鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（130）

南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（XXVII）

（伊集院 IC～市来 IC 間）

市ノ原（いちのはら）遺跡

（第４地点・第２地点）

（鹿児島県日置市東市来町）

2008 年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（130）

市ノ原遺跡（第４地点・第２地点）

二〇〇八年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県

市ノ原遺跡第４地点出土土器

市ノ原遺跡第４地点出土石器

出水筋跡（北西側から）

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島ＩＣ～市来ＩＣ間）の建設事業に伴って，平成８年度から平成11年度にかけて実施した日置市（旧日置郡東市来町）に所在する市ノ原遺跡第４地点・市ノ原遺跡第２地点の発掘調査の記録です。

調査の結果，市ノ原遺跡は各時代の遺構や遺物が多数発見され，旧石器時代，縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世にわたる複合遺跡です。なかでも，第４地点では弥生時代の竪穴住居跡やこれらの遺構に伴って出土した遺物，江戸時代の街道跡（出水筋）の発見は，南九州における弥生時代集落の様相や江戸時代の交通制度を研究する上で貴重な資料となりました。

本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後になりましたが，調査に当たりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所，日置市教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　宮　原　景　信

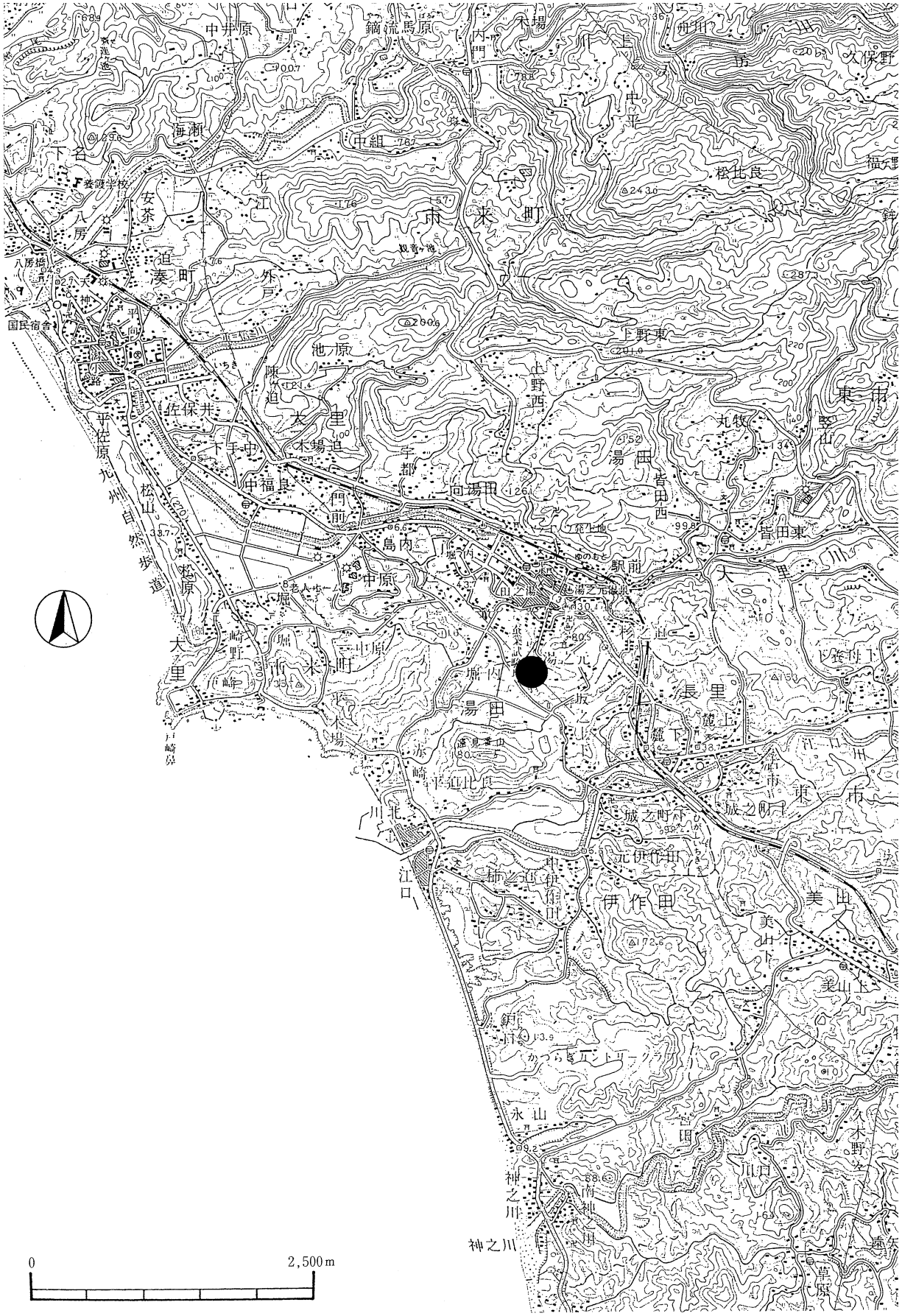
報 告 書 抄 録

ふりがな	いちのはらいせきだいよんちてん・だいにちてん
書　　名	市 ノ 原 遺 跡 第 4 地 点 ・ 第 2 地 点
副 書 名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	ⅩⅩⅦ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	130
編 著 者 名	日高正人・羽嶋敦洋・日高勝博（三垣恵一）
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995－48－5811
発行年月日	西暦2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
いちのはらいせき 市ノ原遺跡 第４地点	かごしまけんひおきし 鹿児島県日置市 ひがしいちきちょうゆだ 東 市来 町 湯田 字 せとのくち 瀬戸ノ口 字 ほりうち 堀内 字 しばたて 柴立	46362	29-60	30° 40' 06" ～ 31° 39' 59"	130° 19' 42" ～ 130° 19' 50"	本調査 19961216～19980331	12,500	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設
						19980506～19990319	1,500	
						19990524～19990712	300 3地点と併行	
いちのはらいせき 市ノ原遺跡 第２地点	かごしまけんひおきし 鹿児島県日置市 ひがしいちきちょうゆだ 東 市来 町 湯田 字 しもいちのはら 下市ノ原	46362	29-60	31° 40' 18"	130° 19' 27"	確認調査 19961101～19961106 本調査 19970421～19970903	1,000	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市ノ原遺跡 第４地点	集落	縄文時代早期	集石　２基	打製石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器・石錐・異形石器・石核・勾玉	調査後の遺跡調査範囲については消滅したが，その他の部分については遺跡が残存する。
		縄文時代前期		前平式・吉田式・中原式・桑ノ丸式	
		縄文時代中期		山形押型文・平栫式・塞ノ神式土器	
		縄文時代後期		曽畑式・深浦式土器	
		縄文時代晩期		春日式・船元式土器	
				指宿式・市来式土器	
				入佐式土器	
			土坑　４基	打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石	
	集落	弥生時代	竪穴住居跡　１基	敲石・石皿・礫器・剥片・チップ・刻目突	
			竪穴状遺構　３基	帯文土器・高橋式土器・紡錘車・土製勾玉	
			土坑　25基		
	集落	古墳時代	土坑　７基	中津野式・東原式・笹貫式土器	
			焼土遺構　３基		
	集落	古代～中世	溝状遺構　５条	土師器・内黒土師器・須恵器・青磁・	
			土坑　６基	白磁・陶磁器・瓦質土器	
			道路状遺構　１条		
			道跡　４条		
			石溜まり遺構　１基		
			掘立柱建物跡　27棟		
	交通	近世	掘立柱建物跡　３棟	陶磁器・古銭・鞴羽口・鉄鐸	
			溝状遺構　５条		
			道路状遺構　１条		
			道跡　３条		
			土坑　29基		
			列石遺構　１基		
			鍛冶炉跡　１基		
市ノ原遺跡 第２地点	散布地	旧石器時代 縄文時代 古代・中世 近世以降	大型土坑　１基	ナイフ形石器・石核 打製石鍬，苦浜式・前平式土器 須恵器・土師器 陶磁器	

遺跡の概要	市ノ原遺跡は，旧石器時代から近世までの長期にわたる複合遺跡で，第４地点では，主体となるのは弥生時代前期と江戸時代である。弥生時代前期の円形の竪穴住居跡や多数の掘立柱建物跡，古代から近世に渡って使用されていた街道跡や道跡などが発見されている。多くの土器・石器・陶磁器が出土しており，その種類は多様である。土器の中には，貝殻で重弧文を付した壺形土器や研磨した鉢形土器など他地域からの持ち込みと思われるのもある。石器も多様であるが，石包丁や磨製石斧などが少なく，敲石や磨石，打製石斧等の粉食具や採集具が多く，当時のこの地域の生業を物語っている。県内で類例の少ない三角壕（とう）形石製品も見付かっている。



第１図　市ノ原遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）建設に伴う市ノ原遺跡第４地点・第２地点の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県日置市東市来町（旧日置郡東市来町）湯田に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成８年度から平成11年度７月12日まで実施し，整理作業報告書作成は，平成17年度と平成18～19年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　遺物番号は，各時代ごとに通し番号とし，本文・表・挿図・図版の番号は一致する。また，遺物取上番号は，通し番号であり，本報告書ではそのまま使用した。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。遺物の挿図縮尺は，３分の１を基本とする。

7　本書で用いたレベル数値は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は，各調査年度の調査担当者が行った。

9　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て日高正人・羽嶋敦洋・日高勝博が行った。

10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て日高正人・日高勝博が行った。

11　石器の実測・トレースは，株式会社九州文化財研究所・大成エンジニアリング株式会社・株式会社パスコ・国際航業株式会社に委託し，監修は羽嶋敦洋が行った。

12　炭化物の放射性炭素年代測定は，株式会社加速器分析研究所に委託した。

13　蛍光Ｘ線による土器付着顔料の分析は，内山伸明が行った。

14　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

15　本書における執筆は，第４地点の第Ⅰ・Ⅲ章を牛ノ濵修が担当し，第Ⅱ・Ⅳ章，Ⅴ章の第２節を日高正人，第１・３・４・５節は日高勝博，第Ⅴ章の石器は羽嶋敦洋が担当した。第Ⅵ章の顔科分析を内山伸明，第Ⅶ章の第１・３・４・５・６節を日高勝博、第２節を日高正人・羽嶋敦洋が担当した。第２地点は，第Ⅰ・Ⅲ章は，日高正人，第Ⅱ章は，羽嶋敦洋が担当した。編集は日高正人・羽嶋敦洋・日高勝博が行った。

16　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，市ノ原遺跡第４地点・第２地点の遺物注記の略号は「市４」「市２」である。

凡　　例

1　遺　　構

⑴　遺構図の縮尺は，集石が１／20，土坑が１／40，掘立柱建物跡・溝状遺構が１／60，中世の道路状遺構・近世の道路遺構（街道跡）が１／250で掲載している。その他の遺構の縮尺については、各図面に示している。

⑵　遺構位置図は，原則として１／400で掲載している。

⑶　出土状況図の遺物番号は，本報告書の遺物番号と同一である。

⑷　遺構番号は，整理作業の段階で北及び東側からの順で遺構ごとに付した。

2　遺　　物

⑴　遺物の出土状況図（平面分布図）には，それぞれに縮尺を付した。

⑵　遺物観察表における遺物の色調は，客観性を保つために農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版『標準土色帖』2006によった。

⑶　遺物観察表における出土層の表記は，発掘調査時の取上げ層位によった。

⑷　土　　器

ア　縮尺は基本的に１／３で掲載し，縮尺が異なる場合には各図面に示してある。

イ　丹塗りは間隔が密な赤のドット，スス付着は細かな黒のかすれのドットでスクリーントーンによりで表現した。

ウ　径の復元ができなかった遺物の実測図の掲載順は，左から外面・内面・断面の順であるが，弥生時代は，左から内面・断面・外面の順で表現した。

エ　弥生時代のⅡ層出土の遺物には遺物番号の下にアンダーラインで示した。

⑸　石　　器

ア　縮尺はナイフ形石器・石鏃（せきぞく）・石匙（いしさじ）・スクレイパーなど剥片（はくへん）石器を２／３，磨製石斧（せきふ）・打製石斧（打製土掘具）・礫器（れっき）・磨石（すりいし）・敲石（たたきいし）類など礫石器を１／３，石皿・砥石類を１／４で掲載している。

イ　磨石・磨敲石・敲石類，石皿・砥石の使用面（磨面）は基本的に白抜きとし，礫面（自然面）をドット，節理面は斜線，明白な擦痕（さっこん）については一部実線で表現している。打製石斧・磨製石斧の擦痕は実線で表現している。

ウ　磨石・敲石類の分類は，磨面のみが観察されるもの，磨面と敲打（こうだ）痕が観察されるもの，敲打痕のみが観察されるものそれぞれ分類しているが，磨敲石と総称している。なお，敲石の一部にはこれまで凹石・棒状敲石とされているものが含まれる。

エ　石器観察表の計測値で（　）書きのものは欠損品における残存値を示す。

オ　各遺物包含層における各器種ごとの総点数は，必ずしも個体数を反映するものではない。

カ　打製石斧の使用痕については実体顕微鏡による観察を行った。

キ　素材となる剥片に二次的な加工が認められるものについては「二次加工のある剥片」とし

た。また使用痕が認められるものについては，「使用痕のある剥片」とした。

ク　住居跡出土石器及びピット内出土石器については，それぞれの遺構と時代の関連性が薄いと判断し，各時代ごとの図版に掲載している。

ケ　石材の同定は主に肉眼観察によるものである。本遺跡から出土した遺物に利用されている石材は，下表のとおりである。なお，表中の分類略号と本文・観察表の表記は一致する。

石材名	分類略号	特徴及び利用状況
黒曜石	Ob1	黒色で光沢があり不純物をほとんど含まない良質の黒曜石である。若干の透明感をもつものが含まれる。佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃・スクレイパーに利用されている。
	Ob2	漆黒で透明感がなく，灰白色の不純物を含む。風化が進み色調が灰色を呈するものが含まれる。薩摩川内市樋脇町上牛鼻産の黒曜石に類似する。旧石器時代のナイフ形石器，縄文時代の打製石鏃・石錐（きり）・楔（くさび）形石器・スクレイパーに利用されている。
	Ob3	青灰色で若干の不純物を含む。長崎県針尾崎産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃などに利用されている。
	Ob4	飴色や茶褐色で透明感，光沢があり不純物を多く含む。鹿児島市吉野町三船（竜ヶ水）産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃・スクレイパーに利用されている。
	Ob5	白灰色で光沢とすりガラス状の透明感がある。佐賀県嬉野産の黒曜石に類似する。縄文時代のスクレイパーに利用されている。
安山岩	An1	灰色で輝石や石英，角閃石を多く含む。鉄分を含むものは灰褐色を呈する。輝石や石英を多く含むものは日置市東市来町湯田（遠見番山）産の安山岩に類似する。縄文時代晩期から弥生時代の打製石斧・磨石・磨敲石・敲石・石皿に利用されている。
	An2	黒灰色で無斑晶である。薩摩川内市樋脇町上牛鼻（系）産の安山岩に類似する。縄文時代の打製石鏃・楔形石器・スクレイパーに利用されている。
	An3	灰色で不純物が少なく，サヌカイトに類似する。西北九州産安山岩と思われる。縄文時代の石鏃・石匙・スクレーパー等に利用されている。
頁岩	Sh	灰色～青灰色で節理が発達したものである。一部に変成を受けたものがある。縄文時代のスクレイパー・弥生時代の磨製石斧・打製石斧に利用されている。
砂岩	Sa	砂粒・石英粒等が集合して固まった堆積岩の一種。触ると砂粒感が強いものを本類に含めた。
粘板岩	Cl	暗灰色を呈し，劈開（へきかい）が強く鉄分が含まれ，部分的に錆（さび）が付着しているものを本類に含めた。
鉄石英	Fq	赤褐色が多いが、部分的に灰色が混ざる。縄文時代の打製石鏃・石匙・楔形石器・石錐に利用されている。
玉髄	Cc	色調は多様で石英質であるが，表面にざらざらと粗い質感がある。縄文時代のスクレイパーに利用されている。
水晶	RC	石英の自然結晶で，通常六角柱状を呈す。縄文時代の楔形石器に利用されている。
チャート	Ch	黄褐色で白色，赤褐色等色彩は様々である。縄文時代の打製石鏃・石匙・石錐・楔形石器・スクレイパーに利用されている。
蛋白石	Op	白色及び浅黄色で縄文時代のスクレイパーに利用されている。
軽石	Pu	黄白色で気孔を多く含む。軽石製品に利用されている。
翡翠輝石	Ja	一般的に白色あるいは明緑色で光を通す。比重があり重く硬い。縄文時代の垂飾品に利用されている。

目　次

巻頭図版 (1)
序文 (7)
報告書抄録 (8)
例言 (10)
凡例 (11)
目次 (13)～(20)

第４地点

第Ⅰ章　はじめに…… 1
第１節　調査に至るまでの経過…… 1
第２節　遺跡の概要…… 1
第Ⅱ章　発掘調査の経過…… 8
第１節　調査に至るまでの経過…… 8
第２節　調査の組織…… 8
第３節　調査の経過…… 11
第Ⅲ章　位置及び環境…… 17
第１節　遺跡の位置及び自然環境…… 17
第２節　歴史的環境…… 17
第３節　周辺遺跡…… 21
第Ⅳ章　発掘調査の概要…… 23
第１節　発掘調査の方法…… 25
第２節　遺跡の層位…… 26
第３節　発掘調査の概要…… 34
第Ⅴ章　発掘調査の成果…… 35
第１節　縄文時代の遺構と遺物…… 35
１　遺構…… 35
(1)　集石遺構…… 36
(2)　土坑・ピット群…… 39
２　遺物…… 43
(1)　土器…… 43
(2)　石器…… 62
第２節　弥生時代の遺構と遺物…… 92
１　遺構…… 92
(1)　竪穴住居跡…… 92
(2)　竪穴状遺構…… 98
(3)　土坑・ピット群…… 102
２　遺物…… 119
(1)　土器…… 119
ア　甕形・鉢形・壺形土器…… 121
イ　高坏・装飾品…… 185
ウ　土器底部…… 191
(2)　石器…… 209
第３節　古墳時代の遺構と遺物…… 271
１　遺構…… 271
(1)　土坑・ピット群…… 271
(2)　焼土遺構…… 276
２　遺物…… 277
(1)　土器1（甕形・壺形・坩形・鉢形土器）…… 277
(2)　土器２（高坏形土器・その他）…… 292
第４節　古代から中世の遺構と遺物…… 301
１　遺構…… 301
(1)　古代・中世の土坑…… 302
(2)　時期不明土坑…… 305
(3)　掘立柱建物跡…… 308
(4)　溝状遺構…… 339
(5)　道路状遺構・道跡…… 340
(6)　石溜まり遺構…… 348
２　遺物…… 349
(1)　古代の遺物…… 349
(2)　中世の遺物…… 354
第５節　近世の遺構と遺物…… 362
１　遺構…… 362
(1)　掘立柱建物跡…… 363
(2)　溝状遺構…… 367
(3)　道路遺構・道跡・硬化面…… 371
(4)　土坑・ピット群…… 375
(5)　鍛冶炉跡・竈跡…… 388
(6)　列石遺構…… 390
(7)　陶器溜まり遺構…… 390
２　遺物…… 393
(1)　陶磁器…… 393
(2)　その他（焙烙・土人形・古銭・鉄滓）…… 396
第Ⅵ章　分析・同定…… 401
第Ⅶ章　調査のまとめ…… 411
第１節　縄文時代について…… 411
第２節　弥生時代について…… 412
第３節　古墳時代について…… 417
第４節　古代から中世について…… 419
第５節　近世について…… 419

第６節　考察（中・近世の市来と市ノ原遺跡）…… 420

挿図目次

第１図　市ノ原遺跡位置図…… (9)
第２図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図…… 4
第３図　市ノ原遺跡調査地点位置図…… 7
第４図　周辺遺跡位置図…… 20
第５図　調査区域全体図…… 24
第６図　調査用グリッド配置図…… 25
第７図　遺跡基本土層図…… 26
第８図　トレンチ配置図…… 27
第９図　土層断面図１…… 28
第10図　土層断面図２…… 29
第11図　土層断面図３…… 30
第12図　土層断面図４…… 31
第13図　土層断面図５…… 32
第14図　土層断面図６…… 33
第15図　縄文時代の遺構配置図…… 35
第16図　集石１配置図…… 36
第17図　集石２配置図…… 37
第18図　集石１・２…… 38
第19図　縄文時代の土坑・ピット配置図…… 39
第20図　縄文時代の土坑…… 41
第21図　縄文時代の土坑出土遺物…… 42
第22図　縄文土器出土状況図（ドット図）… 44
第23図　縄文土器（1）Ⅰ～Ⅵ類…… 45
第24図　縄文土器（2）Ⅶ・Ⅷ類…… 47
第25図　縄文土器（3）Ⅷ類…… 48
第26図　縄文土器（4）Ⅷ・Ⅸ類…… 50
第27図　縄文土器（5）Ⅹ～Ⅻ類…… 51
第28図　縄文土器（6）Ⅻ類…… 53
第29図　縄文土器（7）Ⅻ～ⅩⅤ類…… 54
第30図　縄文土器（8）ⅩⅤ～ⅩⅪ類…… 56
第31図　縄文土器（9）ⅩⅪ・ⅩⅩⅢ類…… 58
第32図　縄文時代の石器出土状況図１・２… 62
第33図　縄文時代の石器出土状況図３・４… 63
第34図　縄文時代の石器出土状況図５・６… 64
第35図　縄文時代の石器出土状況図７・８… 65
第36図　縄文時代の石器出土状況図９・10… 66
第37図　縄文時代の石器１（石鏃１）…… 67
第38図　縄文時代の石器２（石鏃２）…… 68
第39図　縄文時代の石器３（石鏃３）…… 69
第40図　縄文時代の石器４（石鏃４）…… 70
第41図　縄文時代の石器５
（石匙・スクレイパー１）…… 71
第42図　縄文時代の石器６
（スクレイパー２）…… 72
第43図　縄文時代の石器７
（スクレイパー３）…… 73
第44図　縄文時代の石器８
（スクレイパー４）…… 74
第45図　縄文時代の石器９
（スクレイパー５・楔形石器１）…… 75
第46図　縄文時代の石器10
（楔形石器２・石錘・異形石器・二次加工剥片）… 78
第47図　縄文時代の石器11（石核１）…… 79
第48図　縄文時代の石器12（石核２）…… 80
第49図　縄文時代の石器13（石核３）…… 81
第50図　縄文時代の石器14（石核４）…… 82
第51図　縄文時代の石器15（石核５）…… 83
第52図　縄文時代の石器16（石核６・勾玉）… 84
第53図　縄文時代の石器17（礫器）…… 87
第54図　弥生時代の遺構配置図…… 92
第55図　竪穴住居遺構配置図…… 94
第56図　竪穴住居跡柱穴検出状況図…… 94
第57図　竪穴住居内出土遺物状況図…… 95
第58図　竪穴住居内出土遺物１…… 96
第59図　竪穴住居内出土遺物２…… 97
第60図　竪穴状遺構位置図…… 98
第61図　竪穴状遺構１・２…… 99
第62図　竪穴状遺構出土遺物…… 100
第63図　弥生時代土坑位置図…… 102
第64図　弥生時代の土坑１…… 103
第65図　弥生時代の土坑２…… 104
第66図　弥生時代の土坑３…… 105
第67図　弥生時代の土坑４…… 106
第68図　弥生時代の土坑５…… 107
第69図　弥生時代の土坑６…… 108
第70図　弥生時代の土坑出土遺物１…… 110
第71図　弥生時代の土坑出土遺物２…… 111
第72図　弥生時代の土坑出土遺物３…… 112
第73図　弥生時代のピット位置図…… 116
第74図　弥生時代のピット出土遺物…… 118
第75図　弥生時代の分類土器一覧…… 119

第76図　弥生時代の甕形土器分布図…… 122
第77図　弥生時代の甕形土器１…… 123
第78図　弥生時代の甕形土器２…… 124
第79図　弥生時代の甕形土器３…… 125
第80図　弥生時代の甕形土器４…… 126
第81図　弥生時代の甕形土器５…… 127
第82図　弥生時代の甕形土器６…… 128
第83図　弥生時代の甕形土器７…… 129
第84図　弥生時代の甕形土器８…… 130
第85図　弥生時代の甕形土器９…… 131
第86図　弥生時代の甕形土器10…… 132
第87図　弥生時代の甕形土器11…… 133
第88図　弥生時代の甕形土器12…… 134
第89図　弥生時代の甕形土器13…… 135
第90図　弥生時代の甕形土器14…… 136
第91図　弥生時代の甕形土器15…… 137
第92図　弥生時代の甕形土器16…… 138
第93図　弥生時代の甕形土器17…… 139
第94図　弥生時代の甕形土器18…… 140
第95図　弥生時代の甕形土器19…… 141
第96図　弥生時代の甕形土器20…… 142
第97図　弥生時代の甕形土器21…… 143
第98図　弥生時代の甕形土器22…… 144
第99図　弥生時代の甕形土器23…… 145
第100図　弥生時代の甕形土器24…… 146
第101図　弥生時代の甕形土器25…… 147
第102図　弥生時代の甕形土器26…… 148
第103図　弥生時代の甕形土器27…… 150
第104図　弥生時代の鉢形土器分布図…… 159
第105図　弥生時代の鉢形土器１…… 160
第106図　弥生時代の鉢形土器２…… 161
第107図　弥生時代の鉢形土器３…… 162
第108図　弥生時代の鉢形土器４…… 163
第109図　弥生時代の鉢形土器５…… 164
第110図　弥生時代の鉢形土器６…… 165
第111図　弥生時代の鉢形土器７…… 166
第112図　弥生時代の鉢形土器８…… 167
第113図　弥生時代の鉢形土器９…… 168
第114図　弥生時代の壺形土器出土分布図…… 172
第115図　弥生時代の壺形土器１…… 173
第116図　弥生時代の壺形土器２…… 174
第117図　弥生時代の壺形土器３…… 175
第118図　弥生時代の壺形土器４…… 176
第119図　弥生時代の壺形土器５…… 177
第120図　弥生時代の壺形土器６…… 178
第121図　弥生時代の壺形土器７…… 179
第122図　弥生時代の壺形土器８…… 180
第123図　弥生時代の壺形土器９…… 181
第124図　弥生時代の壺形土器10…… 182
第125図　弥生時代の壺形土器11…… 183
第126図　弥生時代の壺形土器12…… 184
第127図　弥生時代の高坏形土器・その他…… 189
第128図　弥生時代の土器底部の分類模式図…… 191
第129図　弥生時代の土器底部の出土分布図…… 192
第130図　弥生時代の土器底部１…… 193
第131図　弥生時代の土器底部２…… 194
第132図　弥生時代の土器底部３…… 195
第133図　弥生時代の土器底部４…… 196
第134図　弥生時代の土器底部５…… 197
第135図　弥生時代の土器底部６…… 198
第136図　弥生時代の土器底部７…… 199
第137図　弥生時代の土器底部８…… 200
第138図　弥生時代の土器底部９…… 201
第149図　弥生時代の土器底部10…… 202
第140図　弥生時代の土器底部11…… 203
第141図　弥生時代の石器出土分布図１・２…… 211
第142図　弥生時代の石器出土分布図３・４…… 212
第143図　弥生時代の石器出土分布図５・６…… 213
第144図　弥生時代の石器出土分布図７・８…… 214
第145図　弥生時代の石器１（打製石斧１）…… 215
第146図　弥生時代の石器２（打製石斧２）…… 216
第147図　弥生時代の石器３（打製石斧３）…… 217
第148図　弥生時代の石器４（打製石斧４）…… 218
第149図　弥生時代の石器５（打製石斧５）…… 219
第150図　弥生時代の石器６（打製石斧６）…… 220
第151図　弥生時代の石器７（打製石斧７）…… 221
第152図　弥生時代の石器８（打製石斧８）…… 222
第153図　弥生時代の石器９（打製石斧９）…… 223
第154図　弥生時代の石器10（打製石斧10）…… 224
第155図　弥生時代の石器11（打製石斧11）…… 225
第156図　弥生時代の石器12（打製石斧12）…… 226
第157図　弥生時代の石器13（打製石斧13）…… 227
第158図　弥生時代の石器14（打製石斧14）…… 228
第159図　弥生時代の石器15（打製石斧15）…… 229

第160図　弥生時代の石器16（打製石斧16）…… 230
第161図　弥生時代の石器17（打製石斧17）…… 231
第162図　弥生時代の石器18（打製石斧18）…… 232
第163図　弥生時代の石器19（打製石斧19）…… 233
第164図　弥生時代の石器20（打製石斧20）…… 234
第165図　弥生時代の石器21（打製石斧21）…… 235
第166図　弥生時代の石器22（打製石斧22）…… 236
第167図　弥生時代の石器23（磨製石斧１）…… 237
第168図　弥生時代の石器24（磨製石斧２）…… 238
第169図　弥生時代の石器25（磨敲石１）…… 239
第170図　弥生時代の石器26（磨敲石２）…… 240
第171図　弥生時代の石器27（磨敲石３）…… 241
第172図　弥生時代の石器28（磨敲石４）…… 242
第173図　弥生時代の石器29（磨敲石５）…… 243
第174図　弥生時代の石器30（磨敲石６）…… 244
第175図　弥生時代の石器31（磨敲石７）…… 245
第176図　弥生時代の石器32（磨敲石８）…… 246
第177図　弥生時代の石器33（磨敲石９）…… 247
第178図　弥生時代の石器34（磨敲石10）…… 248
第179図　弥生時代の石器35（磨敲石11）…… 249
第180図　弥生時代の石器36（磨敲石12）…… 250
第181図　弥生時代の石器37（磨敲石13）…… 251
第182図　弥生時代の石器38（磨敲石14）…… 252
第183図　弥生時代の石器39（石皿１）…… 253
第184図　弥生時代の石器40（石皿２）…… 254
第185図　弥生時代の石器41（石皿３）…… 255
第186図　弥生時代の石器42（石皿４）…… 256
第187図　弥生時代の石器43（石皿５）…… 257
第188図　弥生時代の石器44（砥石１）…… 258
第189図　弥生時代の石器45
（砥石２・石包丁・尖孔具）…… 261
第190図　弥生時代の石器46（軽石製品）・262
第191図　弥生時代の石器47（三角壕形石器１）
…… 263
第192図　弥生時代の石器48（三角壕形石器２）
…… 264
第193図　古墳時代の遺構配置図…… 272
第194図　古墳時代の土坑１…… 273
第195図　古墳時代の土坑２…… 274
第196図　古墳時代の土坑・ピット出土遺物…… 275
第197図　古墳時代の焼土遺構…… 276
第198図　古墳時代の土器出土状況図…… 278
第199図　古墳時代の甕形土器出土状況図…… 279
第200図　古墳時代の甕形土器１
（ＩＡ・ⅡＡ類）…… 280
第201図　古墳時代の甕形土器２（ⅡＡ類）…… 281
第202図　古墳時代の甕形土器３（ⅡＡ類）…… 282
第203図　古墳時代の甕形土器４（ⅡＡ類）…… 283
第204図　古墳時代の甕形土器５（ⅡＡ類）…… 285
第205図　古墳時代の甕形土器６
（ⅡＡ・ⅡＢ類）…… 286
第206図　古墳時代の甕形土器７
（ⅡＢ・ⅢＡ類）…… 287
第207図　古墳時代の甕形土器８（底部）・289
第208図　古墳時代の壺形土器１
（口縁部～胴部）…… 290
第209図　古墳時代の壺形土器２（胴部）…… 291
第210図　古墳時代の壺形土器３（大型土器）… 293
第211図　古墳時代の壺形土器４（胴部～底部）… 294
第212図　古墳時代の坩形土器・
鉢形土器・高坏形土器１…… 295
第213図　古墳時代の高坏形土器２・
手づくね土器…… 296
第214図　古代から中世の遺構配置図…… 301
第215図　古代・中世の土坑・ピット群配置図…… 302
第216図　古代の土坑…… 303
第217図　中世の土坑…… 304
第218図　時期不明土坑配置図…… 305
第219図　時期不明土坑１…… 306
第220図　時期不明土坑２…… 307
第221図　掘立柱建物跡配置図…… 308
第222図　掘立柱建物跡１…… 309
第223図　掘立柱建物跡２・３…… 311
第224図　掘立柱建物跡４・５…… 313
第225図　掘立柱建物跡６・７…… 315
第226図　掘立柱建物跡８…… 316
第227図　掘立柱建物跡９…… 317
第228図　掘立柱建物跡10・11…… 319
第229図　掘立柱建物跡12・13…… 321
第230図　掘立柱建物跡14…… 322
第231図　掘立柱建物跡15…… 323
第232図　掘立柱建物跡16…… 324
第233図　掘立柱建物跡17…… 325
第234図　掘立柱建物跡18…… 327

第235図　掘立柱建物跡19・20…… 329
第236図　掘立柱建物跡21…… 330
第237図　掘立柱建物跡22・23…… 332
第238図　掘立柱建物跡24…… 333
第239図　掘立柱建物跡25…… 335
第240図　掘立柱建物跡26…… 336
第241図　掘立柱建物跡27…… 337
第242図　溝状遺構１…… 339
第243図　溝状遺構２…… 341
第244図　溝状遺構３～５…… 342
第245図　道路状遺構…… 343
第246図　道路状遺構出土遺物…… 344
第247図　道跡１～３…… 346
第248図　道跡４…… 347
第249図　石溜まり遺構…… 348
第250図　石溜まり遺構出土遺物…… 349
第251図　古代の遺物１（土師器１）…… 350
第252図　古代の遺物２（土師器２）…… 351
第253図　古代の遺物３（須恵器１）…… 352
第254図　古代の遺物４
（須恵器２・土錘・瓦）…… 353
第255図　中世の遺物１（土師器）…… 354
第256図　中世の遺物２（須恵質陶器ほか）…… 355
第257図　中世の遺物３（白磁・青磁）…… 357
第258図　近世の遺構配置図…… 362
第259図　掘立柱建物跡１…… 364
第260図　掘立柱建物跡２…… 365
第261図　掘立柱建物跡３…… 366
第262図　溝状遺構１・道跡１～３…… 368
第263図　溝状遺構２～４…… 369
第264図　溝状遺構５…… 370
第265図　道路遺構・道跡・溝状遺構位置図…… 371
第266図　道路遺構（街道跡）…… 373
第267図　道路遺構出土遺物…… 374
第268図　硬化面…… 376
第269図　近世の土坑・ピット群配置図…… 377
第270図　近世の土坑１…… 379
第271図　近世の土坑２…… 380
第272図　近世の土坑３…… 381
第273図　近世の土坑４…… 383
第274図　近世の土坑５…… 384
第275図　近世の土坑６…… 385
第276図　近世の土坑・ピット出土遺物…… 387
第277図　鍛冶炉跡・竈跡…… 389
第278図　列石遺構…… 390
第279図　陶器溜まり遺構と出土遺物…… 391
第280図　近世の遺物１（薩摩焼１）…… 395
第281図　近世の遺物２（薩摩焼２）…… 396
第282図　近世の遺物３（薩摩焼３）…… 397
第283図　近世の遺物４
（陶磁器・焙烙・土人形）…… 398
第284図　近世の遺物５
（古銭・鍛冶関連遺物）…… 399
第285図　層別土器分類比率図…… 413
第286図　層別土器器種比率図…… 414
第287図　弥生時代の土器底部と各器種分布図…… 415
第288図　市ノ原遺跡第４地点石器石材組成表…… 417
第289図　市ノ原遺跡第４地点
出土成川式土器一覧…… 418
第290図　写真「市来郷絵図」（天保八年）…… 422
第291図　写真「市来郷絵図」
（湯田村付近拡大図）…… 422
第292図　市ノ原遺跡周辺字図…… 423
第293図　中・近世の市来…… 423

表　目　次

第１表　南九州西回り自動車道調査遺跡一覧１…… 5
第２表　南九州西回り自動車道調査遺跡一覧２…… 6
第３表　周辺遺跡地名表（１）…… 21
第４表　周辺遺跡地名表（２）…… 22
第５表　縄文時代の土坑計測表…… 41
第６表　縄文時代の土坑出土遺物観察表…… 42
第７表　縄文土器観察表１…… 59
第８表　縄文土器観察表２…… 60
第９表　縄文土器観察表３…… 61
第10表　縄文時代の石器観察表１…… 89
第11表　縄文時代の石器観察表２…… 90
第12表　縄文時代の石器観察表３…… 91
第13表　弥生時代竪穴住居跡出土遺物観察表…… 97
第14表　弥生時代竪穴状遺構出土遺物観察表… 101
第15表　弥生時代土坑内出土遺物観察表… 114
第16表　弥生時代竪穴住居跡計測表…… 115
第17表　弥生時代竪穴状遺構計測表…… 115
第18表　弥生時代土坑計測表…… 115

第19表　弥生時代ピット計測表…… 117
第20表　弥生時代の甕形土器観察表１…… 151
第21表　弥生時代の甕形土器観察表２…… 152
第22表　弥生時代の甕形土器観察表３…… 153
第23表　弥生時代の甕形土器観察表４…… 154
第24表　弥生時代の甕形土器観察表５…… 155
第25表　弥生時代の甕形土器観察表６…… 156
第26表　弥生時代の甕形土器観察表７…… 157
第27表　弥生時代の鉢形土器観察表１…… 169
第28表　弥生時代の鉢形土器観察表２…… 170
第29表　弥生時代の壺形土器観察表１…… 186
第30表　弥生時代の壺形土器観察表２…… 187
第31表　弥生時代の壺形土器観察表３…… 188
第32表　弥生時代の壺形土器観察表４…… 190
第33表　弥生時代の高坏・その他の遺物観察表…… 190
第34表　弥生時代の土器底部観察表１…… 205
第35表　弥生時代の土器底部観察表２…… 206
第36表　弥生時代の土器底部観察表３…… 207
第37表　弥生時代の土器底部観察表４…… 208
第38表　弥生時代の石器観察表１…… 266
第39表　弥生時代の石器観察表２…… 267
第40表　弥生時代の石器観察表３…… 268
第41表　弥生時代の石器観察表４…… 269
第42表　弥生時代の石器観察表５…… 270
第43表　古墳時代の土坑計測表…… 274
第44表　古墳時代の土坑・
　　ピット出土遺物観察表…… 275
第45表　古墳時代土器観察表１…… 297
第46表　古墳時代土器観察表２…… 298
第47表　古墳時代土器観察表３…… 299
第48表　古墳時代土器観察表４…… 300
第49表　古代の土坑計測表…… 303
第50表　中世の土坑計測表…… 304
第51表　時期不明土坑計測表…… 307
第52表　掘立柱建物跡１計測表…… 310
第53表　掘立柱建物跡２計測表…… 310
第54表　掘立柱建物跡３計測表…… 310
第55表　掘立柱建物跡４計測表…… 312
第56表　掘立柱建物跡５計測表…… 312
第57表　掘立柱建物跡６計測表…… 314
第58表　掘立柱建物跡７計測表…… 314
第59表　掘立柱建物跡８計測表…… 316
第60表　掘立柱建物跡９計測表…… 317
第61表　掘立柱建物跡10計測表…… 318
第62表　掘立柱建物跡11計測表…… 318
第63表　掘立柱建物跡12計測表…… 320
第64表　掘立柱建物跡13計測表…… 320
第65表　掘立柱建物跡14計測表…… 322
第66表　掘立柱建物跡15計測表…… 324
第67表　掘立柱建物跡16計測表…… 325
第68表　掘立柱建物跡17計測表…… 326
第79表　掘立柱建物跡18計測表…… 327
第70表　掘立柱建物跡19計測表…… 328
第71表　掘立柱建物跡20計測表…… 328
第72表　掘立柱建物跡21計測表…… 330
第73表　掘立柱建物跡22計測表…… 331
第74表　掘立柱建物跡23計測表…… 331
第75表　掘立柱建物跡24計測表…… 334
第76表　掘立柱建物跡25計測表…… 334
第77表　掘立柱建物跡26計測表…… 336
第78表　掘立柱建物跡27計測表…… 338
第79表　中世道路状遺構出土遺物観察表 …… 344
第80表　中世石溜まり遺構出土遺物観察表…… 349
第81表　古代出土遺物観察表１…… 358
第82表　古代出土遺物観察表２…… 359
第83表　中世出土遺物観察表１…… 360
第84表　中世出土遺物観察表２…… 361
第85表　近世掘立柱建物跡１計測表…… 364
第86表　近世掘立柱建物跡２計測表…… 365
第87表　近世掘立柱建物跡３計測表…… 366
第88表　近世土坑計測表…… 386
第89表　近世遺構内出土遺物観察表…… 392
第90表　近世出土遺物観察表…… 400

第２地点

第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 425
　第１節　調査に至るまでの経過…… 425
　第２節　調査の組織…… 425
　第３節　調査の経過…… 426
第Ⅱ章　発掘調査の概要…… 428
　第１節　発掘調査の方法…… 428
　第２節　遺跡の層位…… 431
　第３節　発掘調査成果の概要…… 431

第Ⅲ章　発掘調査の成果…… 433
　第１節　Ⅵ層の調査　…… 433
　第２節　Ⅴ層の調査…… 436
　第３節　その他の調査…… 438
第Ⅳ章　発掘調査のまとめ…… 446

挿図目次

第１図　周辺地形図…… 428
第２図　グリッド配置図…… 429
第３図　調査用グリッド・
　　確認調査トレンチ配置図…… 430
第４図　遺跡基本土層図…… 431
第５図　土層断面図…… 432
第６図　Ⅵ層上面遺構配置図…… 433
第７図　Ⅵ層遺物出土状況図…… 433
第８図　土坑図…… 434
第９図　出土石器１…… 435
第10図　Ⅴ層遺物出土状況図…… 436
第11図　出土石器２…… 437
第12図　縄文土器…… 439
第13図　古代～中世の遺物，近世の遺物１ 440
第14図　近世の遺物２…… 441
第15図　近世の遺物３…… 442
第16図　近世の遺物４…… 443
第17図　近世の遺物５…… 444

表目次

第１表　出土遺物観察表（石器）…… 444
第２表　出土遺物観察表（土器ほか）…… 445

図版目次

第４地点

図版１　①市ノ原遺跡周辺空撮
　　（国土交通省画像）…… 447
　　②遠見番山遠景
図版２　下層確認トレンチ断面１～３…… 448
図版３　①集石２検出状況
　　②縄文土器出土状況…… 449
図版４　①弥生時代竪穴住居内遺物出土状況
　　②弥生時代竪穴住居完掘状況　… 450
図版５　弥生時代の石器出土状況…… 451
図版６　①古墳時代焼土遺構断面
　　②成川式土器出土状況１
　　③成川式土器出土状況２…… 452
図版７　①Ⅴ類土坑　②Ⅰ類土坑
　　③時期不明土坑１　④時期不明土坑２
…… 453
図版８　①掘立柱建物跡１
　　②掘立柱建物跡２…… 454
図版９　①中世道路状遺構検出状況
　　②中世道路状遺構断面…… 455
図版10　近世道路遺構（出水筋跡）
　　検出状況１～４…… 456
図版11　①近世道跡・溝状遺構検出状況
　　②近世溝状遺構検出状況
　　③近世陶器溜まり遺構検出状況 …… 457
図版12　①鍛冶炉跡検出状況
　　②鍛冶炉跡半截
　　③竈跡・石溜まり遺構検出状況
　　④竈跡　　⑤竈跡調査風景
　　⑥竈跡完掘状況…… 458
図版13　縄文土器１（Ⅰ～Ⅵ類）…… 459
図版14　縄文土器２（Ⅶ・Ⅷ類）…… 460
図版15　縄文土器３（Ⅷ・Ⅸ類）…… 461
図版16　縄文土器４（Ⅹ～Ⅻ類）…… 462
図版17　縄文土器５（Ⅻ～ⅩⅣ類）…… 463
図版18　縄文土器６（ⅩⅤ～ⅩⅨ類）　…… 464
図版19　縄文土器７（ⅩⅩ～ⅩⅩⅡ類）　…… 465
図版20　縄文時代の石器１…… 466
図版21　縄文時代の石器２…… 467
図版22　縄文時代の石器３…… 468
図版23　縄文時代の石器４…… 469
図版24　弥生時代の竪穴住居内出土遺物 …… 470
図版25　弥生時代の竪穴状遺構内出土遺物…… 471
図版26　弥生時代の土坑出土遺物１…… 472
図版27　弥生時代の土坑出土遺物２・３ …… 473
図版28　弥生時代のピット出土遺物…… 474
図版29　弥生時代の甕形土器１…… 475
図版30　弥生時代の甕形土器２…… 476
図版31　弥生時代の甕形土器３…… 477
図版32　弥生時代の甕形土器４…… 478
図版33　弥生時代の甕形土器５…… 479
図版34　弥生時代の甕形土器６…… 480
図版35　弥生時代の甕形土器７…… 481

図版36　弥生時代の甕形土器８…… 482
図版37　弥生時代の甕形土器９…… 483
図版38　弥生時代の甕形土器10…… 484
図版39　弥生時代の甕形土器11…… 485
図版40　弥生時代の甕形土器12…… 486
図版41　弥生時代の甕形土器13…… 487
図版42　弥生時代の甕形土器14…… 488
図版43　弥生時代の甕形土器15…… 489
図版44　弥生時代の甕形土器16…… 490
図版45　弥生時代の甕形土器17…… 491
図版46　弥生時代の甕形土器18…… 492
図版47　弥生時代の甕形土器19…… 493
図版48　弥生時代の鉢形土器１…… 494
図版49　弥生時代の鉢形土器２…… 495
図版50　弥生時代の鉢形土器３…… 496
図版51　弥生時代の鉢形土器４…… 497
図版52　弥生時代の鉢形土器５…… 498
図版53　弥生時代の鉢形土器６…… 499
図版54　弥生時代の鉢形土器７…… 500
図版55　弥生時代の鉢形土器８…… 501
図版56　弥生時代の壺形土器１…… 502
図版57　弥生時代の壺形土器２…… 503
図版58　弥生時代の壺形土器３…… 504
図版59　弥生時代の壺形土器４…… 505
図版60　弥生時代の壺形土器５…… 506
図版61　弥生時代の壺形土器６…… 507
図版62　弥生時代の壺形土器７…… 508
図版63　弥生時代の壺形土器８…… 509
図版64　弥生時代の壺形土器９…… 510
図版65　弥生時代の壺形土器10…… 511
図版66　弥生時代の壺形土器11…… 512
図版67　弥生時代の壺形土器12…… 513
図版68　弥生時代の壺形土器13…… 514
図版69　弥生時代の高坏形土器・土製勾玉…… 515
図版70　弥生時代の土器底部１…… 516
図版71　弥生時代の土器底部２…… 517
図版72　弥生時代の土器底部３…… 518
図版73　弥生時代の土器底部４…… 519
図版74　弥生時代の出土石器１…… 520
図版75　弥生時代の出土石器２…… 521
図版76　弥生時代の出土石器３…… 522
図版77　弥生時代の出土石器４…… 523
図版78　弥生時代の出土石器５…… 524
図版79　弥生時代の出土石器６…… 525
図版80　弥生時代の出土石器７…… 526
図版81　弥生時代の出土石器８…… 527
図版82　弥生時代の出土石器９…… 528
図版83　弥生時代の出土石器10…… 529
図版84　古墳時代の土器１…… 530
図版85　古墳時代の土器２…… 531
図版86　古墳時代の土器３…… 532
図版87　古墳時代の土器４…… 533
図版88　古墳時代の土器５…… 534
図版89　古墳時代の土器６…… 535
図版90　古墳時代の土器７…… 536
図版91　古墳時代の土器８…… 537
図版92　古墳時代の土器９…… 538
図版93　古墳時代の土器10…… 539
図版94　古代の遺物１…… 540
図版95　古代の遺物２…… 541
図版96　中世道路状遺構出土遺物…… 542
図版97　中世の遺物
（土師器・須恵器・青磁・白磁）・543
図版98　①近世道路遺構（出水筋跡）出土遺物
②近世の土坑・ピット出土遺物 …… 544
図版99　近世の遺物１（薩摩焼）…… 545
図版100　近世の遺物２（薩摩焼）…… 546
図版101　近世の遺物３
（古銭・焙烙・鍛冶関連遺物）… 547
第２地点
図版102　下層確認トレンチ断面１～３ …… 548
図版103　Ⅵ層礫群検出状況，
大型土坑検出状況１…… 549
図版104　大型土坑検出状況２，
大型土坑内鉄滓出土状況…… 550
図版105　①縄文時代の石器
②縄文土器…… 551
図版106　古代～中世の遺物，近世の遺物１
…… 552
図版107　近世の遺物２…… 553
図版108　近世の遺物３…… 554

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に伊集院ＩＣと市来ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成８年度から平成12年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。

第２節　遺跡の概要

１　一ノ谷……日置市伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95ｍの丘稜端部に位置し，調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。

２　永迫平……日置市伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150ｍ程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の２か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し，縄文時代早期前半の前平式期には９軒の住居跡を始め，３基の連穴土坑と９基の集石，多数の土坑を検出。その他，古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。

３　下永迫Ａ…日置市伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110ｍのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で，縄文時代後期の指宿式土器と石鏃，古墳時代の成川式土器，古代～中世では土坑・集石が検出され，青磁・白磁が出土した。

４　柳原……日置市伊集院町下谷口の標高約90～100ｍの山間（さんかん）の谷間，傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は8,000㎡である。縄文時代早期の集石４基や後期の石匙，石鏃，古代の土坑，焼土跡とともに土師器・須恵器が発見された。

５　上山路山…日置市伊集院町大田字上山路山の標高約130ｍのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部に当たり，平坦面から続く緩やかな斜面と，谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,300㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早

期・後期），弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは，縄文時代早期で遺構は，道跡や集石，遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

6　大田城跡…日置市伊集院町大田字下城山迫の標高約120ｍの台地上に所在する。調査面積は3,500㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが，山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石，土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。

7　堂平窯跡…日置市東市来町美山の標高約85～92ｍの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で，窯，作業場，物原が発見された。窯は長さ約30m，幅1.2m，傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・摺鉢・動物形土製品），瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。

8　池之頭……日置市東市来町美山字池之頭にあり，美山池北西部の標高約80～100ｍのシラス台地の尾根状部分に立地し，調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃，縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器，晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏など）が多く発見された。

9　雪山……日置市東市来町美山字雪山の標高約95ｍの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石２基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石，古墳時代の成川式土器が出土したが，主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で，炉跡・物原・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・擂鉢・瓶・碗），染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。

10　猿引……日置市東市来町長里字猿引の標高約110～115ｍの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群１基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曽畑式土器・黒曜石片が出土した。

11　犬ヶ原……日置市東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66ｍの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は，2,000㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙，古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが，主になるのは平安時代で，掘立柱建物跡（４間×４間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞴羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器とともに多く発見された。

12　向椎城跡…日置市東市来町伊作田の標高約50ｍの独立台地上に所在する。調査面積は16,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ，縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され，中世山城の遺構が検出された。

13　堂園平……日置市東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり，標高約50ｍの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で，旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片

尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石４基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

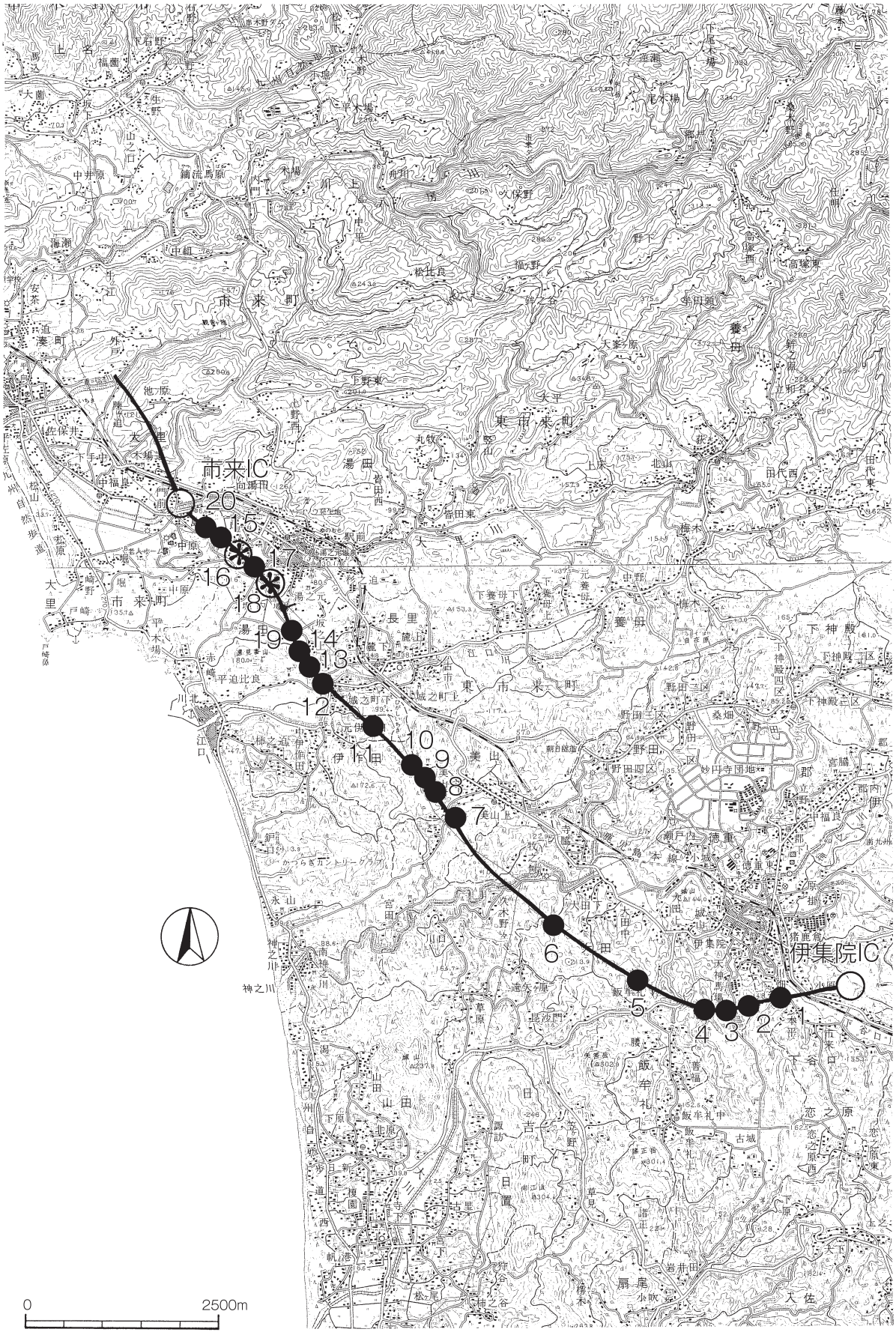
14　今里……日置市東市来町伊作田字今里の標高約65ｍの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し，縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器，古墳時代の成川式土器が発見された。

15　市ノ原……いちき串木野市大里字上ノ原前から日置市東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50ｍ台地西側に所在する。調査面積は81,500㎡である。遺跡は第１地点から第５地点まであり，旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化，縄文時代（早期～晩期），弥生時代の住居跡・壺棺，古墳時代の住居跡，古代～中世，近世の街道跡など多時期に渡り，多種多様な遺構・遺物が発見された。

16　上ノ原……いちき串木野市大里の東シナ海を望む標高40ｍの台地上に立地し，三方は急峻（きゅうしゅん）な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石３基，土坑が検出され，塞ノ神式，轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴住居跡１軒と土坑・成川式土器が，古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

※　刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(31)	2001．3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(32)	2002．3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(33)	2002．9
「市ノ原遺跡(第１地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(49)	2003．3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50)	2003．3
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53)	2003．3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(62)	2003．3
「下永迫Ａ遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(72)	2004．3
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(93)	2005．3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(94)	2005．3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(95)	2005．3
「堂園平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(104)	2006．3
「市ノ原遺跡(第５地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)	2006．3
「堂平窯跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106)	2006.12
「上山路山遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(116)	2007．3



第２図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第１表　南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表（1）（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）

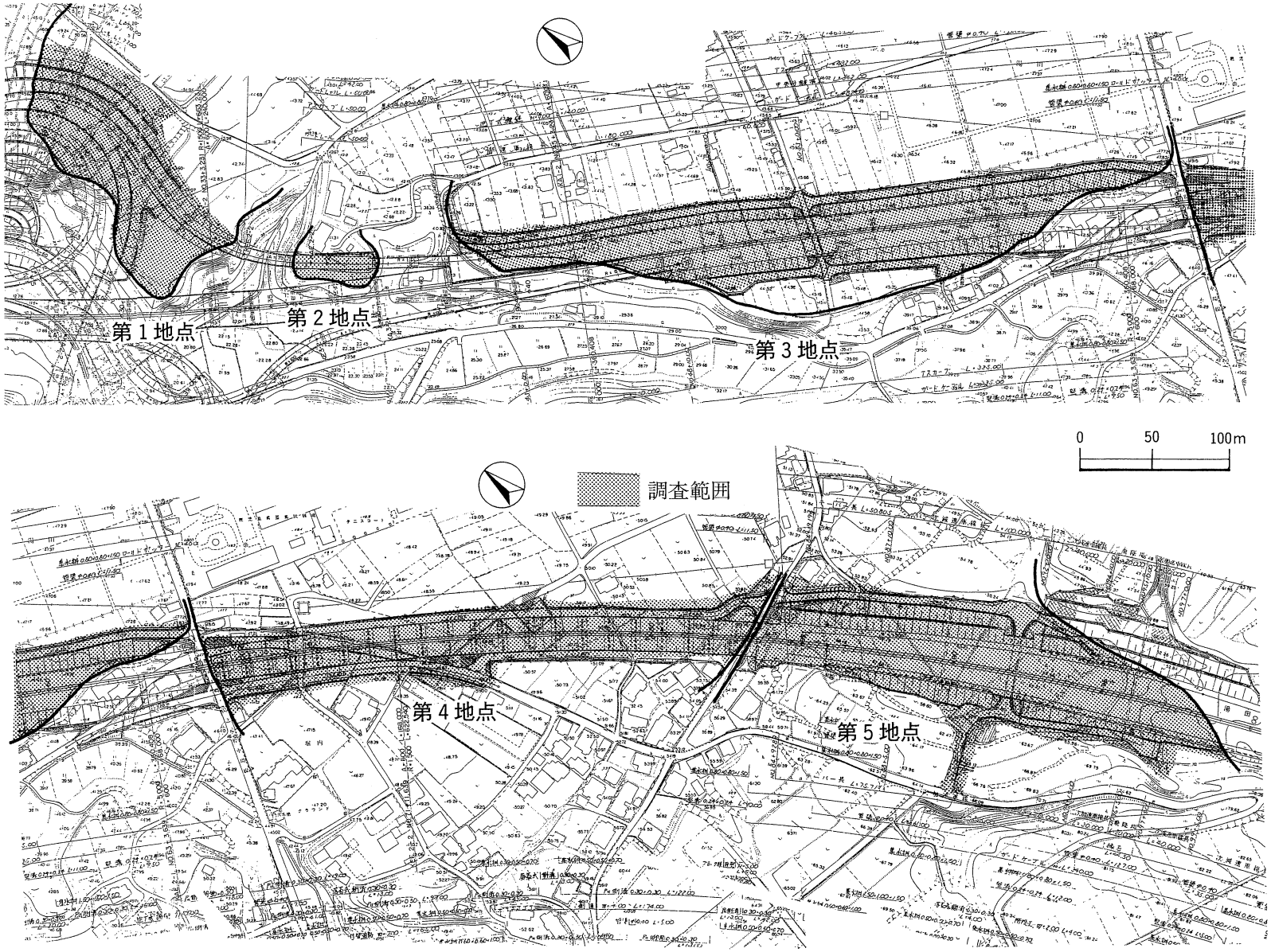
番号	遺跡名	所　在　地	調査面積（㎡）	調　査　期　間	調　　査　　員	時　　代	概　　要
①	一ノ谷	日置市伊集院町 下谷口	1,250	確認H8.10 全面H8.10～11	三垣・桑波田 三垣・桑波田	中世～近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 （県埋文センター報告書31　2001刊行）
②	永迫平	日置市伊集院町 下谷口	14,000	確認8.10～12 全面H8.10～H10.7	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原・桑波田・川口・大窪	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文 古代～近世	礫群，剥片尖頭器・ナイフ形・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑，前平式・吉田式土器 青磁・土師器・陶磁器 （県埋文センター報告書93　2005刊行）
③	下永迫	日置市伊集院町 下谷口	2,600	確認H9.10 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代～中世	土坑・集石，須恵器・土師器 青磁・白磁 （県埋文センター報告書72　2004刊行）
④	柳　原	日置市伊集院町 下谷口	8,000	確認H9.11 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土，須恵器・土師器・鉄製品 ピット・溝状遺構，陶磁器 （県埋文センター報告書94　2005刊行）
⑤	上山路山	日置市伊集院町 大田	6,300	確認H9.2 全面H9.5～H10.3	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文 弥生～古墳	剥片・砕片 道跡・集石，岩本式・前平式・吉田式・市来式土器 成川式土器 （県埋文センター報告書116　2007刊行）
⑥	大田城	日置市伊集院町 大田	3,500	確認H8.12～H9.1 全面H9.12～H10.3	三垣・桑波田	旧石器 縄文	三稜尖頭器 集石・土坑，前平式土器，石鏃・磨石 （県埋文センター報告書95　2005刊行）
⑦	堂平窯	日置市東市来町 美山	3,500	確認H10.2 全面H10.8～12	池畑 池畑・繁昌・宮田 森田・元田他	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具 （県埋文センター報告書106　2006刊行）
⑧	池之頭	日置市東市来町 美山	7,500	確認H9.8 全面H10.8～11 H12.7～8	湯之前・橋口 宮田・寺原 宮田・三垣	旧石器 縄文 古墳	ナイフ形石器・台形石器・石核・細石刃核・細石刃 集石，前平式・吉田式・出水式・黒川式土器 成川式土器 （県埋文センター報告書32　2002刊行）
⑨	雪　山	日置市東市来町 美山	2,700	確認H12.6 全面H12.6～8	宮田・三垣 宮田・三垣	縄文 古墳 近世～近代	前平式・春日式土器，石鏃・磨石・敲石・石皿 成川式土器 窯道具・焙烙・石臼・陶磁器・砥石・鉄製品 （県埋立センター報告書53　2003刊行）
⑩	猿　引	日置市東市来町 長里	800	確認H12.5 全面H12.5～6	宮田・三垣 宮田・三垣	旧石器 縄文	礫群，剥片尖頭器・ナイフ・細石刃核 曽畑式土器，石斧・磨石・敲石 （県埋文センター報告書53　2003刊行）
⑪	犬ヶ原	日置市東市来町 伊作田	2,000	確認H9.2，H10.6 全面H11.11～H12.2	池畑・三垣 牛ノ濵・橋口・大窪	旧石器 縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・剥片 黒川式土器，石斧・石皿・石鏃 掘立柱建物跡・竪穴遺構，須恵器・土師器 （県埋文センター報告書50　2003刊行）
⑫	向椎城	日置市東市来町 伊作田	16,000	確認H8.11～12 全面H9.4～H10.3 全面H10.7～8	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃，隆帯文・前平式・市来式土器 竪穴住居跡，成川式土器 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・竪穴遺構・掘立柱建物跡・ 炉跡・土坑，青磁・備前焼，鉄製品 （県埋文センター報告書129　2008刊行）

○報告書刊行済

第２表　南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表（2）（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）

番号	遺跡名	所　在　地	調査面積（㎡）	調査期間	調　査　員	時　代	概　　要
⑬	堂園平	日置市東市来町 伊作田	2,000	確認H8.11～12 全面H10.5～11	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石 礫群，細石刃核・細石刃 集石，吉田式・塞ノ神式・轟式土器 土坑，須恵器・土師器 （県埋文センター報告書104　2006刊行）
⑭	今　里	日置市東市来町 伊作田	14,000	確認H8.11～12 全面H10.5～11	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文 古墳	礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・ブランク・調整剥片 集石，前平式・深浦式・出水式・黒川式土器 成川式土器 （県埋文センター報告書33　2002刊行）
⑮	市ノ原 第１地点	いちき串木野市 大里	12,000	確認H8.10～12 全面H9.4～H10.3	繁昌・西園・宮田 寺師・藤野	縄文 弥生 古代 中世～近世	集石，前平式・春日式・黒川式土器，玦状耳飾り 埋甕 掘立柱建物跡・土坑・溝，須恵器・墨書土器 道跡・近世墓，青磁・白磁・羽釜・染付 （県埋文センター報告書49　2003刊行）
⑯	**市ノ原 第２地点**	**日置市 東市来町湯田**	**1,000**	**確認H8.10～12 全面H9.4～H10.3**	**池畑・繁昌・西園・宮田 八木澤・松崎**	**旧石器（ナイフ） 縄文 近世**	**ナイフ形石器 塞ノ神式・苦浜式土器 陶磁器 （県埋文センター報告書130　2008刊行）**
⑰	市ノ原 第３地点	日置市 東市来町湯田	34,500	確認H8.10～H8.12 全面H8.12～H9.3 全面H9.4～H10.3 全面H10.5～H11.3 全面H11.5～7	池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣・元田・西村・松村 前野・上之園・八木澤・三垣・横手・松村・大窪 前野・三垣	旧石器（細石刃） 縄文 弥生～古墳 古代～中世	細石刃核・細石刃 集石，刻目突帯文・岩本式・前平式・吉田式・石坂式・ 桑ノ丸式・押型文・平栫式・塞ノ神式・轟式・曽畑式・ 深浦式・竹崎式・春日式・指宿式・市来式土器 竪穴住居跡・土坑・焼土，高橋式・入来式・黒髪式・ 山ノ口式・須玖式・成川式土器 掘立柱建物跡・溝状遺構，須恵器・土師器，青磁・白磁・石鍋
⑱	**市ノ原 第４地点**	**日置市 東市来町湯田**	**22,300**	**確認H8.10～H8.12 全面H9.4～H10.3 全面H10.5～H11.3 全面H11.5～7**	**池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣・元田・西村・松村 前野・上之園・三垣・松村・大窪 前野・三垣**	**旧石器 縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世**	**剥片・砕片 集石・竪穴住居跡・土坑，前平式・吉田式・桑ノ丸式・ 押型文・平栫式・塞ノ神式土器 竪穴住居跡・土坑，高橋式・成川式土器 竪穴住居跡・焼土・溝状遺構，須恵器・土師器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉，陶磁器 （県埋文センター報告書130　2008刊行）**
⑲	市ノ原 第５地点	日置市 東市来町湯田	11,700	確認H8.10～12 全面H9.4～H10.3 全面H10.5～H11.3	繁昌・西園・宮田 森田・中原 寺原・松村	旧石器 縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群，ナイフ・台形石器・細石刃核・細石刃 落し穴・集石，前平式・押型文・深浦式土器 弥生土器・成川式土器 道跡，須恵器・土師器，滑石製石鍋 （県埋文センター報告書105　2006刊行）
⑳	上ノ原	いちき串木野市 大里	2,000	確認H8.11 全面H10.7～9	繁昌・西園・宮田 上之園・栗林	縄文 古墳 古代～中世	集石・土坑，塞ノ神式土器 竪穴住居跡・土坑・貝殻土坑，成川式土器 須恵器・土師器・青磁 （県埋文センター報告書62　2003刊行）

○報告書刊行済



第３図　市ノ原遺跡調査地点位置図

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　調査にいたるまでの経過

市ノ原遺跡は，平成８年10月～12月に実施した確認調査の結果，平成８年12月から平成９年３月，平成９年４月から平成10年３月，平成10年５月から平成11年３月，平成11年５月から同年７月の期間に本調査を実施した。総面積62,000㎡の調査範囲は，道路建設に伴って細長いため，地形を検討した上で，遺跡内をいちき串木野市大里側から，第１地点から第５地点までの５地区に分割して調査を行うこととした。市ノ原遺跡第４地点は，平成８年12月16日から平成９年３月17日，平成９年４月21日から平成10年３月31日，平成10年５月から平成11年３月，平成11年５月24日から７月12日までの期間に本調査を実施した。

第２節　調査の組織

＜確認調査，発掘調査・平成８年度＞

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
調査企画者		次長兼総務課長	尾﨑　　進
		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者		文化財主事	繁昌　正幸
		文化財調査員	宮田　茂樹
調査事務担当者		主査	前屋敷裕徳
		主査	政倉　孝弘
		主事	追立ひとみ

＜発掘調査・平成９年度＞

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	所長	吉元　正幸
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾﨑　　進
調査企画者		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者		文化財主事	前野潤一郎
		文化財研究員	三垣　恵一
		文化財研究員	元田　順子
		文化財研究員	西村　喜一
		文化財調査員	松村　智之

調査事務担当者		主　　査	前屋敷裕徳
		主　　査	政倉　孝弘
		主　　事	追立ひとみ

＜発掘調査・平成10年度＞

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	所　　長	吉永　和人
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾﨑　　進
調査企画者		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者		文化財主事	前野潤一郎
		文化財主事	三垣　恵一
		文化財調査員	松村　智之
調査事務担当者		主　　査	前屋敷裕徳
		主　　査	政倉　孝弘
		主　　事	溜池　佳子

＜発掘調査・平成11年度＞

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉永　和人
調査企画者		次長兼総務課長	黒木　友幸
		総務課係長	有村　　貢
		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	青﨑　和憲
調査担当者		文化財主事	前野潤一郎
		文化財研究員	三垣　恵一
調査事務担当者		主　　査	今村孝一朗

＜整理作業・平成17年度＞

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	上今　常雄
作成企画者		次長兼総務課長	有川　昭人
		次長兼調査第一課長	新東　晃一
		調査第二課長	立神　次郎
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
作成担当者		文化財主事	三垣　恵一
作成事務担当者		主幹兼総務係長	平野　浩二

		主　　査	寄井田正秀

＜整理作業・平成18年度＞

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	上今　常雄（～７月31日）
		所　　長	宮原　景信（８月１日～）
作成企画者		次長兼総務課長	有川　昭人
		次　　長	新東　晃一
		調査第二課長	立神　次郎
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
		主任文化財主事	宮田　栄二
作成担当者		文化財主事	日高　正人
		文化財主事	日高　勝博
作成事務担当者		総務係長	寄井田正秀
		主　　査	蒲地　俊一

＜整理作業・平成19年度＞

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	宮原　景信
作成企画者		次長兼総務課長	平山　　章
		次　　長	新東　晃一
		調査第二課長	立神　次郎
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
		主任文化財主事	宮田　栄二
作成担当者		文化財主事	日高　正人
		文化財主事	羽嶋　敦洋
		文化財主事	日高　勝博
作成事務担当者		総務係長	寄井田正秀
		主　　査	蒲地　俊一

報告書作成検討委員会	平成19年12月17日　宮原景信所長ほか12名
報告書作成指導委員会	平成19年12月14日　新東晃一次長ほか３名
企画担当者	八木澤一郎，川口雅之
遺物指導	本田道輝　鹿児島大学法文学部准教授
	下條信行　愛媛大学法文学部教授
	田畑直彦　山口大学大学情報機構埋蔵文化財資料館助教
	東　和幸　鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸専門員

第３節　調査の経過

調査の経過は，日誌抄をもって記載する。日単位の記録では煩雑になるため，月単位にまとめた。なお，整理作業において，平成19年度は，第２地点の報告書作成を並行して実施したため，合わせて記載した。

〈平成８年度〉（平成８年10月１日～平成９年３月27日）

10月

調査施設設営準備及び環境整備を行う。トレンチ設定し，掘り下げを開始。Ⅲ層上面から弥生時代の甕（かめ）口縁部や壺（つぼ）の底部が出土。１～25Ｔの平板実測及び土層断面実測。

11月

５～30，41～60トレンチの掘り下げ，平板実測，土層断面実測，埋め戻しを行う。31～35トレンチの設定，掘り下げを実施。上ノ原遺跡と並行して作業を行う。トレンチ配置図作成。養蚕試験場の東側調査指示（19日）。建設省調査課，用地課の現場確認。

12月

41～71トレンチの掘り下げ，位置図作成，トレンチ断面実測・写真撮影の実施。全面調査を開始。グリッド設定し，Ｂ～Ｄ-３～８区，Ⅲ層の掘り下げ。（Ⅲb層掘り下げ，Ⅳ層上面検出：方針）Ⅲ層下面よりピット検出。３㎝掘り下げ後完掘，写真撮影，平板実測。重機による表土剥ぎ。ダンプにより排土処理。

１月

ＢＣ-３～９区のピットの完掘，平板実測（1／20）で実測。Ｂ～Ｅ-５～９区からピット，土坑を検出，完掘し，写真撮影，実測を行う。ＢＣ-10～12区の表土剥ぎ。ＤＥ-２～９区土坑，ピット検出，完掘，写真撮影，実測，土壌サンプル採取。

２月

Ｂ～Ｅ-２～14区の土坑レベル実測，Ⅲ層掘り下げ，ピット検出，掘り下げ。１ｍグリッド設置。ＤＥ-９～11区，ピット・焼土域検出，写真撮影，平面実測。Ｂ～Ｅ-２～９区，ピット実測，Ⅲ層掘り下げ，掘建柱建物跡写真撮影。Ｂ～Ｅ-２～９区，掘建柱建物跡検出，写真撮影。

Ｂ～Ｄ-４～８区，ベルトに沿ってＬ字トレンチを２本，直線３本を設定し，下層確認。Ｂ～Ｄ-２～９区，トレンチ掘り下げ（Ⅳ層～Ⅵ層）Ⅵ層下部まで山鍬（やまくわ），Ⅵ層ねじり鎌（がま）を使用して掘り下げる。Ｂ～Ｄ-９～13区，グリッド杭打ち。

３月

ＣＤ-９～12区，Ⅲ層以下掘り下げ。下層確認トレンチ掘り下げ，写真撮影，集石，ピット，土坑実測。Ⅵ，Ⅶ層ＯＢフレーク検出。土器・石斧（せきふ）出土状況実測。Ｂ～Ｄ-２～９区，土層断面写真撮影，集積実測。ＢＣ-７・８区，表土剥ぎ。Ⅲ，Ⅳ層以下掘り下げ。ＢＣ-７～９区，ピット，土坑実測，写真撮影，コンタ図作成。ＣＤ-５・６区，Ⅶ層掘り下げ。Ｃ～Ｅ-７～12区，ピット，土坑実測。ＣＤ-９～11区，Ⅲ層以下掘り下げ，ピット，古道実測。Ⅴ層より平椿式土器出土。トレンチ掘り下げ。ＢＣ-７～９区，土器実測。ＢＣ-４区，集石，土器検出状況実測。Ｄ-11区，土器集中区実測。平成18年度調査終了。

〈平成９年度〉（平成９年４月21日～平成10年３月25日）

５月

平成９年度調査開始。オリエンテーション。全体的な注意。工程等の説明。第１地点～第５地点の現場見学。

ＤＥ－２・３区，杭打ち，グリッド設定。駐車場土砂流出防止の土のう積み上げ。Ｆ－４・５区，民有地との境界に杭打ち。Ｃ-21～30区，遺物取上げ，下層確認，平板実測。ＢＣ-18～21区，精査，遺物集中か所検出。Ｂ～Ｄ-10～29区，ピット検出，完掘，平面実測。Ｃ-27区，空爆待避トレンチ検出，掘り下げ，平板実測を実施。Ｃ-13～16区，遺構検出，写真撮影。ＤＥ－１～３区，表土剥ぎ，Ⅲ層上面検出。ＦＧ-35区，表土剥ぎ。ＤＥ－１～３区，ピット・土坑掘り下げ。Ｃ～Ｅ-23～27区，古道（出水筋）確認トレンチ（断ち割り），写真撮影。サポートシステムによる平板実測。

６月

ＢＣ-19・20区，精査・遺構検出・掘り下げ終了後，下層確認。遺物取上げ，平板実測。ＣＤ-16～20区，平板実測，遺物取上げ，精査，遺構検出。ＣＤ－１～３区，Ⅲ層以下下層確認，写真撮影。Ａ～Ｅ－１～３区，遺物出土状況写真撮影，平板実測，遺物取上げ，遺構検出。Ｂ～Ｄ-17～20区，Ⅱ層掘り下げ，遺構検出。Ｃ-19区，Ⅲ層上面に遺構を検出。１～３区，Ⅲ層以下，下層確認。19・20区，精査・遺構検出，掘り下げ終了後，下層確認。ＤＥ-22～28区，出水筋掘り下げ，平板実測，遺物取上げ，断ち割り断面実測。Ｃ－14～20区，Ⅱ～Ⅷ層掘り下げ。下層確認トレンチ（２ｍ×20ｍトレンチ）の土層断面図作成。ＤＥ-15～20区，遺構検出，サポートシステムによる平板実測。Ｅ～Ｇ-27～30区，Ⅱ層上面溝状遺構，柱穴検出，遺構精査。第３地点と並行して調査。

７月

Ｄ-11～14区，下層確認トレンチ掘り下げ。Ｅ～Ｇ-27～30区，溝状遺構，柱穴検出，清掃。ＣＤ-16～19区，清掃。Ｄ-20区，埋め戻し開始。Ｂ～Ｄ-14区，下層確認トレンチ掘り下げ，写真撮影，土層断面図作成。Ｃ～Ｇ-21～30区，Ⅲａ・Ⅲｂ層掘り下げ，遺構検出，写真撮影，土層断面作成，平面実測。Ｃ-21・22区で縄文時代晩期の竪穴住居跡を検出，平面図実測。Ｅ～Ｇ－29・30区では近世の建物跡等の実測終了後，下層確認を実施したところ版築（はんちく）状遺構を検出，平面実測。サポートシステムによる平面実測。

Ｃ～Ｆ-15～20区，Ⅲｃ層にて遺構検出。Ｇ-29・30区，Ⅲ層上面掘り下げ，写真撮影，版築状遺構掘り下げ。ＦＧ-29・30区，Ⅲ層遺構検出，平面実測，Ⅱ層掘り下げ。Ｅ-15区　表土剥ぎ。ＣＤ-17・18区，精査及び平板実測。Ｅ-18・19区，下層確認トレンチ，実測完了。ＥＦ-17・18区，表土剥ぎ。出水筋断面精査・写真撮影。Ｄ-21区，下層確認トレンチ掘り下げ。ＦＧ-27・28区，排土除去，Ⅱ層～掘り下げ。ＣＤ-15区，遺構平面実測終了。

西南学院大学教授　高倉洋彰氏　来所。

８月

Ｄ-16区，住居跡，スプリンクラーによる散水。Ｂ～Ｅ-16～18区の生活道路以東は，確認調査を実施し，ほぼ調査を終了。縄文時代早期の遺物の出土範囲の把握。生活道路以西は，Ｃ～Ｅ-24区まで調査を終了し，25～30区については下層確認を実施。

D-22・23区，下層確認トレンチ，遺物取下げ，セクションベルト掘り下げ，遺物検出。E-16～18区，遺構掘り下げ，遺物取上げ。ＤＥ-17・18区，下層確認トレンチ。E-17区，ベルト部ピット検出，掘り下げ。D-18区，下層確認トレンチ掘り下げ，写真撮影。D-16区，下層確認トレンチ掘り下げ。D-17区，下層確認トレンチ断面図作成。F-18区，C-21区，土坑周辺，調査区拡張。F-18区，Ⅲa層まで掘り下げ，遺構検出。C～G-22～28区，Ⅲ層当該層以下掘り下げ，平板実測，遺構検出。ＦＧ-27～30区，D-22・23区，下層確認トレンチ掘り下げ，遺物取上げ。ＤＥ-16区，ＥＦ-18区，平板測量実施。D-15～17区，縄文時代早期の遺物出土が少量確認。25～30区，下層確認実施。ＥＦ-27～30区，隣接する民家の排水路の付け替え，表土剥ぎ。建設省との打ち合わせ。

千葉県市川市考古博物館　堀越正行氏　来所。

９月

E-17区，Ｆ-18区，土坑遺物取上げ，平面実測。ＣＤ-21区，ピット平面実測。C～G-23～26区，Ⅲa層掘り下げ，遺構検出，遺構実測，写真撮影。16日（火）台風のため作業中止。ＥＦ-25～27区，サポートシステムによる平板実測。C～E-23～27区，Ⅲ層掘り下げ，遺構検出。ＥＦ-25・26区，表土剥ぎ，ＦＧ－26・27区，遺物取上げ，平板実測，遺構検出，遺構平面実測。Ａ～Ｅ-14～21区の生活道路に伴う迂回（うかい）路が完成，９月16日より通行開始。ＥＦ-17・18区，迂回路部分，土のう積み上げ。C～E-22～25区，Ⅲ層掘り下げ，遺構検出。Ｅ～G-25・26区，表土剥ぎ。C-23区，下層確認トレンチ，土層断面図作成。Ｅ～G-25～27区，Ⅲ層上面まで掘り下げ，平板実測，遺物取上げ。

ＤＥ-23・24区，Ⅲ層下面，遺構実測。E-21～24区，埋め戻し。Ａ～Ｅ-14～21区の生活道路部分の表土剥ぎ及び配水管・排水管の付け替え終了，調査開始。

なお，Ｆ～H-30区の生活道路部分については道路下に周辺集落への排水用の水道管（径20㎝）が埋設してあり，水道管を支持するかたちや水道管下部分だけ残すなど，調査の方法を考慮したが，水道管から包含層まで表土が２ｍ強あり，いずれの方法でも水圧に耐えられないとの判断から調査を断念。町道より北のＥ～G-24～30区，下層確認実施。迂回路立合い検査。町道から現場までスロープ（坂道）造成。

考古学会会長　河口貞徳氏，鹿児島大学法文学部教授　上村俊雄氏　来所。

10月

Ｅ～G-25・26区，平面実測。Ｆ-24区，集石遺構検出。ＢＣ-17・18区，ＣＤ-19・20区，遺物取上げ，Ⅲ層上面まで掘り下げ，古道，平面実測。Ｆ-25・26区，下層確認トレンチ土層断面図作成。Ｆ-27区，集石遺構実測。Ｂ～D-17～21区，Ⅲa層まで掘り下げ，平板実測，遺物取上げ。溝状遺構検出，写真撮影，平面実測。ピット，土坑埋土除去。Ⅲ層上面遺構検出。溝状遺構土層断面写真撮影。サポートシステムによるピット，土坑平面実測。下永迫Ａ，Ｂ遺跡，並行して確認調査を実施。Ｂ～Ｅ-21区，Ⅲ層上面で遺構を検出。溝状遺構平面実測。溝状遺構土層断面写真撮影。Ｂ～Ｅ-17～21区，精査遺構検出，溝状遺構ベルト外し。ＣＤ-28区，土坑実測。

生活道路についても調査をする予定であったが，町道部分とそれに付随する側溝・用水路・電柱等の移設工事が早くて平成９年12月ごろからになりそうな見通しで，図中の調査未了範囲を残

した形で第３地点の調査範囲を拡大して発掘調査を継続する。

池畑係長，北海道大学教授　林　謙作氏を案内。

11月

生活道路部分を下層確認。Ｂ～Ｅ-17～21区，Ⅲ層まで掘り下げ，遺構検出，平板実測，遺物取上げ，土坑写真撮影。Ｂ～Ｅ-17～21区，Ⅶ層上面まで掘り下げ（Ⅵ層以下，下層確認）遺構検出，ピット内遺物取上げ。サポートシステムによる平面実測。集石遺構検出，清掃，写真撮影，平板実測，遺構検出，遺物取上げ。ピット内遺物取上げ。Ｅ－20区土坑掘り下げ，埋土サンプル採取。ピット，土坑内遺物取上げ。第３地点，第５地点と並行して発掘調査実施。

徳島文理大学大学院教授　石野博信氏　来所。

12月

Ｂ～Ｅ-17～21区，Ⅳ層以下の下層確認，掘り下げ，遺物取上げ，遺構検出，平面実測。下層確認トレンチ掘り下げ。土層断面図。Ｂ-16・17区，Ｅ－20区，土坑検出，遺物取上げ，見通し断面実測，写真撮影。Ｂ-17・18区（電信柱周囲）の遺構検出。Ｄ-18・19区，Ⅶ層以下下層確認。Ｂ～Ｅ-17～21区のうち，Ｄ-18～20区，Ⅶ層以下，下層確認，土層断面写真。Ｂ-16・17区，遺構検出，土坑遺物取上げ。ＢＣ-17区，遺構平面実測。Ｅ－20区，土坑，平面実測，見通し断面実測，遺物取上げ。グリッド杭地点掘り下げ。第４地点終了。以下３月末まで，第３地点の調査を継続。

〈平成10年度〉（平成10年５月６日～平成10年８月28日）

５月

プレハブ周辺整備。休憩所，事務所，倉庫，整理。３地点を主に調査。

６月

新設町道沿いへの電柱・石碑・水道管等の移設終了後，旧道路部分の表土剥ぎ。新設町道工事中。（平成９年12月８日～）。堀内高架橋梁工事開始。（平成10年２月～）第３地点を主に調査。

７月

業務委託現地説明（遺構実測），海田産業，現地打ち合わせ。第４地点調査開始。

旧町道部分アスファルト剥ぎ，一部表土剥ぎ。ダンプ２台で搬出。バリケード設置，杭打ち，ＤＥ-24～28区，Ⅲ層まで掘り下げ。道跡検出，掃除後，写真撮影。ＤＥ-24～32区，溝状遺構２条検出，硬化面を確認。ＤＥ-28・29区，Ⅱ層下面土坑検出，掘り下げ，写真撮影。Ｄ-26～30区，Ｅ-26・27区，道跡，実測図作成，レベル測定。

旧町道沿いの電柱・地下埋設ケーブル等の移設及び新設町道舗装工事終了後，旧町道部分の表土剥ぎ，調査開始。

ＤＥ-24～28区，Ⅱ～Ⅲa層面まで掘り下げ，遺物出土。ＤＥ-26～29区，Ⅲa層掘り下げ，遺物取上げ。道跡実測図，レベル測量。Ⅱ層下面検出，遺構（土坑など）掘り下げ。

８月

ＤＥ-23～30区，溝状遺構掘り下げ。埋文サポートシステムによる溝状遺構，土坑実測。遺構内遺物取上げ。Ⅲ層以下掘り下げ。下層確認。溝状遺構，土坑清掃後写真撮影。土坑断面図作成。Ⅲb層まで掘り下げ。遺構検出。ＤＥ-35～38区，付近埋め戻し。杭，フェンス撤去。第４地点調

査終了。

〈平成18年度　整理作業〉

整理作業を平成18年４月から平成19年３月まで，県立埋蔵文化財センターで行った。

４月　オリエンテーション，土器注記，接合，遺構内遺物の抽出，遺構配置図作成。

５月　遺物接合，遺構内遺物の接合，図面整理，近世掘立柱建物跡トレース，包含層遺物分類。

６月　底部接合，遺構トレース，土坑配置図作成，集石配置図作成，西回り整理作業事務所へ引っ越し。

７月　住居・土坑内遺物接合，底部拓本，住居跡トレース，出水筋トレース，遺構配置図作成，石溜（だ）まり遺構トレース。

８月　底部分類，実測，計測。

９月　縄文土器実測。

10月　縄文，弥生，中近世土器実測，復元，拓本，掘立柱建物跡分類，計測。

11月　遺物台帳入力，縄文，弥生土器実測，トレース，復元。

12月　遺物トレース，縄文，弥生土器実測，底部計測。

１月　底部実測，弥生土器実測，平板図データ入力。

２月　弥生土器実測，平板図データ入力，弥生土器分布図作成，縄文土器トレース，拓本，底部実測。

３月　６日鹿児島大学法文学部准教授本田道輝氏，８日愛媛大学法文学部教授下條信行氏遺物指導，弥生土器，石器実測，平板図データ入力。

〈平成19年度　整理作業〉

整理作業及び報告書作成作業を平成19年４月から平成20年３月まで，県立埋蔵文化財センターで行った。

４月　オリエンテーション，物品確認，土器の分類，接合。弥生，古墳時代の土器実測，復元，トレース，土器底部木葉痕の拓本，平板図データ入力。

５月　縄文，弥生土器の分類，接合，実測，復元，トレース，仮レイアウト，遺構トレース，写真整理，平板図データ入力，中・近世遺物分類，実測，石器実測業務委託準備，クレイ粘土型取り，石器実測業務委託。

６月　古墳時代土器選別，片付け，弥生，古墳時代土器，石器実測，復元，縄文時代土器，近世遺構トレース，遺構（ピット，土坑）分類，図面作成，データ入力，石器実測業務委託準備，石器実測業務委託，第２地点遺物トレース。

７月　図面整理，古墳時代土器分類，石器・弥生土器実測，石器トレース，データ入力，古墳時代レイアウト，近世遺物復元。

第２地点石器実測業務委託準備，石器実測業務委託，台風対策。

８月　近世遺物の分類，弥生土器，古代・中世出土遺物実測，データ入力，写真分類。

９月　５日　山口大学情報機構埋蔵文化財資料館准教授田畑直彦氏遺物指導，中世遺物実測，弥

生土器実測，土器胎土観察表作成，土坑，石器トレース，データ入力，遺構内遺物分類，実測，トレース，レイアウト。

10月　胎土観察表作成，石器，土坑トレース，弥生土器，石器，近世遺物実測，写真撮影準備，遺構内遺物実測，トレース，胎土観察表作成，データ入力。

11月　第２地点：須恵器（すえき）拓本，土器トレース，遺構配置図作成。

第４地点：弥生土器実測，胎土観察表作成，データ入力，石器，掘立柱建物跡トレース，レイアウト，土器撮影準備。

12月　第２地点，第４地点レイアウト，観察表作成，データ入力，原稿作成，入札起案。

１月　原稿修正，確認，入札，校正，遺物整理。

２月　校正，図面整理，遺物，図面収納，展示遺物確認。

３月　校正，報告書掲載遺物の収納，報告書納入をもって，市ノ原遺跡（第４地点・第２地点）の報告書作成作業のすべてを終了。

なお，報告書作成に当たっては，企画担当者のほか下記の方に指導・助言を頂いた。

寺田仁志　鹿児島県立博物館　主任学芸主事

池畑耕一，中村耕治，鶴田靜彦，前迫亮一，岩屋高広，中村和美，関明恵，黒川忠広，内村光伸，上床真

第Ⅲ章　位置及び環境

第１節　遺跡の位置及び自然環境

市ノ原遺跡第４地点・第２地点は，日置市東市来町湯田字下市ノ原・字瀬戸ノ口・字堀内・字柴立に所在する。

日置市東市来町は，平成の大合併で，平成17年５月１日，伊集院町・日吉町・吹上町と合併し，51,955人の日置市となった。

旧東市来町は，薩摩半島の北西部に位置し，東は旧伊集院町，南は旧日吉町，北はいちき串木野市に接し，西は東シナ海に面している。鹿児島市から西方約28㎞に位置し，東西16㎞，南北約９㎞の細長い地域で面積は70.97ｋ㎡，人口13,623人（平成12年10月１日国勢調査人口）である。1889年（明治22）市来郷の湯田・伊作田・神之川・長里・養母の５か村を合わせて東市来村として発足，1937年（昭和12）４月，町制を施行，1956年（昭和31）９月，旧下伊集院村の南神之川・苗代川（美山）・宮田・牧之角を合併し，平成17年5月に周辺の伊集院町・日吉町・吹上町と合併し日置市となり現在に至る。

市ノ原遺跡のある旧東市来町の地形は，北部の重平山・中岳・大峰ヶ原など数百ｍの旧火山灰の山地と，南西部の中生層の低い山地を除けば，これらの山地の間を埋めた50～180ｍ内外の火山灰（シラス）台地である。大里川・江口川は町の中央部を貫流し，南端の町境及び南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。また，それらの河川によってつくられた小さな盆地状の谷底平野がいくつも並び，そこに大里・養母・湯之元などの集落が発達している。水田は主としてこの三河川流域に沿って開け，畑地はその丘陵に分布しているが，大半はシラス台地である。シラス台地は，錦江湾奥部にある姶良カルデラから噴出した火砕流が堆積した台地で，シラスは約25,000年前の火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。

江口浦の海岸には，海岸砂丘の発達がみられず，シラスの海食崖には，卓越風による風食地形が発達し，「江口蓬莱」の名がある。

薩摩半島の東シナ海側の，ほぼ全域といっていいほどに白砂青松の砂浜が続く浜は，吹上浜と呼ばれ，日本三大砂丘の一つである。南北47㎞にわたる海岸線は，いちき串木野市から南さつま市にかけて３市にわたり，距離的には日本最長の砂丘である。冬は北西の風が強く，海岸の砂は内陸部に吹き溜まり，最大幅２㎞，最高所47ｍ（南さつま市金峰町竹原）の吹上浜砂丘ができた。

遺跡は，日置市東市来町の南西部，湯田地区の南方に位置する。湯田集落の標高約50ｍの河岸段丘上のシラス台地にあり，ＪＲ湯之元駅の南側にあたる。

第２節　歴史的環境

旧東市来町では昭和62年養母の上二月田遺跡で縄文時代前期・後期の調査がなされ，仮牧段遺跡・桜町遺跡などわずかな遺跡が知られていたのみで，昭和59年度発行の遺跡地名表では寺院城跡・窯跡を含んでも15か所が紹介されているのみであったが，平成３年から始まった北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査や南九州西回り自動車道建設に伴う調査が行なわれたこと等により，遺跡数が一気に増加し，現在では92か所の遺跡が周知されている。そこで，周辺遺跡と併せて主な遺

跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

旧東市来町では，南九州西回り自動車道建設が始まるまでは，旧石器時代の遺跡は伊作田の老ノ原遺跡で細石刃核・細石刃が出土したことが知られているのみであったが，今では旧松元町・旧伊集院町と並んで県内でも有数の遺跡群となっている。

今里遺跡は伊作田の標高約63mの台地端の傾斜地に所在し，ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパーと細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土している。特に細石刃は比較的小規模な発掘にも限らず101点と多く出土し，また分類・編年等もでき，今後の旧石器文化研究に重要な遺跡となっている。猿引遺跡は長里の標高約110～115mの尾根上の台地に所在し，旧石器時代の遺跡は迫状窪みに集中して出土した。ナイフ形石器文化の礫部１基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃がみつかった。池之頭遺跡は美山の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に所在し，ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃が出土した。向椎城跡は伊作田の標高約50mの独立台地上に所在し，剥片尖頭器・ナイフ形石器が出土した。堂園平遺跡は伊作田の遠見番山から下る斜面の裾野にあり，標高約50mの平坦地に所在する。ナイフ形石器文化の礫群９基と剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃が出土した。また，湯田の市ノ原遺跡でも多くの旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代

上二月田遺跡は養母に所在し，縄文時代後期の住居跡２基・土坑２・炉跡などが検出した遺跡で，遺物には平椎式・塞ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜臼式土器等が出土している。今里遺跡では早期の集石３基と早期～晩期の岩本式・前平式・押型式・深浦式・春日式・出水式・上加世田式・黒川式土器と共に，多くの石器（石鏃・石匙・磨石等）が出土している。特に独鈷状石器は注目される。池之頭遺跡では早期の集石８基と，前平式・吉田式・石坂式土器の他，春日式・並木式・阿高式・入佐式・黒川式土器が出土している。隣接する雪山遺跡では前平式土器の円筒土器と角筒土器の完形品が出土している。向椎城跡では，草創期の配石遺構・集石が多量の隆帯文土器や石鏃・敲石・石斧・石皿と共伴して出土している。前期～晩期でも轟式・阿高式・市来式・黒川式土器が出土している。市ノ原遺跡は湯田の標高約50mの台地西側に所在し，調査面積は62,000㎡と広範囲の遺跡で早期～晩期まで多種多様な遺構・遺物が発見された。特殊な遺物として竹崎式土器や耳飾り・三角壕形の土・石製品等，交易品と考えられるものも出土している。

弥生～古墳時代

調査対象地域は台地が多いせいか，弥生時代の遺跡は少ないが，上二月田遺跡で高橋式土器が出土し，市ノ原遺跡では竪穴住居や壺棺に，高橋式・北麓式・黒髪式・山ノ口式土器と石鏃・石錐・石斧等が，共伴して出土している。

古墳時代の遺跡は多く発見されている。住居跡が検出された遺跡では向椎城跡11基，市ノ原遺跡で７基がある。遺物では成川式土器の甕・壺・高坏・手捏土器と磨石・磨製石鏃等が出土している。老ノ原遺跡では成川式土器と須恵器が共伴して出土した。

古代

旧東市来町は古代においては薩摩国日置郡に属していたと考えられている。市来院は宝亀年間以降，郡司の大蔵氏一族が支配していた。向椎城跡では円形周溝遺構・土坑に土師器・墨書土器・須恵器・古銭と共伴して出土している。市ノ原遺跡では第１地点で掘立柱建物跡15棟・土坑が検出され，墨書土器も100点以上出土し，「春」「奉」「松」「厨」などの文字が判読されている。隣接する旧市来町では安茶ヶ原遺跡から「日置厨」の墨書土器が出土している。

中世～近世

旧東市来町は中世山城が多く，中心となる鶴丸城は古代から，大蔵氏が居を構えて市来氏と称していた。中世，椎宗姓を称した市来氏は島津軍に攻められ滅亡するが，1550年，フランシスコ・ザビエルが鶴丸城に立ち寄り，布教活動をしたとの記録も残されている。また，11年後に鶴丸城をたずねた宣教師のイルマン・ルイス・デ・アルメイダは「私たちは城に到着しましたが，これは世界で最も堅固なものの一つです。それは十の要塞に分かれている山にあるからです。そのひとつひとつが互いに離れ，つるはしで削り取ったように険しく，人間の手で作ることは不可能であると思われるほど，深い堀で囲まれています。一つの要塞から他の要塞へ行くためには跳ね橋を渡るのですが，渡るときに下を見ると，はなはだしく高いので地獄を見ているようです。全要塞の中心に本丸があって，そこに城主が住んでいますが，これは鹿児島の大名の家来です。」（注１）と詳細な記録を残している。

向椎城跡では，空堀，帯曲輪，曲輪，堀切，大型円形土坑，竪穴建物跡，掘立柱建物跡，炉跡などの遺構が検出された。また市ノ原遺跡第４地点では出水筋（近世の街道）の道路遺構が検出されているが，向椎城跡でも，周辺に出水筋が通っていたことが，現地の聞き取り調査や『歴史の道調査報告書　第１集　出水筋』（注２）でも判明している。

（注１）結城了悟『鹿児島のキリシタン』春苑堂書店　1975

（注２）鹿児島県教育委員会『歴史の道調査報告書　第１集　出水筋』 1993

下手中
木場迫
湯田
松山
大里川
中福良
宇都
向湯田
皆田西
皆田東
ヤコソウ発生地
門前
島内
大里
松原
駅前
堀ノ内
湯之元温泉
田之湯
老人ホ
中原
堀
大里市来町
中原
畜産業振興センター
中央
消防学校
戸崎
平木場
湯田
里
籠上
籠下
戸崎鼻
保養センター
赤崎
平迫比良
城之町下
城之町上
古市
川北
江口川
伊作田
鹿児島本線
江口
柿之迫
中伊
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40

第４図　周辺遺跡位置図

第３節　周辺遺跡

市ノ原遺跡の所在する日置市東市来町周辺には，以下のような遺跡が存在する。

第３表　周辺遺跡（１）

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
1	下諏訪	28-11	いちき串木野市大里	縄文	土器片・打製石斧	1
2	中諏訪	28-12	いちき串木野市大里	古墳	土師器・須恵器	1
3	西ノ鼻	28-39	いちき串木野市大里	古墳・中世	土師器・陶器	2
4	半崎堀	28-40	いちき串木野市大里	弥生～中世	弥生土器・土師器・陶器	2
5	上平山	28-41	いちき串木野市大里	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	2
6	市ノ原 ３地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	細石刃核，集石，岩本式・塞ノ神式土器等 竪穴住居跡，土坑，高橋式・成川式土器等 掘立柱建物跡・鍛冶炉跡，陶磁器等	2
7	市ノ原 ４地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	竪穴住居跡・集石，前平式・押型文土器等 竪穴住居跡・土坑，高橋式・成川式土器等 竪穴住居跡・溝，須恵器・土師器等 街道跡，鍛冶炉跡，陶磁器等	2
8	市ノ原 ５地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群，落し穴，ナイフ形石器・前平式土器等 夜臼式・高橋式土器・成川式土器 道跡・掘立柱建物跡，土師器等	3
9	諏訪原	29-61	日置市東市来町湯田	古墳・中世	土師器・陶器・染付	2
10	森薗平	29-62	日置市東市来町長里	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	2
11	浦田	29-63	日置市東市来町長里	古墳・中世	土師器	2
12	今里	29-67	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	礫群，尖頭器・ナイフ形石器・細石刃核 集石，前平式・深浦式・出水式土器・石匙 成川式土器	4
13	堂園平	29-90	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古代	礫群，ナイフ形石器・尖頭器・細石刃核 集石，吉田式・塞ノ神式・轟式土器等 土坑，土師器・須恵器	5
14	向椎城跡	29-17	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	配石遺構，剥片尖頭器・ナイフ形石器・剥片 隆帯文・石鏃，前平式・市来式土器 竪穴住居跡，成川式土器 空堀・曲輪・竪穴状遺構・炉跡，青磁	
15	古城跡	29-13	日置市東市来町長里	南北朝	石塁	6
16	番屋城跡	29-10	日置市東市来町長里	南北朝～室町	消滅	6
17	平之城跡	29-11	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・古墓塔	6
18	鶴丸城跡	29-５	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・土塁・礎石	6
19	得仏城跡	29-15	日置市東市来町長里	中世	鶴丸城の出城	6
20	総陣ヶ尾	29-14	日置市東市来町長里	中世	五輪塔	6
21	馬場ヶ原	29-64	日置市東市来町長里	弥生・古墳 中世～近世	弥生土器・成川式土器 土師器・陶器	2
22	犬ヶ原	29-65	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・石鏃，黒川式土器 掘立柱建物跡・鍛冶炉跡，土師器・硫黄	7
23	金木山	29-66	日置市東市来町伊作田	古墳・中世	土器・陶器	2

第４表　周辺遺跡（２）

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
24	西原持原	29-76	日置市東市来町伊作田	古墳・中世		2
25	伊作田城跡	29-12	日置市東市来町伊作田	南北朝	伊作田道材居城	8
26	古城	29-12	日置市東市来町伊作田	古墳 古代	土坑，成川式土器 畝状遺構，土師器・須恵器・黒色土器	9 10
27	前畑	29-１	日置市東市来町伊作田	縄文・古墳 古代～中世	土坑，黒川式土器，石鏃・石匙・石斧 竪穴住居跡・掘立柱建物跡，成川式土器	8
28	栫城跡	29-16	日置市東市来町伊作田			6
29	老ノ原	29-68	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古墳	細石刃核，前平式・春日式・黒川式土器 成川式土器	11 12
30	猿引	29-80	日置市東市来町長里	旧石器 縄文	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 曽畑式土器	13
31	雪山	29-81	日置市東市来町美山	縄文 近世～近代	集石・前平式土器 陶器・磁器・瓦・窯道具	13
32	池之頭	29-82	日置市東市来町美山	旧石器 縄文 古墳	ナイフ形石器・台形石器・細石刃核・細石刃集石・石皿集積，前平式・春日式土器 成川式土器	14
33	池之平	29-70	日置市東市来町美山	古墳・近世	成川式土器・土師器・陶器	6
34	五本松窯跡	29-７	日置市東市来町美山	近世	町指定史跡	15
35	堂平窯跡	29-91	日置市東市来町美山	近世	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具	16
36	御定式窯跡	29-８	日置市東市来町美山	近世	町指定史跡	15
37	南京皿山窯跡	29-15	日置市東市来町美山	近世	町指定史跡	15
38	水溜	29-71	日置市東市来町美山	中世～近世	土師器・陶器・磁器	2
39	大田城塁跡	29-６	日置市東市来町美山	南北朝～室町	五輪塔・青磁・白磁・須恵器・瓦器	15

引用文献

1　『市来町郷土誌』　市来町　1982
2　「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅰ）」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書61　1992
3　「市ノ原遺跡５地点」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書105　2006
4　「今里遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書33　2002
5　「堂園平遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書104　2006
6　「中世城館」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書40　1987
7　「犬ヶ原遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書50　2003
8　「前畑遺跡・伊作田城跡」　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書６　1995
9　「古城遺跡Ⅰ」　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書７　1996
10　「古城遺跡Ⅱ」　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書10　2004
11　「老ノ原遺跡」　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書８　1996
12　「老ノ原遺跡２」　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書９　1998
13　「猿引遺跡・雪山遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書53　2003
14　「池之頭遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書32　2002
15　『東市来町郷土誌』　東市来町教育委員会　1987
16　「堂平窯跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書106　2006

第　4　地　点

第Ⅳ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法

平成８年10月から12月にかけて，市ノ原遺跡の確認調査を行った。確認調査は，地形を考慮して合計８か所に，２ｍ×５ｍを基本としたトレンチを設定した。周辺の伐採作業終了後，表土から人力によって掘り下げを行った。この調査により，小高く残っていた北側の部分は，表土下からシラスが出てきたため，包含層の削平または包含層の堆積がなかったと判断し，調査の対象地域から除外した。それ以外の対象区域のトレンチから遺物が出土したことから，遺跡の残存する地域として発掘調査の対象とした。

確認調査終了後，市ノ原遺跡の本調査は，地形や確認トレンチの遺構・遺物の検出状況から，第４地点の南側から北側に向けて調査を開始した。まず，第４地点の遺跡の広がりを把握するために，南側から伐採を開始し，確認トレンチを設定していった。各トレンチを人力により丁寧にⅢ層上面まで掘り下げ，遺構の残存状態と遺物の出土傾向の調査を行った。

その結果，道路状遺構や土坑など，良好な遺跡の残存状態を確認し調査区の表土の除去（以後，表土剥ぎ）に着手した。当初，調査区はセイタカアワダチソウや竹等に覆われ，表土を露出させるために１週間以上の時間を要した。表土露出後は，トレンチ内の遺構・遺物検出の状況からアカホヤ一次堆積層のⅢb層まで機械掘削を行い，Ⅳ層上面を遺構検出面として調査面をそろえた。Ⅲb層から下層は，山鍬やじょれん，ねじり鎌など，人力で状況に応じて掘削深度を変えながら調査に当たった。

第３地点と第４地点を南北に横切る県道戸崎・湯之元停車場線と旧東市来町堀内を横切る町道との交差点の任意の点を起点に，市ノ原遺跡第４地点の東側に向かって一辺が10ｍの正方形（以後グリッド）の調査基点を展開し，調査用の杭を設置した。

第４地点の東から西に向かって１・２・３…37の番号を付け，北から南に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ～Ｉの９つのアルファベットによる名称を付けた。それぞれのグリッドを北側からＡ－１区，Ａ－２区…，東側からＡ－１区，Ｂ－１区…と各グリッドの名称を設定した。

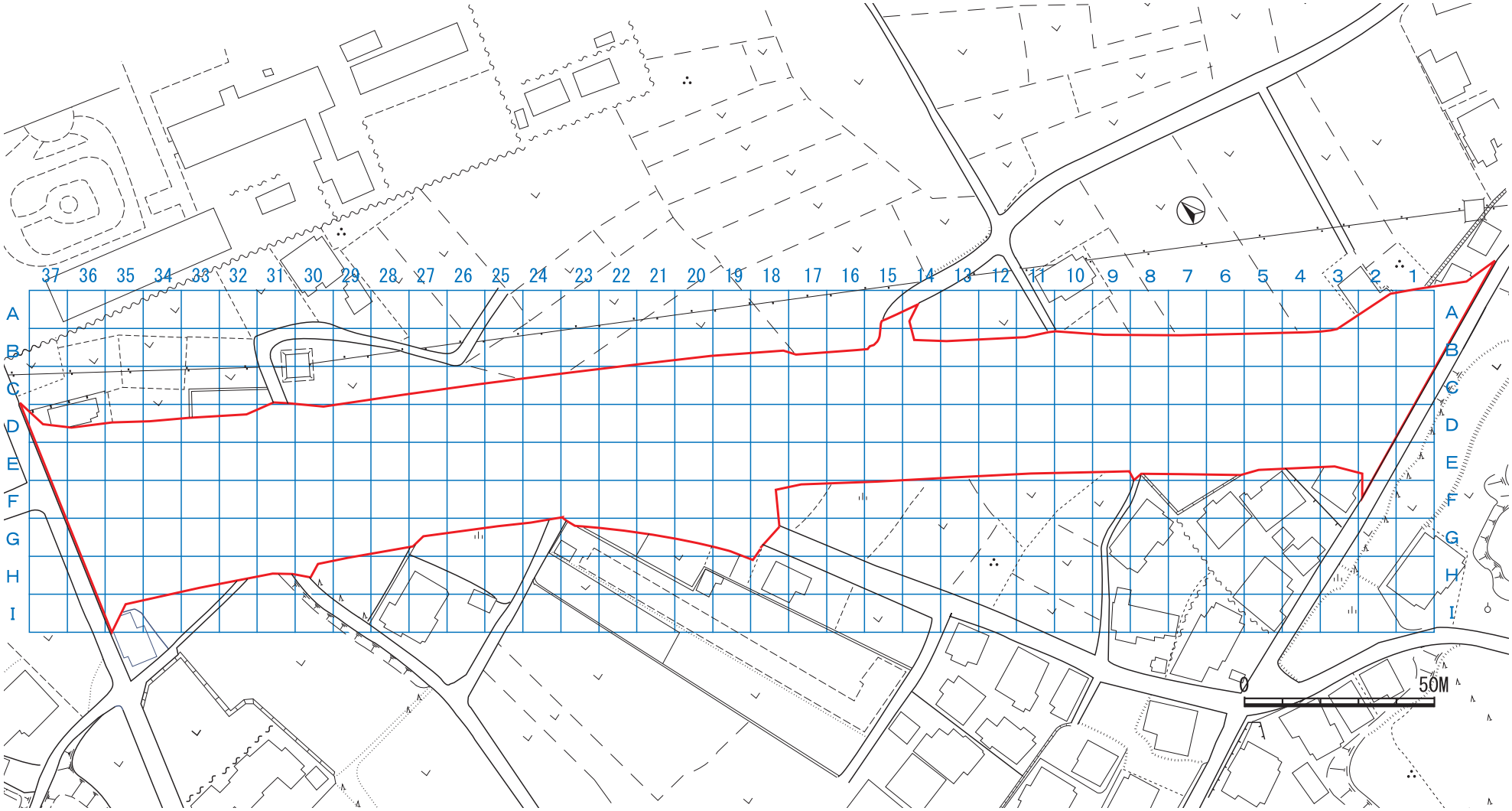
Ｂ－２区より調査を開始したが，調査区の絞り込みを行うために，全面の調査と並行して随時確認トレンチを設定し，市ノ原遺跡全体で合計71個のトレンチの調査を行った。

その結果，ＡＢ－１区，ＤＥＦＧＨ-31～37区，Ｉ-34～36区の範囲の確認トレンチでは，人力による掘り下げを行い，表土下から撹乱された地層とシラスの層が堆積していたため，この調査区範囲の調査を終了した。

Ｇ-18～23区，Ｆ-21～23区，Ｅ-22～24区の遺跡を横切る町道下の調査では，生活主要道路のため道設の付け替えが不可能で，協議の上，該当範囲の調査を中止した。また，同様に，第４地点の両端を挟む県道と町道の範囲は，調査範囲より除外した。

以上のことから，１区～32区までを対象調査範囲として，Ⅲb層またはⅣ層～Ⅴ層まで人力による掘り下げを行った。それより下層は，確認トレンチの結果，遺構・遺物の発見がなかったため，調査を終了した。

第５図　調査区域全体図



第６図　調査用グリッド配置図

第２節　遺跡の層位

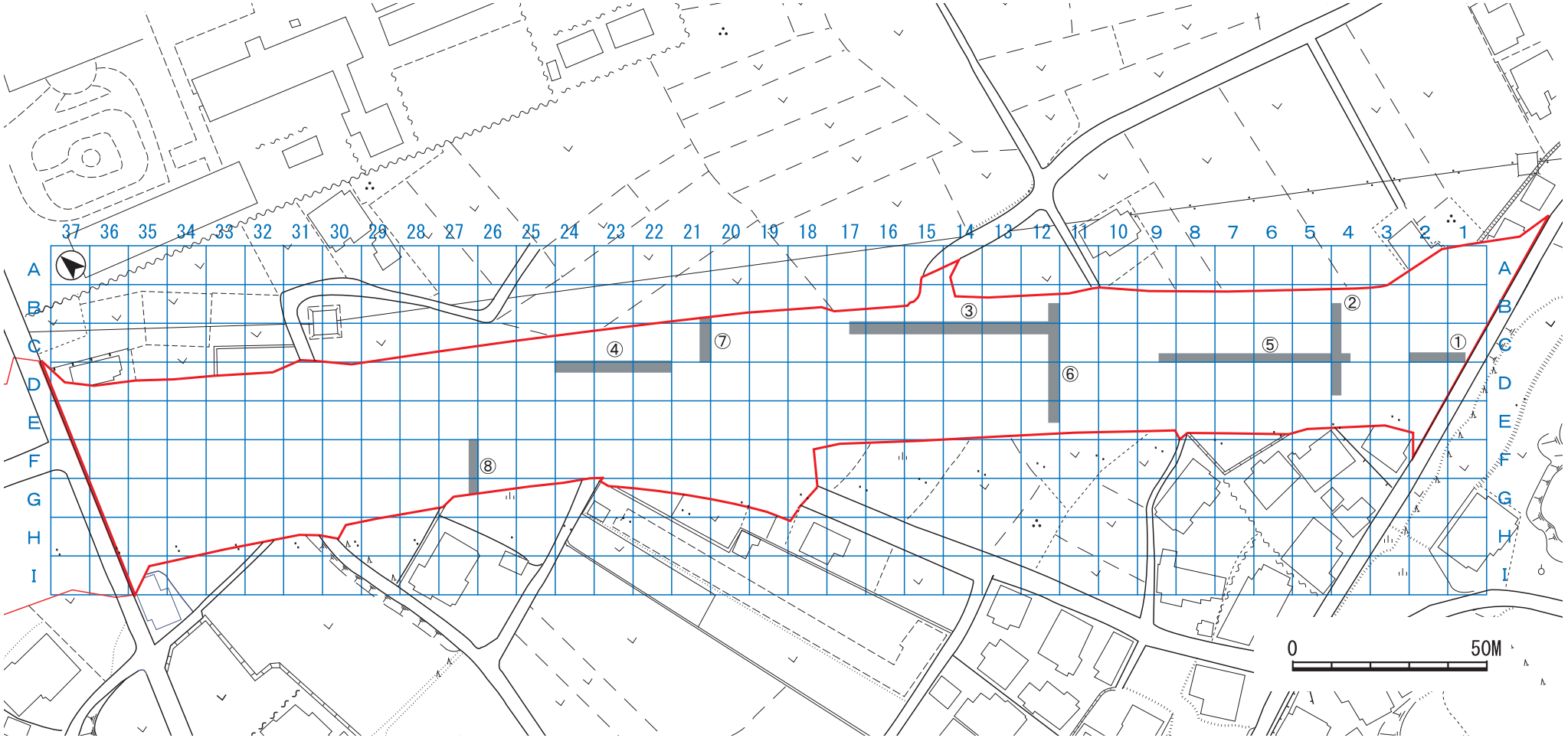
市ノ原遺跡第４地点は，薩摩半島北西部の日置市東市来町湯田に所在する。地理的には薩摩半島の東シナ海に面した海岸から，直線距離で約1.5㎞ほど内陸に位置する遠見番山184mを中心とする小起状山地にあり，西麓に海岸段丘状の台地が西に向かって緩やかに傾斜する標高40～50mの台地西側に立地する。

第４地点は，北東側の丘陵地から南西側の谷に向かって，約６mほどの高低差を持ち緩やかに傾斜するほぼ平坦な地形である。遺跡の北東や南西端は，耕作による削平や道路の造成などで包含層が残存しない場所もあるが，おおむね緩やかな傾斜に沿って，緩やかな安定した地層の堆積を見ることができる。

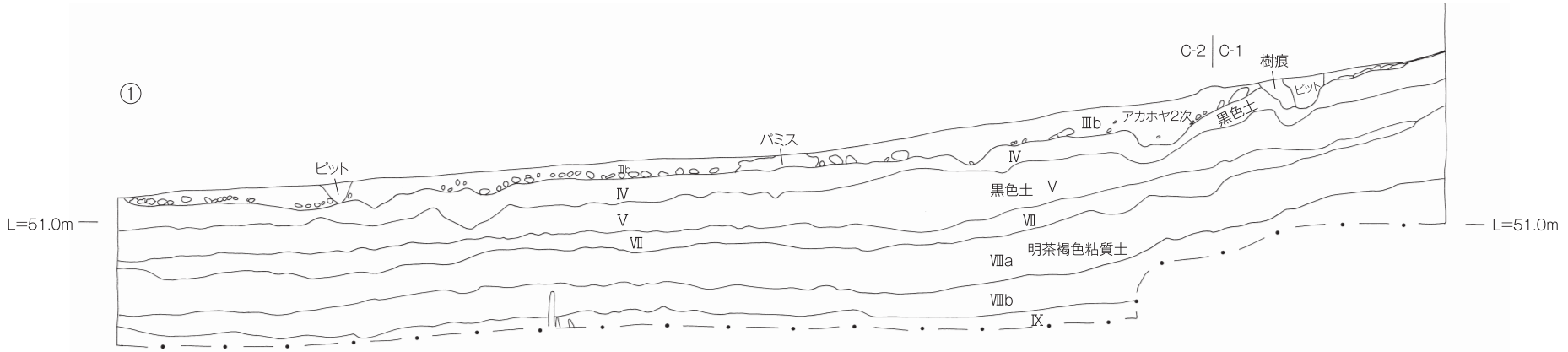
市ノ原遺跡の基本的な層序については以下に示すとおりである。

Ⅰ層	Ⅰ　層　表土・耕作土・客土
Ⅱ層	Ⅱ　層　黒色腐植土
Ⅲ層a	Ⅲａ層　暗黄褐色土（アカホヤ腐植土）縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層
Ⅲb層　Ⅲc層	Ⅲｂ層　黄褐色土 Ⅲｃ層　黄橙色軽石　6,400年前の鬼界カルデラ噴出起源の一次降下火山灰（アカホヤ）
Ⅳ層	Ⅳ　層　茶褐色土
Ⅴ層	Ⅴ　層　黒色土　　縄文時代早期の遺物包含層
Ⅵ層	Ⅵ　層　黄褐色軽石　11,500年前の桜島噴出起源の降下火山灰（桜島薩摩火山灰）
Ⅶa層	Ⅶａ層　暗褐色粘質土
Ⅶb層　Ⅶc層	Ⅶｂ層　明褐色粘質土 Ⅶｃ層　暗褐色土　（部分的に残存）
Ⅷa層	Ⅷａ層　明黄色土
Ⅷb層	Ⅷｂ層　暗黄色土
Ⅸ層	Ⅸ　層　黄白色火山灰質土　24,500年前の姶良カルデラ噴出起源の火山灰 ＡＴ（火山灰）シラス

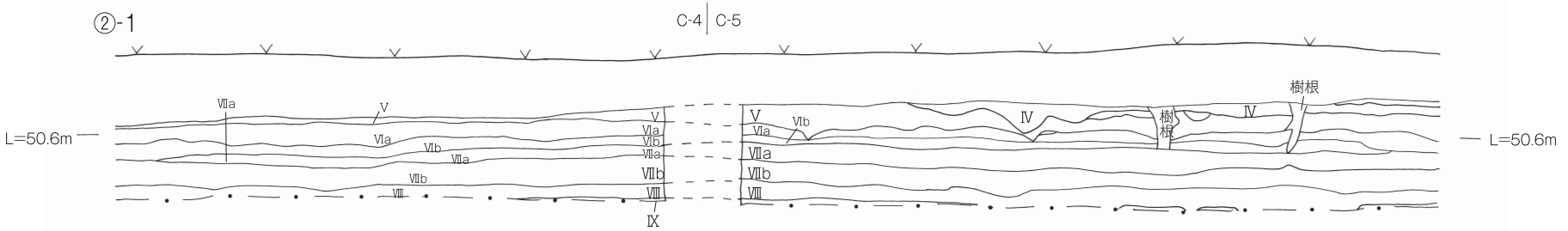
第７図　遺跡基本土層図


37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
A B C D E F G H I
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
0
50M

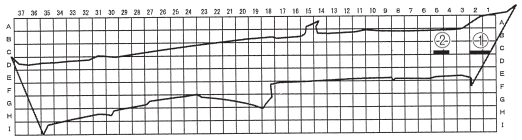
第８図　トレンチ配置図

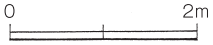


C-1·2区　南側土層断面

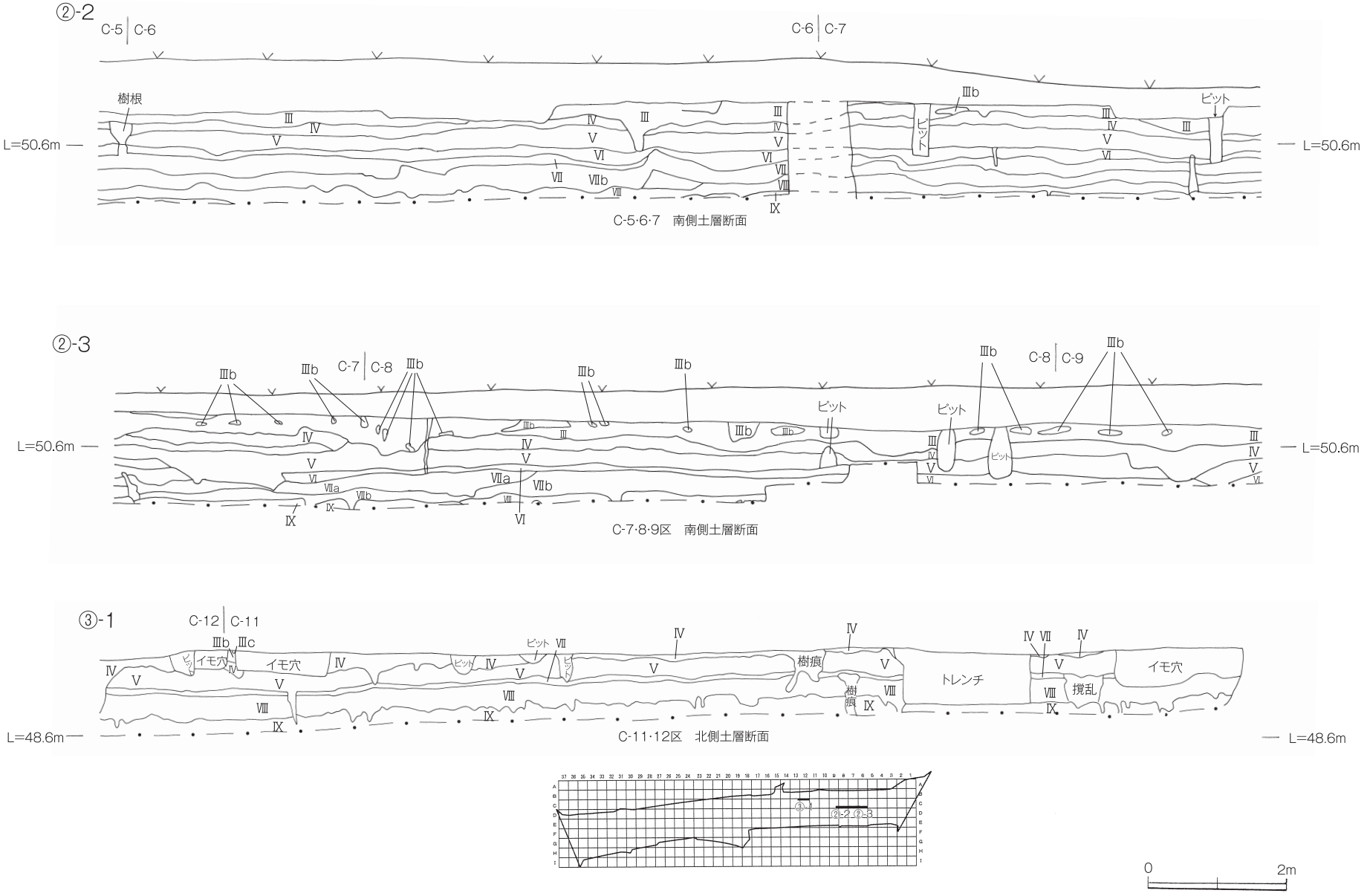


C-4·5区　南側土層断面

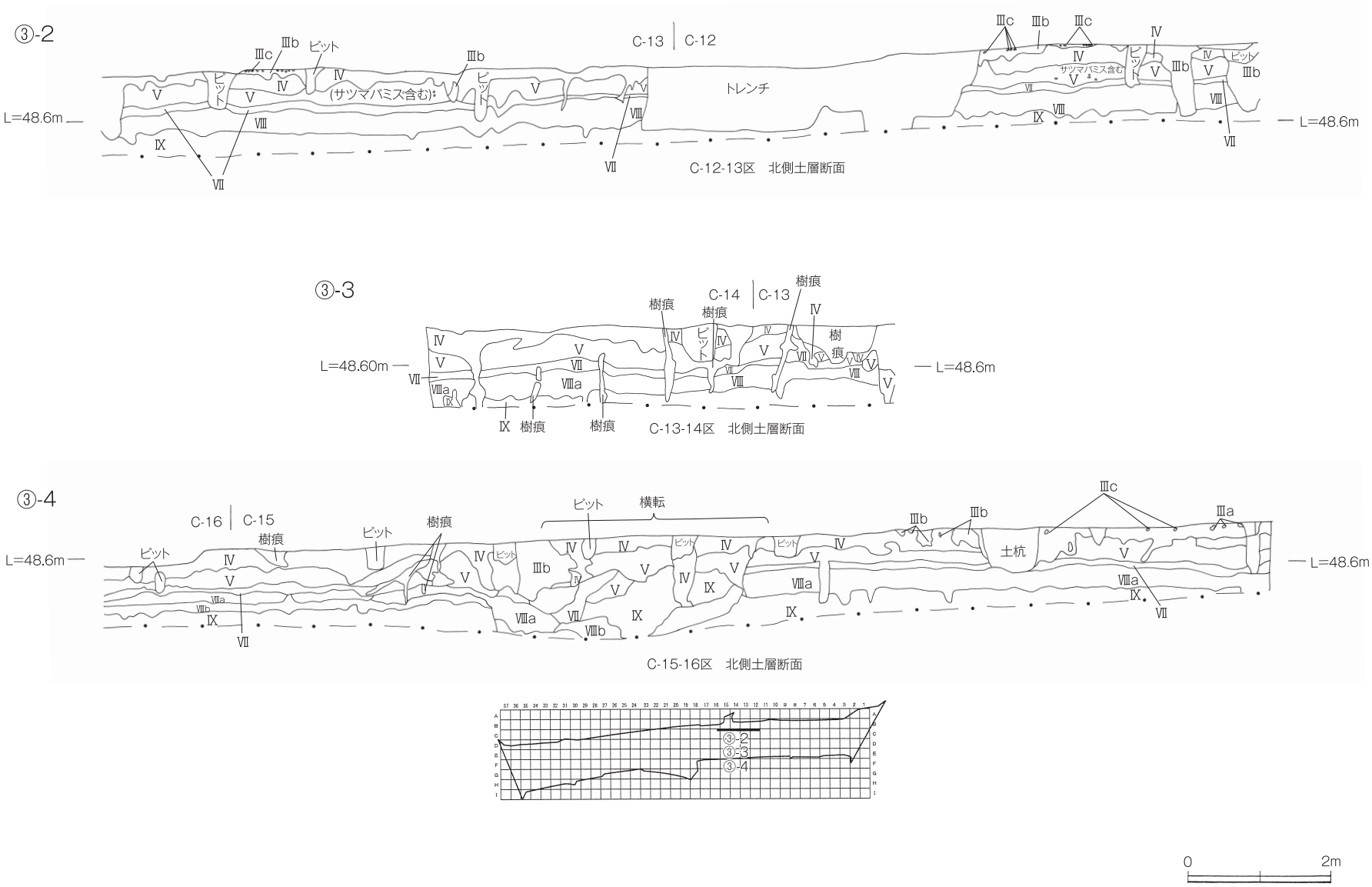




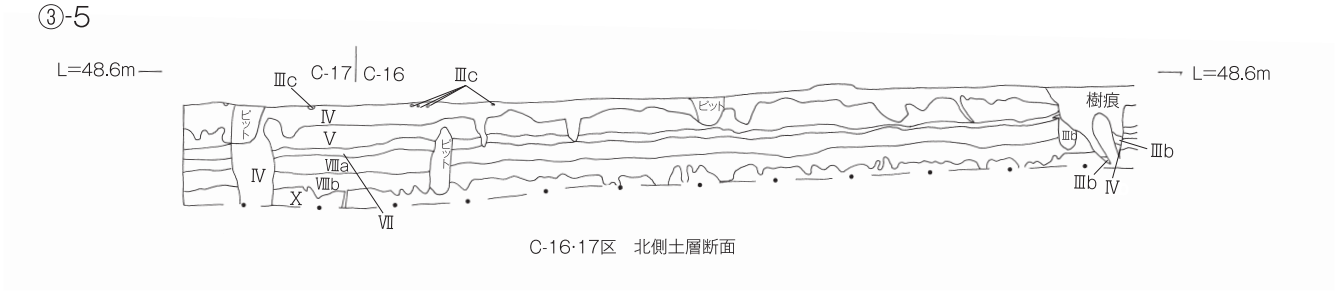
第９図　土層断面図１

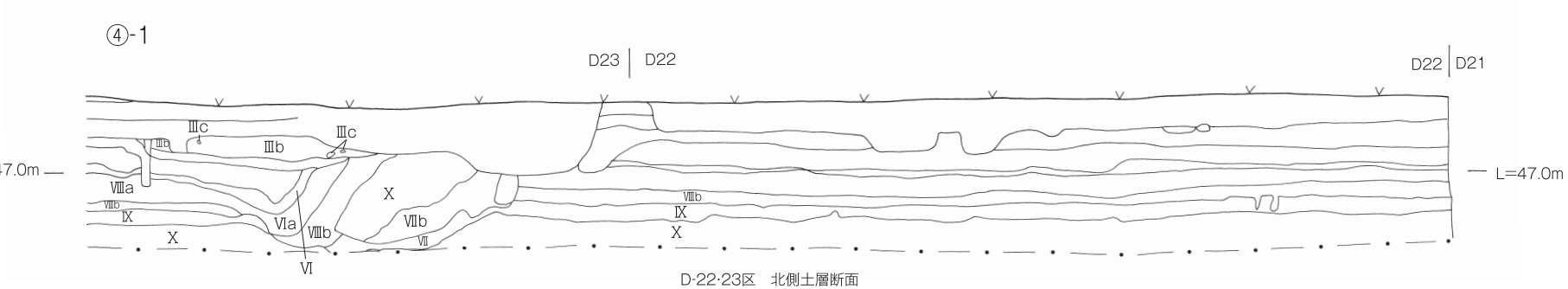

②-2
C-5
C-6
C-7
樹根
ピット
L=50.6m
C-5·6·7　南側土層断面
②-3
C-8
C-9
C-7·8·9区　南側土層断面
③-1
C-12
C-11
イモ穴
樹痕
トレンチ
撹乱
L=48.6m
C-11·12区　北側土層断面
0
2m

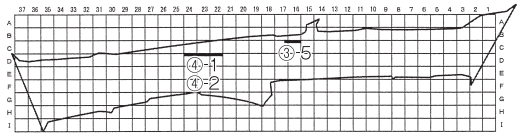
第10図　土層断面図２

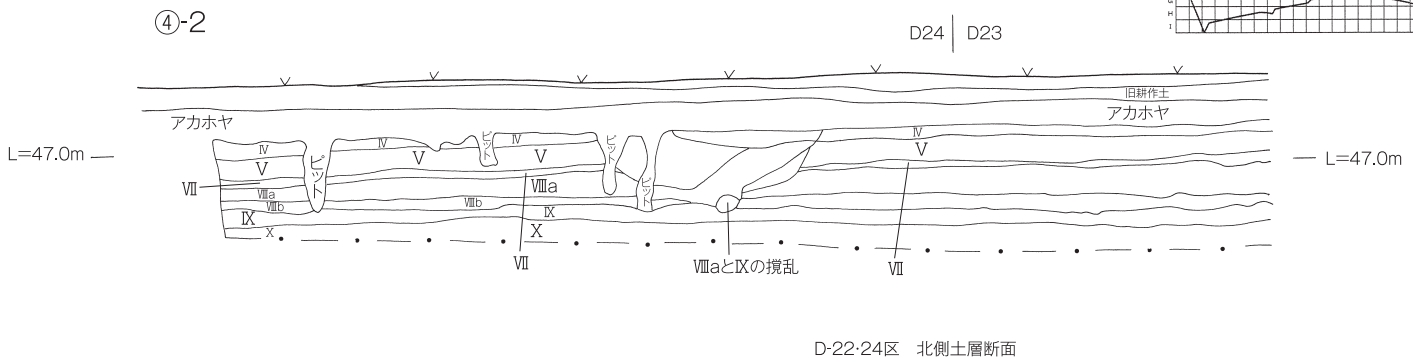

③-2
C-13
C-12
L=48.6m
トレンチ
サツマパミス含む
C-12-13区　北側土層断面
③-3
C-14
C-13
樹痕
L=48.60m
C-13-14区　北側土層断面
③-4
C-16
C-15
ピット
横転
土杭
C-15-16区　北側土層断面
0
2m

第11図　土層断面図３



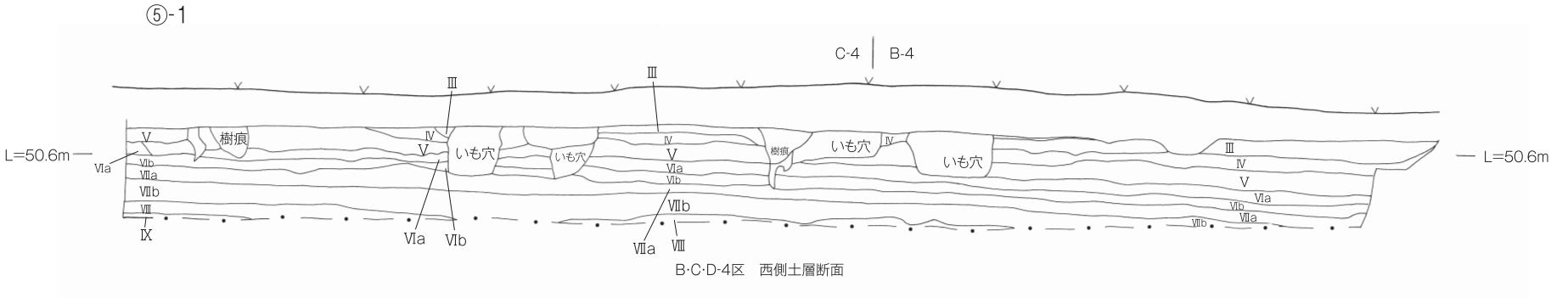




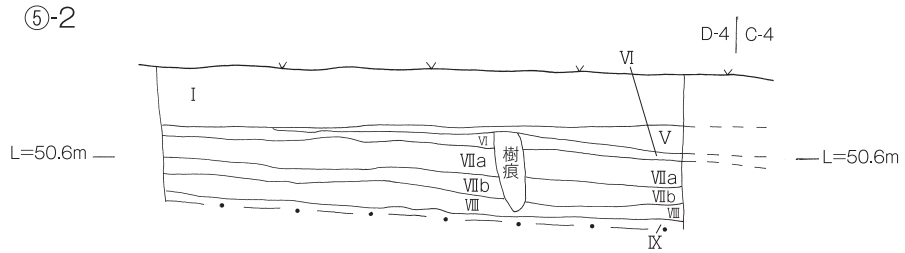


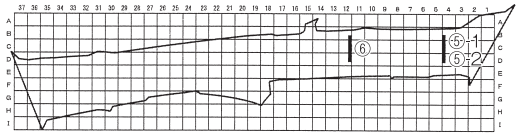
0　2m

第12図　土層断面図４

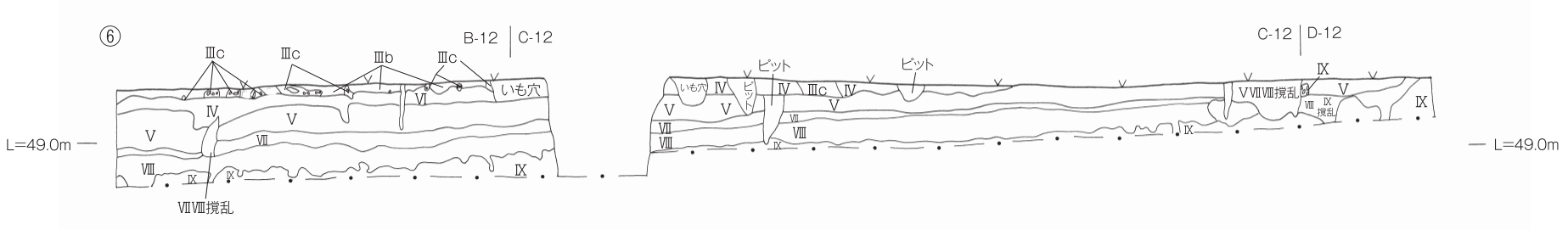


B·C·D-4区　西側土層断面





C·D-4区　西側土層断面

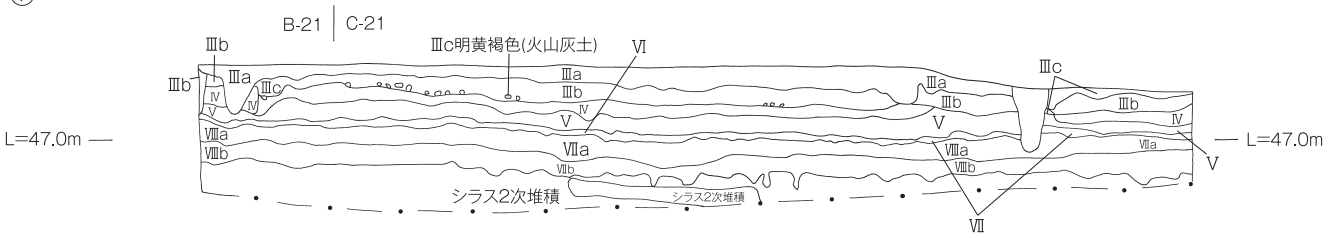


B·C·D-12区　東側土層断面

0　2m

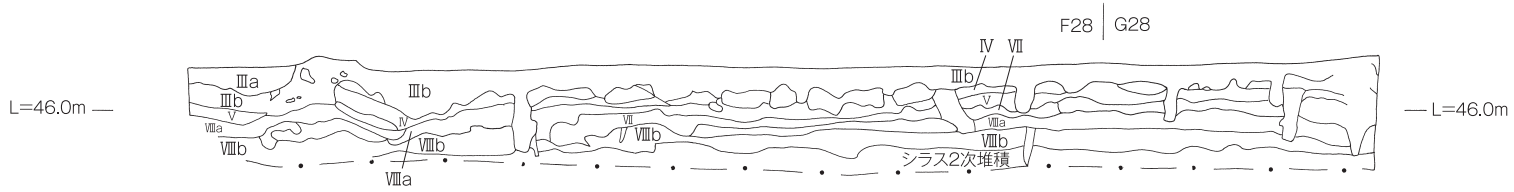
第13図　土層断面図５

⑦

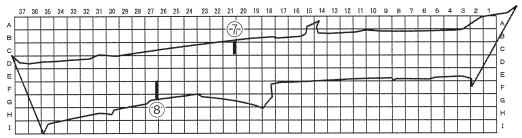


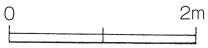
B·C-21区　東側土層断面

⑧



F·G-28区　東側土層断面





第14図　土層断面図６

第３節　遺跡の概要

１　縄文時代

縄文時代早期から晩期にかけての遺構・遺物が検出されている。遺構は，集石遺構や土坑・ピットが検出された。遺物は，早期の貝殻文系土器から晩期の組織痕土器まで多くの種類の土器が出土した。特に，縄文早期後葉や前期の土器が多く出土している。

石器は打製石鏃，石匙，スクレイパー，石錐，楔形石器等，剥片石器が出土し，特に打製石鏃が大量に出土している。また，翡翠輝石に類似する垂飾品が１点出土している。

２　弥生時代

縄文時代晩期から弥生時代にかけて，Ⅱ層，Ⅲ層，Ⅲa層，Ⅲb層，Ⅲc層，Ⅳa層，Ⅳb層から遺物が出土している。主たる包含層は，Ⅲ層であり，調査区によってⅢa層，Ⅲb層，Ⅲc層に分けられる。遺構は，弥生前期の竪穴住居や竪穴状遺構，様々な形態の土坑やピットが発見されている。遺物については，土器は，刻目突帯文土器がそのほとんどを占めるが，北部九州系の土器の影響を感じさせるものや在地の胎土でないものもある。石器は，扁平打製石斧が大量に出土し，磨製石斧や磨石，石皿，敲石，砥石等が出土している。また，県内では類例の少ない（第５地点では，土製品と石製品がそれぞれ１点出土）三角壕形石製品が，未製品を含む４点出土している。

３　古墳時代

Ⅱ層及びⅢ層から遺構・遺物が検出された。遺構は，焼土遺構や土坑・ピットが検出された。遺物は，Ⅲa層を中心に南九州の在地土器である成川式土器が大量に出土した。

４　古代から中世

Ⅱ層を中心に遺構・遺物が検出された。遺構は，道路状遺構・道跡，土坑・ピット等が検出された。遺物は，土師器，須恵器，陶磁器（常滑焼，白磁，青磁など）等が出土している。

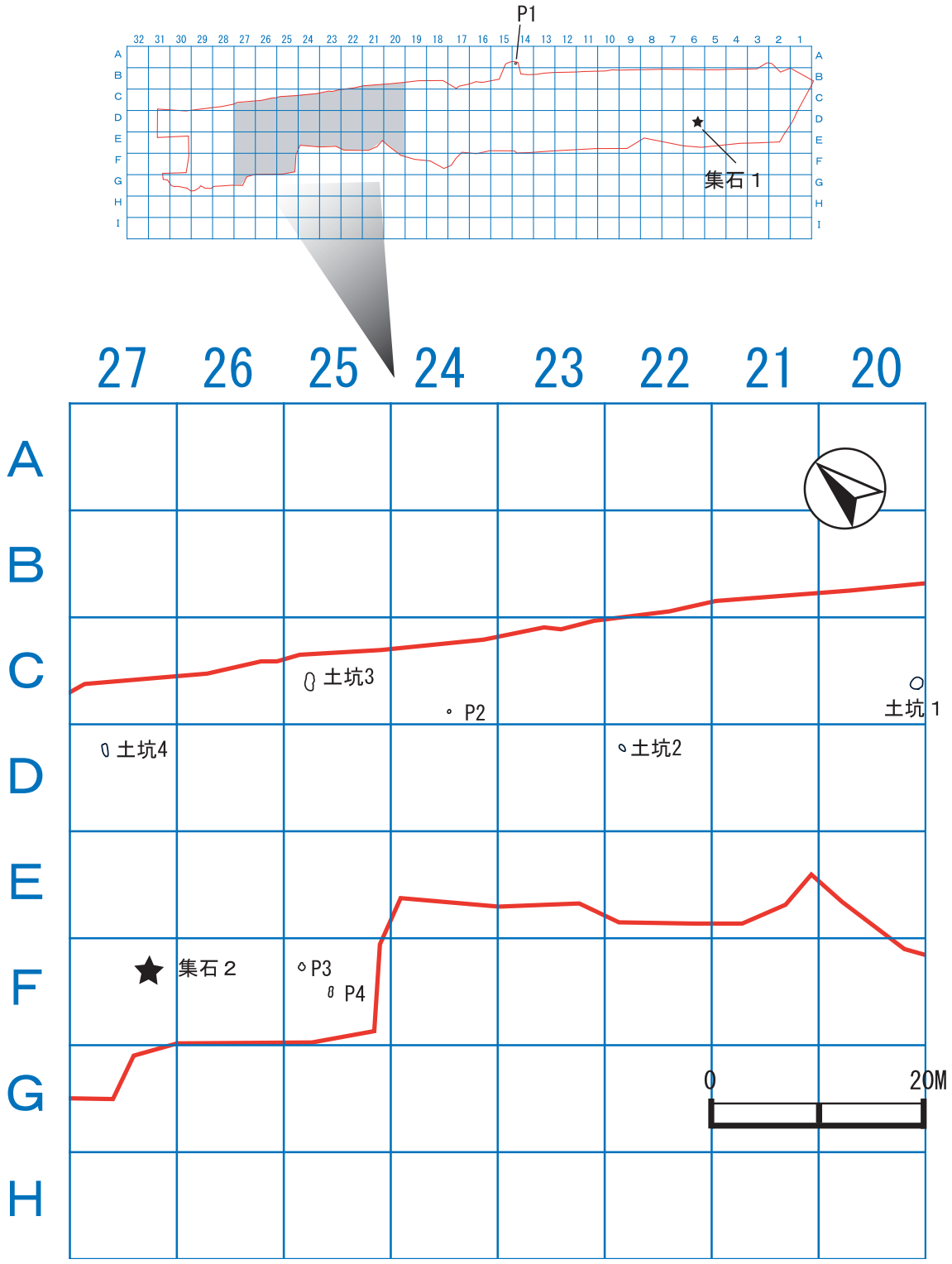
５　近世

調査区の西側から多くの遺構・遺物が検出された。遺構は，根石のある柱穴が確認された掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡，道路遺構，鍛冶炉跡等である。特に，道路遺構は硬化面と両側に溝状遺構を伴うもので，藩政時代の主要街道であった出水筋の一部と考えられる。遺物は，Ⅱ層から陶磁器，土師質土器，鞴羽口，鉄滓等が出土した。陶磁器は，薩摩焼がそのほとんどを占め，中には肥前系や京焼風陶器も出土している。

第Ⅴ章　発掘調査の成果

第１節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の調査は，Ⅲ～Ⅴ層がこれに該当する。遺構は，集石遺構や土坑が検出された。遺物は，早期から晩期の土器と打製石斧や石鏃など多くの石器が出土した。



第15図　縄文時代の遺構配置図

1　遺構

(1)　集石遺構（第16～18図）

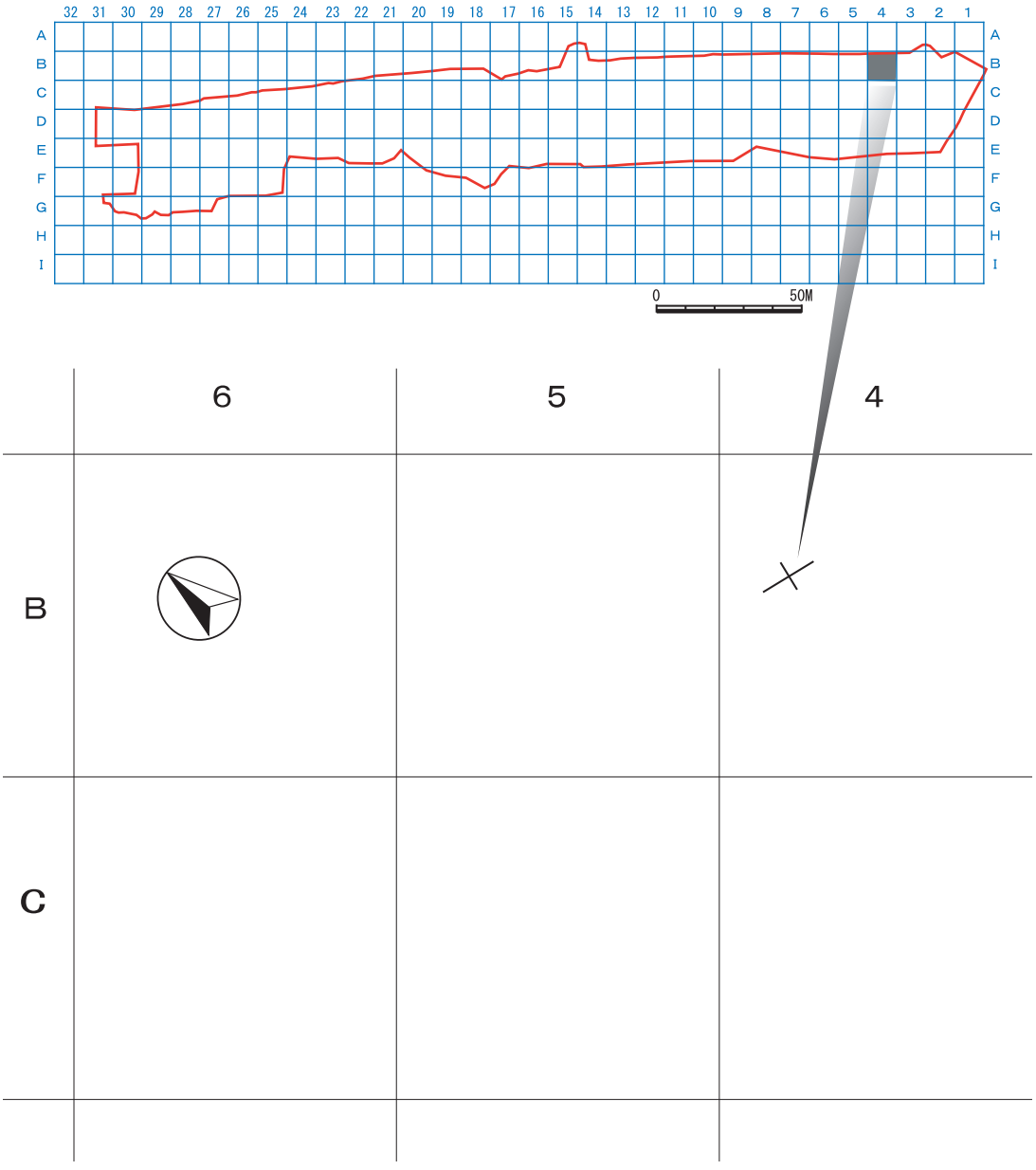
集石遺構が２基検出された。

集石１（第16・18図）

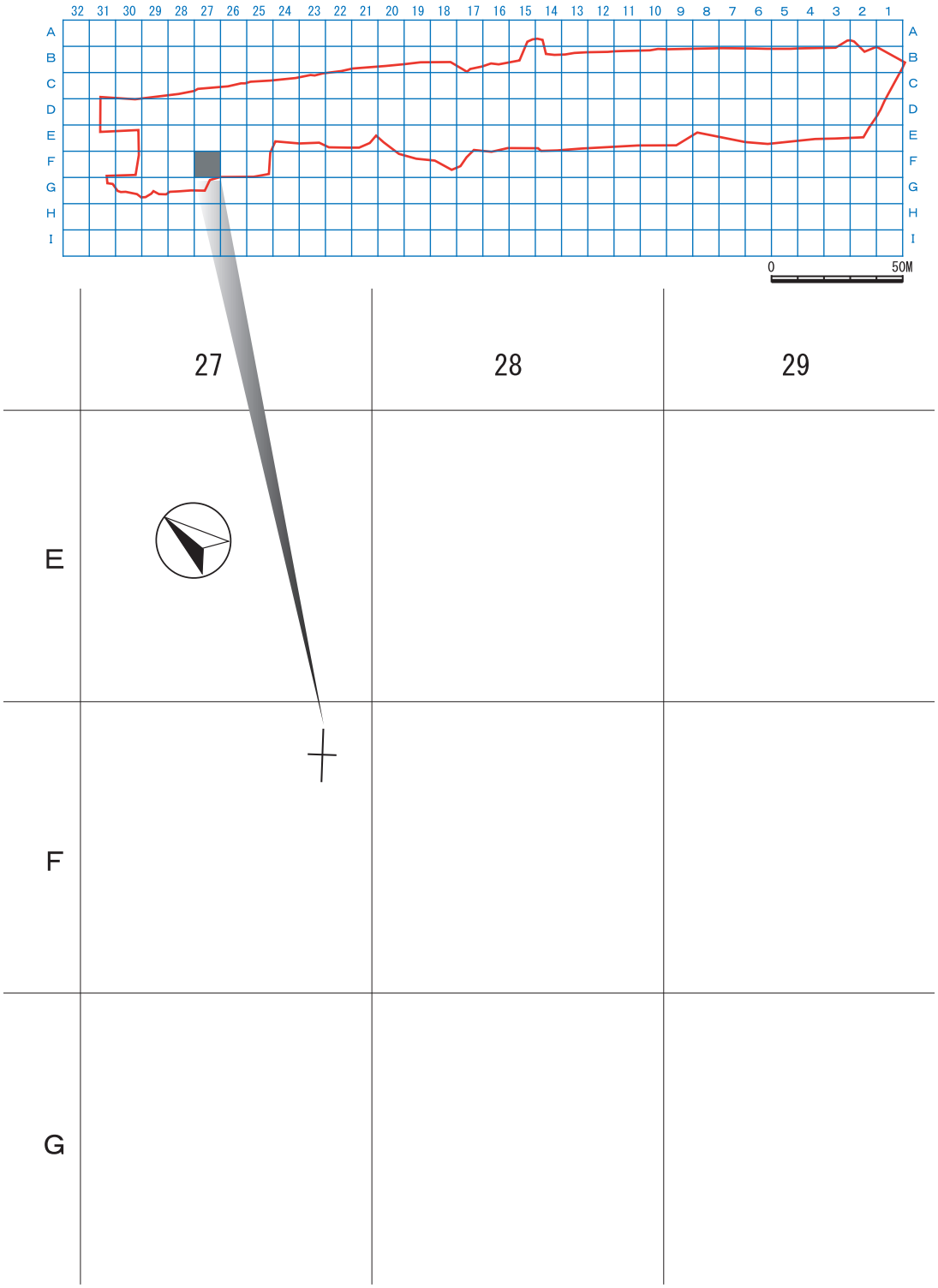
Ｂ－４区のⅣ層から検出された。掘り込みはみられず，170cm×50cmの範囲に散在している。30個の礫で構成され，肉眼で火熱を受けていると確認できるのは，２個である。礫の石材は，安山岩や砂岩で，安山岩の角礫が多数を占める。構成礫の中には，石皿の破片を転用したものも見られる。

集石２（第17・18図）

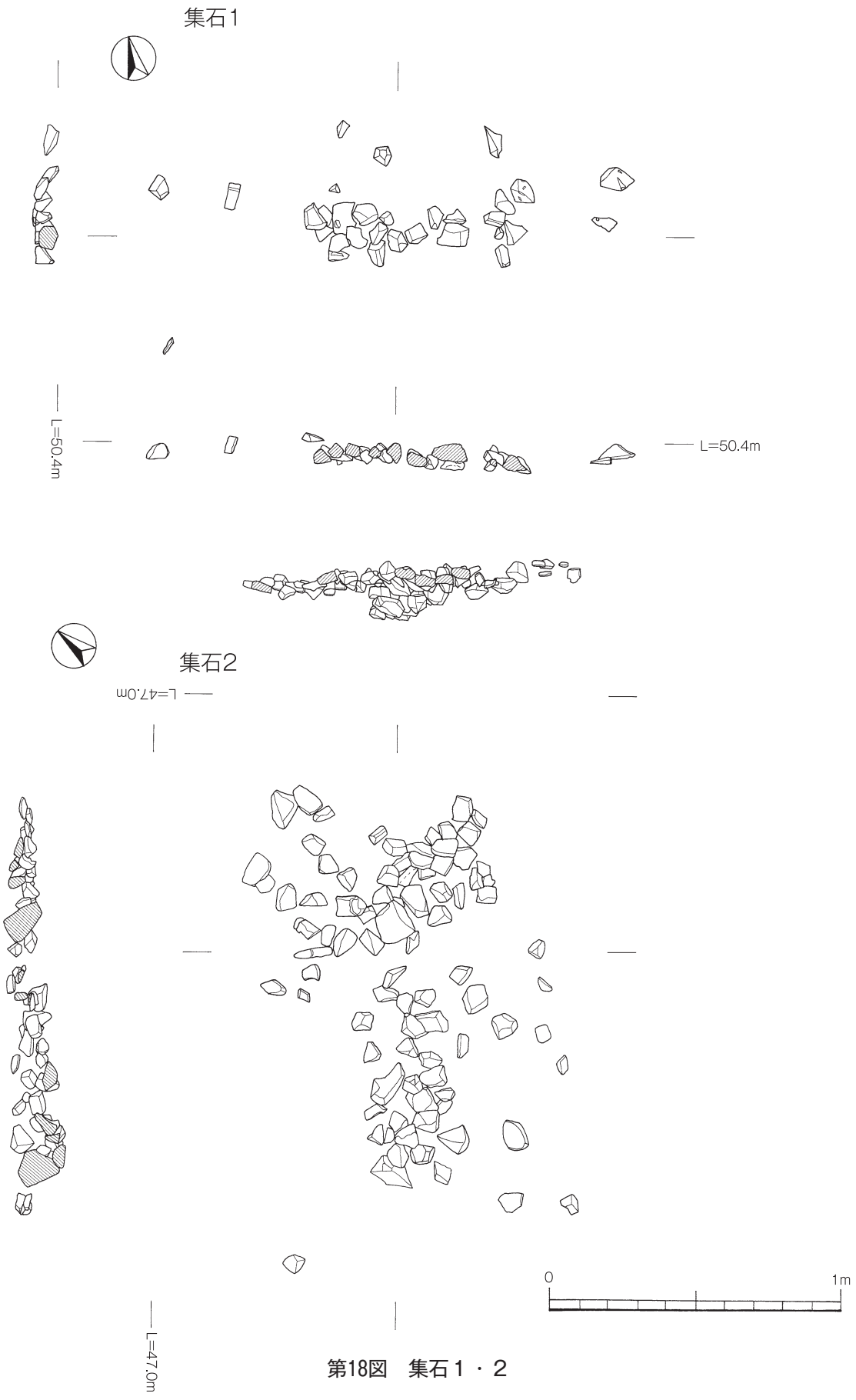
Ｆ-27区のⅣ層で検出された。掘り込みは見られず，125cm×170cmの範囲に広がっている。86個の礫で構成されている。



第16図　集石１配置図


32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
A B C D E F G H I
0 50M
27
28
29
E
F
G

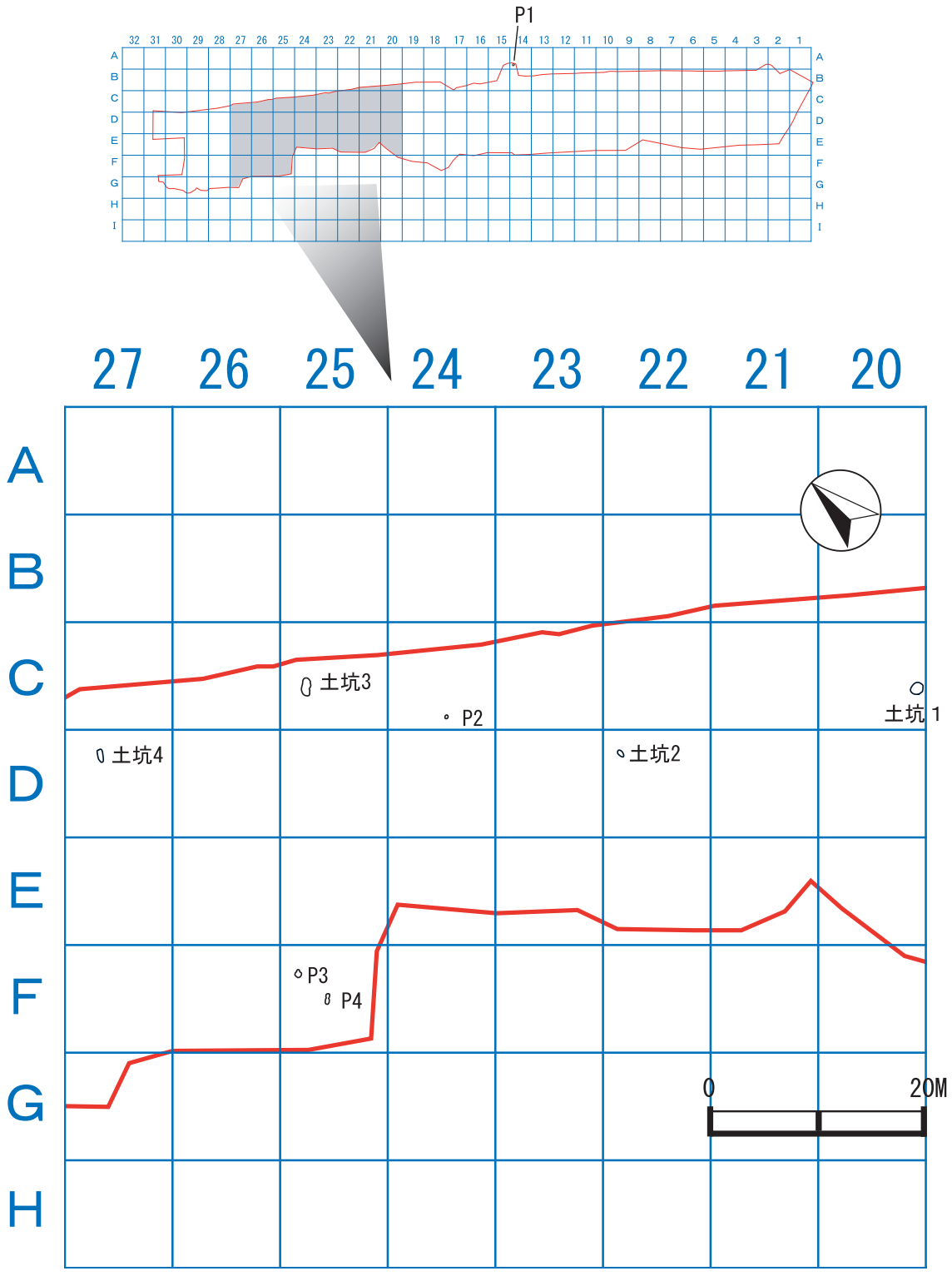
第17図　集石２配置図



第18図　集石１・２

(2) 土坑・ピット（第19～20図）

調査区からは多数の土坑やピットが検出されている。埋土中の出土遺物から縄文時代の時期と考えられる土坑は４基である。平面形は，円形，楕円形，隅丸方形などがあり大きさや形状に類似性はみられない。



第19図　縄文時代の土坑・ピット配置図

土坑１（第20図）

Ｃ－20区のⅢ層で検出された。長径123cm，短径110cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは20cmと浅い。底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。

土坑２（第20図）

Ｄ－22区のⅢ層で検出された。長径74cm，短径37cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは56cmである。底面は平坦で，直に立ち上がる。

土坑３（第20図）

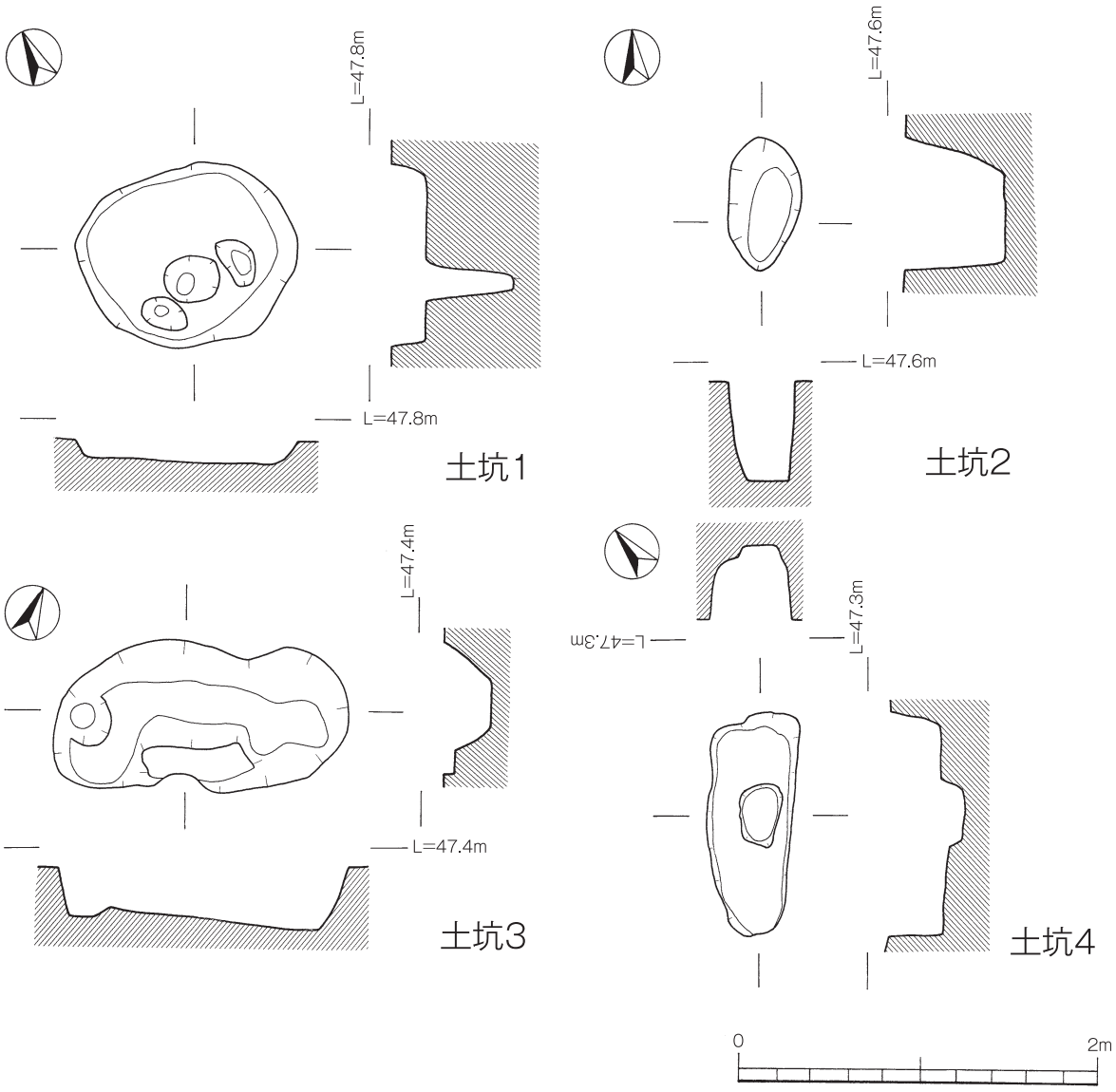
Ｃ－25区のⅢ層で検出された。長径162cm，短径74cmの不定形を呈し，検出面からの深さは36cmである。底面は，東側に向かってゆるやかに傾き，西側はピットによって切られている。埋土中からは，縄文土器の小片が出土している。図化はできなかった。

土坑４（第20図）

Ｄ－27区のⅢ層で検出された。長径123cm，短径47cmの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは30cmである。底面は，ほぼ平坦で中央部はさらに一段深く落ち込んでいる。

土坑内出土遺物（第21図，１～５）

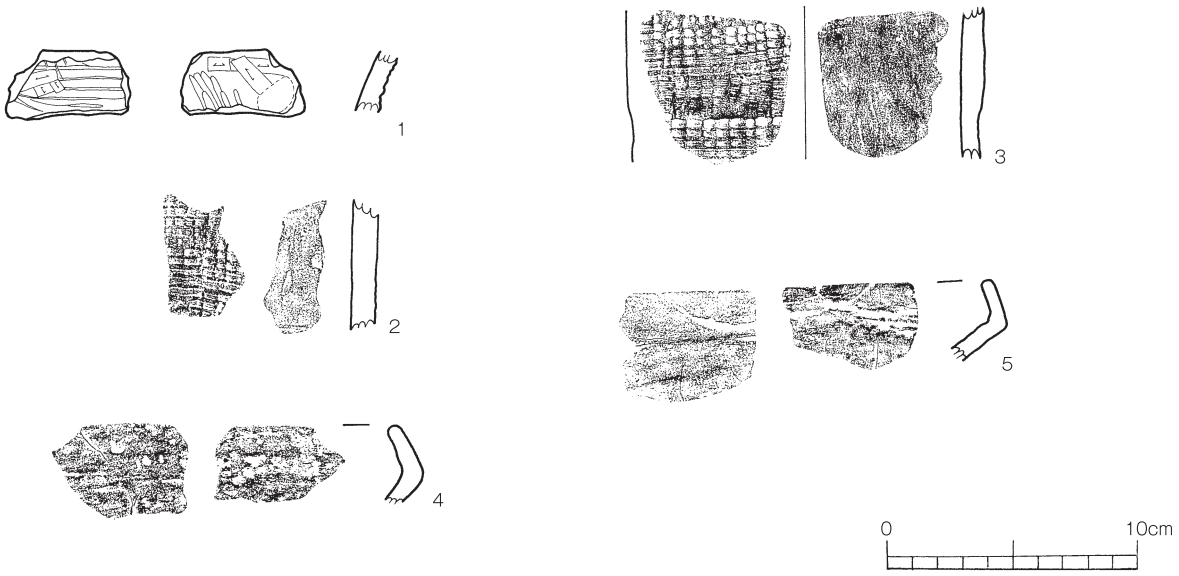
１は土坑１から出土した胴部片である。内外面とも貝殻条痕調整で仕上げられている。２・３は，土坑２から出土した胴部片である。外面は，貝殻押引文が施された後，ナデ調整で仕上げられている。内面は，丁寧なナデ調整で仕上げられている。４・５は，土坑４から出土した浅鉢の口縁部である。頸部から口縁部に向かって内側に屈曲している。口唇部はやや丸みを帯びている。



第20図　縄文時代の土坑

第５表　縄文時代の土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	出土遺物番号	備考（旧遺構名）
20	土坑1	C　ー　20	123	110	20	1	土坑4
	土坑2	D　ー　22	74	37	56	2, 3	土坑9
	土坑3	C　ー　25	162	74	36	なし	ー
	土坑4	D　ー　27	123	47	30	4,5	土坑1



第21図　縄文時代の土坑出土遺物

第６表　縄文時代の土坑出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様・調整		色調		胎土							備考
								外面	内面	外面	内面	長石	石英	輝石	角閃石	火山ガラス	軽石	その他	
21	1	4	C-20	－	深鉢	不明	胴部	ナデ　貝殻条痕文	ヘラケズリ　指オサエ ヘラナデ　貝殻条痕文	黒褐	褐	○			○			金雲母	沈線
	2	9	D－22	－	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻押引文,ナデ	ミガキ,ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○			○	○	○	茶粒	
	3	9	D－22	－	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻押引文,ナデ	ミガキ,ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐		○		○			茶粒	
	4	1	D－27	－	浅鉢	不明	口縁	ナデ,ミガキ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○		○			茶粒	
	5	1	D－27	－	深鉢	不明	口縁	ヘラケズリ, ミガキ	ヘラケズリ, ミガキ	黒褐	黒褐	○			○		○	茶粒	

２　遺物

⑴　縄文時代の出土土器（第22～31図）

縄文時代の土器は，114点を図化した。縄文時代早期から晩期にかけて，各時期の遺物が出土している。特に，縄文時代の早期後葉と前期後半，晩期の土器が多い。土器の調整や文様をもとにⅠ～ⅩⅩⅢ類に分類した。

Ⅰ類土器（第23図，６～８）

Ⅲb，Ⅲc層から出土している。口縁部に刺突文を巡らし，胴部外面には斜め方向や横方向の貝殻条痕文が施される土器である。器形は，口縁部がほぼ直線的に立ち上がる円筒形を基本とする。３点を掲載する。

６は，口縁部の破片である。口唇部から口縁部にかけて縦方向の刻みが施されている。胴部は，斜め方向の貝殻条痕文が施されている。内面は，横方向のケズリ調整で仕上げられている。器壁は，８㎜と薄い。７，８は胴部片である。斜め方向の貝殻条痕文が施されている。内面はケズリ調整で仕上げられている。

Ⅱ類土器（第23図，９）

口縁部に貝殻刺突文が巡り，胴部は貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる土器である。この種の土器には，円筒形，角筒形，レモン形の３タイプがあるが，角筒形のみが出土している。１点を掲載する。

９は，胴部片である。斜め方向の貝殻条痕文の上に，縦方向の貝殻刺突文が密に施されている。内面は，縦方向のケズリ調整で仕上げられている。器壁は，約４㎜と薄い。

Ⅲ類土器（第23図，10・11）

口唇部に刻みが施され，口縁部直下に横方向の貝殻刺突文が巡る土器である。胴部は，縦方向に押圧気味の貝殻刺突文が施される。器形は，口縁部がやや外反し，胴部から直線的に底部へ至る円筒形である。

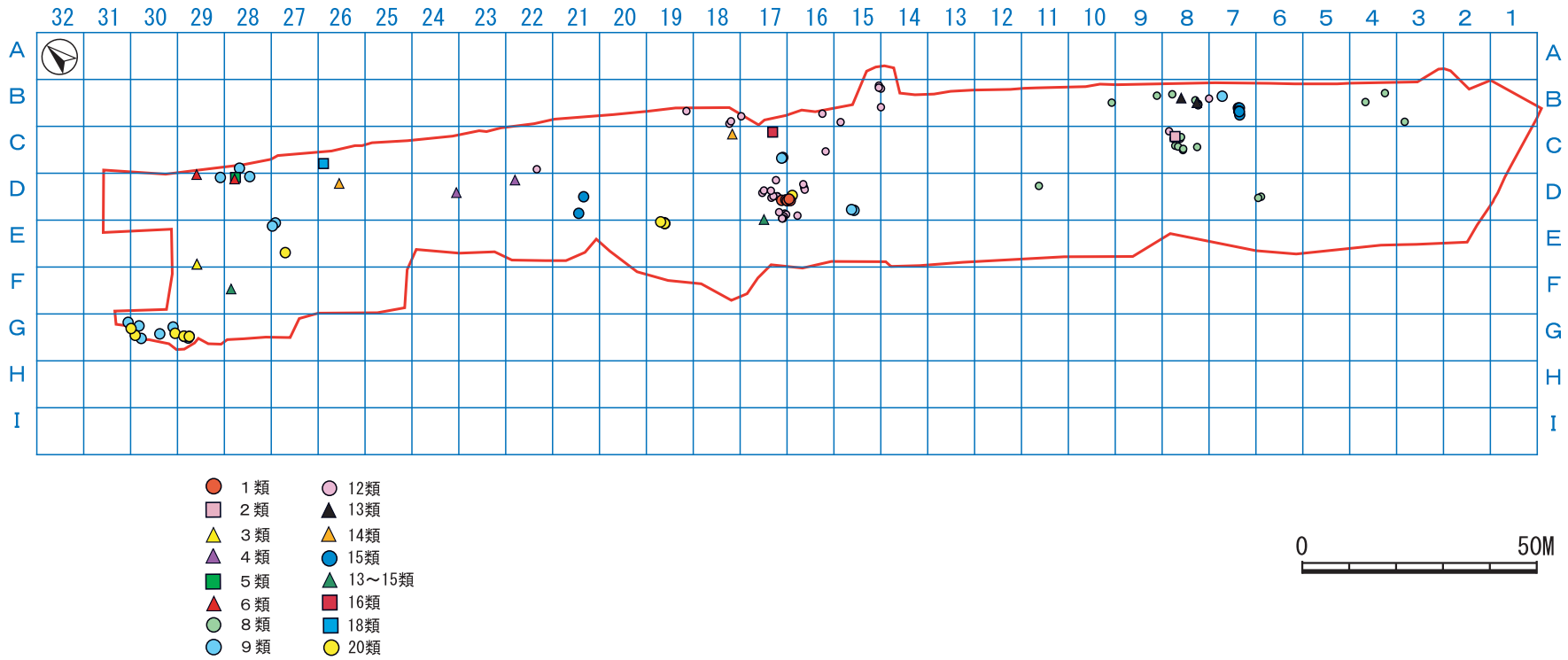
10，11は口縁部の破片である。平坦な口唇部に刻みが施され，口縁部直下に２列の貝殻刺突（線）文，胴部には縦方向の押圧気味の貝殻刺突文が施されている。口径は，それぞれ24.4㎝，22㎝である。内面は，ナデ調整で仕上げられている。

Ⅳ類土器（第23図，12～14）

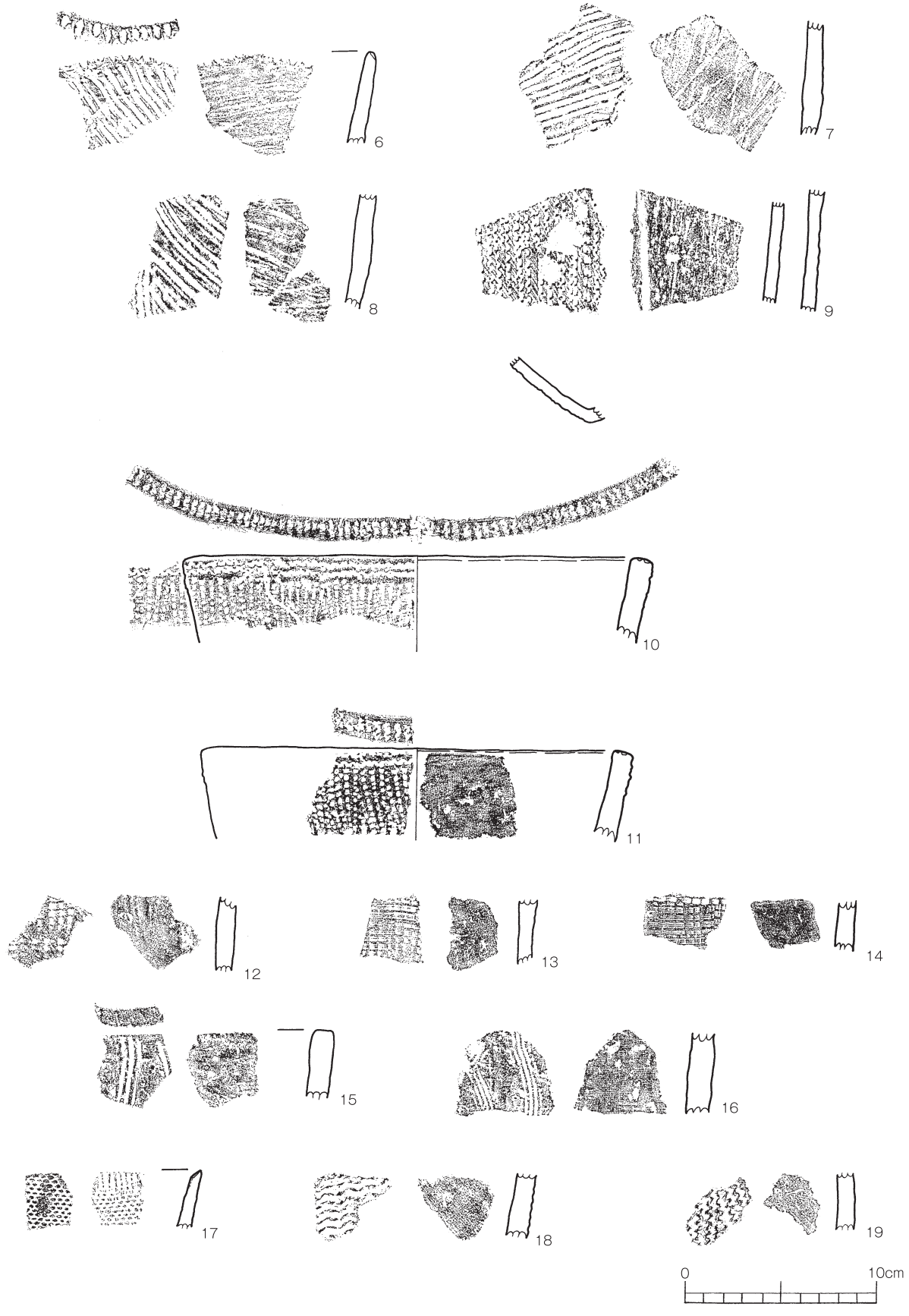
平坦な口唇部に刻みが施され，口縁部には横方向の貝殻刺突文が巡り，胴部には貝殻押引文が施される土器である。器形は，口縁部が外反し，胴部が直線的に底部へ至る円筒形である。

12～14は，胴部片である。横方向に貝殻押引文が施された後，ナデ調整で仕上げられている。

14は，上部に方形状の貝殻押圧文が施されているので，口縁部付近の可能性もある。内面は，丁寧なナデ調整で仕上げられている。



第22図　縄文土器出土状況図



第23図　縄文土器（1）Ⅰ～Ⅵ類

Ⅴ類土器（第23図，15・16）

口唇部が平坦で，外面には縦方向や斜め方向に貝殻復縁による短線の条痕文が施される土器である。器形は口縁部が直行し，円筒形で器壁は厚い。

15は，口縁部片である。縦方向に貝殻腹縁による条痕文が施されている。内面は，ナデ調整で仕上げられている。16は，胴部片である。３条ほどの貝殻条痕文が縦方向に施されている。内面はミガキ調整で仕上げられている。器壁は，平均して1.2㎝と厚い。

Ⅵ類土器（第23図，17～19）

外面全体に山形，楕円形の押型文が施される土器である。口縁部は外反し，底部は平底である。

17は，楕円形の押型文が施された口縁部片である。外へ開き，口縁内面には刻目が施されている。内面にも押型文が施されている。

18・19は，山形の押型文が施されている胴部片である。横方向や斜め方向に施されている。

Ⅶ類土器（第24図，20）

口縁部外面に横方向の貝殻条痕文が施される土器である。器形は，胴部でわずかにふくらみ，平底の円筒形である。

20は，完形土器である。口径15㎝，高さ22.2㎝，底径9.4㎝である。口唇部は丸みを帯び，口縁部には，横方向の貝殻条痕文が施されている。器壁は厚い。口縁部の外面には，ふきこぼれた汁が炭化し付着した跡が見られる。内面は，丁寧なナデ調整で仕上げられている。

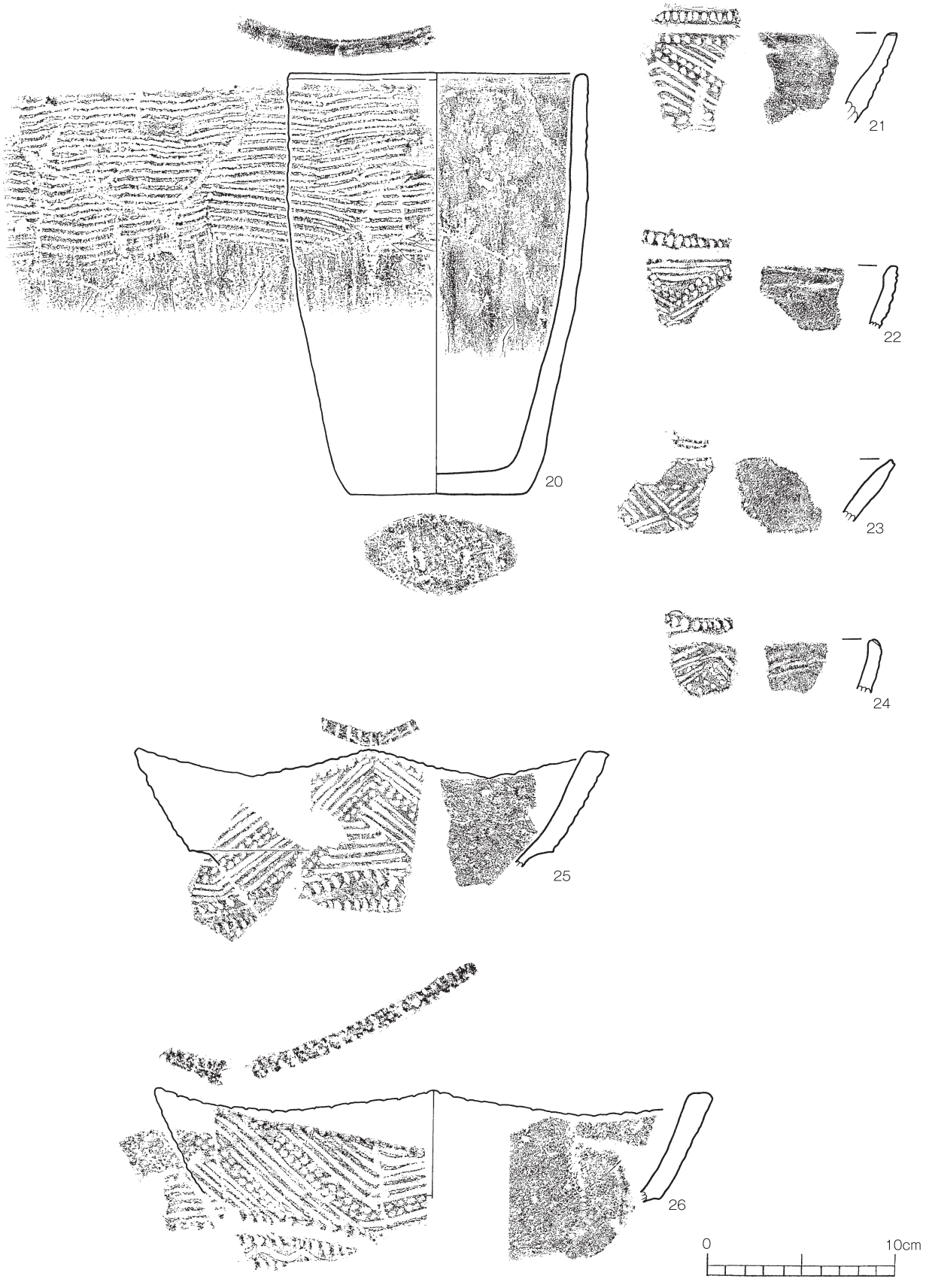
Ⅷ類土器（第24～26図，21～37）

口唇部に刻みが施され，口縁部には連点文・幾何学凹線文などが施される土器である。胴部には，撚糸文，縄文が施されている。器形は，浅い波状口縁のものと平口縁のものとがある。口縁部は外へまっすぐ開き，頸部は締まり，胴部はやや膨らみながら，平底になる。内面は，丁寧なナデ調整で仕上げられている。

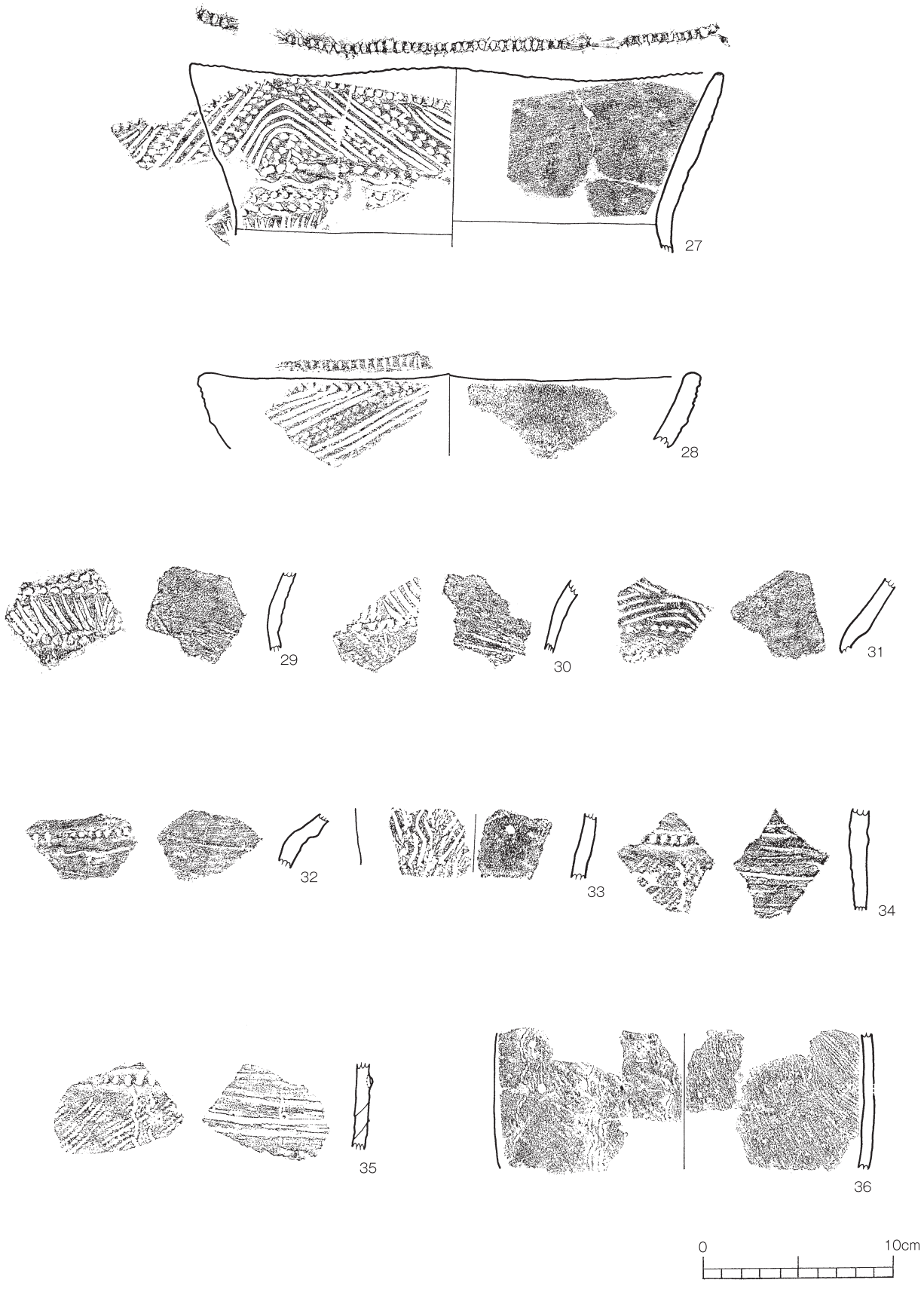
21～24は，平口縁の口縁部片である。21は，口唇・口縁端部に横方向の連点文が施され，その下に斜め方向の凹線文と連点文が施されている。23は，ヘラ状工具による斜め方向の浅い凹線文が施されている。胎土に金雲母を多く含む。

25～28は，波状口縁の口縁部片である。25は，口径が25.0㎝で，口唇部にはヘラ状工具による刻目が施されている。外面には，幾何学的に連点文や凹線文が施され，頸部には刻目突帯が巡る。26も25と同じ文様である。口径は，29.2㎝である。27は，口唇部と口縁部の上面に半截竹管による刻目が施されている。口縁部外面は，曲線文や波状の凹線文と，横方向や波状の連点文が施されている。頸部には，縦方向にヘラ状工具による長さ約２㎝の刻目が施され，その下には横方向に刺突文が巡る。胴部には，縦方向に撚糸文が施されている。内面は，丁寧なナデ調整で仕上げられている。

29～37は，頸部から胴部の破片である。30は，頸部から胴部との境になる土器片である。ヘラ状工具による刻目が施され，その下に横方向に刺突文が巡る。胴部には，縦方向の二条の撚糸文と羽状縄文が施されている。31,33は波状に浅く凹線文が施されている。胎土に金雲母を多く含む。36,



第24図　縄文土器（2）Ⅶ・Ⅷ類



第25図　縄文土器（3）Ⅷ類

37は縦方向に二条の撚糸文と羽状縄文が施されている。内面は，ケズリ調整で仕上げられている。

Ⅸ類土器（第26図，38～53）

口縁部や口唇部に沈線や刻目が施され，胴部には撚糸文や貝殻またはヘラ状工具による格子状沈線文が施される土器である。器形は，口縁部がラッパ状に外反するものや口縁部が直行し，胴部がわずかにふくらむ円筒形である。底部は，平底でやや上げ底になる。Ⅲa層から主に出土している。Ⅸ類土器は，胴部の文様からさらに２つに分類した。

ａ類：網目状の撚糸文が施文されているもの。

ｂ類：貝殻やヘラ状工具による沈線文が施文されているもの。

Ⅸa類（第26図，38～49）

38は，口縁部である。大きく外へ開き，横方向に三条の平行沈線文が施されている。

39～48は，胴部片である。39は，網目撚糸文が施され，その下には，２本１組の平行沈線文が施されている。平行沈線文の間には，縦方向に撚糸文が施されている。44～48は，縦方向にある程度間隔をおいて，撚糸文が施されている。

49は底部で，縦方向に撚糸文が施されている。内面は，丁寧なナデ調整で仕上げられている。

Ⅸb類（第26図，50～53）

50～52は胴部片で，外面は貝殻条痕調整が施されている。51は，貝殻条痕調整ののち，縦方向に沈線文が施されている。

53は，底部片で，菱形に沈線文が施されている。

Ⅹ類土器（第27図，54）

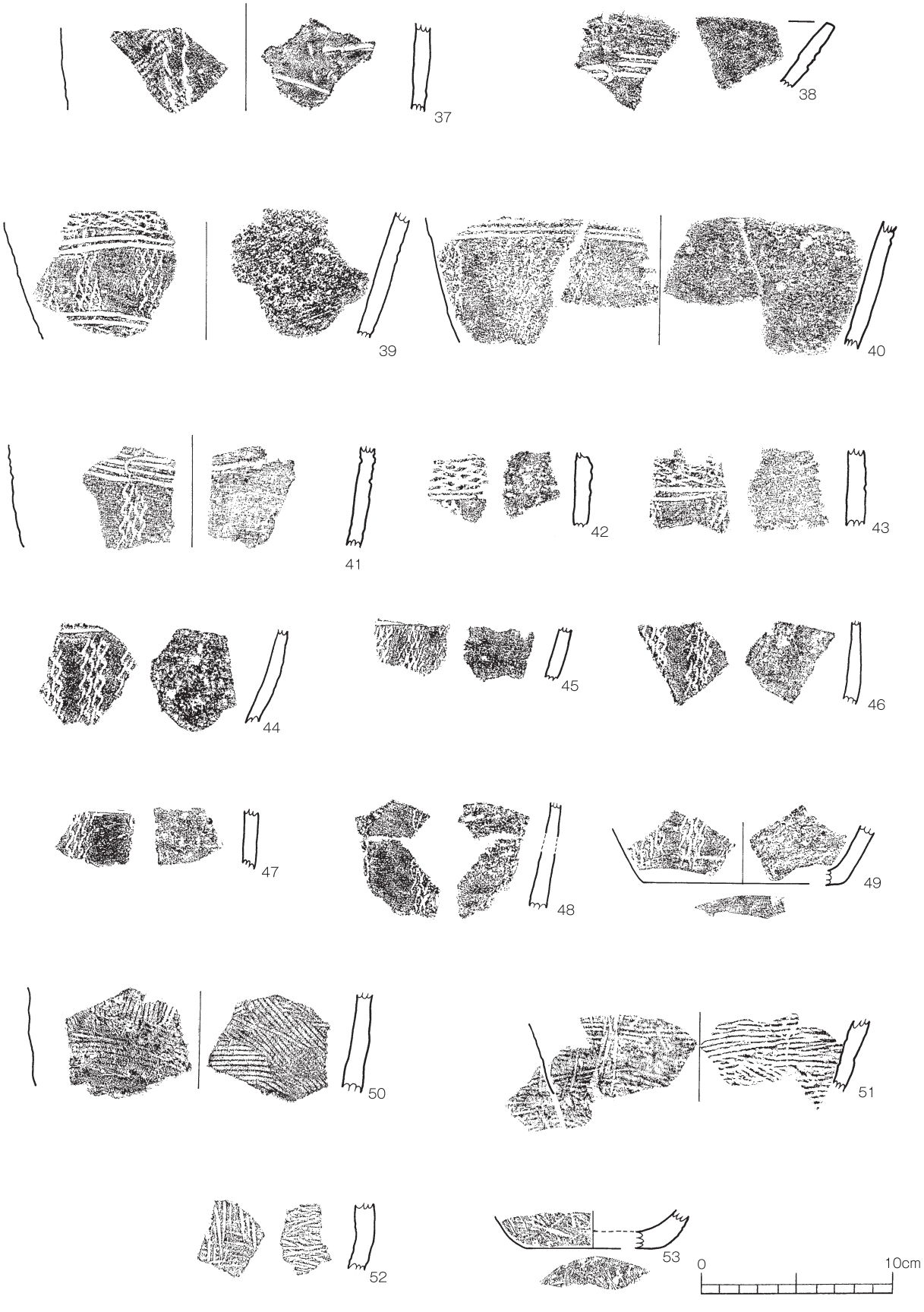
口縁部に突帯が貼り付けられ，口唇部と突帯に刻目が施される土器である。

54は，やや外反する口縁部である。二条の刻目突帯を有し，内外面とも貝殻条痕ののち，ナデ調整で仕上げられている。さらに，内面には曲線文が施されている。

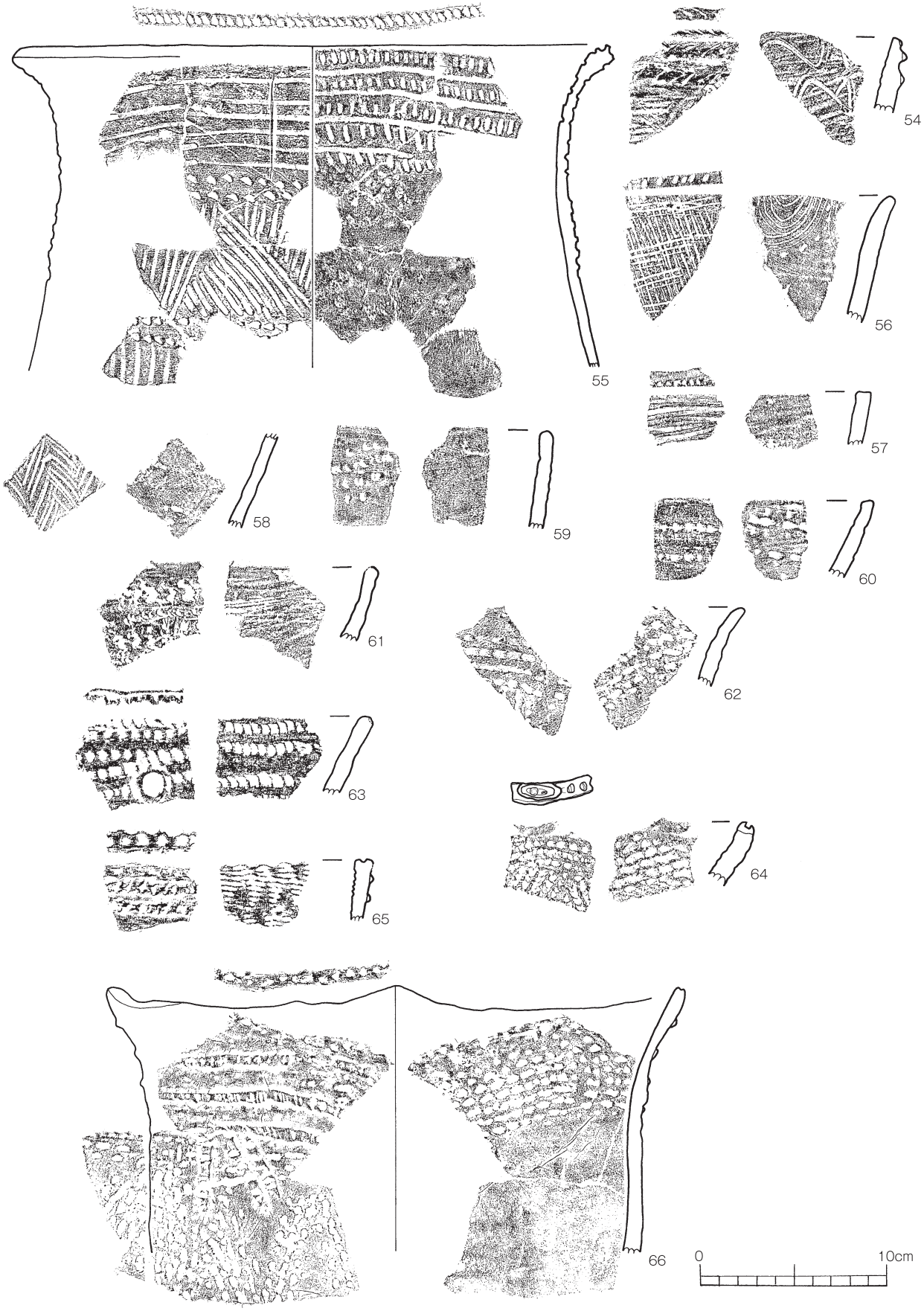
Ⅺ類土器（第27図，55～58）

口縁部から胴部にかけて，沈線文や刺突連点文が施される土器である。ほぼ直立するもの，緩やかに外反するもの，強く外反するものがあり，丸底の器形を呈する。

55は，口径が31.6㎝ある大型の土器で，頸部から口縁部に向かって強く外反する器形を呈する。口唇部には，密に刺突文が施され，口縁部には横方向に沈線文が施され，胴部には横方向に二条の刺突連点文が施され，その下には斜め方向に沈線文，横方向に刺突連点文が施されている。口縁部内面には，横方向に沈線文が施され，その間には縦方向にやや長い刺突文が施されている。内外面ともナデ調整で仕上げられている。56・57は口縁部片である。56は，口唇部にヘラ状工具で刻目が施され，縦方向に細い沈線文が施されたのち，横方向に３条１組の細い沈線文が施されている。内面は，同心円状に細い沈線文が施され，そのまわりに刺突文が施されている。



第26図　縄文土器（4）Ⅷ・Ⅸ類



第27図　縄文土器（5）X～XII類

58は胴部片で，菱形に多重凹線文が施されている。

Ⅻ類土器（第27～29図，59～84）

貝殻刺突文，貝殻連点文，突帯文などが施され，内面にも貝殻連点文や貝殻刺突文が施される土器である。器形は，やや外反する深鉢で，平口縁になるものや波状口縁になるものがある。内外面とも貝殻条痕調整やナデ調整で仕上げられている。

59～69は口縁部である。59～61は，口唇部がやや丸みを帯び，貝殻連点文や貝殻刺突文が施されている。60・62は内面にも連点文が施されている。63は，口縁部がやや外反し，口唇部はやや山形につくられ，密に刻目が施されている。内外面とも，横方向に貝殻連点文が施されている。補修孔の跡がみられる。65～67は，刻目突帯文が貼り付く土器である。口唇部には，竹管による刺突文が施されている。66・67は，口径がそれぞれ30.8cm，23.8cmとなり，横方向や斜め方向に突帯文が施されている。68は，平坦な口唇部に棒状工具による刻目が施され，外面には斜め方向に沈線文が施されている。69は，口唇部に貝殻による刻目があり，口縁には貝殻腹縁による相交孤文が施されている。

70～84は，胴部片である。70・71は胴部の直径が31.4cm，26.0cmの大型土器である。70は，胴部上部は４～５条１組の貝殻連点文がある程度の幅を置いて縦方向に施され，その下には連点文が横方向に施されている。71は，４～５条１組の貝殻連点文がある程度の幅を置いて，横方向に施されている。内面は，ヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。73は，貝殻条痕調整ののち縦方向に貝殻連点文が施されている。内面は，貝殻条痕調整で仕上げられている。77・78は，縦方向に貝殻連点文と貝殻刺突文が施され，内面は貝殻条痕調整で仕上げられている。器壁は，約５㎜と薄い。

79は，横方向に刻目突帯文が貼り付けられている。80～84は，貝殻腹縁による相交弧文が施されている。83は，穿孔があり，内面は貝殻条痕調整で仕上げられている。

ⅩⅢ類土器（第29図，85・86）

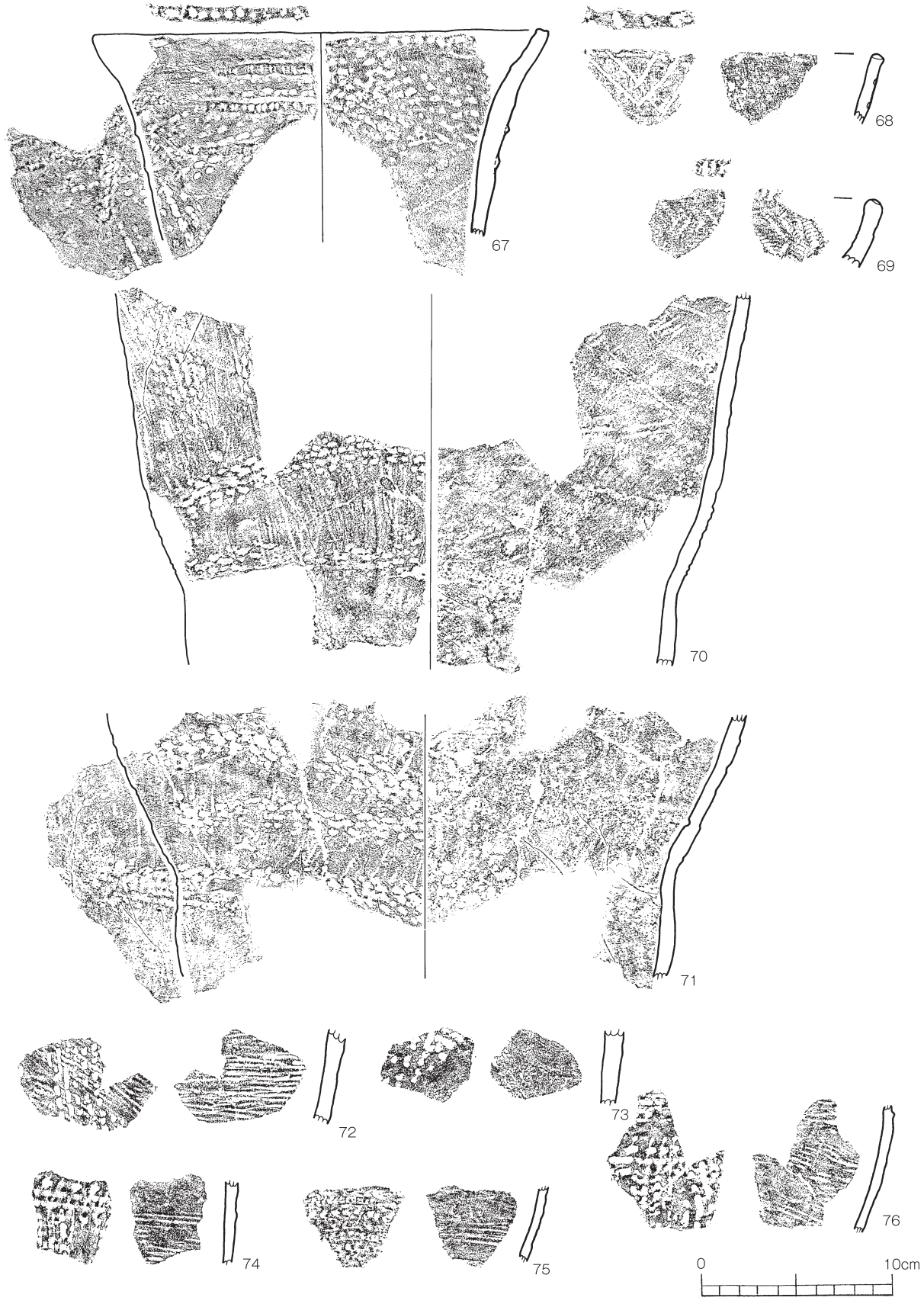
外面に縄文が施される土器である。器壁は，比較的薄い。

85・86は，胴部片である。密に縄文が施されており，内面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。胎土や色調から同一個体の可能性が考えられる。

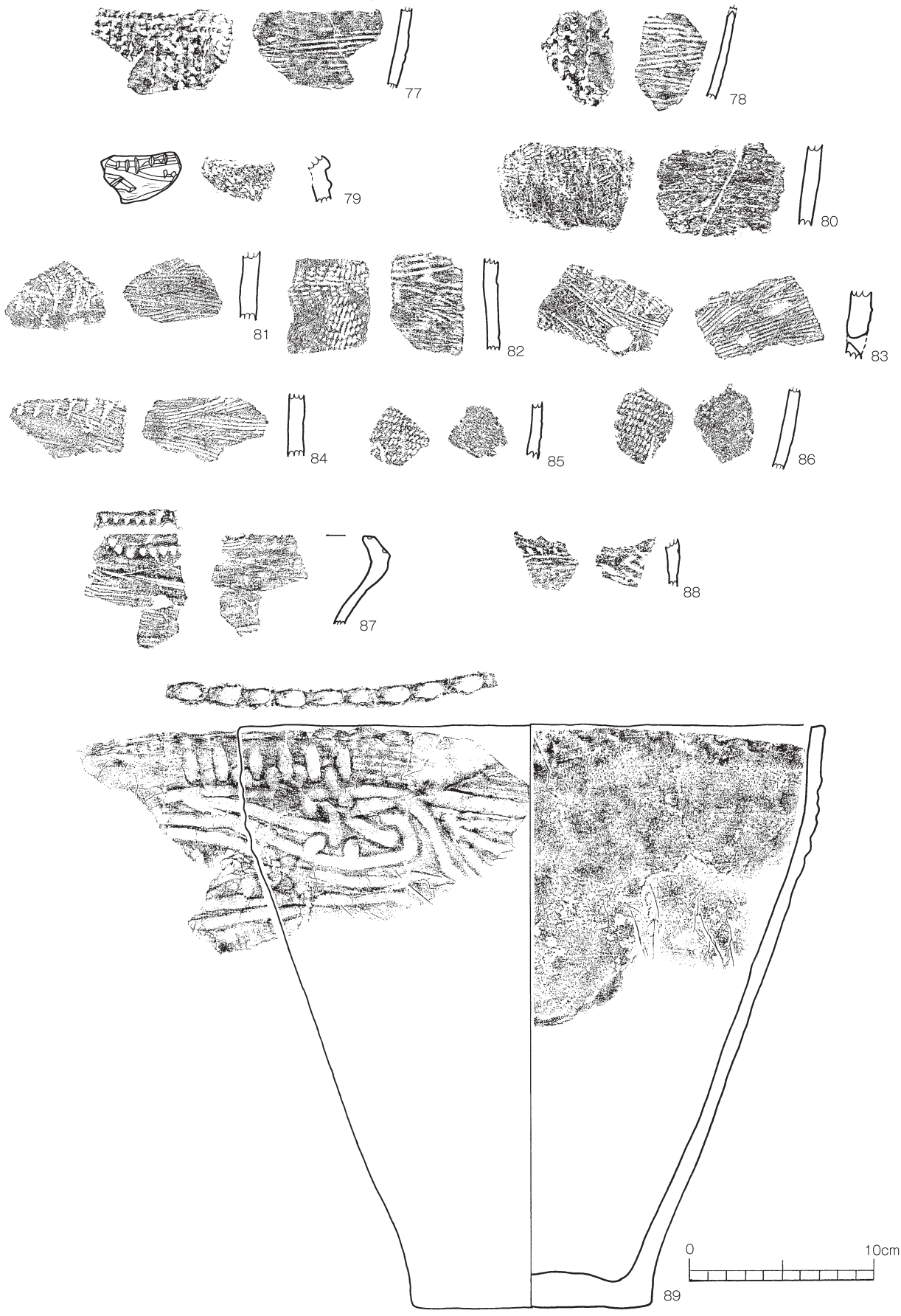
ⅩⅣ類土器（第29図，87・88）

沈線文，連点文，突帯文などが施される土器である。器形は，底部から直線的に立ち上がり，胴部はやや張り，頸部でわずかに締まる。口縁部は外に開いてから内弯，内反し，いわゆるキャリパー状を呈する。胎土に滑石が含まれたものがあり，器壁は薄い。内外面とも，貝殻腹縁による条痕調整で仕上げられている。

87は，口縁部片である。口唇部，口縁部に連点文が施されている。88は，胴部片で横方向に貝殻刺突文が施されている。胎土に滑石を多く含み，なめらかである。



第28図　縄文土器（6）Ⅻ類



第29図　縄文土器（7）XII～XV類

XV類土器（第29・30図，89・90）

凹線文が直線，曲線的に施される土器である。器形は，底部から直線的に立ち上がり，口縁部は直行している。

89は，完形で口径が31.4cm，器高が31.3cm，底径が12.8cmの大型土器である。口唇部には凹線文が施され，口縁部に短い縦方向の凹線文，胴部上部には曲線の凹線文が施されている。内面はナデ調整で仕上げられている。90は，口縁部片である。口唇部には，棒状工具で深く凹線の刻目が施されている。外面は，直線や曲線を組み合わせた凹線文が施されている。内面は，ヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。

XVI類土器（第30図，91・92）

縄文時代中期の型式不明土器をまとめた。91は，胴部片である。縦方向に細い沈線文が施された後，横方向に沈線文が施されている。内面は，ナデ調整で仕上げられている。92は，口縁部片である。口唇部は，やや丸みを帯び，横方向に刺突連点文が施されている。

XVII類土器（第30図，93・94）

口縁部から胴部上半にかけて２本１組の沈線文や凹線文が施される土器である。器形は，口縁部が外反するものが多く，平口縁と波状口縁になるものがある。胴部は，緩やかに張り直線的に底部へ至る。安定した平底で，外に張り出す。器面調整は，貝殻条痕調整で仕上げられているものが多い。

93・94は胴部片である。93は，並行する２本の沈線文と楕円形の沈線文が組み合わされている。内面はケズリ調整後ナデ調整で仕上げられている。94は，斜め方向の貝殻条痕調整後，やや太い凹線文が長靴形に施されている。内面は，ケズリ調整で仕上げられている。

XVIII土器（第30図，95）

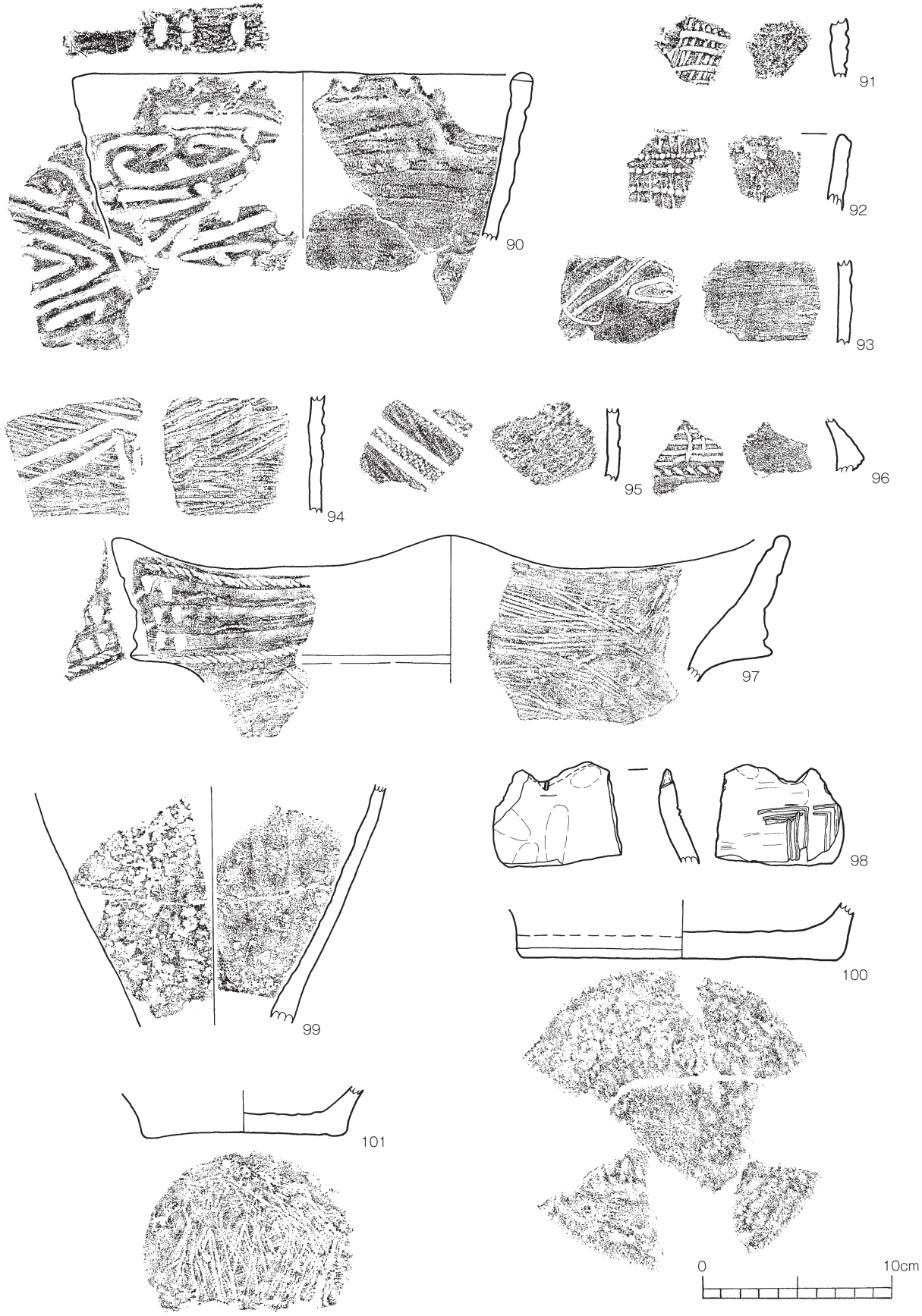
沈線文の間に縄文が施文される土器である。器形は，口縁部が外反するものや直行するものがある。

95は，胴部片である。幅４㎜の沈線文の間に縄文が施文され磨り消されている。内面は，ナデ調整で仕上げられている。

XIX土器（第30図，96）

口縁部に沈線文や刻目文が施される土器である。器形は，口縁部が内弯し，平口縁になるものが多い。器面調整は，内外面ともナデ調整で仕上げられている。

96は，口唇部がわずかに欠けているが，口縁部と考えられる。横方向に浅く三条の沈線文が施された後，縦方向にヘラ状工具により沈線文が施されている。その下には，刻目文が施される。内面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。



第30図　縄文土器（8）XV～XXI類

ＸＸ土器（第30図，97）

貝殻腹縁やヘラ状工具による刺突文，沈線文などが施される土器である。文様は，口縁部のみに施されるものや胴部に施されるもの，無文のものがある。器形は，口縁部断面形が三角形を呈する深鉢形である。平口縁と山形口縁になるものがある。器面調整は，内外面とも貝殻条痕調整が施されている。

97は，口縁部である。山形口縁で，口縁部文様帯には上下２列に連続刺突文が巡る。その間には，三条の沈線文が施され，さらにその間には横方向に貝殻刺突文が施されている。内面は，貝殻条痕調整で仕上げられている。

ＸＸⅠ土器（第30図，98～101）

型式がはっきりしない後期土器をここにまとめた。

99は，無文土器である。底部から胴部へ直線的に立ち上がる。外面はヘラケズリ調整で仕上げられている。

100・101は底部である。ともに平底で，底径はそれぞれ16.5㎝，10.8㎝である。101は，内外面とも条痕後ナデ調整で仕上げられている。胎土に金雲母，滑石を多く含む。

ＸＸⅡ土器（第31図，102）

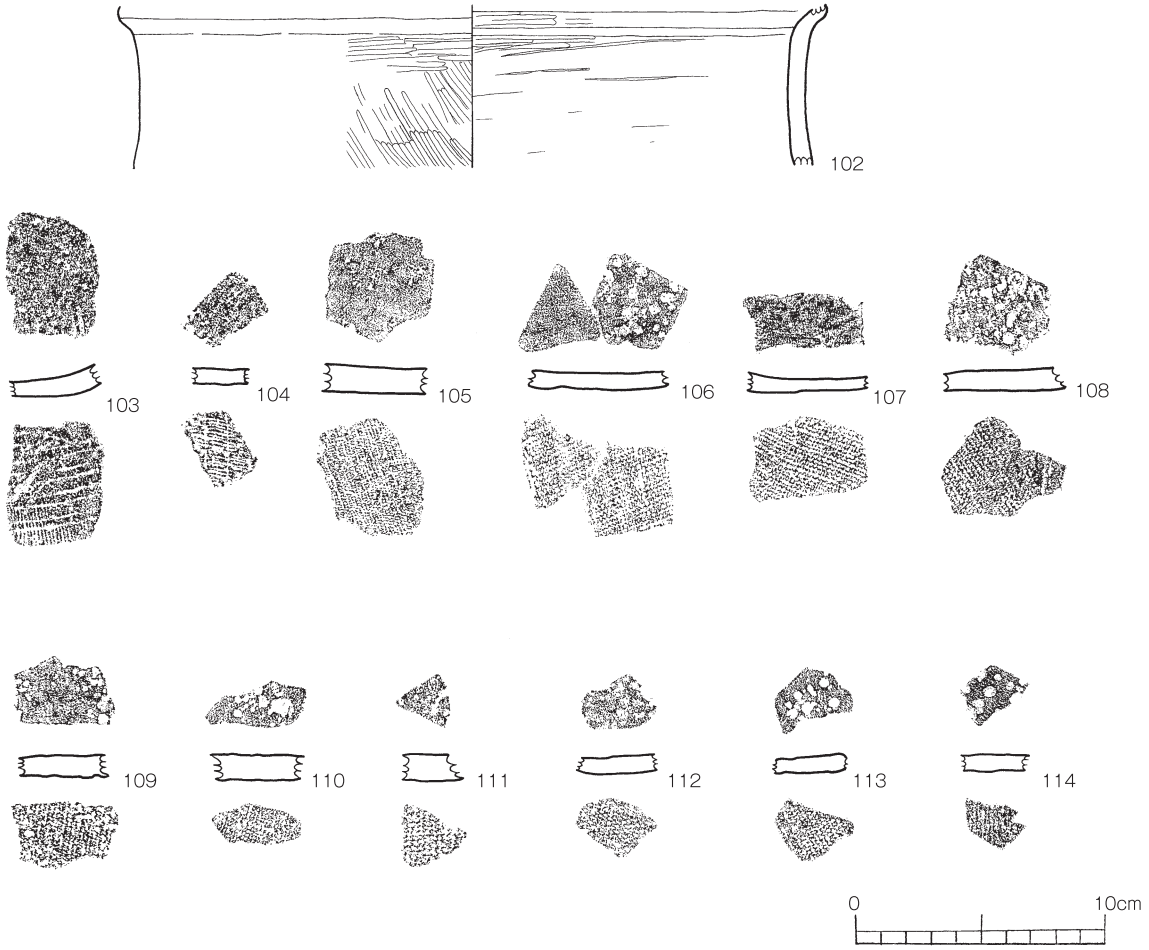
縄文晩期に属すると考えられる土器である。102は，深鉢の頸部である。胴上部から頸部にかけてわずかに外反する。外面はミガキ調整で仕上げられている。

ＸＸⅢ土器（第31図，103～114）

組織痕がみられる土器をまとめた。組織痕は，胴部下半から底部にかけて，網代痕・編布痕が認められる。小破片で，全体の器形が分かる資料は少ないが，中華鍋形の器形を呈すると考えられる。12点を図化した。

103・104は，底部片である。網代痕が確認できる。104は，器壁が５㎜と薄い。

105～114は，編布痕が確認できる底部片である。内面はミガキ調整で仕上げられているものが多い。



第31図　縄文土器（9）ⅩⅫ・ⅩⅩⅢ類

第７表　縄文土器観察表１

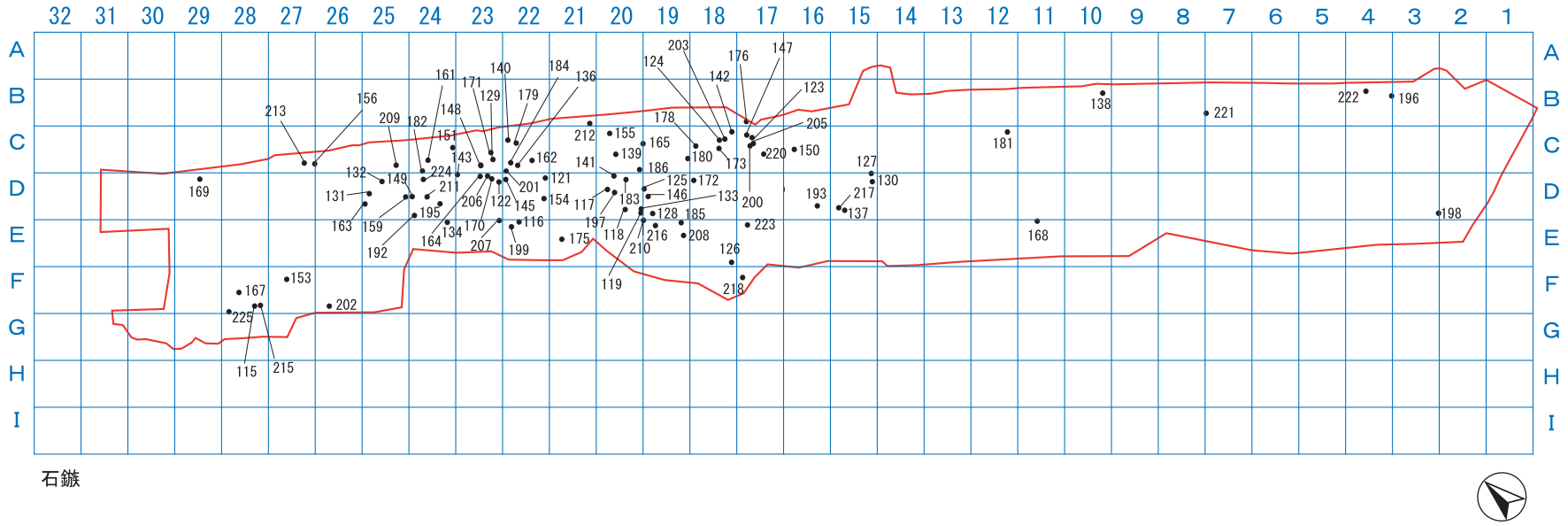
挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様・調整		色調		胎土							備考
								外面	内面	外面	内面	長石	石英	輝石	角閃石	火山ガラス	軽石	その他	
23	6	20291	D－17	Ⅲc	深鉢	Ⅰ	口縁	貝殻条痕文・刻目文	ヘラケズリ後ナデ	橙	橙					○	○		
	7	20295 20298	D-16・17	Ⅲc	深鉢	Ⅰ	胴部	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙	暗灰黄	○				○	○		
	8	20296 20300	D－16 C-23	Ⅲb	深鉢	Ⅰ	胴部	貝殻条痕文　ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい褐	灰黄	○							
	9	23	3T	Ⅲ	深鉢	Ⅱ	胴部	貝殻刺突文　貝殻条痕文	ヘラケズリ	橙	明赤褐	○						茶粒	
	10	21093	E-29	Ⅳ	深鉢	Ⅲ	口縁	貝殻刺突文　ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○		○				
	11	21093 表採	E－29 F-28	Ⅳ	深鉢	Ⅲ	口縁	貝殻刺突文　ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○			赤粒	
	12	4876	D-23	Ⅱ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻押引文	ミガキ様のナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○	小石	
	13	4071	D-22	Ⅱ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻押引文	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○					雲母	
	14	P－18	D-22	ピット	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻押引文	ミガキ	黒褐	褐	○	○		○				
	15	なし	ー	ー	深鉢	Ⅴ	口縁	貝殻条痕文　ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○		○		○		
	16	8719	C-15	Ⅳ	鉢	Ⅴ	胴部	貝殻条痕文　ナデ	ミガキ	明赤褐	オリーブ褐		○		○		○		
	17	23371	D－19	Ⅲb	深鉢	Ⅵ	口縁	楕円形押型文・刻目文	刻目文・押型文	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○		
	18	表採	G-27	表採	深鉢	Ⅵ	胴部	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○	○		
	19	8717	C-15	Ⅴ上	深鉢	Ⅵ	胴部	山形押型文	ナデ	明黄褐	灰黄褐	○			○	○			
24	20	不明	不明	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	完形	貝殻条痕文　ヘラケズリ後ナデ	ヘラミガキ	明黄褐	にぶい黄褐	○	○		○		○	砂粒	外面に煤が付着
	21	16	57T	Ⅳ	深鉢	Ⅷ	口縁	連点文・曲回線文・刻目文	丁寧なヘラミガキ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○		○	○			
	22	7023	B－8	Ⅲ	深鉢	Ⅷ	口縁	連点文・刻目文・回線文	ナデ	灰褐	にぶい褐	○				○			
	23	5768	D－6	Ⅴ	深鉢	Ⅷ	口縁	回線文・連点文　ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○	金雲母	
	24	7030	B－9	Ⅲ	深鉢	Ⅷ	口縁	回線文・連点文・刻目文　ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○			○	○	○		
	25	7010 7012	B－8	Ⅲ Ⅳ	深鉢	Ⅷ	口縁	回線文・連点文・刻目文　ナデ	丁寧なヘラミガキ	赤褐	にぶい褐	○				○	○		
	26	700 6452 7013 7014	B－8	Ⅳ Ⅲ Ⅳ Ⅳ	深鉢	Ⅷ	口縁	回線文・連点文・刻目文　ナデ	丁寧なヘラミガキ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○			○		茶粒	
25	27	12 15 17 18 21 22 23	57T	Ⅳ	深鉢	Ⅷ	口縁	回線文・撚糸文・刻目文	ナデ	明赤褐	暗灰黄	○	○			○	○		
	28	なし	不明	不明	深鉢	Ⅷ	口縁	回線文・連点文・刻目文　ナデ	ヘラミガキ	明赤褐	橙	○			○	○			
	29	なし	ー	ー	深鉢	Ⅷ	頸部	連点文・回線文	ヘラミガキ	褐	褐	○	○			○			
	30	24	57T	Ⅳ	深鉢	Ⅷ	頸部	回線文・撚糸文・連点文・縄文	ケズリ・ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○			○			
	31	5729	D－6	Ⅵ	深鉢	Ⅷ	頸部	回線文・連点文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○						金雲母	
	32	6345	D－11	Ⅲ	深鉢	Ⅷ	頸部	刻目突帯文	ケズリ	にぶい黄	にぶい黄	○				○	○	金雲母	
	33	なし	D－6		深鉢	Ⅷ	胴部	沈線文・撚糸文・回線文	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄	明黄褐	○					○	金雲母	
	34	5643	48	Ⅲ	深鉢	Ⅷ	胴部	突帯文・撚糸文　ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○	○		
	35	5636	D－23	Ⅱ	深鉢	Ⅷ	胴部	撚糸文・縄文	ヘラナデ	明黄褐	黄褐	○	○			○			
	36	14 26 5736	57T 57T C-8	Ⅳ	深鉢	Ⅷ	胴部	撚糸文・羽状縄文	ケズリ	褐	赤褐					○	○		
26	37	5716	C-9	Ⅴ	深鉢	Ⅷ	胴部	撚糸文・羽状縄文　ナデ	ケズリ	橙	明黄褐	○				○	○		
	38	17008	F-32	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	口縁	沈線文	ナデ	明赤褐	オリーブ褐	○	○		○				
	39	16995 17051	G-29 F-29	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	撚糸文・沈線文	ナデ	明赤褐	灰黄褐	○	○		○				
	40	17021	F-29	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	沈線文・撚糸文　ナデ	ナデ	褐	暗褐	○	○		○				
	41	8710	C-15	Ⅳ下	深鉢	Ⅸa	胴部	撚糸文・沈線文　ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○						
	42	16968	G-30	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	沈線文・撚糸文	ナデ	明赤褐	オリーブ褐	○			○		○		
	43	16999	G-29	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	沈線文・撚糸文　ナデ	ナデ	橙	褐	○	○		○	○	○		
	44	8706	C-15	Ⅳ上	深鉢	Ⅸa	胴部	撚糸文・沈線文　ナデ	指オサエ	にぶい橙	にぶい黄橙		○		○	○	○		
	45	23335	D-29	Ⅲb	深鉢	Ⅸa	胴部	沈線文・撚糸文	ヘラケズリ後ナデ	にぶい赤褐	オリーブ褐	○				○			

第８表　縄文土器観察表２

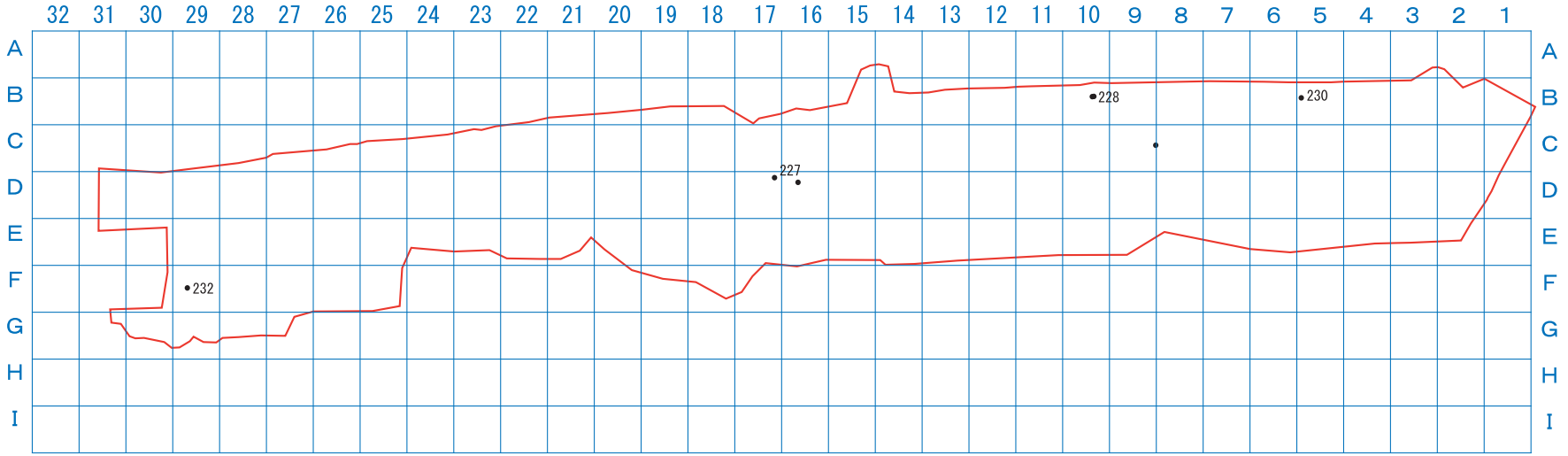
挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様・調整		色調		胎土							備考
								外面	内面	外面	内面	長石	石英	輝石	角閃石	火山ガラス	軽石	その他	
26	46	32376	E-27	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	撚糸文　ナデ	ナデ・指オサエ	にぶい橙	にぶい黄橙		○		○	○	○		
	47	32377	E-27	Ⅳ	深鉢	Ⅸa	胴部	撚糸文　ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○		○	○			
	48	17000	G-29	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	撚糸文	ヘラケズリ	にぶい橙	暗褐	○				○	○		
		17022	F-29	Ⅲa															
	49	23348	C-28	Ⅲb	深鉢	Ⅸa	底部	撚糸文　ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○		
	50	5779	B-7	表採	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条痕文	貝殻条痕文	明赤褐	にぶい黄褐	○			○	○	○		
	51	8767	D-15	Ⅲ	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条痕文・沈線文　ナデ	貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○	くさり礫	
		16456	C-17	Ⅲa															
		16457	C-17	Ⅲb															
	52	8769	D-15	Ⅲ	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○			○	○	小石	
	53	なし	ー	ー	深鉢	Ⅸb	底部	貝殻条痕文	沈線文	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○				○	○		
27	54	なし	ー	ー	深鉢	Ⅹ	口縁	貝殻条痕文・貼付突帯文　ナデ	曲線文　ナデ	黒褐	にぶい褐	○				○		茶粒	
	55	なし	45T	Ⅲ	深鉢	ⅩⅠ	口縁～胴部	刺突文・沈線文・押引文　ナデ	刺突文・押引文　ナデ	橙	にぶい赤褐	○	○		◎	○			
	56	なし	ー	ー	ー	ⅩⅠ	ー	沈線文	刺突文・沈線文　ケズリ	灰黄褐	にぶい黄	○				○	○		
	57	なし	ー	表採	深鉢	ⅩⅠ	口縁	刻目文・条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黄褐	○				○	○		
	58	なし	E-28	Ⅲb	深鉢	ⅩⅠ	胴部	沈線文・菱形文	ナデ	にぶい褐	橙	○				○			
	59	27	51T	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	口縁	貝殻連点文　ヘラケズリ後ナデ	ナデ	赤	暗赤褐	○	○		○	○			
	60	なし	ー	ー	深鉢	ⅩⅡ	口縁	貝殻連点文　ヘラナデ	ヘラケズリ・ナデ	褐	にぶい黄褐	○	○	○				砂粒	
	61	なし	ー	ー	深鉢	ⅩⅡ	口縁	貝殻刺突文　ナデ	ケズリ	黒褐	にぶい赤褐	○	○			○	○		
	62	なし	ー	ー	深鉢	ⅩⅡ	口縁	貝殻連点文	貝殻連点文	灰褐	にぶい赤褐	○	○			○	○		
	63	3362	B-19	Ⅱ	深鉢	ⅩⅡ	口縁	貝殻連点文　ナデ	貝殻連点文　ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○			○	○		補修孔
	64	7908	B-15	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	口縁	貝殻刺突文	貝殻刺突文	明赤褐	明赤褐	○				○	○		口唇部に突起あり
	65	7910	C-16	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	口縁	刻目突帯文・刺突文　ヘラナデ	貝殻押引文　ミガキ	黒	黄灰		○			○	○		
	66	1203	B-14	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	口縁～胴部	刺突文・刻目突帯文・貝殻連点文　丁寧なナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	○	○		○	○	○		
		1218	B-15																
28	67	814	B-15	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	口縁	刻目突帯文・刺突文・貝殻連点文　ナデ	貝殻連点文	褐灰	にぶい褐	○	○		○	○		砂粒	
	68	16998	G-29	Ⅲa	深鉢	ⅩⅡ	口縁	沈線文　ナデ	ナデ	褐	にぶい褐	○			○	○	○		
	69	ー	ー	ー	深鉢	ⅩⅡ	口縁	貝殻による相交弧文　ナデ	相交弧文　ナデ	暗灰黄	褐灰	○	○						
	70	11259	D-17	Ⅲa・Ⅲb	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻刺突文・貝殻連点文　ヘラケズリ後ナデ	貝殻連点文　ヘラケズリ後ナデ	にぶい褐	暗褐	○				○			
		11271																	
		11272																	
		11273																	
		14053																	
		14068																	
		14135																	
		15133																	
		15134																	
		15138																	
		15664																	
		16922																	
	71	11256	D-17・20	Ⅲa	深鉢	ⅩⅡ	頸部	貝殻連点文　ヘラケズリ後ナデ	貝殻連点文　ヘラケズリ後ナデ	灰黄褐	黄褐	○		○		○			
		11274	D-17・19	Ⅲa															
		14137	D-17・21	Ⅲa															
		15663	D-17・22	Ⅲa															
		17477	D-17・23	Ⅲb															
		17479	D-17・24	Ⅲa															
		表採	D-17・25	Ⅲ															
	72		B－9	表採	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻連点文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	黒褐	褐	○				○			
	73	5821	B－15	Ⅱ	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻連点文	貝殻条痕文	黒褐	灰黄褐	○			○	○			
	74	11233	D-16	Ⅲb	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻連点文　ナデ	貝殻条痕文　ナデ	褐灰	灰黄褐								
	75	7901	B-16	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻刺突文	貝殻条痕文	にぶい褐	黒褐		○			○	○		
	76	15129	D-17	Ⅲb	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻連点文　ナデ	貝殻条痕文　丁寧なナデ	黒褐	黒褐								
29	77	13979	D-16	Ⅲb	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻刺突文・貝殻連点文	貝殻条痕文	黒褐	黒褐		○			○	○		
		15633	C-17	Ⅲa															
	78	14143	D-17	Ⅲa	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻刺突文・貝殻連点文　ミガキ	貝殻条痕文　ナデ	黒褐	黒褐								
	79	25	51T	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	胴部	刻目突帯文　ナデ	ナデ	黄灰	黄褐		○			○	○	茶粒	

第９表　縄文土器観察表３

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様・調整		色調		胎土							備考
								外面	内面	外面	内面	長石	石英	輝石	角閃石	火山ガラス	軽石	その他	
29	80	4317 4318	B-18	Ⅲa	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	ケズリ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○				○	茶粒	
	81	30984	B-18	Ⅲb	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	貝殻条痕文　指オサエ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○	○		
	82	5789	B-7	Ⅲ	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	貝殻条痕文	にぶい黄褐	黄褐	○			○	○	○		
	83	31534	B-17	Ⅳ	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	貝殻条痕文　ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい褐		○			○	○		
	84	30986	B-18	Ⅲb	深鉢	ⅩⅡ	胴部	貝殻による相交弧文　指オサエ	貝殻条痕文　指オサエ	明黄褐	オリーブ褐	○				○	○		
	85	7022	B-8	Ⅲ	深鉢	ⅩⅢ	胴部	縄文　ナデ	ナデ	明赤褐	橙	○		○		○	○		
	86	7011	B-8	Ⅳ	深鉢	ⅩⅢ	胴部	縄文	ケズリ	明赤褐	にぶい黄橙	○			○	○	○		
	87	15901	D-16	Ⅲa	深鉢	ⅩⅣ	口縁	貝殻条痕文・刺突文　ナデ	貝殻条痕文　ナデ	明褐	明褐	○				○	○		
	88	24036	C-18	Ⅲa	深鉢	ⅩⅣ	胴部	貝殻条痕文・刺突文	ナデ	黄灰	灰黄褐				○	○		滑石	
	89	141 143 147 148 149 153 548	B-6・7 C-8	Ⅱ・ Ⅲ	深鉢	ⅩⅤ	完形	凹線文・刺突文　ナデ	ナデ	にぶい赤褐	褐	○	○				○	○	
30	90	5380 6000	D-20・21	Ⅲ	深鉢	ⅩⅤ	口縁	凹線文　ナデ	ヘラケズリ・ナデ	明赤褐	明褐	○	○	○			○		
	91	11315	D-7	Ⅲa	深鉢	ⅩⅥ	胴部	凹線文・条痕文	ナデ	灰褐	褐	○					○		時期不明
	92	17648	F-28	Ⅲa	深鉢	ⅩⅥ	口縁	刺突列点文　ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○				○	○		時期不明　擬似口縁
	93	1707	C-16	Ⅱ	深鉢	ⅩⅦ	胴部	沈線文　ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					○	○		
	94	15569	C－17	Ⅲa	深鉢	ⅩⅦ	胴部	沈線文・貝殻条痕文	ケズリ	にぶい黄	にぶい黄						○	○		
	95	11000	D－16	Ⅲa	深鉢	ⅩⅧ	胴部	磨消縄文・沈線文　ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○			○	○	○		
	96	21158	C-26	Ⅲb	深鉢	ⅩⅨ	口縁	凹線文　ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○				○		茶粒	
	97	なし	ー	表採	深鉢	ⅩⅩ	口縁	貝殻刺突文・凹線文・刻目文　ヘラケズリ	貝殻条痕文	明赤褐	明黄褐	○	○				○	○		
	98	なし	なし	Ⅰ	深鉢	ⅩⅩⅠ	口縁	ケズリ後ナデ	指オサエ・ナデ	にぶい黄褐	黄褐	○		○	○		○		
	99	17002 16996 16997 16999 17003 16980	F-29 G -29・30	Ⅲa	深鉢	ⅩⅩⅠ	胴部	ヘラケズリ・ナデ	剥離が著しい	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○			○	○	○		
	100	16423 17502 17503 31434	E-19	Ⅲ Ⅲb Ⅲb Ⅳ	深鉢	ⅩⅩⅠ	底部	ケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○				○	○		
	101	32360	E-27	Ⅲa	深鉢	ⅩⅩⅠ	底部	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○		金雲母・滑石	
31	102	なし	なし	表採	深鉢	ⅩⅩⅡ	口縁	ミガキ	ヘラケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○		
	103	2651	C-22	Ⅱ	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	編代底	ケズリ・ナデ	にぶい褐	オリーブ褐					○	○		
	104	21881	D-25	Ⅲb	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	網代底	ナデ	明褐	にぶい黄橙	○			○	○	○		
	105	2821	D-26	Ⅲa	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ミガキ様のナデ	明褐			○		○	○	○	小石	
	106	4209	C-23	Ⅱ	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ナデ	明褐	にぶい黄褐	○					○		
	107	6404	D-15	Ⅱ	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕　指オサエ	ナデ	にぶい褐	黒褐		○			○	○		
	108	4725	C-24	Ⅱ	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	○		
	109	30055	C-17	Ⅲb	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ミガキ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○		○	○			
	110	18733	E-18	Ⅲa	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ナデ	黄褐	黄褐	○	○			○	○		
	111	18156	F-28	Ⅲa	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙		○			○	○		
	112	なし	ー	表採	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙		○			○	○		
	113	6741	D-4	Ⅱ	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	剥離が著しい	橙	にぶい褐		○		○	○			
	114	なし	ー	表採	浅鉢	ⅩⅩⅢ	底部	組織痕　編布痕	ナデ	にぶい褐	暗灰黄		○			○	○		

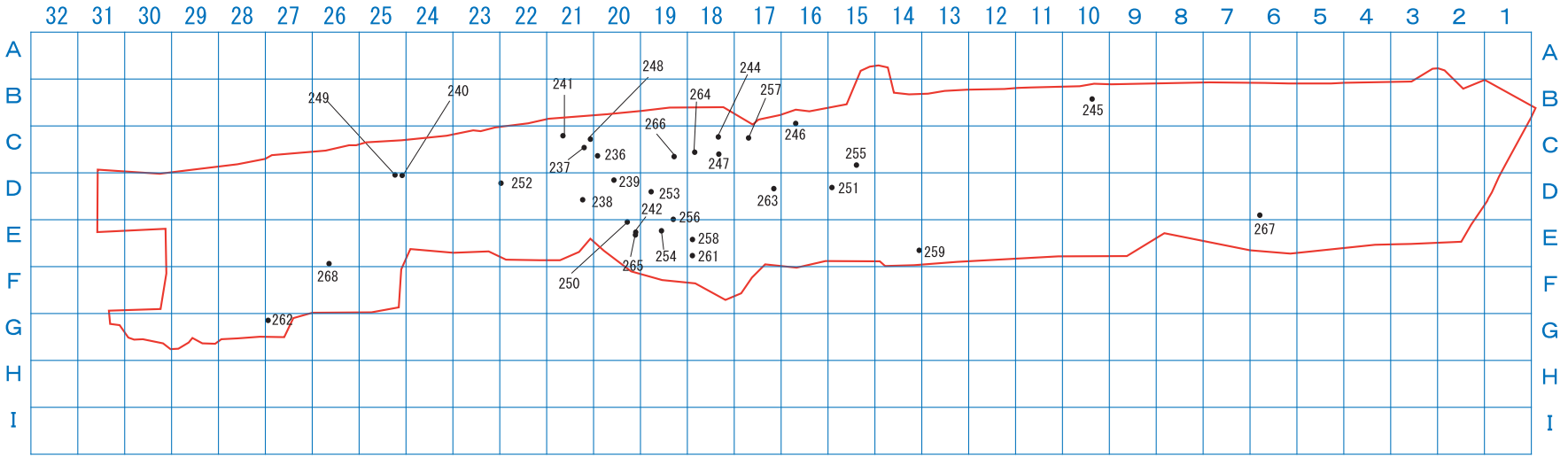


石鏃

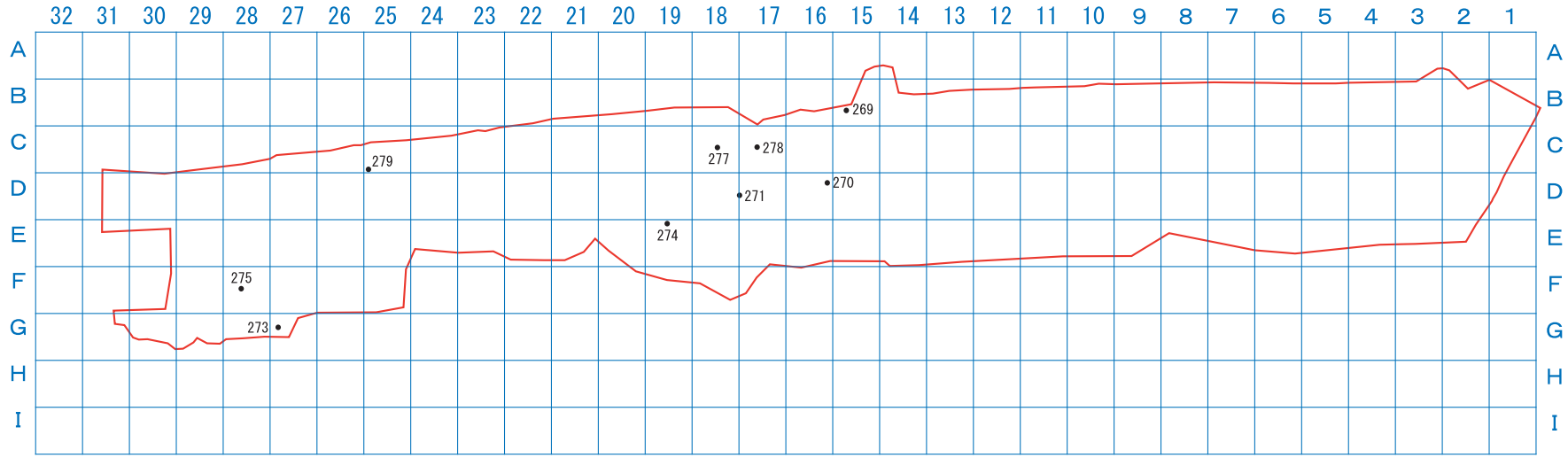


石匙

第32図　縄文時代の石器出土分布図　１・２

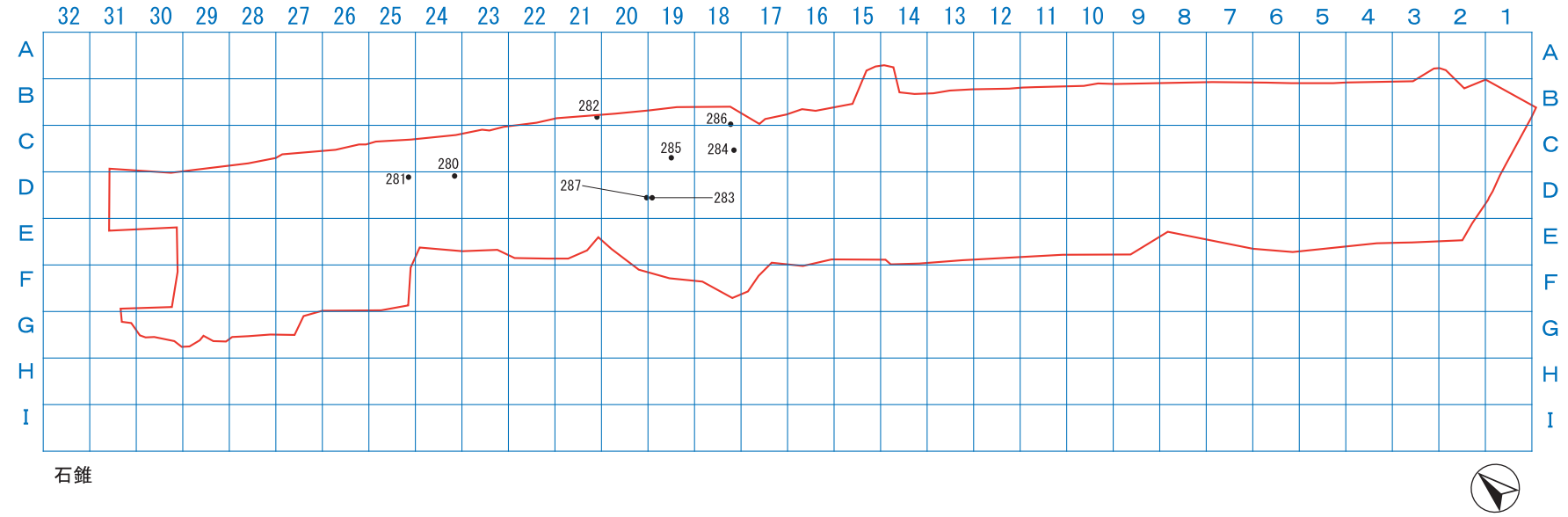


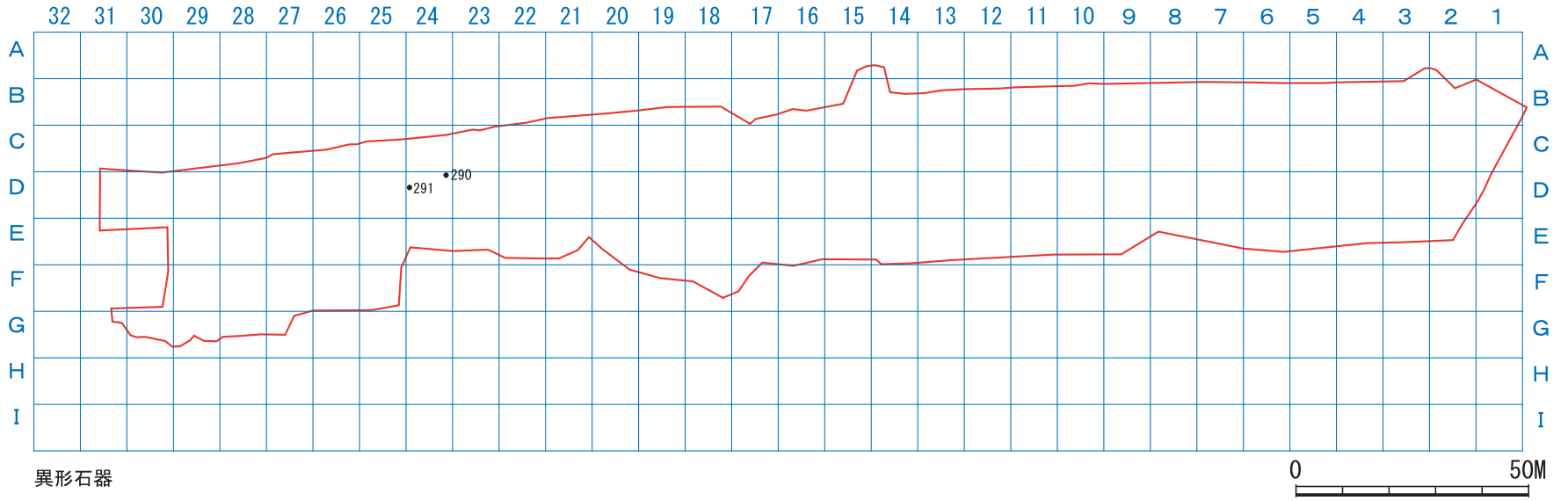
スクレイパー



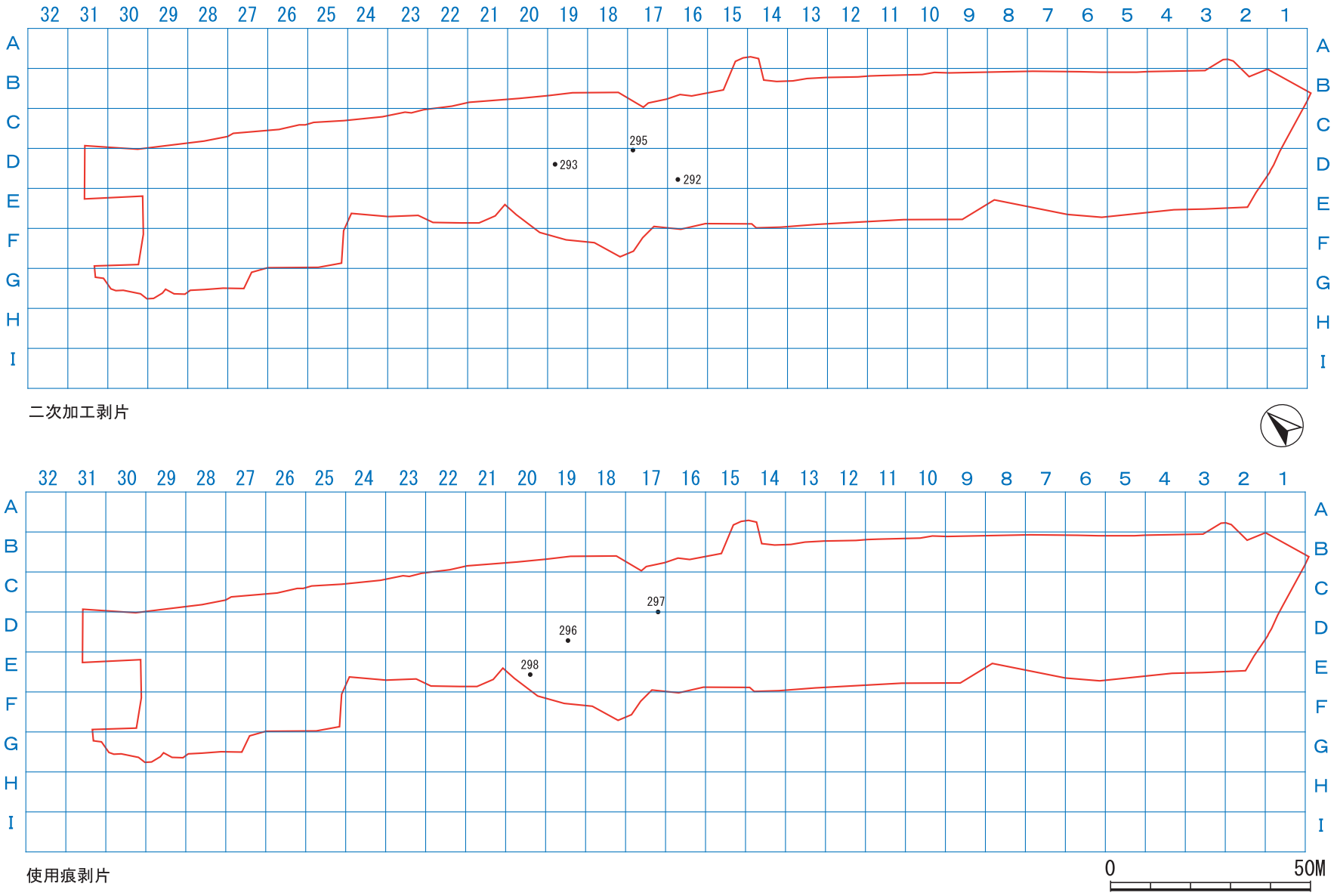
楔形石器

第33図　縄文時代の石器出土分布図　３・４

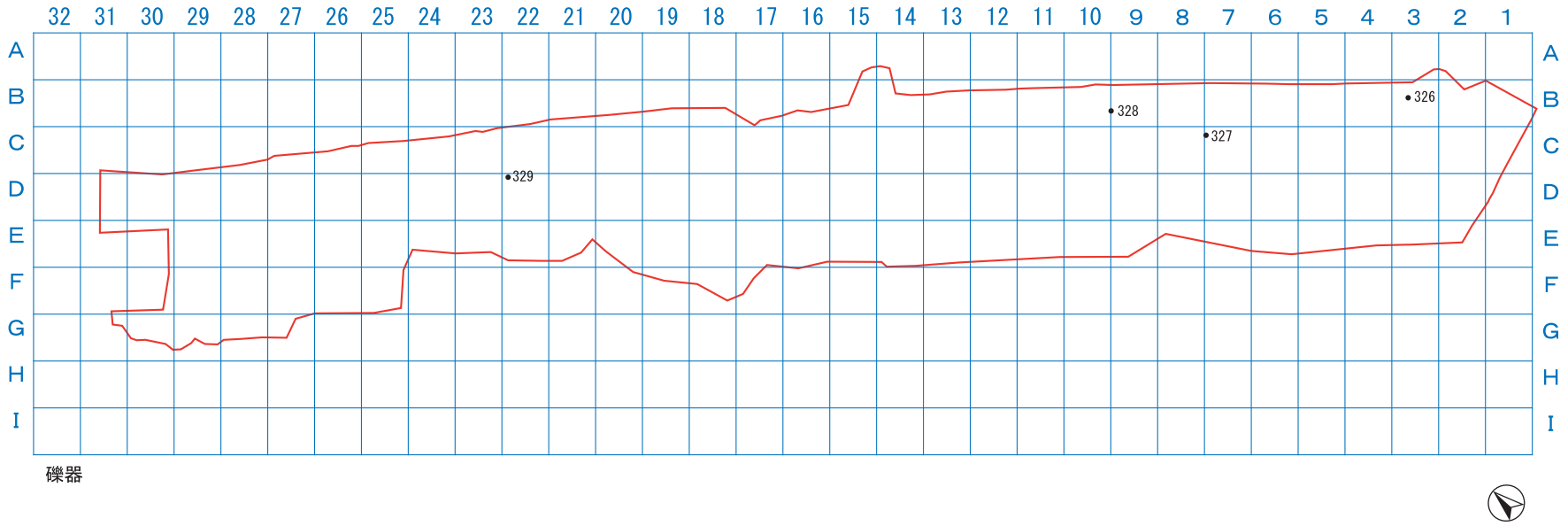


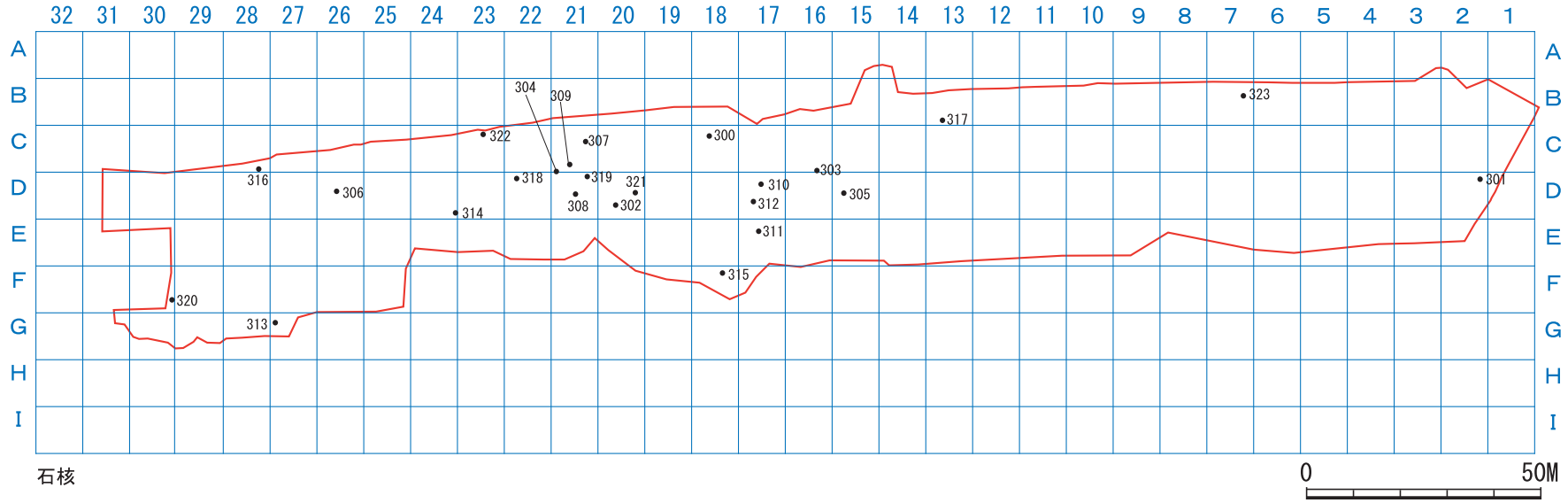


第34図　縄文時代の石器出土分布図　５・６

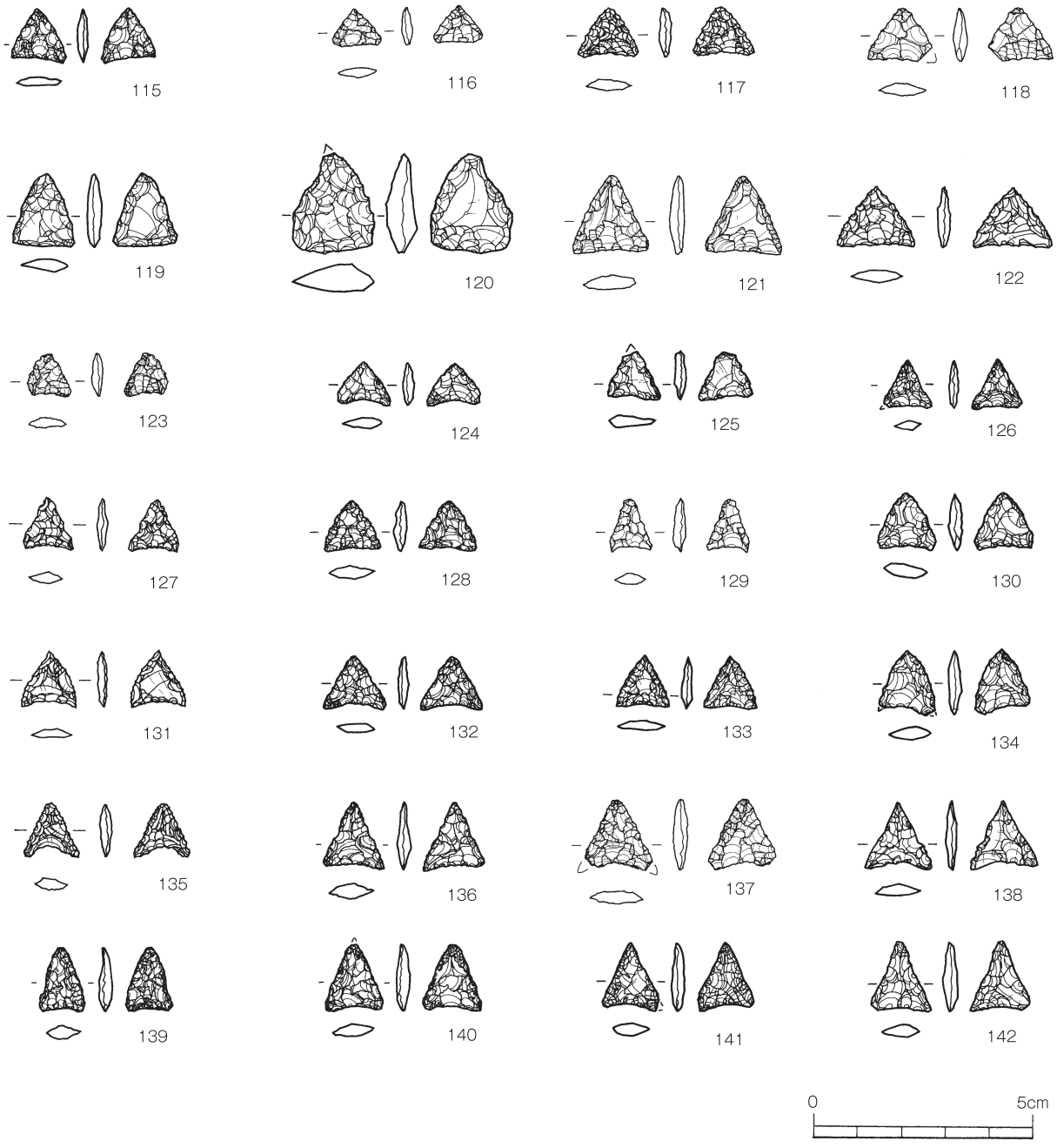


第35図　縄文時代の石器出土分布図　７・８





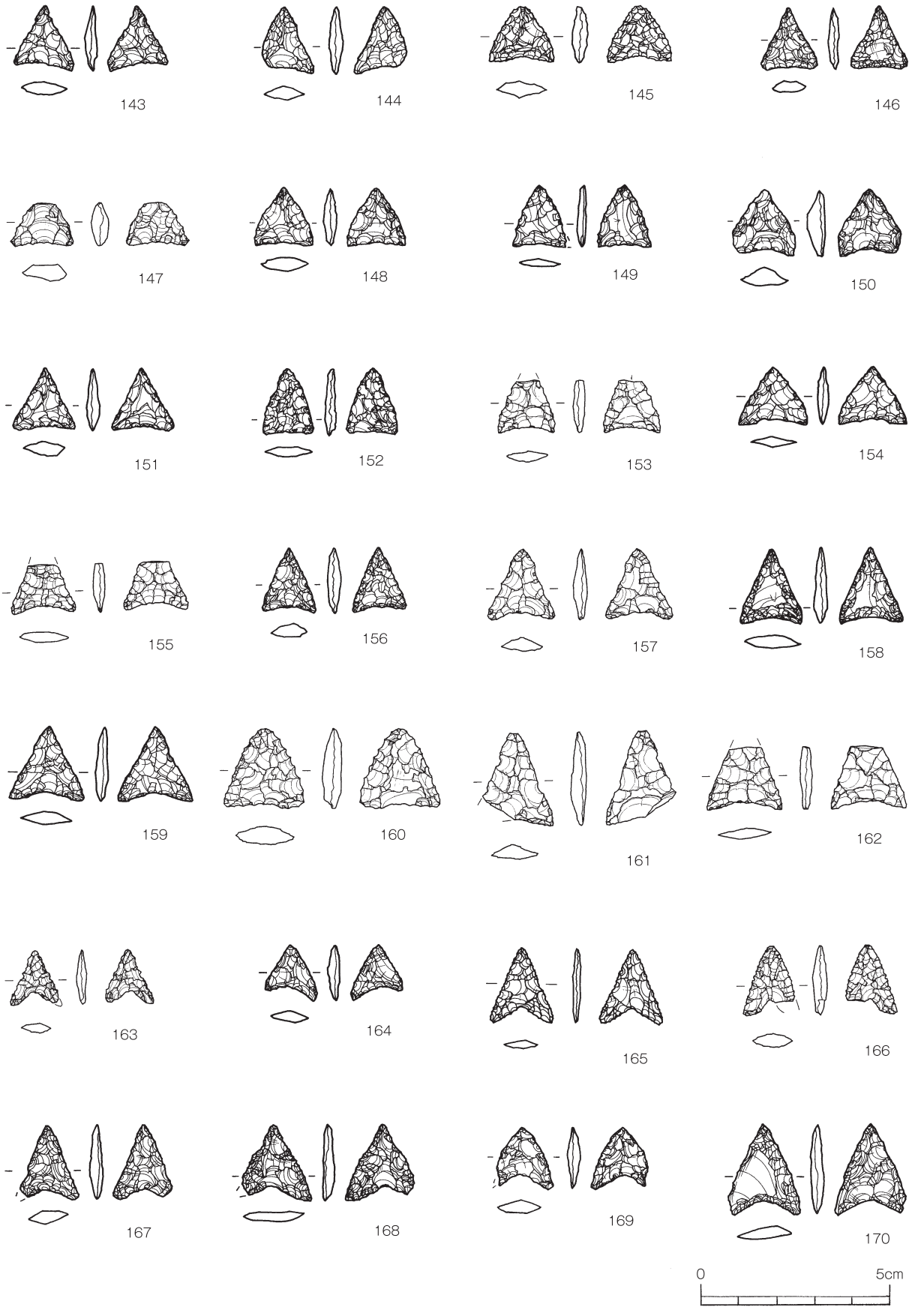
第36図　縄文時代の石器出土分布図　9・10



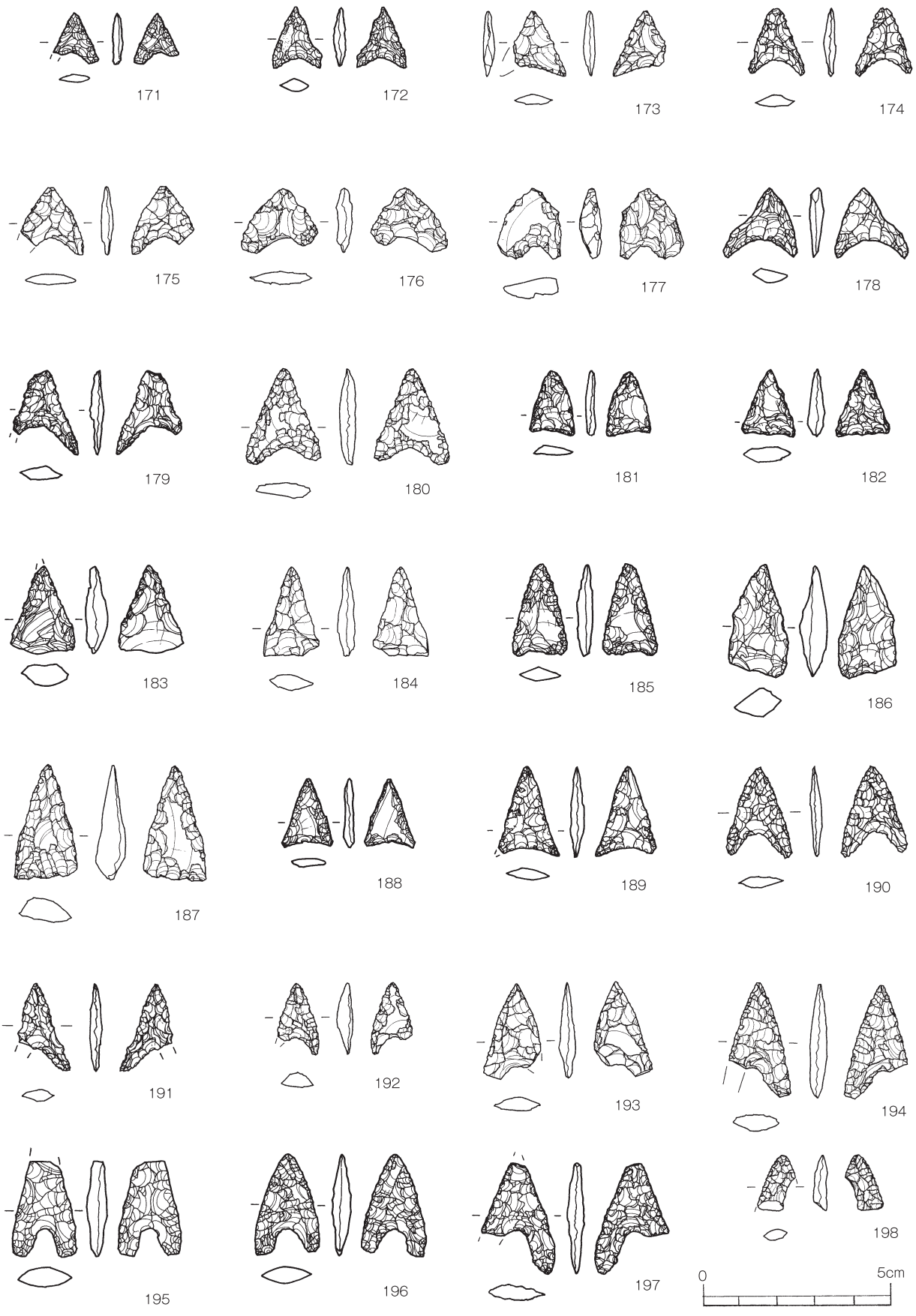
第37図　縄文時代の石器１（石鏃１）

(2) 縄文時代の石器（第37図～第53図）

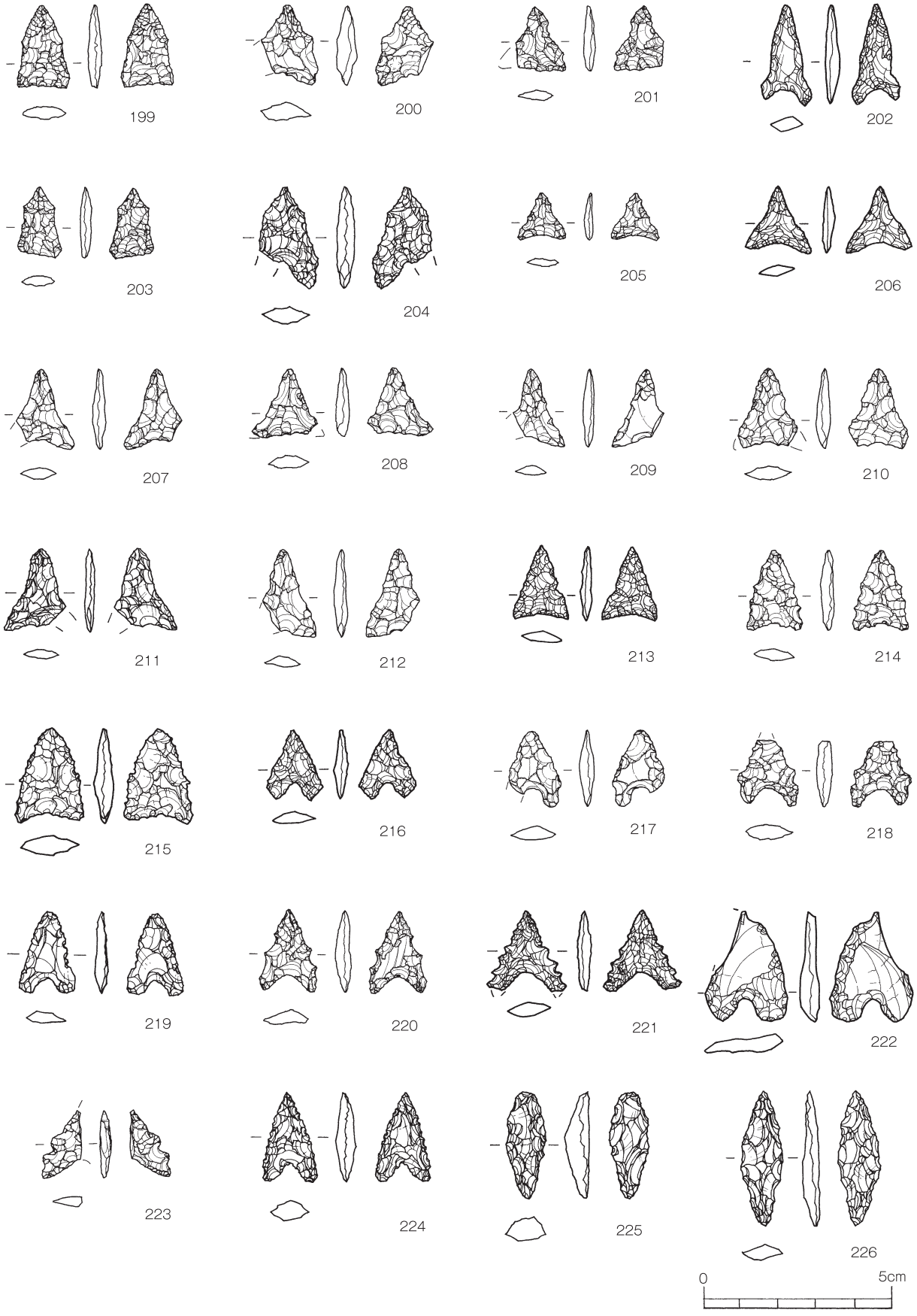
Ⅲ層の石器は，撹乱により確実な層位確定が困難で，明確な時期の特定はできなかった。従って石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器・石錐・異形石器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片等の剥片石器及び礫器・石核・垂飾品を縄文時代晩期の遺物として扱った。なお石材については全て肉眼的観察によるものである。



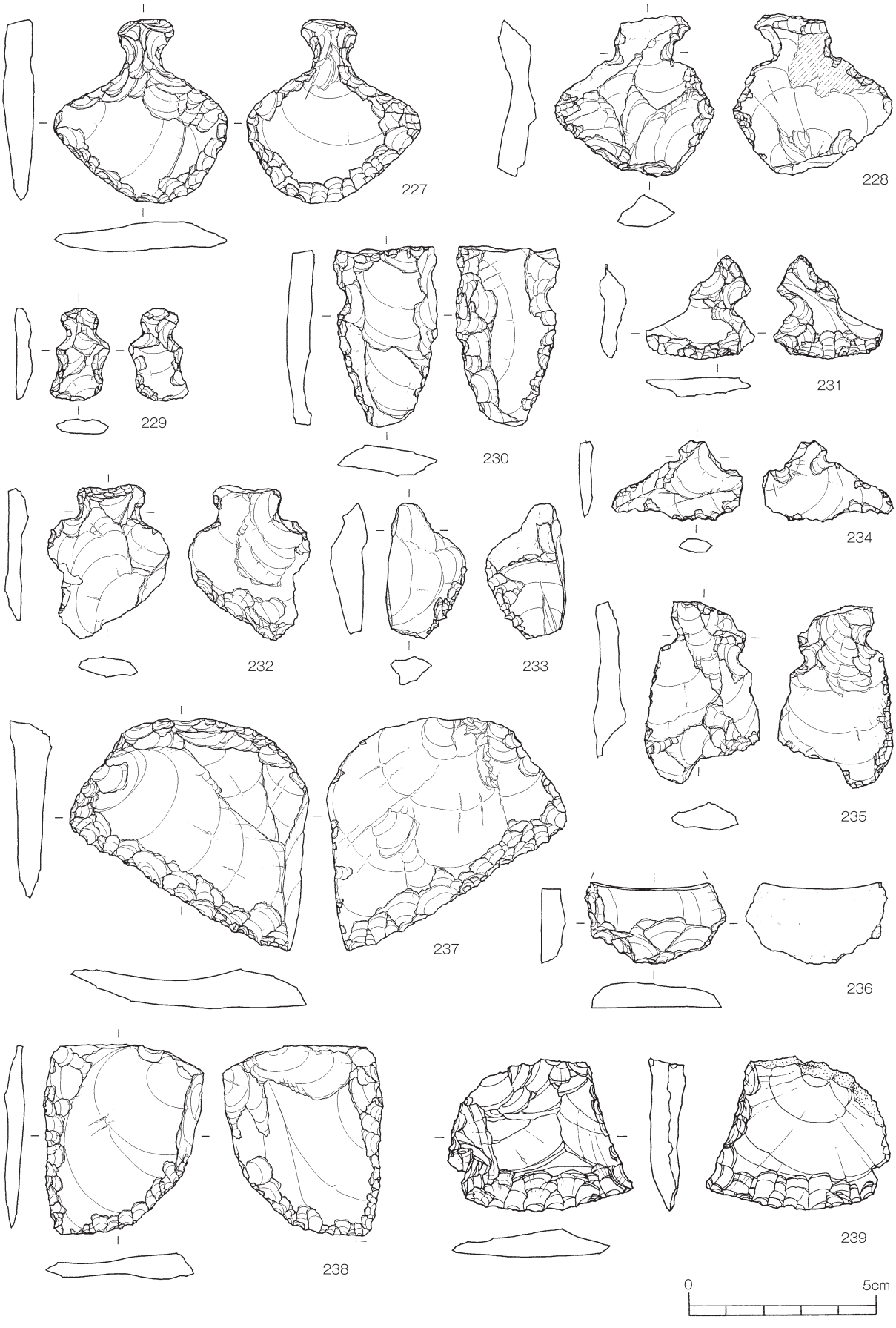
第38図　縄文時代の石器２（石鏃２）



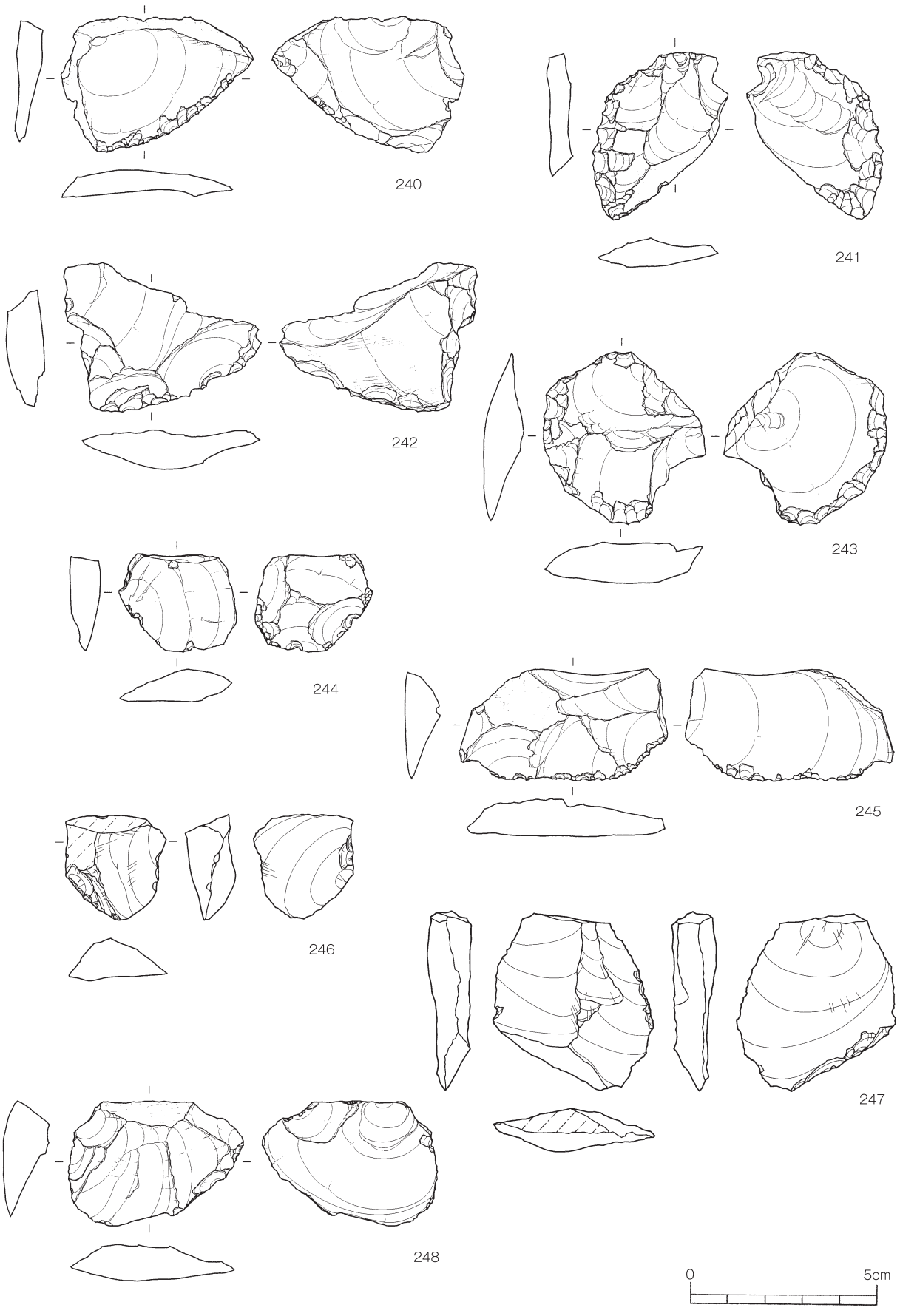
第39図　縄文時代の石器３（石鏃３）



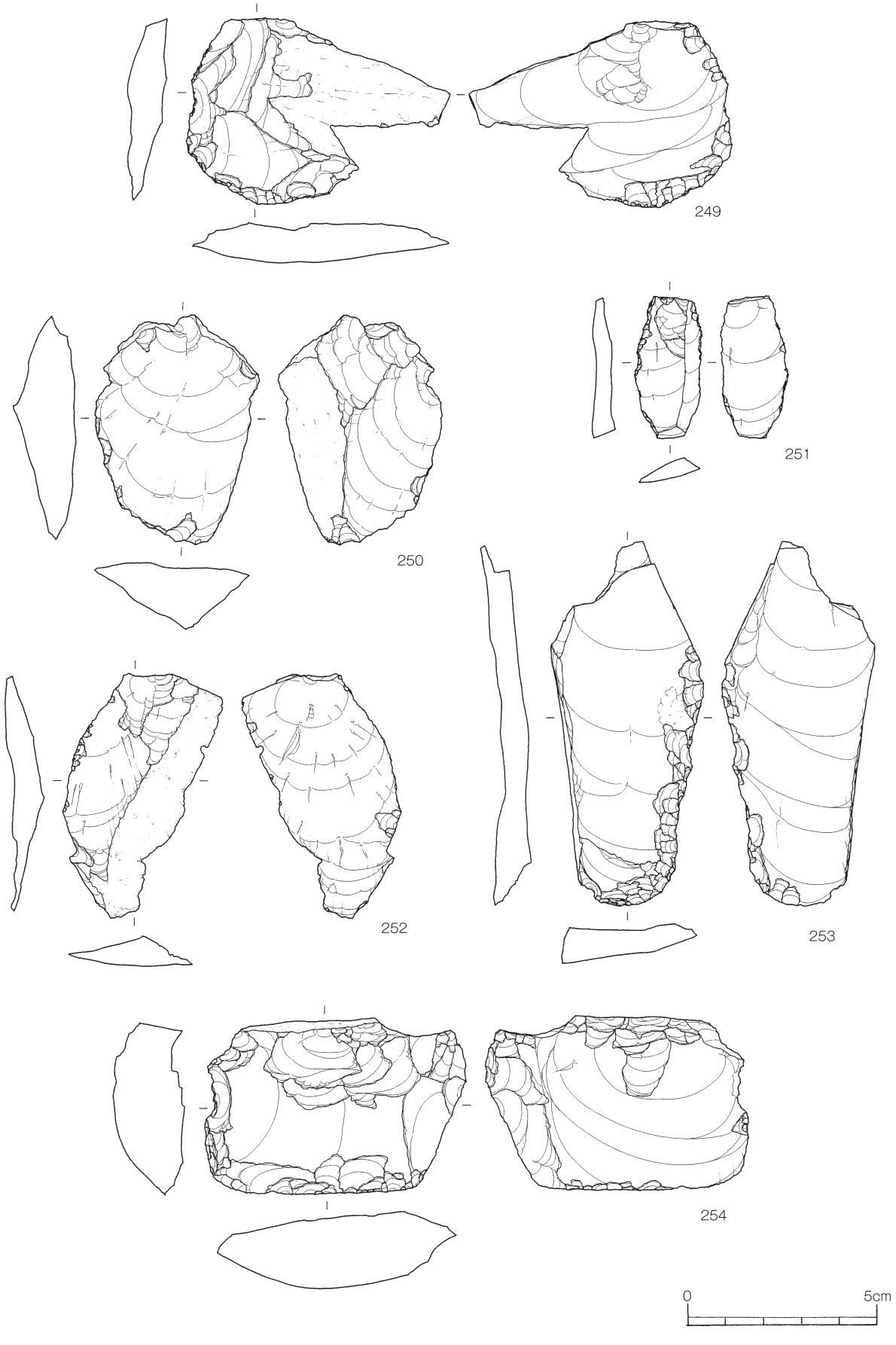
第40図　縄文時代の石器４（石鏃４）



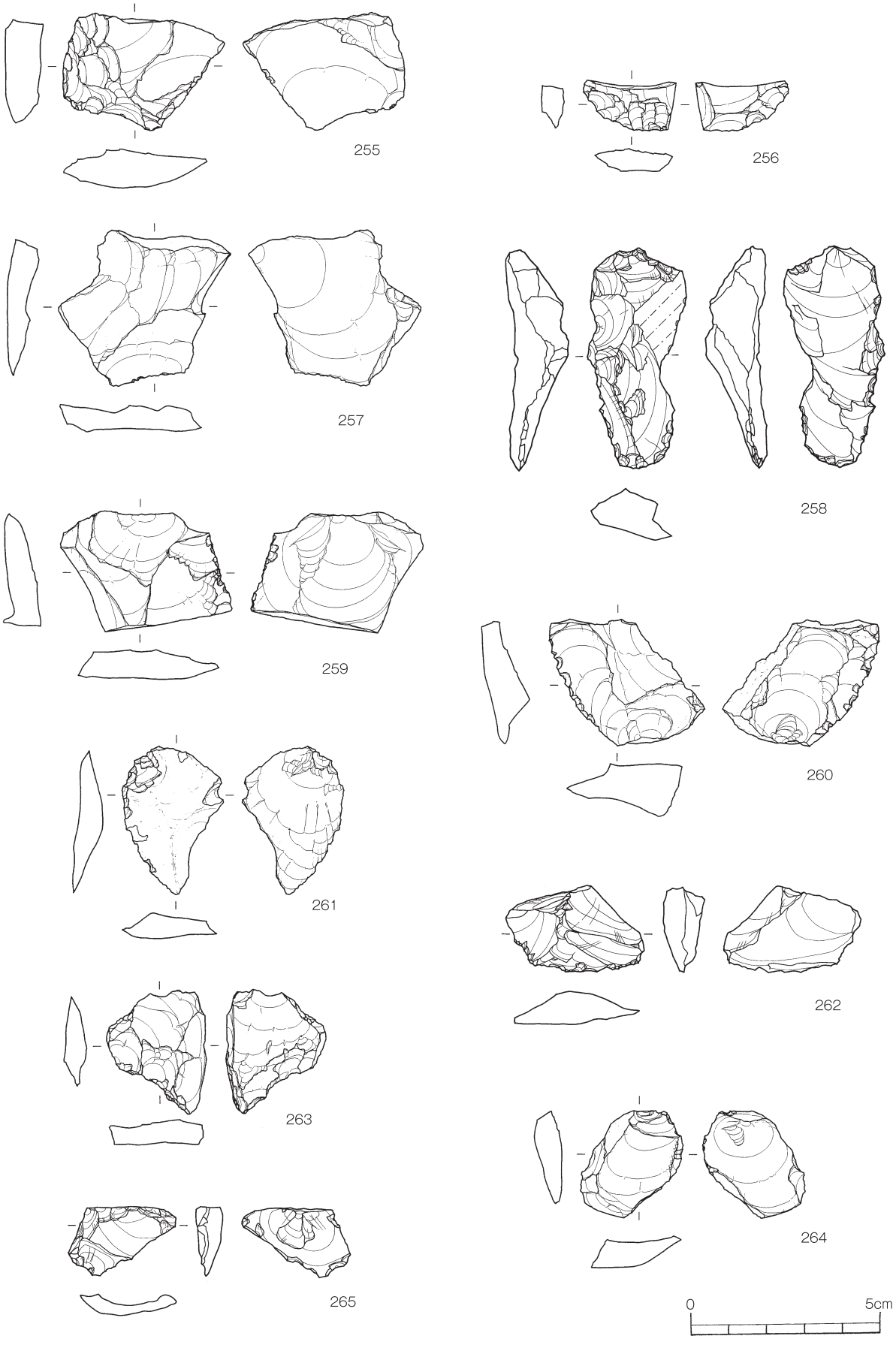
第41図　縄文時代の石器５（石匙・スクレイパー１）



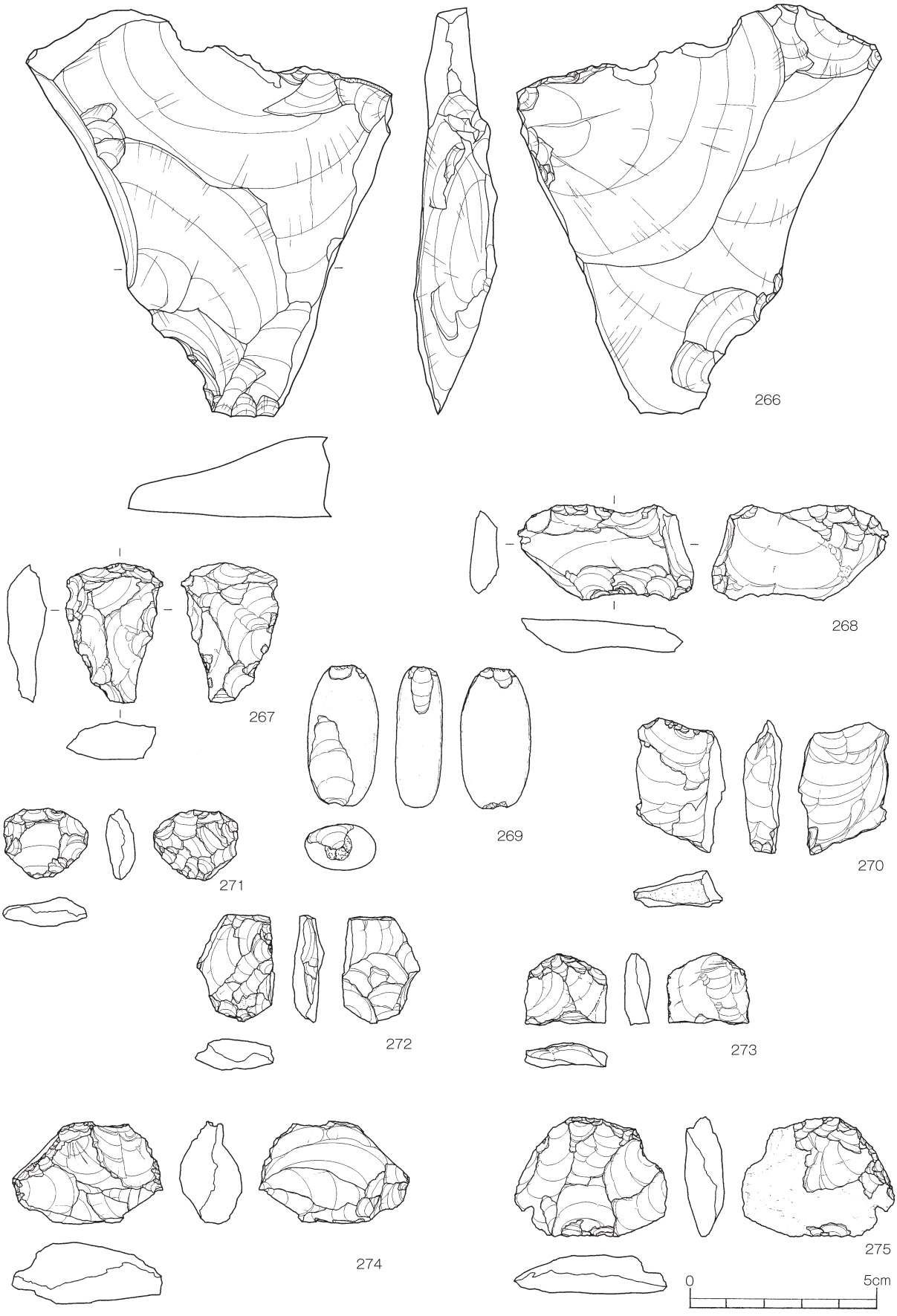
第42図　縄文時代の石器６（スクレイパー２）



第43図　縄文時代の石器７（スクレイパー３）



第44図　縄文時代の石器８（スクレイパー４）



第45図　縄文時代の石器９（スクレイパー５・楔形石器１）

石鏃（第37図～第40図）

石鏃は欠損品，未製品を含めて計297点出土している。そのうち112点を図化した。形態により大きく５つに分類した。

市ノ原遺跡４地点　　石器(打製石鏃)分類

形態	Ⅰ類　三角形	Ⅱ類　五角形	Ⅲ類　撥菱形	Ⅳ類　鋸歯状	Ⅴ類　菱形
長幅比	a　正三角形に近い（a＜1.5）		b　二等辺三角形（1.5≦b）		
基部形	a　平坦	b　浅い	c　Ｖ字形	d　Ｕ字形	

※1.5は底辺／高さの比率を表わす

Ⅰ類（115～198）

115～122は正三角形状を呈し，基部が平坦であり，Ⅰaaに分類した。115～117は腰岳産系黒曜石と思われる。118～121はサヌカイトに類似する。120は剥離や刃部形成の状況から，未製品と考えられる。123～162は正三角形様ではあるが基部に浅い抉りが見られ，Ⅰabに分類できる。出土した石鏃中最多を占めるものである。石材としては，腰岳産及び上牛鼻産黒曜石・サヌカイトが大部分を占める。145は乳白色を呈す蛋白石である。163～166は基部に比較的深いV字形の抉りをもつものであり，Ⅰacに分類した。163は黒曜石，164・165はサヌカイトに類似する。なお166は長崎県針尾系黒曜石に類似する。167～180は正三角形様でU字型の抉りがあるものとして分類した。腰岳産黒曜石の中，173は針尾系黒曜石に類似し，未製品の可能性がある。それ以外の石材は上牛鼻産黒曜石に類似する。181～187は二等辺三角形状を呈し，基部が平坦なものである。Ⅰbaに分類した。186・187は形状が似ており，厚みがあるのが特徴である。188・189は二等辺三角形の基部に浅い抉りがみられるのでⅠbbに，190・191は基部に深いＶ字状の抉りが見られるため，Ⅰbcに分類した。192～198は基部にＵ字状の深い抉りが確認できるため，Ⅰbdに分類した。Ⅰbb及びⅠbc，Ⅰbdに分類した18点の中で185・188・190・191・192・194・196の７点が針尾産黒曜石に類似する。またこれらは両縁部に緩い曲線を描くような，丁寧な押圧剥離が施されている形状のものが多いのが特徴である。187は乳白色の蛋白石製，197は鉄石英製である。190・193・175はサヌカイトに類似する。

Ⅱ類（199～204）

199～204は五角形状を呈す石鏃であり，Ⅱbbに分類した。石材は黒曜石が多くを占める。200は

鉄石英，202は砂岩であり，一部欠損しているが，基部が歪曲し特異な形状をしている。

199・201・203は腰岳産黒曜石に類似する。

Ⅲ類（205～212）

205～212は全体的には三角形のそれぞれの頂点を結ぶと，正三角形状であるが，縁辺部三辺に抉りがあり，撥き菱形状を呈するものをⅢ類に分類した。石材は全てサヌカイトに類似する。

Ⅳ類（213～224）

213～224は両縁部が丁寧な押圧剥離により鋸歯状に調整されたものでⅣ類に分類した黒曜石である。218・221は上牛鼻産黒曜石，222・223は針尾産黒曜石に類似する。214は鉄石英に類似する。213・215・216・217・219・220・224はサヌカイト製と思われる。

Ⅴ類（225・226）

225・226は菱形形状を呈し，他の石鏃の形状とは異なる。特に基部に平坦部及び抉りがない。異なった使用法があるのかもしれない。あるいは別の器種の可能性がある。

石匙（第41図　113～121）

本遺跡では11点が出土し，そのうち９点を図化した。どれも丁寧な加工を施し，つまみ部・基部及び刃部を成形している。遺物量及び形態から，特に分類は行わなかった。

227は砂岩製。押圧剥離により縁辺を丁寧に加工している。刃部は両面からの丁寧な二次加工が確認できる。228は頁岩製である。薄い剥片を利用し，刃部を形成している。基部・刃部とも比較的雑な作りである。229はサヌカイト製で，両側縁及び突部に刃部加工が見られる。また，全体的に摩滅が認められる。別な使用法の可能性のある石器である。最大長2.5cm・最大幅1.4cm・重量1.86gの大変小型の石匙である。230はサヌカイトの剥片を使用し，抉り及び刃部を，比較的簡単に加工している。抉り部の幅が2.3cmあり，他の石匙と比較すると幅広な特徴がある。231は小型の石匙で刃部を両面から二次加工を施している。玉髄に類似する石材である。234は上牛鼻産黒曜石と思われる。基部は比較的簡単な作りであるが，刃部は両側からの丁寧な剥離が見られる。231と形状が類似し，平坦な刃部を形成している。232は頁岩製である。片側縁からの丁寧な剥離により，刃部形成がされている。233は鉄石英に類する石材であり，抉り部分は自然面を利用して片側に刃部形成を施している。刃部先は破損している可能性があり，スクレイパーに分類すべきかもしれない。235は上牛鼻系黒曜石と想定される。刃部が破損した後，再度刃部形成を行い，抉りを含め丁寧な刃部加工が施されている。

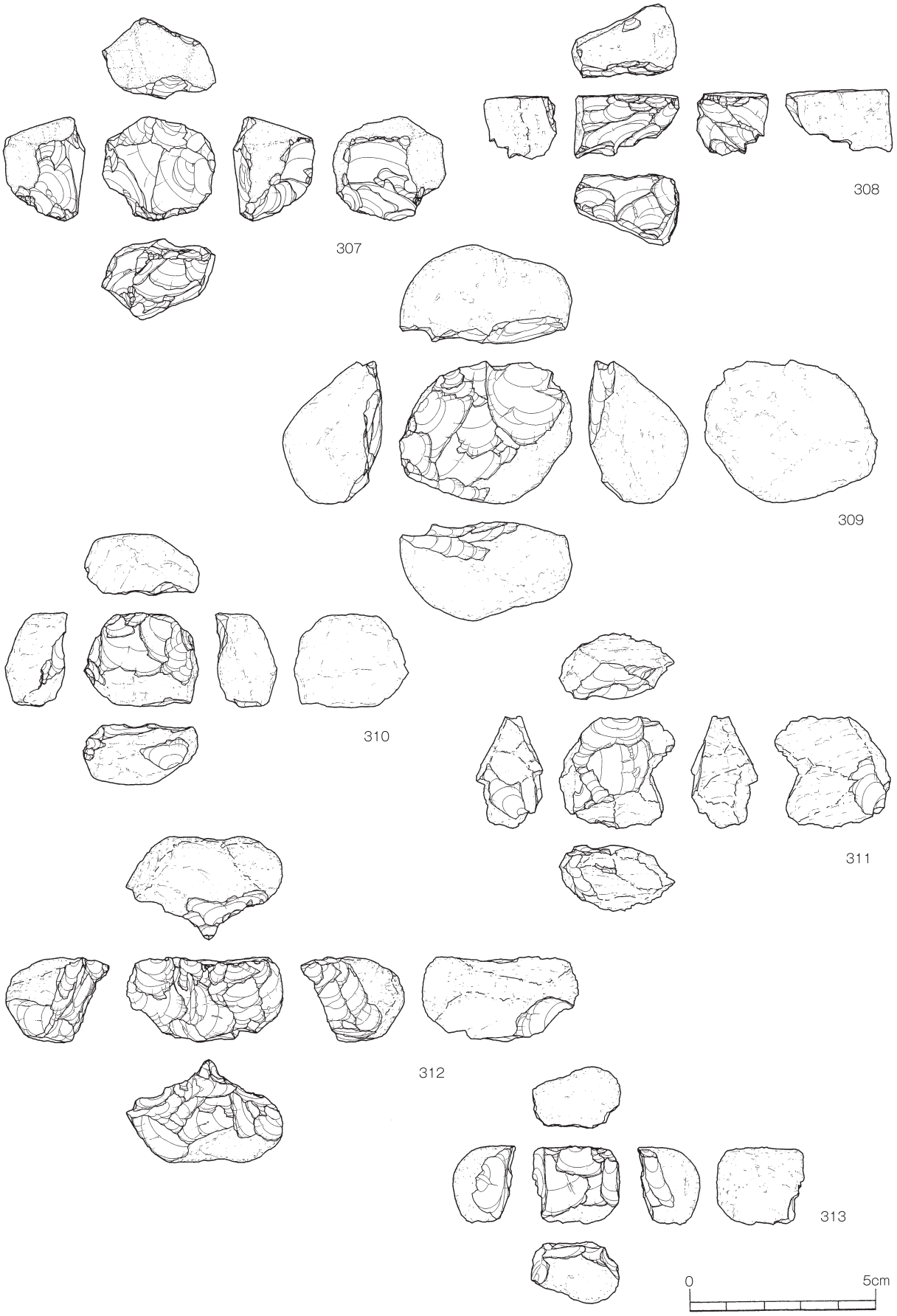
スクレイパー（第41図・42図・43図・44図・45図　123～268）

各種の石材を用いたものが計67点出土した。そのうち31点を図化し，削器（エンドスクレイパー）と掻器（サイドスクレイパー）に分類した。本遺跡の出土状況として，一点を除き，全て削器に分類した。また大型のものは，大型剥片を取りやすい大型サヌカイト剥片を素材とするものが多い。また，小型のものは比較的剥片を取りにくい鉄石英や玉髄類の小礫素材を用いたものが多いことがあげられる。

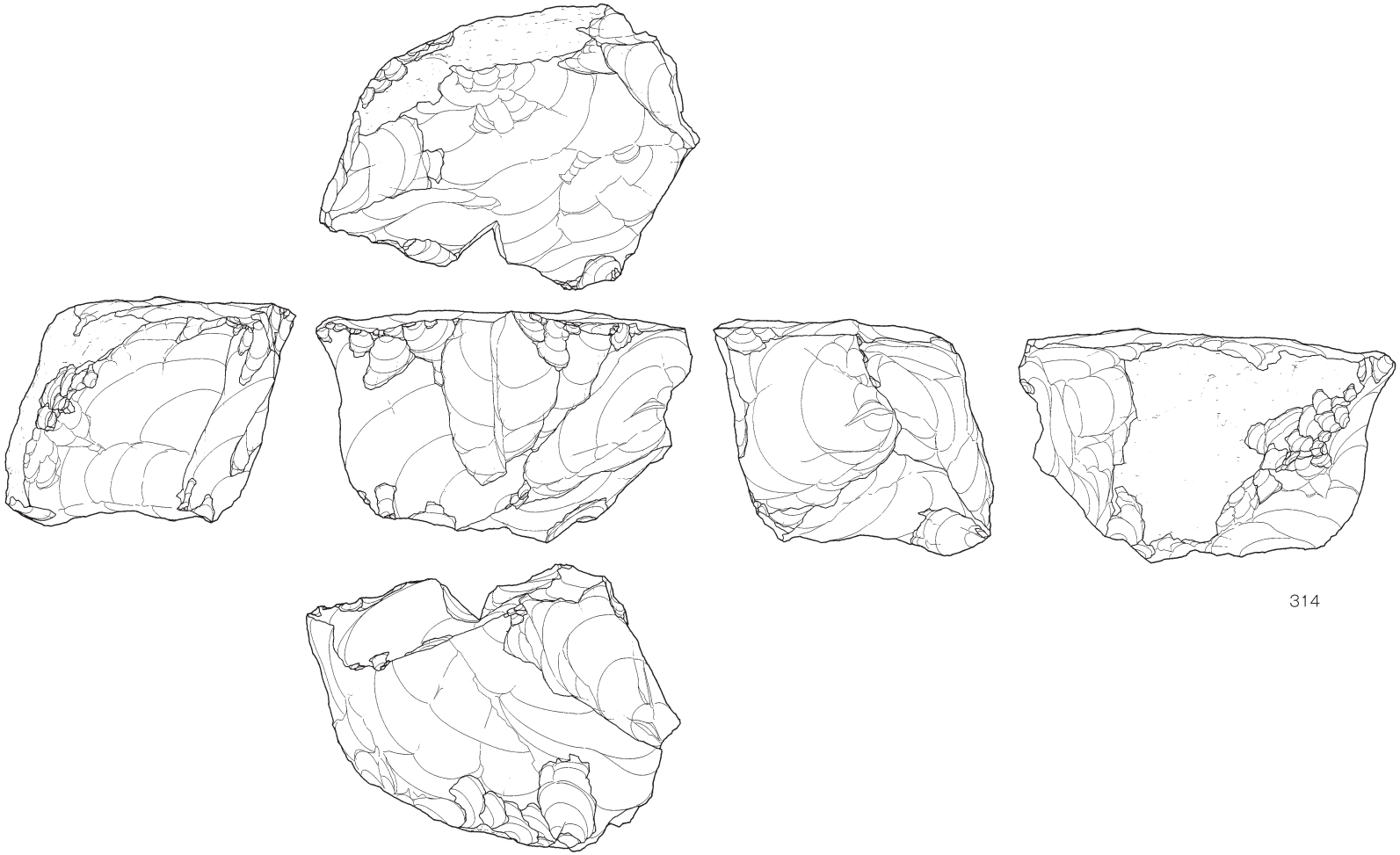
236は刃部角が45度以上ある急角度の刃部加工を施す，いわゆる掻器（サイドスクレイパー）である。腰岳産黒曜石に類似する。237～241は両縁辺に丁寧な二次加工を施している。両刃部のつながる部分が尖っているのが特徴である。全てサヌカイトに類似する。242は片側からの剥離による刃

第46図　縄文時代の石器10（楔形石器２・石錘・異形石器・二次加工剥片）

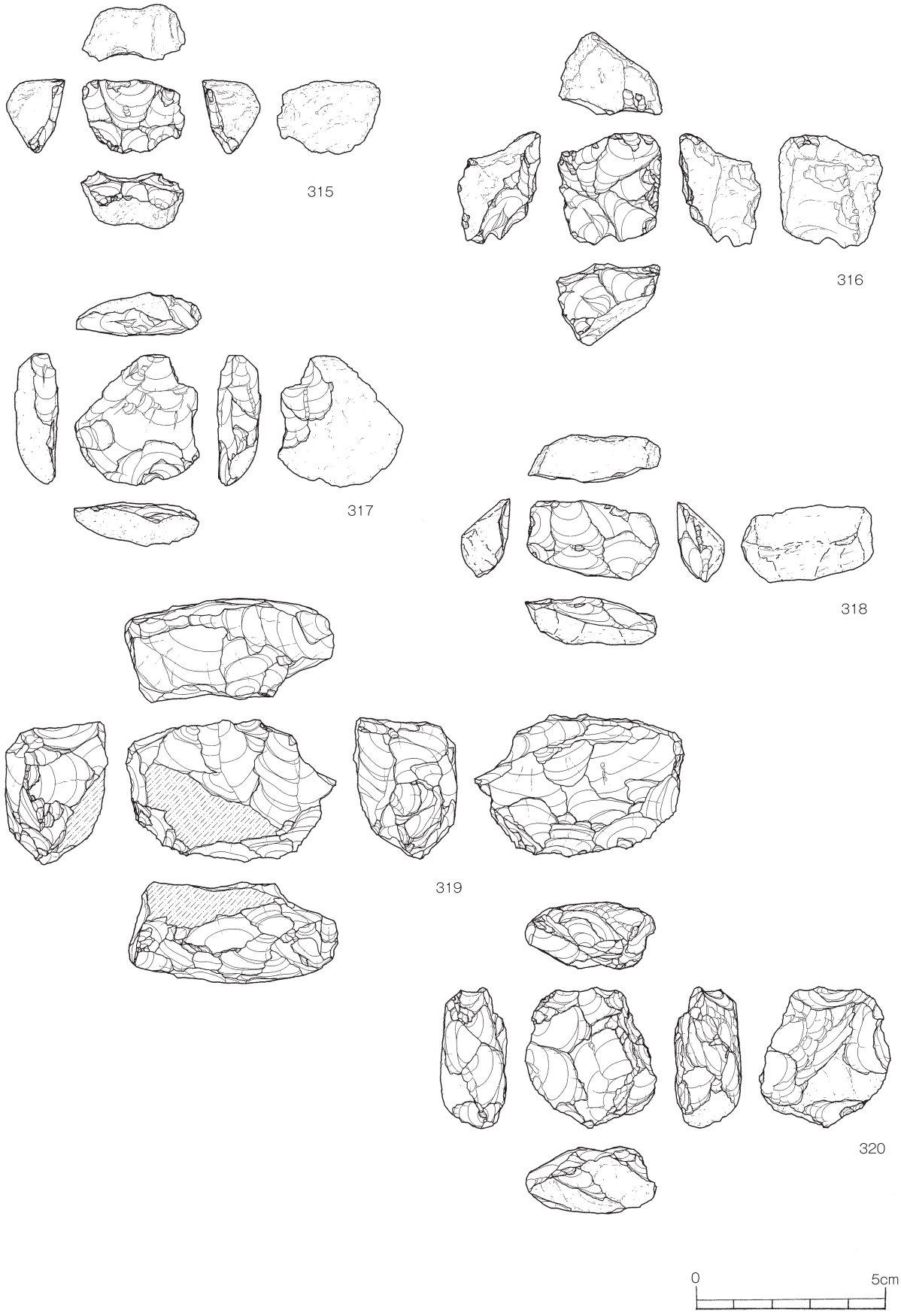
第47図　縄文時代の石器11（石核１）



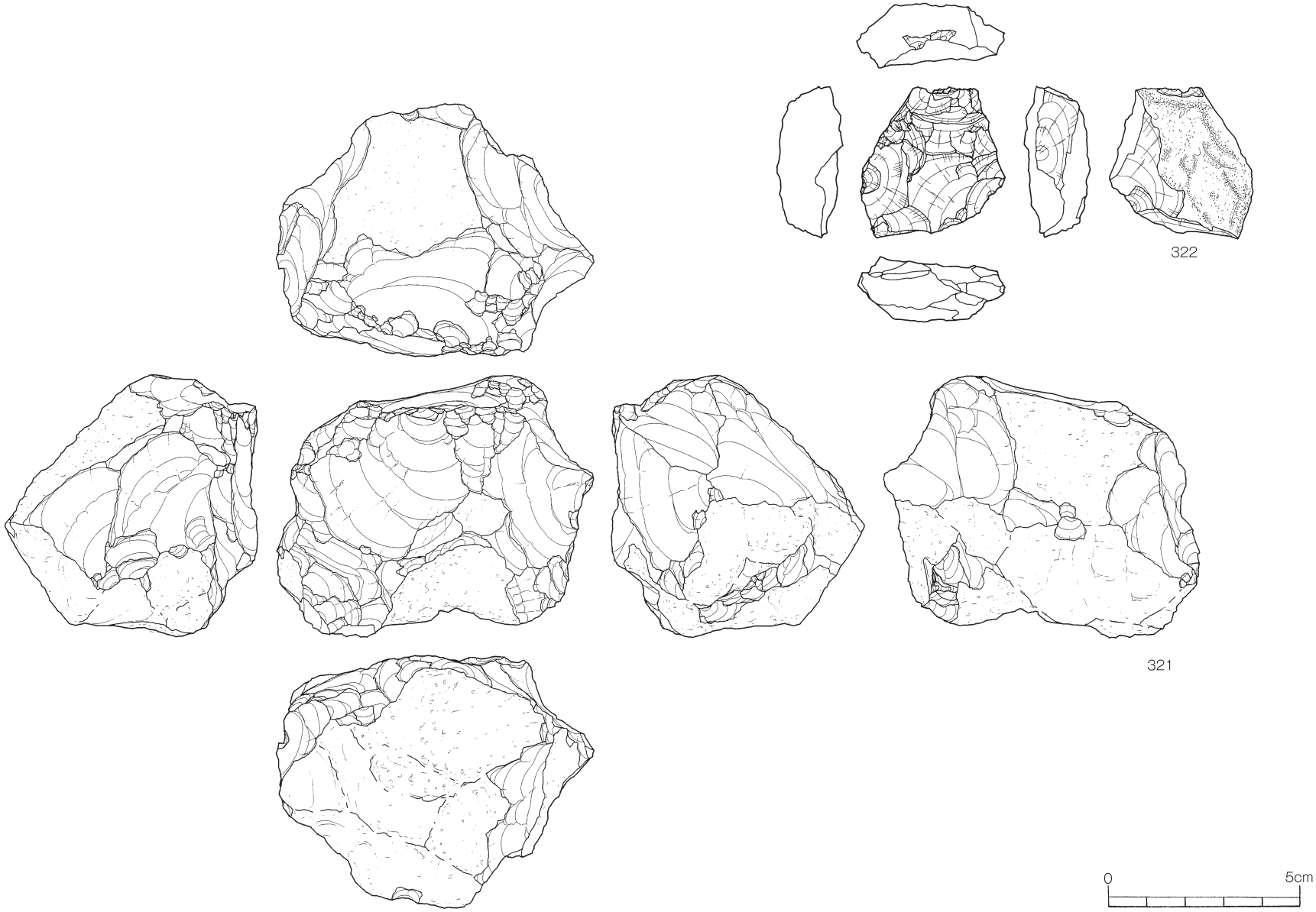
第48図　縄文時代の石器12（石核２）



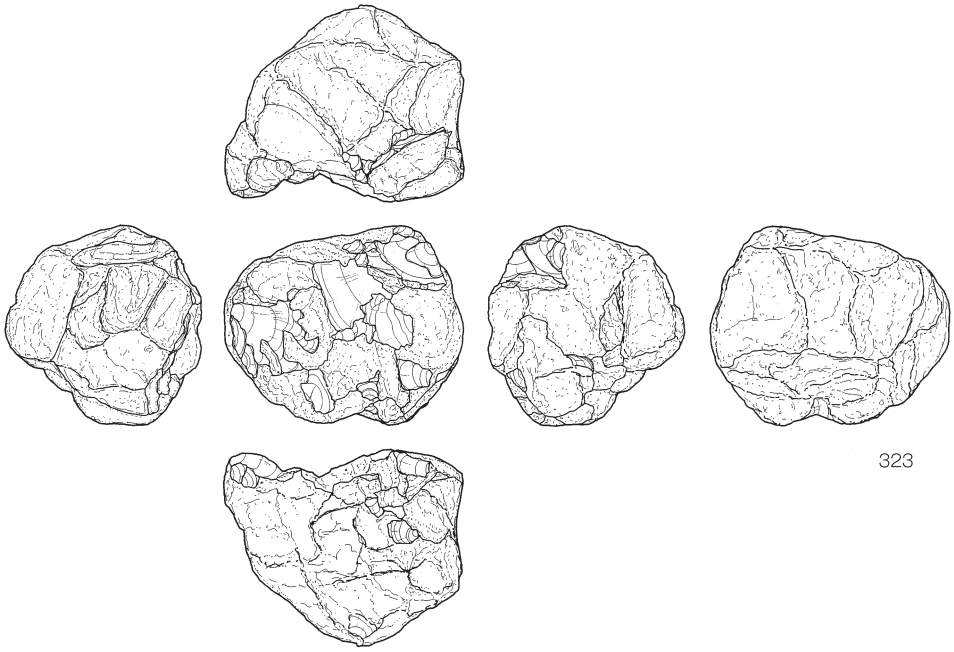
第49図　縄文時代の石器13（石核３）

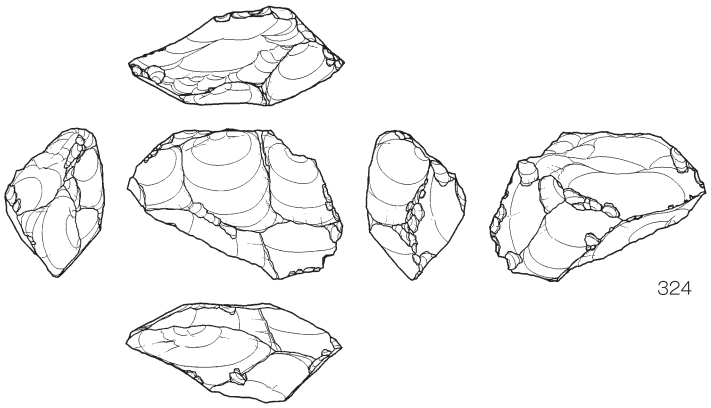


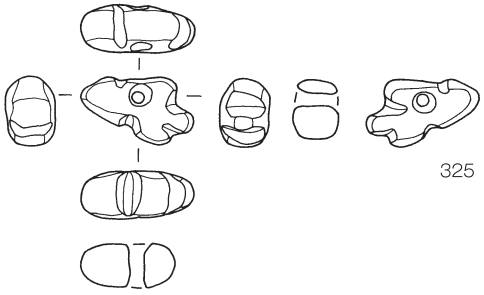
第50図　縄文時代の石器14（石核４）



第51図　縄文時代の石器15（石核５）







第52図　縄文時代の石器16（石核６・垂飾品）

部形成が見られる。形状から推察して，打製石斧の再利用品の可能性がある。236～243は特に丁寧な刃部形成を施し，形状が類似している。244は縁辺の一部に簡単な刃部形成を施したものである。頁岩製である。245は鉄石英製で片縁に片側から丁寧な剥離を施している。246は両縁一部から簡単な刃部形成を施している。247は鉄石英製で自然面を上下面としてその両側縁部に刃部を形成している。248はサヌカイト製で片側からの簡単な刃部形成が見られる。249はサヌカイトの剥片を利用し，自然面を上面にして，下部に弧状に両面から丁寧な剥離がなされている。250は厚い剥片を利用し，自然面を残し鋭利な片辺に簡単な二次加工を施している。251は珪質の頁岩製で片側からの簡単な微細剥離を施している。252は上牛鼻産黒曜石に類似し，縦長剥片の片縁部に二次加工を行っている。253も形状的には類似しているが，鋭角辺上下に両側からの丁寧な二次加工を施している。使用による刃こぼれが見られる。251～253は石刃状の剥片を作出し，加工している。254は頁岩製の台形のスクレイパーである。自然面を上面にし，下部に平坦な刃部形成をしている。255は一辺に簡単な刃部加工が見られる。256は小型のスクレイパーである。弧上に両側からの剥離が認められる。255・256ともサヌカイト製である。257・258は玉髄製で形状は異なるが，端部に微細な二次加工による刃部形成を行っている。259は頁岩製で簡単な刃部形成が見られる。260・262は形状が類似し，自然面の平坦部を上面にして，下部に細かな刃部加工を施している。両方とも鉄石英製である。261・263は上牛鼻産黒曜石で，片辺から簡単な刃部加工を施している。264は質の良い頁岩製で簡単な刃部加工をしている。251と石材的に類似する産地不明の頁岩製である。265は姫島産黒曜石に類似する小剥片を利用している。刃部を２方向から簡単に刃部形成を施している。266はサヌカイト製の大型剥片を使用したスクレイパーである。端部に両縁からの刃部形成を施している。267・268は摩滅が見られることや，刃部の状態から相当使用されたことが考えられる。

楔形石器（第45図・第46図　269～279）

楔形石器は小型の剥片石器の一つでピエス・エスキーユと称される。ほぼ四角形の剥片で，対縁，ときに四縁に相対する打撃角の低い剥離面をもつ。ハンマーなどで対象物に間接的に力を加える際に楔のように用いられた石器である。形状から多様な石器にも思われるが，これは使用過程を示すものであり，使用に伴う頻度と破損度の状況が示されているものと考えられる。上下両端に位置する加撃部と機能部は直線状のものが多い。本遺跡では総計16点出土し，そのうち11点を図化した。269は砂岩の小型楕円礫を，加工せず利用した楔形石器である。使用痕及び加撃による剥離が確認できる。270～272は鉄石英製と思われる。加撃部・機能部とも両極剥離痕はあまり見られず，使用頻度は低いものと思われる。断面形はレンズ状を呈する。273は機能部に多くの剥離痕が確認できる。加撃部は平坦で，機能しやすい形状をしている。274は比較的大型の楔形石器である。両極剥離痕が多く残存していることが，使用頻度を示している。275は鉄石英製の剥片を利用している。加撃部・機能部とも小さいのが特徴である。276は水晶製の楔形石器である。水晶の六角柱状の結晶をそのまま利用し，両極に加工を施し，楔形石器として使用した両極剥離痕が残る。277は敲打による打撃角の低い剥離面が見られる。上牛鼻産安山岩に類似する。278は上牛鼻産黒曜石の自然礫が残る剥片を加工したものと思われる。機能部に使用による微細剥離が確認できる。279は断面がレンズ状で丁寧な加工を施した楔形石器である。両極剥離痕は，わずかながら観察されるため，使用頻度は低かったものと推測される。

石錐（第46図）

素材の一部または全体に二次加工を施して棒状に尖った部分，あるいは全体を作出したものを識別の基準とした。形式分類は全体形より２つに分類した。

Ⅰ類（280～282）

手持ち部分が比較的大きく，錐部，手持ち部ともに加工が施され形が整えられたもの

Ⅱ類（283～287）

剥片を利用して，先端部が作出され，基部にはほとんど加工が施されないもの

280～282はⅠ類に分類した。280は上牛鼻産黒曜石に類似し，手持ち部を大きく加工している。錐部は特に丁寧な押圧剥離を施し，調整を行い鋭い先端部を作出している。281はサヌカイト製の小型の石錐である。手持ち部にも丁寧な加工が見られる。282もサヌカイト製の石錐である。比較的大きな手持ち部を作出している。錐部も他と比較して太く，先端径は５㎜である。283～287はⅡ類に分類した。283～286は横長剥片を利用し，突部を錐として丁寧な二次加工を施している。基部に加工は見られないが，礫面が手持ち部として機能していると思われる。石材はサヌカイトに類似する。287はサヌカイトの細長い剥片を利用し，一端に二次加工を施し錐部としている。錐部以外に加工は認められない。

異形石器（第46図　288～291）

288はサヌカイト製の異形石器である。基部と刃部先端が破損しているため，石錐の可能性も残される。289は腰岳系黒曜石に類似し，表裏両極から丁寧な押圧剥離を施した石器である。両石器とも幅10㎜厚さ５㎜で形状が酷似している。非常に扁平な形状から，異形石器と思われる。290は三日月形の石器である。縁辺に素材を一周するように丁寧な押圧剥離を施している。腰岳系黒曜石と思われる。291は小さく剥離された剥片の両縁辺片面から細かな押圧剥離が施してある。先端部は破損している。

二次加工のある剥片（第46図　292～295）

292～295は，剥片の縁辺の一部に二次加工が施されているものである。破損品が多く，スクレイパーの破損品が含まれている可能性が残るが，刃部としてのエッジが明確でないものである。使用されている石材は，鉄石英，頁岩，腰岳系黒曜石，頁岩に類似するものである。

使用痕のある剥片（第46図　296・297）

296・297はいずれも剥片の鋭利な縁辺に使用痕と考えられる微細剥離が認められるものであるため，使用痕のある剥片に分類した。石材は頁岩，チャート，腰岳系黒曜石に類似する。

打面再生剥片（第46図　299）

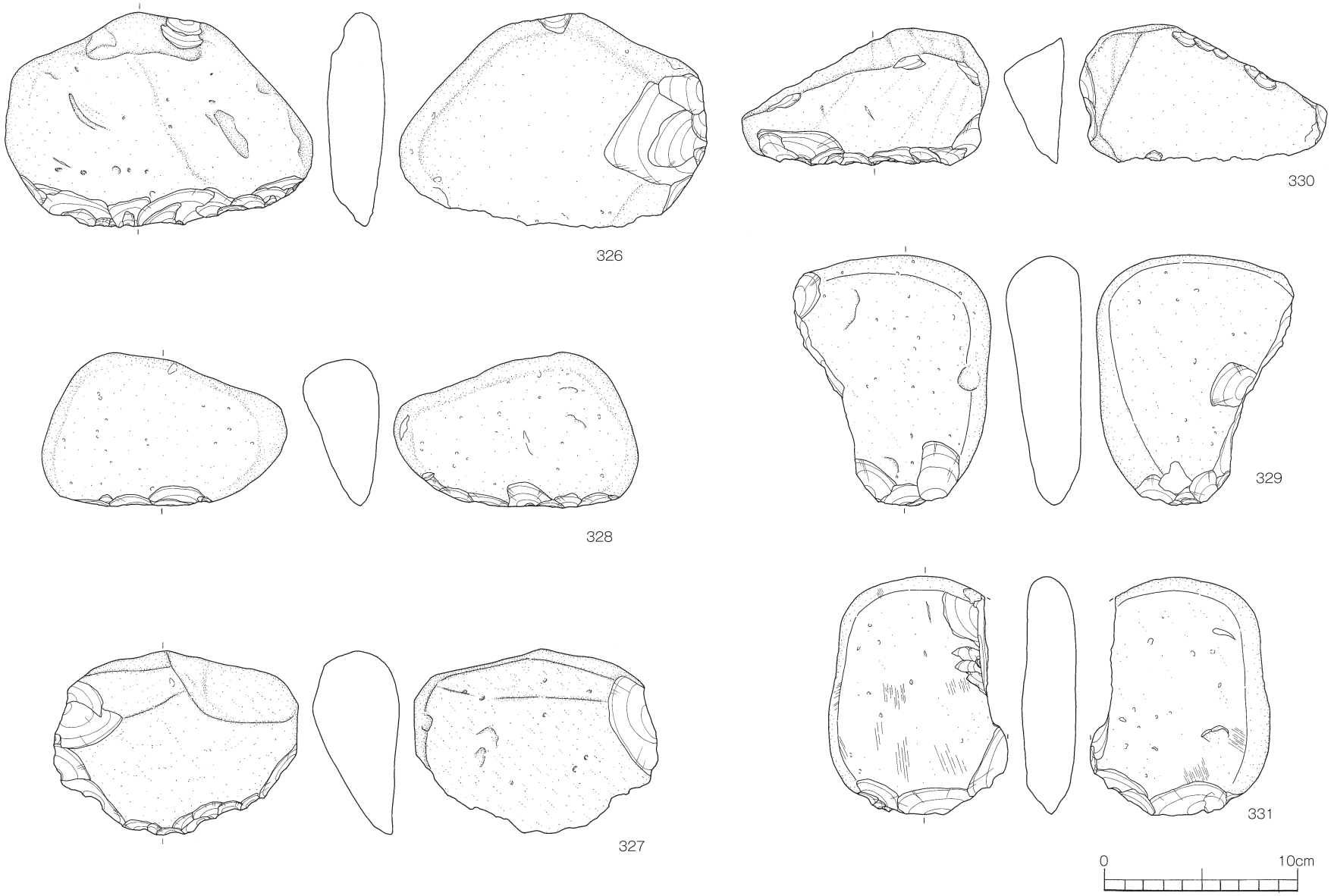
299は鉄石英の剥片である。側面には前剥離面が確認でき，低角度の打面を形成するために自然面を平坦に剥離している。

石核（第47図・第48図・第49図・第50図・第51図）

石核は68点が出土し，代表的なものを25点図化した。剥片剥離の状況から，以下のように分類した。

Ⅰ類

円礫（小礫）の自然面を打面にして，打点転移を行いながら相方向から剥片を取るものをⅠ類と



第53図　縄文時代の石器17（礫器）

した。その中で，自然面を残しつつ剥離を行っているものをⅠa類。自然面を残さず全方向からの剥離を行うもの。サイコロ状を呈するものをⅠb類とした。

Ⅱ類

平坦な打面を作出し，剥離を行っているものをⅡ類とした。

Ⅲ類

素材の周縁部から求心的な剥離を行っているものをⅢ類とした。また，自然面を残して求心的な剥離を行うものをⅢa類，自然面を残さず，両側面から求心的な剥離を行っているものをⅢb類とした。

300～304をⅠa類とした。石材は上牛鼻系及び腰岳系黒曜石に類似する小礫である。305・306はⅡb類に分類した。305は三船産，306は上牛鼻産黒曜石に類似する。

307～312をⅡ類とした。上牛鼻産黒曜石に類似する。313～318はⅢa類に分類した。313・315・317は上牛鼻産黒曜石と思われ，小円礫を用い剥片を作出している。316・318は腰岳系黒曜石に類似し，比較的大きな角礫を用いたものと思われる。314は鉄石英製で，大きな石核である。あるいは，原礫に近いものかもしれない。319～322をⅢb類に分類した。319・320・321は鉄石英の石核である。322は自然面の観察からサヌカイトに類似する。

原石・剥片（第51図　323～324）

323は上牛鼻産黒曜石に類似する原石である。出土した上牛鼻産と思われる石核から推測すると，このような小礫が原石になっていたと思われる。また，採集した礫の搬入歴を知る手ががりとなる可能性がある。324は鉄石英の剥片である。全体にローリングを受けている。

垂飾品（第52図　325）

325は明緑色を呈し，最大長1.4cm，最大幅2.25cm，厚さ0.9cm，重量4.43gの小型のものである。穿孔があり，何かを模った形状である。石材産地や加工方法から考慮して，遺跡内での製作とは考えにくく，外部からの持ち込みの可能性が高い。外観的状況から，翡翠輝石の勾玉と推測される。本遺跡では一点のみの出土である。

礫器（第53図　326～331）

326～331の６点が出土し，全てを図化した。長辺あるいは短辺に粗い二次加工を施している。326は安山岩と思われ，比較的薄い素材を使用している。礫の長辺に刃部形成を施し，両縁辺に敲打痕が確認される。327・328も同様の礫を素材とし，礫のより薄くなった長辺部分に粗い剥離を施し，直線状の刃部形成を行っている。敲打痕は確認できない。330は砂岩の三角礫を素材としている。三辺のうち二辺に刃部形成を行っている。突部には敲打による作業剥離痕が見られる。329・331は安山岩の楕円礫を用い，一辺を加工して曲線状の刃部を作出しているが，作業時の加圧によるものと思われる縦割れが刃部と垂直に確認できる。

第10表　縄文時代の石器観察表１

図版	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号
第37図	115	石鏃	F−28	Ⅲa	Ob1	1.1	1.2	0.2	0.24	18253
	116	石鏃	E−22	Ⅱ	Ob1	0.85	1.1	0.21	0.14	7731
	117	石鏃	D−20	Ⅱ	Ob1	2.65	1.55	0.45	0.29	6026
	118	石鏃	D−20	Ⅲb	An3	1.3	1.5	0.4	0.39	30807
	119	石鏃	D−20	Ⅲa	An3	1.7	1.4	0.3	0.65	28662
	120	石鏃	C−20	Ⅴ	An3	2.5	1.8	0.6	2.42	なし
	121	石鏃	D−22	Ⅲa	An3	1.8	1.8	0.4	0.8	16916
	122	石鏃	D−23	Ⅱ	An3	1.35	1.8	0.3	0.5	4566
	123	石鏃	C−17	Ⅲa	Ob1	1.0	1.0	0.3	0.18	25600
	124	石鏃	C−18	Ⅲa	An3	1.0	1.2	0.3	0.22	27375
	125	石鏃	D−20	Ⅲa	An3	1.1	1.2	0.2	0.28	30838
	126	石鏃	E−18	Ⅲa	Ob1	1.1	1.1	0.2	0.18	18717
	127	石鏃	C−15	Ⅲc	Ob1	1.2	1.2	0.25	0.25	16382
	128	石鏃	D−19	Ⅲa	Ob1	1.2	1.3	0.3	0.3	29500
	129	石鏃	C−23	Ⅲa	Ob1	1.2	0.95	0.3	0.19	2993
	130	石鏃	D−15	Ⅲ	An3	1.3	1.3	0.3	0.35	8820
	131	石鏃	D−25	Ⅱ	An3	1.25	1.2	0.25	0.27	2373
	132	石鏃	D−25	Ⅲb	Ob1	1.2	1.4	0.2	0.28	17435
	133	石鏃	D−20	Ⅲa	Ob1	1.2	1.2	0.2	0.23	28690
	134	石鏃	E−24	Ⅲa	An3	1.5	1.2	0.3	0.42	20866
	135	石鏃	—	—	An3	1.2	1.25	0.3	0.22	なし
	136	石鏃	C−22	Ⅱ	An3	1.6	1.4	0.3	0.38	3010
	137	石鏃	D−15	Ⅲc	Ob1	1.6	1.6	0.3	0.61	16353
	138	石鏃	B−10	Ⅲ	An3	1.6	1.5	0.3	0.38	711
	139	石鏃	C−20	Ⅱ	Ob1	1.4	1.0	0.3	0.36	1830
	140	石鏃	C−23	Ⅱ	Ob1	1.5	1.3	0.3	0.43	4970
	141	石鏃	D−20	Ⅲ	Ob1	1.5	1.3	0.3	0.37	8016
	142	石鏃	C−18	Ⅲa	An3	1.6	1.3	0.3	0.43	24026
第38図	143	石鏃	C−24	Ⅱ	An3	1.7	1.6	0.3	0.4	3713
	144	石鏃	C−20	Ⅴ	An3	1.8	1.2	0.3	0.56	なし
	145	石鏃	D−23	Ⅱ	Op	1.45	1.65	0.4	0.7	7610
	146	石鏃	D−20	Ⅲa	Ob1	1.7	1.5	0.3	0.42	26774
	147	石鏃	C−17	Ⅳ	Ob1	1.2	1.7	0.5	0.62	31705
	148	石鏃	C−23	Ⅲa	An3	1.5	1.5	0.3	0.62	4307
	149	石鏃	D−25	Ⅲa	An3	1.6	1.4	0.2	0.43	12640
	150	石鏃	C−16	Ⅲ	An3	1.7	1.7	0.5	1.03	1739
	151	石鏃	C−24	Ⅱ	An3	1.6	1.7	0.4	0.56	7584
	152	石鏃	C−20	Ⅱ	Ob1	1.8	1.3	0.3	0.5	1941−①
	153	石鏃	F−27	Ⅲa	An3	1.4	1.5	0.3	0.59	18360
	154	石鏃	D−22	Ⅲa	An3	1.5	1.8	0.3	0.52	5383
	155	石鏃	C−20	Ⅲ	Ob1	1.3	1.8	0.3	0.5	9206
	156	石鏃	C−27	Ⅱ	Ob1	1.7	1.4	0.3	0.54	7384
	157	石鏃	B−13	土坑1	An3	1.9	1.8	0.4	0.61	なし
	158	石鏃	C−22	Ⅱ	Ob1	2.0	1.7	0.4	0.77	なし
	159	石鏃	D−25	Ⅲa	An3	2.0	1.9	0.3	0.74	12675
	160	石鏃	B−11		An3	2.2	2.1	0.5	1.91	なし
	161	石鏃	C−24	Ⅲb	An3	2.0	1.9	0.4	1.15	21802
	162	石鏃	C−22	Ⅲ	An3	1.7	2.0	0.3	0.82	8156
	163	石鏃	D−26	Ⅲb	Ob1	1.5	1.3	0.3	0.26	21134
	164	石鏃	D−23	Ⅲ	An3	1.5	1.3	0.3	0.38	3918
	165	石鏃	C−20	Ⅱ	An3	1.9	1.65	0.2	0.53	3412
	166	石鏃	—	—	Ob3	1.9	1.4	0.4	0.58	なし
	167	石鏃	F−28	Ⅲa	Ob1	2.0	1.5	0.3	0.62	18183
	168	石鏃	D−11	Ⅳ	Ob1	2.0	1.8	0.4	0.84	1279
	169	石鏃	D−29	Ⅱ	An3	1.6	1.5	0.4	0.48	2473
	170	石鏃	D−23	Ⅲa	Ob1	2.4	1.8	0.3	0.88	16728
第39図	171	石鏃	C−23	Ⅲb	Ob1	1.3	1.2	0.2	0.26	21450
	172	石鏃	D−19	Ⅲb	Ob1	1.6	1.3	0.3	0.34	30374
	173	石鏃	C−18	Ⅲa	An3	1.8	1.4	0.3	0.52	27421
	174	石鏃	I−30		An3	1.8	1.5	0.3	0.52	なし
	175	石鏃	E−21	Ⅲa	An3	1.8	1.6	0.3	0.62	13182
	176	石鏃	B−17	Ⅲa	Ob2	1.7	2.0	0.4	1.19	23752
	177	石鏃	—	—	Ob3	1.9	1.7	0.6	1.48	なし
	178	石鏃	C−19	Ⅲb	An3	1.8	1.9	0.4	0.67	31406
	179	石鏃	C−22	Ⅱ	An3	2.2	1.7	0.4	0.6	3033
	180	石鏃	C−19	Ⅲb	Ob2	2.6	2.0	0.3	1.32	30079
	181	石鏃	C−12	Ⅱ	An3	1.7	1.2	0.2	0.5	5450
	182	石鏃	C−24	Ⅱ	An3	1.8	1.4	0.4	0.72	4765
	183	石鏃	D−20	Ⅱ	An3	2.3	1.7	0.6	1.5	7118
	184	石鏃	C−22	Ⅱ	An3	2.35	1.5	0.45	1.06	3005
	185	石鏃	E−19	Ⅲa	Ob3	2.4	1.4	0.4	0.97	11700
	186	石鏃	C−20	Ⅱ	An3	3.0	1.5	0.7	2.51	1922
	187	石鏃	E−19	—	Op	3.1	1.7	0.8	2.62	なし

第11表　縄文時代の石器観察表２

図版	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号
第39図	188	石鏃	B－7	Ⅲ	Ob3	1.8	1.3	0.3	0.39	なし
第39図	189	石鏃	C−21	Ⅱ	An3	2.4	1.6	0.3	0.73	なし
	190	石鏃	—	—	Ob3	2.4	1.7	0.3	0.75	なし
	191	石鏃	44T	—	Ob3	2.3	1.4	0.3	0.59	なし
	192	石鏃	D−25	Ⅲa	Ob3	1.9	1.6	0.4	0.57	21306
	193	石鏃	D−16	Ⅲb	An3	2.5	1.6	0.5	1.0	14291
	194	石鏃	道路溝		Ob3	3.0	1.7	0.5	1.44	なし
	195	石鏃	D−24	Ⅲb	Sa	2.5	1.6	0.5	1.67	21880
	196	石鏃	B－4	Ⅲ	Ob3	2.7	1.7	0.5	1.57	5637
	197	石鏃	D−20	Ⅱ	Fa	2.9	1.9	0.4	1.59	7134
	198	石鏃	D－3	Ⅲb	Ob1	1.5	1.1	0.4	0.34	11918
第40図	199	石鏃	E−22	Ⅲb	Ob1	2.2	1.4	0.4	0.83	17242
	200	石鏃	C−17	Ⅲa	Fa	2.1	1.6	0.6	1.28	26002
	201	石鏃	C−23	Ⅲb	Ob1	1.8	1.3	0.3	0.65	16778
	202	石鏃	F−26	Ⅲa	An3	2.7	1.3	0.3	0.88	22273
	203	石鏃	C−18	Ⅲa	Ob1	1.9	1.3	0.3	0.55	28450
	204	石鏃	—	—	Ob1	1.1	1.35	0.3	1.27	なし
	205	石鏃	C−17	Ⅲa	An3	1.3	1.3	0.2	0.21	24130
	206	石鏃	D−23	Ⅲ	An3	1.8	1.7	0.3	0.5	3938
	207	石鏃	D−23	Ⅲ	An3	2.3	1.5	0.4	0.66	8295
	208	石鏃	E−19	Ⅲa	An3	1.8	1.8	0.4	0.66	14769
	209	石鏃	C−25	Ⅲa	An3	2.1	1.3	0.3	0.44	7216
	210	石鏃	D−20	Ⅲa	An3	2.1	1.6	0.4	0.84	27214
	211	石鏃	D−24	Ⅲa	An3	2.15	1.6	0.25	0.58	12735
	212	石鏃	B−21	Ⅲb	An3	2.3	1.4	0.4	0.64	13870
	213	石鏃	C−27	Ⅲb	Ob1	1.9	1.4	0.3	0.49	23571
	214	石鏃	E−32	—	An2	2.2	1.5	0.3	0.86	なし
	215	石鏃	F−28	Ⅲa	An3	2.5	1.8	0.5	1.51	18161
	216	石鏃	E−19	Ⅲb	An3	1.8	1.4	0.4	0.55	29672
	217	石鏃	D−15	Ⅲa	An3	2.0	1.4	0.4	0.7	14298
	218	石鏃	F−18	Ⅲa	Ob2	1.7	1.6	0.4	0.9	18623
	219	石鏃	—	—	An3	2.1	1.5	0.3	1.81	なし
	220	石鏃	C−17	Ⅲc	Ob3	2.2	1.5	0.4	0.76	16321
	221	石鏃	B−8	Ⅳ	Ob2	2.1	2.1	0.3	0.85	7000
	222	石鏃	B－4	Ⅲ	An3	2.9	2.1	0.5	2.34	5639
	223	石鏃	E−17	Ⅲb	Ob3	1.8	1.1	0.4	0.35	11359
	224	石鏃	D−24	Ⅱ	Fa	2.35	1.4	0.5	11.15	3754
	225	石鏃	F−28	Ⅲa	An3	2.85	1.05	0.65	1.47	18000
	226	石鏃	F−19	溝埋土生活道路	An3	3.55	1.1	0.45	1.32	なし
第41図	227	石匙	D−17	Ⅲb	Sa	4.9	4.6	0.8	15.67	なし
	228	石匙	B−10	Ⅲ	Sh	4.4	4.25	0.8	13.69	1152
	229	石匙	E−28	—	An2	2.5	1.4	0.4	1.86	なし
	230	石匙	B－5	Ⅲ	An3	4.9	2.8	0.65	11.89	672
	231	石匙	53T	Ⅲ	Cc	2.8	2.9	0.7	3.59	2
	232	石匙	F−29	Ⅲa	An2	4.2	3.3	0.5	6.32	17733
	233	石匙	B−10	Ⅲ	Fa	3.6	2.2	0.9	6.81	715
	234	石匙	C−17	Ⅲa	Ob2	2.2	3.5	0.4	2.64	14044
	235	石匙	C−17	Ⅲa	Ob2	4.9	3.1	0.9	10.7	15632
	236	スクレイパー	C−20	Ⅲb	Ob1	2.2	3.8	0.65	6.85	14869
	237	スクレイパー	C−21	Ⅱ	An3	6.3	6.4	1.1	41.58	7854
	238	スクレイパー	D−21	Ⅱ	An3	5.1	4.3	0.45	17.03	6155
	239	スクレイパー	D−20	Ⅲa	An3	4.1	4.9	1.0	16.62	1864
第42図	240	スクレイパー	D−25	Ⅲa	An3	3.6	5.15	0.7	14.37	12614
	241	スクレイパー	C−21	Ⅱ	An3	4.5	3.7	0.45	11.6	7843
	242	スクレイパー	E−20	Ⅲa	An3	4.0	5.35	1.0	17.18	24815
	243	スクレイパー	D−15	Ⅰ	An3	4.6	4.35	1.1	18.3	なし
	244	スクレイパー	C−18	Ⅲa	An3	2.6	3.15	0.7	7.37	23992
	245	スクレイパー	B−10	Ⅲ	Fa	3.1	5.6	0.95	16.3	715
	246	スクレイパー	B−16	Ⅲ	Cc	2.8	2.7	1.1	8.46	1610
	247	スクレイパー	C−18	Ⅲa	Fa	4.7	4.3	1.2	18.71	24532
	248	スクレイパー	C−21	Ⅱ	An3	3.35	4.7	1.2	15.95	7347
第43図	249	スクレイパー	D−25	Ⅲa	An3	4.9	6.95	1.0	28.98	12980
	250	スクレイパー	E−20	Ⅲa	An3	6.1	4.35	1.6	37.93	31232
	251	スクレイパー	D−15	Ⅲb	Ob3	3.75	1.75	0.6	3.83	16344
	252	スクレイパー	D−22	Ⅱ	Ob2	6.5	4.2	0.8	17.0	4044
	253	スクレイパー	D−19	Ⅲa	An3	9.65	4.0	0.8	37.64	29913
	254	スクレイパー	E−19	Ⅲa	Sh	4.6	6.9	1.8	76.08	14708
第44図	255	スクレイパー	C−15	Ⅲ	An3	3.1	4.3	0.95	13.4	8517
	256	スクレイパー	D−19	Ⅲa	An3	1.3	2.4	0.6	2.06	15280
	257	スクレイパー	C−17	Ⅲa	Cc	4.1	4.6	0.75	13.32	24187
	258	スクレイパー	E−18	Ⅲa	Cc	5.8	2.6	1.4	16.53	11487
	259	スクレイパー	E−14	Ⅲ	Sh	3.2	4.55	1.0	11.6	6915
	260	スクレイパー	—	—	Fa	3.4	4.1	1.4	15.02	なし

第12表　縄文時代の石器観察表３

図版	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号
第44図	261	スクレイパー	E−18	Ⅲa	Ob2	3.9	2.7	0.65	5.73	11514
	262	スクレイパー	G−27	Ⅲa	Fa	2.3	3.6	0.9	7.33	18504
第44図	263	スクレイパー	D−17	Ⅲa	Ob2	3.3	2.6	0.5	5,78	15127
	264	スクレイパー	C−18	Ⅲb	Sh	2.85	3.65	0.7	5.7	30976
	265	スクレイパー	E−20	Ⅲa	Ob5	1.8	2.8	0.6	2.03	24802
第45図	266	スクレイパー	C−19	Ⅲa	An3	10.9	9.7	2.1	156.62	26284
	267	スクレイパー	D− 6	Ⅴ	An3	3.75	2.6	1.05	9.46	5730
	268	スクレイパー	E−26	Ⅲa	An3	2.55	4.7	0.75	12.28	23255
	269	楔形石器	B−15	Ⅱ	Sa	3.8	1.9	1.2	12.73	1035
	270	楔形石器	D−16	Ⅲa	Fa	3.1	2.4	1.0	7.75	10919
	271	楔形石器	D−17	Ⅲb	Fa	1.9	2.3	0.8	2.71	16304
	272	楔形石器	C−17	Ⅲa	Ch	2.9	2.1	0.9	4.76	14015
	273	楔形石器	G−27	Ⅱ	Ob2	1.9	2.2	0.7	2.68	10535
	274	楔形石器	E−19	Ⅲa	Fa	2.1	4.0	1.7	14.34	14800
	275	楔形石器	F−28	Ⅲa	An3	3.2	4.1	1.0	12.49	18083
第46図	276	楔形石器	—	—	Rc	2.8	1.85	1.35	7.19	なし
	277	楔形石器	C−18	Ⅲa	An2	2.6	1.8	0.8	4.59	24571
	278	楔形石器	C−17	P22	Ob2	2.0	2.2	1.1	4.58	なし
	279	楔形石器	C−25	Ⅲa	Fa	1.8	1.6	0.7	2.45	12860
	280	石錐	D−24	Ⅱ	Ob2	3.0	2.7	0.75	3.24	4889
	281	石錐	D−25	Ⅲa	An3	3.1	1.2	0.65	1.54	12222
	282	石錐	B−21	Ⅲa	An3	4.5	2.3	1.0	8.01	16566
	283	石錐	D−19	Ⅲa	An3	3.5	1.8	0.3	3.73	28819
	284	石錐	C−18	Ⅲa	An3	3.5	1.7	0.6	3.59	24414
	285	石錐	C−19	Ⅲa	An3	2.55	1.2	0.25	0.79	26887
	286	石錐	B−18	Ⅲa	An3	3.4	1.1	0.7	2.64	23876
	287	石錐	D−20	Ⅲa	An3	5.5	1.1	0.8	5.37	27887
	288	異形石器	C−19	Ⅱ	An3	3.2	0.8	0.5	2.21	なし
	289	異形石器	C−18	—	Ob1	3.8	1.1	0.45	1.83	なし
	290	異形石器	D−24	Ⅱ	Ob1	3.0	1.2	0.35	0.98	4893
	291	異形石器	D−24	Ⅲb	Ob1	1.7	0.7	0.3	0.43	23645
	292	二次加工剥片	D−16	Ⅲa	Fa	2.9	3.4	1.0	9.2	11231
	293	二次加工剥片	D−20	Ⅲa	Ob3	2.6	3.5	1.0	5.68	28022
	294	異形石器	F−31	—	Ob1	3.2	1.3	0.5	1.59	なし
	295	二次加工剥片	D−17	Ⅲa	Ch	2.4	1.4	0.8	1.85	15115
	296	使用痕剥片	D−19	Ⅲa	An3	1.9	1.9	0.6	1.85	25164
	297	使用痕剥片	D−17	Ⅲa	Fa	4.9	2.8	1.2	11.96	15644
	298	使用痕剥片	E−20	Ⅲa	Ob1	3.0	1.0	0.3	0.88	27513
	299	打面再生剥片	C−17	Ⅲa	Fa	3.6	3.1	0.8	7.37	31849
第47図	300	石核	C−18	Ⅲa	Ob1	1.8	2.4	2.1	9.41	28419
	301	石核	D−2	P	Ob2	3.03	4.0	2.8	37.28	11905
	302	石核	D−20	Ⅲa	Ob1	2.4	4.2	2.0	16.75	28730
	303	石核	C−17	Ⅲa	Ob2	3.05	2.95	1.9	14.95	10851
	304	石核	C−21	Ⅱ	Ob2	2.0	2.2	2.0	8.76	7816
	305	石核	D−15	Ⅲ	Ob4	2.9	2.6	2.2	14.89	8794
	306	石核	D−26	Ⅱ	Ob2	2.2	2.7	1.45	11.34	2438
第48図	307	石核	C−21	Ⅲb	Ob2	2.8	3.05	2.2	17.98	17135
	308	石核	D−21	Ⅲb	Ob2	1.65	2.85	1.9	8.09	14953
	309	石核	D−21	Ⅱ	Ob2	3.9	4.65	2.7	44.32	5314
	310	石核	D−17	Ⅲa	Ob4	2.5	3.1	1.6	12.67	14257
	311	石核	E−17	Ⅲa	Ob2	3.0	3.1	1.8	13.8	18963
	312	石核	D−17	Ⅲb	Ob2	2.3	4.2	2.7	24.31	17478
	313	石核	G−27	Ⅲa	Ob2	2.1	2.35	1.6	8.29	18603
第49図	314	石核	D−24	Ⅲa	Fa	5.3	8.55	5.8	292.5	20883
第59図	315	石核	F−18	Ⅲa	Ob2	1.95	2.7	1.5	7.54	19511
	316	石核	C−28	Ⅲa	Ob1	2.9	2.7	2.1	11.6	2457
	317	石核	B−13	Ⅲ	Ob2	3.45	3.3	1.1	12.2	8874
	318	石核	D−22	Ⅲb	Ob1	2.1	3.5	1.2	6.68	16938
	319	石核	C−21	Ⅱ	Fa	3.8	5.6	2.6	64.66	3143
	320	石核	F−30	Ⅲa	Fa	3.7	3.5	1.75	23.95	17719
第51図	321	石核	C−21	Ⅱ	Fa	6.5	8.2	6.6	330.0	3824
	322	石核	C−23	Ⅱ	Sh	3.9	3.7	1.7	23.77	7252
第52図	323	石核	C−8	Ⅱ	Ob2	4.0	4.7	3.9	78.0	163
	324	石核	E−28	—	Fa	3.1	4.3	1.95	19.14	なし
	325	垂飾品	—	—	Ja	1.4	2.25	0.9	4.43	なし
第53図	326	礫器	B− 2	Ⅲ	An1	11.1	16.0	3.0	623.8	5631
	327	礫器	C− 8	Ⅱ	Sa	7.1	12.8	3.1	334.0	66
	328	礫器	B−10	Ⅳ	An1	8.0	12.7	4.0	422.66	1156
	329	礫器	D−22	Ⅲb	An1	13.0	10.3	3.8	529.07	20618
	330	礫器	E−19	P13	An1	9.6	12.7	4.5	619.2	なし
	331	礫器	F−29	Ⅲa	An1	12.4	9.4	2.8	399.4	17005

第２節　弥生時代の遺構と遺物

本遺跡の主体となる時代で，縄文時代晩期から弥生時代の遺構・遺物を本項で述べる。この時期は，縄文から弥生時代にかけての過渡期であり，本県における実態もよく分かっていないところから，ここでは弥生時代としてまとめて取り扱う。

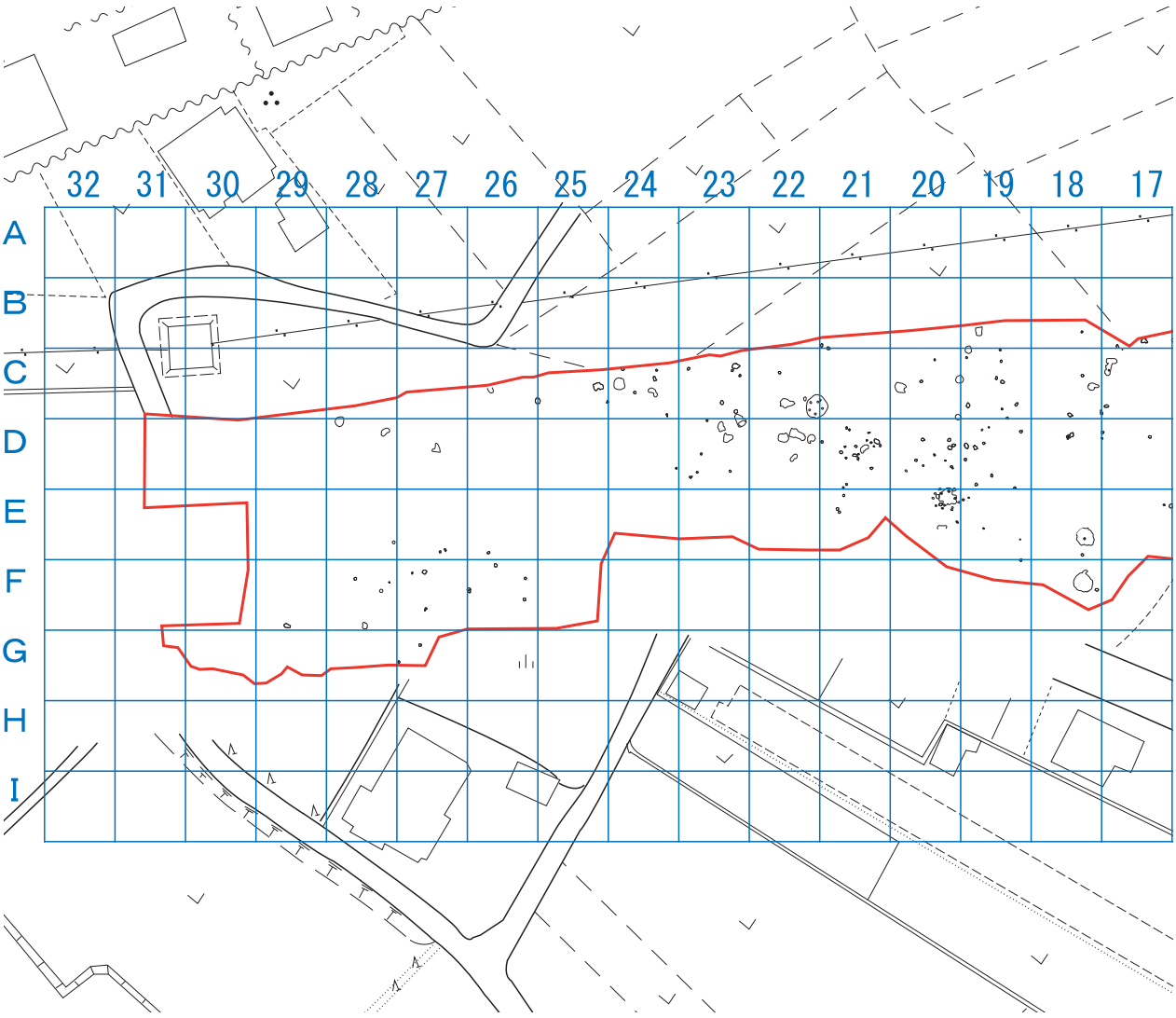
竪穴住居や竪穴状遺構，土坑やピットなどの遺構と甕形・鉢形・壺形・高坏などの土器，打製石斧，磨製石斧，磨石，敲石，三角錐形石器，砥石などの石器などの遺物が発見されている。

１　遺構

遺構は，竪穴住居１軒，竪穴状遺構２基，土坑25基，ピット147基を検出した。そのほとんどは，遺跡の11区以西より検出され，17区から24区の間に遺構が集中している。Ⅳ層上面で検出され，遺構内の埋土はⅢａ層単一である。

⑴　竪穴住居（第56図）

Ｃ－22，23区境の南東部に長径3.1m，短径2.6m，底面までの深さ16cmの円形で，底面から深さ30cm～40cmの５本の柱穴を持つ竪穴住居である。柱穴は，竪穴の中央に五角形に並ん



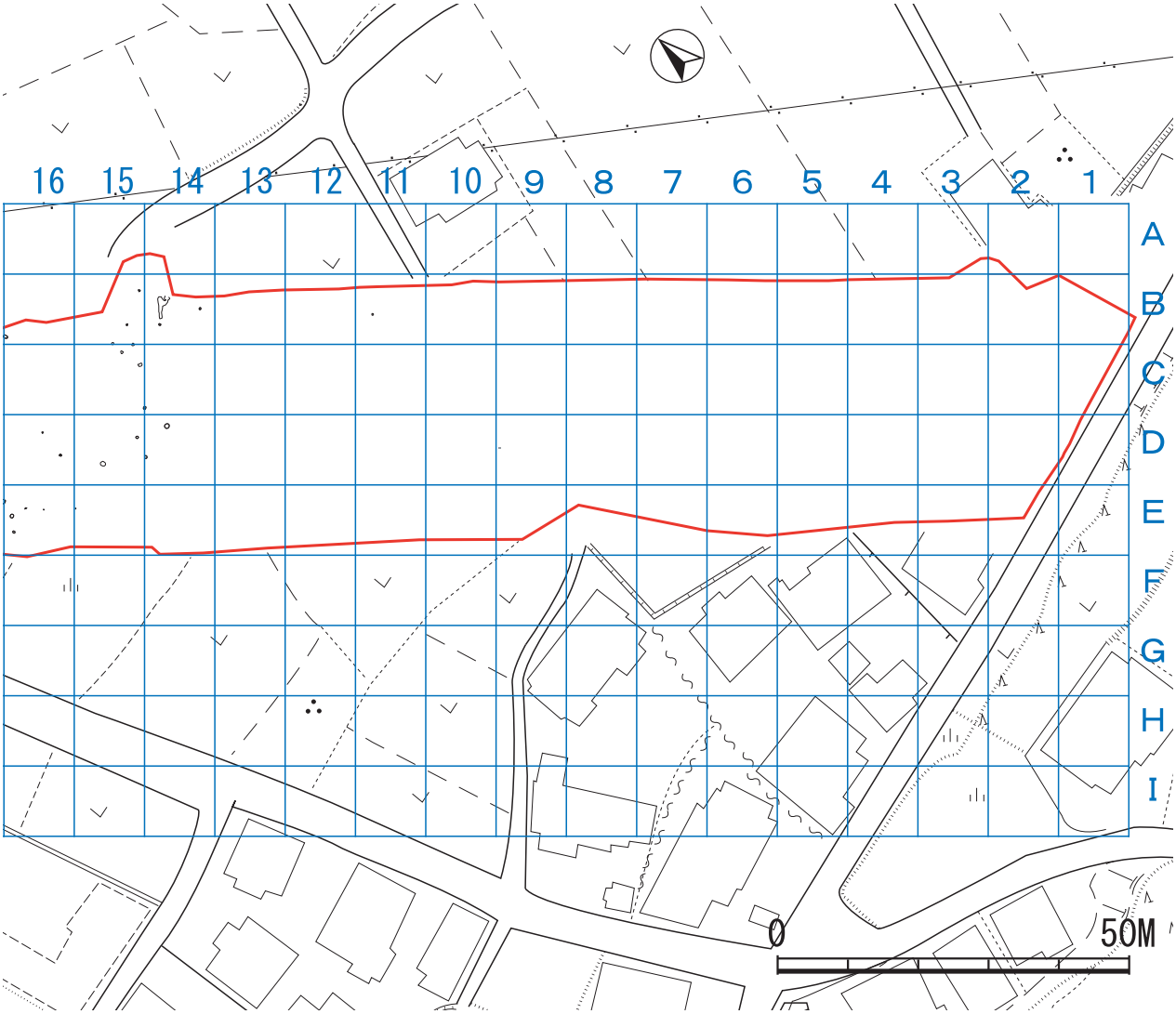
第54図　弥生時代の遺構配置図

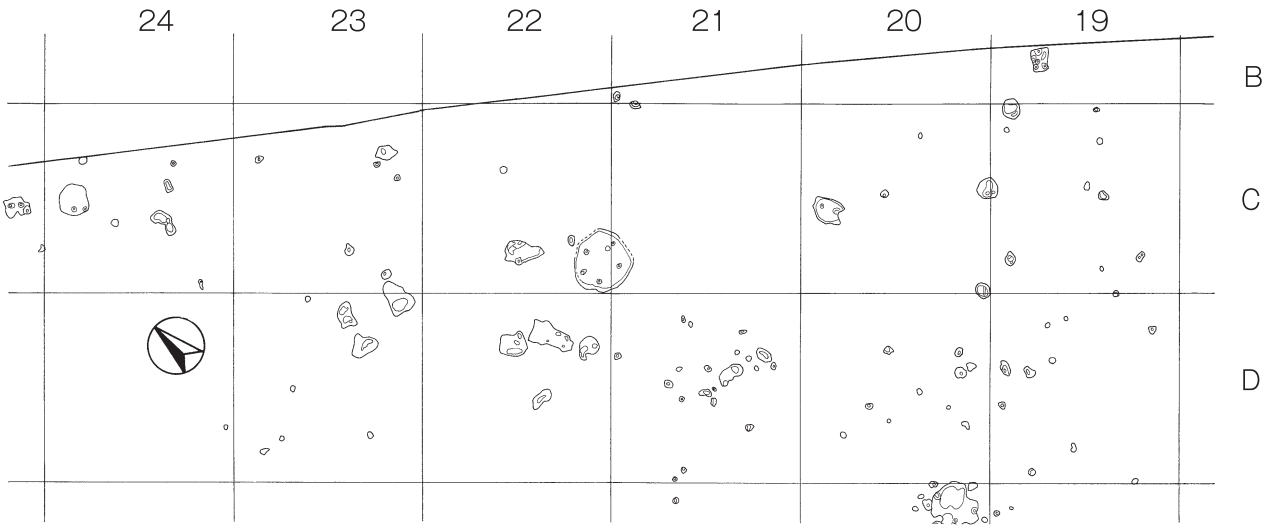
でいる。上部構造に係る遺構は検出されなかったが，遺構内の埋土から175点の遺物が出土した。小破片が多いため，その内の甕形土器11点，鉢形土器２点，壺形土器２点，打製石鏃２点，石核４点の計21点を図化した。遺構内の埋土の堆積状況は，Ⅲａ層の単一埋土である。

・ **竪穴住居跡遺構内遺物**（第58図～第60図）

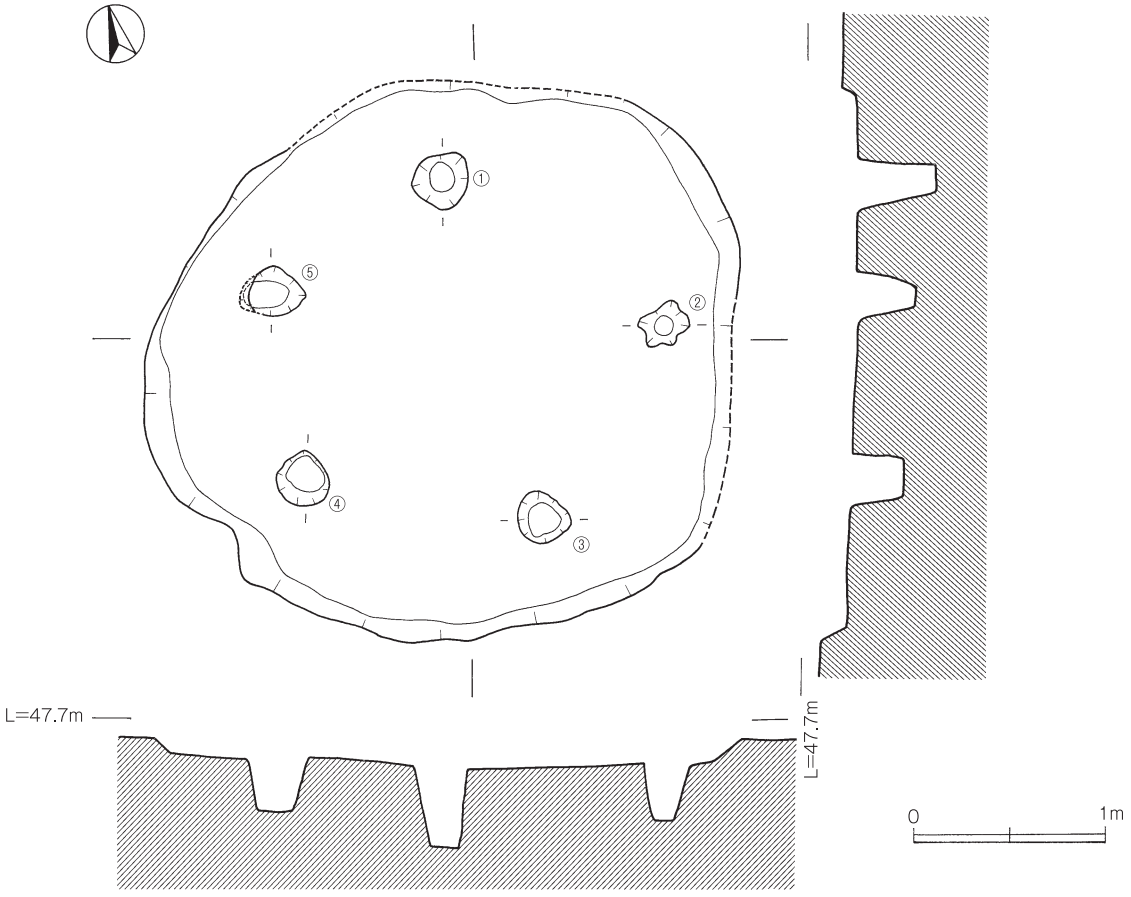
１～７は甕形土器の口縁部である。１，２の器形は，胴部に向かってまっすぐに伸びているが，屈曲の有無は不明である。口縁部に接して，小さな断面三角形の突帯を貼り付け，ヘラ状工具を用いて，細かく浅い刻みを密に刺突している。同一個体の可能性があり，器面を丁寧になでている。３～５は，口縁部から少し下がった位置に突帯を持つ甕形土器である。４は，口縁部から一段下がった位置に突帯を持ち，小さな断面三角形の突帯に，刻目をヘラ状工具で深く斜位に刺突し，密に施文している。器面調整は，丁寧なヘラミガキとナデている。６は断面三角形の突帯を口縁部に接し，庇（ひさし）状に水平に張り出す突帯を持つ。突帯に小さく浅い刻目を密に施し，器面をヘラ状工具でナデを施している。

８～10は，甕形土器の胴部である。８・９は，胴部に断面三角形の突帯を貼り付けヘラ状工具で密に刻目を施している。同一個体の可能性がある。10は，断面が台形の突帯を貼

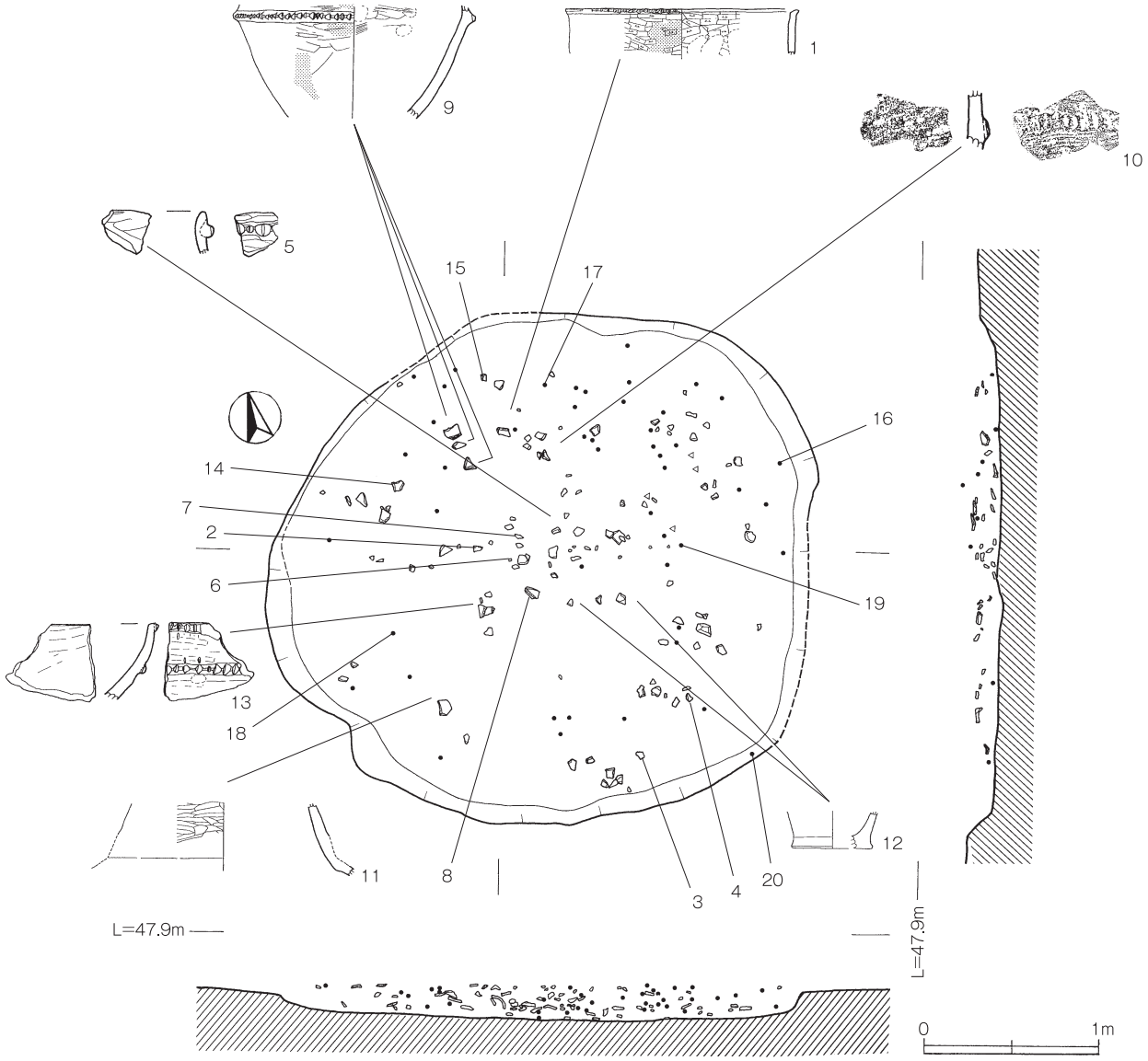




第55図　竪穴住居遺構配置図

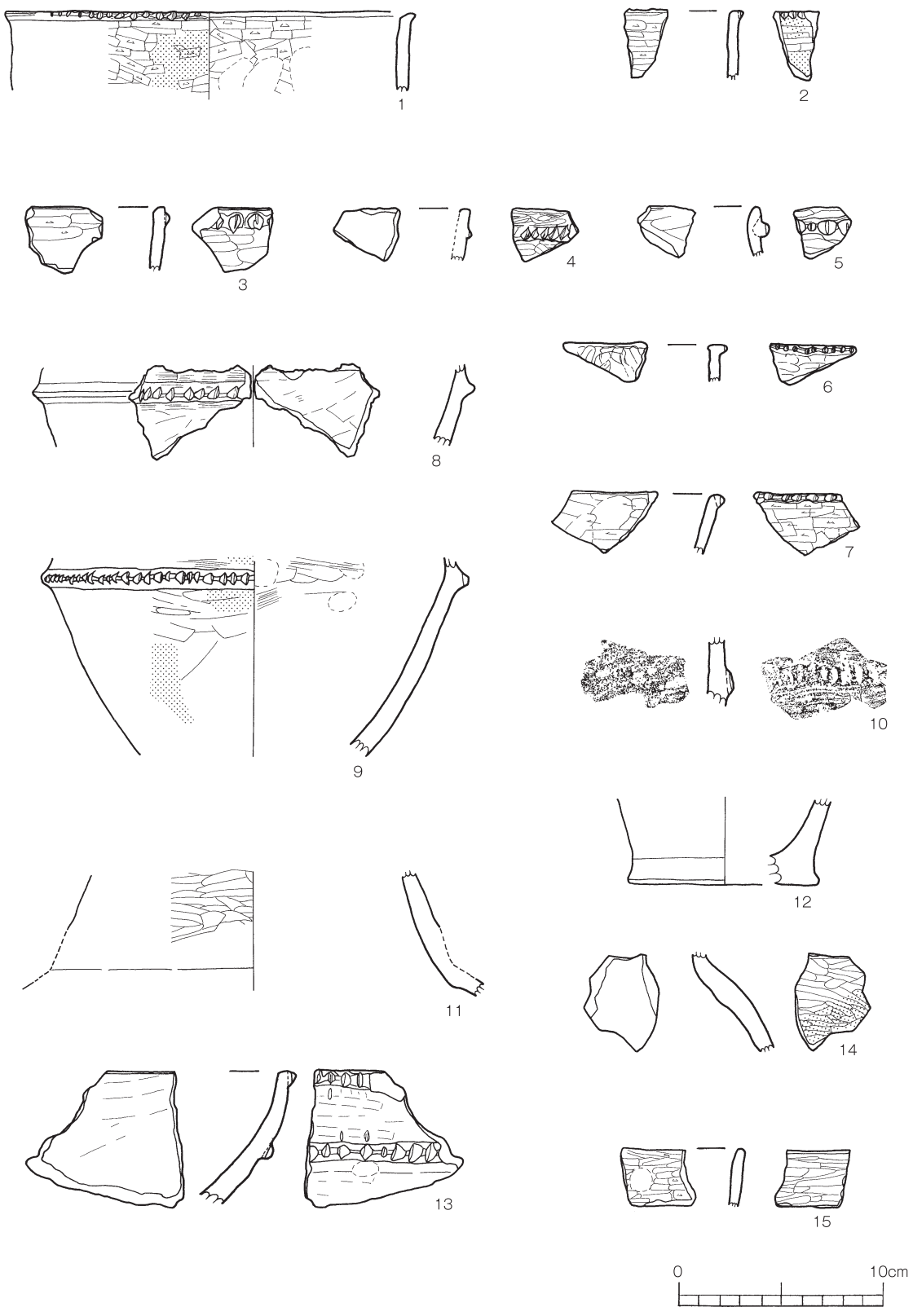


第56図　竪穴住居柱穴検出状況図

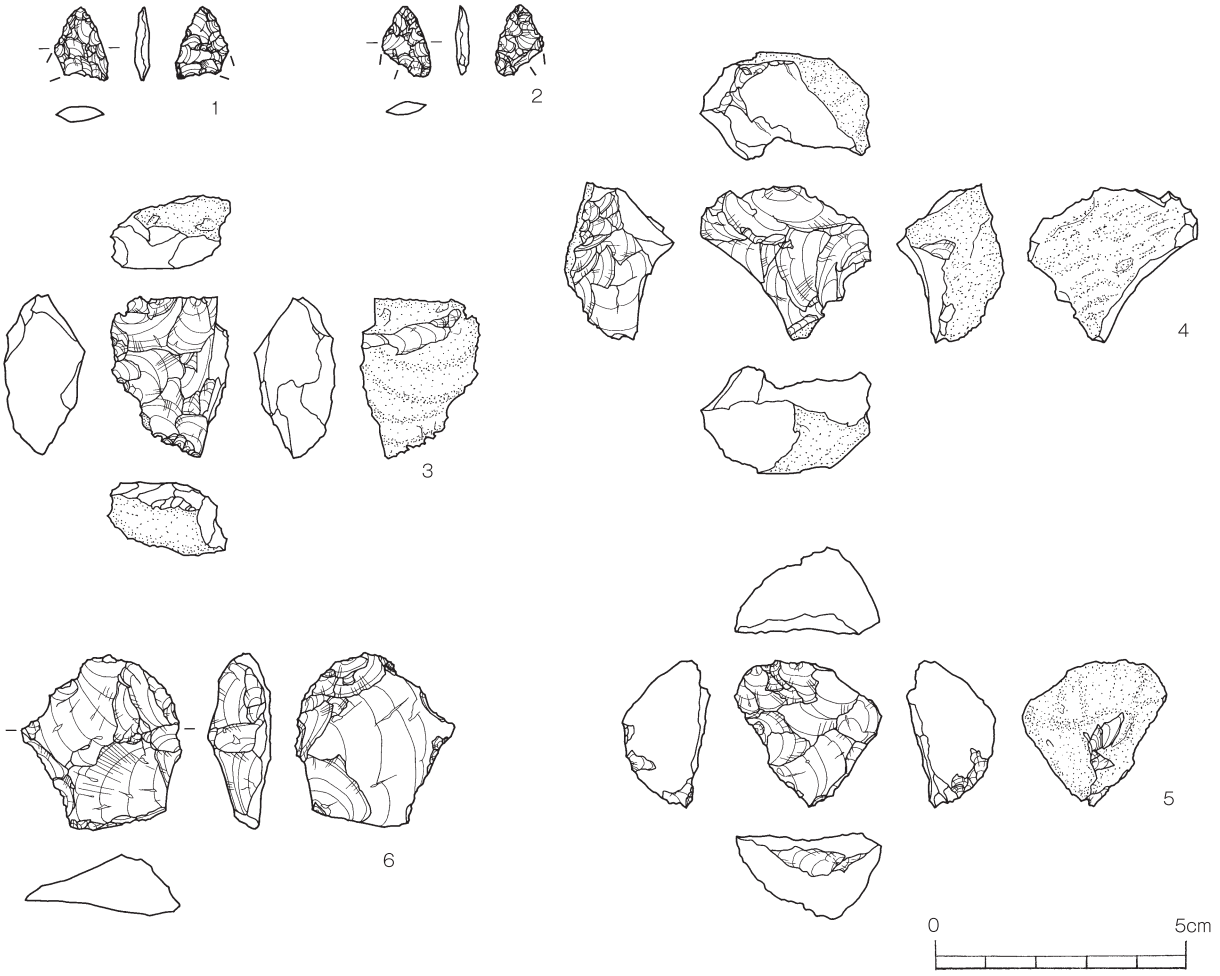


第57図　竪穴住居内出土遺物状況図

り付け，ヘラ状工具で密に刺突している。突帯は，丁寧になでて成形しているが，突帯下部は，条痕を持つ。12は，甕形土器の底部である。全体を丁寧にナデて調整している。11，12は壺形土器の肩部である。11は頸部を横位にヘラミガキを施している。表面に赤色顔料を塗布している。14は，肩部から胴部に掛けて緩やかに張り出す。13，15は鉢形土器である。13は断面三角形の突帯を口縁部に接し，胴部にも同じ大きさの突帯を持つ。15は，内外がヘラミガキである。16，17は基部の抉りが浅く，正三角に近い形状の石鏃である。基部が一部欠損している。16は上牛鼻産黒曜石，17は腰岳産黒曜石に類似する。18～20は，上牛鼻産黒曜石と思われる小角礫を利用し，一部自然面を残す石核である。21は二次加工のある剥片で，ノッチ状に加工された微細剥離痕が観察できる。上牛鼻産黒曜石に類似する。



第58図　竪穴住居内出土遺物１

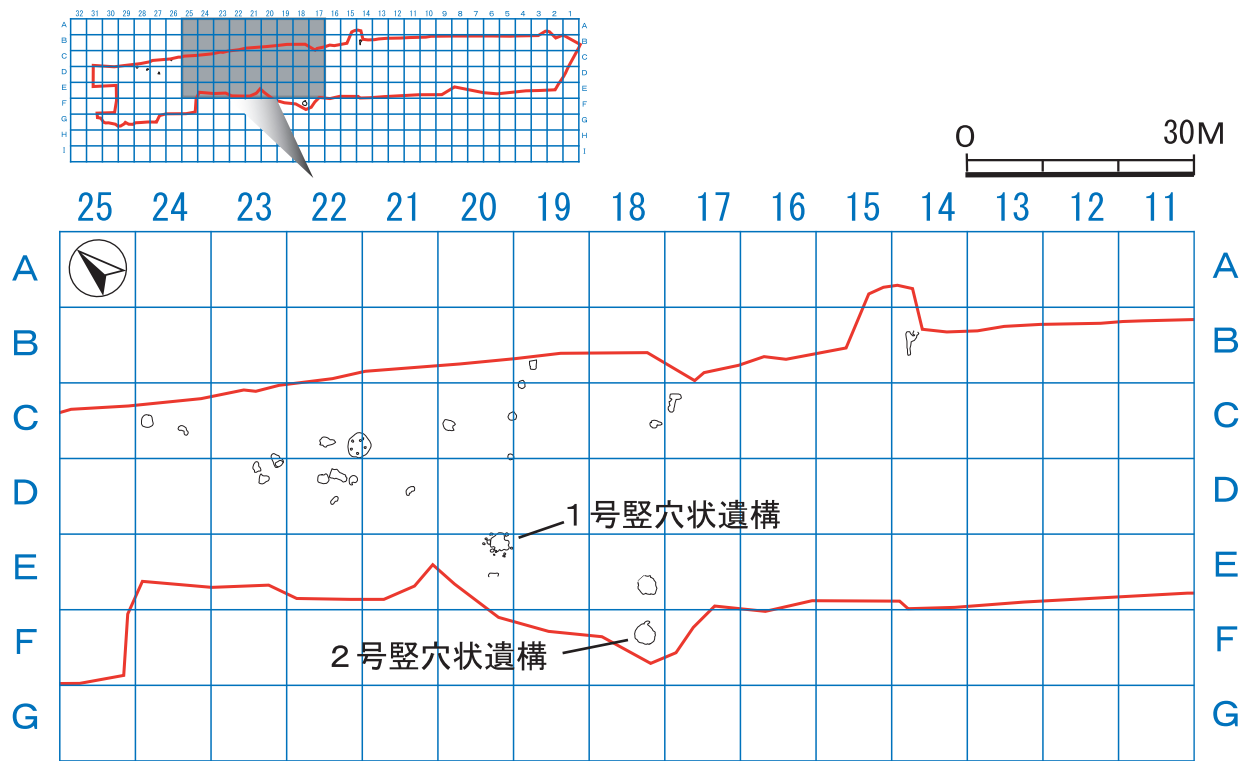


第59図　竪穴住居内出土遺物２

第13表　弥生時代竪穴住居跡出土遺物観察表

挿図	遺物番号	取上番号	器種	部位	分類	遺構名	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 [illegible]	胎土 片岩	胎土 その他	備考
第58図	1	81	甕形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	横ナデ・指押さえ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○	○			○			
	2	119	甕形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐			○						刻目突帯文・ｽｽ
	3	6	甕形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ヘラミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○		○			○	○	砂粒	刻目突帯文
	4	13	甕形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	剥離	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙						○		軽石	刻目突帯文
	5	71	甕形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ナデ	明赤褐	橙						○			刻目突帯文・二条屈曲
	6	157	甕形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	ヘラナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	○		○			○			刻目突帯文
	7	149	甕形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	ヘラミガキ・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文・ｽｽ
	8	121	甕形土器	胴部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ナデ・ハケ目	にぶい褐	にぶい褐		○	○			○		軽石	刻目突帯文
	9	86.87.88	甕形土器	胴部		竪穴住居	C － 21.22	ハケ目・指押さえ・ナデ	ヘラケズリ後ナデ・ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○	○					刻目突帯文・ｽｽ
	10	146	甕形土器	胴部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ハケ目	淡黄	淡黄	○		○			○	○		刻目突帯文
	11	113	壺形土器	肩部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		○		○	玉ずい・砂粒	丹塗り
	12	123	甕形土器	底部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	○					○	○	軽石	木ノ葉痕
	13	115	鉢形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・ヘラナデ・指頭圧痕	にぶい赤褐	明赤褐		○	○	○		○			二条刻目突帯文
	14	97	壺形土器	肩部		竪穴住居	C － 21.22	剥離	ヘラミガキ	暗灰黄	黄褐		○				○			ｽｽ痕
	15	85	鉢形土器	口縁部		竪穴住居	C － 21.22	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	○		○		○	○			

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	石材分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
第59図	1	石鏃	C-23.24	ob2	1.5	1.1	0.3	0.39	45	
	2	石鏃	C-21.22	ob3	1.4	0.9	0.3	0.28	170	
	3	二次加工剥片	C-23.24	ob2	3.5	3.1	1.2	11.02	108	
	4	石核	C-23.24	ob2	2.4	1.6	9.4	9.4	35	
	5	石核	C-23.24	ob2	2.4	2.1	14.1	14.11	28	
	6	石核	C-21.22	ob2	2.9	1.7	10.7	10.73	P4	



第60図　竪穴状遺構位置図

(2)　竪穴状遺構　（第61図）

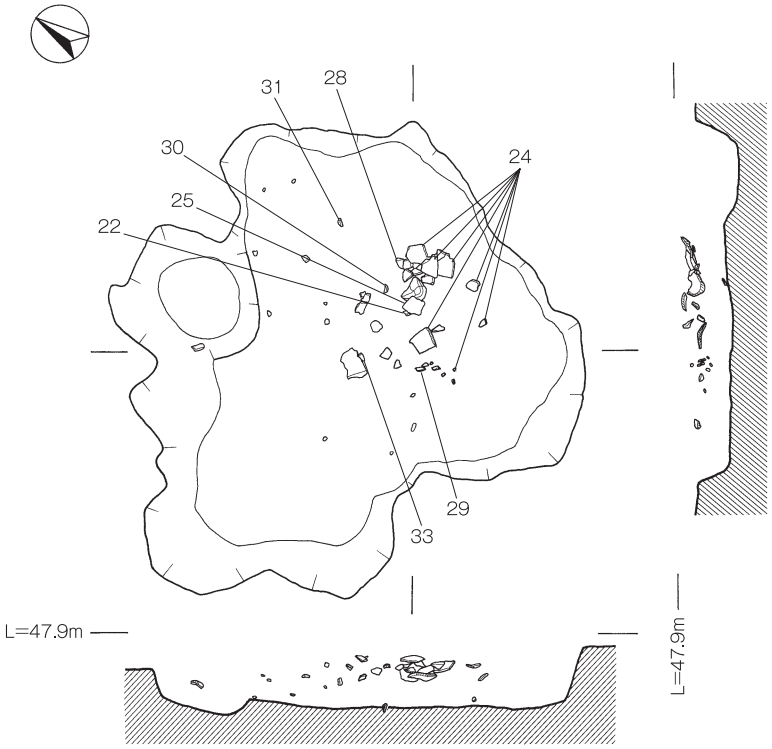
遺跡のほぼ中央南側にあり，竪穴住居跡と南北上の軸に並んで検出された。大型の土坑で，不定形のものや形状の整ったものがあり，検出状況や遺物出土状況から２基を竪穴状遺構として取り扱った。

ア　１号竪穴状遺構

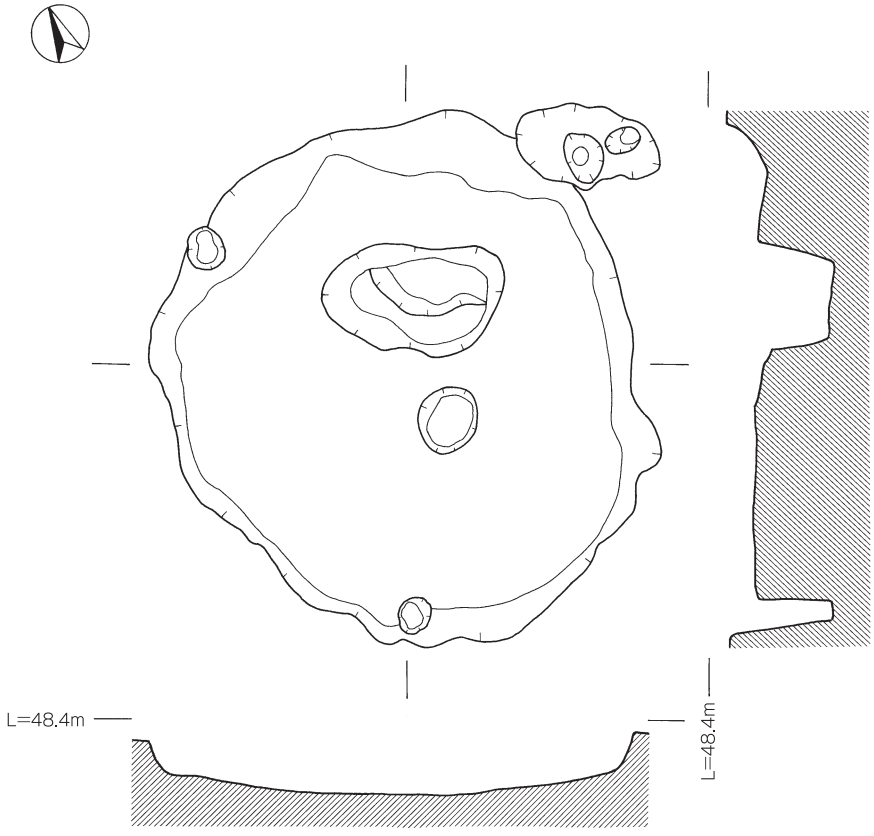
Ｅ－20区の北東にあり，長径2.4m，短径2.17m，深さ18cmの三角形の底面を持ち，外側が不定形の遺構で，西端に直径約70cm，深さ24cmの円形の土坑を持つ。埋土はⅢａ層単一で，床面から４～14cmの位置から多くの遺物を検出しているが，その不定形の形状から竪穴状遺構とした。10点の黒曜石の剥片と59点の土器片の計69点が検出され，その内，図化できたものを12点掲載した。

イ　２号竪穴状遺構

Ｆ－18区の北東にあり，長径2.8m，短径2.6m，深さ30cmの円形の遺構で，底面はほぼ平坦である。中央に長径37cm，短径32cm，深さ32cmのピットと東西に長く長径１m，短径60cm，底面からの深さ40cmの楕円形の土坑を持つ。遺構の縁辺部北西に長径23cm，短径21cm，深さ41cmのピット，南に調整1cm，短径17cm，深さ30cmのピット，北東に長径76cm，短径42cmで，中に深さ76cmと56cmの２つのピットのある土坑を持つ。ピットは，それぞれほぼまっすぐに掘り込まれており，柱穴の可能性がある。形状は，松菊里タイプの住居跡の可能性があるが，発掘調査では土坑と認定しているため竪穴状遺構とした。出土遺物が２点あり図化した。



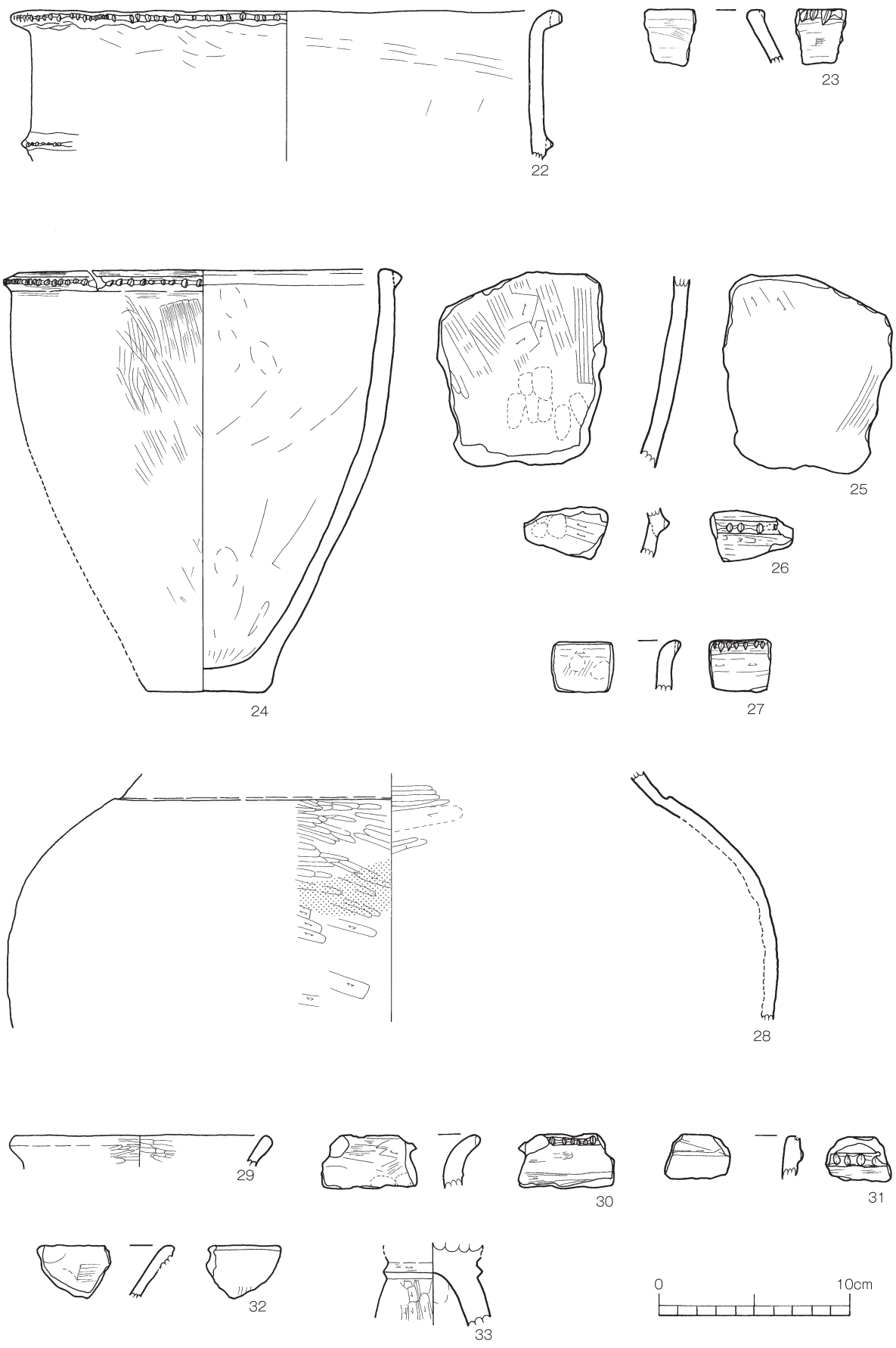
1号竪穴状遺構



2号竪穴状遺構

0 1m

第61図　竪穴状遺構１・２



第62図　竪穴状遺構出土遺物

・ **竪穴状遺構内出土遺物**（第62図）

㈠ １号竪穴状遺構内出土遺物

22～27は甕形土器である。27は，口縁部を如意形に折り曲げて口縁部を成形し，浅くて小さい刻目をヘラ状工具により密に施文している。口縁部下部には，断面三角形の突帯を貼り付け，丁寧に成形した後に，口縁部同様な刻目を密に施している。胎土は，明るい黄橙色をし，器面を丁寧になでて調整している。24は，砲弾形をなし，口縁部に三角断面の突帯を貼り付け，口縁部上部を丁寧にナデて成形し，胴部はハケ目を施している。27は，口縁部を折り曲げて，緩やかな如意形をなし，ヘラ状工具で施文している。28は，壺形土器の胴部である。肩部に段を持ち，ヘラミガキを施している。29は，口縁下部に段を持つ。30～32は，小片で器種不明の土器である。30は，口縁部に刻目を持ち，やや下がった位置に沈線文を持つ。口縁部屈曲付近は，ヘラミガキやナデの調整を施す。33は，高坏である。坏部と脚部との間に断面三角形の突帯を貼り付け，脚部を縦位のヘラミガキやナデを施している。

㈡ ２号竪穴状遺構内出土遺物

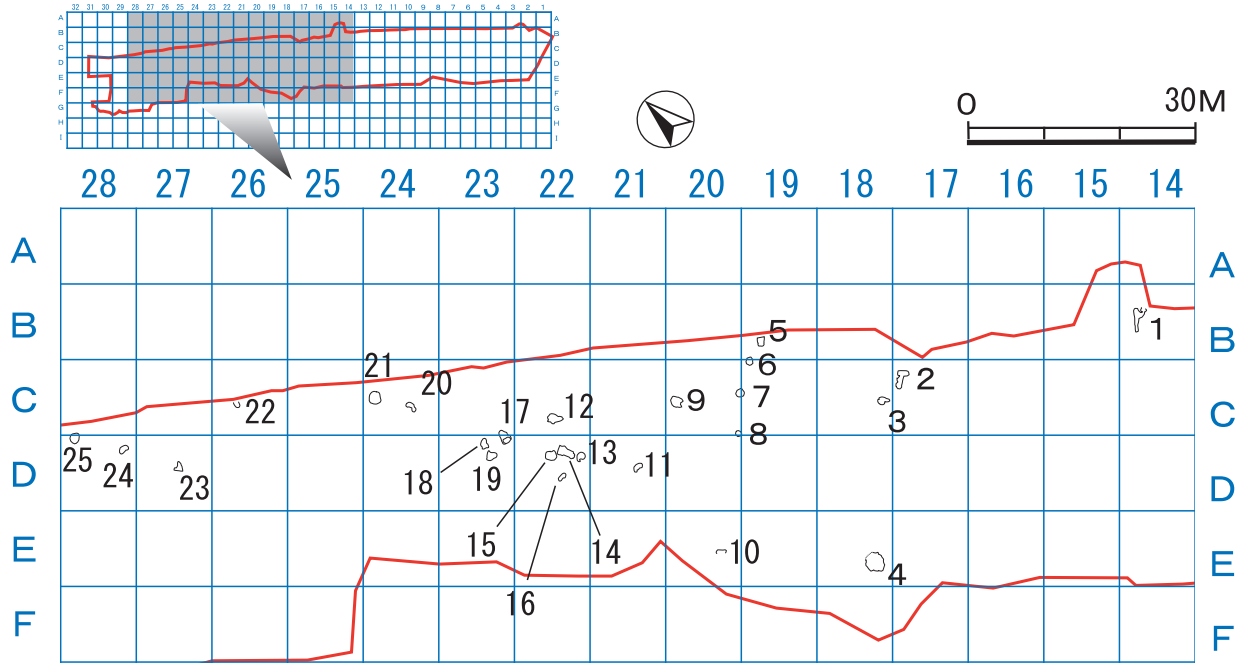
23は，刻目突帯文土器で，口縁部に小さな断面三角形の突帯を貼り付け深い刻目をヘラ状工具により施文している。32は，口縁部から少し下がった位置の突帯が欠損した土器である。全面をナデまたは，ヘラミガキで器面を調整している。

第14表　弥生時代竪穴状遺構出土遺物観察表

挿図番号	遺構名	遺物番号	取上番号	器種	部位	分類	出土区	調整		色調		胎土							旧遺構名	備考
								内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	緑石	雲母	ﾊﾞｰﾐｷｭﾗｲﾄ	片岩	その他	
第62図	1号竪穴状遺構	22	31178	甕形土器	口縁部	E類	E　－　20	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	明黄褐	にぶい黄橙	○		○			○	○		二条刻目突帯文
		24	9.32.34.38.40.43.45.46.48.49.50 52.53.55.56.58 59.67.31136	甕形土器	完形	D類	E　－　20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ハケ目	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○		茶粒	刻目突帯文・底径6.9cm器高22.3cm
		25	1	甕形土器	胴部	不明	E　－　20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ハケ目・指押さえ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ハケ目	明赤褐	にぶい橙	○	○	○			○	○		(外)ｽｽ
		26	47	甕形土器	胴部	不明	E　－　20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	灰黄褐			○			○	○	軽石	刻目突帯文
		27	35	甕形土器	口縁部	V類	E　－　20	ﾅﾃﾞ・指押さえ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	黒褐	○		○			○		軽石	刻目突帯文・如意状口縁
		28	42	壺形土器	頸部～胴部	W－1類	E　－　20	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・剥離	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	茶粒・砂粒・玉ずい	(外)胴部ｽｽ付着
		29	12	壺形土器	口縁部	V類	E　－　20	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	○	○	軽石	
		30	70	壺形土器？	口縁部	不明	E　－　20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○			○	○	軽石・茶粒	
		31	19	壺形土器？	口縁部	不明	E　－　20	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰黄褐	灰黄褐	○		○			○	○		刻目突帯文
		33	23	高坏	脚部	Y類	E　－　20	ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	明褐	明褐		○	○			○		軽石	貼付突帯・内外ともｽｽ付着
	2号竪穴状遺構	23	20280	甕形土器	口縁部	C類	F　－　18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	橙		○	○			○	○	軽石	刻目突帯文
		32	土20263	鉢形土器？	口縁部	不明	F　－　18	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指頭圧痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	○		砂粒・茶粒	

(3) 土坑・ピット群

弥生時代の土坑は，Ⅳ層上面で25基検出し，埋土はⅢａ層相当である。遺物は一括して取り上げられている。土坑の形状は様々で，下記のとおりⅠ～Ⅵ類に分類することができる。



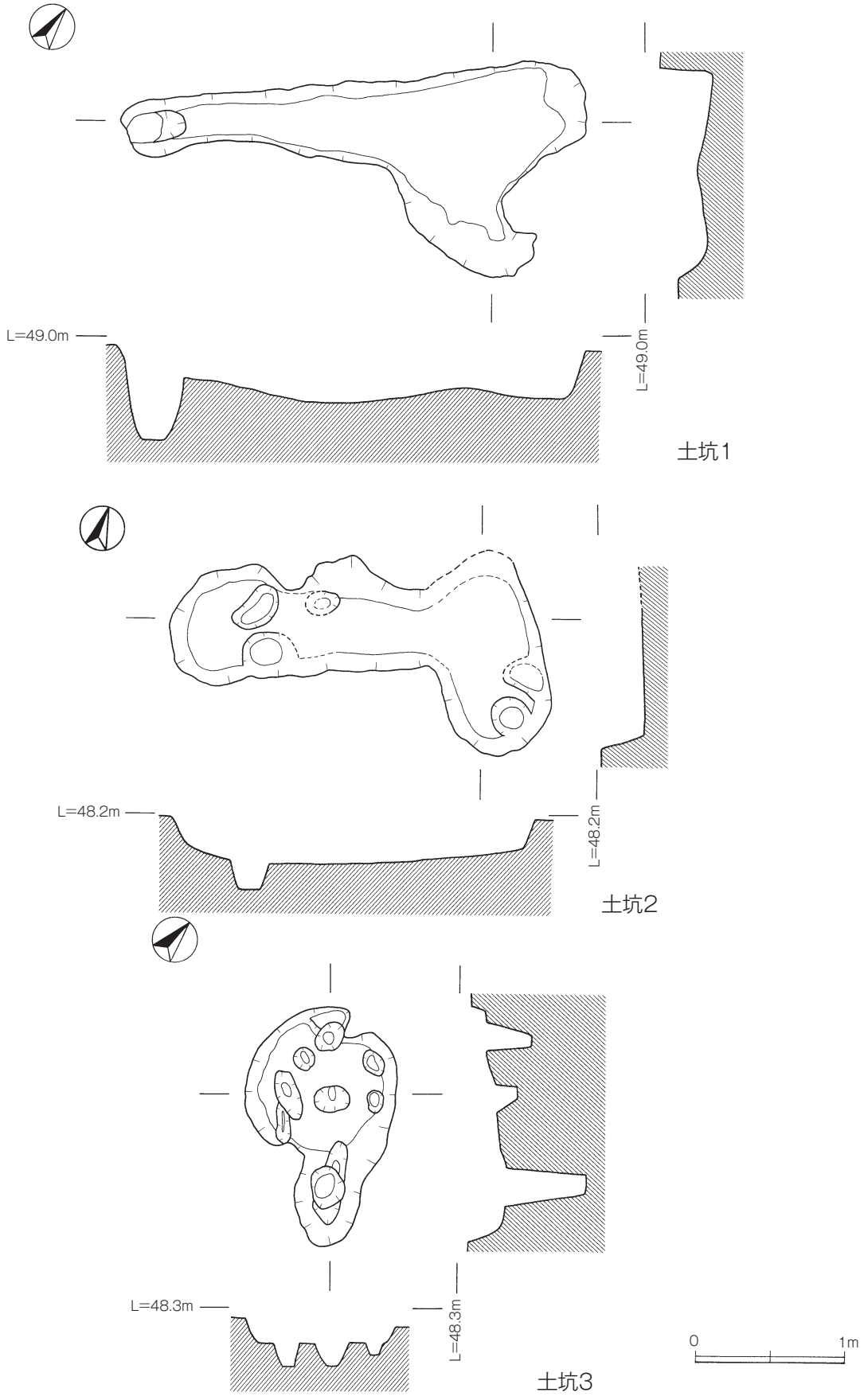
第63図　弥生時代の土坑位置図

土坑分類表

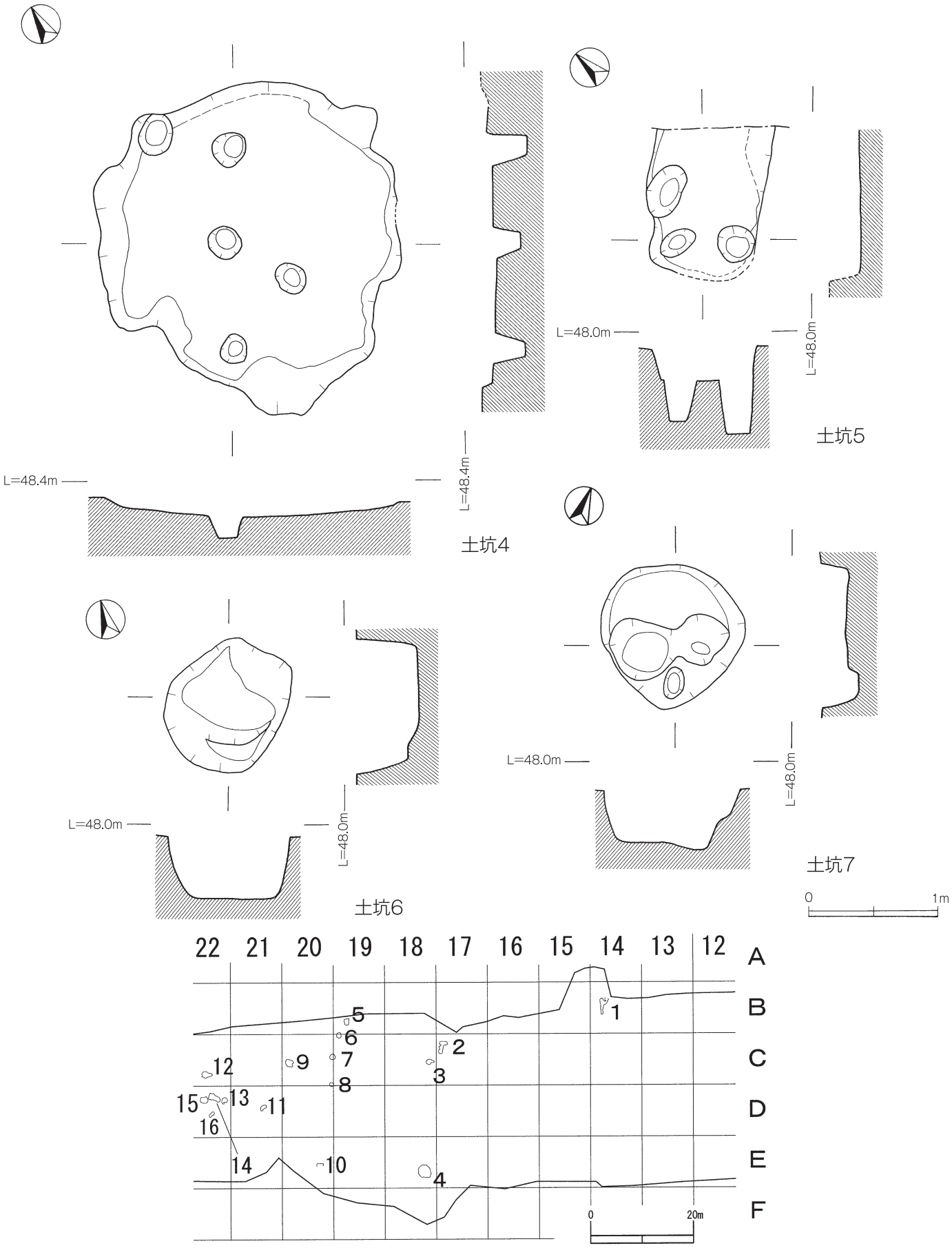
Ⅰ類：円形の形状をして，中にピットを持つものと持たないものがある。（土坑４，６，７，８，25）
Ⅱ類：三角形の形状をして，中にピットを持つものと持たないものがある。（土坑12，17，19）
Ⅲ類：方形の形状をして，中にピットを持つものと持たないものがある。（土坑５，14，15，21）
Ⅳ類：楕円形をして，中にピットを持つものと持たないものがある。（土坑10，16，22，24）
Ⅴ類：「く」字形をして，ピットを複数持つ。（土坑３，９，11，13，18，20，23）
Ⅵ類：Ｔ字形をして，中にピットを持つものと持たないものがある。（土坑１，２）

ア　Ⅰ類土坑

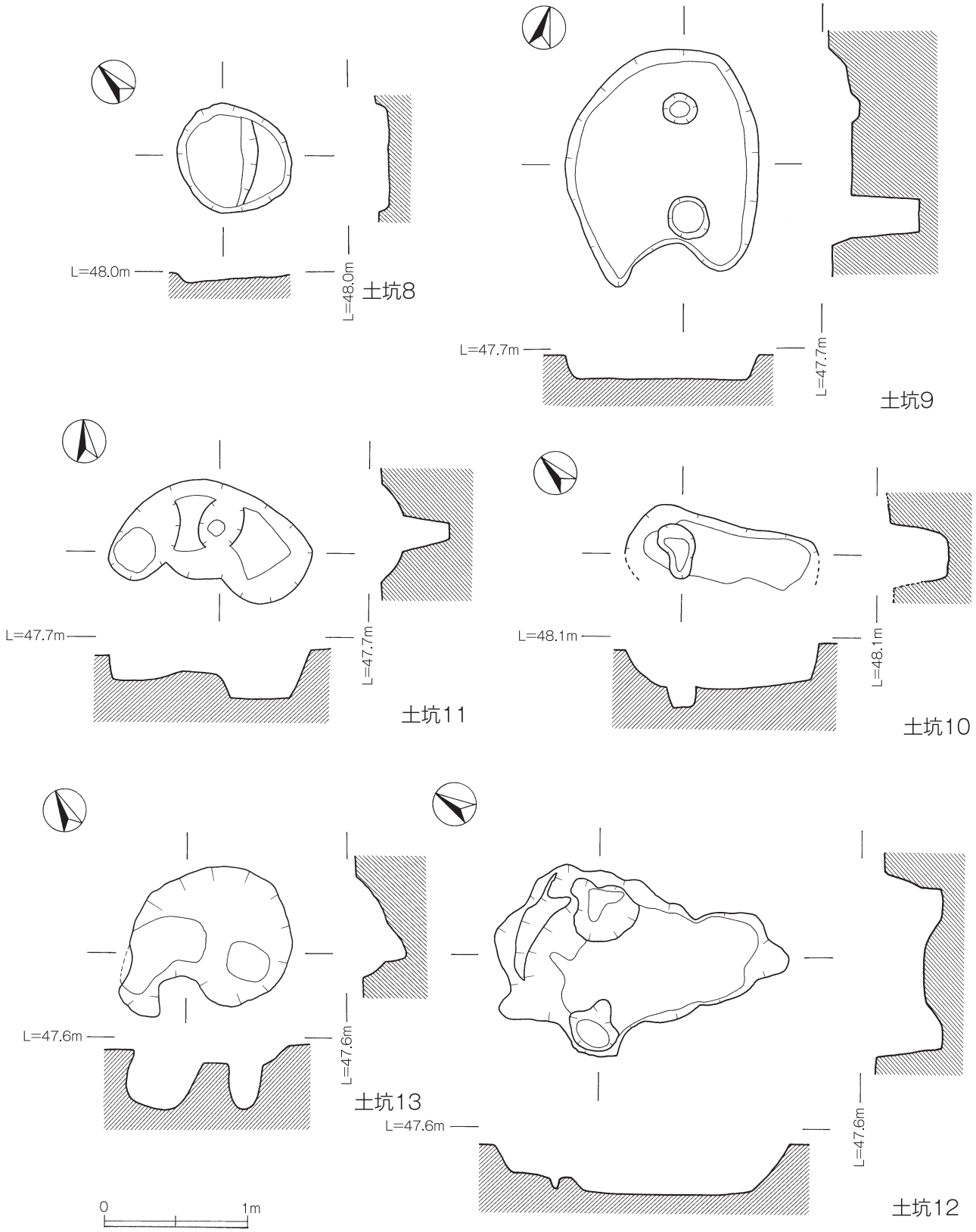
土坑４はＥ－18区にある直径約2.3m，底面までの深さ18cmの土坑で，中に５つのピットを持つ。中央に，北からそれぞれ直径約25，26，20cm，底面からの深さ28，20，28cmのピットが３つ並び，長径26cm，短径17cm，底面から48cmのピットが中央から少し南の位置にひとつ，北側縁辺部に長径35cm，短径26cm，深さ54cmのピットがある。遺物の出土状況は不明である



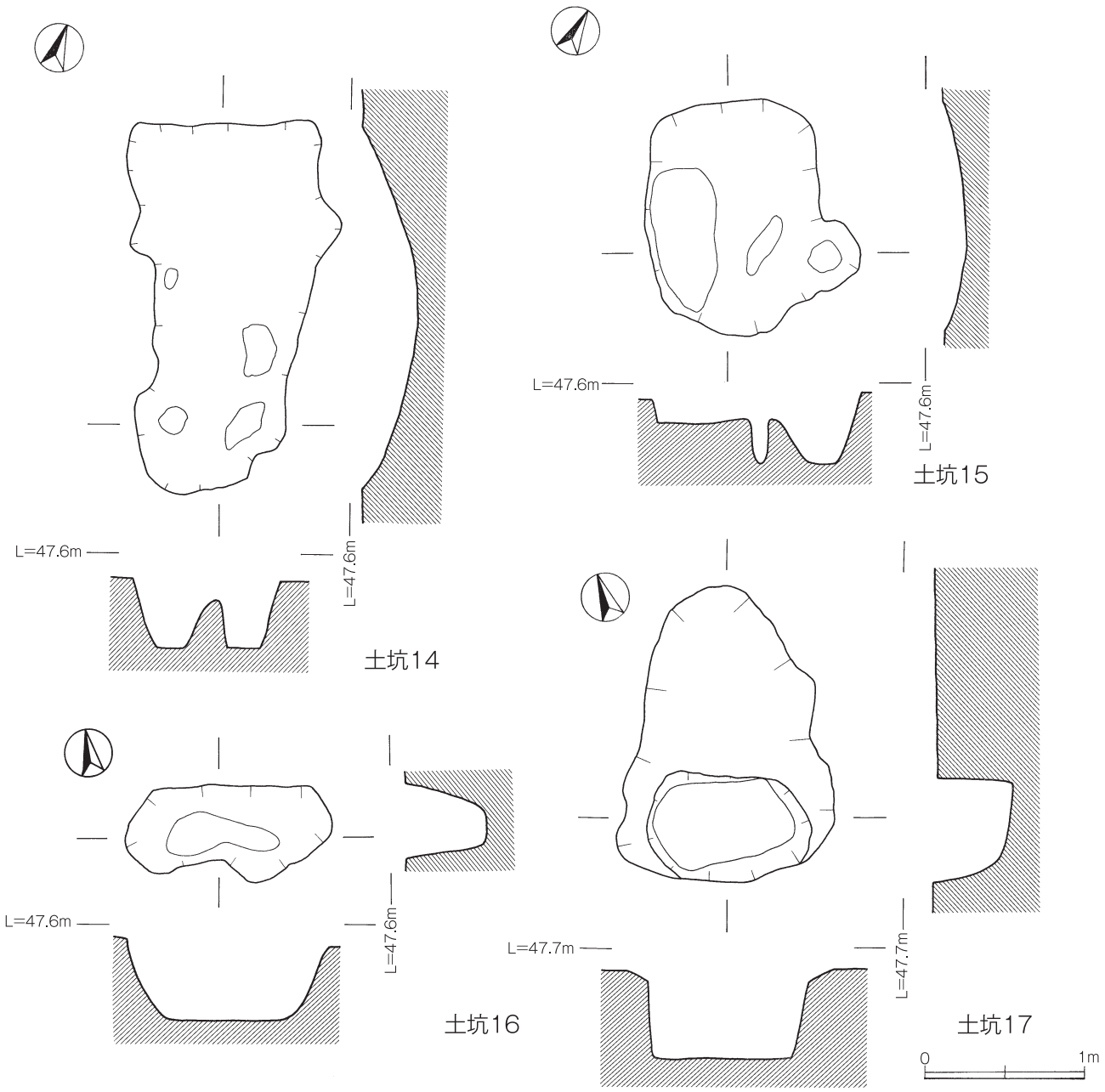
第64図　弥生時代の土坑１

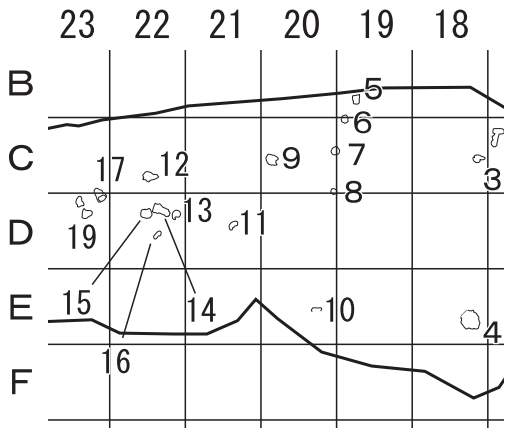


第65図　弥生時代の土坑２

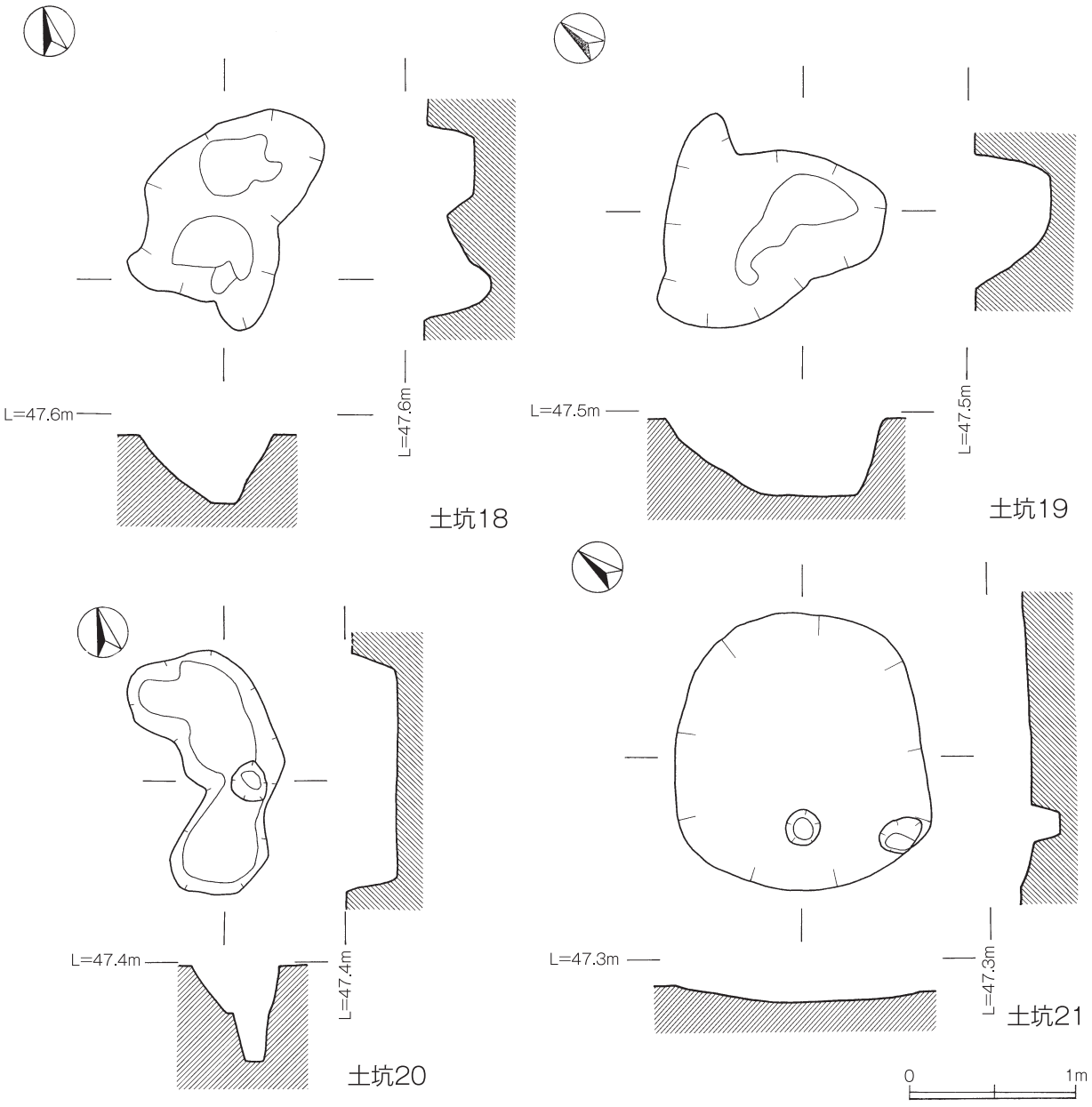


第66図　弥生時代の土坑３

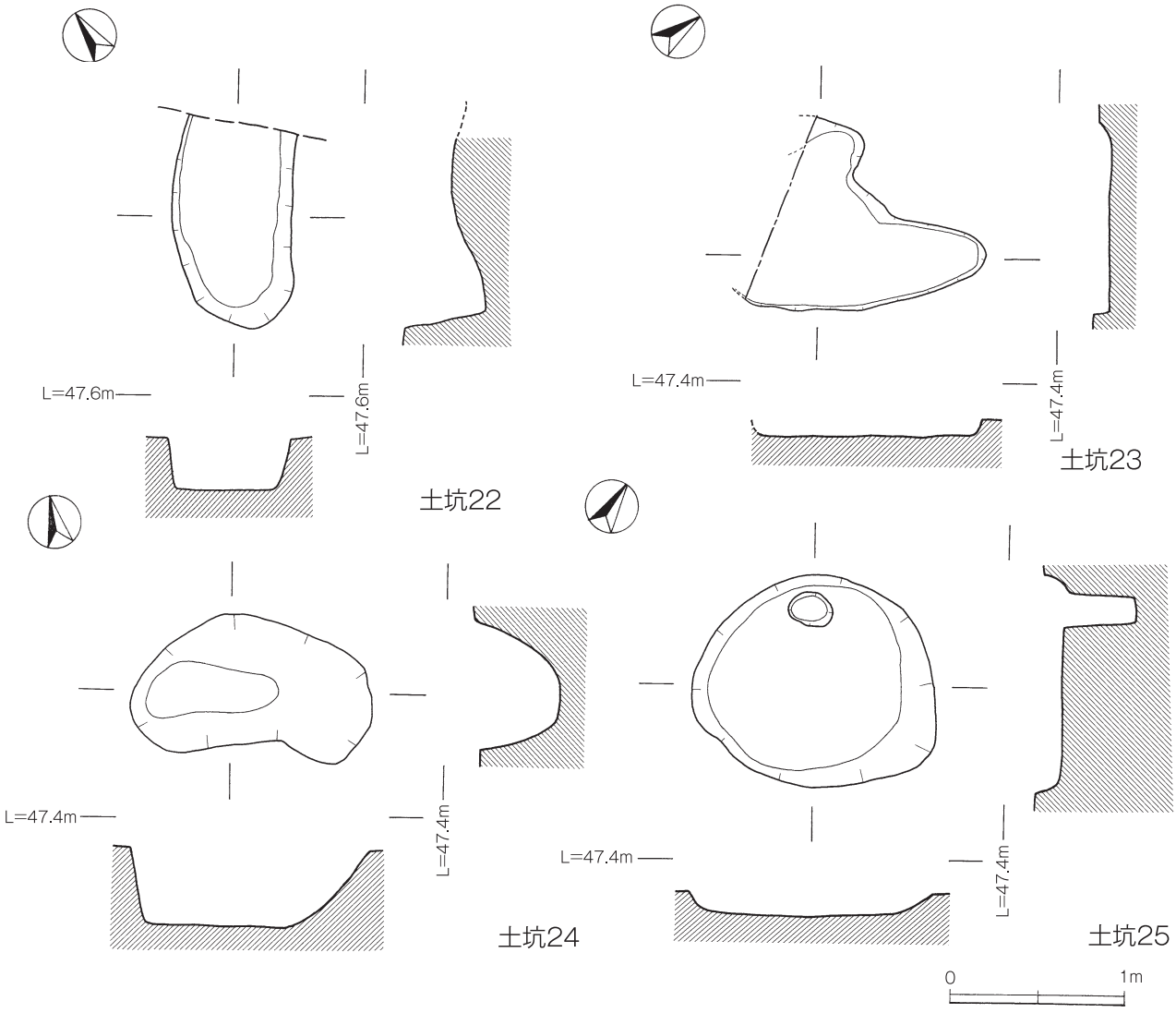


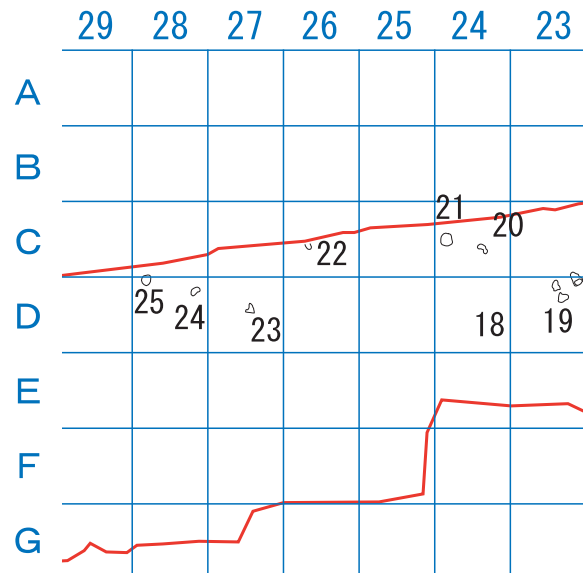


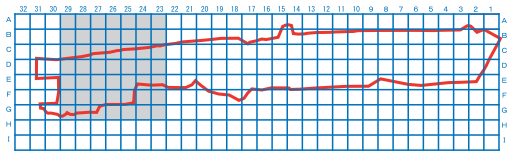
第67図　弥生時代の土坑４



第68図　弥生時代の土坑５







第69図　弥生時代の土坑６

が，その形状から住居跡の可能性がある土坑である。土坑６は，Ｂ－19・20区にあり，深さ47cmで底面に段を持つ。土坑７は，Ｃ－20区にあり，浅い窪みと長径23cm，短径13cm，底面からの深さ５cmのピットをひとつ持つ。土坑８は，Ｃ－20区にあり，直径約80cmの底面に浅い段を持つ。土坑25は，Ｄ－28区にあり，長径140cm，短径120cm，底面までの深さ16cmで，土坑北側の底面に，長径23cm，短径10cm，深さ40cmのピットを持つ。

イ　Ⅱ類土坑

土坑12は，長径40cm，短径45cm，底面からの深さ12cmと長径40cm，短径30cm，底面からの深さ14cmの２つのピットを持つ不定型な三角形の土坑である。土坑17は，Ｄ－23区にあり，南側に長径130cm，短径８cm，底面からの深さ60cmの掘り込みを持つ。土坑19は，Ｄ－23区にあり，長径130cm，短径85cm，深さ45cmの土坑である。

ウ　Ⅲ類土坑

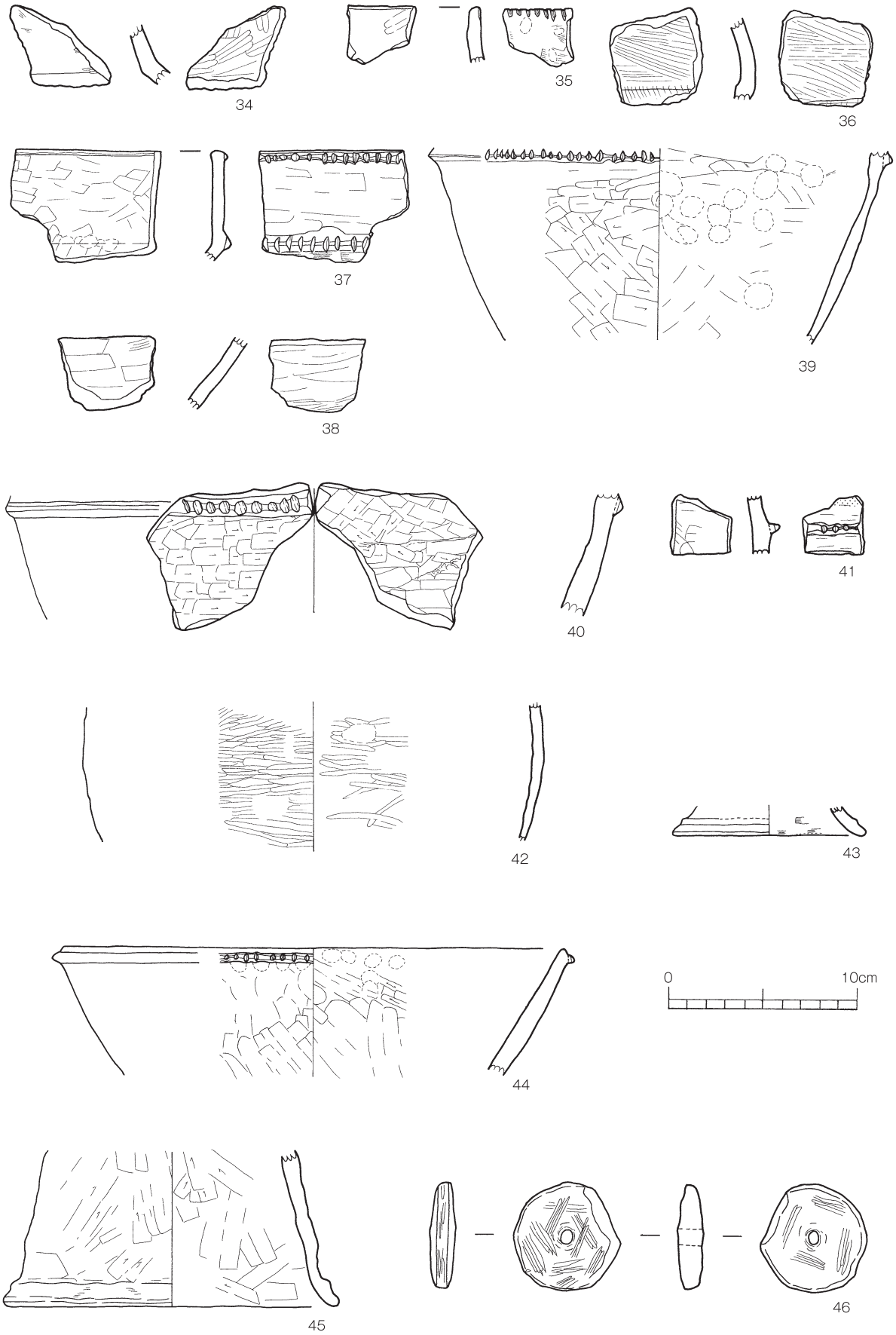
土坑５は，Ｂ－19区にあり，北面を調査区域外に接する方形の土坑である。中に３つのピットを持ち，南側に直径約30cm，底面からの深さ44cm，西側に長径30cm，短径18cm，底面からの深さ32cm，北側に長径43cm，短径26cm，深さ78cmのピットを持つ。土坑14はＤ－22区にあり，東側に長径43cm，短径28cm，底面からの深さ19.5cm，南東の長径47cm，短径15cm，底面からの深さ13.5cm，南西の直径18cm，底面からの深さ18cm，北西に長径13cm，短径８cm，底面からの深さ17cmのピットを４つ持ち，緩やかな窪みのある底面を持つ。土坑15はＤ－22区にあり，緩やかな窪みの底面に，東側の深さ46cm，土坑中央の底面からの深さ30cmのピットを２つ持つ。土坑21はＤ－24区にあり，緩やかな深さ６cm底面を持つ土坑で，南西の直径10cm，深さ24cm，南側の土坑の縁辺部に長径27cm，短径18cm，深さ52cmのピットを２つ持つ。

エ　Ⅳ類土坑

土坑10はＥ－20区にあり，中央に長径40cm，短径30cm，底面からの深さ14cmのピットを持つ楕円形の土坑である。土坑16はＤ－22区にあり，長径126cm，短径48cm，深さ45cmの土坑である。土坑22はＣ－26区にあり，北側を調査区域外に接し，深さ30cmの土坑である。土坑24はＤ－28区にあり，長径137cm，短径74cm，深さ48cmの楕円形の土坑である。

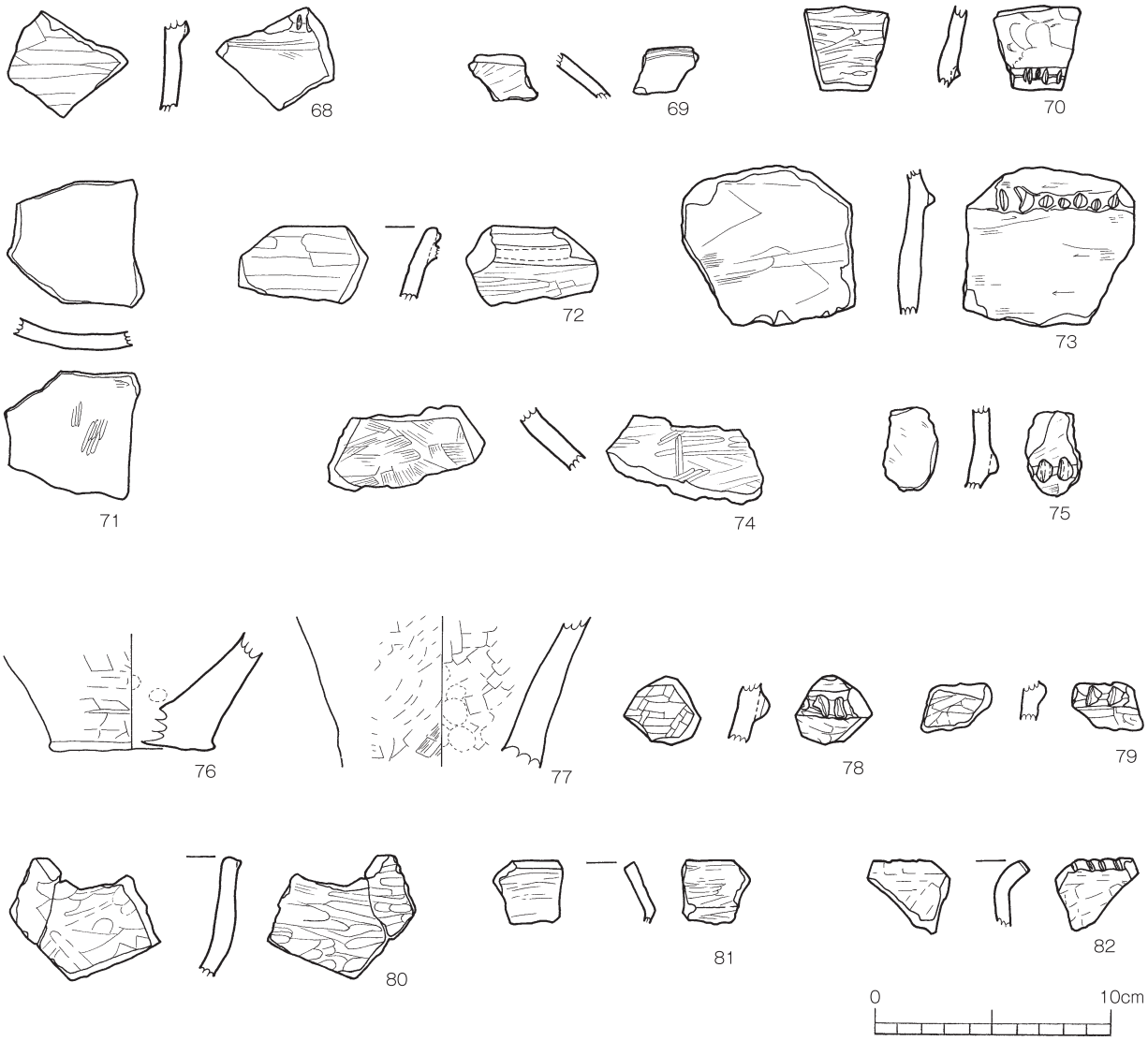
オ　Ⅴ類土坑

土坑３はＣ－18区にあり，長径161cm，短径110cm，深さ80cmの不定形の「く」の字をした土坑である。土坑９はＣ－20区にあり，土坑内に９個のピットを持つ，北西から時計回りに底面から深さ23cm，８cm，６cm，２つのピットが重なって深さ54cm，５cm，13cm，13cm，中央に13cmのピットを持つ。土坑11はＤ－21区にあり，中央に底面からの深さ30cmのピットを持つ。底面に段を持ち，２～３つの土坑が重なり合っている可能性がある。土坑13はＤ－22区にあり，長径120cm，短径70cm，深さ51cmで，西側のピットは外に張り出している。土坑18はＤ－23区にあり，北側に深さ30cmのピットを持つ。土坑20はＣ－24区にあり，中央に深さ56cmのピットを持つ。土坑23はＤ－27区にあり，深さ９cmの不定形の土坑で，底面は平坦である。



第70図　弥生時代の土坑出土遺物１

第71図　弥生時代の土坑出土遺物２



第72図　弥生時代の土坑出土遺物３

カ　Ⅵ類土坑

土坑１はＢ－14区にあり，長径315cm，短径142cm，深さ32cmで，Ｔ字形の土坑である。南西端に長径40cm，短径20cm，検出面から深さ70cmの楕円形のピットを持ち，底面は不定形である。土坑２はＣ－17区にあり，長径250cm，短径150cm，深さ40cmで，Ｔ字形の土坑で，東側の長径22cm，短径13cm，深さ105cm，南側の直径26cm，深さ50cm，西側の長径22cm，短径18cm，深さ27cm，北西の長径32cm，短径30cm，深さ18cm，北側中央の長径36cm，短径22cm，深さ13cmの５つのピットを持つ。

・　**土坑内遺物**（第71図～第72図）

土坑内遺物は，25基の土坑すべてに出土したが，小破片が多いため，できるだけ図化できるものはすべて掲載するようにした。なお，遺物は土坑番号順に掲載する。

土坑１　　34は，壺形土器の頸部である。内外ともていねいなミガキで仕上げており，内面は

鋭く屈曲している。

土坑２　35は，口唇部に直接刻目を施した甕形土器である。

土坑３　36は，丸みをおびた胴の屈曲内部に段をもつ土器が出土している。内外面はハケメを施し，内面の段のところから縦のハケメを施している。壺形土器の可能性が高い。

土坑４　甕形土器・鉢形土器・高坏形土器・円盤形土製品が出土している。甕形土器（37～42）は底部から口縁へまっすぐ開きながら立上がる器形をしている。37は二条甕で，口縁部に小さな断面三角形の刻目突帯，屈曲部に口縁部よりやや大きな刻目突帯を貼付けてある。39・40は胴下半部に刻目突帯が付く。41は緩やかな屈曲部で，つまみ出した断面三角形で浅い刻目の突帯が貼り付けている。43・45は高坏形土器の脚部で，43の脚部直径が10cm，45の脚部直径は17cmである。43は裾近くに小さな断面三角形の突帯がある。45は高い脚である。46は直径5.5cm，厚さ1.2cm，孔径0.3の土器片を再利用した有孔円盤形土製品で，両面・側辺とも丁寧に磨いている。

土坑５　47～49の甕形土器と50の壺形土器が出土している。47は表面にハケメを施す胴部である。48は突帯文土器の屈曲部である。47は砲弾形の甕の口縁部である。50は如意形に屈曲し頸部に２条の沈線を施す。

土坑６　甕形土器が出土している。51は口縁部に断面三角形の突帯を接し，胴部で強く屈曲する。52は口縁部から少し下がった位置に突帯を貼り付け，突帯部にススが付着する。

土坑７　54～56の甕形土器と57の壺形土器が出土している。54は口唇部に突帯を乗せる砲弾形の甕形土器である。55は丸みをもって底に至るあげ底風，56は外へやや張り出す。底部に木葉痕を持つ。57はていねいに磨かれた肩部である。

土坑８　58は断面三角形の突帯を口縁部に接し，ヘラ状工具で刻目を施す甕形土器である。

土坑９　60は甕形土器の胴部である。59は屈曲部から緩やかに外反し，口唇部を丁寧になでた鉢形土器である。61はヘラミガキで仕上げられた高坏形土器である。

土坑10　62は浅い刻目を施す刻目突帯の貼り付けられた甕形土器の胴部である。63は部位不明の壺形土器が出土している。

土坑12　64，65は内傾する口縁部で，口縁部よりやや下に刻目突帯が貼り付けられた甕形土器で，66は直径7.5cmの平底で丸みをもって立ち上がる器種不明の土器の底部である。

土坑13　２条の沈線を持つ壺形土器の肩部が出土している。

土坑14　68は断面三角形の突帯を持つ甕形土器の胴部で，69は重弧文を持つ壺形土器の肩部が出土している。

土坑15　70は断面三角形の突帯にヘラ状工具で刻目を施した甕形土器の底部である。

土坑16　71はヘラミガキの残る器種・部位不明の土器である。76は甕形土器の底部である。

土坑17　甕形土器が出土している。72は口縁部から少し下がった位置に突帯を持つ。欠損して突帯の形状や施文は不明である。73は不定形の突帯を屈曲部に持つ胴部である。

土坑19　74はていねいに磨かれた壺形土器の肩部，75は断面三角形の突帯を持ち，棒状工具で施文をした甕形土器の胴部が出土している。

土坑20　77は甕形土器の胴部下半部が出土している。

土坑21　78・79は断面三角形の突帯を持つ甕形土器の胴部が出土している。

土坑22　80は口縁部に断面三角形の突帯を持つ鉢形土器が出土している。

土坑24　81は口縁部の内傾する鉢形土器が出土している。

土坑25　82は口唇部に刻目のある如意状口縁の甕形土器が出土している。

第15表　弥生時代土坑内出土遺物観察表

挿図番号	土坑名	遺物番号	取上番号	器種	部位	出土区	調整		色調		胎土								旧遺構名	備考
							内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	火山ガラス	片岩	その他		
第70図	土坑1	34	土1	壺形土器	肩部	B — 41	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	橙	橙	○		○			○			土1	
	土坑2	35	土1	甕形土器	口縁部	C — 17	指ﾅﾃﾞ	粗いﾅﾃﾞ	橙	明赤褐		○	○			○	○	軽石・茶粒	ー	棒状工具による口唇部刻目
	土坑3	36			胴部	C — 18	ﾊｹ目	ﾊｹ目	にぶい黄	にぶい橙	○	○	○			○		軽石	土1	ﾍﾗｹｽﾞﾘの段付・内外面に段をつける。傾き不明
	土坑4	37	土20241	甕形土器	口縁部	E — 18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	灰褐	○		○			○			土2	刻目突帯文
		38	土20240	壺形土器	胴部	E — 18	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○		○			○		茶粒	土	丹塗磨研
		39	226	甕形土器	口縁～胴部	E — 18	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	軽石	土2	貼付突帯・ﾍﾗｷｻﾞﾐ
		40	20230	甕形土器	胴部	E — 18	(上)ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ(下)ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○		軽石・茶粒	土2	
		41	20222	甕形土器	胴部	E — 18	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙		○	○			○			土2	
		42	20246	壺形土器	胴部	E — 18	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押さえ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	茶粒	土2	丹塗り
		43	7208	壺形土器	口縁部	E — 18	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	にぶい褐	橙		○	○			○			土2	突帯文
		44	20247	深鉢	口縁部	E — 18	指ﾅﾃﾞ・指押さえ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後指押さえ	橙	橙	○	○	○			○	○	軽石	土2	口縁部ｷｻﾞﾐ目突帯文(外)組織痕
		45	20236 20228	高坏	脚部	E — 18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	赤褐	赤褐	○		○		○	○		茶粒・砂粒	土2	
		46	202	紡錘車	完形	E — 18	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		土坑2	最大長5.6cm孔径0.8cm厚さ1.3cm
第71図	土坑5	47	土2	甕形土器	胴部	B — 19	粗いﾅﾃﾞ	ﾊｹ目	灰ｵﾘｰﾌﾞ	灰	○		○			○	○		土2	ﾊｹ目による正逆方向に交差する
		48	土2	甕形土器	胴部	B — 19	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	橙	黄褐	○		○			○	○	軽石	土2	刻目突帯文
		49	土2	壺形土器	口縁部	B — 19	ﾍﾗﾅﾃﾞ	粗いﾐｶﾞｷ	にぶい黄褐	灰黄褐		○	○			○	○	茶粒	土坑	
		50	土2	壺形土器	口縁部	B — 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○	軽石		沈線(三条)
	土坑6	51	土3	甕形土器	口縁部	C — 19	ﾅﾃﾞ				○	○	○			○	○		土3	刻目突帯文・貝殻条痕
		52	土3	甕形土器	口縁部	C — 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ・粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ	明褐	橙	○	○	○			○		軽石	土3	刻目突帯文
		53	土3	甕形土器	胴部	C — 19	ﾊｹ目	ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ	灰	橙			○			○	○	軽石・茶粒	土坑	
	土坑7	54	土	甕形土器	口縁部	C — 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	明赤褐	黄灰	○	○				○	○		土1	刻目突帯文
		55	ー	甕形土器	底部	C — 20	指頭圧痕・ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○		○	茶粒	土1	
		56	土1	甕形土器	底部	C — 20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐	明石褐	○	○	○			○	○	茶粒	土1	
		57	土1	壺形土器	胴部	C — 20	ﾅﾃﾞ・剥離	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	明赤褐	○		○		○	○		軽石	土坑	丹塗り
	土坑8	58	土5	甕形土器	口縁部	C — 20	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい橙	○	○				○		軽石・砂粒・茶粒	土坑	刻目突帯文
	土坑9	59	土2	浅鉢	口縁部	C — 20	ﾅﾃﾞ	(上)ﾍﾗﾐｶﾞｷ(下)指ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	土坑	口唇部丁寧なﾅﾃﾞ
		60	土2	甕形土器	胴部	C — 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明茶褐	橙	○	○	○			○	○	磁鉄鉱・茶粒・石かんらん石	土坑2	
		61	土2	杯	杯部	C — 20	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	土坑2	(内)剥離面が多く観察が難しい
	土坑10	62		甕形土器	胴部	E — 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○			土1	刻目突帯文
		63	土1	壺形土器	頸部	E — 20	ﾅﾃﾞ・剥離	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	橙	明赤褐	○		○		○	○		赤かんらん石	土1	丹塗り
	土坑12	64	土2	甕形土器	口縁部	C — 22	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄褐	暗灰黄	○	○				○			土坑	刻目突帯文
		65	土2	甕形土器	口縁部	C — 22	ﾊｹ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｵﾘｰﾌﾞ褐	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐	○	○				○		軽石	土坑	
		66	土2	甕形土器？	底部	C — 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○		茶粒	土坑	粗粒子1～4ﾐﾘの物が多い、表面は綺麗に調整している。
	土坑13	67	土2	壺形土器		D — 22	指ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	明黄褐	にぶい橙	○	○	○		○				土坑	二重沈線文
第72図	土坑14	68	土3	甕形土器	胴部	D — 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○		軽石	土坑	刻目突帯文
		69	土3	壺形土器	頸部	D — 22	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○		○		○	○		軽石	土坑3	重弧文
	土坑15	70	土4	甕形土器	胴部	D — 22	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	黒褐	黒褐	○	○				○		軽石	土坑	
	土坑16	71	土7	浅鉢？	底部	D — 22	ｹｽﾞﾘ？	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄	黄灰	○	○				○		軽石・ﾊﾟﾐｽ・茶粒	土坑	黒色磨研・丹塗り
	土坑17	72	土23	甕形土器	口縁部	D — 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○			○	○	軽石・茶粒	土坑	刻目突帯文
		73	土3	甕形土器	胴部	D — 23	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	橙	明褐		○	○			○		軽石・茶粒	土坑	
	土坑19	74	土1	壺形土器	肩部	D — 23	ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○			○			土坑	
		75	土1	甕形土器	胴部	D — 23	指押さえ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	褐	○	○				○	○	砂粒	土坑	刻目突帯文
		76	土7	甕形土器	底部	D — 22	ﾅﾃﾞ・指押さえ	横方向の板ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	明赤褐	○		○			○		軽石	土坑	
	土坑20	77	4	甕形土器	胴部	C — 24	ﾍﾗﾅﾃﾞ後指ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ後指ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○				○		軽石	土坑	
	土坑21	78	土2	甕形土器	胴部	C — 24	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○			土坑	
		79	土2.10764		胴部	C — 24	ｹｽﾞﾘ		黄橙	にぶい褐			○			○		軽石・茶粒	土坑	刻目突帯文
	土坑22	80	1	甕形土器		C — 26	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	暗灰黄	にぶい褐	○	○	○			○		軽石	土	
	土坑24	81	土3	浅鉢	口縁部	D — 28	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○						ー	黒川式遺構・黒色磨研
	土坑25	82	土1	甕形土器	口縁部	D — 28	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○	○		ー	如意状口縁

第16表　弥生時代竪穴住居跡計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土区遺物番号	備考(旧遺構名)
第56・59図	竪穴住居	C　ー　21,22	310	260	16	1～21	住居趾
第55図	柱穴①	C　ー　22	30	28	41	なし	住居趾
	柱穴②	C　ー　21	28	20	28	なし	住居趾
	柱穴③	C　ー　21	28	27	23	なし	住居趾
	柱穴④	C　ー　22	30	28	25	なし	住居趾
	柱穴⑤	C　ー　22	28	27	34	なし	住居趾

第17表　弥生時代竪穴状遺構計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物番号	備考(旧遺構名)
第61図	1号竪穴状遺構	E　ー　20	240	217	18	22～33	土坑2
	2号竪穴状遺構	F　ー　18	280	260	30	なし	土坑

第18表　弥生時代の土坑計測表　　(　) は推定値

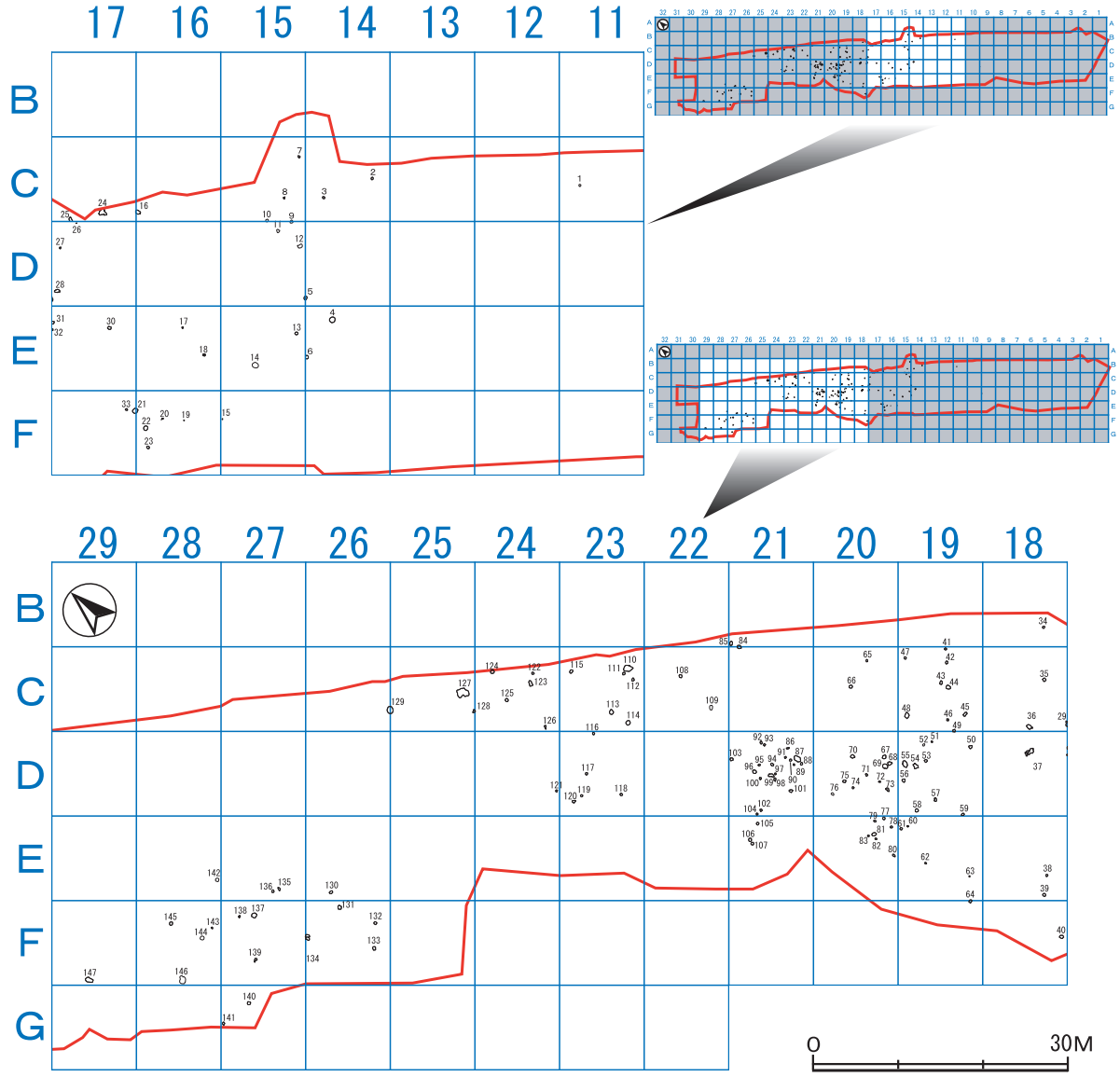
挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物番号	備考(旧遺構名)
第65図	土坑1	B　ー　14	315	31	32	34	土坑1
	土坑2	C　ー　17	250	51	40	35	土坑1
	土坑3	C　ー　18	172	42	80	36	土坑1
第66図	土坑4	E　ー　18	260	223	18	36～46	土坑2
	土坑5	B　ー　19	120	80	79	47～50	土坑2
	土坑6	B　ー　19	(106)	82	47	51～53	土坑3
	土坑7	C　ー　20	112	106	40	54～57	土坑1
第67図	土坑8	C　ー　20	82	80	10	58	土坑5
	土坑9	C　ー　20	152	136	18	59～61	土坑2
	土坑10	E　ー　20	136	40	35	62・63	土坑1
	土坑11	D　ー　21	144	52	15	図化不可	土坑1
	土坑12	C　ー　22	207	60	40	64～66	土坑2
	土坑13	D　ー　22	110	70	51	67	土坑2
第68図	土坑14	D　ー　22	230	85	40	68・69	土坑3
	土坑15	D　ー　22	150	130	45	70	土坑4
	土坑16	D　ー　22	126	48	45	71・76	土坑7
	土坑17	D　ー　23	190	113	50	72・73	土坑3
第69図	土坑18	D　ー　23	126	76	42	図化不可	土坑2
	土坑19	D　ー　23	130	85	45	74・75	土坑1
	土坑20	C　ー　24	145	38	31	77	土坑4
	土坑21	C　ー　24	167	149	6	78・79	土坑2
第70図	土坑22	C　ー　26	(116)	68	30	80	土坑1
	土坑23	D　ー　27	127	50	9	図化不可	土坑2
	土坑24	D　ー　28	137	66	48	81	土坑3
	土坑25	D　ー　28	140	120	16	82	土坑1

・　**ピット群**（第74図～第75図）

弥生時代のピット群は，147基を検出した。ピットの中からは，小片の土器が多数検出され，ピット内遺物として一括して取り上げられている。その内図化できたものは，14点である。

○　**ピット内出土遺物**

83・84はＤ－15区のピット14から出土した壺形土器の肩部である。83は外面に細い鋸歯状のの沈線が二条みられる。84は外面を丁寧に磨いている。85はＥ－18区ピット39から出土した口縁部が強く内傾し，外面に断面三角形の突帯が貼り付けられている鉢形土器である。86はＥ－16区ピット20で出土した口縁部に小さな断面三角形の突帯を接し，胴部屈曲部に口縁部より少し大きな突帯を貼り付け，ヘラ状工具で刺突施文を施した甕形土器である。87はＤ－19区ピット51で出土した内傾する口縁部を持ち，やや下に成形の粗い刻目突帯を貼り付けた甕形土器である。88はＤ－19区ピット52で出土した口縁部が如意形をしている壺形土器である。89はＤ－19区ピット51

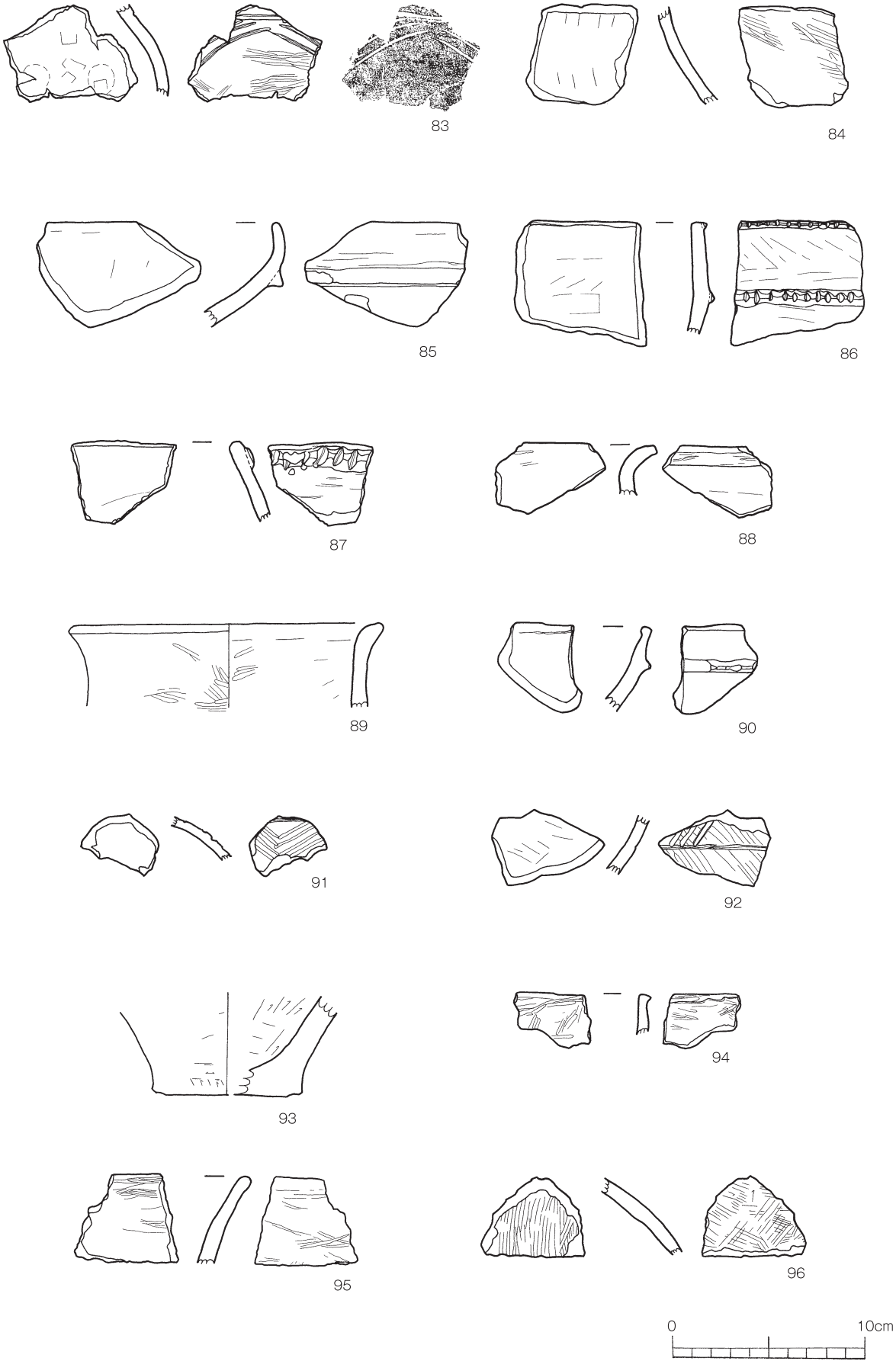


第73図　弥生時代のピット位置図

で出土した壺形土器である。口縁直径が16㎝で，口縁部で緩やかに外反している。90はＤ－19区ピット58で出土した甕形土器である。口縁部に突帯を持たず，口縁下部に断面三角形の刻みのない突帯が貼り付けられている浅い器形である。91はＥ20－区ピット83で出土した壺形土器の肩部で，四条の鋸歯状沈線文がみられる。92はＤ－21区ピット88で出土した壺形土器の肩部で，三条以上の鋸歯状沈線文とその下に一条の沈線がみられる。器面は，粗いハケメを施す。93はＣ－22区ピット109で出土した甕形土器の底部で，直径が８㎝ある。94はＤ24－区ピット121で出土した甕形土器である。口縁部に小さな断面三角形の突帯を乗せている。95はＣ－24区ピット119で出土した広く外反する壺形土器の口縁部である。96はＥ－27区ピット129で出土したハケメとナデで鬼面を調製した壺形土器の肩部である。

第19表　弥生時代のピット計測表

番号	区			長径	短径	深さ	番号	区			長径	短径	深さ	番号	区			長径	短径	深さ
1	Ｂ	－	11	26	24	48	50	Ｄ	－	19	42	30	48	99	Ｄ	－	21	70	32	39
2	Ｂ	－	14	31	24	46	51	Ｄ	－	19	22	16	40	100	Ｄ	－	21	26	24	50
3	Ｂ	－	14	31	24	41	52	Ｄ	－	19	32	26	23	101	Ｄ	－	21	40	30	40
4	Ｄ	－	14	70	60	105	53	Ｄ	－	19	34	32	59	102	Ｄ	－	21	28	23	42
5	Ｃ	－	14	44	31	38	54	Ｄ	－	19	70	52	26	103	Ｄ	－	21	40	36	37
6	Ｄ	－	14	42	32	41	55	Ｄ	－	19	40	20	35	104	Ｄ	－	21	24	22	42
7	Ｂ	―	15	24	23	29	56	Ｄ	－	19	40	36	34	105	Ｅ	－	21	32	28	41
8	Ｂ	－	15	38	16	―	57	Ｄ	－	19	40	30	―	106	Ｅ	－	21	36	42	51
9	Ｃ	－	15	40	32	23	58	Ｄ	－	19	57	22	37	107	Ｅ	－	21	34	32	51
10	Ｂ	－	15	34	32	26	59	Ｄ	－	19	37	32	49	108	Ｃ	－	22	38	36	6
11	Ｃ	－	15	42	30	67	60	Ｅ	－	19	28	14	18	109	Ｃ	－	22	60	38	19
12	Ｃ	－	15	58	36	―	61	Ｅ	－	19	30	28	25	110	Ｃ	－	23	116	66	36
13	Ｄ	－	15	36	33	44	62	Ｅ	－	19	26	20	53	111	Ｃ	－	23	38	32	51
14	Ｄ	－	15	80	68	46	63	Ｅ	－	19	20	17	29	112	Ｃ	－	23	40	34	24
15	Ｅ	－	15	24	22	44	64	Ｆ	－	19	38	36	28	113	Ｃ	－	23	60	48	26
16	Ｂ	－	16	64	40	42	65	Ｃ	－	20	28	24	60	114	Ｃ	－	23	54	50	61
17	Ｄ	－	16	20	16	29	66	Ｃ	－	20	40	37	57	115	Ｃ	－	23	42	34	46
18	Ｄ	－	16	30	22	―	67	Ｄ	－	20	50	40	19	116	Ｄ	－	23	35	32	11
19	Ｅ	－	16	24	12	60	68	Ｄ	－	20	52	40	25	117	Ｄ	－	23	32	30	60
20	Ｅ	－	16	24	10	52	69	Ｄ	－	20	66	50	22	118	Ｄ	－	23	32	27	51
21	Ｅ	－	16	66	56	78	70	Ｄ	－	20	52	42	36	119	Ｄ	－	23	30	26	42
22	Ｅ	－	16	56	46	88	71	Ｄ	－	20	34	24	71	120	Ｄ	－	23	46	22	51
23	Ｅ	－	16	32	31	118	72	Ｄ	－	20	28	16	―	121	Ｄ	－	24	28	22	34
24	Ｃ	－	17	16	10	20	73	Ｄ	－	20	60	30	19	122	Ｃ	－	24	44	18	21
25	Ｃ	－	17	21	16	15	74	Ｄ	－	20	24	20	20	123	Ｃ	－	24	64	30	32
26	Ｃ	－	17	65	34	132	75	Ｄ	－	20	50	32	―	124	Ｃ	－	24	46	42	57
27	Ｃ	－	17	66	20	99	76	Ｄ	－	20	34	24	54	125	Ｃ	－	24	42	36	23
28	Ｄ	－	17	42	33	71	77	Ｅ	－	20	34	28	40	126	Ｃ	－	24	50	26	―
29	Ｄ	－	17	40	32	59	78	Ｅ	－	20	30	22	38	127	Ｃ	－	25	156	124	50
30	Ｄ	－	17	26	20	71	79	Ｅ	－	20	30	22	28	128	Ｃ	－	24	34	32	41
31	Ｅ	－	17	26	18	62	80	Ｅ	－	20	40	24	18	129	Ｃ	－	25	86	68	31
32	Ｂ	－	18	26	24	33	81	Ｅ	－	20	56	40	33	130	Ｅ	－	26	43	32	61
33	Ｃ	－	18	41	34	98	82	Ｅ	－	20	20	20	36	131	Ｆ	－	26	48	36	63
34	Ｃ	－	18	80	44	29	83	Ｅ	－	20	22	18	19	132	Ｆ	－	26	38	30	40
35	Ｄ	－	18	110	30	42	84	Ｂ	－	21	54	38	25	133	Ｆ	－	26	46	34	30
36	Ｅ	－	18	26	26	27	85	Ｂ	－	21	50	33	51	134	Ｆ	－	26	74	40	50
37	Ｅ	－	18	40	36	66	86	Ｄ	－	21	44	22	53	135	Ｅ	－	27	44	14	44
38	Ｆ	－	18	52	33	38	87	Ｄ	－	21	90	58	30	136	Ｅ	－	27	38	26	33
39	Ｃ	－	19	28	26	―	88	Ｄ	－	21	32	30	26	137	Ｆ	－	27	70	64	30
40	Ｃ	－	19	34	30	64	89	Ｄ	－	21	20	18	55	138	Ｆ	－	27	30	22	35
41	Ｃ	－	19	32	30	―	90	Ｄ	－	21	28	24	36	139	Ｆ	－	27	50	32	16
42	Ｃ	－	19	54	44	34	91	Ｄ	－	21	22	20	33	140	Ｇ	－	27	40	36	65
43	Ｃ	－	19	34	32	49	92	Ｄ	－	21	28	28	41	141	Ｇ	－	27	32	31	33
44	Ｃ	－	19	40	30	53	93	Ｄ	－	21	40	26	39	142	Ｅ	－	28	40	42	16
45	Ｃ	－	19	28	26	24	94	Ｄ	－	21	38	30	39	143	Ｆ	－	28	20	20	―
46	Ｃ	－	19	76	52	20	95	Ｄ	－	21	26	22	49	144	Ｆ	－	28	52	44	―
47	Ｃ	－	19	32	28	32	96	Ｄ	－	21	46	40	57	145	Ｆ	－	28	50	38	34
48	Ｃ	－	19	42	30	48	97	Ｄ	－	21	22	22	28	146	Ｆ	－	28	64	100	39
49	Ｃ	－	19	22	16	40	98	Ｄ	－	21	42	24	43	147	Ｆ	－	29	96	50	58



第74図　弥生時代のピット内出土遺物

2　遺　物

主たる包含層はⅢ層であるが，Ⅱ・Ⅲ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ・Ⅳ・Ⅴの各層から，甕形，鉢形，壺形，高坏形の土器，機種不明のもの，底部などの各土器が，磨製石斧，打製石斧，磨石・敲石，石皿，砥石，石包丁，軽石製品，三角壕形石器などの石器が出土している。

⑴　弥生時代の出土土器

甕形・鉢形・高坏形土器は，口縁部や突帯の形状，壺形土器は，口縁部，肩部の形状により，以下のように分類し，底部は器種が不明であるため，別途分類表を作成した。

甕形土器	A	夜臼Ⅱ～板付Ⅰ式相当	器形：上胴部で「く」の字に屈曲する。屈曲の強いものと弱いものがある。 突帯：口唇部から少し下がった位置に丁寧に成形されていない突帯が付く。 文様：刻目は大振りな刻みが多く，ヘラ状工具や爪を用いて施文している。 調整：粗いケズリ，条痕，ミガキ
	B	夜臼Ⅱ～板付Ⅰ式相当	器形：上胴部は，A類より緩やかに屈曲する。口縁から胴部にかけて，内弯するものや砲弾形に開くものもある。 突帯：断面三角形の突帯を口縁部に接して施し，丁寧に成形する。 文様：深い刻目を持つがA類より小さい刻目で，ヘラ状工具により施文する。山形の重弧文を胴部上部に施すものもある。 調整：粗いナデ，ケズリ，条痕。A類より丁寧な調整を行う。
	C	高橋式・板付Ⅱ（初頭頃）式相当	器形：上胴部は，A・B類より緩やかに屈曲するものと，屈曲のない砲弾形のがある。 突帯：小さな突帯を口縁部に付けるものとつまみ出してナデて成形するものがある。突帯は，B類より上に付き，口縁部と一体化するために，上面が平坦になる。また，口唇部に直接刻目を持つものや刻目のないものがある。 文様：ヘラ状工具により細く鋭い刻目を持つ。また，刻目を持たないものもある。 調整：ケズリ，ミガキ，粗いナデ
	D	高橋式・板付Ⅱ式相当	器形：屈曲がほとんどなくなり，底部に向かって緩やかに膨らむものと砲弾形をなすものがある。 突帯：断面三角形の突帯が，口唇部に接する。非常に小さな突帯を持つものがある。 文様：刻目はC類より小さくヘラ状工具で密に施す。 調整：丁寧なナデ，ハケ目
	E	高橋式・板付Ⅱ式相当	器形：口縁部は，折り曲げたり緩やかに外反したりする如意形で，緩やかに張る胴部を持つ。(折衷型を含む) 突帯：突帯を持たないものや胴部に突帯を持つものがある。 文様：口唇部に，細かく密な刻目を持つ。 調整：ナデ，ハケ後ナデ
	F	入来Ⅰ式	器形：大きな突帯が平坦な口縁部を形成し，緩やかに張る胴部を持つ。 文様：口縁端部に細かな刻目を持つものや持たないものがある。 調整：ナデ，ハケ後ナデ
	G	入来Ⅱ式	器形：口縁部が下方に向かって垂れ下がり，緩やかに張る胴部を持つ。 文様：大きな突帯が口縁部に接し，端部は，浅く凹む。。胴部に3条の突帯を持つものもある。 調整：ナデ，ハケ後ナデ，ミガキ
	H－1	黒髪式	器形：断面三角形の口縁部が上方へ傾き，口縁部上面は浅く凹む。内面に弱い張り出しを持つ。 調整：ナデ
	H－2	黒髪式	器形：断面三角形の口縁部が上方へ傾き，口縁部上面の反りが強い。内面に強い張り出しを持つ。 調整：ナデ
	I	須玖式	器形：断面方形に近い口縁部が下方に弱く傾く大型の土器 調整：ナデ

第75図　弥生時代の分類土器一覧

鉢形土器	J		器形: 山形の口縁部で，口唇部は小さく直立する。上胴部は屈曲する。 調整: 黒色磨研，ヘラミガキ
	K		器形: 玉縁やリボン状の突帯を持つ 調整: ヘラミガキ，ナデ
	L		器形: 口縁部は，強く折り曲げたものや肥厚させたもの，平坦なものや断面三角形の突帯を付したものがある。胴部は強く屈曲し，屈曲部から内側へ外反するものや上方へまっすぐ伸びるものがある。また，屈曲部を肥厚させて三角断面の突帯状に成形したものもある。 調整: ヘラミガキ，ケズリ後ナデ，ナデ
	N		器形: 胴部で緩やかに屈曲し，口縁部は屈曲部から緩やかに外反する。 調整: ヘラミガキ，ナデ
	M		器形: 浅いボウル状を呈する口縁部が，平坦なものやリボン状の突帯を持つもの，口縁部に接するか少し下がった位置に刻目突帯文を持つものがある。胴部は緩やかに内弯しながら底部に至るものとまっすぐに底部に伸びるものがある。 調整 ヘラケズリ後ナデ，条痕，ミガキ
	O		器形: 平坦な口縁部や先のとがった口縁を持ち，緩やかに内弯するボウル状の胴部を持つ。 調整: ヘラミガキ，ヘラケズリ後ナデ，ナデ
	P		器形: 口縁部は，如意形を呈する。 調整: ナデ，ヘラミガキ
	Q		器形: 波状口縁で，口縁部に接して刻目突帯文を持つ。胴部は緩やかに底部に伸びる。 調整: ヘラケズリ後ナデ
	R		器形: リボン状の突起を持ち，突起内に沈線を施す。胴部で強く屈曲し，屈曲部から外反する。 調整: ヘラミガキ
壺形土器	S	夜臼式相当	器形: まっすぐに伸びる口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ，ナデ
	T	高橋式・板付Ⅱ式相当	器形: 段を持ち，外に開く口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ，ナデ
	U	高橋式・板付Ⅱ式相当	器形: 肥厚させた口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ，ナデ
	V	高橋式・板付Ⅱ式相当	器形: 如意形に外反させる口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ，ナデ
	W		1 肩部に段のあるもの　3 突帯を持つもの 2 肩部に沈線を施すもの　4 連点文を持つもの
	X	高橋式・板付Ⅱ式相当	1 山形文を持つもの　4 格子文を持つのもの 2 重弧文を持つもの　5 無紋のもの 3 貝殻重弧文を持つもの　6 彩文土器
高坏	Y		器形: 口縁部は，大きく外に開き，脚部上部に断面三角形の突帯を持つ。 調整: ヘラミガキ，ナデ

第75図　弥生時代の分類土器一覧

ア　弥生時代の甕・鉢・壺形土器（第77図～第125図）

壺形土器

甕形土器の分布状況は，ＣＤ－19・20区に集中し，Ｂ類土器はⅢ層においてＦ－26・27区に集中する傾向があるが，どの甕形土器も遺跡の中央付近18区から24区にかけて同様の分布状況を示す。Ⅱ層に関しては，Ｂ～Ｃ区の19区～25区に偏って出土している傾向がある。分布する土器の特徴について，分類図に沿って説明を行う。

㈠　Ａ類土器（第77図～第80図）

97～107は，突帯が，口縁部から突帯分下がった位置に付き，器面はヘラケズリあるいはヘラケズリ後ナデ調整を施している。器形は，胴部上部で屈曲の強いものから弱いものがあり，屈曲部から内傾するものと直立するものがある。100は内面に指頭圧痕を持ち丁寧に外面をナデている。104は直立する口縁部は屈曲部と口縁部で押さえて成形している。107は断面三角形の突帯を密に刺突施文を施している。

108・109は胴上部で強く屈曲し，屈曲部に突帯を持たない。屈曲部はやや肥厚し，刻目は棒状工具による刺突施文を施し，俵状の刻目を持つ。原山式土器に似るが，胎土は赤褐色で真似て作成したものの搬入品の可能性がある。

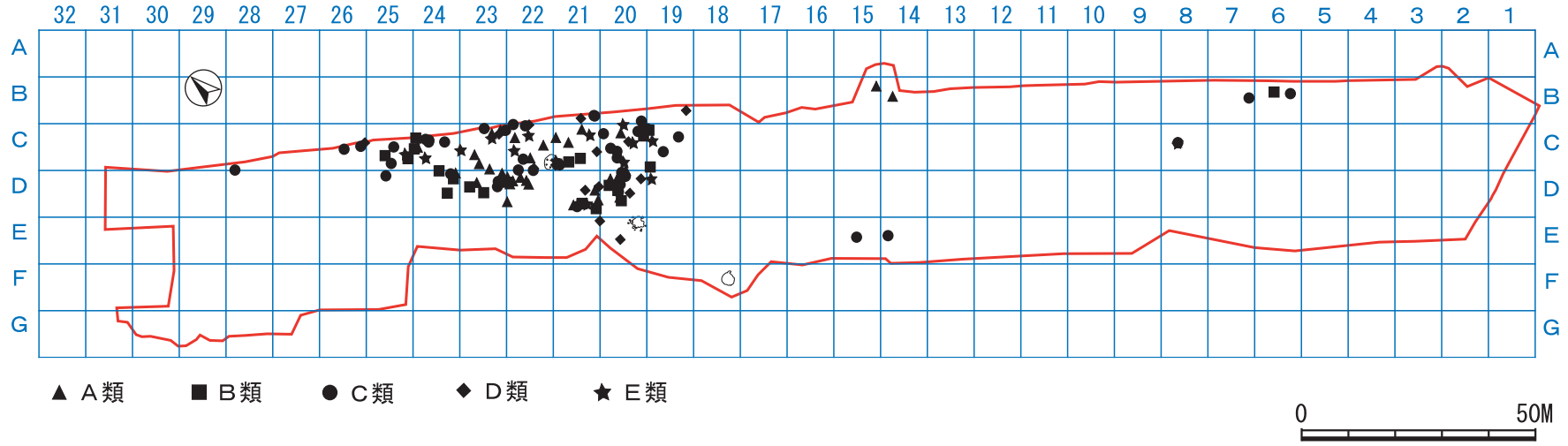
111～113は屈曲部から口縁部にかけて内傾しながら外反する器形を持つ。111は明褐色の胎土を持ち，ヘラ状工具で押し切り施文を施す。114は当職の在地系の胎土を持ち，断面三角形の突帯にやや浅めの施文を施す。116は器面に条痕を持つ。118は二条の突帯間が狭く小型の甕形土器である。119は器形が104に似るが，下段の突帯をヘラ状工具で押し引きで施文を施す。120～122は器形の屈曲が不明であるが，口縁部が外に開く。上段の突帯の位置が，口縁部から一段下がり，刻目も深い。120は内面に条痕を持ち，胎土は黄橙色の在地の土器である可能性が高い。121は口縁部の突帯と２条目の突帯が近接している。125は薄い器壁に小さな断面三角形の突帯を持ち，斜位に刻目を刺突する。127・131は口唇部を丁寧にナデて平坦に成形している。132は口縁部から胴部に向かって外反する。

123～172は小破片のため，突帯がひとつ以上あり，屈曲が不明な土器である。116・172は口唇部を丁寧にナデて平坦にしている。

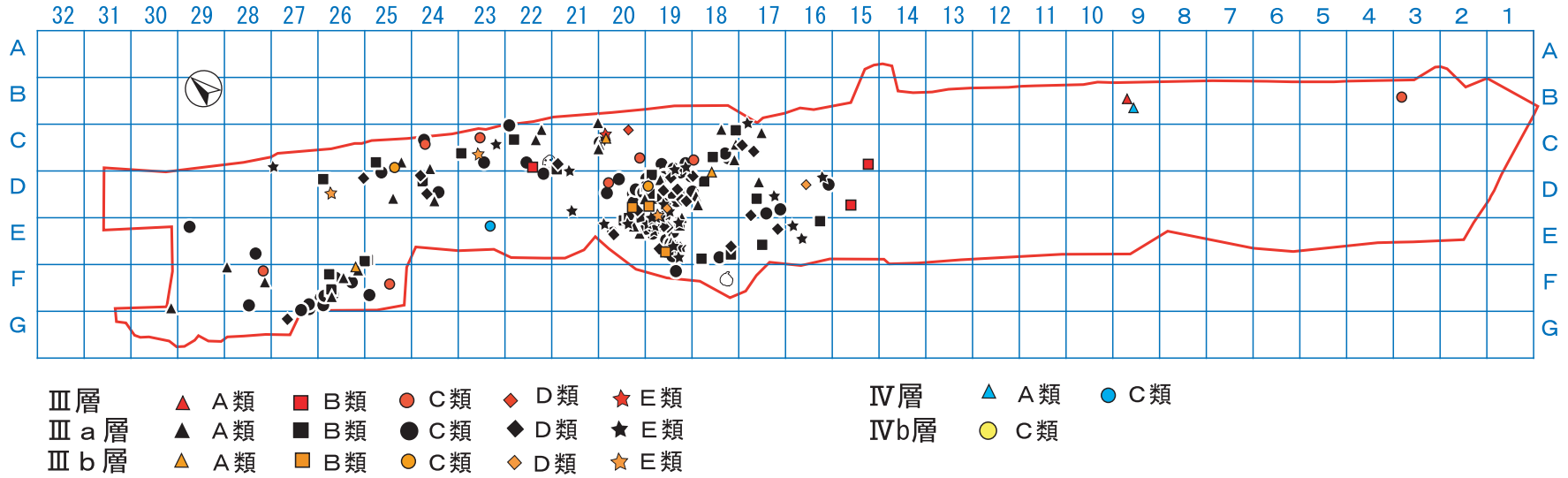
㈡　Ｂ類土器（第81図～第83図）

173～180は胴部屈曲部から緩やかに内傾する甕形土器である。12.3㎝の小型の甕形土器で屈曲部は肥厚し，内面器壁はまっすぐに底部に向かって伸びる。177は上部突帯下に横位のヘラミガキを施し，その下部に条痕を施す。器壁が薄く胎土は外来のものである。179は不定形の突帯にヘラ状工具による押引で施文する。181・182・184は内弯する器形を持ち，192は張り出す胴部より上に２条目の突帯を持つ。183・185は外傾する口縁部を持ち，突帯にヘラ状工具による刺突施文を施す。186～231は小破片のため，突帯が２条以上あるかどうか判断できないため，口縁部の傾きによって掲載した。188・191・194・204・205・229～231上部突帯下部に２～３本の山形や斜位の沈線文を施す。192は上部突帯下を内外面ともヘラミガキを施す。198は断面三角形の突帯に竹管状の工具で刺突施文を施す。207～211は薄い器壁を持ち，断面三角形の突帯にヘラ状工具により刺突施文を施す。胎土はにぶい黄褐・浅黄色

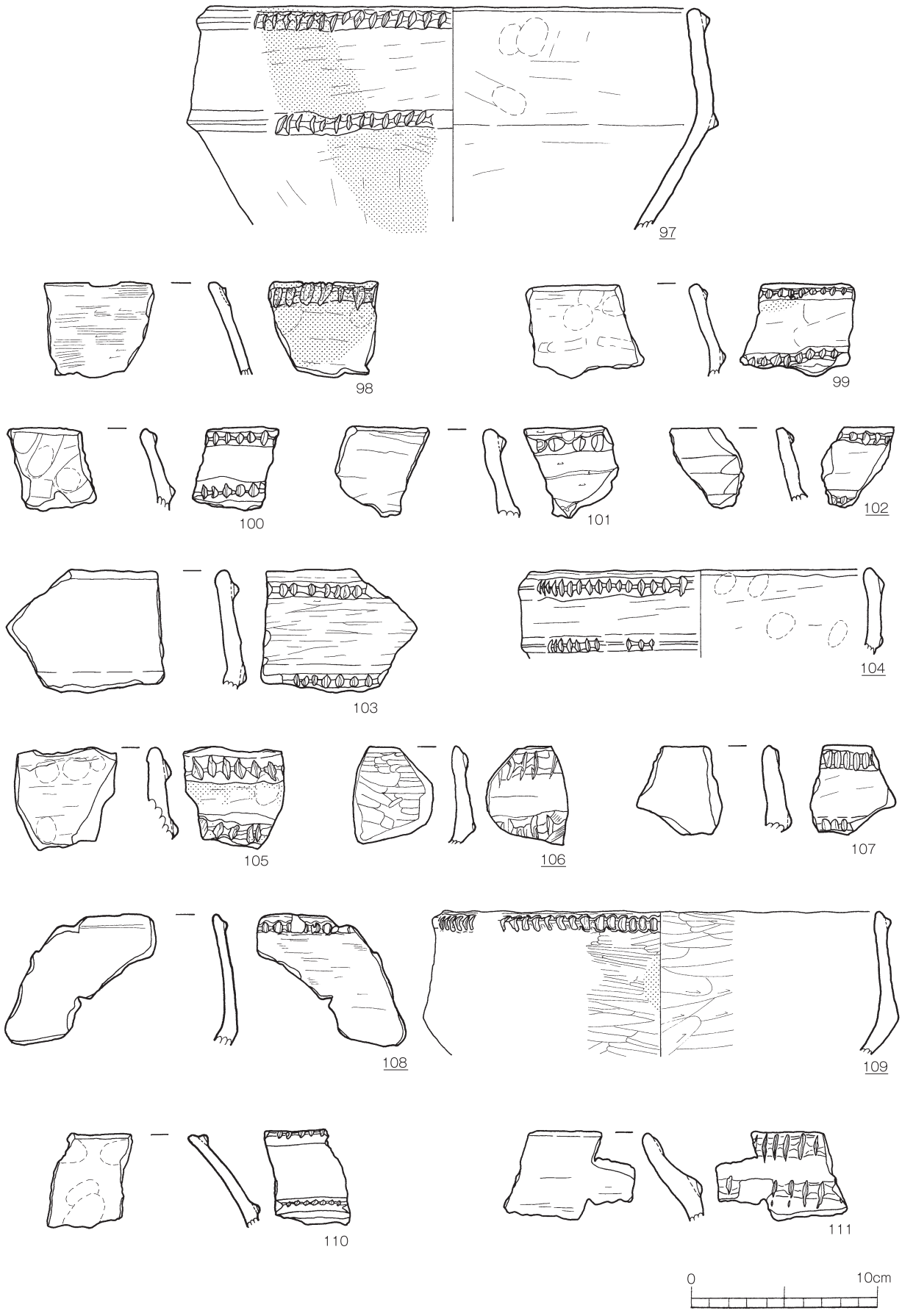
Ⅱ層出土状況



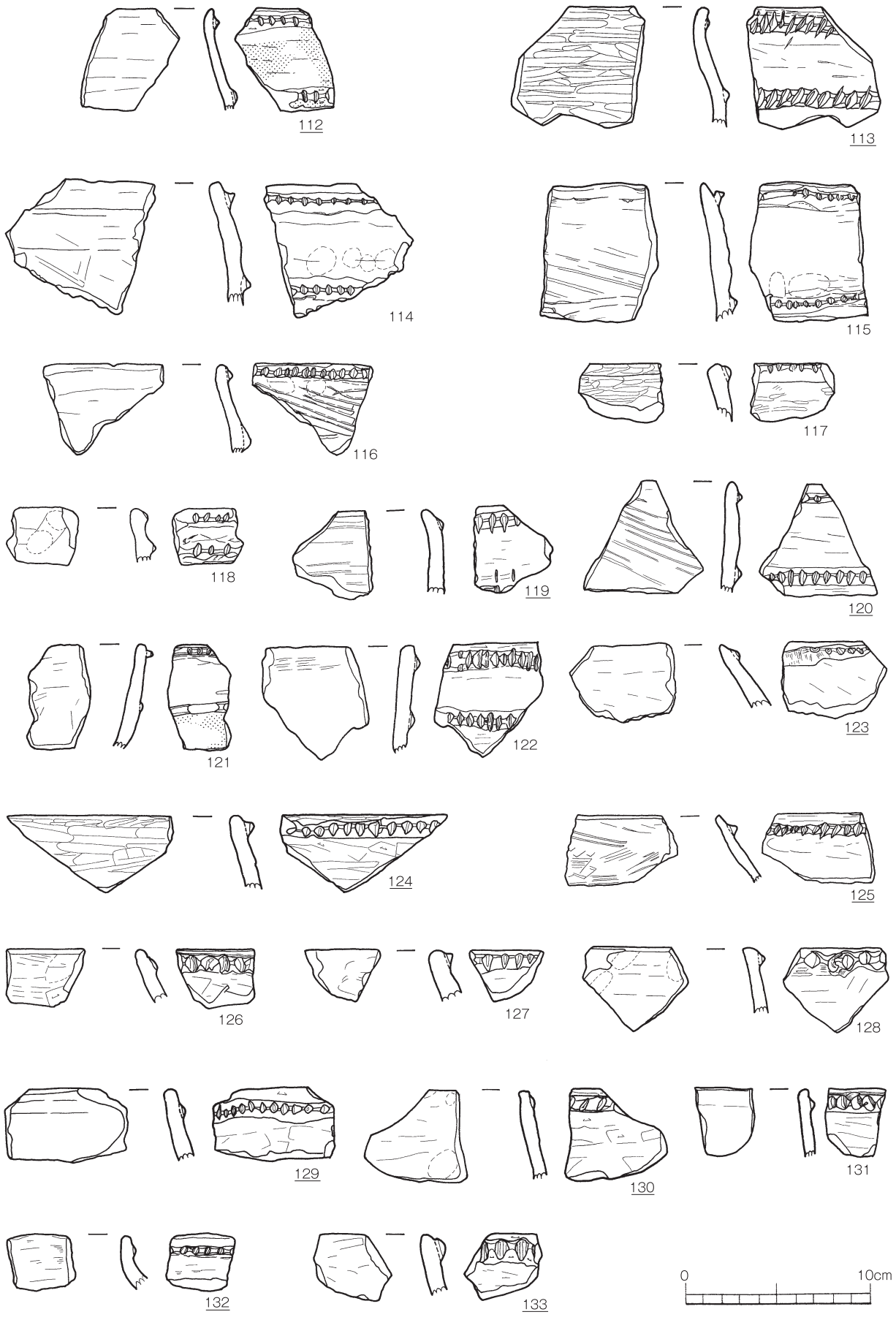
Ⅲ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅳ・Ⅳｂ層出土状況



第76図　弥生時代の甕形土器分布図



第77図　弥生時代の甕形土器１



第78図　弥生時代の甕形土器２

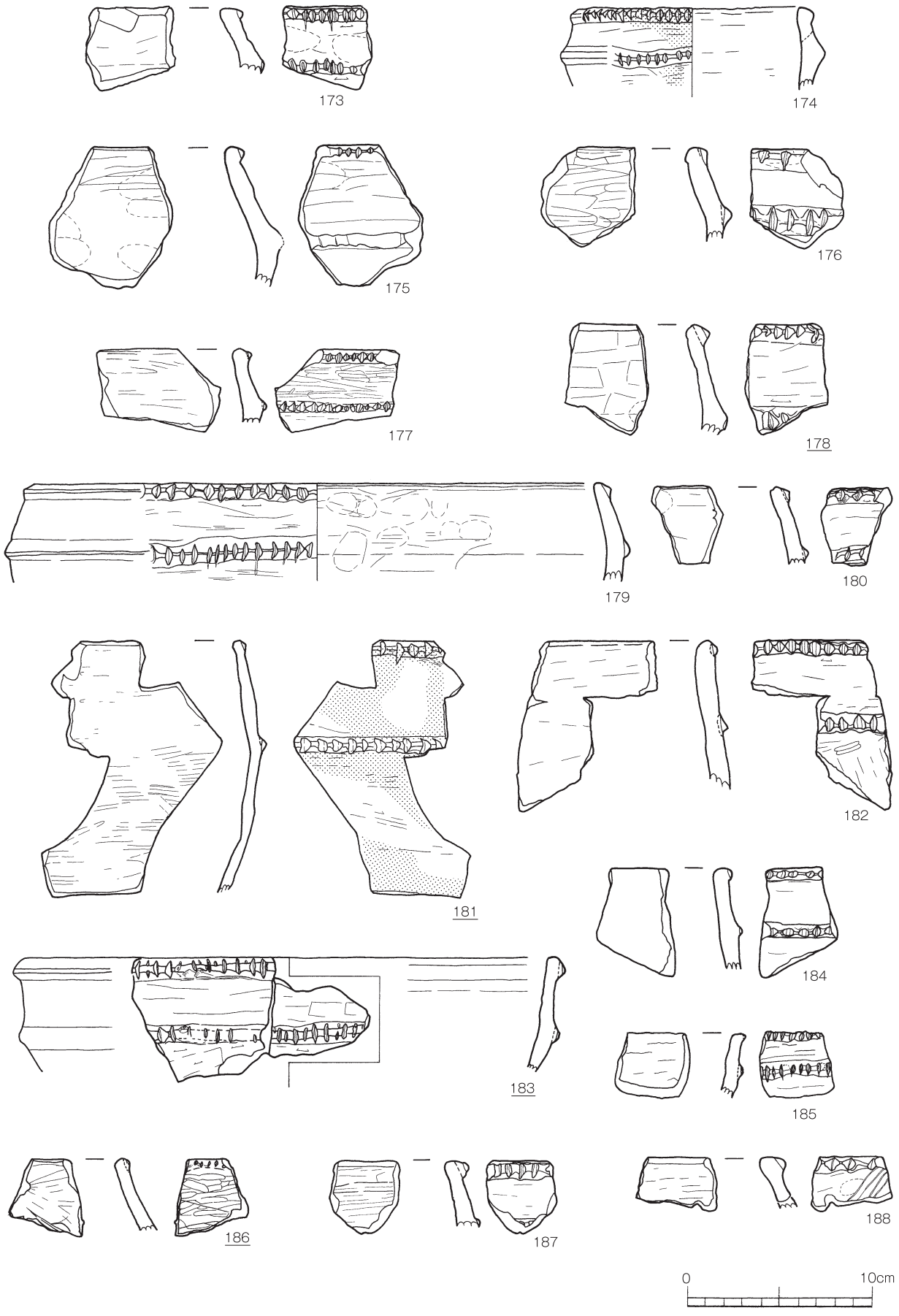
第79図　弥生時代の甕形土器３

第80図　弥生時代の甕形土器４

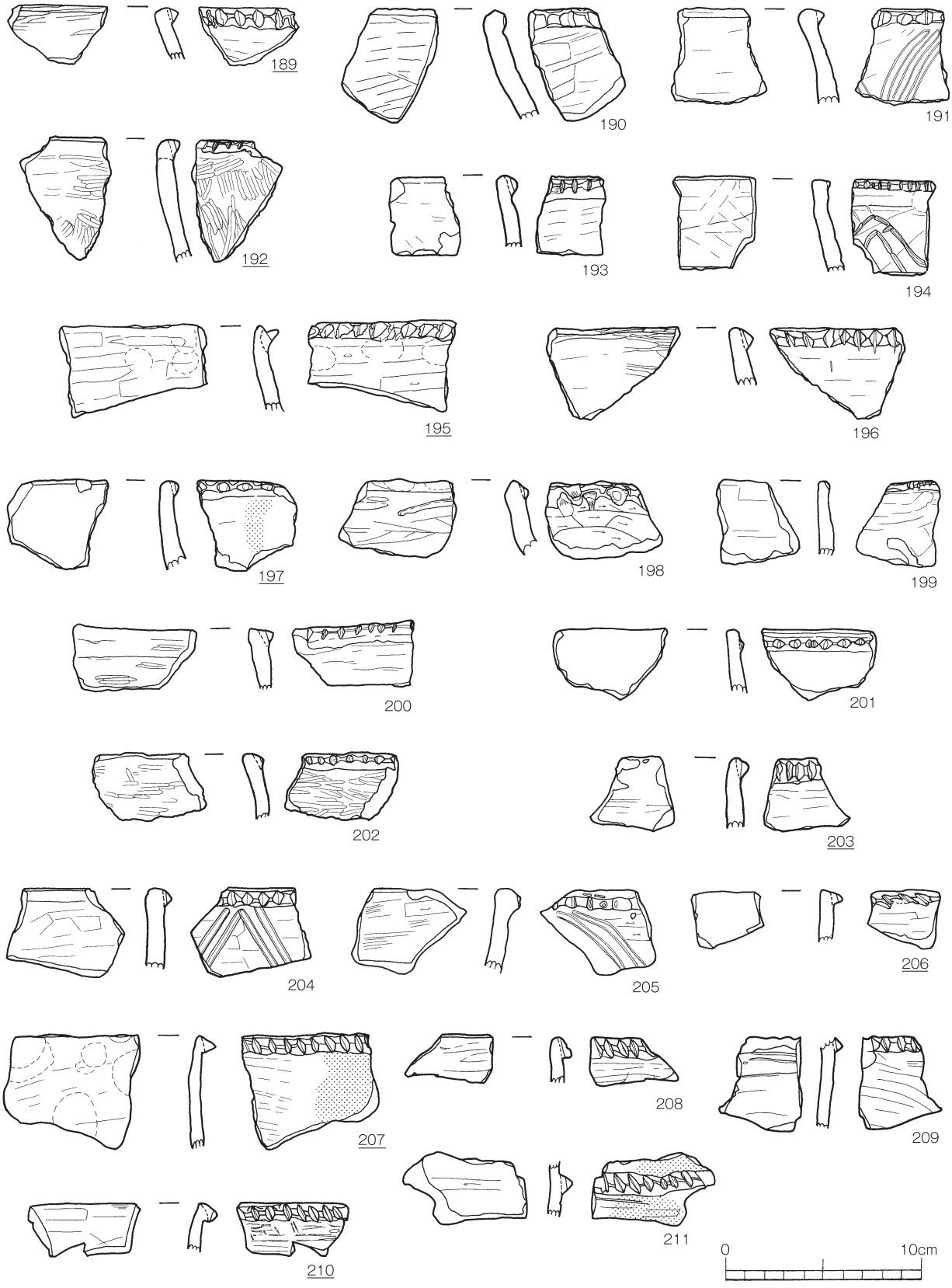
で同一個体と思われる。212～214は口唇部を丁寧にナデて平坦に成形する。219は口縁部突帯から斜位に突帯を貼り付け，刻目を施した土器である。221は口縁部に瘤を持ち，竹管状工具で，口縁上部から刺突施文を施している。219は口縁部に接する突帯に斜位に断面三角形の突帯を貼りつけ，ヘラ状工具による施文を施す。突帯間はヘラミガキで器面調整する。227は口縁部が外傾する。口縁部より少し下に貼りつけた紐状の突帯を竹管状の施文具で押しつけるように刻目を施し，突帯下部の器壁を露出させている。

(ｳ)　C類土器（第84図～第92図）

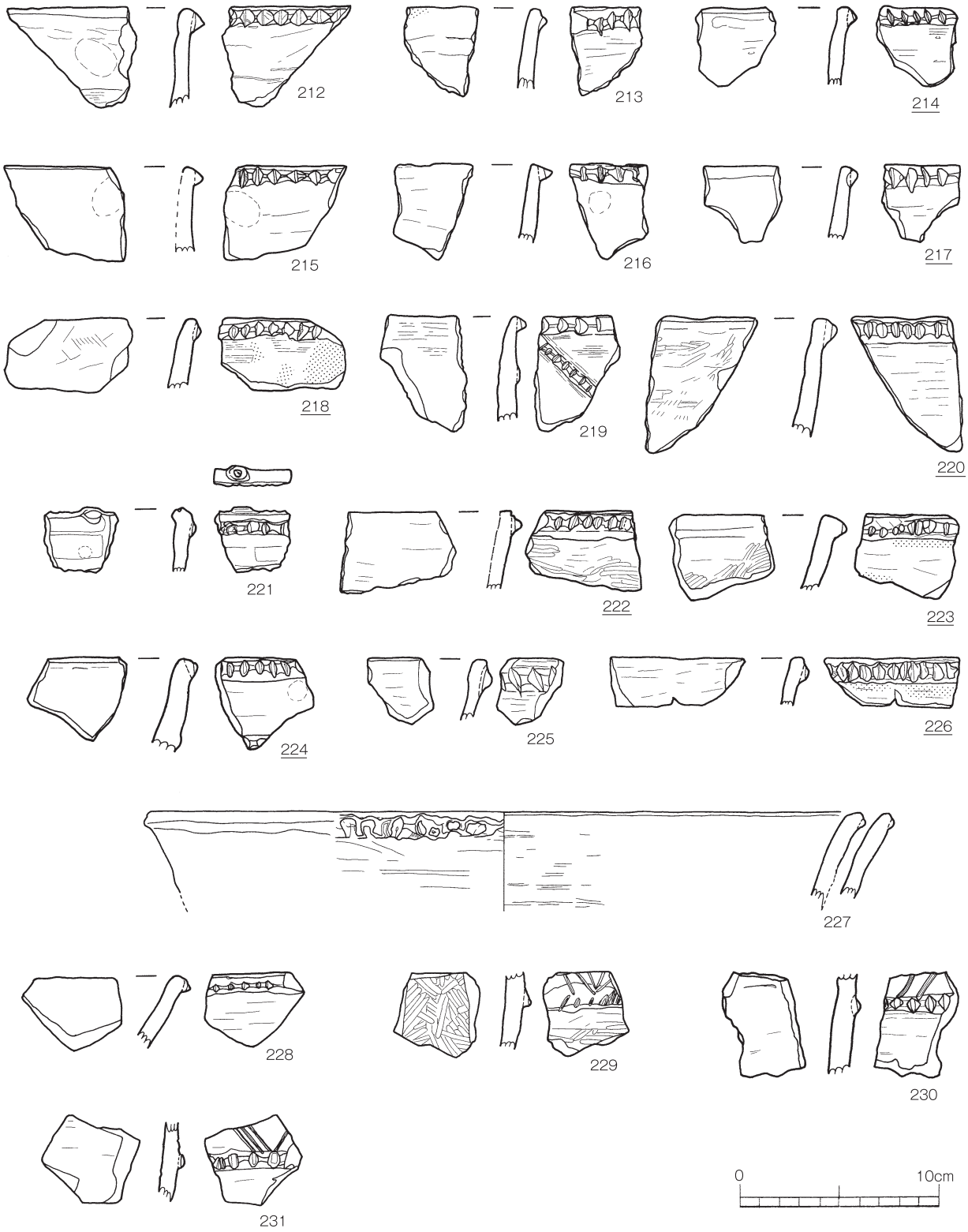
232～285は２条の突帯を持つ甕形土器である。240は屈曲が強く，内面にススの付着のある器高の低い土器である。242・248は小さな突帯に押引で深く施文を施す。内面はヘラケズリによる条痕を残す。239は小さな無刻目の突帯を口縁部に貼り付け，口縁部が山形をなす。245は無刻目の突帯を持つ甕形土器である。241は口縁部内面を粗いヘラミガキで調整し屈曲部をヘラケズリをして，屈曲を成形している。外面はハケメやヘラミガキの痕跡を残す。252は器壁外面に粗いヘラミガキを施す。243～247は断面三角形の突帯を口縁部に接し，口



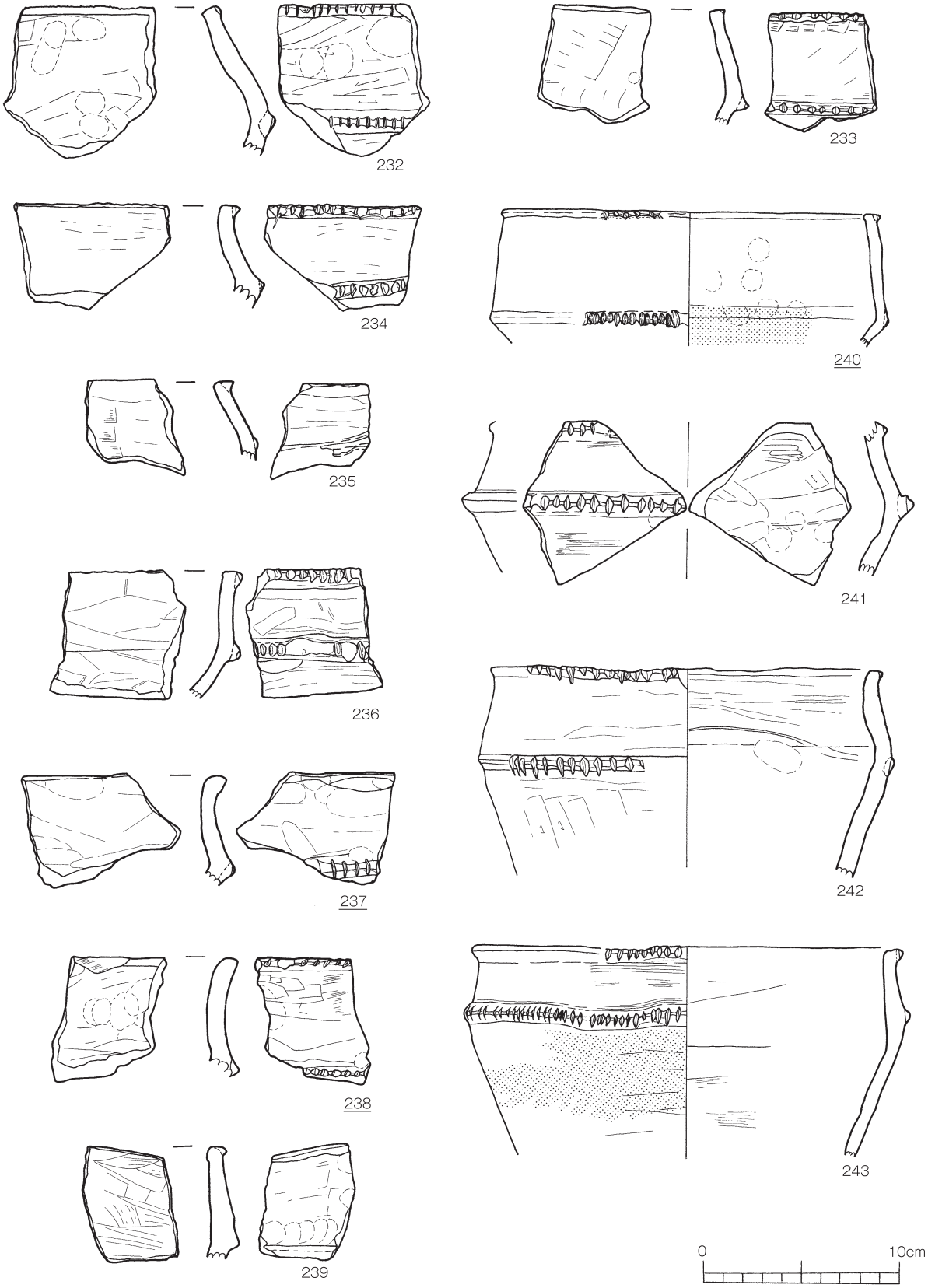
第81図　弥生時代の甕形土器５



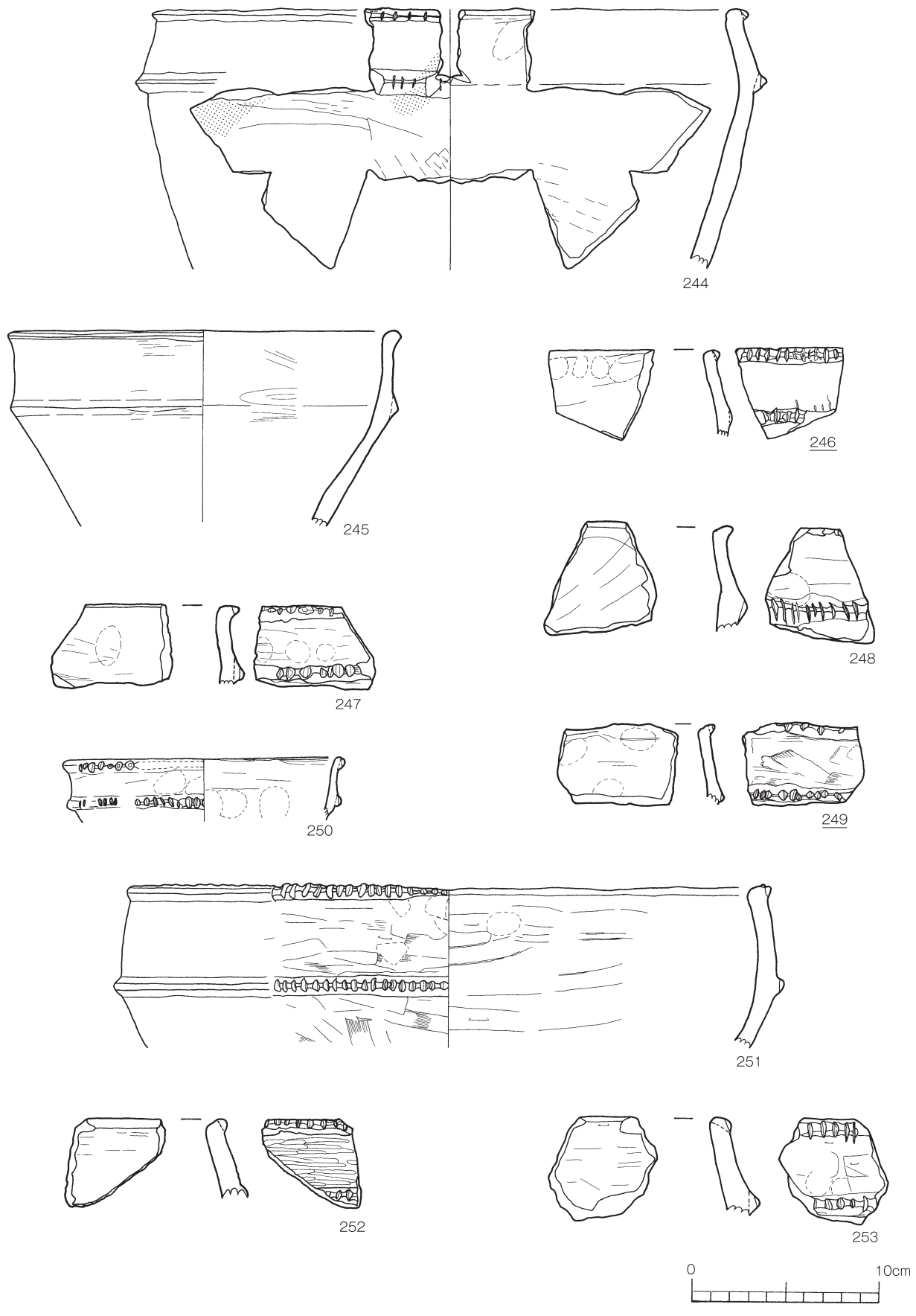
第82図　弥生時代の甕形土器６



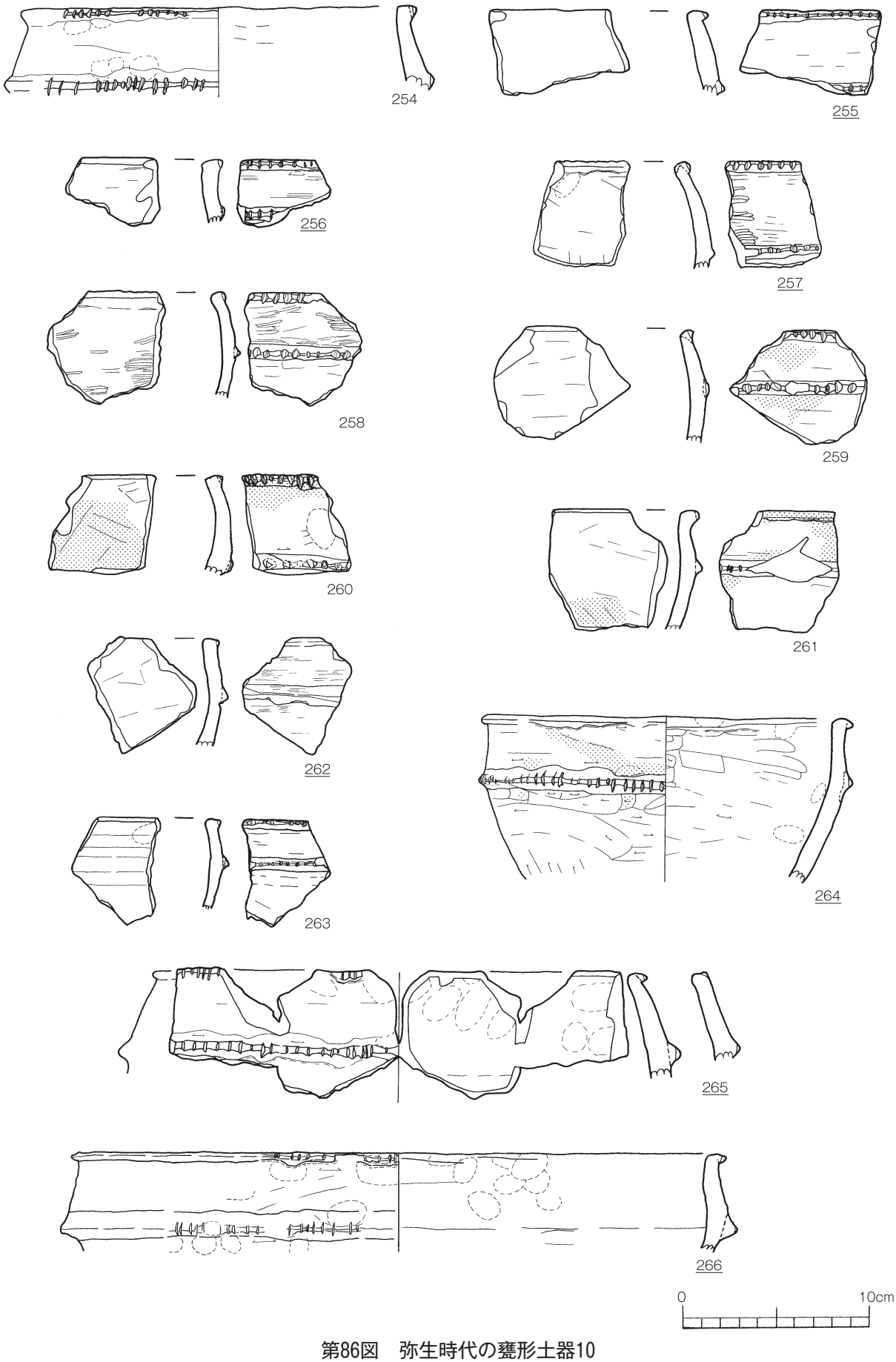
第83図　弥生時代の甕形土器７



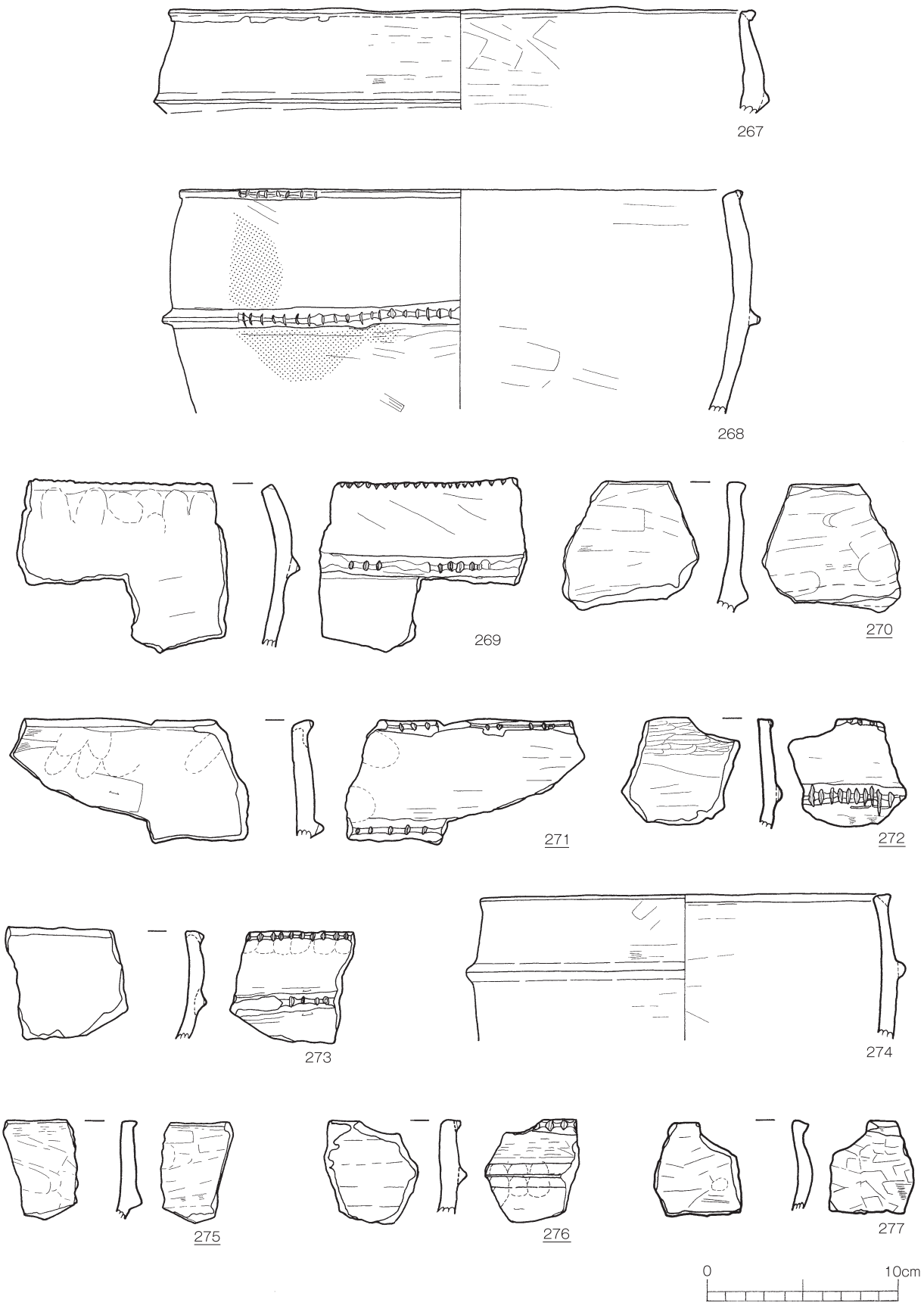
第84図　弥生時代の甕形土器８



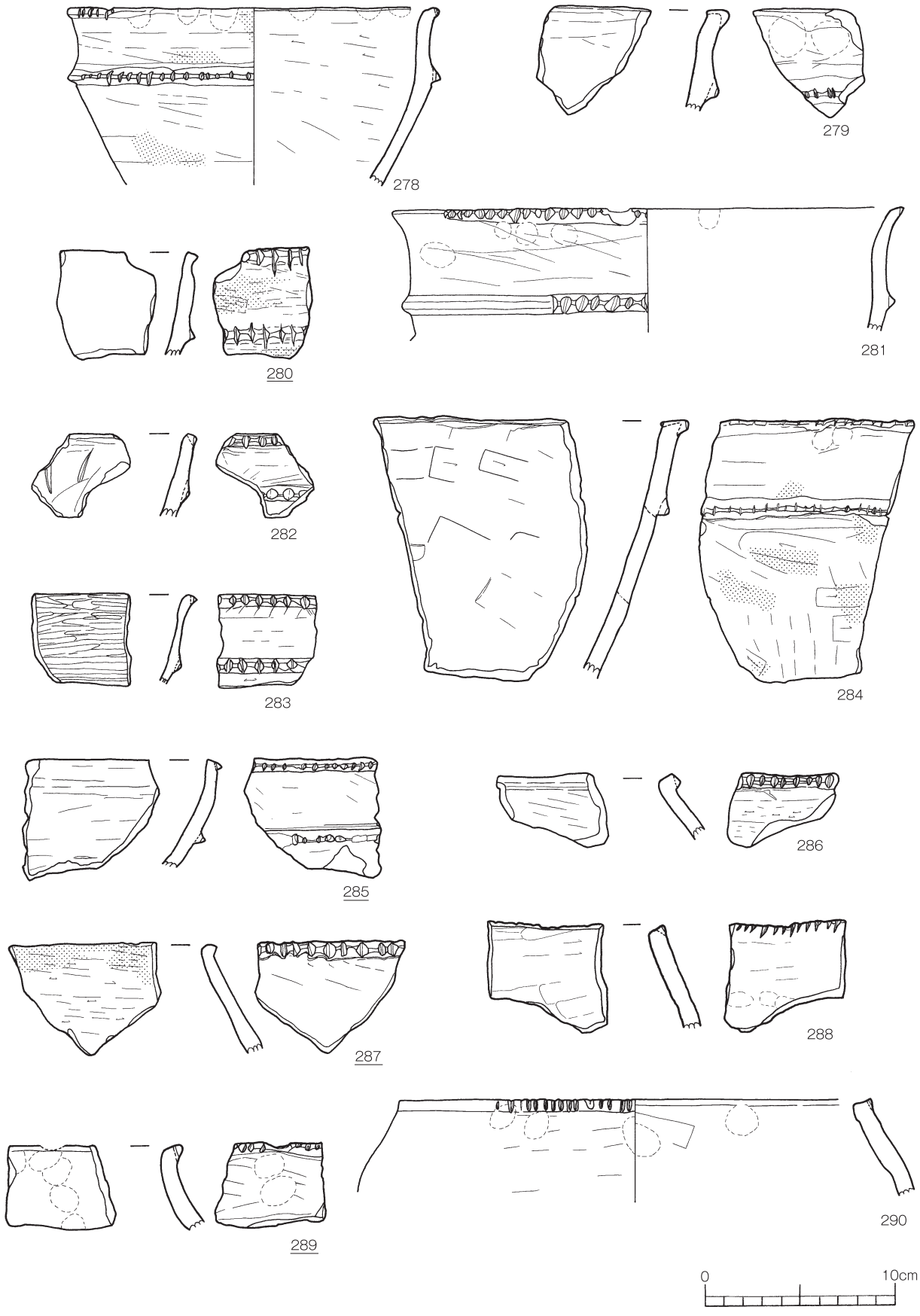
第85図　弥生時代の甕形土器９



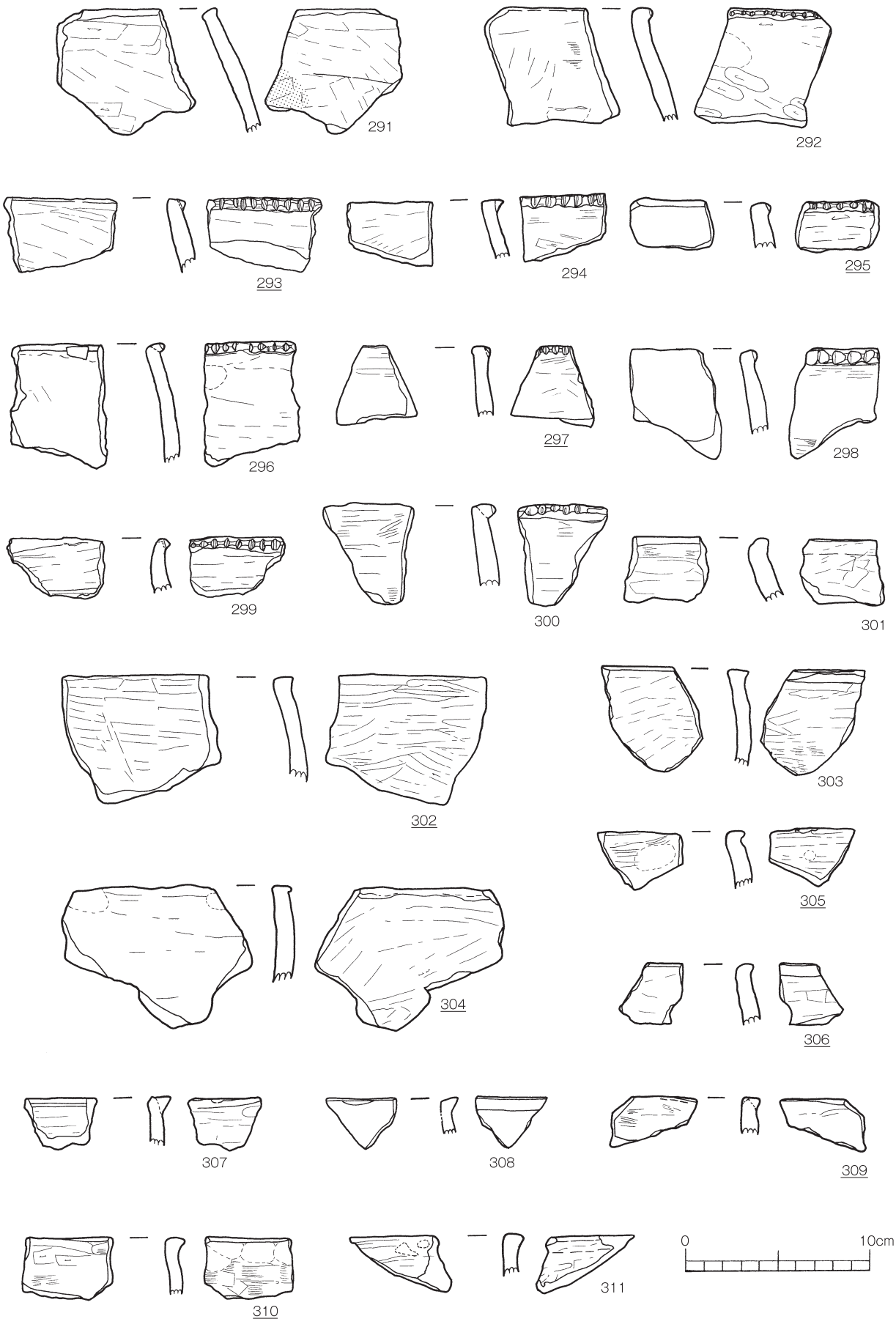
第86図　弥生時代の甕形土器10



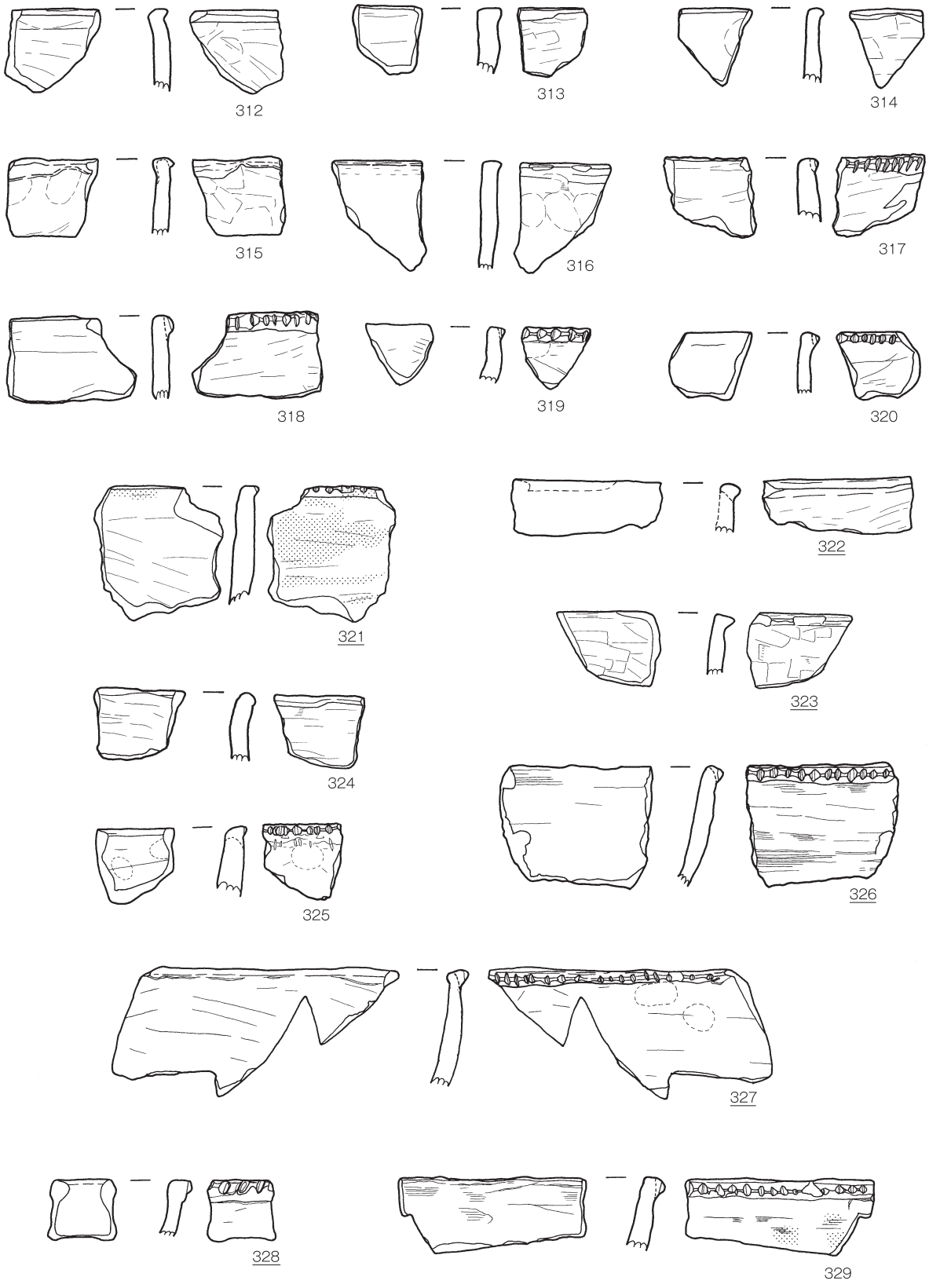
第87図　弥生時代の甕形土器11



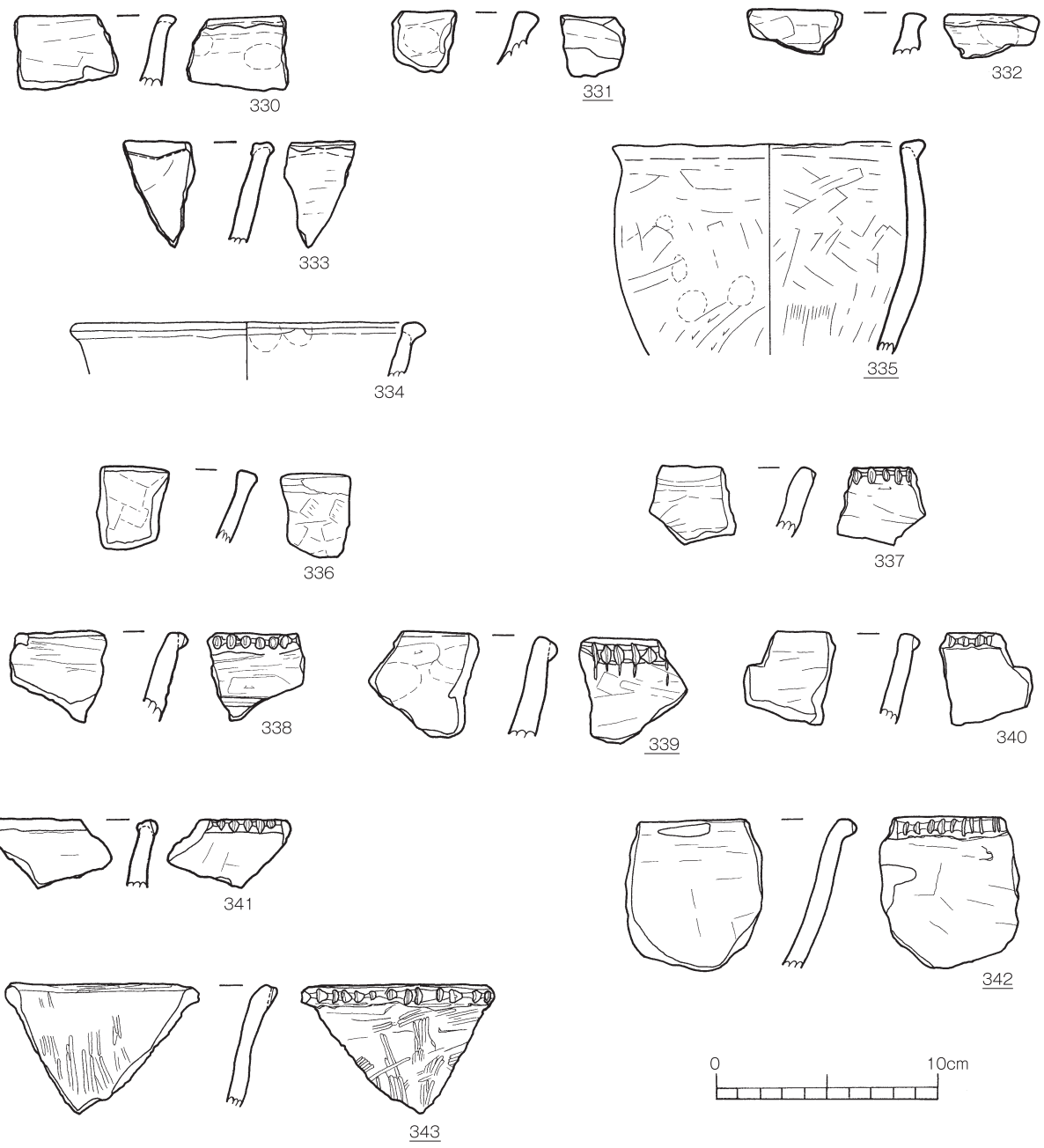
第88図　弥生時代の甕形土器12



第89図　弥生時代の甕形土器13

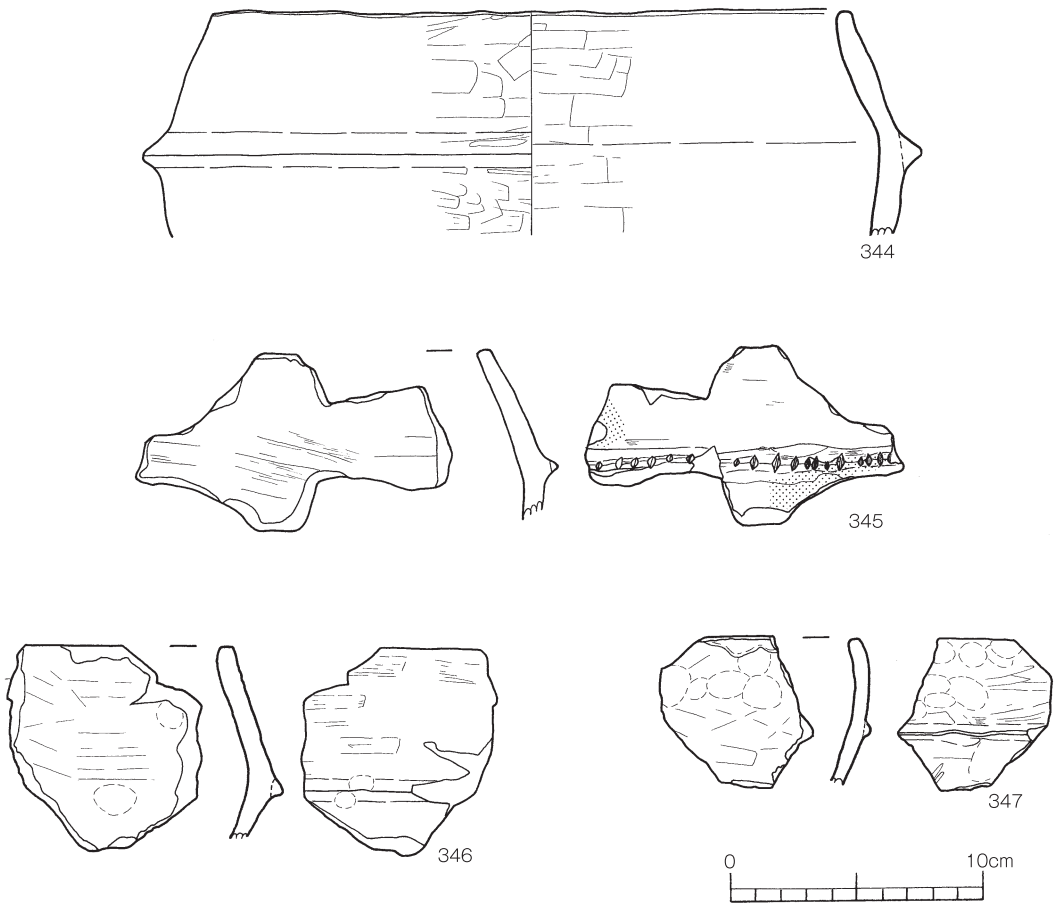


第90図　弥生時代の甕形土器14



第91図　弥生時代の甕形土器15

縁部上端をナデて成形している。252・256～258は外面にヘラミガキを持つ。261・264・267は折り曲げてつまみ出した上部突帯を持ち，刻目を持たない。266は断面三角形の突帯を口縁部に接して貼り付け，つまみ出して成形をする。上部突帯場所によっては矮小化して，口唇部に直接刻目を施している部分がある。267～277はほぼ直立した口縁部を持つ。264は胴部突帯に大小不定形の刻目を刺突する。269は内弯する器形を持ち，口唇部に直接刻目を施す。284～285は，砲弾形に開く器形を持つ。274はほとんど屈曲を持たない寸胴の胴部を持ち上下の突帯は無刻目である。276は胴部突帯につまみ出しの調整を施した指頭圧痕を残す。284は突帯からはみ出て，ヘラ状工具による押引きによる施文を施す。278・279・281は胴部



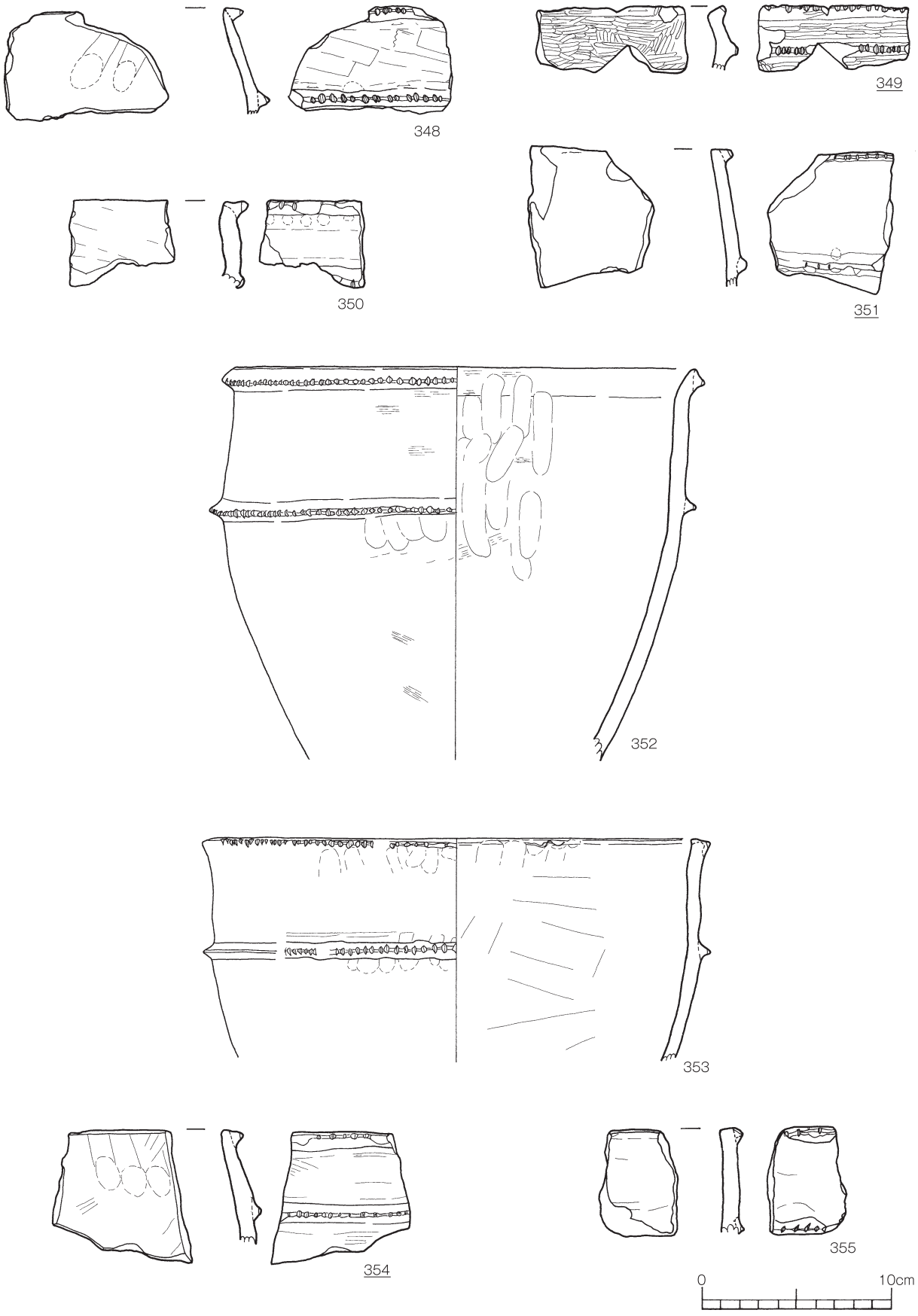
第92図　弥生時代の甕形土器16

の屈曲部から外反する口縁部を持つ。284は大小の刻目を刺突する。283は内面に粗いヘラミガキを施す。327は口縁部に突帯を接し，口唇部をナデて成形をする。内面に調整時にはみ出した粘土の痕跡が見られる。

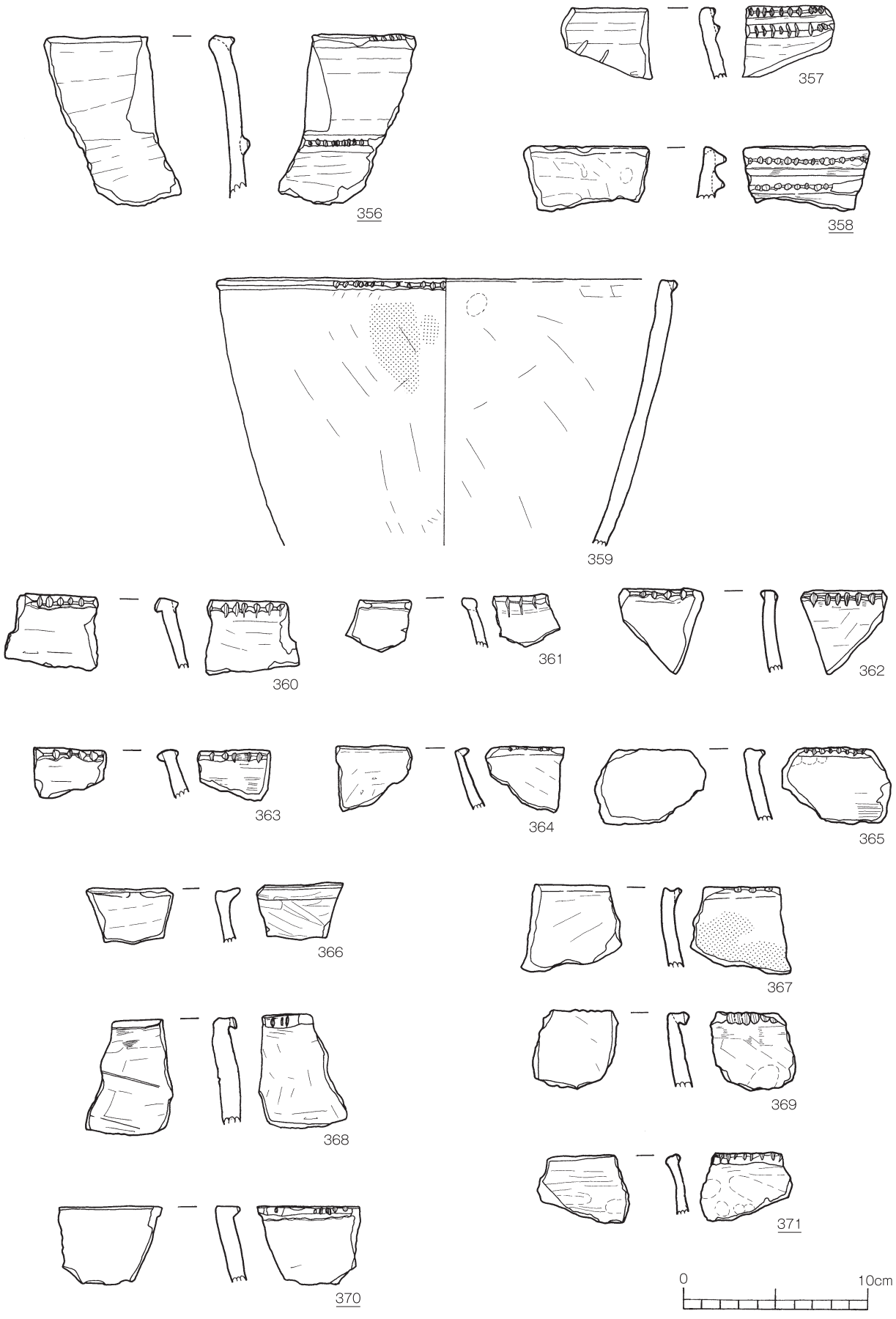
286～334・336～352は小片で，突帯の数や器形の不明な土器である。301～311は断面三角形の無刻目突帯を口縁部に接し，内弯もしくは内傾する器形を持つ。器面調整は一部にヘラミガキを持つものがある。322・334～336は直立する口縁部に大きな断面三角形の無刻目の突帯を乗せ，335は緩やかに外に膨らむ器形を持つ。342・343は口縁部を折り曲げたり張り出したりして，口唇部に大きな刻目を密に刺突施文を施す。344～347は口縁部に突帯を持たない土器である。345は下部の突帯に刻目を持つが，欠損部の上部に小突帯やつまみ出した突帯などが付く可能性がある。

(エ)　D類土器（第93図～第96図）

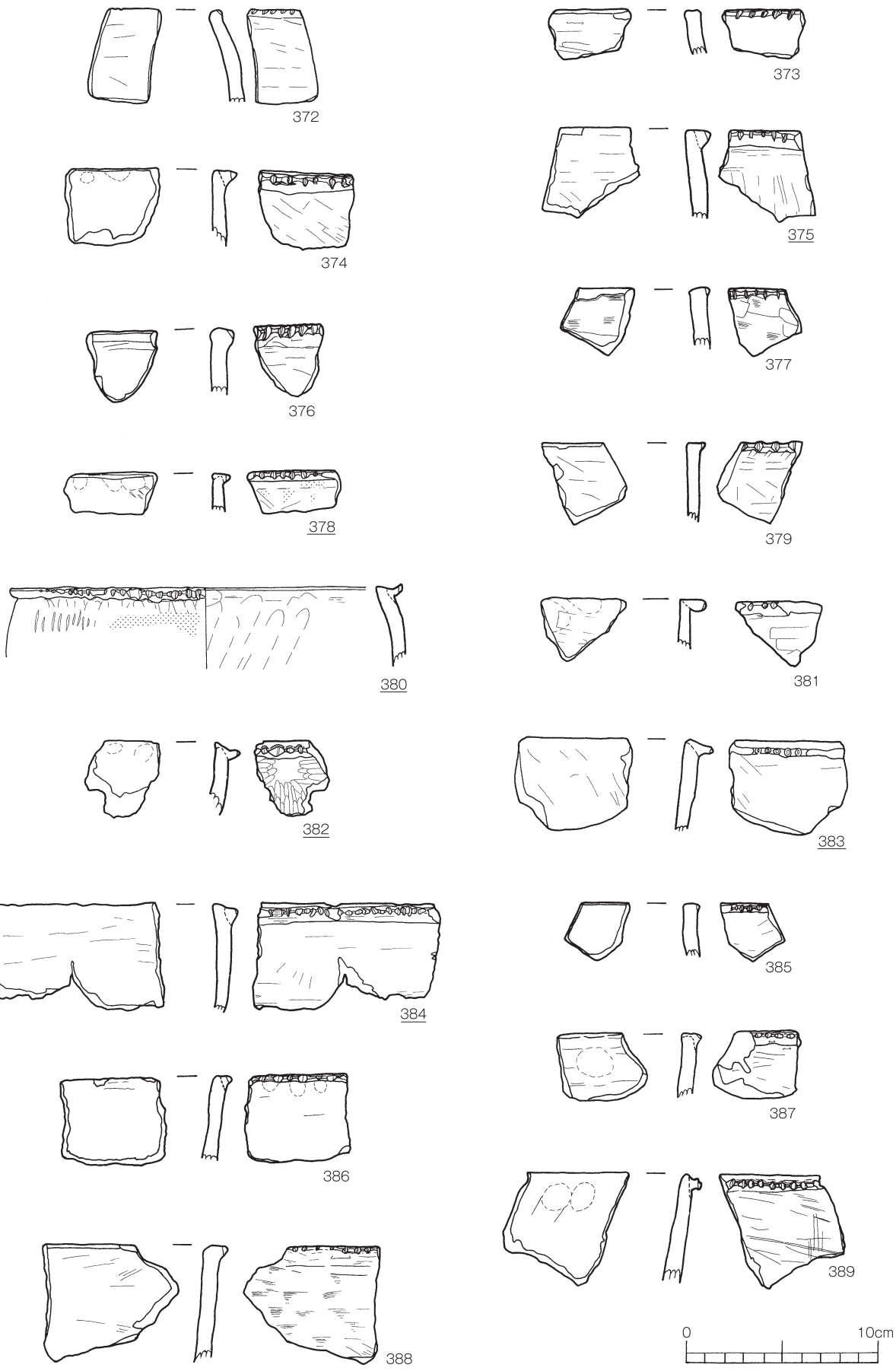
348～358は二条の突帯を持つ甕形土器である。349は内外面にヘラミガキを施す。351～359は器壁を丁寧にナデを施す。352は口唇部に断面三角形の突帯を接し，口縁部を如意形に折り曲げて突帯上部を丁寧にナデを施す。突帯に浅く細かい刻目を刺突する。353は口縁部に突帯を乗せ，細かな刻目を施す。357・358は口縁部が内傾または外傾し，口縁部上部に二条の突帯を近接して持つ。359は口縁部に小さな突帯を接し，ヘラ状工具で，密に刻目



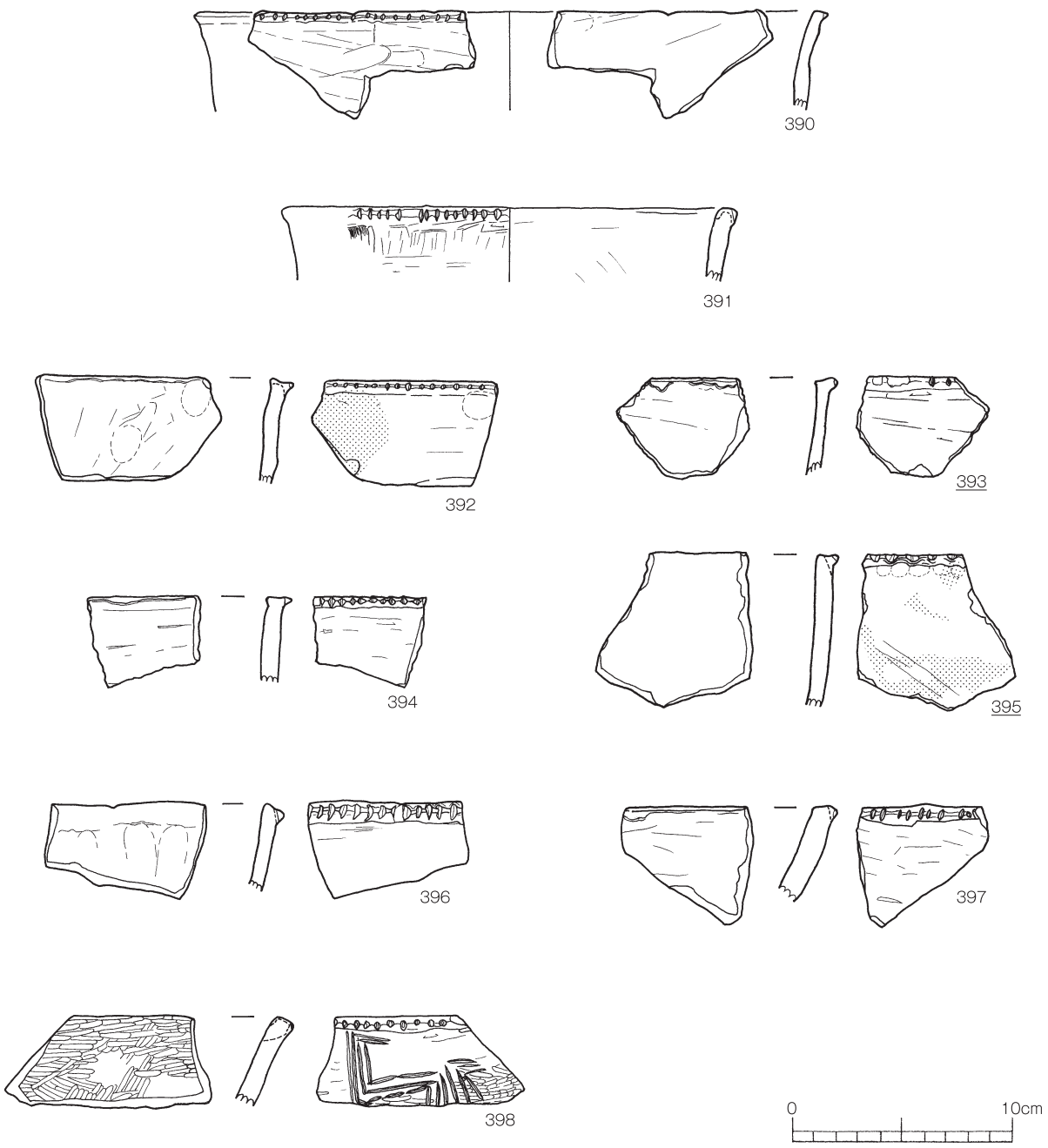
第93図　弥生時代の甕形土器17



第94図　弥生時代の甕形土器18

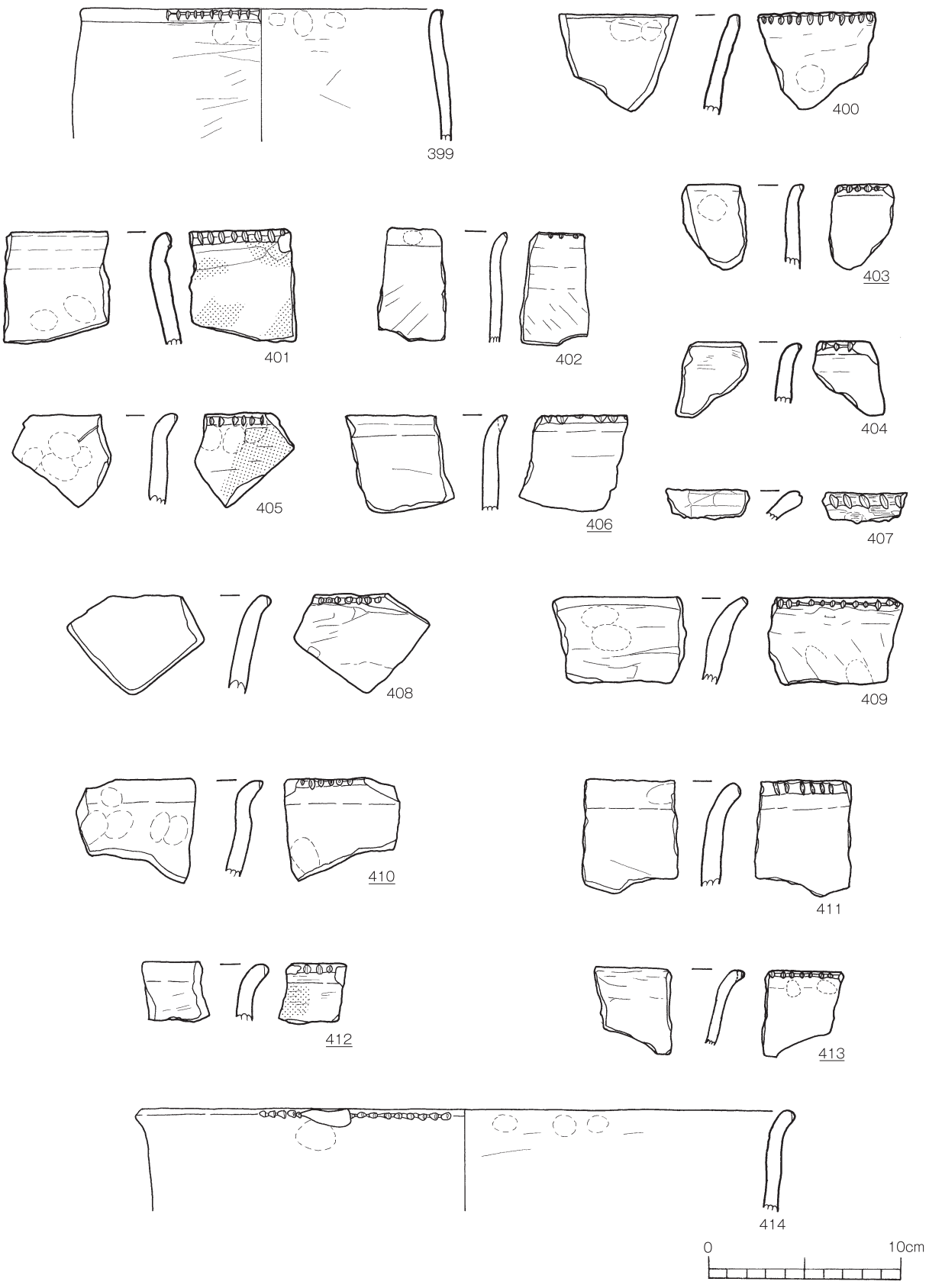


第95図　弥生時代の甕形土器19

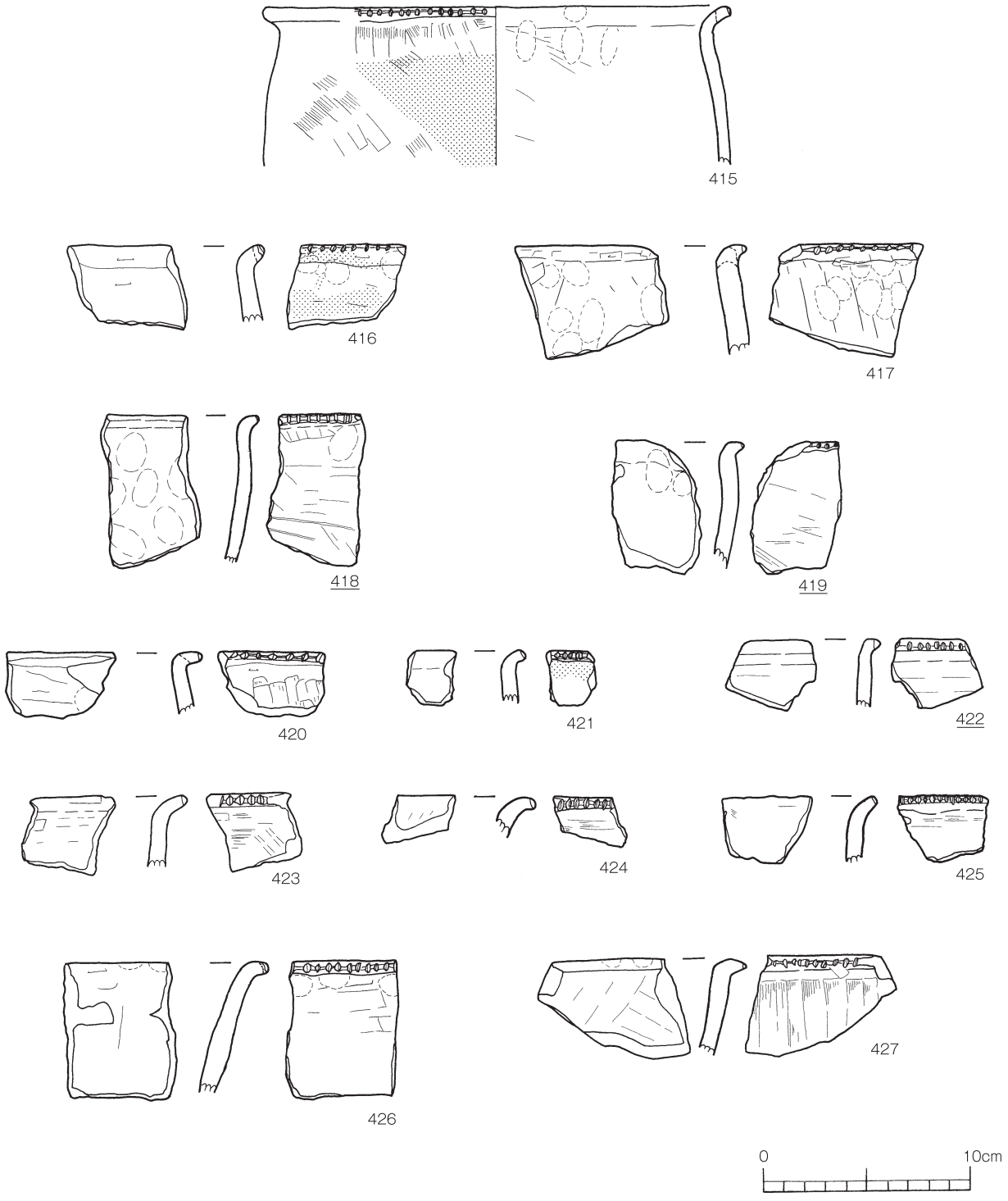


第96図　弥生時代の甕形土器20

を施す砲弾形の甕形土器である。360・362・363は口縁部に小さな断面三角形の突帯を貼り付け，内面外面の両方に深い刻目を施す。いずれも内傾する口縁部を持つ。366・367・380・382・383は断面三角形の突帯をつまみ出して成形し，小さな刻目を密に施す。367・369・381は口縁部に断面方形の突帯を貼りつけ庸（ひさし）状の突帯を持つ。390～398は口縁部に小さな断面三角形の突帯を接し，口縁部上端を丁寧に成形する。398は内外面にヘラミガキを持ち，外面突帯下部に３条の沈線の鍵状の文様を持つ。



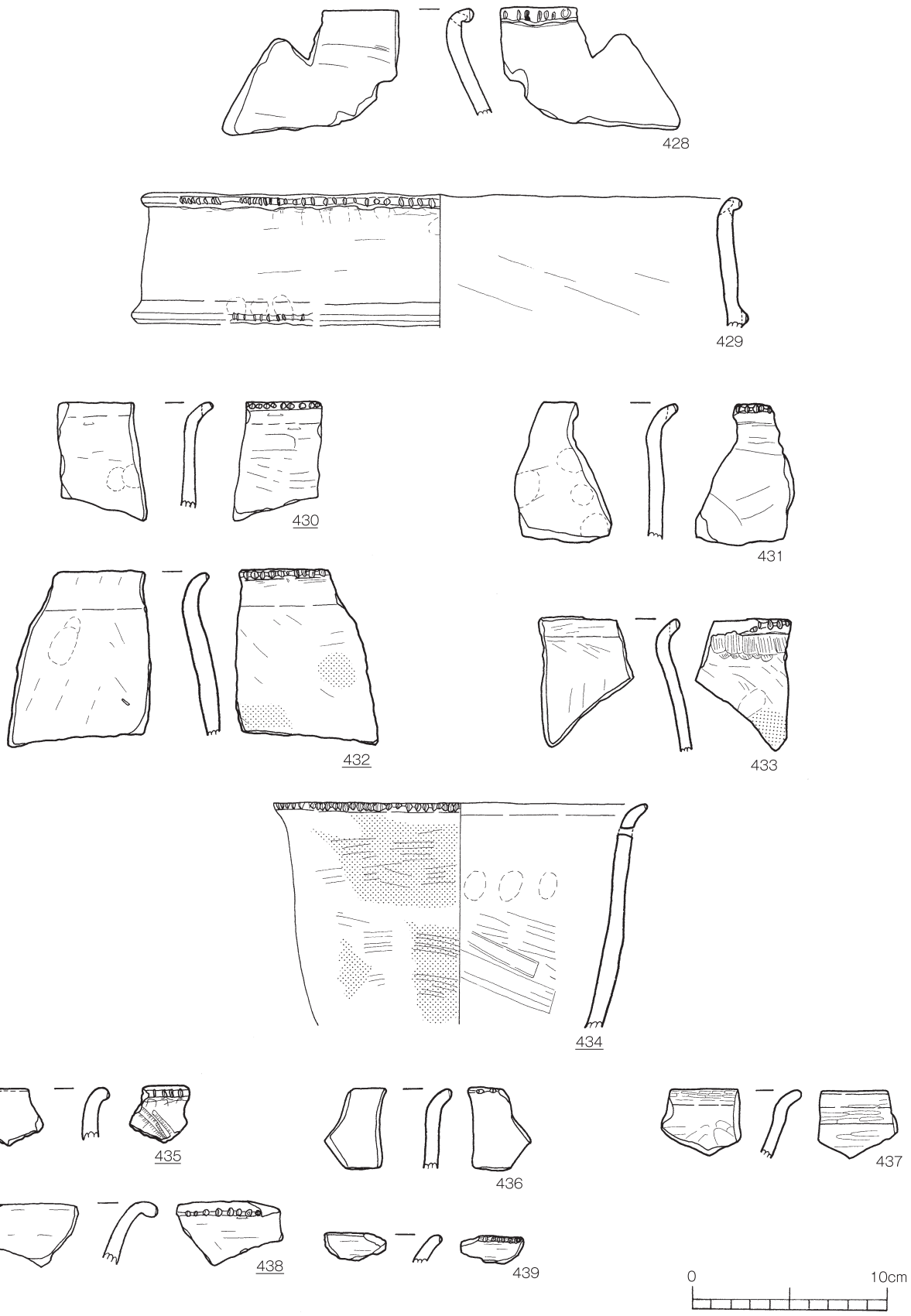
第97図　弥生時代の甕形土器21



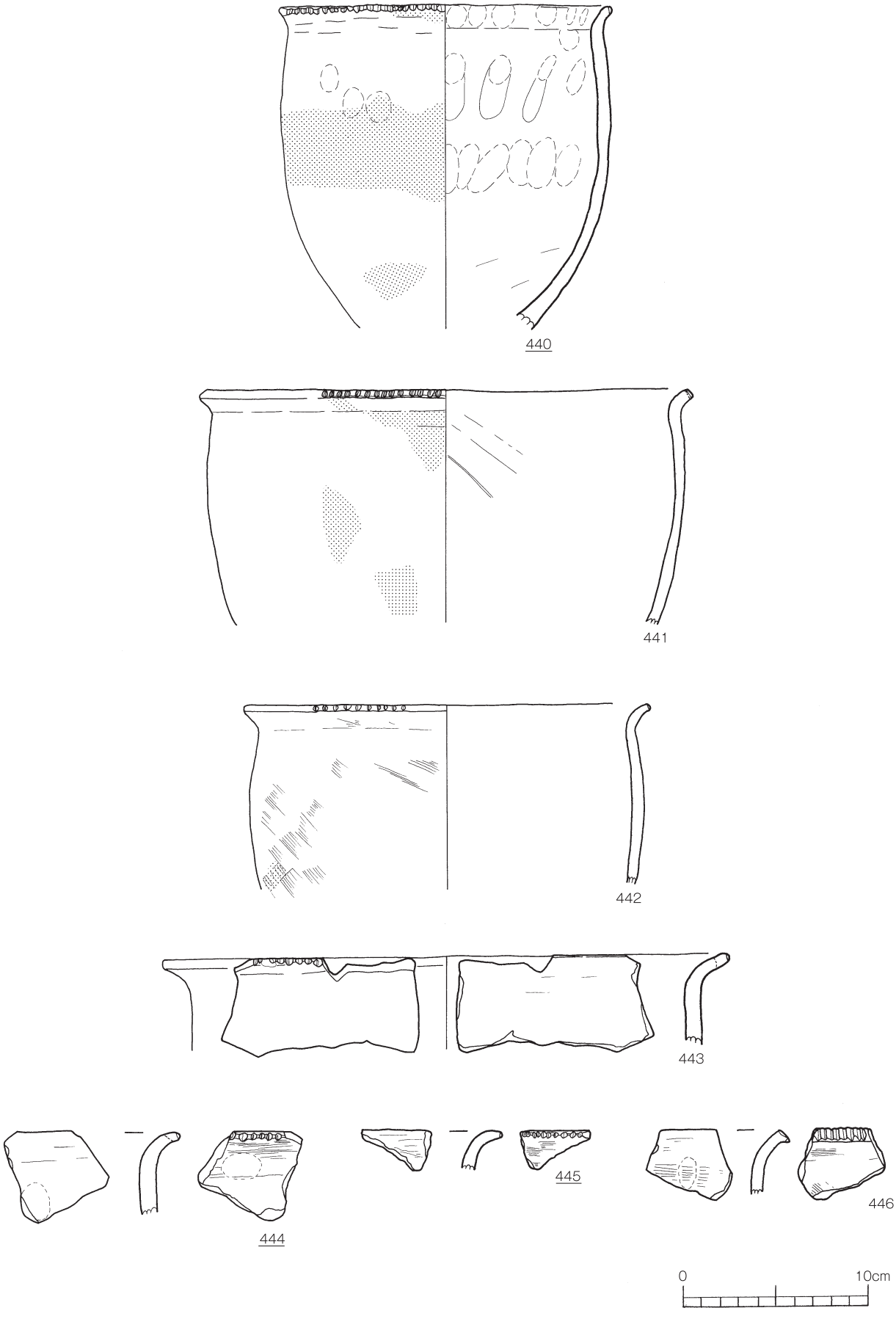
第98図　弥生時代の甕形土器22

(オ)　E類土器（第97図～第100図）

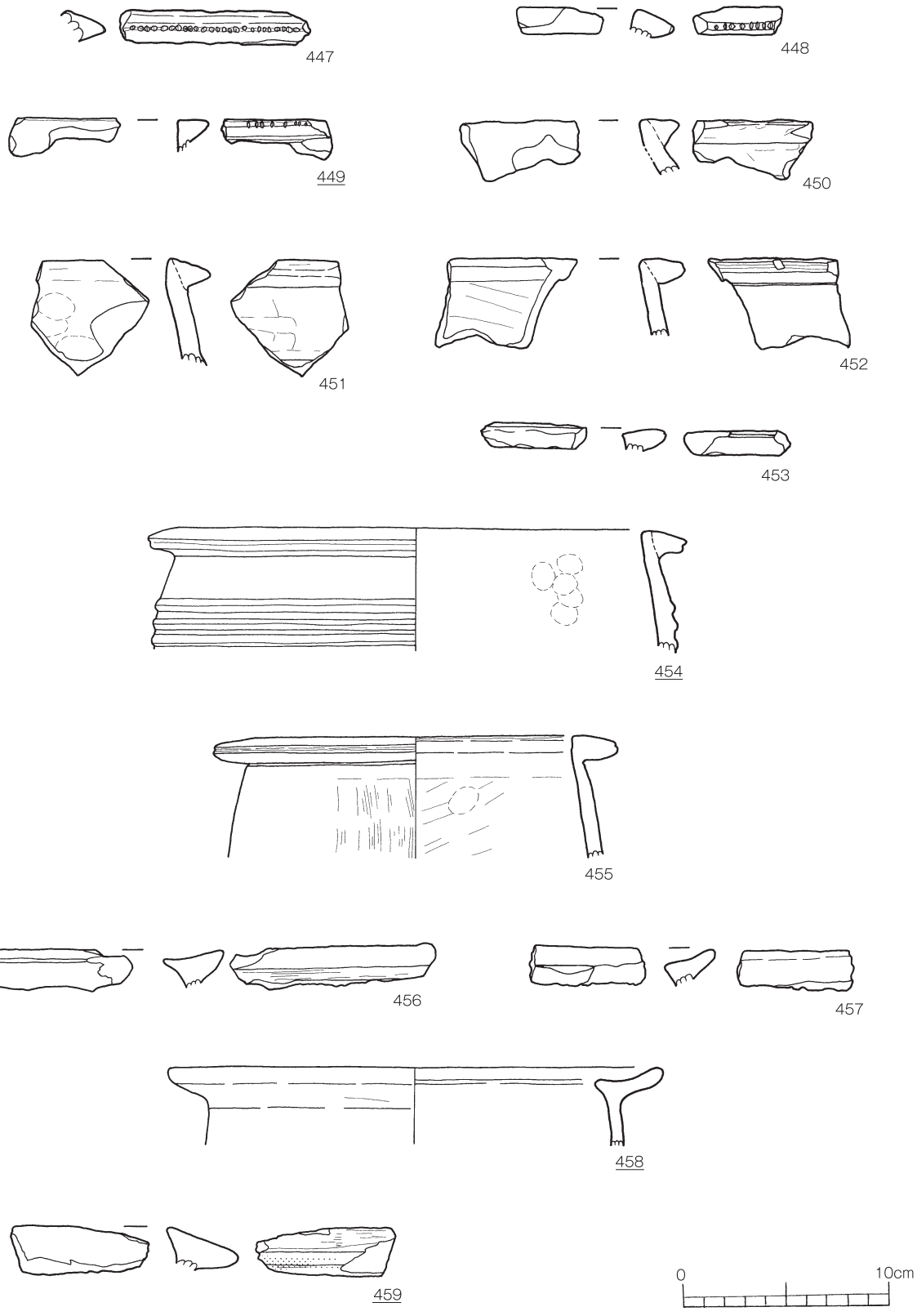
399は口唇部をわずかに曲げ突帯状に肥厚した口唇部に刻目を施す。口縁部はやや内傾し，胴部が緩やかに張る。440は緩やかに外傾し，口唇部に直接刻目を密に施す。401～414は口縁下部で緩やかに曲げて如意形を成形し，細かな刻目を施す。415は口縁部を如意形に折り曲げた一条甕で，胴部が外に張り出す。420は如意形に曲げた口縁部から外に開く。二条甕



第99図　弥生時代の甕形土器23



第100図　弥生時代の甕形土器24



第101図　弥生時代の甕形土器25

第102図　弥生時代の甕形土器26

の可能性がある土器である。421は口縁部の屈曲部より下がった位置にスス痕を持つ。426・427は大きく外に開く器形を持ち，427は口縁部下の屈曲部から縦位のハケメを施す。428は口縁部下部で強く折り曲げて突帯を形成する二条甕である。434～446は如意形口縁を持つ一条甕である。434は屈曲部に補修孔を持つ。443は如意形の屈曲から口縁端部まで緩やかに伸びる器形を持つ。446は口唇部を平坦に成形し，刺突施文を密に施す。

(カ)　F類土器（第101図）

446～451・453は大きな突帯が平坦な口縁部を形成し，緩やかに張る胴部を持つ甕形土器である。447～449は口縁部端部に細かな刻目を持つ。449～453は断面三角形の口縁部に接する突帯を持つ。

(キ)　G類土器（第101図）

452・454・455は口縁部が下方に向かって垂れ下がり，緩やかに張る胴部を持ち，大きな突帯が口縁部に接して端部が浅く凹む甕形土器である。454は胴部に３条の断面三角形の突帯を３条以上持つ甕形土器である。上から３条目で欠損して突帯の数は不明である。455は口径20cmの甕形土器で口縁部暗部が浅く凹み，口縁部下部から縦位のハケメ調整を施す。

(ｸ)　Ｈ－１類土器（第101図）

456・457は断面三角形の口縁部が上方へ傾き，口縁部正面は浅く凹む。内面に弱い張り出しを持つ甕形土器である。丁寧なナデ調整が施される。

(ｹ)　Ｈ－２類土器（第101図）

458は断面三角形の口縁部が上方へ傾き，口縁部正面の反りが強く，内面に強い張り出しを持つ甕形土器である。

(ｺ)　Ⅰ類土器（第101図）

459は断面方形に近い口縁部が下方に弱く傾く大型の甕形土器である。口縁部の平坦面がナデて丁寧に調整し，口縁部端部にススの痕跡がある。その大きさから甕棺の可能性もある。

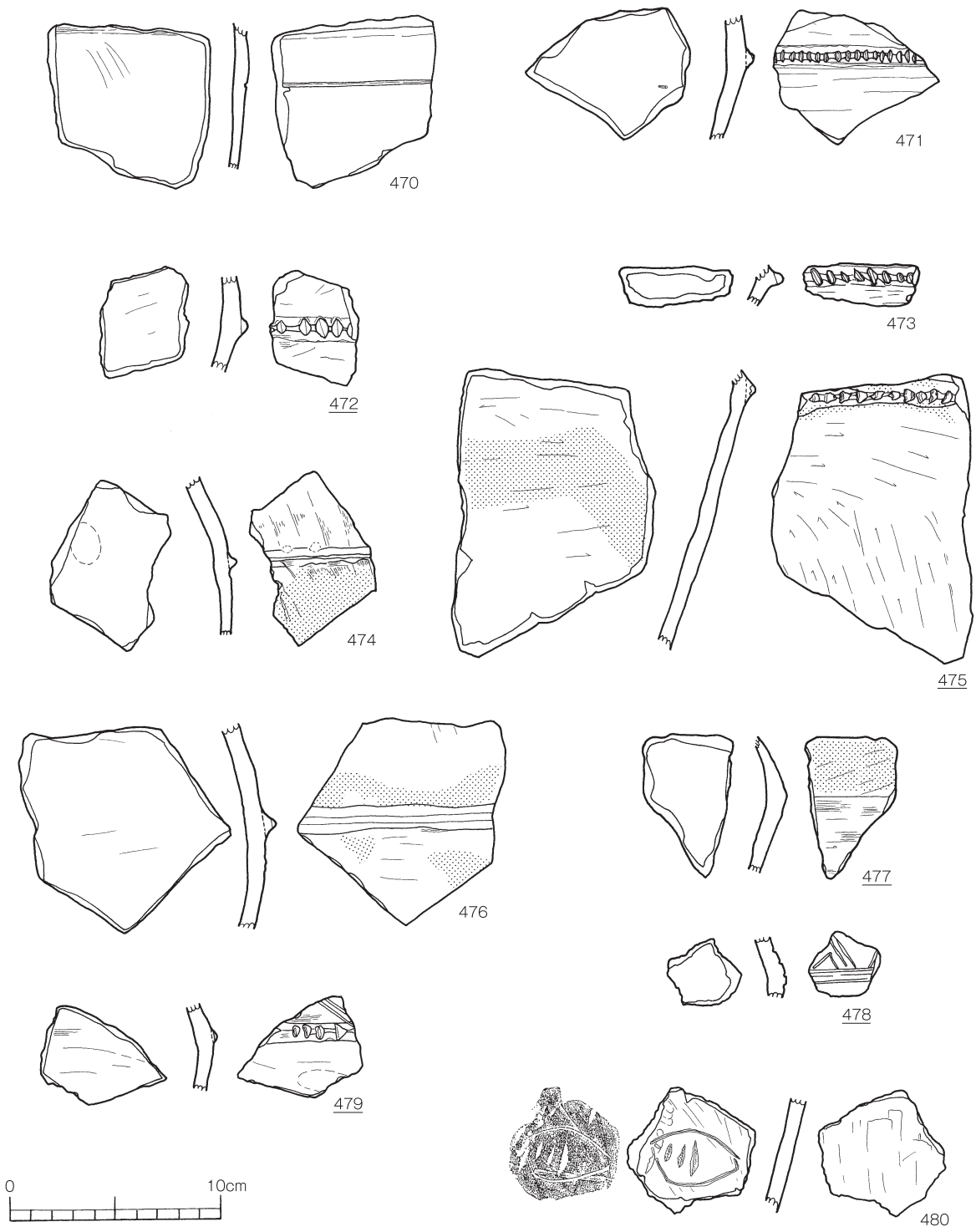
(ｻ)　その他の土器（第102図～第103図）

460～462は同一個体である。口縁部に断面三角形の突帯を接し，小さな刻目を粗に施文している。上部胴部に付く刻目突帯を縦位の断面三角形の突帯が「工」の字に結ぶ。突帯間の器壁はヘラミガキを施している。463は横位の刻目突帯を２重の断面三角形の突帯が弧状に結ぶ。突帯間の器壁はヘラミガキを施す。464は薄い器壁を持ち，口縁部に棒状後部による刺突施文を施す。器壁外面は沈線で三角形の文様を施す。

465は口縁部からかなり下がった位置に無刻目の突帯を持つ。466～469は，橙色・にぶい黄橙色の胎土を持ち，口縁部から少し下がった位置に無刻目の突帯を持ち，傾き，器種ともに不明である。468は高坏形土器の脚部の可能性を持つ。

470はナデ調整の胴部に横位の沈線を持つ。甕形土器の胴部である。471～473・479は刻目突帯を持つ土器である。471～473は傾き，器種共に不明である。479は突帯の上に２条の沈線で山形施文を施す。479は甕形土器の胴部である。476は無刻目の断面三角形の突帯を持つ胴部である。477は屈曲を持ち，上部にスス痕を持つ土器である。478は屈曲部に横位の沈線文を持ち，その上部に山形の沈線文を持つ土器である。

480は甕形土器の胴部で，傾きは不明である。器壁内面に楕円形の文様を描き，その中に３本の長さの異なる縦位の刻みを施す。魚を摸した描画の可能性がある。



第103図　弥生時代の甕形土器27

第20表　弥生時代の甕形土器観察表１

挿図番号	分類	遺物番号	取上番号	部位	層	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 ｽｺﾘｱ	胎土 片岩	その他	備考
第77図	A	97	1412 8042	口縁	Ⅱ Ⅲ	48.85	B － 15 C － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	丁寧なﾅﾃﾞ（上）5cm（下）ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	褐灰	○		○			○	○		刻目突帯文
	A	98	29896	口縁	Ⅲａ	47.92	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指頭圧痕	明黄褐	にぶい黄褐	○		○			○	○		刻目突帯文
	A	99	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ（指押さえ）	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	褐	○		○			○			
	A	100	23500	口縁	Ⅲｂ	46.91	F － 26	ﾅﾃﾞ指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石	
	A	101	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○			○	○	茶粒	
	A	102	5967	口縁	Ⅱ	49.55	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○		○			○	○		
	A	103	24387	口縁	Ⅲａ	48.35	C － 18	ﾅﾃﾞ・剥離	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○			○	○		
	A	104	23062 2411	口縁	Ⅲａ Ⅱ	47.03	F － 26 C － 24	指押さえ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○		
	A	105	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ指押さえ	ﾅﾃﾞ指押さえ	橙	橙	○		○			○	○		
	A	106	7642	口縁	Ⅱ	47.49	C － 23	（上）ﾍﾗﾐｶﾞｷ（下）丁寧なﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明赤褐	灰褐			○			○	○		
	A	107	21884	口縁	Ⅲａ	47.09	D － 25	ﾊｹﾒ・剥離	ﾊｹﾒﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	灰黄褐	○		○			○	○		11061
	A	108	11061	口縁	Ⅱ	—	D － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	11027
	A	109	3979	口縁	Ⅱ	—	D － 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指ﾅﾃﾞ（ヨコ）	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指ﾅﾃﾞ（ヨコ）	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		11024,11029,11047, 11065,11080,11081
	A	110	20627	口縁	Ⅲａ	47.67	B － 21	ﾅﾃﾞ指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○			
	A	111	1180 1168	口縁	Ⅳ Ⅲ	50.02	B － 9	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	明黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目二条突帯
第78図	A	112	5395	口縁	Ⅱ	47.58	D － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明赤褐	灰褐	○	○	○			○	○	黒曜石	
	A	113	5955	口縁	Ⅱ	49.59	D － 20	ﾍﾗﾅﾃﾞ・工具によるﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目二条突帯
	A	114	15228	口縁	Ⅲａ	48.18	D － 18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ指押さえ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ指押さえ	橙	橙	○		○			○	○		
	A	115	15122	口縁	Ⅲａ	0.00	D － 17	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ指頭圧痕	にぶい赤褐	明赤褐	○		○		○	○	○		刻目突帯文
	A	116	14861	口縁	Ⅲｂ	47.62	C － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	貝殻条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		○		○		刻目突帯文・貝殻条痕
	A	117	30968	口縁	Ⅲｂ	48.29	D － 18	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷﾅﾃﾞ（口唇）ﾍﾗﾐｶﾞｷ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	A	118	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	灰黄褐	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石	二条刻目突帯文・ｽｽ
	A	119	2787	口縁	Ⅱ	47.64	D － 26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○				○	○	黒曜石 茶粒	（外）刻目突帯文・（内）凹線文
	A	120	3210	口縁	Ⅱ	47.72	C － 21	貝殻	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	A	121	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・剥離	灰黄褐	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・（外）磨滅多し・二条目の刻目は不明・ｽｽ
	A	122	17570	口縁	Ⅲａ	46.30	F － 28	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	○		○			○	○		
	A	123	10706	口縁	Ⅱ	47.42	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	橙		○	○			○			刻目突帯文（二条疑）
	A	124	4060	口縁	Ⅱ	47.63	D － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ（口唇部）ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	明褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	125	4896	口縁	Ⅱ	47.48	D － 24	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい褐	褐灰	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	A	126	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	暗灰黄	橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・ツメによる刻目
	A	127	15273	口縁	Ⅲａ	48.12	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐灰	橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	128	7280	口縁	Ⅲａ	47.56	C － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後指ﾅﾃﾞ（口）ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明褐	にぶい褐	○	○	○	○		○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・左から1番と2番の間に刻目がつぶれたもの有り、爪による刻目
	A	129	1858	口縁	Ⅱ	47.92	D － 20	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄褐	黄灰	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	130	3692	口縁	Ⅱ	47.56	C － 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後丁寧なﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後粗いﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	131	15424	口縁	Ⅲａ	48.12	E － 19	ﾅﾃﾞ	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	132	4995	口縁	Ⅱ	47.47	C － 23	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文
	A	133	5579	口縁	Ⅱ	49.07	B － 14	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
第79図	A	134	15804	口縁	Ⅲａ	48.14	D － 18	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・ツメによる刻目
	A	135	20658	口縁	Ⅲａ	47.62	C － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	粗いヨコﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	A	136	4826	口縁	Ⅱ	47.50	D － 23	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明黄褐	暗褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・屈曲型
	A	137	表採	口縁	Ⅲ	—	E － 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○	○		○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	138	22957	口縁	Ⅲａ	46.97	E － 26	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐	橙	○		○			○	○	黒曜石	32326 刻目突帯文
	A	139	7846	口縁	Ⅱ	47.64	C － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明褐	褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	A	140	31924 30034	口縁	Ⅲａ	48.35	B － 17 C － 18	ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	141	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	142	14165	口縁	表採	48.51	－	ﾅﾃﾞ指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	A	143	3034	口縁	Ⅱ	47.67	C － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ（口唇）丁寧なﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・口唇部丁寧なﾅﾃﾞ
	A	144	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	A	145	2141	口縁	Ⅱ	47.76	C － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄	にぶい黄褐	○	○				○	○	黒曜石 玉ずい	刻目突帯文
	A	146	20666	口縁	Ⅲａ	47.65	D － 20	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文・ｽｽ
	A	147	9640	口縁	Ⅱ	47.52	D － 22	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	黒褐	暗灰黄	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・ｽｽ

第21表　弥生時代の甕形土器観察表２

挿図番号	分類	遺物番号	取上番号	部位	層	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	角閃石	長石	輝石	雲母	火山ガラス	片岩	その他	備考
	A	148	4709	口縁	Ⅱ	47.43	C － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	149	5918	口縁	Ⅱ	49.64	C － 14	ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	灰黄褐	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・棒状の円筒形工具で刻みを刺突したもの（ひも状の突帯）
	A	150	11113	口縁	集積1	0.00	D － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	粗いナデ	にぶい褐	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	151	4077	口縁	Ⅱ	47.58	D － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・ツメによる刻目施文
	A	152	4097	口縁	Ⅱ	47.65	D － 22	ﾅﾃﾞ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	橙	黒褐	○	○	○	○		○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	153	17628	口縁	Ⅲa	46.55	F － 28	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	褐灰	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	154	12763	口縁	Ⅲa	47.39	D － 24	ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	155	4973	口縁	Ⅱ	47.52	C － 23	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	156	7289	口縁	Ⅲa	47.57	C － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄	灰黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	157	なし	口縁	表採	―	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	158	30438	口縁	Ⅲa	48.00	E － 20	ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	A	159	7206	口縁	Ⅲa	47.30	C － 25	ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	にぶい黄	にぶい黄橙	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	A	160	2547	口縁	Ⅱ	47.90	C － 20	ﾅﾃﾞ・剥離	粗いナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・剥離
	A	161	6356	口縁	表採	49.80	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ヘラナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・スス
	A	162	29772	口縁	Ⅲa	48.01	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	A	163	4064	口縁	Ⅱ	47.61	D － 22	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	A	164	17717	口縁	Ⅲa	45.63	F － 30	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	A	165	24798	口縁	Ⅲa	48.04	E － 20	剥離の為不明	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		刻目突帯文・瓜形刻目
第80図	A	166	28489	口縁	Ⅲa	48.26	C － 18	ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 玉ずい	刻目突帯文
	A	167	7682	口縁	Ⅱ	47.57	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・古墳の可能性有り
	A	168	6011	口縁	Ⅱ	49.59	D － 20	ﾅﾃﾞ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・ツメによる刻目
	A	169	2933	口縁	Ⅱ	47.67	D － 22	ﾅﾃﾞ	ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	170	14165	口縁	Ⅲa	48.51	D － 17	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	A	171	27888	口縁	Ⅲa	48.00	D － 20	ﾅﾃﾞ	ナデ	暗灰黄	暗灰黄	○		○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	A	172	5905	口縁	Ⅱ	49.48	C － 14	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ(口唇)ﾍﾗﾐｶﾞｷ様のﾅﾃﾞ	ナデ	明赤褐	にぶい褐	○	○				○	○	黒曜石	刻目突帯文・口唇部ﾐｶﾞｷ様ﾅﾃﾞ
	B	173	なし	口縁	表採	―	－	ﾅﾃﾞ	ヘラケズリ・ナデ・指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	二条刻目突帯文
	B	174	23511	口縁	Ⅲa	47.00	E － 25	ﾅﾃﾞ	ケズリ後ナデ	明褐	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	23440 二条刻目突帯文・スス
	B	175	14465	口縁	Ⅲa	48.24	F － 18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ヘラケズリ後ナデ指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	二条刻目突帯文（突帯下段は磨滅により不明確）
	B	176	12434	口縁	Ⅲa	47.37	D － 24	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	177	16240	口縁	Ⅲb	48.01	E － 19	指頭圧痕・指ﾅﾃﾞ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○		
	B	178	3680	口縁	Ⅱ	47.59	D － 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ナデ	明褐	明褐	○		○			○	○		刻目突帯文
	B	179	2441	口縁	Ⅲa	47.41	D － 26	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ	ナデ	褐	黒褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	B	180	なし	口縁	表採	―	－	ﾅﾃﾞ・指押さえ	ナデ	橙	にぶい橙	○		○			○	○		
第81図	B	181	6175	口縁～胴部	Ⅱ	47.65	C － 21	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐			○			○			6176,2038 貝殻条痕・スス
	B	182	8776	口縁	Ⅲ	49.12	D － 15	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	（上）丁寧なナデ（下）ヘラケズリ（縦）後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○		二条刻目突帯文・（下）突帯下に　ヘラ磨き状の痕跡あり一部のみ観察するが全面に展開するかは不明
	B	183	3149 4867	口縁	Ⅱ	47.74	C － 21 D － 24	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	B	184	23233	口縁	Ⅲa	46.81	F － 26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい橙	にぶい褐	○		○			○	○		刻目突帯文
	B	185	8145	口縁	Ⅲ	47.58	C － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	B	186	4611	口縁	Ⅱ	47.58	D － 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	明赤褐	黒褐	○	○				○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	B	187	2741	口縁	Ⅲa	47.54	D － 26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
	B	188	27979	口縁	Ⅲa	47.95	D － 20	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	褐灰	黒褐	○	○	○			○	○		
	B	189	7061	口縁	Ⅱ	47.82	C － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	灰褐	○	○	○			○	○	OB 茶粒	刻目突帯文　口唇部ﾍﾗﾐｶﾞｷ
	B	190	27225	口縁	Ⅲa	48.01	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラケズリ	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	B	191	28563	口縁	Ⅲa	47.94	E － 20	ﾅﾃﾞ	ナデ	にぶい黄褐	褐灰	○		○			○	○		山形文
	B	192	3823	口縁	Ⅱ	47.79	C － 25	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐	黒渇	○		○			○	○	OB 茶粒	光沢のある内外面，ﾍﾗﾐｶﾞｷが磨滅により全面に観察できなかった。
	B	193	19119	口縁	Ⅲa	48.99	E － 16	ﾅﾃﾞ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文
	B	194	29953	口縁	Ⅲa	48.00	D － 19	丁寧な ﾍﾗｹｽﾞﾘ	丁寧な ヘラケズリ 指頭圧痕	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	B	195	3712 3740	口縁	Ⅱ	47.56	D － 24	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	196	27213 27678	口縁	Ⅱ，Ⅲa	48.01	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ナデ	にぶい褐	褐灰	○	○	○			○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
	B	197	4714	口縁	Ⅱ	47.36	C － 25	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	明赤褐	○	○	○			○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
第82図	B	198	29433	口縁	Ⅲa	47.90	E － 19	ﾐｶﾞｷ	ｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・（内）組織痕
	B	199	25656	口縁	Ⅲa	48.30	C － 18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ	黒褐	黒褐	○	○	○			○	○		山形波状口縁
	B	200	12842	口縁	Ⅲa	47.28	C － 25	ﾐｶﾞｷ	ケズリ後ナデ	黒褐	黒褐	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	201	29549	口縁	Ⅲa	48.12	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗灰黄	暗灰黄	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	B	202	11711	口縁	Ⅲa	48.26	E － 19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・剥離	ヘラミガキ	明赤褐	赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文

第22表　弥生時代の甕形土器観察表３

挿図番号	分類	遺物番号	取上番号	部位	層	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 ﾊﾞｰｽﾗｲﾄ	胎土 片岩	その他	備考
	B	203	304	口縁	Ⅱ	50.78	C － 8	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	B	204	18774	口縁	Ⅲａ	48.37	E － 18	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ	黄褐	黒褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文・凹線文（二重）・折帯文
	B	205	29518	口縁	Ⅲａ	48.09	E － 19	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・凹線文
	B	206	5191	口縁	Ⅱ	47.34	C － 25	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	207	5974	口縁	Ⅱ	49.52	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄褐	暗褐	○				○	○	○		刻目突帯文・ｽｽ
	B	208	31620	口縁	Ⅲｂ	47.71	D － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	浅黄	浅黄	○	○	○			○		OB	刻目突帯文
	B	209	11378	口縁	Ⅲａ	48.48	D － 17	細いﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○			○	○	玉随	
	B	210	2265 29961	口縁	Ⅱ Ⅲａ	47.93	C － 20 D 19	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○			○	○	OB	刻目突帯文
	B	211	18861	胴部	Ⅲａ	48.54	E － 17	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	浅黄	浅黄	○				○		○	茶粒	刻目突帯文・ｽｽ
第83図	B	212	なし	口縁	表採	—	—	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐	褐灰	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	213	30003	口縁	Ⅲｂ	47.83	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○		金	○	○		口縁部にｽｽ
	B	214	なし	口縁	Ⅱ	—	C － 20	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明赤褐	にぶい褐	○		○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文（ヘラ状工具で深く刻目を施す
	B	215	21956	口縁	Ⅲａ	46.93	F － 26	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄褐	橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	B	216	28949	口縁	Ⅲａ	47.81	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○		○	茶粒	刻目突帯文（ヘラ状工具を使って深い刻み）
	B	217	4704	口縁	Ⅱ	47.36	C － 23	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○			○	○	OB 茶粒	
	B	218	6158	口縁	Ⅱ	47.74	D － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	暗灰黄	浅黄	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・ｽｽ
	B	219	なし	口縁	表採	—		ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文・刻目の中心部が一番低くなっている。貝殻で施した
	B	220	7133	口縁	Ⅱ	47.73	D － 20	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	黄灰	灰黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	221	20027	口縁	Ⅲａ	47.62	C － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	明黄褐	灰黄褐	○		○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	B	222	4710	口縁	表採	47.38	—	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい褐	黒褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	B	223	5059	口縁	Ⅱ	47.77	C － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	黄灰	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・ｽｽ
	B	224	なし	口縁	Ⅱ	—	C － 26	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	OB	
	B	225	なし	口縁	Ⅲｂ	—	D － 20	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	灰褐	灰褐	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	226	4041 4190	口縁	Ⅱ Ⅲａ	47.67	D － 22 C － 22	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○		○				○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・ｽｽ
	B	227	27665	口縁	Ⅲａ	47.99	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・押しつぶした様な刻目・ひも状の突帯をつぶす
	B	228	27488	口縁	Ⅲａ	48.23	C － 18	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	B	229	25459	胴	Ⅲａ	48.21	D － 19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○	○	黒曜石	刻目突帯文・沈線文
	B	230	8521	口縁	Ⅲ	47.51	C － 15	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	B	231	なし	口縁	表採	—		ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明黄褐	橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文・沈線あり
第84図	C	232	22277	口縁	Ⅲａ	46.89	F － 26	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	233	29943	口縁	Ⅲａ	47.84	D － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ ﾍﾗﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文二条文・指で屈曲させたような跡ウラに有り
	C	234	14530	口縁	Ⅲａ	48.18	E － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	二条刻目突帯文・剥離
	C	235	32190	口縁	Ⅲａ	46.69	E － 28	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄	黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石	
	C	236	32247	口縁	Ⅲａ	46.67	E － 29	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	237	7116	口縁	Ⅱ	47.75	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	明褐	橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	C	238	2386	口縁	Ⅱ	47.47	C － 24	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	暗赤褐	赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	239	3072	口縁	Ⅲａ	47.66	E － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		貼付突帯・山形口縁の可能性あり
	C	240	6891	口縁	Ⅱ	48.88	D － 15	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい黄褐	にぶい黄	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・ｽｽ
	C	241	29575	胴部	Ⅲａ	48.08	D － 19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指ﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	C	242	3876	口縁	Ⅲ	47.42	C － 24	ﾍﾗｹｽﾞﾘ指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	C	243	18409	口縁	Ⅲａ	46.78	F － 28	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	22547,22545 二条刻目突帯文・ｽｽ
第85図	C	244	28723	口縁～胴部	Ⅲａ	47.91	D － 20	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明褐	明褐	○	○	○			○	○	黒曜石	28063,28062,26913 二条刻目突帯文・ヘラ状工具で切り込むように刻目を施す
	C	245	30631	口縁	Ⅲａ	47.90	E － 20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	31172,30784,31167 31164
	C	246	7122	口縁	Ⅱ	47.76	D － 20	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	C	247	なし	口縁	表採	—	C － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい赤褐	灰褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	248	15310	口縁	Ⅲａ	48.22	E － 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	249	3375	口縁	Ⅱ	47.93	B － 20	指ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	250	8917 32323	口縁	Ⅲｂ Ⅲａ	47.29	C － 25 E － 26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	暗灰黄	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	二条刻目突帯文・一条目の刻目は磨滅により不明、欠損も有り、全面に剥離
	C	251	29644	口縁	Ⅲａ	47.95	E － 19	板ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい黄褐	橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文（外）口縁部と胴部に刻目突帯が巡る
	C	252	14863	口縁	Ⅲａ	47.81	C － 20	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい褐	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石	二条刻目突帯文・ｽｽ
	C	253	なし	口縁	表採	—	—	ﾅﾃﾞ	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	C	254	5979 5980	口縁	Ⅲａ	49.58	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐灰	にぶい赤褐		○	○			○	○		刻目突帯文
	C	255	4963	口縁	Ⅱ	47.56	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					○		茶粒	刻目突帯文（二条）
	C	256	5347	口縁	Ⅱ	47.73	D － 21	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	灰黄褐	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	257	7446	口縁	Ⅱ	47.31	D － 25	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	二条刻目突帯文
	C	258	なし	口縁	表採	—	—	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒褐	灰黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	二条刻目突帯文・黒色磨研
	C	259	23095	口縁	Ⅲ	47.00	F － 25	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	橙	黒褐	○	○	○			○	○	茶粒	二条刻目突帯文・外面にｽｽ付着

第23表　弥生時代の甕形土器観察表４

挿図番号	分類	遺物番号	取上番号	部位	層	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 ﾊﾝﾚｲｽ	胎土 片岩	その他	備考
第86図	C	260	27862	口縁	Ⅲa	48.00	D － 19	ケズリ・ナデ	ハケメ・指ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	OB 茶粒	刻目突帯文（二条）二条目は磨滅が激しい 内外面ススあり
	C	261	27789	口縁	Ⅲa	47.98	D － 20	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	○	○			○	○	OB	内外面にスス
	C	262	2958	口縁	Ⅱ	47.68	C － 22	ナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	
	C	263	22552	口縁	Ⅲa	46.28	F － 27	ハケ・ナデ・指頭圧痕	ハケ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	C	264	1866	口縁～胴部	Ⅱ	47.92	D － 20	丁寧なヘラケズリ・指頭圧痕	ヘラ状による工具ケズリ・指ナデ	にぶい黄褐	橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・口唇部を指でクイッと曲げている様が特徴・スス
	C	265	4140	口縁	Ⅱ	47.63	C － 22	ヘラナデ	ヘラナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	C	266	7111 2564	口縁	Ⅱ	47.83	D C － 20	ナデ	ナデ	にぶい褐	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
第87図	C	267	31223	口縁	Ⅲa	48.06	F － 20	ヘラケズリ・ナデ	粗いヘラケズリ後ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	OB	
	C	268	29020 29326	口縁	Ⅲa Ⅲ	48.14	C D － 18 19	ケズリ	ケズリ後ナデ・ヘラナデ	にぶい赤褐	橙	○	○	○			○	○	黒曜石	二条刻目突帯文・外面にスス付着
	C	269	28650	口縁	Ⅲa	47.91	D － 20	ナデ・指頭圧痕	ヘラケズリ後ナデ	にぶい赤褐	褐灰	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	27770,27769 刻目突帯文
	C	270	4423	口縁	Ⅱ	47.52	C － 19	ヘラケズリナデ	ヘラケズリとナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	
	C	271	7290	口縁	Ⅲ	48.00	D － 20	ヘラケズリ・指頭圧痕	ヘラナデ・指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		3860,2000
	C	272	4148	口縁	Ⅱ	47.63	C － 22	丁寧なナデ・ヘラケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石	二条刻目突帯文・口唇部内面は丁寧なナデ
	C	273	11329	口縁	Ⅲa	48.57	D － 17	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	274	2178 3130	口縁	Ⅱ	47.80	C － 21	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	明赤褐	明褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	無刻目突帯文
	C	275	6490	口縁	Ⅱ	47.68	C － 20	ヘラケズリ・指頭圧痕	ヘラケズリ・指ナデ・指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	OB	無刻目突帯文
	C	276	2358	口縁	Ⅱ	47.52	C － 26	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	明黄褐	黒褐	○	○	○			○	○		
	C	277	27979	口縁	Ⅲa	47.95	D － 20	指頭圧痕・ナデ	ナデ・指頭圧痕	褐灰	黒褐	○	○	○			○	○		
第88図	C	278	15326	口縁	Ⅲa	48.12	D － 19	ヘラケズリ後ナデ	ナデ・指頭圧痕	橙	橙	○	○	○			○	○		27787,26775,14740,28845,15868 刻目突帯文・スス
	C	279	11255	口縁	Ⅲa	48.65	D － 17	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	にぶい黄褐	暗赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	
	C	280	3822	口縁	Ⅱ	47.86	C － 21	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	明赤褐	黒褐	○		○			○	○	玉ずい	
	C	281	23169	口縁	Ⅲa	46.89	F － 26	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	明赤褐	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石	23535,23536
	C	282	なし	口縁	表採	—	－	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	○		○			○	○		
	C	283	7159	口縁	Ⅲa	47.70	D － 21	ヘラミガキ	丁寧なナデ	黒褐	黒褐	○		○			○			
	C	284	26945 26251	口縁	Ⅲa	48.03	D － 19	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後・ナデ	明赤褐	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文（二条）
	C	285	20	口縁	Ⅱ	50.83	C － 8	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	茶粒	
	C	286	なし	口縁	表採	—	－	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい褐	灰黄褐	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	287	4890	口縁	Ⅱ	47.48	D － 24	粗いヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	明黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文　棒状工具により深く刻まれている 内側口唇部にスミが付着
	C	288	P14	口縁	表採	—	F － 26	ナデ・ヘラケズリ	ナデ指押さえ	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○			○	○	OB	
	C	289	2323	口縁	Ⅱ	47.53	C － 24	ヘラケズリ・指頭圧痕	ヘラケズリ・指頭圧痕	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	290	21967 21970	口縁	Ⅲa	46.98	F － 26	ヘラケズリ・ナデ・指圧痕	ヘラケズリ後ナデ・指圧痕	黄橙	浅黄	○	○	○	○		○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
第89図	C	291	24398	口縁	Ⅲa	48.33	C － 18	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○			○	○		ススス
	C	292	28800	口縁	Ⅲa	48.09	D － 19	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕・指ナデ	褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文（刻目の深さが浅い）
	C	293	3296	口縁	Ⅱ	48.00	C － 19	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文・棒状工具で浅い刻目を施す
	C	294	14587	口縁	Ⅲa	48.24	E － 17	ヘラナデ	ヘラナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		刻目突帯文・ヘラ状工具で深く施文
	C	295	3672	口縁	Ⅱ	47.64	C － 23	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	明褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
	C	296	22963	口縁	Ⅲa	46.98	F － 26	ナデ	指押さえケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	OB	
	C	297	2693	口縁	Ⅱ	47.74	C － 23	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	黒曜石	刻目突帯文（外）板の調整
	C	298	4309	口縁	Ⅲa	47.43	C － 23	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	OB 茶粒	刻目突帯文・丹塗り
	C	299	4019	口縁	Ⅲ	47.55	C － 23	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	黄褐	にぶい黄褐		○				○	○	OB 茶粒	
	C	300	25185	口縁	Ⅲa	48.18	D － 19	ハケメナデ（板調整）	ハケメナデ（板調整）	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	OB	棒状工具で刻目突帯文
	C	301	29366	口縁	Ⅲa	47.85	E － 20	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○		
	C	302	8721	口縁	Ⅱ	47.28	C － 15	粗いヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・ナデ	橙	灰黄褐	○	○	○			○	○		無紋
	C	303	28241	口縁	Ⅲa	48.12	C － 19	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい赤褐	黒褐	○	○	○			○	○		
	C	304	174	口縁	Ⅱ	50.79	C － 8	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	茶粒	
	C	305	4574	口縁	Ⅱ	47.52	D － 23	ナデ・指頭圧痕	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		無紋
	C	306	6682	口縁	Ⅱ	49.13	D － 14	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		
	C	307	4177	口縁	Ⅲa	47.60	C － 23	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		
	C	308	31356	口縁	Ⅲb	47.73	D － 29	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	茶粒	
	C	309	4366	口縁	Ⅱ	47.62	C － 19	ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○		
	C	310	3785	口縁	Ⅱ	47.36	C － 25	丁寧なヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		
	C	311	12352	口縁	Ⅲa	47.32	D － 24	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○			○	○		無紋・剥離
	C	312	29152	口縁	Ⅲa	47.84	D － 19	ナデ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		無紋
	C	313	29938	口縁	Ⅲa	47.84	D － 19	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	黒褐	橙	○	○	○			○	○		無紋
	C	314	9017	口縁	Ⅲ	47.53	C － 20	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	C	315	29136	口縁	Ⅲa	48.03	D － 19	ヘラケズリ・指頭圧痕	ヘラケズリ・ナデ	明黄褐	橙	○	○	○			○	○		
	C	316	なし	口縁	表採	—	C － 18	ナデ	ナデ・指頭圧痕	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○			○	○		
	C	317	22449	口縁	Ⅲa	47.15	F － 25	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	OB	
	C	318	10923	口縁	Ⅲa	49.03	D － 16	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	灰黄	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文　ヘラ状の工具で深く刻まれている
	C	319	なし	口縁	表採	—	－	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	OB	
	C	320	なし	口縁	表採	—	－	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文

第24表　弥生時代の甕形土器観察表５

挿図番号	分類	遺物番号	取上番号	部位	層	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 ﾊﾞﾝﾄﾞｽ	胎土 片岩	その他	備考
第90図	C	321	4568	口縁	Ⅱ	47.55	D － 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○				○	OB	刻目突帯文
	C	322	5200	口縁	Ⅱ	47.34	C － 25	剥離	ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙	にぶい黄	○		○				○		貼付突帯
	C	323	なし	口縁	表採	—	C － 21	ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	褐	褐	○	○	○				○		
	C	324	25268	口縁	Ⅲa	48.24	D － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○				○		無紋
	C	325	12792	口縁	Ⅲa	47.25	D － 25	丁寧なﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○	○				○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	C	326	2310	口縁	Ⅱ	47.55	C － 24	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	褐	暗褐	○	○	○				○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	327	29521	口縁	Ⅲa	47.69	D － 19	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい褐	○		○						3039,16107 刻目突帯文
	C	328	363	口縁	Ⅱ	50.80	C － 8	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○				○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
	C	329	19607	口縁	Ⅲa	48.29	E － 18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	黒褐	黒褐	○	○	○				○	○	OB	20248,19489 刻目突帯文，口唇部ﾍﾗﾐｶﾞｷ，ｽｽ痕，突帯をﾍﾗﾐｶﾞｷ後刻目を入れる
第91図	C	330	30641	口縁	Ⅲa	47.95	E － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○	○				○	○		（口縁）初期・斑縁
	C	331	2275	口縁	Ⅱ	47.94	C － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	暗灰黄	○	○	○				○	○		突帯文
	C	332	25351	口縁	Ⅲa	48.24	D － 18	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○		
	C	333	16100	口縁	Ⅲa	48.03	E － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○		
	C	334	16240	口縁	Ⅲb	48.01	E － 19	指頭圧痕・指ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○				○	○	茶粒	
	C	335	なし	口縁	Ⅱ	—	C － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指頭圧痕	にぶい橙	黒褐	○	○	○				○	○		
	C	336	24522	口縁	Ⅲa	48.35	C － 18	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○		
	C	337	598	口縁	Ⅲ	50.61	D － 15	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐	明赤褐	○	○	○				○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	338	26879	口縁	Ⅲa	47.95	C － 19	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○	○	○				○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	339	2366	口縁	Ⅱ	47.55	C － 26	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	灰黄褐	にぶい橙			○				○	○	黒曜石	刻目突帯文
	C	340	29916	口縁	Ⅲa	47.88	D － 19	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○				○	○	OB 茶粒	棒状工具刻目突帯文
	C	341	11972	口縁	Ⅳ	47.19	E － 23	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	ﾊｹ・指ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○				○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	C	342	4781	口縁	Ⅱ,Ⅲa	47.40	C － 24	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○					○	○		粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ後生乾きのうちにﾅﾃﾞつけたような感じ
	C	343	4420	口縁	Ⅱ	47.52	C － 19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒褐	褐	○	○	○				○	○	茶粒	刻目突帯文
第92図	C	344	14596 14380	口縁	Ⅲa	48.17	E F － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	（上）丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ（下）ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい褐	橙	○	○	○				○	○		
	C	345	4112	口縁	Ⅲa	47.65	C － 21	ﾅﾃﾞ・ﾊケメ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				○	○	黒曜石	刻目突帯文・ススス
	C	346	3267 2001	口縁	Ⅱ	47.79	B － 21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい赤褐	褐	○	○	○				○	○	OB	無刻目突帯文
	C	347	30240	口縁	Ⅲa	47.92	D － 14	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指押さえ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	橙	明黄褐							○			
第93図	D	348	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○					○		二条刻目突帯文・3～5㍉大の石英・長石の粒が特徴
	D	349	3600	口縁	Ⅱ	47.80	C － 20	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	明赤褐	橙	○	○	○				○	○	OB 茶粒	
	D	350	27050	口縁	Ⅲa	48.14	D － 19	ﾅﾃﾞ	指押さえ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○	OB 茶粒	
	D	351	10675	口縁	Ⅱ	47.93	D － 21	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○				○	○	茶粒	刻目突帯文・2段目の突帯は摩耗激しい
	D	352	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ・指ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐	褐	○	○	○				○	○	茶粒	刻目突帯
	D	353	25243	口縁	Ⅲa	48.11	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	明黄褐	明黄褐	○	○	○				○	○	OB	28978,28125 刻目突帯文
	D	354	1903	口縁	Ⅱ	47.87	C － 19	指押さえ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○				○	○	茶粒	
	D	355	27229	口縁	Ⅲa	48.04	D － 20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	赤褐	黒褐	○	○	○				○	○	OB 茶粒	刻目突帯文（二条）
第94図	D	356	5935 1803	口縁	Ⅱ	49.62	D － 21 C － 21	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	明黄褐	○		○				○	○	茶粒	二条刻目突帯文
	D	357	12748	口縁	Ⅲa	47.40	D － 24	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい褐										刻目突帯文
	D	358	8240	口縁	Ⅱ	47.97	E － 20	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	灰黄褐	灰黄褐	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文
	D	359	25252 25260	口縁	Ⅲa	48.19	D － 19	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○				○	○	黒曜石	口唇部に8㍉幅のﾍﾗ状工具痕4個あり（突帯貼付部）
	D	360	なし	口縁	表	—	D － 18	ﾍﾗｹｽﾘ	ﾍﾗｹｽﾘ	褐灰	にぶい褐	○	○	○				○	○		
	D	361	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	D	362	なし	口縁	表採	—	－	丁寧なﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文　小さなﾍﾗ状工具で刻目を施す。内外面とも口唇部に刻目を施す。
	D	363	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	ﾊケメ（板調整）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○	OB 茶粒	
	D	364	30542	口縁	Ⅲa	47.82	E － 20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○		○				○	○	茶粒	
	D	365	14351	口縁	Ⅲa	48.14	E － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙		○	○				○			刻目突帯文
	D	366	11346	口縁	Ⅲa	48.46	D － 17	ﾅﾃﾞ	工具による丁寧なﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○		○				○	○	黒曜石 茶粒	
	D	367	18984	口縁	Ⅲa	48.66	E － 18	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗褐	にぶい赤褐	○	○	○				○	○	OB 茶粒	ゆるやかな屈曲の口縁・はりつけた突帯は不明瞭・外面にスス
	D	368	18740	口縁	Ⅲa	48.39	E － 18	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	橙	橙	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文
	D	369	19263	口縁	Ⅲa	46.87	G － 27	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	橙	橙	○	○	○				○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
	D	370	3560	口縁	Ⅱ	48.09	B － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	明黄褐	○	○	○				○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	D	371	4390	口縁	Ⅱ	47.59	C － 19	ﾅﾃﾞ・指ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指押さえ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文
	D	372	25879	口縁	Ⅲa	48.21	D － 18	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○				○	○	OB	
	D	373	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文
	D	374	12456	口縁	Ⅲa	47.42	D － 24	ﾅﾃﾞ・指押さえ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指押さえ	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○				○	○	OB 茶粒	刻目突帯文
	D	375	2971	口縁	Ⅱ	47.67	C － 23	ﾅﾃﾞ	横ナデ・ﾍﾗｹｽﾘ後ﾅﾃﾞ（タテ）下段	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文
	D	376	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文
	D	377	16098	口縁	Ⅲa	48.04	E － 19	ハケメ	ハケメ	明赤褐	にぶい褐	○	○	○				○	○		刻目突帯文
	D	378	4118	口縁	Ⅱ	47.66	C － 21	指押さえ・ﾅﾃﾞ	ハケ・ナデ	橙	橙	○		○		○			○	茶粒	刻目突帯文・外側にスス
	D	379	13977	口縁	Ⅲb	48.70	D － 16	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○	○	OB	刻目突帯文

第25表　弥生時代の甕形土器観察表６

挿図番号	分類	遺物番号	取上番号	部位	層	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 ﾊﾞﾝﾄﾞｶﾞﾗｽ	胎土 片岩	その他	備考
第95図	D	380	3129 28964	口縁	Ⅱ Ⅲa	47.70	C,D － 21,19	横ﾅﾃﾞ・指ﾅﾃﾞ	指押さえ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○			○	○	OB 茶粒 玉ずい	刻目突帯文・部分的に胴部に刻目が及ぶ不等ピッチの刻目・外面ｽｽ
	D	381	土坑2	口縁	表採	—	C － 17	ﾅﾃﾞ・指押さえ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文
	D	382	3483	口縁	Ⅱ	47.76	B － 21	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	浅黄	にぶい黄橙	○	○					○	OB 茶粒 玉ずい	刻目突帯文
	D	383	3803	口縁	Ⅱ	47.40	C － 25	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	OB 茶粒 玉ずい	刻目突帯文
	D	384	3396	口縁	Ⅲ	47.89	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						○			刻目突帯文
	D	384	5960	口縁	Ⅱ	49.56	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						○			刻目突帯文
	D	385	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文（ヘラ状工具で切り込む様に刻み目を施す）
	D	386	13021	口縁	Ⅲa	47.35	D － 26	ﾅﾃﾞ・指ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指押さえ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	OB	
	D	387	14087	口縁	Ⅲa	48.46	C － 17	ﾅﾃﾞ指押さえ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文
	D	388	2650	口縁	Ⅱ	47.68	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		
	D	389	14720	口縁	Ⅲa	48.17	E － 19	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	
第96図	D	390	30905	口縁	Ⅲb	48.11	D － 19	丁寧なﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	D	391	28870	口縁	Ⅲa	48.10	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明黄褐	にぶい黄	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	D	392	なし	口縁	現道溝内	—	現道 －	ﾅﾃﾞ・指押さえ	ﾅﾃﾞ・指押さえ	黄橙	明黄褐	○		○			○	○	OB	刻目突帯文・口縁部が如意状
	D	393	4139	口縁	Ⅱ	47.69	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	暗灰黄	暗灰黄	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文
	D	394	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○			刻目突帯文
	D	395	31082	口縁	Ⅱ	48.20	E － 20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指押さえ	橙	橙	○	○	○			○	○	OB	
	D	396	16426	口縁	Ⅲa	47.90	E － 19	指押さえﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	橙	○	○	○			○	○	OB	刻目突帯文
	D	397	なし	口縁	表採	—	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	D	398	24257	口縁	Ⅲa	48.36	C － 17	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・三条線刻文（内）磨滅によりはっきりはしない部分あり（外）右側にﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ後に線刻を行う
第97図	E	399	25007	口縁	Ⅲa	48.19	D － 19	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ	指頭圧痕・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	E	400	10877	口縁	Ⅲa	48.93	D － 16	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯
	E	401	2452	口縁	Ⅲa	47.32	C － 27	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	（外）ｽｽ
	E	402	21558	口縁	Ⅲb	47.32	C － 24	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	褐	○	○	○			○	○	黒曜石	
	E	403	4382	口縁	Ⅱ	47.53	C － 19	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい褐	褐	○	○	○			○	○	黒曜石	
	E	404	19696	口縁	Ⅲa	47.92	D － 21	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○				○	○	茶粒	如意状口縁
	E	405	30566	口縁	Ⅲa	47.95	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文・ｽｽ
	E	406	3017	口縁	Ⅱ	47.68	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	E	407	26897	口縁	Ⅲa	48.26	C － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指頭圧痕	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		口縁部に刻目突帯文
	E	408	18997	口縁	Ⅲa	48.78	E － 16	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	（外）ｽｽ
	E	409	18954	口縁	Ⅲa	48.85	E － 16	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	指ﾅﾃﾞ	明赤褐	暗赤灰	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯
	E	410	なし	口縁	Ⅱ	—	C － 26	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	橙	ｵﾘｰﾌﾞ黒	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・如意状口縁
	E	411	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	E	412	4204	口縁	Ⅱ	47.63	C － 23	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文・ｽｽ
	E	413	7985	口縁	Ⅱ	47.75	C － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	如意状口縁・刻目
	E	414	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	
第98図	E	415	11708 30910	口縁	Ⅲa Ⅲb	48.26	E D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文（口唇）
	E	416	11410	口縁	Ⅲa	48.59	D － 17	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文（二重）2穴の工具による刺突とヘラの2列の刻み・如意形口縁・ｽｽ
	E	417	28554	口縁	Ⅲa	47.87	E － 20	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ・指頭圧痕	明黄褐	にぶい黄橙	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文（口唇）
	E	418	2796	口縁	Ⅱ	47.65	D － 26	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	E	419	3761	口縁	Ⅱ	47.49	C － 14	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	
	E	420	なし	口縁	表採	—	－	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	浅黄	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	E	421	21119	口縁	Ⅲb	47.19	D － 26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹﾒ	灰黄褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石	如意状口縁刻目
	E	422	4276	口縁	Ⅱ	47.42	C － 23	ﾅﾃﾞ	横ﾅﾃﾞ	明黄褐	明黄褐	○	○				○	○	茶粒	刻目突帯文
	E	423	31514	口縁	Ⅲa	48.17	B － 17	ﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	橙	黄灰	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	E	424	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明赤褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	E	425	なし	口縁	表採	—	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○		○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	E	426	29374 30658	口縁	Ⅲa	48.09	E － 19 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	橙	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石	口縁部丁寧なﾅﾃﾞ・刻目突帯文
	E	427	26222	口縁	Ⅲa	48.09	C － 19	指頭圧痕・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・横ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
第99図	E	428	24982 15864	口縁	Ⅲa	48.22	D E － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	E	429	24861	口縁	Ⅲa	48.08	E － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	30696,2601二条刻目突帯文（全体的に磨滅している部分が多い）口唇部のみを折り曲げて如意形を意識して作る。口唇をむりやり曲げたため、刻目下部には粘土の押さえ痕が残る。
	E	430	2601	口縁	Ⅱ		C － 21	ﾅﾃﾞ・指押さえ	丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	
	E	431	14634	口縁	Ⅲa	48.20	E － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○		○		○	黒曜石 茶粒	屈曲させて如意状を真似ている様が見て取れる

第26表　弥生時代の甕形土器観察表７

挿図番号	分類	遺物番号	取上番号	部位	層	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 ﾊﾞﾘｽｶﾞﾗｽ	胎土 片岩	その他	備考
第99図	E	432	3490	口縁	Ⅱ	47.75	C － 21	指頭圧痕 ﾅﾃﾞ	かなり丁寧なﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	如意状口縁・ﾐｶﾞｷといえなくもない程丁寧なﾅﾃﾞ・口縁付近はﾀﾃ、頭部は30°程斜め～水平、胴下部は30°以下でﾅﾃﾞ・断面接合面は磨滅して観察できない
	E	433	29727	口縁	Ⅲa	48.00	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・横ﾅﾃﾞ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	E	434	6498 10649	口縁～胴部	Ⅱ,Ⅲ	47.67	C － 20	ｹｽﾞﾘ・横ﾅﾃﾞ	工具ｹｽﾞﾘ横ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	(外)ｽｽ・刻目突帯文・如意形口縁・補修孔
	E	435	1875	口縁	Ⅱ	47.94	C － 20	ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	E	436	3655	口縁	Ⅲa	47.61	C － 23	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	明黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	E	437	29791	口縁	Ⅲa	ー	B － 19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	E	438	5335	口縁	Ⅱ	47.83	D － 21	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	橙	○	○	○			○	○		刻目突帯文
	E	439	なし	口縁	表採	ー	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		刻目突帯文
第100図	E	440	15 20	口縁	Ⅱ.土、土I	50.86	C － 8	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	橙	にぶい橙	○	○	○		○		○		刻目突帯文・ｽｽ付着
	E	441	30112 30123	口縁	Ⅲa	47.98	E D － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文(口縁)・ｽｽ付着
	E	442	14638 14645	口縁～胴部	Ⅲa	48.25	E － 19	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	橙	浅黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文・長石石英の2㎜大の粒子の大きさが在地のものと異なる
	E	443	15456 5375	口縁	Ⅲa	48.06	E － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	にぶい黄橙	○		○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文・如意形口縁・石英粒子等2㎜程度と大きいものが多い
	E	444	4694	口縁	Ⅱ	47.32	C － 25	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕(ﾖｺﾅﾃﾞ)	にぶい橙	にぶい褐	○		○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	E	445	1910	口縁	Ⅱ	47.87	D － 19	ﾅﾃﾞ(横ﾅﾃﾞ)	ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ(横)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○		刻目突帯文・ｽｽ
	E	446	なし	口縁	表採	ー		ﾍﾗﾅﾃﾞ(横)	丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	○	○	茶粒	口唇に刻目あり
第101図	F	447	2472	口縁	Ⅱ	47.16	D － 29	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	刻目突帯文
	F	448	11157	口縁	Ⅲa	49.01	D － 15	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	玉ずい 黒曜石	刻目突帯文
	F	449	10185	口縁	Ⅱ	47.20	E － 28	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	刻目突帯文
	F	450	17668	口縁	Ⅲa	46.72	E － 28	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜石	
	F	451	2471	口縁	Ⅲ	47.19	D － 29	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜石	
	G	452	17748	口縁	Ⅲa	46.70	E － 29	ﾊｹ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	茶粒	
	F	453	17582	口縁	Ⅲa	46.57	F － 28	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○			○	○	茶粒	口縁部に刻目突帯
	G	454	なし	口縁	表採	ー	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○		玉ずい 茶粒	
	G	455	なし	口縁	表採	ー	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指頭圧痕	ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	玉ずい	口縁部に沈線文有り
	H1	456	なし	口縁	表採	ー	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	
	H1	457	10456	口縁	Ⅱ	46.86	G － 27	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	黒髪Ⅱ式
	H2	458	2612	口縁	Ⅱ	47.67	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		黒髪Ⅱ式
	I	459	なし	口縁	表採	ー	－	ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	浅黄橙	明黄褐	○	○	○			○	○		ｽｽ
第102図	その他	460	25730	口縁	Ⅲa	48.22	C － 18	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石	29048,29058 刻目突帯文
	その他	461	なし	口縁	Ⅱ	ー	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○	○		○	○		
	その他	462	2604	口縁	Ⅱ	47.72	C － 21	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○	○			○		刻目突帯文
	その他	463	24775	胴部	Ⅲa	48.00	E － 20	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		貼付突帯(二重孤文)・刻目突帯文
	その他	464	16994	口縁	Ⅲa	46.29	G － 29	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	褐灰	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	
	その他	465	29742	口縁	Ⅲa	48.05	D － 19	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		
	その他	466	6497	口縁	Ⅱ	47.70	C － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指押さえ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		無刻目突帯文
	その他	467	5953	口縁	Ⅱ	49.61	D － 23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜石	口唇部平坦・口唇部下に断面三角形の突帯が付く
	その他	468	19152	口縁	Ⅲa	49.26	D － 15	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○		
	その他	469	27792	口縁	Ⅲa	47.94	D － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		突帯部指つまみ痕(押さえあと)
第103図	その他	470	2467	胴部	Ⅲa	47.27	C － 29	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	OB	沈線
	その他	471	24402	胴部	Ⅲa	48.35	C － 18	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐	灰黄褐	○	○				○	○	茶粒	刻目突帯文
	その他	472	4389	胴部	Ⅱ	47.57	C － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄	○	○				○	○		刻目突帯文
	その他	473	29834	胴部	Ⅲa	47.91	C － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		金	○		OB	刻目突帯文
	その他	474	なし	胴部	表採	ー	－	ﾅﾃﾞ・指押さえ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾊケ目	にぶい橙	にぶい黄			○					茶粒	外面にｽｽ
	その他	475	3979	胴部	Ⅱ	47.58	D － 23	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	横ﾅﾃﾞ・ﾊケ目	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		○		○	○		刻目突帯文・貝殻刺突文・ｽｽ付着
	その他	476	30497	胴部	Ⅲa	47.94	E － 20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ			○	○	○			○	○	OB 茶粒	ｽｽ
	その他	477	11040	肩	Ⅱ	0.00	D － 21	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜石 茶粒	剥離多し・ｽｽ
	その他	478	1565	胴部	Ⅱ	48.63	B － 16	ﾅﾃﾞ・剥離	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	明褐	にぶい黄褐	○		○	○		○	○	黒曜石 茶粒	(外)平行線文・沈線文
	その他	479	3603	胴部	Ⅱ	47.61	C － 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	浅黄	浅黄	○		○			○	○		刻目突帯文・沈線有り
	その他	480	15205	胴部	Ⅲa	48.36	D － 18	工具によるﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○		○	○	○	黒曜石 茶粒	内面に線刻描画あり、魚を意識しているように見えるが縦方向の傷は左に単純に発掘時の傷のようにも見えるが不明

鉢形土器（第105図～第113図）

鉢形土器の分布状況は，Ⅱ層では，竪穴住居跡のあるＣＤ－20・21区に，Ⅲ層以下の層では１号竪穴状遺構のあるＤＥ－19～20区に集中する。鉢形土器はその口縁の形状でＪ類からＲ類に分類した。

(ｼ)　Ｊ類土器（第105図）

481は山形の口縁を持ち，口縁部下部で屈曲する。全体にヘラミガキを施す。482は口縁部下部で屈曲し，屈曲から小さく直立する。全体にヘラミガキを施し，黒川式土器の浅鉢に似る。488は鉢形土器の胴部下部で，緩やかに屈曲して口縁部に立ち上がる器形を持つ。

(ｽ)　Ｋ類土器（第105図）

484は外面にヘラミガキを施し，口縁部にリボン状の突帯を持つ。485は内面にヘラミガキを施し口縁部に玉淵状の突帯を持つ。486は口縁部にリボン状の突帯を持ち，器面をナデによる調整を施す。胴部は肥厚し，緩やかに屈曲する土器である。

(ｾ)　Ｌ類土器（第105図～第108図）

489･492･515･523･525は口縁部下に小さな段を付けて口縁部を強調したものである。490･505・508・は断面三角形の突帯を持ち，口縁部に貼りつける。504は口縁部にひも状の突帯を張り付け，ヘラミガキを施す。510は口縁部を突帯状に断面三角形を成形し，口縁部上をナデて成形する。518・519は緩やかに内弯する口縁を持ち，屈曲が緩やかである。522は，口縁部を曲げて如意形を成形する。屈曲部は粘土を貼りつけて肥厚させ，内面に条痕を残す。525・526は口縁部が緩やかに外反する。525は屈曲部に補修孔を二つ持つ。527～530は口縁部から胴部屈曲部との間が短い土器である。527は口縁部に粘土を貼りつけ口縁部を外へ傾斜させる。529は断面三角形の無刻目の突帯を口縁部に接し，屈曲部にも貼りつける。531～534は胴部から緩やかに屈曲し，直立する口縁部を持つ。

(ｿ)　Ｎ類土器（第108図）

屈曲部がやや肥厚し，緩やかに屈曲する。554・556は緩やかに屈曲部から外反して口縁に伸びる器形を持つ。器面は丁寧なナデを持つ。559･560･561はまっすぐに底部から口縁部に開くバケツ状の器形を持ち，口縁部から少し下がった位置に爪で施文した刻目を持つ。器面外面は粗いヘラケズリによる調整痕を内外面ともに持つ。558は胎土やその器面調整，器形から559の底部の可能性が高い。

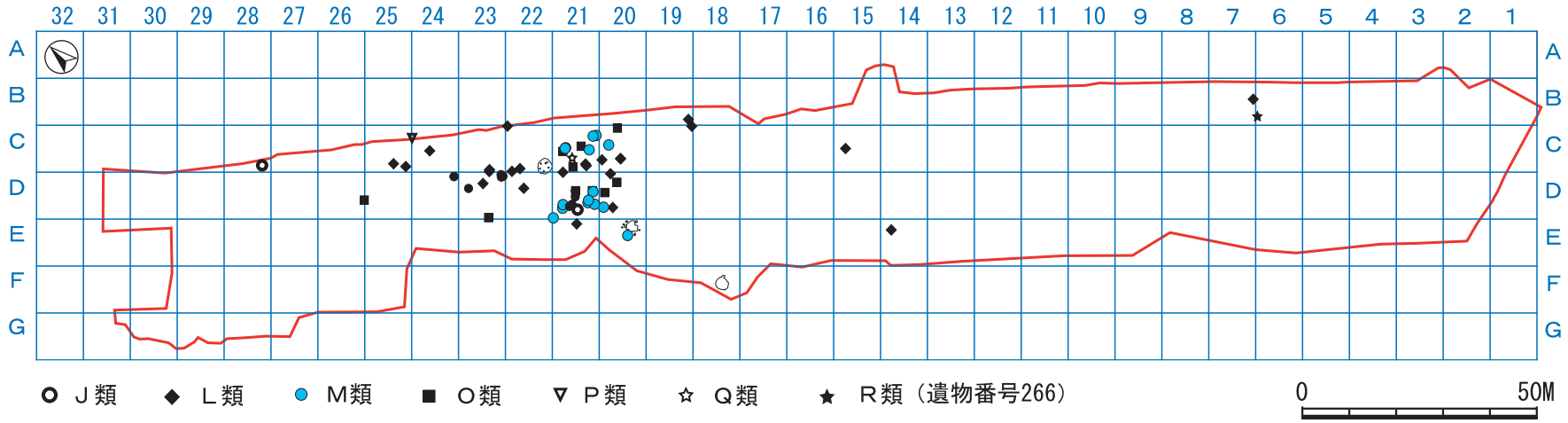
(ﾀ)　Ｍ類土器（第109図～111図）

557は口縁部にひとつ以上の山形のリボン状突帯を持ち，口縁部から少し下がった位置に刻目突帯を持つ。器面はヘラケズリ後荒いナデを施す。

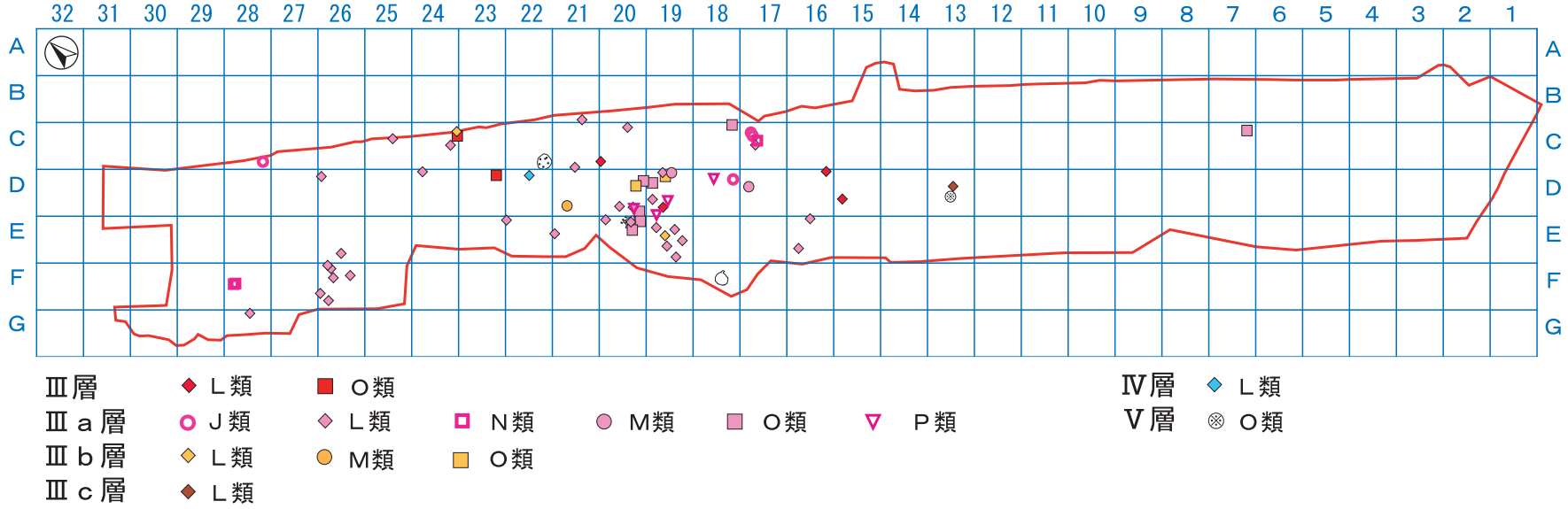
(ﾁ)　Ｏ類土器（第112図）

器壁を緩やかに弯曲させるボウル状の器形を持ち，口縁部は平坦にナデて成形する。572は内壁にヘラミガキを施す。578は口唇部の器壁が薄く，胴部に向かって厚くなり，緩やかに胴部に伸びる。583は口縁部に向かって大きく開き，器面をヘラケズリ後ナデている。584～588黄褐色の明るい胎土を持ち，内外面にヘラミガキや丁寧なナデを施す。584・585・587・588は同一個体の可能性が高い。

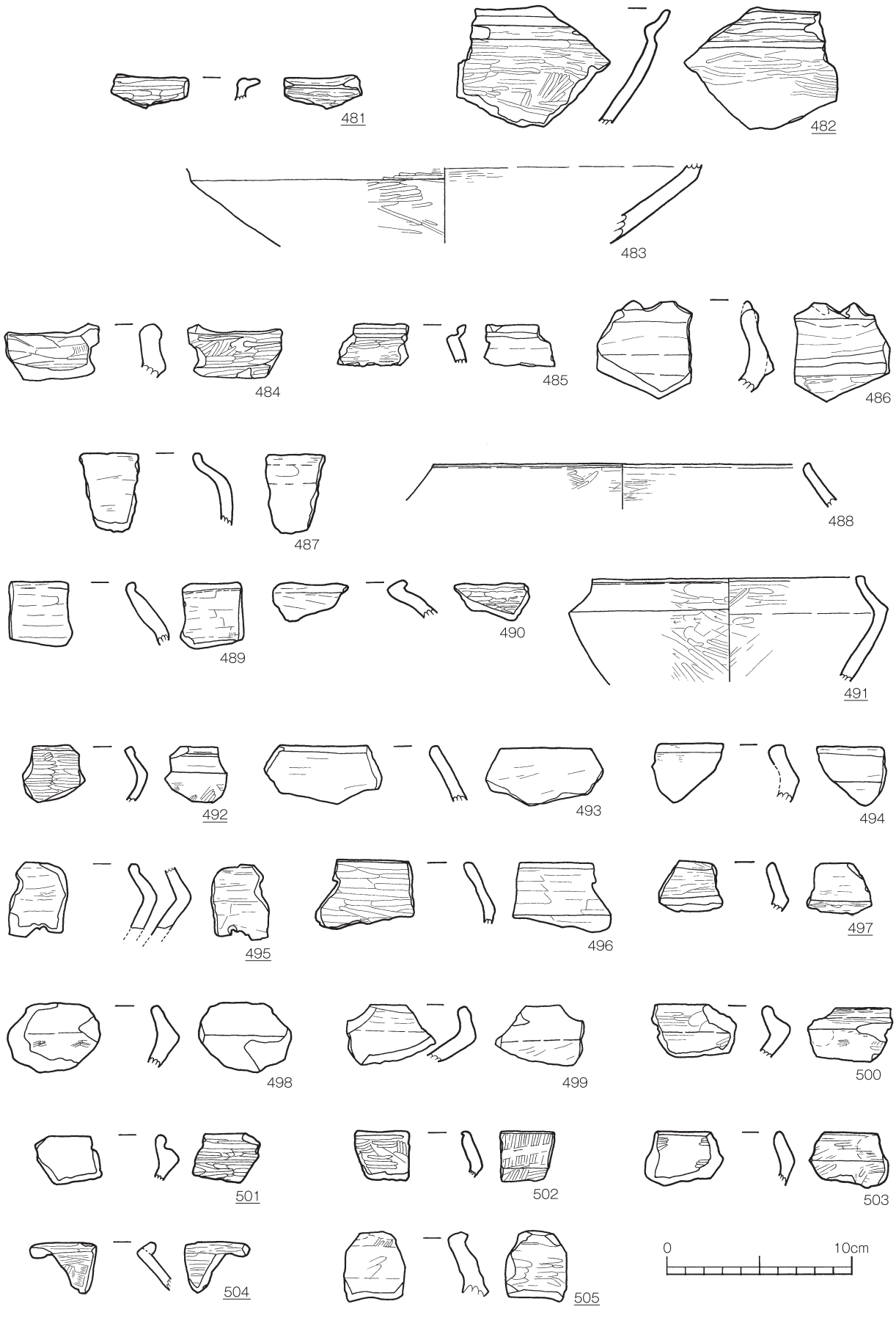
Ⅱ層出土状況



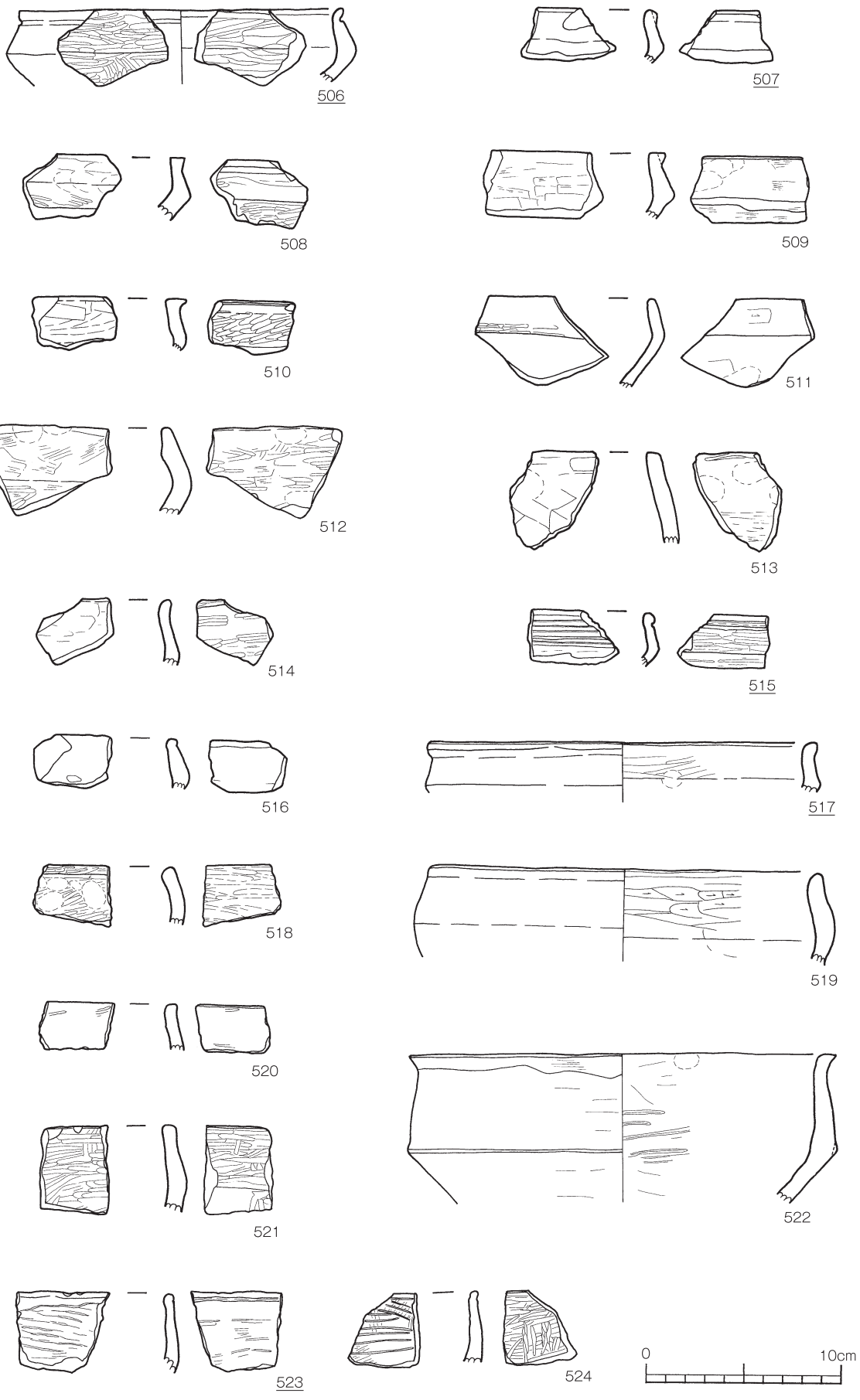
Ⅲ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ・Ⅳ・Ⅴ層出土状況



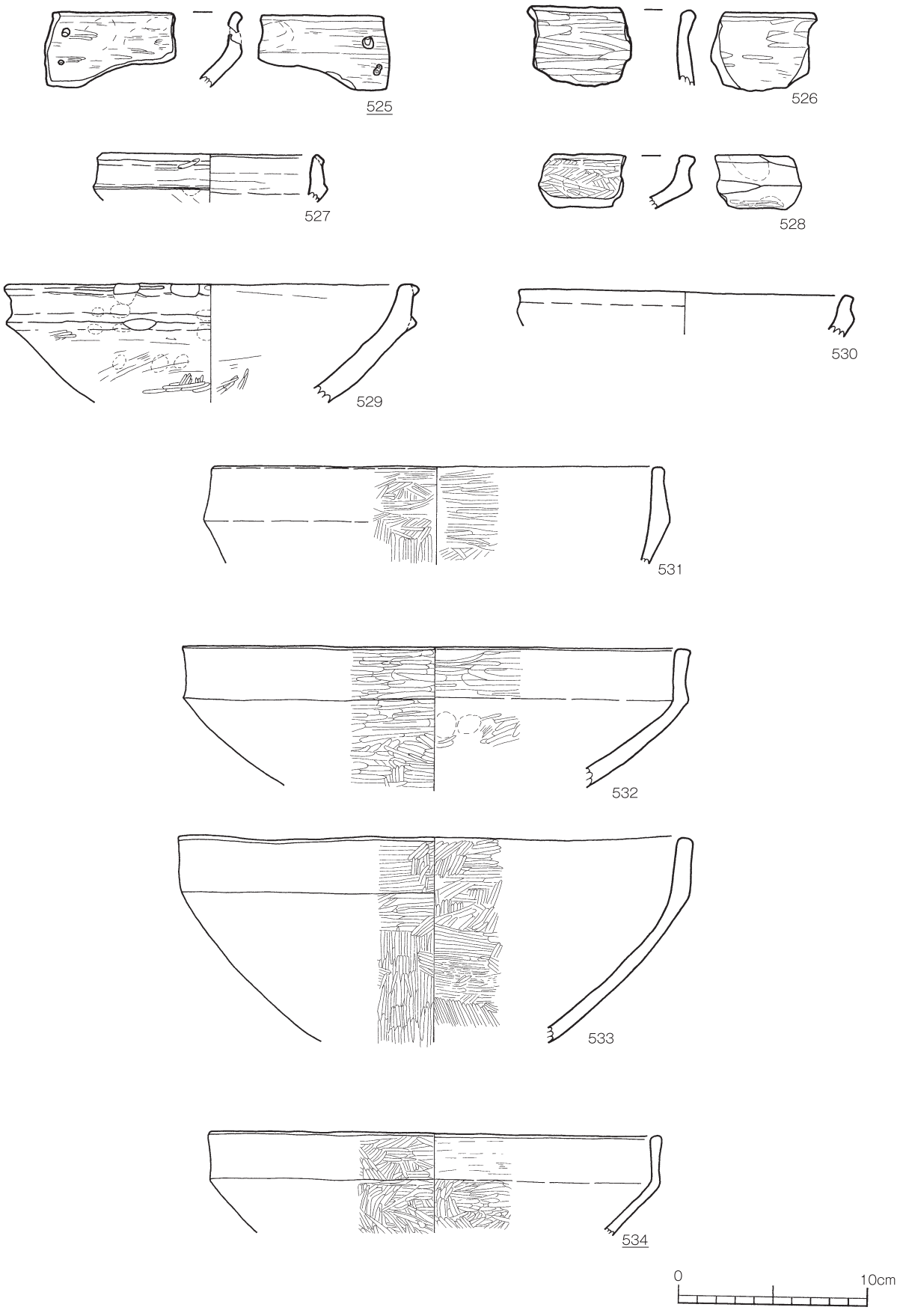
第104図　弥生時代の鉢形土器出土分布図（Ⅱ・Ⅲ層）



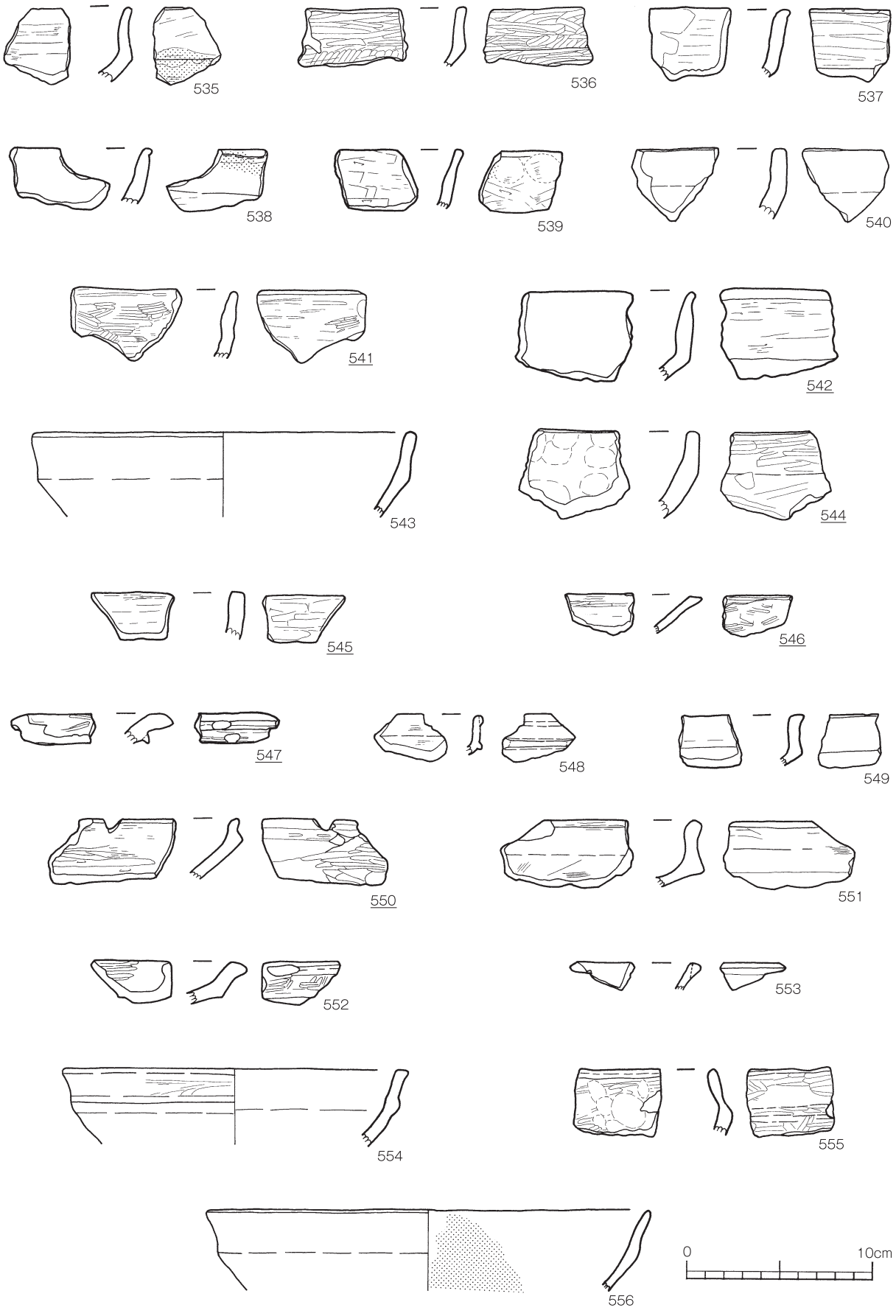
第105図　弥生時代の鉢形土器 1



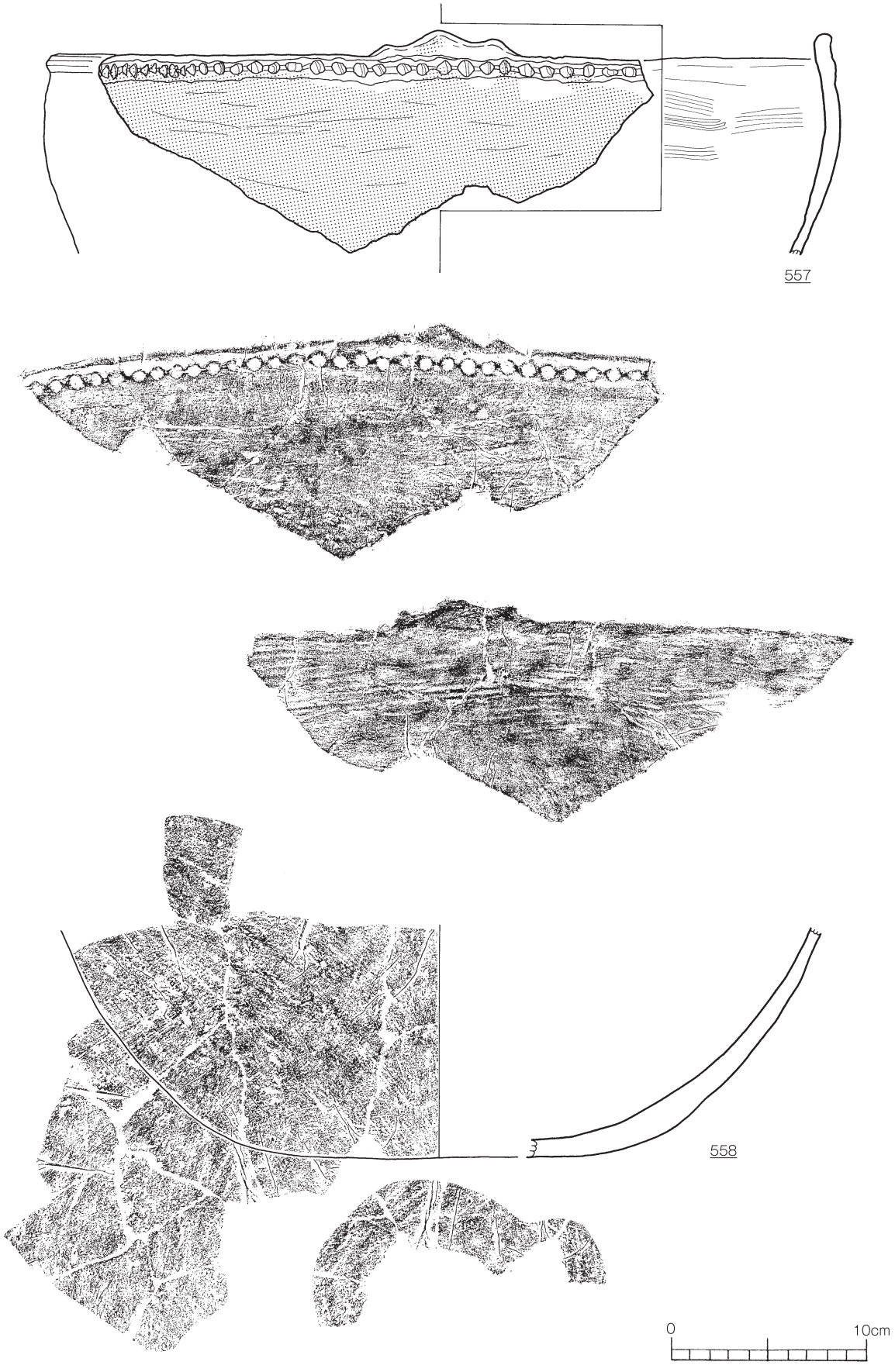
第106図　弥生時代の鉢形土器２



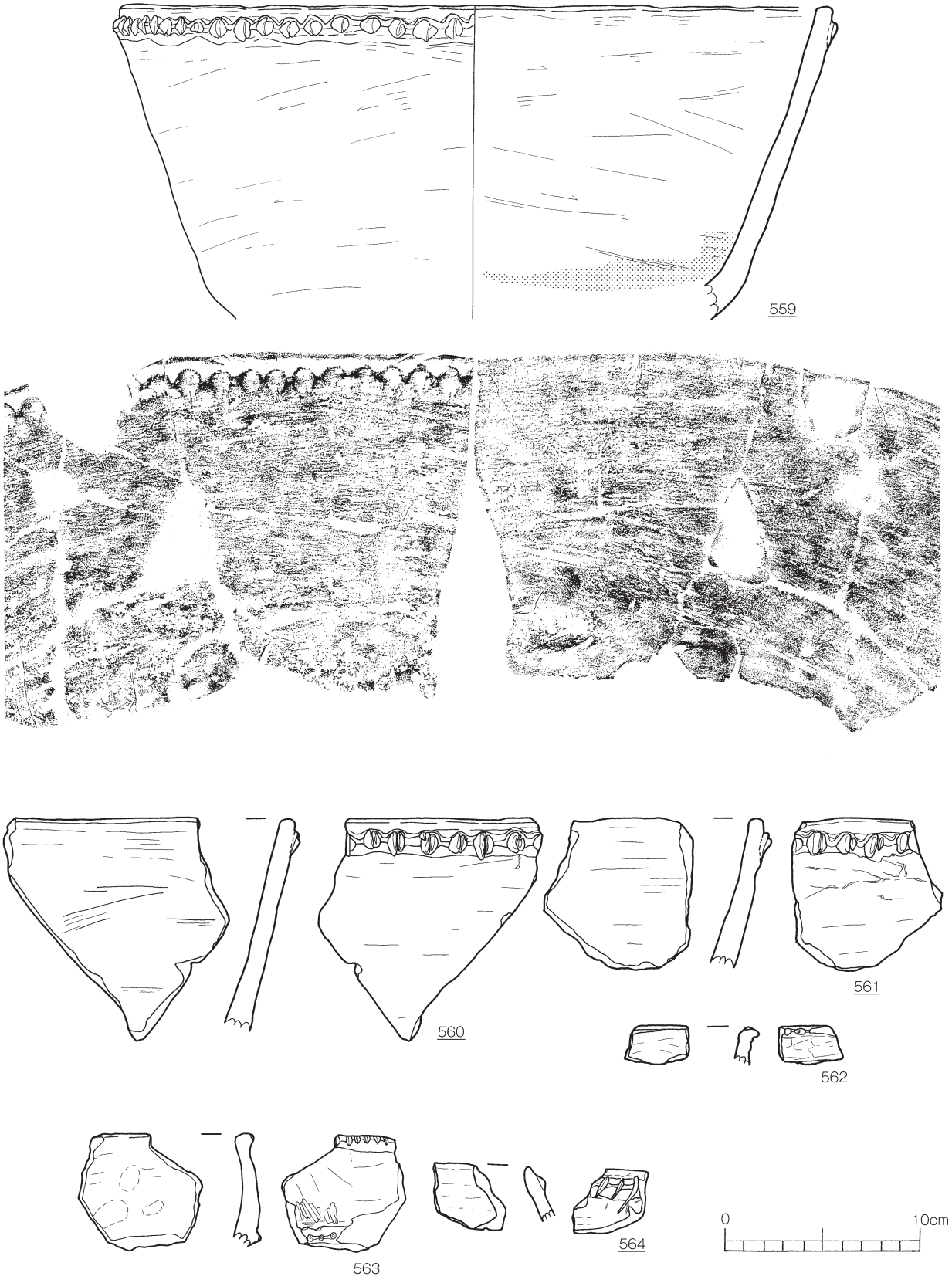
第107図　弥生時代の鉢形土器３



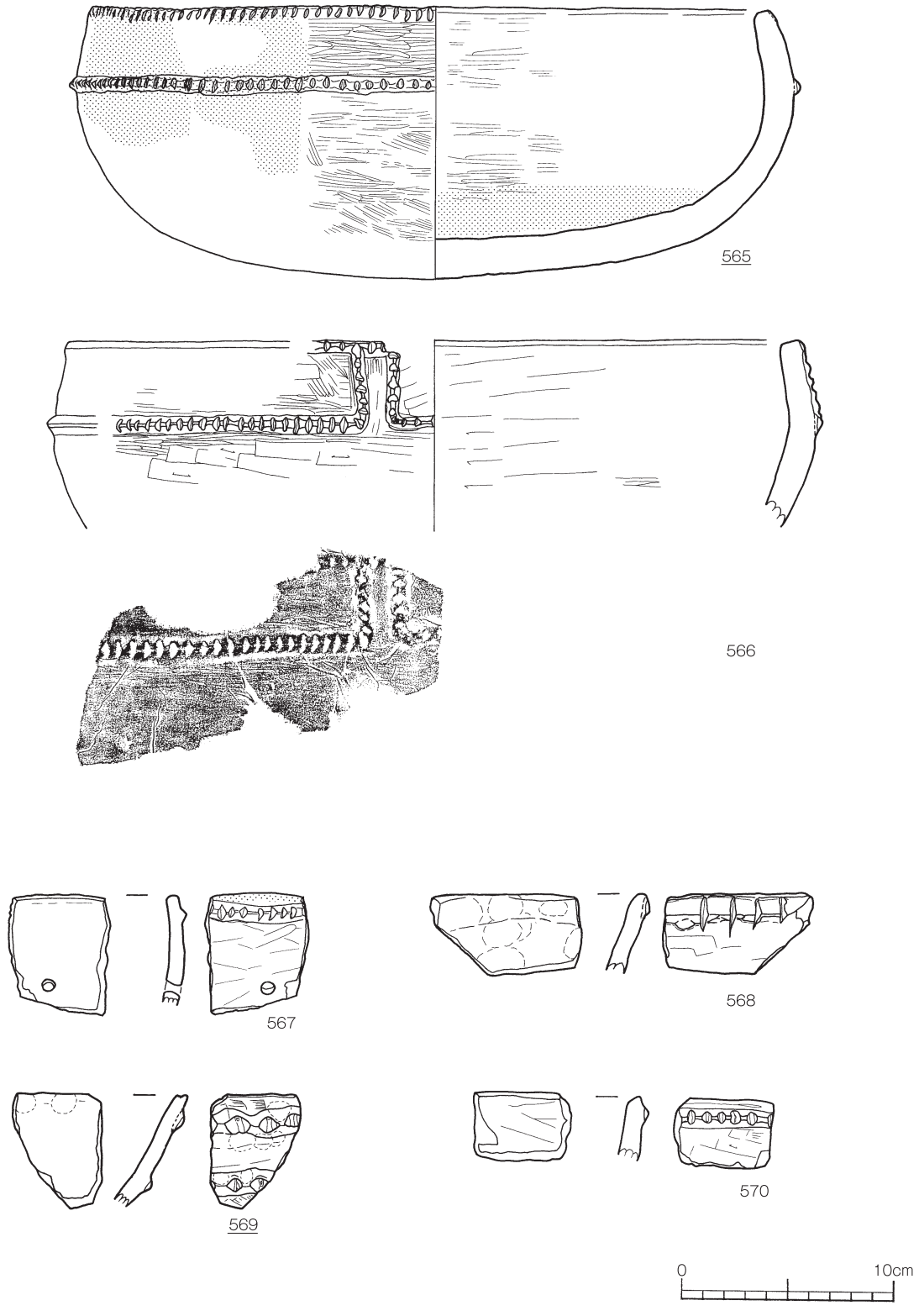
第108図　弥生時代の鉢形土器４



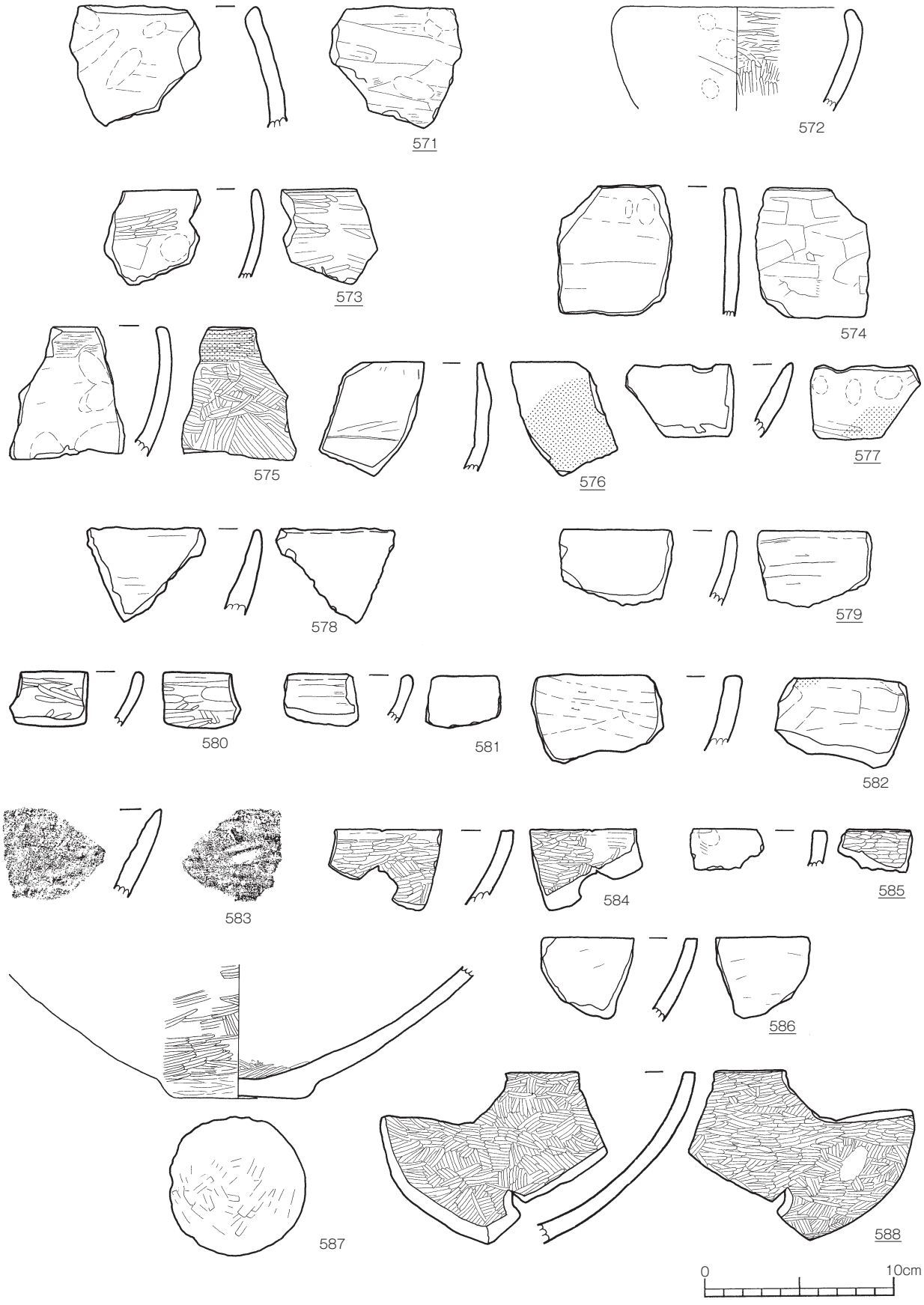
第109図　弥生時代の鉢形土器５



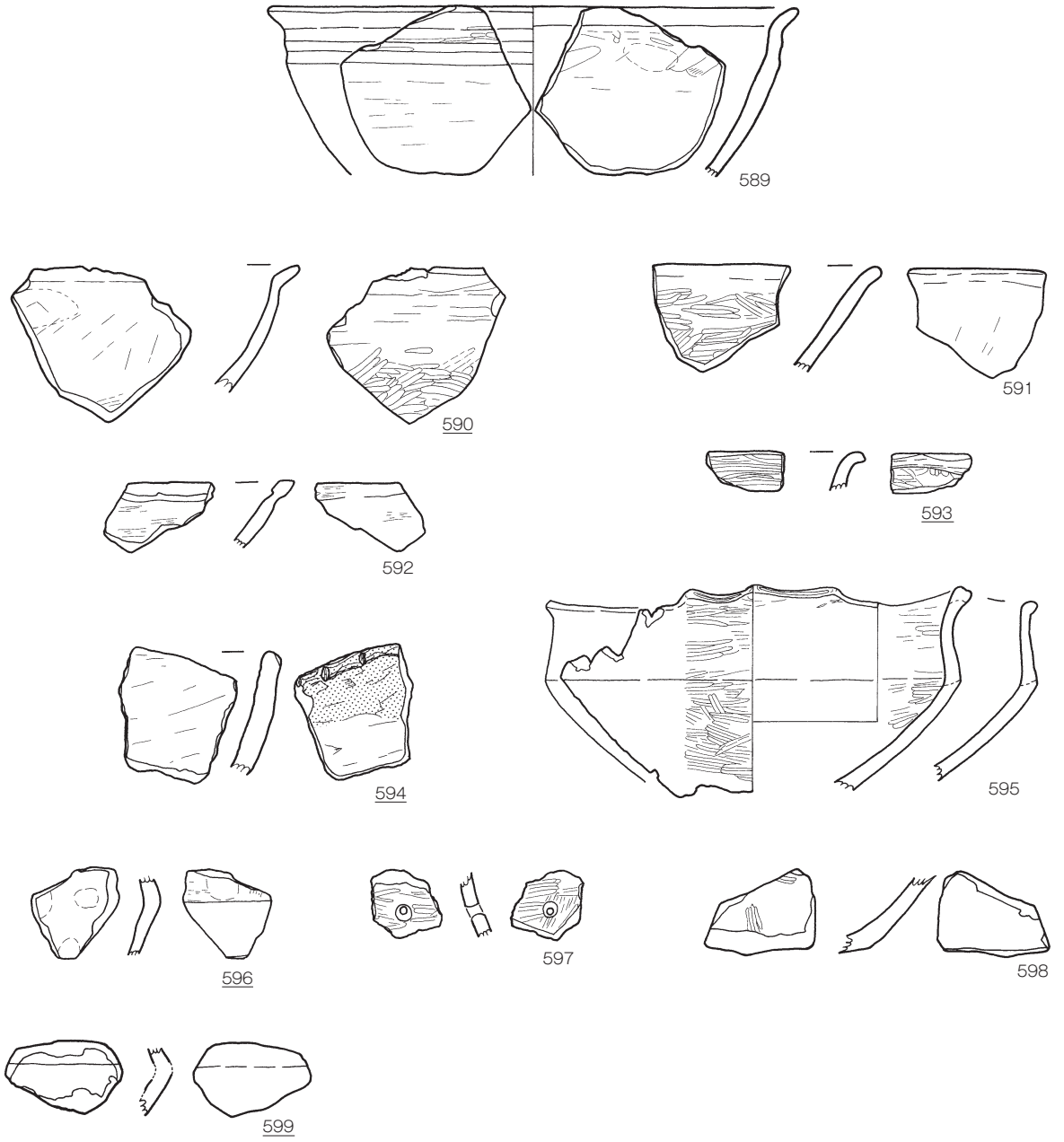
第110図　弥生時代の鉢形土器６



第111図　弥生時代の鉢形土器７



第112図　弥生時代の鉢形土器８



第113図　弥生時代の鉢形土器９

㈣　Ｐ類土器（第113図）

589～593は口縁部が如意形に外反する器形を持ち，590は口縁部に山形の口縁部を持つ可能性がある。592は如意形に曲げた口縁を折り返し，内面に貼りつけ，口縁部を平坦に成形している。

㈤　Ｑ類土器（第113図）

594は緩やかに底部に向かって伸びる器形をなし，口縁部に刺突による刻目を粗に入れ，山形の口縁を持つ。

(ト) R類土器（第113図）

口縁部にリボン状突帯を持ち，突帯内に沈線を施す。如意形に開き胴部から緩やかに屈曲する。田畑直彦氏の指導によると大洞Ｃ２～Ａ１式土器（夜臼式併行期）と類似し，沈線を引くことにより見掛け状眼鏡状隆帯と近似させる点で，東日本系土器の影響を受けた可能性が高い。

(チ) その他の土器（第113図）

596・599は鉢形土器の屈曲する胴部である。597は胴部上部で補修孔を持ち，器壁全体にヘラミガキを持つ。598は底部付近の破片である。

第27表　弥生時代の鉢形土器観察表１

挿図番号	遺物番号	取上番号	層	分類	部位	標高	出土区	調整 内	調整 外	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	その他	備考
第105図	481	5345	Ⅱ	J	口縁	47.73	D－21	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄	黄灰	○	○	○			○	○		(内)黒色磨研・口唇部沈線あり・リボン状突起の可能性あり王斑口縁化している可能性
	482	4030，2455	Ⅱ	J	口縁	47.28	C－28	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		○		○		24196,25584,P18 (内)黒色磨研・沈線
	483	15180	Ⅲa	J	口縁	48.36	C－17	ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○		
	484	なし	表採	K	口縁	—	—	ヘラケズリ・指押さえ	ナデ・ヘラミガキ 指押さえ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		黒色塗り
	485	なし	表採	K	口縁	—	—	ヘラミガキ	ナデ・摩滅	黄灰	浅黄	○	○	○			○	○	黒曜岩	(内)黒色磨研
	486	なし	表採	K	口縁	—	—	ナデ・剥離	ヘラナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	突帯→口唇部にリボン状の突起がある
	487	16148	Ⅲa	L	口縁	48.00	E－19	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	玉ずい	
	488	なし	表採	L	口縁	—	—	ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	にぶい黄	明赤褐	○		○			○	○	黒曜岩 茶粒	黒色磨研・磨滅が多く不明瞭
	489	21566	Ⅲb	L	口縁	47.22	F－24	粗いヘラケズリ・ナデ	粗いヘラケズリ・ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	
	490	7214	Ⅲa	L	口縁	47.22	C－25	ナデ	ヘラミガキ	橙	黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	無紋
	491	4416	Ⅱ	L	口縁～頸部	47.49	C－20	ヘラミガキ 丁寧なナデ	ヘラミガキ 丁寧なナデ	明黄褐	明黄褐	○		○		○		○		(内)ベンガラ残存
	492	170	Ⅱ	L	口縁	50.82	C－8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄	黄灰	○		○			○	○	黒曜岩	剥離や摩滅の部分が多く不明瞭な部分が多い、(口縁)波状又はリボン付口縁の可能性あり・黒色磨研
	493	14020	Ⅲa	L	口縁	48.44	C－17	ナデ	ナデ	にぶい褐	黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	(外)ヘラミガキで痕跡が磨滅したものの可能性あり
	494	30803	Ⅲa	L	口縁	48.00	D－20	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	摩滅や剥離が多い
	495	4459	Ⅱ	L	口縁	47.80	D－21	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	補修孔2孔
	496	なし	表採	L	口縁～頸部	—	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○	○			○	○		口唇部は平坦
	497	6232	Ⅱ	L	口縁	47.61	D－21	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	498	18234	Ⅲa	L	口縁	46.85	G－28	一部ヘラミガキ	剥離	明赤褐	明黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	調整が剥離とローリングの為不明
	499	なし	表採	L	口縁	—	—	ナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	明褐	明褐	○	○	○			○	○		
	500	なし	表採	L	口縁	—	—	ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ・ナデ	橙	にぶい黄	○	○	○		○	○	○		摩滅によりミガキ痕残存わずか
	501	4677	Ⅱ	L	口縁～肩部	47.39	C－25	剥離	ヘラミガキ・ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	○		○			○	○	黒曜岩	
	502	19962	Ⅲa	L	口縁	47.74	C－21	ヘラミガキ ケズリ後ナデ	ヘラミガキ・ヘラケズリ ナデ	にぶい赤褐	明赤褐		○	○			○	○	茶粒	
	503	なし	表採	L	口縁	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	丹塗磨研・摩滅多い
	504	4790	Ⅱ	L	口縁	47.39	C－24	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄	浅黄	○		○			○	○		
	505	4674	Ⅱ	L	口縁	47.39	C－25	ヘラケズリ・ヘラミガキ 剥離	ヘラミガキ・ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	
第106図	506	2027	Ⅱ	L	口縁	47.84	C－21	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐	灰黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	507	2026	Ⅱ	L	口縁	47.81	C－21	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	胴部下部にヘラミガキ痕が残るがムラがあり摩滅による物か不明瞭・内面も同様。中央部は粗いヘラケズリ・指頭圧痕あり
	508	なし	表採	L	口縁	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○	黒曜岩	黒色磨研摩滅
	509	16111	Ⅲa	L	口縁～肩部	48.06	E－19	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・ナデ・指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	突帯
	510	27649	Ⅲa	L	口縁	48.02	D－20	ヘラケズリ後丁寧なナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	
	511	なし	表採	L	口縁～肩部	—	—	丁寧なナデ ヘラミガキ	ナデ	暗灰黄	浅黄	○	○	○			○	○		117と胎土的に似ている
	512	8785	Ⅲ	L	口縁	49.06	D－15	ヘラミガキ ケズリ後ナデ	ヘラミガキ・ケズリ後ナデ・指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		
	513	16188	表採	L	口縁	48.10	E－19	ヘラケズリ後ナデ	ナデ・指頭圧痕	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	514	13178	Ⅲa	L	口縁	47.71	E－21	ヘラケズリ	ヘラミガキ	明暗褐	にぶい褐	○	○	○			○	○		丹塗磨研・摩滅多い
	515	2960	Ⅱ	L	口縁	47.66	C－22	ヘラケズリ(条痕)	ヘラミガキ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	516	19759	Ⅳ	L	胴部	47.22	D－22	ナデ・ケズリ	ナデ	明黄褐	浅黄	○	○	○			○	○		スス・スタンプ痕
	517	2690	Ⅱ	L	口縁	47.77	C－22	ヘラナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	518	7914	Ⅲ	L	口縁	48.77	D－16	ナデ・指頭圧痕 ナデ	ヘラミガキ	灰	にぶい黄橙	○	○				○	○		黒色磨研・ヘラミガキ痕が磨滅によりやや不明瞭
	519	なし	表採	L	口縁	—	—	ヘラケズリ・ナデ(屈曲部の下方)	ナデ	淡黄	淡黄		○	○			○	○		口唇部はやや丸みを帯びる
	520	2442	Ⅲa	L	口縁	47.41	D－26	ヘラミガキ後ナデ 剥離	ヘラミガキ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		
	521	31222	Ⅲa	L	口縁	48.11	E－20	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		黒色磨研
	522	28592,29102	Ⅲa	L	口縁～肩部	47.94	E－20	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		棒状工具よる条痕
	523	3572	Ⅱ	L	口縁	48.03	C－20	ハケメ後ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	(外)一部ヘラミガキ痕残る
	524	6128	Ⅲ	L	口縁	47.84	D－21	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙	明褐	○		○			○	○	黒曜岩	(外)黒色磨研・沈線文(内)条痕
第107図	525	2939	Ⅱ	L	口縁	47.70	C－22	ヘラミガキ様のナデ	ヘラミガキ様のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○		補修孔が2ヶ所、裏面は再修正した後あり
	526	4409	Ⅲa	L	口縁	47.53	C－19	ヘラケズリ	ナデ・ヘラミガキ	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○			○	○		丹塗り
	527	27933	Ⅲa	L	口縁	48.13	D－19	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	528	18906	Ⅲa	L	口縁～肩部	48.84	E－16	ヘラミガキ	指頭圧痕・ナデ ヘラミガキ	灰	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	(外)摩滅により残存少ない、(内)黒色磨研
	529	14524,14591	Ⅲa	L	口縁	48.17	E－19	ナデ	粗いヘラケズリ・ナデ 指頭圧痕 ヘラミガキ	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	突帯
	530	12460	Ⅲa	L	口縁	47.37	D－24	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	
	531	なし	表採	L	口縁	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐灰	にぶい褐	○	○	○			○		黒曜岩	黒色磨研
	532	23031	Ⅲa	L	口縁～肩部	46.92	E－26	ヘラミガキ・ナデ 指頭圧痕	ヘラミガキ・ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○	○		23157,23170,23243 スス付着
第107図	533	1984,3484	Ⅲa	L	口縁～頸部	47.75	D－19	ヘラミガキ	ヘラミガキ	オリーブ黒	灰褐	○	○	○			○	○		黒色磨研(丹塗り)
	534	3046	Ⅱ	L	口縁～肩部	47.59	D－23	(上)ヘラケズリ後ナデ・(下)ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	

第28表　弥生時代の鉢形土器観察表２

挿図番号	遺物番号	取上番号	層	分類	部位	標高	出土区	調整 内	調整 外	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	その他	備考
第108図	535	13361	Ⅲa	L	口縁	47.48	E－22	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐	明褐	○	○				○	○	茶粒	(外)ｽｽ付着
	536	23382	Ⅲa	L	口縁～胴部	46.87	F－26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	褐灰	褐灰	○	○	○				○	茶粒	
	537	なし	表採	L	口縁	―	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい褐	褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	538	なし	表採	L	口縁	―	－	ﾅﾃﾞ・剥離	ﾍﾗﾅﾃﾞ	明褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		(外)ｽｽ付着
	539	2737	Ⅲa	L	口縁	47.52	D－26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	黒褐	褐	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	(外)ｽｽ付着
	540	19195	Ⅲa	L	口縁	48.70	E－16	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	541	3826	Ⅱ	L	口縁	47.81	C－21	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		
	542	2815	Ⅱ	L	口縁～胴部	47.58	D－26	剥離	ｹｽﾞﾘ	にぶい橙	にぶい褐	○		○			○	○	黒曜岩 茶粒	
	543	22464	Ⅲa	L	口縁	46.86	F－26	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	明褐	○	○	○			○	○		
	544	6606	Ⅱ	L	口縁	49.11	D－14	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		
	545	841	Ⅱ	L	口縁	48.97	C－15	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	546	6003	Ⅱ	L	口縁	49.58	D－20	(上)ﾍﾗﾐｶﾞｷ (下)ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	547	3276	Ⅱ	L	口縁	48.08	C－19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐	灰黄褐	○	○				○	○	茶粒	
	548	なし	表採	L	口縁	―	－－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	黄橙	明黄褐		○	○		○		○		
	549	29364	Ⅲa	L	口縁	47.78	E－20	指ﾅﾃﾞ	剥離	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	550	3746	Ⅱ	L	口縁	47.62	C－24	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	肩部で「＜」の字状に内側に屈曲する。頸部から口唇部までは短い物
	551	22988	Ⅲa	L	口縁～胴部	46.91	F－26	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	○	○	黒曜岩	肩部で逆「＜」の字状に内側へ強く屈曲する
	552	29280	Ⅲ	L	口縁	48.20	D－19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	橙	橙	○		○			○	○		丹塗り
	553	なし	表採	L	口縁	―	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	554	15096	Ⅲa	N	口縁	48.40	C－17	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	突帯
	555	なし	表採	N	口縁	―	－	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄灰	黒褐	○		○			○	○		黒色磨研
	556	18047,18046	Ⅲa	N	口縁	46.74	F－28	丁寧なﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	(外)摩滅多い(内)ｽｽ・黒色磨研
第109図	557	14981	Ⅲb	M	口縁	47.53	D－21	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	浅黄橙	○	○	○		○	○	○	黒曜岩	11100,11096,5367,11057・ｽｽ付着・黒川式のﾘﾎﾞﾝ状突帯の特徴を残しているが口唇部に一つ付く形状の刻目突帯期の浅鉢と推定される
	558	5321	Ⅱ	M	頸部～胴部	49.45	D 21	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	浅黄橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	5328,5369,5901,11114,11115,11116 11117,11118,11090,26231,;溝5
第110図	559	3052	Ⅱ	M	口縁～胴部	47.63	C－23	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	暗褐	暗褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	3054,3055,3979,4895 (内)ｽｽ付着・刻目突帯
	560	3055,4895	Ⅱ	M	口縁	47.66	D－23,4	粗いﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい褐	○	○				○	○	黒曜岩 茶粒	刻目突帯
	561	3680	Ⅱ	M	口縁	47.59	D－23	ﾅﾃﾞ	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	刻目突帯文(爪形)
	562	14185	Ⅲa	M	口縁	48.40	D－17	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい褐	灰褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	(口唇部)ﾘﾎﾞﾝ状突起あり
	563	14040	Ⅲa	M	口縁	48.47	C－17	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ ﾍﾗﾐｶﾞｷ	明赤褐	橙	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	刻目突帯文・二条目の突帯部全面にﾍﾗﾐｶﾞｷ痕。表面の摩滅の為不明瞭
	564	4145	Ⅱ	M	口縁	47.66	C－22	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ後ﾅﾃﾞ	橙	褐灰	○	○	○			○	○		刻目突帯文
第111図	565	29216	Ⅲ	M	完形品	47.77	E－20	ﾍﾗﾐｶﾞｷ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙	明赤褐	○	○	○			○	○		3197,9223,P46、152、153 3200,6156,6079,4495,4496,5378,4484,2608 (口唇部)刻目、刻目突帯文一条・ｽｽあり、器高12.8
	566	土1	表	M	口縁	―	C－19	丁寧なﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	黒褐・暗赤褐	○	○	○			○	○		(口唇部)刻み(外)刻目突帯文
	567	20038	Ⅲa	M	口縁	47.77	D－20	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文・(外)ｽｽあり
	568	11478	Ⅲa	M	口縁	48.30	E－18	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	569	5263	Ⅱ	M	口縁	47.65	D－21	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	橙	褐	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
	570	28075	Ⅲa	M	口縁	48.02	D－20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	丁寧なﾍﾗｹｽﾞﾘ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	刻目突帯文
第112図	571	7486,2772	Ⅱ	O	口縁	47.27	D－26	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	
	572	27221	Ⅲa	O	口縁	48.06	D－20	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	573	3456	Ⅱ	O	口縁	47.73	C－21	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指頭圧痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	574	3886	Ⅲ	O	口縁	47.46	C－24	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	575	3964	Ⅲ	O	口縁	47.61	D－23	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ 指頭圧痕	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	(外)黒色磨研・ｽｽ付着
	576	1856	Ⅱ	O	口縁	47.95	D－20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	ｽｽ付着
	577	3470	Ⅱ	O	口縁	47.73	C－21	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○				○	○	黒曜岩 茶粒	山形口縁の可能性あり・正面右端部の口唇部が肥厚している。ｽｽ付着
	578	31251	Ⅲa	O	口縁	47.83	E－20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	579	2161	Ⅱ	O	口縁	47.77	C－21	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	茶粒	
	580	なし	表採	O	口縁	―	－	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄	暗灰黄	○					○	○	黒曜岩	摩滅によりﾐｶﾞｷ痕散見(内)黒色磨研
	581	1526	Ⅴ	O	口縁	49.54	D－13	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	灰黄褐	○		○			○	○		
	582	なし	表採	O	口縁	―	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	ｽｽ付着
	583	27250	Ⅲa	O	口縁	48.05	E－20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	
	584	31383,31462	Ⅲb	O	口縁	47.69	D－19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○					○	黒曜岩	
	585	5320	Ⅱ	O	口縁	47.79	D－21	丁寧なﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	586	2576	Ⅱ	O	口縁	47.89	B－19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	茶粒	
	587	29940	Ⅲa	O	底部	47.75	D－19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒 玉ずい	30208,28860,202 底部内側に丁寧なﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ
	588	6377	Ⅱ	O	口縁	49.76	D－22	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩 茶粒	6029 白色系・肥後系の胎土
第113図	589	30134	Ⅲa	P	口縁	47.99	D－19	工具による圧痕・指頭圧痕・丁寧なﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ 丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	口縁部下部に押線文あるいは沈線を意識したラインあり
	590	6516,6518	Ⅱ	P	口縁	47.89	C－20	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	明黄褐	○		○			○	○	黒曜岩	
	591	27660	Ⅲa	P	口縁	47.96	D－20	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○	黒曜岩	(内)ﾍﾗﾐｶﾞｷなど表面の摩滅により少ない
	592	なし	表採	P	口縁	―	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	593	5231	Ⅱ	P	口縁	47.33	C－24	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○		黒曜岩	
	594	3455	Ⅱ	Q	口縁	47.73	C－21	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		刻目突帯
	595	表採	表採	R	口縁～胴部	―	－	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	摩滅して部分的にﾍﾗﾐｶﾞｷ痕が残る
	596	1823	Ⅱ	その他	口縁	47.98	C－20	ﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ 指頭圧痕	浅黄	浅黄		○				○	○		
	597	14762	Ⅲa	その他	胴部	48.20	E－19	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	浅黄	浅黄	○	○	○			○	○	黒曜岩	補修孔あり
	598	16393	Ⅲc	その他	高坏部	49.58	D－13	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	灰褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	
	599	4092	Ⅱ	その他	肩部	47.64	D－22	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・剥離	灰黄褐	褐灰			○			○	○		(内)沈線文

壺形土器

壺形土器は，Ⅱ層ではＣＤ－21～24区を中心に分布し，Ⅲ層以下はＤ－19・20区に集中する。遺物は，口縁部や胴部の器形や文様の違いでＳ類からＸ類に分類した。

㈡　Ｓ類土器（第115図）

まっすぐに伸びる口縁部を持ち，ナデやヘラミガキの調整を持つ壺形土器である。601～604・610は，口唇部を肥厚させている。604・608は肩部に近い位置から縦位のヘラミガキを施す。また，608は口唇部断面が薄く，緩やかに広がりながら肩部に続く器形を持つ。607・611は口縁部下を軽く折り曲げるように肩部に伸びる器形をなす。

㈬　Ｔ類土器（第115図～第116図）

口縁部に粘土を貼り付け小さく屈曲させた口縁部に段を付け，そこから外に開くナデやヘラミガキを持つ壺形土器である。612は口縁部株で段をつけて外へ開く口縁部を持ち，粗いヘラミガキを施す。614は帯状の粘土を口縁部に貼り付け厚い口縁部を形成している。616～617は口唇部を丸く成形し，厚ぼったい断面を持つ。623は厚い器壁を持ち，口縁部から小さな段を持ち緩やかに肩部に伸びる器形を持つ。622・624は口縁部から下部の段までが長く，622は肩部近くまで横位のヘラミガキを持つ。625は口縁部から肩部までと底部が残存し，全体に横位のヘラミガキを施す。図面上で復元を施したが，胴部下部は，さらに膨らむ可能性がある。

㈭　Ｕ類土器（第117図）

口唇部を肥厚させ，口縁部の段を強調し，ヘラミガキやナデを持つ土器である。626は肥厚させ屈曲した口縁部に，肩部に向かって縦位のヘラミガキを施している。627は肥厚させた口縁部が，断面三角形をなし，口縁部上部内面を横位のヘラミガキを施し，その下部をヘラ状工具でナデている。器壁外面は肩部に向かって斜位のヘラミガキを持つ。

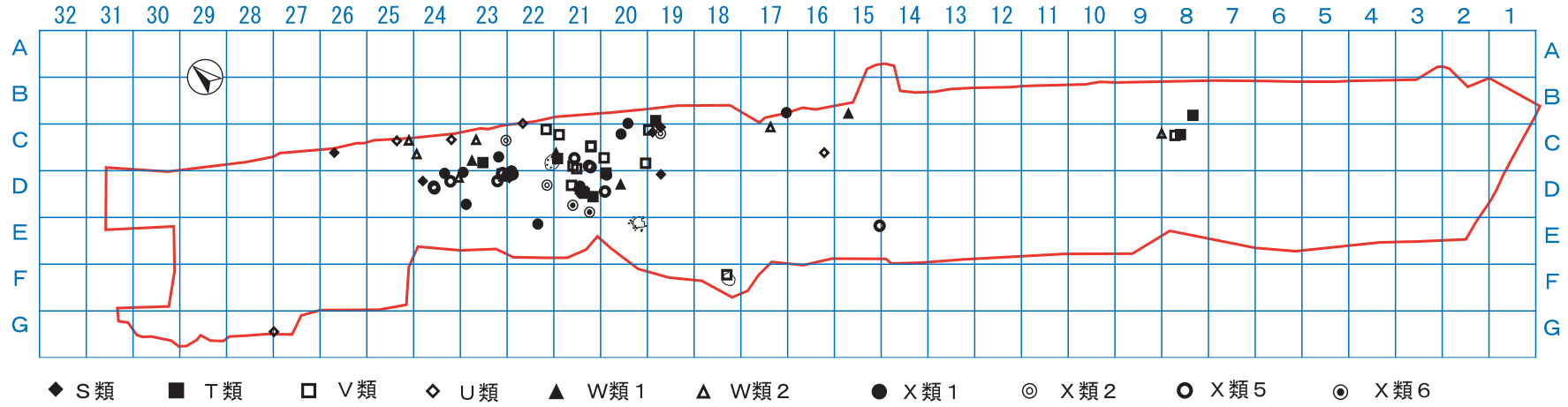
㈮　Ｖ類土器（第117図～第119図）

口縁部を折り曲げたり，広く肥厚させたりして，口縁部を如意形に外反させる口縁部を持ち，器面をヘラミガキやナデを施す土器である。

632・633は口唇部に刺突施文による刻目を持ち，633は屈曲部にススの付着が見られ，屈曲下部に沈線が１条ある。甕形土器の可能性もあるが，器形の傾きから壺形土器に分類した。器面調整は，外面はナデ，内面はヘラミガキの痕跡が見られる。635・636は口唇部を小さく折り曲げている。小破片のため，口唇部を肥厚させるＵ類土器の可能性もある。642はまっすぐに立つ口縁部を口縁部下から折り曲げ，肩部に向かって外に大きく広がる。642は口縁部下部で強く折り曲げて，口縁部に段を作る内外面とも口縁部付近は横位のヘラミガキ，外面の下部には縦位のヘラミガキを施す。

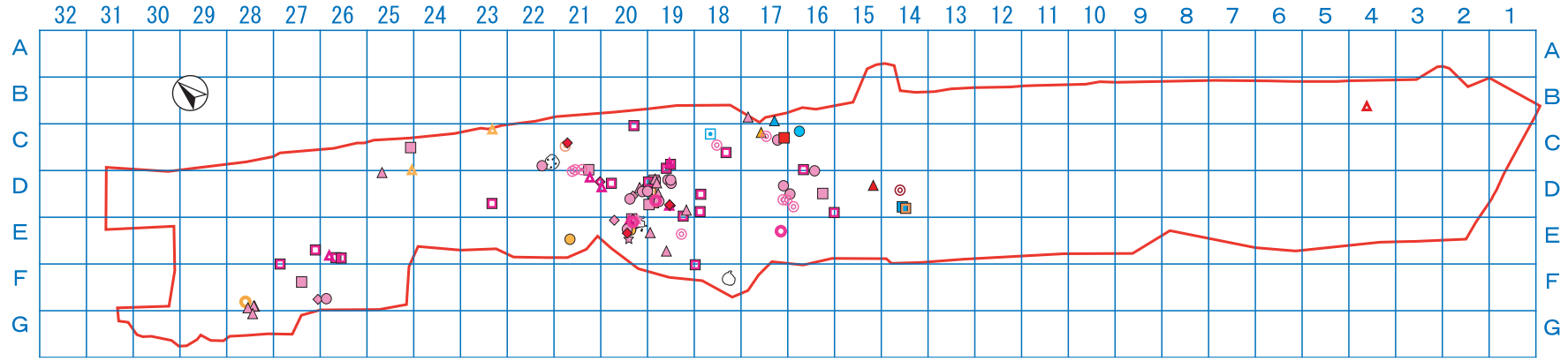
643から678は，口縁部を如意形に成形した土器である。646は折り曲げた口縁部上面をヘ

Ⅱ層出土状況



0 50M

Ⅲ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ・Ⅳ層出土状況



Ⅲ層 S類 T類 W類1 W類2

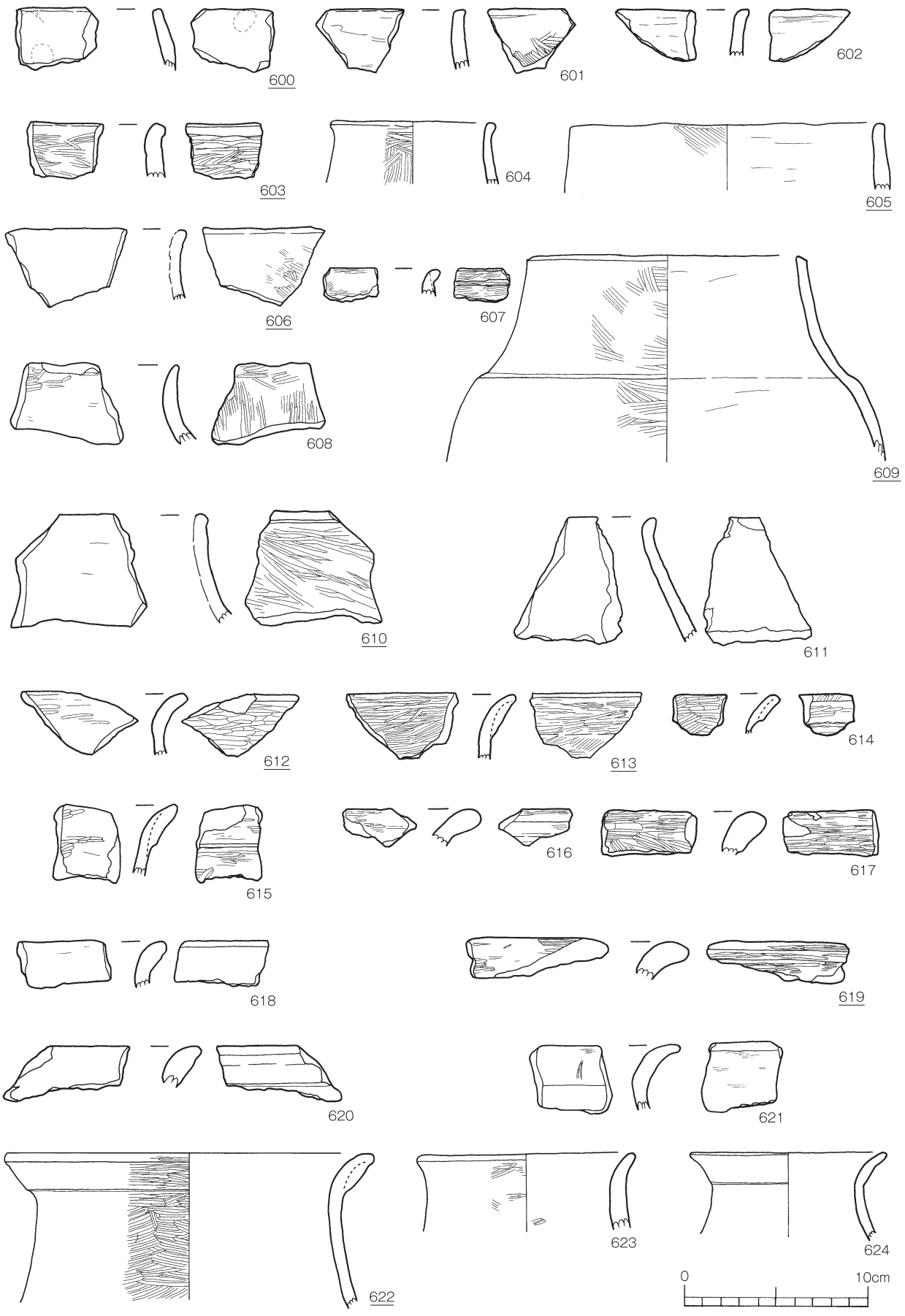
Ⅲａ層 S類 T類 U類 V類 W類1 W類2 X類1 X類2 X類3 X類4 X類5 X類6

Ⅲｂ層 V類 W類1 W類2 X類1 X類5 X類6

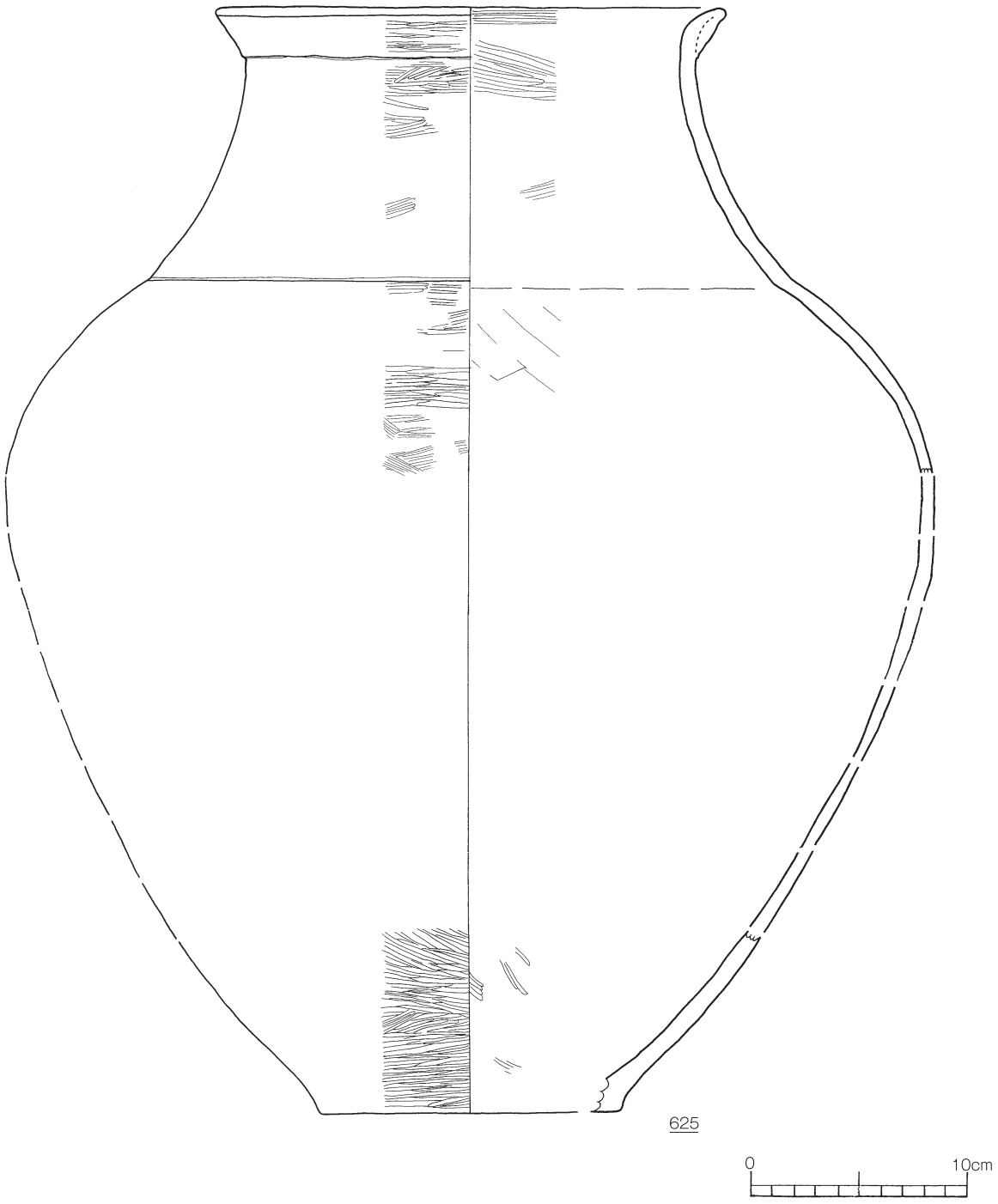
Ⅲｃ層 X類2

Ⅳ層 T類 V類 W類1 X類1

第114図　弥生時代の壺形土器出土分布図

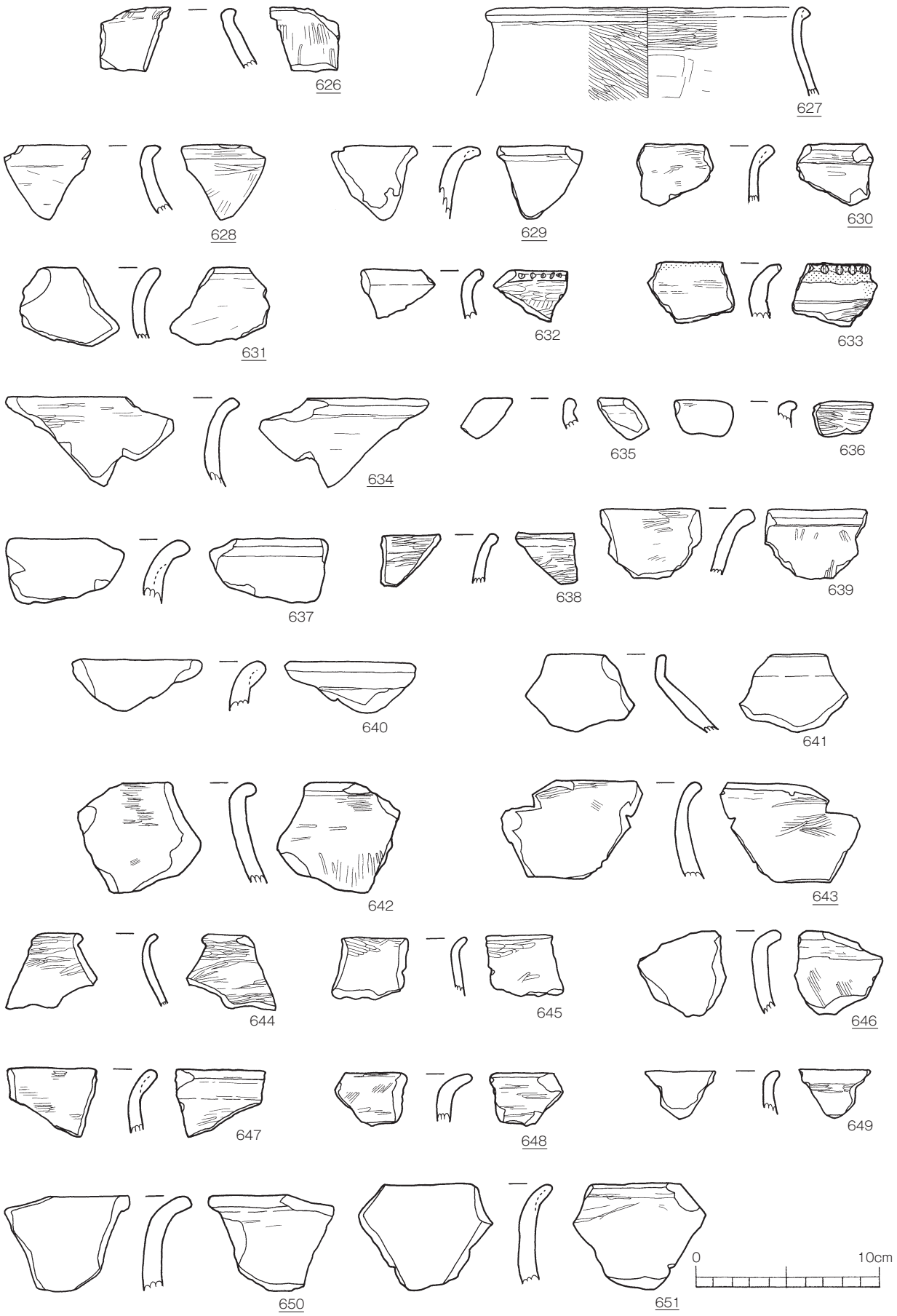


第115図　弥生時代の壺形土器 1

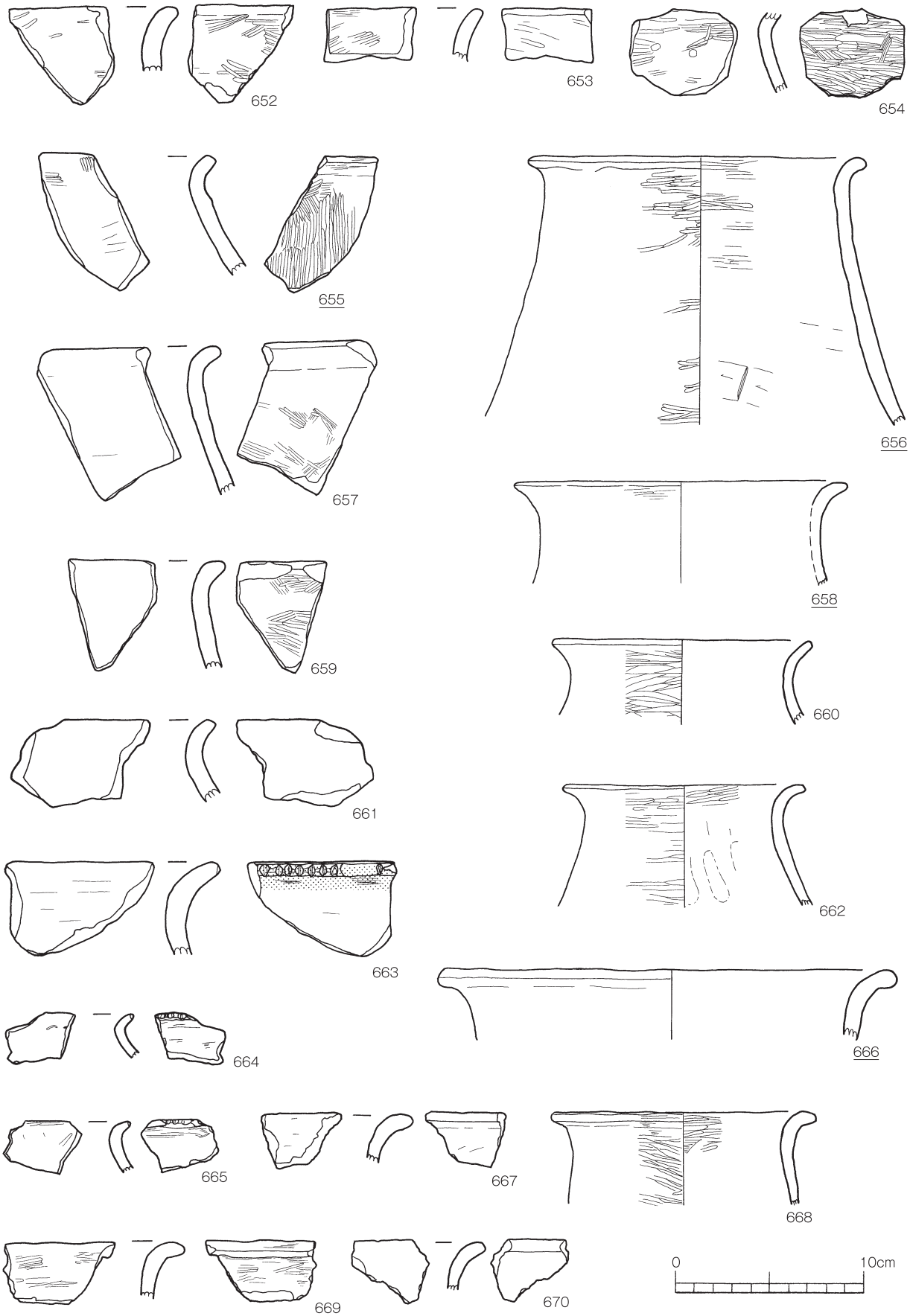


第116図　弥生時代の壺形土器２

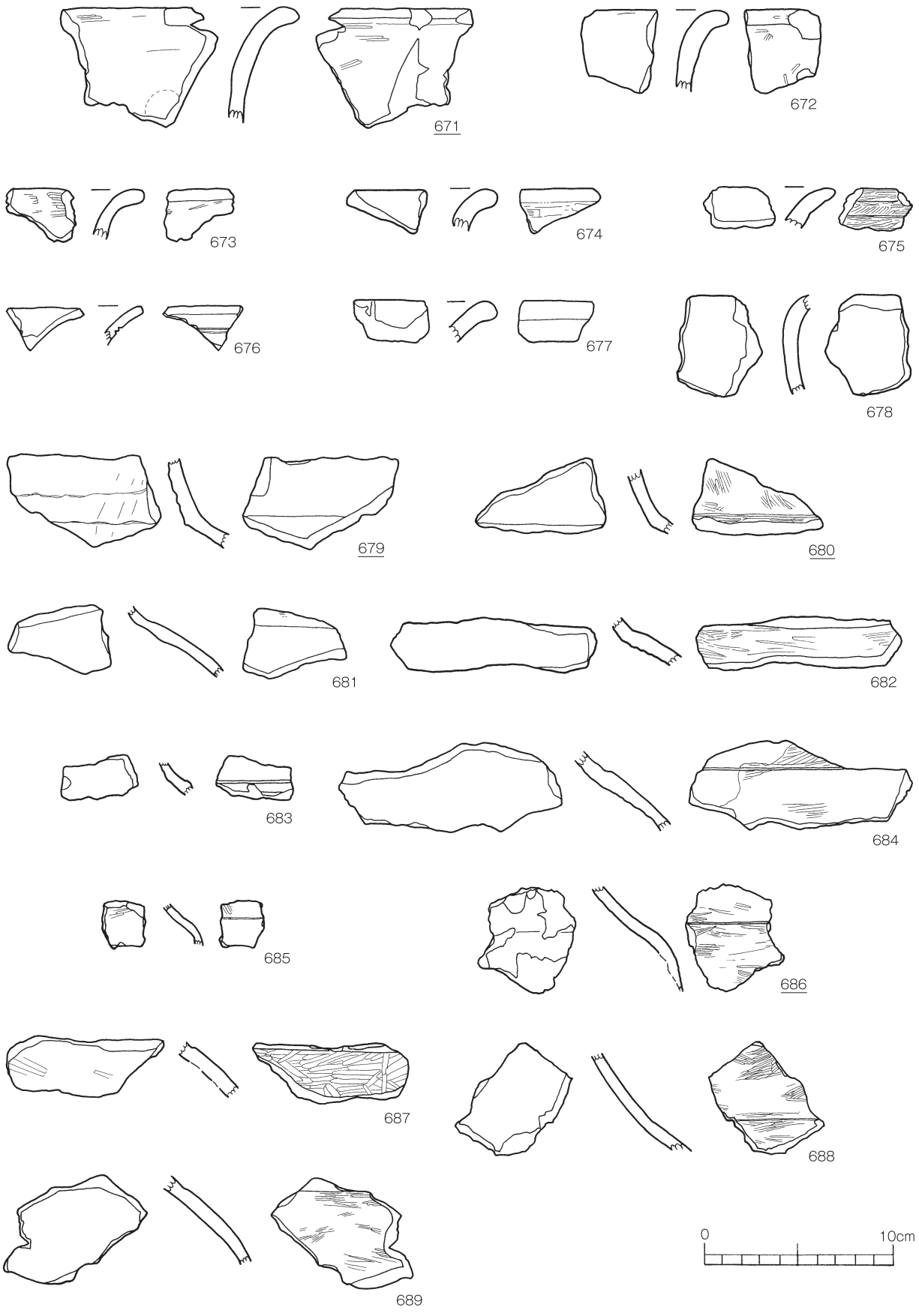
ラ状の工具で粗く成形し，肩部に向かって斜位のヘラミガキを施す。655は頸部から縦位のヘラミガキを持つ。656は頸部を強く如意形に曲げた後，ヘラ状工具で頸部を整形し横位のヘラミガキを施す。660は緩やかな如意形の頸部を持ち，横位の粗いヘラミガキを持つ。663，664，665は口縁部に刻目を持ち，663口縁部にススの付着が見られる。666～672は如意形の口縁部から肩部にかけてまっすぐに伸びる。676は口縁部下に二条の沈線文を持つ。



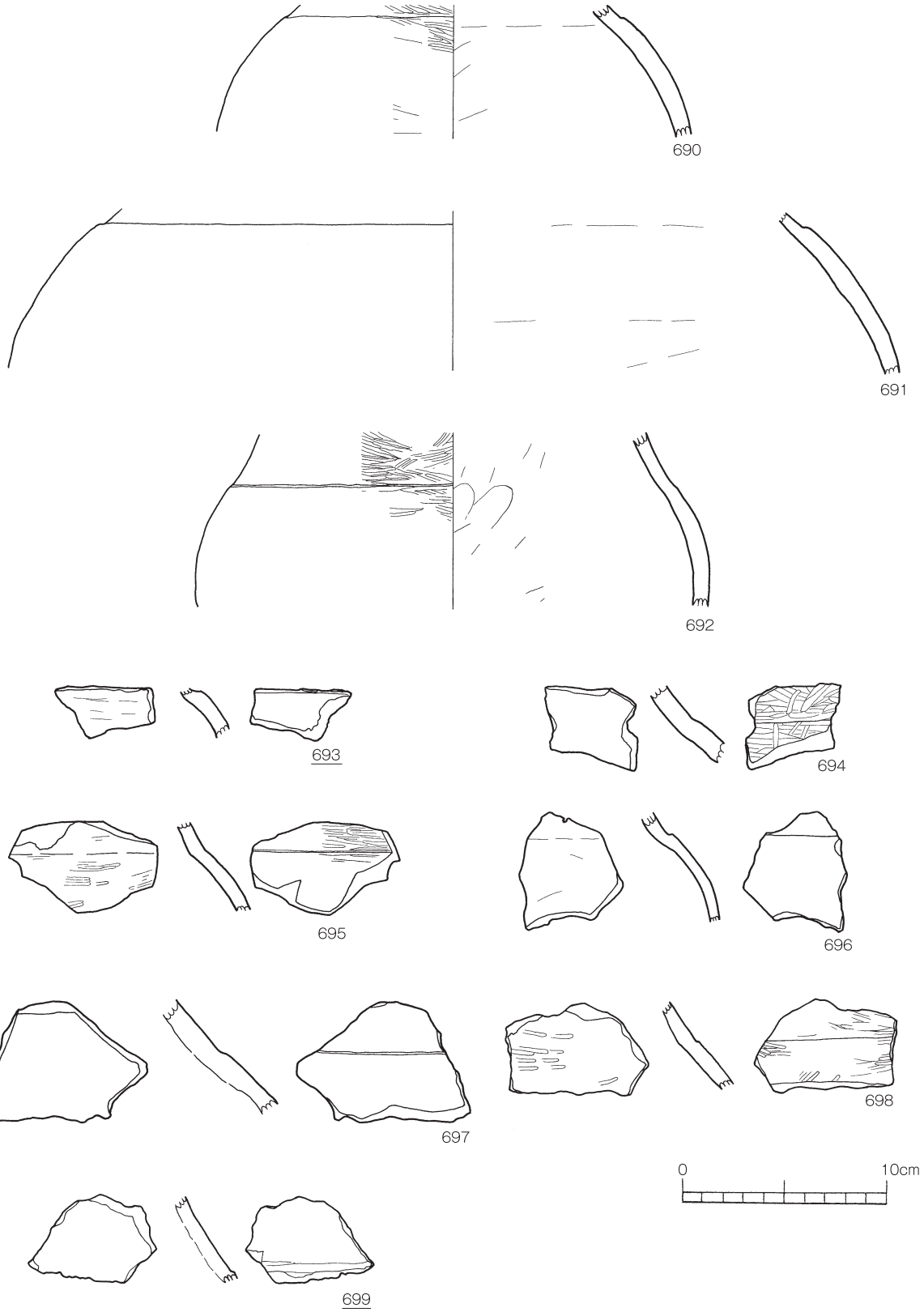
第117図　弥生時代の壺形土器３



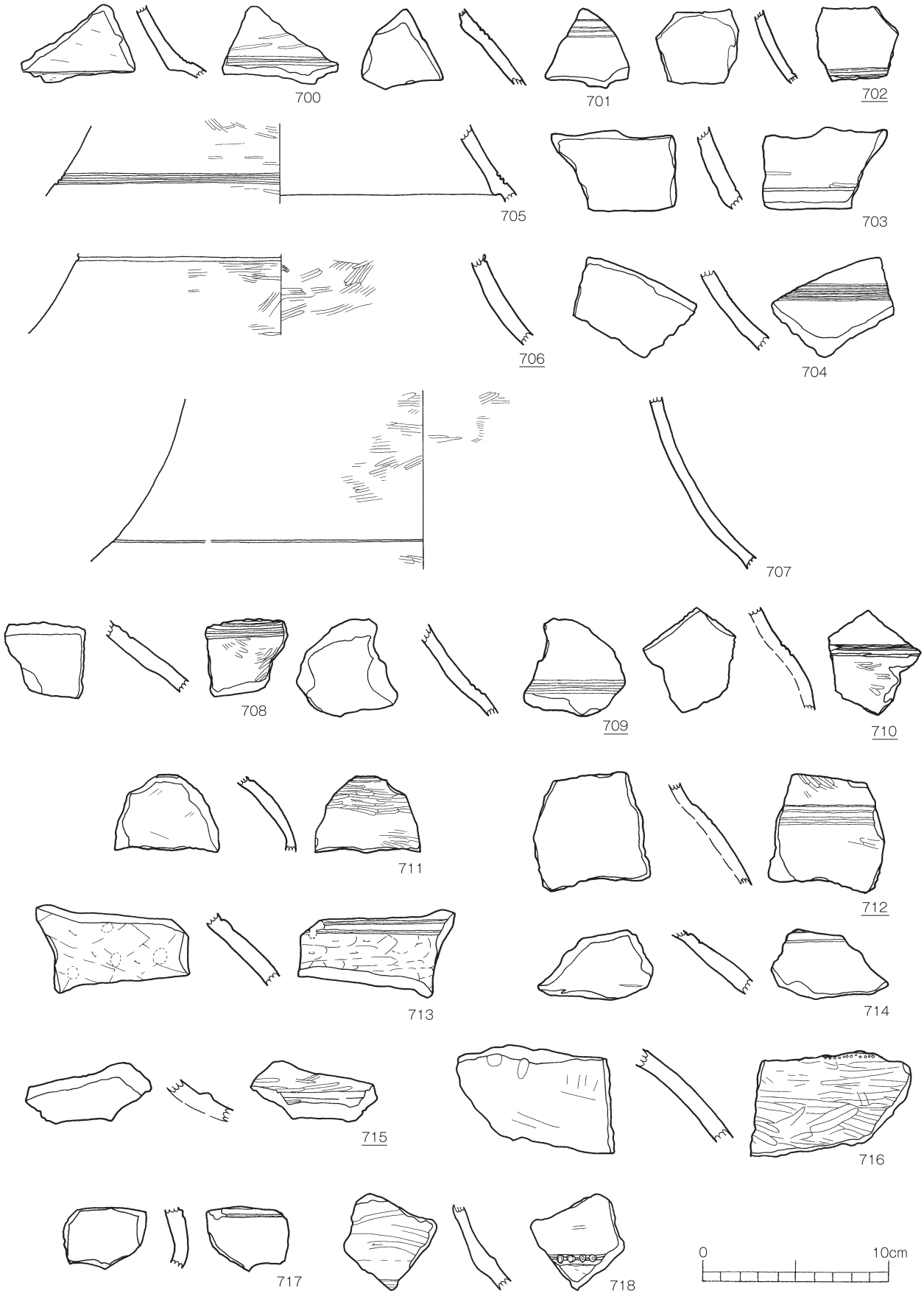
第118図　弥生時代の壺形土器４



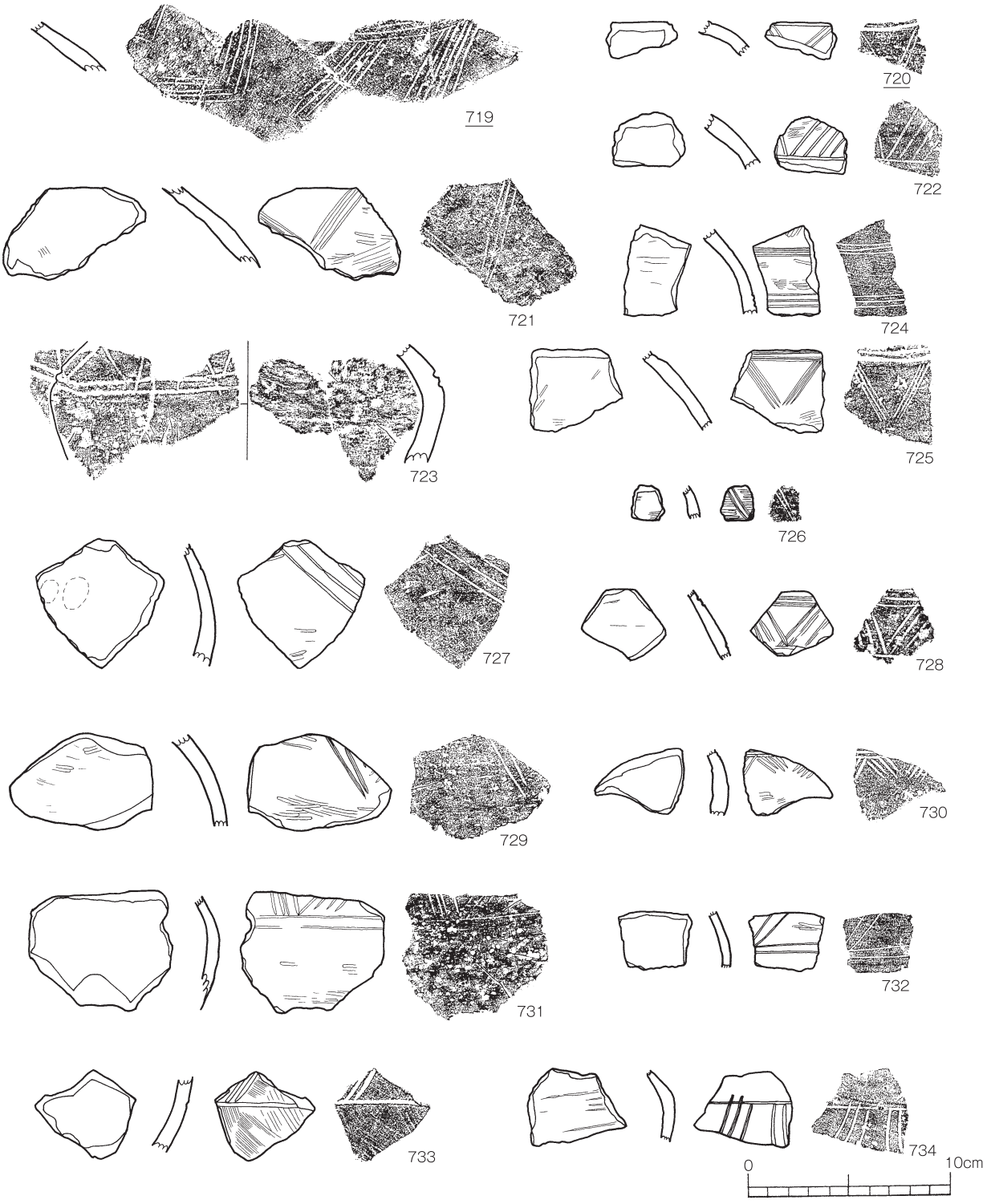
第119図　弥生時代の壺形土器５



第120図　弥生時代の壺形土器６



第121図　弥生時代の壺形土器７



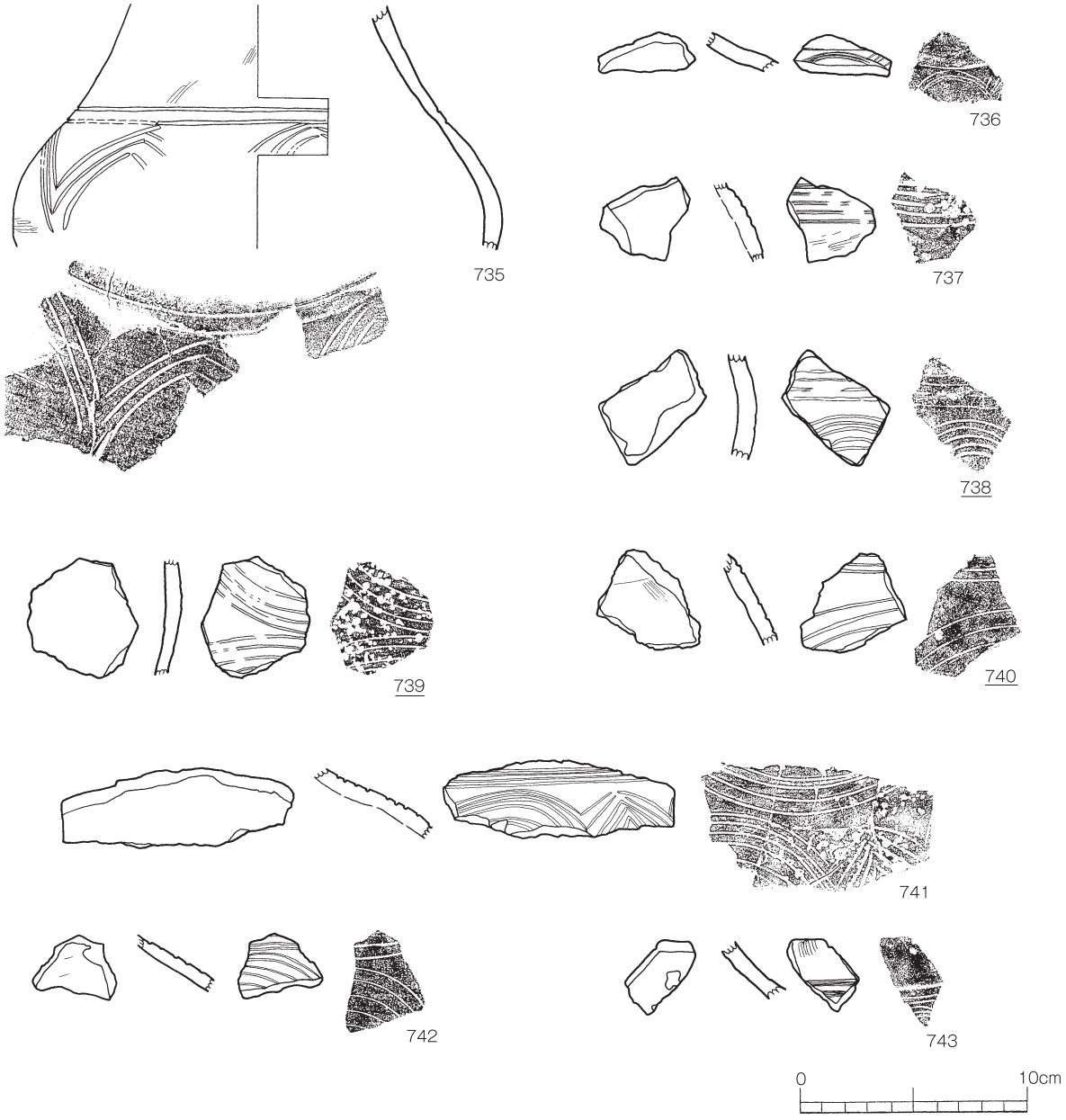
第122図　弥生時代の壺形土器８

㈠　W類土器（第119図～第122図）

壺形土器の肩部に段を持つもの，沈線を持つもの二つに分類した。

ａ　W－１類　（第119図～第120図）

679～699は肩部に段を持つ壺形土器である。679は内面に強い段を持つ。680は肩部の



第123図　弥生時代の壺形土器９

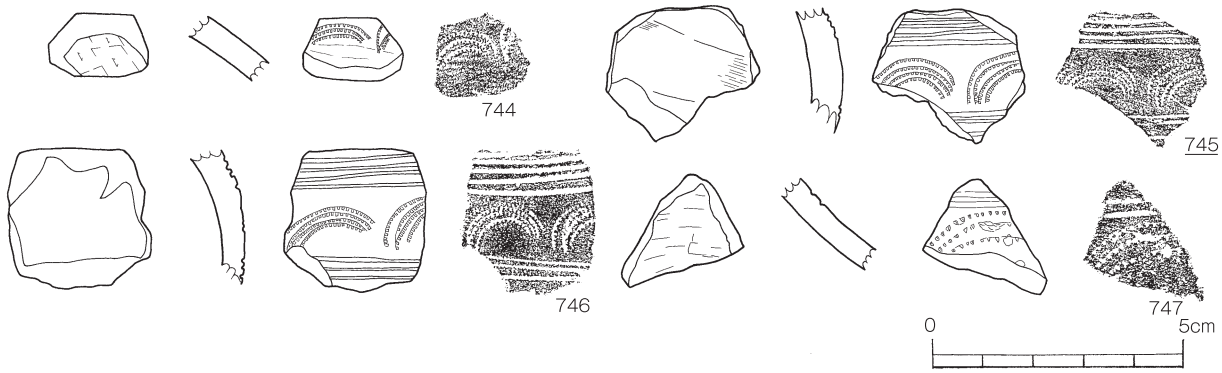
段は横位のヘラミガキ，それより上部は縦位あるいは横位のヘラミガキを施す。686は頸部の段から底部に向かって大きく内傾する肩部の膨らむ器形を持つ。690・691・693～699は大きな段を持つ。694は横位のヘラミガキの上から縦位や斜位のヘラミガキを持つ。

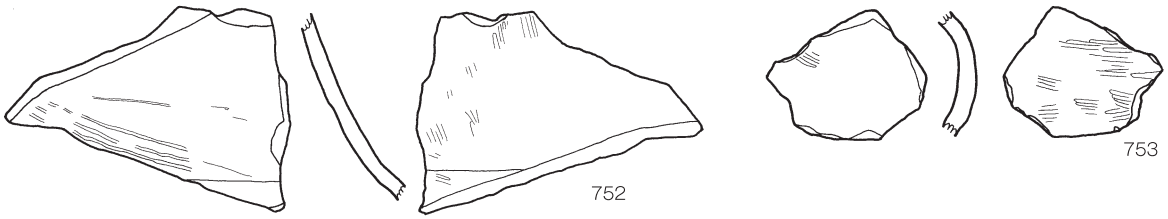
b　W－２類（第121図）

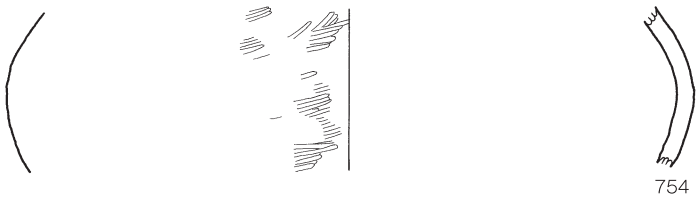
700～712は沈線を持つ壺形土器である。703･706･707･711は一条の沈線を持つ。700・702・704・705・708・710・712は，２条から４条の沈線を肩部に持つ。

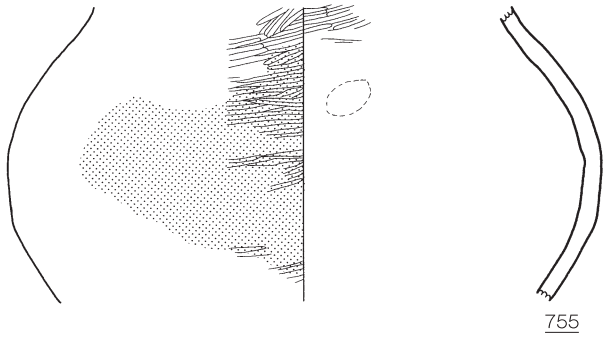
c　W－３類（第121図）

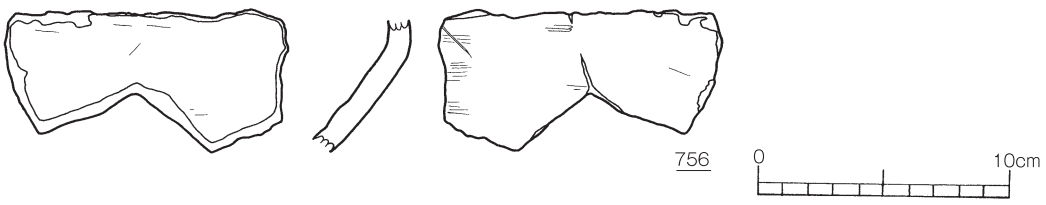
713～715・717は断面三角形の突帯を持つ壺形土器である。713・714・717は突帯を沈



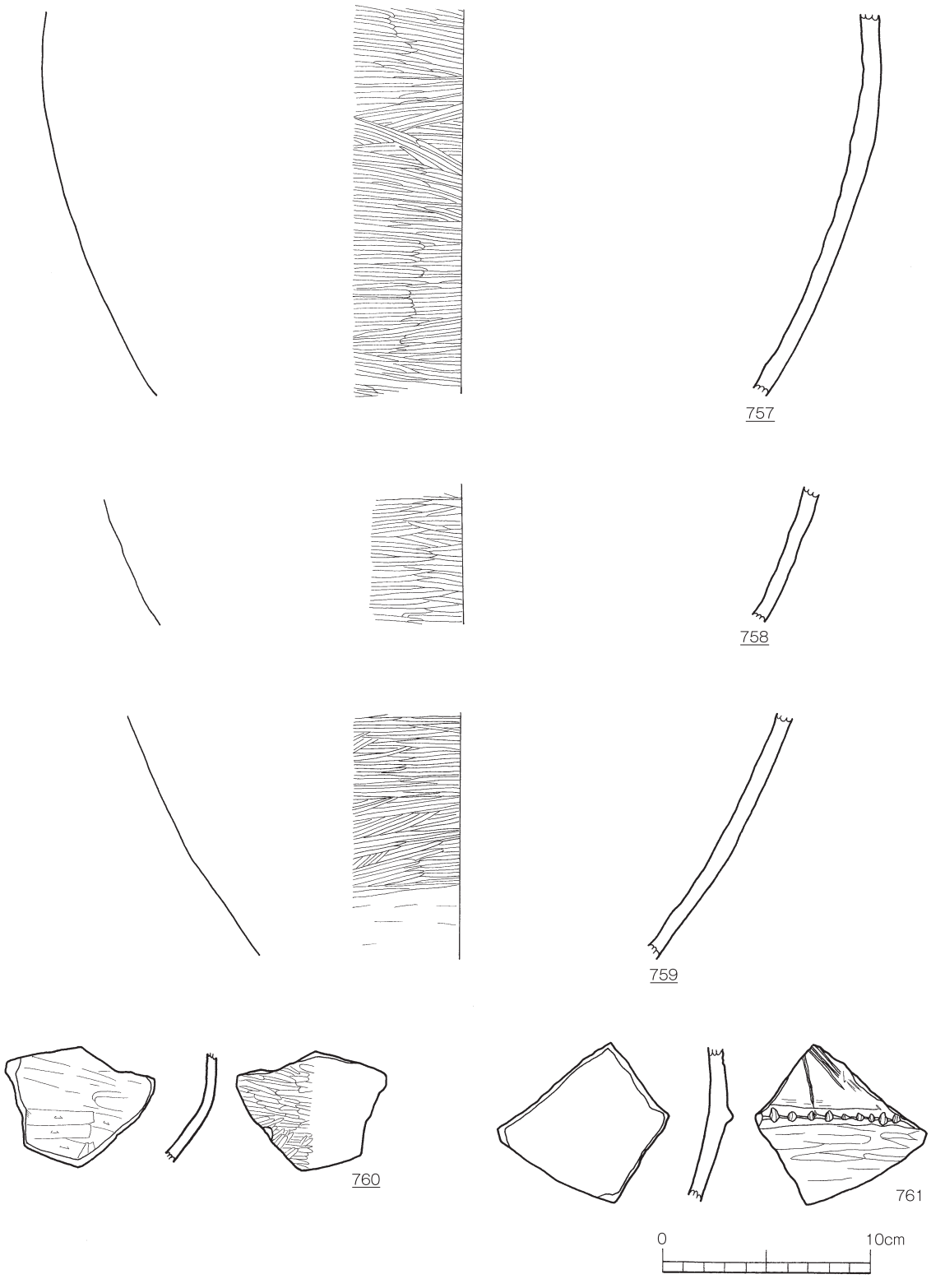








第124図　弥生時代の壺形土器10

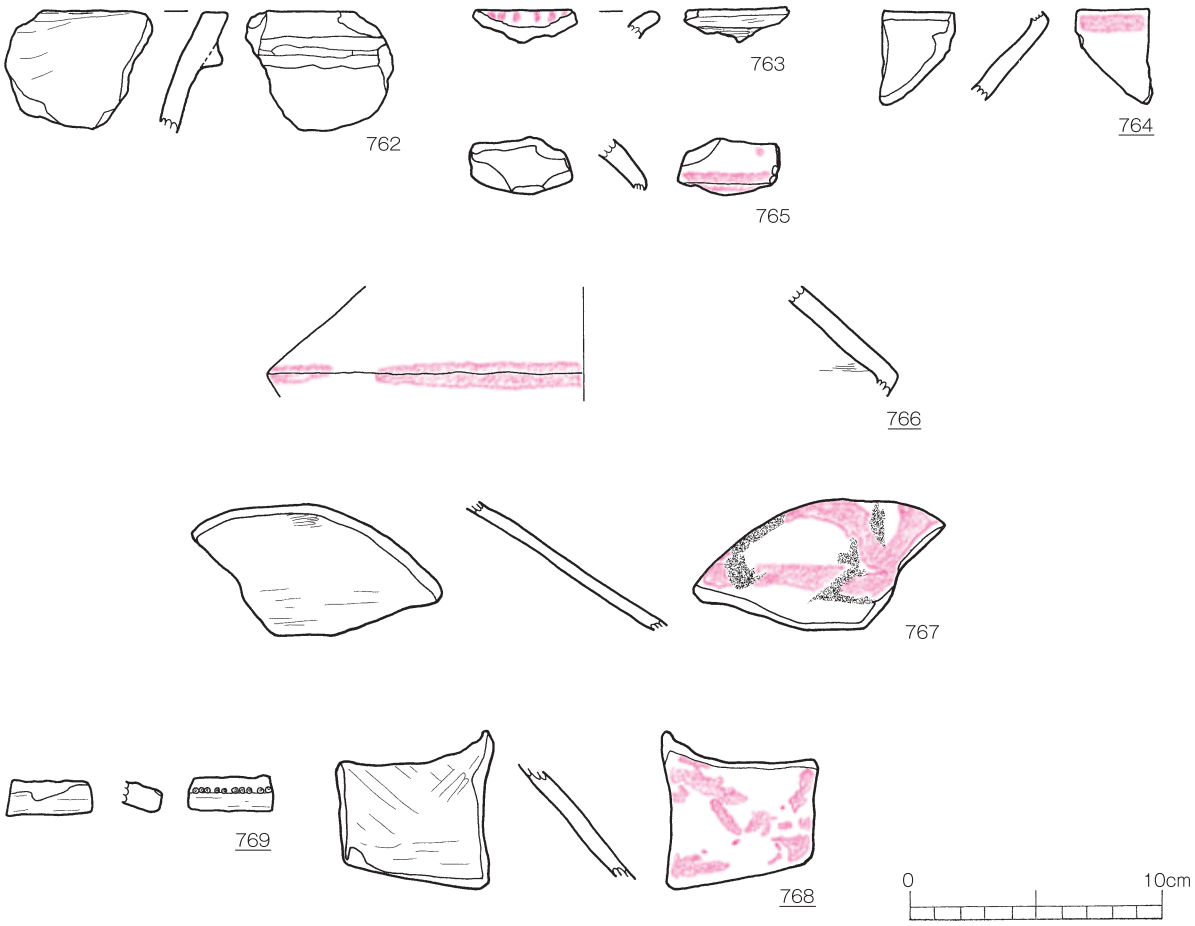


第125図　弥生時代の壺形土器11

線で挟む。718は突帯に刺突施文の刻目を持つ。

d　W－4類（第121図）

716は肩部に竹管状の施文具で連点文を施している。器面は外面は粗いヘラミガキ，内面はナデを施している。



第126図　弥生時代の壺形土器12

(ト)　**X類土器**（第122図～126図）

壺形土器の肩部から胴部にかけて，文様を持つ土器を６つに分類した。

a　X－１類（第122図）

719～734は胴部から肩部にかけて２条から６条の沈線で山形文を持つ壺形土器である。720・723・726・729・732は２条の沈線で山形文を構成する。721・722・725・728・731・734は３条の沈線で山形文を構成する。723は粗いナデで器面調整を持ち，器壁が厚く，成形や文様も雑である。724は山形文の下部に３条の横線文で区画している。733は器面を粗いハケメで調整している。

b　X－２類（第123図）

735～743は３条から４条の沈線で半弧，または弧を組み合わせて重弧文を構成する甕形土器の胴部である。735は半弧の３条の沈線を組み合わせた山形文もしくは重弧文を持つ。737は５条の並行した沈線文を持つ。739，740は貝殻による施文を施した重弧文を持つ。741は，貝殻状工具の復縁で沈線文を施し，２つ以上の山形文と重弧文を組み合わせている。田畑氏の指導によると，灘沿岸域(山口県西部)に特徴的な施文形状で，この地域から伝播したものかそれを在地の土器で模したもので弥生時代前期中葉以降の壺形土器である。

ｃ　Ｘ－３類（第124図）

744～747はオダマキ貝の肋を用いて刺突施文で重弧文を施した壺形土器の胴部である。重弧文の上下を３から４条の沈線で横位に区画を施している。器面は丁寧なヘラミガキを施している。綾羅木式土器の甕形土器に似るが，それを真似て作った物の搬入品の可能性が高く，弥生時代前期中葉以降の壺形土器である。

ｄ　Ｘ－４類（第124図）

748～750は横位の沈線文に左右の斜位の沈線で，格子状の文様を施した壺形土器の胴部である。

ｅ　Ｘ－５類（第124図～第125図）

751～760は無文の壺形土器の肩部から胴部である。752は肩部上部でヘラ状工具による条痕を持つ。755は器面に丁寧な横位のヘラミガキを持つ。757・758・759は器壁が薄く全面に細かな横位のヘラミガキが施され，同一個体の可能性が高い。

ｆ　Ｘ－６類（第126図）

763は，壺の口縁部で，内面に縦位の彩文が施されている。764～768は，器形不明，傾きなど不明であるが，文様の位置から壺形土器の胴部に分類した。胴部の張りが算盤状に張り出し，器面に赤色顔料と黒色顔料を塗布して，山形の文様をハケ状の工具を用いて屈曲部上位と屈曲部に沿って施文している。

⑺　その他（第125図・第126図）

761は胴部に断面三角形の刻目突帯を持ち，その上部に沈線文を持つ。突帯下の胴部は粗いヘラミガキを持ち，甕形土器の可能性もあり，分類上不明土器である。762は，口縁部下に断面三角形の突帯を持った壺形土器である。焼成の具合から弥生時代中期相当のもの考えられる。769は口縁部上端に非常に細かな刻目を施す断面方形の口縁部でる。小破片であり器種不明であるが，ふたの可能性が高い。

イ　弥生時代の高坏形土器・装飾品（128図）

⑺　Ｙ類土器

770～780は，高坏形土器である。771，772は口縁部で771は口縁部内面にヘラミガキを施しやや反り気味に開く。770・773～775は胴部で，770は内外面にヘラミガキを施し，脚部につながる基部に断面三角形の突帯を持つ。773は赤色顔料を塗り，ヘラミガキを施す。773は傾きは不明である。776～781は基部に断面三角形の突帯を持ち，779と780は断面三角形の突帯を２条持つ。

⑴　その他

782は土製勾玉である。縦28㎜，幅13㎜で正面上部に穿孔（せんこう）痕があり，そこから上が欠損している。正面から左側面にかけて球状とその下部に横位の沈線文がある。

第29表　弥生時代の壺形土器観察表１

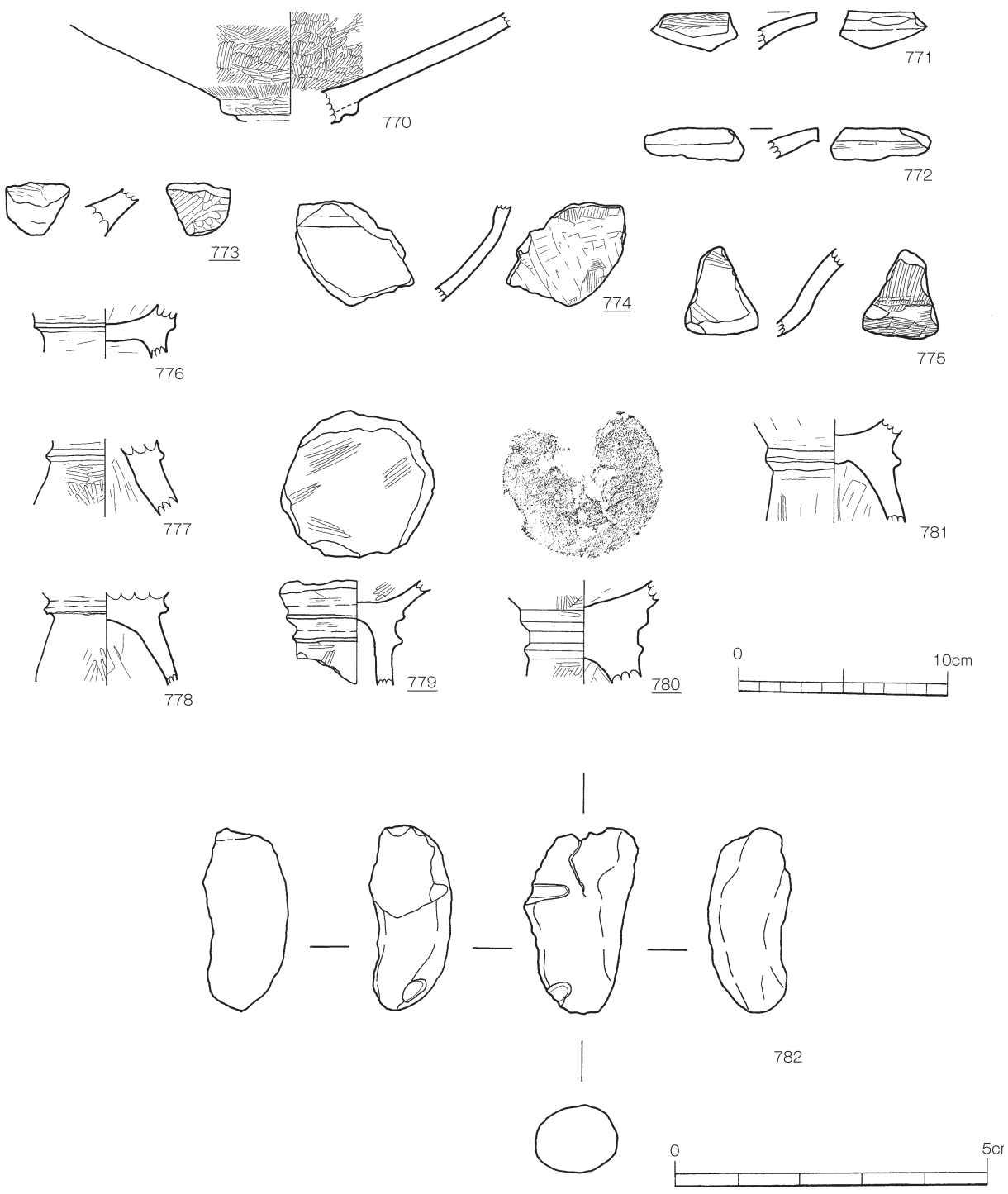
挿図番号	遺物番号	層	取上番号	器種	分類	部位	標高	出土区	調整		色調		胎土							備考
									内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	ｶﾙｾﾄﾝ	片岩	その他	
第115図	600	Ⅱ	3874	壺	S	口縁	48.01	C － 20	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	
	601	Ⅲa	26592	壺	S	口縁	47.88	E － 20	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		(外)ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き痕は一部残るが不明瞭
	602	表採	－	壺	S	口縁	－	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	橙	橙	○	○	○			○			
	603	Ⅱ	7575	壺	S	口縁	47.41	D － 24	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	橙	橙	○	○	○			○	○		
	604	表採	－	壺	S	口縁	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	
	605	Ⅱ	3511,3512	壺	S	口縁	48.02	C － 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	3507
	606	Ⅱ	6197	壺	S	口縁	47.72	D － 21	剥離	ﾍﾗ磨き	橙	暗赤褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	607	Ⅲa	29935	壺	S	口縁	47.78	D － 19	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○		黒色磨研・沈線文
	608	Ⅲa	8096	壺	S	口縁	47.64	D － 21	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	灰褐	灰褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	609	Ⅱ	2424	壺	S	口縁	47.49	C － 24	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	明赤褐	明褐	○		○		○	○	○		
	610	Ⅱ	11092	壺	S	口縁	0.00	D － 21	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	ｵﾘｰﾌﾞ黒	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	黒曜岩	
	611	Ⅲa	22537	壺	S	口縁	46.42	F － 27	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	○	○		丹塗り
	612	Ⅱ	3519	壺	T	口縁	47.96	B － 19	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	粗いﾍﾗ磨き	暗灰黄	明赤褐	○	○	○		○	○	○		(内)ﾍﾗ磨き残りよく見える
	613	Ⅱ	2804	壺	T	口縁	47.60	D － 26	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○	○		丹塗り
	614	Ⅲa	16864	壺	T	口縁	47.27	C － 25	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	明赤褐	橙	○		○			○	○	黒曜岩	丹塗り
	615	表採	－	壺	T	口縁	－	－	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	橙	橙	○		○			○			長石が多いのが特徴
	616	Ⅲa	29978	壺	T	口縁	47.89	D － 19	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	明赤褐	橙	○	○	○			○	○	茶粒	
	617	Ⅲa	1029	壺	T	口縁	48.57	C － 17	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○	茶粒	頸部内面に沈線あり
	618	Ⅲa	11180	壺	T	口縁	48.89	D － 16	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	胎土が赤褐色(表面・磨き痕不明)
	619	Ⅱ	2603	壺	T	口縁	47.69	C － 21	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	橙	橙	○	○	○					茶粒	ﾓﾐ痕
	620	表採	－	壺	T	口縁	－	－	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	
	621	Ⅳ	1352	壺	T	口縁	49.13	D － 14	ﾊｹ目	ﾊｹ目	橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	
	622	Ⅲa、Ⅱ	26823,29932	壺	T	口縁	47.87	○○○ － 19,8	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	浅黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	46,26・(361)と同一？可能性あり
	623	Ⅲa	17830,19925	壺	T	口縁	47.18	F － 27	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	褐灰	灰黄褐	○	○	○			○	○		
	624	Ⅲa	31228	壺	T	口縁	48.06	E － 20	磨き	磨き	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		
第116図	625	Ⅲa、Ⅱ	29555,29552	壺	T	口縁	48.03	D,C － 19	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	26954,P8, 29?, 4443, 9062, 5303　(362)と同一個体
	625	Ⅱ	5311,5922	壺	T	底部	47.78	D,C － 21,12	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	5308・(361)と同一個体
第117図	626	Ⅱ	2653	壺	U	口縁	47.76	C － 22	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	褐灰	褐灰	○	○	○			○		茶粒	
	627	Ⅱ	4049	壺	U	口縁	47.61	D － 22	ﾍﾗ磨き・ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい赤褐	赤褐	○		○			○	○	茶粒	
	628	Ⅱ	2396	壺	V	口縁	47.51	C － 24	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい橙	明赤褐	○		○		○	○	○	茶粒	段まね・丹塗り(外)磨滅でよく見えない
	629	Ⅱ	1775	壺	V	口縁	48.78	C － 16	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄	浅黄橙	○				○	○			
	630	Ⅱ	4662	壺	V	口縁	47.34	C － 25	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○		段まね(直頸)
	631	Ⅱ	5319	壺	V	口縁	47.81	D － 21	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○		○	○	○	茶粒	
	632	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	明赤褐	赤褐	○	○	○		○	○	○		刻目突帯文
	633	Ⅲa	28596	壺	V	口縁	47.89	E － 20	ﾅﾃﾞ横	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○					○	○	茶粒	上段の沈線を施文後調整の為に斜めﾍﾗで調整時に沈線を欠き消してしまった物。ｽｽ？
	634	Ⅱ	9699	壺	V	口縁	47.23	G － 27	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○		○	○	○	茶粒	段まね・長石5～3㍉大多く含む・剥離あり
	635	Ⅲb	1344	壺	V	口縁	49.14	D － 23	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	赤褐	○	○	○			○	○		丹塗り
	636	表採	T	壺	V	口縁	－	F － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄橙	橙	○	○	○			○	○		段まね
	637	Ⅲa	30187	壺	V	口縁	48.00	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙	浅黄橙	○		○			○	○	茶粒	磨き痕・摩滅により見えない
	638	Ⅲa	20174	壺	V	口縁	47.68	D － 21	ﾍﾗ磨き	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	灰	暗灰黄	○	○	○			○	○		
	639	Ⅲa	32134	壺	V	口縁	46.87	E － 26	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	黄灰	にぶい黄橙	○	○				○	○		剥離多い
	640	Ⅲa	15275	壺	V	口縁	48.18	D － 19	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	にぶい橙	橙	○	○					○	茶粒	段まね
	641	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	茶粒	段なし
	642	Ⅲa	14470	壺	V	口縁	48.29	F － 18	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	灰黄褐	褐灰	○		○			○	○	茶粒	段まね・丹塗り
第117図	643	Ⅱ	3051	壺	V	口縁	47.64	D － 23	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	灰	灰	○	○				○	○	茶粒	剥離多い
	644	Ⅲa	6107	壺	V	口縁	47.96	D － 20	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		段まね

第30表　弥生時代の壺形土器観察表２

挿図番号	遺物番号	層	取上番号	器種	分類	部位	標高	出土区	調整		色調		胎土							備考
									内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	ｶﾙｾﾄﾝ	片岩	その他	
第117図	645	Ⅲb	30865	壺	V	口縁	48.00	D － 19	ヘラ磨き	ヘラ磨き	灰黄褐	にぶい黄褐	○		○		○	○	○		
	646	Ⅱ	3145	壺	V	口縁	47.72	C － 21	ナデ	ナデ・ヘラ磨き	明黄褐	橙	○	○	○		○	○			段なし(内)剥離の為不明・4～2㎜大の長石多く含む
	647	Ⅲa	21077	壺	V	口縁	47.04	F － 27	ヘラ磨き	ナデ・ヘラ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○		段まね
	648	Ⅱ	4216	壺	V	口縁	47.71	C － 23	ヘラ磨き	ヘラ磨き・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	649	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ナデ	ヘラ磨き・ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	茶粒	段なし
	650	Ⅱ	2128	壺	V	口縁	47.74	C － 21	ナデ	ナデ	淡黄	淡黄	○	○	○			○	○	茶粒	431・432・429は同一個体？
	651	Ⅱ	3148	壺	V	口縁	47.74	C － 21	ナデ	ヘラ磨き・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	茶粒	段まね
	652	Ⅲa	15226	壺	V	口縁	48.25	D － 18	ヘラ磨き	ヘラナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	玉ずい	
	653	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ヘラケズリ後ヘラ磨き	ヘラ磨き後指ナデ	褐灰	にぶい褐	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒	
	654	Ⅲa	28095	壺	V	口縁下	48.05	C － 19	ヘラ磨き・ナデ	ヘラ磨き	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		段まね・・如意形
第118図	655	Ⅱ	18651	壺	V	口縁	48.49	C － 20	ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	明赤褐	○	○	○		○	○			
	656	Ⅱ	6313,22	壺	V	口縁	47.76	C,B － 8,19	ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	橙	○		○			○	○	茶粒	3508・段なし口縁・頸部下部はヘラケズリ・丹塗り
	657	Ⅲa	23257	壺	V	口縁	46.92	E － 26	ナデ	ヘラ磨き・ナデ	橙	明褐	○	○	○			○	○		(内)不明瞭
	658	Ⅱ	6487	壺	V	口縁	47.67	C － 20	剥離	ヘラ磨き	浅黄橙	黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・茶粒・玉ずい	
	659	Ⅲa	22932	壺	V	口縁	47.00	E － 26	ナデ	ヘラ磨き・ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○		段まね(如意口縁)
	660	Ⅲa	29010	壺	V	口縁	48.01	C － 19	ナデ後磨き	ナデ後磨き			○	○	○			○	○	茶粒	段なし
	661	Ⅲa	15239	壺	V	口縁	48.28	D － 18	ヘラ磨き	ヘラ磨き	浅黄橙	浅黄橙	○	○					○	茶粒	段なし
	662	土Ⅰ,Ⅲa	26682,29186	壺	V	口縁	47.93	D,E － 22,20	ヘラ磨き・ナデ	ヘラ磨き	橙	明赤褐	○	○	○			○	○	茶粒	29187・段なし口縁・丹塗り(内)口縁のみ丹
	663	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	664	Ⅲa	12286	壺	V	口縁	47.50	D － 23	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○					○		茶粒	刻目口縁(不明)・爪後が裏に残る・1㎜大の長石多く含む
	665	Ⅲb	29975	壺	V	口縁	47.98	D － 19	ヘラ磨き・ナデ	ヘラ磨き・ヘラケズリ	灰黄褐	明赤褐	○						○		刻目口縁
	666	Ⅱ	7856,7857	壺	V	口縁	47.68	C － 21	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	○		○			○	○	茶粒	
	667	Ⅳ	31486	壺	V	口縁	47.65	C － 18	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	段まね(外)磨滅してよく見えない
	668	Ⅲa	4403	壺	V	口縁	47.55	C － 19	ヘラ磨き	ヘラ磨き(上)ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○		○			○	○		
	669	Ⅲa	11169	壺	V	口縁	48.96	D － 16	ヘラ磨き・ナデ	ヘラ磨き	明赤褐	橙	○	○	○			○	○	玉ずい	段まね・丹塗り・長石5～3㎜大多く含む
	670	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	段なし口縁・ヘラ磨き不明
第119図	671	Ⅱ	5260	壺	V	口縁	47.69	D － 21	ヘラ磨き・ナデ	ヘラ磨き	淡黄	灰白	○	○	○			○	○	茶粒	431・429と同一個体？
	672	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ナデ・ヘラ磨き	ヘラ磨き・ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	剥離あり
	673	Ⅲa	10839	壺	V	口縁	48.74	C － 17	ヘラ磨き	ナデ・ヘラ磨き	にぶい黄橙	明赤褐	○		○			○			口縁外反するもの・摩滅により残少
	674	Ⅲ・土	－	壺	V	口縁	－	D － 23	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	段まね
	675	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ナデ	ヘラ磨き	黒褐	黒	○					○	○		黒色磨研
	676	Ⅲa	24530	壺	V	口縁	48.35	C － 18	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい橙	○	○				○	○	茶粒	沈線文
	677	表採	－	壺	V	口縁	－	－	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○		段まね
	678	Ⅲa	27827	壺	V	頸部	47.96	D － 20	ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	○		○			○	○		赤色顔料・(外)口縁～頸部に赤色顔料による横線文(内)口縁内面に口唇部からの赤色顔料の着色
	679	Ⅱ	4306	壺	W1	肩部	47.43	C － 23	剥離	ナデ	橙	明赤褐	○	○	○			○		玉ずい	有段無文・輪積み痕(内)
	680	Ⅱ	3982	壺	W1	肩部	47.63	D － 26	ナデ	ヘラ磨き・ナデ	褐	褐	○	○				○			有段無文
	681	Ⅲa	27945	壺	W1	肩部	48.08	D － 19	ヘラケズリ後ナデ	剥離	橙	明赤褐	○	○			○	○		茶粒	有段無文
	682	Ⅲa	23597	壺	W1	肩部	46.86	F － 26	剥離	ナデ	黄橙	橙	○	○	○		○	○	○	黒曜岩・茶粒	有段無文
	683	Ⅲa	16292	壺	W1	肩部	48.04	D － 8	剥離	ナデ・ヘラ磨き	明黄褐	灰白	○	○				○	○	茶粒	有段無文
	684	Ⅲ	8687	壺	W1	胴部	49.21	D － 15	剥離	ヘラ磨き	橙	橙	○		○		○	○	○	茶粒	
	685	Ⅲ	19301	壺	W1	肩部	46.67	F － 27	ヘラ磨き	ナデ・ヘラ磨き	橙	橙	○	○	○			○	○		有段無文
	686	Ⅱ	7121	壺	W1	肩部	47.80	D － 20	ナデ	ヘラ磨き・ヘラナデ	灰黄	浅黄	○		○			○	○		有段無文(内)剥離
第119図	687	表採	－	壺	W1	頸部		－	ヘラケズリ後ナデ	磨き	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○	○	○	○	○		丹塗り(頸部)
	688	Ⅲa	29928,28947	壺	W1	頸部	47.90	D － 19	ナデ	ヘラ磨き			○	○	○			○	○	茶粒	有段無文
	689	表採	－	壺	W1	肩部	－	－	ヘラナデ	ヘラ磨き	にぶい橙	橙	○		○		○	○	○	玉ずい	有段無文
第120図	690	Ⅲa	28642	壺	W1	胴部	47.85	D － 20	ナデ	ヘラ磨き・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○			黒曜岩・茶粒	1～2㎜の石英を多く含む

第31表　弥生時代の壺形土器観察表３

挿図番号	遺物番号	層	取上番号	器種	分類	部位	標高	出土区	調整		色調		胎土							備考
									内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	ｶﾝﾗﾝｾｷ	片岩	その他	
第120図	691	Ⅲa	18226,18159	壺	W1	肩部	46.82	F － 28	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐	橙	○	○	○			○	○		18160
	692	Ⅲa	28843,27838	壺	W1	胴部	47.84	D － 19,20	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	(上)橙・(下)浅黄	○	○	○		○		○		2～3㎜石英を多く含む
	693	Ⅱ	1552	壺	W1	肩部	48.84	B － 15	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	有段無文
	694	Ⅲa	14357	壺	W1	肩部	48.22	E － 19	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		丹塗り磨研
	695	Ⅲa	29441	壺	W1	肩部	47.85	D － 20	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒・玉ずい	有段無文・摩滅して外は磨き不明
	696	Ⅲa	24808	壺	W1	肩部	48.10	E － 20	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙	橙	○		○		○	○	○		有段無文・(外)摩滅でみえない
	697	Ⅲa	31522	壺	W1	肩部	48.15	B － 17	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐	橙	○	○	○		○	○	○		有段無文・(外)ﾍﾗ磨き痕は不明瞭
	698	Ⅳ	1675	壺	#N/A	肩部	48.49	B － 17	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	橙	橙	○	○	○		○	○	○		有段無文・長石を多く含む
	699	Ⅱ	2605	壺	#N/A	肩部	47.71	C － 21	剥離	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	有段無文
第121図	700	Ⅲa	19835	壺	W2	肩部	47.66	D － 20	ﾅﾃﾞ	粗いﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	橙	○		○			○	○	茶粒	有段線刻文・長石を多く含む
	701	表	－	壺	W2	肩部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	有段線刻文
	702	Ⅱ	1699	壺	W2	胴部	48.52	C － 17	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	灰黄褐	にぶい黄橙	○		○			○	○	茶粒・玉ずい	無段沈線文
	703	Ⅲa	一括	壺	W2	肩部	－	F － 23	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	無段凹線文
	704	Ⅲb	21554	壺	W2	肩部	47.35	C － 24	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄	○		○			○	○	玉ずい	無段沈線文・(内)剥離多い
	705	表	－	壺	W2	肩部	－	－	ナデ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ，ナデ	にぶい黄橙	橙	○		○		○		○		長石が多いのが特徴
	706	Ⅱ	24	壺	W2	肩部	50.64	C － 8	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐	橙	○	○				○	○	茶粒	無段無文(沈線)・ﾓﾐ痕
	707	Ⅲa	28203,28570	壺	W2	肩部	47.98	C,E － 19,20	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	無段無文(沈線)・粘土を屈曲させたことによるﾋﾋﾞ割れが肩部に顕著
	708	Ⅲb	21589	壺	W2	頸部	47.22	C － 24	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	暗灰黄	明黄褐	○		○			○	○		無段沈線文
	709	Ⅱ	2749	壺	W2	肩部	47.59	D － 26	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗灰黄	黄灰	○	○	○			○	○		無段沈線文
	710	Ⅱ	4724	壺	W2	肩部	47.38	C － 24	ﾍﾗ磨き	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	浅黄橙	橙	○	○	○			○	○	黒曜岩・玉ずい	無段沈線文・(外)磨滅して不明瞭(内)剥離の為不明
	711	表	－	壺	W2	肩部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい赤褐	明赤褐	○		○		○	○			無段凹線文・丹塗り・貝殻による施文
	712	Ⅱ	3773	壺	W2	肩部	47.36	C － 25	ﾅﾃﾞ・剥離	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○			○	○	茶粒	有段線刻文
	713	Ⅲa	23251	壺	W3	胴部	46.91	E － 26	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄褐	にぶい黄橙	○	○				○	○		貝殻条痕文
	714	Ⅲa	16605	壺	W3	肩部	47.54	D － 21	磨き・ﾍﾗｹｽﾞﾘ・指頭圧痕	粗い磨き	にぶい橙	橙	○	○	○			○			無段凹線文・丹塗り
	715	Ⅱ	4908	壺	W3	肩部	47.47	D － 24	ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	橙	灰黄褐	○		○			○	○	茶粒	無段突帯文・ﾅﾃﾞ状になってﾍﾗ磨きの見えた物のみ(内)剥離多く不明
	716	Ⅰ	－	壺	W4	胴部	－	現土溝埋土	ﾅﾃﾞ	粗いﾍﾗ磨き	暗黄褐	橙	○	○				○	○	茶粒	竹管の上に沈線一条あり・ｽｽ
	717	Ⅲa	29775	壺	W3	肩部	48.07	D － 19	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	暗赤褐	○		○		○	○	○		無段凹線文・丹塗り
	718	Ⅲ	5720	壺	W2	肩部	50.64	C － 9	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		段なし・刻目突帯文
第122図	719	Ⅲb,Ⅱ	31205,5997	壺	X1	肩部	48.08	E,D － 20	ﾅﾃﾞ・剥離	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	1002・無段沈線文
	720	Ⅱ	8258	壺	X1	胴部	47.58	E － 22	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	山形文
	721	Ⅲa	10857	壺	X1	胴部	48.83	D － 16	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		○	○	○	茶粒	(外)薄く摩滅してﾍﾗ磨きの痕跡・丹塗り・山形文・561と同一？
	722	表	－	壺	X1	胴部	－	E － 20	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	茶粒	重弧文
	723	Ⅲa,Ⅳ	15039	壺	X1	胴部	48.50	C － 17,16	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○			○	○		沈線
	724	Ⅲa	11421	壺	X1	胴部	99.50	D － 17	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○			○	○	茶粒	黒色磨研後丹塗り・山形文
	725	Ⅲa	16674	壺	X1	胴部	47.57	C － 22	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	灰白	浅黄橙	○	○	○		○	○	○		山形文・摩滅してどちらか不明
	726	Ⅲb	13222	壺	X1	胴部	47.78	E － 21	ﾊｹ目	ﾍﾗ磨き	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		山形文
	727	Ⅲa	30224	壺	X1	胴部	47.92	D － 19	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	ﾍﾗ磨き・ﾅﾃﾞ	明黄褐	明黄褐	○	○	○			○	○	茶粒・玉ずい	山形文
	728	溝③	－	壺	X1	胴部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	山形文
	729	Ⅲa	10998	壺	X1	胴部	48.75	D － 16	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ磨き	ﾍﾗ磨き	浅黄	明赤褐	○	○	○		○	○	○	玉ずい	山形文・丹塗り・517と同一？
	730	表	－	壺	X1	胴部	－	－	剥離	磨き	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○			○	○	茶粒・玉ずい	山形文・上二条後→右斜→左斜の施文
	731	Ⅲa	22275	壺	X1	胴部	46.92	F － 26	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	橙	橙	○	○				○	○	茶粒・玉ずい	山形文
	732	表	－	壺	X1	胴部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ磨き	橙	にぶい赤褐	○	○	○		○	○	○	茶粒・玉ずい	丹塗り・(外)明瞭に見えない
	733	表	－	壺	X1	胴部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目・ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙	○		○			○	○		山形文
	734	表	－	壺	X1	胴部	－	D － 19	ﾍﾗｹｽﾞﾘ？	磨き	暗灰黄	褐灰	○		○			○	○		山形文・黒色磨研・丹塗りか？
第123図	735	Ⅲa	11243,11245	壺	X2	胴部	48.73	D － 17			にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○		○	○	○	玉ずい	24564,11237,13881・山形文(重弧→山形)
	736	表	－	壺	X2	胴部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	○	○	玉ずい	重弧文



第127図　弥生時代の高坏形土器・その他

第32表　弥生時代の壺形土器観察表４

挿図番号	遺物番号	層	取上番号	器種	分類	部位	標高	出土区	調整		色調		胎土								備考
									内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	ｵﾘｰﾌﾞﾗｽ	片岩	その他	
第123図	737	Ⅲa	11635	壺	X2	胴部	48.29	E － 19	ナデ	ヘラ磨き	にぶい褐	灰黄褐	○	○	○			○	○	玉ずい	重弧文
	738	Ⅱ	4115	壺	X2	胴部	47.72	D － 22	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	玉ずい	重弧文・ヘラ磨きの可能性あり
	739	Ⅱ	2700	壺	X2	胴部	47.68	C － 23	ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	重弧文
	740	Ⅱ	5070	壺	X2	胴部	47.83	C － 19	ナデ	ヘラ磨き	橙	橙	○	○	○		○	○	○	玉ずい	重弧文
	741	Ⅲa	20143,20155	壺	X2	胴部	47.53	D,C － 21	ナデ・剥離	ヘラ磨き	明黄褐	橙	○	○	○			○	○	茶粒・玉ずい	重弧文
	742	表	－	壺	X2	胴部	－	現道溝埋土	ナデ	ヘラ磨き	橙	橙	○	○	○			○	○	玉ずい	重弧文
	743	Ⅲc	16389	壺	X2	胴部	49.30	C － 15	ナデ	ヘラ磨き・ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	茶粒	重弧文
第124図	744	表	－	壺	X3	胴部	－	－	ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○		重弧文・綾羅木式
	745	Ⅱ	－	壺	X3	胴部	－	D － 20	ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		重弧文・綾羅木式
	746	表	P30	壺	X3	胴部	－	C － 17	ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		○	○			重弧文・綾羅木式・貝殻条痕文
	747	Ⅲa	31099	壺	X3	胴部	48.17	E － 20	ナデ	ナデ	明黄褐	橙	○	○	○			○	○		重弧文(貝殻刺突による)・沈線文・綾羅木式
	748	Ⅲa	27580	壺	X4	胴部	47.97	E － 20	ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		格子文・沈線・施文順(横→左斜→右斜)
	749	表	－	壺	X4	胴部	－	－	ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		格子文・施文は横三条、右斜、左斜、下一条(横)の順
	750	Ⅱ	－	壺	X4	胴部	－	C － 21	ナデ	ヘラ磨き	灰褐	にぶい橙	○	○				○	○	茶粒	格子文
	751	Ⅲb	19878	壺	X5	胴部	46.63	F － 28	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○				○		無文
	752	表	－	壺	X5	胴部	－	－	ヘラケズリ・ナデ	ヘラ磨き	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		無段無文・剥離多い
	753	Ⅲa	29495	壺	X5	胴部	48.04	D － 19	ヘラ磨き・ナデ	ナデ・ヘラ磨き	にぶい黄橙	橙	○	○			○		○	茶粒	摩滅により不明あり内外よく見えない
	754	Ⅲa	30775	壺	X5	胴部	48.08	E － 20	ナデ・剥離	ヘラ磨き	にぶい黄橙	灰黄	○	○	○			○	○		無文(外)剥離多く見えない物、磨滅の物あり
	755	Ⅱ	6053,3460	壺	X5	胴部	49.53	C,D － 21	ヘラ磨き・ナデ・指頭圧痕	ヘラ磨き	明赤褐	にぶい黄褐	○		○			○	○		3163・無文・ススト付着
	756	Ⅱ	4938,4940	壺	X5	胴部	47.50	D － 23	ヘラケズリ・剥離	ヘラ磨き	浅黄	淡黄	○	○	○			○	○		重弧文
第125図	757	Ⅱ	2934,2935	壺	X5	胴部	47.67	D,C － 22,23,24	条痕・ケズリ	磨き	灰黄	明褐	○	○	○		○	○	○	玉ずい	4920,3232,2938,4052,4928,4849 (528・529)同一個体
	758	Ⅱ	3950,3050	壺	X5	胴部	47.61	D － 23	条痕・ケズリ	磨き	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○			○	○	○	玉ずい・茶粒	3979
	759	Ⅱ	2050,4050	壺	X5	胴部	47.78	C,D － 21,22	ナデ・剥離	ヘラ磨き	にぶい黄橙	褐	○	○			○	○	○	玉ずい・茶粒	4051,4053,4054・丹塗り
	760	Ⅱ	7138	壺	X5	胴部	47.70	D － 20	丁寧なヘラケズリ・指頭圧痕	磨き	暗灰黄	褐灰	○				○	○	○	茶粒	黒色磨研
	761	Ⅲa	19165	壺	その他	胴部	48.52	E － 17	ヘラナデ	ヘラケズリ・ナデ	にぶい黄褐	明赤褐	○	○				○	○		沈線文・刻目突帯文
第126図	762	Ⅲ	8013	壺	その他	口縁	47.68	C － 20	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○				○	玉ずい・茶粒	突帯部の表面は剥離が多い
	763	Ⅲa	30211	壺	X6	口縁	47.78	D － 19	ヘラ磨き	ヘラ磨き	灰褐	にぶい橙	○	○	○			○	○		土器の表下部のみヘラ磨きが残る・彩文
	764	Ⅱ	5934	壺	X6	胴部	49.54	C － 14	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						○			赤色顔料(丹塗り)
	765	Ⅲa	19940	壺	X6	胴部	47.66	C － 21	ナデ	ナデ	灰白	灰白	○	○				○			赤色顔料
	766	Ⅱ	6054,5366	壺	X6	胴部	49.37	D － 21	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○				○			赤色顔料(丹塗り)
	767	Ⅲb	13800	壺	X6	胴部	47.62	C － 21	ナデ・ヘラ磨き	ナデ	褐	にぶい褐		○				○	○		彩文土器・山形文・丹塗り・(ススト、水銀？)
	768	Ⅱ	11063	壺	X6	胴部	47.86	D － 28	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい赤褐	○		○			○	○		彩文土器・山形文・丹塗り
	769	Ⅱ	3839	壺	その他	フタ	47.86	B － 21	ナデ	ナデ	褐	にぶい褐	○	○				○	○		フタの縁辺に竹管状の施文具で刺突施文

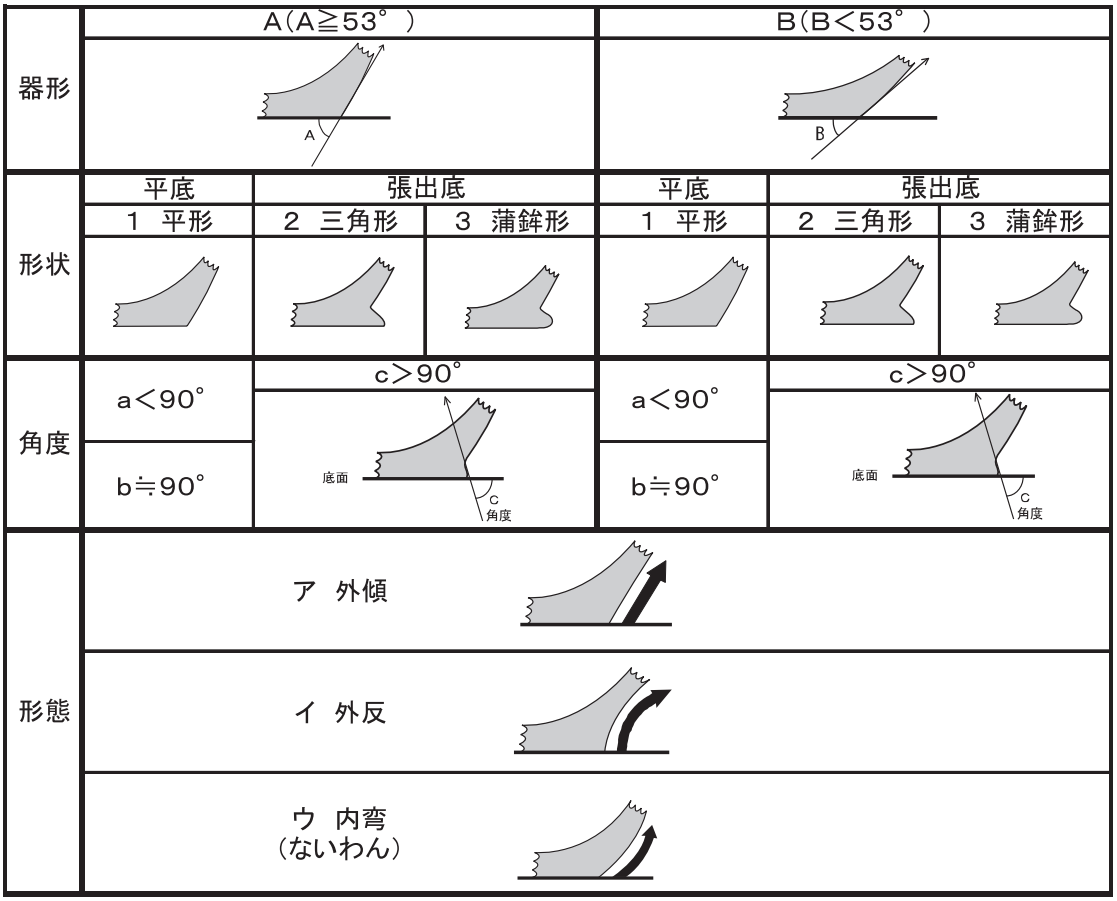
第33表　弥生時代の高坏・その他の遺産観察表

挿図番号	遺物番号	層	取上番号	器種	分類	部位	標高	出土区	調整		色調		胎土								備考
									内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	ｵﾘｰﾌﾞﾗｽ	片岩	その他	
第127図	770	Ⅲa	11512	高坏	Z類	胴部	48.31	E － 18	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○			○		○	茶粒	板付式
	771	Ⅲa	22645	高坏？	Z類	口縁	47.09	F － 26	ハケメ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	○					○	○	茶粒	
	772	Ⅲ	8689	高坏？	Z類	口縁	49.20	D － 15	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	茶粒	
	773	Ⅱ	1833	高坏？	Z類	口縁	47.94	C － 20	ヘラ磨き・ナデ・指頭圧痕	ヘラ磨き	明赤褐	赤褐	○	○	○			○	○	茶粒	丹塗り磨研
	774	Ⅱ	3575	高坏	Z類	口縁	48.09	B － 19	丁寧なヘラナデ	ハケ目・ヘラ削り	にぶい黄橙	黄灰	○	○	○		○	○	○	茶粒	松木薗から中津野
	775	表採	－	高坏	Z類	胴部	－	－	ヘラケズリ後ナデ	ハケ目	灰黄褐	にぶい橙	○	○			○		○		
	776	Ⅲ	2470	高坏	Z類	脚部・杯底部	47.20	D － 29	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○		○	○	黒曜岩	
	777	Ⅲ	29310	高坏	Z類	脚部	48.16	D － 19	ヘラケズリ	ヘラミガキ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○				○		
	778	Ⅲb	30926	高坏	Z類	脚部	48.07	E － 19	ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	茶粒	
	779	Ⅱ	－	高坏	Z類	脚部	－	D － 20	ナデ	ケズリ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	坏部の内底面磨き
	780	Ⅱ	2171,2169	高坏	Z類	坏～脚部	47.76	C － 21	ナデ	ヘラミガキ	灰黄	にぶい黄橙	○	○					○	茶粒	(坏部)ナデ磨きがよく見えない(脚内)ヘラケズリ
	781	Ⅲa	19564	高坏	Z類	基部	48.28	E － 18	ヘラケズリ後ナデ	ヘラミガキ・ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	黒曜岩	突帯文
	782	Ⅲa	16860	土製勾玉	その他	完形	47.31	C － 25	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		ナデ(全面)

ウ　弥生時代の土器底部（第129図～第140図）

⑷　底部の分類方法

底部は，そのほとんどが上部との接合ができず，器種が不明であった。そのため，ある程度の器種を探るため，次のように分類した。器壁から底面につながる角度を出し，53°の角度で，甕形土器の可能性の高いＡ類と壺形土器や鉢形土器の可能性の高いＢ類に分類した。土器底部の形状を平底と張出底に分け，張出底を断面三角形と断面蒲鉾形とに分けた。また，底面と土器の接点から底部器壁の角度を90度を基準にａ・ｂ・ｃの３つに分類した。それを土器の形態によって外傾するもの，外反するのも，内弯するものの３つに分類した。市ノ原遺跡第４地点の底部は，Ａ1aア類・Ａ1aイ類・Ａ1aウ類・Ａ1bア類・Ａ1bウ類・Ａ2cア類・Ａ3cア類・Ａ3cイ類・B1aア類・B1aウ類・Ｂ1bア類・Ｂ1bウ類と分類できなかったものの14類に分類した。

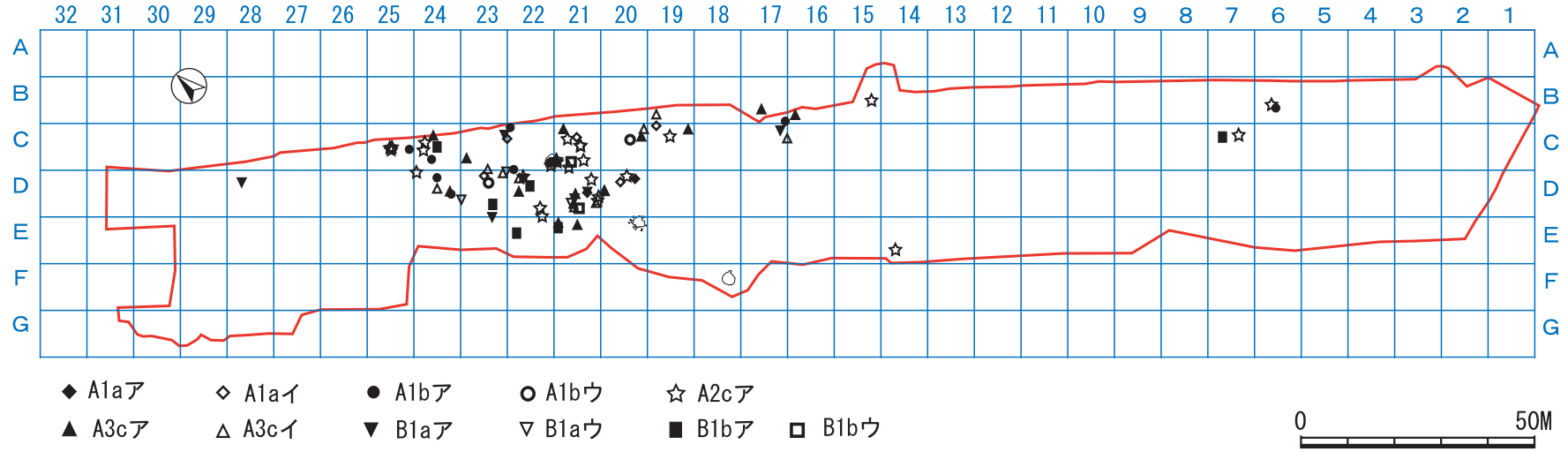


第128図　弥生時代の土器底部の分類模式図

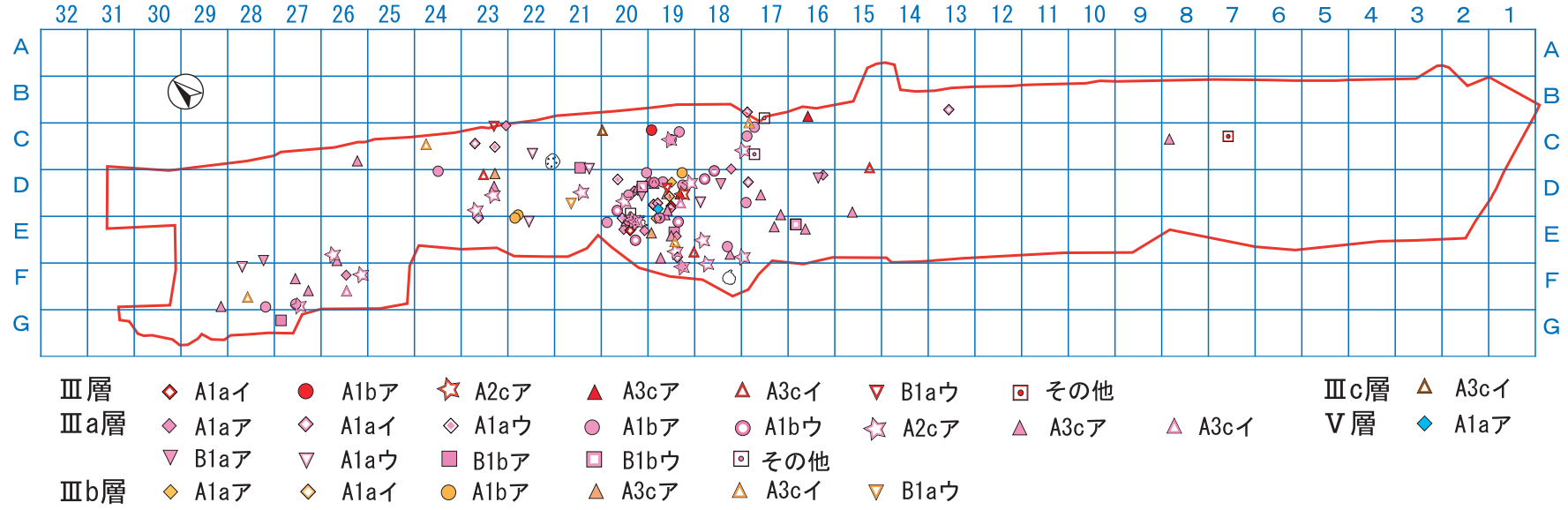
⑸　底部の分布（第129図）

底部の各層位ごと，分類語との分布は次の通りである。全体の出土状況は，甕・鉢・壺の分布図とほぼ重なる出土状況である。Ⅱ層では，Ｃ－21・22区の竪穴住居跡周辺に集中して分布し，Ⅲ層以下の層では，Ｅ－20区の１号竪穴状遺構周辺に集中して分布する。また，Ｆ－26～29区に分布が見られる。

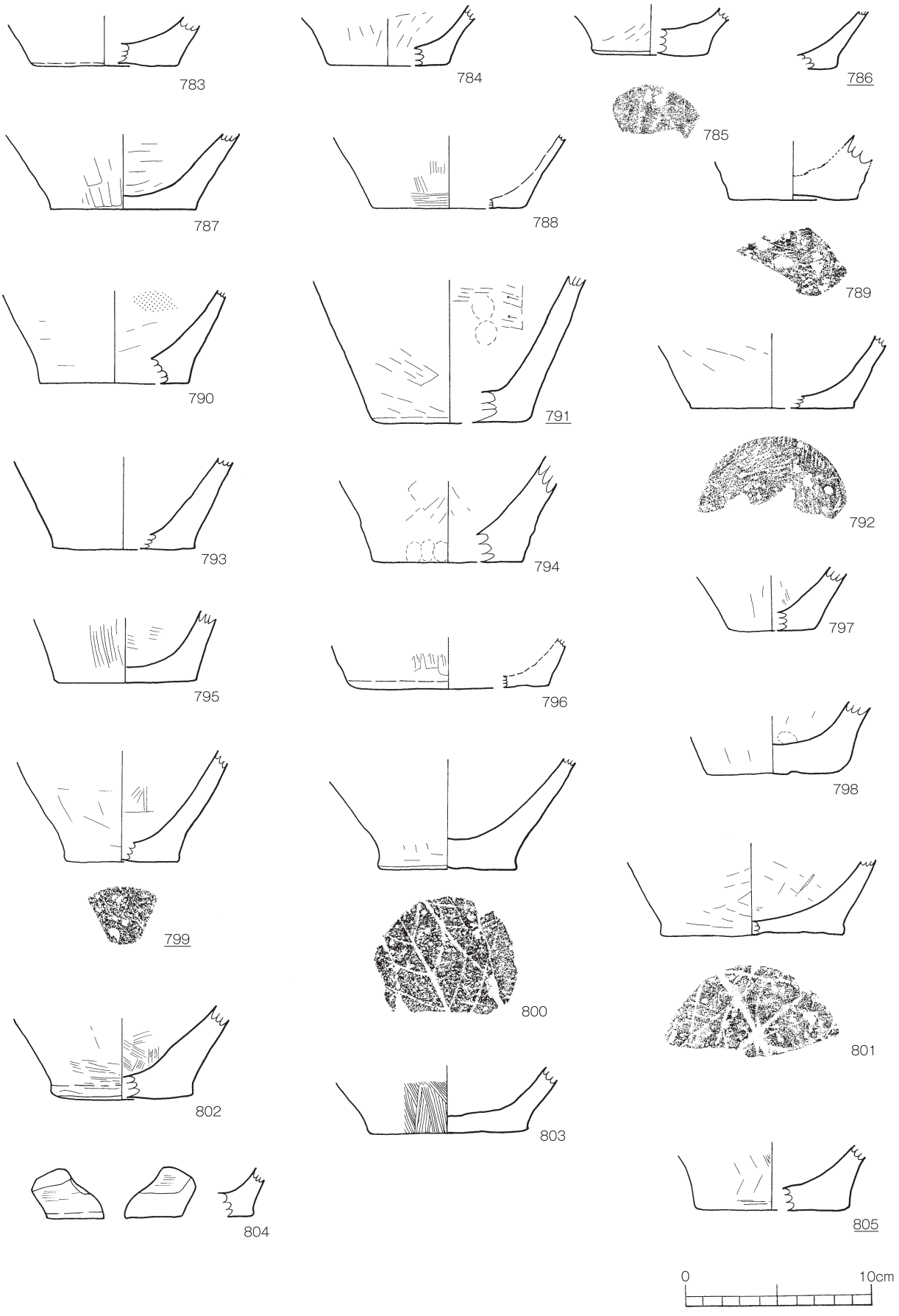
Ⅱ層出土状況



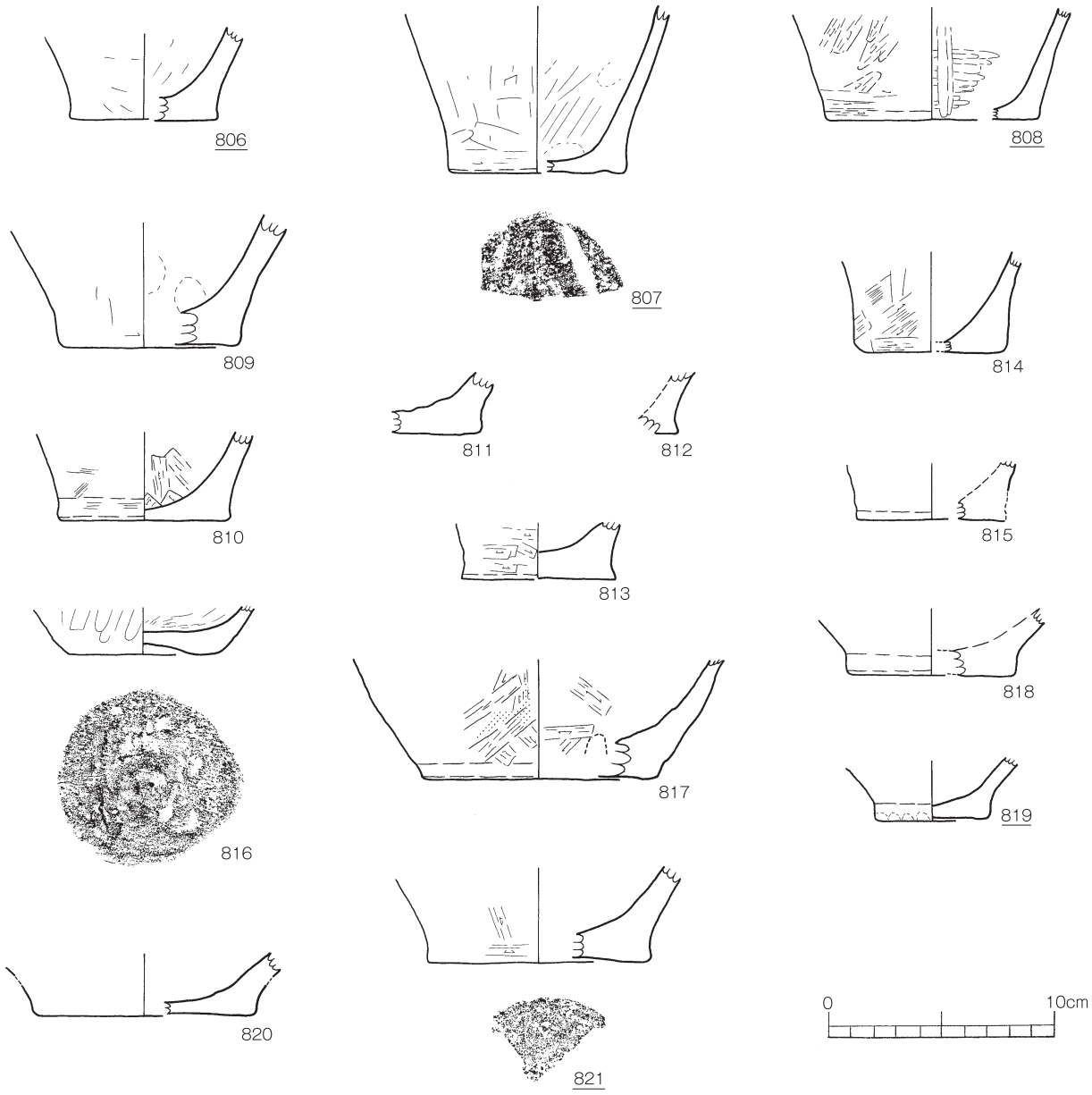
Ⅲ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ・Ⅳ層出土状況



第129図　弥生時代の土器底部の出土分布図



第130図　弥生時代の土器底部 1

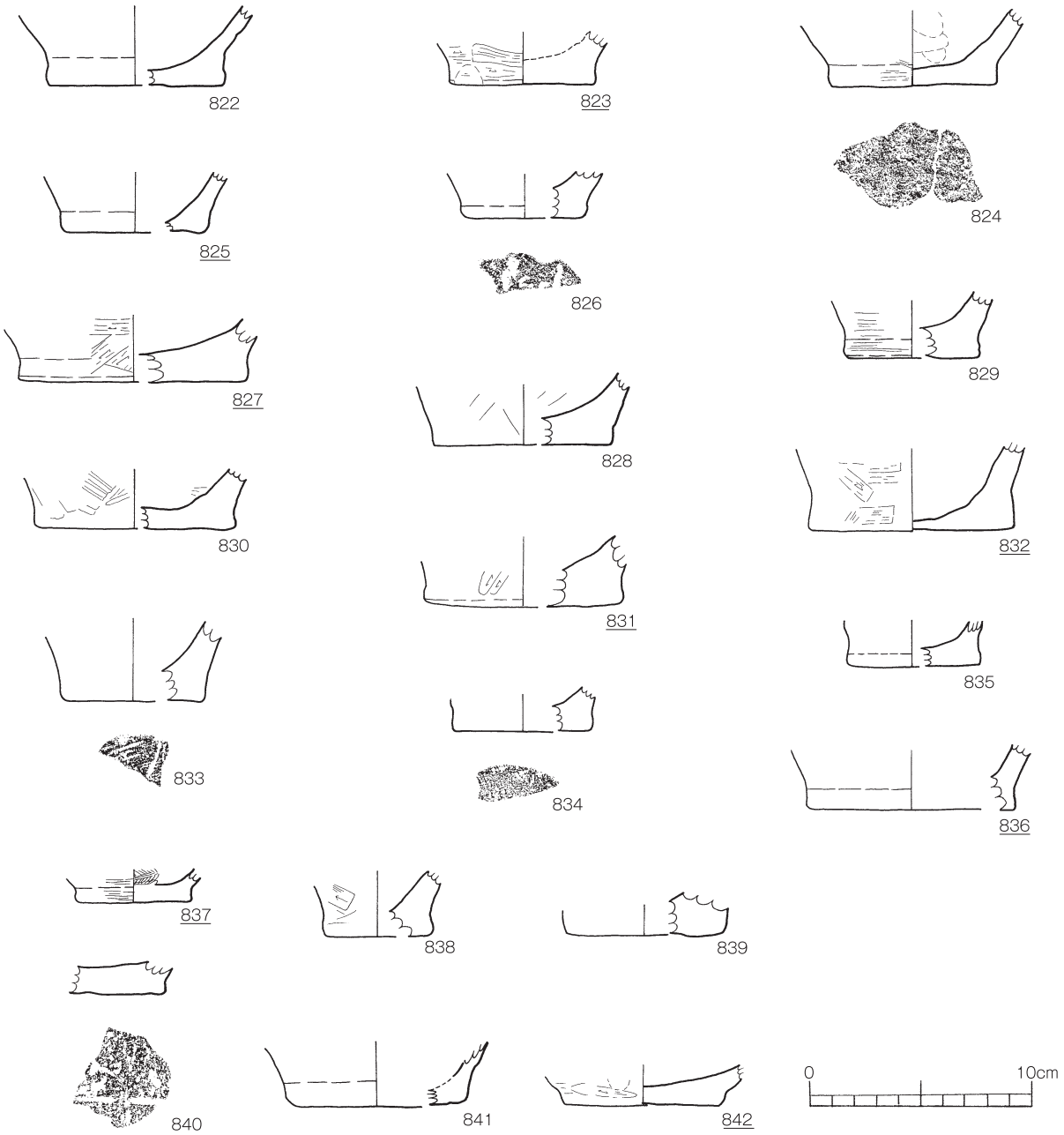


第131図　弥生時代の土器底部２

⑹　底部の分類（第130図～第140図）

・A1aア類（第130図　783～798）

784・787・795は底部と底面の接地面まで，縦位のヘラケズリ後ナデやハケメの調整をする。788は器壁が薄く，内面は剥離が多い。外面はナデを施す。792はハケメがありナデ消している。797は底面の直径が48ミリの底部である。器面は外面をナデて調整をしている。795は器壁外面に縦位のハケメを施す。783・784・786～788・792・797は器形が，53°以上61°未満の角度を持ち，壺形土器を含む可能性があるが，器面の調整はナデやヘラケズリ後ナデの調整である。785・787・789・792は木葉痕を持つ。785は葉脈が３本観察できる。

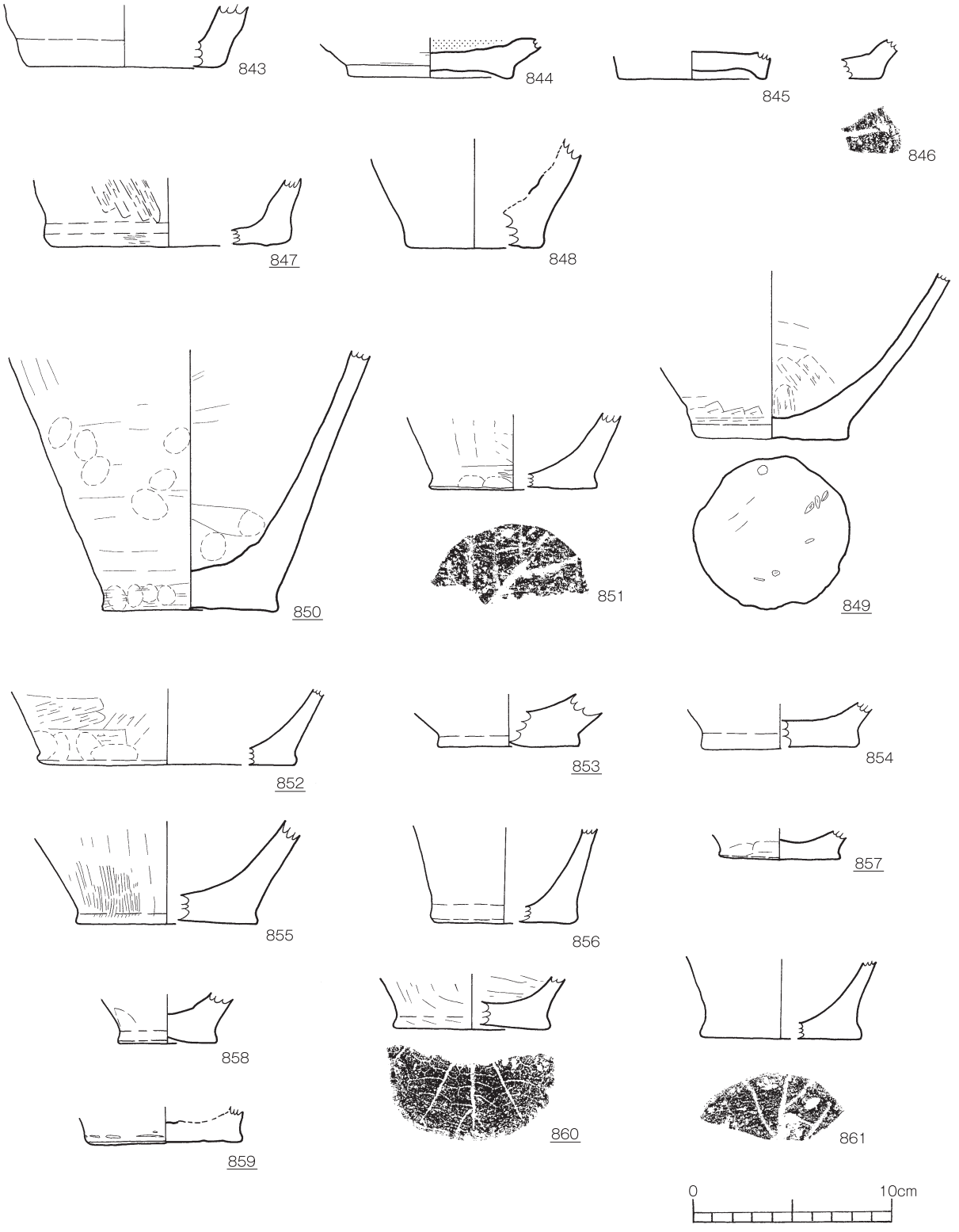


第132図　弥生時代の土器底部３

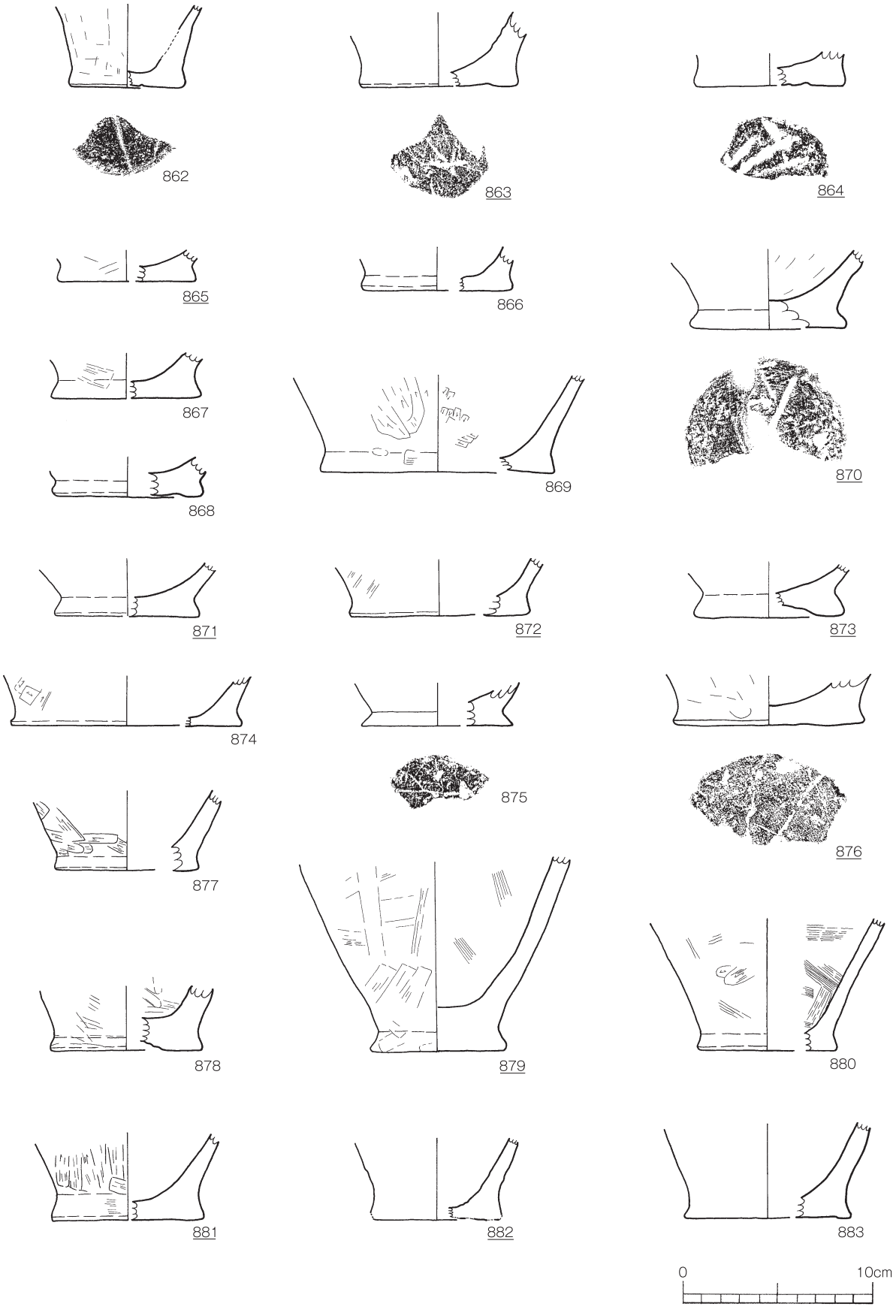
・A1aイ類（第130図～第131図　799～815）

801はほかの土器よりも広い直径約10センチの底部を持つ。803は胴部に明瞭なハケメを持つ。808は底面からまっすぐ開く砲弾形の器形を持ち，外面に底面付近では横位，その上部では斜位のヘラミガキを施す。799・800・802は器形が53°以上61°未満の角度を持ち，壺形土器を含む可能性がある。

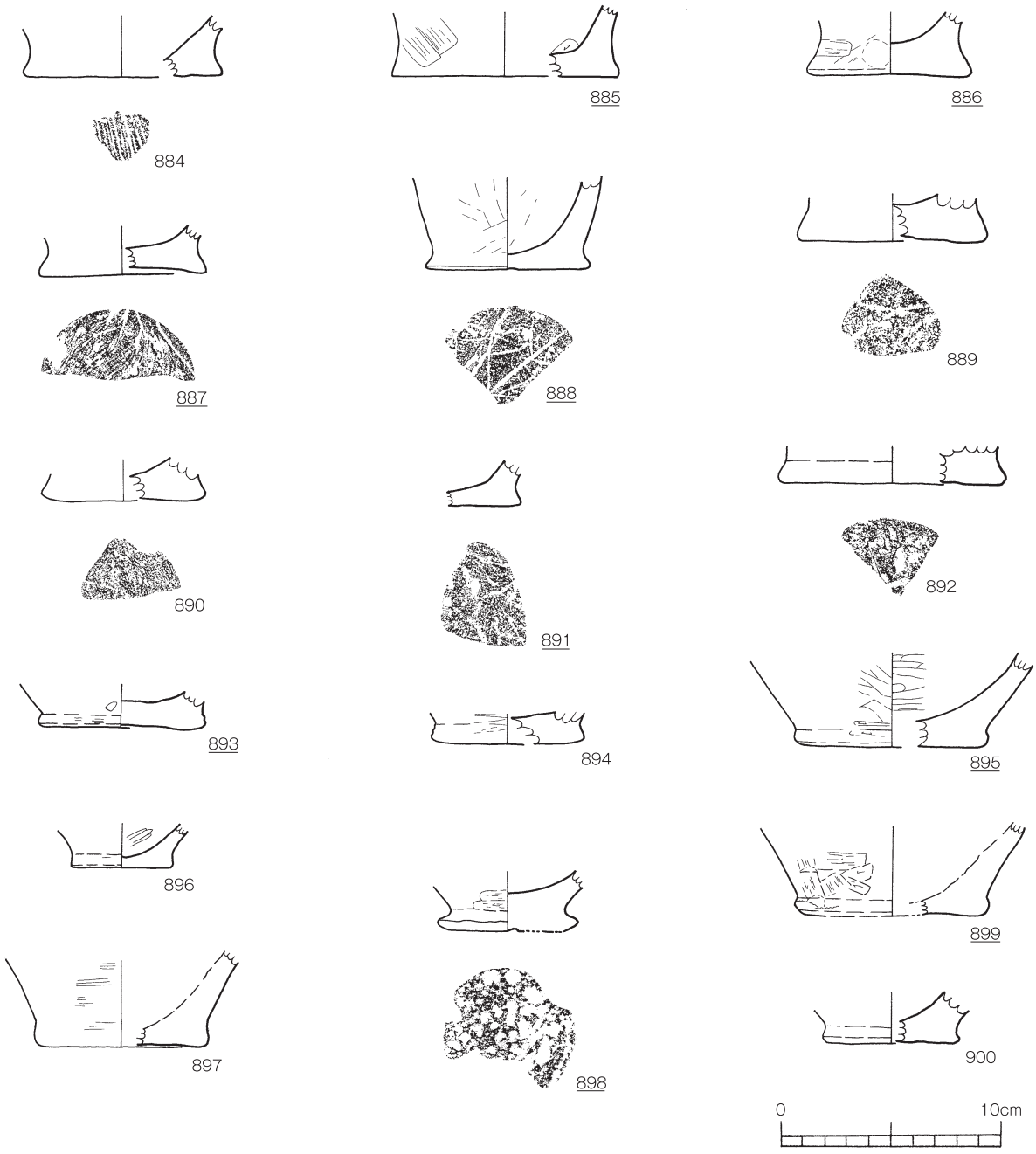
799・800・801・807は木葉痕を持ち，葉身の中央のみがスタンプされている。800は羽状脈とみられ，主脈をほぼ並行にして２枚以上の葉を重ねている。801は掌状脈のような葉脈があり，約45度の角度で重なる。807は直径４㎜と直径２㎜の棒状のスタンプをみる。それ



第133図　弥生時代の土器底部４



第134図　弥生時代の土器底部５



第135図　弥生時代の土器底部６

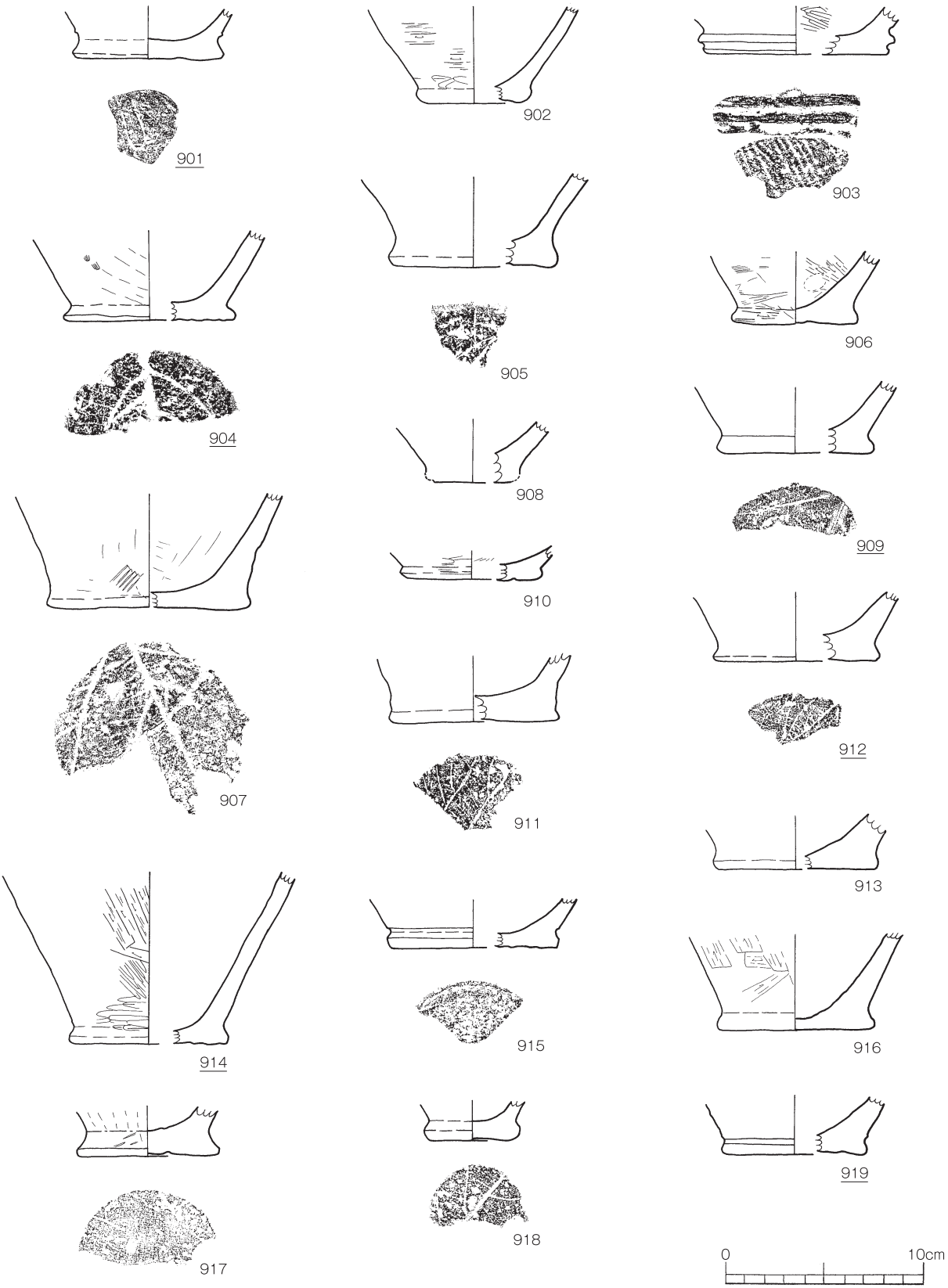
をナデ消して底部を成形する。

・ **A1aウ類**（第130図　816～818）

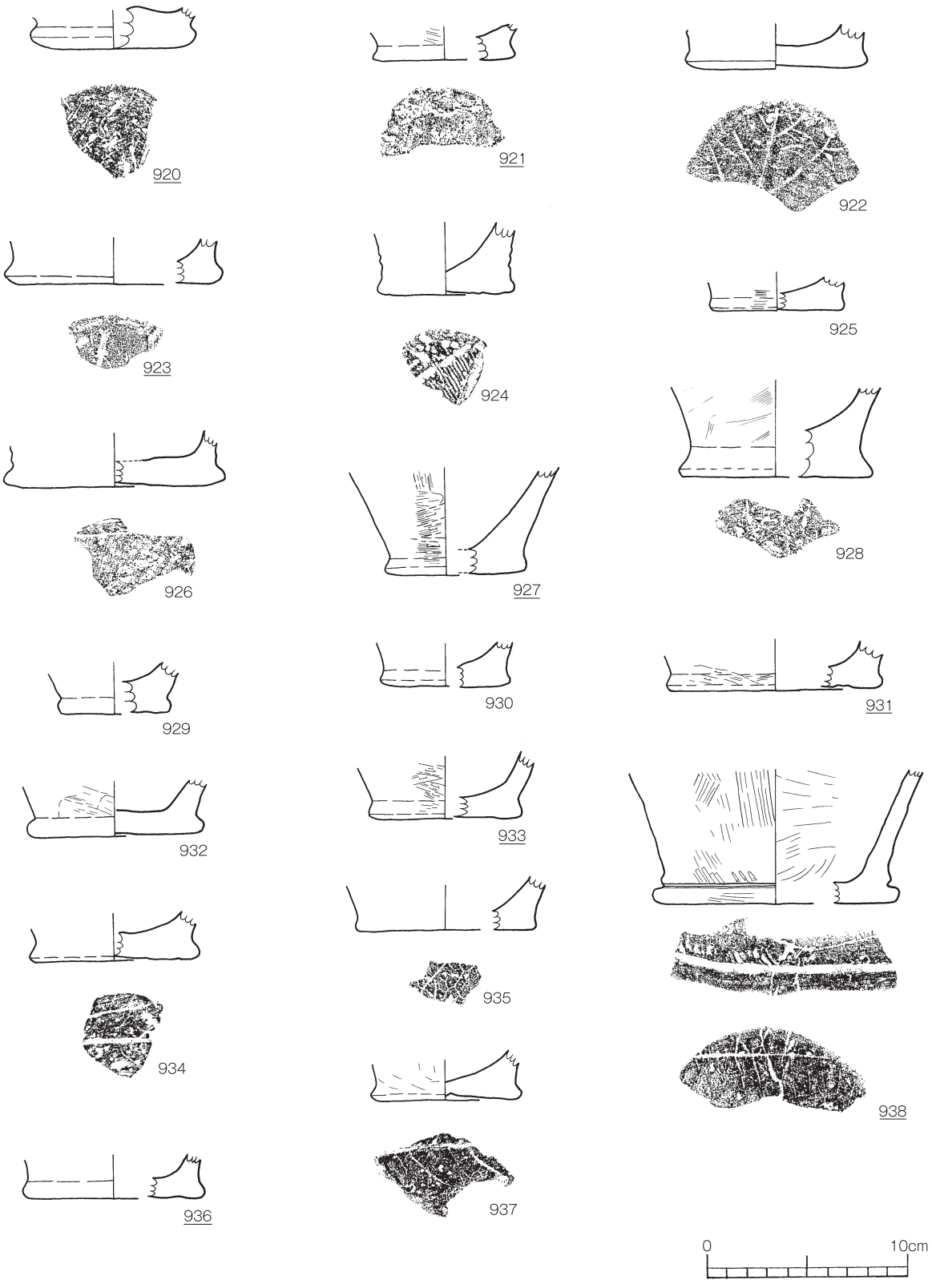
816は平底で底面が上げ底になる。器面調整はヘラケズリ後ナデやナデである。816・817器形が53°以上61°未満の角度を持ち，壺形土器を含む可能性がある。

・ **A1bア類**（第130図～第133図　820～845）

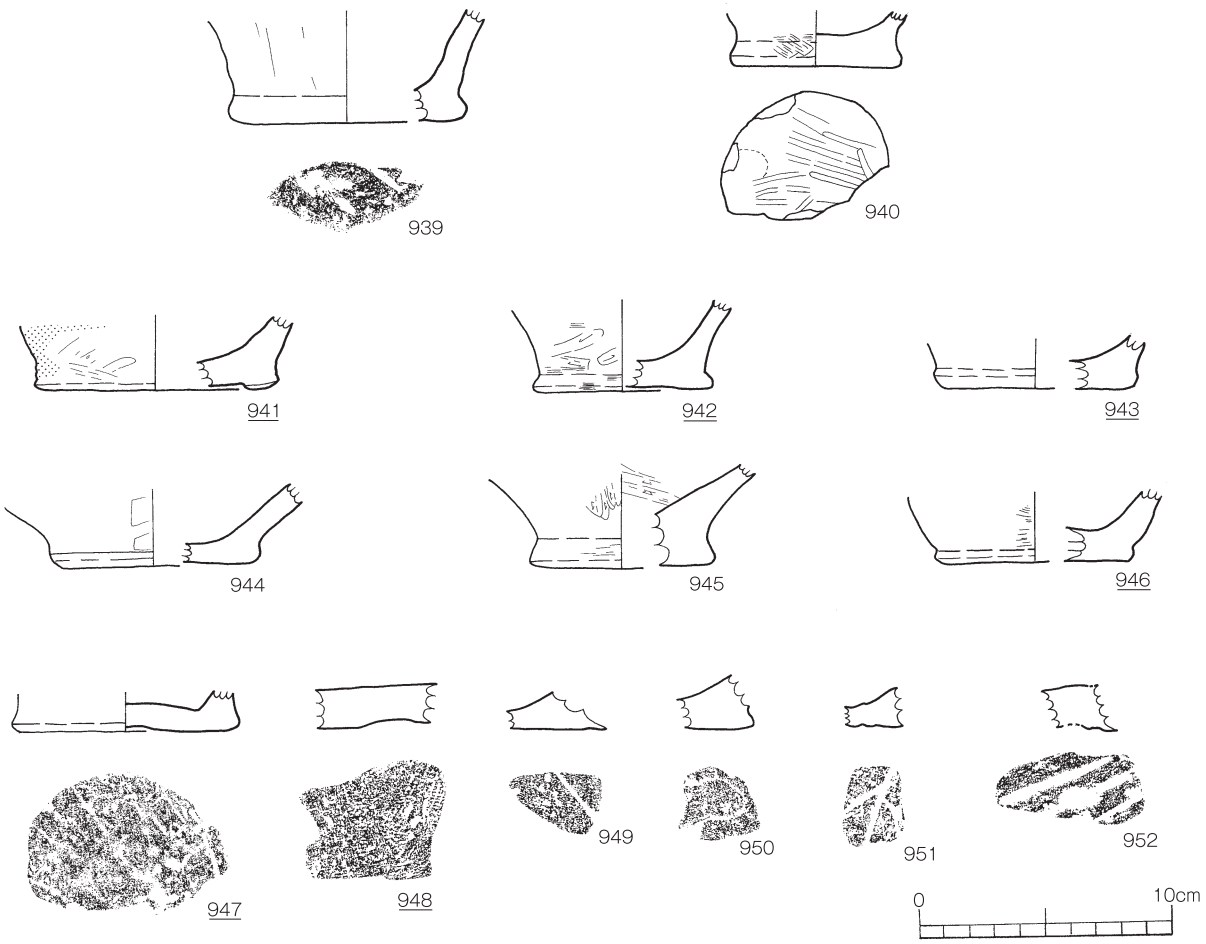
819～821は平底で，底面が上げ底になる。823は胴部下部は横に細かくヘラナデをして成



第136図　弥生時代の土器底部７



第137図　弥生時代の土器底部８



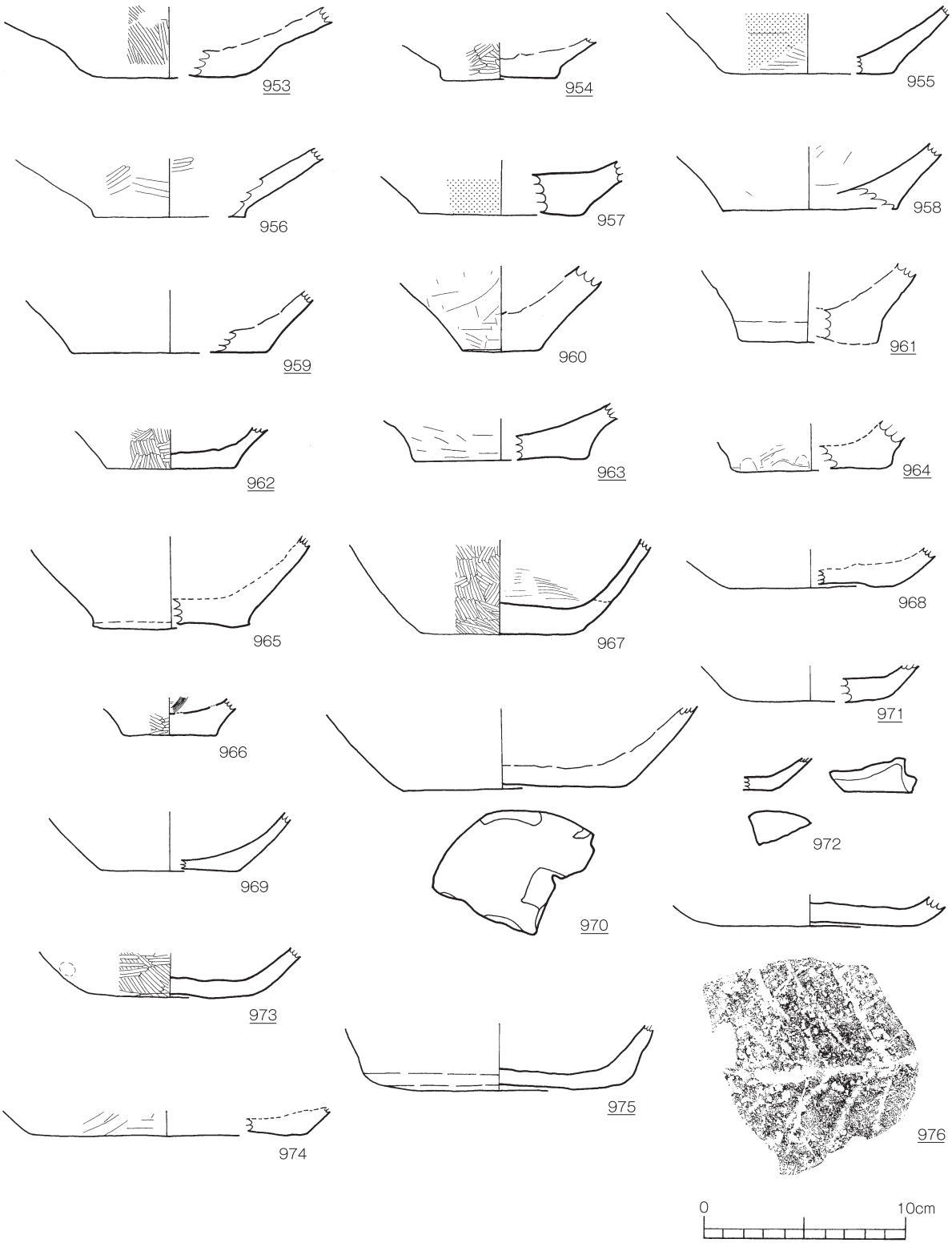
第138図　弥生時代の土器底部９

形する。827は斜位のナデ調整を底部器壁側面に持つ。830は底部下面作成後に胴部を輪積みする接合痕が見られる。837は底面からまっすぐに６㎝に立ち上がる器形を持ち，内外面にヘラミガキを持つ。841は外面をナデ調整し，内面は剥離が目立つ。844・845は底部縁辺を高台状に立ち上げ，上げ底を形成する。844は内側にスス痕を持つ。824・840は器形が53°以上61°未満の角度を持ち，壺形土器を含む可能性がある。

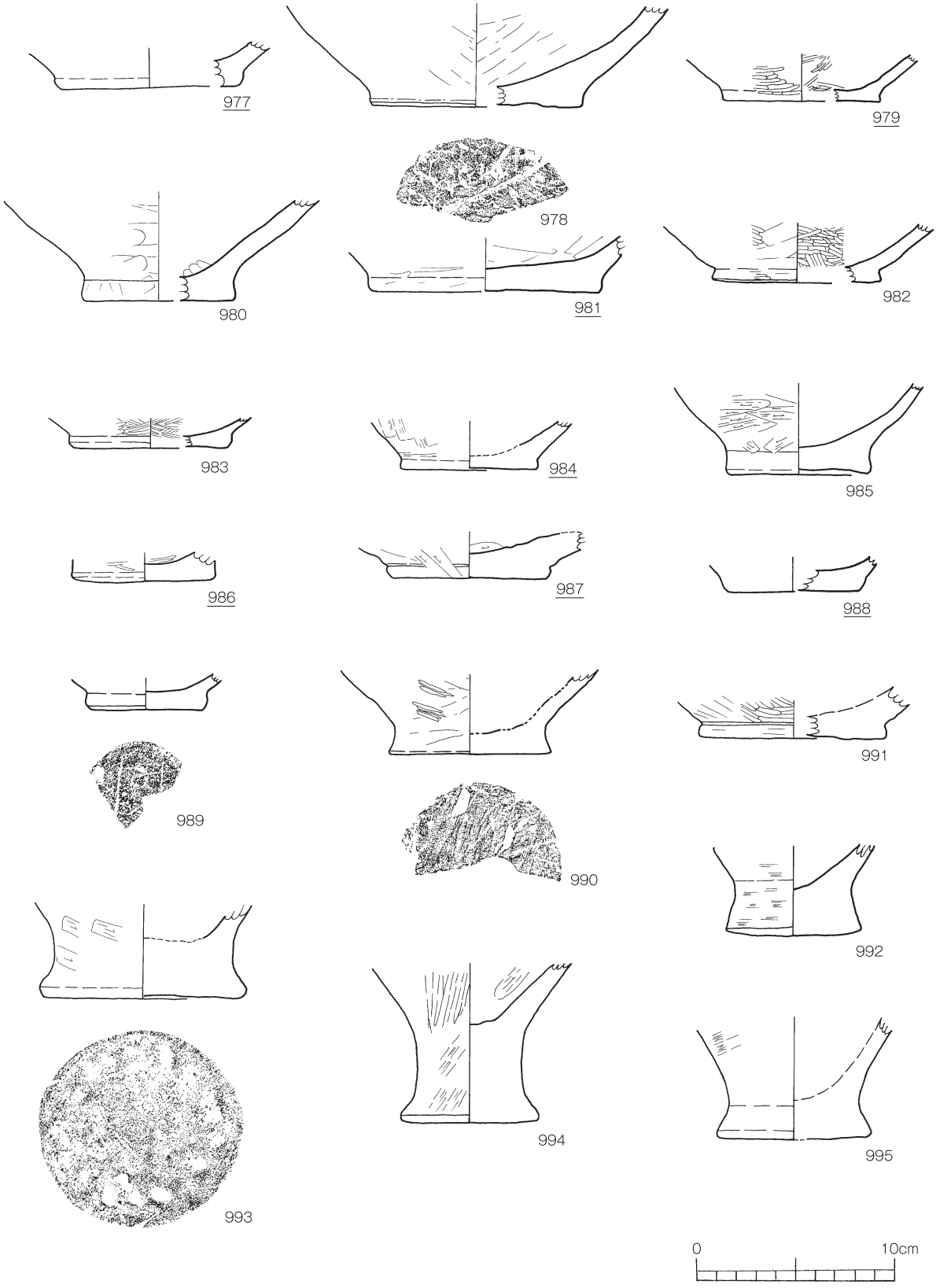
833・834は平行な編み目を持つ組織痕を持つ。821・824・826・834・840・846は木葉痕を持つ。826は直径２㎜の葉柄の部分と思われる痕跡を見る。840は直径２㎜の中央脈と見られる横位のスタンプと斜位に側主脈と見られる痕跡が残る。

・A1bウ類（第133図　847～849）

847は底面からまっすぐに立ち上がり緩やかに開く器形を持つ。外面はヘラケズリ後ナデの調整を施す。849は外面下部を斜位にヘラナデ後横ナデして器面を成形する。内面はヘラケズリをして成形する。849は器形が53°以上61°未満の角度を持ち，壺形土器である可能性がある。



第139図　弥生時代の土器底部10



第140図　弥生時代の土器底部11

・ **A2cア類**（第133図～第135図　850～892）

850は器壁外面上部を縦位に，下部を横位に，最下部を横ナデし，指で押さえをして成形をする。851は器壁外面を縦位にナデ，最下部を指押さえをして成形する。底部に中央脈と側脈を持つ木葉痕が見られる。852は器壁外面を横位にナデ，最下部を指押さえをして成形する。855は器壁外面をハケメで器面調整し，856は全体をナデて調整し寸胴の器形を持ち，最下部を横ナデして成形する。879は縦位や斜位にハケメやナデで調整し，最下部を斜位にヘラでナデて成形する。887・889は底面中央部が凹む。857・872・875は器形が53°以上61°未満の角度を持ち，壺形土器を含む可能性がある。

851・860～864・870・875・876は木葉痕を持つ土器である。860・861は掌状脈の形状をなし，放射状に中央脈や側脈が見られその間に細脈を観察することができる。862は直径約0.5㎜の葉脈を放射状に見ることができる。863は右下を上にして２条の葉脈を観察でき，それをヘラ状工具によりナデ消す横位の工具痕を見ることができる。864は直径３㎜の斜位の葉脈を３本持つ。870は右斜め上方を上にして中央脈を持つ。876は右上を上にして葉脈が広がる。887は下方を上にして放射状に葉脈が広がり，底部縁辺部にその痕跡が残る。中央部は木葉痕をナデ消している。888は右上を上にして中央脈あるいは側脈が見られ，細脈を観察できる。また同様の形状の葉を並行して重ねておいている。891は右下を上にして葉脈が並行してみられる。

884は，並行の編み目を持つ組織痕土器である。

・ **A3cア類**（第135図～第137図　893～926）

894は断面蒲鉾形の底部が上に反り，張り出しの強い器形をなす。903は底部下部よりやや上がったところに断面三角形の突帯を持つ。底部に並行の編み目を持つ組織痕を持つ。906は底部縁辺部が膨らみ，中央が凹む断面を持つ。914は胴部下部を横位に，上部を斜位にヘラナデを施す。915は底部上部に浅い横線を持つ。896・895・898・899・900は，器形が53°以上61°未満の角度を持ち，壺形土器を含む可能性がある。

898・901・904・907・909・911・912・915・917・918・921・926は木葉痕を持つ。898は上部を，901は左上を，904は右上方を，909は左下を，907は右下を，上にして葉を置く。907は中央脈が74㎜以上ある。911は右上を上にして２枚の葉を重ねている。912は右上方を上にする。917は左上方を，918は右上方を，922は上をそれぞれ上にして葉を置く。

・ **A3cイ類**（第137図～第138図　927～945）

938は胴部と底部の境に沈線を持ち，胴部上部をハケメ，沈線直上にヘラミガキを施す。底部に右を上にして木葉痕を持ち，中央部を丁寧にナデ消している。940は底部に裏にヘラケズリとナデを持つ。928・934・935・937・938・939は，木葉痕を持つ。928は上方を，934は右を，935は左下を，937は左を上にして，中央脈や側脈を持つ。

・ **A3cウ類**（第138図　946）

946は底部上部で小さな段を持ち，胴部に向かって内弯する。

・ **その他**（第138図　947～952）

小破片や底部から胴部への立ち上がりが欠損して器形の判断できないものである。947～949・951は木葉痕を持つ。952は直径２㎜の並行したくぼみを持つ。木葉の中央脈を並べたものの可能性を持つ。950は「つ」の字の糸状の痕跡を持つものであるが，原体は不明である。

・ **B1aア類**（第139図　953～966）

器形を大きく開く土器で，器面にナデやヘラミガキを施す。953は底部の裏と内面が，954は内面がそれぞれ剥離している。壺形土器の可能性が高い。底部器壁上部は縦位や斜位のヘラミガキを施す。960は底部直径が39㎜の土器である。

・ **B1aウ類**（第139図　967～975）

967・973は器壁外面にヘラミガキを施す。975は内面に細かな剥離があり，開かずに立ち上がる器形を持つ。976は左を上にして，長さ95㎜，直径３㎜の中央脈を持つ。

・ **B1bア類**（第140図　977～987）

979・982・983・985は器壁外面にヘラミガキを持つ。987は底部正面に浅い沈線を持ち，横に大きく開く土器である。978は右上方を上にして側脈と細脈を見る。

・ **B1bウ類**（第140図　989～991）

990・991は底部正面のヘラミガキを持ち，991は底部と胴部の境に沈線文を持つ。990は右を上にして側脈と細脈を見るが，縁辺部を残してナデ消している。

第34表　弥生時代の土器底部観察表１

挿図番号	遺物番号	実測番号	注記番号	層位	分類	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 赤色粒	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	その他	備考
第130図	783	112	26529	Ⅲa	A1aア	48.01	E － 20	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○			組織痕
	784	208	なし	表採	A1aア	－	－	ナデ	ナデ	灰黄	にぶい黄橙		○				○			
	785	25	10875	Ⅲa	A1aア	48.88	D － 16	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○		組織痕・木葉痕・底部はナデ
	786	159	5931	Ⅱ	A1aア	49.61	C － 14	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○			
	787	209	28731 28732	Ⅲa	A1aア	47.94	D － 20	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○				○	○		28733・ヘラミガキ状の光沢のある部分あり
	788	212	16630	Ⅲa	A1aア	47.50	C － 23	剥離	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	○	○	○			○			貝殻かヘラ
	789	21	31735	Ⅳ	A1aア	47.39	D － 19	剥離	剥離	明赤褐	明赤褐	○	○				○			モミ痕・葉脈痕・木葉痕
	790	188	なし	溝埋土	A1aア	－	－	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○			スス付着
	791	ピン195	7106	Ⅱ	A1aア	47.87	D － 20	ナデ・指頭圧痕	ナデ	明赤褐	橙	○	○	○			○			
	792	73	30353 31606	Ⅲb	A1aア	48.04	E － 19	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄	橙	○	○	○			○			木葉痕・底部にハケメ
	793	213	14237	Ⅲa	A1aア	48.33	C － 18	ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄	灰オリーブ	○	○	○			○			
	794	216	なし	Ⅲa	A1aア	－	－	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	灰黄褐	橙	○	○	○			○			
	795	210	29643 30212	Ⅲa	A1aア	47.98	E,D － 20,19	ヘラ	ヘラ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○			
	796	170	22958	Ⅲa	A1aア	46.97	F － 26	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○			
	797	219	14389	Ⅲa	A1aア	48.31	F － 19	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○			○			
	798	221	14700	Ⅲa	A1aア	48.23	E － 19	ナデ・指頭圧痕	ヘラケズリ後ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○		植物遺体のサンプリング底部

第35表　弥生時代の土器底部観察表２

挿図番号	遺物番号	実測番号	注記番号	層位	分類	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	その他	備考
第130図	799	207	2094	Ⅱ	A1aイ	47.81	C － 21	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○					組織痕
	800	1	28798 27907	Ⅲa	A1aイ	48.10	D － 19	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい赤褐	○	○	○			○		29494・組織痕・木葉痕
	801	5	？912	表採	A1aイ	－	－	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○		組織痕・木葉痕・葉脈痕
	802	218	31412 26697	Ⅲa	A1aイ	47.92	D － 20	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	○	○	○			○		
	803	214	25020	Ⅲa	A1aイ	48.12	D － 20	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○		
	804	110	3788	Ⅱ	A1aイ	47.41	C － 25	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○		
	805	215	7120	Ⅱ	A1aイ	47.80	D － 20	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	
第131図	806	206	3514	Ⅱ	A1aイ	47.96	C － 19	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	
	807	7	194	Ⅱ	A1aイ	0.00	C － 8	横ナデ	ヘラケズリ後ナデ胴部は縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○	○	○	木葉痕
	808	119	2699 2820	Ⅱ	A1aイ	47.70	C・D － 2226	ヘラミガキ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	袖部分は横ミガキその上は口縁方向への縦のミガキ・その切合い部分
	809	217	29287	Ⅲ	A1aイ	48.18	D － 19	丁寧なナデ・指頭圧痕	ナデ・工具痕	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	灰白色の粒子が底面に張付く
	810	131	15470	Ⅲa	A1aイ	48.17	E － 19	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒
	811	51	29220	Ⅲ	A1aイ	48.10	E － 20	ナデ	ヘラケズリ	橙	明赤褐	○	○	○			○	○	底部粗織痕・木葉痕・葉脈痕が一部あるのみ大きな圧痕の中に支葉痕がある
	812	172	31865	Ⅲa	A1aイ	48.37	B － 17	ナデ・摩滅	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	茶粒
	813	180	7247	Ⅲa	A1aイ	47.46	C － 3	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	
	814	129	15148	Ⅲa	A1aイ	48.45	D － 17	ナデ	ハケメ・ナデ・ヘラケズリ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	
	815	175	20924	Ⅲa	A1aイ	47.49	E － 23	ナデ・剥離	ナデ・剥離	橙	橙	○	○	○			○	○	
	816	81	2992	Ⅲa	A1aウ	47.63	C － 23	粗いヘラケズリ	ナデ	橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	(外)底部のまん中にヘラケズリ後を指でなでた後がある
	817	107	26580	Ⅲa	A1aウ	47.87	E － 20	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	外面にスス
	818	127	1854	Ⅲa	A1aウ	47.93	F － 27	剥離	ナデ	黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	
	819	157	2939	Ⅱ	A1bア	47.70	C － 23	ナデ	ナデ・指頭圧痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	
	820	92	19643	Ⅲa	A1bア	48.36	F － 18	ナデ	ハケ・ナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	内面剥離あり
	821	148	328	Ⅱ	A1bア	50.86	C － 8	ナデ	指ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	
第132図	822	97	28634	Ⅲa	A1bア	47.89	D － 22	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	内外面剥離あり
	823	158	4864	Ⅱ	A1bア	47.51	D － 24	剥離	ヘラナデ・指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○		
	824	155	4321 30942	Ⅲa	A1bア	47.69	C － 19	指頭圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	
	825	168	12371	Ⅱ	A1bア	47.33	D － 24	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○			○		
	826	59	25293	Ⅲa	A1bア	48.21	D － 19	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	褐灰	○	○	○			○	○	木葉痕
	827	105	1668	Ⅱ	A1bア	48.53	B － 17	ナデ・剥離	ケズリ後横ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○			○		
	828	220	29466	Ⅲa	A1bア	48.03	D － 19	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	明黄褐	橙	○	○	○			○		
	829	109	19303	Ⅲa	A1bア	46.86	F － 27	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○		
	830	187	なし	表採	A1bア	－	－	ナデ	ヘラケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○	○				○		
	831	144	4176	Ⅱ	A1bア	47.59	C － 23	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○				○		
	832	176	2192	Ⅱ	A1bア	47.67	D － 22	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄	○	○	○			○		
	833	60	4328	Ⅲa	A1bア	47.69	C － 19	ケズリ	ナデ	灰黄褐	明赤褐		○	○			○	○	組織痕
	834	67	18247	Ⅲa	A1bア	46.98	E － 28	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	木葉痕
	835	99	15675	Ⅲa	A1bア	48.26	D － 17	ナデ	ナデ	にぶい褐	褐灰	○	○	○			○		
	836	149	4698	Ⅱ	A1bア	47.33	C － 25	剥離	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○		
	837	223	なし	Ⅱ	A1bア	－	?C － 19	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄褐	オリーブ黒	○		○			○		黒色磨研(底)ヘラミガキ
	838	179	24115	Ⅲa	A1bア	48.39	C － 17	ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○		
	839	61	30056	Ⅲa	A1bア	48.30	C － 17	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○		木葉痕
	840	40	1909	Ⅲa	A1bア	47.93	D － 20	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	組織痕・木葉痕・葉脈
	841	87	7243	Ⅲa	A1bア	47.35	D － 24	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	○	○	○			○		
	842	177	3732	Ⅱ	A1bア	47.45	C － 24	ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○	
第133図	843	36	29108	Ⅲa	A1bア	47.81	E － 20	ケズリ・ナデ	ヘラケズリ後指ナデ(縦)	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	茶粒 組織痕・スス
	844	189	なし	表採	A1bア	－	－	ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄橙	橙		○	○			○	○	スス
	845	95	13334	Ⅲb	A1bア	47.41	E － 22	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○			○	○	
	845	95	13120	Ⅲb	A1bア	47.44	D － 22	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○			○	○	
	846	64	11830	Ⅲ	A1bア	47.70	C － 19	ケズリ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	木葉痕
	847	120	3927	Ⅱ	A1bウ	47.60	D － 23	ナデ・剥離	ナデ・ヘラケズリ	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	
	848	90	29619	Ⅲa	A1bウ	48.19	D － 18	剥離	ナデ	褐	にぶい赤褐	○	○	○			○	○	
	849	185	3408 24913	Ⅲa	A1bウ	47.85	E － 19	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○			○	○	25457,2750,29937,31165,29390,　15310・モミ痕
	850	186	3790 3789	Ⅱ	A2cア	47.40	C － 25	指頭圧痕・指ナデ	指頭圧痕後ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○			○	○	2337
	851	12	23000	Ⅲa	A2cア	46.93	E － 26	丁寧なナデ	ヘラケズリ後横ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	組織痕・木葉・葉脈
	852	173	6402	Ⅱ	A2cア	49.72	D － 15	ナデ	ヘラケズリ・指頭圧痕	明赤褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	
	853	102	1446	Ⅱ	A2cア	48.94	B － 15	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	
	854	143	23385	Ⅲa	A2cア	46.86	F － 27	ナデ	ナデ	黄褐	明黄褐	○	○	○			○	○	
	855	94	24330	Ⅲa	A2cア	48.32	C － 17	ナデ	ハケメ後ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○	
	856	141	14320	Ⅲa	A2cア	48.22	E － 19	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐	○	○	○			○	○	
	857	162	6716	Ⅱ	A2cア	49.21	D － 14	ナデ	ナデ	黒褐	橙	○	○	○			○	○	
	858	108	22814	Ⅲa	A2cア	47.09	F － 26	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	
	859	86	3472	Ⅱ	A2cア	47.72	C － 21	ナデ	ナデ・ヘラケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	
	860	10	3757	Ⅱ	A2cア	47.46	C － 24	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	○	○	○			○	○	木葉痕
	861	15	14422	Ⅲa	A2cア	48.31	F － 18	ケズリ・ナデ	ヘラケズリ後横ナデ	灰黄橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	組織痕・木葉痕・葉脈・ナデ
第134図	862	16	なし	表採	A2cア	－	－	剥離・ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄褐	明褐	○	○	○			○	○	組織痕・木葉痕
	863	26	2189	Ⅱ	A2cア	47.76	C － 22	剥離	ヘラケズリ後ナデ	明赤褐	橙	○	○	○			○	○	木葉痕
	864	38	2030	Ⅱ	A2cア	47.86	C － 21	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○	組織痕・木葉痕・葉脈(太)・布痕

第36表　弥生時代の土器底部観察表３

挿図番号	遺物番号	実測番号	注記番号	層位	分類	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	その他	備考
第134図	865	164	210	Ⅱ	A2cア	50.99	C － 8	ナデ	ナデ後ヘラケズリ	にぶい橙	橙	○		○		○	○	茶粒黒曜石	スタンプ痕
	866	138	2760	Ⅲa	A2cア	47.66	F － 29	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○		
	867	160	31221	Ⅲa	A2cア	48.07	E － 20	ケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	○			
	868	140	4339	Ⅲa	A2cア	47.69	C － 19	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐	○	○			○			
	869	174	18802	Ⅲa	A2cア	48.53	E － 17	ナデ	ヘラナデ	にぶい黄	橙	○	○			○	○		圧痕
	870	6	3449 4119	Ⅱ	A2cア	47.69	C － 21	ナデ	ナデ	明赤褐	褐灰	○	○	○		○	○		木葉痕
	871	32	2725	Ⅱ	A2cア	47.45	D － 26	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○			木葉痕
	872	163	2319	Ⅱ	A2cア	47.57	C － 24	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○			
	873	184	320	Ⅱ	A2cア	50.87	C － 8	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		○			
	874	169	5945	Ⅲa	A2cア	49.42	C － 14	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		○	○		
	875	37	なし	表採	A2cア	－	－	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○		○			組織痕・木葉痕・葉脈
	876	9	6067	Ⅱ	A2cア	49.49	D － 21	ナデ・ヘラケズリ後ナデ指頭圧痕	ナデ(横方向)	褐	赤褐	○	○	○		○	○		木葉痕・葉脈痕
	877	124	11506	Ⅲa	A2cア	48.36	E － 18	ナデ	ケズリ後ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○		○			組織痕
	878	139	25947	Ⅲa	A2cア	48.17	D － 19	ヘラケズリ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	橙	橙	○	○	○		○			
	879	147	5245	Ⅱ	A2cア	47.87	C － 19	ハケメ・ナデ	工具ナデ・指ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○		○			
	880	116	29428	Ⅲa	A2cア	47.96	E － 19	ヘラケズリ・ヘラナデ	ヘラケズリ・ナデ	にぶい黄	にぶい橙	○	○	○		○			
	881	114	3186	Ⅱ	A2cア	47.75	C － 21	剥離	ケズリ・ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		○	○		
	882	45	4527	Ⅱ	A2cア	47.67	D － 22	ナデ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		○			組織痕
	883	39	29296	Ⅲ	A2cア	48.23	D － 19	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○		○			木葉痕底辺が不安定で点で支え得てる
第135図	884	56	なし	表採	A2cア	－	― ―	ナデ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○	○		○	○		組織痕・綱代痕
	885	100	2087	Ⅱ	A2cア	47.80	C － 21	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		○			
	886	183	4083	Ⅱ	A2cア	47.62	D － 22	ナデ	ヘラケズリ後・指頭圧痕	黄橙	明黄褐	○	○			○			
	887	101	6073	Ⅱ	A2cア	49.48	D － 21	ヘラナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐		○	○		○	○		木葉痕・凹線文
	888	17	7113	Ⅱ	A2cア	47.83	D － 20	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	褐灰	にぶい赤褐	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕・葉脈
	889	49	14391	Ⅲa	A2cア	48.31	F － 19	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○			底部木葉痕
	890	63	4534	Ⅱ	A2cア	47.78	D － 22	ナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○	○		○	○		(外)底部木葉痕
	891	33	2057	Ⅱ	A2cア	47.85	C － 21	ヘラナデ	ヘラケズリ後横ナデ	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○		○	○		木葉痕・組織痕
	892	35	27605	Ⅲa	A2cア	47.92	D － 20	ナデ	ケズリ後ナデ	褐	赤褐	○	○	○		○	○		木葉痕・組織痕
	893	128	2947	Ⅱ	A3cア	47.81	D － 22	ケズリ・ナデ	ナデ	にぶい橙	明赤褐	○	○	○		○	○		圧痕
	894	153	18967	Ⅲa	A3cア	48.57	E － 17	ナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		○			
	895	123	3748,3779	Ⅱ	A3cア	47.47	C － 24	ヘラナデ	ヘラナデ・ケズリ	橙	橙	○	○	○		○			
	896	132	29297	Ⅲ	A3cア	48.25	D － 19	剥離	ヘラケズリ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		○			(底)ケズリ状のミガキヘラケズリ
	897	211	18448	Ⅲa	A3cア	47.09	E － 16	剥離	ナデ	橙	橙	○	○	○		○	○		
	898	19	4870	Ⅱ	A3cア	47.51	D － 24	ナデ	ヘラケズリ後横ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	899	125	3280	Ⅱ	A3cア	48.04	C － 19	剥離	ヘラナデ	明褐	にぶい橙	○	○			○			茶色の顔料が付着
	900	66	31578	Ⅲa	A3cア	47.80	D － 19	ナデ	ナデ・ハケメ	灰黄褐	明赤褐		○	○		○	○		木葉痕
第136図	901	41	5030	Ⅱ	A3cア	47.44	C － 23	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・ナデ	黒褐	褐		○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	902	122	19769	Ⅲb	A3cア	47.10	D － 23	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	橙	にぶい黄褐	○	○	○		○	○		
	903	74	なし	表採	A3cア	－	－	ミガキ	ハケメ・ヘラナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○	○		○		組織痕
	904	8	27272 5323	Ⅲa	A3cア	48.09	D － 19	ナデ・ヘラナデ	ヘラケズリ後・ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○		○	○		組織痕・木葉痕明瞭な葉脈痕
	905	48	29586	Ⅲa	A3cア	48.09	D － 19	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ・ナデ	灰褐	明褐	○	○	○	○		○		組織痕
	906	136	18718	Ⅲa	A3cア	48.45	E － 18	ヘラナデ・指ナデ	ヘラケズリ・指ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○			
	907	2	17057	Ⅲa	A3cア	46.66	F,G － 29,28	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	橙	明黄褐	○	○	○	○		○		組織痕・木葉痕・剥離がまだらに入る。一部底部縁部にヘラによる欠き取りあり
	908	52	27814	Ⅲa	A3cア	47.92	D － 20	ナデ	ヘラケズリ後・ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	○		組織痕
	909	42	1745	Ⅱ	A3cア	48.60	C － 16	ヘラケズリ	ヘラケズリ後横ナデ	明赤褐	にぶい褐		○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	910	224	12905	Ⅲa	A3cア	47.37	C － 26	ヘラミガキ・摩滅	ナデ	黄褐	黄褐	○	○	○		○	○		
	911	27	14661	Ⅲa	A3cア	48.20	E － 19	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	橙	にぶい赤褐	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	912	54	5604	Ⅱ	A3cア	48.47	B － 16	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	明赤褐	橙	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	913	28	11280	Ⅲa	A3cア	48.74	D － 17	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	914	115	30786 30778	Ⅲa	A3cア	48.03	E － 20	ナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○		○			7139,7140・組織痕
	915	75	988	Ⅲ	A3cア	48.67	B － 16	ヘラナデ	ヘラケズリ後ナデ	暗灰黄	明褐	○	○	○		○	○		木葉痕(外)凹線
	916	152	23213 23376	Ⅲa	A3cア	46.84	F － 27	剥離	ケズリ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	○		
	917	20	11387	Ⅲa	A3cア	48.53	D － 17	ナデ・剥離	ヘラケズリ・ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	918	57	10	Ⅲa	A3cア	50.69	C － 8	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい赤褐	橙	○	○	○		○			組織痕
	919	72	1089	Ⅱ	A3cイ	48.62	C － 17	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○		○			木葉痕・剥離が多い
第137図	920	29	2108	Ⅱ	A3cア	47.75	C － 21	ナデ	ヘラケズリ	赤褐	橙		○	○		○			組織痕
	921	171	2911	Ⅱ	A3cア	47.94	E － 21	ナデ	ナデ	赤黄褐	橙		○	○		○			
	922	13	一括	表採	A3cア	－	－	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕・葉脈
	923	44	2602	Ⅱ	A3cア	47.70	C － 21	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕
	924	46	19147	Ⅲa	A3cア	49.22	D － 15	ナデ	ヘラケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕・外壁は斑点状に剥離が見られる
	925	113	17521	Ⅲb	A3cア	47.86	E － 19	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○		○			
	926	43	19180	Ⅲa	A3cア	48.79	E － 16	丁寧なナデ	ヘラナデ	オリーブ褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	○		木葉痕
	927	135	10641	Ⅱ	A3cイ	47.81	C － 20	ケズリ後ナデ	ケズリ	橙	橙	○	○			○	○		
	928	24	なし	表採	A3cイ	－	― ―	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	○	○	○		○	○		組織痕・木葉痕・葉脈
	929	167	19874	Ⅲb	A3cイ	46.65	F － 28	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○		○	○		
	930	133	14485	Ⅲ	A3cイ	48.19	E － 19	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○		○			摩耗が多い
	931	130	2811	Ⅱ	A3cイ	47.61	D － 26	ナデ・剥離	ヘラナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	○	○			○			

第37表　弥生時代の土器底部観察表４

挿図番号	遺物番号	実測番号	注記番号	層位	分類	標高	出土区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	その他	備考
第137図	932	182	17348	Ⅲb	A3cイ	47.28	C － 24	剥離	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○			○			
	933	104	5374	Ⅱ	A3cイ	47.70	D － 21	ケズリ・ナデ・剥離	ヘラケズリ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		
	934	31	17526	Ⅲb	A3cイ	48.09	E － 19	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○	茶粒	組織痕・葉脈痕
	935	53	8523	Ⅲ	A3cイ	47.60	C － 15	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○			木葉痕
	936	96	4942	Ⅱ	A3cイ	47.53	D － 24	ナデ	ナデ	橙	明赤褐	○	○	○			○			
	937	23	3917	Ⅲ	A3cイ	47.57	D － 23	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい褐	赤褐	○	○	○			○	○		組織痕・木葉痕
	938	70	3979	Ⅱ	A3cイ	47.58	D － 23	ケズリ	ヘラケズリ・貝殻状痕・ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○			○			木葉痕・(外)ヘラ状工具による横位の凹線文・斜位の沈線文
第138図	939	14	25182	Ⅲa	A3cイ	48.18	D － 19	剥離	ヘラケズリ	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○	茶粒	組織痕
	940	117	31511	Ⅲb	A3cイ	48.05	B － 17	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		
	941	161	5128	Ⅱ	A3cイ	47.82	D － 19	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	暗灰褐	○	○	○			○	○		
	942	121	2941	Ⅱ	A3cイ	47.70	D － 22	ナデ・剥離	ヘラケズリ・ナデ	明赤褐	橙		○	○			○	○		
	943	137	6063	Ⅱ	A3cイ	49.45	D － 21	ナデ	ナデ	黄褐	浅黄	○	○	○			○	○		
	944	88	20402	Ⅲc	A3cイ	47.89	C － 21	ナデ・剥離	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		
	945	151	32298	Ⅲa	A3cイ	46.74	E － 26	工具ナデ	工具ナデ	黄褐	橙	○	○	○			○	○		
	946	106	5368	Ⅱ	A3cア	47.69	D － 22?	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙		○	○			○	○		
	947	18	2840	Ⅱ	不明	47.76	D － 22	指頭圧痕	ヘラケズリ後指ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			○	○		木葉痕
	948	71	4450	Ⅱ	不明	47.58	C － 19	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	褐灰	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		組織痕
	949	65	30859	Ⅲa	不明	47.96	D － 19	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	黄褐	○	○	○			○			木葉痕
	950	62	21659	Ⅲa	不明	47.36	D － 23	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黄橙	○	○	○			○	○		木葉痕
	951	58	22934	Ⅲa	不明	47.00	E － 26	ヘラケズリ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○			木葉痕
	952	22	14316	Ⅲa	不明	48.17	E － 19	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		組織痕・木葉痕・摩耗剥離多し
第139図	953	194	2187	Ⅱ	B1aア	4771.00	C － 21	剥離	ハケメ	浅黄	橙		○	○			○			
	954	195	2771	Ⅱ	B1aア	47.61	D － 26	剥離	ヘラミガキ	にぶい褐	にぶい橙		○	○			○	○		
	955	200	30285	Ⅲa	B1aア	47.80	D － 20.16	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○			○			ススス付着
	956	203	10882	Ⅲa	B1aア	48.87	D － 16	ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ・ナデ	明赤褐	橙		○	○			○			
	957	190	なし	表採	B1aア	－	－	ナデ・剥離	ナデ	橙	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		ススス付着
	958	225	なし	表採	B1aア	－	－	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		ススス付着
	959	98	5930	Ⅱ	B1aア	49.60	C － 14	剥離	ハケメ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○			
	960	199	15812	Ⅲa	B1aア	48.17	D － 18	ナデ・剥離	ヘラケズリ後ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			○			浅鉢の可能性を有する
	961	111	2984	Ⅱ	B1aア	47.72	C － 23	剥離	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○			○			
	962	191	4085	Ⅱ	B1aア	47.62	D － 22	剥離	ミガキ	灰黄	灰黄	○	○	○			○	○		貝殻条痕・ケズリ・千河原式の可能性あり
	963	198	2465	Ⅱ	B1aア	47.26	D － 28	剥離	ヘラケズリ	黒褐	明褐		○	○			○			
	964	150	1721	Ⅱ	B1aア	48.58	C － 17	ナデ・剥離	ヘラケズリ・指頭圧痕	にぶい黄橙	明褐		○	○			○	○		
	965	93	17800	Ⅲa	B1aア	47.09	F － 28	ケズリ後ナデ・剥離	ナデ	灰褐	橙		○	○			○	○		
	966	202	なし	表採	B1aア	－	－	ナデ・ヘラケズリ・剥離	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○			○			赤片岩の粒子ガ最大5㎜多い
	967	192	16540 5363	Ⅲb	B1aウ	47.55	E － 18	剥離	ヘラ？	褐灰	にぶい褐		○	○			○			丹塗り
	968	78	15232	Ⅲa	B1aウ	48.26	D － 18	剥離	ナデ	明黄褐	浅黄橙		○	○			○			
	969	80	4026	Ⅲ	B1aウ	47.58	C － 23	ヘラケズリ後丁寧なナデ	ヘラケズリ後粗いナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○			3～4㎜大の粒子ガ多い
	970	227	18066 3108	Ⅲa	B1aウ	46.81	F － 28	剥離	ナデ	明褐	にぶい褐	○	○	○			○			丹塗り
	971	82	4851	Ⅱ	B1aウ	47.43	C － 23	ナデ・剥離	ナデ・剥離	橙	にぶい赤褐		○	○			○			
	972	226	19925	Ⅲa	B1aウ	47.70	C － 21	剥離	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙		○	○			○			丹塗り
	973	193	5398	Ⅱ	B1aウ	47.55	D － 23	剥離	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙		○	○			○			丹塗り・1cm大の安山岩粒子
	974	79	13145	Ⅲa	B1aウ	47.55	E － 23	剥離	ケズリ・ナデ	暗灰黄	明黄褐		○	○			○	○		
	975	76	4907	Ⅱ	B1aウ	0.00	D － 24	剥離	ケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	976	4	5351	Ⅱ	B1aウ	47.76	D － 21	ナデ	ナデ	にぶい黄	褐灰		○				○	○		底部表組織痕・木葉痕・剥離多し
第140図	977	181	239	Ⅱ	B1bア	50.94	C － 8	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		
	978	3	なし	表採	B1bア	－	― －	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○			○	○		組織痕・木葉痕
	979	197	2898	Ⅱ	B1bア	47.83	E － 21	ヘラミガキ・剥離	ヘラミガキ	灰	淡黄	○	○	○			○	○		胎土は微細な粘土を使用しているのか混和材も小粒
	980	85	14732	Ⅲa	B1bア	48.23	E － 19	ヘラケズリ	指頭圧痕・指ナデ	橙	浅黄橙	○	○	○			○	○	茶粒	石英の粒子が大きい0.5～2㎜
	981	89	2889	Ⅱ	B1bア	47.76	D － 21	ヘラケズリ	丁寧なヘラケズリ	橙	橙	○	○	○			○	○		粗粒の長石4～3㎜・底部に植物遺体の痕跡
	982	204	19947	Ⅲa	B1bア	47.63	C － 21	ヘラミガキ・ヘラケズリ・剥離	ヘラケズリ	灰白	淡黄	○	○	○			○	○		
	983	ピンク196	なし	表採	B1bア	－	－	ヘラケズリ	(胴部)ミガキ(脚)ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		充実高台
	984	154	2758	Ⅱ	B1bア	47.62	D － 26	剥離	ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○		
	985	103	18599	Ⅲa	B1bア	47.10	G － 27	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
	986	156	4239	Ⅱ	B1bア	47.37	C － 23	ヘラミガキ・剥離	ヘラミガキ・剥離	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		
	987	84	2054	Ⅱ	B1bウ	47.85	C － 21	ヘラケズリ・ナデ	ナデ・ヘラケズリ	暗灰黄	橙		○	○			○	○		
	988	34	6173	Ⅱ	B1bウ	47.68	D － 21	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい赤褐	橙		○	○			○	○		組織痕・木葉痕
	989	30	なし	表採	B1bウ	－	－	ヘラナデ後ミガキ	ヘラナデ	黒褐	灰黄褐		○	○			○			組織痕・木葉痕
	990	11	18999 19000	Ⅲa	B1bウ	48.80	E － 16	ヘラミガキ・剥離	ヘラケズリ後ナデ(横)ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			○	○		組織痕・木葉痕・ケズリ後ミガキ、ナデ消している
	991	205	26770	Ⅲa	B1bウ	48.00	D － 20	剥離	ヘラナデ・ヘラミガキ	橙	にぶい橙		○	○			○	○		
	992	ピンク194	28584	Ⅱ、Ⅲa	その他	47.95	D － 20	ナデ・剥離	ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○		
	993	142	563	Ⅲ	その他	50.73	C － 7	ヘラケズリ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○			○	○		
	994	196	4095	Ⅱ	その他	47.65	D － 22	ヘラミガキ	ヘラケズリ	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○			○	○		黒色磨研
	995	ピンク191	14091	Ⅲa	その他	48.37	B － 17	ナデ・剥離	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			○	○		底部はケズリ

・ **その他**（第140図　993～995）

994は充実脚台を持ち，器壁側面にハケメを持つ入来式土器の底部である。992・993・995は，底部底面の器壁の厚い土器である。

⑵ 弥生時代の出土石器

縄文時代出土石器と同様，層位による石器の分類が困難なため，縄文時代晩期と想定される石器を含め，弥生時代及び古墳時代，器種によっては古代・中世まで使用が確認される石器については，本稿で扱うこととした。

磨製石斧（第167図・168図　1206～1224）

磨製石斧は破損品を含め，出土した24点中19点を図化した。

磨製石斧は木を切り倒したり，木材を加工したりする道具と思われるが，時には狩猟により確保した動物を，解体及び調理する際に骨を断ち割る道具としての使用も考えられる。本遺跡では肉厚で重量があり，刃部が蛤の形を呈している大型蛤刃石斧や小型の蛤刃石斧が多い。横斧と思われるものも一点出土している。また，刃部付近で破損したものが多く出土している。

1206は安山岩製で全体を丁寧に研磨し，形を整えている。大型の磨製石斧である。刃部には対象物への打撃によると思われる刃こぼれが，多く見られる。基部には二次使用による敲打痕が確認でき，敲打による剥離が生じている。1207は薄手の頁岩製の石斧で，接合資料である。基部には装着による摩滅が残り，木の柄等に装着して使用したと思われる。1208は全体を丁寧に研磨調整した頁岩製である。擦痕が多く残される。細身で全体的に楕円形状である。基部先端には敲打痕が見られるため，破損後再利用されたと思われる。1209は敲打による成形調整を行った安山岩製の磨製石斧である。打撃によると想定される刃部の欠けが見られる。また刃部先端及び基部に敲打痕が確認でき，二次的利用があったものと思われる。1210は中心付近で破損している接合資料である。刃部の状況から，使用頻度は高くなかったものと思われる。1211は短形の石斧である。基部付近の破損により，敲打具としての再利用が想定される。敲打による調整の後，刃部を丁寧に研磨してある。1212・1213は基部幅が狭く刃部に向かうに従って幅広になる磨製石斧である。1214は頁岩製で，刃部に丁寧な研磨が施されている。1215は表裏が非対照的で，刃部には反りが生じ，横斧としての使用が想定される。1216は頁岩製の破損品である。扁平で薄い形状をしており，刃部は直線状に加工されており，先端に丁寧な調整痕が確認できる。1217は頁岩製である。縁辺部の使用痕から点破損した円形扁平な破片をスクレイパーとして再利用したようである。1218～1221は磨製石斧の破損品である。いずれも刃部及び刃部付近での破損である。

1222～1224は頁岩製の柱状片刃石斧である。弥生時代に木の加工に使われた磨製石斧の一つで，手斧の役目をしたと思われる。石斧の基部断面が長方形をしているので，この呼び方をしている。木材の細かな部分の加工に使ったと考えられる。1222と1223は刃部付近で接合した。1224の石材も同一と考えられ，同一個体の可能性が高い。

打製石斧（第145図～第166図）

出土遺物中最多の出土数になる。破損品を含め483点が出土した。完形品と思われるものを含め，基部・胴部・刃部の形態がある程度認識できる215点を図化した。ここでは便宜的に，形状により４類に分類した。

Ⅰ類

基部幅に比して刃部幅が広く，二側縁に明瞭な肩を有し，いわゆる有肩打製石斧である。概ね刃部幅が７㎝以上とした。更に刃部が円形に近いものをⅠa類，刃部が三角形状で片側に偏っているものをⅠb類とした。

Ⅱ類

有肩打製石斧に類するが素材厚が薄く，意図的に小型のものを作ったと推測されるもの。

Ⅲ類

刃部幅が狭く抉り部分が比較的浅いもの，全体的に細身のもの。更に，刃部先端が尖っているものをⅢa類，平坦になっているものⅢb類とした。

Ⅳ類

装着部に抉りが無く，短冊形を呈するもの。

Ⅰ類（第145図～第149図　996～1035）

996や998は刃部に使用による剥離が認められるものの，特に大型で装着による紐擦れ痕や摩滅が認められないため，原型に近い形と思われる。999・1000は抉れている装着部及び基部上面に，紐擦れ痕や摩滅が著しく残る。1004～1011はⅠbに分類した。基部形状等Ⅰaに類似するが，刃部片側に著しい使用痕が見られる。斜めに振り下ろす作業に使用したため，片方が減ったと思われる。また装着面や作業部位から検証すると，左右いずれかが使用により減っていることがわかる。利き手との関係があると考えられる。1022・1024・1026・1027は大型のものと同程度の厚みがあり，相当の使用痕が認められるため，Ⅰ類の最終形態と考えられる。表面にも多くの摩滅が認められる。1012・1014は接合資料である。

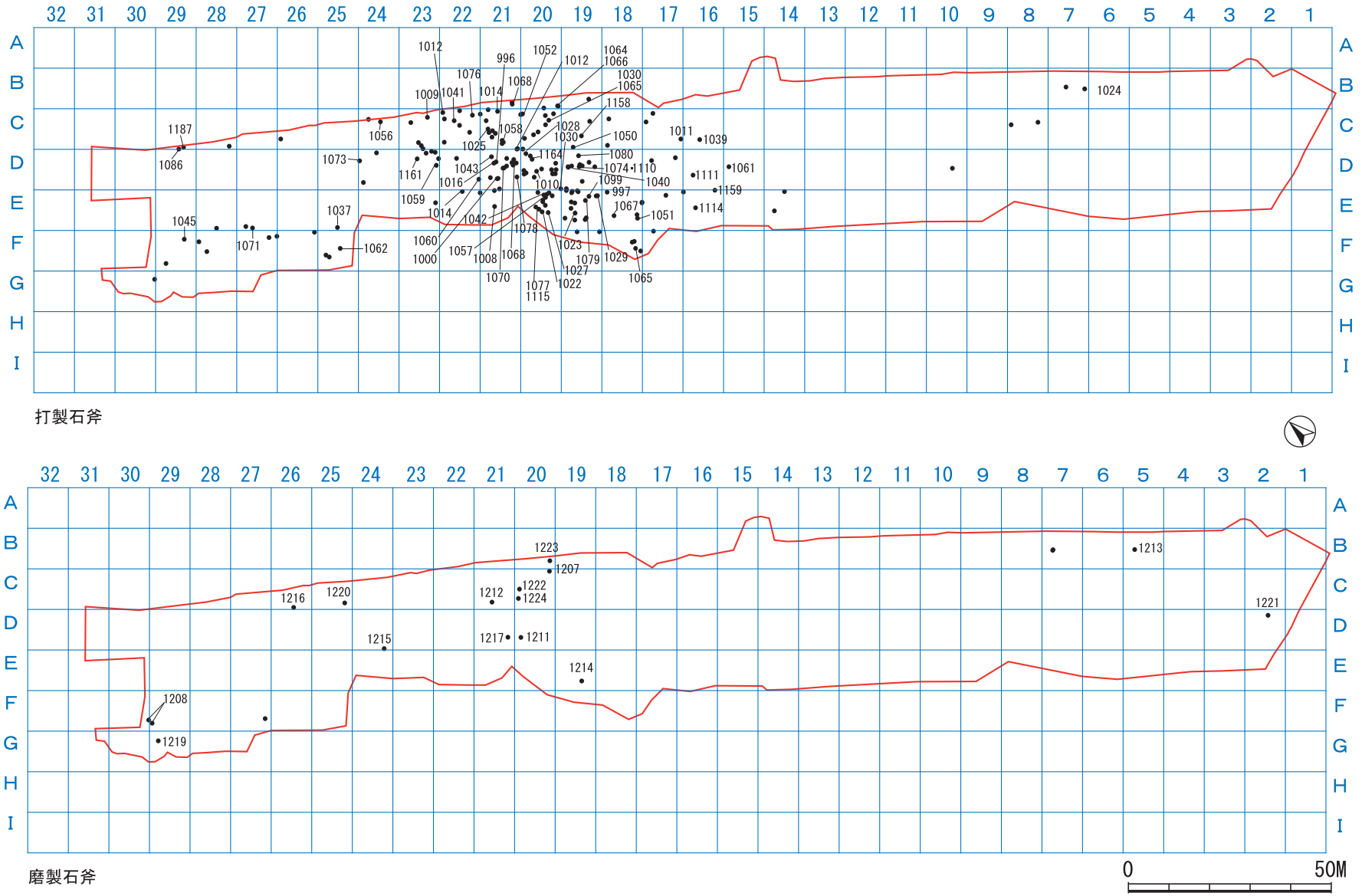
石材は，頁岩（1000・1032・1034）安山岩（996～999・1001～1031・1033・1035）Ⅰ類の石材比率は安山岩93％，頁岩７％である。

Ⅱ類（第149図～第150図　1036～1040）

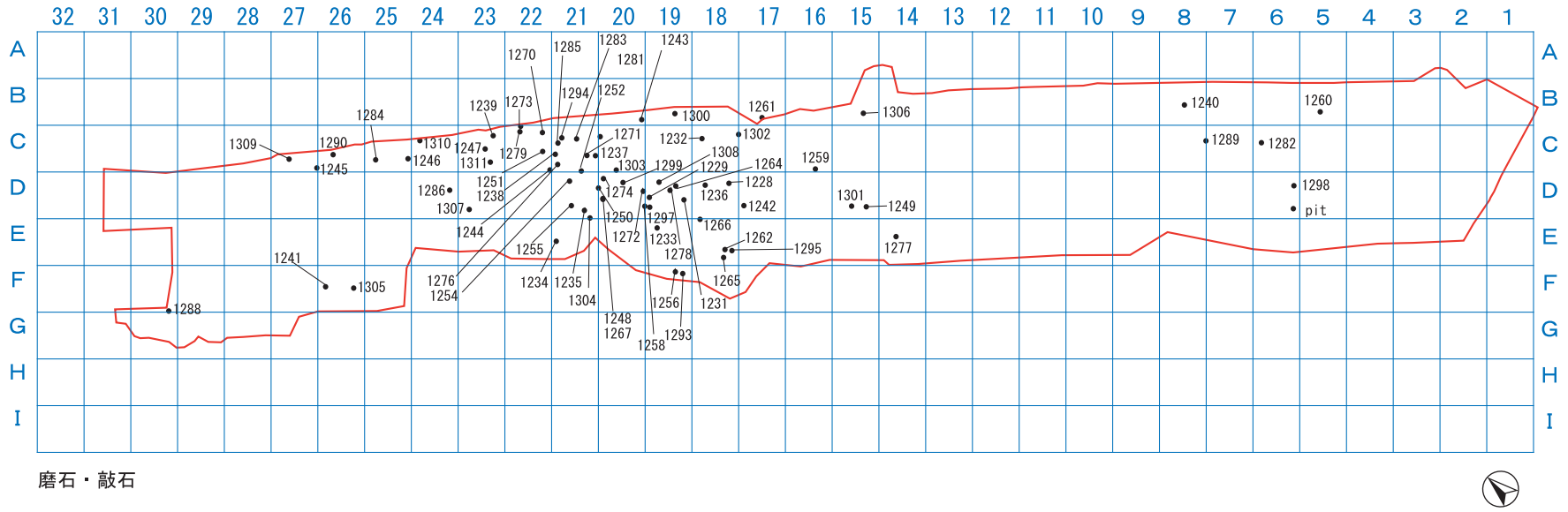
Ⅰ類の最終形態と形状は類似しているが，薄い剥片を利用している。薄く大きな素材を使用した場合，作業時の一定方向からの加圧により，使用初期段階で破損してしまう可能性が大きいものと考えられる。素材剥片から石鏃を製作する際に厚い剥片は大型に，薄い剥片は最初から小型に意図的に作成した可能性もある。素材に応じて作り分けたか，それに応じて使用目的が異なっていたかは，今後の検討課題である。石材は，全て安山岩に類似する。

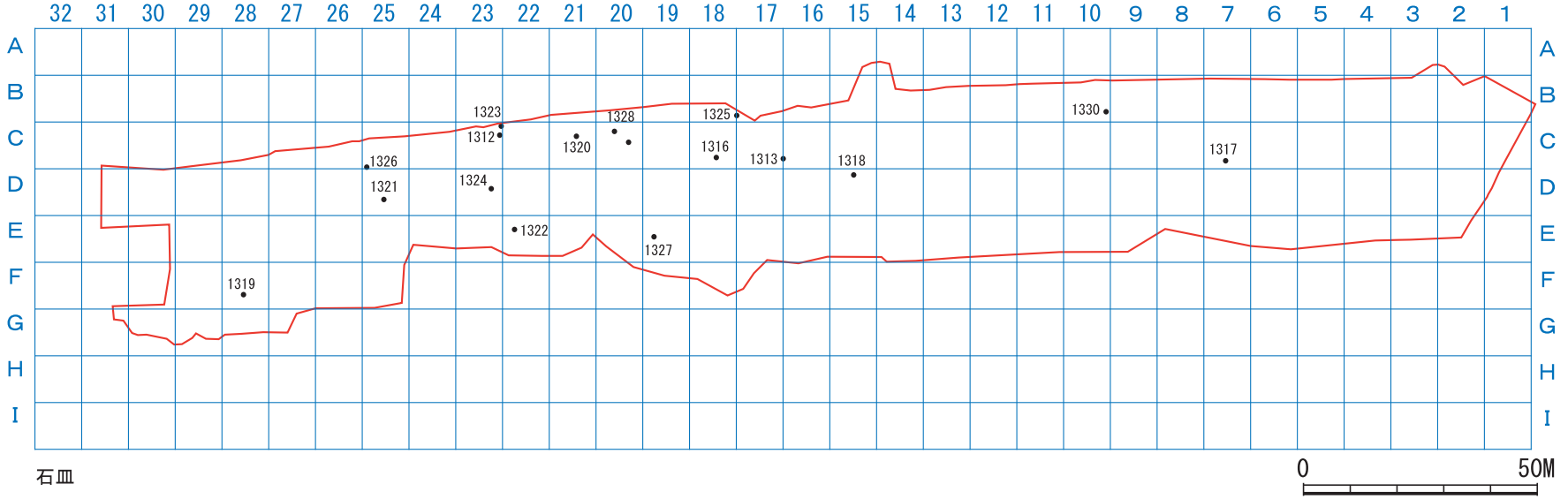
Ⅲ類（第150図～第153図　1041～1069）

刃部の抉りが小さく全体的に細身である。刃部先端が比較的平坦なものをⅢa類1041～1058に，

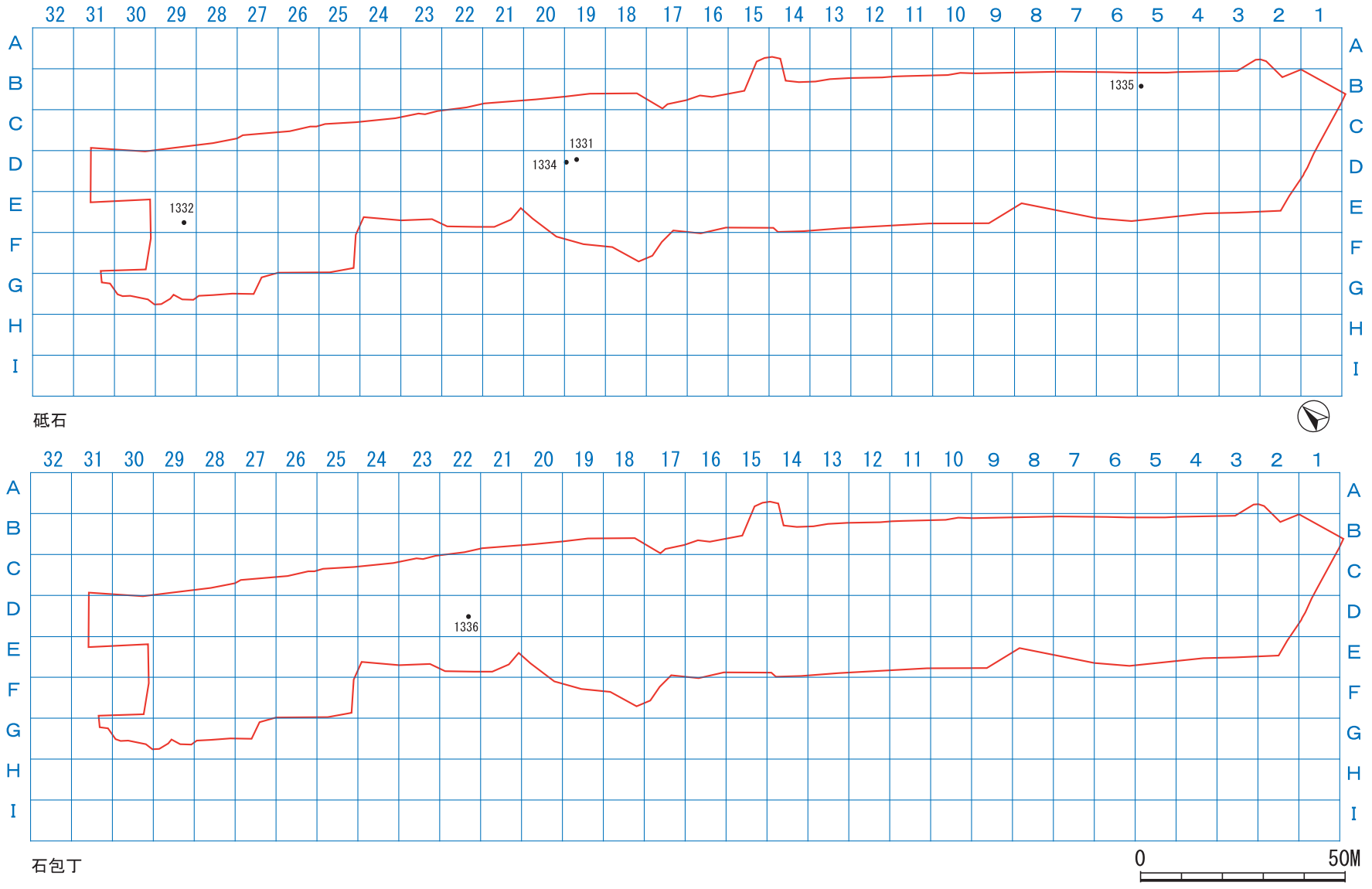


第141図　弥生時代の石器出土分布図　1・2

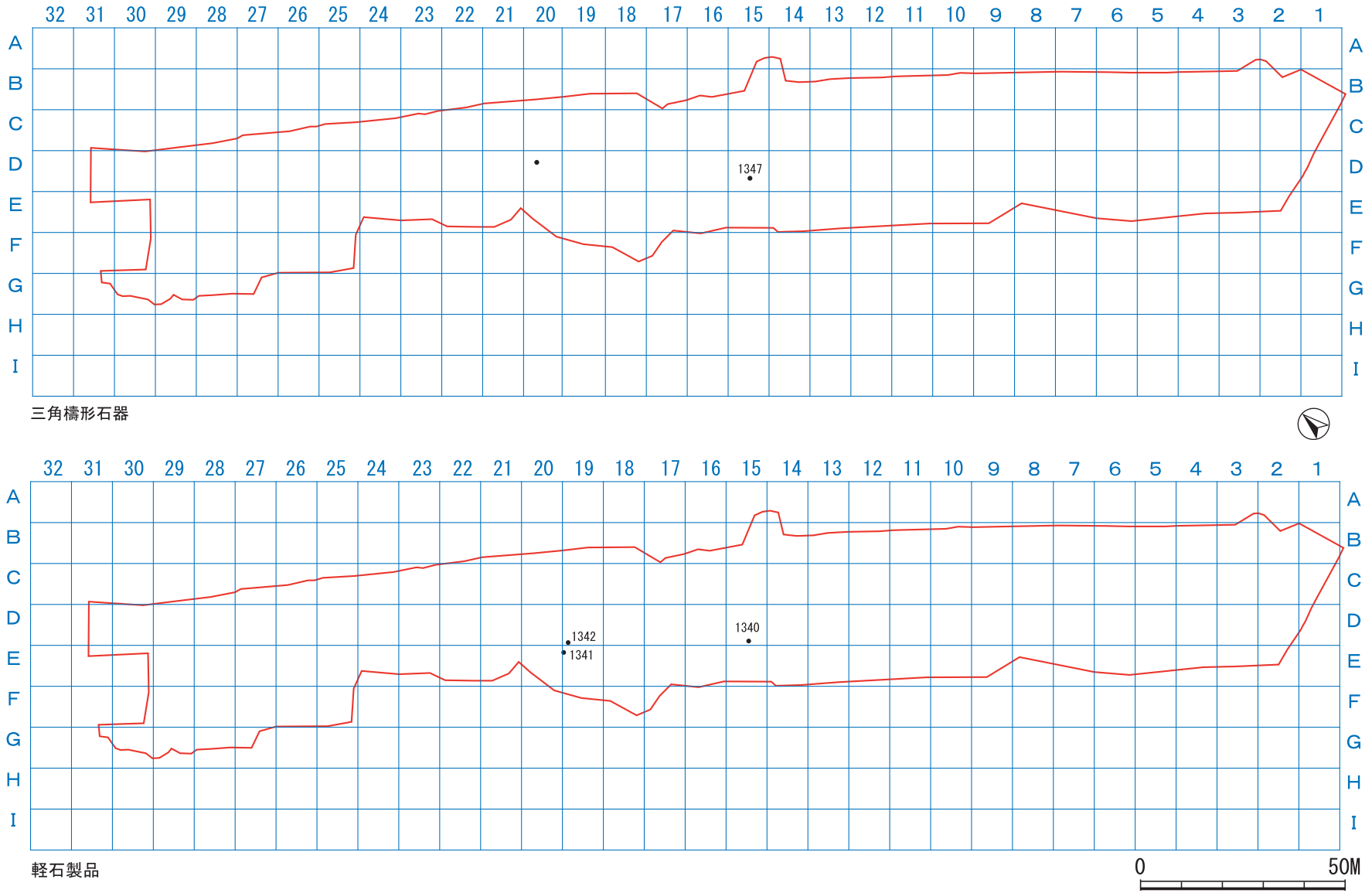




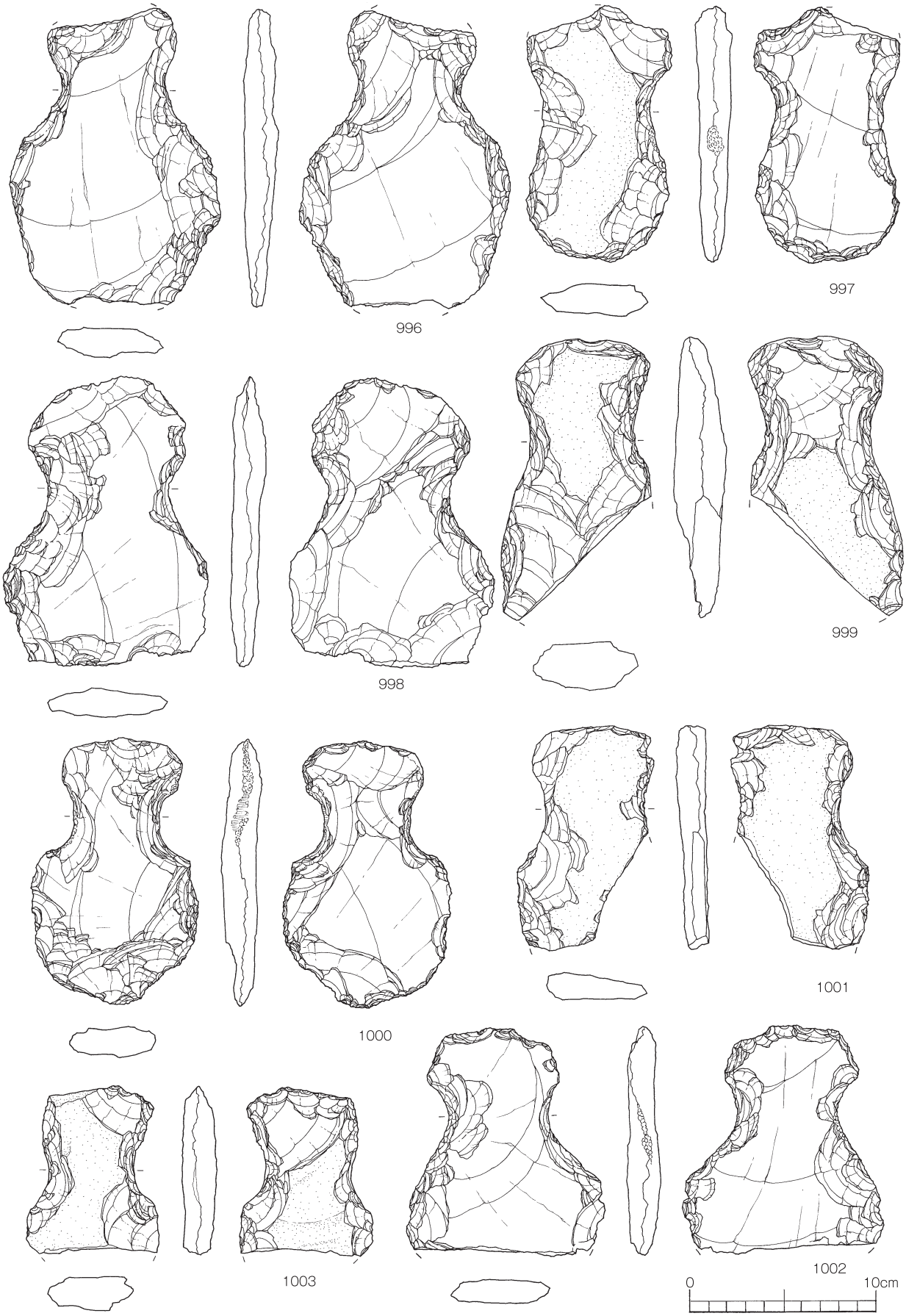
第142図　弥生時代の石器出土分布図　３・４



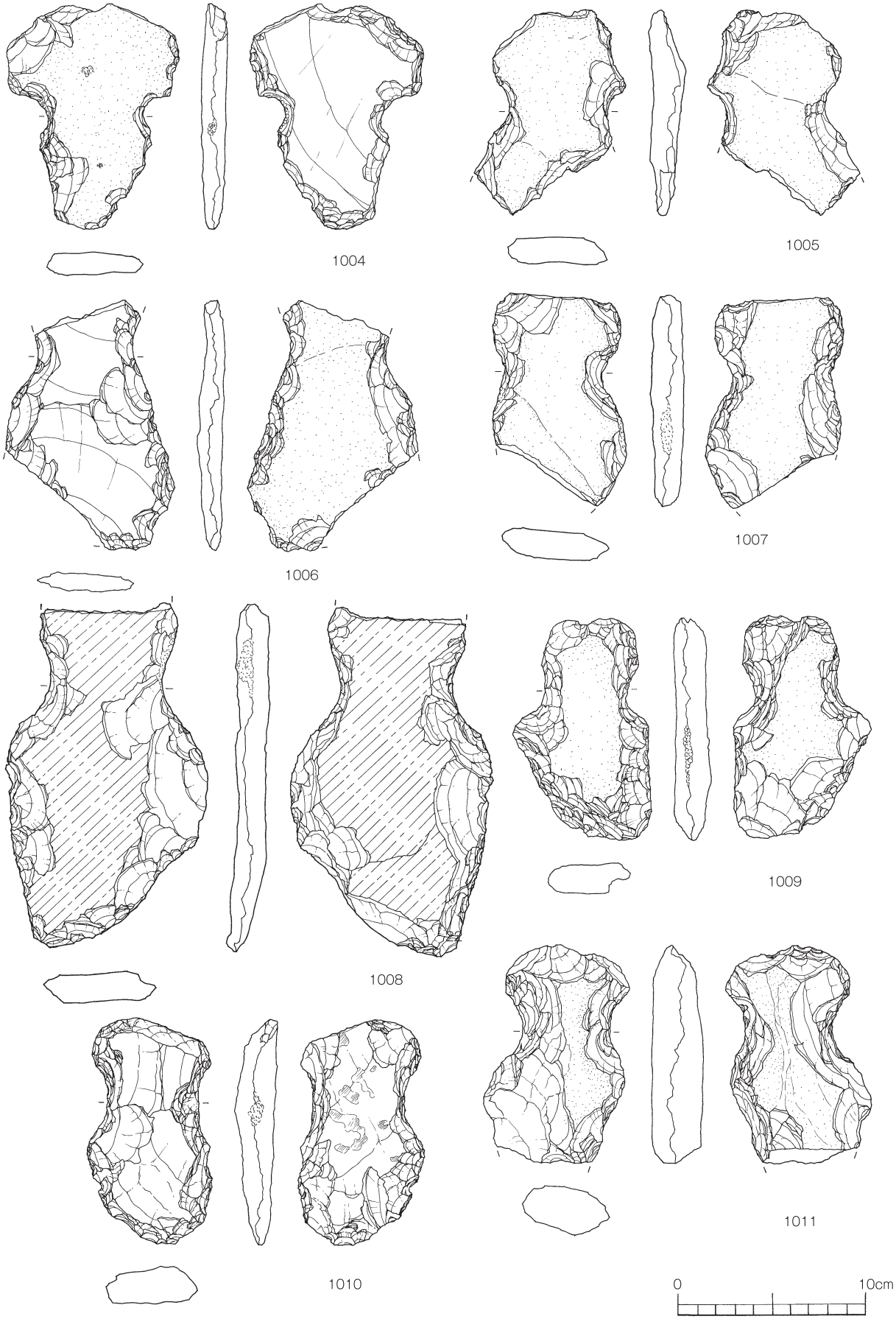
第143図　弥生時代の石器出土分布図　５・６



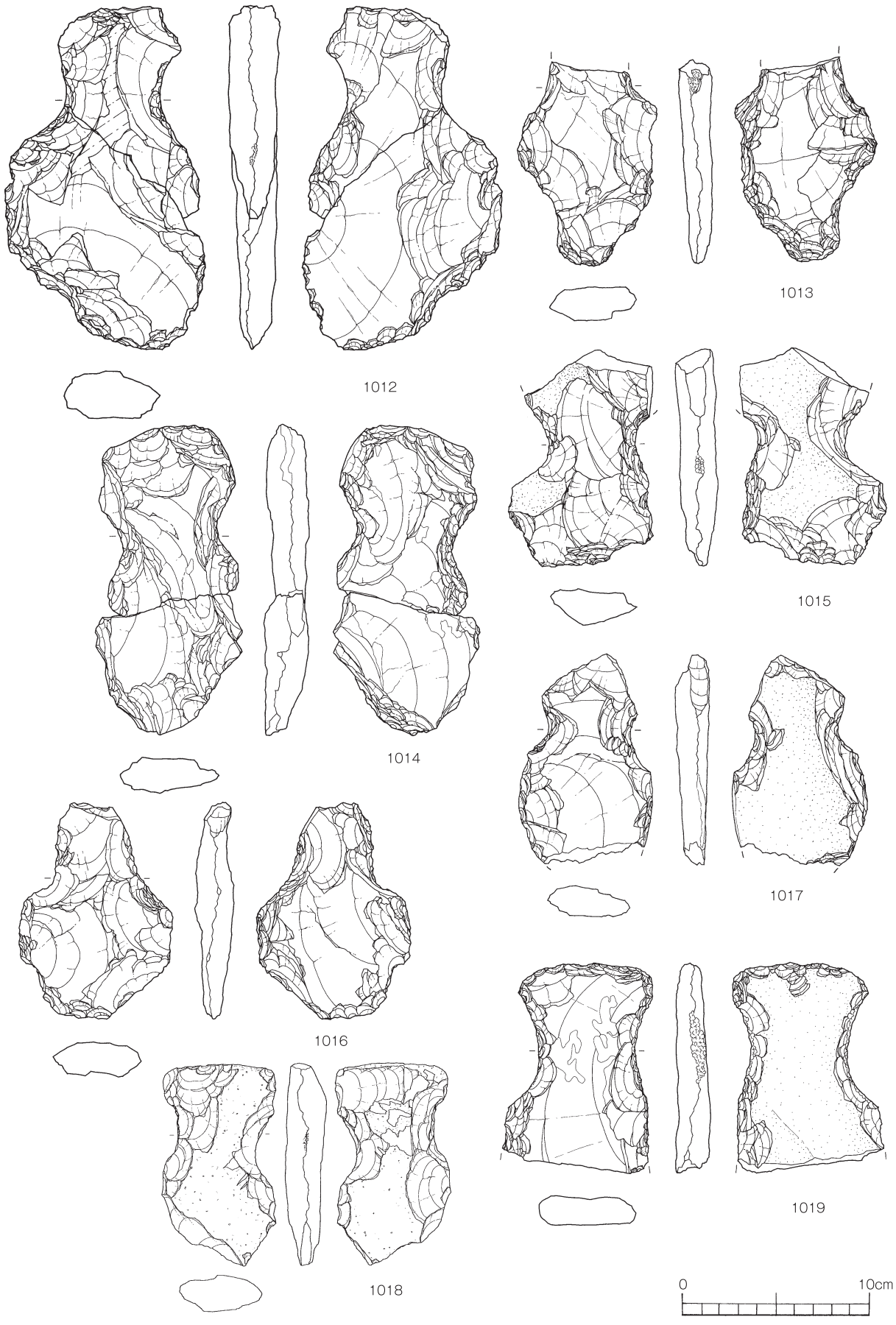
第144図　弥生時代の石器出土分布図　７・８



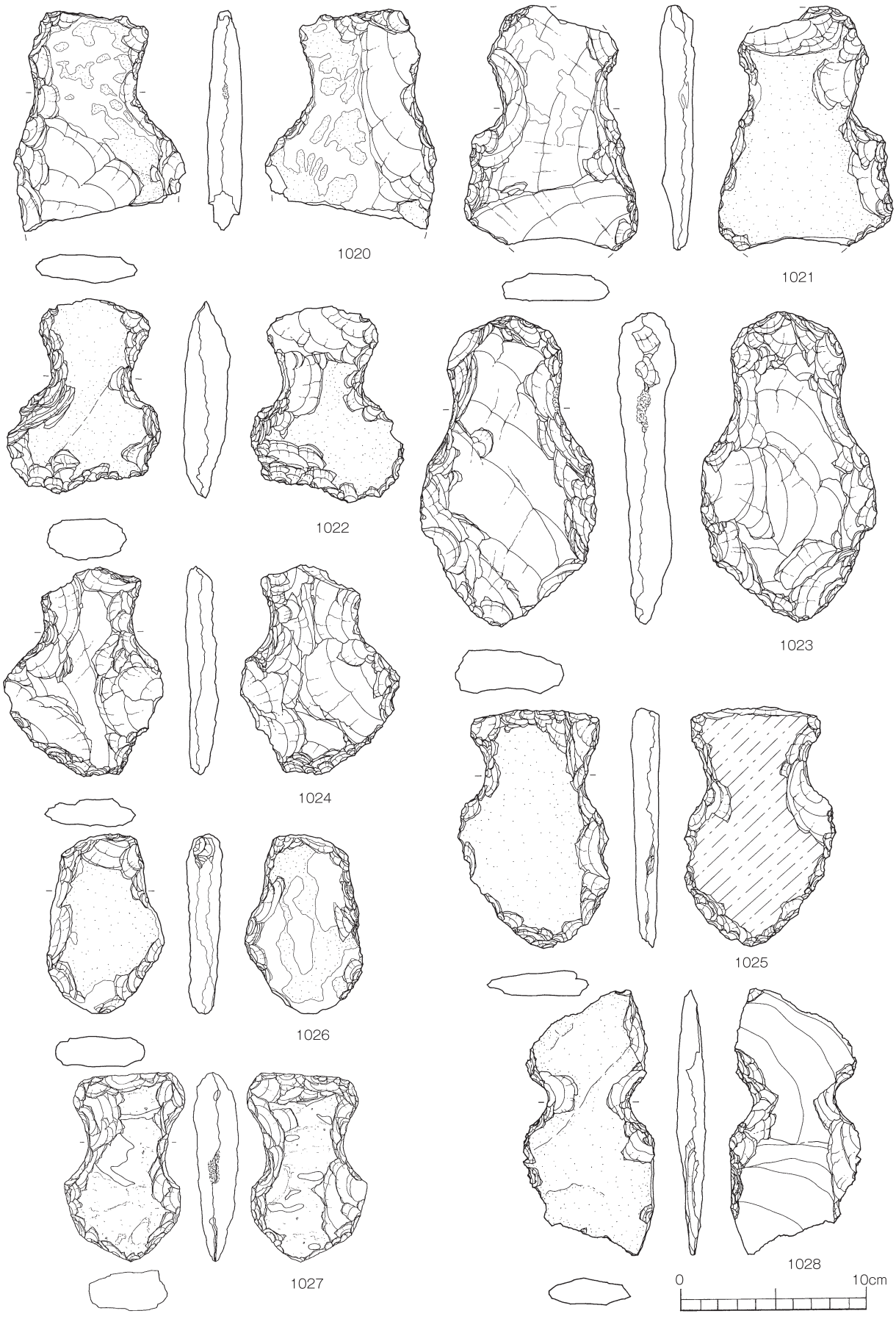
第145図　弥生時代の石器１（打製石斧１）



第146図　弥生時代の石器２（打製石斧２）

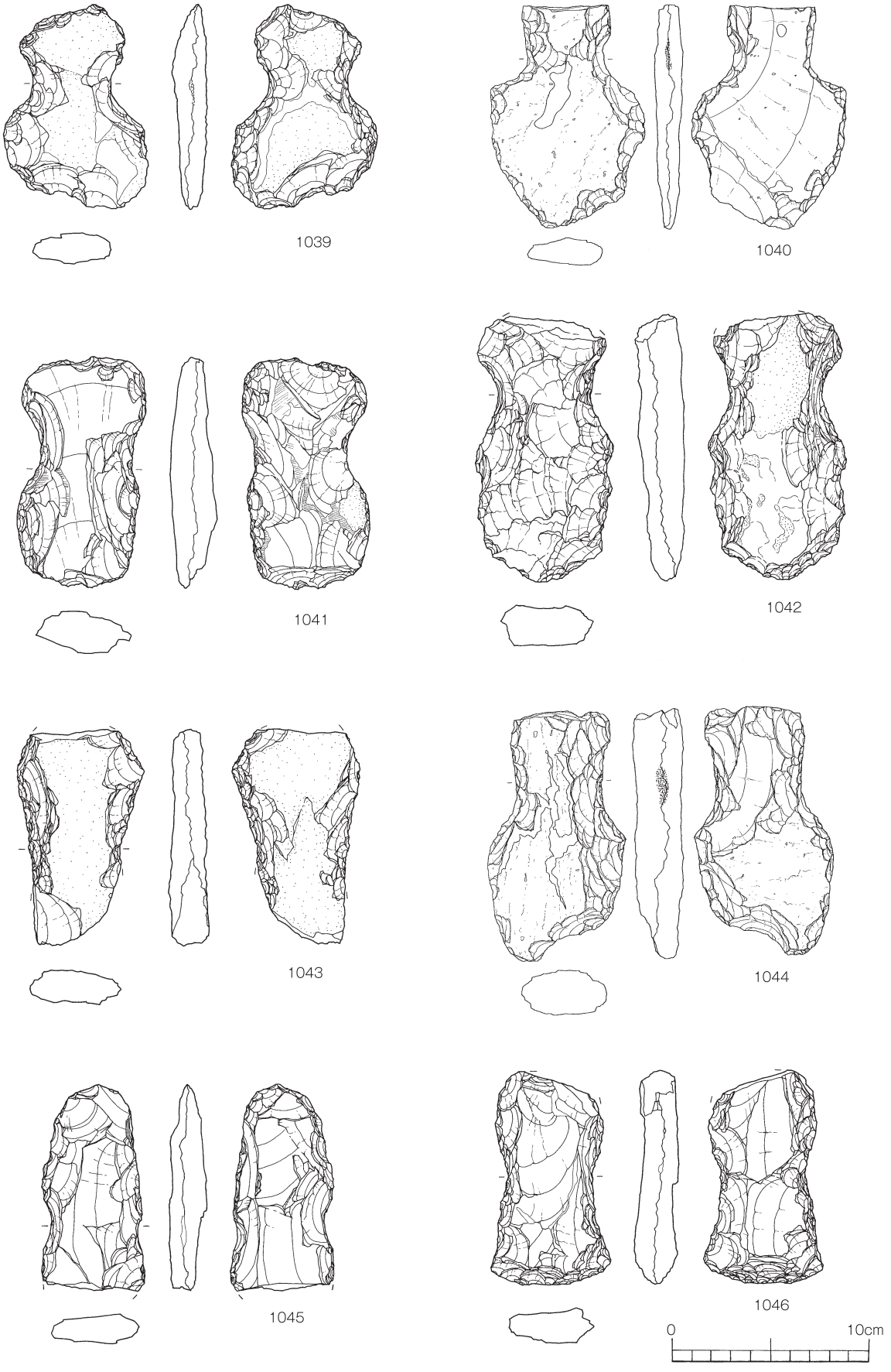


第147図　弥生時代の石器３（打製石斧３）

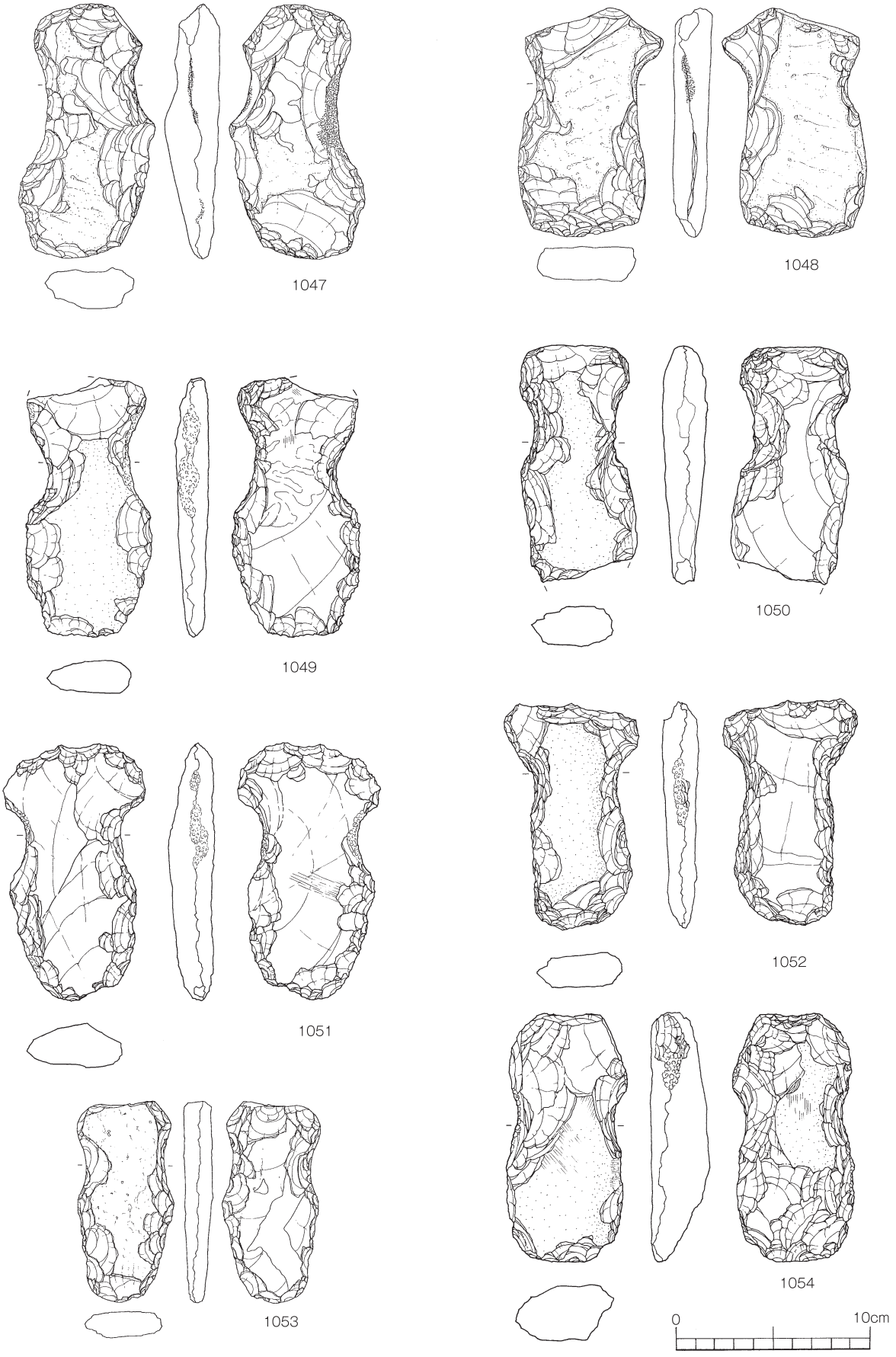


第148図　弥生時代の石器４（打製石斧４）

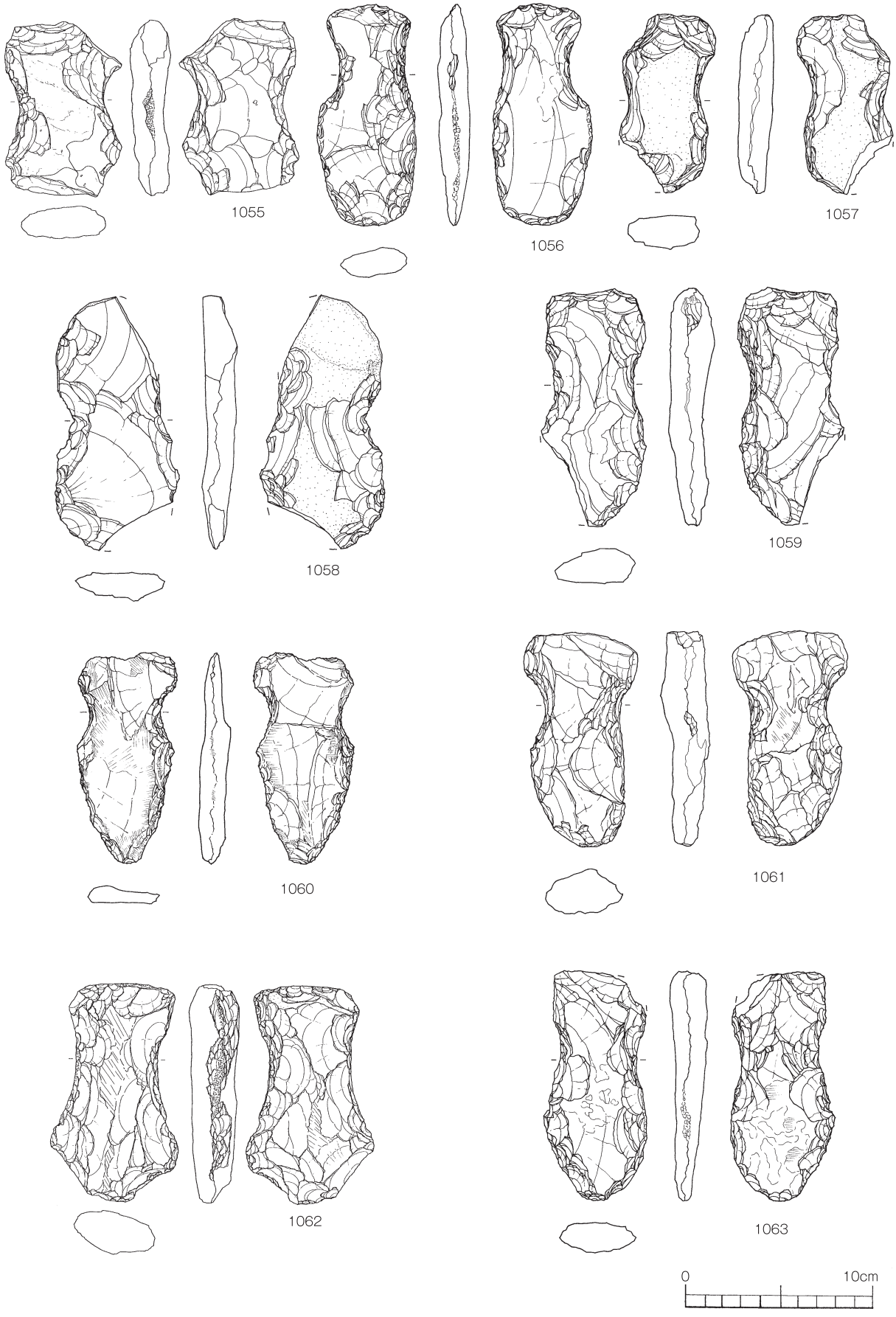
第149図　弥生時代の石器５（打製石斧５）



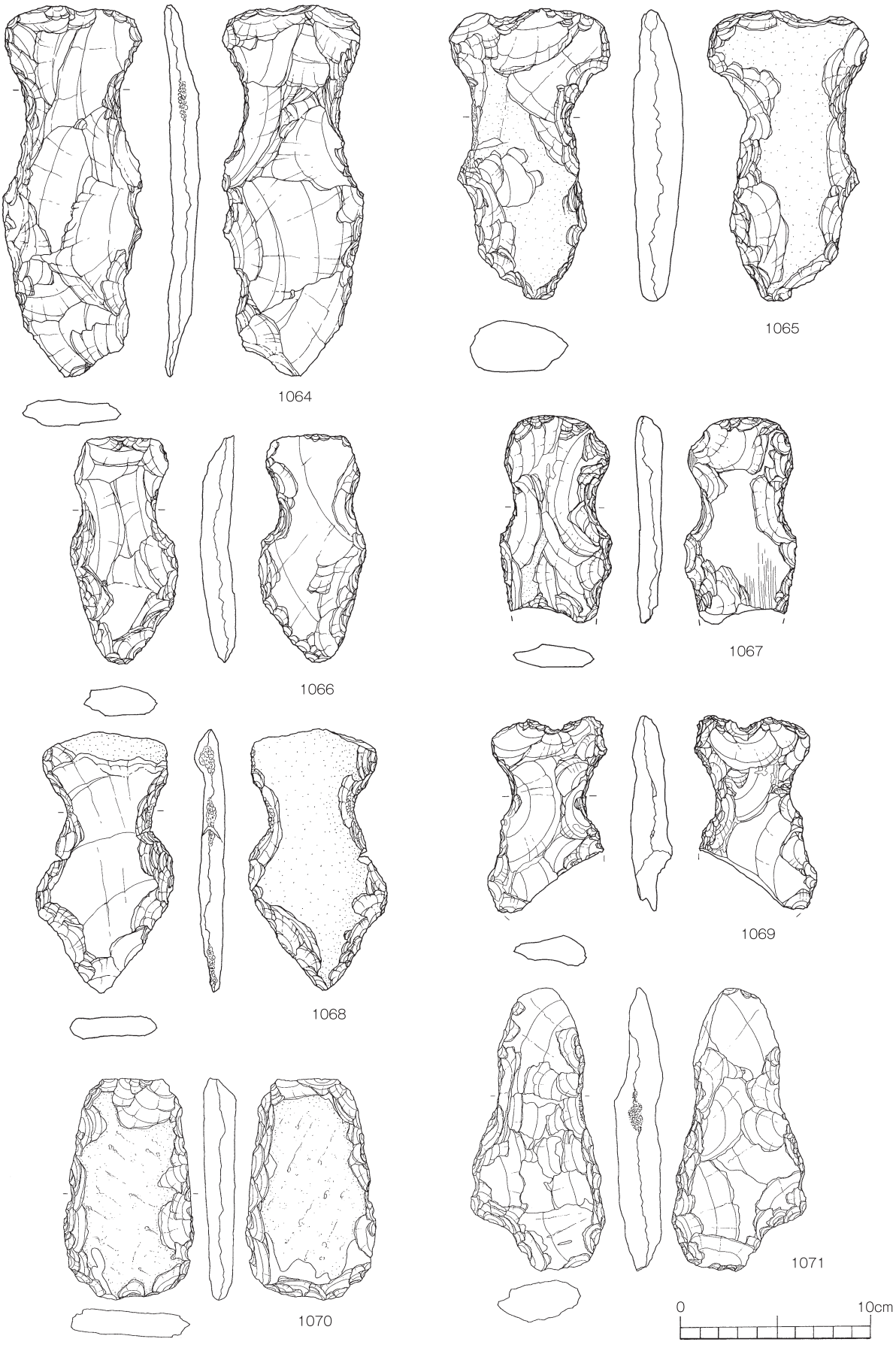
第150図　弥生時代の石器６（打製石斧６）



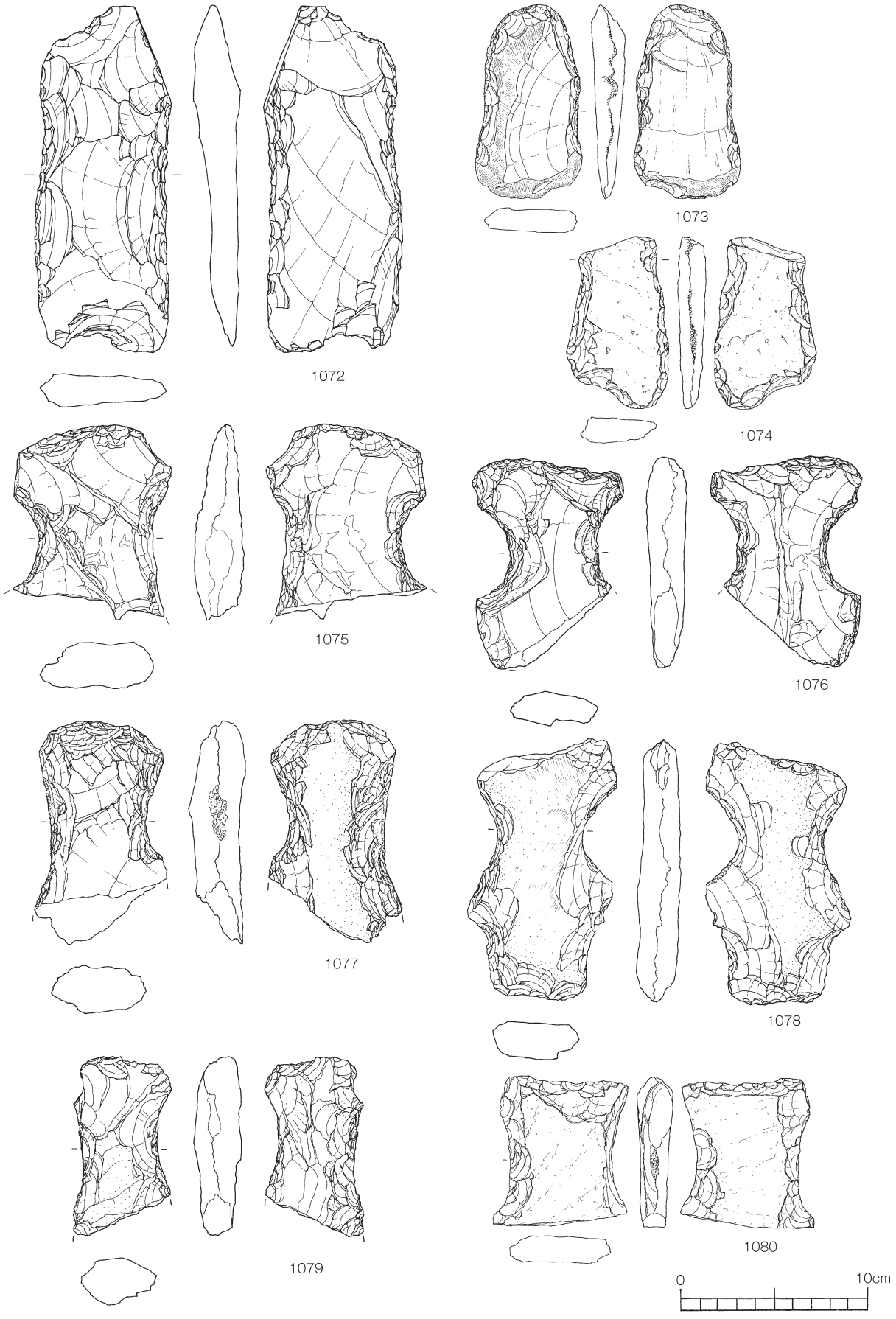
第151図　弥生時代の石器７（打製石斧７）



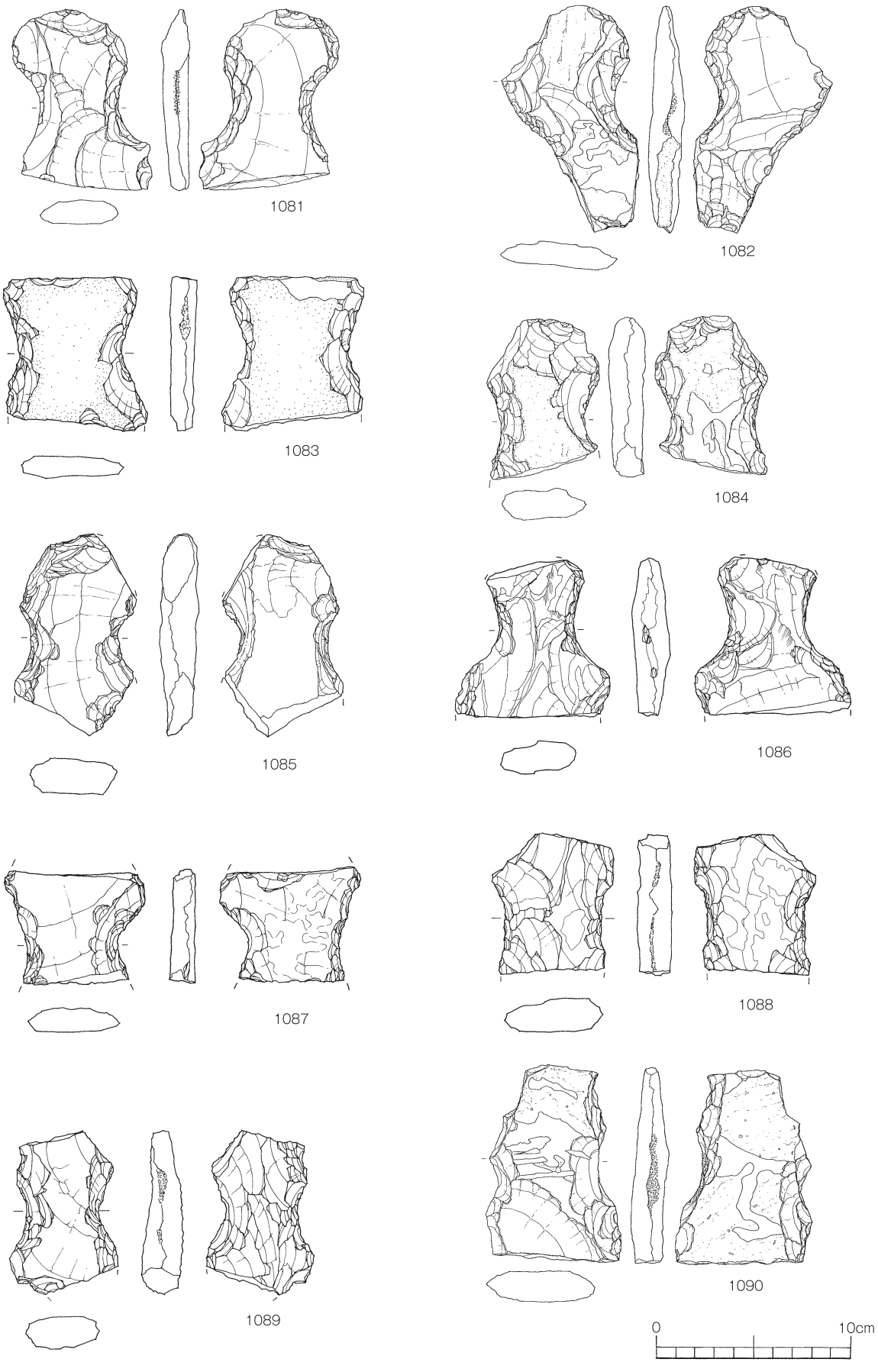
第152図　弥生時代の石器８（打製石斧８）



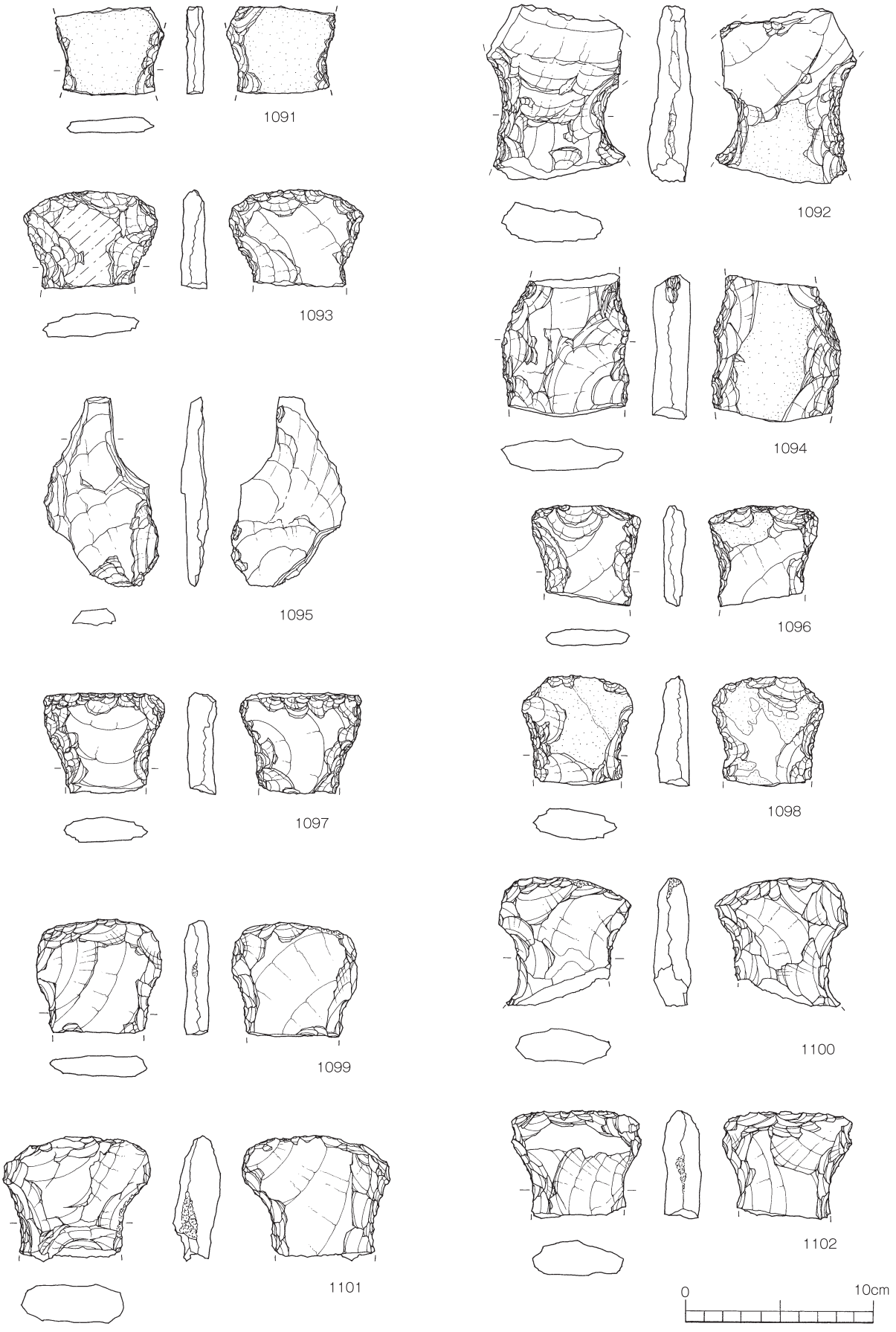
第153図　弥生時代の石器９（打製石斧９）



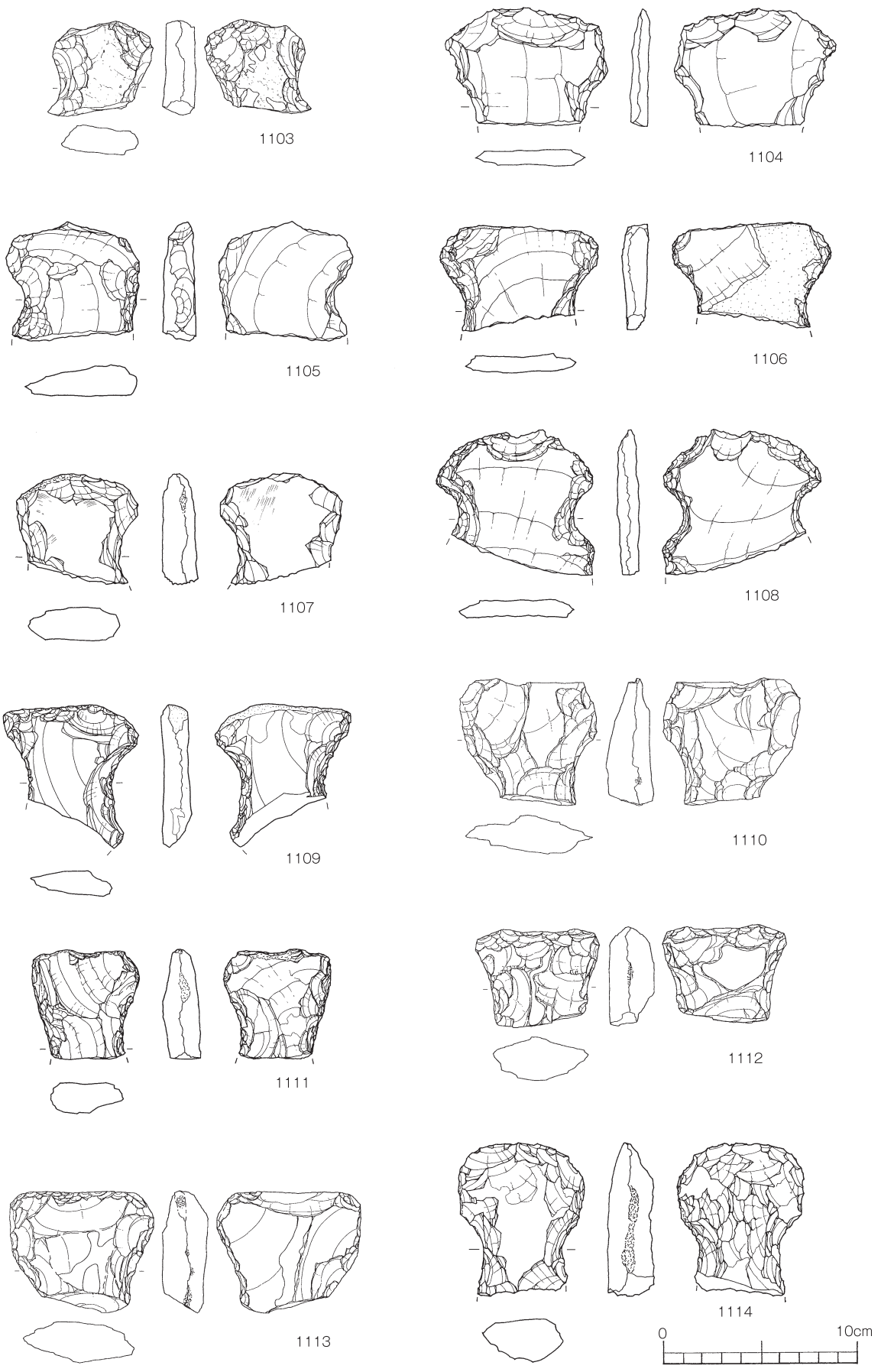
第154図　弥生時代の石器10（打製石斧10）



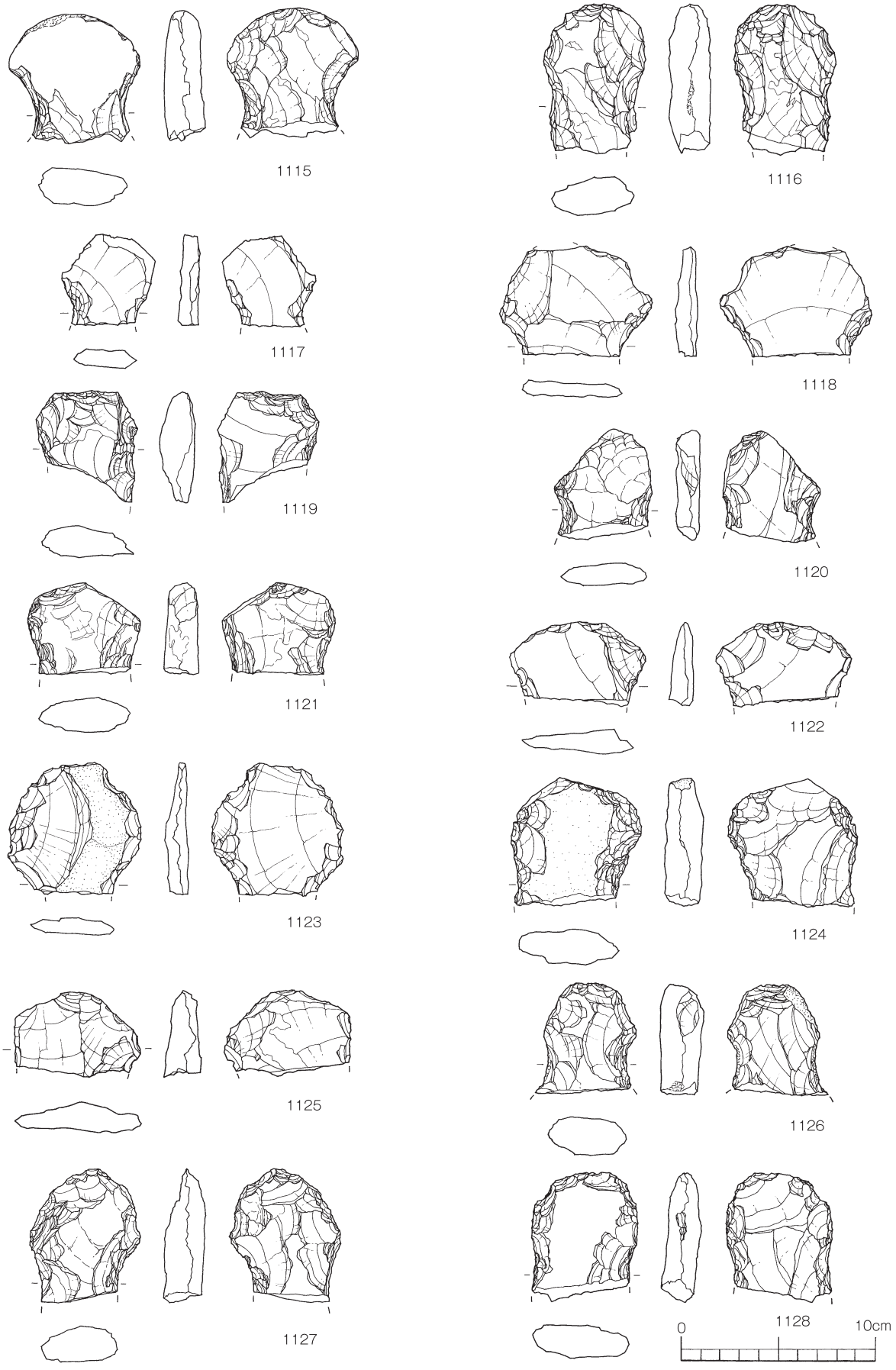
第155図　弥生時代の石器11（打製石斧11）



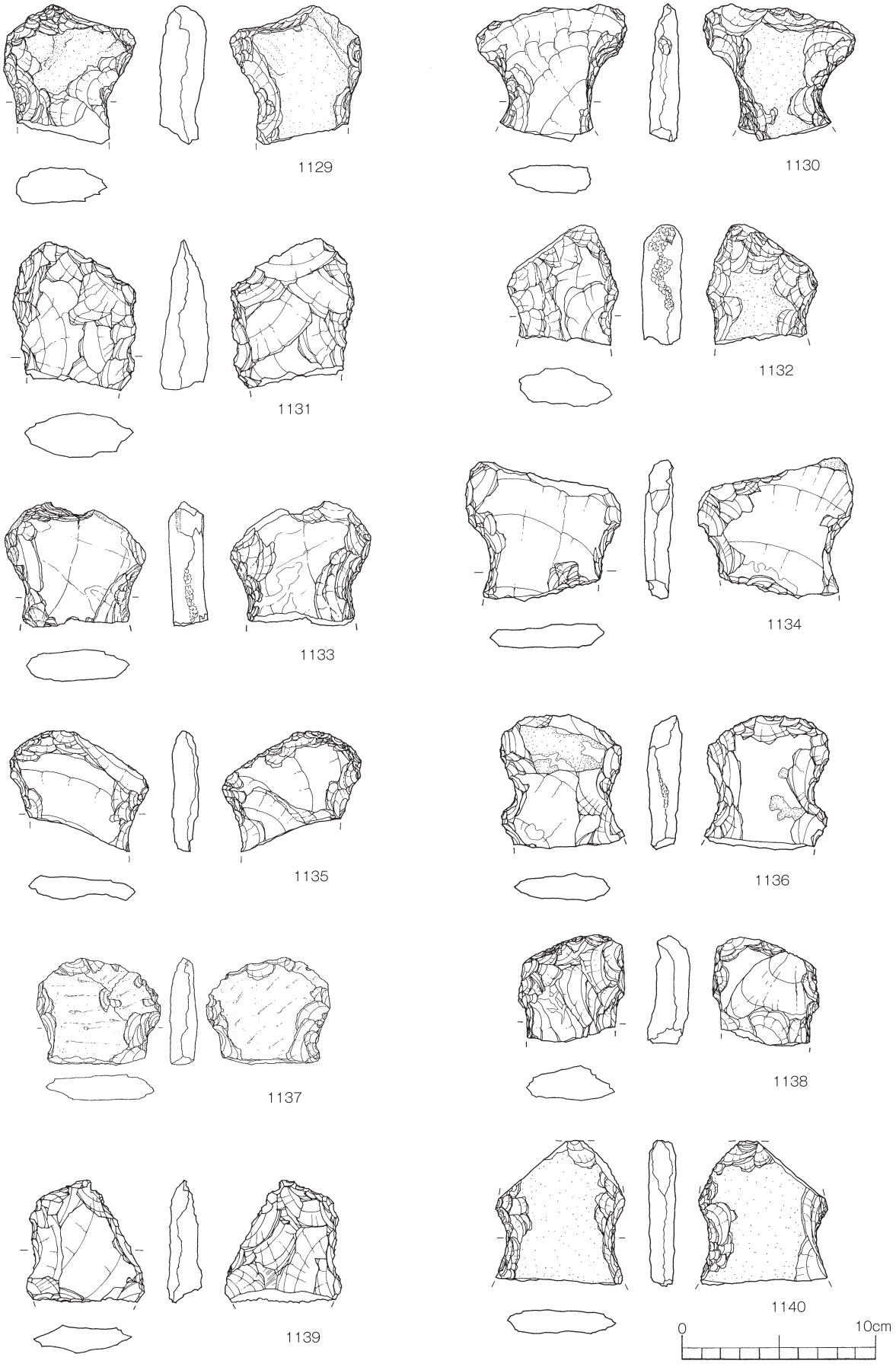
第156図　弥生時代の石器12（打製石斧12）



第157図　弥生時代の石器13（打製石斧13）

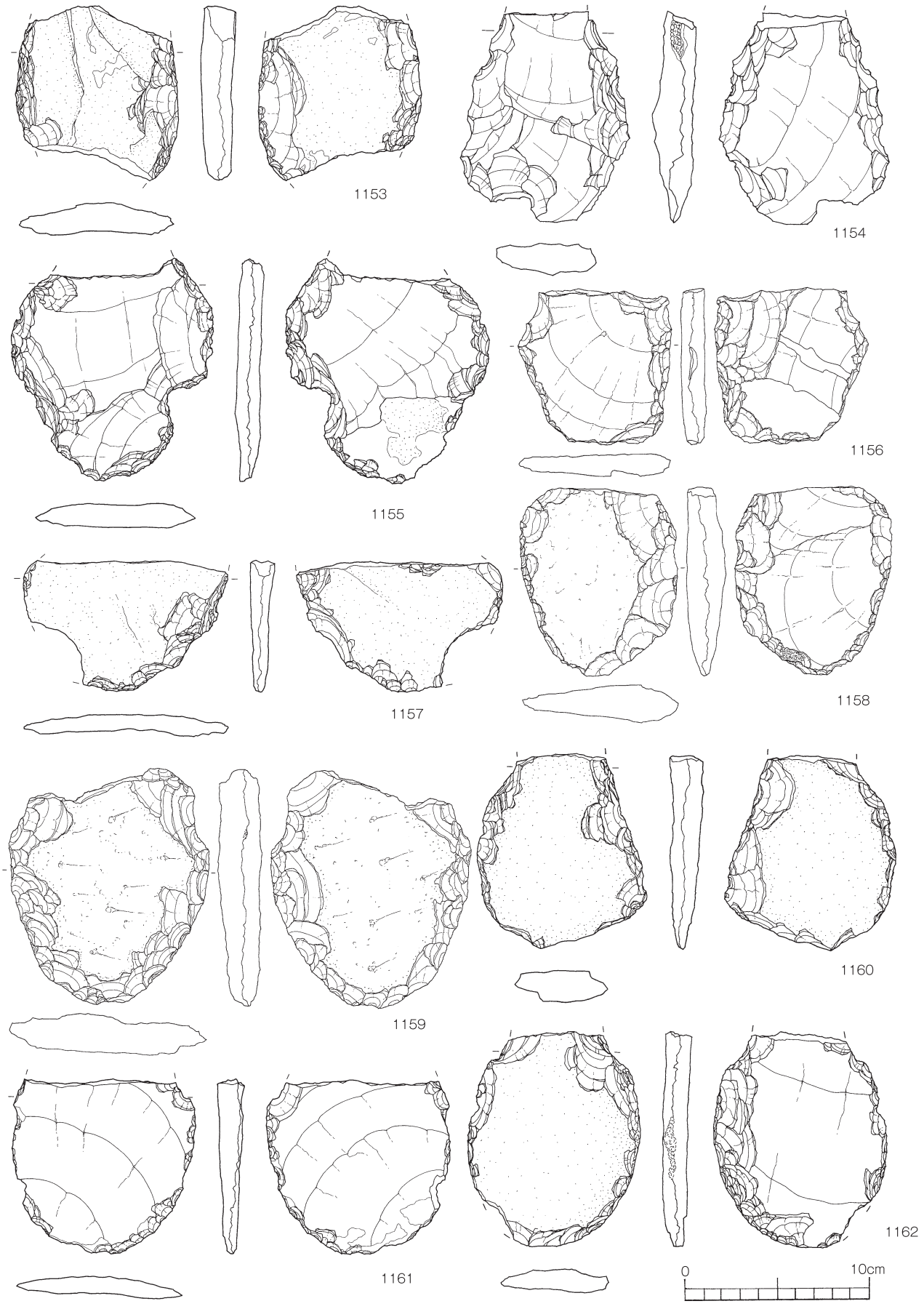


第158図　弥生時代の石器14（打製石斧14）

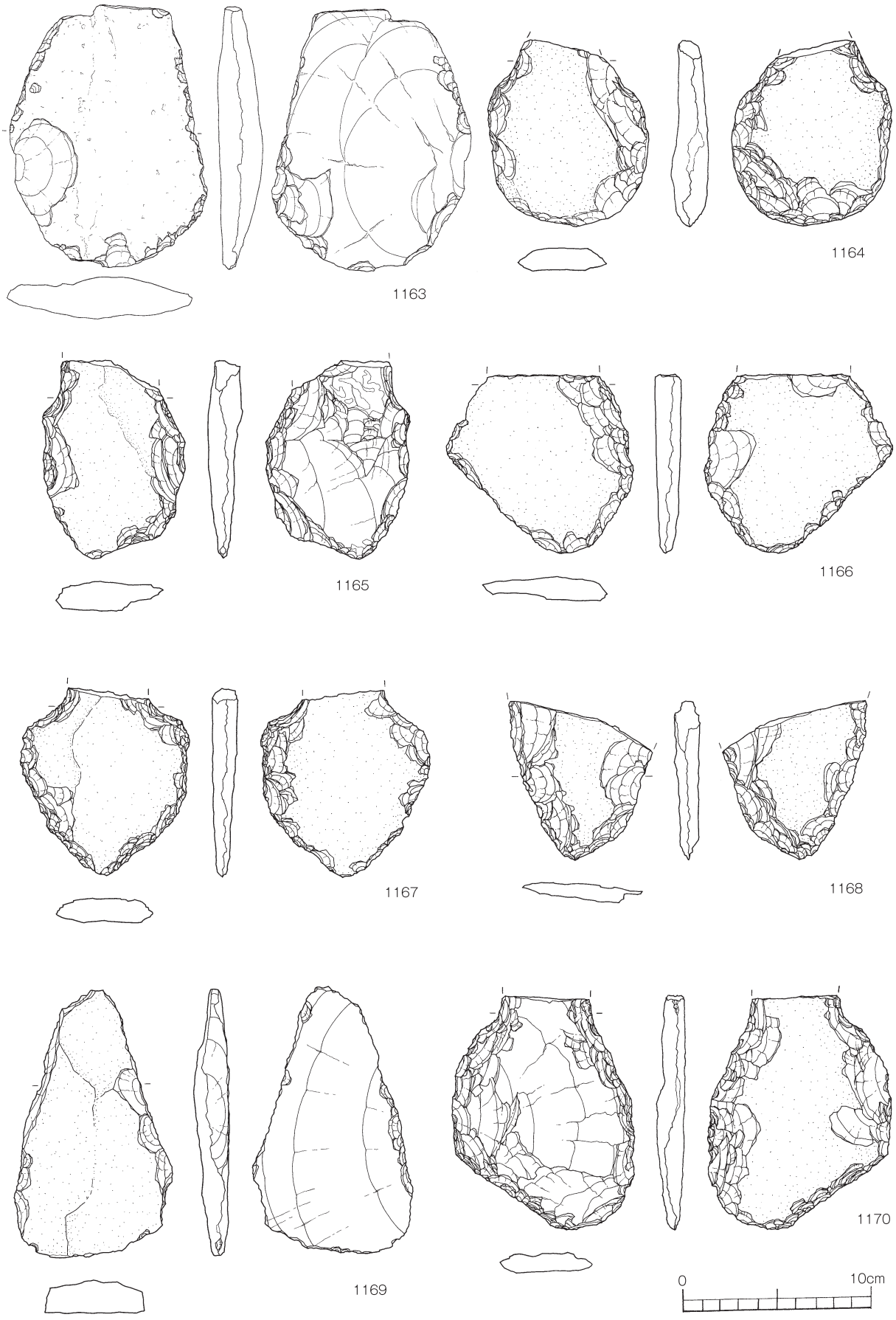


第159図　弥生時代の石器15（打製石斧15）

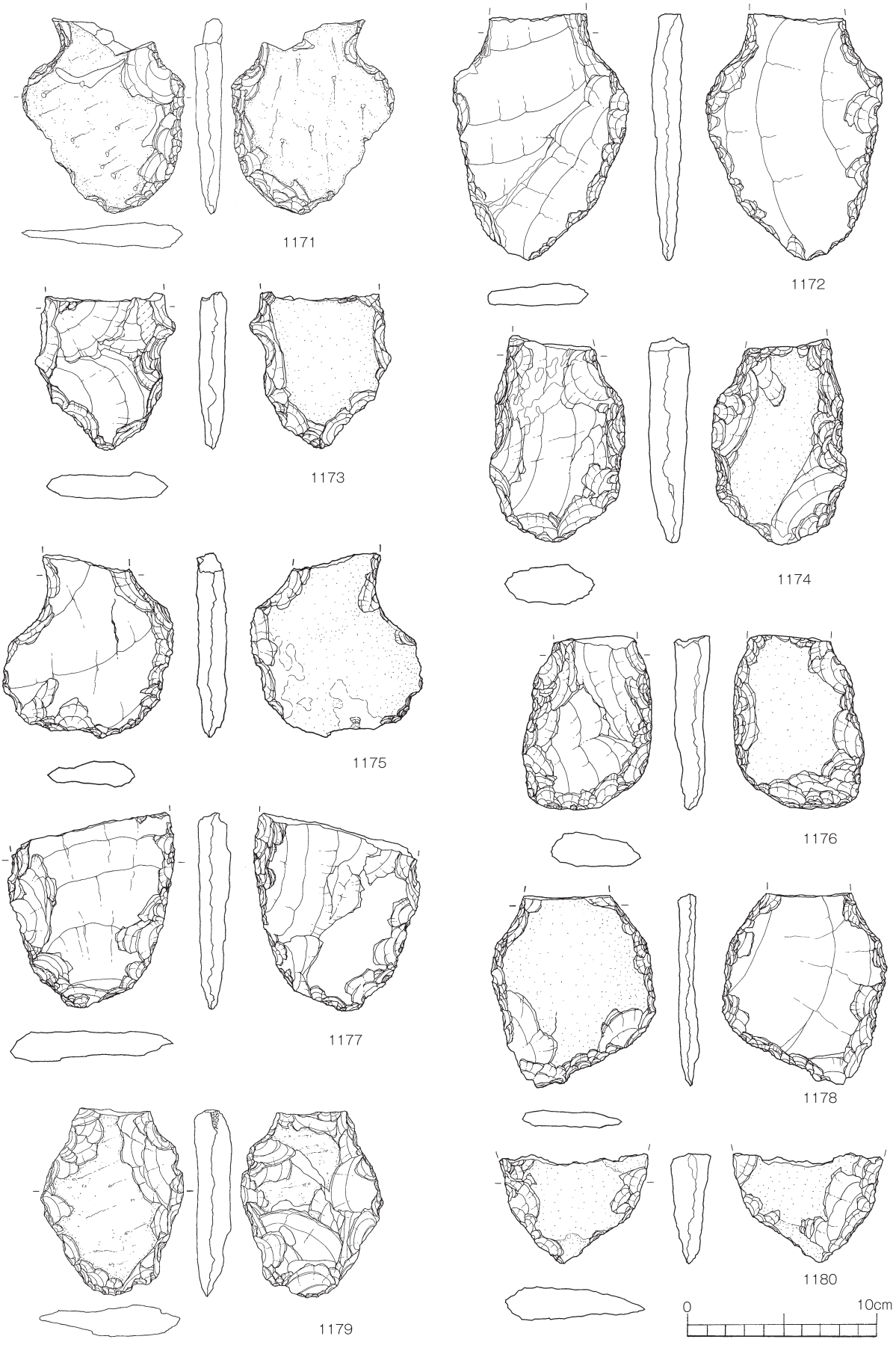
第160図　弥生時代の石器16（打製石斧16）



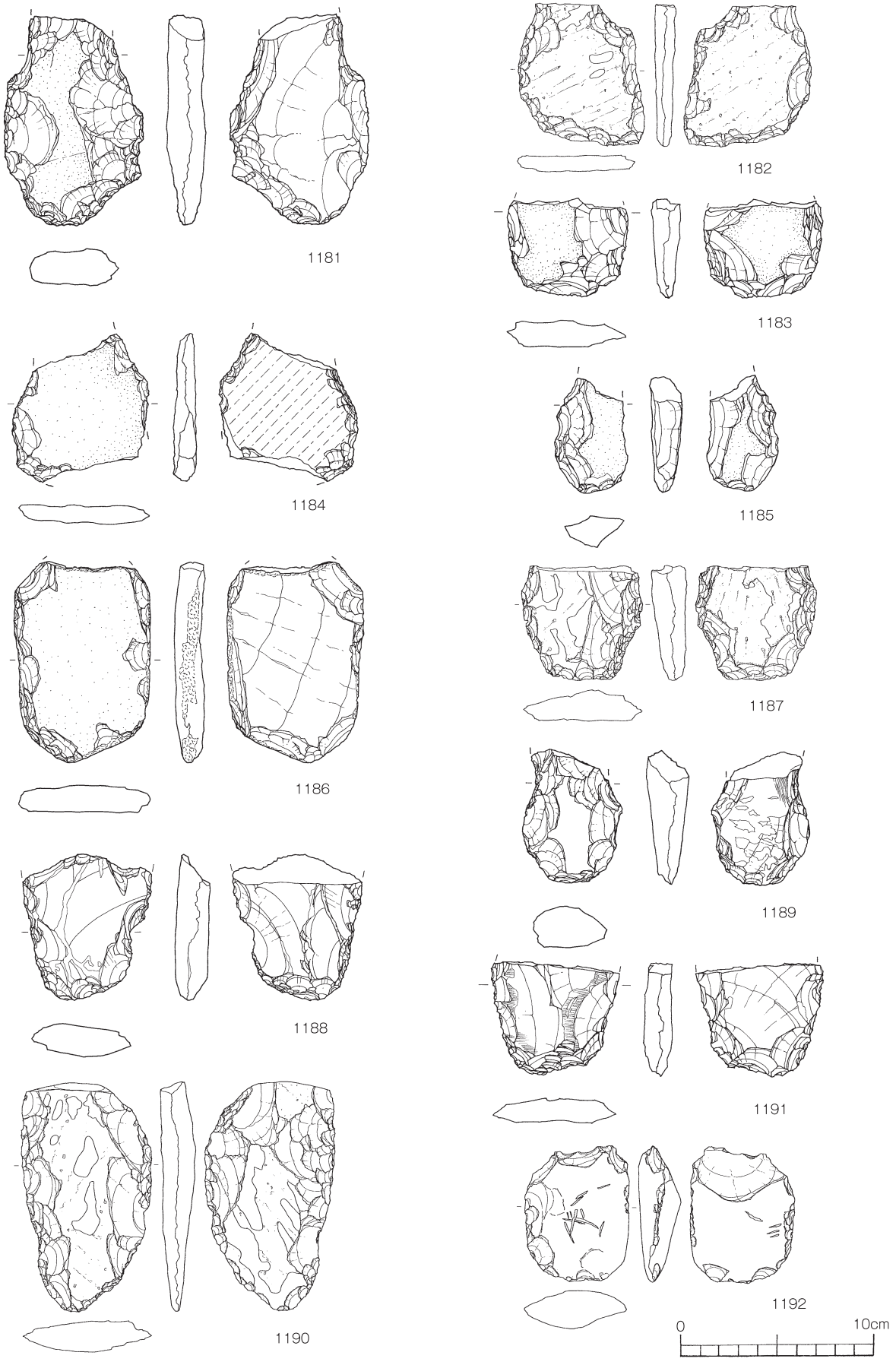
第161図　弥生時代の石器17（打製石斧17）



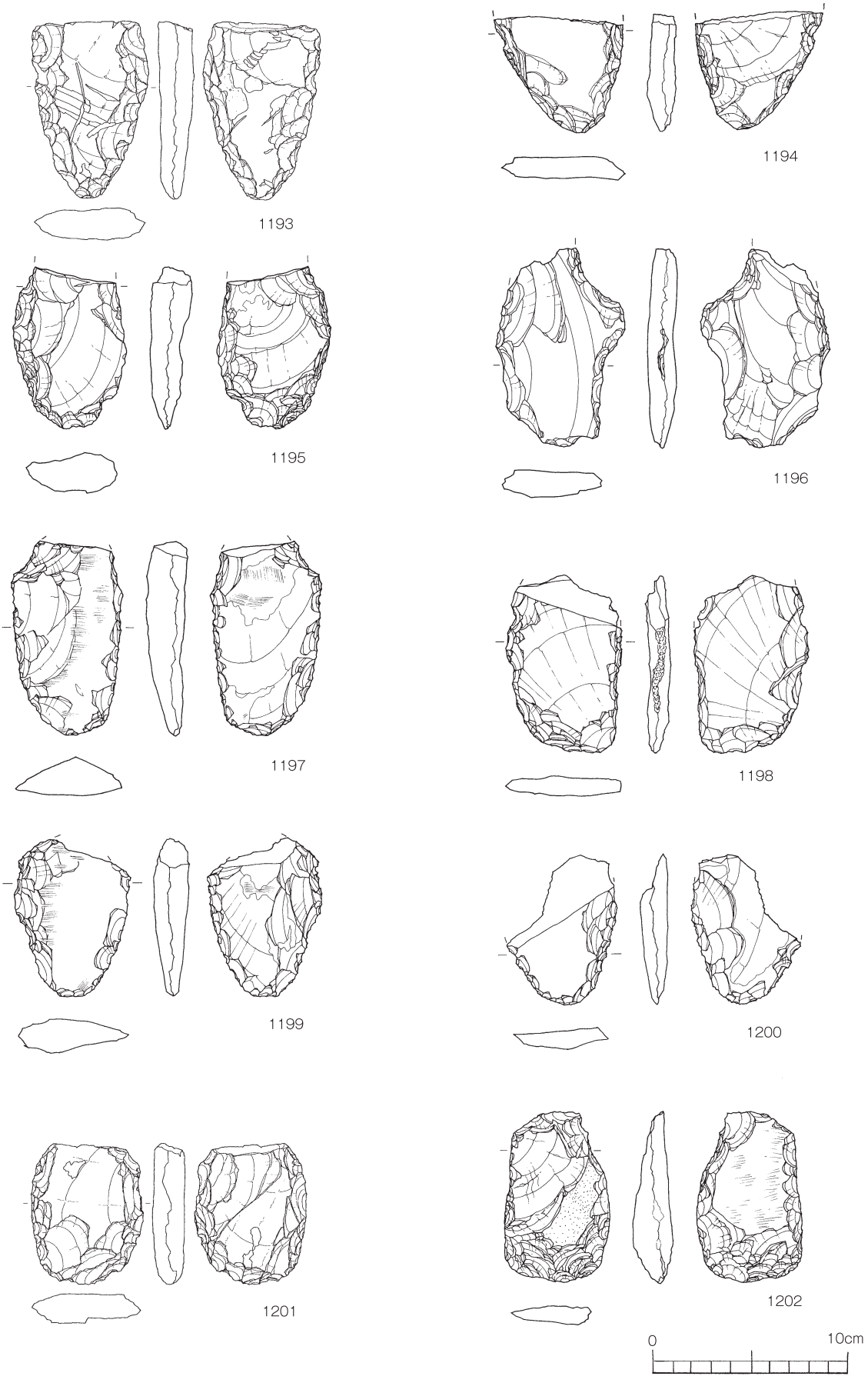
第162図　弥生時代の石器18（打製石斧18）



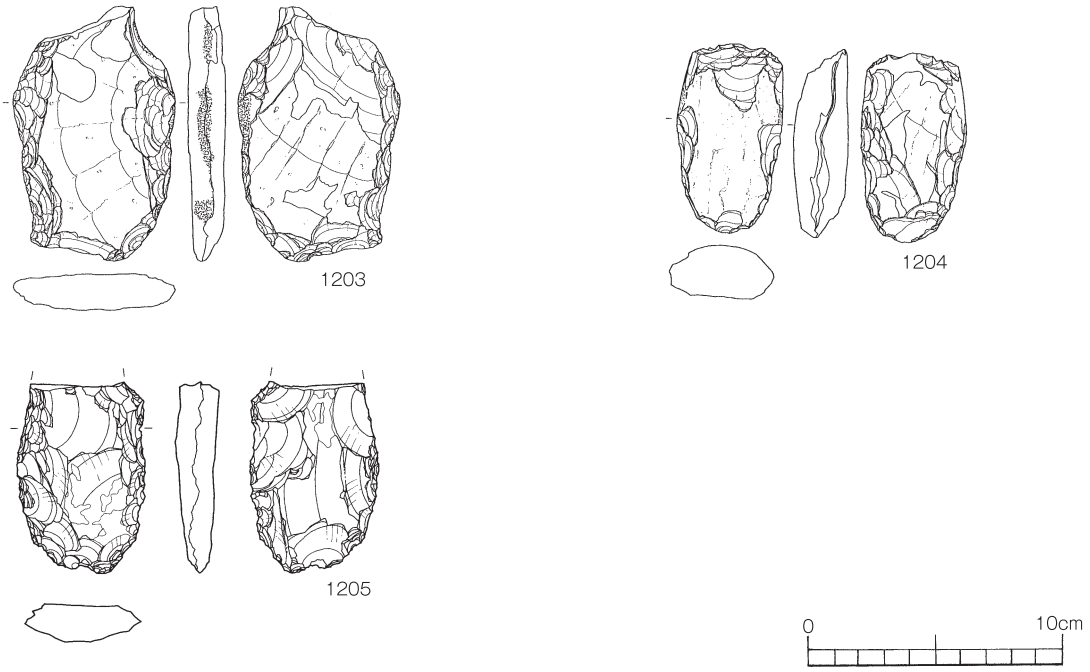
第163図　弥生時代の石器19（打製石斧19）



第164図　弥生時代の石器20（打製石斧20）



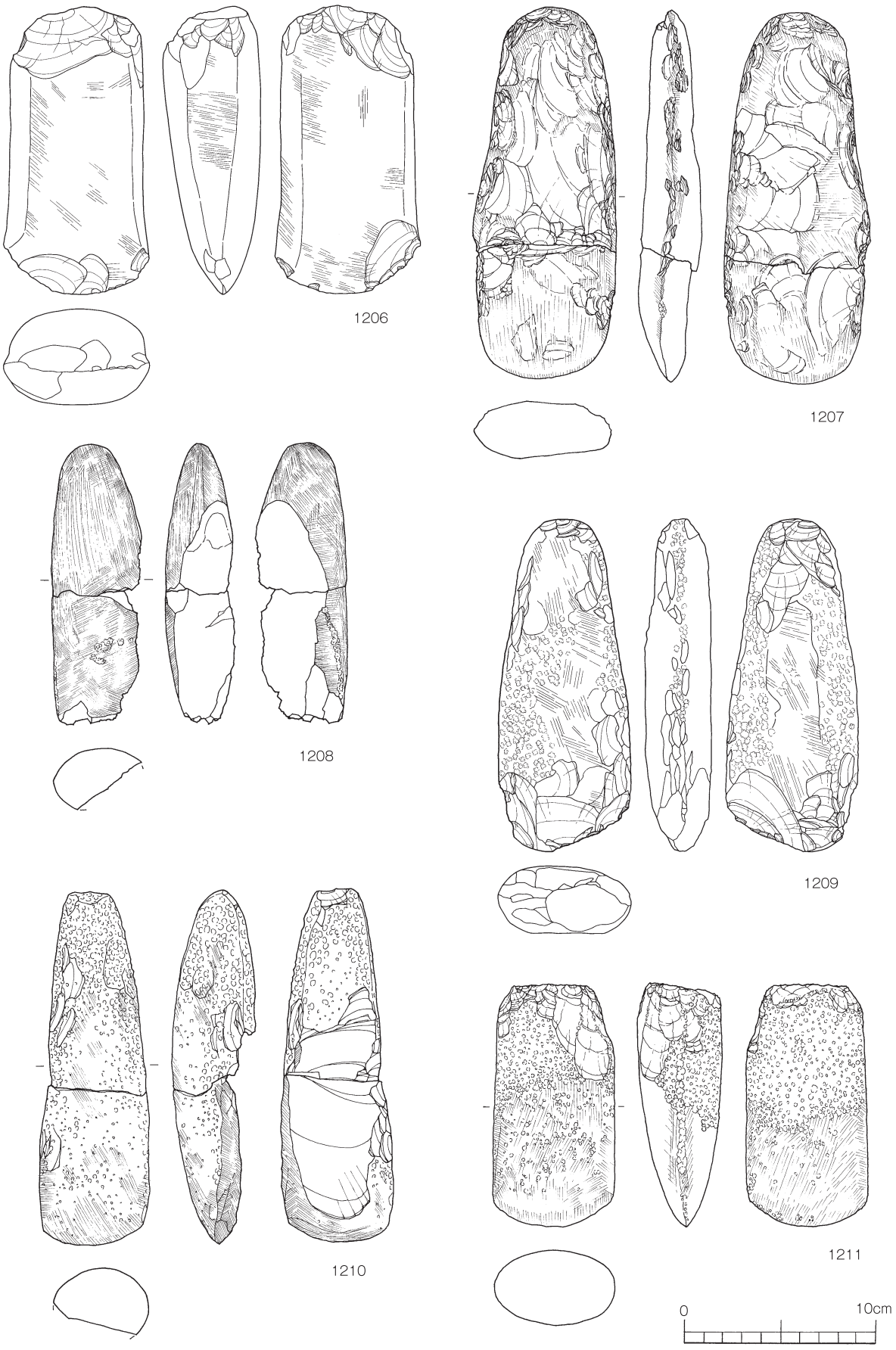
第165図　弥生時代の石器21（打製石斧21）



第166図　弥生時代の石器22（打製石斧22）

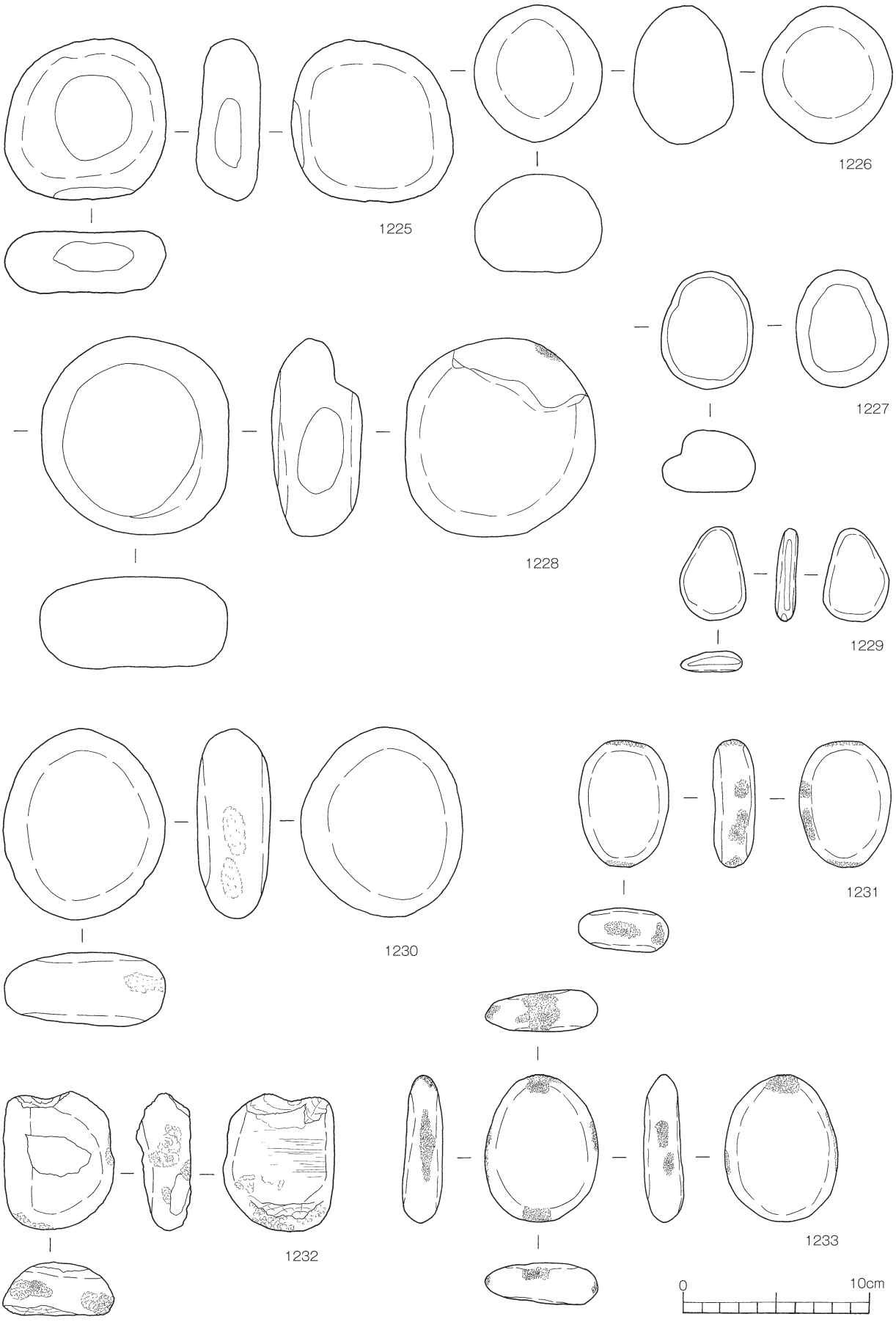
市ノ原４地点　石器（打製石斧）分類

Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類
a		a	
b		b	



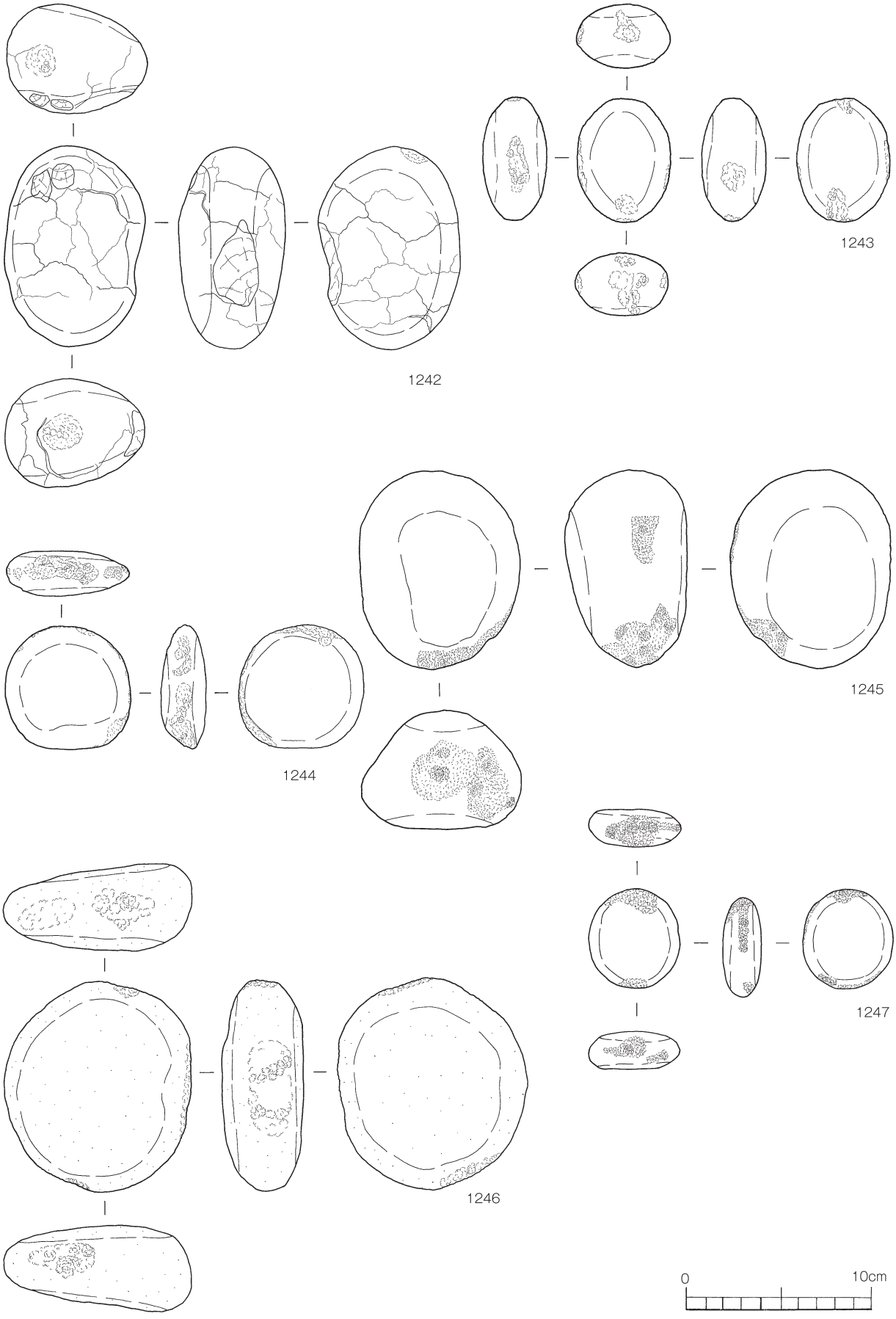
第167図　弥生時代の石器23（磨製石斧１）

第168図　弥生時代の石器24（磨製石斧２）

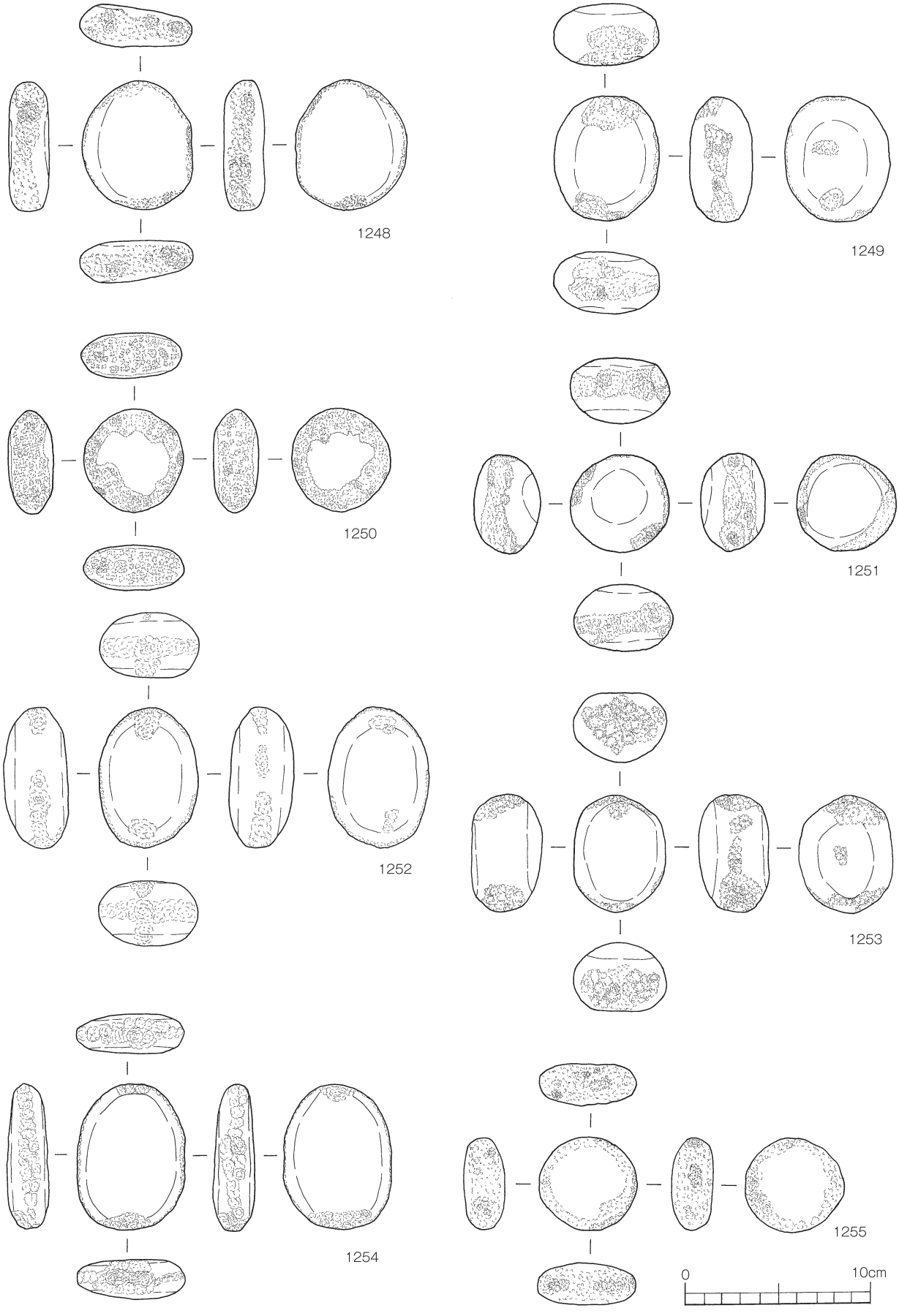


第169図　弥生時代の石器25（磨敲石１）

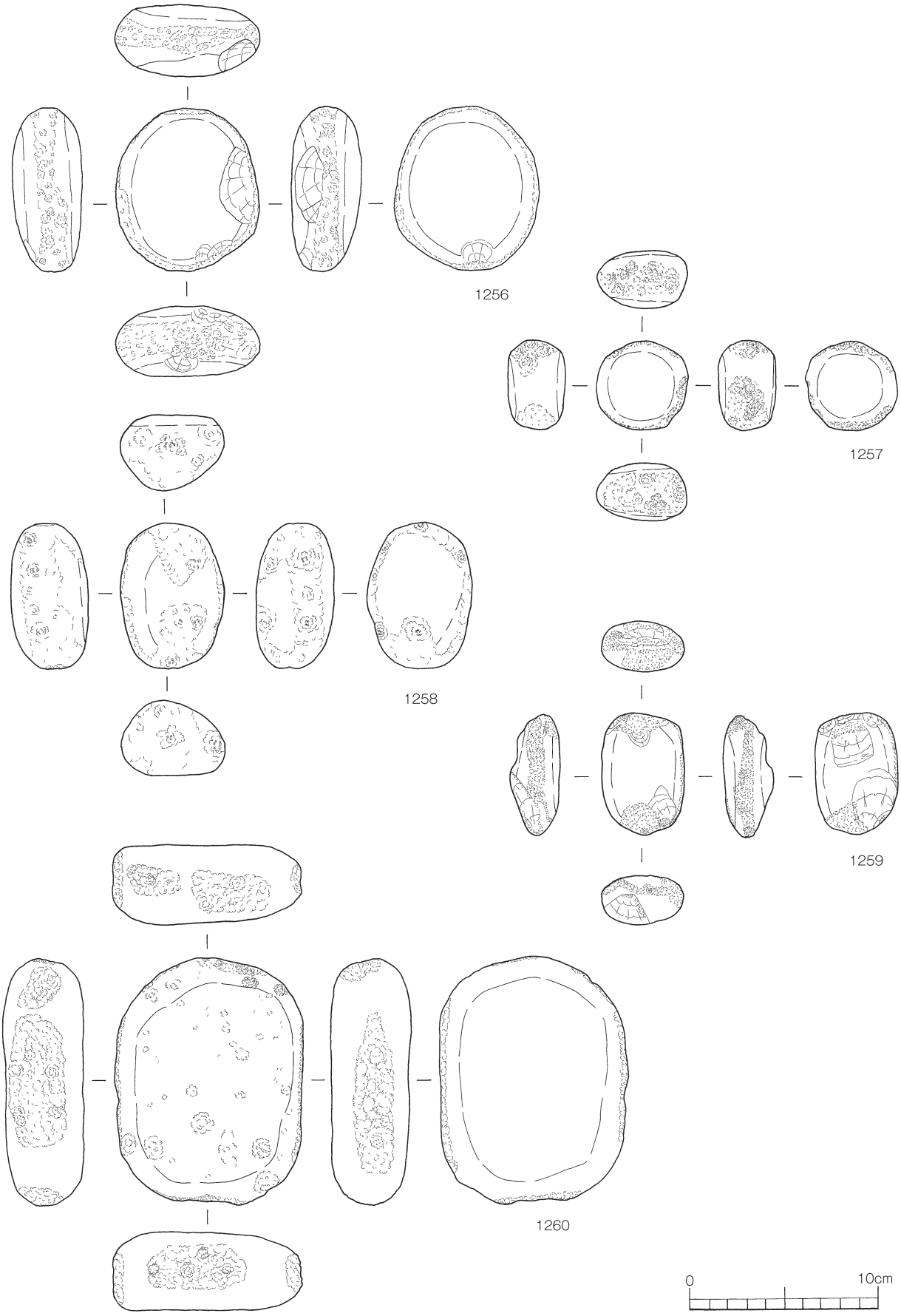
第170図　弥生時代の石器26（磨敲石２）



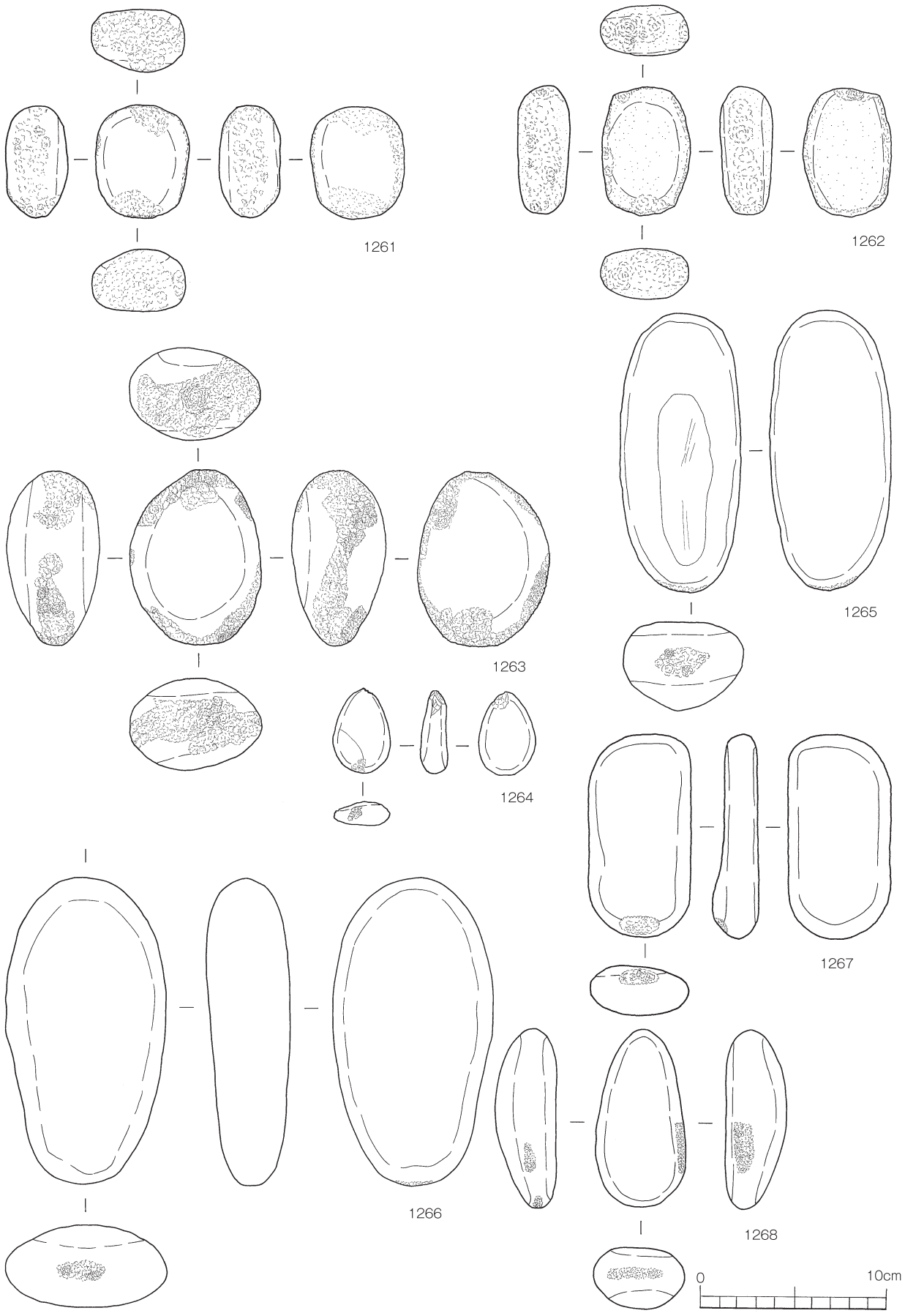
第171図　弥生時代の石器27（磨敲石３）



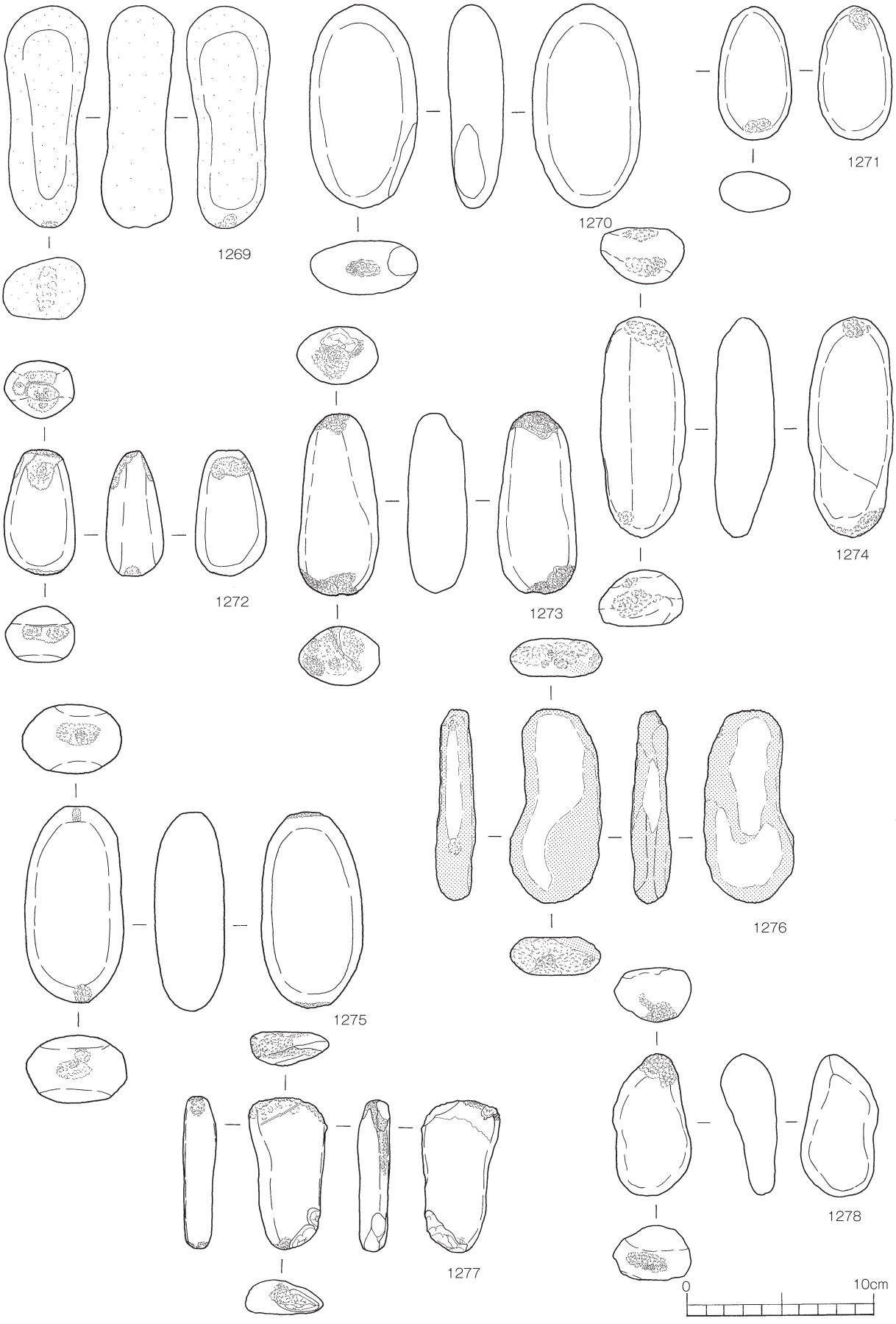
第172図　弥生時代の石器28（磨敲石４）



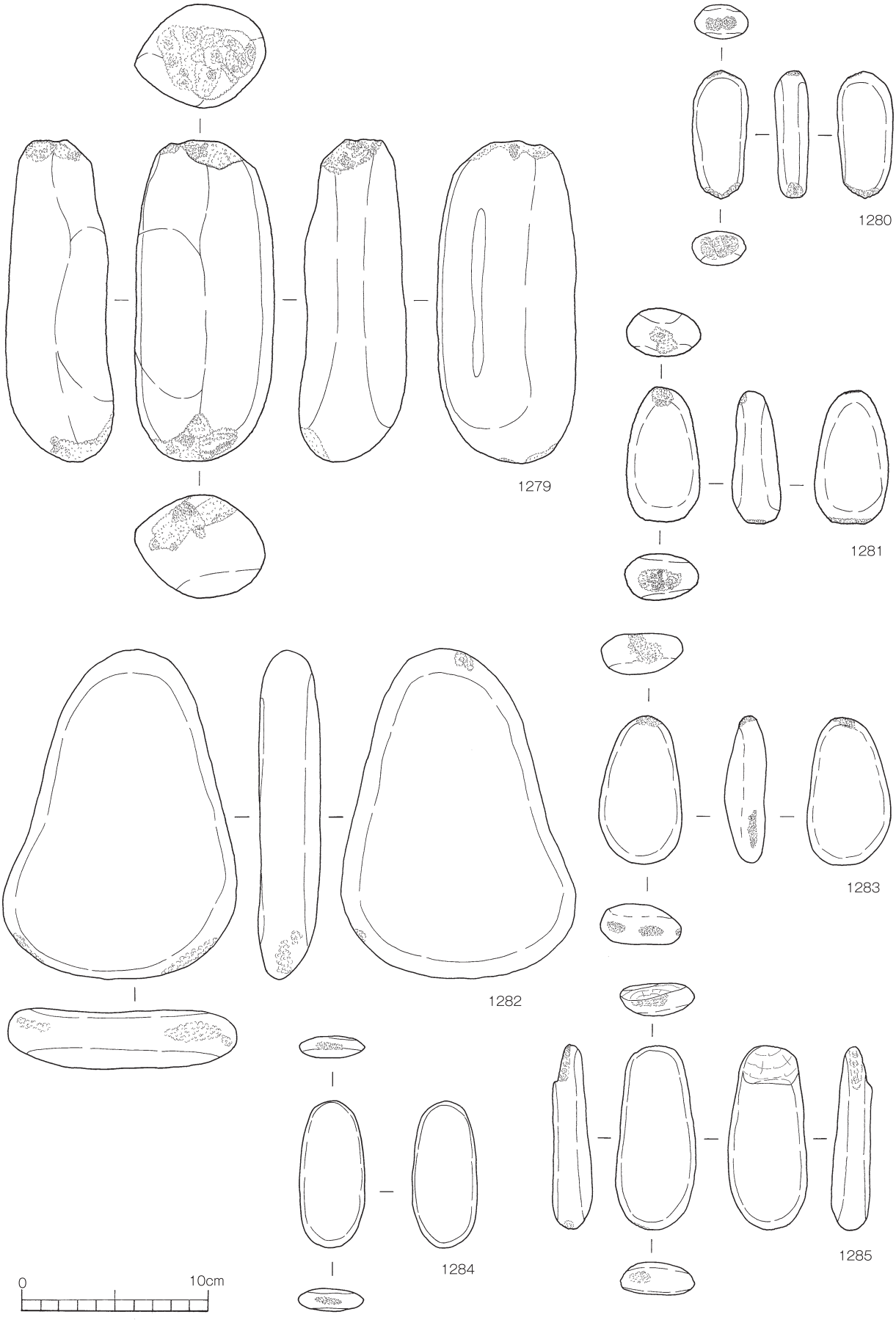
第173図　弥生時代の石器29（磨敲石５）



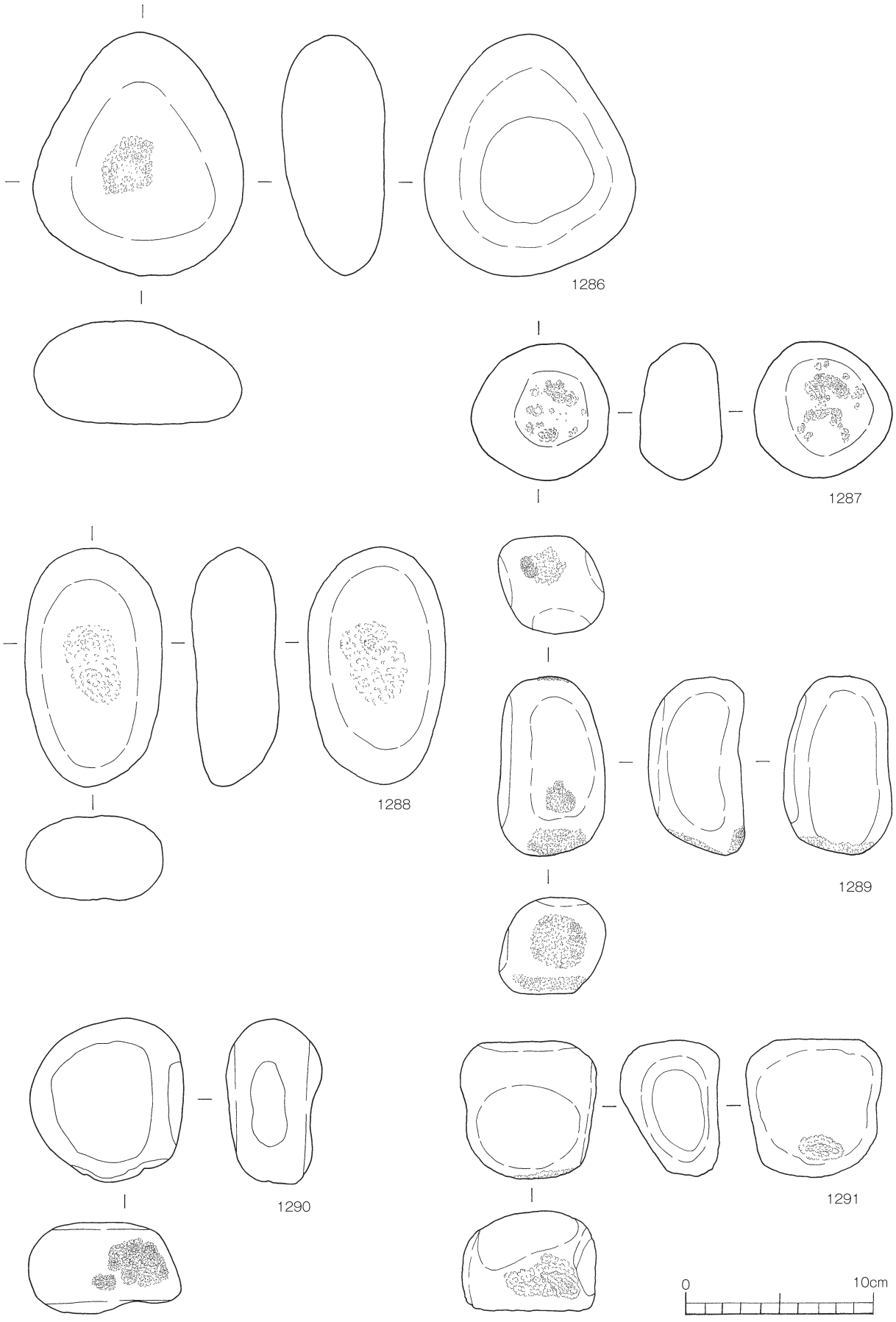
第174図　弥生時代の石器30（磨敲石６）



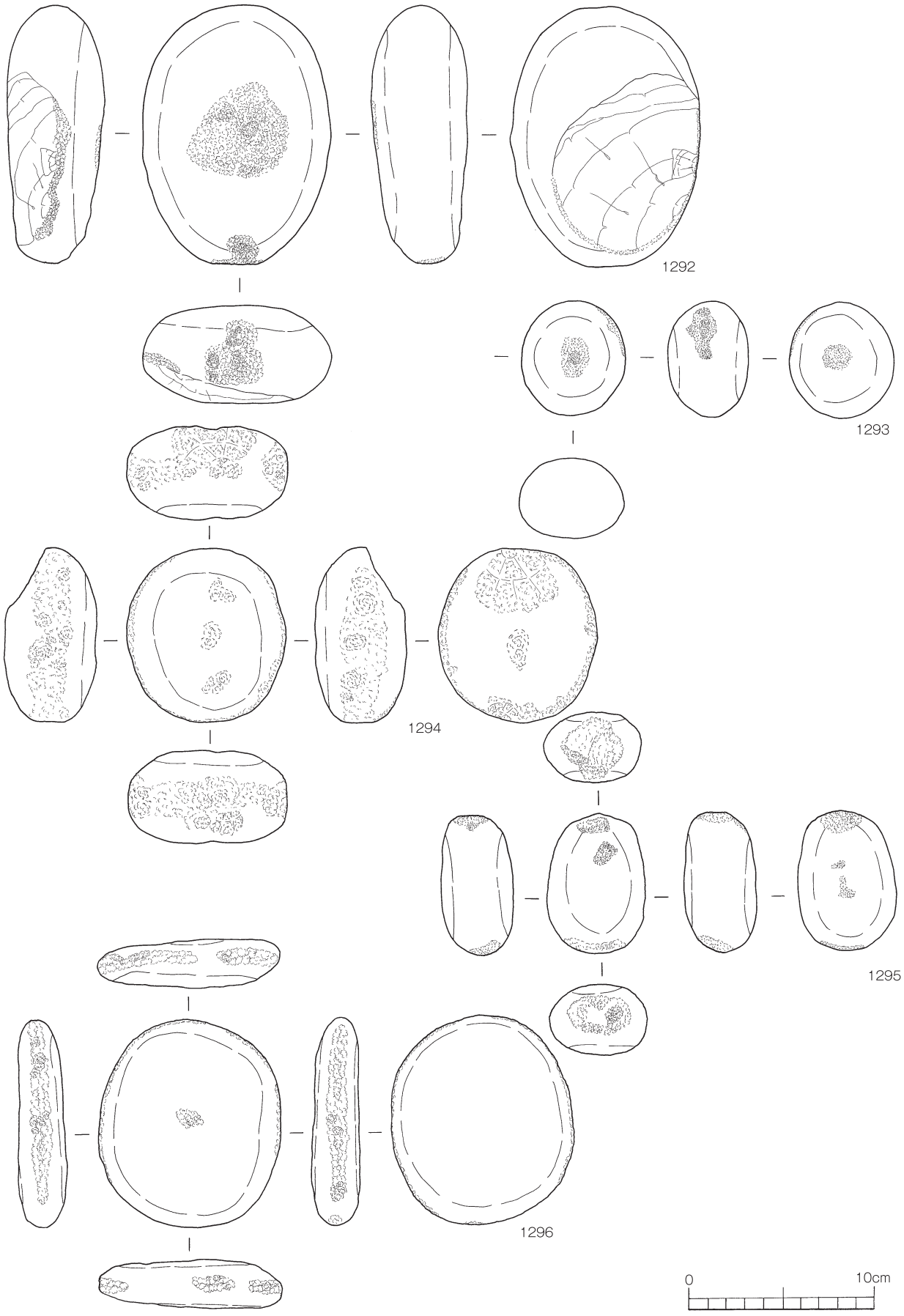
第175図　弥生時代の石器31（磨敲石７）



第176図　弥生時代の石器32（磨敲石８）

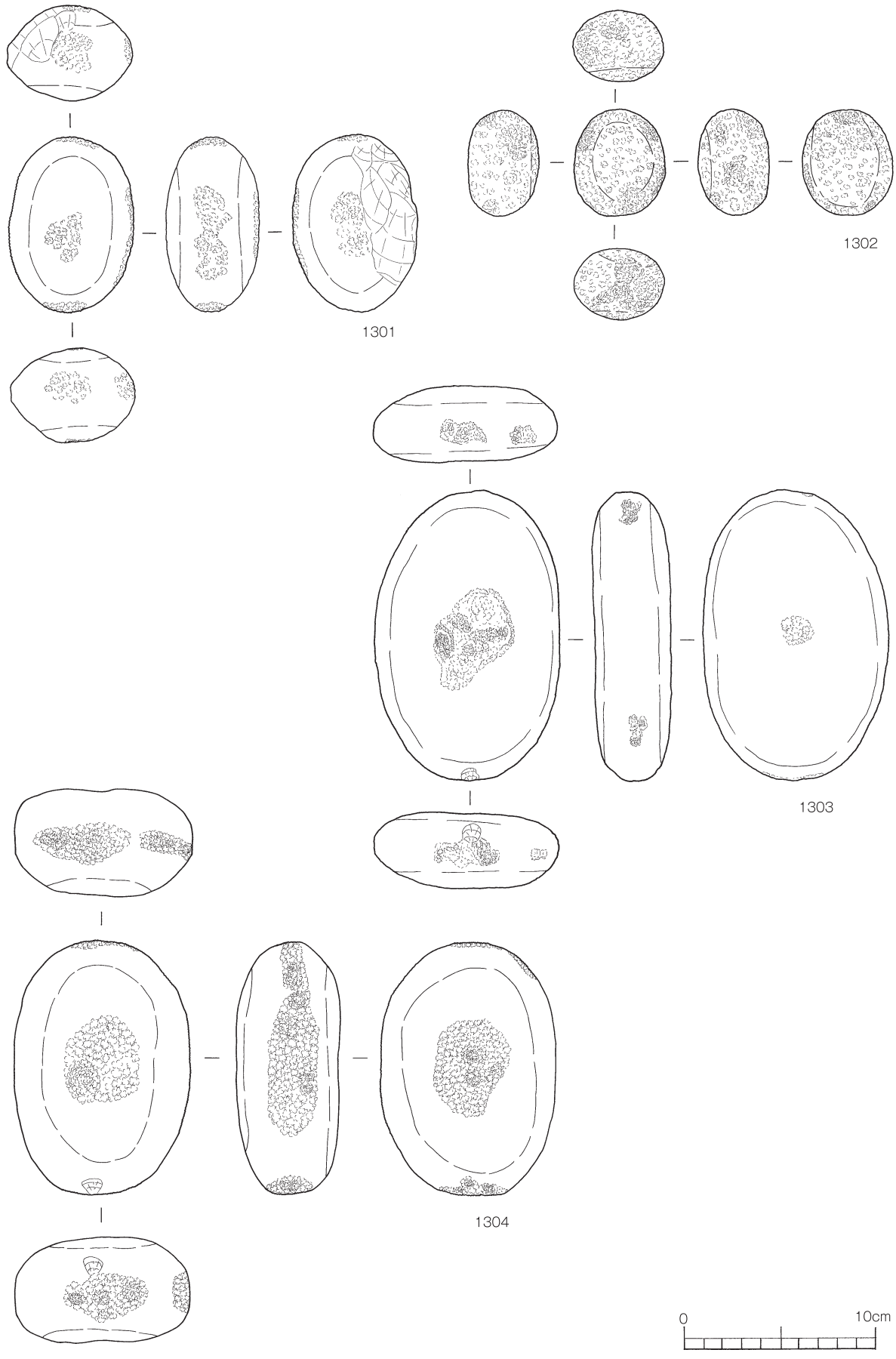


第177図　弥生時代の石器33（磨敲石９）

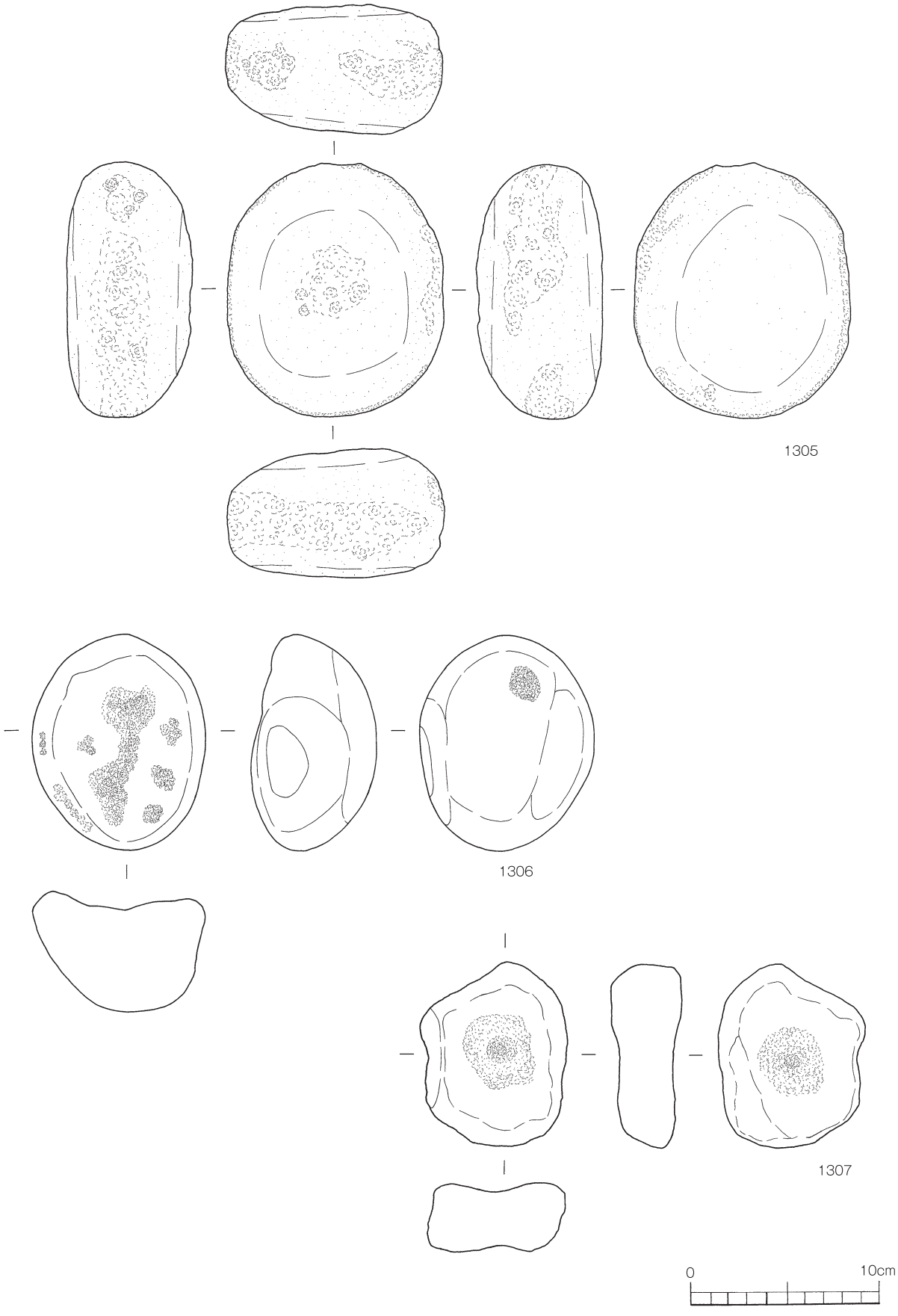


第178図　弥生時代の石器34（磨敲石10）

第179図　弥生時代の石器35（磨敲石11）

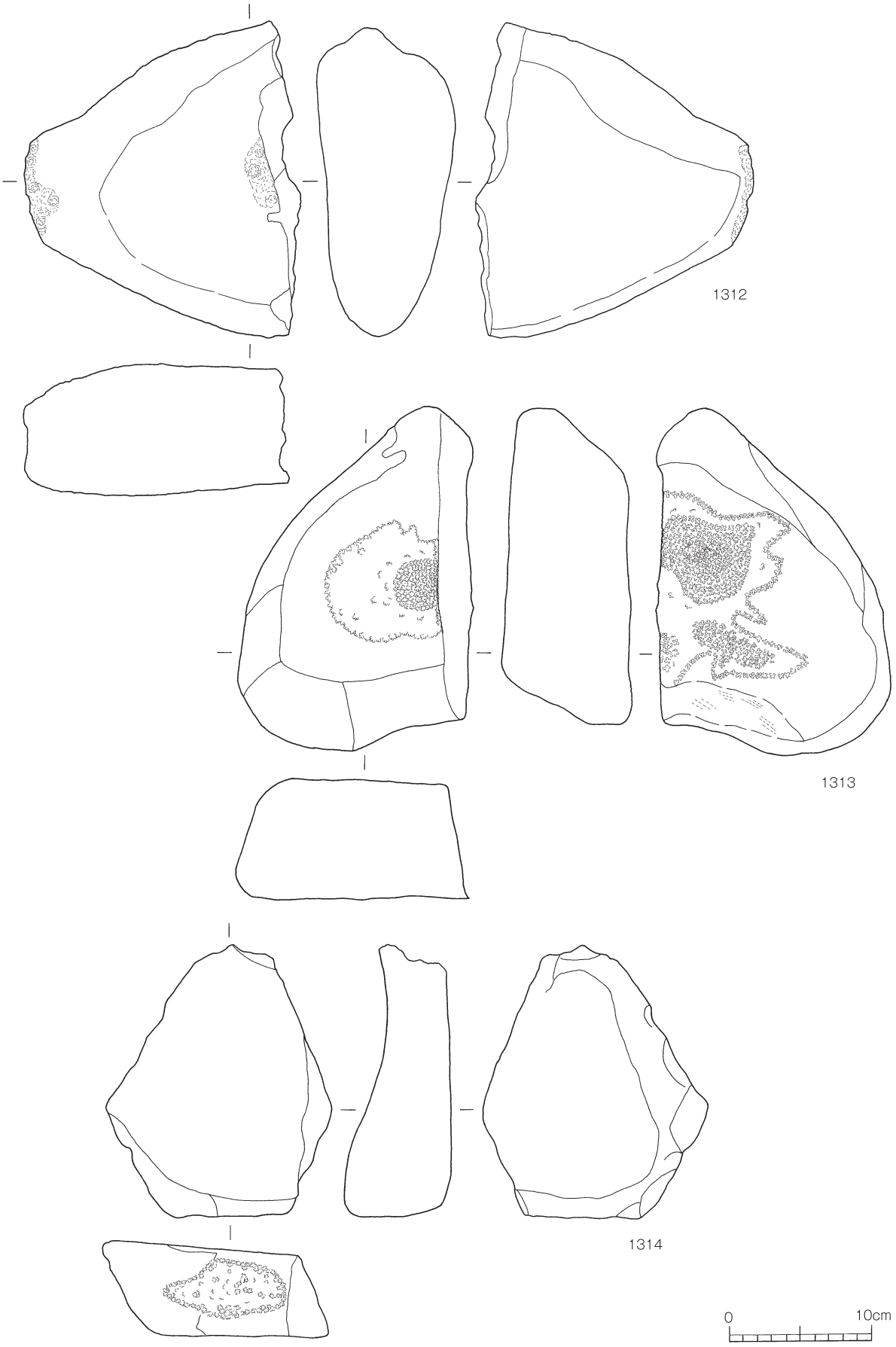


第180図　弥生時代の石器36（磨敲石12）

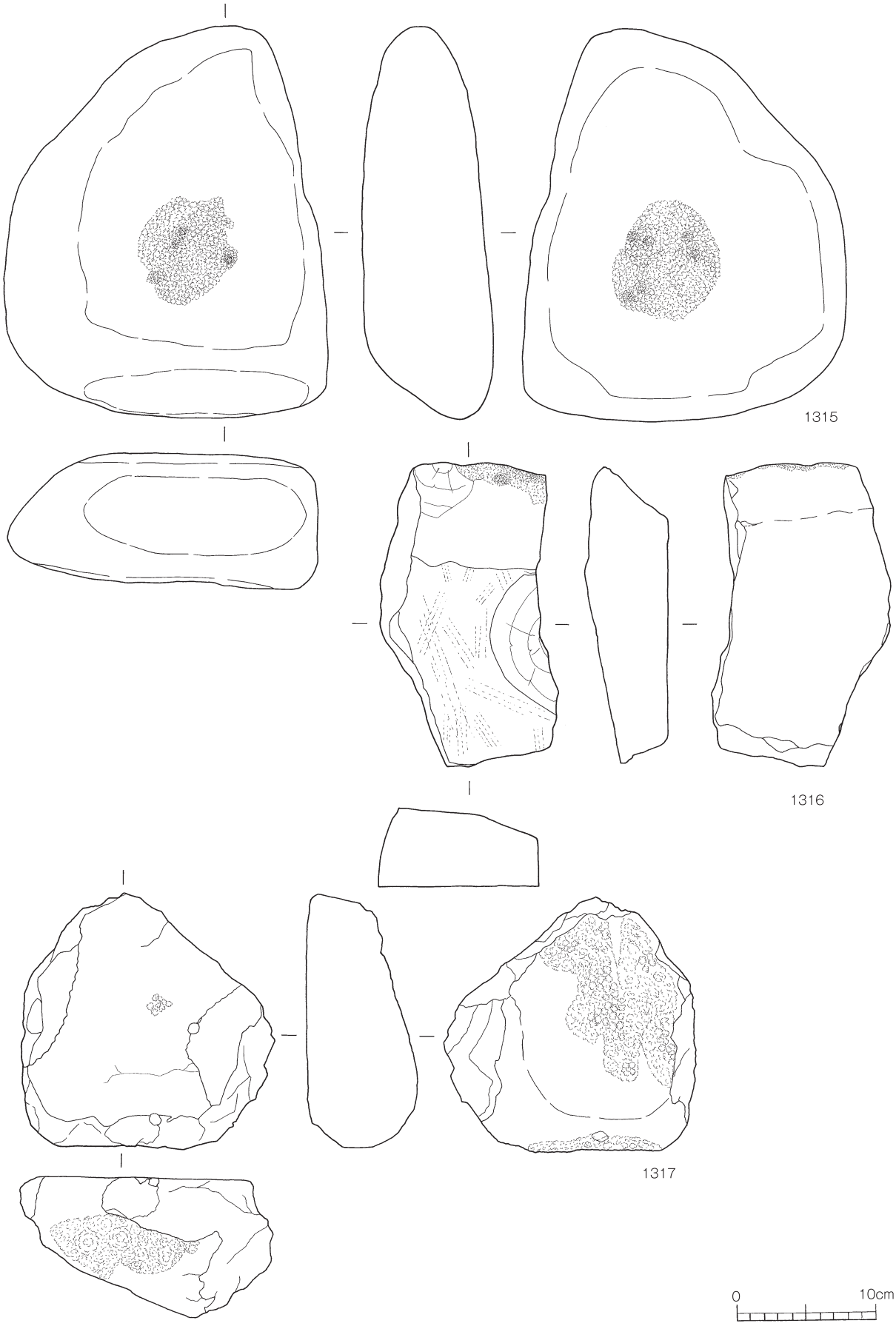


第181図　弥生時代の石器37（磨敲石13）

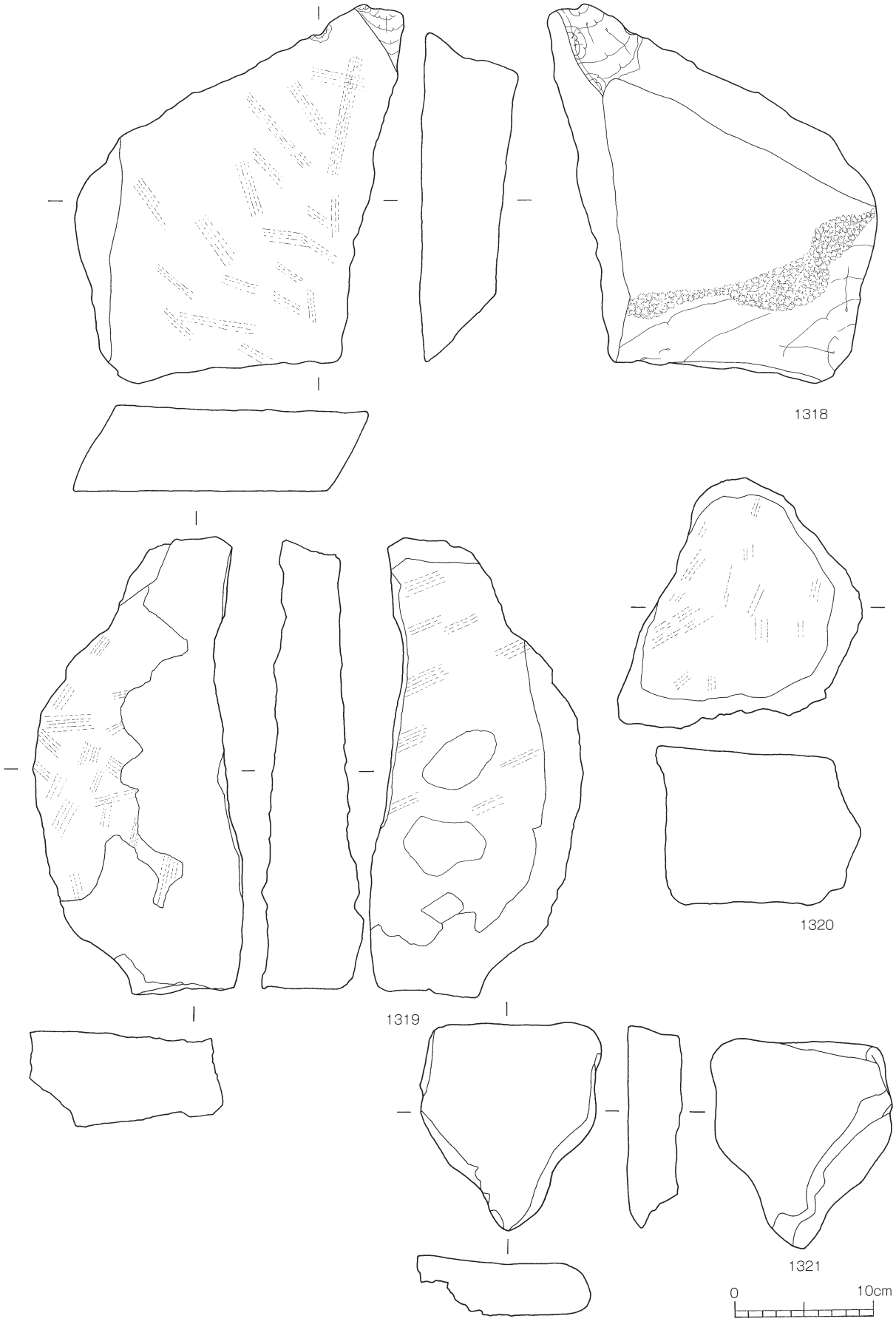
第182図　弥生時代の石器38（磨敲石14）



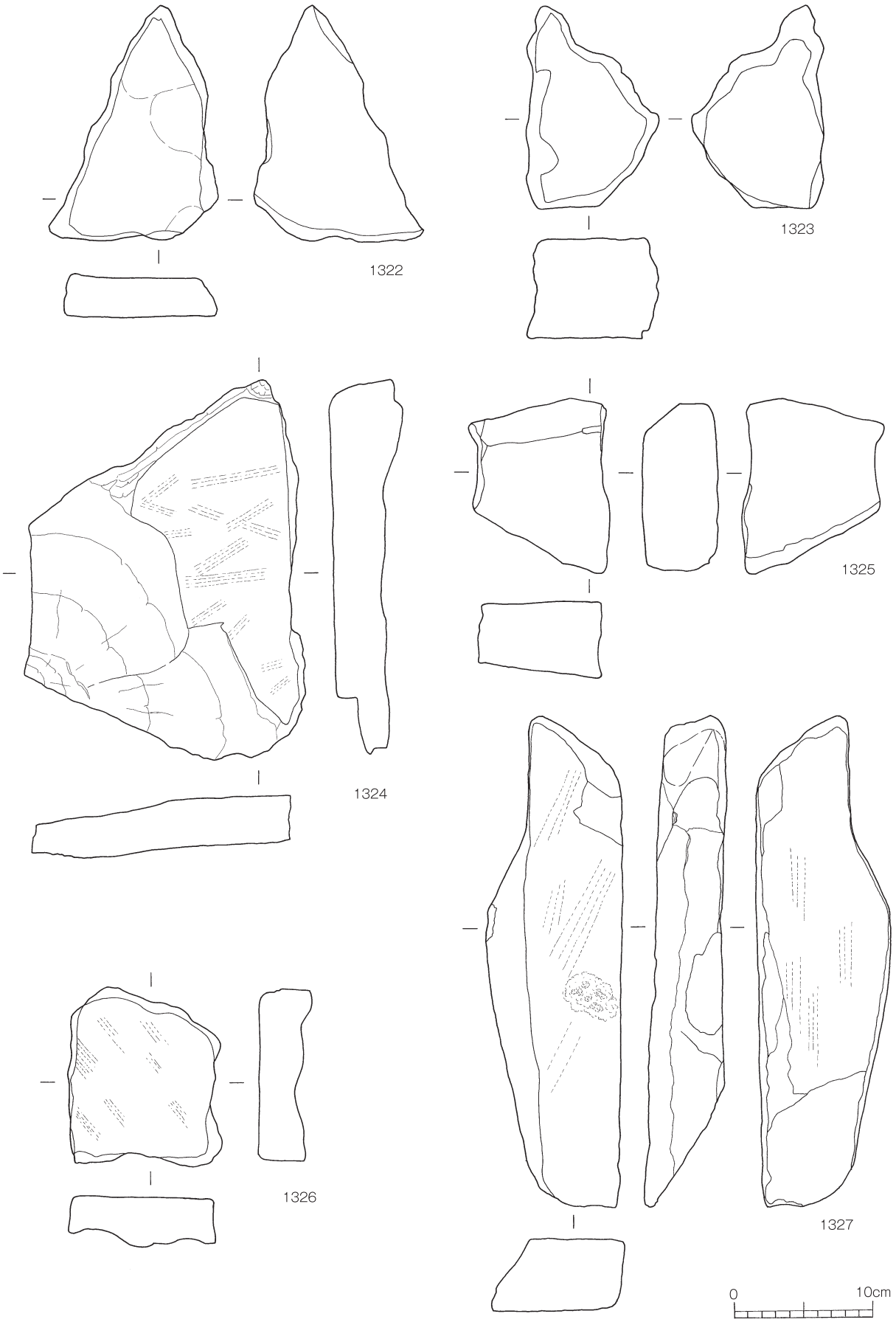
第183図　弥生時代の石器39（石皿１）



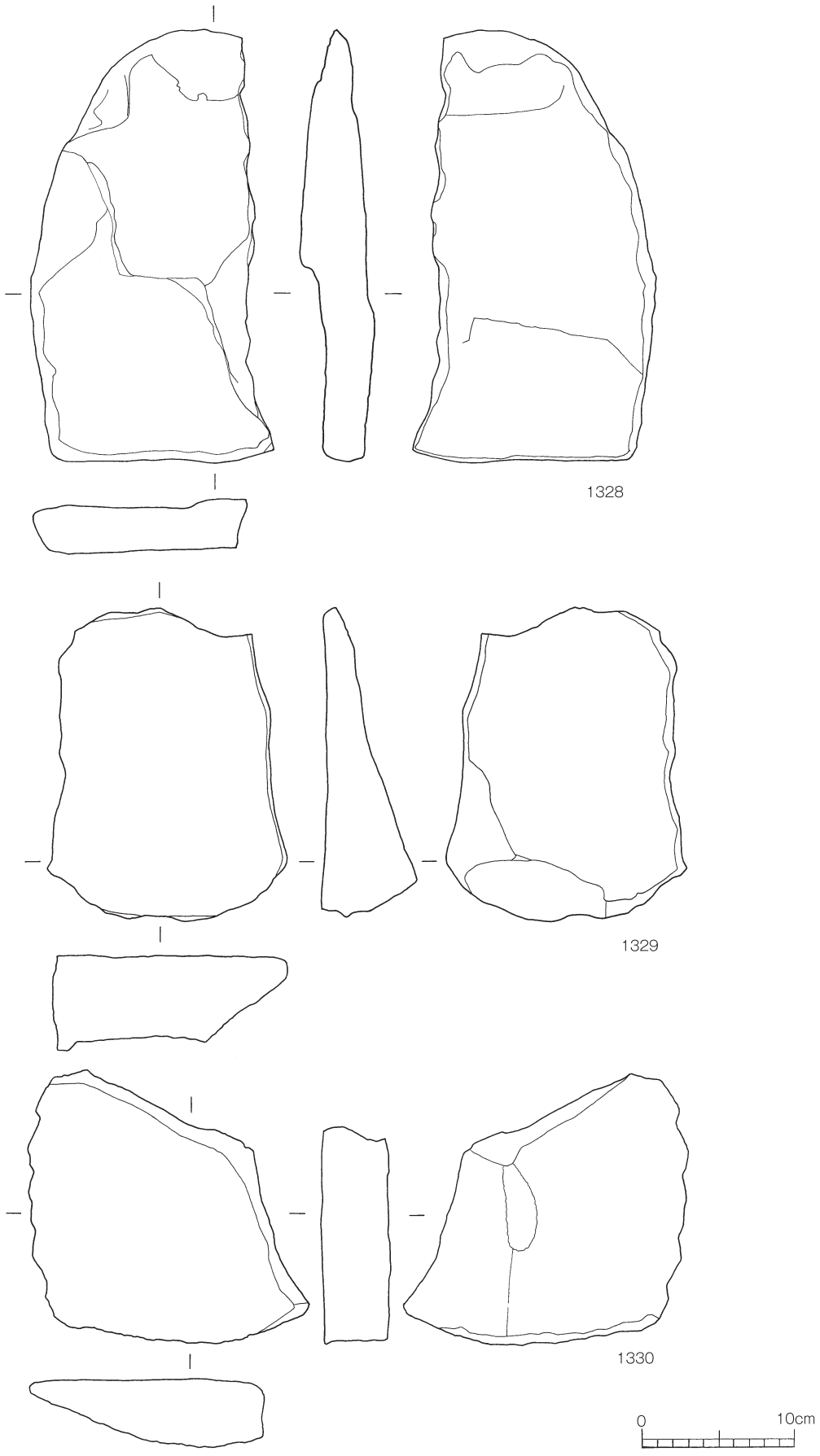
第184図　弥生時代の石器40（石皿２）



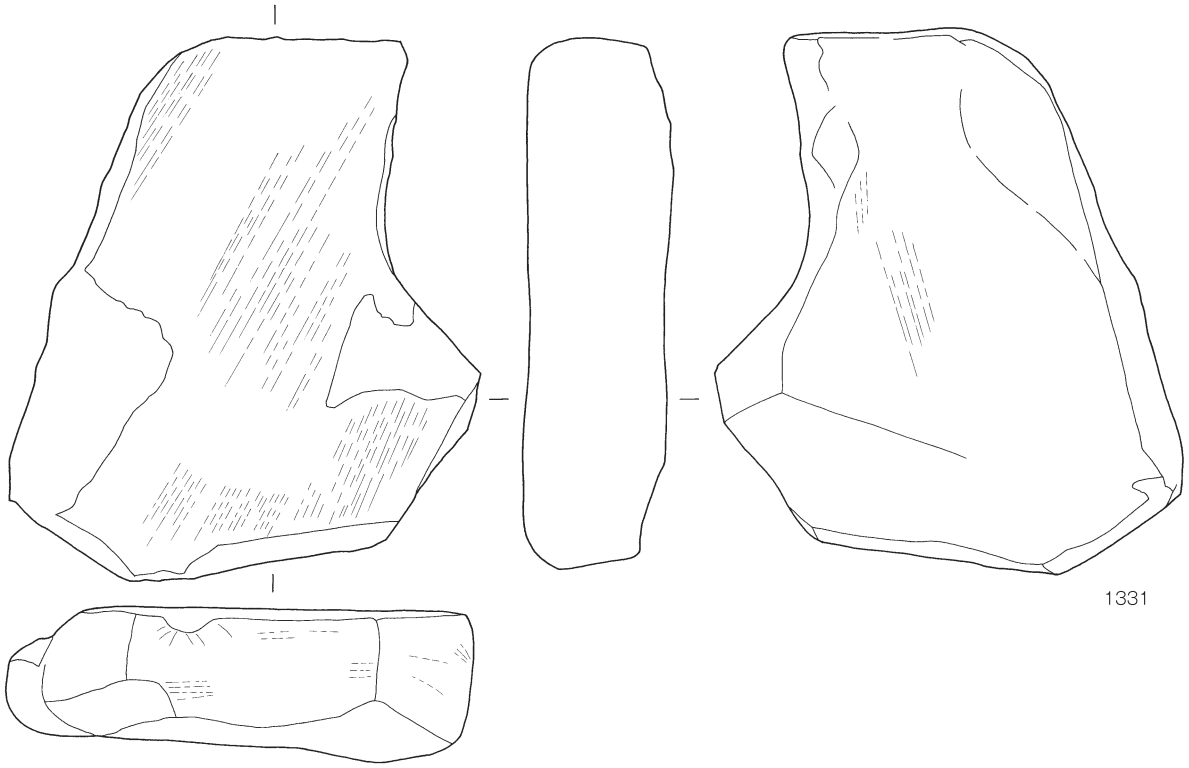
第185図　弥生時代の石器41（石皿３）

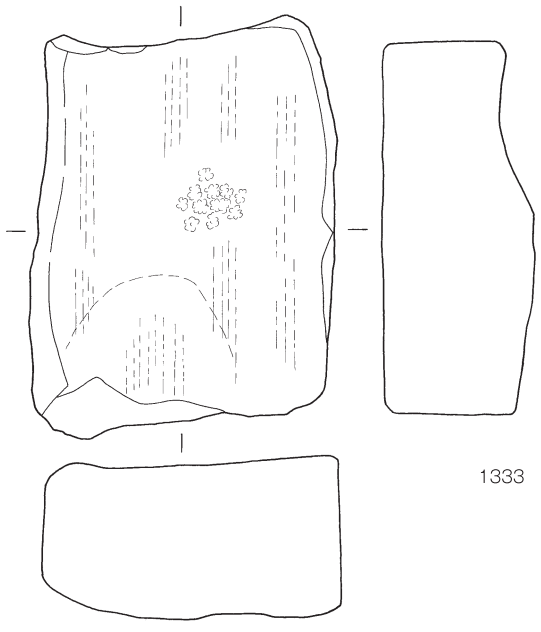


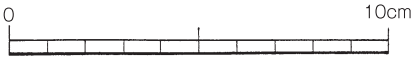
第186図　弥生時代の石器42（石皿４）



第187図　弥生時代の石器43（石皿５）







第188図　弥生時代の石器44（砥石１）

刃部先端が尖っているもの1059～1069に分類した。細身であるため，土を深く掘り下げることができる可能性がある。現在のキンツと呼ばれる土堀具との類似性が指摘でき，抉り部の装着痕あるいは擦痕が確認できる。1064は粘板岩の打製石斧である。打製石斧の出土遺物の中で一点のみの出土である。薄い剥片を粗く加工している。Ⅲ類の石材は，安山岩（1042～1044・1046～1055・1058・1059・1061・1063・1065・1068）頁岩（1041・1045・1056・1057・1060・1062・1066・1067）粘板岩（1064）石材比率は安山岩68％，頁岩29％，粘板岩３％である。

Ⅳ類（第153図～第154図　1070～1074）

装着部の抉りがほとんど確認できない，いわゆる短冊形状をしている。1072は比較的大型で使用痕がほとんど認められない。1073と1074は縁辺部に多数の使用痕が認められるため，使用による破損を整形しながらこの大きさに変形するまで使用されたものと思われる。最終形態の可能性がある。石材は，安山岩（1070・1071・1074）頁岩（1072・1073）である。石材比率は，安山岩60％，頁岩40％である。

基部から胴部にかけての破損品（分類不能の破損品）

（第154図～第155図　1075～1090）

基部から胴部にかけての形状を残している。抉りの深いものは，Ⅰ類及びⅡ類の可能性がある。抉りの浅いものはⅢ類に分類されるであろう。

基部の破損品

（第156図～第160図　1091～1146）

基部のみが残る破損品である。1077や1114，1115のように基部上端が曲線状を呈するものは，敲打痕が多数残り，破損後に敲打具として再利用されたものと思われる。

刃部の破損品

（第160図～第166図　1147～1205）

刃部の破損品である。破損面及び刃部先端の敲打痕から，基部の破損品と同様に，破損後に敲打具として再利用されたと推測されるものが多く出土している。

磨石・敲石類（第169図～第182図）

磨石・敲石類は，一部欠損品を含め150点が出土し，86点を図化した。ほとんどが扁平な円礫，楕円礫である。石材の形状などから，遺跡近辺の河原や海岸で転石を採取したものと思われる。ここでは，磨石・敲石・凹石として分類できるものと，石器製作等に伴う敲打具も含め，磨敲石として一括で扱った。

磨敲石は，以下のように分類した。

Ⅰ類

円礫及び楕円礫を用い，磨面及び側縁部に敲打痕があるものをⅠ類とした。更に磨面のみのものをⅠa類，磨面及び側縁部に一部敲打痕が残るものをⅠb類，磨面及び全側縁部に敲打痕が残るものをⅠc類とした。

Ⅱ類

棒状の楕円礫を用い，敲打痕の残るものをⅡ類とした。その中で，一部敲打されているものをⅡa類，磨き及び長軸の両端に敲打痕の残るものをⅡb類，磨痕は確認できないが，礫の長軸両端に敲打痕の残るものをⅡc類とした。

Ⅲ類

円礫及び楕円礫を用い，平坦部に敲打痕が残るものをⅢ類とした。その中で，平坦面中央部のみに敲打痕が残るものをⅢa類，平坦中央部及び側縁部に一部敲打痕が残るものをⅢb類，平坦中央部及び側縁全体に著しい敲打痕の残るものをⅢc類とした。

Ⅳ類

使用により，凹石状に凹んでいるものをⅣ類とした。

Ⅰ類（第169図～第174図　1225～1264）

1225～1229はⅠa類である。敲打痕は見られず，磨石として使用されたと思われる。全て安山岩製である。1229は砂岩製で，小型で扁平な自然礫を利用し，側縁部に磨痕が確認できる。

1230～1247はⅠb類に分類した。側縁部の上下面及び左右面に，使用されたと思われる痕跡が残される。1242は火を受けたと思われ，亀裂が認められる。

1236・1238・1259は，敲打痕の状況からハンマーストーンの可能性が考えられる。

石材は以下のとおりである。安山岩（1231・1232・1234・1236・1239・1240・1243・1245～1247）砂岩（1230・1233・1235・1237・1238・1241・1242・1244）である。

1248～1264はⅠc類である。素材の側縁部殆どに敲打痕が見られる。1250は平面部の中心付近を残し，殆どの面に敲打痕が確認できる。1253は上下側縁に二方向からの磨面が確認できる。素材を斜めに持ち，素材を持ち替えながら作業を繰り返したものと思われる。1260は比較的大型の表面の粗い素材を用いている。上下左右の側縁を使用した跡が見られる。このタイプは砂岩に分類されるものが多い。石材は，砂岩（1248～1255・1257～1259・1262）安山岩（1256・1260・1261・1264）である。

Ⅱ類（第174図～第177図　1265～1285）

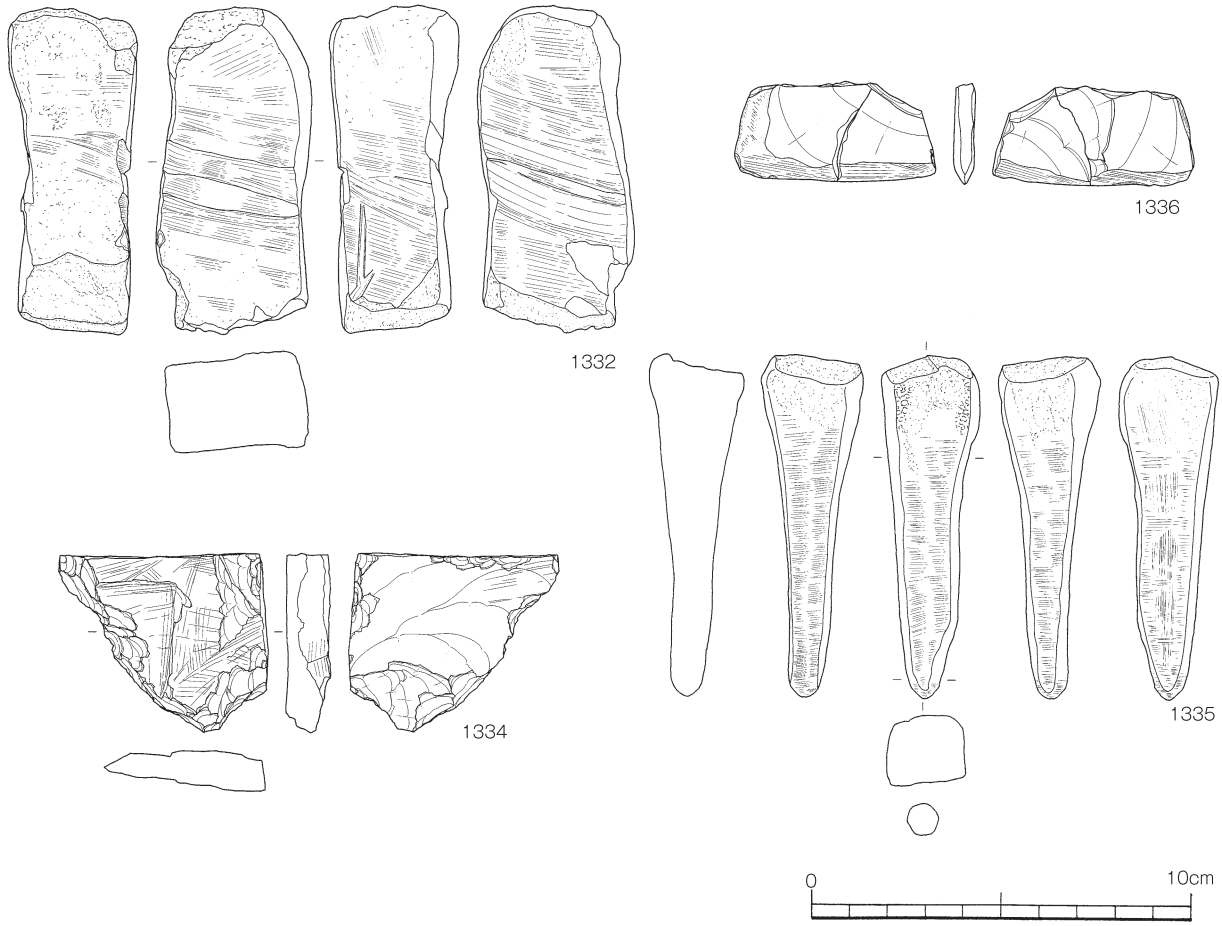
1265～1271はⅡa類である。棒状楕円礫の一部を使用し，浅い敲打を行っている。磨敲石として分類したが，棒状敲打具として打斧の調整に使われた可能性があるものを一括して扱った。石材は，砂岩（1265・1267・1268・1270・1271）安山岩（1266・1269）である。

1272～1279はⅡb類である。素材の長軸の両端に敲打痕が確認できる。1279は打斧の敲打調整を行った可能性がある。石材は，砂岩（1272～1276・1277）安山岩（1275・1278・1279）である。

1280～1285はⅡc類に分類した。礫の上下に浅い敲打痕が認められる。砂岩の小形の扁平楕円礫を素材としている。

Ⅲ類（第177図～第181図　1286～1305）

1286～1288はⅢa類に分類した。楕円礫の平坦面に敲打痕が確認できる。比較的浅い敲打痕であ



第189図　弥生時代の石器45（砥石２・石包丁・尖孔具）

る。1286と1288は砂岩製，1287は粗い自然面を呈す安山岩製である。

1289～1293はⅢb類に分類した。平坦面の敲打痕及び側縁部の一部に敲打痕が認められる。1293には敲打作業の際と思われる破損部が見られる。石材は，砂岩（1292）安山岩（1289～1291・1293）である。

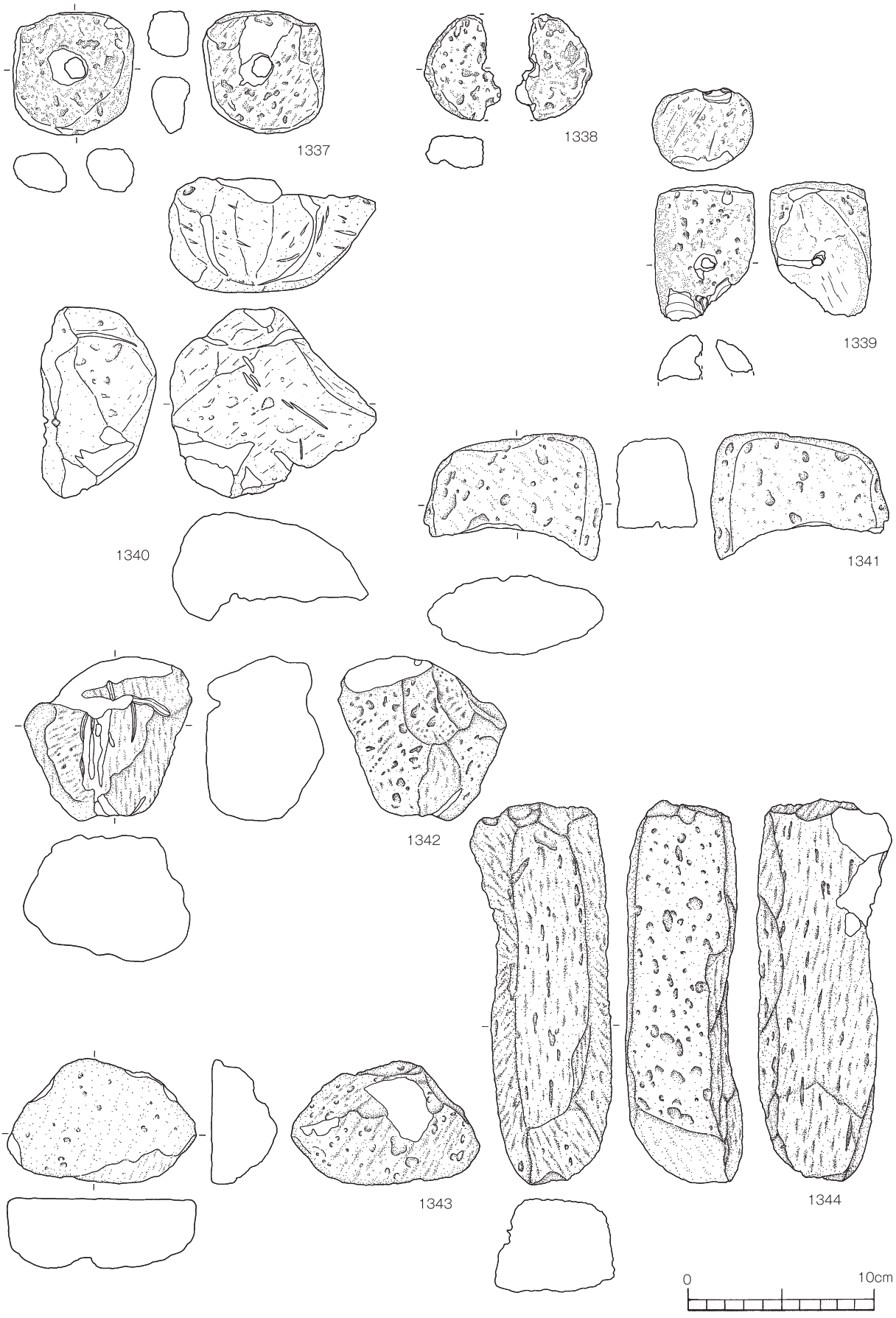
1294～1305はⅢc類に分類した。素材の平面への比較的深い敲打痕が認められる。また，1297・1300・1301には，敲打による剥離が確認できる。1294の破損は，火を受けたために弾けたものと思われる。石材は，安山岩（1300・1304）砂岩（1294～1299・1301・1302・1305）である。

Ⅳ類（第181図～第182図　1306～1311）

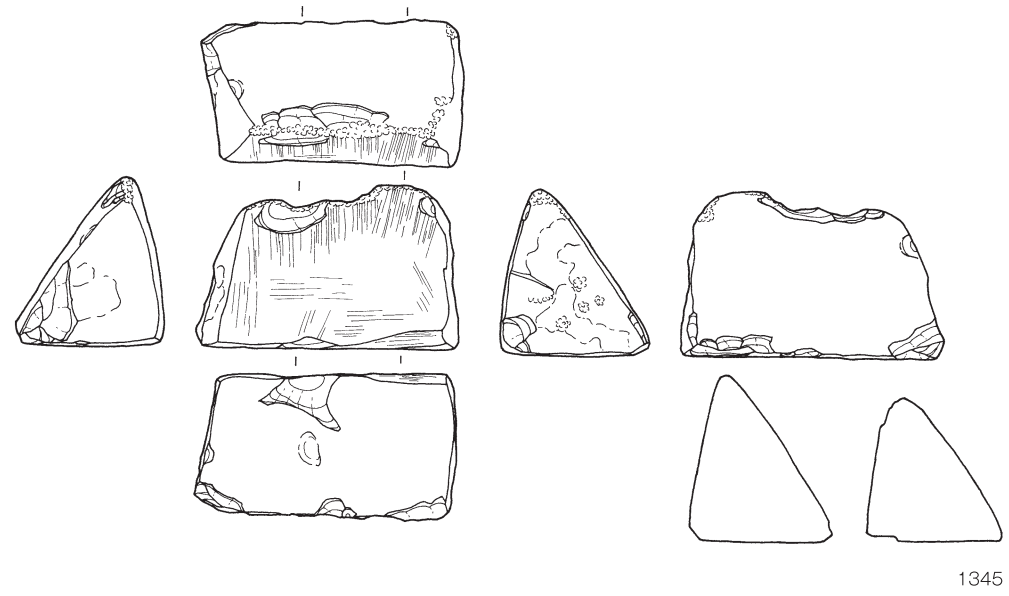
礫の平坦部は敲打と思われる作業により，深く凹んでいる。または，異なった使用法も考えられる。石材は，安山岩（1306・1307・1308・1309・1311）砂岩（1310）である。

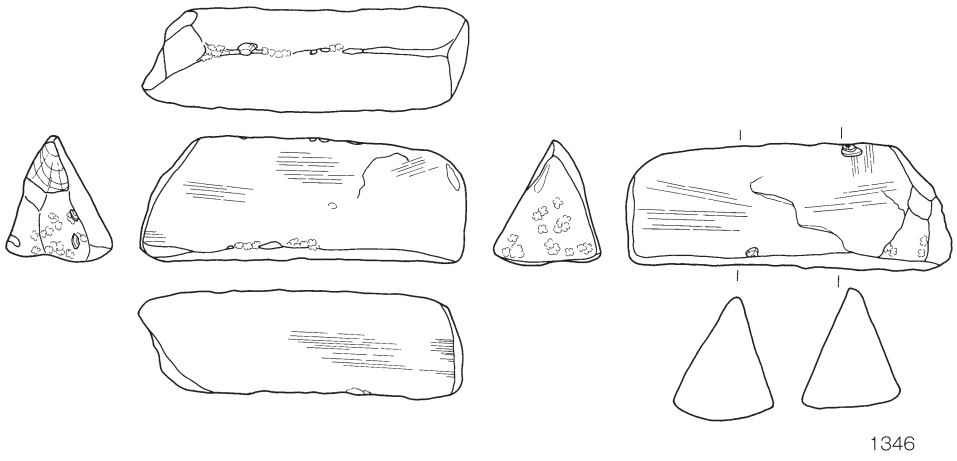
石皿（第183図～第187図　1312～1330）

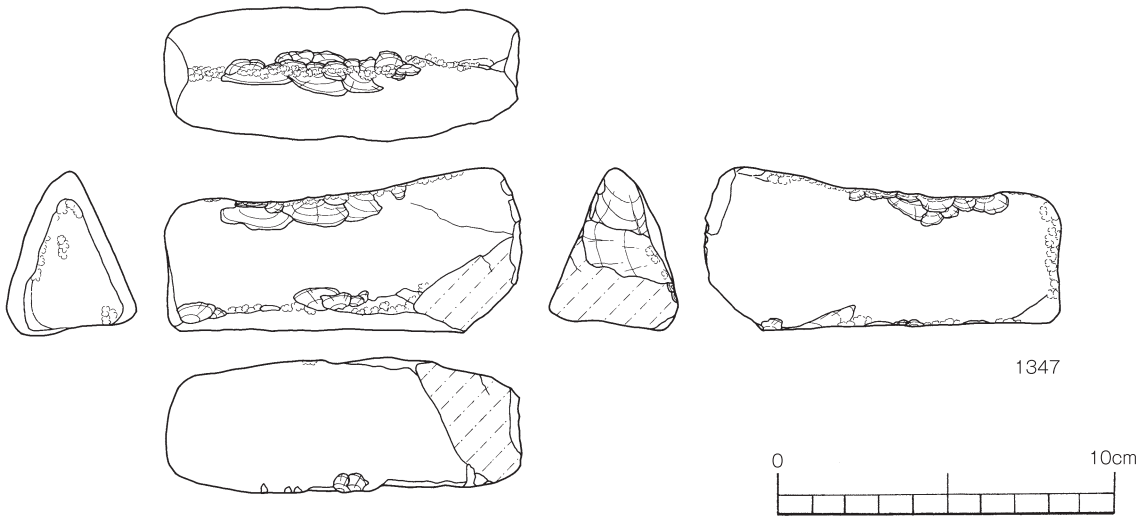
出土31点中21点を図化した。磨石・敲石などとセットをなし，対象物を破砕・粉化する機能を持ち，中央に敲打痕や凹んだ形態をもつもの，あるいはそれに相当する磨面をもつ石器を石皿とした。ある程度の厚さを保ちながらも全体的に扁平な石材を利用しており，使用頻度が増してくると，全



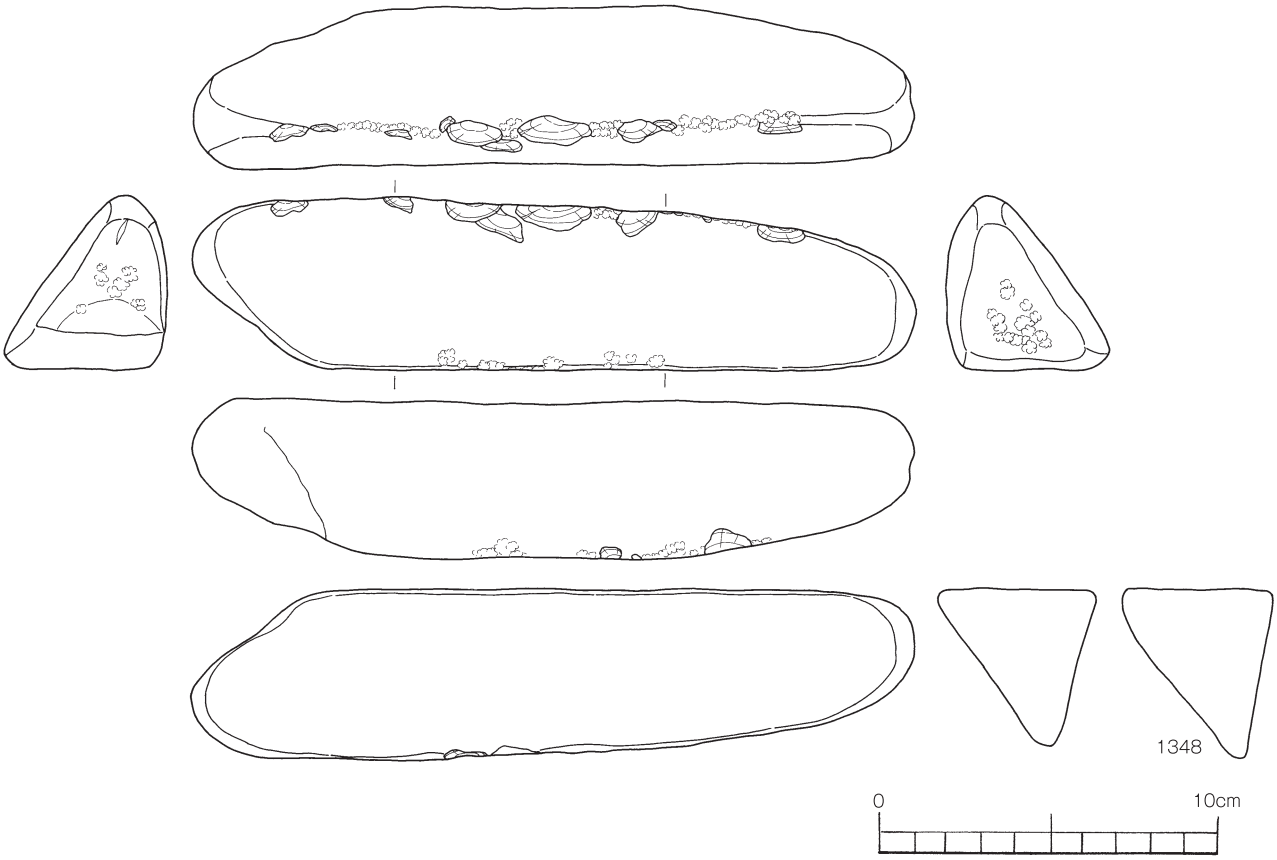
第190図　弥生時代の石器46（軽石製品）







第191図　弥生時代の石器47（三角壕形石製品１）



第192図　弥生時代の石器48（三角壕形石製品２）

体が凹レンズ状に窪んでくる。窪みの長軸方向に対して磨石などを掴んだ両手で前後方向の反復運動を繰り返して粉状にしたと考えられる。石材の粗い表面を利用した道具であるため，打製石斧の石材と同様の安山岩製のものや砂岩製のものが多い。その多くが破損品と思われるが，火を受け赤茶けた様相を呈するもの，または熱を受け，表面の一部がはじけ飛んでいるものが７点出土している。1315はほぼ完形での出土で，最大長27.9cm・最大幅22.8cm・重量8.2kgの安山岩の扁平な楕円礫の平坦部を石皿として使用している。1314は破損品であるが，礫の中心部分に向かって大きく窪み，相当の使用がされていると思われる。1312及び1313は1315と同様に扁平な自然礫であるが，中央部分で破損している。石皿の多くの縁部に石皿製作の際に，整形による調整が施されたと思われる加工痕が確認できる。

砥石（第188図～189図　1331～1334）

緻密で均一な石材を利用した研磨面を有する石器を，砥石として分類した。対象物，工程，機能などによって固有の分類があるが，ここでは出土数も少なく，時代照合もはっきりしないため，一括して扱うこととした。

1331は砂岩製，破損品ではあるが一定方向への線状痕が観察される。1332は現在でも砥石に利用されるいわゆる天草砥石に類似する。溝状の砥痕が認められる。1333は緻密な砂岩製で，一定方向に擦痕が確認でき，中心部に敲打痕が見られる。1334は頁岩製の破損品である。一定方向への磨痕

が認められ，使用によってすり鉢状に凹んでいる。

石包丁（第189図　1336）

1336は長方形状の石包丁で，砂岩製の接合資料である。刃部は両面から研磨を施し，鋭角の刃部を形成している。

尖孔具（第189図　1335）

1335は砂岩製の穿孔具である。錐部に擦痕が認められる。先端部には穿孔する際に生じたであろう擦痕が認められる。

軽石製品（第190図　1337～1344）

加工を施さない軽石を含め，42点が出土している。ここでは，明らかに人為的加工を施したと思われる８点を図化した。石材の性質上，破損品が多い。1337・1338は扁平な軽石の中央部に両面側から穿孔を施した軽石製品である。1338は破損している。1339は円柱形に加工した素材に三方向からの穿孔が確認できる。円柱形の中心部分でつながる形状になっている。破損品である。1340は円周上に筋状の彫り込みを施し，全体を磨き，何らかに模した加工がされていると思われる軽石製品である。破損のため，全容が不明である。1341・1343・1344は磨面と考えられる滑らかな面が観察できる。片面が平坦になっており，この面を使用している状況がうかがえる。

三角壕形石製品（第191図～第192図　1345～1348）

1345～1348は三角壕形石製品である。本遺跡では形状的に類似したものを含め，４点が出土し，すべて図化した。1345は安山岩製で最大長7.75㎝・最大幅4.95㎝・重量220gである。三角柱状の三面に磨きとも捉えられる擦痕が認められ，縁辺部分には，敲打痕が残される。1346も類似した安山岩製である。最大長9.6㎝，最大幅４㎝，重量112gで1345と同様に，敲打痕や磨痕が認められ，形状的にも類似している。1347は，砂岩製で最大長10.6㎝，最大幅5.1㎝，重量239ｇである。縁辺部には敲打痕が認められ，特に一辺には多くの敲打痕が観察できる。1348は既述の1345～1347に比べ，最大長が長く，磨痕は認められないが，三角柱状の砂岩の自然礫を利用し，敲打痕が認められるため本器種に分類した。

ここで呼称する三角壕形石製品は，新潟県や富山県など北陸地方で出土している三角壕形土製品に形状が類似している。ただし，三角壕形土製品に見られるような文様は確認できない。

規則性のある研磨面や，生活用具としては不自然な敲打痕が認められるため，生活用具ではなく，祭祀等で使用された可能性がある。市ノ原遺跡第３地点でも同様の石製品の出土がある。また，隣接する市ノ原遺跡第５地点では三角壕形土製品の出土がある。

第38表　弥生時代の石器観察表１

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長	幅	厚さ	重量	取上番号
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
第145図	996	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	15.85	11.3	1.9	305	5259
	997	打製石斧	E-18	Ⅲa	An1	13.65	7.8	2.0	238	11727
		打製石斧	E-19	Ⅲa	An1					30914
	998	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	15.5	11.0	1.85	275	27558
	999	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	14.9	8.15	2.6	325	14353
	1000	打製石斧	D-21	Ⅱ	Sh	14.2	9.05	2.15	250	5906
	1001	打製石斧	C-20	Ⅱ	An1	11.9	7.4	1.4	155	3579
	1002	打製石斧	C-23	Ⅱ	An1	12.15	10.7	1.8	210	—
	1003	打製石斧	C-21	Ⅲa	An1	9.0	7.15	1.8	139	3457
第146図	1004	打製石斧	D-19	Ⅲ	An1	19.5	9.25	1.4	160	29303
	1005	打製石斧	D-20	Ⅱ	An1	10.85	8.15	1.5	140	6032
	1006	打製石斧	C-21	Ⅲ	An1	13.25	9.1	1.3	159	8106
	1007	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	11.1	7.3	1.7	181	2037
	1008	打製石斧	E-21	Ⅱ	An1	18.6	8.5	1.7	370	3873
	1009	打製石斧	C-23	Ⅱ	An1	11.75	7.4	2.05	187	2788
	1010	打製石斧	D-20	Ⅱ	An1	12.0	6.75	2.2	183	5970
	1011	打製石斧	C-17	Ⅲa	An1	11.55	7.8	2.6	290	13900
第147図	1012	打製石斧	D-21	Ⅲa	An1	18.35	10.7	2.6	500	19649
		打製石斧	C-22	Ⅲa	An1					2687
	1013	打製石斧	D-14	Ⅱ	An1	10.85	7.5	1.8	145	6693
	1014	打製石斧	E-22	Ⅱ	An1	16.6	7.9	2.3	358	2894
		打製石斧	C-21	Ⅱ	An1					2103
	1015	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	11.5	7.8	2.25	202	14611
	1016	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	11.5	8.3	2.0	188	5261
	1017	打製石斧	C-17	Ⅲa	An1	11.1	7.2	1.8	155	24293
	1018	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	10.8	6.2	2.2	151	24771
	1019	打製石斧	D-21	Ⅲa	An1	11.15	8.1	1.9	193	19651
第148図	1020	打製石斧	D-23	Ⅱ	An1	11.7	9.2	1.9	199	3049
	1021	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	13.1	9.3	1.9	239	10747
	1022	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	10.45	8.3	2.3	188	29369
	1023	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	16.7	9.5	3.1	460	14542
	1024	打製石斧	D-7	Ⅱ	An1	11.2	8.6	1.6	140	178
	1025	打製石斧	C-21	Ⅲ	An1	12.75	8.2	1.55	160	8091
	1026	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	9.6	6.3	1.8	147	15381
	1027	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	10.2	6.4	1.4	175	29370
	1028	打製石斧	D-20	Ⅱ	An1	14.1	7.0	1.45	159	6036
第149図	1029	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	11.8	7.0	2.2	215	11716
	1030	打製石斧	D-20	Ⅲa	An1	11.7	6.8	2.6	184	27690
	1031	打製石斧	C-26	Ⅱ	An1	9.7	6.6	1.65	117	2433
	1032	打製石斧	C-17	—	Sh	10.6	6.35	1.05	98.0	—
	1033	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	11.0	7.15	2.45	200	2162
	1034	打製石斧	D-20	Ⅲa	Sh	11.7	7.7	1.6	169	28743
	1035	打製石斧	—	—	An1	19.95	7.65	2.4	273	—
	1036	打製石斧	C-17	Ⅲa	An1	10.1	8.0	1.6	120	25581
	1037	打製石斧	E-25	Ⅲb	An1	9.7	5.8	1.3	91	25566
	1038	打製石斧	D-20	Ⅲa	An1	12.75	6.3	3.05	312	26711
第150図	1039	打製石斧	C-16	Ⅲa	An1	10.35	7.4	1.7	128	10844
	1040	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	11.3	7.8	1.4	124	29949
	1041	打製石斧	C-22	Ⅱ	Sh	11.7	6.6	2.45	194	2644
	1042	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	13.45	7.0	2.45	263	30695
	1043	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	10.9	6.5	1.95	168	6223
	1044	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	12.3	7.1	2.5	249	25205
	1045	打製石斧	F-29	Ⅲa	Sh	10.5	5.3	1.5	116	17310
	1046	打製石斧	—	—	An1	10.8	6.1	2.15	173	—
第151図	1047	打製石斧	D-20	Ⅱ	An1	13.2	7.1	2.8	265	—
	1048	打製石斧	D-15	Ⅰ	An1	11.9	7.5	1.9	225	—
	1049	打製石斧	C-20	Ⅱ	An1	13.3	6.6	1.7	178	6489
	1050	打製石斧	C-19	Ⅱ	An1	12.2	6.15	2.35	200	1981
	1051	打製石斧	E-18	土坑	An1	13.2	7.35	2.4	245	20215
	1052	打製石斧	C-20	Ⅲa	An1	11.6	6.95	1.85	152	20635
	1053	打製石斧	—	—	An1	10.4	5.0	1.5	106	—
	1054	打製石斧	D-20	Ⅲa	An1	11.35	7.4	1.45	102	26711
第152図	1055	打製石斧	E-18	土20	An1	9.4	6.3	2.2	149	—
	1056	打製石斧	C-24	Ⅱ	Sh	11.7	5.3	1.7	127	3721
	1057	打製石斧	E-20	Ⅲa	Sh	9.45	5.15	1.8	110	26521
	1058	打製石斧	C-21	Ⅲa	An1	13.4	6.6	1.55	163	3458
	1059	打製石斧	D-23	Ⅱ	An1	12.55	5.6	1.85	180	2832
	1060	打製石斧	D-22	Ⅱ	Sh	11.15	5.35	1.7	99	4497
	1061	打製石斧	D-15	Ⅲa	An1	11.35	6.15	2.6	182	11150
	1062	打製石斧	F-25	Ⅲa	Sh	11.6	6.8	2.7	230	23092
	1063	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	12.2	5.5	2.05	139	30776
第153図	1064	打製石斧	B-20	Ⅱ	Cl	19.4	7.3	1.8	230	3595

第39表　弥生時代の石器観察表２

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長	幅	厚さ	重量	取上番号
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
第153図	1065	打製石斧	F-18	Ⅲa	An1	15.15	8.4	2.7	338	18610
		打製石斧	C-20	Ⅲa	An1					3409
	1066	打製石斧	B-20	Ⅱ	Sh	11.8	5.6	1.85	126	3596
	1067	打製石斧	E-18	Ⅲa	Sh	10.8	5.8	1.15	108	14440
	1068	打製石斧	B-21	Ⅱ	An1	13.65	7.2	1.55	128	3489
		打製石斧	D-21	Ⅱ	An1					6085
	1069	打製石斧	—	—	Sh	10.15	6.3	2.1	117	—
	1070	打製石斧	—	—	An1	11.7	6.8	1.7	175	—
	1071	打製石斧	E-27	Ⅲa	An1	14.8	7.0	2.5	245	19355
第154図	1072	打製石斧	C-9	—	Sh	18.5	7.3	2.5	450	—
	1073	打製石斧	D-24	Ⅲb	Sh	10.3	5.7	1.9	121	23698
	1074	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	9.2	5.5	1.5	88	28967
	1075	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	10.3	8.5	2.6	250	30114
	1076	打製石斧	C-22	Ⅲ	Sh	11.15	8.1	2.1	194	9401
	1077	打製石斧	E-20	Ⅱ	An1	11.8	7.05	3.0	252	31081
	1078	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	13.9	7.85	2.35	290	6064
	1079	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	9.5	5.25	2.5	146	15352
	1080	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	8.0	7.3	1.9	140	26952
第155図	1081	打製石斧	D-20	Ⅲa	Sh	9.4	7.3	1.5	99	27850
	1082	打製石斧	E-27	Ⅲa	An1	11.7	7.1	1.9	124	19369
	1083	打製石斧	G-30	Ⅲa	An1	7.9	7.4	1.4	103	16964
	1084	打製石斧	E-23	Ⅲb	An1	8.3	5.9	1.9	111	21290
	1085	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	10.3	6.2	1.85	156	29480
	1086	打製石斧	C-29	Ⅱ	Sh	8.1	8.0	1.75	122	4029
	1087	打製石斧	D-24	Ⅰ	An1	5.85	7.15	1.45	70	—
	1088	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	7.2	6.2	1.75	113	30120
	1089	打製石斧	B-21	Ⅲa	An1	8.4	5.5	2.05	96	16568
	1090	打製石斧	C-18	Ⅲa	An1	10.2	7.1	1.9	136	25842
第156図	1091	打製石斧	F-29	Ⅲa	An1	4.6	5.7	0.9	97	17763
	1092	打製石斧	C-19	Ⅲa	An1	9.3	7.4	2.2	163	4407
	1093	打製石斧	C-23	Ⅱ	An1	5.2	7.05	1.3	55	4208
	1094	打製石斧	D-24	Ⅱ	Sh	7.6	6.7	2.0	145	4801
	1095	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	10.0	6.0	0.85	66	2883
	1096	打製石斧	C-14	Ⅱ	An1	5.2	5.7	1.2	45	5939
	1097	打製石斧	D-26	Ⅱ	An1	5.35	6.3	1.5	67	2812
	1098	打製石斧	D-23	Ⅱ	An1	5.8	5.9	1.8	62	2923
	1099	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	6.0	6.6	1.3	78	11647
	1100	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	6.8	7.0	1.9	96	29580
	1101	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	6.6	7.8	2.1	132	30750
	1102	打製石斧	E-20	Ⅲa	An1	5.7	6.8	1.8	94	26579
第157図	1103	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	4.9	5.2	1.8	52	26416
	1104	打製石斧	C-9	Ⅲ	An1	6.1	8.3	1.0	60	—
	1105	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	6.15	6.8	1.7	95	2905
	1106	打製石斧	C-23	Ⅲa	An1	5.4	8.15	1.0	55	16751
	1107	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	5.6	6.2	1.8	75	16080
	1108	打製石斧	D-20	Ⅱ	An1	7.4	8.2	1.1	75	6037
	1109	打製石斧	—	—	Sh	7.3	6.9	1.45	72	—
	1110	打製石斧	F-27	Ⅲa	Sa	6.6	7.1	2.3	95	22757
	1111	打製石斧	D-16	Ⅲa	Sh	5.6	5.45	1.6	76	11230
	1112	打製石斧	E-20	Ⅲ	Sh	5.1	6.4	2.3	87	29362
	1113	打製石斧	E-19	Ⅲa	Sh	6.3	7.4	2.3	132	29704
	1114	打製石斧	E-16	Ⅲa	An1	7.9	6.4	2.2	146	18952
第158図	1115	打製石斧	E-20	Ⅲa	Sh	6.65	6.7	2.05	119	27543
	1116	打製石斧	E-18	Ⅲa	An1	7.7	5.2	2.1	115	18739
	1117	打製石斧	F-27	Ⅲa	Sh	4.6	4.8	1.0	29	18314
	1118	打製石斧	C-22	Ⅱ	An1	5.7	7.8	1.1	52	—
	1119	打製石斧	D-20	Ⅱ	Sa	5.7	5.2	1.75	53	5963
	1120	打製石斧	—	—	An1	5.65	5.0	1.25	42	—
	1121	打製石斧	C-19	Ⅱ	An1	4.7	5.8	1.8	67	3303
	1122	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	4.3	7.0	1.25	35	2150
	1123	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	6.8	6.8	1.0	51	11715
	1124	打製石斧	D-25	Ⅱ	An1	6.55	6.6	1.9	114	2492
	1125	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	4.4	6.4	1.9	48	4469
	1126	打製石斧	47T	Ⅱ	An1	5.65	5.15	2.3	78	72
	1127	打製石斧	E-28	Ⅲ	An1	6.9	5.75	1.85	90	18250
	1128	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	6.7	5.5	1.7	85	29478
第159図	1129	打製石斧	C-28	Ⅲa	An1	7.15	6.75	2.25	126	2454
	1130	打製石斧	C-20	Ⅱ	An1	7.05	7.8	1.5	87	3598
	1131	打製石斧	47T	Ⅱ	An1	7.6	6.8	2.4	125	11
	1132	打製石斧	D-22	Ⅱ	An1	6.15	5.6	2.15	95	4482
	1133	打製石斧	D-22	Ⅱ	An1	6.4	7.2	2.0	104	2198
	1134	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	7.2	7.9	1.4	96	2073

第40表　弥生時代の石器観察表３

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長	幅	厚さ	重量	取上番号
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
第159図	1135	打製石斧	D-22	Ⅱ	An1	6.2	7.1	1.3	57	2945
	1136	打製石斧	E-16	Ⅲa	An1	6.9	6.4	1.7	100	11264
	1137	打製石斧	E-18	Ⅲb	An1	5.5	6.4	1.5	59	20270
	1138	打製石斧	E-18	Ⅲa	Sh	5.55	5.4	1.8	78	19504
	1139	打製石斧	E-14	Ⅲ	Sh	6.3	6.0	1.65	65	1324
	1140	打製石斧	D-23	Ⅱ	An1	7.5	6.6	1.4	95	3998
第160図	1141	打製石斧	F-18	Ⅲa	An1	6.6	3.3	1.3	27	18647
	1142	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	6.05	6.85	1.7	72	15488
	1143	打製石斧	C-21	Ⅲa	An1	6.9	5.85	1.1	53	20637
	1144	打製石斧	D-17	Ⅲa	An1	7.4	6.1	1.7	90	15684
	1145	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	6.2	6.7	1.9	84	14339
	1146	打製石斧	C-20	Ⅱ	An1	7.5	7.3	1.75	120	3366
	1147	打製石斧	C-20	Ⅱ	An1	5.4	8.35	1.15	78	1938
	1148	打製石斧	E-11	Ⅱ	Sa	5.3	9.0	1.0	60	—
	1149	打製石斧	D-20	Ⅲa	Sa	5.3	7.9	0.9	59	26768
	1150	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	5.4	7.95	1.35	67	3825
	1151	打製石斧	D-17	Ⅲ	An1	9.1	8.1	2.0	145	20499
	1152	打製石斧	F-18	Ⅲa	An1	10.7	9.4	2.4	302	20288
第161図	1153	打製石斧	C-19	Ⅱ	An1	9.4	8.85	1.8	190	4429
	1154	打製石斧	D-15	Ⅱ	An1	11.4	9.2	2.15	262	6370
	1155	打製石斧	C-14	Ⅱ	An1	11.9	11.0	1.5	192	5937
	1156	打製石斧	—	Ⅰ	An1	8.5	8.3	1.3	116	—
	1157	打製石斧	C-22	Ⅱ	An1	7.05	11.15	1.35	93	4163
	1158	打製石斧	C-19	Ⅲa	An1	10.2	8.4	2.2	201	26889
	1159	打製石斧	E-16	Ⅲa	An1	12.8	10.8	2.4	400	19123
	1160	打製石斧	44T	Ⅱ	An1	10.5	9.2	1.75	200	109
	1161	打製石斧	D-23	Ⅱ	An1	9.45	9.9	1.3	128	4820
	1162	打製石斧	F-28	Ⅲa	An1	11.6	9.4	1.55	192	18182
第162図	1163	打製石斧	D-10	Ⅲ	Sa	14.1	10.6	2.3	330	1241
	1164	打製石斧	D-20	Ⅱ	An1	9.9	8.6	1.95	202	3820
	1165	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	10.55	7.7	1.8	150	14557
	1166	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	9.5	10.05	1.4	139	—
	1167	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	9.95	9.1	1.4	122	6198
	1168	打製石斧	C-22	Ⅱ	An1	8.4	7.7	1.3	74	3619
	1169	打製石斧	C-21	Ⅱ	Sa	14.2	8.5	1.9	222	2078
	1170	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	12.4	9.8	1.55	211	6200
第163図	1171	打製石斧	F-26	Ⅲa	An1	10.4	8.6	1.5	116	23409
	1172	打製石斧	D-15	Ⅱ	An1	12.9	9.3	1.55	200	6400
	1173	打製石斧	C-24	Ⅱ	An1	8.1	7.35	1.9	98	2380
	1174	打製石斧	C-23	Ⅲa	An1	10.7	7.15	2.1	210	4196
	1175	打製石斧	F-28	Ⅲa	An1	9.6	9.1	1.6	161	17697
	1176	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	9.1	6.85	1.85	140	15792
	1177	打製石斧	F-17	Ⅲa	An1	10.3	8.8	1.65	175	18809
	1178	打製石斧	E-25	Ⅲa	An1	10.0	8.7	1.1	98	32266
	1179	打製石斧	C-19	Ⅰ	An1	9.9	7.5	2.0	150	—
	1180	打製石斧	C-20	Ⅱ	An1	5.75	7.9	2.0	87	3398
第164図	1181	打製石斧	D-26	Ⅱ	An1	10.8	7.2	2.0	180	2805
	1182	打製石斧	F-25	Ⅲa	An1	7.9	6.5	1.1	67	22858
	1183	打製石斧	D-15	Ⅱ	An1	5.15	6.3	1.5	58	6409
	1184	打製石斧	D-21	Ⅱ	An1	7.55	8.15	1.2	71	7799
	1185	打製石斧	F-18	土坑	An1	6.0	3.7	1.65	40	20261
	1186	打製石斧	E-19	Ⅲa	An1	10.35	7.05	1.4	160	14580
	1187	打製石斧	C-29	Ⅲa	An1	9.0	6.2	1.8	82	2469
	1188	打製石斧	C-21	Ⅱ	Sh	7.55	6.7	1.7	99	3809
	1189	打製石斧	E-20	Ⅲa	Sh	6.9	5.1	2.1	83	30624
	1190	打製石斧	C-23	Ⅱ	An1	11.9	6.7	1.8	156	4289
	1191	打製石斧	E-17	Ⅲa	Sh	5.9	6.6	1.4	70	18965
	1192	打製石斧	C-18	Ⅲa	Sh	7.1	5.4	2.2	87	28374
第165図	1193	打製石斧	—	—	An1	9.1	6.0	1.8	108	—
	1194	打製石斧	C-18	P8	An1	6.0	6.55	1.25	63	—
	1195	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	8.3	5.8	2.05	111	2107
	1196	打製石斧	D-20	Ⅱ	Sh	10.15	6.6	1.45	110	6010
	1197	打製石斧	E-19	Ⅲa	Sh	9.9	5.65	2.1	140	14500
	1198	打製石斧	D-20	Ⅲa	An1	9.1	5.9	1.1	71	26704
	1199	打製石斧	C-23	Ⅲa	Sh	8.1	5.8	1.7	88	3685
	1200	打製石斧	F-19	Ⅲa	Sh	7.7	5.5	1.4	45	14505
	1201	打製石斧	C-25	Ⅱ	Sa	7.2	5.7	1.7	100	—
	1202	打製石斧	C-21	Ⅱ	An1	8.7	5.4	2.0	96	3807
第166図	1203	打製石斧	D-19	Ⅲa	An1	10.0	6.4	1.4	121	25014
	1204	打製石斧	G-35	Ⅲa	Sh	7.5	4.1	2.2	89	127671
	1205	打製石斧	—	—	Sh	7.5	5.0	1.6	81	—
第167図	1206	磨製石斧	E-27	Ⅲa	An1	15.0	7.6	5.0	772	32336

第41表　弥生時代の石器観察表４

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長	幅	厚さ	重量	取上番号
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
第167図	1207	磨製石斧	C-20	Ⅱ	Sa	19.3	7.5	3.25	590	6489
	1208	磨製石斧	F-29	Ⅲa	Sh	14.5	4.6	3.3	280	17723
		磨製石斧	F-29	Ⅲa	Sh					17722
	1209	磨製石斧	B-12	—	An1	17.3	6.9	3.5	644	—
	1210	磨製石斧	C-８	Ⅱ	Sa	18.3	5.8	4.2	540	100
		磨製石斧	C-８	Ⅱ	Sa					99
	1211	磨製石斧	D-20	Ⅱ	Sa	12.65	6.3	4.5	287	6041
第168図	1212	磨製石斧	C-21	Ⅱ	Sa	12.1	5.4	3.2	271	8078
	1213	磨製石斧	B-5	Ⅱ	Sa	11.9	5.15	3.2	220	413
	1214	磨製石斧	E-19	Ⅲa	Sh	7.6	6.05	3.1	157	14600
	1215	磨製石斧	D-24	Ⅱ	Sh	12.35	5.3	3.0	277	2751
	1216	磨製石斧	C-26	Ⅲa	Sh	9.0	5.9	1.75	152	13000
	1217	磨製石斧	D-21	Ⅱ	Sh	8.8	6.7	1.4	104	6066
	1218	磨製石斧	—	—	An1	5.6	5.9	2.8	122	—
	1219	磨製石斧	G-29	Ⅱ	Sa	3.5	4.3	1.6	40	10397
	1220	磨製石斧	C-25	Ⅲa	Sa	6.3	5.95	2.0	64	7205
	1221	磨製石斧	D-２	Ⅲb	Sh	8.4	7.3	1.7	142	11900
	1222	磨製石斧	C-20	Ⅲ	Sh	4.7	1.2	1.7	13	9031
	1223	磨製石斧	B-20	Ⅱ	Sh	2.6	1.5	0.7	4	4395
	1224	磨製石斧	C-20	Ⅱ	Sh	3.8	1.65	0.7	4	3368
第169図	1225	磨石敲石	—	—	An1	8.7	8.7	3.3	430	—
	1226	磨石敲石	F-18	P3	An1	7.5	6.9	5.3	355	—
	1227	磨石敲石	P6	Ⅲ	An1	6.3	4.9	3.3	150	534
	1228	磨石敲石	D-18	Ⅴ	An1	10.6	10.0	4.8	772	20490
	1229	磨石敲石	D-19	Ⅲa	Sa	4.95	3.5	1.05	60	28820
	1230	磨石敲石	C-25	P1	Sa	10.2	8.7	4.0	511	—
	1231	磨石敲石	D-19	Ⅲa	An1	6.7	4.85	2.2	110	25255
	1232	磨石敲石	C-18	Ⅲa	An1	7.4	5.9	2.8	160	25737
	1233	磨石敲石	E-19	Ⅲb	Sa	7.9	6.0	2.2	165	17516
第170図	1234	磨石敲石	E-21	Ⅲ	An1	12.3	9.85	4.2	690	7751
	1235	磨石敲石	D-21	Ⅲa	Sa	6.4	4.4	1.85	78	6164
	1236	磨石敲石	D-18	Ⅱ	An1	4.8	3.6	3.0	70	29307
	1237	磨石敲石	C-21	Ⅲb	Sa	7.8	5.9	2.8	191	17132
	1238	磨石敲石	C-21	Ⅱ	Sa	6.2	4.3	3.9	148	3128
	1239	磨石敲石	C-23	Ⅲb	An1	7.6	7.1	4.9	350	21448
	1240	磨石敲石	B-８	Ⅳ	An1	7.1	6.9	6.0	386	7018
	1241	磨石敲石	F-26	Ⅱ	Sa	7.9	9.1	6.5	620	22324
第171図	1242	磨石敲石	D-17	Ⅲa	Sa	10.7	7.4	5.6	610	14260
	1243	磨石敲石	B-20	Ⅱ	An1	6.6	5.0	3.3	160	3590
	1244	磨石敲石	C-22	Ⅲb	Sa	6.6	6.7	2.4	170	17182
	1245	磨石敲石	C-27	Ⅲb	An1	10.7	8.6	6.5	790	21157
	1246	磨石敲石	C-25	Ⅲa	An1	14.4	10.0	4.7	723	7223
	1247	磨石敲石	C-23	Ⅱ	An1	5.3	4.8	2.0	79	2789
第172図	1248	磨石敲石	D-20	Ⅱ	Sa	7.0	6.1	2.3	149	6034
	1249	磨石敲石	D-15	Ⅲ	Sa	6.7	5.6	3.4	192	8759
	1250	磨石敲石	D-21	Ⅲa	Sa	5.6	5.4	2.4	104	19833
	1251	磨石敲石	C-22	Ⅲ	An1	5.2	5.3	3.6	137	3442
	1252	磨石敲石	D-21	Ⅲa	Sa	7.6	5.3	3.5	179	19655
	1253	磨石敲石	C-19	Ⅱ	Sa	6.3	5.0	3.7	209	—
	1254	磨石敲石	D-21	Ⅱ	Sa	7.8	5.75	2.1	170	5266
	1255	磨石敲石	D-21	Ⅱ	Sa	5.0	5.3	2.3	92	5370
第173図	1256	磨石敲石	F-19	Ⅲa	An1	8.8	7.7	3.8	382	16227
	1257	磨石敲石	C-20	土坑2	Sa	4.8	4.8	3.1	105	—
	1258	磨石敲石	D-20	Ⅲa	An1	7.8	5.5	4.1	265	28771
	1259	磨石敲石	C-16	Ⅲa	Sa	6.4	4.4	2.6	104	10850
	1260	磨石敲石	B-5	Ⅱ	An1	13.0	10.1	4.2	760	409
第174図	1261	磨石敲石	B-17	Ⅲa	An1	6.0	5.0	3.3	166	32065
	1262	磨石敲石	E-18	Ⅲa	Sa	6.9	4.7	2.7	147	19641
	1263	磨石敲石	—	—	Sa	9.4	7.1	4.9	448	—
	1264	磨石敲石	D-19	Ⅲa	An1	4.5	3.1	1.4	22	25220
	1265	磨石敲石	E-18	Ⅲa	Sa	15.0	6.45	4.7	700	18713
	1266	磨石敲石	E-18	Ⅲa	An1	16.5	8.6	4.5	940	15240
	1267	磨石敲石	D-20	Ⅱ	Sa	12.0	5.5	2.5	245	6035
	1268	磨石敲石	—	Ⅰ	Sa	9.6	4.9	3.3	210	—
第175図	1269	磨石敲石	—	—	An1	14.8	4.4	3.8	293	—
	1270	磨石敲石	C-22	Ⅲ	Sa	10.9	5.7	2.9	280	9400
	1271	磨石敲石	C-21	Ⅱ	Sa	7.1	3.9	2.1	90	10664
	1272	磨石敲石	D-20	Ⅲa	Sa	6.7	3.7	3.0	103	28847
	1273	磨石敲石	C-22	Ⅱ	Sa	9.6	4.4	3.1	189	3605
	1274	磨石敲石	D-20	Ⅱ	Sa	11.8	4.5	3.0	239	6018
	1275	磨石敲石	C-20	土坑1	An1	10.5	5.3	3.6	308	—
	1276	磨石敲石	C-21	Ⅱ	Sa	10.2	4.9	2.0	143	2177

第42表　弥生時代の石器観察表５

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長	幅	厚さ	重量	取上番号
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
第175図	1277	磨石敲石	E-14	Ⅱ	Sa	8.2	4.1	1.8	78	6613
	1278	磨石敲石	D-19	Ⅲa	An1	7.5	4.1	2.9	100	26395
第176図	1279	磨石敲石	C-22	Ⅱ	An1	17.3	7.4	5.7	1018	2659
	1280	磨石敲石	—	—	Sa	6.7	2.9	1.9	52	—
	1281	磨石敲石	C-20	Ⅲa	Sa	7.2	3.8	2.5	100	20642
	1282	磨石敲石	C-6	Ⅱ	An1	17.6	12.4	3.3	878	454
	1283	磨石敲石	C-21	Ⅲa	Sa	7.8	4.5	2.1	110	3188
	1284	磨石敲石	C-25	Ⅱ	Sa	7.9	3.45	1.2	50	5156
	1285	磨石敲石	C-21	Ⅲb	Sa	9.8	4.2	1.8	120	17166
第177図	1286	磨石敲石	D-24	Ⅲ	An1	12.9	11.3	5.5	1188	8990
	1287	磨石敲石	F-25	P6	An1	7.4	7.4	4.5	300	—
	1288	磨石敲石	F-30	Ⅲa	Sa	12.8	7.3	4.5	660	17716
	1289	磨石敲石	C-8	Ⅳ	An1	9.5	5.8	5.2	425	5735
	1290	磨石敲石	C-26	Ⅲa	An1	8.2	8.7	5.1	510	2425
	1291	磨石敲石	I-32	Ⅳ	An1	7.3	7.3	5.4	450	—
第178図	1292	磨石敲石	—	—	Sa	13.8	10.1	5.2	935	—
	1293	磨石敲石	F-19	Ⅲa	An1	6.1	5.7	4.4	227	14398
	1294	磨石敲石	C-21	Ⅱ	Sa	9.4	8.6	4.9	612	2132
	1295	磨石敲石	E-18	Ⅲa	Sa	7.5	5.3	3.8	230	18753
	1296	磨石敲石	—	—	Sa	11.2	9.8	2.7	460	—
第179図	1297	磨石敲石	D-19	Ⅲa	Sa	6.7	4.5	2.8	129	28796
	1298	磨石敲石	D-6	Ⅲ	An1	10.8	8.3	5.3	750	529
	1299	磨石敲石	D-20	Ⅱ	An1	8.9	8.2	3.6	402	7109
	1300	磨石敲石	B-19	Ⅱ	An1	10.3	8.7	4.6	645	3581
第180図	1301	磨石敲石	D-15	Ⅲ	An1	9.1	6.5	4.9	419	8777
	1302	磨石敲石	C-18	Ⅲa	An1	5.5	4.8	3.7	133	30031
	1303	磨石敲石	C-20	Ⅱ	SA	15.2	9.6	4.0	940	3833
	1304	磨石敲石	D-21	Ⅳ	An1	13.1	9.0	5.4	1090	18284
第181図	1305	磨石敲石	F-26	Ⅲa	An1	13.4	11.4	6.7	1648	22254
	1306	磨石敲石	B-15	Ⅲa	An1	11.4	9.1	6.5	825	5840
	1307	磨石敲石	D-23	Ⅱ	An1	9.7	7.8	3.8	385	2704
第182図	1308	磨石敲石	D-19	Ⅲa	An1	13.2	10.6	5.3	1070	29884
	1309	磨石敲石	C-27	Ⅱ	An1	8.3	7.8	3.9	334	2450
	1310	磨石敲石(凹)	C-24	Ⅱ	Sa	9.8	7.0	3.5	320	2324
	1311	磨石敲石	C-24	Ⅲb	An1	9.5	9.9	4.1	371	21545
第183図	1312	石皿	C-23	Ⅱ	An1	22.0	19.1	8.7	4600	2987
	1313	石皿	C-16	Ⅲb	Sa	22.3	16.1	8.9	4800	16331
	1314	石皿	D-21	Ⅱ	An1	17.8	15.8	6.3	2400	11041
第184図	1315	石皿	—	Ⅱ	An1	27.9	22.8	9.8	8200	—
	1316	石皿	C-18	Ⅲa	An1	14.9	9.4	4.1	940	24644
	1317	石皿	C-7	Ⅲ	An1	17.9	17.8	9.7	3000	5688
第185図	1318	石皿	D-15	Ⅲ	Sa	20.0	17.4	4.2	1790	8512
	1319	石皿	F-28	Ⅲa	An1	24.3	10.3	5.1	2030	18178
	1320	石皿	C-21	Ⅱ	An1	16.4	17.1	15.6	1200	3190
	1321	石皿	D-25	Ⅲ	An1	14.6	13.1	3.7	850	8939
第186図	1322	石皿	E-22	Ⅲ	An1	16.8	12.0	2.8	770	7723
	1323	石皿	C-23	Ⅱ	An1	14.4	9.4	7.0	1380	2692
	1324	石皿	D-23	Ⅱ	An1	20.3	15.0	3.0	1200	4850
	1325	石皿	B-17	Ⅲa	Sa	12.5	10.3	5.4	980	26096
	1326	石皿	C-25	Ⅲa	An1	9.3	8.1	2.6	310	12850
	1327	石皿	E-19	Ⅲa	An1	35.0	10.1	5.2	2800	14557
第187図	1328	石皿	C-20	Ⅱ	An1	27.8	13.9	3.2	2600	3417
	1329	石皿	C-19	Ⅱ	An1	19.9	15.4	6.2	2130	4447
	1330	石皿	B-10	Ⅳ	An1	16.7	18.2	4.2	1700	1157
第188図	1331	砥石	D-19	Ⅲa	Sa	14.3	12.4	3.6	930	29884
第189図	1332	砥石	E-29	Ⅱ	Sa	8.7	4.0	3.7	179	10512
第188図	1333	砥石	C-21	Ⅱ	Sa	11.1	7.7	4.1	620	—
第189図	1334	砥石	D-19	Ⅲa	Sh	4.7	5.55	1.1	35	28868
	1335	砥石	B-5	Ⅲ	Sa	9.1	2.6	2.7	52	672
	1336	石包丁	D-22	Ⅱ	Sa	2.4	5.3	0.55	10	—
第190図	1337	有孔軽石軽石製品	—	Ⅱ	Pu	6.6	6.4	2.3	22	—
	1338	有孔軽石軽石製品	E-20	Ⅲa	Pu	5.7	4.1	1.2	13	28525
	1339	有孔軽石軽石製品	C-21	Ⅱ	Pu	7.2	5.4	4.4	42	2300
	1340	軽石製品	D-15	Ⅲa	Pu	10.2	11.0	5.8	133	19153
	1341	軽石製品	E-19	Ⅲa	Pu	6.8	9.5	4.2	78	30103
	1342	軽石製品	D-19	Ⅲa	Pu	8.8	7.0	6.8	147	29584
	1343	軽石製品	D-21	Ⅱ	Pu	6.7	10.0	3.8	75	—
	1344	軽石製品	F-25	—	Pu	20.5	7.3	5.0	311	—
第191図	1345	三角壕形石製品	—	—	An1	7.75	4.95	5.0	220	—
	1346	三角壕形石製品	D-2	P	An1	9.6	4.0	3.0	112	11903
	1347	三角壕形石製品	D-15	Ⅱ	Sa	10.6	5.1	3.7	239	6392
第192図	1348	三角壕形石製品	D-16	Ⅲb	Sa	21.3	6.1	3.7	646	14300

第３節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に該当する遺構・遺物は，Ⅱ層及びⅢ層から発見された。遺構は，住居跡などの集落を想定できるものは検出されなかったが，Ⅲ層で土坑や焼土遺構が検出されている。遺物は，Ⅲa層を中心に南九州の在地土器である成川式土器が数多く出土している。

１　遺構（第193～197図）

土坑が７基，焼土域が３か所検出されている。これらの遺構の埋土には，縄文土器や弥生土器など古墳時代よりも古い時期の遺物が含まれているものもあるが，より新しい成川式土器の遺物があることから，古墳時代の時期と判断した。

⑴　土坑・ピット群（第194～196図）

Ⅲ層から，７基検出された。調査区のほぼ中央，Ｃ・Ｄ-17～22区で多く検出されている。平面形は，円形，楕円形，不定形と大きさや形状に類似性はみられない。

土坑１（第194図）

Ｂ-13・14区のⅢ層で検出された。北側部分が削平を受けているが，長径85cm，短径80cmのほぼ円形を呈し，検出面からの深さは約25cmである。底面は平坦で，直に立ち上がる。埋土中から成川式土器と考えられる小片が出土している。

土坑２（第194図）

Ｃ-17区のⅢ層で検出された。長径121cm，短径73cmの略楕円形を呈し，検出面からの深さは約20cmである。底面はほぼ平坦で，西側がさらに深く落ち込んでいる。埋土中から成川式土器と考えられる小片が出土している。

土坑３（第194図）

Ｃ-18区のⅢ層で検出された。長径170cm，短径88cmの略楕円形を呈し，検出面からの深さは約30cmである。土坑全体が，５～６つの小ピットによって切られている。

土坑４（第194図）

Ｂ-19区のⅢ層で検出された。長径175cm，短径60cmの不定形を呈し，検出面からの深さは40～50cmである。底面はほぼ平坦で，北西側はゆるやかに立ち上がる。土坑内に２つのピットがある。

土坑５（第194図）

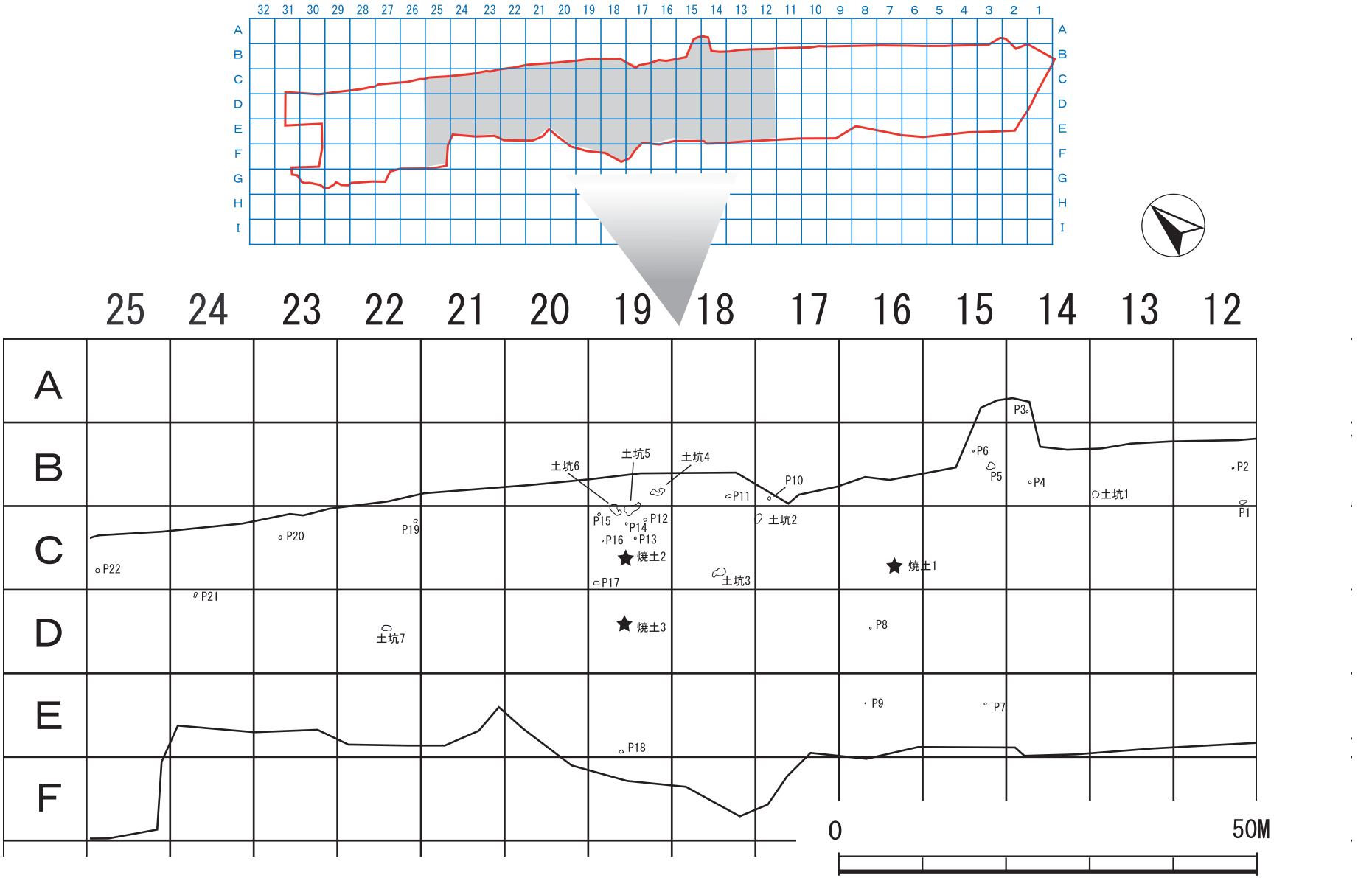
Ｃ-19区のⅢ層で検出された。長径206cm，短径110cmの不定形を呈し，検出面からの深さは約30cmである。底面は，平坦で直に立ち上がる。底面に３つの小ピットがある。埋土中から，成川式土器と考えられる小片が出土している。

土坑６（第195図）

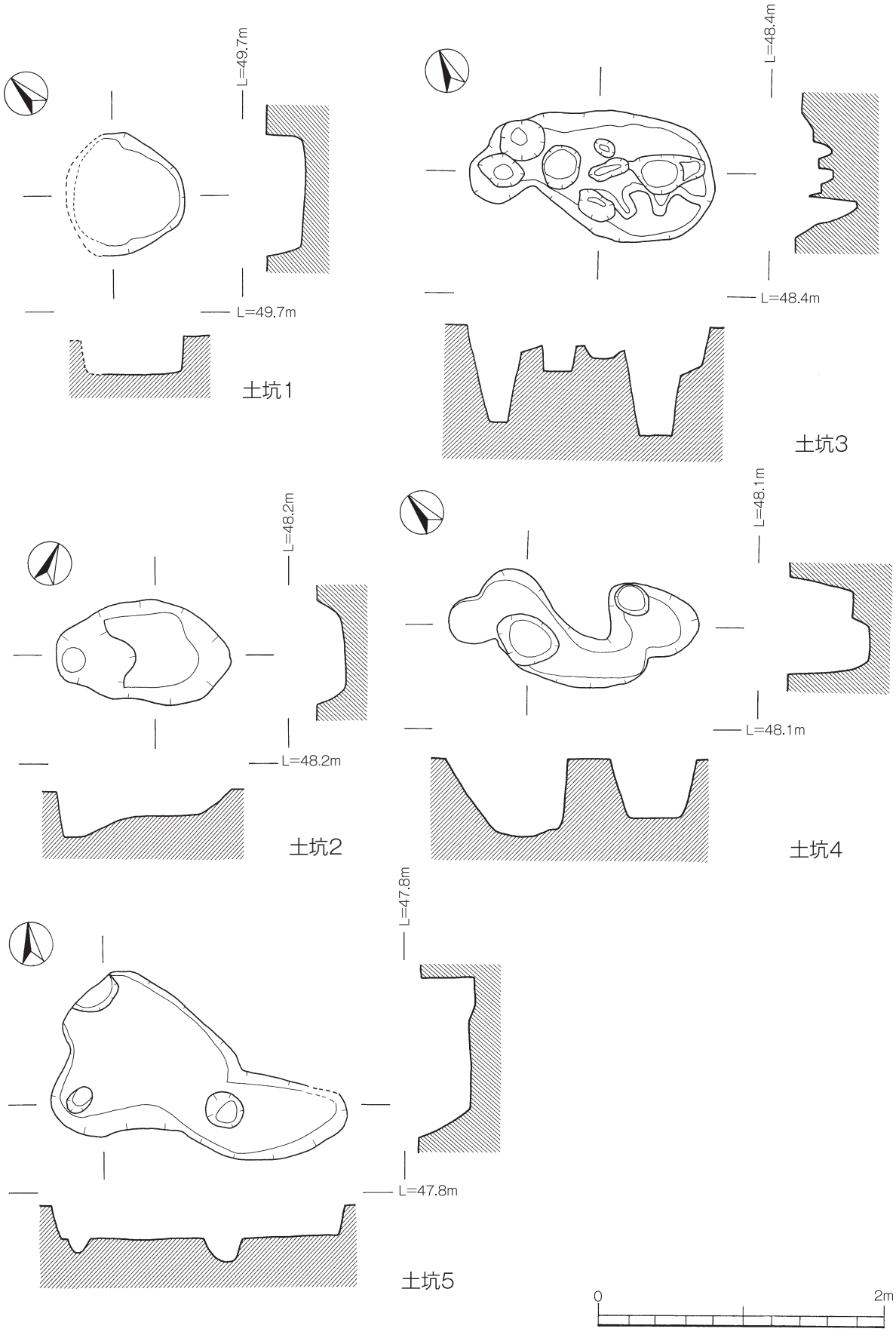
Ｃ-19区のⅢ層で検出された。長径142cm，短径68cmの不定形を呈し，検出面からの深さは約35cmである。底面は，平坦で直に立ち上がる。南側に小ピットがある。

土坑７（第195図）

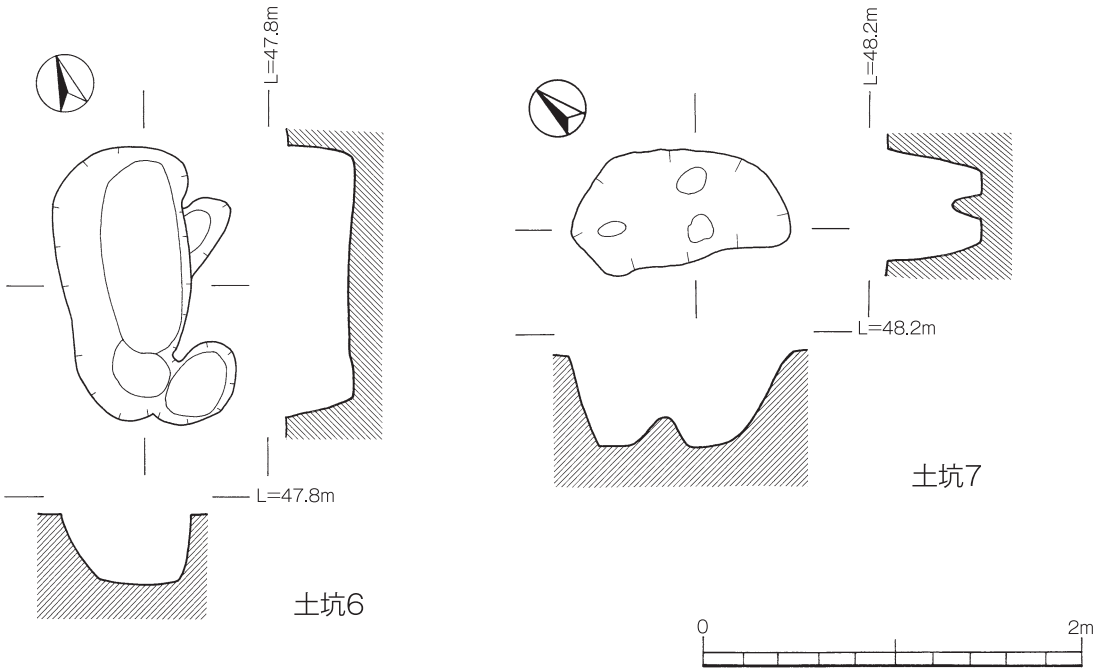
Ｄ-22区のⅢ層で検出された。長径116cm，短径58cmの略楕円形を呈し，検出面からの深さは約50cmである。底面はほぼ平坦だが，中央部が約15cm突出している。



第193図　古墳時代の遺構配置図



第194図　古墳時代の土坑１



第195図　古墳時代の土坑２

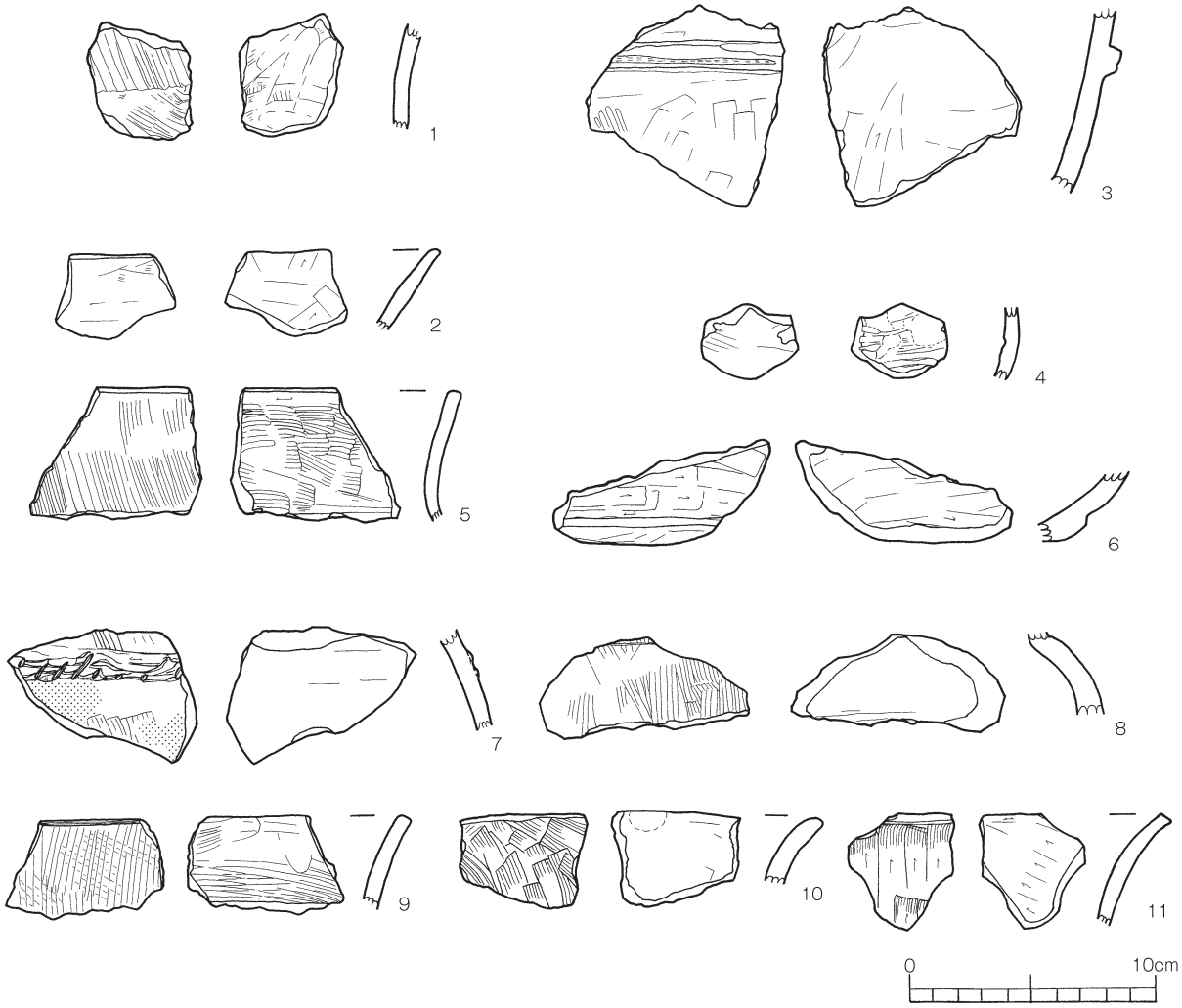
第43表　古墳時代の土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	出土遺物番号	備考（旧遺構名）
194	土坑1	B　ー　13	85	80	25	ー	ー
	土坑2	C　ー　17	121	73	20	ー	土坑3
	土坑3	C　ー　18	170	88	30	1	土坑2
	土坑4	B　ー　19	175	60	40	ー	土坑3
	土坑5	C　ー　19	206	110	30	ー	土坑2
195	土坑6	C　ー　19	142	68	35	2,3	土坑1
	土坑7	D　ー　22	116	58	50	4	土坑5

土坑・ピット内出土遺物（第196図，１～11）

１は，土坑３の埋土から出土した甕形土器の頸部である。外面は、縦方向のハケ目調整で仕上げられている。２は，土坑６の埋土から出土した坩形土器の口縁部である。３は，土坑６の埋土から出土した壺形土器の胴部である。断面台形の突帯が貼り付く。４は，土坑７の埋土から出土した坩形土器の胴部である。

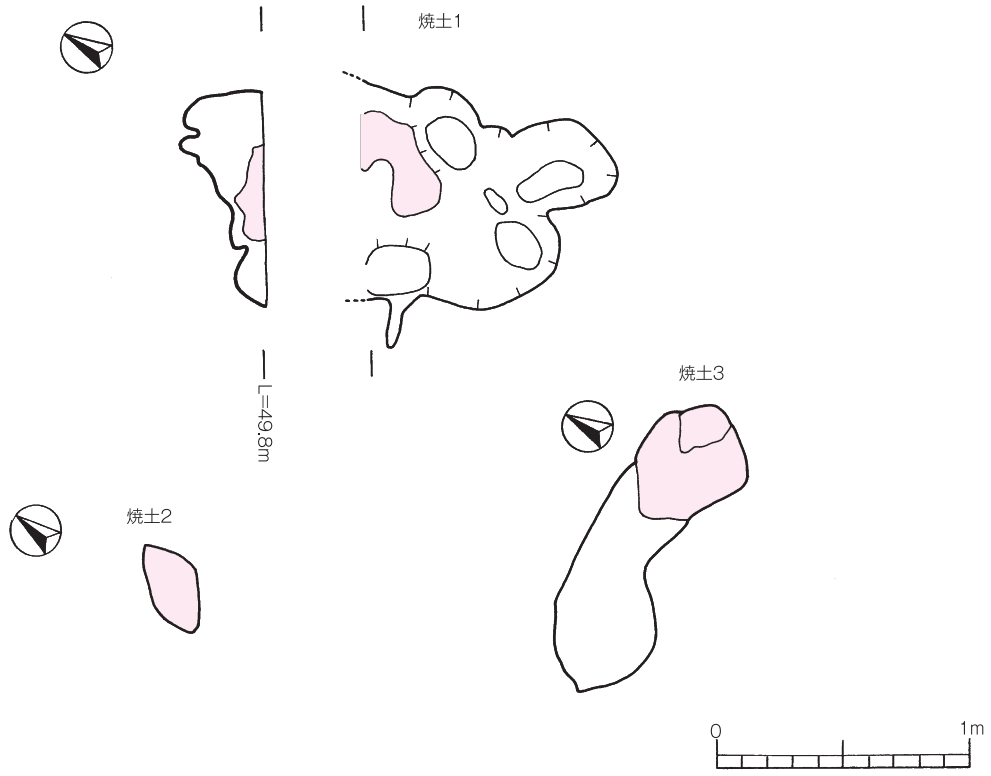
５～11は，ピット内出土遺物である。ゆるやかに外反し，屈曲部から口唇部に向かって縦方向のハケ目調整が施される。６は，高坏形土器の坏部である。段を有し，内外面とも赤色顔料が施されている。７は，器種はよく分からないが，斜め方向に刻目が施され，外面には，煤が付着している。８は，甕形土器の胴部片である。外面はハケ目調整ののち，ナデ調整で仕上げられている。９～11は甕形土器の口縁部片である。９は，ゆるやかに外反し，ハケ目が施される。10は，口唇部がやや丸くなっており，指頭圧痕が残る。11は，ゆるやかに外反し，口唇部は平坦である。外面は，口唇部に向かってハケ目調整が施されている。



第196図　古墳時代の土坑・ピット出土遺物

第44表　古墳時代の土坑・ピット出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	器種	部位	調整		色調		胎土								焼成	備考
						内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	火山ガラス	片岩	その他		
196	1	土2	C－18	甕	胴部	ヘラケズリ	ハケ目	褐灰	赤褐	○			○					良好	土坑3内
	2	土1	C－19	甕	口縁	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい橙	○		○			○		軽石	良好	土坑6内
	3	土1	C－19	壺	胴部	ナデ	ナデ	灰黄	にぶい黄橙			○	○		○			良好	土坑6内
	4	土5	D－22	坩	胴部	ヘラケズリ 指頭圧痕	ナデ	浅黄	浅黄	○	○	○			○			良好	土坑7内
	5	P	B－17	甕	口縁	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		良好	ピット10内
	6	P1	B－12	高坏	坏部	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	○		○				○	茶粒	良好	ピット1内
	7	P10	E－16	甕	胴部	ナデ	ハケ目	橙	にぶい褐	○		○			○	○	茶粒	良好	ピット9内
	8	P6	B－12	甕	胴部	ナデ　ハケ目	ハケ目	にぶい黄褐	明赤褐	○		○			○	○		良好	ピット2内
	9	P4	C－19	甕	口縁	ハケ目　指頭圧痕	ハケ目	暗灰黄	浅黄			○			○			良好	ピット14内
	10	P2	C－25	甕	口縁	ナデ　指頭圧痕	ハケ目　ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○			○	○		良好	ピット22内
	11	P	B－14	甕	口縁	ナデ	ハケ目	にぶい橙	にぶい橙		○	○			○	○		良好	ピット4内



第197図　古墳時代の焼土遺構

⑵　焼土遺構（第197図）

Ⅲ層から３か所検出された。

焼土１（第197図）

D-16区で検出された。約１ｍ×85㎝の範囲に広がり，最も深いところで約30㎝の窪みになる。埋土は，炭化物を含み，成川式土器と考えられる小片が出土している。

焼土２（第197図）

C-19区で検出された。約40㎝×20㎝の範囲に広がる。埋土中からの出土遺物は，無かったが，近くから成川式土器が出土していることから時期は古墳時代と考えられる。

焼土３（第197図）

D-19区で検出された。約130㎝×40㎝の範囲に広がる。東側に炭化物が集中している。

2　出土遺物（第198～213図）

⑴　甕形土器（第200～207図，12～72）

調査区から大量に出土している。底部を欠き，全体の形状が不明なものが多いが，多くは口縁部が広口で脚台を持つタイプと考えられる。口縁部の形状や調整などからⅠ～Ⅲ類に分類した。さらに，突帯の有無等から無文と有文に細分した。次に，胴部と底部（脚部）の各部位をまとめた。

Ⅰ類：口縁部がくの字状に屈曲し，頸部に明瞭な稜を持つ。屈曲部外面には屈曲部から口唇部に向かって縦方向にハケ目調整が施され，段を有するものもある。内面にも明瞭な稜を持つ。

Ⅱ類：口縁部が緩やかに外反し，内面の稜ははっきりしないものが多い。

Ⅲ類：口縁部が直立またはわずかに内弯するもの。

Ａ：無文

Ｂ：有文（外面に一条突帯が施される）

ⅠＡ類（口縁部くの字屈曲，無文）（第200図，12）

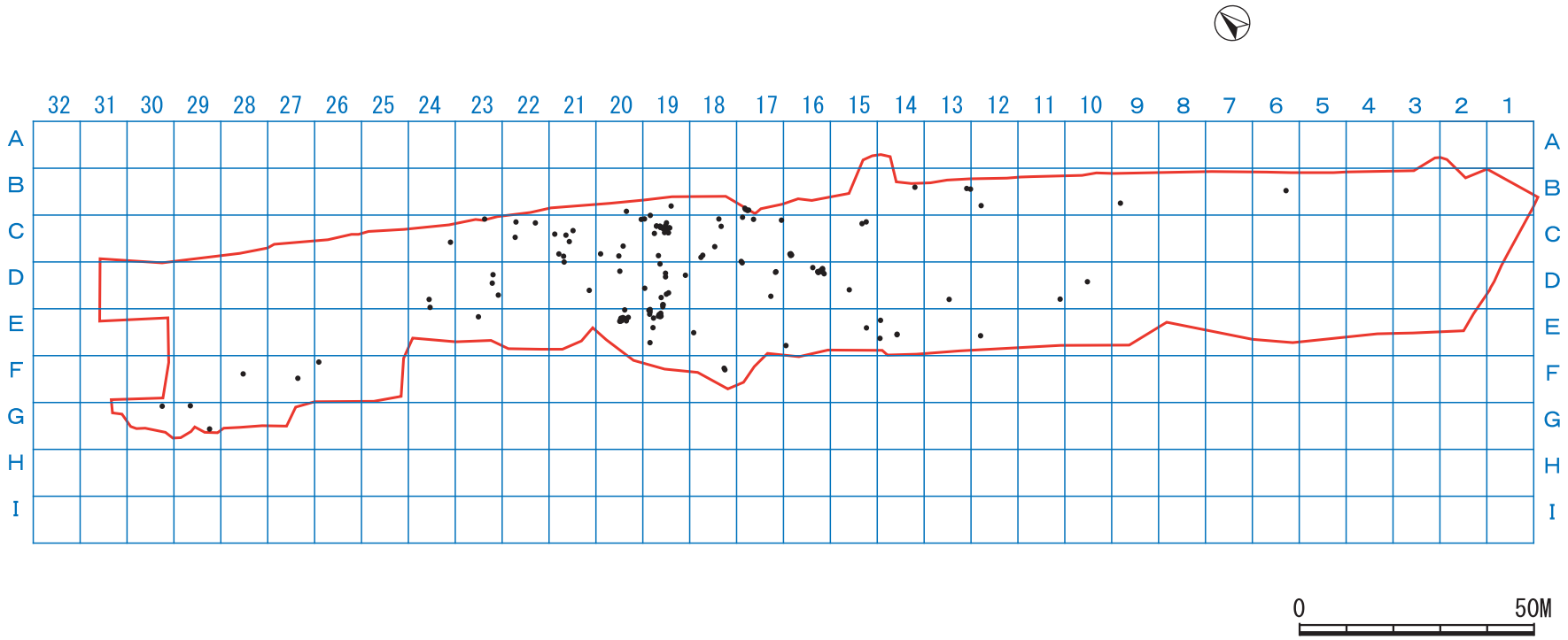
12は，D-14区の土器集中区から出土した。口径が約18.8cmで底部（脚台）を欠く。屈曲部には内外面とも明瞭な稜が残り，縦方向のハケ目調整による段を有する。胴部上半外面はハケ目，下半はケズリが施されている。屈曲部付近には部分的にススが付着している。

ⅡＡ類（口縁部緩やかに外反，無文）（第200～205図，13～44）

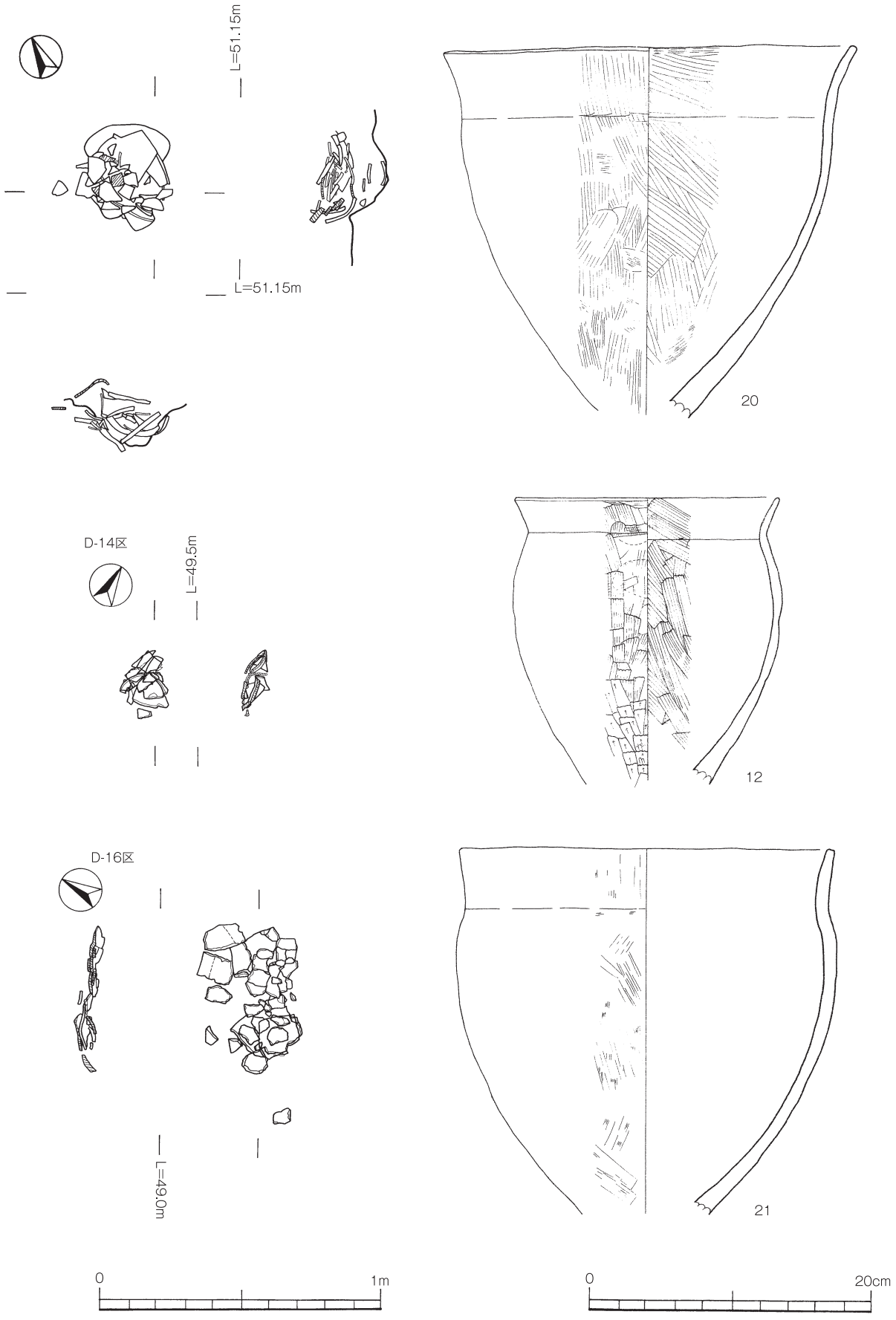
13・14は，口径が30cm近くで，胴部（肩部）が張るタイプである。13は，口径が約27cmで，口縁部はくの字に屈曲し，屈曲部外面には明瞭な稜が残り，段を有する。屈曲部付近は，縦方向にハケ目調整が施され，口唇部はハケ目調整ののちナデ調整で仕上げられている。胴部は，ケズリ調整が施され，外面には煤が付着している。14は，口径が約28.2cmで底部（脚部）を欠く。屈曲部外面に段を有する。口唇部は平坦で，屈曲部から口唇部はナデ調整で仕上げられている。胴部下半外面はケズリ調整で仕上げられている。

15・16は，口径が約25cm以下で，屈曲部外面に段を有し，胴部があまり張らず，直線的に底部へ至るタイプである。15は，口径約23.4cmで屈曲部外面に段を有する。屈曲部から口唇部は横方向にナデ調整が施されている。胴部外面は，縦方向や斜め方向にケズリが施されている。内面はハケ目調整で仕上げられている。16は，口径が約23.0cmで，屈曲部外面に段を有する。屈曲部から口唇部の外面は，横方向にヘラナデ，胴部外面はケズリが施されている。17は，口径が約26.2cmで，口唇部はやや丸味を帯びる。器面調整は内外面ともハケ目が施されている。口縁部外面には縦方向に施されたハケ目の工具痕が明瞭に残る。（30と同一個体と考えられる。）19は屈曲部付近の破片である。屈曲部から口唇部は斜め方向にハケ調整が施されている。器壁が約５㎜と薄い。

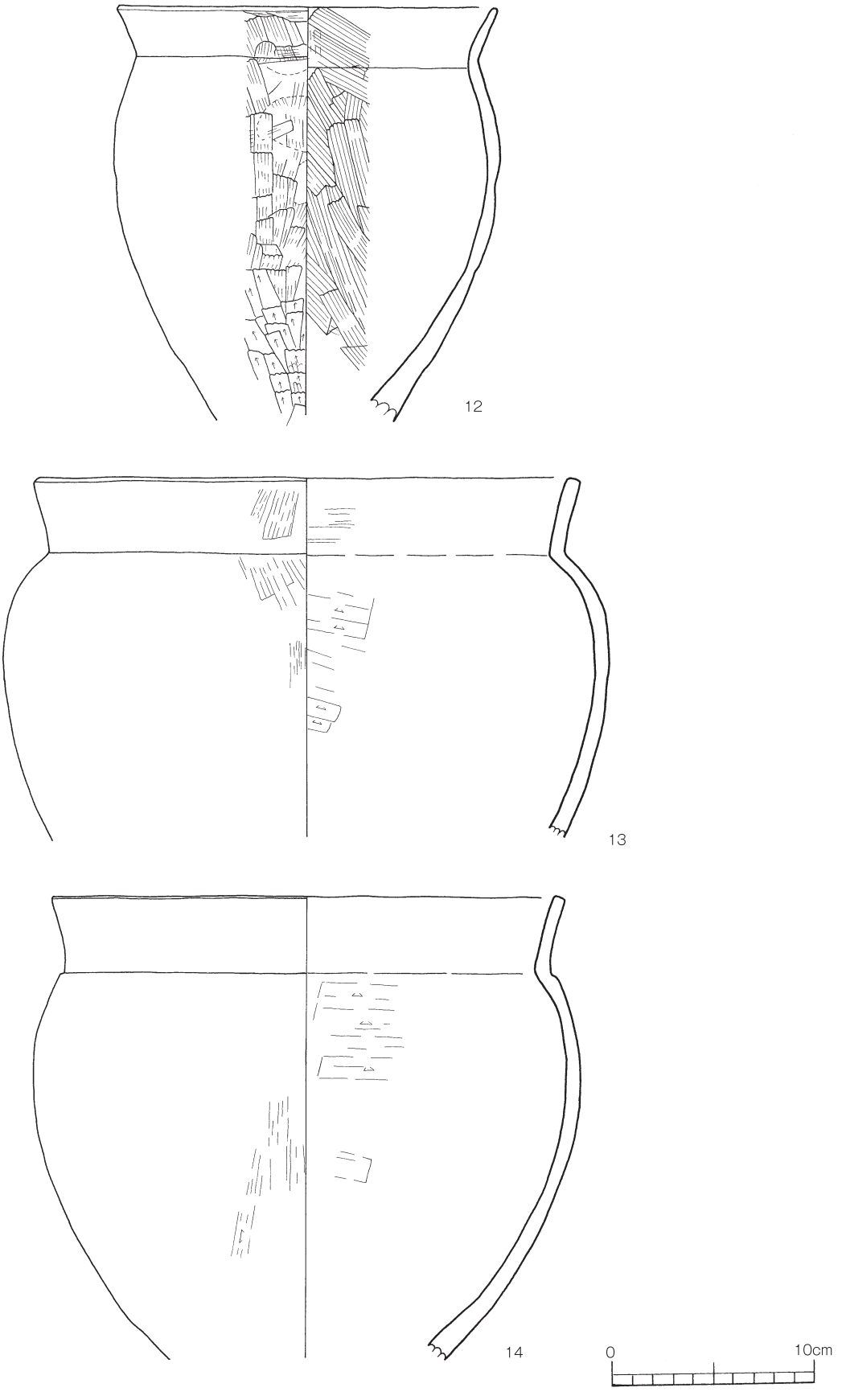
20・21は，口径が30cm近くで，屈曲部外面に段が無いタイプである。20は，口径が約29.4cmで底部（脚台）を欠く。口唇部は平坦をなし，胴部はあまり張らず直線的に底部へ至る。器面調整は，内外面ともハケ目調整で，特に口縁部外面には，縦方向に施されたハケの工具痕が明瞭に残る。器



第198図　古墳時代の土器出土状況図

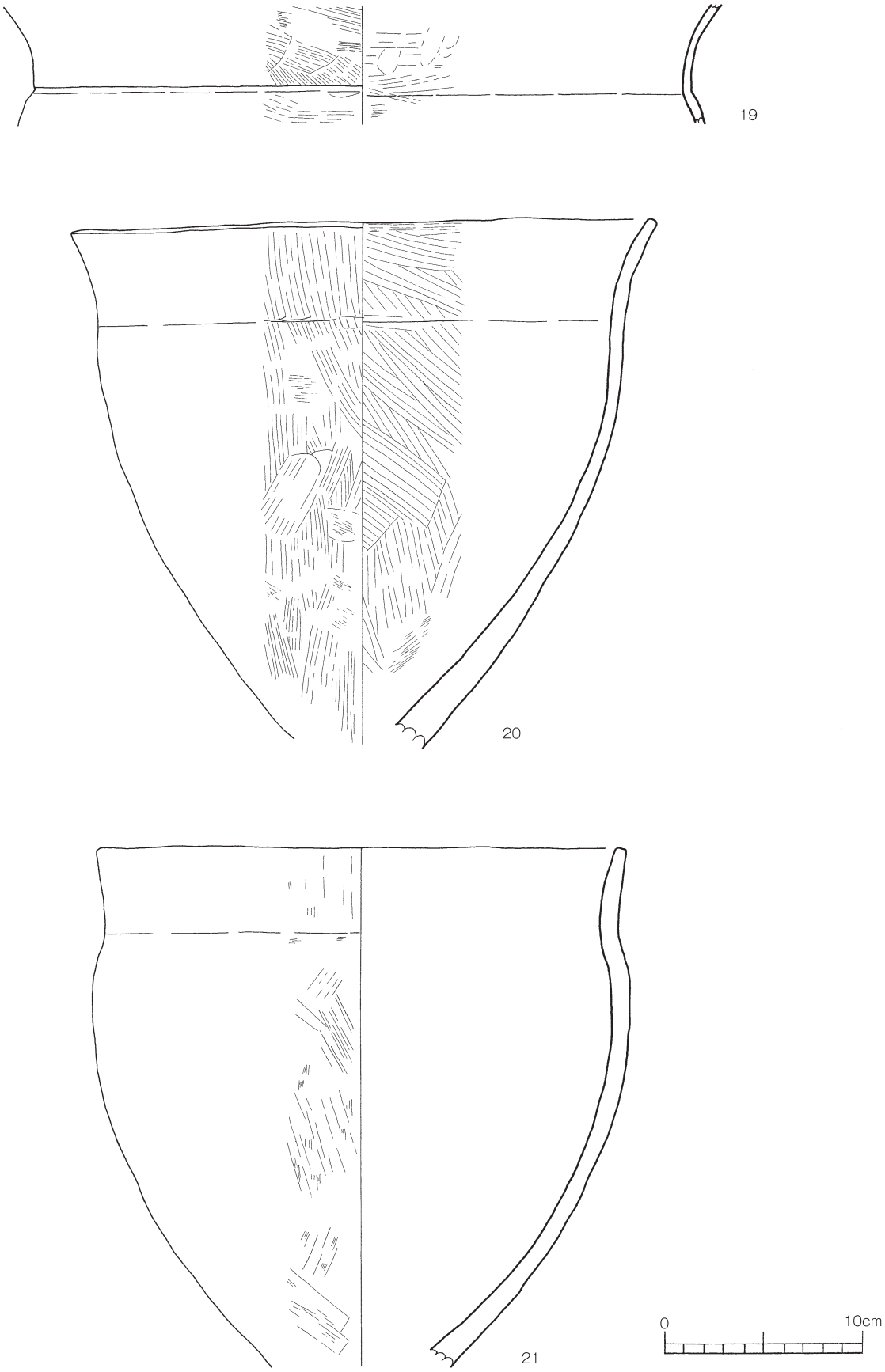


第199図　古墳時代の甕形土器出土状況図

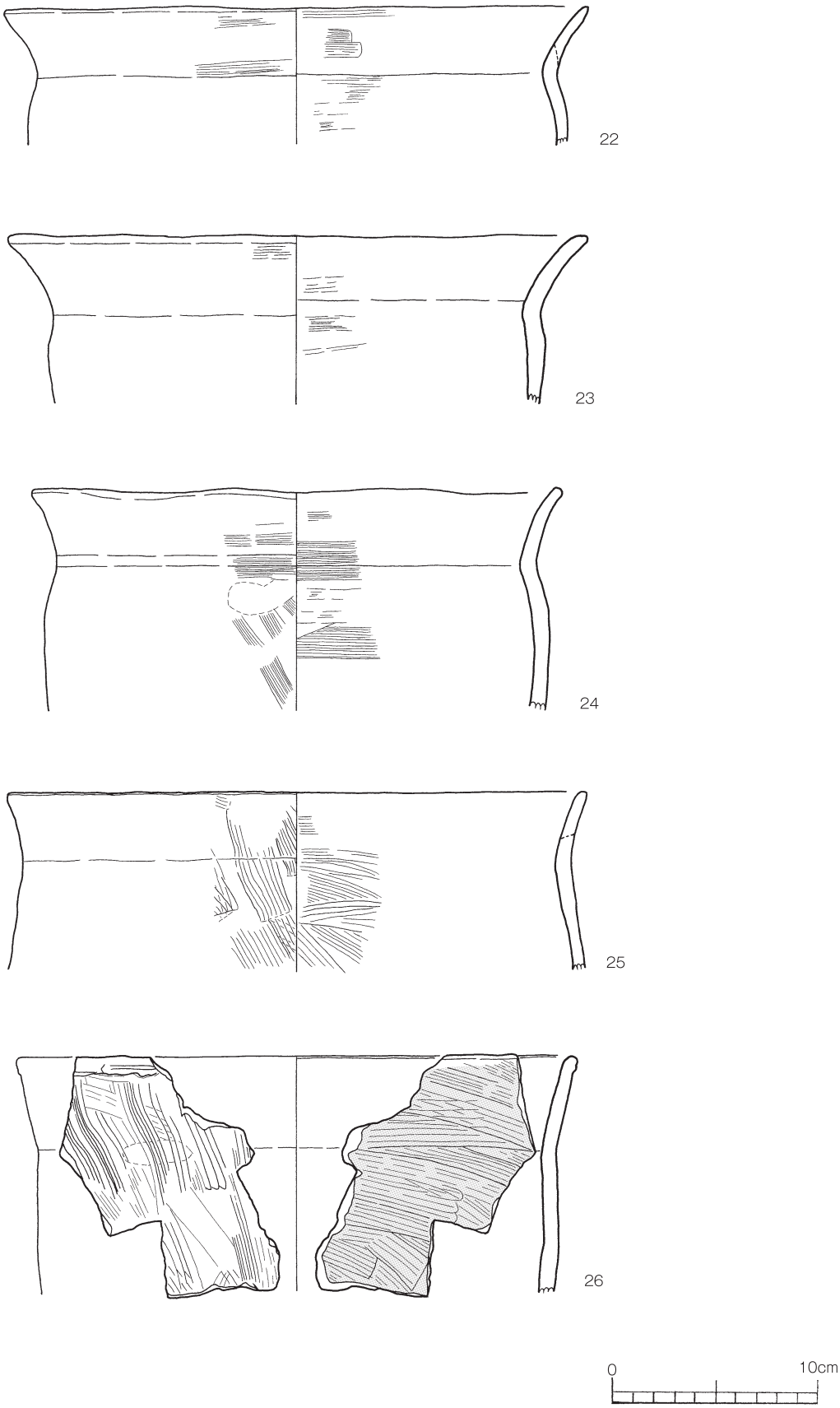


第200図　古墳時代の甕形土器１（ＩＡ・ⅡＡ類）

第201図　古墳時代の甕形土器２（ⅡＡ類）



第202図　古墳時代の甕形土器３（ⅡＡ類）



第203図　古墳時代の甕形土器４（ⅡＡ類）

壁は，胴部下半から段々と厚くなっている。口縁部や胴部上半の外面には煤が付着している。21は，D-16区の土器集中から出土した。底部（脚台）を欠くが口縁部から胴部下半までが残る。口径は26.2cmで，胴部はあまり張らず直線的に底部へ至る。器面調整は，口縁部や胴部上半の外面は丁寧なナデ調整，胴部下半外面はケズリ調整で仕上げられている。内面は，丁寧なナデ調整である。

22～26は，口径復元のできる口縁部片である。22・23は，口径がそれぞれ28.2cm，28cmで，屈曲部から口唇部の外面は丁寧なナデ調整が施されている。24は，口径約25.6cmで胴部はあまり張らない器形である。屈曲部から口唇部の内外面は，丁寧なナデ調整が施されている。

27～44は，口縁部片である。27は，口唇部がやや丸みを帯びる。28は，口唇部は平坦をなし，内外面ともナデ調整で仕上げられてる。31・32は，口縁部外面に縦方向のハケ目調整が密に施されている。同一個体の可能性も考えられる。34・35・37は，屈曲部外面に縦方向のハケの工具痕が明瞭に残る。39の屈曲部外面には，屈曲部から口唇部に向かって縦方向のハケ目が施された後，横方向にナデ調整が丁寧に施されている。胎土は，石英・輝石を多く含み精緻なつくりになっている。41・42は，口唇部が平坦をなし，屈曲部と口唇部との間が短い。同一個体と考えられる。

Ⅱ B類（口縁部が緩やかに外反，有文）（第205・206図，45～57）

45～57は，屈曲部付近に絡縄突帯や刻目突帯が施されている口縁部片である。45～47は，屈曲部に幅約１cmの突帯が貼り付けられた後，ヘラ状工具により斜格子状に刻目が施されている。内外面ともハケ目調整が施されている。屈曲部付近外面に煤が付着している。同一個体と考えられる。48は，屈曲部外面に幅約1.3cmの突帯が貼り付けられた後，斜め方向に刻目が施されている。刻目には，布目痕が残り，布を巻き付けた棒状工具で施文されたと考えられる。

49・50は，屈曲部片である。49は，刻目突帯が施され，器壁が約６㎜と薄い。胎土に石英を多く含み，砂粒も細かい。色調は，明黄褐色で他の地域で製作された可能性もある。

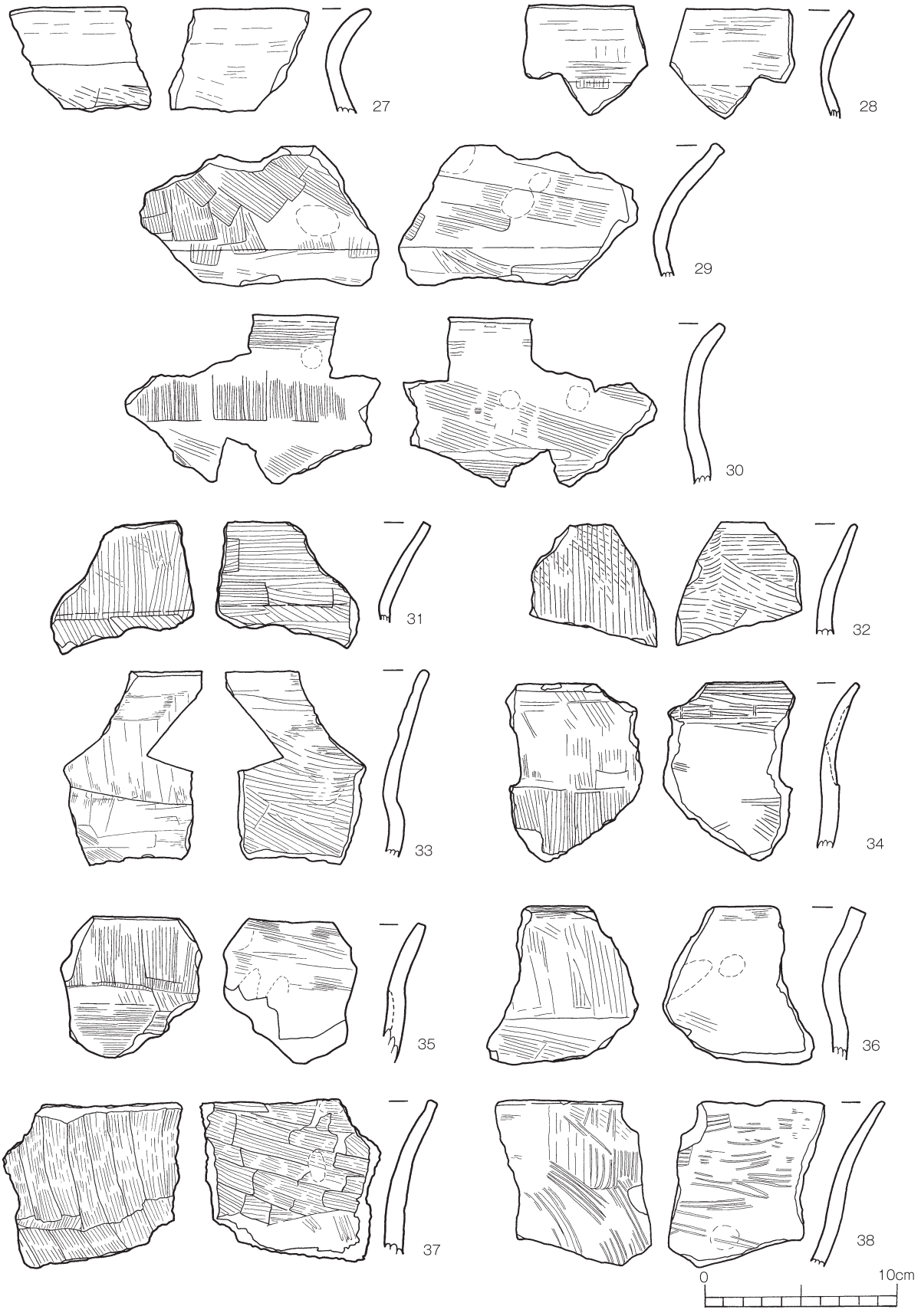
51～57は，口縁部下の突帯部分である。刻目突帯や絡縄突帯などで，一部分のみの出土で分類できないものをここにまとめた。51・52は，突帯の刻目が，ヘラ状工具で斜格子状に施文されている。53・54は，刻目に布目圧痕が確認できる。器面調整は，内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げられている。55～57は，絡縄突帯である。いずれも指による成形が認められる。

Ⅲ A類（口縁部直立またはやや内弯，無文）（第206図，58）

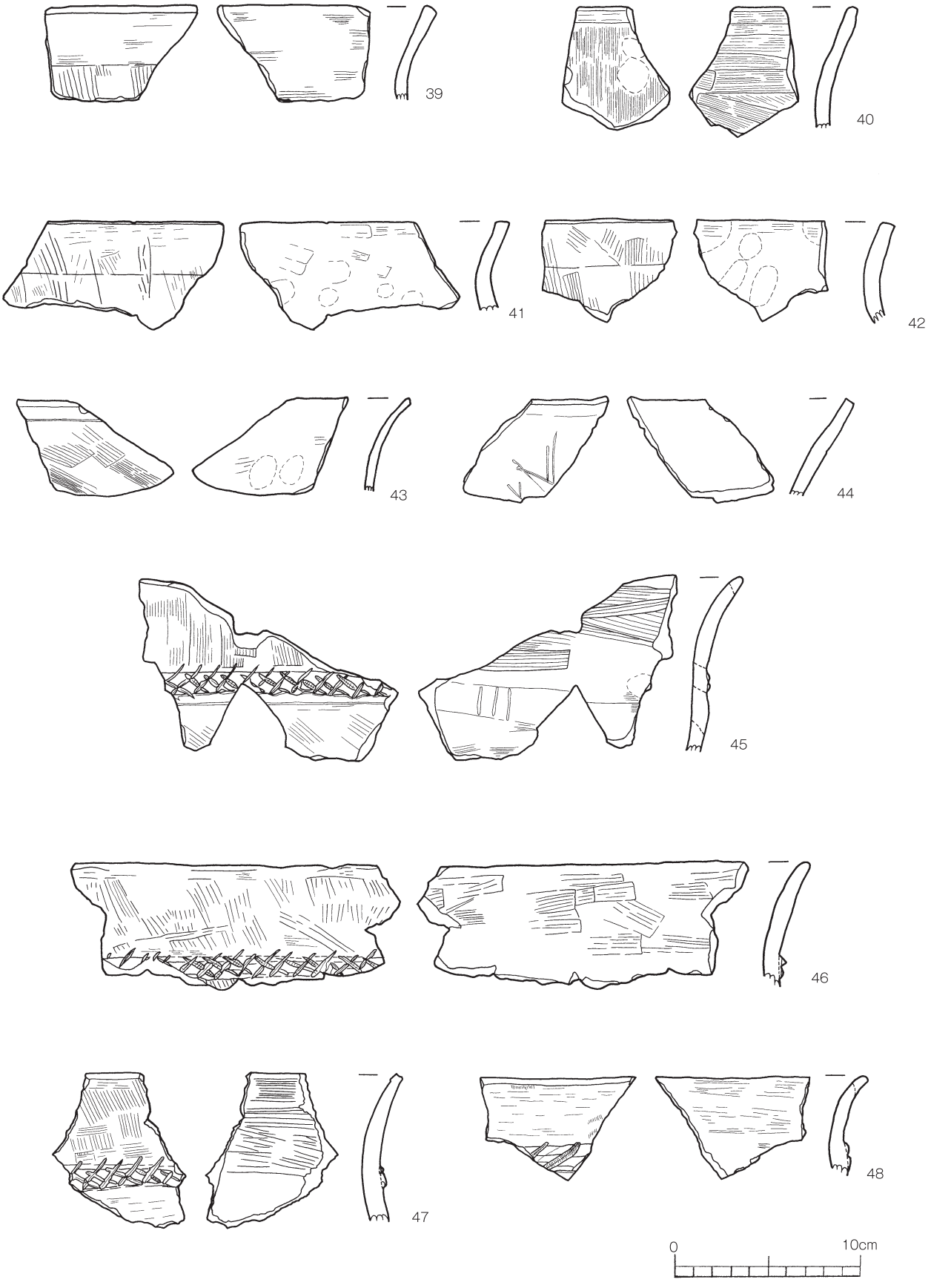
58は，口唇部は平坦をなす。器面調整は，内外面ともナデ調整で仕上げられている。胎土に石英，輝石を多く含む。

Ⅲ B類（口縁部直立またはやや内弯，有文）（第206図，59）

59は，口縁下部に絡縄突帯が施され，口唇部は丸みを帯びる。口縁部付近外面には，煤が付着している。



第204図　古墳時代の甕形土器５（ⅡＡ類）



第205図　古墳時代の甕形土器６（ⅡＡ・ⅡＢ類）

第206図　古墳時代の甕形土器７（ⅡＢ・ⅢＡ類）

胴部（第207・208図，60～62）

60～62は，甕形土器の胴部下半である。60は，器壁が1.3㎝と厚く直線的に底部へ至る。器面調整は，内外面ともハケ目が施されている。外面に煤が付着している。61は，脚台の天井部が平坦である。外面は，ヘラケズリ調整で仕上げられている。

底部（第208図，63～72）

63～72は，底部（脚部）である。63は，脚台内面天井部がややふくらみを持つタイプである。丸底の外側に脚部を付けたものと考えられる。脚端にかけて直線的に開き，端部は尖っている。

64～66は，天井部が平坦なものである。さらに，細長いタイプ（64）と低脚タイプ（65・66）に分けられる。64は，脚端にかけて直線的にのびながら開き，脚端は丸みを帯びる。65は，ゆるやかに外反しながら開く。外面はハケ目調整，内面はヘラケズリ調整で仕上げられている。

67～72も脚部であるが，体部との接合部付近で欠損し天井部が残っていないタイプである。脚端にかけて直線的に開く細長いタイプ（67～71）と外反しながら開く低脚タイプ（72）がある。69は，脚端が平坦面をなす。72は，脚端が平坦面をなす。内外面ともケズリ調整で仕上げられている。

⑵ **壺形土器（**第209～212図，73～99）

甕形土器に比べ出土数が少ない。胴部片の出土が多く，全体の形状が不明なものが多い。無文は少なく，胴部に刻目突帯や幅の広い突帯が巡るタイプが多い。部位ごとに大きく分け，胴部に施された文様からさらに細かく分類した。

口縁部～頸部（第209図，73～77）

73～77は，口縁部から頸部の破片である。73は，口縁部が長く直立気味に立ち上がり，口縁端部はやや外反する。肩部との境は屈曲し，口唇部は平坦をなす。器壁は，約５㎜と薄い。器面調整は，内外面ともナデ調整である。復元口径は，約10.8㎝である。76は，頸部からの立ち上がりがやや内傾し，刻目突帯が一条巡る。肩部との境は屈曲する。刻みには，ヘラ状工具による櫛目痕が残る。77は，頸部からの立ち上がりがやや外傾し，口縁部は弯曲すると考えられる。頸部に一条の刻目突帯が施されている。口縁部・頸部の外面は，密にハケ目調整が施されている。

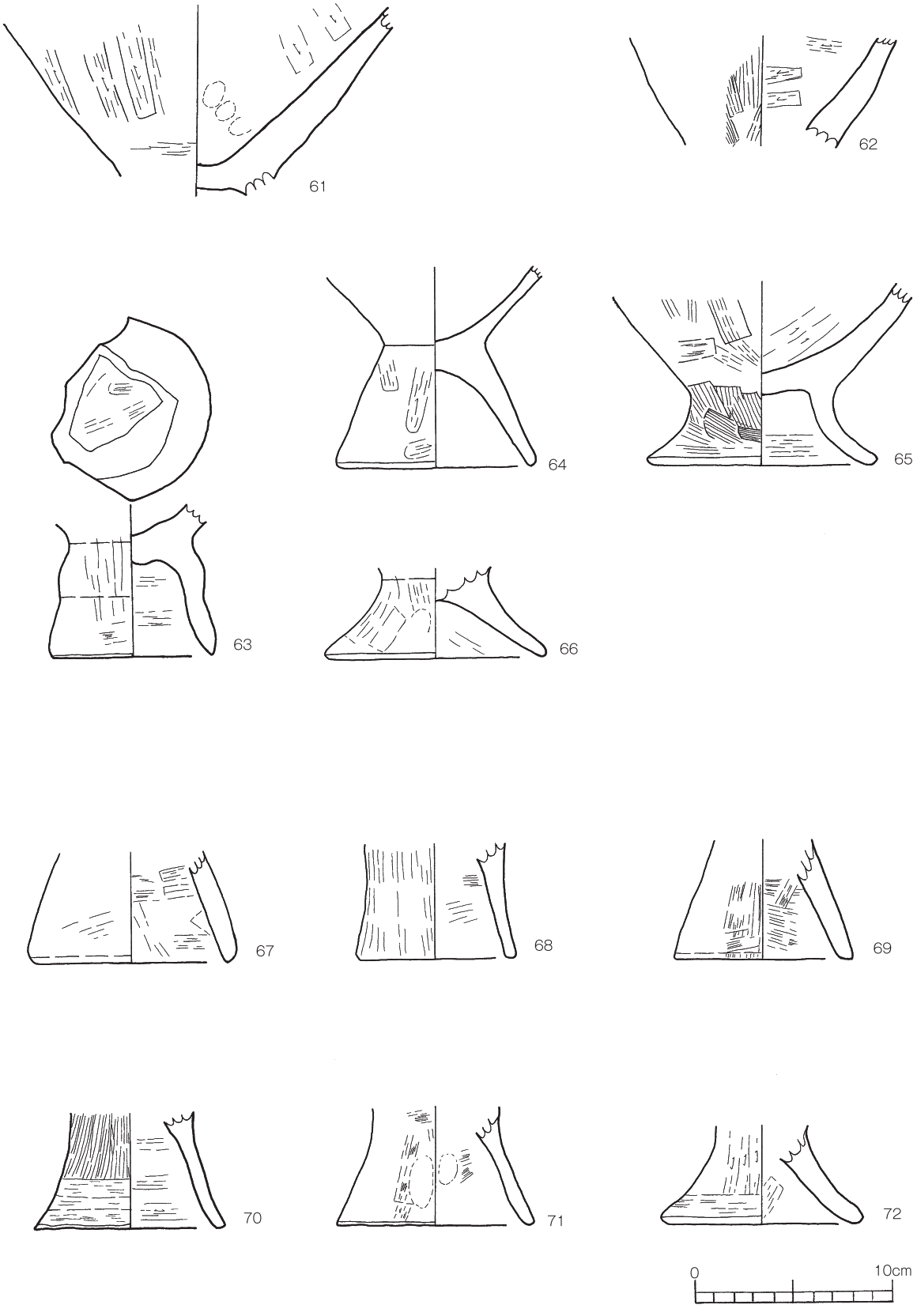
胴部（第209・210図，78～94）

78～94は，胴部の破片である。数条の突帯や幅の広い突帯がある。

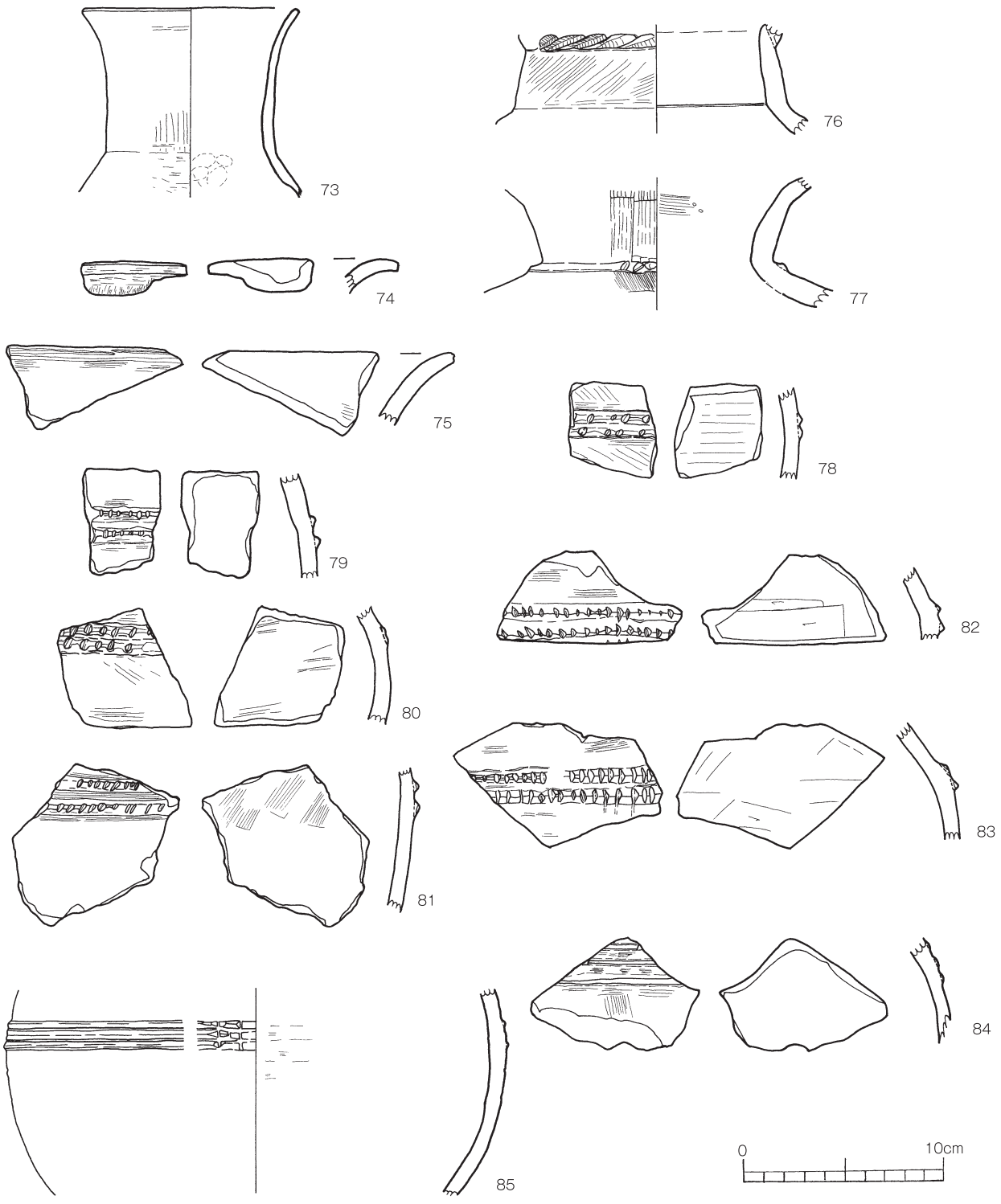
78～83は，二条の突帯が施されるタイプである。ヘラ状工具により刻目が施されている。79は，浅く刻目が施されている。78・80は，二条の突帯に施された刻目が１つの工具により同時に施文されている。83は，刻目が深く施されている。

84・85は，三条の突帯が施されるタイプである。85は，胴部が球状に張り，復元胴径は約24.8㎝である。刻目は，ヘラ状工具により浅く施されている。

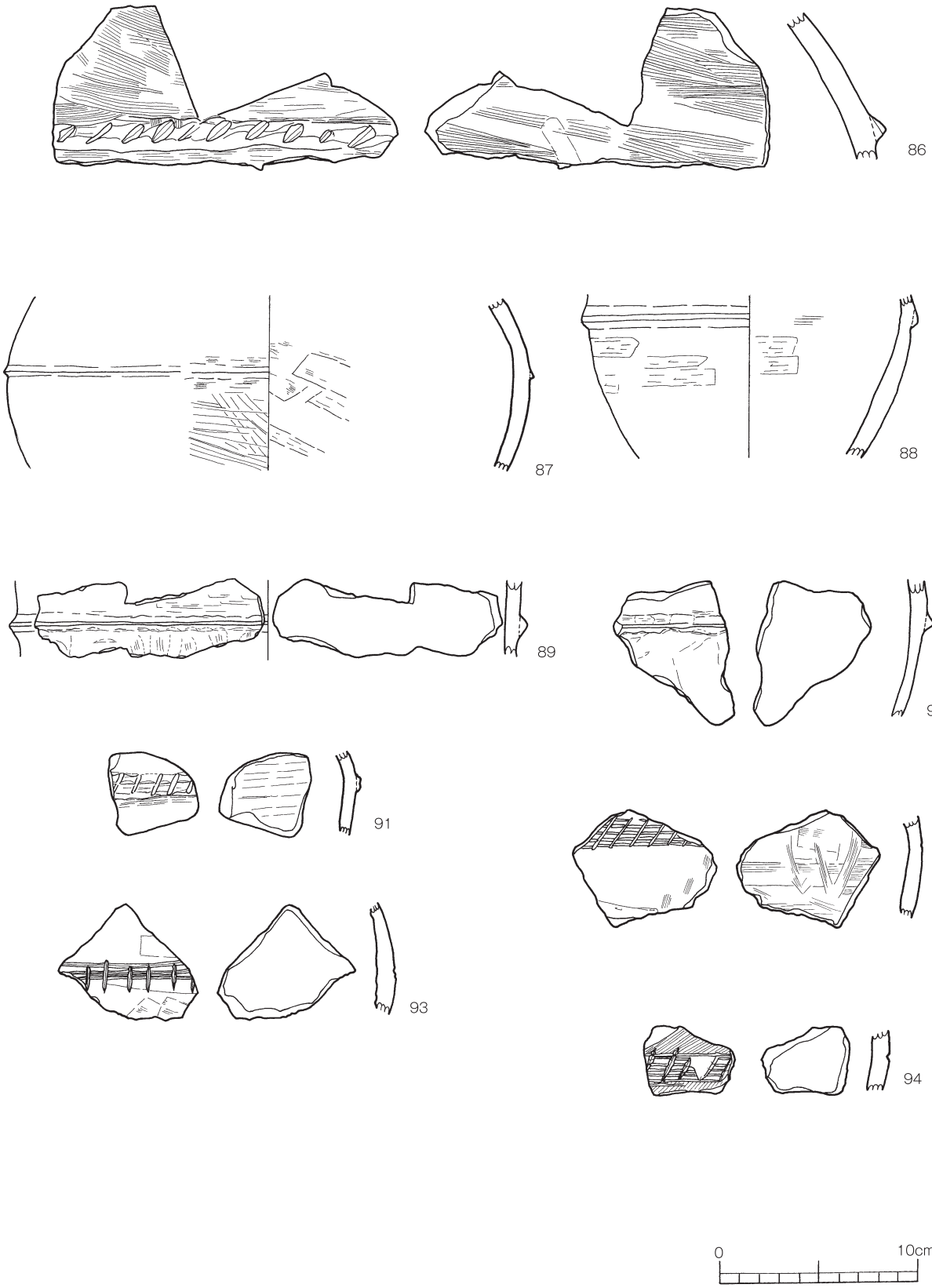
86～90は，一条の突帯が施されるタイプである。86は，断面三角形の刻目突帯が一条巡る。突帯の刻目は，棒状の工具を斜めに押し当てるように施文されている。器面調整は，内外面ともハケ目



第207図　古墳時代の甕形土器８（底部）



第208図　古墳時代の壺形土器１（口縁部～胴部）



第209図　古墳時代の壺形土器２（胴部）

調整で仕上げられている。器壁は1.1cmと厚い。87は，胴部が球状に張る。突帯は断面三角形であるが，頂部は丸みを帯びる。88は，断面三角形の突帯が一条施されている。胴部はあまり張らず，器形は長胴形である。89・90は，断面三角形の突帯が施され，外面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。同一個体の可能性が高い。

92～94は，複数の沈線文が施され，その上から刻目が施されるタイプである。94は，横方向に沈線文が六条巡り，さらにその上から斜め方向にヘラ状工具による刻目が施されている。内外面ともハケ目調整で仕上げられている。

大型土器（第211図，95・96）

95・96は，胴部に幅の広い突帯が一条巡るタイプである。95は，口縁部を欠くが頸部から底部まで残る大型の壺形土器である。器形は，肩部は張りながら胴部に至り，底部へは直線的に至る卵形である。断面が台形となる幅約1.5cmの幅の広い突帯が巡る。内外面ともハケ目調整が施されている。胴部最大径は，中心よりやや上方で，復元胴径は約28.2cmである。96は，胴部下半で，断面が台形となる幅約2.5cmの幅の広い突帯が貼り付く。突帯部分は，ナデ調整が施されている。胴部下半の外面は，斜め方向にハケ目が繰り返し施されている。復元胴径は，約36.7cmである。

胴部下半（第212図，97～99）

97～99は，胴部下半である。99は，底部を欠くが丸底と考えられる。外面はハケ目後ナデ調整で，内面はヘラケズリ調整がみられるが剥離が多い。

⑶　坩形土器（第213図，100～110）

11点を図化した。100は，完形品で，口縁部は直線的に外へ開き，胴部はやや球胴状になる。頸部には明瞭な稜線を有し，丸底である。口径は，9.4cmである。外面は横方向にミガキ調整が施され，精緻なつくりになっている。102は，頸部である。口縁部に向かって直線的に開く。外面は丹塗りが施されている。109は，肩部から底部の破片である。玉ねぎ状に肩部が張り，胴部の稜は丸みを帯び平底である。

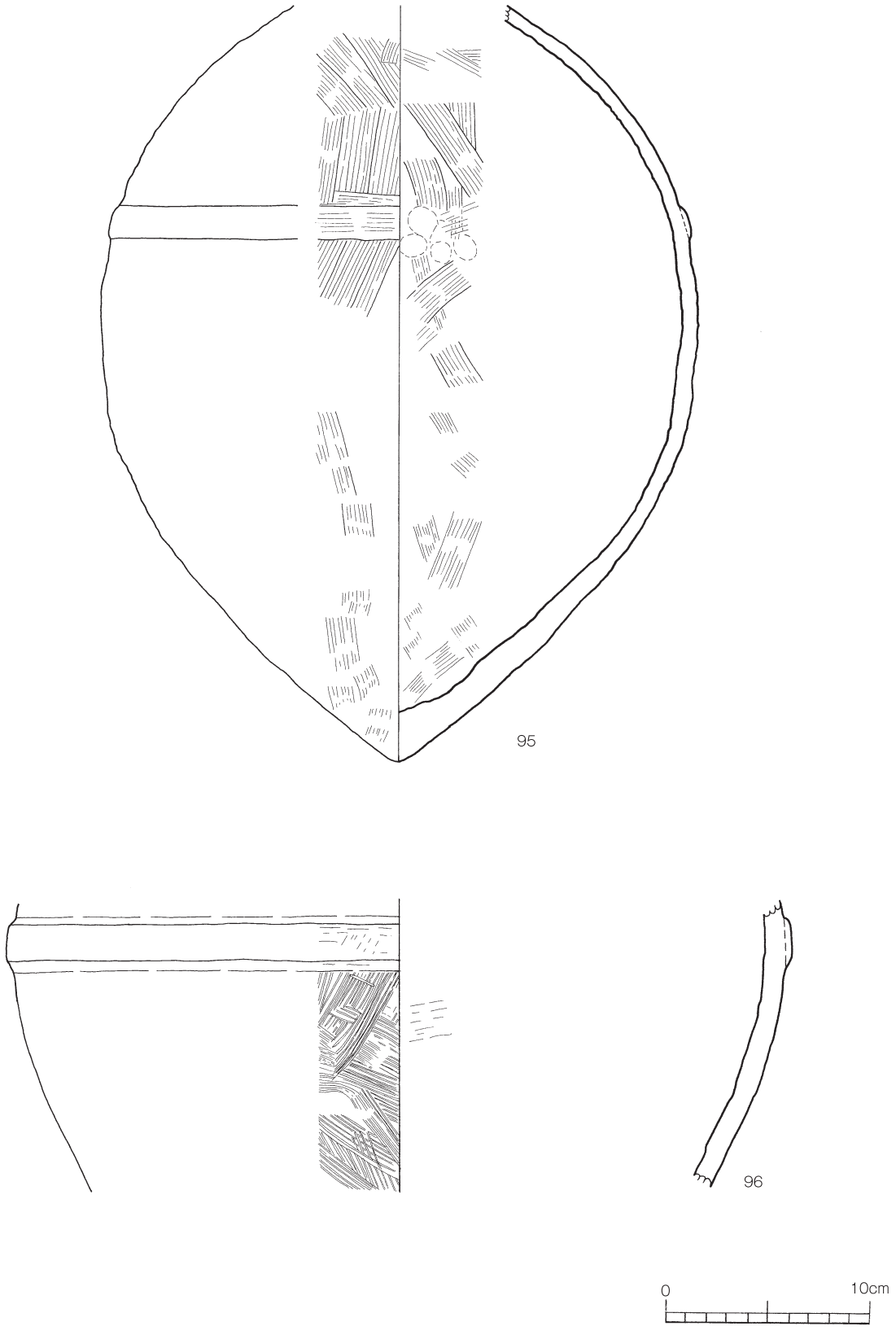
⑷　鉢形土器（第213図，111～114）

出土数が少なく，4点を図化した。111～113は口縁部片である。112は，口縁部がやや内弯し，口唇部が平坦になっている。内外面ともハケ目調整が施されている。113は，口縁部が直立し，口唇部が平坦で器壁が1.1cmと厚い。内外面ともナデ調整で仕上げられている。114は，低い脚で外に開き，脚端は平坦面を成す。

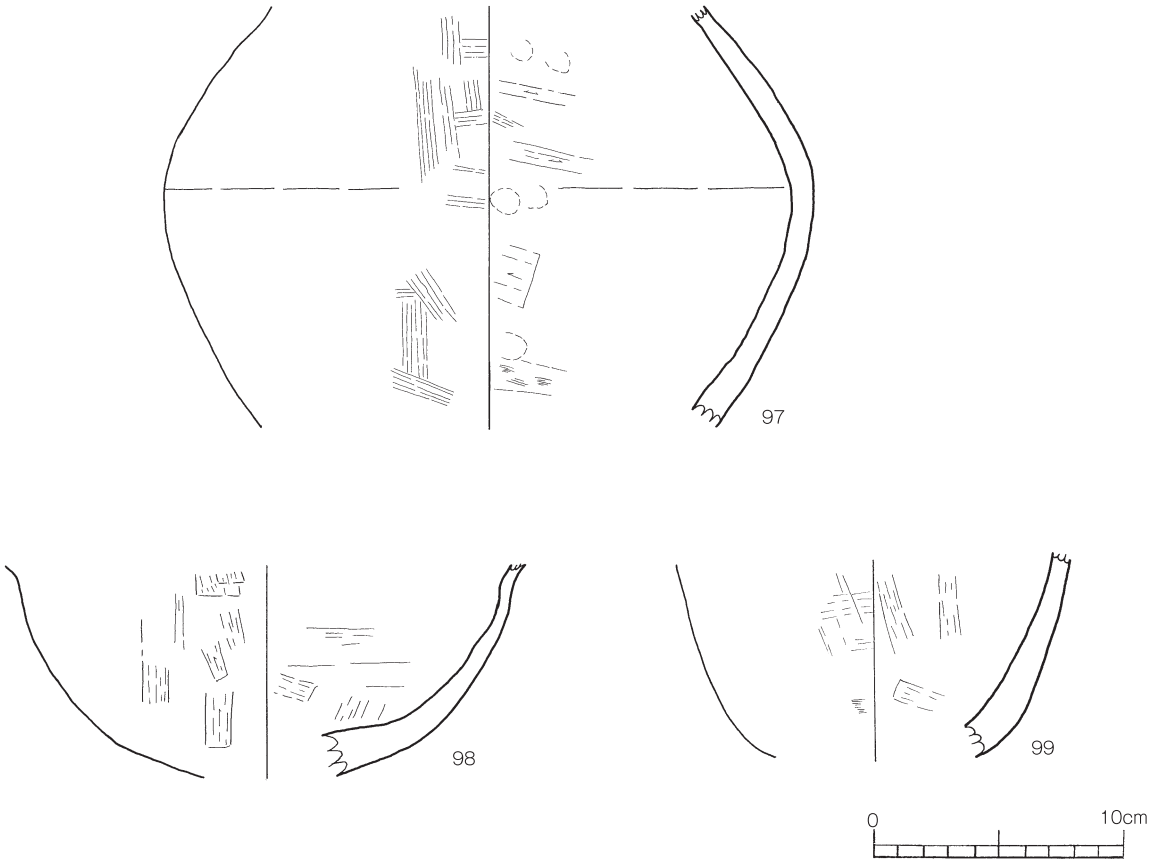
⑸　高坏形土器（第213・214図，115～129）

出土数は少なく，全体の形状が分かるものは少ない。15点を図化した。

115～121は，坏部である。115は，屈曲部から直線的に開き，口唇部は平坦面を成す。外面に明瞭な段を有する。内外面とも赤色顔料（丹塗り）が施され，ミガキ調整で仕上げられている。



第210図　古墳時代の壺形土器３（大型土器）



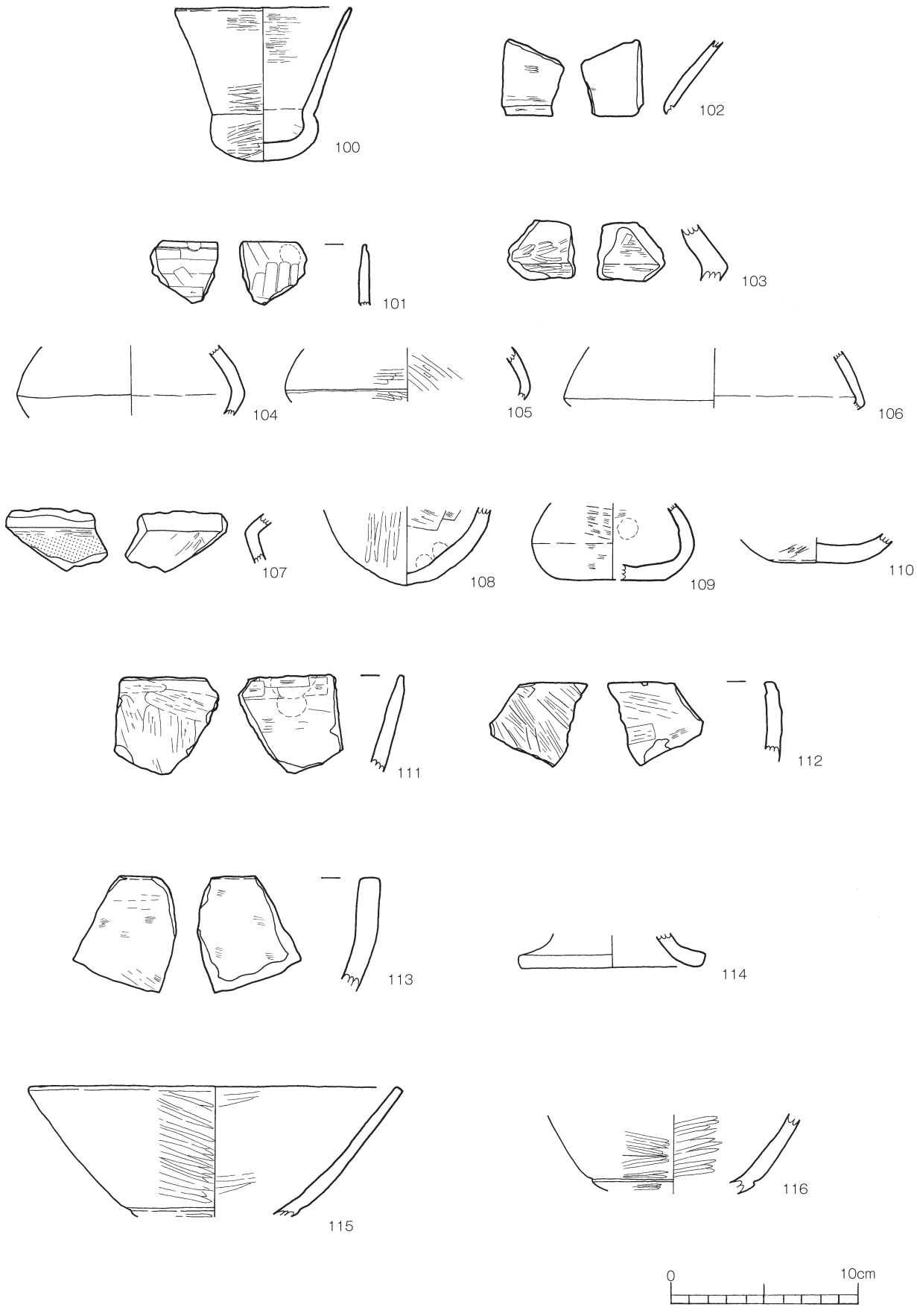
第211図　古墳時代の壺形土器４（胴部～底部）

口径は20.0cmである。116は，坏部下半で外面に段を有する。内外面とも赤色顔料が施されている。120は，坏部の底部である。内底は平坦で，内外面ともナデ調整で仕上げられている。

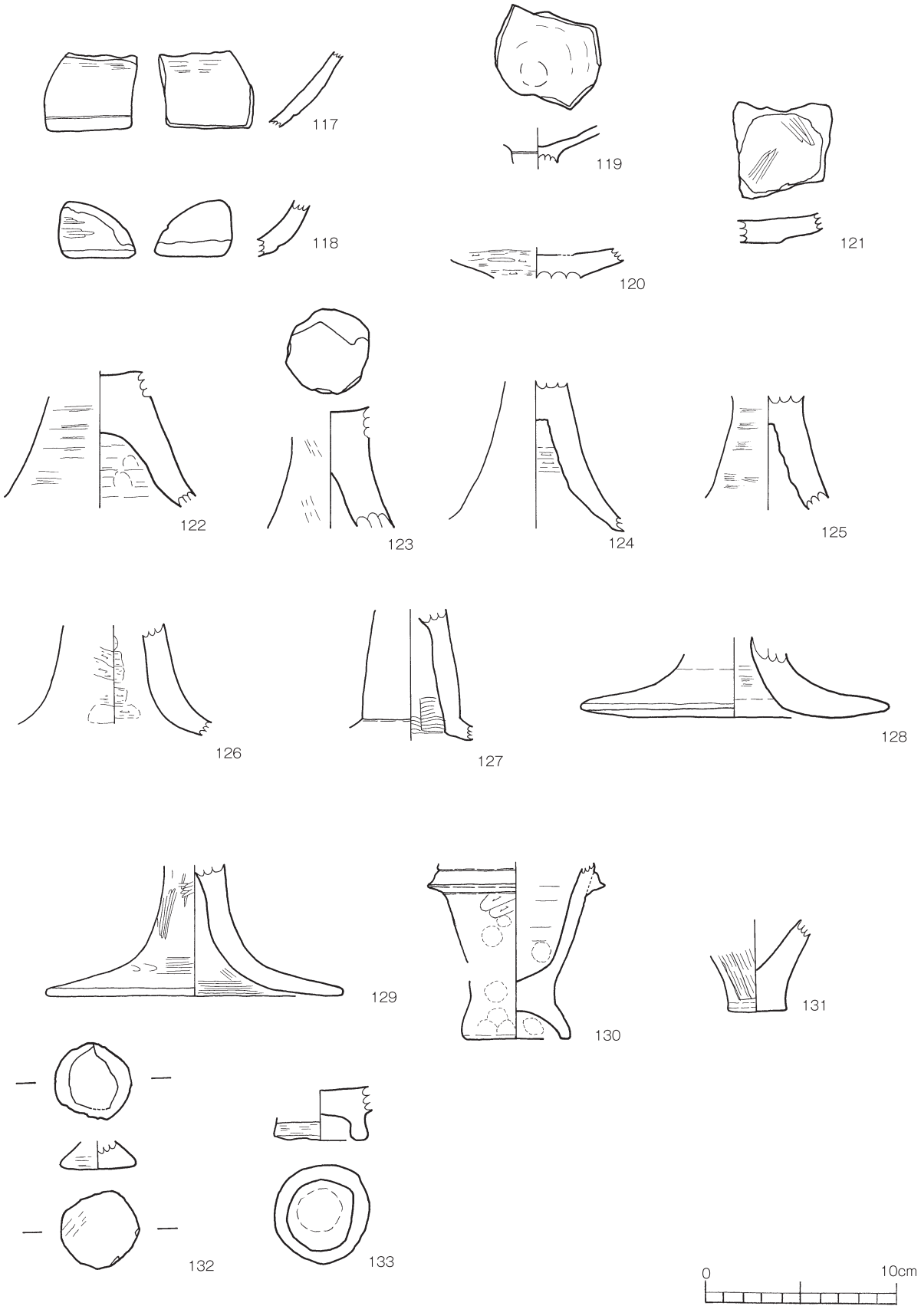
122～129は，脚部である。上半部は棒状で，下半部がスカート状に弯曲して開くものが多い。122は，上部から大きく広がりながら接地面に向かうタイプと考えられる。外面は横方向にナデ調整，内面はケズリ調整や指頭圧痕がみられる。127は，上部から接地面方向にまっすぐ下がる。裾部は外へ折れ曲がり，外面に明瞭な稜が残る。128は，裾部が外へ向かって大きく広がり，端部はやや丸みを帯びる。底径は，16.0cmである。129は，裾部が外へ向かって大きく広がり，端部は平坦面を有する。外面は，ミガキ調整が施されている。底径は，14.8cmである。

⑹　手づくね土器（第214図，130～133）

４点を図化した。130は，甕形土器を模したものと考えられる。絡縄突帯が貼り付けられ，底部は脚台が付いている。内外面とも指頭圧痕が明瞭で，粗雑なつくりである。底径は，5.4cmである。131は，小鉢で内面に指頭圧痕が認められる。底径は，3.0cmである。



第212図　古墳時代の坩形土器・鉢形土器・高坏形土器１



第213図　古墳時代の高坏形土器２・手づくね土器

第45表　古墳時代土器観察表１

（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	法量（cm）		調整		色調		胎土							焼成	備考
								口径	底径	内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	火山ガラス	片岩	その他	
200	12	集積	D-14	－	甕	ⅠA	口縁～胴部	18.8	－	ﾊｹ目	ﾍﾗﾅﾃﾞ，ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	にぶい黄	にぶい黄		○	○			○		軽石	良好	
	13	15109 14000	C，D－17	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	27.0	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい橙	にぶい褐	○			○					良好	
	14	15834 15836 16417 16418 16136 15842 10417 16094 3317 5072	E－19	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	25.2	－	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	橙	橙	○		○			○			良好	
201	15	13958 15086 10900 10902 15604 13954 20497	C，D－16，17	Ⅲ，Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	23.4	－	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ，ﾅﾃﾞ，指頭圧痕	にぶい橙	にぶい赤褐			○	○		○		軽石	良好	
	16	13949 10898 10904 13956 15080 13966 15081 20501 10865 10905 13961 18895	D-16，17 D-16，17	Ⅲ，Ⅲa	甕	ⅡA	口縁～胴部	23.0	－	ﾊｹ目（板調整）	ﾍﾗｹｽﾞﾘ（胴部），ﾅﾃﾞ（口縁部）	にぶい橙	橙	○		○	○		○			良好	
	17	29679 13924 15,588	C－16	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	(25.6)	－	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	浅黄	黄橙	○		○	○		○		軽石	良好	
	18	2519 2264 19998 3146 なし	C－20 C－21	Ⅱ，Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	(22.0)	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	浅黄	黄灰	○		○						良好	
202	19	31914 31875	B－17	Ⅲa	甕	ⅡA	頸部	(33.0)	－	ﾅﾃﾞ，指頭圧痕	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	橙	橙	○								良好	
	20	6666 1263	D－11	Ⅱ Ⅲ	甕	ⅡA	口縁～下胴部	29.4	－	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	明褐	橙			○	○		○			良好	ｽｽ付着
	21	130 8650 16545	C－12，14，16	Ⅱ，Ⅲ，Ⅲb	甕	ⅡA	口縁～胴部	27.0	－	ていねいなﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	灰黄	橙	○		○			○	○	茶粒	良好	
203	22	24993 29131 30184 25337 29000	D－19	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁～頸部	(28.2)	－	ﾍﾗ，ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ，ﾊｹ目	にぶい黄橙	にぶい橙			○	○		○			良好	
	23	25153	D－19	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	(28.0)	－	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄	にぶい黄橙	○								良好	
	24	29675 29679 29685 16109 土1 25160 26489 30108 24999	D・E－19	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	(25.6)	－	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	浅黄	にぶい黄橙			○	○		○			良好	

第46表　古墳時代土器観察表２

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	法量（cm）		調整		色調		胎土							焼成	備考
								口径	底径	内面	外面	内面	外面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	火山ガラス	片岩	その他	
203	25	3843 5114	C，D－19	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	(28.0)	－	ハケ目	ハケ目	にぶい橙	にぶい橙			○	○		○	○		良好	
	26	3317 5072 6137	C－19，20	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	(27.0)	－	ハケ目，ヘラケズリ	ハケ目，ナデ	褐灰	にぶい橙			○			○		軽石	良好	
204	27	6987	D-13	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ナデ	ハケ目，ナデ	橙	橙	○	○							良好	表面スス付着
	28	31860 32017	B－17	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	明黄褐	明黄褐	○	○	○						良好	
	29	3268	B―21	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目，指頭圧痕	ハケ目，指頭圧痕	橙	明赤褐	○		○	○				軽石・茶粒	良好	
	30	15056 15589 13928	C－16	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目後ナデ，ケズリ	ハケ目	褐灰	橙	○	○	○						良好	
	31	5098	C－19	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目	ハケ目	浅黄	浅黄			○	○		○			良好	
	32	1988	C－19	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目	ハケ目	浅黄	浅黄								軽石	良好	
	33	5074 2218	C－19 B－20	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁～肩部	－	－	板ケズリ	ハケ目	浅黄	浅黄						○		茶粒	良好	スス付着
	34	31882	B－17	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目	ハケ目，ナデ	明赤褐	明赤褐			○					茶粒	良好	
	35	3321	C－19	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目，ナデ	ハケ目，ナデ	にぶい橙	褐灰	○		○				○	茶粒	良好	スス付着
	36	3845	C－20	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ナデ，指頭圧痕	ハケ目，ナデ	橙	黒褐			○			○		軽石	良好	
	37	－	－	－	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目，ミガキ，指頭圧痕	ハケ目	橙	にぶい黄褐							○		良好	スス付着
	38	1190	B-9	Ⅳ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目後ナデ，指頭圧痕	ハケ目後ナデ	明赤褐	橙	○								良好	
205	39	31891	B－17	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	－	－	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	○		○						良好	
	40	31883	B－17	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	－	－	ハケ目，ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	明黄褐	○		○	○					良好	
	41	5242 3340	C－19	Ⅱ	甕	ⅡA ⅡA	口縁	－	－	ナデ，指頭圧痕	ヘラケズリ，ナデ	橙	にぶい橙	○			○					良好	煤付着
	42	3337	C－19	Ⅱ	甕	ⅡA	口縁	－	－	ナデ，指頭圧痕	ハケ目，ナデ	橙	にぶい褐	○								良好	
	43	なし	－	－	甕	ⅡA	口縁	－	－	ナデ後指頭圧痕	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○	○					良好	
	44	22438	F－25	Ⅲa	甕	ⅡA	口縁	－	－	ナデ	ナデ	暗灰黄	灰黄	○	○	○			○	○		良好	線刻文
	45	24776 26530 26535 32127	E－20	Ⅲa，Ⅲb	甕	ⅡB	口縁	－	－	ハケ目，ヘラケズリ，指頭圧痕	ハケ目	明赤褐	明赤褐			○	○		○			良好	46と同一個体か
	46	30727 31213 30455 30729 31115 30493	E－20	Ⅲa	甕	ⅡB	口縁	－	－	ハケ目	ハケ目，ナデ	橙	橙	○							軽石	良好	刻目突帯文，煤付着
	47	24774	E－20	Ⅲa	甕	ⅡB	口縁	－	－	ハケ目，ナデ	ハケ目，ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○		○					良好	煤付着
	48	1340	D－14	Ⅳ	甕	ⅡB	口縁	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○		○				○	茶粒	良好	刻目突帯文(布目痕)　煤付着
206	49	19685	D－21	Ⅲa	甕	ⅡB	頸部	－	－	ナデ	ハケ目	明黄褐	明黄褐	○		○						良好	刻目突帯文
	50	2142	C－21	Ⅱ	甕	ⅡB	頸部	－	－	ハケ目，ナデ	ハケ目，ナデ	褐灰	にぶい黄橙	○	○	○						良好	刻目突帯文
	51	なし	－	－	甕	ⅡB	頸部	－	－	ナデ	ハケ目，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○							良好	52と同一個体か
	52	なし	－	－	甕	ⅡB	頸部	－	－	ナデ，指頭圧痕	ハケ目，ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○		○						良好	刻目突帯文
	53	1553	B－15	Ⅱ	甕	ⅡB	胴部	－	－	ハケ目	ナデ	灰黄褐	褐灰	○	○	○			○	○		良好	刻目突帯文(布目痕)
	54	5575	B－14	Ⅱ	甕	ⅡB	胴部	－	－	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○		○				○		良好	刻目突帯文(布目痕，スス付着)，片岩(黒)
	55	－	－	－	甕	ⅡB	頸部	－	－	ナデ	ナデ	灰黄褐	橙	○		○						良好	貼付突帯
	56	2239	C－19	Ⅱ	甕	ⅡB	胴部	(8.4)	－	ハケ目，ナデ	ハケ目，ナデ	明赤褐	橙	○	○						軽石	良好	軽石，貼付突帯
	57	3586	B－19	Ⅱ	甕	ⅡB	胴部	－	－	ケズリ	ナデ	橙	橙	○		○			○			良好	貼付突帯
	58	6617 6618 6817	D-14	Ⅱ	甕	ⅢA	口縁	24.8	－	ヘラケズリ，ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○	○					良好	スス付着
	59	2724	D－26	Ⅱ	甕	ⅢB	口縁	－	－	ナデ，指頭圧痕	ナデ	橙	橙	○		○	○					良好	炭化物が付着，突帯文
	60	28300	C－19	Ⅲa	甕		胴部～底部	－	－	ハケ目，指頭圧痕	ハケ目(板)，ナデ	橙	にぶい橙	○		○			○		茶粒	良好	スス付着

第47表　古墳時代土器観察表３

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	胎土 その他	焼成	備考
207	61	5089 3308 3310	C－19	Ⅱ	甕	－	底部	(8.4)	－	ナデ，指頭圧痕	ヘラケズリ，ナデ	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○						良好	
	62	6206	D－21	Ⅱ	甕	－	底部	(10.4)	－	ヘラケズリ，ナデ	ハケ目後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○						○	茶粒	良好	ススト付着
	63	2012 2047	C－21	Ⅱ	甕	－	底部	(8.4)	－	ナデ，ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○	○				砂粒	良好	
	64	9999	D－24	Ⅱ	甕	－	脚部	(10.0)	－	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○			○		軽石	良好	
	65	32434	E－24	Ⅲa	甕	－	脚部	(11.6)	－	ヘラナデ，ヘラケズリ	ハケ目，ヘラナデ	にぶい黄橙	橙			○			○		軽石	良好	
	66	14313	E－19	Ⅲa	甕	－	底部	(11.0)	－	ナデ	ハケ目後ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○		○						良好	
	67	2236 4330	C－19	Ⅱ Ⅲ	甕	－	底部	(10.4)	－	ヘラナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	○		○						良好	
	68	3346 4344	C－19	Ⅱ Ⅲa	甕	－	底部	－	－	ナデ	ハケ目後ナデ	橙	にぶい黄橙			○				○	茶粒・軽石	良好	
	69	なし	C－19	Ⅱ	甕	－	底部	(9.0)	－	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○						良好	
	70	3300	C－19	Ⅱ	甕	－	底部	(9.5)	－	ヘラケズリ	ハケ目，ナデ	橙	橙			○				○	茶粒	良好	
	71	19569	E－18	Ⅲa	甕	－	底部	(10.0)	－	ナデ，指頭圧痕	指押さえ，ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○						良好	
	72	19708	D－21	Ⅲa	甕	－	底部	(10.1)	－	ナデ	ヘラケズリ，ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○	○					軽石	良好	
208	73	17040	F－29	Ⅲa	壺	－	口縁	(10.8)	－	ナデ，指頭圧痕	ナデ	橙	橙							○	軽石	良好	片岩(茶・黒)
	74	11291	D－17	Ⅲa	壺	－	口縁	－	－	ナデ	ハケ目後ナデ	にぶい黄橙	橙	○		○						良好	
	75	32318	E－26	Ⅲa	壺	－	口縁	－	－	ナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	○		○				○		良好	口唇部に沈線
	76	802	B－14	Ⅲ	壺	－	頸部	－	－	剥離が多く不明	ハケ目，ナデ	橙	橙	○		○			○			良好	布目痕が確認できる突帯
	77	4405 4335 3476	C－19 C－21	Ⅱ Ⅲa	壺	－	口縁～頸部	－	－	ハケ目	ナデ	橙	橙			○				○	茶粒	良好	頸部に貼付突帯
	78	1919	C－20	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	ヘラナデ	ナデ	黄橙	黄橙	○								良好	二条突帯
	79	4846	D－23	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○						良好	二条突帯
	80	5148	C－19	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	ヘラナデ	ナデ	橙	浅黄橙	○		○						良好	二条突帯
	81	11301	D－17	Ⅲa	壺	－	胴部	－	－	ハケ目，ナデ	ナデ	橙	橙			○			○			良好	二条突帯
	82	19571	E－18	Ⅲa	壺	－	胴部	－	－	ヘラケズリ，ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	褐灰			○	○		○			良好	二条突帯
	83	31183 11504	E－18 E－20	Ⅲa	壺	－	胴部	－	－	ヘラナデ	ナデ	橙	橙	○	○							良好	二条突帯
	84	なし	B－13	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	ナデ	ハケ目，ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	○		○						良好	三条突帯
	85	30062 3462 3461 13868	C－21 D－21 D－18	Ⅲa Ⅲb Ⅱ	壺	－	胴部	(24.8)	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐		○	○	○					良好	三条突帯
209	86	6145 2058 19787	C－20 C－21 D－21	Ⅱ Ⅲa	壺	－	胴部	－	－	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○			○		茶粒	良好	刻目突帯文
	87	11372 4183	D-17	Ⅲa	壺	－	胴部	(26.4)	－	ヘラナデ	ハケ目，ナデ	橙	橙	○		○					茶粒	良好	断面三角形の一条突帯
	88	29324 6250 28140	D－19 D－22	Ⅱ Ⅱa Ⅲ	壺	－	胴部	(14.8)	－	ヘラケズリ，ナデ	ヘラケズリ，ナデ	にぶい黄褐	橙	○	○	○						良好	一条突帯，長胴形
	89	2836 27983	D－20 D－22	Ⅱ Ⅲa	壺	－	胴部	(26.4)	－	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	橙	橙	○	○	○				○		良好	片岩(黒)，突帯文
	90	27612	D－20	Ⅲa	壺	－	胴部	－	－	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○				○		良好	片岩(黒)，突帯文
	91	1935	C－20	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	ヘラナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○						良好	刻目突帯文，丹塗り(朱)
	92	3538	B－19	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	ヘラケズリ，ヘラナデ	ナデ，ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄						○		茶粒	良好	
	93	2607	C－21	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	剥離	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○			○		軽石	良好	
	94	5137	C－19	Ⅱ	壺	－	胴部	－	－	ハケ目	ハケ目	にぶい橙	にぶい褐			○			○			良好	沈線，刻目
210	95	3096 3082 2639 3085 3092 3252 3094 3222 3250	C－22	Ⅱ	壺	－	胴部～底部	－	－	ハケ目，ナデ，指頭圧痕	ハケ目，ナデ，指頭圧痕	灰黄褐	明黄褐	○		○						良好	底部にススト痕有り大型土器

第48表　古墳時代土器観察表４

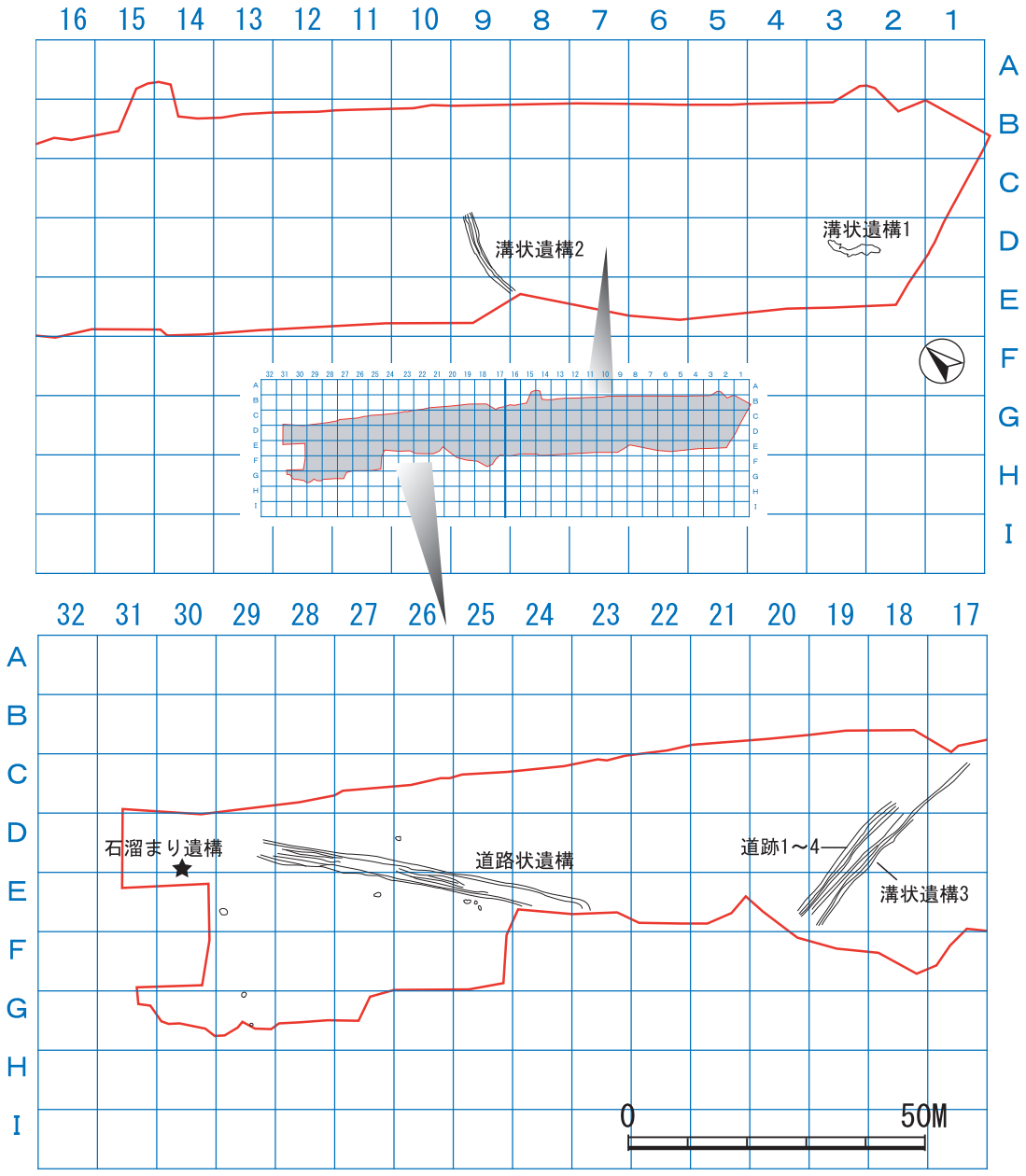
挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 輝石	胎土 雲母	胎土 火山ガラス	胎土 片岩	胎土 その他	焼成	備考
210	95	2668 3080 3107	C－22	Ⅱ	壺	－	胴部～底部	－	－	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ，指頭圧痕	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ，指頭圧痕	灰黄褐	明黄褐	○		○						良好	底部にｽｽ痕有り 大型土器
	96	7127 3333 3330 24244 なし	D－20 C－19 C－19 C－17 C－19	Ⅱ Ⅲa	壺	－	胴部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	橙	にぶい赤褐	○	○	○						良好	大型土器
211	97	15829 15369 15481 15345 15799 14789 14783 15823	E－19	Ⅲa	壺	－	胴部	(25.6)	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ，指頭圧痕，ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	橙			○			○		軽石	良好	
	98	11485	E－18	Ⅲa	壺	－	胴部～底部	(11.8)	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	浅黄橙	にぶい黄橙	○		○						良好	
	99	19741 19734	D－21	Ⅲa	壺	－	胴部～底部	(11.4)	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	橙	橙	○		○					軽石	良好	
212	100	なし	－	－	坩	－	完形	(9.4)	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ，ﾅﾃﾞ	黄橙	にぶい橙			○						良好	
	101	6783	D－15	Ⅱ	坩	－	口縁	－	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄	にぶい黄橙	○			○	○	○	○		良好	
	102	なし	－	－	坩	－	杯部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ	浅黄橙	浅黄橙	○					○	○	茶粒	良好	丹塗り
	103	21002	F－27	Ⅲa	坩	－	胴部	－	－	ﾍﾗﾐｶﾞｷ，ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい橙	明赤褐						○	○	黒耀岩，軽	良好	丹塗り
	104	なし	F－25	Ⅲb	坩	－	胴部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐	橙	○	○	○					黒耀石，	良好	
	105	18483 18319	F－27	Ⅲa	坩	－	胴部	－	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	暗灰黄	赤褐	○	○	○			○		茶粒	良好	丹塗り
	106	2195	D－29	Ⅱ	坩	－	胴部	－	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○		○			○			良好	丹塗り
	107	なし	－	－	坩	－	胴部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○		○			○	○	茶粒，黒耀岩	良好	
	108	6690	D－14	Ⅱ	坩	－	底部	－	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ，ﾕﾋﾞ押さえ	ﾐｶﾞｷ	にぶい黄褐	黒	○		○						良好	
	109	28490	C－18	Ⅲa	坩	－	底部	－	(5.6)	ﾅﾃﾞ，指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○							茶粒	良好	
	110	32327	E－26	Ⅲa	坩	－	底部	－	(5.1)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ，ﾐｶﾞｷ	黄橙	橙		○	○					軽石，	良好	軽石
	111	なし	－	－	鉢	－	口縁	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	明赤褐			○			○	○	軽石，	良好	剥離著しい
	112	17589	F－28	Ⅳa	鉢	－	口縁	－	－	ﾊｹ目，ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目，ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄橙	橙			○					茶粒，軽石	良好	
	113	なし	－	－	鉢	－	口縁	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	赤灰	にぶい橙	○	○	○						良好	
	114	10664	F－27	Ⅱ	鉢	－	底部	－	10.0	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○				○	玉髄	良好	
	115	2067	C－21	Ⅱ	高杯	－	杯部	(20.0)	－	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	赤橙	赤橙	○								良好	丹塗り
	116	2331，なし	C－24 C－25	Ⅱ	高杯	－	杯部	－	－	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	明赤褐	明赤褐	○	○							良好	丹塗り
213	117	なし	－	－	高杯	－	杯部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	橙							○		良好	丹塗り
	118	18402	F－28	Ⅲa	高坏	－	杯部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	橙	橙			○						良好	丹塗り
	119	3523	B-19	Ⅱ	高坏	－	坏部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙	浅黄橙	○	○					○		良好	
	120	なし	D･E－26～30	溝	高坏	－	坏部	－	－	ﾅﾃﾞ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	橙	橙	○	○						軽石	良好	
	121	23990	C－18	Ⅲa	高杯	－	胴部～底部	－	－	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	橙	橙						○		茶粒	良好	丹塗り
	122	19713	D－21	Ⅲa	高坏	－	脚部	－	－	ｹｽﾞﾘ，指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	褐灰	にぶい橙	○								良好	
	123	32263	D－28	Ⅲa	高坏	－	脚部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙	浅黄橙			○			○		砂粒	良好	
	124	なし	－	－	高坏	－	脚部	－	－	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○						○		良好	
	125	なし	－	－	高坏	－	脚部	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐	橙	○		○			○			良好	
	126	なし	D･E－26～30	溝	高坏	－	脚部	－	－	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 指頭圧痕	浅黄橙	浅黄橙		○							良好	
	127	なし	－	－	高杯	－	脚部	－	－	ﾊｹ目	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						○		茶粒	良好	
	128	2143 2083 2144	C－21	Ⅱ	高坏	－	脚部	－	16.0	ﾍﾗｹｽﾞﾘ ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙	浅黄橙	○		○	○		○			良好	
	129	なし	－	－	高杯	－	脚部	－	14.8	ﾊｹ目	ﾐｶﾞｷ，ﾅﾃﾞ	橙	橙						○	○	茶粒	良好	
	130	8929	D－28	Ⅲ	手づくね	－	胴部～底部	－	5.4	ﾅﾃﾞ，指頭圧痕	ﾅﾃﾞ，指頭圧痕	橙	橙	○	○		○					良好	貼付突帯
	131	なし	－	－	手づくね	－	底部	－	3.0	ﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	褐	にぶい黄褐	○		○						良好	
	132	14721	E－19	Ⅲa	手づくね	－	底部	－	4.0	剥離が多い	ﾅﾃﾞ	剥離が多い	にぶい橙	○		○			○		軽石	良好	
	133	なし	－	－	手づくね	－	底部	－	5.0	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい橙	橙	○		○					軽石，茶粒	良好	

第４節　古代から中世の遺構と遺物

１　遺構

古代から中世の遺構は，土坑，掘立柱建物跡，溝状遺構，道路状遺構などがⅡ層を中心に検出された。

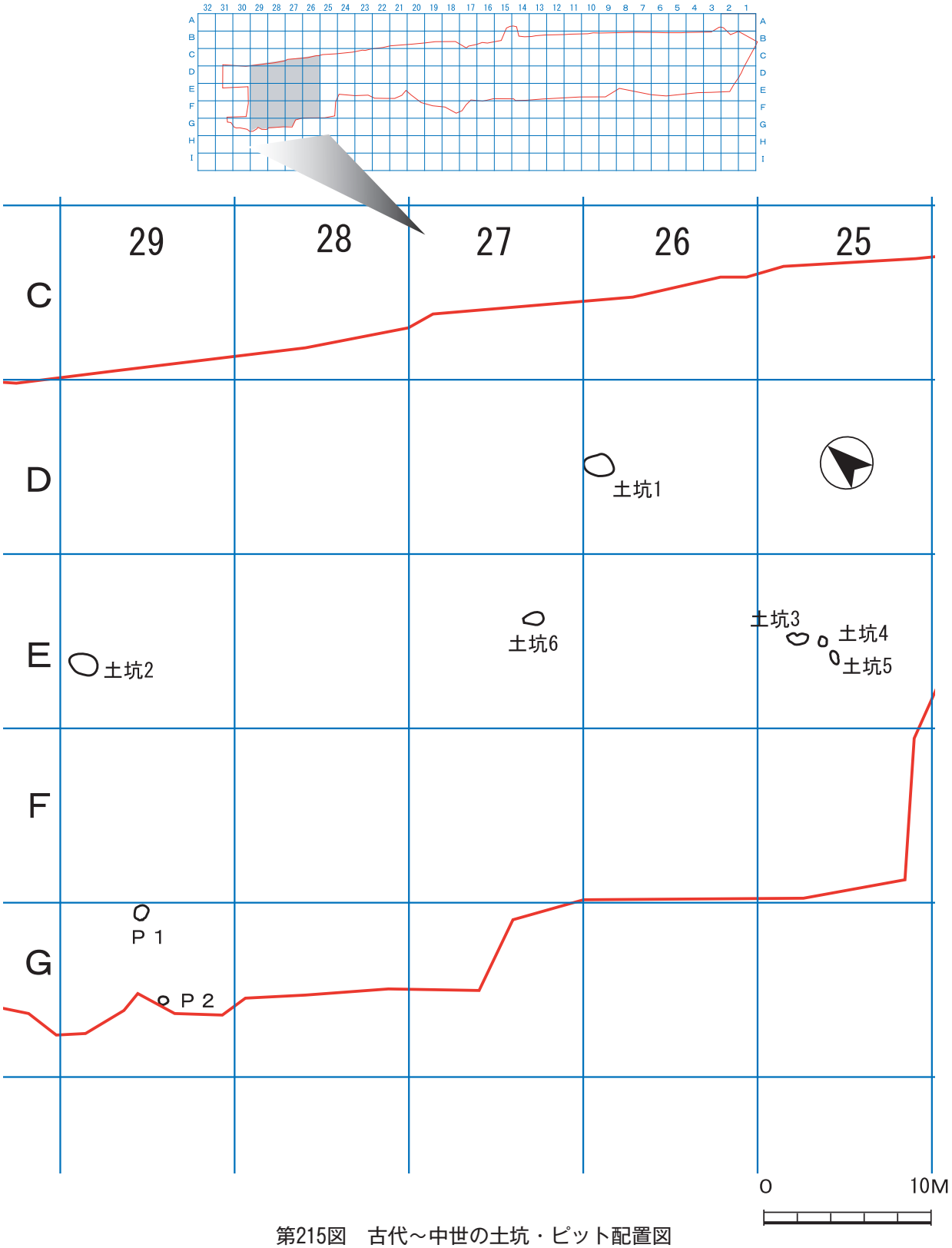
遺構の埋土から出土する遺物が少なく，確実な時期を判断できない遺構が多い。出土遺物の無い遺構は，層位や埋土状況から時期を判断した。



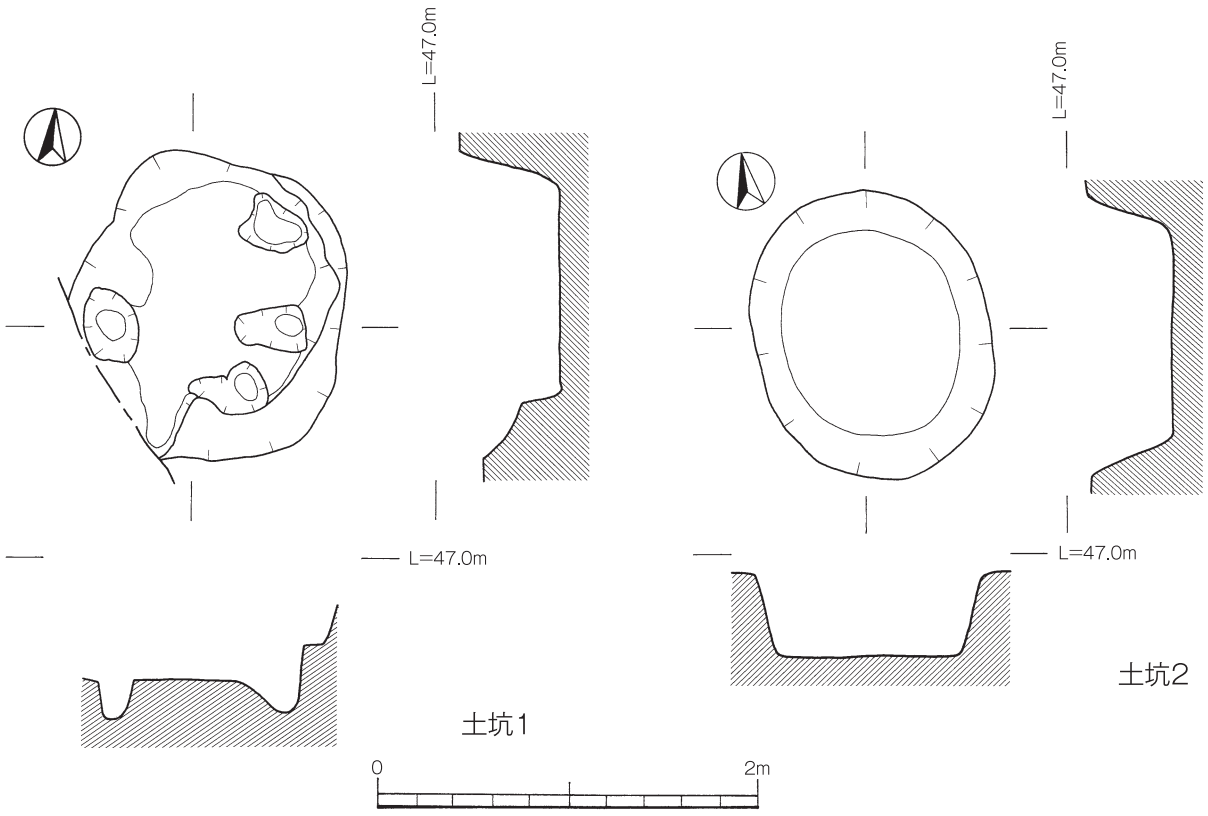
第214図　古代～中世の遺構配置図

⑴　古代～中世の土坑，ピット（第215～217図）

埋土中の出土遺物や層から判断して，古代の時期と考えられる土坑が２基，中世の時期と考えられる土坑が４基検出された。



第215図　古代～中世の土坑・ピット配置図



第216図　古代の土坑

ア　古代の土坑

土坑１（第216図）

D-26区のⅡ層で検出された。長径162cm，短径136cmの略楕円形を呈し，南西側は切られている。検出面からの深さは40cmである。底面はほぼ平坦で，東側に約10cmの水平の段があり，立ち上がる。底面に４つの小ピットがある。土師器の小片が出土している。図化はできなかった。

土坑２（第216図）

E-29区のⅡ層で検出された。長径151cm，短径126cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは43cmである。底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。土師器の小片が出土している。図化はできなかった。

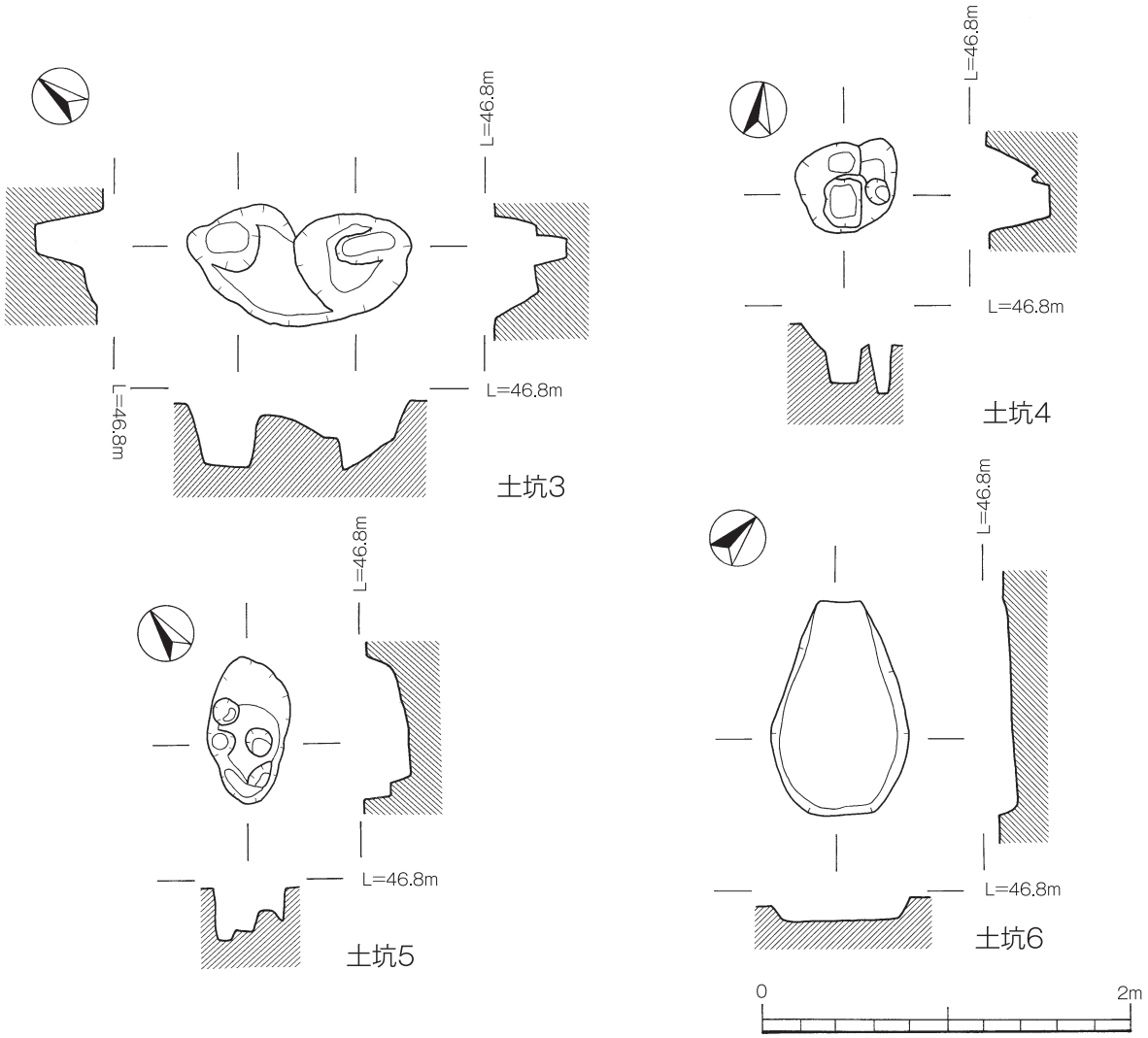
第49表　古代の土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	出土遺物番号	備考（旧遺構名）
216	土坑1	D　ー　26	162	136	40	ー	土坑1
	土坑2	E　ー　29	151	126	43	ー	土坑3

イ　中世の土坑

土坑３（第217図）

E-25区のⅡ層で検出された。長径122cm，短径50cmの不定形を呈し，検出面からの深さは約25cmと浅く，２つのピットによって切られている。



第217図　中世の土坑

土坑４（第217図）

Ｅ-25区のⅡ層で検出された。長径50cm，短径48cmの隅方丸形を呈し，検出面からの深さは30cmである。２つのピットによって切られている。

土坑５（第217図）

Ｅ-25区のⅡ層で検出された。長径80cm，短径40cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは22cmである。３～４の小ピットがある。

土坑６（第217図）

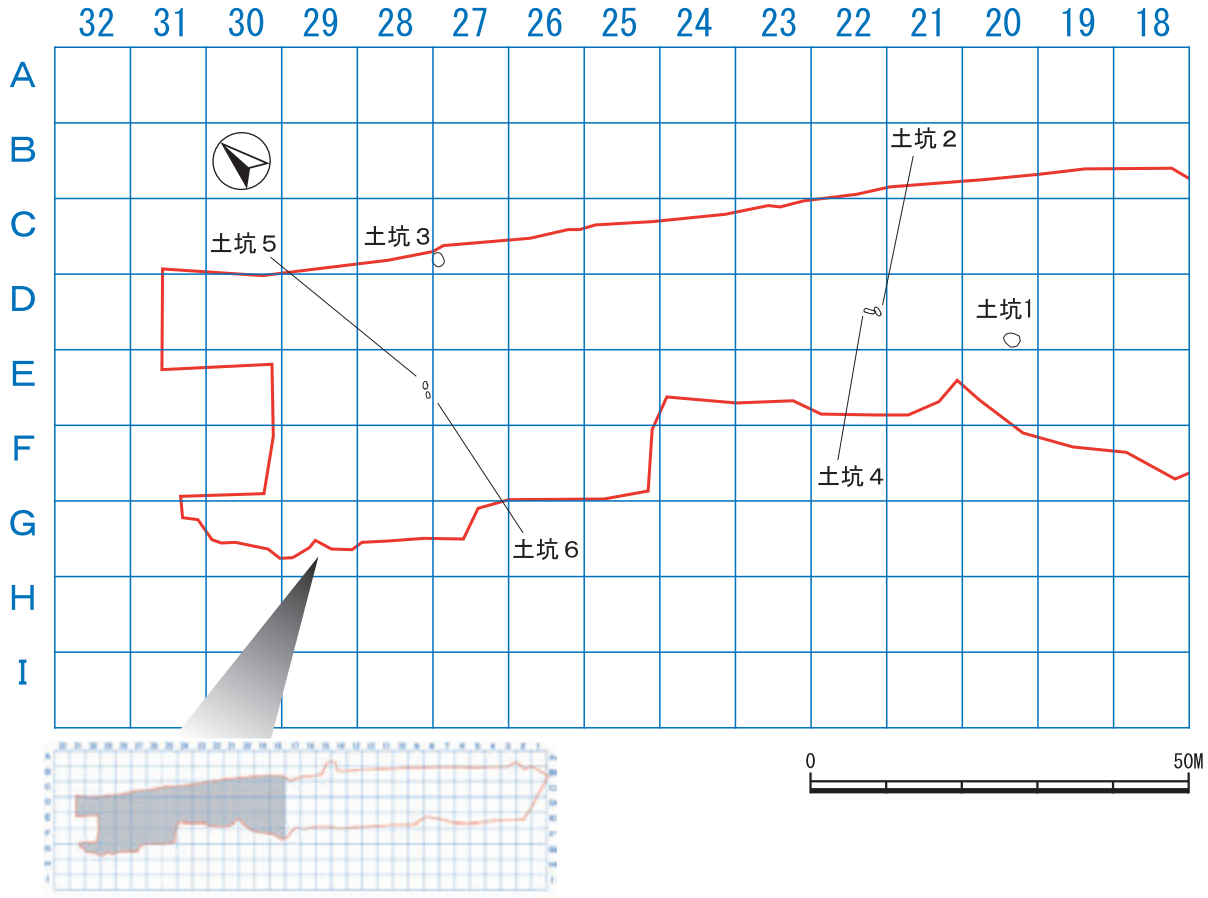
Ｅ-27区のⅡ層で検出された。。長径116cm，短径76cmの不定形を呈し，検出面からの深さは12cmと浅い。底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。

第50表　中世の土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物番号	備考(旧遺構名)
216	土坑3	Ｅ　－　25	122	50	24	－	土坑37
	土坑4	Ｅ　－　25	50	48	30	－	土坑36
	土坑5	Ｅ　－　25	80	40	22	－	土坑35
	土坑6	Ｅ　－　27	116	76	12	－	土坑30

⑵　不明土坑

遺物や埋土から時期の特定できなかった土坑を６基検出した。検出状況から，ほかのピットとの関連性を検討したが，遺構の性格は１基を除いて不明である。



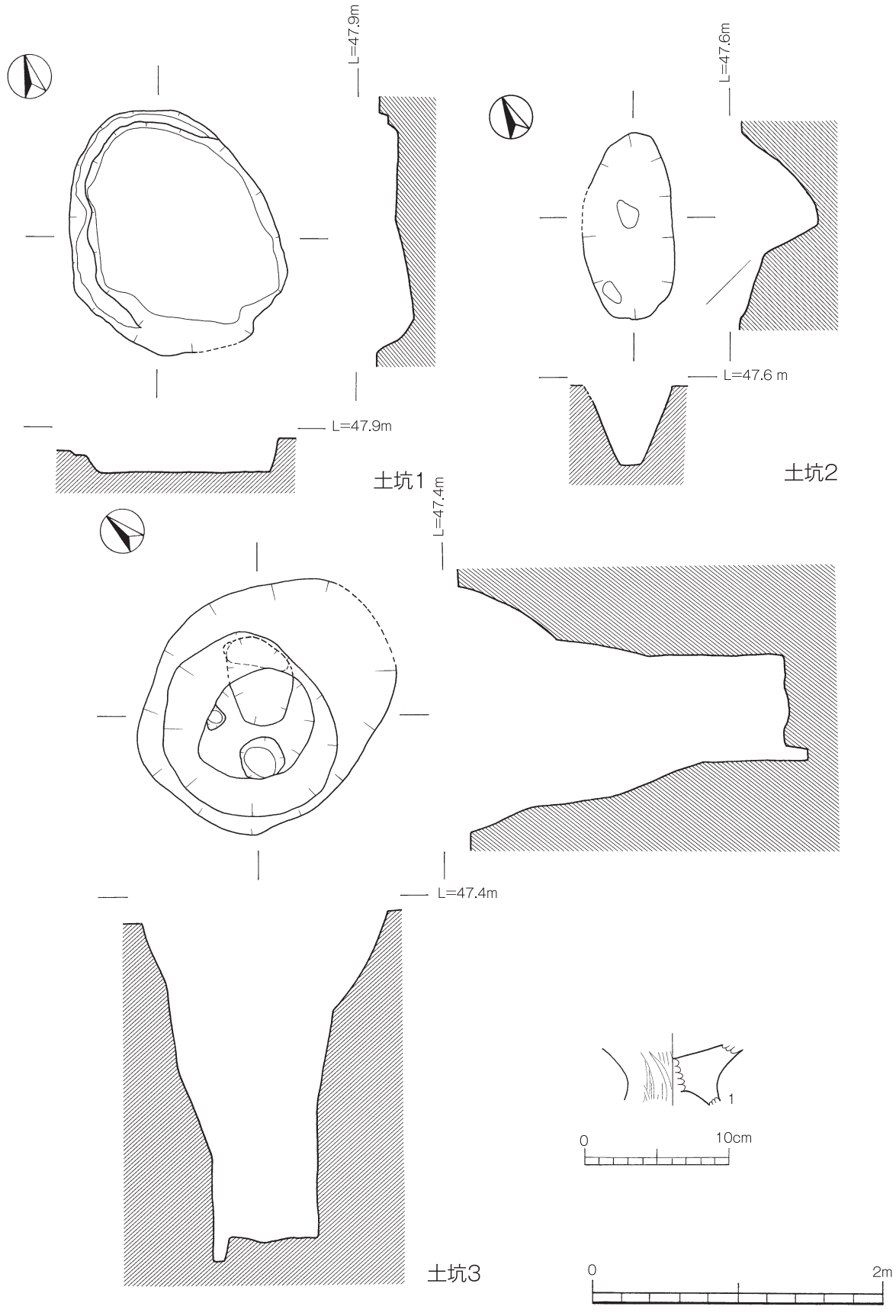
第218図　時期不明土坑配置図

土坑１は，Ｄ－20区にあり，長径170cm，短径150cm，底面までの深さ22cmのほぼ円形で，北面に約８cmの小さな段を持つ土坑である。

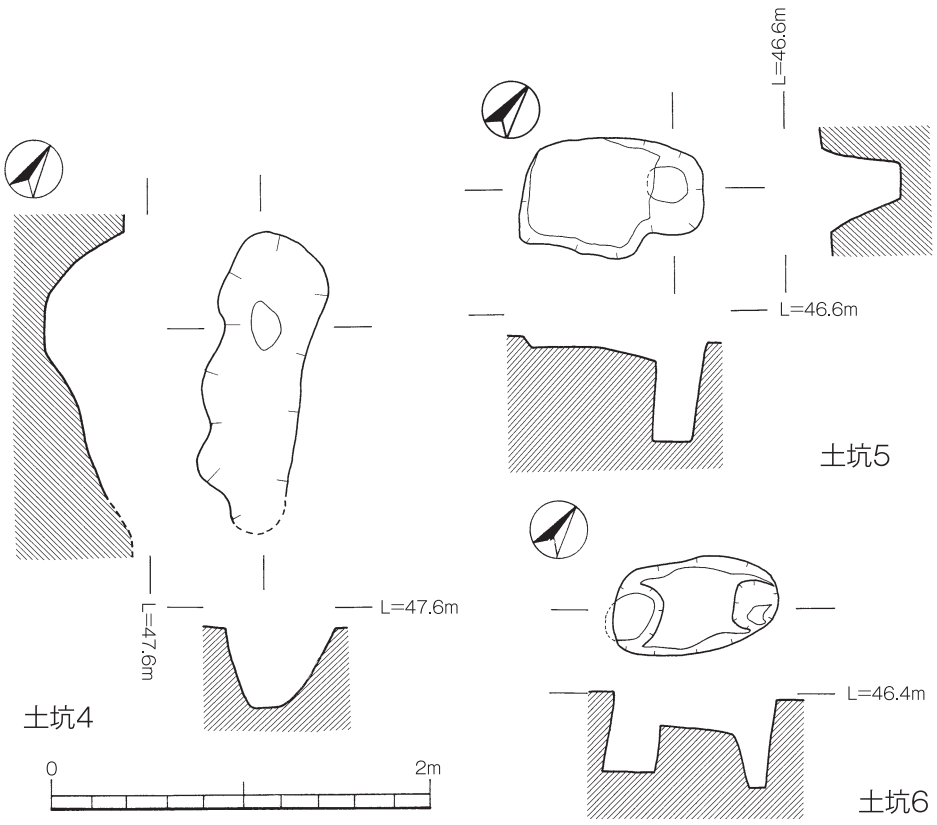
土坑２は，Ｄ－22区にあり，長径130cm，短径60cm，底面までの深さ54cmの楕円形をしており，底面に緩やかなくぼみを持つ土坑である。土坑の西側で不明土坑３と接しているが，切り合いは不明である。

土坑４は，Ｄ－22区にあり，長径160cm(推定値)，短径50cm，底面までの深さ45cmの細長い不定形で，底面は緩やかにくぼんでいる土坑である。東側で，土坑２と接しているが，切り合いは不明である。

土坑３は，Ｃ－27区にあり，長径185cm，短径150cm，底面までの深さ230cmのほぼ円形でバケツ状の形態をした底面に３つの小穴を持つ土坑である。底面の小穴は，一つは底面外へ飛び出しているが，掘りすぎによるものか，あるいは樹（じゅ）根である可能性が高いと考えられる。埋土内で，弥生時代のものと思われる高坏の脚部を検出しているが，土坑の形状から落とし穴の可能性が高く，この遺構の性格上，弥生時代中期以降のものと考えられる。



第219図　時期不明土坑 1



第220図　時期不明土坑２

土坑５は，Ｅ－28区にあり，長径94cm，短径50cm，底面までの深さ８cmの浅い長方形の土坑で東側に深さ56cmの小穴を持つ。

土坑６は，Ｅ－28区にあり，長径90cm，短径50cm，底面までの深さ20cmの楕（だ）円形をした土坑で，中に２つの小穴を持つ。２つの小穴は，それぞれ底面から25cmから30cmあり，一つは底面外へ飛び出しているが，掘りすぎによるものか，あるいは樹根である可能性が高いと考えられる。

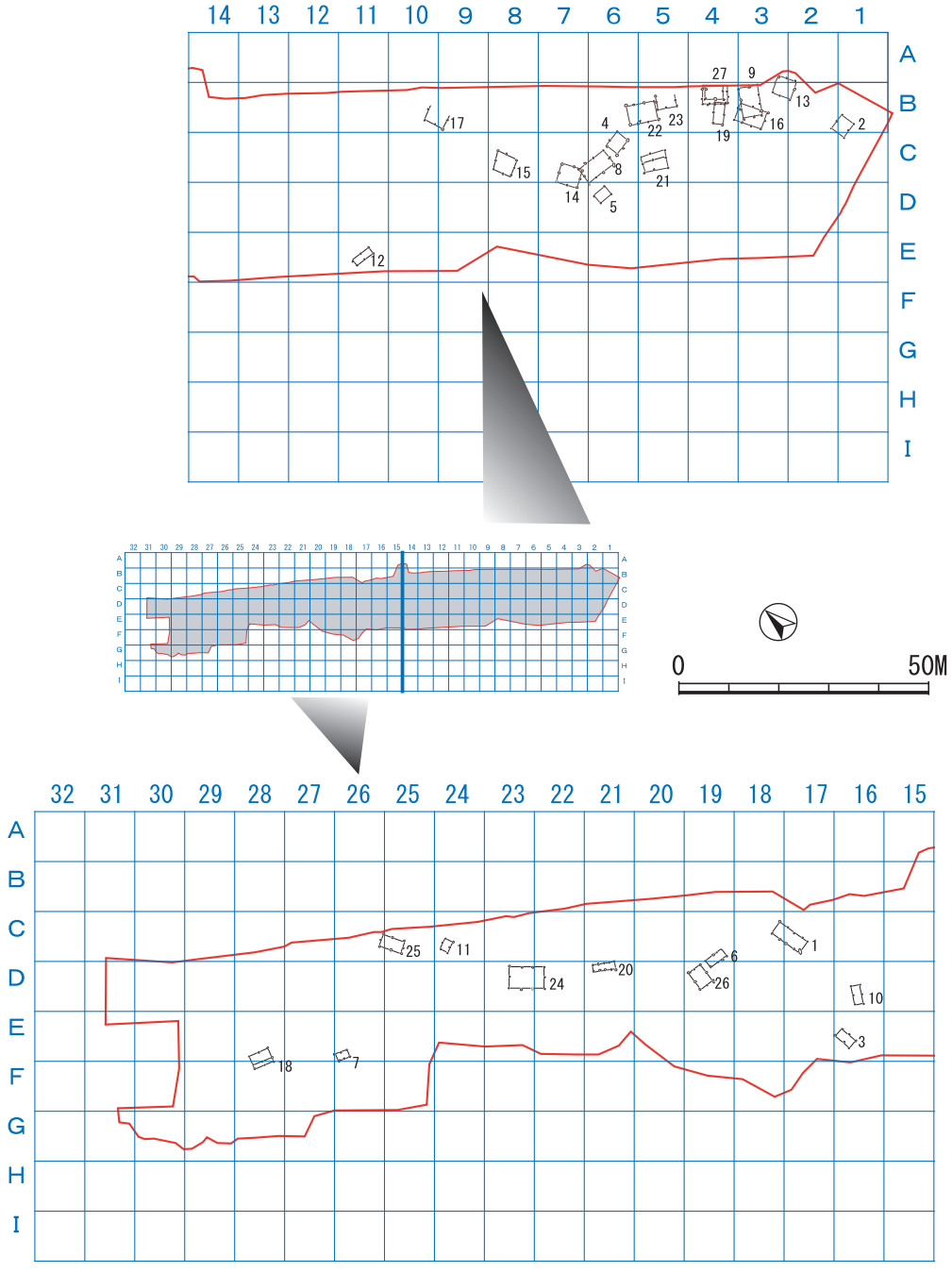
第51表　時期不明土坑計測表　　（　）は推定値

挿図番号	遺構名	検出区	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	出土遺物番号	備考（旧遺構名）
219	土坑1	D　－　20	170	150	22	－	土坑2
	土坑2	D　－　22	130	60	54	－	土坑8－1
	土坑3	C　－　27	185	150	230	1	土坑1
220	土坑4	D　－　22	(160)	50	45	－	土坑8－2
	土坑5	E　－　28	94	50	8	－	土坑39
	土坑6	E　－　28	90	50	20	－	土坑1

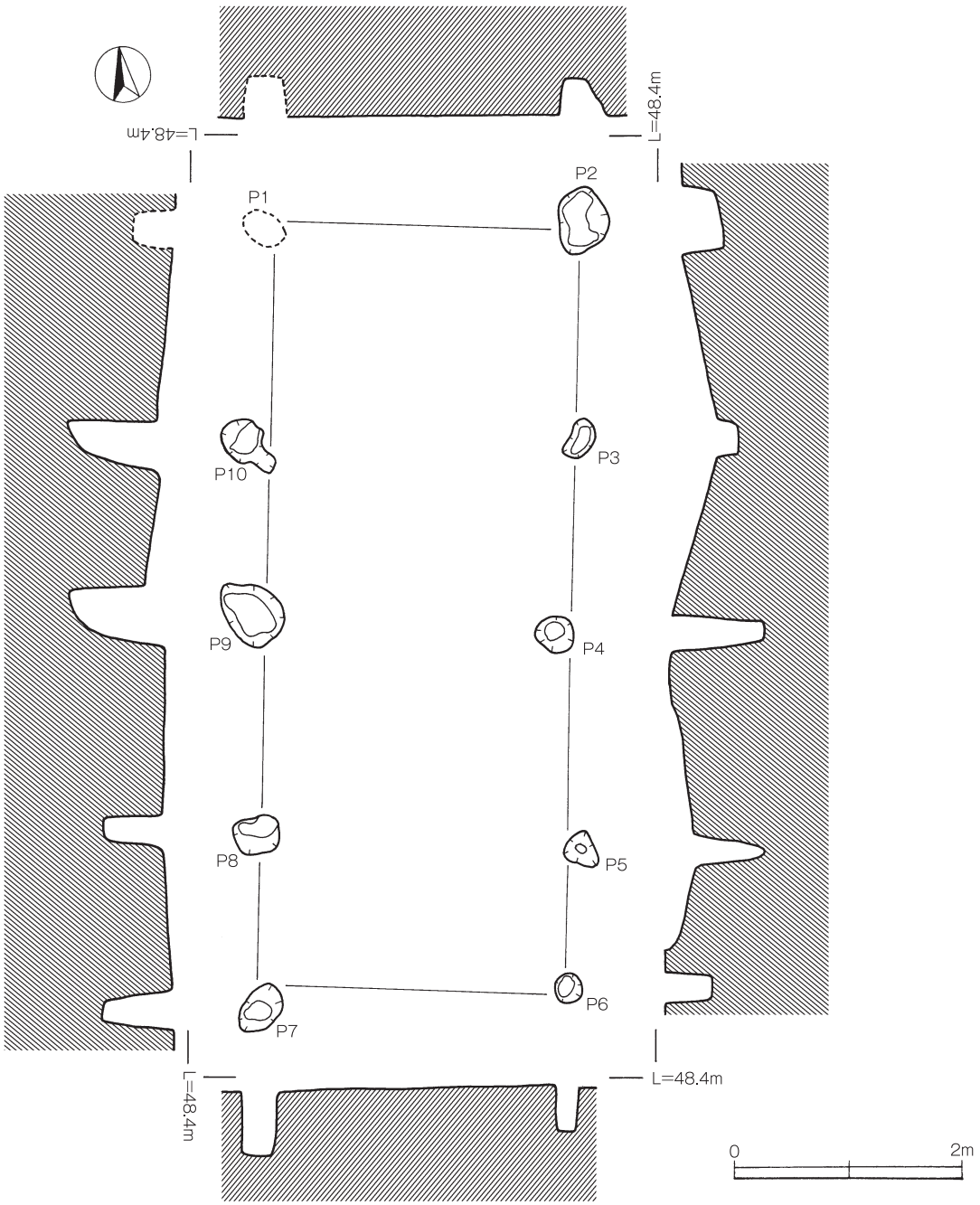
(3) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は，無数にあるピットの中で27棟を検出することができた。平成８年の発掘調査では，26棟を検出したが，その後の整理作業の中で，いびつにゆがんだものを削除し，新たに図面上で27棟を抽出した。削平されるなどして，一部分のみ検出されたものもある。切り合って検出された遺構もあり，建物の時期も複数あると考えられる。

建物のほとんどは，時期を特定する遺物もなく，周辺遺跡や市ノ原遺跡第１地点の掘立柱建物跡との比較をおこなったが，時代を判別できなかったため，唯一特定のできた近世の掘立柱建物跡をのぞいて，古代～中世の項に掲載した。分類方法は，この項の最後（338頁）に示す。



第221図　掘立柱建物跡配置図



第222図　掘立柱建物跡１

掘立柱建物跡１（第222図）

Ｃ-17・18区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は１間×４間の上屋だけで構成されており，10個の柱穴からなる。最大桁行685cm，最大梁間290cm，１間間尺の平均値は桁行方向で170cm，梁間方向で279cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は43cm，検出面からの深さの平均値は46cmである。

第52表　掘立柱建物跡１計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P2 ― P3	198	P2－P6	678	P1 － P2	(290)	1	(33)	(39)	26
	P3 － P4	170			P6 － P7	267	2	31	60	43
	P4 － P5	185					3	18	35	20
南北	P5 － P6	125					4	22	35	31
N7° E	P7 － P8	150	P7－P1	(685)			5	85	34	27
	P8 － P9	190					6	40	26	23
	P9 － P10	150					7	13	48	32
	P10 － P1	(195)					8	54	41	27
							9	84	62	47
							10	80	54	32
	平均	(170)		(681)		(279)		(46)	(43)	31

掘立柱建物跡２（第223図）

Ｂ・Ｃ－１・２区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行346cm，最大梁間322cm，１間間尺の平均値は桁行方向で170cm，梁間方向で305cmである。柱穴の平面形は，ほぼ円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は31cm，検出面からの深さの平均値は40cmである。

第53表　掘立柱建物跡２計測表

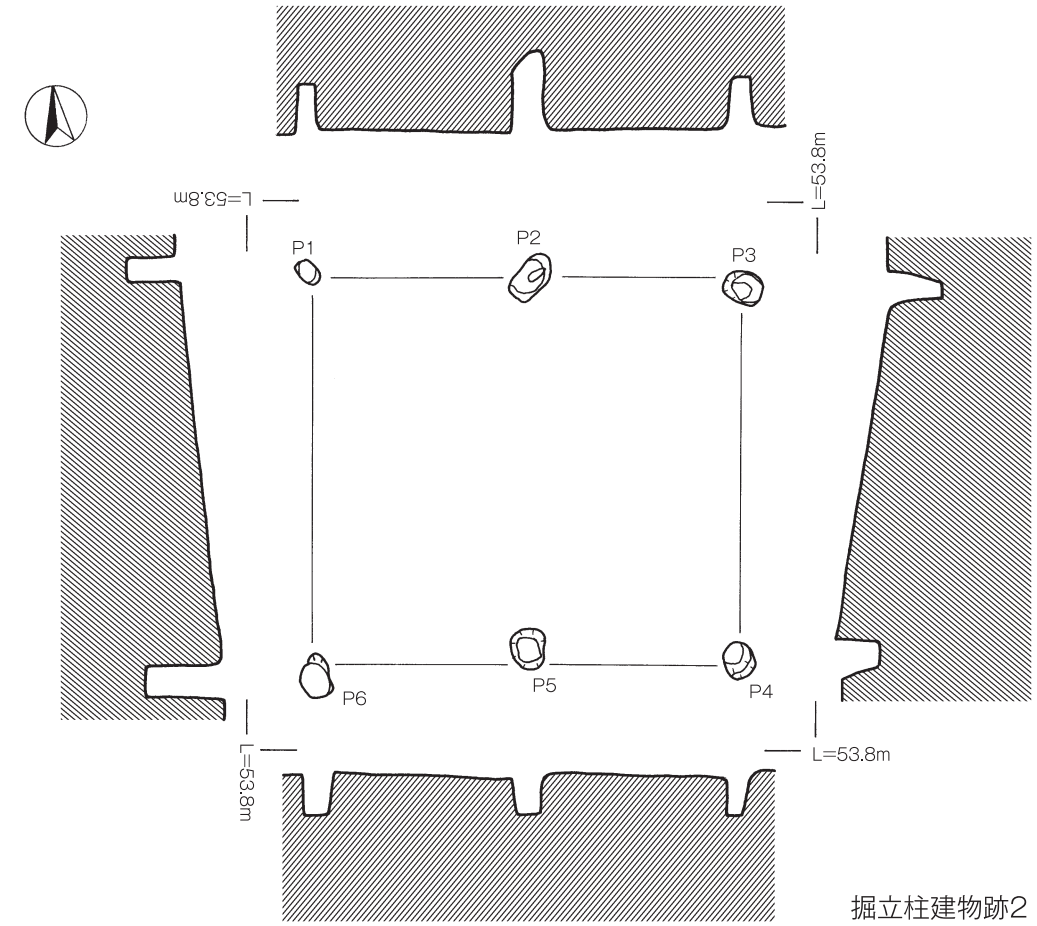
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 ― P2	180	P1－P3	346	P3 － P4	288	1	40	22	14
	P2 － P3	166			P6 － P1	322	2	64	40	32
	P4 － P5	166	P4－P3	336			3	42	30	24
南北	P5 － P6	170					4	33	30	26
N10° E							5	32	32	24
							6	34	36	24
	平均	170		341		305		40	31	24

掘立柱建物跡３（第223図）

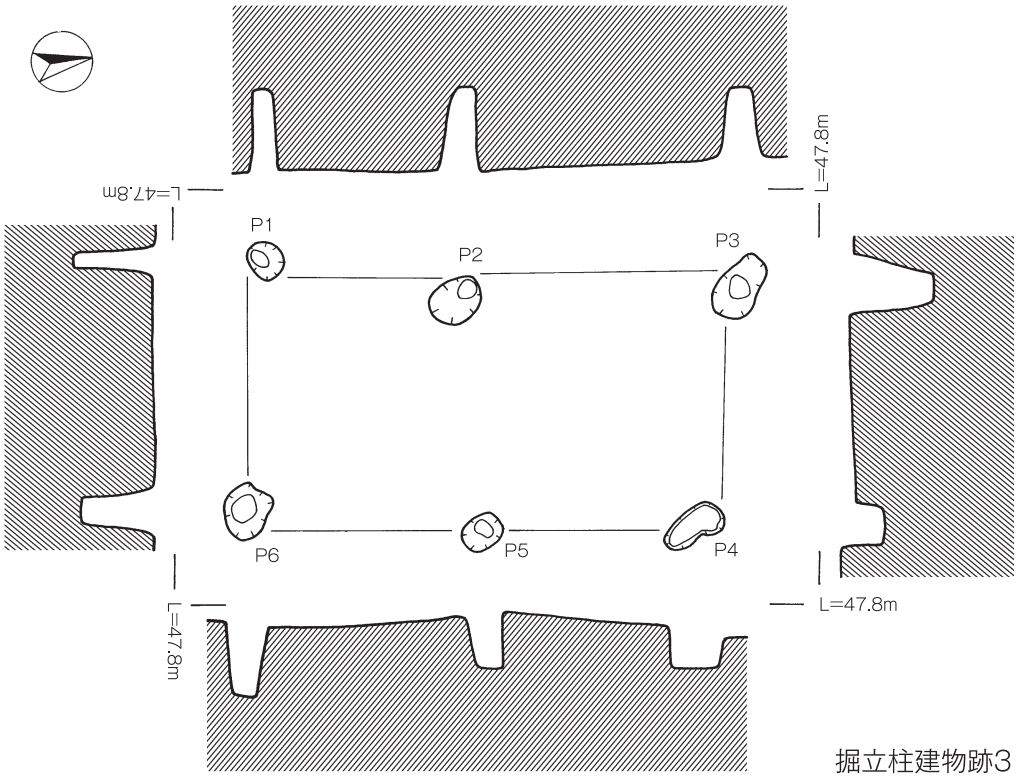
Ｅ-16区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行382cm，最大梁間200cm，１間間尺の平均値は桁行方向で183cm，梁間方向で199cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は44cm，検出面からの深さの平均値は54cmである。

第54表　掘立柱建物跡３計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 ― P2	167	P1－P3	382	P3 － P4	198	1	62	32	26
	P2 － P3	215			P6 － P1	200	2	70	45	26
	P4 － P5	160	P4－P6	351			3	66	55	32
南北	P5 － P6	191					4	28	52	22
N7° E							5	41	34	27
							6	57	46	35
	平均	183		366		199		54	44	28



掘立柱建物跡2



掘立柱建物跡3

第223図　掘立柱建物跡２・３

0　2m

掘立柱建物跡４（第224図）

C－６区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行364cm，最大梁間270cm，１間間尺の平均値は桁行方向で182cm，梁間方向で270cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は49cm，検出面からの深さの平均値は66cmである。

第55表　掘立柱建物跡４計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 ― P2	134	P1－P3	364	P3 － P4	270	1	60	48	35
	P2 － P3	230			P6 － P1	270	2	77	38	33
	P4 － P5	184	P4－P6	364			3	72	38	36
東西	P5 － P6	180					4	68	62	56
N77° W							5	51	52	28
							6	68	56	48
	平均	182		364		270		66	49	39

掘立柱建物跡５（第224図）

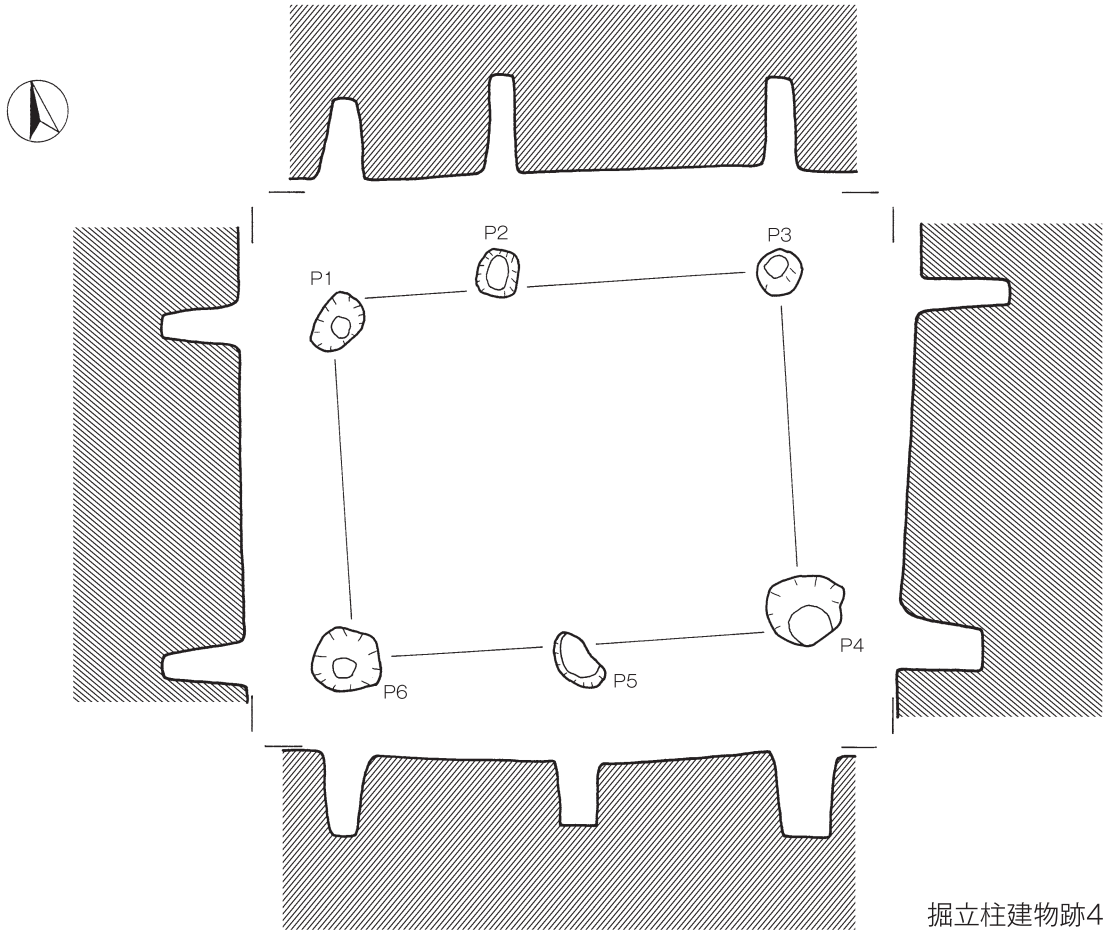
D－６区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×１間の上屋だけで構成されており，４個の柱穴からなる。最大桁行284cm，最大梁間208cm，１間間尺の平均値は桁行方向で276cm，梁間方向で199cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は35cm，検出面からの深さの平均値は40cmである。

第56表　掘立柱建物跡５計測表

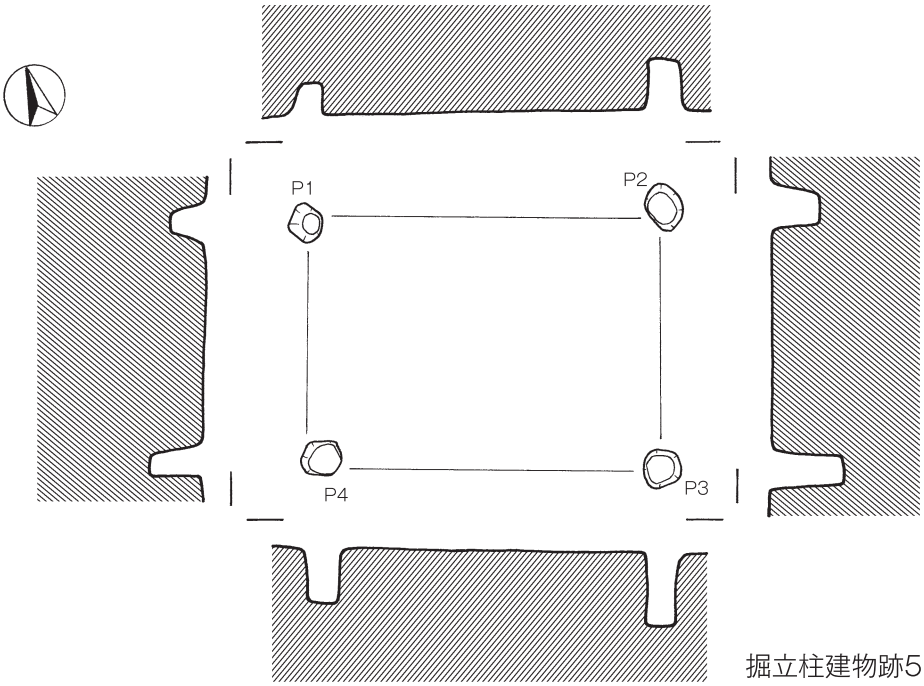
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 ― P2	284			P2 ― P3	208	1	25	34	28
	P3 － P4	268			P1 － P4	190	2	37	40	32
東西							3	57	34	32
N75° W							4	41	34	32
	平均	276				199		40	35	31

掘立柱建物跡６（第225図）

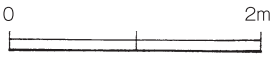
C・D－19区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行432cm，最大梁間172cm，１間間尺の平均値は桁行方向で206cm，梁間方向で168cmである。柱穴の平面形は，ほぼ楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は35cm，検出面からの深さの平均値は44cmである。



掘立柱建物跡4



掘立柱建物跡5



第224図　掘立柱建物跡４・５

第57表　掘立柱建物跡６計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
東西 N70°W	P1 ― P2	240	P1－P3	432	P3 － P4	172	1	52	36	17
	P2 － P3	192			P6 － P1	164	2	67	50	42
	P4 － P5	210	P4－P6	392			3	34	24	12
	P5 － P6	182					4	25	39	32
							5	66	25	23
							6	19	33	23
	平均	206		412		168		44	35	25

掘立柱建物跡７（第225図）

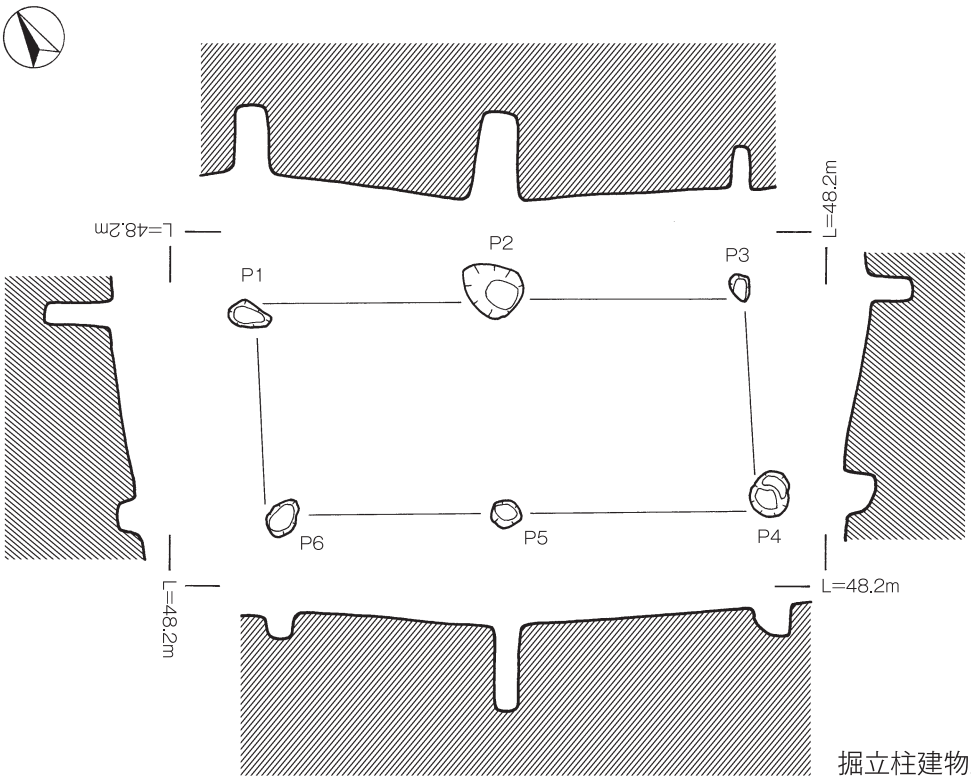
Ｅ・Ｆ-26区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行228cm，最大梁間150cm，１間間尺の平均値は桁行方向で122cm，梁間方向で149cmである。柱穴の平面形は，ほぼ楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は37cm，検出面からの深さの平均値は56cmである。

第58表　掘立柱建物跡７計測表

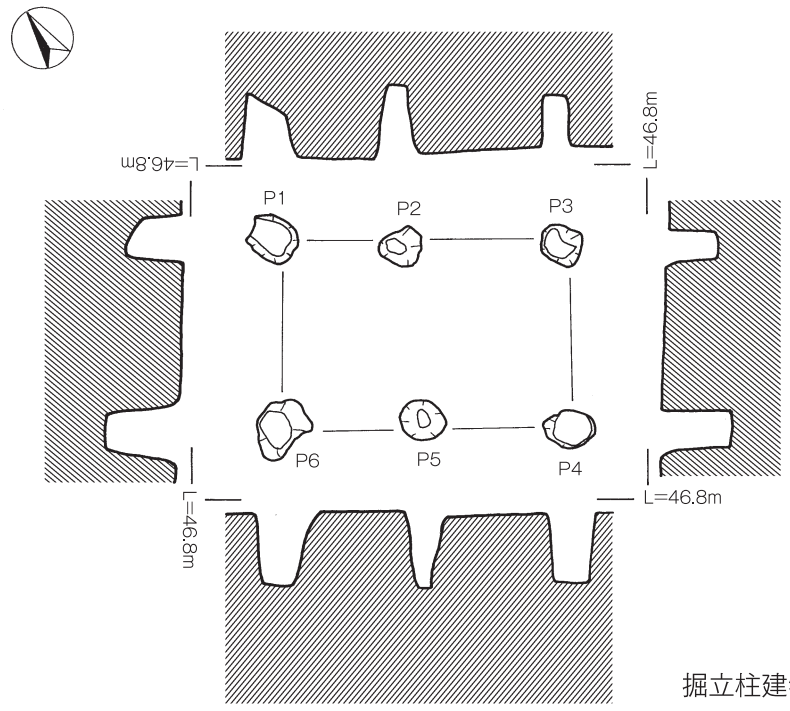
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
東西 N60°W	P1 ― P2	100	P1－P3	228	P3 － P4	148	1	67	37	32
	P2 － P3	128			P6 － P1	150	2	51	33	27
	P4 － P5	114	P4－P6	228			3	41	34	23
	P5 － P6	114					4	53	40	33
							5	69	35	32
							6	53	43	33
	平均	114		228		149		56	37	30

掘立柱建物跡８（第226図）

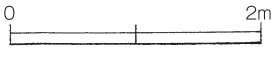
Ｃ-６・７区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は２間×３間の上屋だけの構成と考えられる。検出された柱穴は７個である。最大桁行628cm，最大梁間380cm，１間間尺の平均値は桁行方向で208cm，梁間方向で182cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は47cm，検出面からの深さの平均値は61cmである。東側の柱穴７は，建て直しの可能性がある。



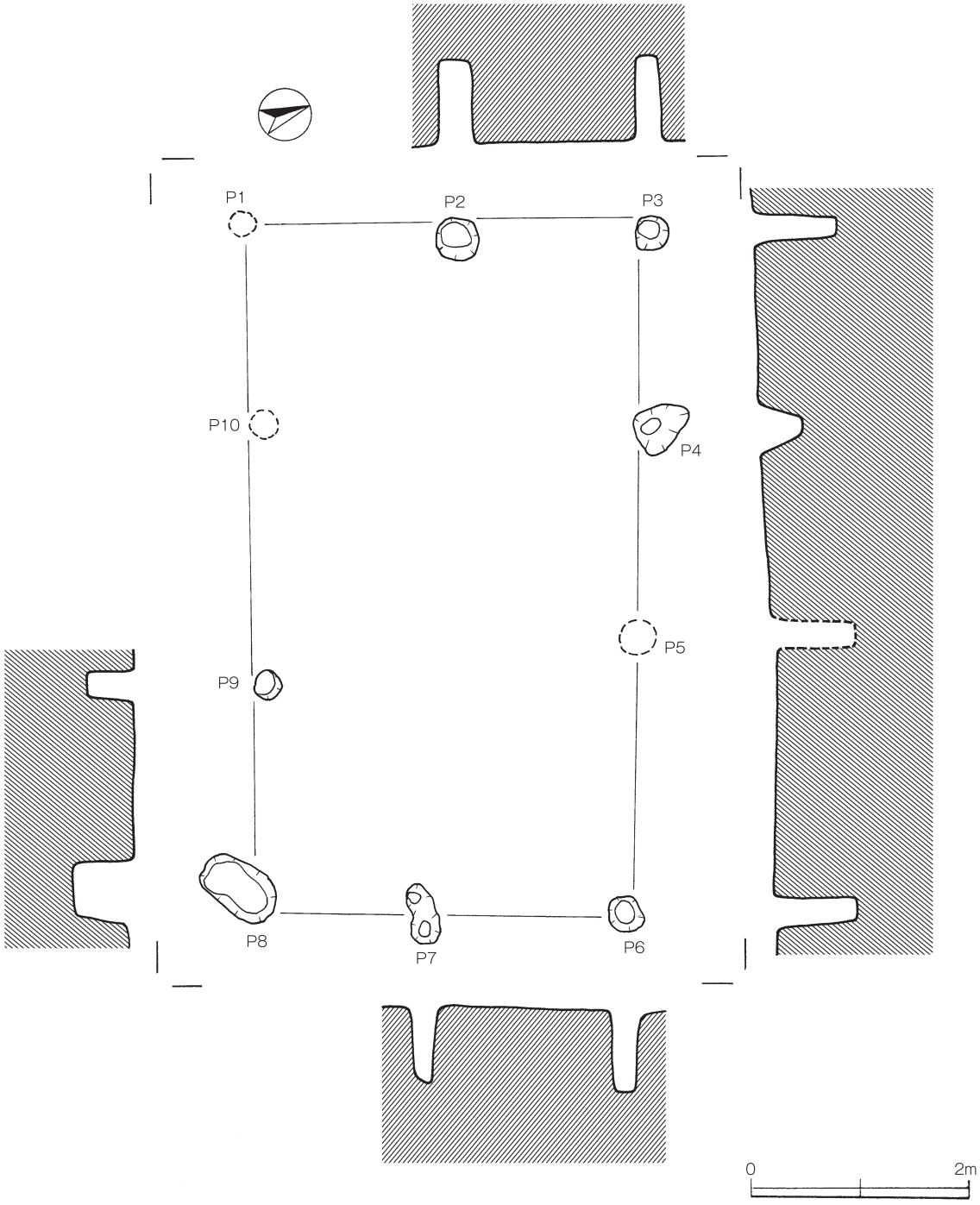
掘立柱建物跡6



掘立柱建物跡7



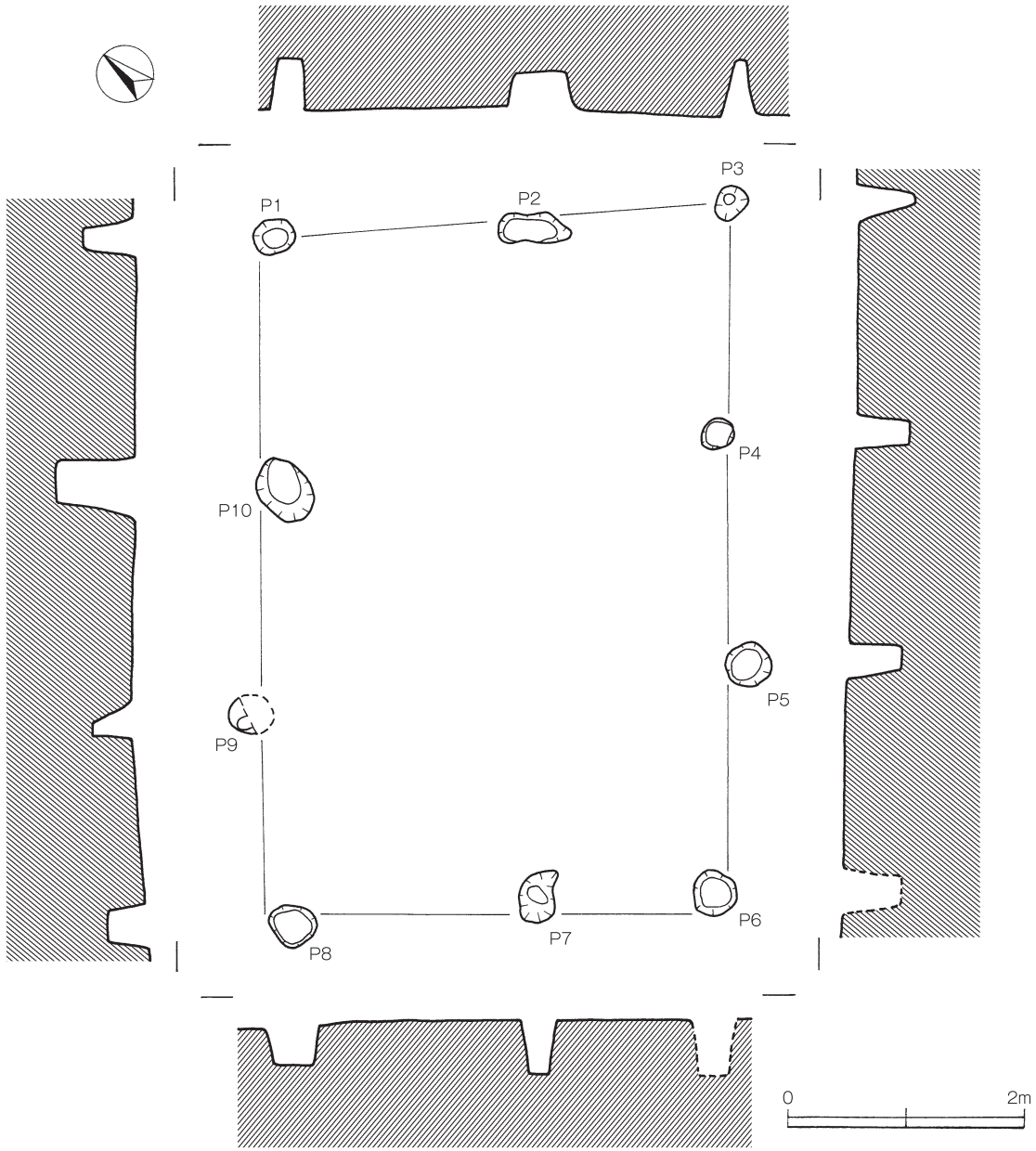
第225図　掘立柱建物跡６・７



第226図　掘立柱建物跡８

第59表　掘立柱建物跡８計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P3 — P4	184	P3—P6	(628)	P1 — P2	(200)	P1—P3	(380)	1			
	P4 — P5	(190)			P2 — P3	180			2	75	42	40
	P5 — P6	(254)			P6 — P7	180	P6—P8	350	3	72	36	34
	P8 — P9	192	P8—P1	(622)	P7 — P8	170			4	39	55	40
東西	P9 — P10	(240)							5			
N70° W	P10 — P1	(190)							6	73	38	30
									7	67	56	20
									8	56	76	42
									9	45	26	26
									10			
	平均	(208)		(625)		(182)		(365)		61	47	33



第227図　掘立柱建物跡９

掘立柱建物跡９（第227図）

Ｂ－３区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は２間×３間の上屋だけで構成されており，10個の柱穴からなる。最大桁行625cm，最大梁間372cm，１間間尺の平均値は桁行方向で199cm，梁間方向で183cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は40cm，検出面からの深さの平均値は45cmである。

第60表　掘立柱建物跡９計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P3 － P4	195	P3－P6	625	P1 － P2	220	P1－P3	372	1	43	35	31
	P4 － P5	180			P2 － P3	152			2	32	58	24
	P5 － P6	250			P6 － P7	150	P6－P8	360	3	50	31	29
	P8 － P9	180	P8－P1	571	P7 － P8	210			4	47	28	25
南北	P9 － P10	178							5	48	38	37
N50° E	P10 － P10	213							6	(46)	40	35
									7	49	44	38
									8	32	40	35
									9	(42)	40	32
									10	70	50	48
	平均	199		598		183		366		(45)	40	33

掘立柱建物跡10（第228図）

Ｄ－16区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行385cm，最大梁間150cm，１間間尺の平均値は桁行方向で189cm，梁間方向で138cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は27cm，検出面からの深さの平均値は63cmである。

第61表　掘立柱建物跡10計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	187	P1－P3	374	P3 － P4	150	1	37	25	22
	P2 － P3	187			P6 － P1	127	2	57	30	26
東西	P4 － P5	195	P4－P6	385			3	67	29	24
N50° E	P5 － P6	190					4	81	21	20
							5	55	35	33
							6	84	25	19
	平均	189		379		138		63	27	24

掘立柱建物跡11（第228図）

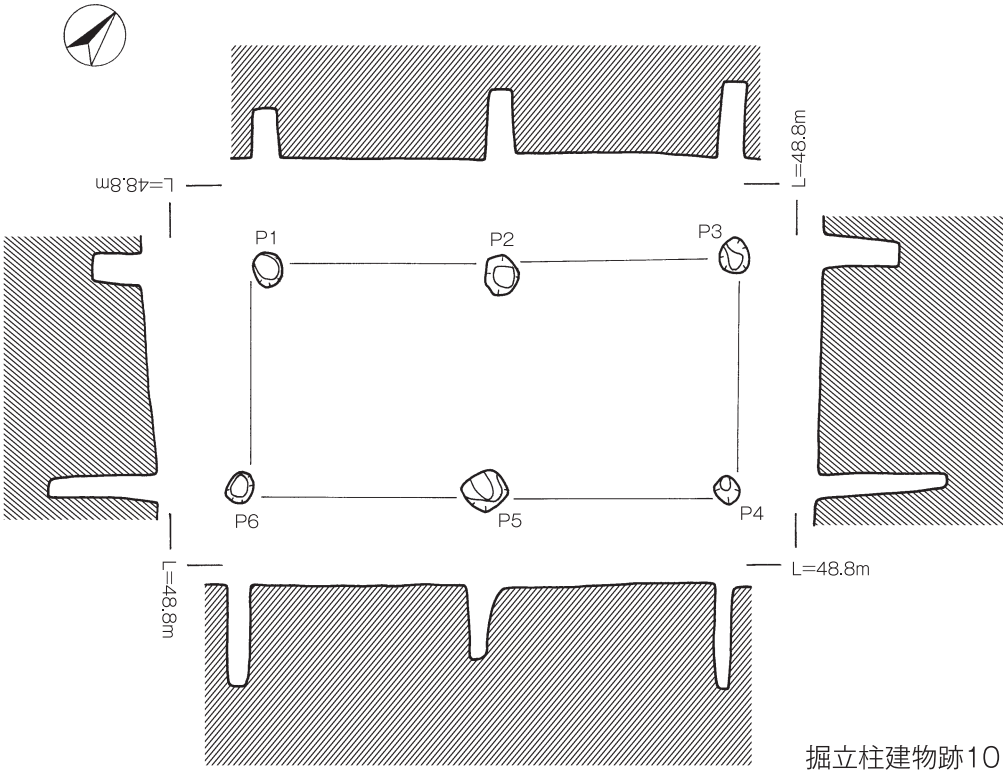
Ｃ－24区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行245cm，最大梁間170cm，１間間尺の平均値は桁行方向で121cm，梁間方向で160cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は31cm，検出面からの深さの平均値は48cmである。柱穴の埋土からの出土遺物はなかった。

第62表　掘立柱建物跡11計測表

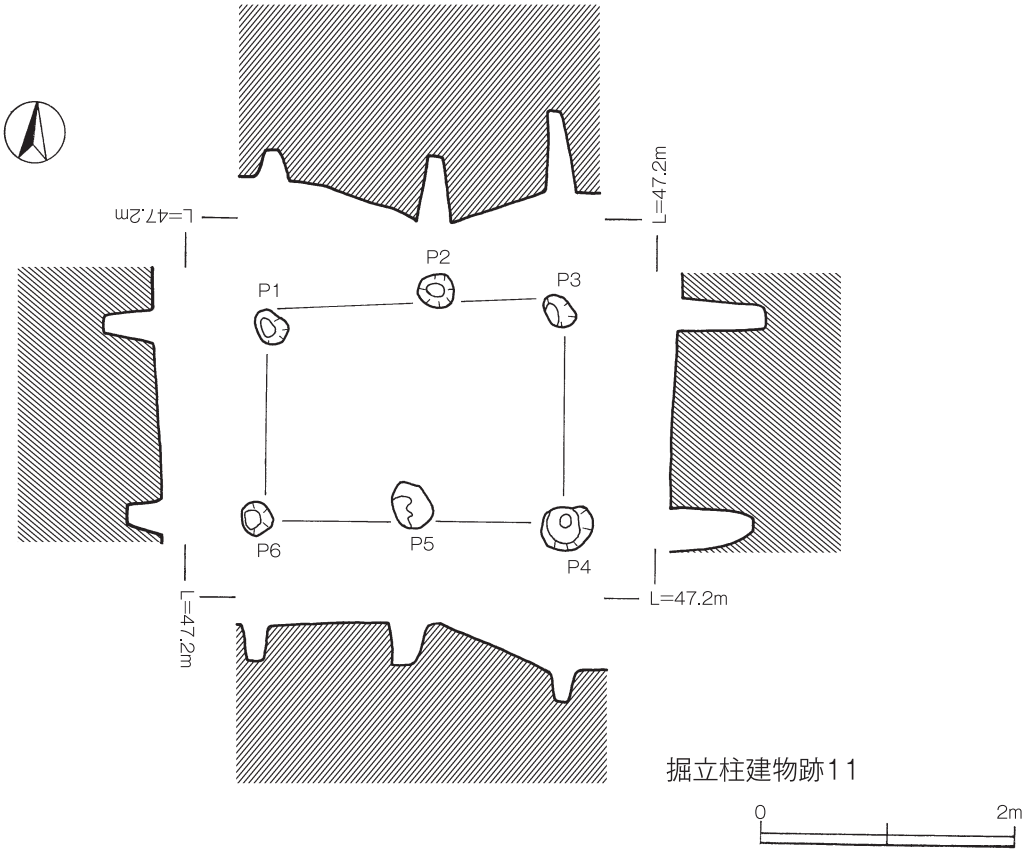
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	140	P1－P3	240	P3 － P4	170	1	31	30	22
	P2 － P3	100			P6 － P1	150	2	52	28	25
東西	P4 － P5	120	P4－P6	245			3	75	25	20
N5° E	P5 － P6	125					4	67	40	36
							5	38	40	30
							6	28	24	24
	平均	121		242		160		48	31	26

掘立柱建物跡12（第229図）

Ｅ-11区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行414cm，最大梁間156cm，１間間尺の平均値は桁行方向で205cm，梁間方向で138cmである。柱穴の平面形は，円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は35cm，検出面からの深さの平均値は27cmである。



掘立柱建物跡10



掘立柱建物跡11

0 2m

第228図　掘立柱建物跡10・11

第63表　掘立柱建物跡12計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	214	P1－P3	414	P3 － P4	156	1	22	44	32
	P2 － P3	200			P6 － P1	120	2	31	32	30
	P4 － P5	214	P4－P6	408			3	41	38	32
東西	P5 － P6	194					4	26	36	32
N70° W							5	16	30	22
							6	30	34	30
	平均	205		411		138		27	35	29

掘立柱建物跡13（第229図）

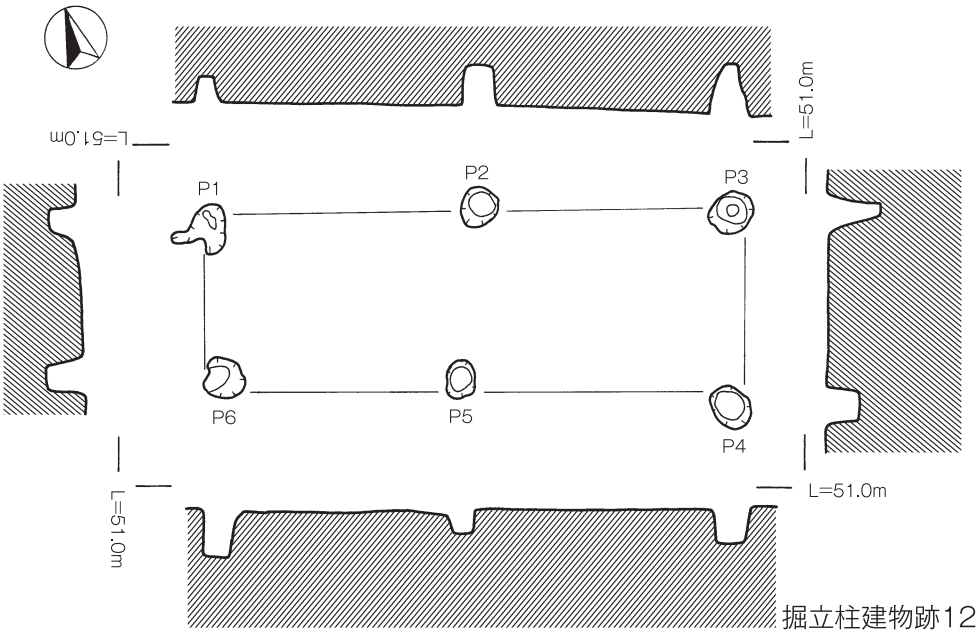
Ａ・Ｂ－２・３区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は２間×２間の上屋だけで構成されており，８個の柱穴からなる。最大桁行378cm，最大梁間384cm，１間間尺の平均値は桁行方向で178cm，梁間方向で177cmである。柱穴の平面形は，ほぼ円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は35cm，検出面からの深さの平均値は49cmである。

第64表　掘立柱建物跡13計測表　　（　）は推定

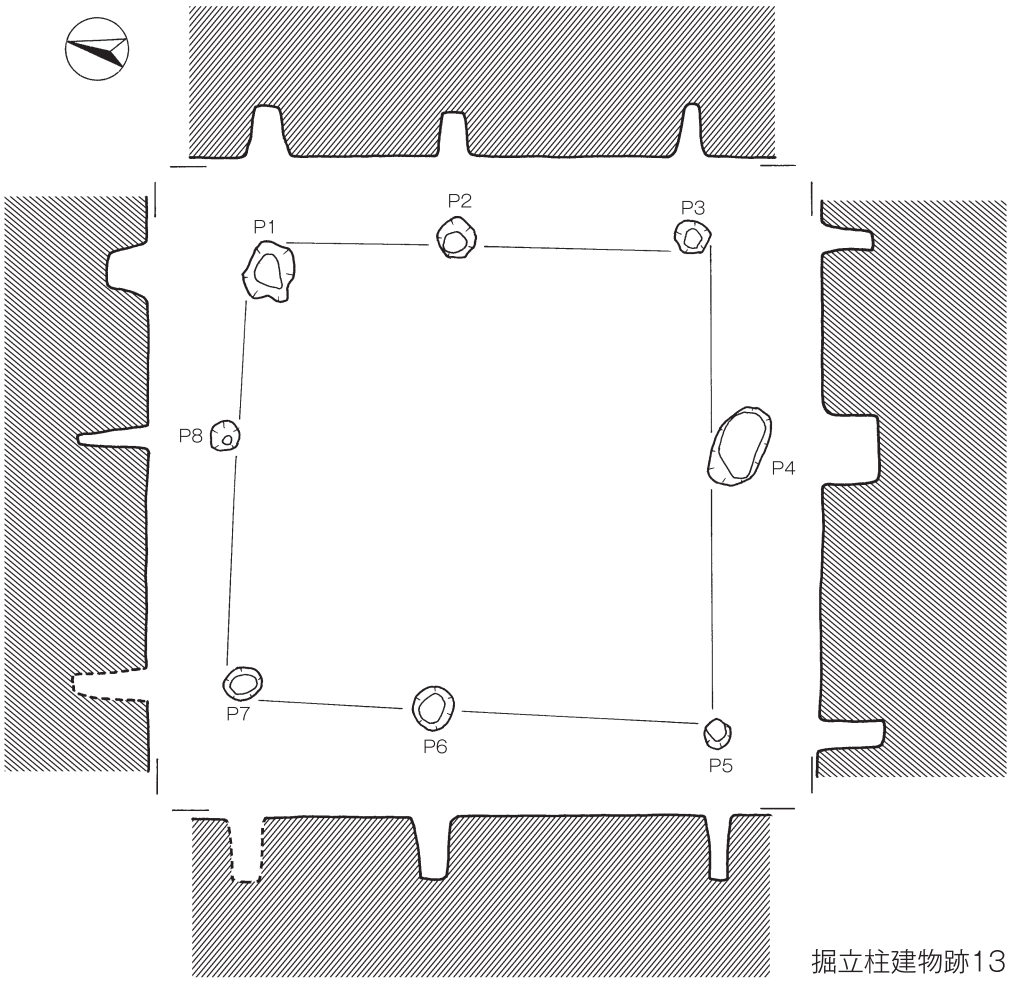
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	150	Ｐ１－Ｐ３	334	P3 － P4	160	Ｐ３－Ｐ５	384	1	32	50	37
	P2 － P3	184			P4 － P5	224			2	34	30	30
	P5 － P6	226	Ｐ５－Ｐ７	378	P7 － P8	190	Ｐ７－Ｐ１	324	3	48	27	26
南北	P6 － P7	152			P8 － P1	134			4	78	64	40
N10° E									5	51	24	22
									6	40	32	31
									7	(58)	30	24
									8	56	23	22
	平均	178		356		177		354		(49)	35	29

掘立柱建物跡14（第230図）

Ｃ・Ｄ-17区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は２間×２間の上屋だけの構成と考えられる。検出された柱穴は７個である。最大桁行424cm，最大梁間360cm，１間間尺の平均値は桁行方向で210cm，梁間方向で175cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は44cm，検出面からの深さの平均値は59cmである。

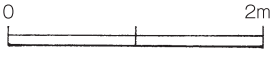


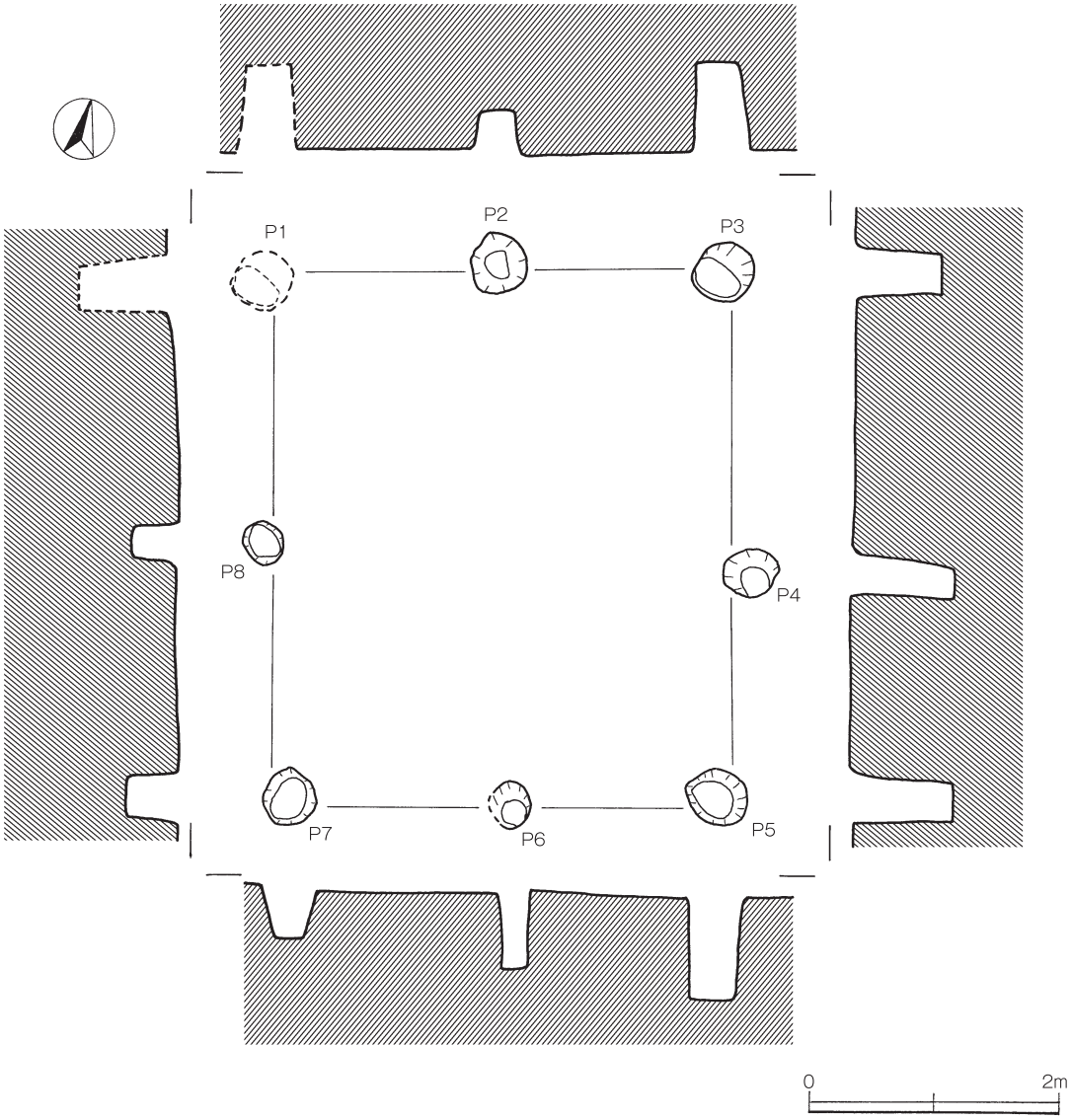
掘立柱建物跡12



掘立柱建物跡13

第229図　掘立柱建物跡12・13

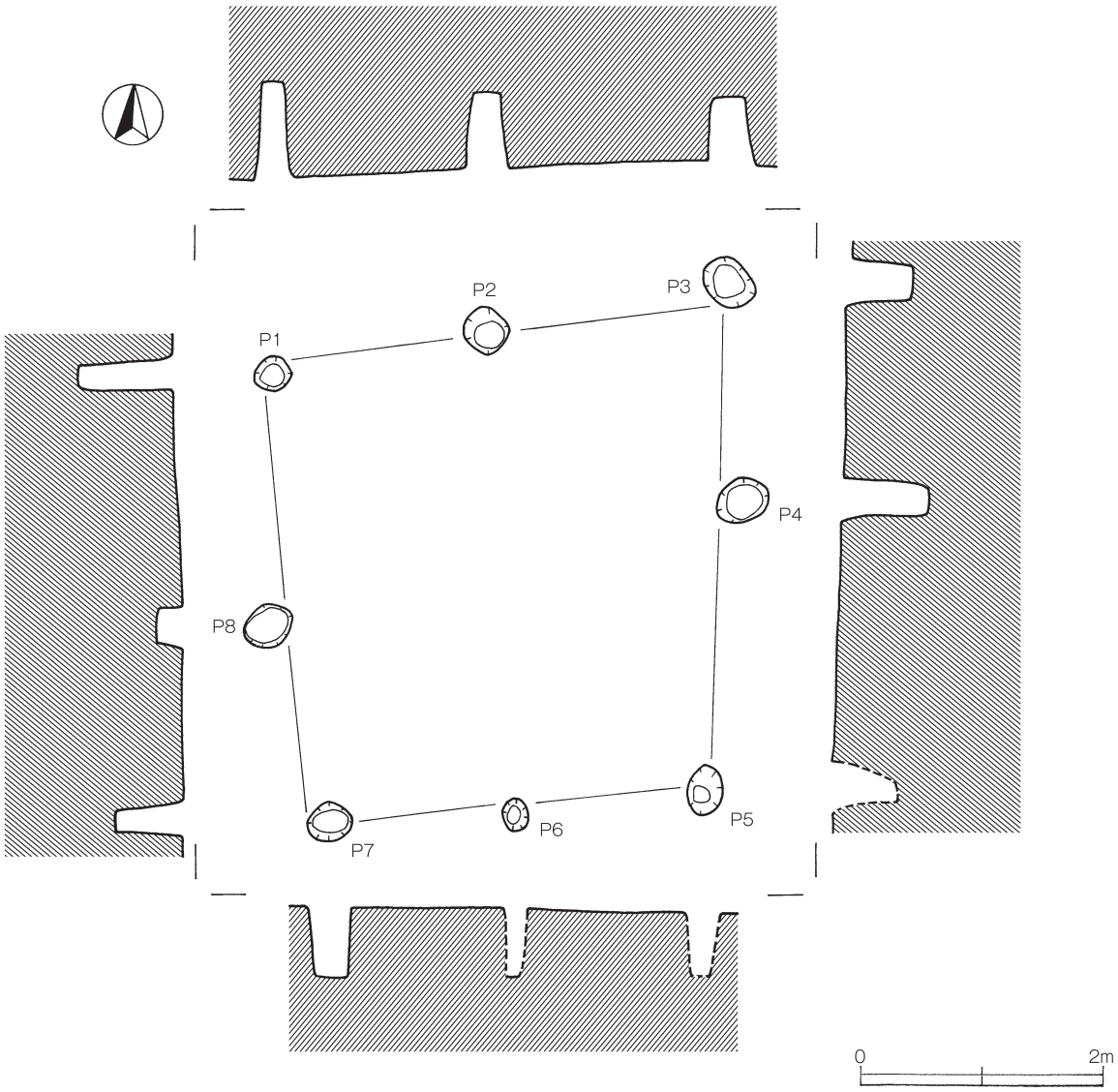




第230図　掘立柱建物跡14

第65表　掘立柱建物跡14計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
南北 N10° E	P3 － P4	244	P3－P5	424	P1 － P2	(180)	P1－P3	(360)	1	(70)		
	P4 － P5	180			P2 － P3	180			2	35	50	48
	P7 － P8	200	P7－P1	(418)	P5 － P6	160	P5－P7	340	3	70	52	48
	P8 － P1	(218)			P6 － P7	180			4	82	46	40
									5	81	52	48
									6	61	34	30
									7	42	46	44
									8	34	34	32
	平均	(210)		(421)		(175)		(350)		(59)	44	41



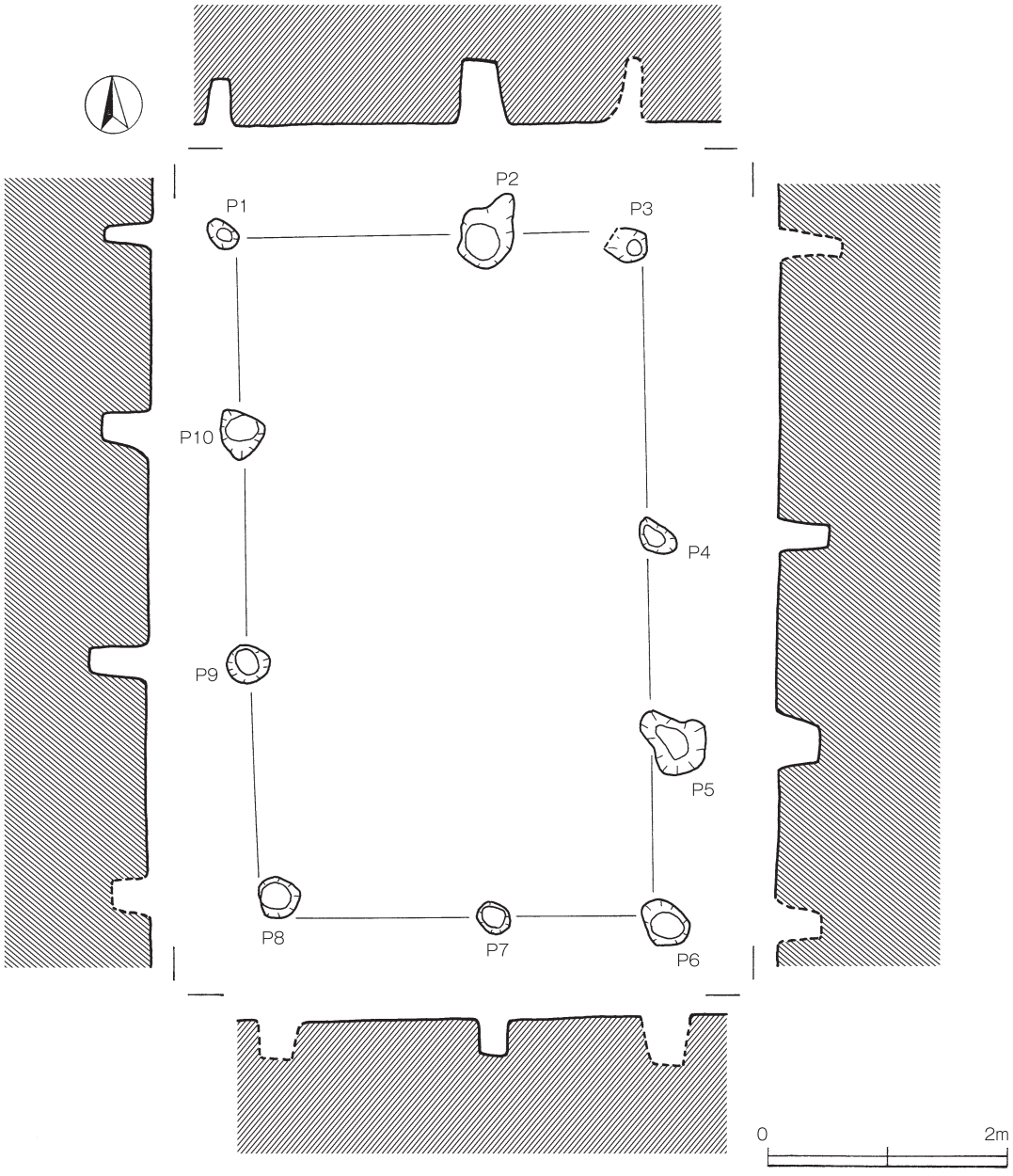
第231図　掘立柱建物跡15

掘立柱建物跡15（第231図）

Ｃ－８区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は２間×３間の上屋だけで構成されており，８個の柱穴からなる。最大桁行430cm，最大梁間386cm，１間間尺の平均値は桁行方向で201cm，梁間方向で174cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は38cm，検出面からの深さの平均値は55cmである。

第66表　掘立柱建物跡15計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P3 － P4	186	P3－P5	430	P1 － P2	184	P1 － P3	386	1	77	29	25
	P4 － P5	244			P2 － P3	202	P5 － P7	310	2	61	38	33
	P7 － P8	172	P7－P1	377	P5 － P6	158			3	55	46	35
南北	P8 － P1	205			P6 － P7	152			4	67	44	34
N10° E									5	(52)	42	30
									6	(55)	26	22
									7	57	37	31
									8	22	43	33
	平均	201		403		174		348		(55)	38	30



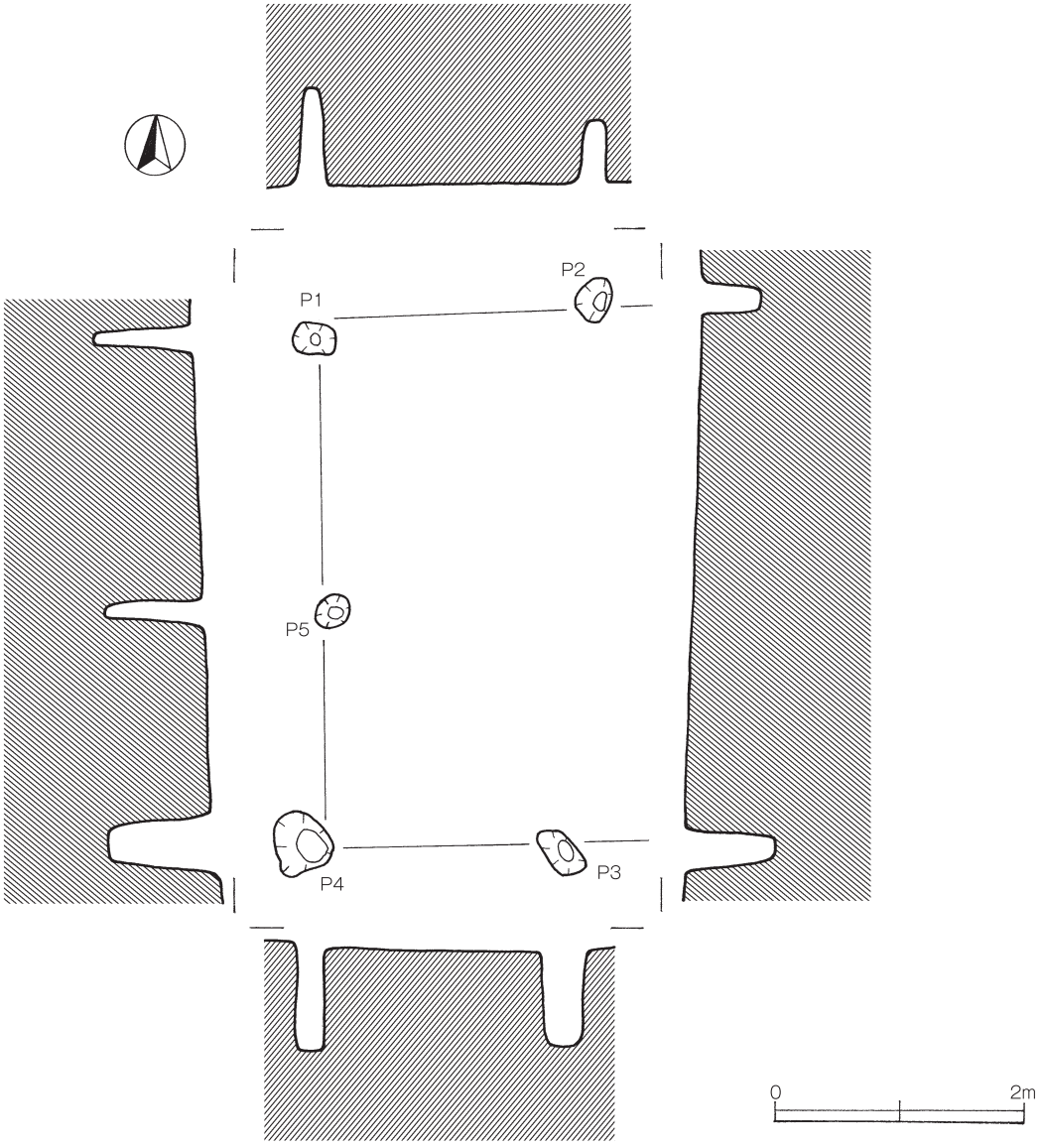
第232図　掘立柱建物跡16

掘立柱建物跡16（第232図）

B－3・4区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は2間×2間の上屋だけで構成されており，10個の柱穴からなる。最大桁行565cm，最大梁間350cm，1間間尺の平均値は桁行方向で188cm，梁間方向で170cmである。柱穴の平面形は，ほぼ楕円形であるが中には不定形を呈するものもある。柱穴の上面長径の平均値は39cm，検出面からの深さの平均値は39cmである。

第67表　掘立柱建物跡16計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P3 － P4	240			P1 － P2	223			1	41	28	23
	P4 － P5	175	P3－P6	565	P2 － P3	127	P1－P3	350	2	57	50	48
	P5 － P6	150			P6 － P7	148			3	(43)	34	26
	P8 － P9	200			P7 － P8	184	P6－P8	332	4	43	35	24
南北	P9 － P10	200	P8－P1	564					5	17	62	31
N5° E	P10 － P10	164							6	(37)	40	36
									7	36	28	26
									8	(30)	36	35
									9	50	36	34
									10	41	45	38
	平均	188		564		170		341		(39)	39	32



第233図　掘立柱建物跡17

掘立柱建物跡17（第233図）

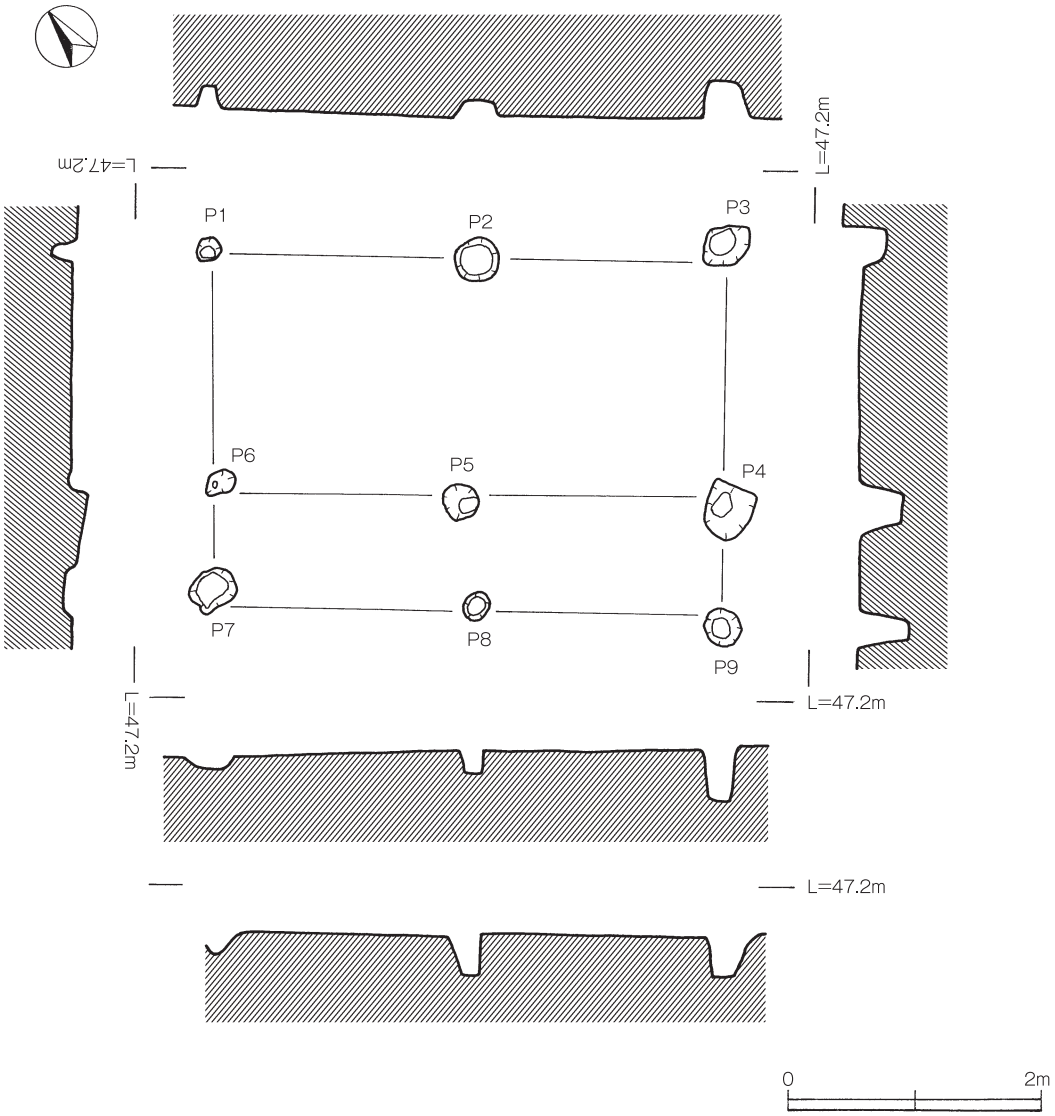
Ｂ－９・10区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，検出された部分の建物規模は１間×２間である。５個の柱穴からなる。最大桁行410cm，最大梁間232cm，１間間尺の平均値は桁行方向で205cm，梁間方向で218cmである。柱穴の平面形は，ほぼ楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は41cm，検出面からの深さの平均値は，73cmである。

第68表　掘立柱建物跡17計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
南北 N5°E	P4 － P5	190	P4－P1	410	P1 － P2	232	1	76	37	22
	P5 － P1	220			P3 － P4	204	2	49	38	25
							3	76	46	24
							4	86	54	40
							5	80	32	27
	平均	205		410		218		73	41	27

掘立柱建物跡18（第234図）

Ｅ・Ｆ-28区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間で南側に庇が付く。９個の柱穴からなる。最大桁行416cm，最大梁間310cm，１間間尺の平均値は桁行方向で205cm，梁間方向で149cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は33cm，検出面からの深さの平均値は23cmである。



第234図　掘立柱建物跡18

第69表　掘立柱建物跡18計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
東西 N60° W	P1 － P2	218	P1－P3	416	P3 － P4	210	P3－P9	310	1	21	22	20
	P2 － P3	198			P4 － P9	100			2	12	36	34
	P4 － P5	204	P4－P6	406	P1 － P6	186	P1－P7	286	3	31	42	34
	P5 － P6	202			P6 － P7	100			4	36	48	40
	P7 － P8	196	P7－P9	410					5	33	30	28
	P8 － P9	214							6	7	26	22
									7	42	34	32
									8	19	22	20
									9	11	42	30
	平均	205		410		149		298	平均	23	33	28

掘立柱建物跡19（第235図）

Ｂ－４区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×２間の上屋だけで構成されており，６個の柱穴からなる。最大桁行354cm，最大梁間213cm，１間間尺の平均値は桁行方向で173cm，梁間方向で201cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は35cm，検出面からの深さの平均値は52cmである。

第70表　掘立柱建物跡19計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	210	P1－P3	340	P3 － P4	213	1	45	38	38
	P2 － P3	130			P6 － P1	190	2	60	33	30
東西	P4 － P5	160	P4－P6	354			3	54	31	31
N60° E	P5 － P6	194					4	44	28	26
							5	63	30	28
							6	48	50	33
	平均	173		347		201		52	35	31

掘立柱建物跡20（第235図）

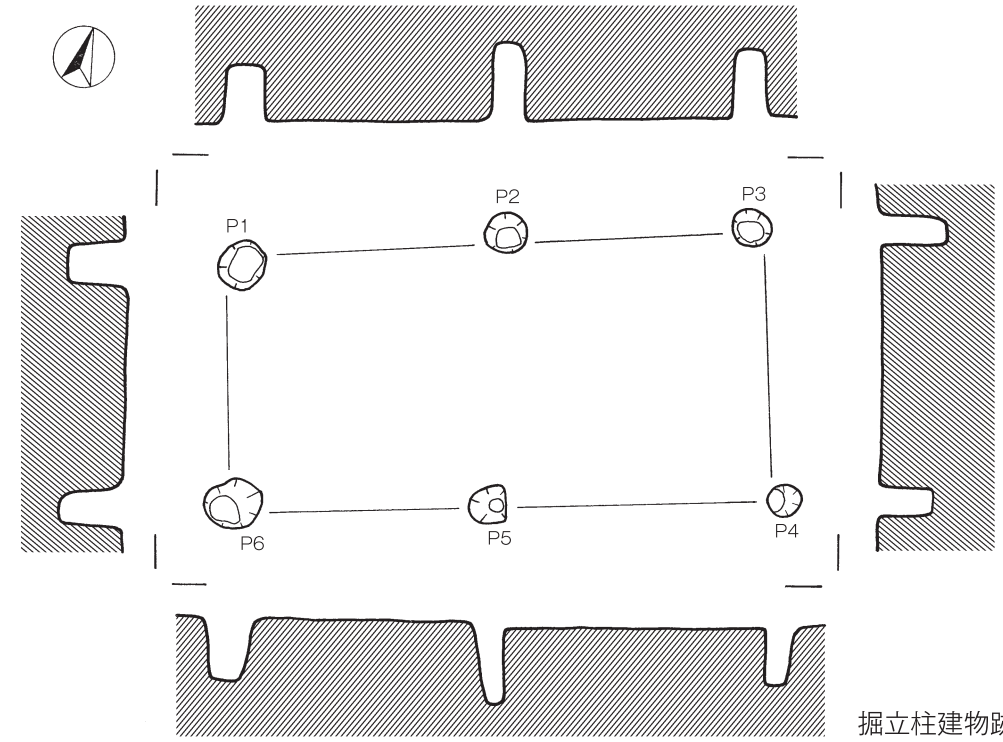
Ｄ-21区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は１間×４間の上屋だけで構成されており，10個の柱穴からなる。最大桁行452cm，最大梁間172cm，１間間尺の平均値は桁行方向で110cm，梁間方向で153cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は40cm，検出面からの深さの平均値は39cmである。

第71表　掘立柱建物跡20計測表

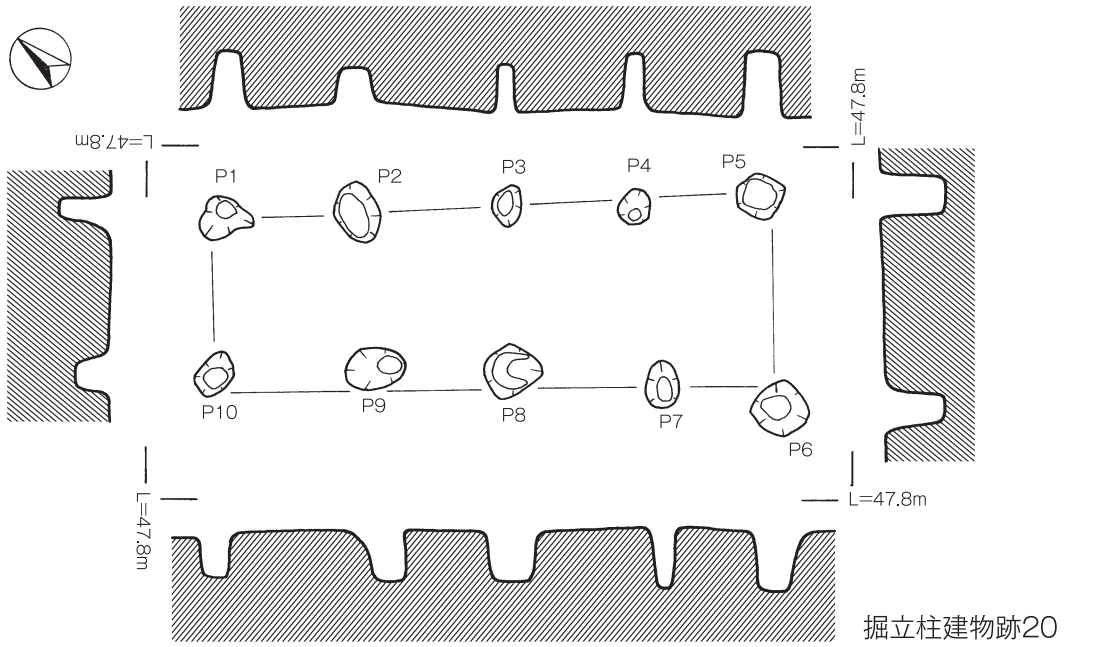
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	100	P1－P5	428	P5 － P6	172	1	44	40	36
	P2 － P3	122			P10 － P1	134	2	27	47	33
	P3 － P4	104					3	38	32	24
	P4 － P5	102					4	44	28	22
東西	P6 － P7	92	P6－P10	452			5	50	37	34
N42° W	P7 － P8	124					6	46	47	41
	P8 － P9	96					7	45	37	27
	P9 － P10	140					8	38	48	38
							9	40	50	20
							10	26	38	26
	平均	110		440		153		39	40	30

掘立柱建物跡21（第236図）

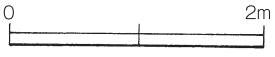
Ｃ－５区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は２間×２間の上屋だけで構成されており，９個の柱穴からなる。最大桁行492cm，最大梁間354cm，１間間尺の平均値は桁行方向で243cm，梁間方向で171cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は41cm，検出面からの深さの平均値は53cmである。中央部に束柱が１本入る。



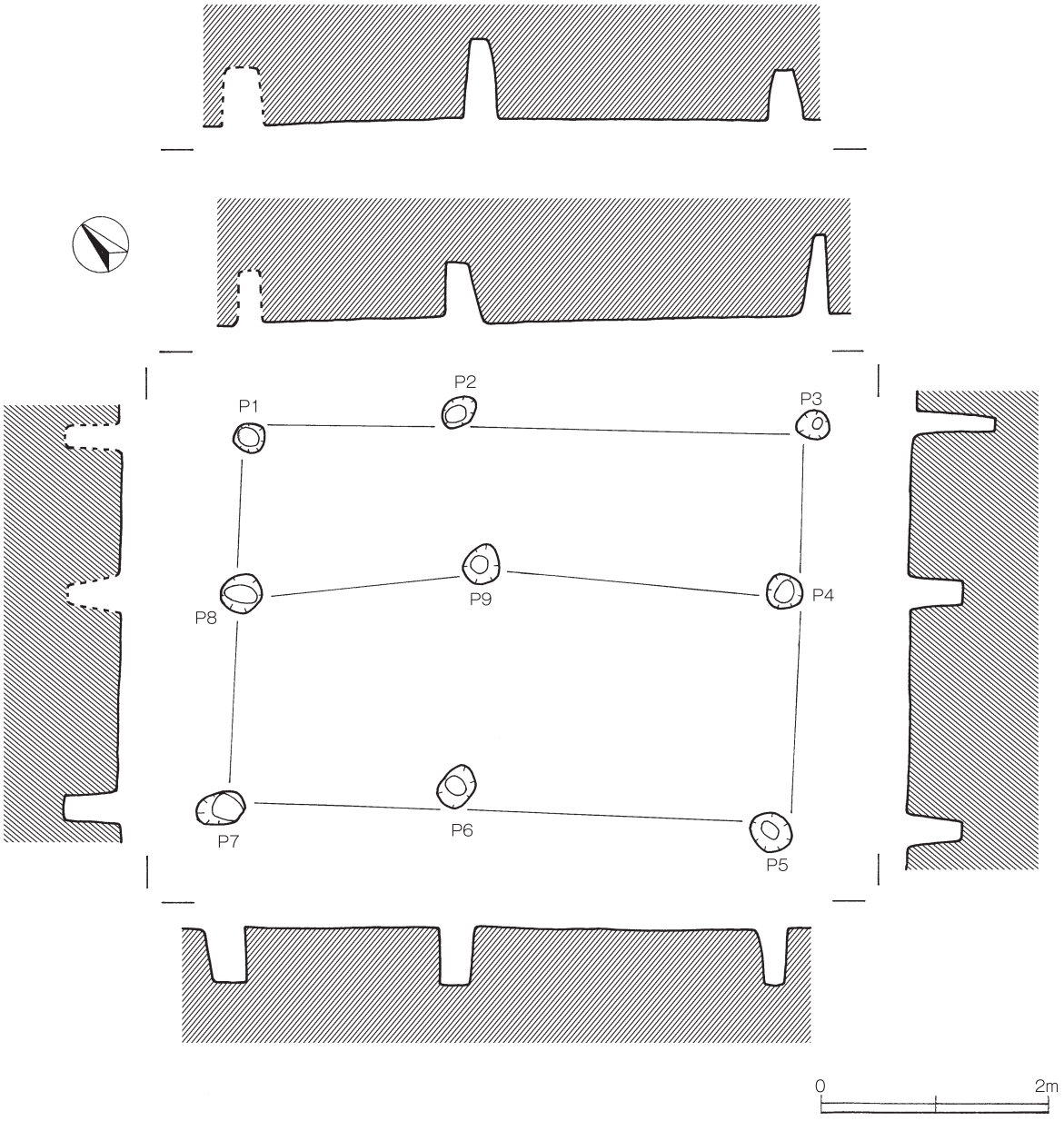
掘立柱建物跡19



掘立柱建物跡20



第235図　掘立柱建物跡19・20



第236図　掘立柱建物跡21

第72表　掘立柱建物跡21計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
東西 N42° E	P1 － P2	180	P1－P3	492	P3 － P4	150	P3－P5	354	1	(48)	27	26
	P2 － P3	312			P4 － P5	204			2	55	34	26
	P5 － P6	280	P5－P7	480	P1 － P8	150	P1－P7	340	3	72	28	28
	P6 － P7	200			P8 － P7	190			4	47	32	32
	P4 － P9	270	P4－P8	486					5	51	38	32
	P9 － P8	216							6	50	40	28
									7	48	44	30
									8	(48)	66	60
									9	62	62	60
	平均	243		486		171		342		(53)	41	35

掘立柱建物跡22（第237図）

B－5・6区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模は1間×3間の上屋だけで構成されており，8個の柱穴からなる。最大桁行585cm，最大梁間400cm，1間間尺の平均値は桁行方向で189cm，梁間方向で382cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は57cm，検出面からの深さの平均値は53cmである。

第73表　掘立柱建物跡22計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	150			P4 － P5	365	1	67	56	49
	P2 － P3	206	P1－P4	554	P8 － P1	400	2	68	46	33
	P3 － P4	198					3	55	51	45
東西	P5 － P6	225					4	41	40	30
N45° W	P6 － P7	180	P5－P8	585			5	64	60	31
	P7 － P8	180					6	41	35	28
							7	50	114	43
							8	44	54	53
	平均	189		569		382		53	57	39

掘立柱建物跡23（第237図）

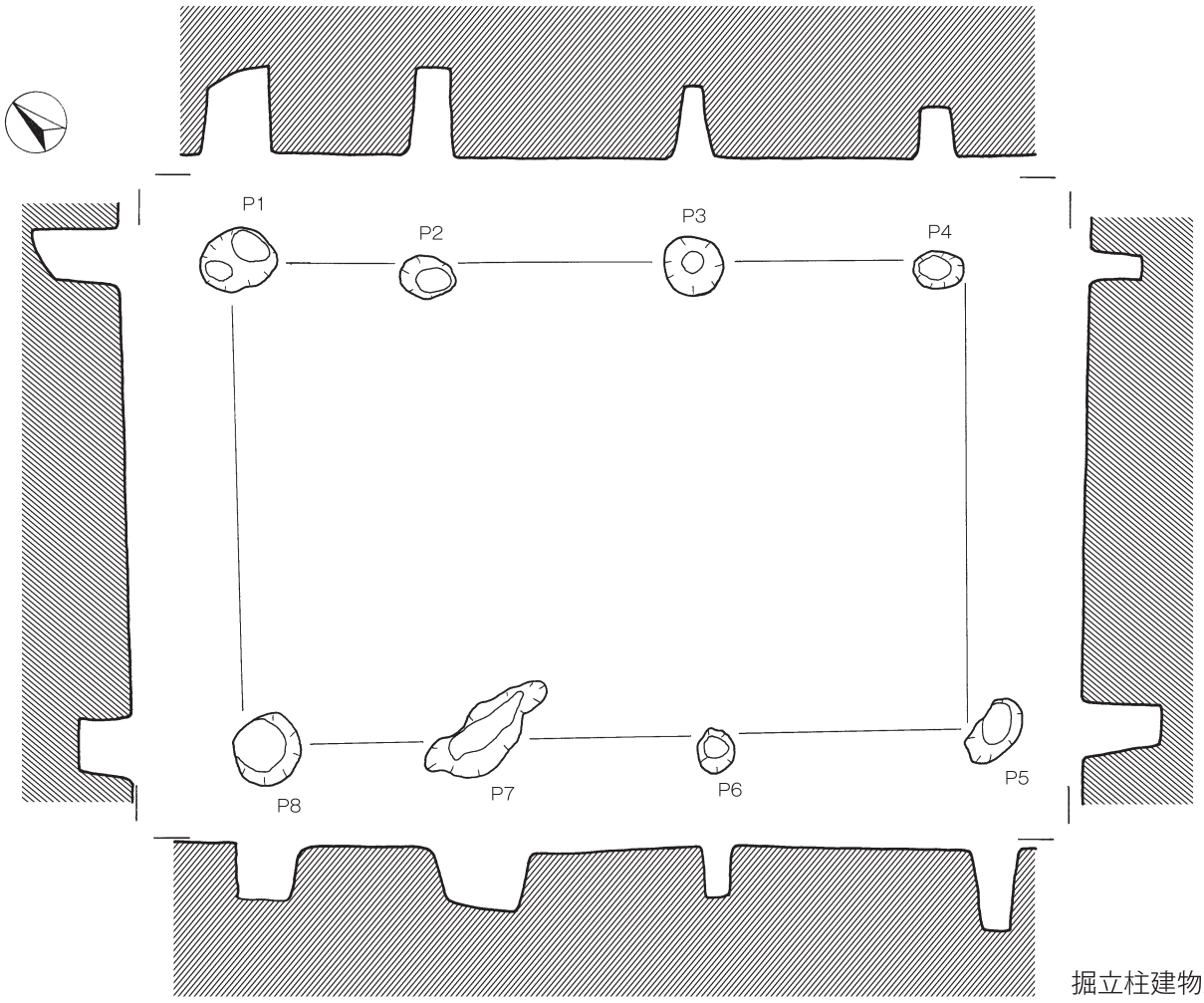
B－5区のⅡ層で検出された。主軸方向は東西方向で，建物規模ははっきりしないが，検出された部分は2間×2間で構成されている。6個の柱穴からなる。最大桁行394cm，最大梁間272cm，1間間尺の平均値は桁行方向で197cm，梁間方向で130cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は46cm，検出面からの深さの平均値は53cmである。

第74表　掘立柱建物跡23計測表　　（　）は推定

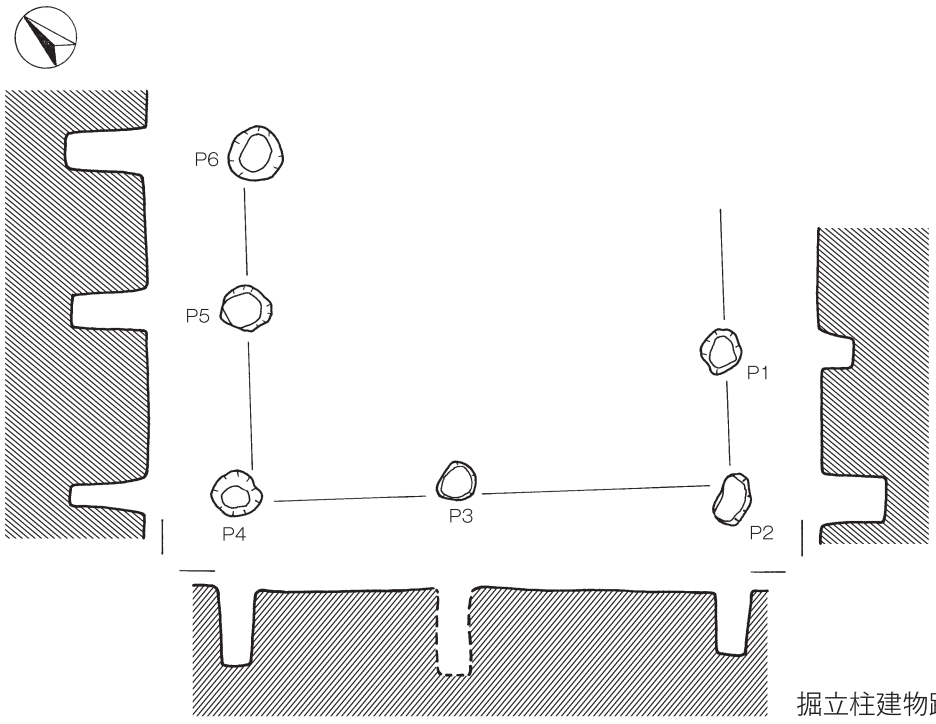
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P2 － P3	220	P2－P4	394	P1 － P2	118	P1 － P2	118	1	24	38	32
	P3 － P4	174			P4 － P5	150	P4－P6	272	2	51	44	24
東西					P5 － P6	122			3	(64)	54	46
N50° E									4	61	54	34
									5	61	42	35
									6	62	45	43
	平均	197		394		130		195		(53)	46	35

掘立柱建物跡24（第238図）

D－23・24区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は2間×3間の上屋だけの構成と考えられる。検出された柱穴は9個である。最大桁行730cm，最大梁間432cm，1間間尺の平均値は桁行方向で236cm，梁間方向で216cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は36cm，検出面からの深さの平均値は43cmである。

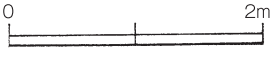


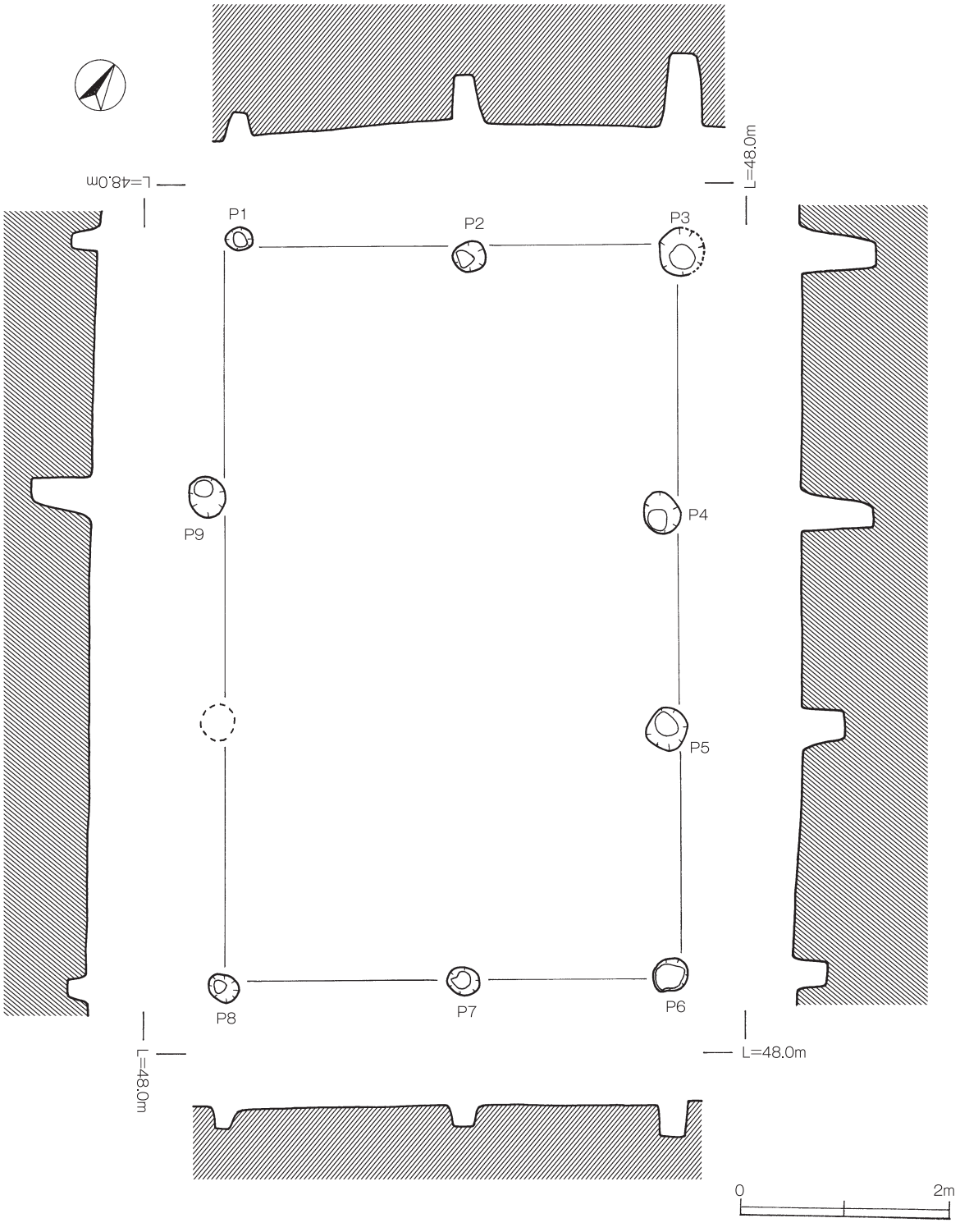
掘立柱建物跡22



掘立柱建物跡23

第237図　掘立柱建物跡22・23





第238図　掘立柱建物跡24

第75表　掘立柱建物跡24計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P3 － P4	252	P3－P6	688	P1 － P2	222	P1－P3	432	1	26	26	24
	P4 － P5	204			P2 － P3	210			2	48	32	32
	P5 － P6	232			P6 － P7	202	P6－P8	432	3	71	(48)	(42)
	P8 － P9	478	P8－P1	730	P7 － P8	230			4	58	42	36
南北	P9 － P1	252							5	40	42	36
N58° E									6	34	33	32
									7	38	31	28
									8	21	32	22
									9	57	40	36
	平均	(236)		709		216		432		43	36	32

掘立柱建物跡25（第239図）

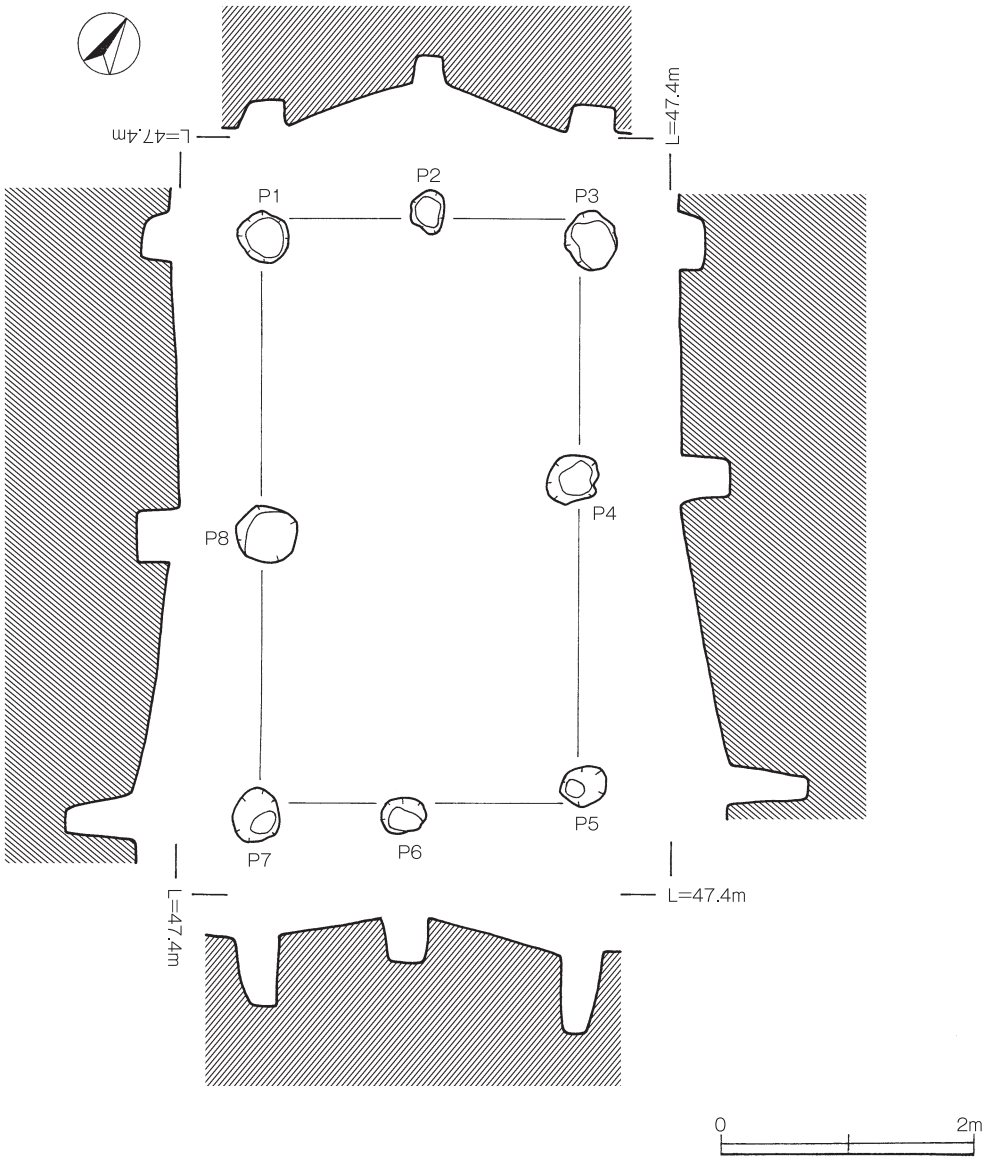
C-25・26区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は２間×２間の上屋だけで構成されており，８個の柱穴からなる。最大桁行466cm，最大梁間256cm，１間間尺の平均値は桁行方向で227cm，梁間方向で127cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は43cm，検出面からの深さの平均値は35cmである。

第76表　掘立柱建物跡25計測表

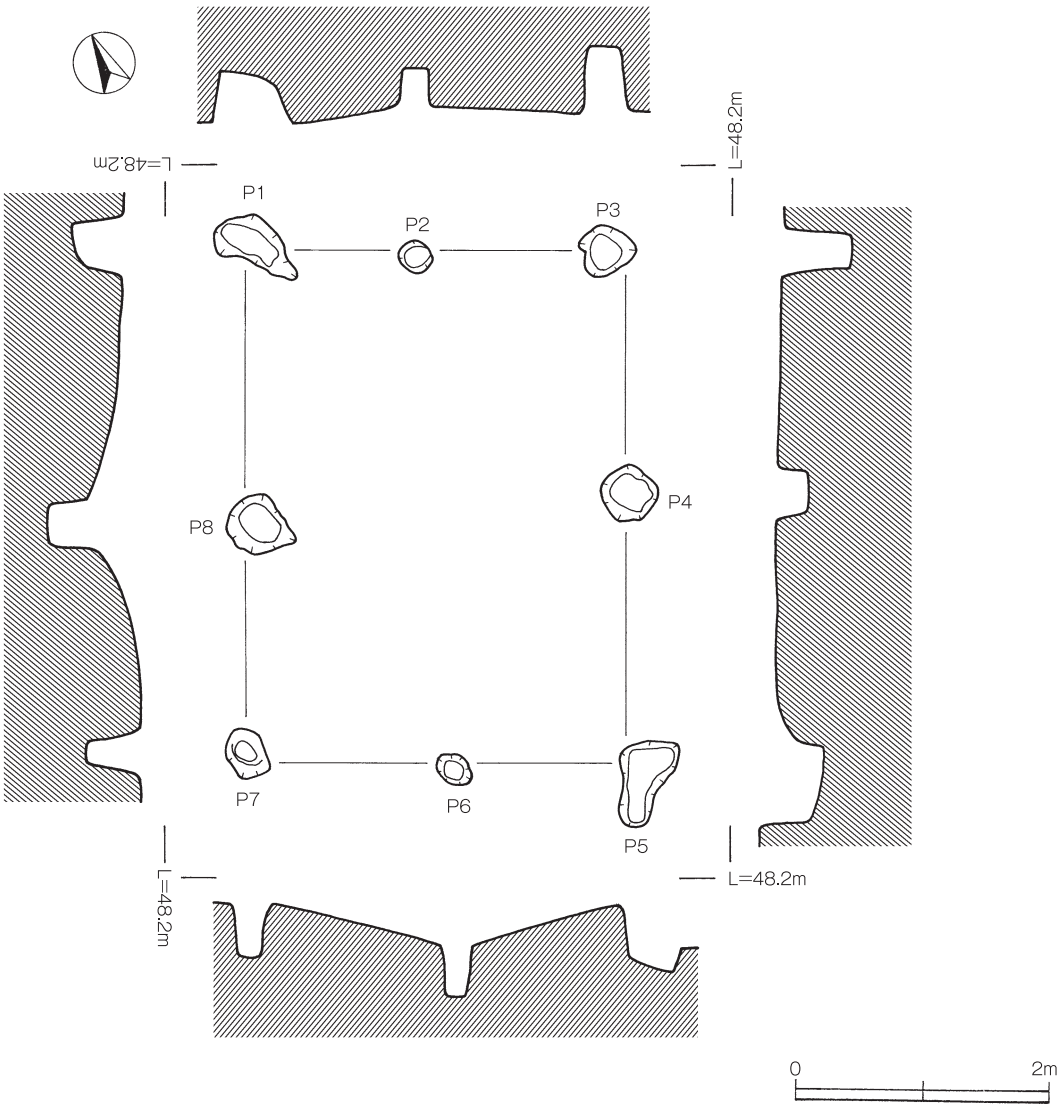
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P3 － P4	192	P3－P5	442	P1 － P2	130	P1－P3	254	1	23	44	42
	P4 － P5	250			P2 － P3	124			2	21	34	24
	P7 － P8	232	P7－P1	466	P5 － P6	142	P5－P7	256	3	18	48	42
南北	P8 － P1	234			P6 － P7	114			4	37	44	42
N65° E									5	64	38	34
									6	32	48	36
									7	54	44	38
									8	34	50	40
	平均	227		454		127		255		35	43	37

掘立柱建物跡26（第240図）

C・D-19区のⅡ層で検出された。主軸方向は南北方向で，建物規模は２間×２間の上屋だけで構成されており，８個の柱穴からなる。最大桁行414cm，最大梁間328cm，１間間尺の平均値は桁行方向で206cm，梁間方向で155cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は50cm，検出面からの深さの平均値は40cmである。



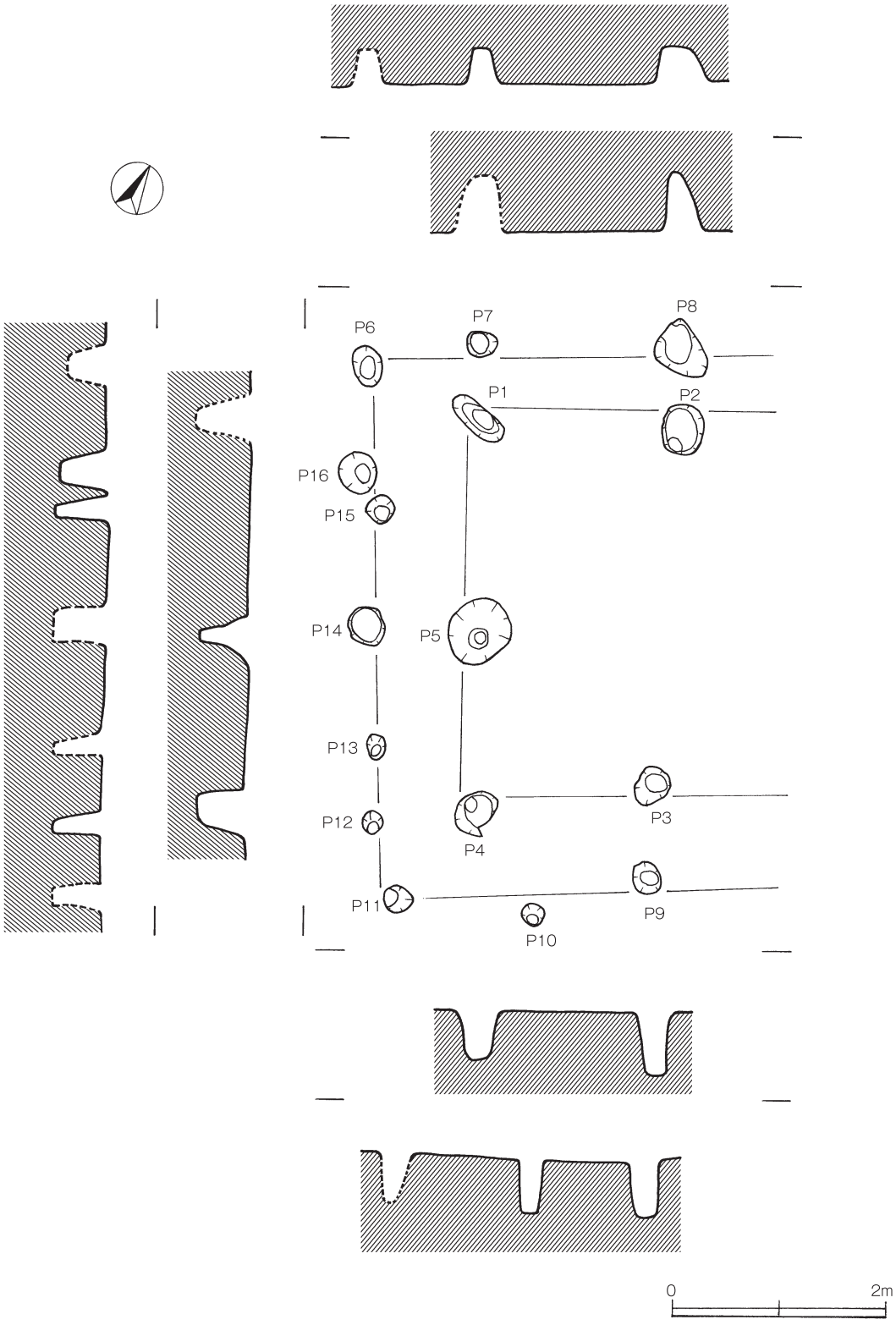
第239図　掘立柱建物跡25



第240図　掘立柱建物跡26

第77表　掘立柱建物跡26計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
南北	P3 － P4	194	P3－P5	414	P1 － P2	140	P1－P3	294	1	42	74	30
	P4 － P5	220			P2 － P3	154			2	29	27	24
	P7 － P8	185	P7－P1	410	P5 － P6	160	P5－P7	328	3	52	45	37
	P8 － P1	225			P6 － P7	168			4	24	47	40
N70° W									5	51	75	24
									6	40	30	24
									7	44	47	30
									8	38	56	42
	平均	206		412		155		311		40	50	31



第241図　掘立柱建物跡27

掘立柱建物跡27（第241図）

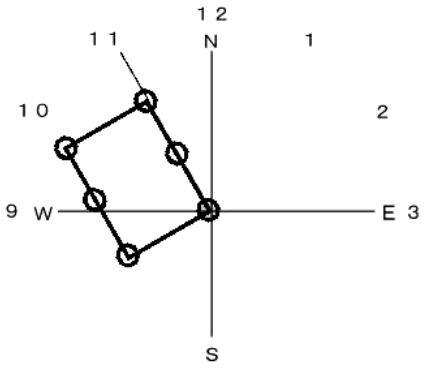
Ｂ－４区のⅡ層で検出された。東側が調査区外のため全体的な建物規模は不明である。主軸方向は東西方向と考えられ，検出された上屋は２間×１間以上である。16個の柱穴からなる。上屋の周囲には半間ほどの距離を置き，小型の柱穴が見られ廂と考えられる。小型の柱穴は，北・西・南の３方向にあることから，四面廂建物の可能性がある。１間間尺の平均値は桁行方向で（190）cm，梁間方向で（160）cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は37cm，検出面からの深さの平均値は45cmである。

第78表　掘立柱建物跡27計測表

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	192	P1－P2	192	P4 － P5	160	P4－P1	362	1	53	56	24
	P3 － P4	170	P3－P4	170	P5 － P1	202			2	54	47	40
	P6 － P7	102	P6－P8	282	P11 － P12	80	P11－P6	506	3	58	38	31
	P7 － P8	180			P12 － P13	72			4	46	45	31
	P9 － P10	100	P9－P11	220	P13 － P14	114			5	46	64	62
	P10 － P11	120			P14 － P15	110			6	34	38	28
					P15 － P16	30			7	33	30	22
東西					P16 － P6	100			8	30	56	38
N60° E									9	52	32	26
									10	51	22	22
									11	(44)	28	26
									12	44	22	20
									13	(44)	22	16
									14	(50)	36	34
									15	(50)	28	24
									16	(42)	38	36
	平均	(144)		(216)		108		434		(45)	37	30

分類方法

市ノ原遺跡第１地点で検出した古代の官舎的建物跡を参考にして，北向きの建物を基準にし，分類をおこなった。建物の長軸に当たる柱間が，その角に当たる最南端の柱穴を基準として何度傾いているかを時計表示によって示し，12時に近いものから順に掲載した。

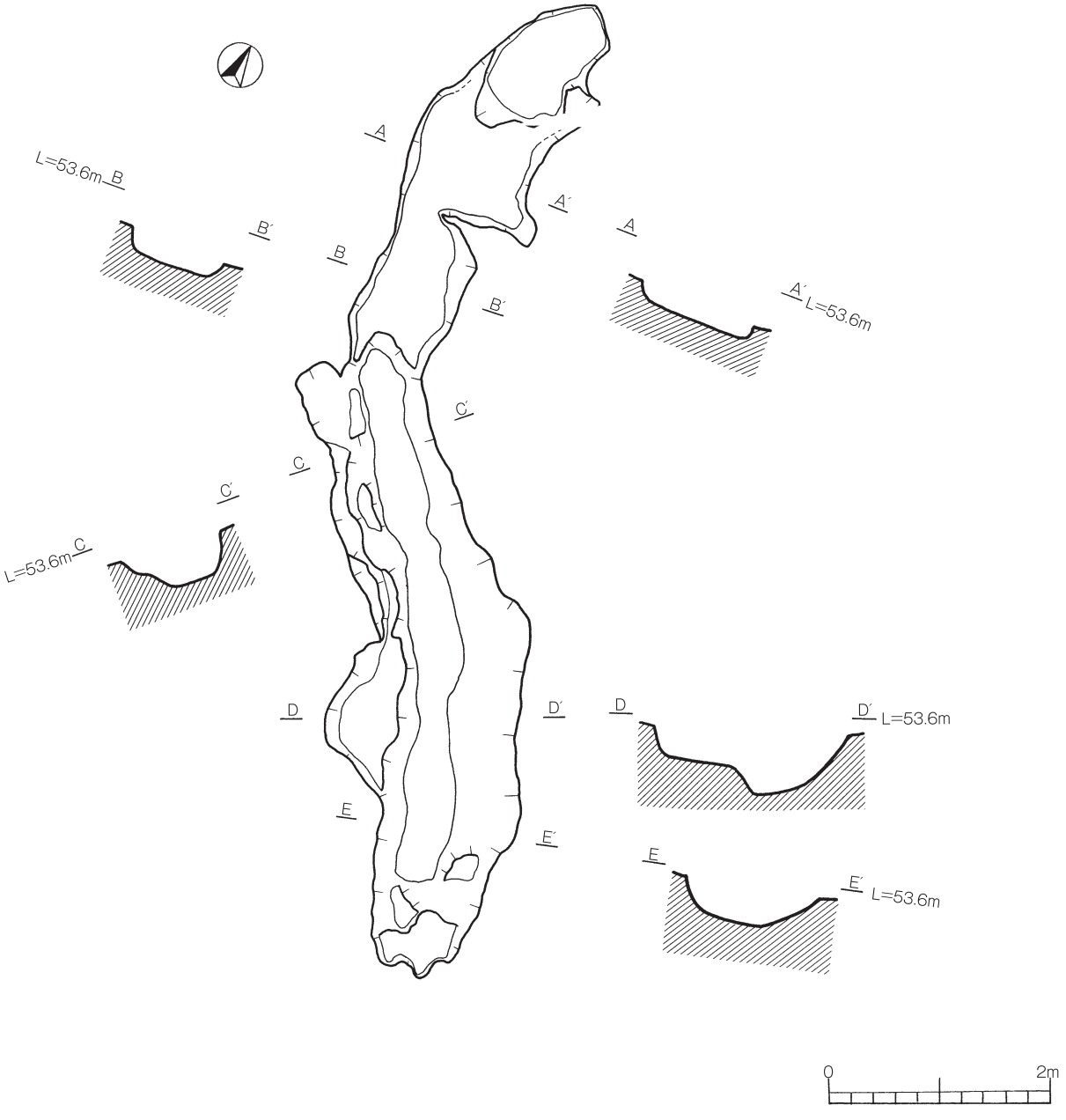


⑷　溝状遺構（第242～244図）

５条検出された。いずれの遺構も，埋土中からの出土遺物はなかった。層位や埋土状況から古代～中世の時期と判断した。

溝状遺構１（第242図）

D－２・３区のⅡ層で検出された。検出された部分は，長さ約９m，幅１～1.7mで，南北方向にややくの字に曲がりながら延びている。検出面からの深さは，20～50cmである。底面の，北側部分は平坦であるが，南側はやや丸みを帯び，段を持ち立ち上がる箇所がある。底面には，硬化面が確認されなかった。



第242図　溝状遺構１

溝状遺構２（第243図）

Ｃ・Ｄ−９区のⅡ層で検出された。検出された部分は，長さ約15m，幅約１～２ｍで南北方向へゆるやかに曲がりながら延びている。検出面からの深さは，５～10㎝で浅い。底面は，平坦ではあるが段差がみられる。高い段の部分に硬化面が見られることから，道跡の可能性も考えられる。

溝状遺構３（第244図）

Ｂ～Ｅ−18～20区のⅡ層で検出された。東西の端は，調査区外のため全体的な大きさは不明である。検出された部分は，長さ約38m，幅1.5ｍで東西方向に延びている。溝状遺構４・溝状遺構５と併行している。検出面からの深さは，50～60㎝である。底面はやや丸みを帯び，ゆるやかに立ち上がる。

溝状遺構４（第244図）

Ｅ−20区のⅡ層で検出された。西端は調査区外のため，全体の大きさは不明だが，検出された部分は，長さ2.2m，幅20～70㎝で東西方向に延びている。溝状遺構３・溝状遺構５と併行している。検出面からの深さは，15～20㎝である。底面は，平坦でゆるやかに立ち上がる。

溝状遺構５（第244図）

Ｅ−20区のⅡ層で検出された。西端は，調査区外のため，全体の大きさは不明だが，検出された部分は，長さ2.5m，幅70㎝で東西方向に延びている。溝状遺構３・溝状遺構４と併行している。検出面からの深さは，20～60㎝である。底面は，東端でやや丸みを持つ。

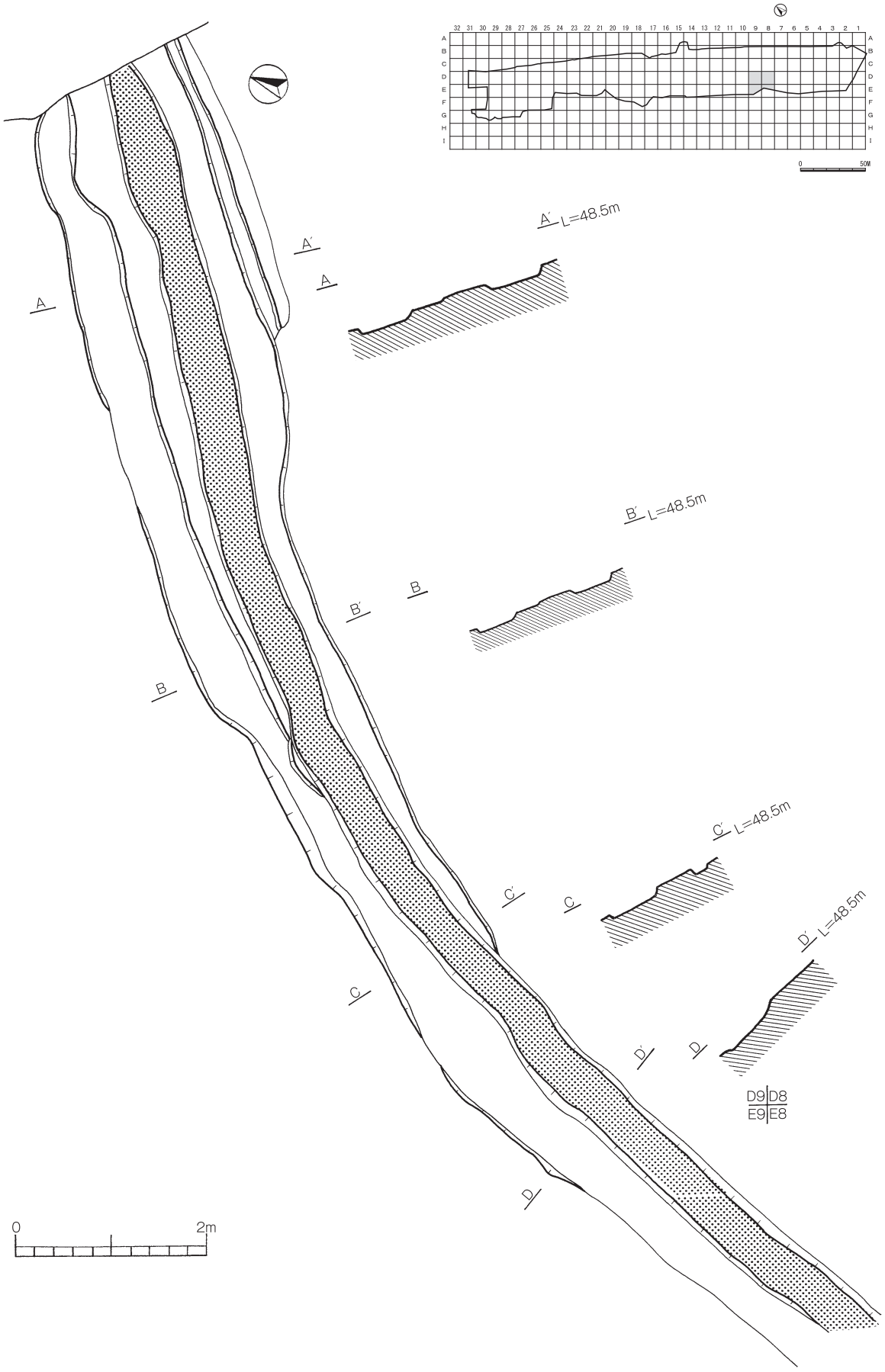
⑸　道路状遺構・道跡（第245～248図）

道路状遺構や道跡が４条検出された。道跡については，埋土中から遺物は出土しなかったが，層位や埋土状況から判断して古代から中世の時期と考えられる。

道路状遺構（第245図）

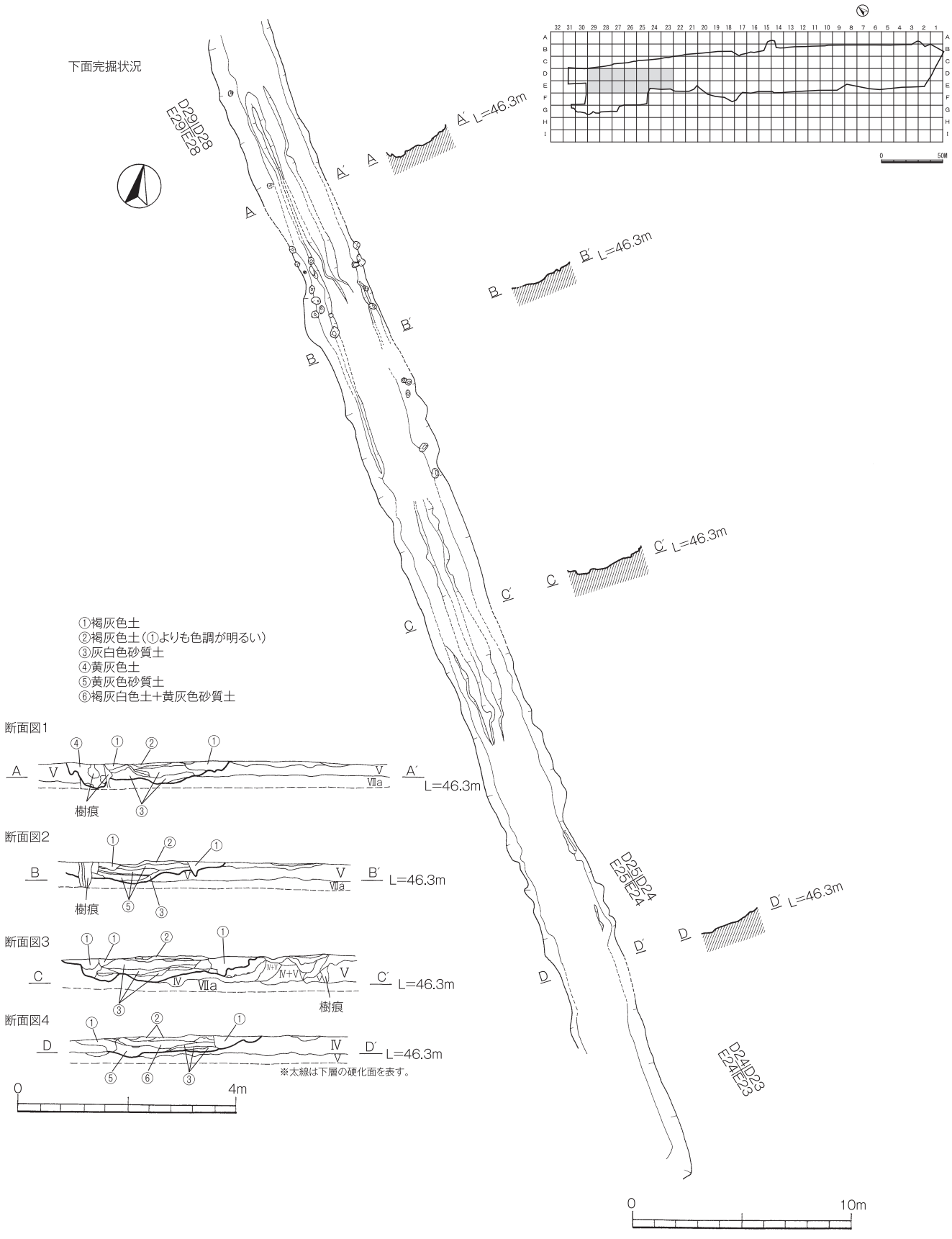
現道部分（市道）の調査で，Ｄ・Ｅ−24～29区で検出された。近世の道路遺構（街道跡）の約７ｍ西側で検出され，南北方向に延びている。検出された部分は，長さ55m，幅約4.6～5.6ｍである。表土除去後，硬化面とその両側に溝状遺構が検出された。硬化面の幅は，約2.3～2.6ｍで，鉄分を含んだ厚さ約４～５㎝の黒色土の層である。溝状遺構の幅は，約40～60㎝で，検出面からの深さは５～10㎝と非常に浅い。溝状遺構の底面も硬化しており，埋まる以前は硬化面，溝状遺構を含めて道として利用されていたことが考えられる。さらにトレンチを設定し掘り下げると，幅約3.0～3.5ｍの溝状遺構が検出された。埋土には，砂質土がみられる。埋土を除去すると，底面には厚さ２㎝の硬化面が確認された。この２枚目の硬化面がより古い時期の路面と考えられる。

このように，幅3.0～3.5ｍの道の時期と幅4.6～5.6ｍの道の時期の２時期が考えられる。上下２

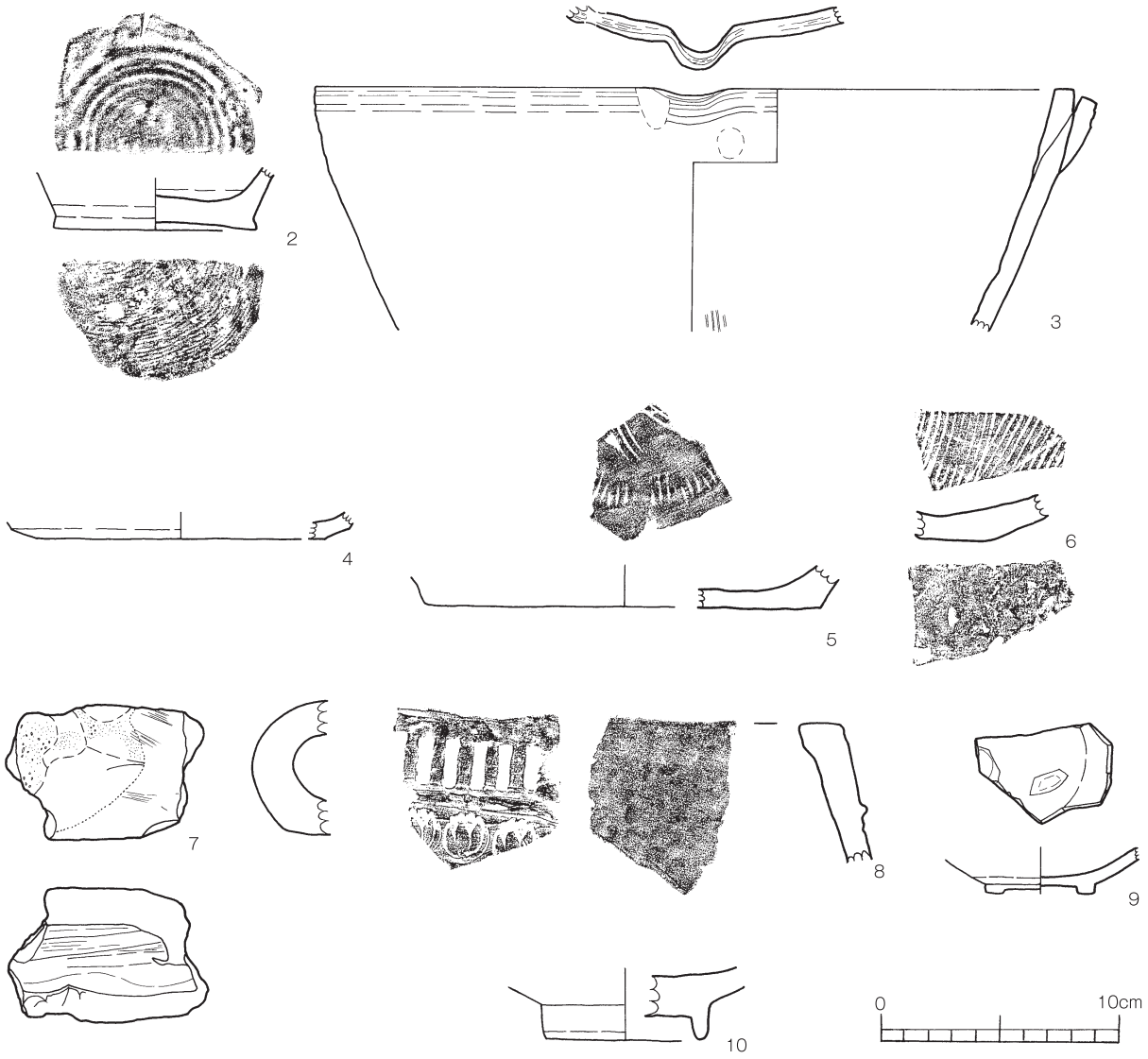


第243図　溝状遺構２

第244図　溝状遺構３～５


下面完掘状況
D29ID28
E29IE28
D25ID24
E25IE24
D24ID23
E24IE23
A
A´
L=46.3m
B
B´
C
C´
D
D´
①褐灰色土
②褐灰色土（①よりも色調が明るい）
③灰白色砂質土
④黄灰色土
⑤黄灰色砂質土
⑥褐灰白色土＋黄灰色砂質土
断面図1
断面図2
断面図3
断面図4
樹痕
Ⅴ
Ⅶa
Ⅳ
Ⅳ+Ⅴ
※太線は下層の硬化面を表す。
0
4m
0
10m
0
50M

第245図　道路状遺構



第246図　道路状遺構出土遺物

第79表　道路状遺構内出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	取上げ番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調整・文様		色調		焼成	備考
											内面	外面	内面	外面		
246	2	—	D・E−24〜29	溝	土師器	坏	底部	—	(8.4)	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	糸切り底
	3	—	D・E−24〜29	溝	土師質	擂鉢	口縁	(33.8)	—	—	ナデ　かき目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	
	4	—	D・E−24〜29	溝	土師器	皿	底部	—	(12.0)	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	
	5	—	D・E−24〜29	溝	須恵質	擂鉢	底部	—	(16.4)	—	かき目	ナデ	浅黄	灰黄	良好	
	6	—	D・E−24〜29	溝	須恵質	擂鉢	底部	—	—	—	かき目	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	
	7	—	D・E−24〜29	溝	羽口	—	—	外径 5.6	孔径 2.8	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	
	8	—	D・E−24〜29	溝	瓦質	火鉢	口縁	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	良好	花文
	9	—	D・E−24〜29	溝	白磁	坏	底部	—	4.6	高台高 0.3	—	—	胎土　灰白	釉薬　灰白	良好	目跡
	10	—	D・E−24〜29	溝	青磁	碗	底部	—	7.0	高台高 1.3	—	—	胎土　灰白	釉薬　青緑	良好	龍泉窯系

つの硬化面の間には，砂層もみられ，一時期自然流路（溝状遺構）となっていた可能性もある。

道路の建設と廃棄の時期は，明確ではないが，側溝（溝状遺構）の埋土中から15世紀代の遺物が出土し，16世紀以降の遺物がみられないことから，15世紀中には遺構が埋没し，道路としての機能が停止したと考えられる。

出土遺物（第246図，２～10）

溝状遺構の埋土中から，中世と考えられる土師器，白磁，青磁，瓦質土器，国内陶器（常滑焼，備前焼）が出土した。９点を図化した。

２～４は土師質の土器である。２は，坏の底部である。底径は8.4cmで，底面はわずかに張り出している。糸切り底である。３は，擂鉢である。口縁部を外に曲げ，注口にした片口で，内面は磨耗が著しいがわずかにかき目が残る。４は，皿の底部である。底径は12cmで，底面から直線的に立ち上がる。５・６は，須恵質土器で，擂鉢の底部である。５の底径は，16.4cmで，内面には縦方向のかき目が施されている。７は，鞴羽口である。先端部分は，溶けてガラス質になっている。細かい亀裂があり，加熱による破砕によるものと考えられる。円筒形で外径5.6cm，孔径2.8cmである。８は，瓦質の火鉢である。口唇部は平坦で，外面には一条の突帯が巡る。口縁部と突帯の間にはヘラ状工具による縦方向の刻み，突帯の下には花文の型押しが施されている。９は，白磁で坏の底部と考えられる。高台には抉りが見られ，見込みには目跡が残る。15世紀代のものと考えられる。10は，青磁で碗の底部である。底径は７cm，高台高は1.3cmである。龍泉窯系で15世紀代のものと考えられる。

道跡１（第247図）

Ｃ～Ｅ-19・20区のⅡ層で検出された。東西方向に延び，検出された部分は，長さ約24m，幅60～80cmで，硬化面が確認された。道跡２・道跡３と並行している。

道跡２（第247図）

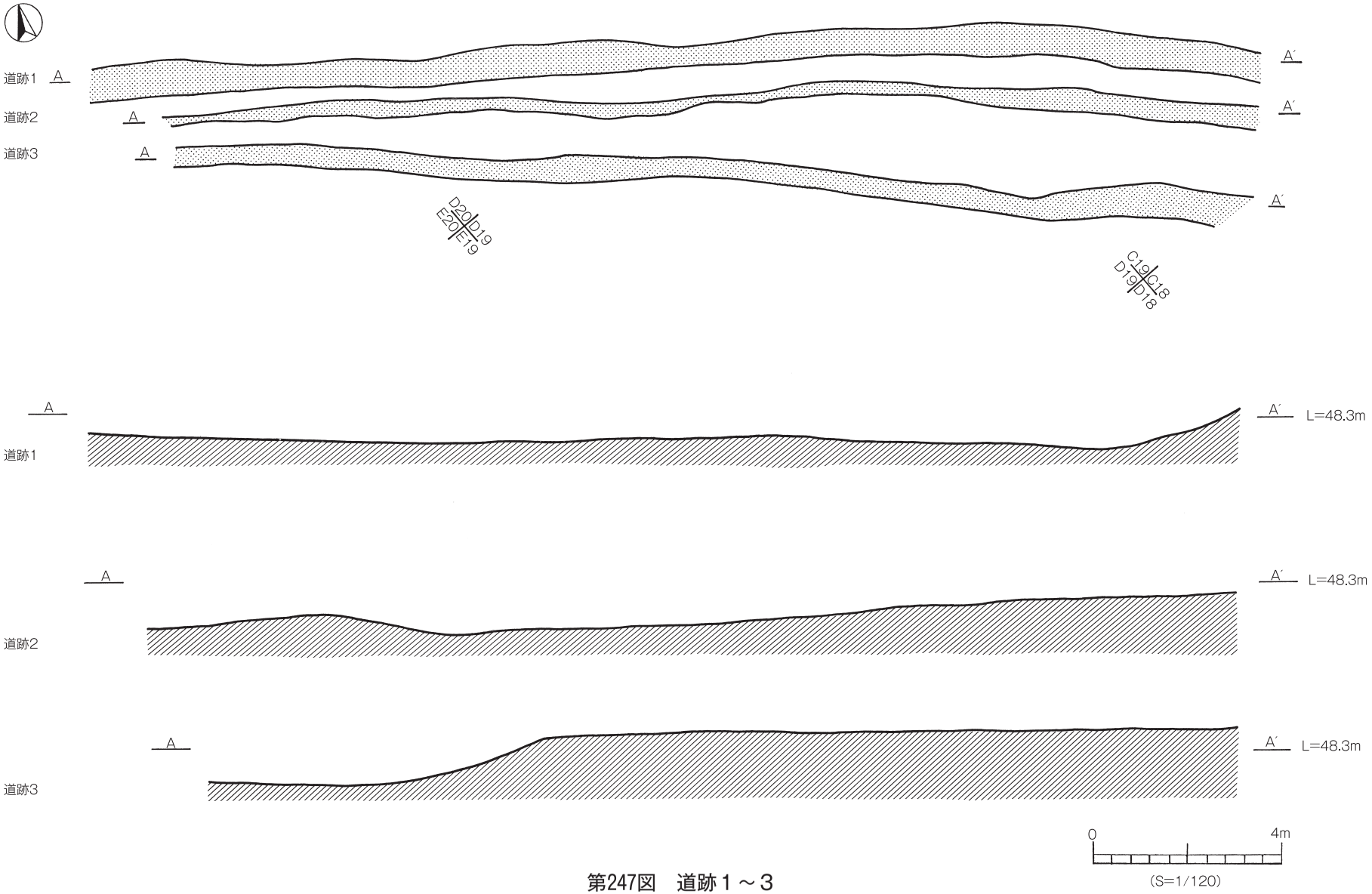
Ｃ～Ｅ-18～20区のⅡ層で検出された。東西方向に延び，検出された部分は，長さ23m，幅30～50cmで，硬化面が確認された。道跡１・道跡３と並行している。

道跡３（第247図）

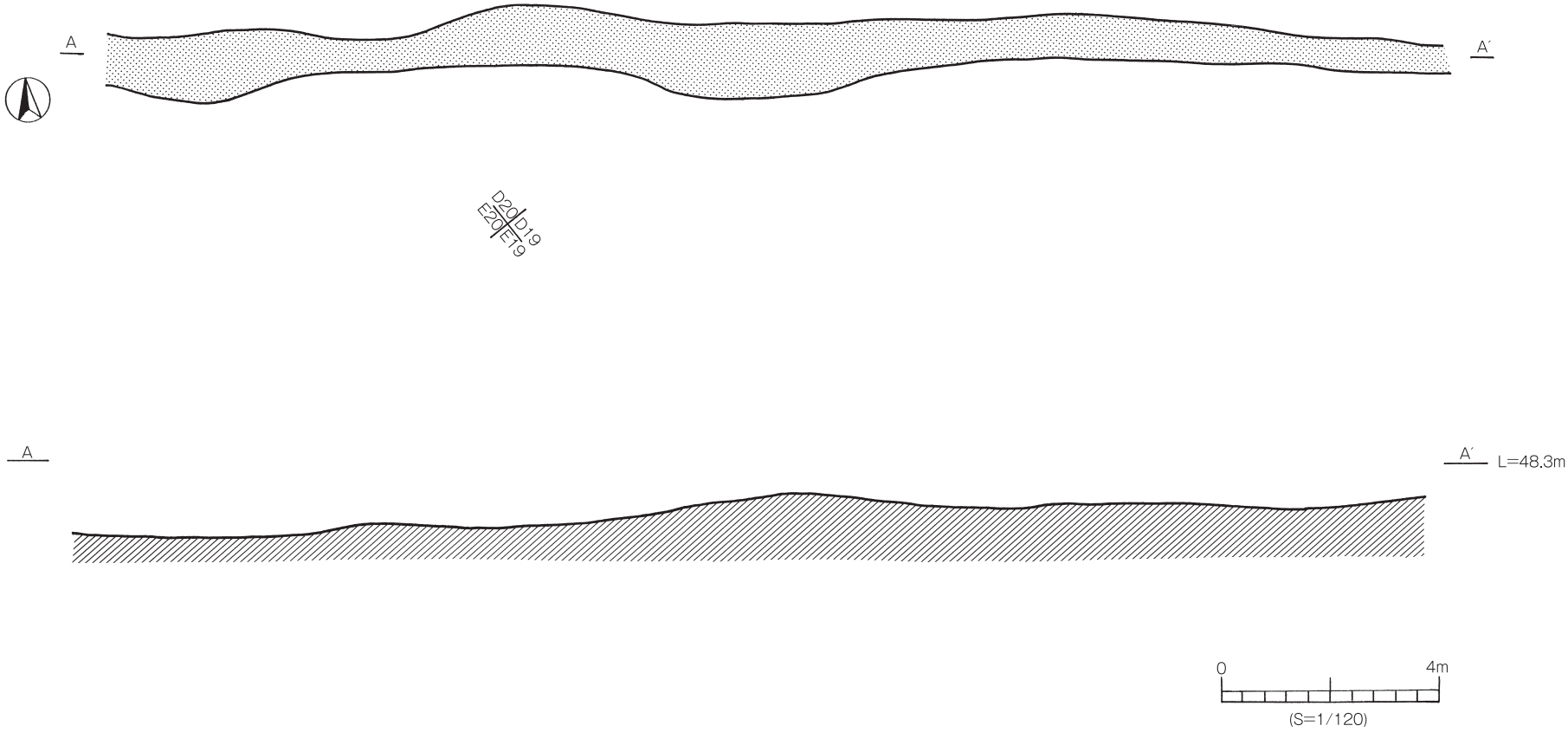
Ｃ～Ｅ-18～20区のⅡ層で検出された。東西方向に延び，検出された部分は，長さ22m，幅40～80cmで，硬化面が確認された。道跡１・道跡２と並行している。西側部分は，地形的に低くなっている。

道跡４（第248図）

Ｄ・Ｅ-19・20区のⅢ層下面で検出された。東西方向に延び，検出された部分は，長さ約25m，幅60～120cmで，硬化面が確認された。道跡１～３と切り合い関係にあり，道跡４がより古い時期のものと考えられる。


道跡1
A
A´
道跡2
A
A´
道跡3
A
A´
D20/D19
E20/E19
C19/C18
D19/D18
A
A´
L=48.3m
道跡1
A
A´
L=48.3m
道跡2
A
A´
L=48.3m
道跡3
0
4m
(S=1/120)

第247図　道跡１～３



第248図　道跡４

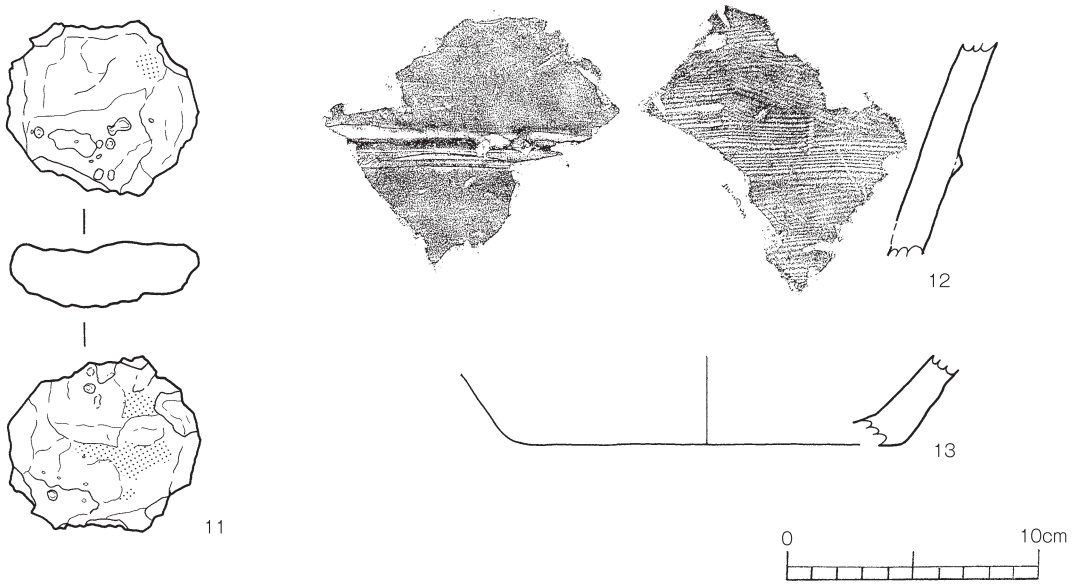
第249図　石溜まり遺構

⑹　石溜まり遺構（第249図）

D-30区のⅡ層で検出された。近世の鍛冶炉跡の下層から検出された。礫は，長軸1.8m，短軸1.0mの楕円形の範囲に広がっている。約160点の礫から構成され，砂岩や安山岩が多い。軽石も数点含まれている。礫は赤化していない。

出土遺物（第250図，11～13）

11は鉄滓である。12は瓦質土器である。擂鉢の胴部と思われる。13は，陶質土器である。甕の底部と考えられ，復元底径は15.4cmである。



第250図　石溜まり遺構出土遺物

第80表　石溜まり遺構出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	取上げ番号	出土区	層	種類	器種	部位	最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	調整・文様		色調		胎土	焼成	備考
											内面	外面	内面	外面			
250	11	—	D−30	遺構	鉄滓	鉄滓	—	7.5	7.0	2.3	—	—	—	—	—	—	重さ195.9g
	12	—	D−30	遺構	瓦質土器	擂鉢	胴部	—	—	—	ハケ目	ヘラナデ	灰黄	淡黄	—	良好	
	13	—	D−30	遺構	陶質土器	甕	底部	底径（15.4）	—	—	—	—	淡黄	淡黄	—	良好	

2　遺物

(1)　古代の遺物（第251～254図，14～56）

土師器（第251・252図，14～21・27～30）

土師器は，埦・坏・甕が出土している。

14・16・20・21は埦である。14は復元口径13.6cmである。20は復元口径14.6cm，器高7.3cm，底部径7.8cmで，器形は外側へ開く高台から口縁部にかけて直線的に外側へ立ち上がる。高台の内面には，成形時にできたと思われる突起がある。21はていねいにみがいている。

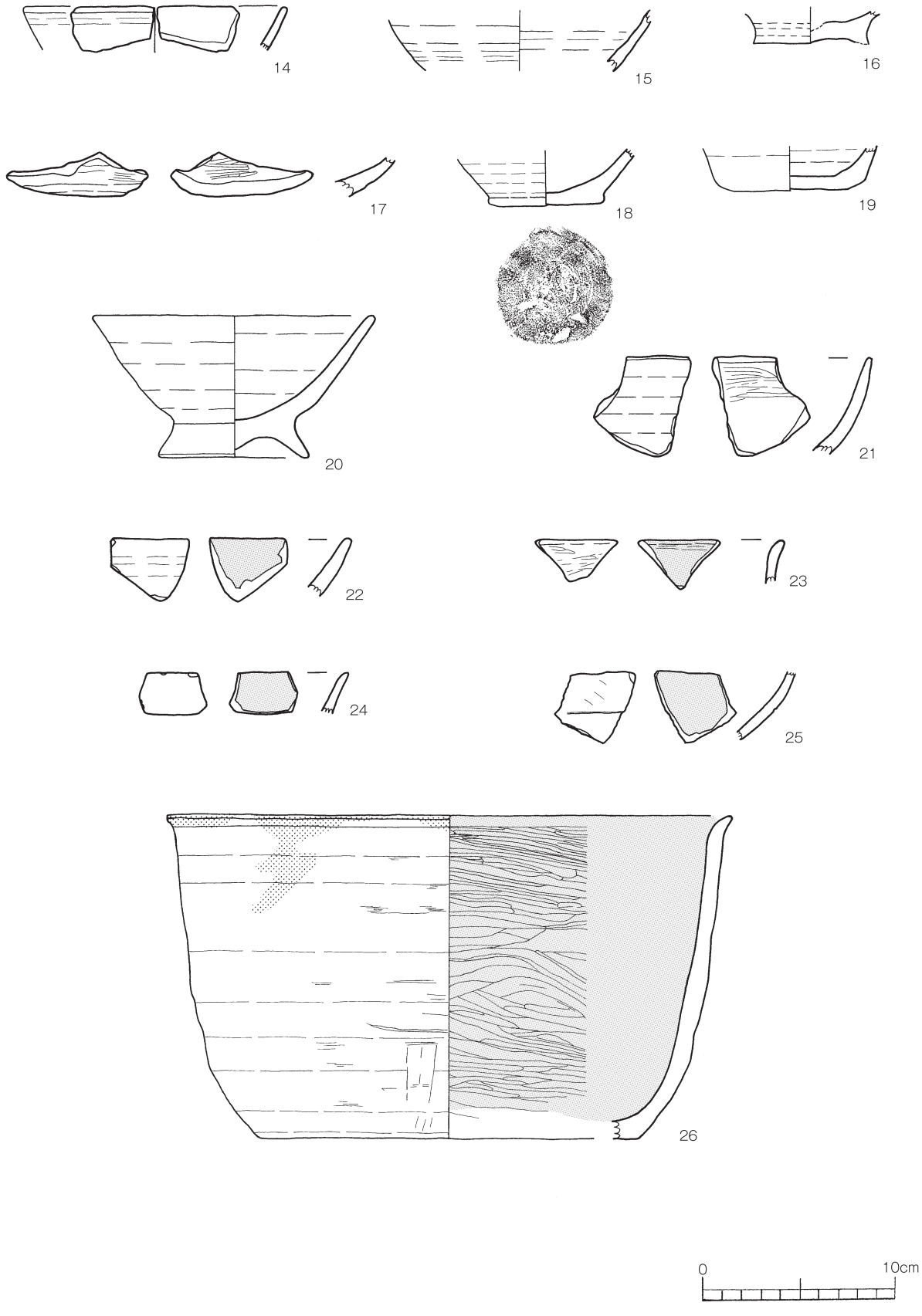
15・17～19は坏である。18は底部径6.0cmで，ヘラ切底である。19は復元底部径5.8cmで，磨滅が目立つ。

27～30は甕で，30は口縁部と考えられるものである。27～29は薄手の胴部で，外面は平行タタキのあとヘラナデで仕上げ，内面には平行当て具の痕跡がみられる。須恵器の製作法を用いている。

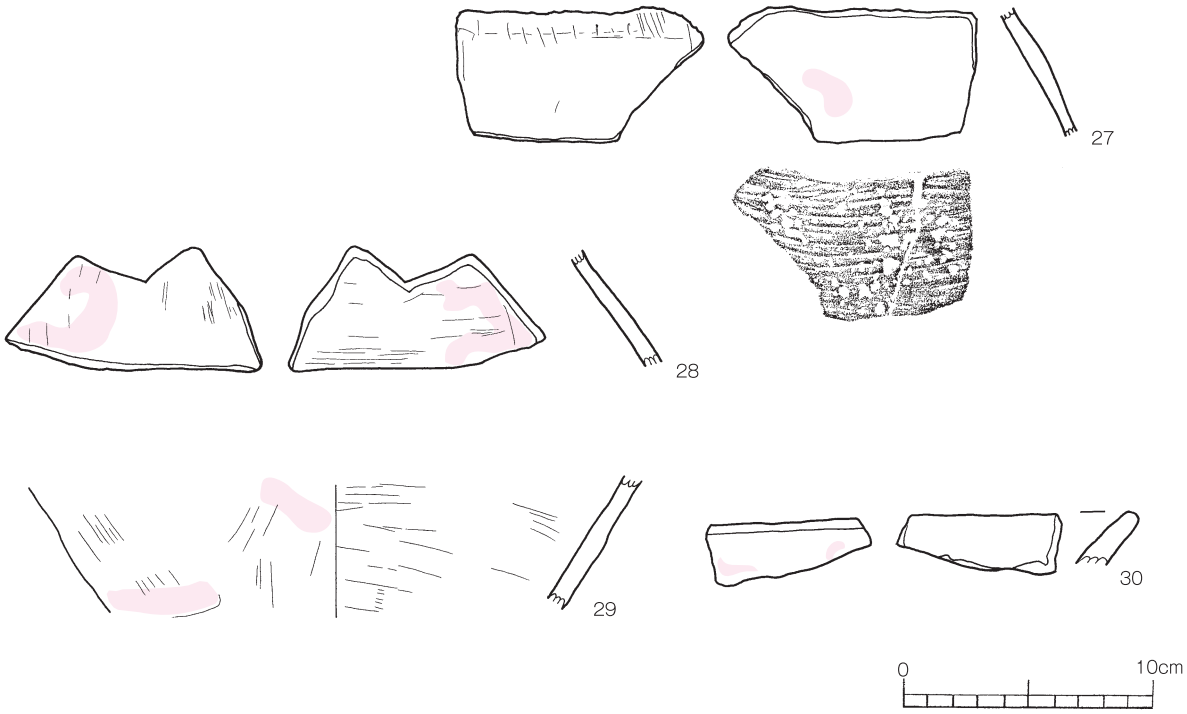
内黒土師器（第251図　22～26）

器種には埦と鉢がある。

埦は口縁部が直に開くものと，外反するものとがあり，23は内外ともていねいに磨かれている。



第251図　古代の遺物１（土師器１）



第252図　古代の遺物２（土師器２）

26は鉢である。一部は口縁部の外面まで黒くなっている。内面は横方向に丁寧に磨かれており，外面はナデのあと一部磨かれている。復元口径29.0cm，復元底部径19.4cm，器高16.6cmである。

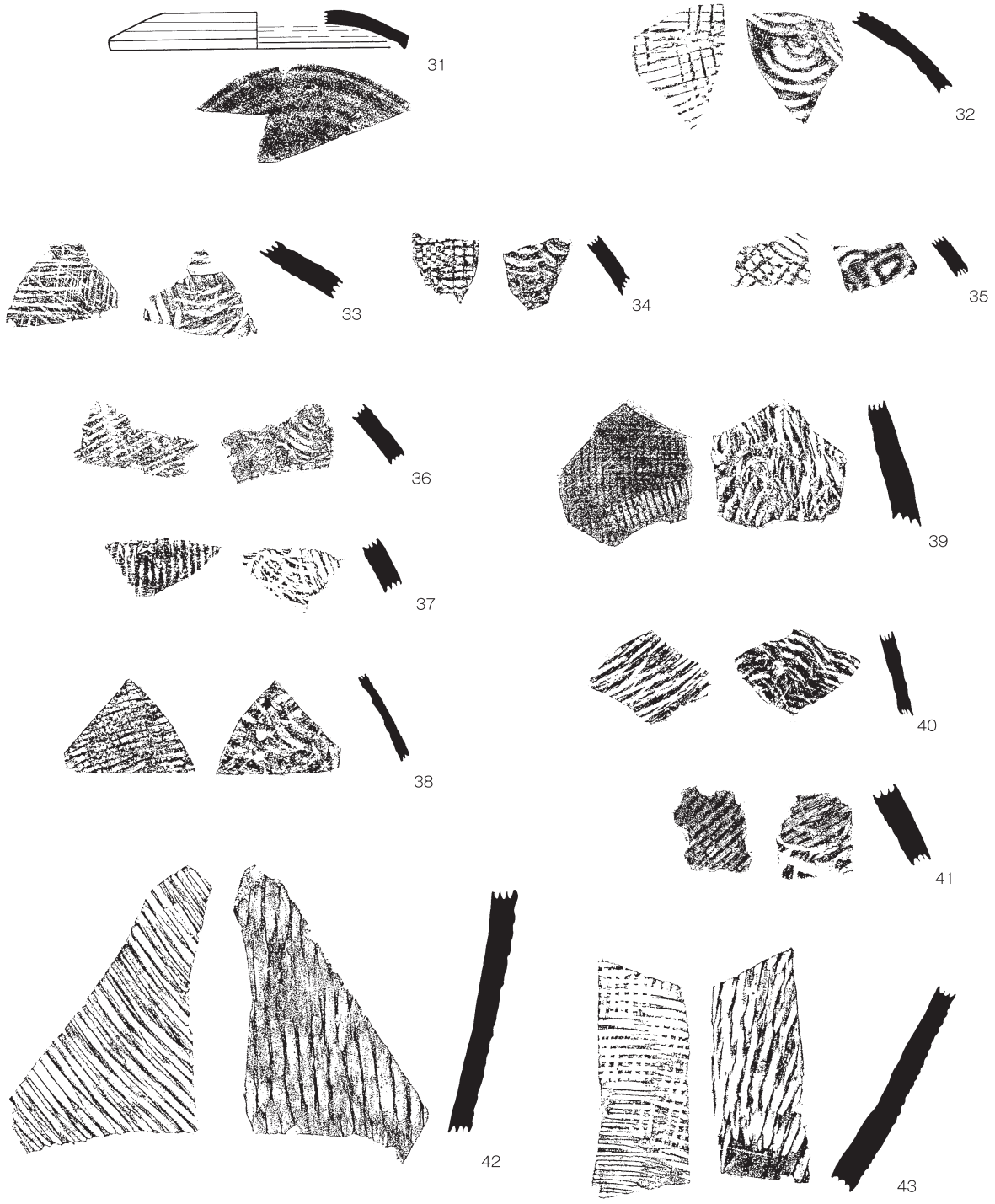
須恵器（第253・第254図，31～49）

須恵器は，坏蓋と甕，壺が出土している。

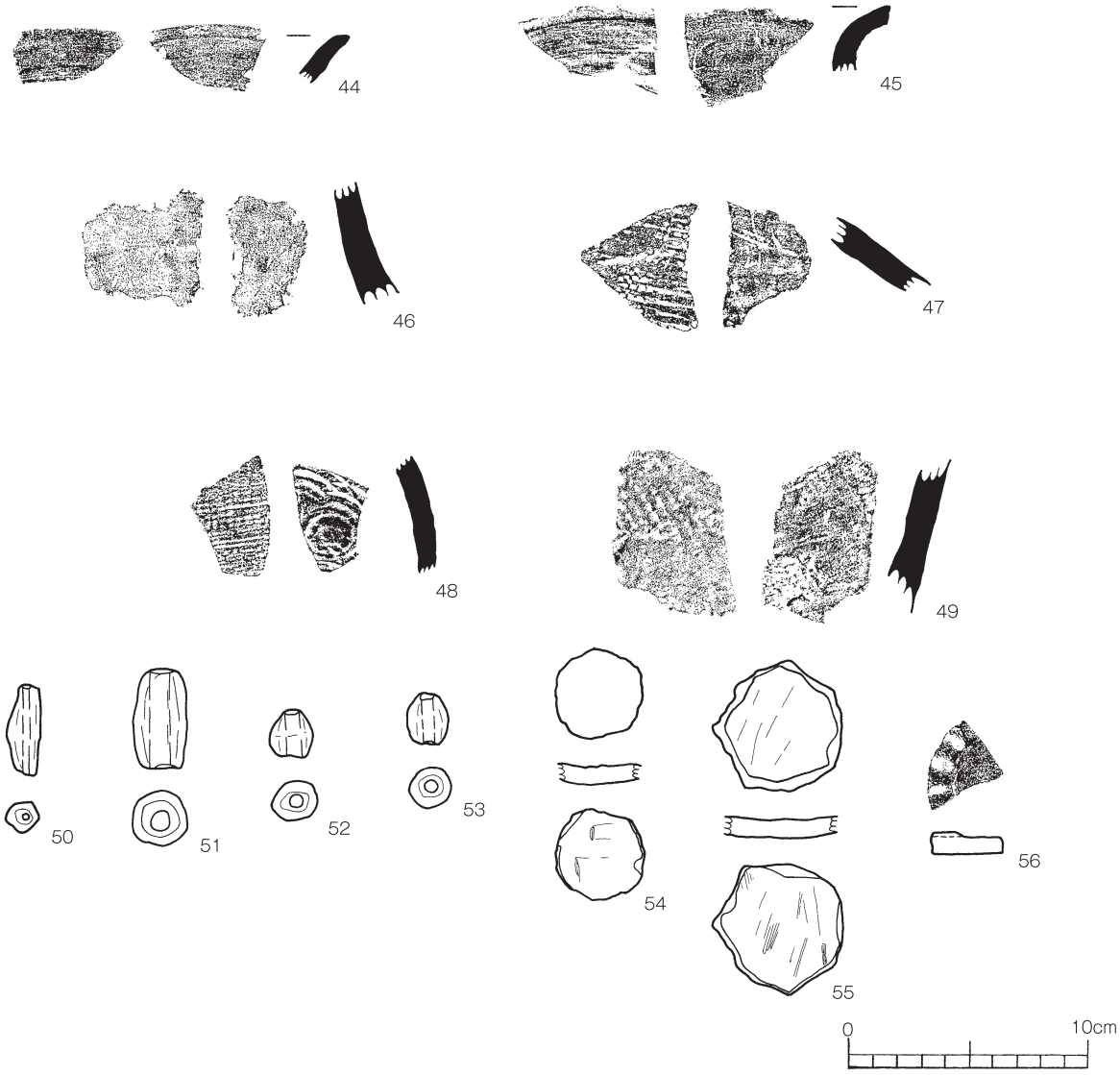
31は坏蓋である。口縁端部は垂直に鋭角に尖る。天井部はほぼ平坦であるが，ややひずみが見られ，一部にはヘラケズリ痕が残る。外面には自然釉がかかる。胎土にはやや粗い砂粒が見られる。復元径は13.8cmである。

32～43・48は甕の破片である。内外面共にタタキ・当て具痕が見られ，外面は格子目タタキ・平行タタキ，内面には同心円・平行の当て具痕がある。32・35は同一個体と考えられる破片で淡黄色を呈する。

44～47・49は壺である。44・45は口縁部破片で，44はやや外反しているが，ほぼ直線的に外傾する。45は頸部から大きく外反し，端部がややくぼむ。46は頸部と考えられる破片である。内面にも釉がかかる。47・49は肩部で，外面のタタキは小さい格子である。



第253図　古代の遺物３（須恵器１）



第254図　古代の遺物４（須恵器２・土錘・メンコ・土製品）

土錘・メンコ・土製品（第254図，50～56）

50～53は土錘である。紡錘状のもの（50），管状のもの（51），丸玉状のもの（52・53）がある。長さは50が3.6cm，51が4.0cm，52・53が2.0cm，幅は50が1.4cm，51が2.2cm，52・53が1.7cm，孔径は50が0.3cm，51が0.8cm，52・53が0.5cm，重さは50が5.5ｇ，51が18.3ｇ，52が4.7ｇ，53が5.2ｇである。51はていねいにナデて，両側面をヘラで切ってあるが，50は雑な作りである。

54，55は成川式土器の破片を円形に加工した，いわゆるメンコである。最大径は54が3.6cm，55が5.4cmあり，厚さはいずれも0.8cmである。54は内面が剥落している。

56は用途不明の土製品である。円形を呈するものと考えられ，復元径が6.2cmである。中央部分には復元径0.4cmの穿孔が見られる。外周部分には幅0.9cmの凹凸があり，厚さは凸部0.9cm，凹部0.7cmである。中央の穿孔部分の厚さは0.6cmである。古代の遺物として扱ったが，焼成が非常に良好であることから，後の時代のものである可能性もある。

⑵　中世の遺物（第255～257図，57～103）

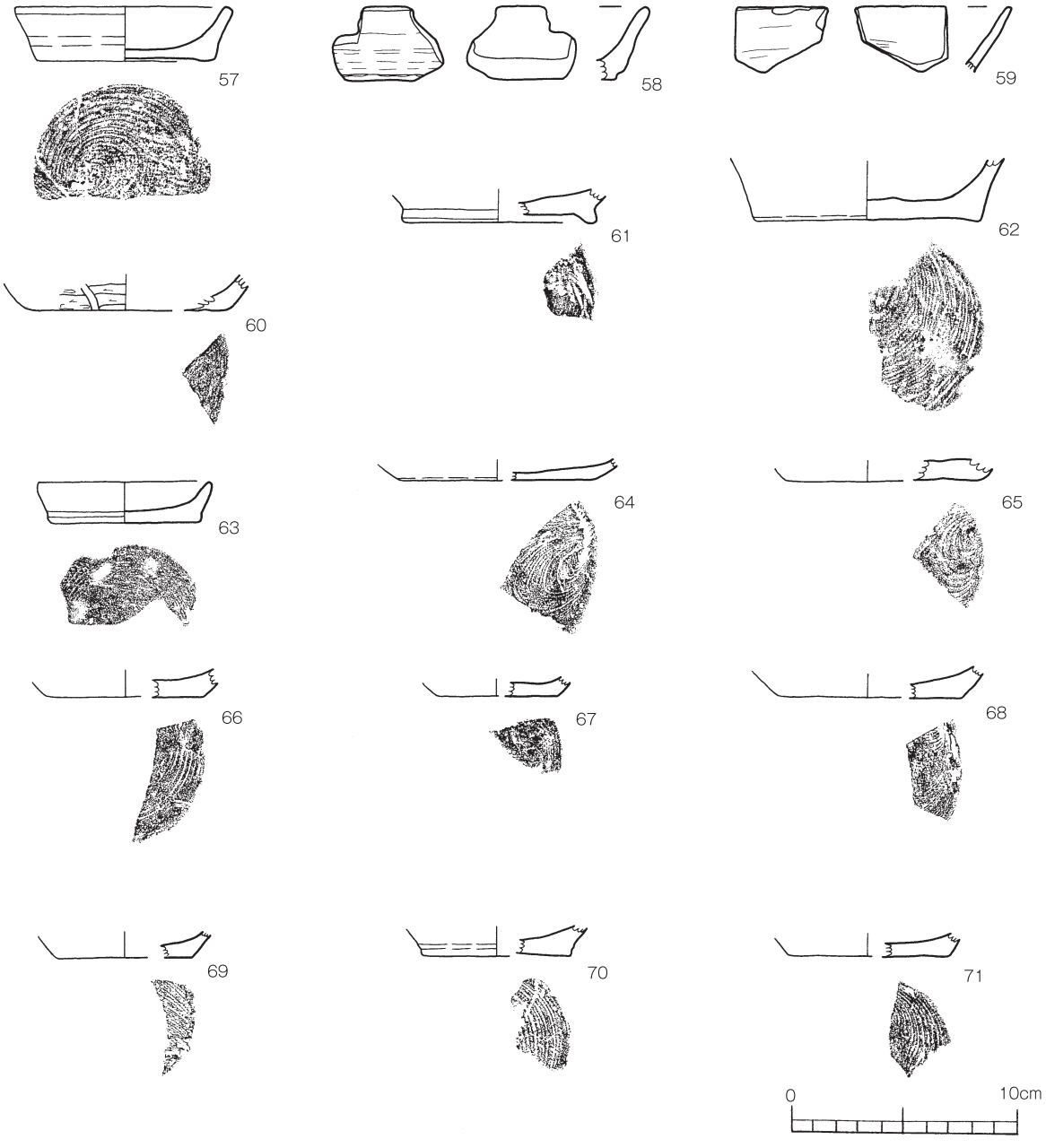
土師器（第255図，57～71）

57・58・62・63は皿で，底部は糸切底である。57は底部がわずかに上げ底気味で，復元口径9.6cm，底部径7.8cm，器高2.9cmである。62の復元底径は10.0cmである。63の底部は，端が外側へ張り出し，復元口径7.8cm，底部径6.9cm，器高1.8cmである。57・62・63は灯明皿として使用されている。

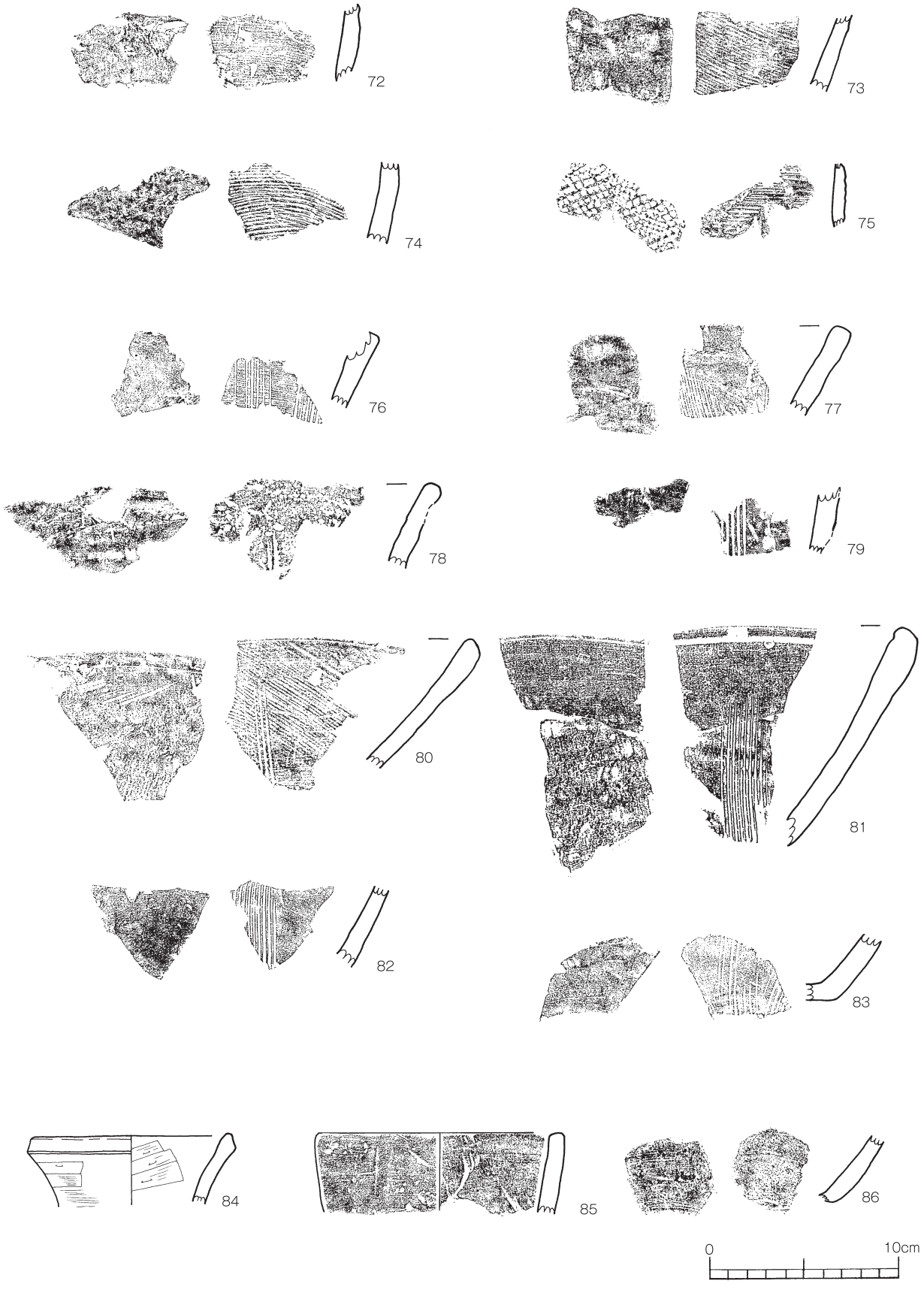
59は坏と考えられる。

61は低い高台付きの坏あるいは埦と考えられるもので，復元底径が8.7cmである。

60，64～71は皿と考えられるもので，底部はいずれも糸切底である。70は底部の端が張り出し気味に明確な稜を持つ。64は灯明皿として用いられており，68は硬質に焼けている。



第255図　中世の遺物１（土師器）



第256図　中世の遺物２（須恵質陶器ほか）

須恵質陶器（第256図　72～75，77・80～84・86）

72～74・84・86は青灰色を呈するこね鉢で，外面はヘラナデ，内面は横方向のハケナデである。73は硬質に焼け，内面は黒色化している。84は注ぎ口で，口縁部だけ黒色化している。東播系のものと思われる。

75は外面に小さな正格子タタキがあり，内面はハケナデで仕上げている甕である。

80～83は安定した平底から外へ開きながらまっすぐ伸びる擂鉢で，口縁端部はやや厚くなり，丸みをおびた矩形である。外面はヘラナデ，内面は斜方向のハケナデで仕上げ，内面に幅の広いかき目が下から上へみられる。80の口唇部は使用によってすり減っている。81は硬質に焼けており，口縁内部に沈線がある。内面のかき目は九条である。83は使用によってかき目がすり減っている。

瓦質土器（第256図　76・78・85）

擂鉢は口縁部へ向かって，底から開きながらまっすぐ伸びる器形をしており，口縁端は丸みをおびた矩形を呈している。外面はヘラナデで仕上げ，内面は横方向のハケナデで仕上げたあと，下から上へ幅の広いかき目がみられる。

85は口縁直径が13.5cmの火舎で,外面の口縁近くに円形のスタンプが押されている。

土師質土器（第256図　79）

内面はハケナデで，かき目の広い擂鉢である。

陶質土器（第256図　82）

赤みをおびた擂鉢である。

白磁（第257図　87～91）

87は口禿げの坏である。口縁端の釉をはぎ取っている。灰白色の釉である。

88は外反する坏で，灰白色の釉がかかる。薄い作りである。

89・91は多角坏である。坏部・高台とも多角となる。89は見込みに４か所，重ね焼き時の釉はげがみられる。底部から高台にかけて外面は露胎となっている。ともに黄白色の釉がかかり，特に89は貫入が目立つ。

90は口縁直径が10.5cm,高さが２cmの外反する皿で,底部は丸みをもって立ち上がり,直径が4.5cmある。外面の底近くは露胎で，内面の腰部に沈線がある。青白色釉で，見込みには砂目がある。

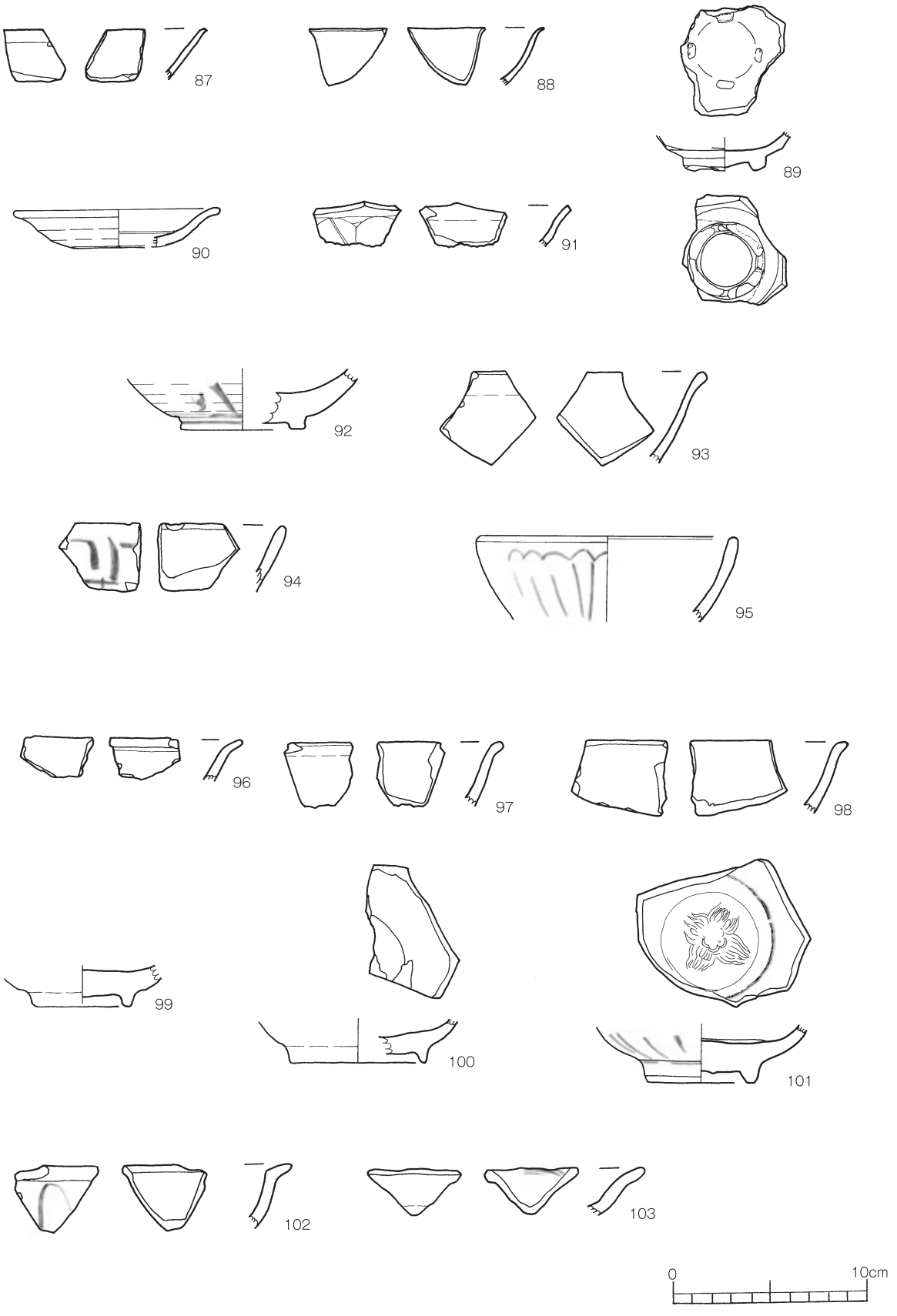
青磁（第257図　92～103）

92・95・101は蓮弁文碗である。いずれも線描き蓮弁文であるが，92・101は片彫りの幅広で深い線で描かれているのに対し，95は細い。95は口縁直径が13cmで内反ぎみの器形で，縦線と鋸歯状の組み合わせは，剣頭と縦線が一致しない。青緑色の釉がかかっている。92は低い高台が貼り付けられた分厚い底部である。101は逆台形の高台が貼り付けられ，92同様，分厚い底である。見込みと畳付け部から高台内にかけては露胎で，貫入が目立つ。見込みに蓮花文のスタンプがみられる。

93・96～100は無文の碗で，口縁部が外反する。高台は小さく，畳付部から内側は露胎で，99は貫入が目立つ。100は見込みも露胎である。

94は片彫りの幅の広い線で描かれる雷文帯碗である。

102は蓮弁文の皿である。端反り風に，口縁部が強く外反し，蓮弁文は線描きである。黄色がかった釉がかかる。103は内面に唐草文のある稜花皿である。



第257図　中世の遺物３（白磁・青磁）

第81表　古代出土遺物観察表１

土師器

（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様		色調		焼成	備考
										内面	外面	内面	外面		
251	14	2978	C－23	Ⅱ	碗	口縁	(13.6)	－	－	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	良好	
	15	－	－	－	坏	口縁	12.0	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	
	16	溝	D･F－26～30	－	碗	底部	－	5.8	－	ナデ	糸切りナデ	明黄褐	浅黄橙	良好	
	17	28027	D－20	Ⅲa	坏？	底部	－	－	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	
	18	－	D･E－26～30	溝	坏	底部	－	6.0	－	ハケ目	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	良好	ヘラ切り底
	19	2952	D－22	Ⅱ	坏	底部	－	(5.8)	－	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	磨滅が著しい
	20	2426	C－26	Ⅱ	碗	完形	(14.6)	7.8	7.3	ナデ	ろくろ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	
	21	－	－	－	碗	口縁	－	－	－	ミガキ	ヘラナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	
	22	－	－	表	碗	口縁	－	－	－	ろくろ	ろくろ	灰黄褐	褐灰	良好	内黒土師器
	23	4830	D－23	Ⅱ	碗	口縁	－	－	－	ミガキ	ミガキ	褐灰	灰黄	良好	内黒土師器
	24	－	－	－	碗	口縁	－	－	－	ナデ	ナデ	黄灰	灰黄	良好	内黒土師器
	25	17595	F－28	Ⅲa	碗	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	黄灰	にぶい黄橙	良好	内黒土師器
	26	22442	F－25	Ⅲa	鉢	口～底部	(29.0)	(19.4)	16.6	ヘラミガキ	ナデ	黒	浅黄	良好	内黒土師器
252	27	11076 11113	D－21	Ⅱ	甕	胴部	25.8	－	－	平行当て具痕	平行タタキ後ヘラナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	赤色顔料　ススト痕あり
	28	11087 3050	D－21･23	Ⅱ	甕	胴部	－	－	－	平行当て具痕	平行タタキ後ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	赤色顔料　(105，108と同一個体)
	29	11098	D－21	Ⅱ	甕	胴部	－	－	－	平行当て具痕	平行タタキ後ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	赤色顔料　(107同一個体)
	30	18111 18142	F－28	Ⅲa	甕	口縁	－	－	－	平行当て具痕	平行タタキ後ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	赤色顔料　外面、磨耗が著しい

第82表　古代出土遺物観察表２

須恵器

（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層	器種	部位	口径(cm)	調整・文様		色調		焼成	備考
								内面	外面	内面	外面		
253	31	3986	D－23	Ⅱ	坏蓋	口縁	(13.8)	ヨコナデ	回転ヘラケズリ	黄灰	黄灰	良好	外面に自然釉
	32	22010	F－25	Ⅲa	甕	胴部	－	同心円当て具痕	格子目タタキ	浅黄橙	浅黄橙	不良	
	33	－	－	－	甕	胴部	－	同心円当て具痕	格子目タタキ	灰	にぶい橙	やや不良	
	34	26882	C－19	Ⅲa	甕	胴部	－	同心円当て具痕	格子目タタキ	灰	灰	良好	
	35	22602	F－25	Ⅲa	甕	胴部	－	同心円当て具痕	格子目タタキ	浅黄橙	浅黄橙	不良	
	36	－	B－11	－	甕	胴部	－	同心円当て具痕	格子目タタキ	灰	灰	良好	
	37	－	－	－	甕	胴部	－	同心円当て具痕	平行タタキ	灰	灰	良好	
	38	－	－	－	甕	胴部	－	同心円当て具痕	平行タタキ	にぶい黄褐	浅黄	良好	
	39	28520	B－18	Ⅲa	甕	胴部	－	平行・同心円当て具痕	格子目タタキ	黄灰	灰黄	良好	
	40	10195	F－28	Ⅱ	甕	胴部	－	同心円当て具痕	平行タタキ	褐灰	褐灰	良好	
	41	－	－	－	甕	胴部	－	平行・同心円当て具痕	平行タタキ	褐灰	黒褐	良好	
	42	10329	G－28	Ⅱ	甕	胴部	－	平行当て具痕	平行タタキ	褐灰	褐灰	良好	
	43	－	－	表	甕	胴部	－	平行当て具痕	格子目タタキ	灰黄褐	にぶい黄褐	良好	
254	44	9708	G－28	Ⅱ	壺	口縁	－	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白	灰白	良好	
	45	－	－	－	壺	口縁	－	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄	灰黄	良好	
	46	－	E－28	表	壺	頸部	－	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	良好	
	47	－	－	－	壺	肩部	－	ヨコナデ	格子目タタキ	灰黄	灰黄	不良	
	48	－	D・E－26～30	溝	甕	胴部	－	同心円当て具痕	格子目タタキ	灰白	灰白	良好	精製された胎土
	49	－	D・E－26～30	溝	壺	肩部	－	ヨコナデ	格子目タタキ、ヨコナデ	にぶい橙	にぶい褐	良好	

土錘・メンコ・土製品

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層	器種	部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼成	備考
254	50	－	G－29	Ⅰ	管状土錘	完形	3.6	1.4	5.5	にぶい黄橙	砂粒	良好	孔径0.3cm
	51	－	G－29	表	管状土錘	完形	4.0	2.2	18.3	にぶい褐色	砂粒	良好	孔径0.8cm
	52	－	E・F－26	表	管状土錘	完形	2.0	1.7	4.7	明赤褐色	砂粒	良好	孔径0.5cm
	53	－	E・F－26	表	管状土錘	完形	2.0	1.7	5.2	にぶい黄橙	砂粒	良好	孔径0.5cm
	54	28413	C－18	Ⅲa	メンコ	完形	最大径3．6	厚さ　0.8	－	にぶい黄橙	長石、石英、雲母、角閃石	良好	成川式土器
	55	2114	C－22	Ⅱ	メンコ	完形	最大径5．4	厚さ　0.8	－	灰黄褐	長石、石英、黒曜岩、雲母、角閃石	良好	成川式土器
	56	－	－	表	土製品	－	最大径6．2	厚さ　0.7	－	にぶい黄橙	玉髄、長石、火山ガラス	良好	

第83表　中世出土遺物観察表１

土師器

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層	器種	部位	法量(cm)			調整・文様		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
255	57	18016	G－28	Ⅲa	皿	底部	(9.6)	7.8	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石、火山ガラス、白片岩、石英、茶粒	良好	糸切り底
	58	－	－	－	皿	口～底	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	にぶい橙	長石、火山ガラス	良好	糸切り底
	59	10201	F－28	Ⅱ	坏	口縁	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	石英、黒片岩、白片岩、角閃石、赤片岩、火山ガラス	良好	
	60	23947	C－18	Ⅲa	皿	底部	－	9.0	－	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	石英、赤片岩、白片岩	良好	糸切り底
	61	10444	G－29	Ⅱ	坏	底部	－	(8.4)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	白片岩、長石、茶粒	良好	糸切り底
	62	－	－	－	皿	底部	－	(10.0)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐	灰褐	黒片岩、石英	良好	糸切り底
	63	－	－	－	皿	底部	(7.8)	6.9	1.8	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	明赤褐	角閃石、石英、赤片岩	良好	糸切り底
	64	－	－	－	皿	底部	－	9.0	－	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	褐灰	石英、白片岩	良好	糸切り底
	65	2684	C－22	Ⅱ	皿	底部	－	10.0	10.0	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白	灰黄	赤片岩、長石	良好	糸切り底
	66	－	－	－	皿	底部	－	7.0	7.0	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	石英、軽石、黒片岩	良好	糸切り底
	67	1897	D－20	Ⅱ	皿	底部	－	5.4	5.4	ヨコナデ	ヨコナデ	黒	にぶい黄褐	黒片岩、石英、火山ガラス	良好	糸切り底
	68	26888	C－19	Ⅲa	皿	底部	－	8.2	8.2	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	火山ガラス、石英、角閃石	良好	糸切り底
	69	－	－	－	皿	底部	－	6.0	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	にぶい橙	石英、角閃石	良好	糸切り底
	70	－	－	－	皿	底部	－	6.6	6.6	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙	赤片岩、火山ガラス	良好	糸切り底
	71	一括	F－23	Ⅲab	皿	底部	－	7.0	7.0	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤片岩、黒片岩、石英	良好	糸切り底

須恵質陶器・瓦質土器・土師質土器・陶質土器

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層	種類	器種	部位	法量(cm)			調整・文様		色調		胎土	焼成	備考
								口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
256	72	27475	D－19	Ⅲa	須恵質陶器	こね鉢	胴部	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	灰	青灰	長石	良好	
	73	2370	D－25	Ⅱ	須恵質陶器	こね鉢	胴部	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	黒	青灰	黒片岩、長石	良好	
	74	10218	F－28	Ⅱ	須恵質陶器	こね鉢	胴部	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	灰	青灰	黒片岩、長石	良好	
	75	－	C－16	表	須恵質陶器	甕	胴部	－	－	－	ハケナデ	格子目タタキ	灰白	灰白	－	良好	
	76	17180	C－22	Ⅲb	瓦質土器	擂鉢	口縁	－	－	－	ハケナデかき目	ヘラナデ	灰	灰	黒片岩、長石、軽石	良好	
	77	－	－	－	須恵質陶器	擂鉢	口縁	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	灰	灰	長石	良好	
	78	－	－	－	瓦質土器	擂鉢	口縁	－	－	－	ハケナデかき目	ヘラナデ	灰オリーブ	オリーブ黄	長石	良好	
	79	－	－	－	土師質土器	擂鉢	胴部	－	－	－	ハケナデかき目	ヘラナデ	灰白	灰白	－	不良	
	80	－	－	表	須恵質陶器	擂鉢	口縁	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	長石、火山ガラス	良好	
	81	－	C－20	表	須恵質陶器	擂鉢	胴部	－	－	－	ハケナデかき目	ヘラナデ	灰	灰	－	良好	
	82	10629	F－30	Ⅱ	陶質土器	擂鉢	胴部	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	灰褐色	灰褐色	－	良好	
	83	－	－	表	須恵質陶器	擂鉢	底部	－	－	－	ハケナデかき目	ヘラナデ	灰オリーブ	灰	長石、火山ガラス	良好	
	84	－	D･E－26･30	溝	須恵質陶器	こね鉢	口縁	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	褐灰	褐灰	精製された胎土	良好	東播磨系
	85	－	G－28	表	瓦質土器	火鉢	口縁	13.0	－	－	ハケナデかき目	ヘラナデ	灰黄	黄灰	長石	良好	
	86	17667	G－28	Ⅲa	須恵質陶器	こね鉢	底部	－	－	－	ハケナデ	ヘラナデ	黄灰	暗灰黄	長石、火山ガラス	良好	

第84表　中世出土遺物観察表２

白磁・青磁

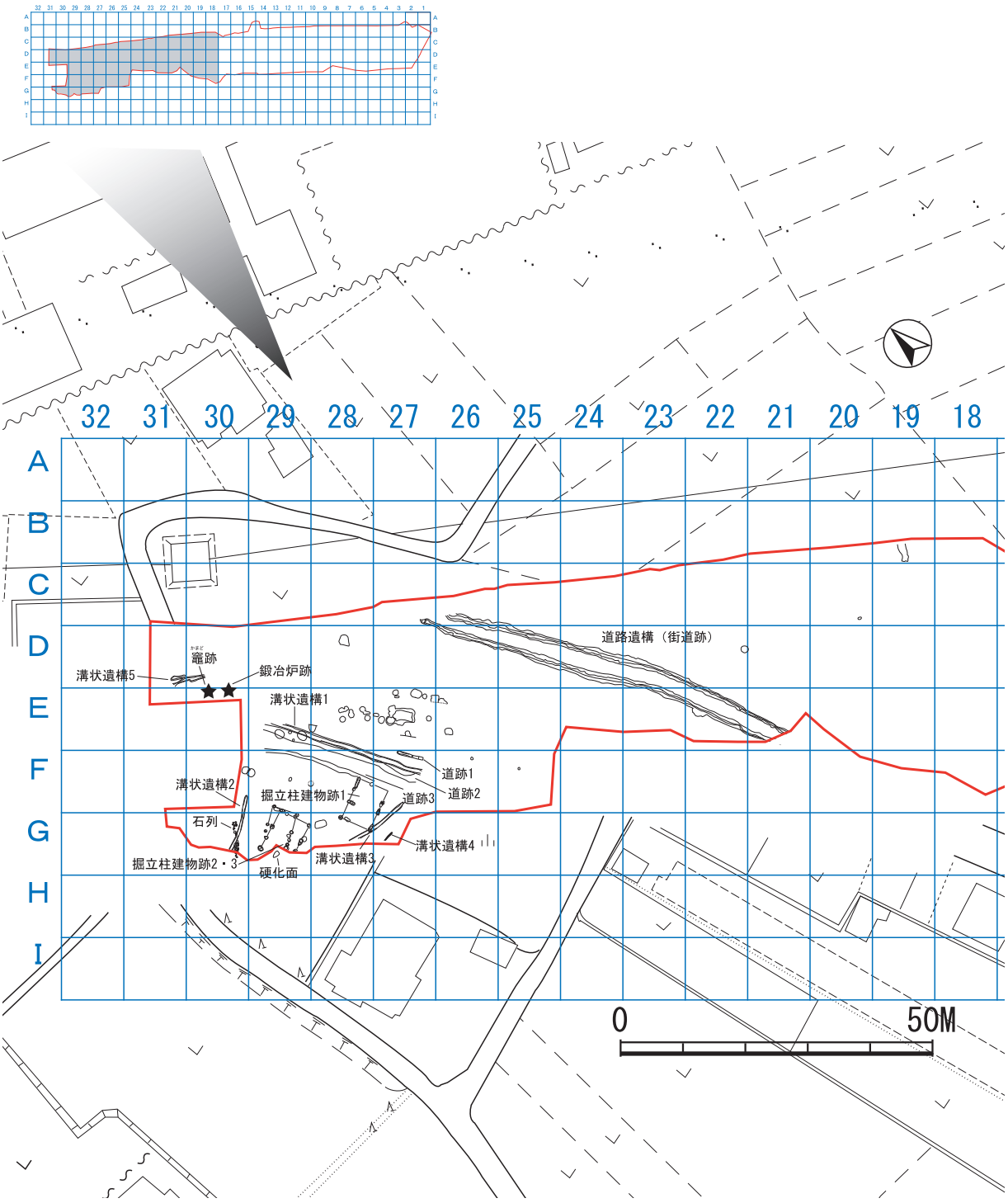
挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層	種別	器種	部位	法量(cm)			胎土	釉薬	焼成	貫入	備考
								口径	底径	器高					
257	87	―	―	表	白磁	坏	口縁	―	―	―	灰白	灰白	良好	無	口禿
	88	―	G･H－28	―	白磁	坏	口縁	14.8	―	―	灰白	灰白	良好	無	
	89	―	―	表	白磁	多角坏	底部	―	4.2	―	灰白	黄白	良好	有	見込みに釉はげ
	90	―	―	―	白磁	皿	口縁	10.5	4.5	2.0	灰白	青白	不良	無	
	91	24619	C－18	Ⅲa	白磁	多角坏	口縁	―	―	―	灰白	黄白	良好	有	
	92	27409	C－18	Ⅲa	青磁	碗	底部	―	5.3	―	灰	暗オリーブ	良好	有	蓮弁文
	93	10220	―	―	青磁	碗	口縁	―	―	―	灰白	オリーブ灰	良好	有	
	94	―	―	―	青磁	碗	口縁	―	―	―	灰白	オリーブ黄	良好	無	雷文帯
	95	―	D－18	―	青磁	碗	口縁	13.0	―	―	灰オリーブ	オリーブ灰	良好	無	蓮弁文
	96	22087	F－26	Ⅱ	青磁	碗	口縁	―	―	―	灰オリーブ	オリーブ灰	不良	無	
	97	―	―	―	青磁	碗	口縁	―	―	―	にぶい橙	黄褐	良好	有	
	98	25716	C－18	Ⅲa	青磁	碗	口縁	―	―	―	灰白	オリーブ灰	良好	無	
	99	―	―	―	青磁	碗	底部	―	5.1	0.6	にぶい橙	釉色のみオリーブ灰	不良	有	
	100	1	F－28	Ⅰ	青磁	碗	底部	―	7.0	0.5	灰黄	釉色のみ	良好	無	
	101	―	―	表土	青磁	碗	底部	―	5.6	―	灰白	オリーブ灰	良好	有	蓮弁文
	102	―	―	―	青磁	皿	口縁	―	―	―	灰黄	浅黄	良好	有	蓮弁文
	103	―	E－28	表	青磁	皿	口縁	―	―	―	灰黄	オリーブ灰	不良	有	唐草文

第５節　近世の遺構と遺物

１　遺構（第258～279図）

近世の遺構は，調査区の西側Ｅ～Ｈ-26～30区を中心に，掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，道路遺構（街道跡）などが，遺物包含層であるⅡ層上面で検出された。

遺構内からは，薩摩焼，染付などが出土している。遺構内出土遺物は，この項で取り扱うこととする。



第258図　近世の遺構配置図

⑴　掘立柱建物跡（第259～261図）

調査区全体で３棟の掘立柱建物跡が検出されている。削平されるなどして，一部分のみ検出されたものもある。切り合って検出された遺構もあり，時期も複数あると考えられる。柱穴からは柱を支えたと考えられる礎石（根石）も出土している。

掘立柱建物跡１（第259図）

Ｆ・Ｇ-27･28区のⅡ層で検出された。南東隅の柱穴は検出されなかった。主軸方向は東西方向で，建物規模は２間×３間と考えられる。８個の柱穴からなる。最大桁行690cm，最大梁間510cm，１間間尺の平均値は桁行方向で234cm，梁間方向で225cmである。柱穴の平面形は，楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は62cm，検出面からの深さの平均値は57cmである。３個の柱穴（Ｐ２，Ｐ６，Ｐ８）に，柱を支える根石（礎石）が置かれている。柱穴の底には，柱を入れてまわりを固めたと考えられる固く締まった土も確認された。Ｐ３とＰ４の間には，長さ約150cm，幅40～50cm，検出面からの深さ約10cmの溝が検出されている。同様にＰ２・Ｐ７・Ｐ８に接して，長さ約50～70cm，深さ約10cmの浅い溝が検出されている。建物の基礎構造（布基礎）の一部と考えられる。

また，建物跡１と溝状遺構３は切り合い関係にあり，建物跡の柱穴が溝状遺構を切っているので，建物跡が溝状遺構よりも新しいと考えられる。

掘立柱建物跡２（第260図）

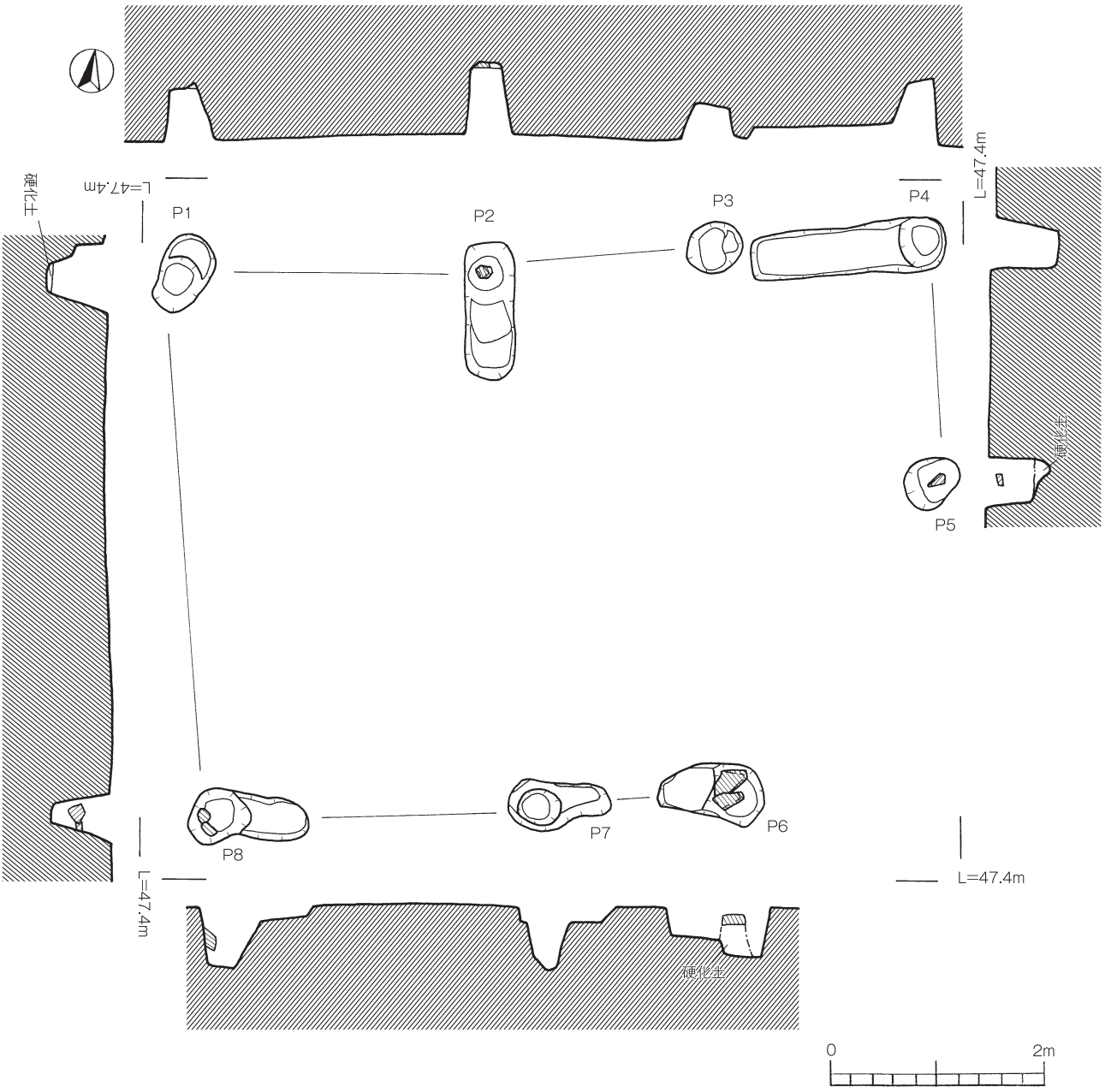
Ｇ-29区のⅡ層で検出された。西側は調査区外のため全体ははっきりしないが，主軸方向は東西方向で，建物規模は２間×３間と考えられる。検出された柱穴は，８個である。最大桁行710cm，最大梁間480cm，１間間尺の平均値は桁行方向で236cmである。柱穴の平面形は，楕円形または略方形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は75cm，検出面からの深さの平均値は41cmである。６個の柱穴（Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８）から，柱を支える根石（礎石）が出土している。柱穴の底からは，硬化した土も確認された。

掘立柱建物跡３と切り合い関係にある。建物跡２の柱穴が建物跡３の柱穴により切られているので，建物跡２がより古い時期のものと考えられる。

掘立柱建物跡３（第261図）

Ｇ-29区のⅡ層で検出された。西側は調査区外のため全体ははっきりしないが，主軸は東西方向で，建物規模は１間×４間以上と考えられる。検出された柱穴は，８個である。検出された部分の最大桁行515cm，最大梁間390cm，１間間尺の平均値は桁行方向で171cmである。柱穴の平面形は，円形または楕円形を呈する。柱穴の上面長径の平均値は56cm，検出面からの深さの平均値は40cmである。

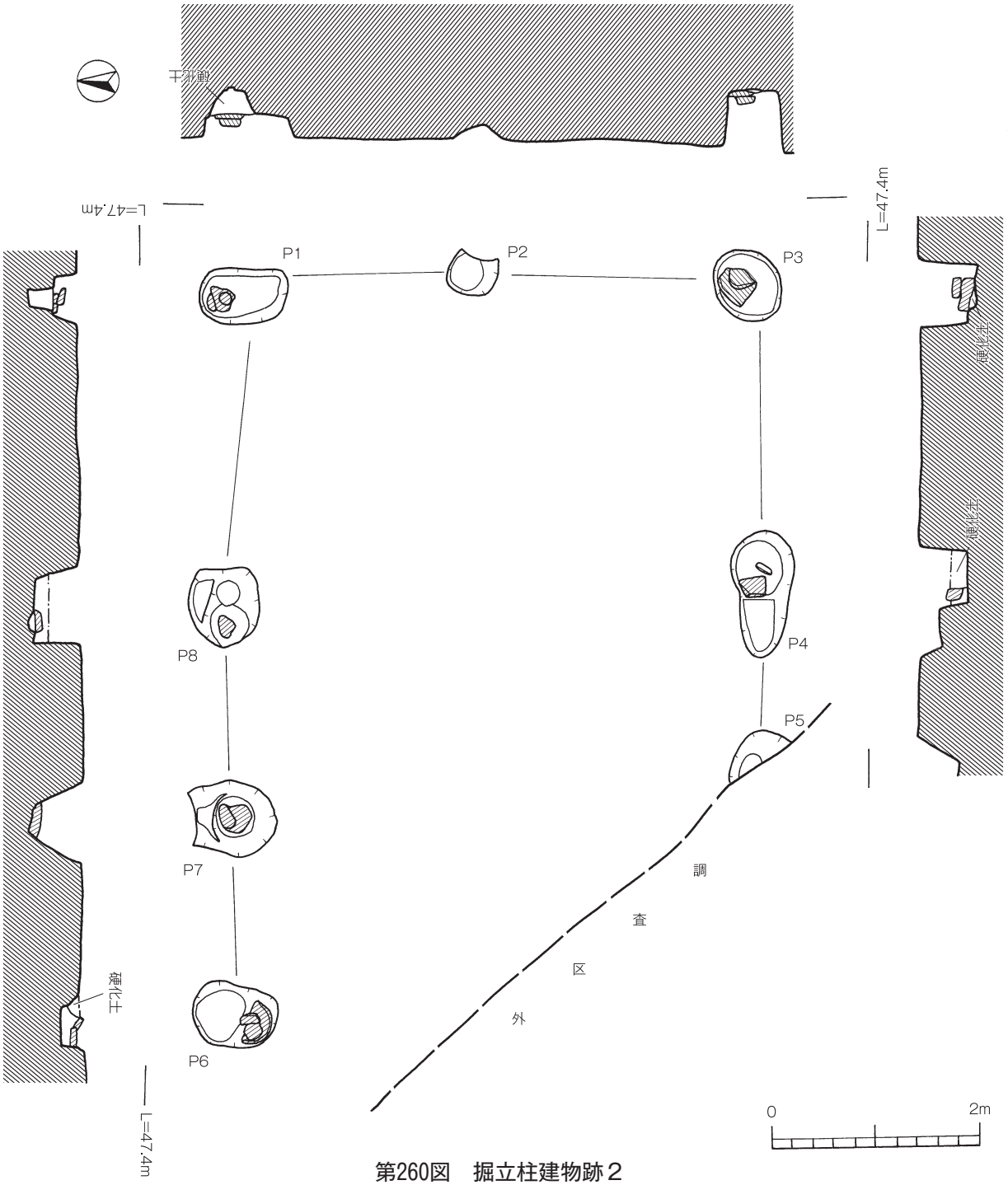
掘立柱建物跡２と切り合い関係にある。建物跡３の柱穴が建物跡２の柱穴を切っているので，建物跡３がより新しい時期のものと考えられる。



第259図　掘立柱建物跡１

第85表　近世掘立柱建物跡１計測表　　（　）は推定

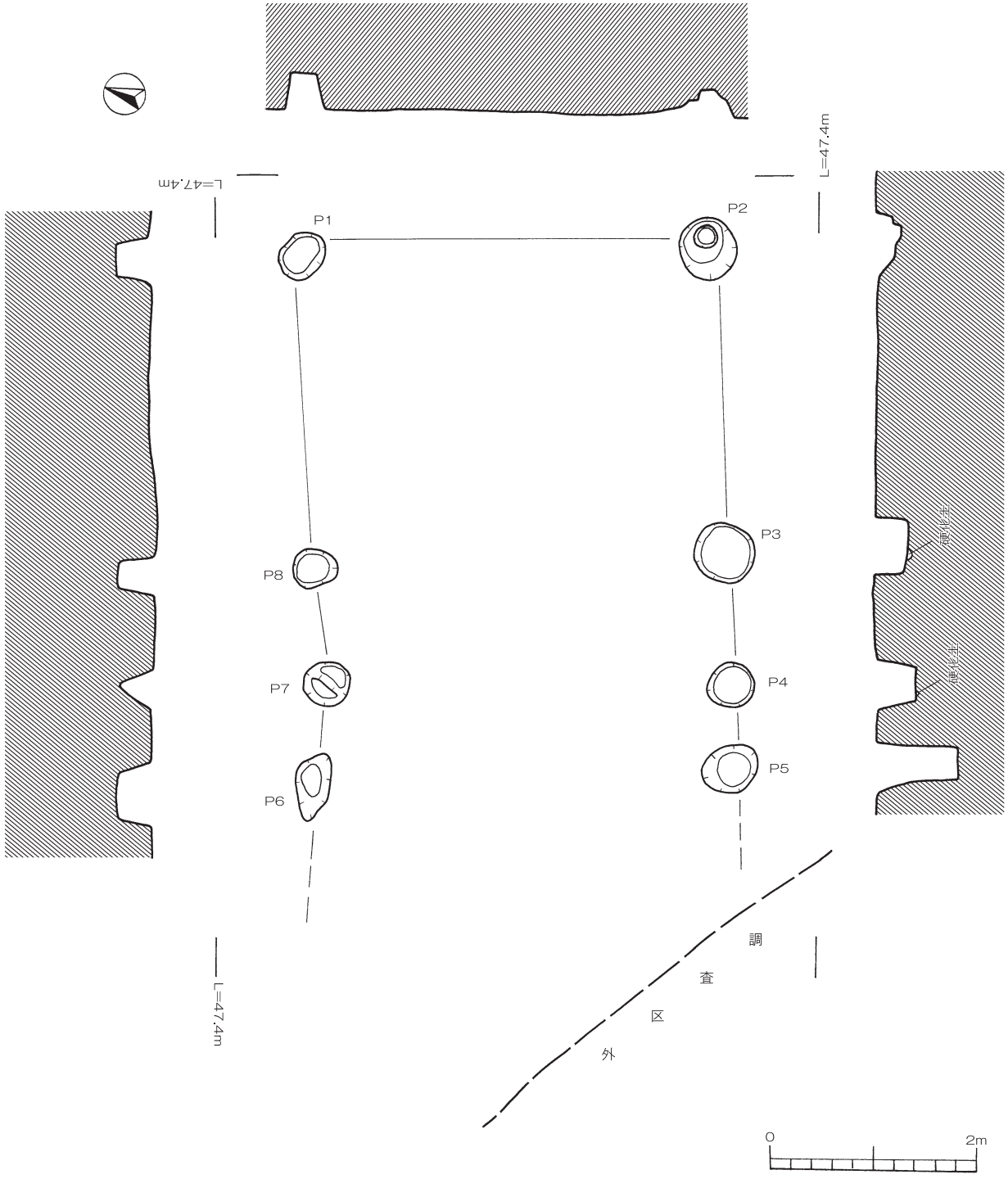
主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P1 － P2	280			P4 － P5	225	1	56	80	45
	P2 － P3	210	P1－P4	690	P8 － P1	510	2	69	(61)	50
	P3 － P4	200					3	36	54	45
東西	P6 － P7	180					4	62	(60)	52
N79° E	P7 － P8	300	P6－P8	480			5	70	55	37
							6	47	(61)	50
							7	61	(61)	50
							8	58	(61)	50
	平均	234		585		225		57	(62)	47



第260図　掘立柱建物跡２

第86表　近世掘立柱建物跡２計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P3 － P4	280	P3－P5	470	P1 － P2	210	1	48	87	55
	P4 － P5	190			P2 － P3	270	2	15	50	40
	P6 － P7	200					3	55	75	65
東西	P7 － P8	210	P6－P1	710			4	50	(73)	65
N85° E	P8 － P1	300					5	40		(65)
							6	25	85	65
							7	50	80	74
							8	45	75	71
	平均	(236)		590		240		41	(75)	63



第261図　掘立柱建物跡３

第87表　近世掘立柱建物跡３計測表　　（　）は推定

主軸	桁行方向	柱間(cm)	桁行方向	柱間(cm)	梁行方向	柱間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
	P2 － P3	310			P1 － P2	390	1	37	53	40
	P3 － P4	130	P2－P5	515			2	27	61	55
	P4 － P5	75					3	35	61	61
東西	P6 － P7	95					4	37	48	45
N69° E	P7 － P8	110	P6－P8	510			5	81	60	45
	P8 － P1	305					6	35	70	35
							7	34	45	45
							8	37	47	40
	平均	(171)		(513)		390		40	56	46

⑵ 溝状遺構（第262～264図）

５条検出された。その中で，４条はＥ～Ｇ-27～30区で検出され，掘立柱建物跡や土坑など近世の遺構が集中している箇所である。

溝状遺構１（第262図）

Ｅ・Ｆ-27～29区のⅡ層で検出された。検出された部分は，長さ約24m，幅約60㎝～１ｍである。検出面からの深さは約20㎝と浅く，南北方向に延びている。溝状遺構Ａが道Ｂを切っており，溝の方が新しい時期のものと考えられる。底面には，はっきりとした硬化面は確認されなかったが，平坦であることから道跡の可能性も考えられる。

溝状遺構２（第263図）

Ｆ・Ｇ-30区のⅡ層で検出された。西側は調査区外のため全体の大きさは不明だが，検出された部分は長さ約9.5m，幅約40～50㎝である。検出面からの深さは約10～25㎝と浅く，東西方向に延びている。底面はほぼ平坦で，はっきりとした硬化面は確認されなかった。

溝状遺構３（第263図）

Ｆ・Ｇ-27・28区のⅡ層で検出された。西側は調査区外のため全体の大きさは不明だが，検出された部分の長さは約10.5m，幅約50～70㎝，検出面からの深さは約10㎝と浅く，東西方向に延びている。底面は，ほぼ平坦ではっきりとした硬化面は確認されなかった。

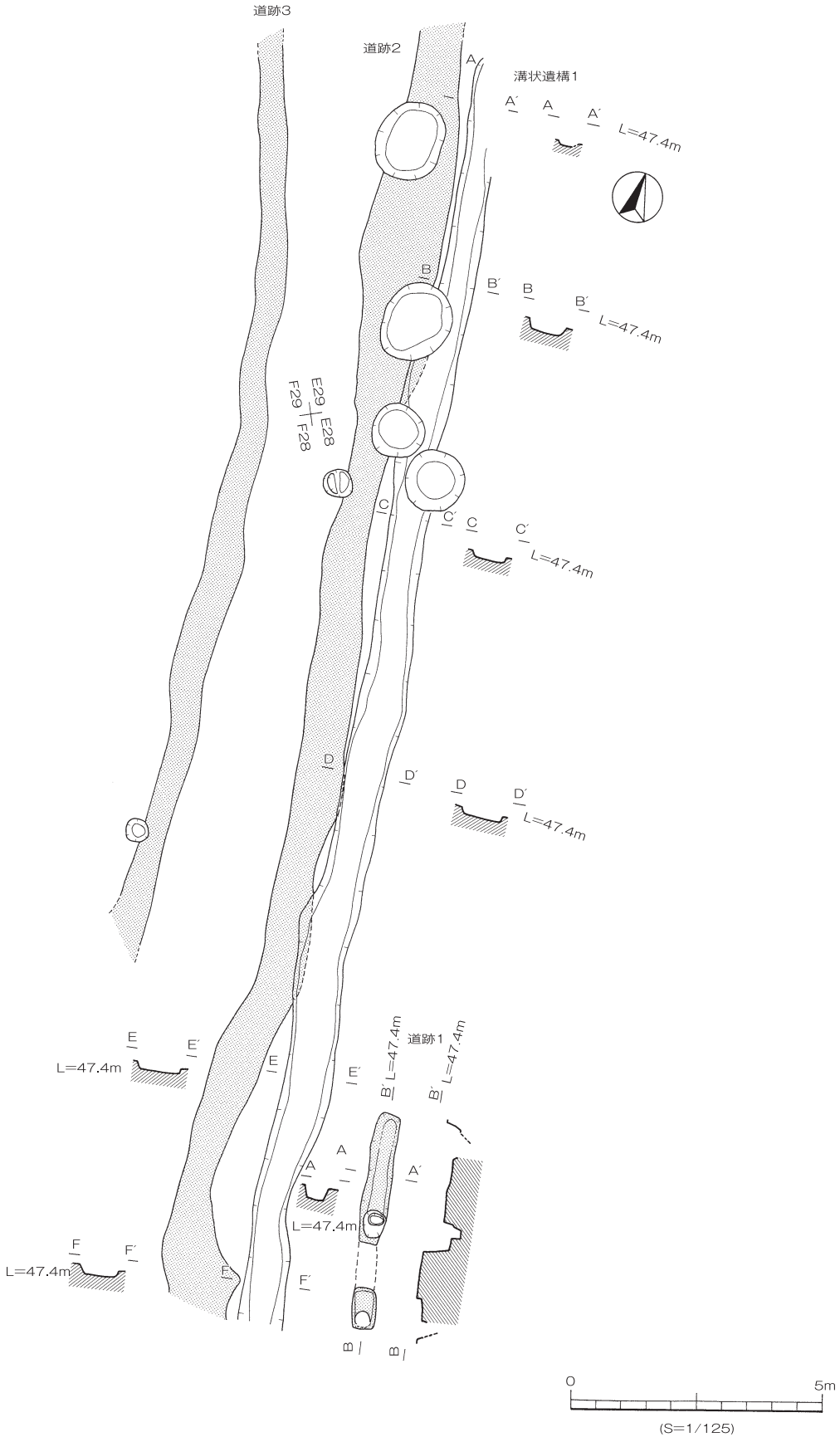
近世の掘立柱建物跡１と切り合い関係にある。溝状遺構が，建物跡の柱穴によって切られているので，溝状遺構のほうがより古い時期のものと考えられる。

溝状遺構４（第263図）

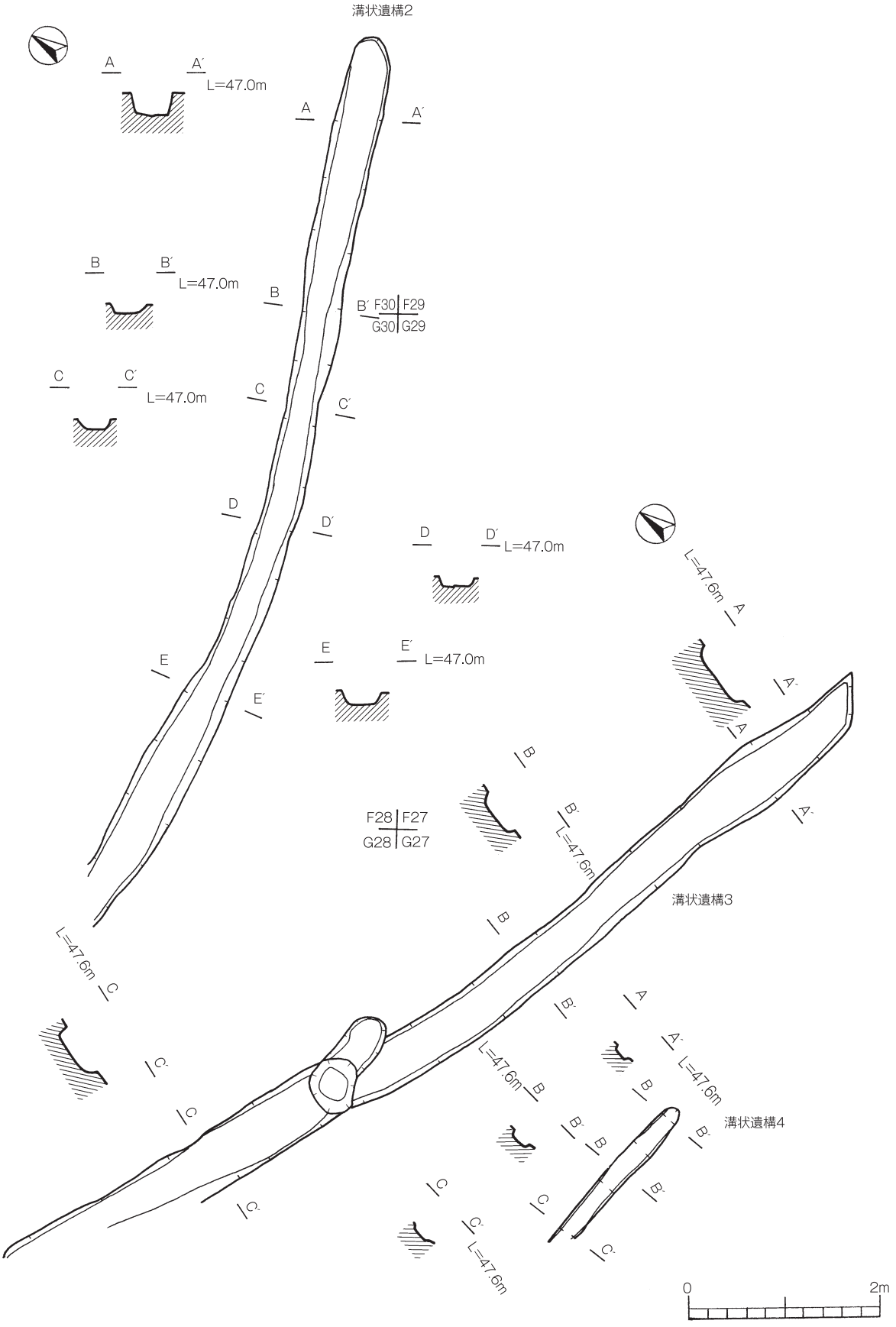
Ｇ-27区のⅡ層で検出された。西側は調査区外のため全体の大きさは不明だが，検出された部分は長さ約２ｍ，幅約20㎝である。検出面からの深さは約５㎝と浅く，東西方向に延びている。底面は，ほぼ平坦で，はっきりとした硬化面は確認されなかった。

溝状遺構５（第264図）

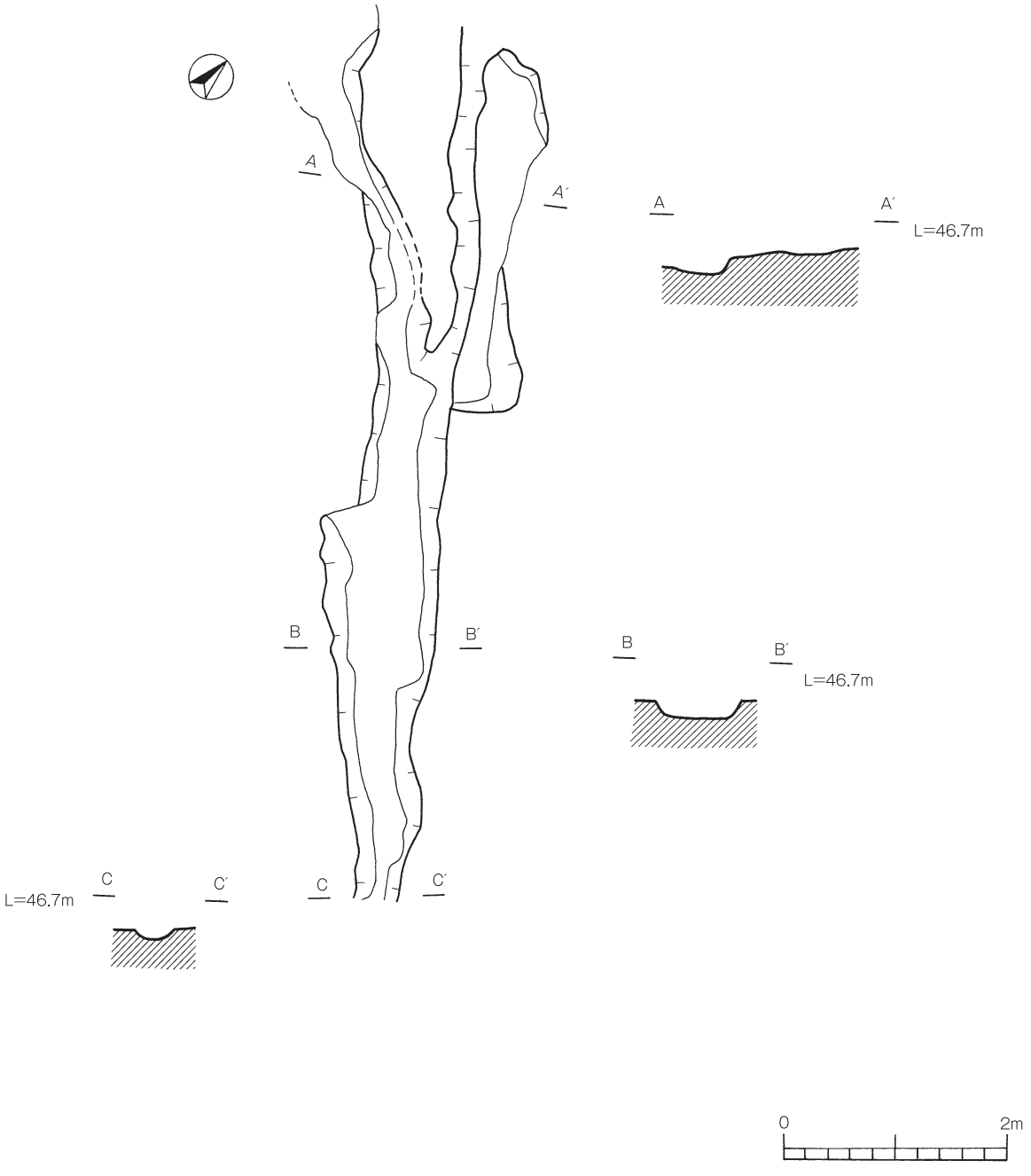
Ｄ・Ｅ-30・31区のⅡ層で検出された。橋脚部分の調査のため，北側と南側部分は不明だが，検出された部分は長さ約８ｍ，幅約50～130㎝である。検出面からの深さは，約10～15㎝と浅く，ほぼ南北方向に延びている。検出された部分の北側は，２つに分かれている。底面は，平坦の箇所，丸みを帯びた箇所など一様ではない。はっきりとした硬化面は確認されなかった。



第262図　溝状遺構１・道跡１～３



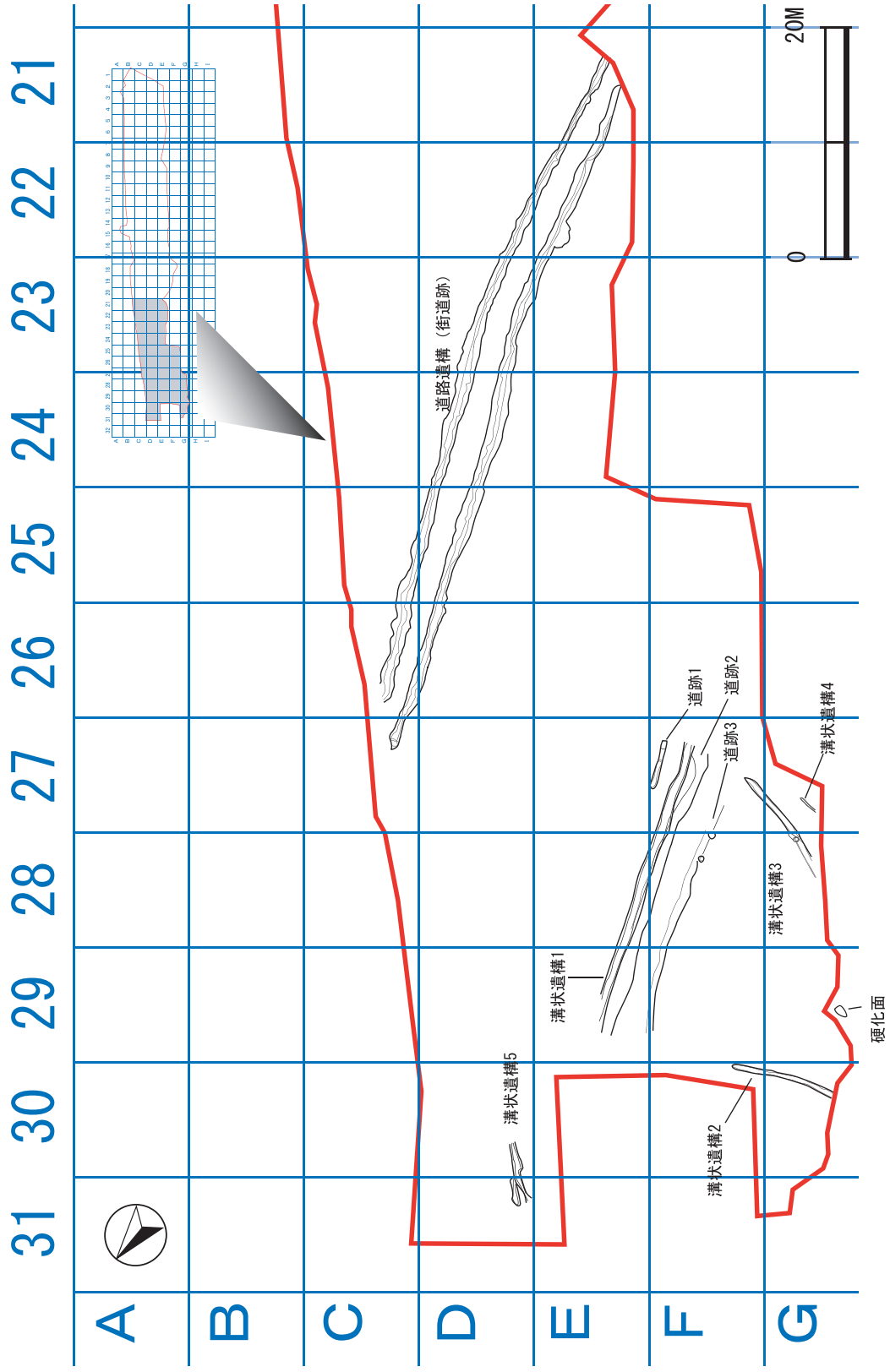
第263図　溝状遺構２～４



第264図　溝状遺構５

⑶　道路遺構（街道跡）・道跡・硬化面（第262・266・268図）

道路遺構と道跡が３条検出された。道跡からは出土遺物がなかったが，層位や埋土状況から判断して近世の時期のものと考えられる。



第265図　道路遺構・道跡・溝状遺構配置図

道路遺構（街道跡）（第266図）

D・E-22～27区のⅡ層で検出された。中世の道路状遺構からは約７ｍ東側で，ほぼ並行して検出された。ほぼ南北方向に直線的に延び，検出された部分は，長さ61.5m，幅3.5～5.4mである。Ⅱ層の黒色土を除去すると当時の路面と考えられる幅1.6～2.5mの硬化面と両側に溝状遺構が検出された。検出された部分の南端は，調査区の中では標高もやや低く，はっきりとした硬化面は確認されず，側溝の深さも浅い。溝状遺構の幅は80～160cm，深さは20～70cmである。溝状遺構の埋土は茶褐色土でしまりはなく柔らかい。Ⅳ層まで掘り込まれ，底面が硬化した状況はみられなかった。側溝としての役割を果たしていたと考えられる。また，ピットの底面から小ピットが検出されている。

溝状遺構（側溝）の埋土中からは，19世紀中ごろの薩摩焼が出土している。遺物からは，道路の建設と廃棄の時期を特定することは難しいが，19世紀中頃には遺構が埋没し，その時期に道路としての機能が停止したと考えられる。

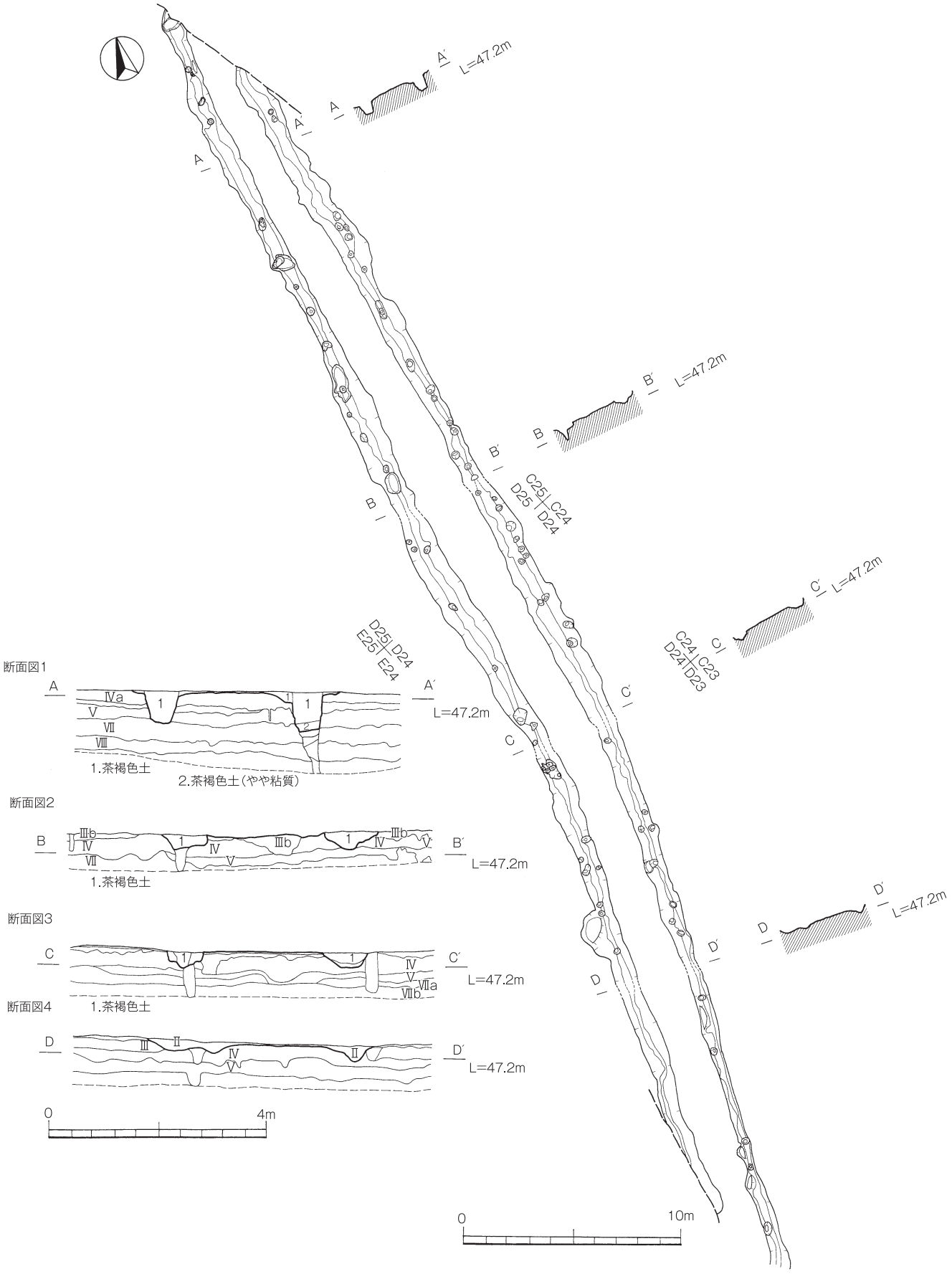
発掘調査時に４か所（第266図のＡ～Ｄ）で東西方向にトレンチを設定し，側溝の断面や路面の検出状況を詳しく調査した。以下に調査成果を詳述する。

【Ａ地点】
・路面の幅－170cm
・側溝の幅　（東側）　上面－110cm　下面－50cm　（西側）上面－60cm　下面－35cm
・側溝の深さ（検出面から）　（東側）　55cm　（西側）　60cm
・側溝の断面形　（東側）　台形　（西側）台形

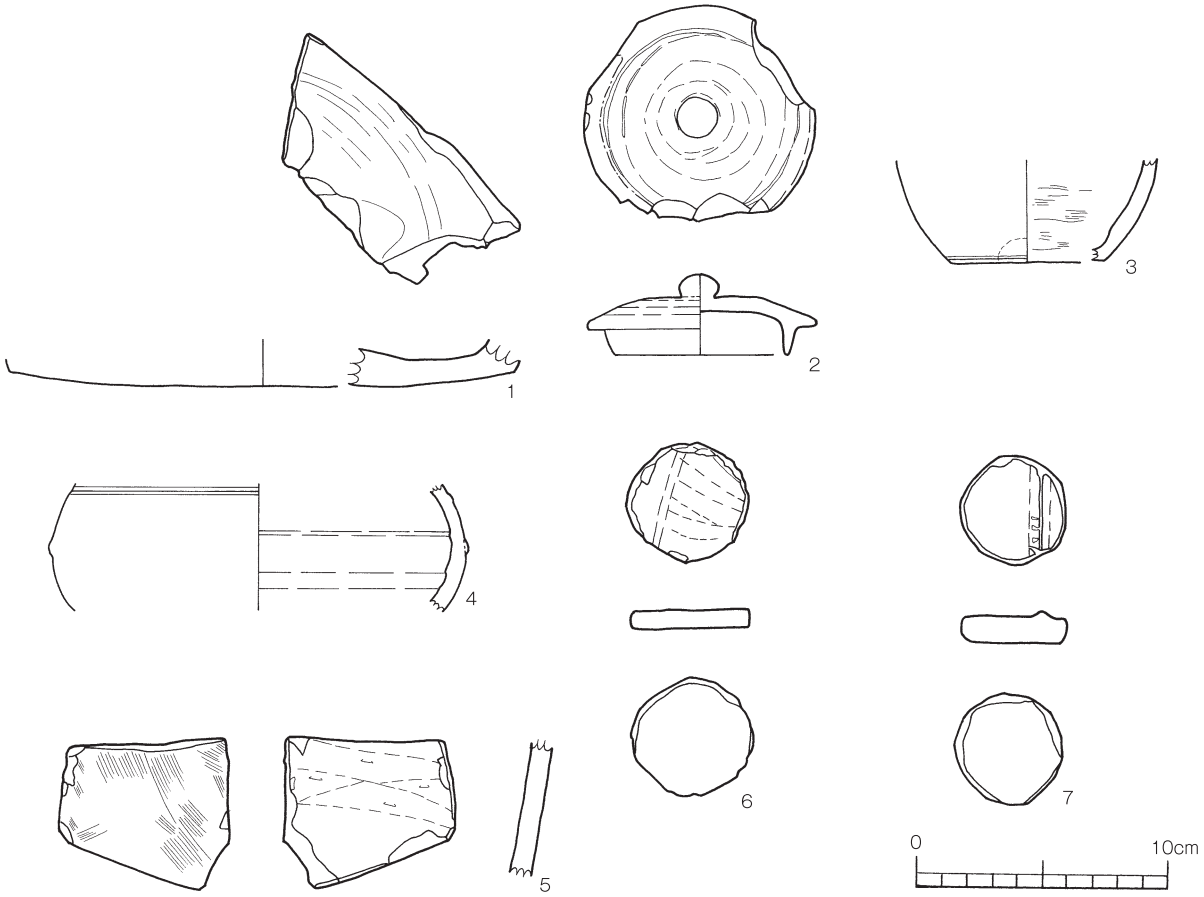
【Ｂ地点】
・路面の幅－215cm
・側溝の幅　（東側）　上面－100cm　下面－20cm　（西側）上面－85cm　下面－12cm
・側溝の深さ（検出面から）　（東側）　34cm　（西側）　67cm
・側溝の断面形　（東側）ゆるやかなＵ字形　（西側）Ｖ字形

【Ｃ地点】
・路面の幅－220cm
・側溝の幅　（東側）　上面－80cm　下面－30cm　（西側）上面－66cm　下面－25cm
・側溝の深さ（検出面から）（東側）　25cm　（西側）　30cm
・側溝の断面形　（東側）台形　（西側）ゆるやかなＵ字形

【Ｄ地点】
・路面の幅－190cm
・側溝の幅　（東側）　上面－80cm　下面－20cm　（西側）　上面－120cm　下面－70cm
・側溝の深さ（検出面から）（東側）　30cm　（西側）　20cm
・側溝の断面形　（東側）ゆるやかなＵ字形　（西側）　浅い皿状



第266図　道路遺構（街道跡）



第267図　道路遺構出土遺物

出土遺物（第267図，１～７）

側溝（溝状遺構）の埋土中から薩摩焼が出土しており，７点を図化した。いずれも，苗代川系の薩摩焼である。

１は，甕の底部である。内外面とも鉄釉がかかる。19世紀代のものと考えられる。２は，土瓶の蓋である。頂部に丸形のつまみを持つ。口縁部外面に施釉される。３は，徳利の胴部～底部である。外面に鉄釉がかかる。４は，土瓶の胴部である。器形は平形である。19世紀代のものと考えられる。５は，甕または壺の胴部である。外面に鉄釉がかかる。６，７は胴部片を転用した円盤状加工品（メンコ）である。

道跡１（第262図）

Ｆ-27区のⅡ層で検出された。ほぼ南北方向に延び，検出された部分は長さ4.3m，幅50cm，検出面からの深さ約20cmの溝状を呈する。底面には硬化面が確認されたので，道跡と判断した。

道跡２（第262図）

Ｅ・Ｆ-27～29区のⅡ層で検出された。北側と南側は調査区外のため全体の大きさは不明だが，検出された部分は長さ26m，幅60～150cmで南北方向に延びている。黒褐色土の硬化面が確認された。

近世の土坑や溝状遺構１と切り合い関係にある。土坑，溝が道跡を切っているので，これら３つの遺構の新旧関係は土坑，溝，道跡の順に古くなる。

道跡３（第262図）

Ｆ-28・29区のⅡ層で検出された。ほぼ南北方向に延び，検出された部分は長さ約18ｍ，幅約50～70㎝である。硬く締まった硬化面が確認された。

硬化面（第268図）

Ｇ-29・30区のⅡ層で検出された。Ⅱ層の黒色土を除去すると，硬く締まった黒色土と茶褐色土の混ざり土が確認された。西側部分は，調査区外のため全体的な大きさは不明だが，検出された部分は，長さ約５ｍ，幅30～110㎝で，北西から南東方向に延びている。

⑷　土坑・ピット群（第270～275図）

調査区の西側Ｅ～Ｈ-26～30区を中心に多く検出された。埋土中から近世の時期と判断される遺物が出土した土坑が29基，ピットが17個ある。ピットについては，全体の遺構配置図のみを示し，個別の遺構図は掲載しなかった。出土遺物は，この項で扱う。

土坑１（第270図）

Ｂ-19区のⅡ層で検出された。長径300㎝，短径95㎝の不定形を呈し，検出面からの深さは約30㎝である。南西側に長径約100㎝，短径40㎝のピットがある。底面は平坦で，直に立ち上がる。

土坑２（第270図）

Ｄ-22区のⅡ層で検出された。長径120㎝，短径110㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約15㎝で浅い土坑である。底面は丸みを帯び，南側に小ピットがある。

土坑３（第270図）

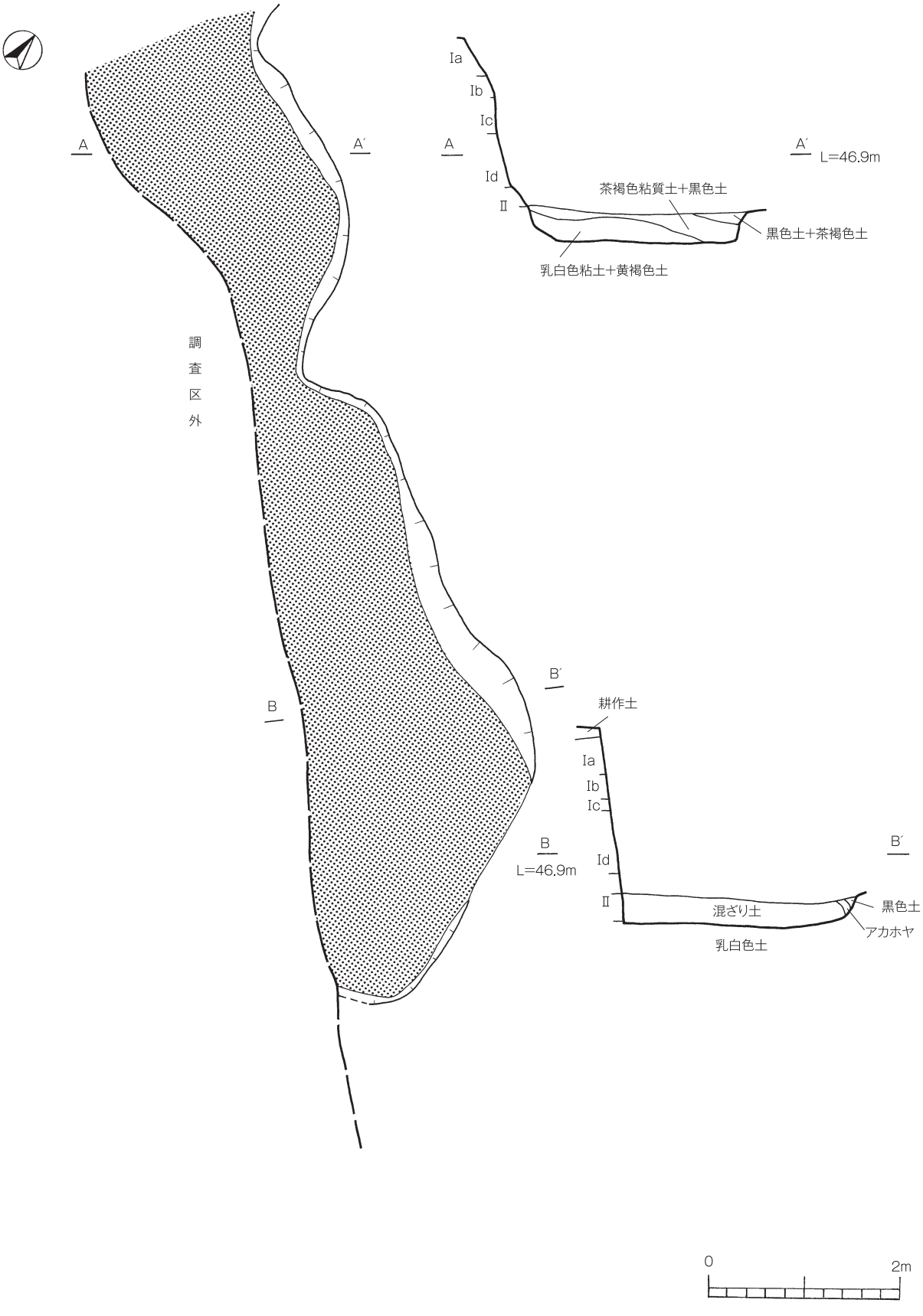
Ｅ-26区のⅡ層で検出された。南東側が調査区外のため，全体の形状は不明だが検出された部分は長径130㎝，短径100㎝で，検出面からの深さは20㎝である。底面はほぼ平坦で，直に立ち上がる。

土坑４（第270図）

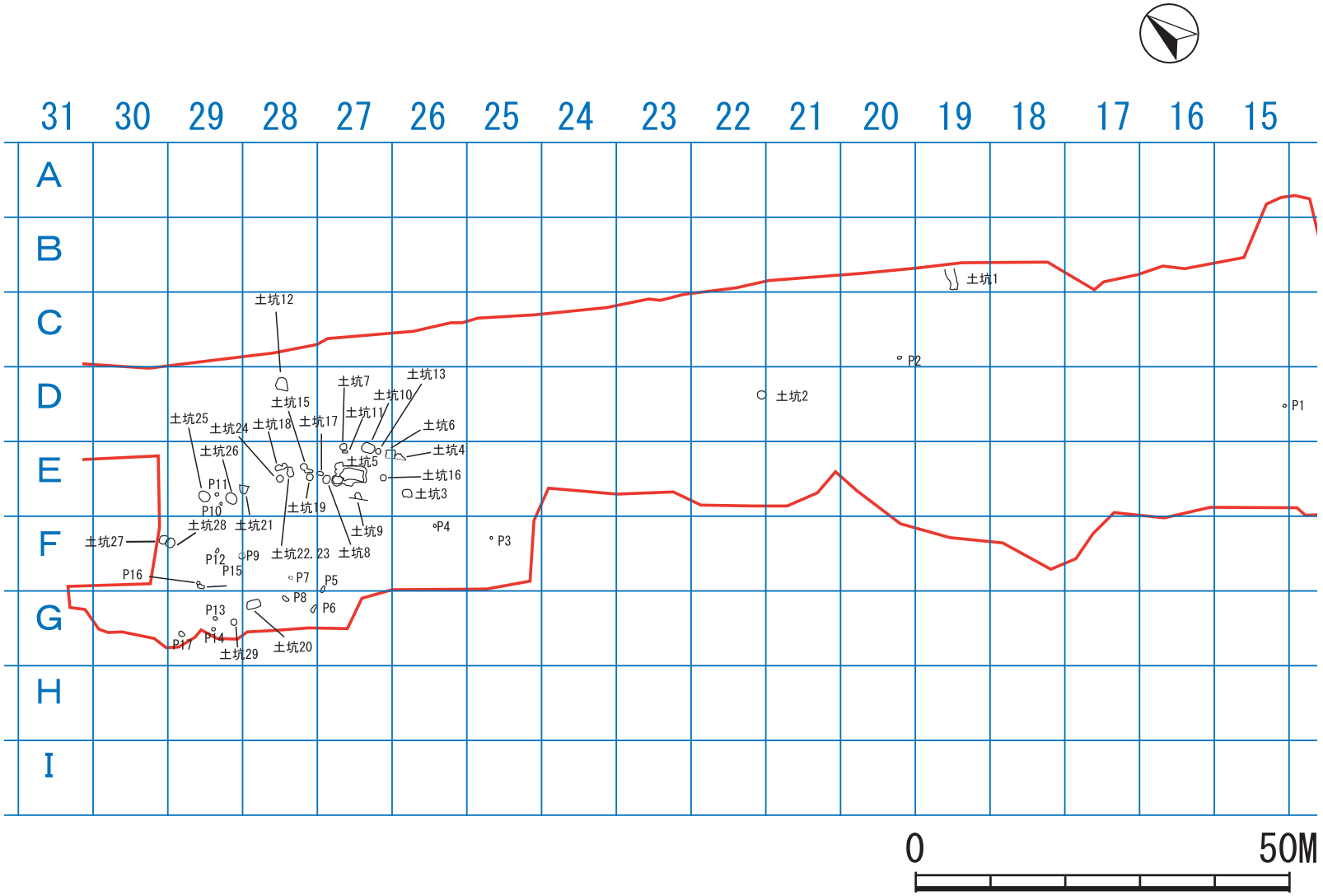
Ｅ-26区のⅡ層で検出された。南側は調査区外のため，全体の形状は不明である。検出された部分は，長径146㎝，短径80㎝である。検出面からの深さは18㎝で，５つの小ピットがある。

土坑５（第271図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径460㎝，短径270㎝の不定形を呈する大型土坑である。検出面からの深さは77㎝である。底面はほぼ平坦で，西側は約10㎝の浅い段がある。


A
A´
Ia
Ib
Ic
Id
Ⅱ
茶褐色粘質土+黒色土
黒色土+茶褐色土
乳白色粘土+黄褐色土
L=46.9m
調
査
区
外
B
B´
耕作土
混ざり土
黒色土
アカホヤ
乳白色土
L=46.9m
0
2m

第268図　硬化面



第269図　近世の土坑・ピット群配置図

土坑６（第272図）

Ｅ-26･27区のⅡ層で検出された。長径116cm，短径108cmの略方形を呈し，検出面からの深さは16cmである。底面はほぼ平坦で，５個の小ピットがある。

土坑７（第272図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径90cm，短径80cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは18cmである。底面は平坦で，２個の小ピットがある。

土坑８（第272図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径112cm，短径98cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは31cmである。平面は平坦で，ゆるやかに立ち上がる。底面に小ピットが２個ある。

土坑９（第272図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。北東側が削平され，全体の形状は不明である。検出された部分は，長径80cm，短径80cm，検出面からの深さは50cmである。底面はゆるやかにくぼみ，北側と南西側に段を持ち立ち上がる。

土坑10（第272図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径177cm，短径136cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは23cmである。底面は丸みを帯び，ゆるやかに立ち上がる。底面に６個の小ピットがある。

土坑11（第272図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径72cm，短径28cmの略楕円形を呈し，検出面からの深さは20cmである。底面は平坦ではなく，北西側から南東側へゆるやかに立ち上がる。

土坑12（第273図）

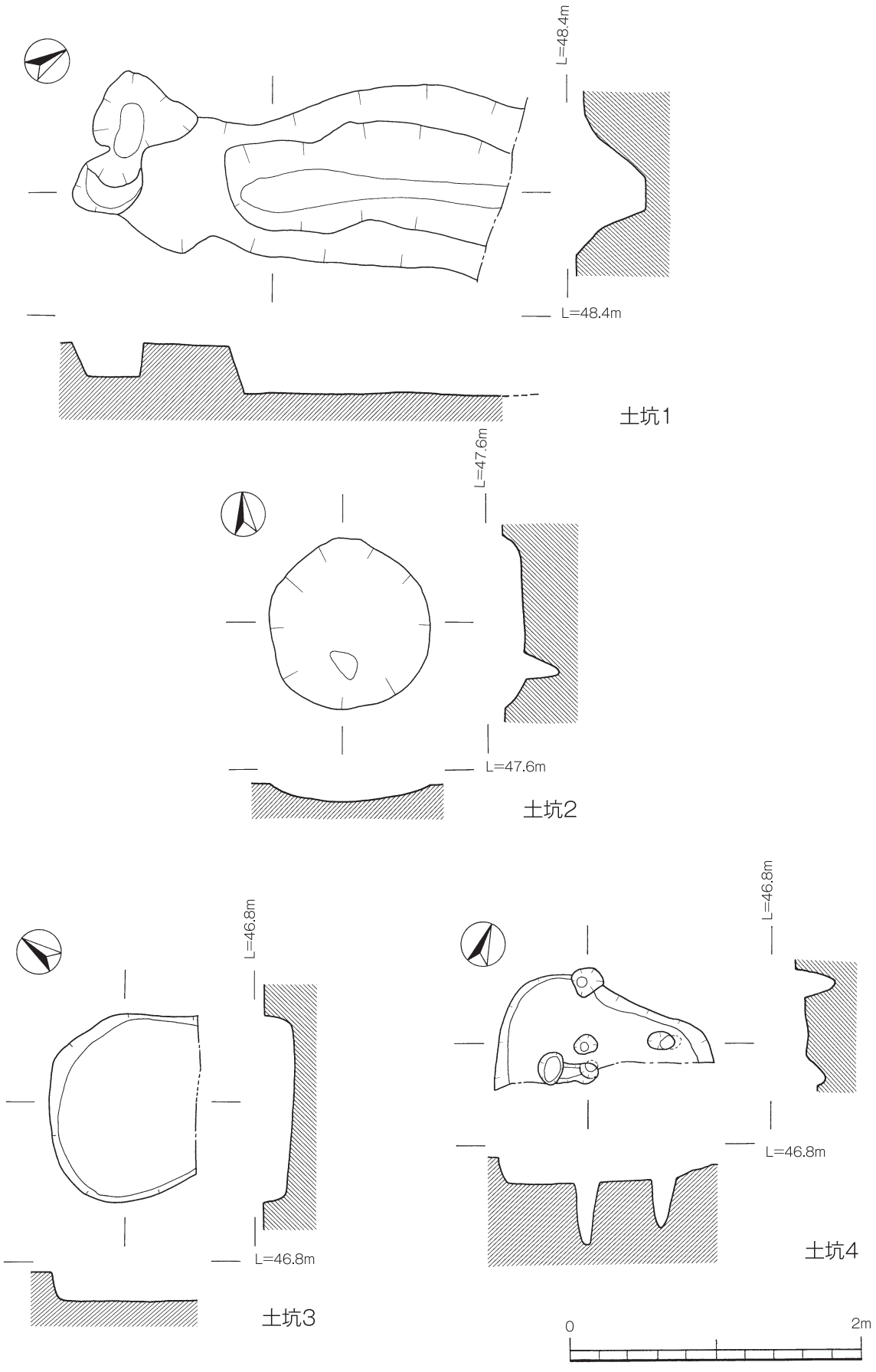
Ｄ-28区のⅡ層で検出された。西側は削平され，全体の形状は不明である。検出された部分は，長径162cm，短径157cmである。検出面からの深さは48cmである。底面に深さ約80cmのピットがある。

土坑13（第273図）

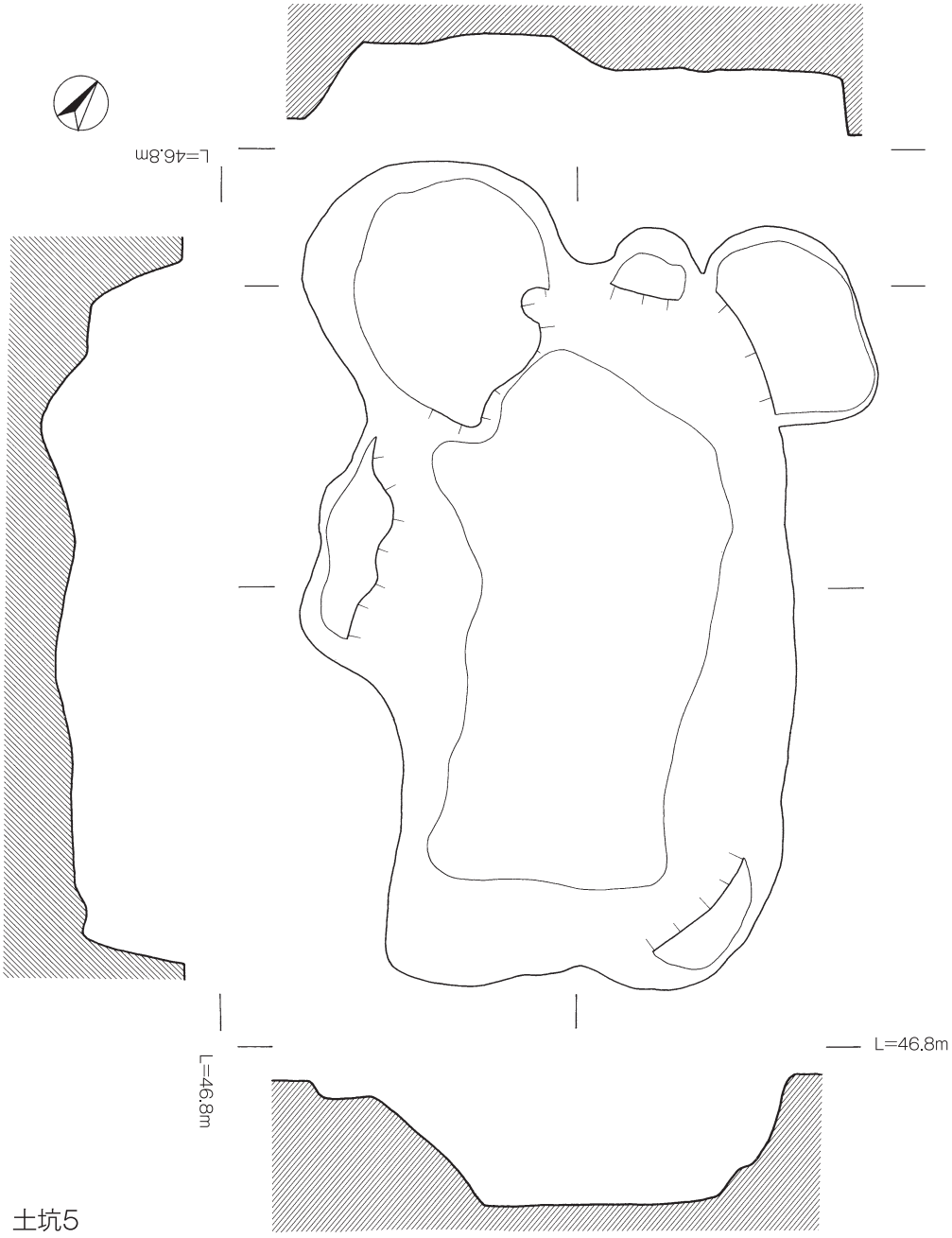
Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径72cm，短径71cmの略円形を呈し，検出面からの深さは12cmである。底面に深さ30～35cmの小ピットが２つある。

土坑14（第273図）

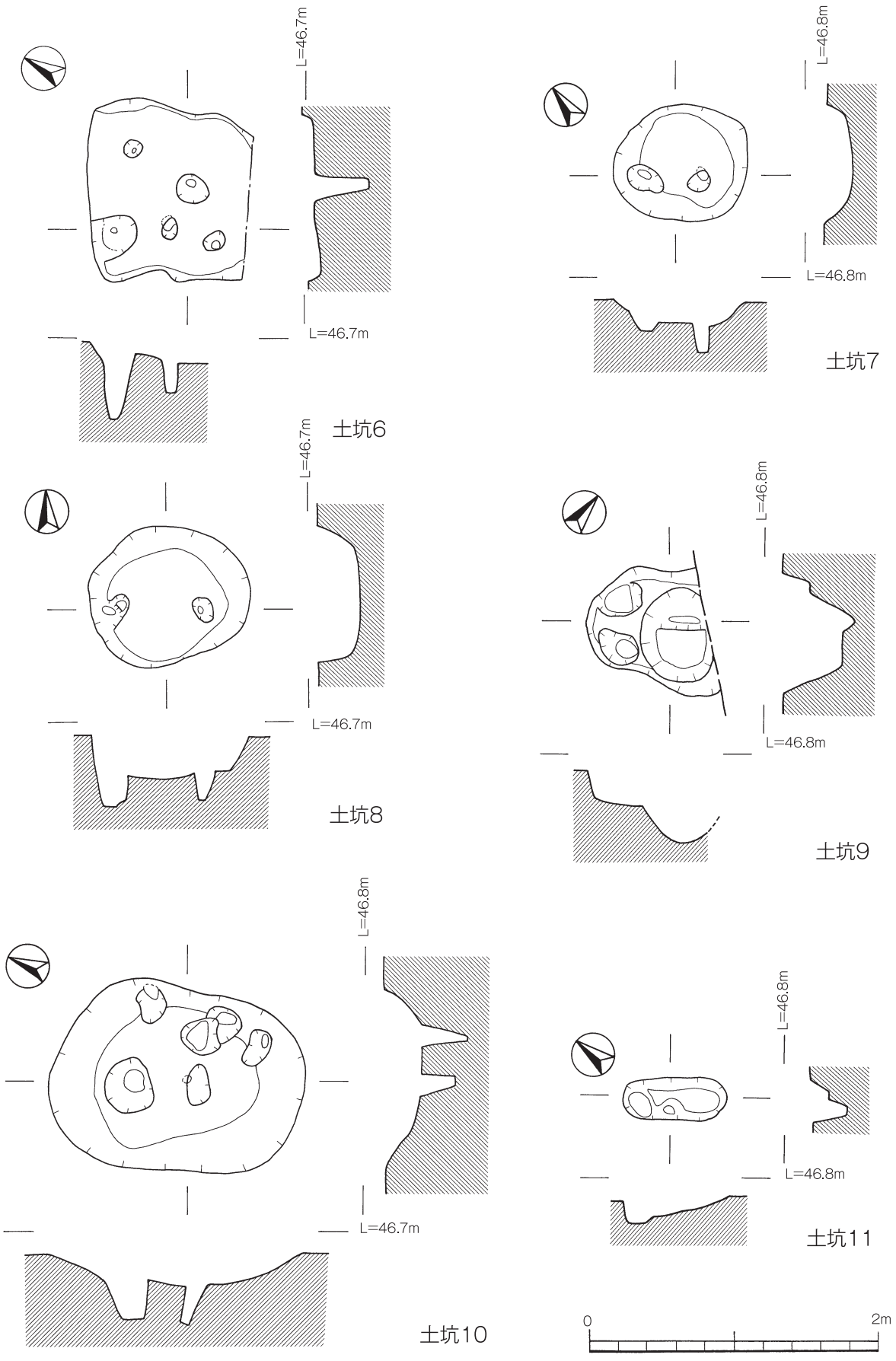
Ｅ-28区のⅡ層で検出された。長径112cm，短径54cmの不定形を呈し，検出面からの深さは68cmである。北東側が最も深く，南西側は２つの段があり立ち上がる。



第270図　近世の土坑１



第271図　近世の土坑２



第272図　近世の土坑３

土坑15（第273図）

Ｅ-28区のⅡ層で検出された。長径93cm，短径83cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは８cmと浅い。

土坑16（第273図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径81cm，短径78cmの円形を呈し，検出面からの深さは15cmである。底面はほぼ平坦で，西側に深さ20cmの小ピットが２個ある。

土坑17（第273図）

Ｅ-27区のⅡ層で検出された。長径91cm，短径48cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは31cmである。北側には，深さ約10cmの浅い段がある。

土坑18（第274図）

Ｅ-28区のⅡ層で検出された。長径160cm，短径64cmの不定形を呈し，検出面からの深さは約52cmである。底面はほぼ平坦で，２つの小さな土坑からなる。

土坑19（第274図）

Ｅ-28区のⅡ層で検出された。直径87cmの円形を呈し，検出面からの深さは10cmと浅い。底面はほぼ平坦で，ゆるやかに立ち上がる。

土坑20（第274図）

Ｇ-28区のⅡ層で検出された。長径189cm，短径112cmの隅丸方形を呈し，検出面からの深さ30cmである。底面は平坦で，ゆるやかに立ち上がる。

土坑21（第274図）

Ｅ-28区のⅡ層で検出された。東側部分は調査区外のため，全体の形状は不明だが，検出された部分は長径108cm，短径106cmで，検出面からの深さは15cmと浅い。底面は平坦で，直に立ち上がる。

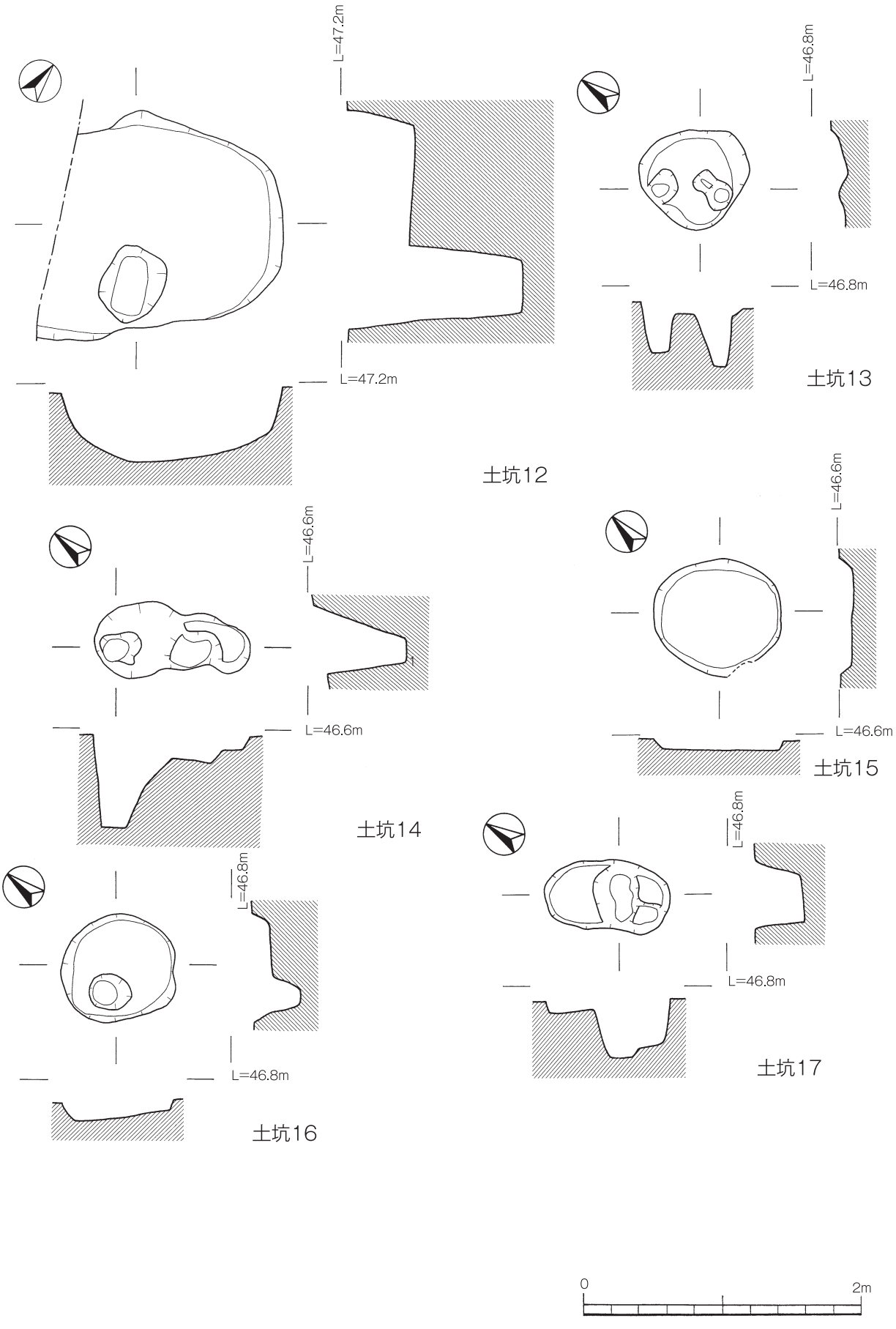
土坑22（第274図）

Ｅ-28区のⅡ層で検出された。直径約90cmの略円形を呈し，検出面からの深さは10cmと浅い。
底面はほぼ平坦で，ゆるやかに立ち上がる。

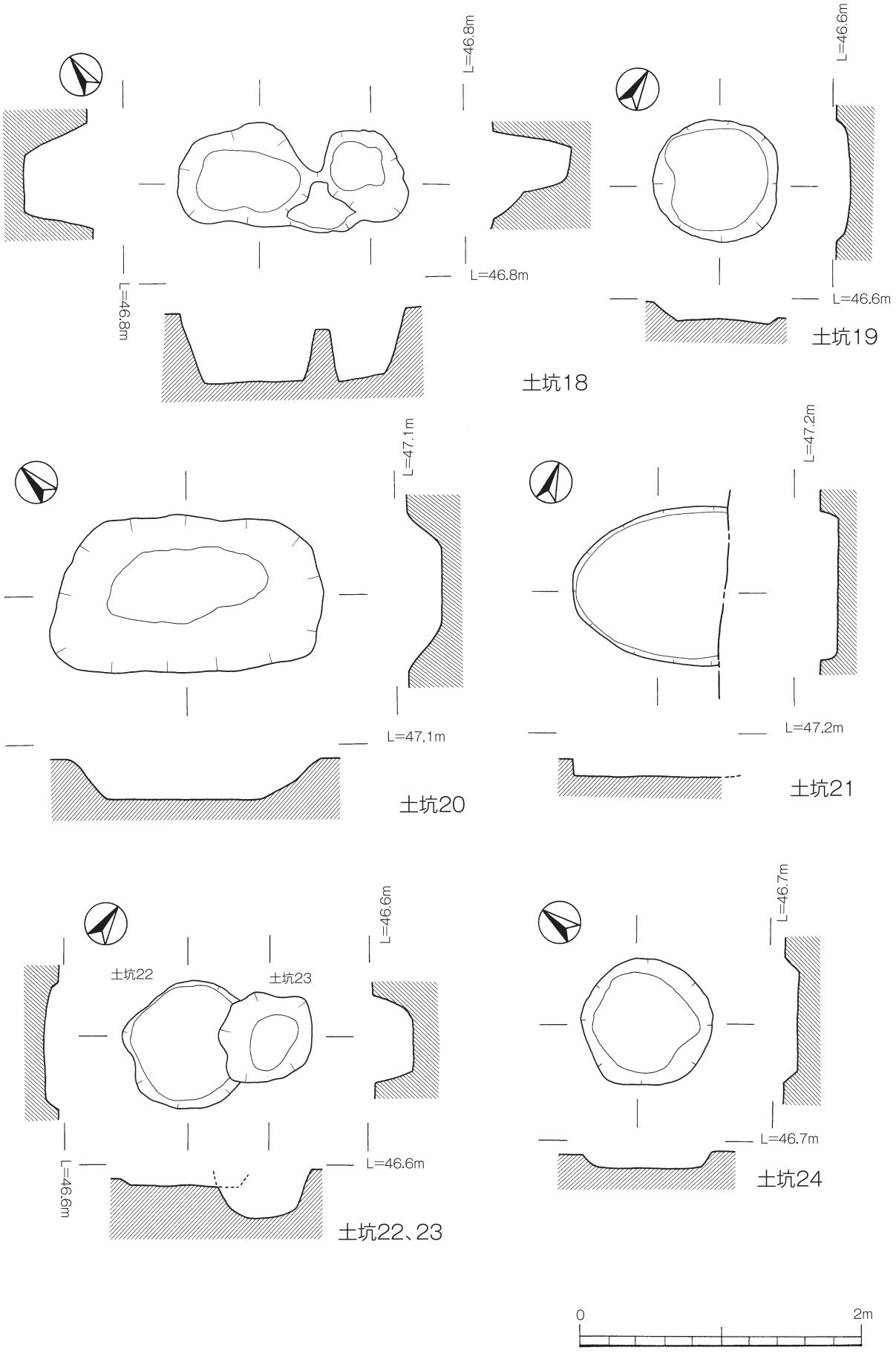
土坑23と切り合い関係にある。土坑22は土坑23に切られているので，より古い時期のものと考えられる。

土坑23（第274図）

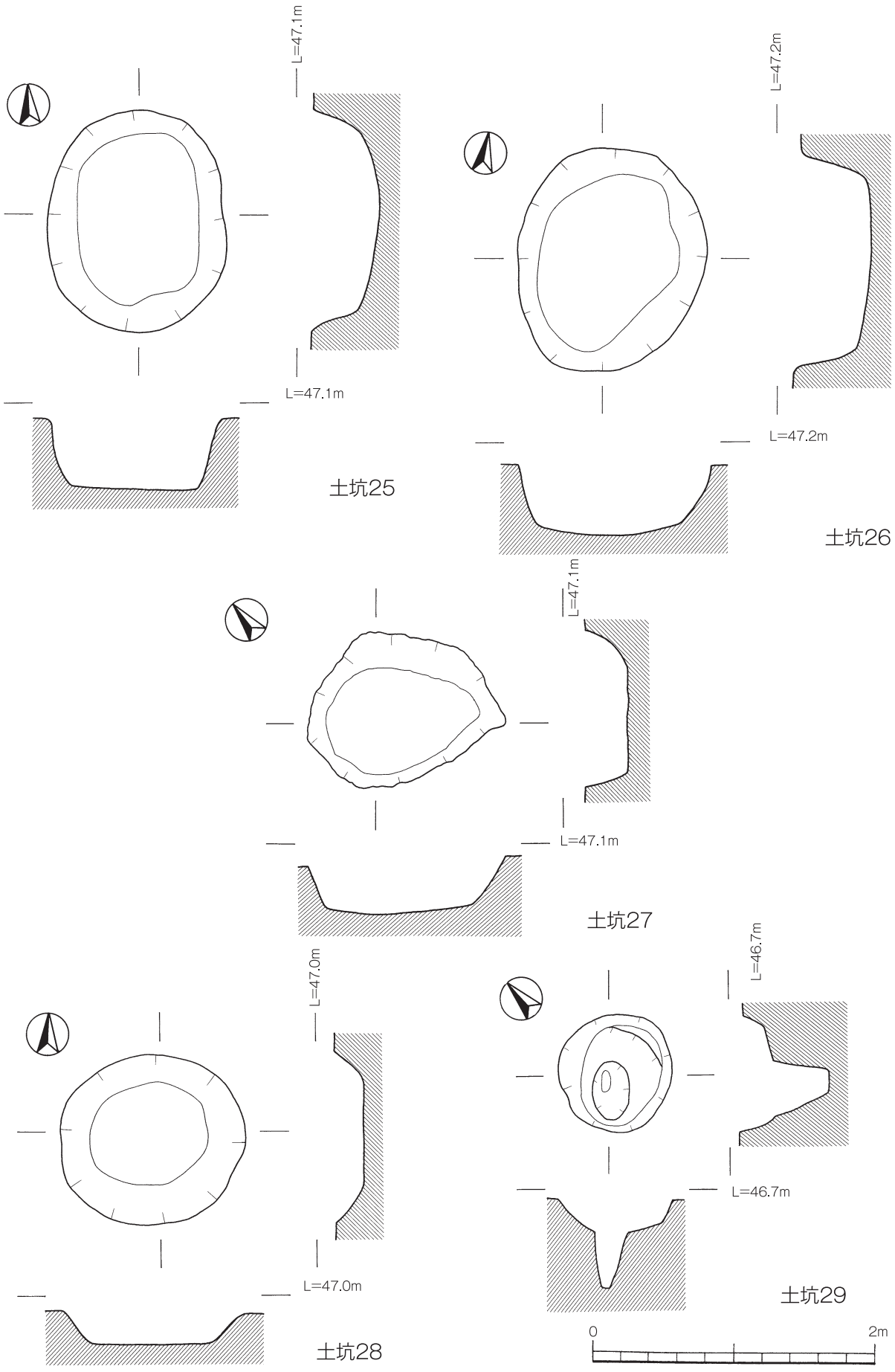
Ｅ-28区のⅡ層で検出された。長径67cm，短径60cmの不定形を呈し，検出面からの深さは35cmである。底面は丸みを帯びる。



第273図　近世の土坑４



第274図　近世の土坑５



第275図　近世の土坑６

土坑22と切り合い関係にある。土坑23が土坑22を切っているので，より新しい時期のものと考えられる。

土坑24（第274図）

Ｅ-28区のⅡ層で検出された。長径93cm，短径90cmの円形を呈し，検出面からの深さは11cmと浅い。底面はほぼ平坦で，ゆるやかに立ち上がる。

土坑25（第275図）

Ｅ-29区のⅡ層で検出された。長径158cm，短径124cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは48cmである。底面は，ほぼ平坦でゆるやかに立ち上がる。

土坑26（第275図）

Ｅ-29区のⅡ層で検出された。長径157cm，短径134cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは49cmである。底面はやや丸みを持ち，ゆるやかに立ち上がる。

土坑27（第275図）

Ｆ-29･30区のⅡ層で検出された。長径140cm，短径110cmの不定形を呈し，検出面からの深さは38cmである。底面はほぼ平坦で，ゆるやかに立ち上がる。

第88表　近世の土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	短径（cm）	長径（cm）	深さ（cm）	出土遺物番号	備考（旧遺構名）
270	土坑1	Ｂ － 19	95	300	30	―	土坑1
	土坑2	Ｄ － 22	110	120	15	8	土坑1
	土坑3	Ｅ － 26	100	130	20	―	土坑2
	土坑4	Ｅ － 26	80	146	18	―	土坑15
271	土坑5	Ｅ － 27	270	460	77	―	土坑3･4･5･6･7
272	土坑6	Ｅ － 26.27	108	116	16	―	土坑16
	土坑7	Ｅ － 27	80	90	18	―	土坑10
	土坑8	Ｅ － 27	98	112	31	―	土坑9
	土坑9	Ｅ － 27	80	80	50	―	土坑8
	土坑10	Ｅ － 27	136	177	23	―	土坑13
	土坑11	Ｅ － 27	28	72	20	―	土坑11
273	土坑12	Ｄ － 28	157	162	48	9，11	土坑4
	土坑13	Ｅ － 27	71	72	12	―	土坑17
	土坑14	Ｅ － 28	54	112	68	―	土坑19
	土坑15	Ｅ － 28	83	93	8	―	土坑18
	土坑16	Ｅ － 27	78	81	15	―	土坑14
	土坑17	Ｅ － 27	48	91	31	―	土坑38
274	土坑18	Ｅ － 28	64	160	52	―	土坑23･25
	土坑19	Ｅ － 28	87	87	10	―	土坑20
	土坑20	Ｇ － 28	112	189	30	―	土坑1
	土坑21	Ｅ － 28	106	108	15	―	土坑1
	土坑22	Ｅ － 28	90	90	10	―	土坑22
	土坑23	Ｅ － 28	60	67	35	―	土坑21
	土坑24	Ｅ － 28	90	93	11	―	土坑26
275	土坑25	Ｅ － 29	124	158	48	―	土坑2
	土坑26	Ｅ － 29	134	157	49	―	土坑1
	土坑27	Ｆ － 29･30	110	140	38	―	土坑2
	土坑28	Ｆ － 29	121	132	38	―	―
	土坑29	Ｇ － 29	72	72	62	10	土坑1

第276図　近世の土坑・ピット出土遺物

土坑28（第275図）

Ｆ-29区のⅡ層で検出された。長径132cm，短径121cmの不定形を呈し，検出面からの深さは38cmである。底面はほぼ平坦で，ゆるやかに立ち上がる。

土坑29（第275図）

Ｇ-29区のⅡ層で検出された。直径72cmの略円形を呈し，検出面からの深さは62cmである。東側に約20cmの浅い段があり，西側は直に落ち込んでいる。

土坑・ピット出土遺物（第276図，８～16）

８～11は，苗代川系の薩摩焼である。８は，土坑２の遺物で壺または甕の底部近くと思われる。

９・11は，土坑12の遺物で甕の底部と口縁部と思われる。全面に鉄釉がかかる。10は，土坑29の遺物で，器種は不明である。

12は，ピット８から出土した薩摩焼の鉢である。口唇部には貝目が残る。13は，ピット５から出土した土師質の香炉である。復元口径は，12.2cmで，口唇部付近には煤が付着している。14は，ピット９から出土した京焼風陶器である。淡黄色の釉がかかり，高台部分は露胎する。外面には，呉須で文様が描かれる。15は，ピット15から出土した染付碗と思われる。16は，ピット２から出土した薩摩焼である。壺の口縁部と考えられ，復元口径は11cmである。

⑸ 鍛冶炉跡・竈跡（第277図）

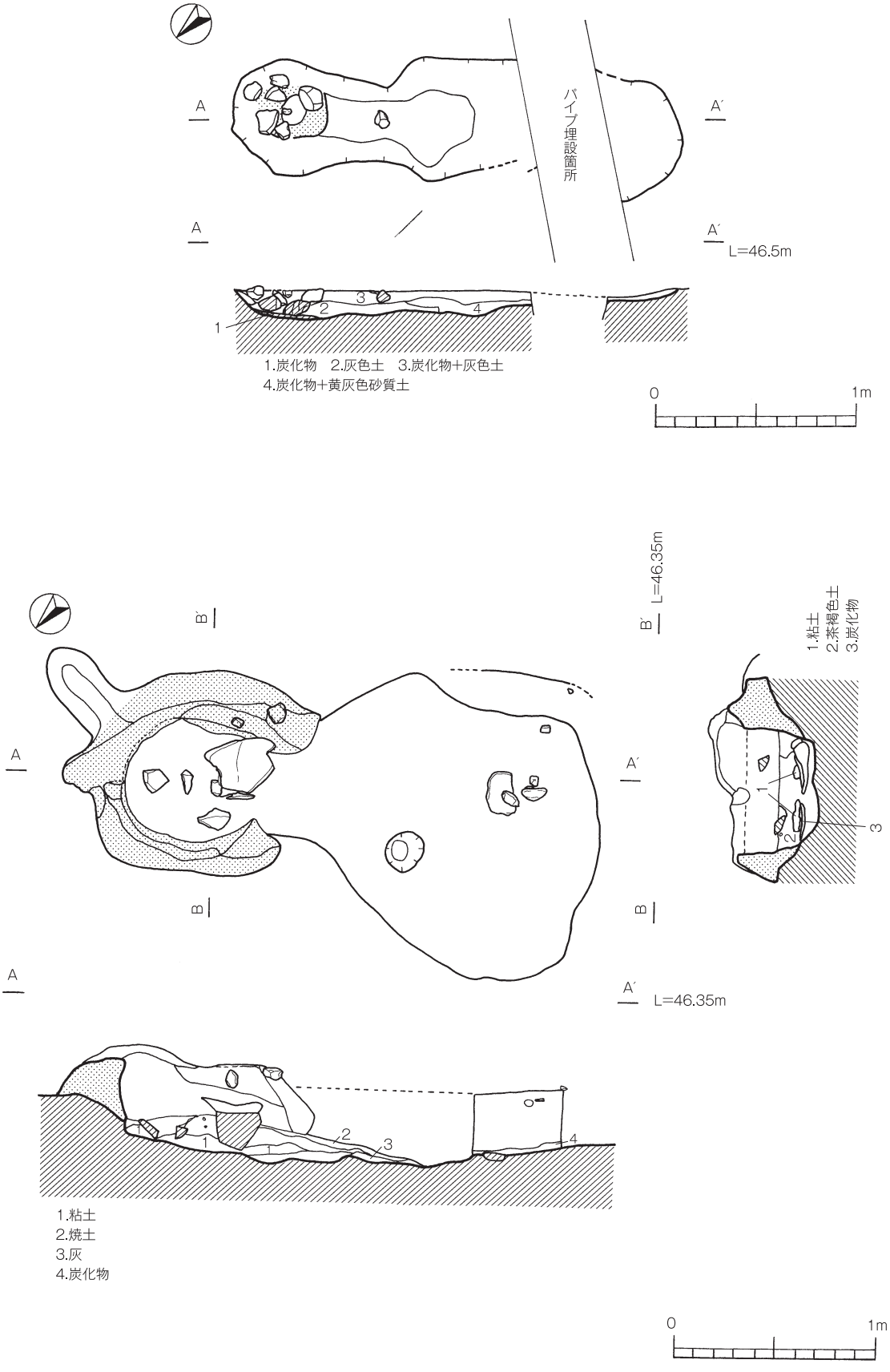
高架橋の橋桁部分（D-30区）で検出された。周辺には，溝状遺構など近世の遺構が集中している。

鍛冶炉跡（第277図）

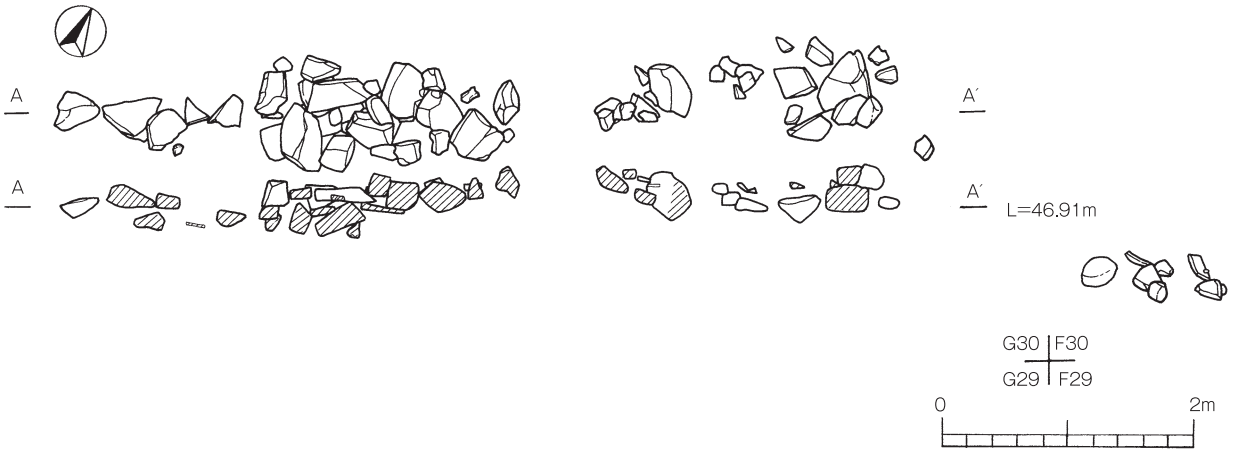
D-30区のⅡ層で検出された。南側部分がパイプ埋設により一部削平されている。検出された部分は，長軸220cm，短軸40cmである。炉壁の上面や側面は崩壊し，検出されたのは底面部分である。炉壁内部からは，粘土やわらなど炉の構成物も出土した。床面には，炭化物や焼土などが約５cm堆積していた。埋土の中から，薩摩焼の小片が３点出土している。

竈跡（第277図）

D-30区のⅡ層で検出された。石溜まり遺構と隣接している。平面形は，楕円形を呈し，長軸120cm，短軸100cmである。たき口は南西側で，30cm開口している。炉壁の天井部は崩壊しているが，側面の約25～40cmの部分が残っている。炉壁は，凝灰岩を含む粘土が用いられている。炉壁の内部からは補強材と考えられる竹も出土している。炉壁内面は，手または工具による調整がなされ，硬化している。炉内部から，25cm×30cmの扁平で大きな凝灰岩が検出された。床面には，焼土・粘土・灰などが10～20cmの厚さで堆積している。たき口部分より後には約140cmの長さで灰出し部分が見られ，焼土や炭が堆積している。灰出し部分から，陶器片が２点出土している。



第277図　鍛冶炉跡・竈跡



第278図　列石遺構

⑹　列石遺構（第278図）

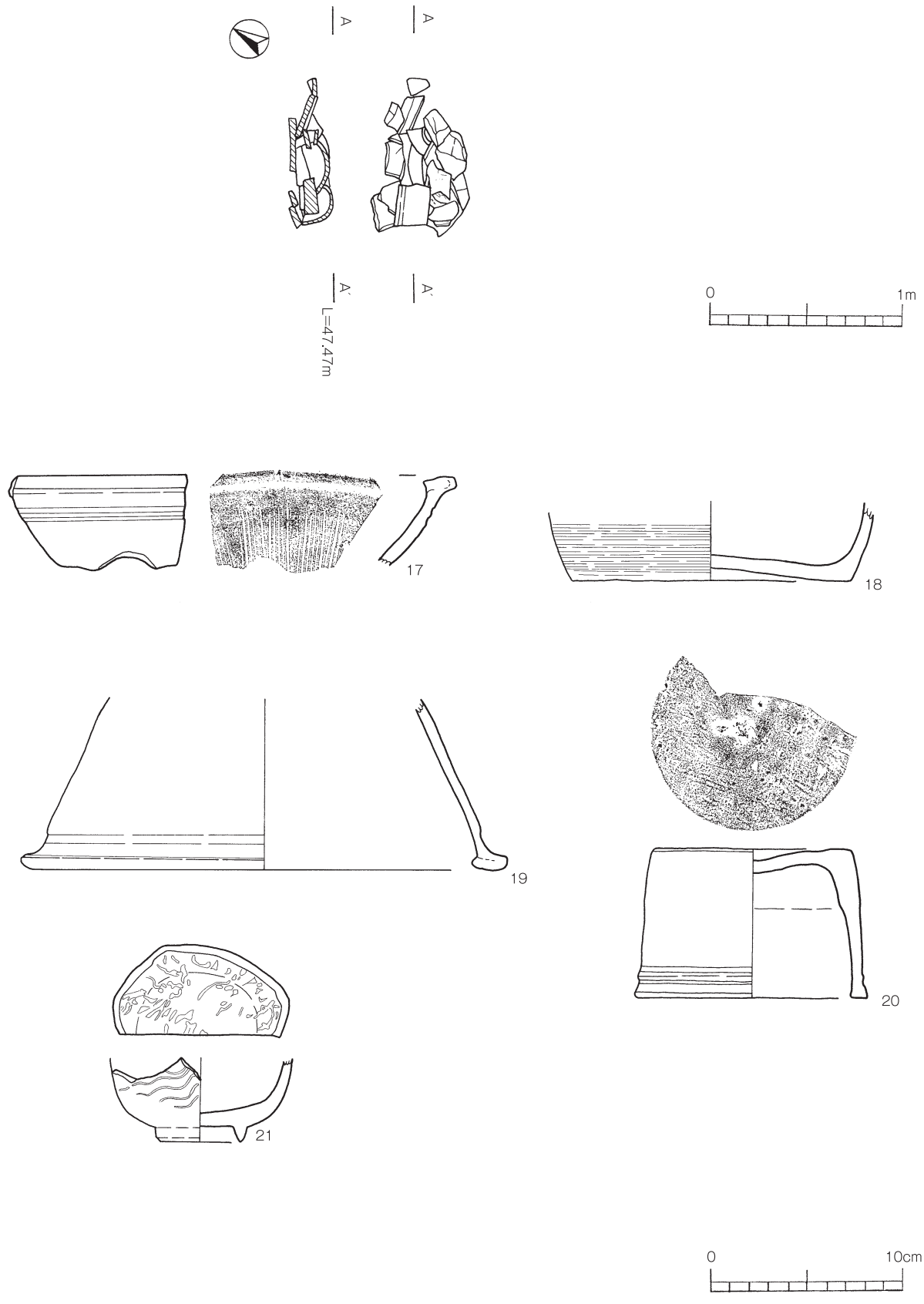
G-30区のⅡ層で検出された。北東～南西方向に長さ約７ｍの範囲で検出された。約50個の礫で構成され，角礫が多い。軽石も数点含まれている。礫は赤化していない。陶器（薩摩焼）が１点含まれることと，検出された層位から時期は近世と考えられる。

⑺　陶器溜まり遺構（第279図）

F-27区のⅡ層で検出された。長径150cm，短径90cmの範囲に陶器が集中している。掘り込みは，確認されなかった。廃棄した場所と考えられる。

出土遺物（第279図，17～21）

薩摩焼を中心に５点出土した。17～20は，苗代川系の薩摩焼である。17は，薩摩焼の擂鉢である。口縁部はＴ字状を呈し，内側は折り返されている。内面には口縁部に向かってかき目が施されている。18世紀代のものと考えられる。18は，壺の底部である。底径は約14cmで，上げ底になっている。全面に灰釉がかかる。17世紀後半～18世紀代のものと考えられる。19は，蓋である。浅鉢型で，甕または壺に使用されたと考えられる。口縁部は内側に折り返される。20は蓋として掲載したが，他の器種の可能性も考えられる。口径は10.6cmで，口唇部を除いた部分に灰釉がかかる。また，口唇部には，貝目が残る。21は，肥前系陶器である。碗の胴部～底部で，内外面に白泥で打ち刷毛目が施される。



第279図　陶器溜まり遺構と出土遺物

第89表　近世遺構内出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	層	種類	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整・文様		色調		胎土	焼成	備考
								内	外	内	外			
267	1	溝	陶器	甕？	底部	－	20	釉薬・鉄	釉薬・鉄	褐	灰褐		良好	薩摩焼(江戸)
	2	溝	陶器	蓋	口縁	7	－	ろくろ	ろくろ	にぶい褐	黒褐	茶粒	良好	出水街道溝
	3	溝	陶器	ソバキ	底～胴	－	6	ハケ目	－	灰オリーブ	オリーブ黒		良好	薩摩焼(近世) 釉薬 外面鉄 釉調 緑褐色 外底面は無釉 内面は無釉 (ソバ掻き)
	4	溝	陶器	土瓶？	胴部	－	－	－	－	褐灰	灰褐		良好	薩摩焼(近世) 釉薬 内外面鉄釉調 黒褐色 胴径16．2cm
	5	溝	陶器	甕	胴部	－	－	ハケ目	ハケ目	黄灰	にぶい赤褐	軽石、石英、火山ガラス	良好	薩摩焼(江戸)陶器
	6	溝	陶器	メンコ	－	－	－	沈線	－	黄褐	灰オリーブ		良好	薩摩焼(江戸) 径4．4cm 陶器の転用 内外面とも施釉 釉薬鉄釉調 緑褐色
	7	溝	陶器	メンコ	－	－	－	－	－	黒褐	黒褐		良好	薩摩焼(江戸)釉薬(上面のみ鉄)釉調(黒褐色)陶器の転用 径4．2cm
276	8	土坑	陶器	不明	底部	－	－	ろくろ	ろくろ	にぶい褐	褐灰		良好	薩摩焼
	9	土坑	陶器	甕	底部	－	－	－	－	暗褐	黄灰		良好	薩摩焼
	10	土坑	陶器	甕	胴部	－	－	－	沈線	黒褐	暗オリーブ褐		良好	薩摩焼
	11	土坑	陶器	甕	口縁	36	－	－	－	黒褐	オリーブ黒		良好	薩摩焼
	12	ピット	陶器	甕	口縁	－	－	－	－	暗赤灰	灰赤		良好	薩摩焼
	13	ピット	土師質	香炉	口縁	12.2	－	ていねいなナデ	ていねいなナデ	にぶい黄橙	明赤褐		良好	口唇部に煤付着
	14	ピット	陶器	碗	口縁～底部	10.3	－	ナデ	ナデ	淡黄	淡黄		良好	京焼風陶器
	15	ピット	磁器	碗	胴部	－	9.6	－	－	灰白	灰白		良好	
	16	ピット	陶器	壺	口縁	11	－	－	－	黒	黒		良好	
279	17	陶器だまり		すり鉢	口縁	－	－	－	－	黒褐	黒褐		良好	薩摩焼(近世18C) すり目が口縁近くまである
	18	陶器だまり		壺	底部	－	14.2	－	－	灰白	灰白		良好	陶磁器(17C後半～18C)
	19	陶器だまり		蓋	口縁	25	－	－	－	灰	灰黄	白片岩	良好	銭鉢型(17C後半～18C)
	20	陶器だまり		蓋	口縁	10.6	－	－	－	灰オリーブ	灰オリーブ		良好	薩摩焼(近世17C～18C) 器高7．7cm
	21	陶器だまり		碗	底部	－	4.2	－	－	暗灰黄	暗オリーブ褐		良好	肥前系陶器(近世) 器台高0．7cm

2　遺物（第280～284図，22～58）

Ⅱ層から薩摩焼など多くの遺物が出土した。特に，近世の遺構が集中して検出されたＥ～Ｈ-26～30区からの出土が多い。

⑴　陶磁器（第280～283図　22～47）

22～41は薩摩焼で，いずれも苗代川系のものである。

22～26は擂鉢である。22・23は口縁部を外側に折り返して肥厚させ，低い二条の突帯を廻らせたものである。22は赤褐色を呈し胎土はやや粗く，白色砂粒をわずかに含む。釉は黒褐色の鉄釉が口唇部を除き全面に施釉される。内面には１単位五条の細くシャープなかき目が，口縁部付近に余白を残して密に施される。また内底面中央には渦巻き状のかき目が看取される。23はやや焼成不良と思われ，にぶい灰黄色の胎土に，やや緑がかった灰釉が口唇部を除きかかる。内面にはかき目が施されるが，口縁部付近は余白を残すためかき目の上端の一部がわずかに観察される程度である。22・23はどちらも18世紀代のものと思われる。24は口縁部のつくりが22・23とは異なるもので，口縁部を外側に折り返したあとさらに内側に折り返して丸くおさめたものである。外面口縁部下位には低い突帯が一条つくり出される。胎土は灰黒色の色調を呈し，やや赤みがかった褐色の鉄釉が口唇部を除きかかる。かき目は口縁部付近に余白を残して施されており，陶片の残存状況からかき目の先端の一部がわずかに観察される。詳細な時期は不明であるが，18世紀代のものではないかと思われる。25は外側に折れた口縁部の断面が三角形を呈するもので，その下端は垂れて胴部と接する部分も見られる。胎土は粗く赤褐色を呈し，釉は緑がかった灰色の灰釉がかけられ，口唇部と外底面はかき取られる。内面はヘラ状工具で横方向の調整を施した上から，１単位八条のかき目を入れる。かき目間は広いがかき目はシャープで，内底面中央から放射状に口縁部上端まで施される。外面はヘラ状工具横方向の調整痕が見られ，部分的に鉄錆のようなものが付着する。19世紀後半以降のものと思われる。26は擂鉢の胴部である。口縁部は欠損しているが，外側に折り返して肥厚させ，二条の突帯をつくるものと思われる。胎土は灰黒色でよく焼き締まっている。釉は内外面とも黒褐色の鉄釉がかかり，光沢も強い。内面には１単位六条の細く鋭いかき目が密に入り，口縁部付近には斜位に入る。17世紀後半～18世紀代のものと思われる。

27は甕である。口縁部は外側に「コ」の字形に折り返してつくる。また外面口縁部下位には浅い二条の沈線を廻らす。胎土は緻密でにぶい灰褐色を呈する。釉は鉄釉がかけられていると思われるが，外面は褐色に発色するものの，内面は灰緑色に発色している。口唇部の釉はかき取られ，貝目が残る。

28は徳利の胴部から底部である。胎土は緻密でよく焼き締まっている。釉は緑褐色に発色した灰釉が外底面及び内面も含め，残存部全てにかかる。また外面にはヘラ状工具による横位の調整痕が筋状に残る。17世紀後半から18世紀代のものと思われる。

29～31・33・34は土瓶である。29～31・34は口縁部末端に平坦な蓋受け部をつくらず，丸くつくるものである。口縁部下位から肩部にかけては，ヘラ状工具による筋状の調整痕が明瞭に残る。29の胎土はにぶい灰褐色で，釉は鉄釉が内外面ともにかけられ，外面は光沢の強い褐色である。30は橙色の色調を呈する胎土に，にぶい褐色の鉄釉がかかるものである。やや焼成不良と思われる。外

面口縁部下位から肩部にかけて，29･31のような筋状の調整痕は見られない。31は灰褐色の胎土に，褐色の鉄釉が内面と外面腰部までかかる。33・34は耳が残存しているものである。耳は型抜きでつくられており，33は台形状を呈し，34は穿孔の周りが花形につくられる。33の胎土は灰色がかった橙色で，内外面に褐色の鉄釉がかかる。34は灰褐色の胎土に，黒褐色の鉄釉がかかる。29～31・33のように口縁部先端を丸くつくり，また29・31・33のように口縁部下位から肩部にかけて筋状の調整痕を明瞭に残すタイプの土瓶は，近年鹿児島県内の消費遺跡からの出土例が増加している。しかし，その生産地についてははっきりしていない。今回は苗代川系薩摩焼の範疇に入れたが，今後の窯跡等の調査結果から，県外産の土瓶である可能性も考えられる。また，年代についても詳細は不明であるが，土瓶という器種の初現が18世紀後半であることから，それ以降のものと思われる。

32は小壺と思われる。口縁部は外側に折り，さらに内側に折り返して丸くおさめる。胎土は緻密で鈍い灰褐色を呈する。釉は緑褐色の鉄釉が口唇部も含め内外面にかかる。外面にはヘラ状工具による筋状の調整痕が明瞭に看取される。17世紀後半～18世紀代のものと思われる。

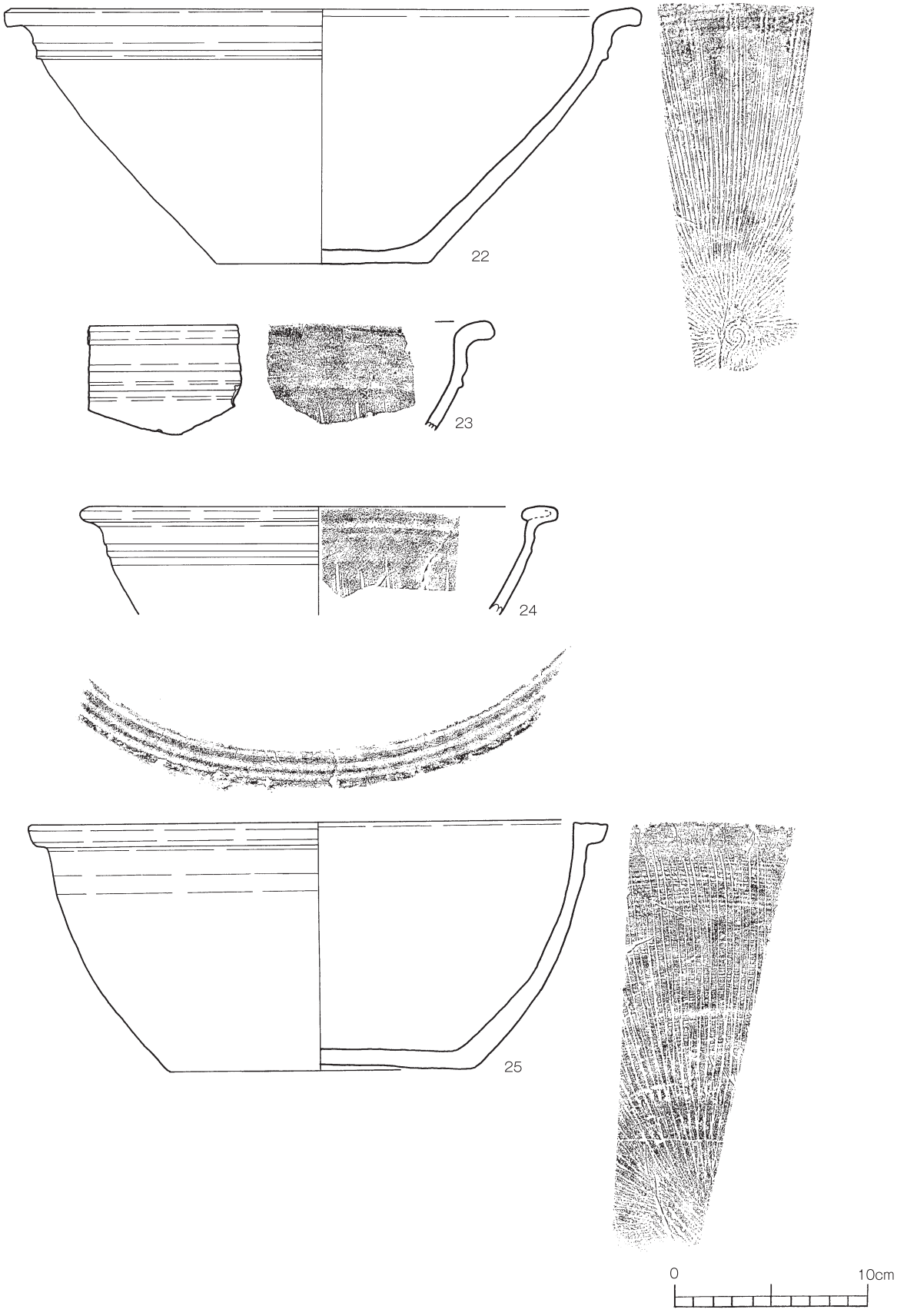
35・36は碗である。苗代川系薩摩焼として掲載したが，肥前系陶器に分類されるものと思われる。35は黄白色の緻密な胎土に，やや緑がかった黒褐色の鉄釉が厚くかかり，畳付を除き高台内面まで総釉で施釉される。器形は体部から口縁部にかけて「逆ハ」の字状に直線的に開き，先端は細くシャープにつくられる。また，高台は高く削り出される。36は口縁部のみの資料である。灰白色の胎土に，黒褐色の鉄釉がかかる。器形は，体部から口縁部にかけて「逆ハ」の字状に直線的に開き，先端は細くシャープにつくられる。年代は不明である。

39は蓋である。大きさから土瓶蓋というよりは，釜等の蓋であろうと思われる。上面中央部にはつまみが付くものと思われるが欠損している。また上面中位から先端にかけてはヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。胎土は粗く，鈍い灰橙色を呈する。釉は上面のみ灰黒色の鉄釉がかかる。19世紀代のものと思われる。

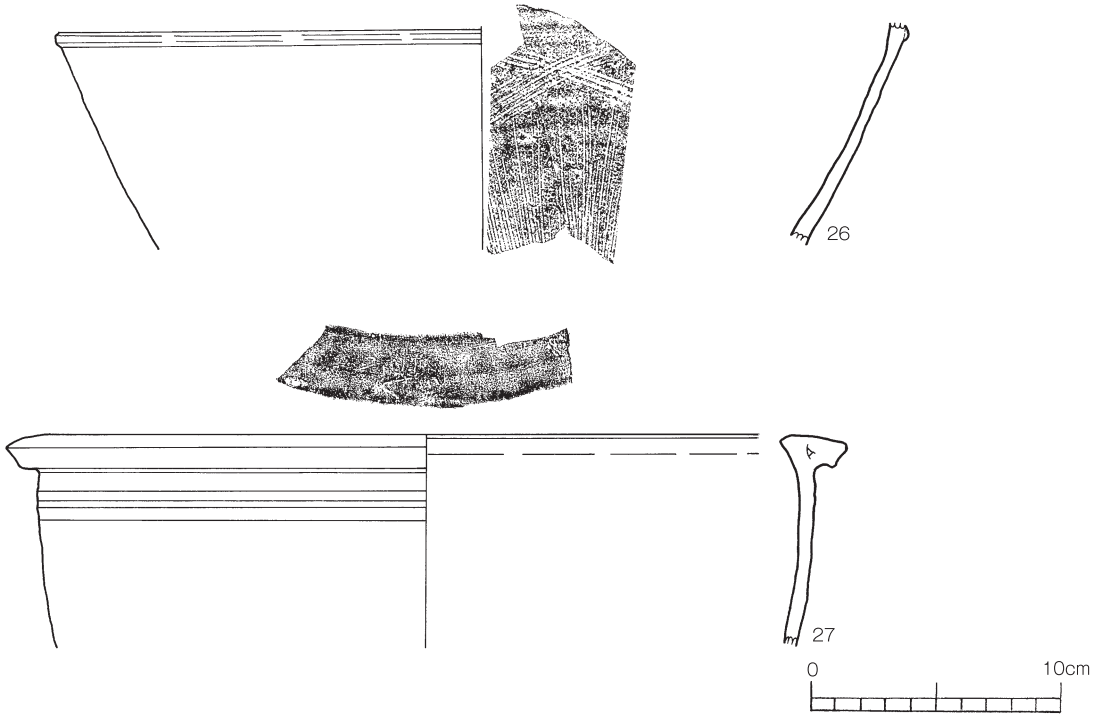
38～41は薩摩焼の陶器を転用したメンコである。38・39は上面に低い突帯がみられることから，甕もしくは擂鉢を転用したものと思われる。

42～47は肥前系及び産地不明の陶磁器である。

42は京焼風陶器である。黄褐色の緻密な胎土に，黄褐色の釉がかかるもので，外面腰部から高台内面にかけては露胎である。高台は断面角形に鋭く削り出され，見込みには呉須で山水文が描かれる。17世紀後半頃のものと思われる。43は染付磁器である。胎土は灰色で透明釉が総釉でかかる。高台の先端は鋭く尖る。波佐見焼と思われる。44は磁器の皿である。白色の胎土に灰色味がかった透明釉がかかるが，焼成不良のためか光沢がなく，外面に呉須で描かれた松葉文と思われる文様も発色は悪い。産地・時期ともに不明である。45は肥前系陶器の碗である。灰黄色の胎土に，内面は褐釉，口唇部から外面にかけては緑釉がかかる。内野山系のものと思われる。46は肥前系陶器の皿である。胎土は白色で，緑釉が口唇部から内面にかけてかけられ，外面は露胎とする。45と同じく内野山系のもので17世紀後半のものと思われる。47は肥前系陶器の大皿である。口縁部は欠損している。胎土は褐色で，内面には白泥で素地の上から刷毛目文を施し，その上から褐釉をかける。一般に「刷毛目唐津」と呼ばれる製品である。



第280図　近世の遺物１（薩摩焼１）



第281図　近世の遺物２（薩摩焼２）

⑵　その他（焙烙・土人形・古銭・鍛冶関連遺物）（第283・284図　48～58）

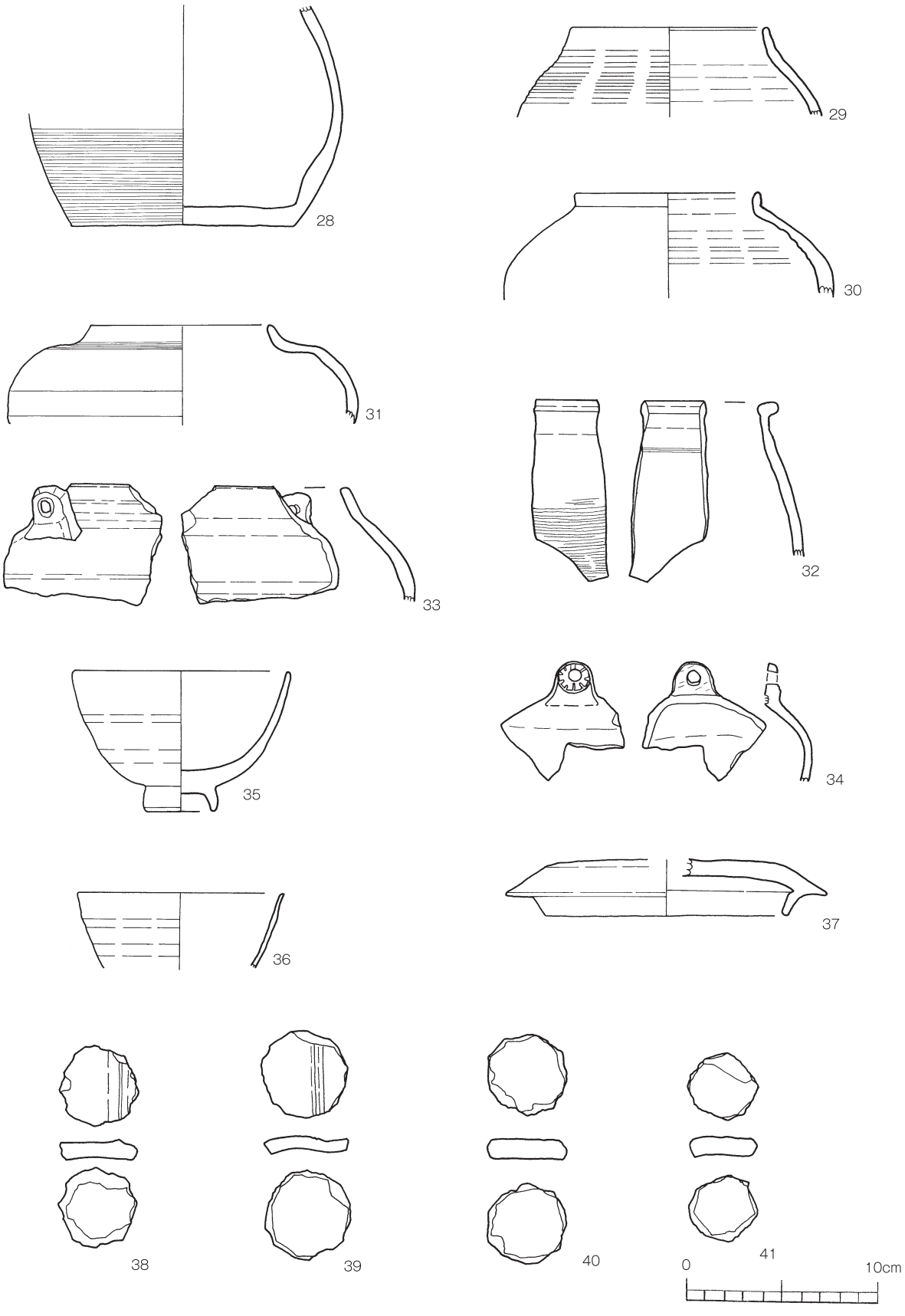
48・49は土師質土器の焙烙である。フライパン状の形状のもので，煎り具として用いられたものである。48は把手部が残存しているものである。胎土は比較的緻密で，色調はにぶい橙色を呈する。外側面には煤が付着している。49は48と同様に把手を１つ持つが，欠損しているものと思われる。把手は別につくられ，外側面につけられたものと思われ，粘土をなでつけた部分が段となって観察される。胎土は比較的緻密で，色調は鈍い橙色を呈する。底部からの立ち上がりは，面取り状にヘラけずりが施されており，やや丸みを帯びた形状となる。口縁部はやや肥厚し，先端は丸くつくられる。外側面上位と内面はやや摩耗している。また，内面には一部煤が付着する。

50は動物形の土人形である。土師質のもので，胎土はにぶい橙色である。犬を形取ったものと思われる。

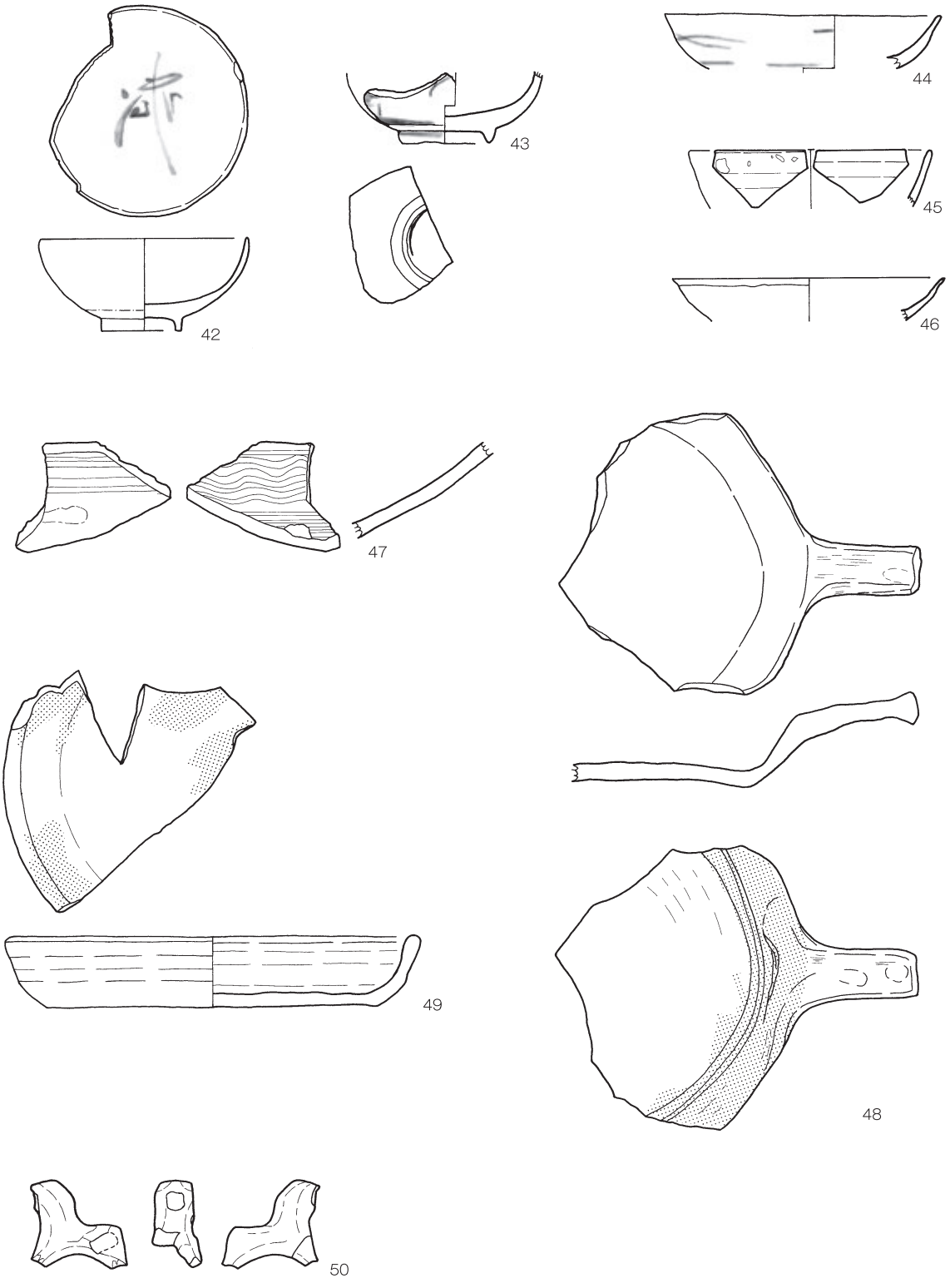
51～54は古銭である。遺構内の出土遺物ではなく，包含層内の資料である。すべて寛永通宝で，銅製の一文銭である。背面に文字は見られない。

55～58は鍛冶関連遺物である。56は鞴の羽口である。本来は筒状の形状であるが，この資料はその一部分である。棒状のものに粘土を巻き付けて製作したものと思われ，外面にはヘラ状工具で成形した痕跡が平坦な面となって残る。また棒状のものを引き抜いた痕跡が，内側面に縞状に残る。

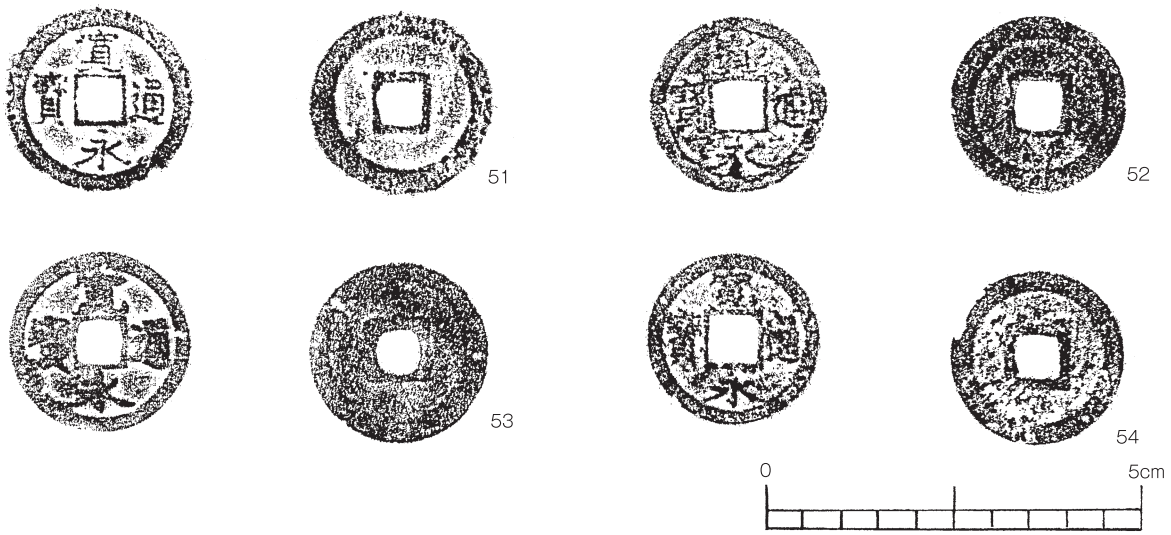
56～58は鉄滓である。56は椀型滓の底部分である。外面に少量ではあるが灰白色の砂粒が付着する。57・58は含鉄鉄滓と思われる資料である。これら鍛冶関連の遺物から，遺構としてはとらえられなかったが，鍛冶が行われていたものと考えられる。

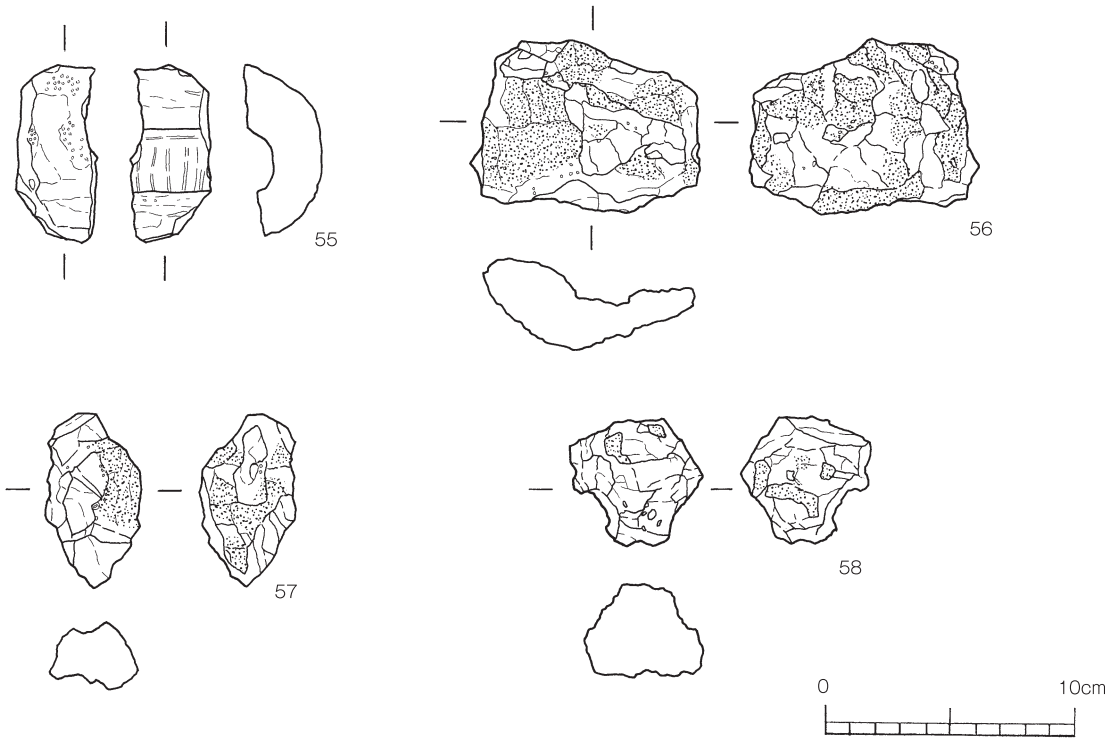


第282図　近世の遺物３（薩摩焼３）



第283図　近世の遺物４（陶磁器・焙烙・土人形）





第284図　近世の遺物５（古銭・鍛冶関連遺物）

第90表　近世出土遺物観察表

陶磁器・土師質土器

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	種類	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整		色調		焼成	備考
										内面	外面	内面	外面		
280	22	－	―	－	陶器	擂鉢	完形	32.8	―	―	―	オリーブ黒	黒褐	良好	薩摩焼(苗代川系)18C
	23	－	―	－	陶器	擂鉢	口縁	―	―	―	―	灰オリーブ	暗オリーブ灰	良好	薩摩焼(苗代川系)18C
	24	22086	―	Ⅱ	陶器	擂鉢	口縁	24.6	―	―	―	オリーブ黒	暗赤褐	良好	薩摩焼(苗代川系)18C
	25	－	トレンチ	－	陶器	擂鉢	完形	29.8	15.4	掻き目	―	赤褐	緑灰	良好	薩摩焼(苗代川系)19C後半
281	26	10631	F－29	Ⅱ	陶器	擂鉢	胴部	―	―	―	―	黒	オリーブ黒	良好	薩摩焼(苗代川系)17C後半～18C
	27	－	―	－	陶器	甕	口縁	33.3	―	―	―	黄灰	暗褐	良好	薩摩焼(苗代川系)　口唇部に貝目跡
282	28	22086	F－26	Ⅱ	陶器	徳利	胴部～底部	―	11.6	―	―	オリーブ黒	浅黄	良好	薩摩焼(苗代川系)17C後半～18C
	29	－	―	－	陶器	土瓶	口縁	10	―	―	―	オリーブ黒	黒褐	良好	薩摩焼(苗代川系)
	30	17823	F－27	Ⅲa	陶器	土瓶	口～胴	9.6	―	―	―	にぶい赤褐	赤褐	良好	薩摩焼(苗代川系)
	31	－	―	―	陶器	土瓶	口縁	9.4	―	―	―	灰褐	褐	良好	薩摩焼(苗代川系)
	32	22086	F－26	Ⅱ	陶器	小壺	口縁	―	―	―	ろくろ痕	オリーブ黒	オリーブ黒	良好	薩摩焼(苗代川系)17C後半～18C
	33	10208	F－28	Ⅱ	陶器	土瓶	口縁	―	―	―	ろくろ痕	黒褐	黒褐	良好	薩摩焼(苗代川系)
	34	－	―	―	陶器	土瓶	口縁	―	―	―	―	暗赤褐	赤黒	良好	薩摩焼(苗代川系)
	35	－	―	―	陶器	碗	口縁	11.2	―	―	―	オリーブ黒	灰オリーブ	良好	肥前系陶器
	36	10367	G－29	Ⅱ	陶器	碗	口縁	10.6	―	―	―	黒褐	黒	良好	肥前系陶器
	37	－	G－28	表	陶器	蓋	口縁	16.6	―	―	―	橙	緑灰	良好	薩摩焼(苗代川系)
	38	－	G－9	―	陶器	メンコ	―	―	―	―	―	黒褐	緑黒	良好	薩摩焼(苗代川系)
	39	228	C－8	Ⅱ	陶器	メンコ	―	―	―	―	―	褐灰	黒褐	良好	薩摩焼(苗代川系)
	40	－	C－19	Ⅰ	陶器	メンコ	―	―	―	―	―	黒褐	黒褐	良好	薩摩焼(苗代川系)
	41	－	―	表	陶器	メンコ	―	―	―	―	―	暗灰黄	オリーブ黒	良好	薩摩焼(苗代川系)
283	42	－	G－28	表	陶器	碗	完形	10	―	―	―	浅黄	浅黄	良好	京焼風陶器　17C後半
	43	－	―	―	磁器	碗	胴～底	―	4.4	―	―	灰白	灰白	良好	波佐見焼
	44	－	―	―	磁器	皿	口縁	13.2	―	―	―	灰白	灰白	良好	
	45	10177	E－28	Ⅱ	陶器	碗	口縁	11.4	―	―	―	黄褐	オリーブ黄	良好	肥前系(内野山系)
	46	－	―	表	陶器	皿	口縁	13	―	―	―	オリーブ灰	灰白	良好	肥前系(内野山系)17C後半
	47	－	―	―	陶器	大皿	―	―	―	ハケ目	―	オリーブ褐	暗灰黄	良好	肥前系
	48	－	―	―	土師質	焙烙	把手部	―	16	ろくろ痕	ヘラ切り	浅黄橙	浅黄橙	良好	外側面に煤が付着
	49	－	―	表	土師質	焙烙	口～胴	19.6	―	ろくろ痕	―	にぶい橙	浅黄橙	良好	
	50	－	G－29	表	土師質	土人形	―	―	―	―	―	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	

古銭

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	口径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
284	51	E～G－27～30	表	古銭	2.4	0.1	2.51	寛永通宝
	52	D-13	まじり	古銭	2.3	0.09	2.77	寛永通宝
	53	C-19	Ⅰ	古銭	2.4	0.09	2.5	寛永通宝
	54	―	表	古銭	2.3	0.1	3.1	寛永通宝

鍛冶関連遺物

挿図番号	遺物番号	出土区	層	種類	器種	部位	最大長	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	調整		色調		胎土	焼成	備考
											内	外	内	外			
284	55	―	表	土製品	羽口	―	6.8	2.6	―	51.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	暗赤灰	やや粗い(砂粒混)	良好	
	56	―	表土	鉄滓	―	―	8.5	6.5	2.7	257.84	―	―	明褐	明褐	粗い	―	(椀型滓)
	57	―	表	鉄滓	―	―	6.9	3.6	2.5	139.33	―	―	黒明褐	黒明褐	―	―	(含鉄鉄滓)
	58	―	表土	鉄滓	―	―	5	5	3.5	175.04	―	―	明褐	明褐	―	―	(含鉄鉄滓)

平成19年２月16日に契約を行い，株式会社加速器分析研究所に放射性年代測定を業務委託した。

放射性炭素年代測定結果報告書
（ＡＭＳ測定）

市ノ原遺跡　第４地点

（株）加速器分析研究所

１　遺跡の位置

市ノ原遺跡は，鹿児島県日置市東市来町湯田上市ノ原ほかに所在する。

２　測定の意義

竪穴住居跡などの遺構の使用された年代を明らかにする。

３　測定対象試料

竪穴住居跡（仮１）の埋土から出土した土器付着炭化物（１：IAAA-62927），竪穴住居跡（仮２）の埋土から出土した土器付着炭化物（２：IAAA-62928），E-26Ⅲa層から出土した土器付着炭化物（３：IAAA-62929），カマド跡（仮２号）から出土した補強材（４：IAAA-62930），Ｄ－21Ⅱ層から出土した土器付着炭化物（５：IAAA-62931），土坑30号の埋土から出土した炭化物（６：IAAA-62932），合計６点である。Ⅱ層とⅢa層は，縄文時代晩期から弥生時代早期の遺物包含層である。

４　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

5　測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

6　算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

⑵　BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

⑶　付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

⑷　δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C=[(^{14}A_S-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$　　（1）

$\delta^{13}C=[(^{13}A_S-^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}]\times1000$　　（2）

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S=^{13}C/^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に^{13}C/^{12}Cを測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，Δ^{14}Cは，試料炭素が$\delta^{13}C=-25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$として^{14}C/^{12}Cを使用するとき）

または

$=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$として^{14}C/^{13}Cを使用するとき）

$\Delta^{14}C=[(^{14}A_N-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$（‰）

$pMC = \Delta^{14}C/10+100$（%）

国際的な取り決めにより，この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional RadiocarbonAge；yrBP）が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

(5) ^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

(6) 較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

(7) 測定結果

竪穴住居跡（仮１）の埋土から出土した土器付着炭化物（１：IAAA-62927）が2540±40yrBP，竪穴住居跡（仮２）の埋土から出土した土器付着炭化物（２：IAAA-62928）が2550±40yrBP，E-26Ⅲa層から出土した土器付着炭化物（３：IAAA-62929）が2560±40yrBP，カマド跡（仮2号）から出土した補強材（４：IAAA-62930）が190±30yrBP，D-21Ⅱ層から出土した土器付着炭化物（5：IAAA-62931）が2500±30yrBP，土坑30号の埋土から出土した炭化物（６：IAAA-62932）が100±30yrBPの14C年代である。暦年較正年代（1σ）は，1～3・5が800BC～540BCに含まれ，縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての年代である。４は1660AD～1960ADに含まれ，江戸時代前期から大正時代に相当する。６は1690AD～1920ADに含まれ，江戸時代前期から明治時代にかけての年代である。４と６の暦年較正年代は，較正曲線と多くの接点をもつことから時間幅を有し，詳細な時期を特定できない。化学処理及び測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H. A. (1977) Discussion:Reporting of 14C data.Radiocarbon,19:355-363
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2) 425-430
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A) 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates , Radiocarbon, 43 (2A) 381-389
- Reimer, P. J. et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058

IAA

IAA Code No.	試料		BP年代および炭素の同位体比		
IAAA-62927	試料採取場所：	鹿児島県日置市東市来町	**Libby Age(yrBP)**	**：**	**2,540 ± 40**
		市ノ原遺跡(第4地点)	**δ^{13}C(‰),(加速器)**	**＝**	**-26.30 ± 0.56**
	試料形態　：	炭化物	**Δ^{14}C(‰)**	**＝**	**-271.1 ± 3.2**
	試料名(番号)：	1	**pMC(%)**	**＝**	**72.89 ± 0.32**
			δ^{14}C(‰)	＝	-273.0 ± 3.1
	(参考)	δ^{13}C の補正無し	pMC(%)	＝	72.70 ± 0.31
#1688-1			Age (yrBP)	：	2,560 ± 30
IAAA-62928	試料採取場所：	鹿児島県日置市東市来町	**Libby Age(yrBP)**	**：**	**2,550 ± 40**
		市ノ原遺跡(第4地点)	**δ^{13}C(‰),(加速器)**	**＝**	**-25.14 ± 0.94**
	試料形態　：	炭化物	**Δ^{14}C(‰)**	**＝**	**-271.6 ± 3.5**
	試料名(番号)：	2	**pMC(%)**	**＝**	**72.84 ± 0.35**
			δ^{14}C(‰)	＝	-271.8 ± 3.2
	(参考)	δ^{13}C の補正無し	pMC(%)	＝	72.82 ± 0.32
#1688-2代替			Age (yrBP)	：	2,550 ± 40
IAAA-62929	試料採取場所：	鹿児島県日置市東市来町	**Libby Age(yrBP)**	**：**	**2,560 ± 40**
		市ノ原遺跡(第4地点)	**δ^{13}C(‰),(加速器)**	**＝**	**-27.09 ± 0.64**
	試料形態　：	炭化物	**Δ^{14}C(‰)**	**＝**	**-272.9 ± 3.2**
	試料名(番号)：	3	**pMC(%)**	**＝**	**72.71 ± 0.32**
			δ^{14}C(‰)	＝	-276.0 ± 3.0
	(参考)	δ^{13}C の補正無し	pMC(%)	＝	72.40 ± 0.30
#1688-3			Age (yrBP)	：	2,590 ± 30
IAAA-62930	試料採取場所：	鹿児島県日置市東市来町	**Libby Age(yrBP)**	**：**	**190 ± 30**
		市ノ原遺跡(第4地点)	**δ^{13}C(‰),(加速器)**	**＝**	**-27.95 ± 0.57**
	試料形態　：	木炭	**Δ^{14}C(‰)**	**＝**	**-23.0 ± 3.9**
	試料名(番号)：	4	**pMC(%)**	**＝**	**97.70 ± 0.39**
			δ^{14}C(‰)	＝	-29.0 ± 3.7
	(参考)	δ^{13}C の補正無し	pMC(%)	＝	97.10 ± 0.37
#1688-4			Age (yrBP)	：	240 ± 30
IAAA-62931	試料採取場所：	鹿児島県日置市東市来町	**Libby Age(yrBP)**	**：**	**2,500 ± 30**
		市ノ原遺跡(第4地点)	**δ^{13}C(‰),(加速器)**	**＝**	**-26.20 ± 0.63**
	試料形態　：	炭化物	**Δ^{14}C(‰)**	**＝**	**-267.9 ± 3.1**
	試料名(番号)：	5	**pMC(%)**	**＝**	**73.21 ± 0.31**
			δ^{14}C(‰)	＝	-269.7 ± 2.9
	(参考)	δ^{13}C の補正無し	pMC(%)	＝	73.03 ± 0.29
#1688-5			Age (yrBP)	：	2,520 ± 30

IAA

IAAA-62932	試料採取場所 ：	鹿児島県日置市東市来町	**Libby Age(yrBP)**	**:**	**100 ± 30**
		市ノ原遺跡(第4地点)	**$\delta^{13}C$(‰), (加速器)**	**＝**	**-27.31 ± 0.5**
					9
	試料形態 ：	炭化物	**$\Delta^{14}C$(‰)**	**＝**	**-12.6 ± 4.0**
	試料名(番号) ：	6	**pMC(%)**	**＝**	**98.74 ± 0.4**
					0
			$\delta^{14}C$(‰)	＝	-17.3 ± 3.8
	(参考)	$\delta^{13}C$ の補正無し	pMC(%)	＝	98.27 ± 0.3
					8
#1688-6			Age (yrBP)	:	140 ± 30

参考

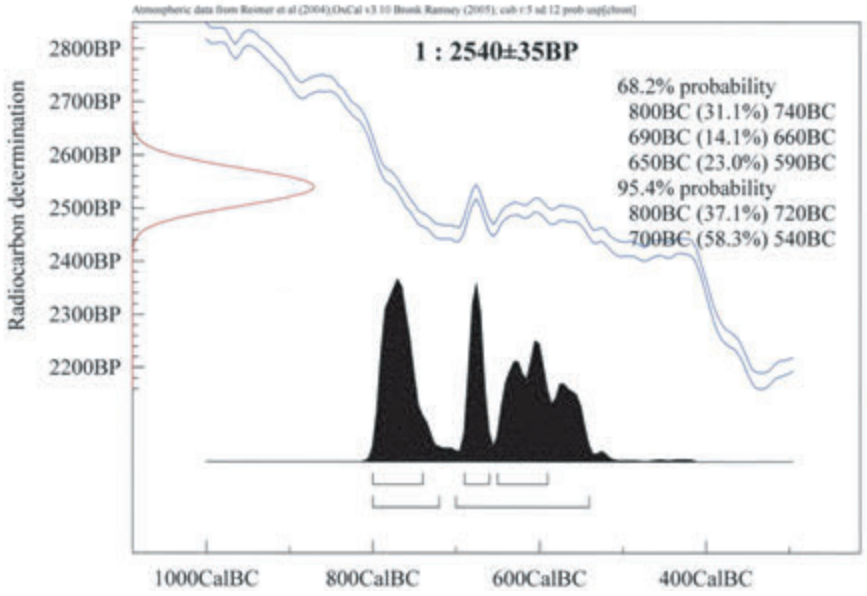
IAAA-62928に関しましては，代替試料を処理し測定した結果になります。

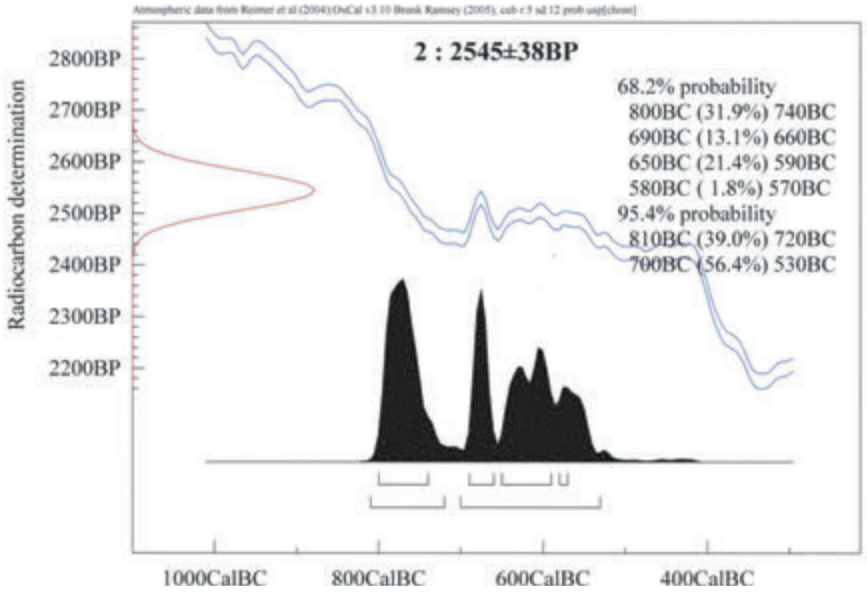
参考資料：暦年較正用年代

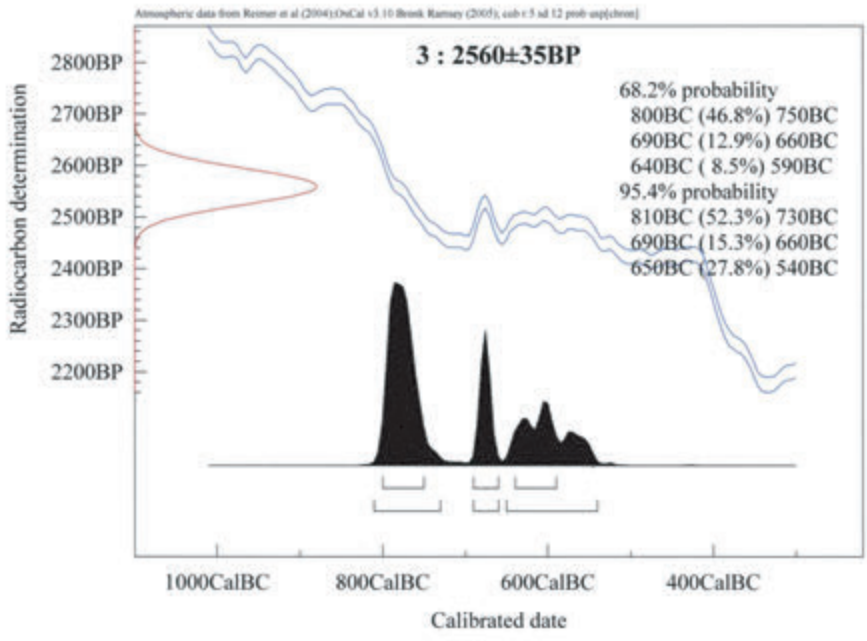
IAA

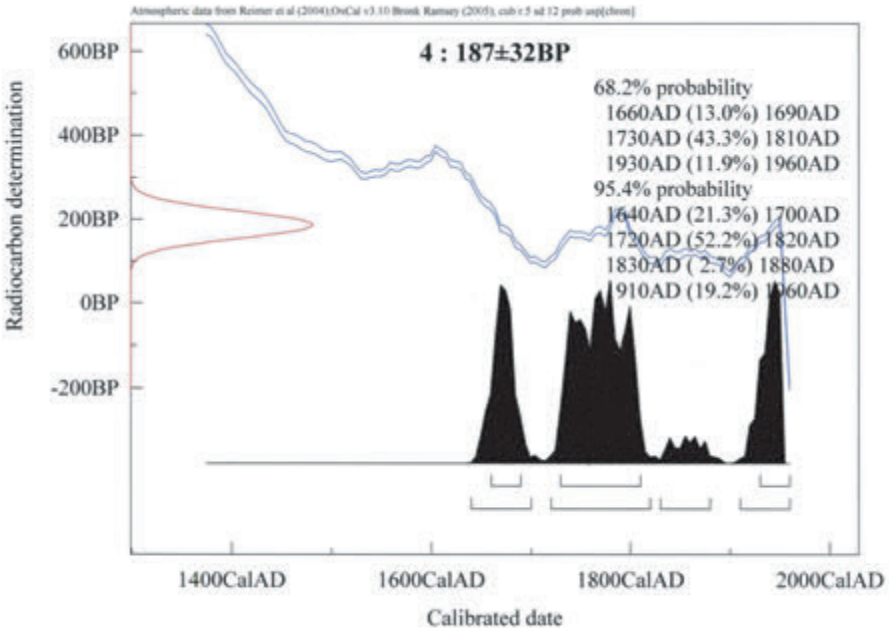
IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-62927	1	2540 ± 35
IAAA-62928	2	2545 ± 38
IAAA-62929	3	2560 ± 35
IAAA-62930	4	187 ± 32
IAAA-62931	5	2504 ± 33
IAAA-62932	6	101 ± 32

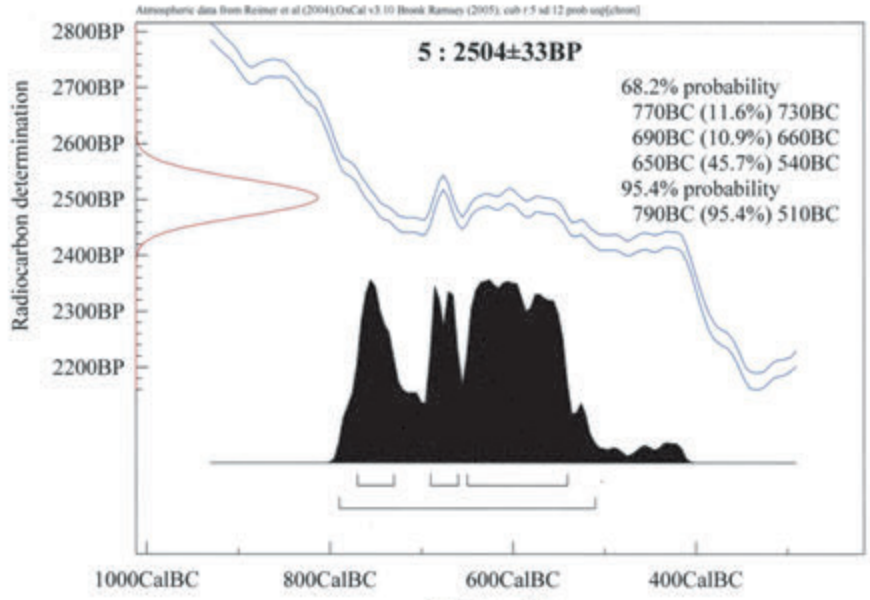
ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

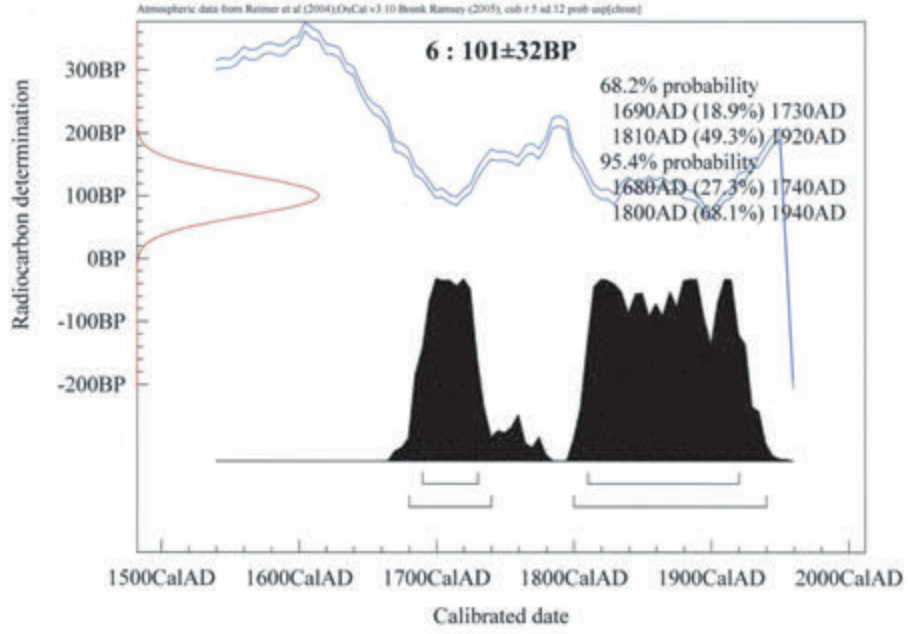

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
1 : 2540±35BP
68.2% probability
800BC (31.1%) 740BC
690BC (14.1%) 660BC
650BC (23.0%) 590BC
95.4% probability
800BC (37.1%) 720BC
700BC (58.3%) 540BC
Radiocarbon determination
2800BP
2700BP
2600BP
2500BP
2400BP
2300BP
2200BP
1000CalBC
800CalBC
600CalBC
400CalBC


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
2 : 2545±38BP
68.2% probability
800BC (31.9%) 740BC
690BC (13.1%) 660BC
650BC (21.4%) 590BC
580BC (1.8%) 570BC
95.4% probability
810BC (39.0%) 720BC
700BC (56.4%) 530BC
Radiocarbon determination
2800BP
2700BP
2600BP
2500BP
2400BP
2300BP
2200BP
1000CalBC
800CalBC
600CalBC
400CalBC


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
3 : 2560±35BP
68.2% probability
800BC (46.8%) 750BC
690BC (12.9%) 660BC
640BC (8.5%) 590BC
95.4% probability
810BC (52.3%) 730BC
690BC (15.3%) 660BC
650BC (27.8%) 540BC
Radiocarbon determination
2800BP
2700BP
2600BP
2500BP
2400BP
2300BP
2200BP
1000CalBC
800CalBC
600CalBC
400CalBC
Calibrated date


4 : 187±32BP
68.2% probability
1660AD (13.0%) 1690AD
1730AD (43.3%) 1810AD
1930AD (11.9%) 1960AD
95.4% probability
1640AD (21.3%) 1700AD
1720AD (52.2%) 1820AD
1830AD (2.7%) 1880AD
1910AD (19.2%) 1960AD
Radiocarbon determination
600BP
400BP
200BP
0BP
-200BP
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date


5 : 2504±33BP
68.2% probability
770BC (11.6%) 730BC
690BC (10.9%) 660BC
650BC (45.7%) 540BC
95.4% probability
790BC (95.4%) 510BC
Radiocarbon determination
2800BP
2700BP
2600BP
2500BP
2400BP
2300BP
2200BP
1000CalBC
800CalBC
600CalBC
400CalBC


6 : 101±32BP
68.2% probability
1690AD (18.9%) 1730AD
1810AD (49.3%) 1920AD
95.4% probability
1680AD (27.3%) 1740AD
1800AD (68.1%) 1940AD
Radiocarbon determination
300BP
200BP
100BP
0BP
-100BP
-200BP
1500CalAD
1600CalAD
1700CalAD
1800CalAD
1900CalAD
2000CalAD
Calibrated date

弥生土器表面の科学分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土の彩色された弥生土器について，次のとおり分析を行った。

1　試料

弥生土器１点（遺物番号767　取上番号13800）

2　観察・分析方法

⑴　形状観察

光学顕微鏡による10～200倍観察並びに走査型電子顕微鏡（日本電子製ＪＳＭ-5300ＬＶ）による2000～3500倍観察を行った。電子顕微鏡観察に際しては，顔料の一部を削り取り，観察用の試料を作成した。

⑵　蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μｍ）を使用した。分析対象は元素番号11のナトリウム（Na）からウラン（U）までである。分析条件は挿図内に示した。

3　結果

⑴　形状観察

帯状に暗赤褐色の顔料が塗布されている。また，一部ではあるが，黒色の顔料と思われるものも付着していた。ハケかヘラのようなもので軽くなでたように見えるが，意図的に塗られたものか，何らかの作業の際に付いたものかは不明である。

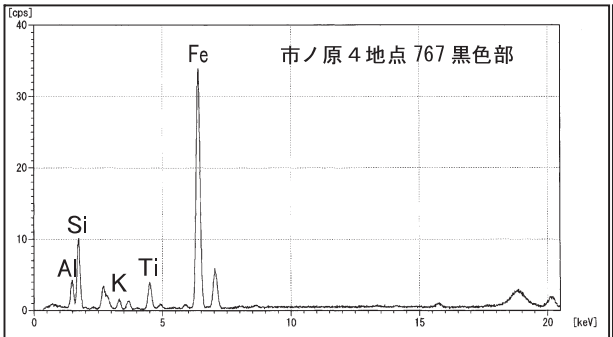
光学顕微鏡での観察では，明らかに赤色顔料の上に付着していることを確認できた。粒子は細かく，高倍率でも物質を特定できるような情報は得られなかった。

電子顕微鏡による観察では，鉄細菌に由来するパイプ状粒子など，微生物の痕跡は見られなかった。

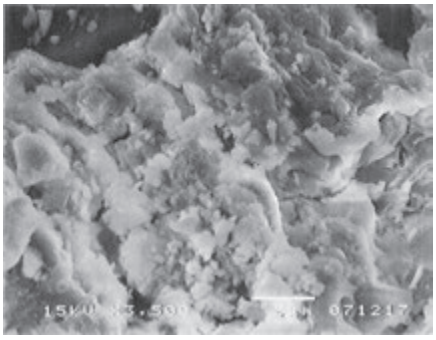
⑵　蛍光Ｘ線分析

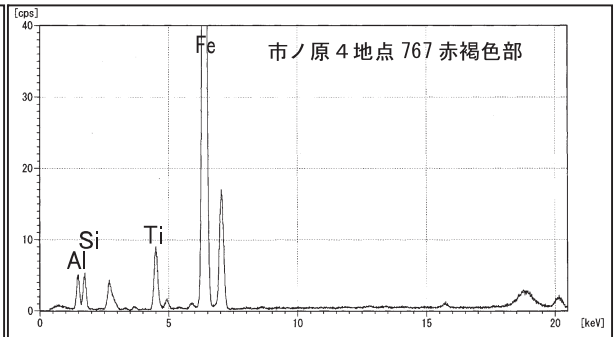
赤色部分・黒色部分共に，鉄（Fe），アルミニウム（Al），けい素（Si）などのピークが見られた。黒色部分に比べて赤色部分ではFeのピークが顕著であった。胎土の一部を削り，新鮮な面をだして分析したところFeのピークは黒色部分に比べても弱いものであったことから，赤色部分はFeを主成分とするベンガラであるといえる。また，Al，Siなどは胎土のチャートの中でも同様に現れているため，胎土そのものや土壌中から混入したものと考えられる。

黒色部分については，有機物に由来するものでカーボン（炭素，C）の可能性が考えられるが，本機では分析対象となっていないため，赤外線カメラでの撮影を試みた。しかし墨書のような結果は得られなかった。また，黒色部分４か所，電子顕微鏡観察用の試料２個についてそれぞれ複数回の蛍光Ｘ線分析を行ったが，リン（P）は全く検出されず，カルシウム（Ca）についてはごく弱いピークが見られる程度であった。磁性については，はっきりと有無を確認することはできなかったが，可能性として，有機物を燃やして作られたものではなく，酸化鉄（Fe_3O_4）を主成分とするような粉末を泥状にして塗ったことが考えられる。

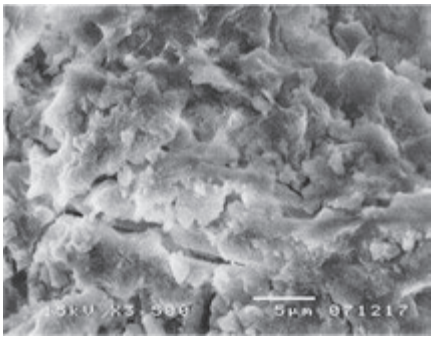


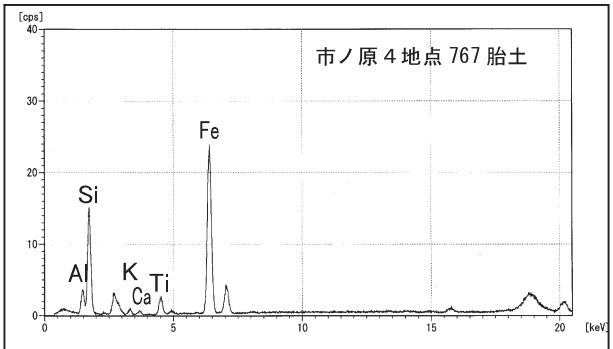
元 素	質量濃度[%]	強度[cps/mA]
Al ｱﾙﾐﾆｳﾑ	25.03	57.17
Si けい素	53.84	173.41
K ｶﾘｳﾑ	2.84	29.14
Ca ｶﾙｼｳﾑ	1.77	25.64
Ti ﾁﾀﾝ	3.21	79.03
Fe 鉄	13.20	759.70
Zr ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ	0.12	17.77





元 素	質量濃度[%]	強度[cps/mA]
Al ｱﾙﾐﾆｳﾑ	34.92	76.76
Si けい素	25.45	83.69
K ｶﾘｳﾑ	0.28	4.51
Ca ｶﾙｼｳﾑ	0.36	8.50
Ti ﾁﾀﾝ	3.95	163.98
Fe 鉄	34.90	2625.05
Zr ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ	0.14	18.15

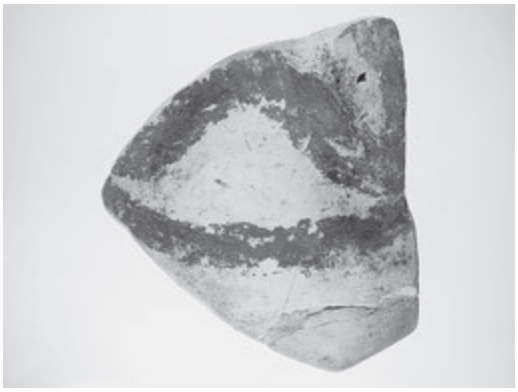




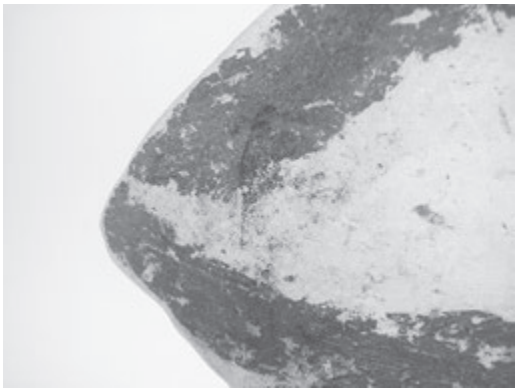
元 素	質量濃度[%]	強度[cps/mA]
Al ｱﾙﾐﾆｳﾑ	16.46	40.70
Si けい素	69.77	260.41
K ｶﾘｳﾑ	1.87	17.48
Ca ｶﾙｼｳﾑ	0.79	10.62
Ti ﾁﾀﾝ	2.15	50.34
Fe 鉄	8.86	518.66
Zr ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ	0.11	18.29

【分析条件】

X線照射径	：100 μm
測定時間	：100 s
X線管電圧	：50 kV
電流	：700 μA
ﾊﾟﾙｽ処理時間	：P3
X線ﾌｨﾙﾀ	：なし
試料ｾﾙ	：なし
定量補正法	：ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞﾚｽ



市ノ原遺跡第４地点　遺物番号７６７



枠内黒色部拡大

古代土師器の赤彩部分の科学分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土の赤彩土器について，次のとおり分析を行った。

1　試料

古代土師器２点（遺物番号28，29）

2　観察・分析方法

(1)　形状観察

双眼実体顕微鏡による10～60倍観察並びに走査型電子顕微鏡（日本電子製ＪＳＭ-5300ＬＶ）による2000～3500倍観察を行った。電子顕微鏡観察に際しては，顔料の一部を削り取り，観察用の試料を作成した。

(2)　蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μm）を使用した。分析条件は次のとおりである。

Ｘ線照射径	：100 μm
測定時間	：100 s
X線管電圧	：50 kV
電流	：900 μA
パルス処理時間	：P3
X線フィルタ	：なし
試料セル	：なし
定量補正法	：スタンダードレス

赤彩部については非破壊で，胎土については，断面の一部を削り，新鮮な面を出して同じ条件で分析した。

3　結果

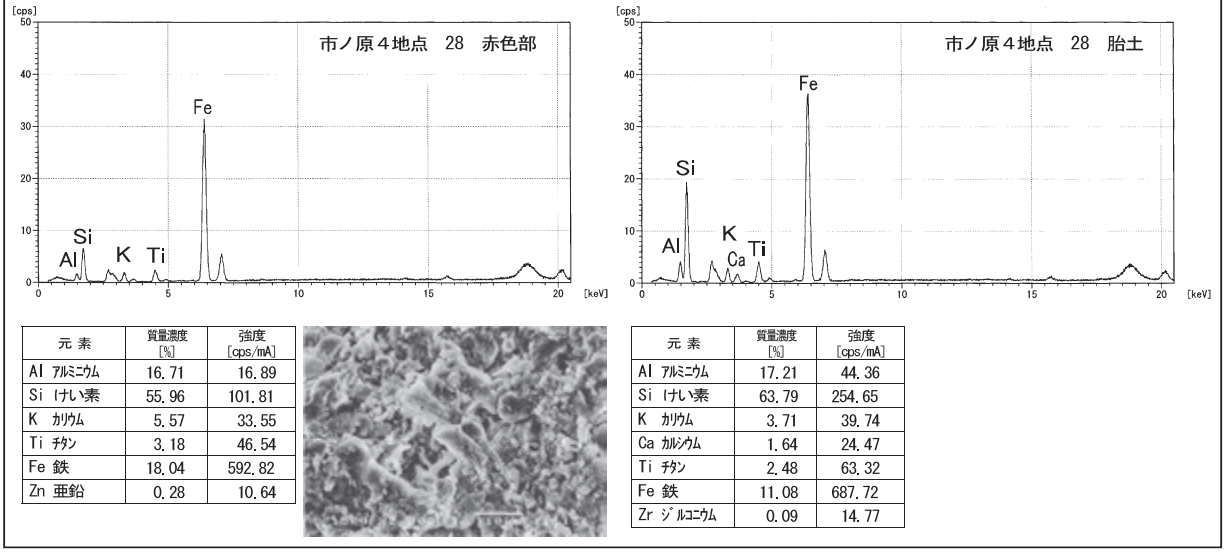
(1)　形状観察

いずれもうすい赤褐色で，内面・外面共に全面的に彩色されていたように見えるが，外面は残存状態が悪い。電子顕微鏡による観察では，鉄細菌に由来するパイプ状粒子は見られなかったが，ケイソウ類など水棲微生物の痕跡が見られた。

(2)　蛍光Ｘ線分析

強度に若干の差はあるものの，いずれも同様の結果が得られたため，ここでは28について分析結果を下に示した。

赤彩部分と胎土で鉄（Fe）のピークが得られたが，赤彩部分の方が，相対的に見て若干強い程度であった。残存している層が薄いことや，胎土そのものか，土壌からの混入によるFeの影響が大きいと思われる。



元素	質量濃度[%]	強度[cps/mA]
Al アルミニウム	16.71	16.89
Si けい素	55.96	101.81
K カリウム	5.57	33.55
Ti チタン	3.18	46.54
Fe 鉄	18.04	592.82
Zn 亜鉛	0.28	10.64

元素	質量濃度[%]	強度[cps/mA]
Al アルミニウム	17.21	44.36
Si けい素	63.79	254.65
K カリウム	3.71	39.74
Ca カルシウム	1.64	24.47
Ti チタン	2.48	63.32
Fe 鉄	11.08	687.72
Zr ジルコニウム	0.09	14.77

第Ⅶ章　発掘調査のまとめ

第１節　縄文時代について

市ノ原遺跡第４地点では，縄文時代早期～晩期まで少量ではあるが，各時期の遺物が出土しており，本遺跡における縄文時代の生活跡がうかがえる。

縄文時代の遺構は，早期と考えられる集石遺構２基，早期や晩期の時期と考えられる土坑４基等が検出された。２基の集石遺構は，いずれも掘り込みは確認されなかった。集石１では，構成礫の中に石皿からの転用がみられ，集石の構造を考える資料である。

縄文土器については，調整や文様をもとにⅠ～ⅩⅩⅢ類に分類した。以下，その型式を示す。

Ⅰ類－前平式土器　Ⅱ類－加栗山式土器　Ⅲ類－小牧３Ａ式土器　Ⅳ類－吉田式土器　Ⅴ類－桑ノ丸式土器
Ⅵ類－押型文土器　Ⅶ類－中原式土器　Ⅷ類－平栫式土器　Ⅸ類－塞ノ神式土器　Ⅹ類－西ノ薗式土器
ⅩⅠ類－曽畑式土器　ⅩⅡ類－深浦式土器　ⅩⅢ類－船元式土器　ⅩⅣ類－春日式土器　ⅩⅤ類－阿高式土器
ⅩⅥ類－中期の型式不明土器　ⅩⅦ類－指宿式土器　ⅩⅧ類－磨消縄文土器　ⅩⅨ類－納曽式土器
ⅩⅩ類－市来式土器　ⅩⅩⅠ類－後期の型式不明土器　ⅩⅩⅡ類－入佐式土器　ⅩⅩⅢ類－組織痕土器

土器の出土量をみると，早期後葉の平栫式土器，塞ノ神式土器と縄文前期末～中期前葉の深浦式土器が多く出土している。

土器の分布（第22図）を見てみると，早期後葉の平栫式土器は，調査区の東側（７・８区）に集中している。塞ノ神式土器は調査区の西側（27～30区）に集中している。深浦式土器は調査区のほぼ中央（15～18区）に集中して出土している。つまり，縄文時代早期後葉と前期で生活の中心区域が異なっている。

土器の分布と遺構との関わりを見てみると，集石１は，平栫式土器が出土した場所であることから，縄文早期後葉のものである可能性が高い。土坑２は，埋土中から吉田式土器が出土しており，また，遺構が検出された近くにも吉田式土器が出土していることから，早期前葉のものである可能性が考えられる。

ⅩⅡ類の深浦式土器については，相美伊久雄氏が分類・編年をおこない（相美2000，2006），三段階に分けられている。59～78，82は日木山段階，79は石峰段階，80・81・83・84は，鞍谷段階に相当すると思われる。

本遺跡では集落の主要な構成要素である竪穴住居跡は発見されなかったが，土器の出土状況をみると，縄文時代早期後葉から中期前葉までの時期が主体であると思われる。

〔参考文献〕

相美伊久雄　2000「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』12　人類史研究会
〃　2006「条痕文土器と縄文施文土器―南九州における縄文時代前期末～中期前葉土器群の再整理―」『大河』８

第２節　弥生時代

１　遺構について

竪穴住居跡から出土した遺物番号２・10は放射性炭素年代測定結果報告書のIAAA－62927（仮1），IAAA－62928（仮２）に当たる。遺物番号２は，2540±40yrBP，遺物番号10は2550±40yrBPの値を示し，暦年較正年代は800ＢＣ～540ＢＣに含まれる。このことから，竪穴住居跡は弥生時代前期のものと考えられる。また，出土内の遺物を分類図に沿って分類するとＡ類２点，Ｃ類土器７点，不明１点，Ｍ類，Ｌ類土器各１点，Ｗ－１類，Ｘ－５類，底部Ａ３ｃア類各１点である。このことから，この各類が同時期に使用された可能性が高く，市ノ原遺跡周辺の土器編年の手掛かりになると思われる。甕形土器の１・２や胴部の８・９が同一個体の可能性があることから口縁部だけで考えると甕形土器は６個体で，各器種構成は，甕・鉢・壺それぞれ３：１：１の比率となる。遺跡全体からは高坏形土器が６点が表採されているが，住居内からの出土はない。また，遺構内からは打製石鏃が出土しており，この時期まで，市ノ原遺跡では打製石鏃の使用が確認できた。類例は魚見ヶ原遺跡（参考文献参照）の竪穴住居内から検出されている。

竪穴状遺構は，２基検出されており，分布図を見ると１号竪穴状遺構の検出されたＥ－20区は，Ⅲ層以下の層で各土器の集中が見られる地区である。それぞれⅢａ層相当の埋土として取り上げられており，１号竪穴状遺構からは，Ｃ類が２点，Ｅ類が２点，Ｖ類が２点，Ｗ－１類が１点，Ｙ類が１点出土している。各器種構成は甕・鉢・壺・高坏それぞれ４：０：３：１の比率となる。Ｌ類は，断定はできないため比率からは除外した。２号竪穴状遺構からＣ類，Ｌ類と思われるが各１点出土している。

２　土器の分類について

土器の編年を考える上で，西北九州で編年の確立されている壺形土器を中心に考えたいところだが，市ノ原遺跡における壺の出土例は少ないことや大きな変化を見いだしにくいことから甕形土器を中心に考えることが妥当ではないかと考えた。

甕形土器は，Ａ～Ｉ類までに分類した。Ａ～Ｅ類は弥生時代前期，Ｆ～Ｉ類は弥生時代中期までの土器である。第４地点では，Ｆ～Ｉ類は出土例が非常に少なく，調査区内の主たる遺物ではないため，周辺にその遺構等が存在するものと考えられる。Ａ類からＢ類にかけて，突帯は口唇部に向かって上昇し，刻目突帯の成形や器面調整も丁寧になっている。Ｃ類は，上胴部はＡ・Ｂ類より緩やかに屈曲し，屈曲のない砲弾形のものがある。突帯はＢ類より上に口縁部で接し，上部突帯が，①小さなものやつまみ出して突帯をつけるもの②口唇部に直接刻目を付けるもの，③刻目突帯を付けるもの，④突帯が口唇部に接するために，口縁部正面が平坦にナデて調整しているものの４つに細分することができるが，口縁部に小さな突帯を貼りつける器種のバリエーションとしてとらえ，ひとつに分類した。出土層を見てもこのバリエーションの前後関係は不明である。下條氏（愛媛大学教授）の指導によると，口縁部が如意化する際に，つまみ出して口縁部を曲げる例があり，①はやや新しい時期に位置する可能性がある。①～④の変化あるいは同時性については，今後の研究の深化を待ちたい。ただし，竪穴住居内出土遺物との比較のため遺物番号251は，放射性炭素年代測定報告書の（3：IAAA－62929）にあたり2560±40yrBPの値を得ている。住居内遺物の値とは10年ほどの差が見られるが，同時期に存在していた土器である可能性を示している。このことから，Ａ類，Ｃ類，Ｍ類，Ｌ類，Ｗ－１類，Ｘ－５類は，同時期に使用されていたといえる。Ｄ類は，口縁部が廂状の突帯となり真横に張り出すものとやや口縁部が垂れ下がり，側面から口縁部上部が見えるものと二つに細分できる。これも出土層での分類は困難であり，Ｃ類同様，今後さらに相関関係を見ていく必要がある。Ｅ類は口縁部が，折り曲げたり緩やかに外反したりする如意形で，緩やかに張る胴部を持つ。突帯を持たないものや胴部に突帯を持つものがあり，刻目はＤ類土器よりも細かく小さく，密に施文をする。口縁部もほとんど曲げないものから，大きく緩やかに曲げるもの，小さく曲げるものに分けられ，その変化によって前後関係があるのか，同時期のバリエーションなのか不明である。田畑氏（山口大学助教）に指導を受けた際に，この土器が作成されていた時期に板付式土器の影響を受けたものと思われるが，如意形に似たものとしてはＤ類の中にも見ることができ，そのまま板付式の影響を受けて変化したものや影響を受けて変化した突帯文土器の影響を受けて，一条甕が如意形に変化したものが混在していることも考えられるとの指導を受けたが，現時点のひとつの方向性として有効ではないかと考える。

鉢形土器はＪ～Ｒ類に分類される。先に述べた竪穴住居内遺物からＭ・Ｌ類は同時期であるといえる。ただし，Ｌ類は，鉢形土器の中で主体の土器であり，口縁部を①強く折り曲げたものや②肥厚させたもの，③平坦なものや④断面三角形の突帯を付したものがあり，バリエーションが４つに分けられる。甕形土器と同様，それぞれに前後関係がある可能性もあるため，一概に同時期のものと言い切れない。また，本遺跡で特徴的である刻目突帯を持つＭ類は，突帯の位置や刻目の施文で分類も可能であるが，甕形土器と同様な変化を見せるのか，今後の類例を待ちたい。壺形土器は，Ｓ類～Ｖ類の口縁部，Ｗ・Ｘ類の胴部に分類される。下條氏（愛媛大学教授）の指導によると頸部のヘラミガキの方向は，縦位の朝鮮半島系と横位の在地系に分けられる。本遺跡においては，縦位４点，横位23点，斜位10点，不明２点であり，斜位のものと在地系とすると半島系：在地系の比率は約１：６弱となる。胎土を見ると大きな粒の長石が含まれる在地（鹿児島県）外からの搬入品も見られる。Ｗ・Ｘ類は口縁部との接合ができず，全体の器形は不明であるが，Ｗ－２・３・４類は弥生時代前期中葉以降に相当するといわれるが，市ノ原遺跡の地域性を考慮するとそれ以降の可能性もある。

以上，指導を受けたことを含め，この地域性を考慮すると遺構内の出土例をまとめることで，今後土器の変遷と文化の伝播の様相が分かってくると考えられる。

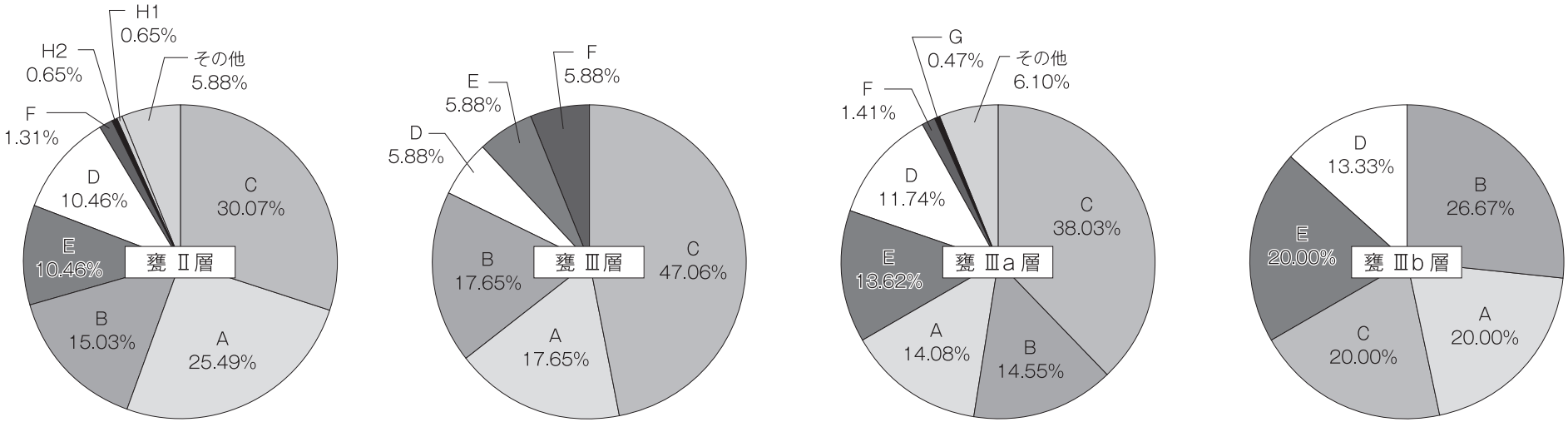
３　層別分類比について（第285図・第286図）

甕形土器は，Ａ～Ｅ類の各類は比率の増減はあるものの，ほぼどの時期にもあり，Ⅲａ層の時期にＦ・Ｇ類が出現する。壺形土器は，ＯＬＭ類を主体として甕と同様で，Ⅲａ層の時期にＪＮＰ類が出現する。壺形土器は，Ⅲｂ層にＶ類とＷ－２類・Ｘ－１・５・６類が，Ⅲａ層にＴ・Ｓ類の出現と共にＸ－２～４類・Ｗ－３類が加わり，胴部に多様性が出現する。Ｕ類は，Ⅱ層のみ２点の出土で，新しい時期のものか，あるいは調査区外にその主体を持つ地域がある可能性がある。このことから，如意形口縁を持つ土器の文化がⅢａ層の時期に伝播した可能性があり，各器種とも多様性を帯びることが分かる。器種比率を見ると，高坏形土器は，基部と脚部だけで見るとⅡ：Ⅲ：Ⅲａ：Ⅲｂ＝２：２：２：１点あり，数が少ないため比率を出していないが，Ⅲｂ～Ⅲａ・Ⅱ層になるにつれ，鉢の比率が大きくなる。特徴的なことは，壺の比率が鉢よりも大きいことであるが，胴部を分類の中に入れたデータであることが大きい。これを壺形土器のＳ～Ｖ類の比率を加えて出すと甕：壺：鉢：高坏はⅡ層49：27：24：２，Ⅲ層55：26：19：２，Ⅲａ層62：24：15：２，Ⅲｂ層54：32：14：１の比率である。

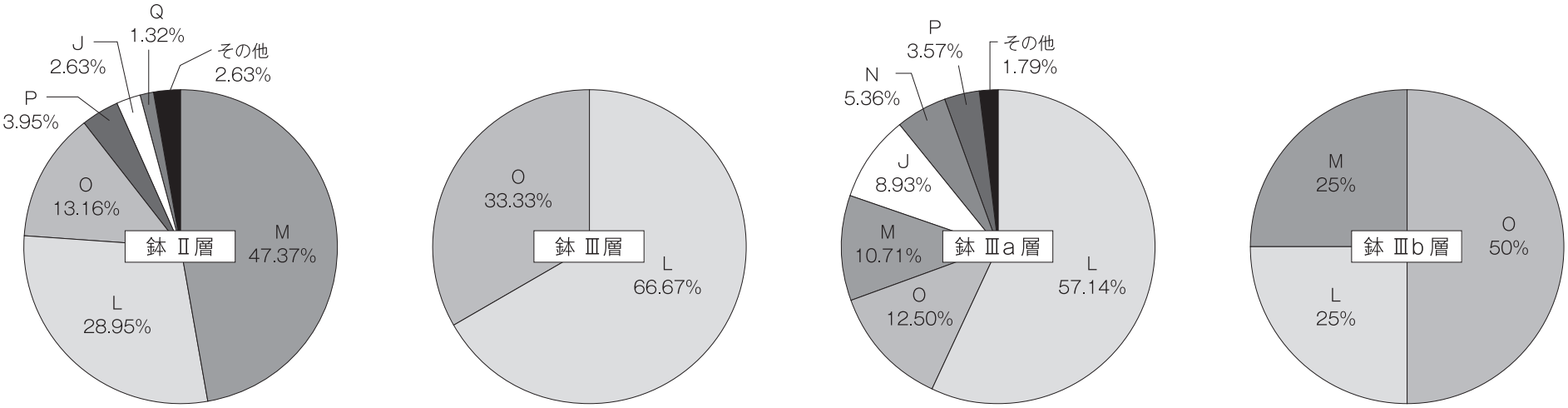
４　底部木葉痕について

土器底部に61点の木葉痕を確認した。その中で木葉痕の残りのよいものを選び，18点の拓本を県立博物館の寺田仁志主任学芸主事に指導をお願いした。その結果，葉身中央部分の圧痕で，葉の形質，とりわけ葉のへり

1　層別甕形土器分類比

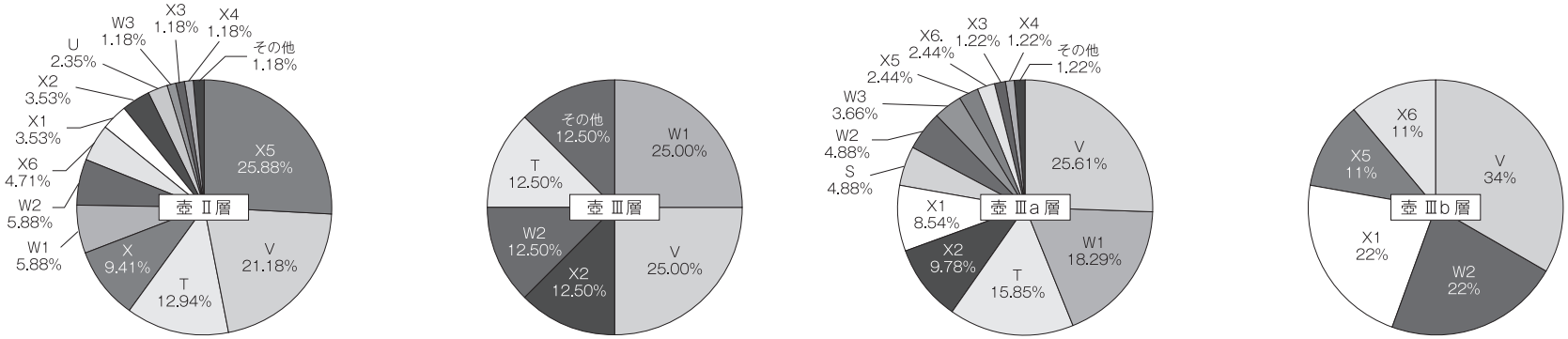


2　層別鉢形土器分類比

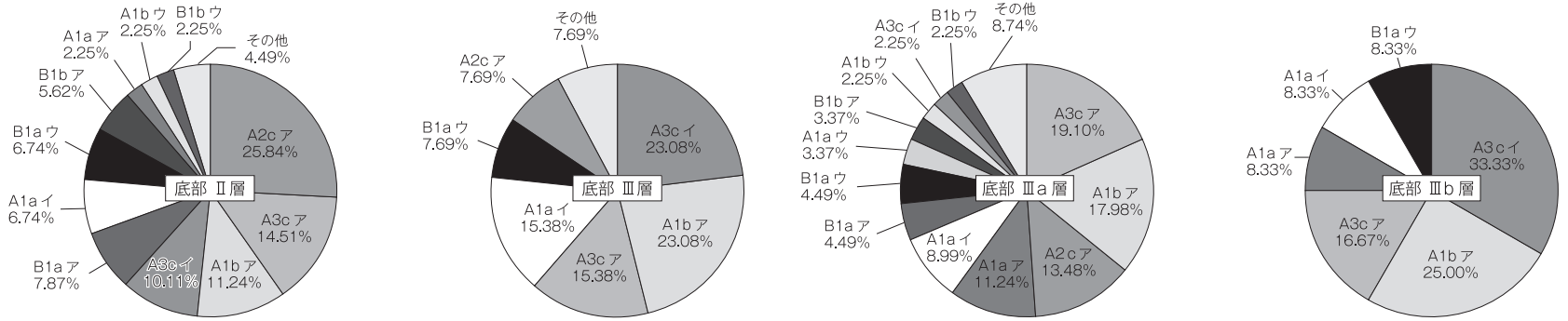


第285図　層別土器分類比率図

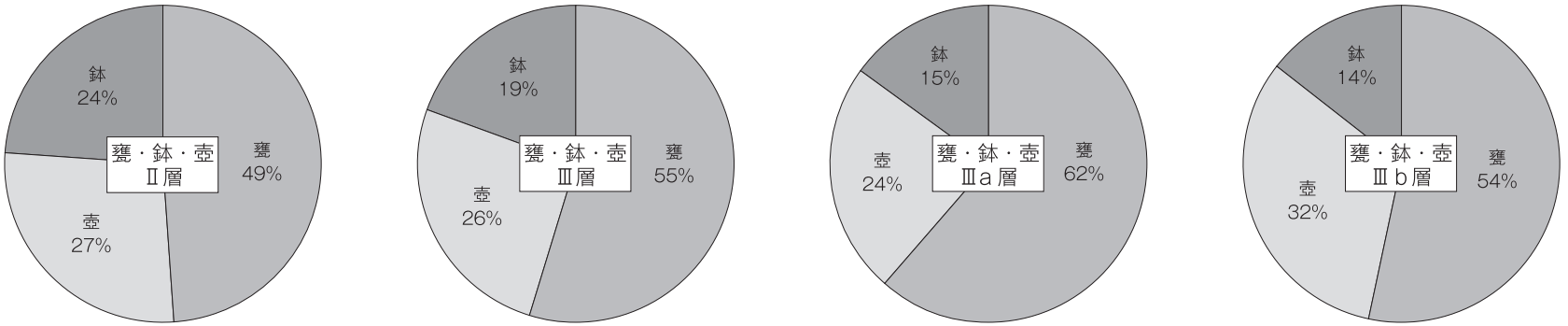
3　層別壺形土器分類比



4　層別底器部分類比

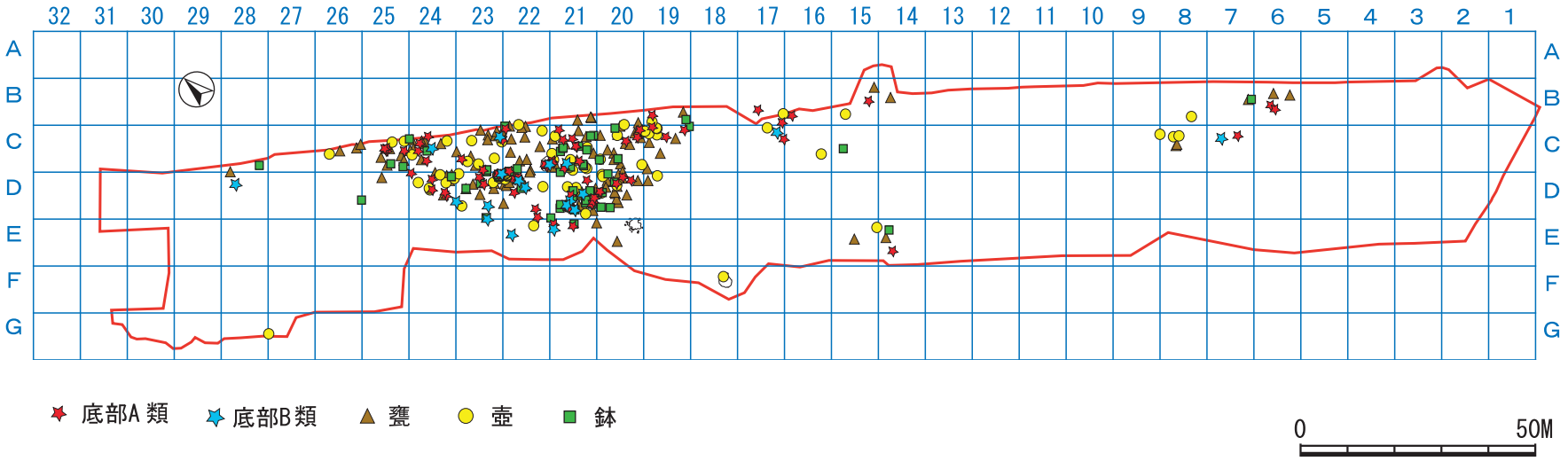


5　層別器種比

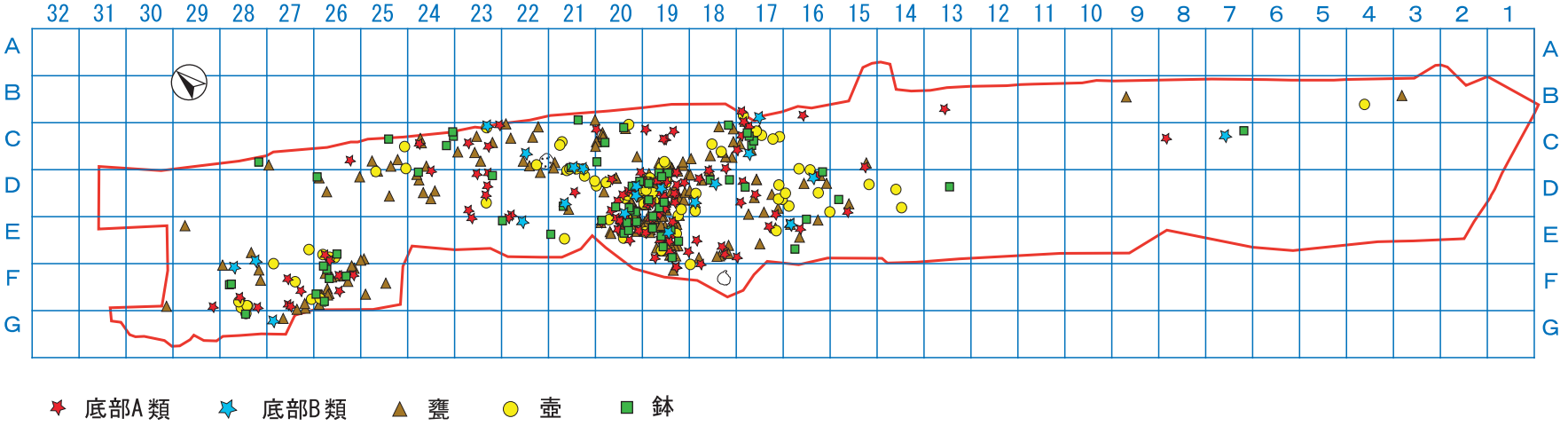


第286図　層別土器器種比率図

Ⅱ層出土状況



Ⅲ層出土状況



第287図　弥生時代の土器底部と各器種分布図

の形状が不明であるため，使用された木葉の特定はできなかった。底部圧痕の植物は，先駆性のあるの草木類（落葉樹）で，アカメカシワのような草木類である可能性を示唆された。アカメカシワは，トウダイグサ科アカメカシワ属の落葉高木で「葉は，径11～20㎝，分裂しないハート形のものから先が２～３裂し，５角形に近いものまでまざる。葉脈は３行脈，下端の腺体は若いときにはぬれたように光る。（中略）若い照葉樹林（二次林）によく生える暖帯の高木で，秋田県・岩手県以南に分布する。」（註）ある。底部圧痕を観察すると，強く押しつけられ，移動による圧痕のゆがみがない。このことから，土器は粘土が柔らかい状態で置かれ，さらに上から強く押しつけていることから，製作時初期に使用されたものと考えられる。また，落葉樹であるアカメカシワは秋に紅葉し，冬に落葉することから，市ノ原遺跡第４地点の木葉痕の付く土器製作は，春から夏の間に行われたと考えられる。

５　底部の分布について（第288図）

底部をＡ類とＢ類に分け，甕形土器の抽出を試みたが，各器種との関連（第289図）を見るとＡ類の数が多いこともあり，各器種とＡ類は近接している。Ⅲ層のＤ－23区，Ｆ－28・29区を見ると壺形土器の周りにＡ類底部が多い傾向がある。当初，壺形土器の底部はＢ類を主とするものと仮説を立てて分類を行ったが，菜畑遺跡（唐津市教育委員会1972年）の壺形土器の器形を追加して測りだしたところ，53°以上63°未満の範囲にも含まれた。浅学による仮説の不備であるが，この数値の範疇に含まれる壺形土器が，市ノ原遺跡には多い傾向があることが分かる。しかし，分布図上のことで，接合もできなかったことを含め，この傾向があると述べるにとどめたい。

（註）尼川大録・長田武正　2006『検索入門　樹木②』保育社　56－57頁。

６　第４地点の弥生時代の生業

扁平打製石斧の大量の出土は，何らかの耕作を行っていた可能性を示し，土器や石斧分布から分布の空白地帯に耕作地があった可能性を示唆している。土器の植物遺体痕の同定はできなかった（少なくとも籾痕を確認できなかった）ことから，稲作以外の何らかの畑作を行っていたと考えられる。また，壺形土器や如意形口縁の甕形土器を持つ弥生的な文化の影響を受けながらも，稲作以外の耕作と大量の打製石鏃の出土から見られるように狩猟生活もおこなう旧来の生活様式が継続されていた地域性が推測される。

７　出土遺物について（石器）

石器組成は当時の生業を反映しているものと考えられ，本遺跡で各種の石器が出土している中で，石器の量的割合も当時の生業における労働の度合（あるいは石器の消耗度合）を反映しているものと予想される。なお，撹乱により時代区分が確実でないため，石器は一括りとしてまとめた。

本遺跡で量的に突出して多く出土したものが，打製石斧（土堀具）であり，石器全体の39.8％を占めている。（ただし，部位がある程度判別できる破損品を含む。）次が狩猟具である石鏃（破損品，未製品を含む）24.4％，そして植物性食料加工具と考えられる磨石・敲石の12.3％と続く。

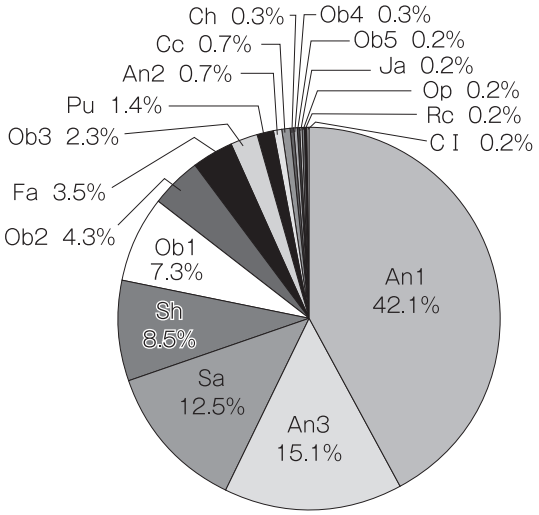
多量に出土した打製石斧製作に伴う破片や剥片類から，遺跡内で必要な打製石斧は遺跡内で製作された可能性が高い。また，石材も遺跡周辺の遠見番山で産出される安山岩の使用が最も多い。

扁平打製石斧のような土堀具が多量に出土している事実から，当時の生業の中で山芋など根茎類の植物質食料確保に占める作業が多かったことが考えられる。また，シイやカシなどの堅果類の植物質食料の加工のためのものと考えられる磨石・敲石が多いことも指摘できる。

県内の縄文時代晩期から弥生時代の遺跡の石器組成を比較してみると，鹿屋市榎崎Ｂ遺跡Ⅲ層では，土堀具26.8％，磨敲石類24.4％，石鏃17.9％と，特に土堀具の割合が高いなど，本遺跡と石器組成が類似している。一方，鹿児島市仁田尾遺跡の縄文時代晩期の石器組成では，磨石類や石鏃は多量に出土しているが，打製石斧（土堀具）の出土がほとんどなく，同時代の生業にも地域差が大きいことがわかる。それぞれの地域集団で石器組成が異なることより，生業における主要な活動に相違があったことが考えられる。今後，一層の比較検討の余地が残されている。

このように，本遺跡の縄文時代晩期及び弥生時代の石器組成から判断すると，植物質食料への依存度が狩猟と同程度か，それ以上に高かったものと思われる。ただ消費していた植物質食料が堅果類や，自然に生育する根茎類の採取のほか，土器等の分析による検証はできていないが，打斧の出土状況から，雑穀類などの植物の栽培を行う生業形態を受け入れていたと推定されることを指摘しておきたい。また，三角壕形石製品のような，祭祀具と推測される用途不明な器種の出土から，他集団・他地域との交流が示唆される。

本遺跡の石材組成をみると，磨敲石や石皿，先にも述べた土堀具については，安山岩・砂岩等，周辺の石材の多用が認められるが，黒曜石に関しては，上牛鼻産黒曜石に類似する県内産以外に，県外産地のもの，佐賀県腰岳産に類似する石材の割合が高く，少数ではあるが佐賀県嬉野産，長崎県針尾産と推定される石材の石器も認められる。また，西北九州のサヌカイトと思われる石材を素材として作製された石鏃・スクレイパー等の



第288図　市ノ原遺跡第４地点　石器石材組成表

弥生時代（分類）石器組成表

器種	石鏃	石匙	スクレイパー	楔形石器	石錐	異形石器	二次加工剥片	使用痕剥片	打面再生剥片	石核	礫器	垂飾品	縄文石器合計	石器合計
器種別出土数	297	11	67	16	9	5	14	11	1	68	6	1	506	1215
全体の比率	24.4	0.9	5.5	1.3	0.7	0.4	1.2	0.9	0.1	5.6	0.5	0.1	41.6(%)	

縄文時代晩期（分類）石器組成表

器種	磨製石斧	打製石斧	磨石・敲石	石皿	石包丁	砥石	軽石	三角壕形石製品	生石器合計	石器合計
器種別出土数	24	483	150	31	1	8	8	4	709	1215
全体の比率	2.0	39.8	12.3	2.5	0.1	0.7	0.7	0.3	58.4(%)	

出土が多く見られることから，当時の生活の中で人的交流や物的交流が盛んに行われていたことが示唆され，あらゆる面から検証していく必要がある。

第３節　古墳時代について

古墳時代では，土坑が７基，焼土遺構が３ヵ所検出された。遺物は，Ⅱ層及びⅢａ層から南九州の在地土器である成川式土器が多く出土した。

遺物の分布状況をみると，調査区のほぼ中央（14～21区）に集中して出土している（第198図）。土坑や焼土など遺構の検出された地域も遺物の集中域と重なる（第193図）。したがって，市ノ原遺跡第４地点の古墳時代における生活の中心地域は，14～21区にあったと推定できる。

遺物について，主な器種の特徴をまとめて述べる。甕形土器は，口縁部が広口で脚台を持つタイプで３つに分類した。Ⅰ類は弥生時代終末期～古墳時代前期の中津野式土器，Ⅱ類は，古墳時代前期後半の東原式土器，Ⅲ類は古墳時代中期～後期の笹貫式土器に比定される。出土した遺物を時期的に見ると，古墳時代前期後半に相当するⅡ類が最も多く出土している。Ⅰ類の中津野式土器に比定される12（第200図）は，胴部下半外面に「ケズリ」が施され，土器製作における中津野式土器の特徴がよく表れている[1)]。Ⅱ類は口縁部が緩やかに外反するタイプで，無文のものと屈曲部に刻目突帯などが施される有文の２種類が見られる。17・26（第201・203図）は，口縁部直下から内面が全面的に黒色を呈し，内面に蓋をかぶせたことが推定される資料である[2)]。

壺形土器は，胴部に刻目突帯などが施された有文のタイプが多い。大型のものは，突帯があるタイプで突帯の断面は台形で幅が広い。刻目突帯は，一条～三条施され，刻目の浅いものや深いものなど様々見られる。外面に煤が付着している資料（第210・211図 96・97）がみられたことから，壺形土器も煮沸に使用されたことが考えられる[3)]。

高坏形土器は，赤色顔料が施されるタイプがみられる。外面の器面調整はミガキがほとんどである。

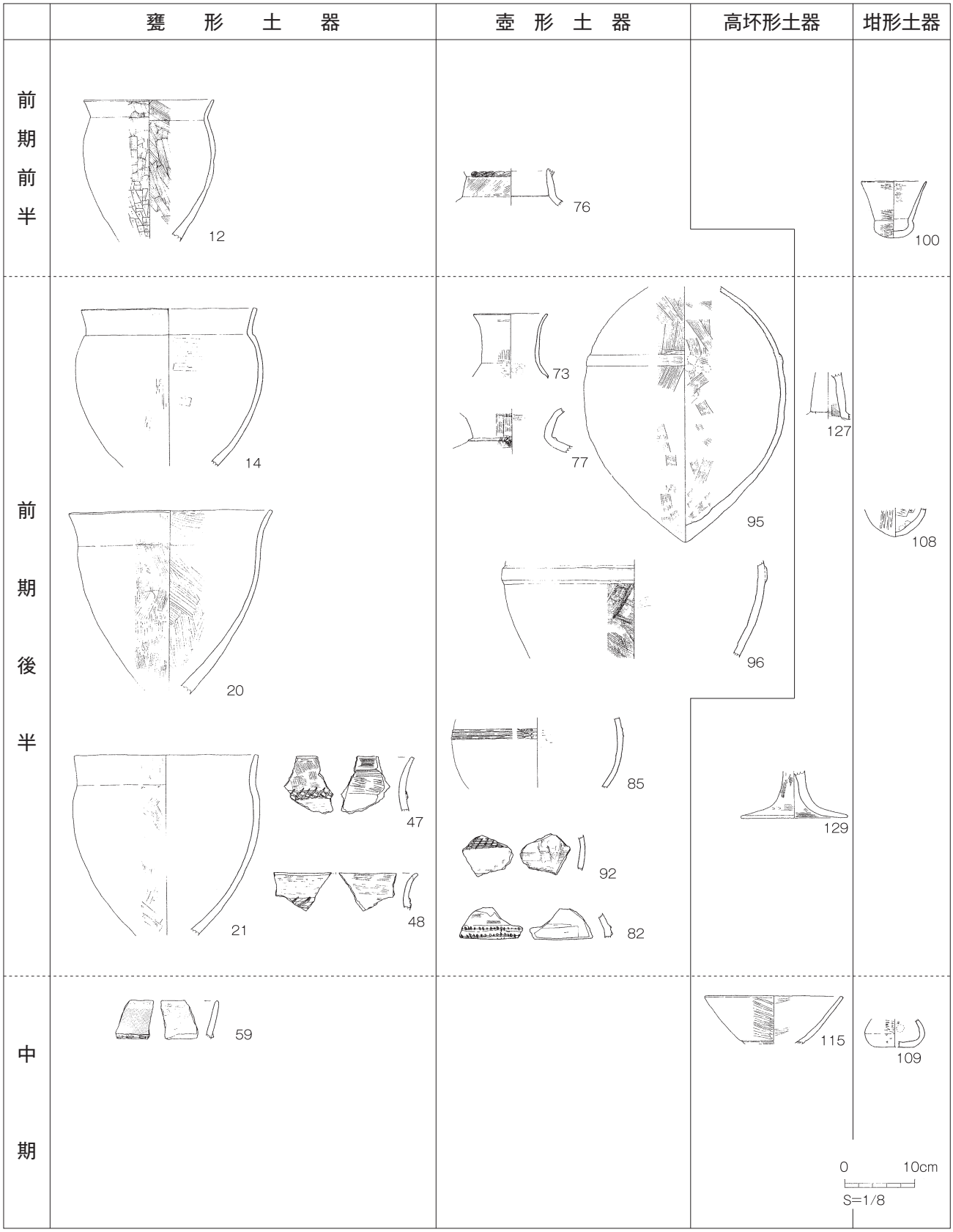
市ノ原遺跡第４地点から出土した成川式土器を器種で各時期ごとに整理したものが第289図である。掲載した土器は，包含層から出土したもので，遺構から出土した一括資料ではない。したがって，違う器種との前後関係はよく分からないが，おおまかな時期区分で掲載した。土器の器種により出土数に違いがみられるが，時期的には古墳時代前期から後期まで幅広い時期で出土しており，各器種とも古墳時代前期後半に位置づけられるものが多い。

出土した遺物から，本遺跡では古墳時代前期から後期の長い間で人々の生活跡がみられる。特に古墳時代前期後半に相当する土器の出土が多いことから，この時期が主体になると考えられる。調査区からは住居跡など集落を想定できる遺構は検出されなかった。しかし，同じ台地で隣接する第３地点からは古墳時代の住居跡が発見されているので，集落の中心域は第３地点側（台地の北側）にあることが考えられる。

註）

１）　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007『堂園Ａ遺跡・古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡・山神迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（108）。

２）　鹿児島大学法文学部准教授本田道輝先生のご指摘による。



番号は遺物番号を表す

第289図　市ノ原遺跡第４地点出土成川式土器一覧

3） 鹿大構内遺跡で出土した笹貫式の壺形土器にも煤の付着が確認されている。煤が付着している位置を，甕形土器と比べてもあまり違いがみられないことが分かっている。詳しくは，鹿児島大学埋蔵文化財調査室2004『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』15 を参照のこと。

第４節 古代から中世について

１ 検出遺構

⑴ 掘立柱建物跡

本文でも述べたように，調査中に検出されたものと，整理作業で確認できたものを総合的に検討し，27棟の掘立柱建物跡を掲載した。

これらの遺構が古代か中世かについては，遺構の検出面もⅡ層と同一面であり，出土遺物もみられないことから，古代～中世というおおまかな範疇でとらえるにとどめた。

⑵ 溝状遺構，道路状遺構・道跡

これらの三つの遺構については，その特徴が類似しているところが多く，判別しがたかった。基本的には，やや深目で硬化面が見られないものを溝状遺構，硬化面が見られるものを道路状遺構及び道跡とした。時期については，道路状遺構（第245図）は，側溝から出土した遺物から中世後半と考えられる。溝状遺構や道跡については，遺構の検出状況が掘立柱建物跡と同様なことから，掘立柱建物跡と同様に古代～中世というおおまかな範疇でとらえるにとどめたい。

２ 出土遺物

本遺跡の古代から中世の遺物は，遺構の数に比べるとその出土量は少ない。

古代は，土師器・須恵器等である。土師器の坏や内黒土師器，須恵器の壺等の特徴からすると，本遺跡における古代の中心は９世紀から10世紀が中心であったと思われる。

中世は，土師器・中世須恵器・土師質土器及び輸入磁器が出土している。遺物が少ないために遺物から見た中世像は，なかなかとらえがたいが，完形の土師器，中世須恵器及び青磁や白磁から垣間見れるところでは，14世紀から15世紀の遺物が多いようである。

第５節 近世について

１ 検出遺構－道路遺構について

本遺跡では，掘立柱建物跡，溝状遺構，道路遺構，鍛冶炉跡などが検出された。特に，道路遺構は，藩政時代薩摩藩の主要街道であった出水筋の一部と考えられている。これまで，近世の街道については，古文書や絵図などの文献資料や街道周辺の歴史的環境（史跡や文化財など）に基づいた調査が行われてきたが，今回の発掘調査により考古学的手法で道の構造や規模などが明らかになったことは特筆される。

⑴ 道の建設と廃棄の時期

道路遺構の側溝からは，19世紀代の苗代川系の薩摩焼が出土している。この道路遺構は，1777（安永６）年に出水筋が付け替えられる前の旧道の一部と考えられている。出土遺物から道路の建設の時期を特定することはできないが，遺構が埋没した時期は19世紀後半で，その時期に道としての機能が失われたと思われる。

⑵ 道路遺構と他の遺構との関係

道路遺構の西側の調査区（27～31区）で，掘立柱建物跡，道跡，土坑，鍛冶炉跡など近世の集落を想定できる遺構が検出されている（第258図）。掘立柱建物跡は３棟検出されたが，いずれも主軸は東西方向で道路遺構（街道跡）と直交する方向である。また，３条の道跡は道幅も狭く，小規模なもので，道路遺構と同じ南北方向に延びている。検出された近世遺構からは出土遺物が少なく，集落が営まれた時期はよく分からないが，掘立柱建物跡や小規模な道跡の方向からは道路遺構を意識して建設されたことが推定できる。

⑶ 他の街道跡の発掘調査事例

近世の街道跡（道路遺構）の発掘調査事例は少ない。ここでは，九州の２つの事例を紹介したい。一つは，県内の中原遺跡（姶良郡姶良町脇元）で大型道路遺構が検出されている。幅約６ｍで，検出された部分は約50ｍの直線的な道路遺構である。薩摩藩の主要街道の一つである「大口筋」との関わりが指摘されている。次に，福岡県の原田（はるだ）宿跡の近くでは長崎街道の道路遺構が検出されている。石敷きで，道幅2.0～2.7ｍの道路跡である。

２ 出土遺物

調査区のⅡ層から陶磁器が多数出土した。大半は，薩摩焼である。産地は，地元の苗代川系で，時期は17世紀後半から19世紀代のものが出土している。遺物の中には，肥前系陶器や京焼風陶器もある。また，鍛冶関連遺物も出土している。鞴羽口や鉄滓などである。鉄滓は，椀型滓が中心だが，中には含鉄鉄滓も含まれ

ている。鍛冶炉跡の遺構も検出されていることから，集落で小規模な鍛冶が行われていたことがうかがえる。

第６節　考察　中・近世の市来と市ノ原遺跡

１　はじめに

市ノ原遺跡第４地点の発掘調査では，中・近世について次のような成果を上げることができた。

⑴　中世の道路状遺構が見つかった。上下で２つの路面（硬化面）が確認され，側溝からは15世紀代の中国製輸入磁器（白磁・青磁）が出土した。

⑵　点数はわずかであるが，中世の中国製輸入磁器や国内産の東播磨系須恵器，常滑焼などが出土した。

⑶　近世の道路遺構が見つかった。その遺構は，主要街道の出水筋の一部と考えられ，文献資料では分からなかった道路の構造等が明らかになった。

市ノ原遺跡の所在地は，中世の市来院で，北は薩摩郡や入来院，南は伊集院や日置北郷（ほくごう）である。島津庄の寄（より）郡（ごおり）で，市来院を支配した郡司（院司）は市来氏である[1)]。また，院内の川上の領主が一族の河上氏である。市来院は東シナ海に面し，以前から市来氏や河上氏と海上交通との関わりが指摘されてきた[2)]。近年中世史研究では都市への関心が高まり，それに伴う物流の研究が盛んに行われている[3)]。また，最近の中世考古学の成果が陸上交通などの交通史研究の進展に大きく寄与していると言われる[4)]。

本稿では，最近の発掘調査の成果も取り入れながら，中・近世の市来の様相を復原する作業を行う[5)]。そのアプローチには，古文書や絵図を用いた文献史学的方法と発掘調査の成果を用いた考古学的方法を用いる。今回，中世においては市来という地域にどのような道が通っていたのか考察を行い，近世においては1837（天保８）年の「市来郷絵図」（第290・291図）からみえる市来の様相を概観してみたい。そして，市ノ原遺跡第４地点の性格についても考えてみたい。

２　中世の様相－市来院内の道

⑴　大道－薩摩郡と伊集院を結ぶ道

応安５（1372）年２月９日に印阿が子息家連に市来院内の所領を譲った譲状[6)]の一部を次に掲げる。印阿も家連も市来氏や河上氏の系図には見えないが，先にこの史料を紹介した栗林文夫氏は「河上氏の庶流にあたる人物」と推察している[7)]。

「高江長崎寺門前吉留五郎左衛門所持之文書」

譲渡　子息次郎左衛門尉家連所

在薩摩國市来院内水田薗等事，

一，大里村河崎薗一所并水田五段，東者限大道，南西者限古河田，北者限大河，

一，永里名下矢母村内牟津幾一町

（後略）　※傍点は筆者による

この史料からは，まず譲与された土地の境界（四至）が読み取れる。また，14世紀後半に市来院内の大里村には道（第293図道Ｂ）が通っていたことがわかる。また，史料中の「北者限大河」の大河は現在の大里川と考えられる。

現在，大里川の流路は，沿岸部で北西に流れ，渡瀬橋付近で重信川と合流し東シナ海に注いでいるが，古くは南の崎野付近で海に入っていたという[8)]。「河崎薗」という地名を現行の小字で探してみると，「川崎堀」，「川崎堀茶屋」の２か所が見つかる。崎野は小字「川崎堀」のほぼ西にあたることから，中世の頃は河崎薗のすぐ北側を大里川が流れ，そのまま西流して海に注いでいたと推定できる（第293図参照）。

近世には出水筋も近くを通っていた[9)]。小字「川崎堀茶屋」の地名からは，街道の休憩施設も想定できる。中世の大道がそのまま近世の街道となったとは断定できないが，大里の「川崎掘」周辺は昔から交通の要地だったことが推測される。

このように，中世の市来院では，大里村（現いちき串木野市大里）を「大道」が通り，その大道は，おそらく南北に延びて，南の伊集院や北の薩摩郡とを結ぶ主要な道であったと考えられる。

⑵　内陸部への道－八房川と陸上交通

八房川は旧市来町と旧串木野市の境を流れている。全長約20㎞で，川上地区を西に流れ東シナ海に注いでいる。八房川河口に位置する市来湊（現いちき串木野市湊町）は，中世以来薩摩国の海外貿易港として栄えた。中世の頃，市来院の領主市来氏やその一族は朝鮮に使いを出し，海外交易に深く関わっていたことが知られる[10)]。

近年，いちき串木野市内でも多くの発掘調査が行われている。その中で，八房川沿いに位置する川上（市来）貝塚[11)]，針原遺跡[12)]，安茶ヶ原遺跡[13)]（第293図参照）からは青磁・白磁の輸入磁器や備前焼・常滑焼東播磨系須恵器など交易によって流入したと思われる中世の遺物が出土している。

内陸部への道を考える際注目されるのが安茶ヶ原遺跡である。遺跡は，市来湊から八房川を約３㎞さかのぼった河岸段丘状に立地する。「安茶ヶ原」の地名は，史料上にもあらわれ，1462（寛正３）年４月15日薩摩国市来院坪付[14]は「あちやかはら」とみえ，河上氏の所領がある場所である。

発掘調査では，掘立柱建物跡や竪穴建物跡など中世の遺構が多数発見された。中世の遺物は，白磁や青磁など中世後半の15世紀のものが主体である。調査地点からは，中世～近世の溝状遺構と複合した小規模な道跡も発見された。報告書担当者は，その中の東西方向に延びる道跡を「市来湊へ延びる恒常的な道」とし，「現在の道よりも以前に使用された」と考えている。また，「遺跡周辺は湊あるいは船溜まり，あるいは渡河点などが近くに存在していた」と水上交通の可能性も推定している。遺跡の性格については「交易活動の一翼を担う，市来湊や渡河点を見下ろす場所として重要な立地にあり，交易や交通を支配するような公的あるいは有力層に関連する遺跡であった可能性が高い」との指摘がなされている。

近世の郷絵図には，八房川沿いに道（第293図道Ａ）が描かれている。さらに，川沿いを内陸部へ進むと，中世の河上氏の山城と考えられる川上城跡がある（第293図参照）。このように発掘調査の成果からも，郷絵図に描かれた八房川沿いの道は中世までさかのぼれる可能性がある。

栗林氏は，「八房川を利用した内陸部への流通経路の可能性」を指摘しているが[15]，筆者も同感である。絵図などの文献資料と最近の発掘調査から得られた考古学的資料から，市来氏（一族の河上氏を含む）は内陸部への物流に八房川を利用する水上交通と湊から内陸部へ延びる陸上交通の２つの経路を利用したと想定できそうである。

３　近世の様相－郷絵図からわかること

次に郷絵図を読み解きながら，絵図からわかる近世の市来について概観してみたい。

絵図には，郷内の山，川，寺院，道，橋，麓などが描かれている。郷境には，「串木野　境　市来」，「市来　境　伊集院」の記載がある。道は朱書きされており，主要街道の出水筋は市来郷の南東から北西方向へ通っている。絵図には，出水筋が付け替えられる前の旧道と付け替え後の新道が両方描かれている。出水筋は湯田村（現在の坂之上馬頭観音付近）で二手にわかれ，「薩摩渡瀬」（現在の大里川河口付近）の南で合流していることがわかる。また，郷内には，脇往還と考えられる道も多数描かれている。

出水筋の付け替えは，地元に残された古文書[16]などから知られていた。絵図の中には，「新往返筋，右，安永六年酉年直方被仰渡，相直候」と書かれた付箋もみられる。絵図作成時に付けられたとは考えられないが[17]，出水筋が付け替えられた事実を示している。

４　むすびにかえて－中・近世の市ノ原遺跡第４地点

最後に，発掘調査の成果から，中・近世における市ノ原遺跡第４地点の性格を考えてみたい。先述したが，本遺跡からは中世の道路状遺構，近世の街道跡が発見された。現在も，遺跡近くで南北に走る市道と東西へ走る県道とが交わっている。これら発見された道路遺構からは，中世から近世にかけて，市ノ原遺跡第４地点は人やモノが往き交う交通の要所だったと想定できる。遺跡名の小字「市ノ原」からは市場の存在も想定できるが，管見の限り史料上では確認できない。今後，市ノ原遺跡第３地点の発掘成果が明らかとなり，市ノ原遺跡全体を通しての遺跡の性格，位置付けがなされるものと思われる。本稿では，多くの課題や問題点が残されているが，文献史学と考古学との融合に少しでも貢献できれば幸いである。

［付記］

報告書に掲載した「市来郷絵図」は，所蔵先の東京大学史料編纂所の許可を得て，鹿児島県歴史資料センター黎明館の紙焼き写真を借用したものである。絵図を掲載した目的は，考古資料と文献資料との比較をし，中・近世の市来の様相を復原する研究のためである。本稿作成にあたり，黎明館はじめ関係機関の協力をいただいた。また，宮下満郎氏（県史料編さん委員）には郷絵図の解読に際して，多くのご教示をいただいた。記して感謝を表したい。

註）

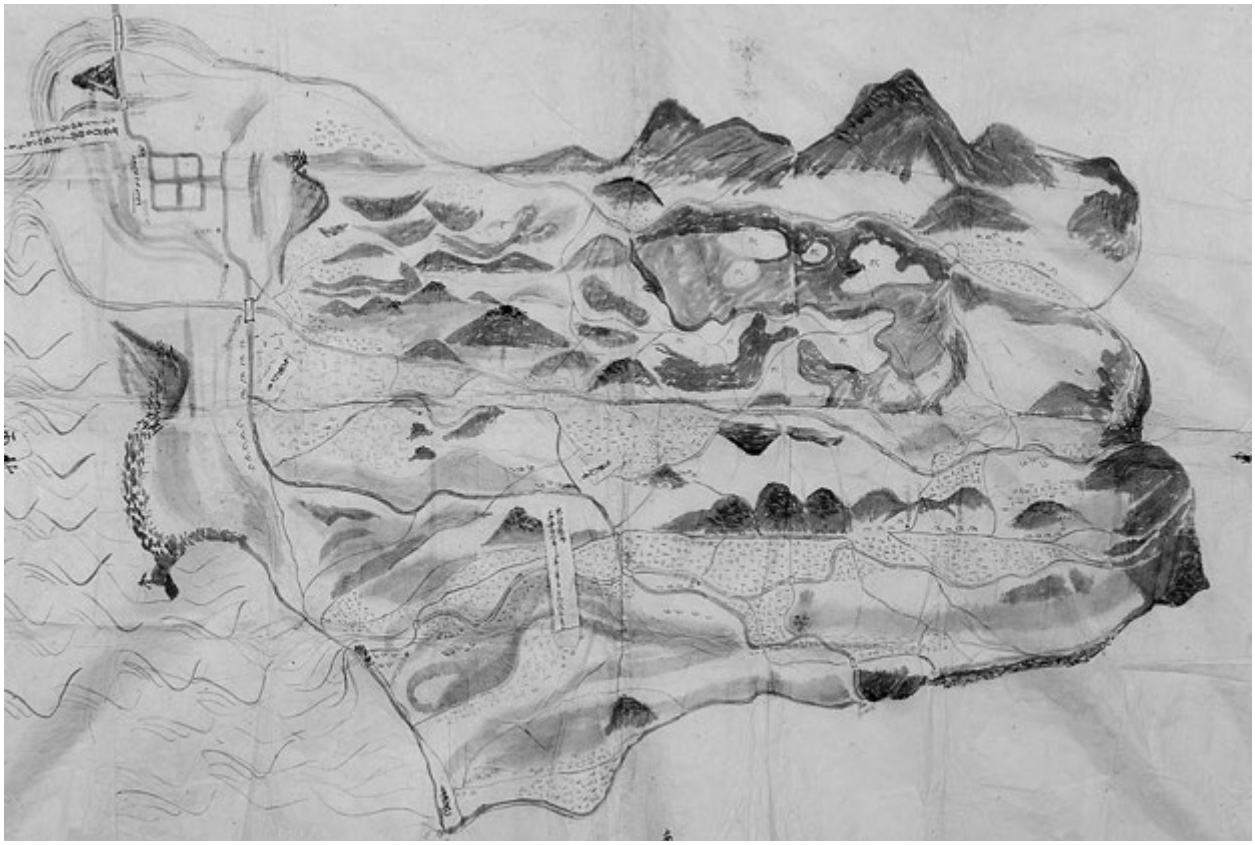
１）　1197（建久８）年の薩摩国建久図田帳（『島津家文書』１－164号）には，「市来院　百五十町」とある。中世の市来院や市来氏・河上氏に関係する史料を紹介した先行研究に，五味克夫　1967 「市来町大里来迎寺跡墓塔群」『鹿児島県文化財調査報告書』第14集　鹿児島県教育委員会　がある。

２）　市来町郷土誌編集委員会　1982 『市来町郷土誌』 市来町　200－206頁，栗林文夫　1994 「第Ⅳ章　中世の川上」『針原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(8)，新町正・西久保敏彦　2000 「第９章　まとめ」『上城詰城跡』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)。

３）　藤原良章　1999 「中世の交流と物流－問題提起にかえて」『中世のみちと物流』 山川出版社　３頁。

４）　註3)の藤原論文６頁。

５）　中世の万之瀬川下流地域を復原した論考に柳原敏昭　1998 「付篇　中世の万之瀬川下流地域と持躰松遺跡」

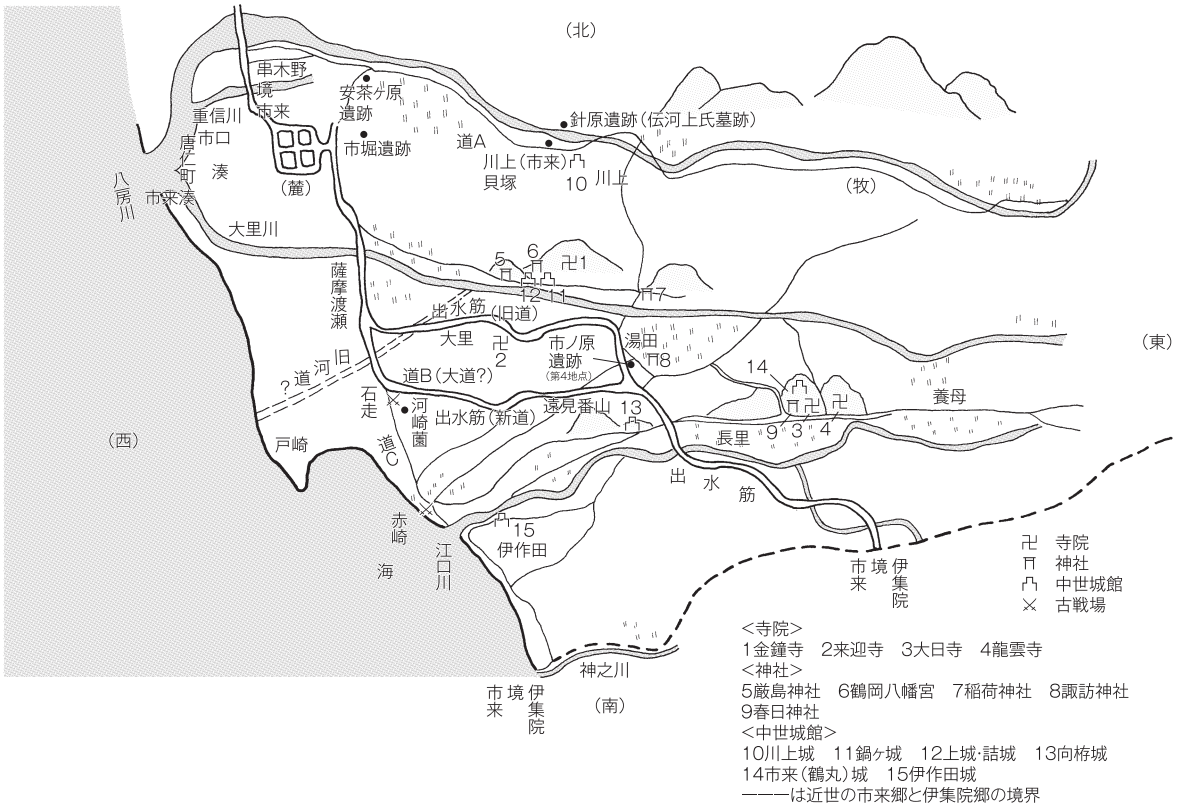


第290図　写真「市来郷絵図」（天保八年）

写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館
所蔵：東京大学史料編纂所

第291図　写真「市来郷絵図」（湯田村付近拡大図）

第292図　市ノ原遺跡周辺字図（『東市来町誌』付図より改編）



第293図　中・近世の市来（天保八年の「市来郷絵図」をもとに作成）

『持躰松遺跡第一次調査』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)，柳原敏昭　1999 「中世前期南薩摩の湊・川・道」『中世のみちと物流』 山川出版社　がある。本稿も，柳原氏のアプローチに負うところが大きい。

6） 応安５（1372）年２月「印阿譲状写」(鹿児島県　2002 『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺家わけ九』市来文書五－３所収)。

7） 註２）の栗林論文31頁。

8） 平凡社地方資料センター　1998 『鹿児島県の地名』日本歴史地名体系47　342頁，「角川日本地名大辞典」編纂委員会　1983 『角川日本地名大辞典　鹿児島県』 150頁。

9） 鹿児島県教育委員会　1993 『出水筋』歴史の道調査報告書第１集の「市来町」の部分。

10） 註２)，申叔舟著・田中健夫訳注　1991 『海東諸国記』 国書刊行会　216－217頁。

11） 市来町教育委員会　1991・1993 『川上（市来）貝塚』『川上（市来）貝塚２』 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）（２)。

12） 註２）の『針原遺跡』報告書。

13） 鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007『安茶ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（118)。

14）「河上文書」24号（宮崎県　1990 『宮崎県史　史料編中世１』所収)。

15） 註２）の栗林論文38頁。

16）「臼井仁平太聞書」(臼井久夫氏所蔵文書)。同聞書は，徳永律　1990 『市来郷史資料集』に所収。

17） 宮下満郎氏のご教示による。

【参考文献】

鹿児島県教育委員会　1980 『石峰遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
鹿児島県教育委員会　1983 『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　1993 『榎崎Ｂ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（４）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　1997 『干迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(22)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2000 『浜町遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(25)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002 『鍛冶屋馬場遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(39)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002 『計志加里遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003 『市ノ原遺跡（第１地点)』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(49)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003 『猿引・雪山遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003 『中原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(54)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005 『大坪遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005 『大島遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)
鹿児島県立埋蔵文化時センター　2006 『尾ヶ原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006 『堂園平遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（104)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006 『市ノ原遺跡（第５地点)』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006 『堂平窯跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006 『中尾遺跡・四方高迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(99)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007 『魚見ヶ原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(111)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007 『上水流遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113)
大口市教育委員会　1997 『新平田遺跡』 大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
唐津市教育委員会　1972 『菜畑遺跡』 唐津市文化財調査報告第５集
高知県埋蔵文化財センター　1994 『柳田遺跡』 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(17)
太宰府市教育委員会　2006 『馬場遺跡２』 太宰府市の文化財第87集
福岡市教育委員会　2005 『下月隈Ｃ遺跡』 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集
新潟県教育委員会　1992 『五丁歩遺跡・十二木遺跡』 新潟県埋蔵文化財報告書(57)
長野県教育委員会　1982 『中央自動車道開発遺跡群・原村その５』長野県埋蔵文化財報告書
大手前大学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第５号　2007 『弥生土器集成と編年－播磨編－』 大手前大学
尼川大録・長田武正　2006 『検索入門　樹木①』『検索入門　樹木②』 保育社
田崎博之編　2000 『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
藤尾　慎一朗　2003 『弥生変革期の考古学』 同成社
五十嵐　俊雄　2007 『考古資料の岩石学』 パリノ・サーヴェイ
小田　静夫　1976 『縄文中期の打製石斧』 ドルメン
後藤　秀一　1979 『凹石・磨石・敲石』 峠山聖山遺跡
宮田　栄二　2002 『鹿児島県の非黒曜石石材と原産地』 Stone Sources1

第　2　地　点

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

第２地点は，日置市東市来町に所在し，確認調査（平成８年度11月１日～11月８日）の結果，遺跡の存在を確認した。そこで，平成９年度４月21日～９月３日まで本調査を実施した。

第２節　調査の組織

＜確認調査・平成８年度＞

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
調査企画者		次長兼総務課長	尾﨑　進
		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者		文化財主事	繁昌　正幸
		文化財調査員	西園　勝彦
		文化財調査員	宮田　茂樹
調査事務担当者		主査	成尾　雅明
		主査	前屋敷裕徳
		主事	追立ひとみ

＜発掘調査・平成９年度＞

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
調査企画者		次長兼総務課長	尾﨑　進
		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当者		文化財主事	八木澤一郎
		文化財調査員	松村　智之
調査事務担当者		主査	前屋敷裕徳
		主査	政倉　孝弘
		主事	追立ひとみ

＜整理作業・平成17年度＞

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄
		次長兼総務課長	有川　昭人
		次長	新東　晃一
		調査第二課長	立神　次郎
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
		主任文化財主事	繁昌　正幸
作成担当者		文化財主事	三垣　恵一
作成事務担当者		主幹兼総務係長	平野　浩二
		主査	寄井田正秀

＜整理作業・平成19年度＞

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
作成企画者		次長兼総務課長	平山　　章
		次長	新東　晃一
		調査第二課長	立神　次郎
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
		主任文化財主事	宮田　栄二
作成担当者		文化財主事	日髙　正人
		文化財主事	羽嶋　敦洋
		文化財主事	日髙　勝博
作成事務担当者		総務係長	寄井田正秀
		主査	蒲地　俊一

報告書作成検討委員会　平成19年12月17日　宮原景信所長ほか12名
報告書作成指導委員会　平成19年12月14日　新東晃一次長ほか３名
企画担当者　　八木澤一郎，川口雅之

第３節　調査の経過

市ノ原遺跡第２地点の確認調査は，平成８年11月１日～11月８日にかけて市ノ原遺跡第３地点，上ノ原遺跡の確認調査と並行して実施した。２×５m規模の確認トレンチを４か所設定して人力による掘り下げを行った。その結果，旧石器時代のものと思われる黒曜石片・砂岩礫などが出土したため，平成９年４月21日～平成９年９月３日まで，第３地点のＢ～Ｉ－１～23の調査と並行して本調査を実施した。第２地点の調査対象面積は1,000㎡である。

以下，調査の経過を日誌抄によって略述する。

〈平成８年度〉（確認調査・平成８年11月１日～平成８年11月８日）

27～30Tを設定。表土以下，人力による掘り下げ開始。Ⅵ層から旧石器時代の遺物出土。土層断面実測。人力による埋め戻し。

〈平成９年度〉（発掘調査・平成９年４月21日～平成９年９月３日）

４月　市ノ原遺跡全体（１～４班）のオリエンテーション。職員紹介・注意事項・作業日程の説明。市ノ原遺跡第１～５地点の発掘現場確認，オリエンテーション。発掘調査開始，人力・重機による表土剥ぎ，排土搬出。表土剥ぎの結果，中世包含層は削平されていることが判明。南北方向に試掘溝を設定し，重機による掘り下げを実施。平成８年度の確認トレンチ（30T）の下層確認，シラス二次堆積（たいせき）層から黒曜石製剥片等が出土。第３南北トレンチ，東西トレンチを設定し，Ⅵ層以下の掘り下げ，下層確認，清掃，写真撮影，土層断面・地形図作成等を実施。バックホウによる表土剥ぎ。

５月　Ⅰb層とⅢ層の掘り下げ，Ⅲ層上面での遺構精査，遺構未検出。北・南・西側先行トレンチ設定，掘り下げ，北側トレンチでは黒曜石製剥片出土，Ⅴ～Ⅵ層出土遺物の取上げ，重機によりⅢ層からⅤa～Ⅴb層上面まで掘り下げ。

６月　西側トレンチ断面写真撮影。Ⅴa～Ⅵ層を調査区西側半分に２ｍグリッド設定，千鳥格子による掘り下げ実施。Ｂ－２区のⅤb層で円形の掘り込みを検出，写真撮影，実測図作成。地形測量図作成。北壁の土層断面図作成。

７月　Ⅴa～Ⅴb層出土遺物の取上げ。円形土坑の断面実測。土坑内検出の礫群実測。断面ベルト部分から鉄滓４点が出土。Ｂ－２～４・８・13区で検出した遺構の掘り下げを開始。

８月　円形土坑の平面実測。Ａ－２～９区，Ｂ－２～５区のⅤa～Ⅴb層掘り下げ，遺物出土なし。

９月　北壁・西壁の精査，土層分層，断面図作成。第２地点の発掘調査終了。

整理作業を平成12年・17年・19年度に，県立埋蔵文化財センターで行った。

〈平成12年度〉（整理作業）　市ノ原遺跡全体の遺物の注記，整理，分類を実施。

〈平成17年度〉（整理作業）

６月～７月　遺物実測，拓本，トレース，遺構配置図作成，遺構トレース

〈平成19年度〉（整理作業）

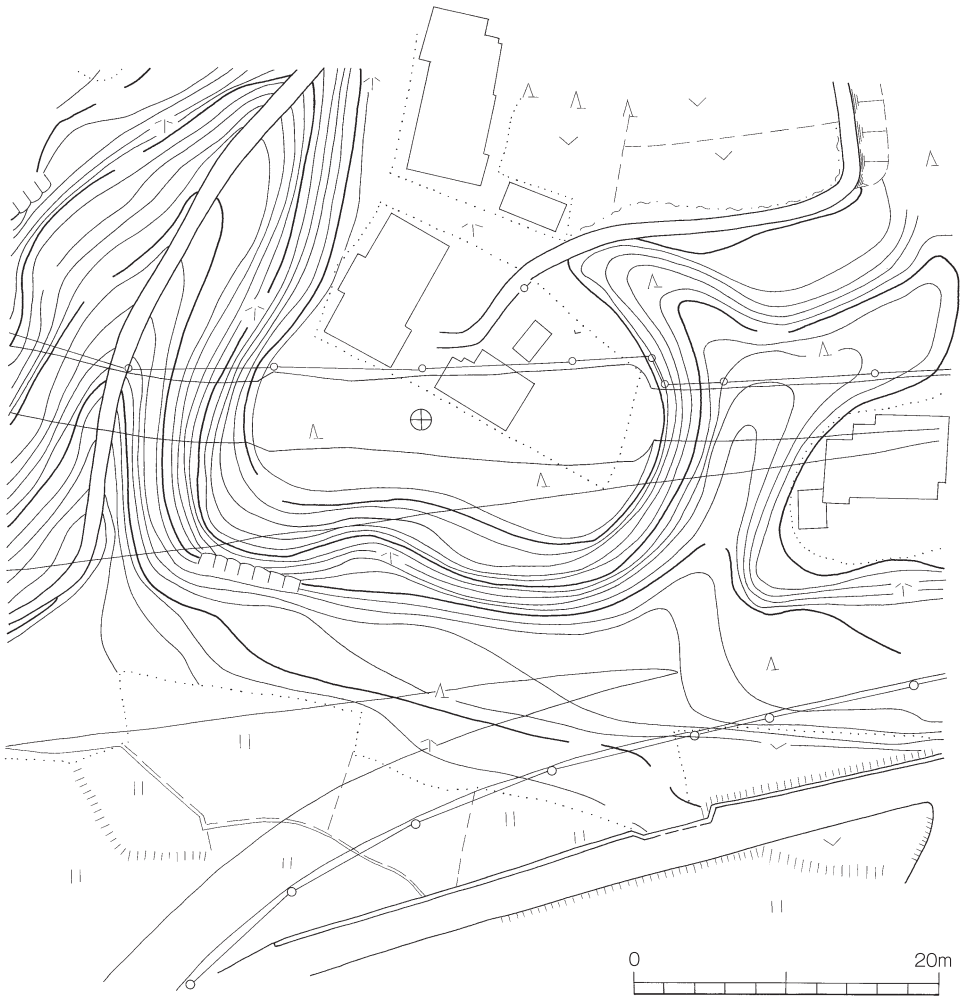
第４地点の整理作業・報告書作成作業と並行して実施。詳細は，第４地点「第Ⅱ章　発掘調査の経過，第３節　調査の経過」の項を参照。

第Ⅱ章　発掘調査の概要

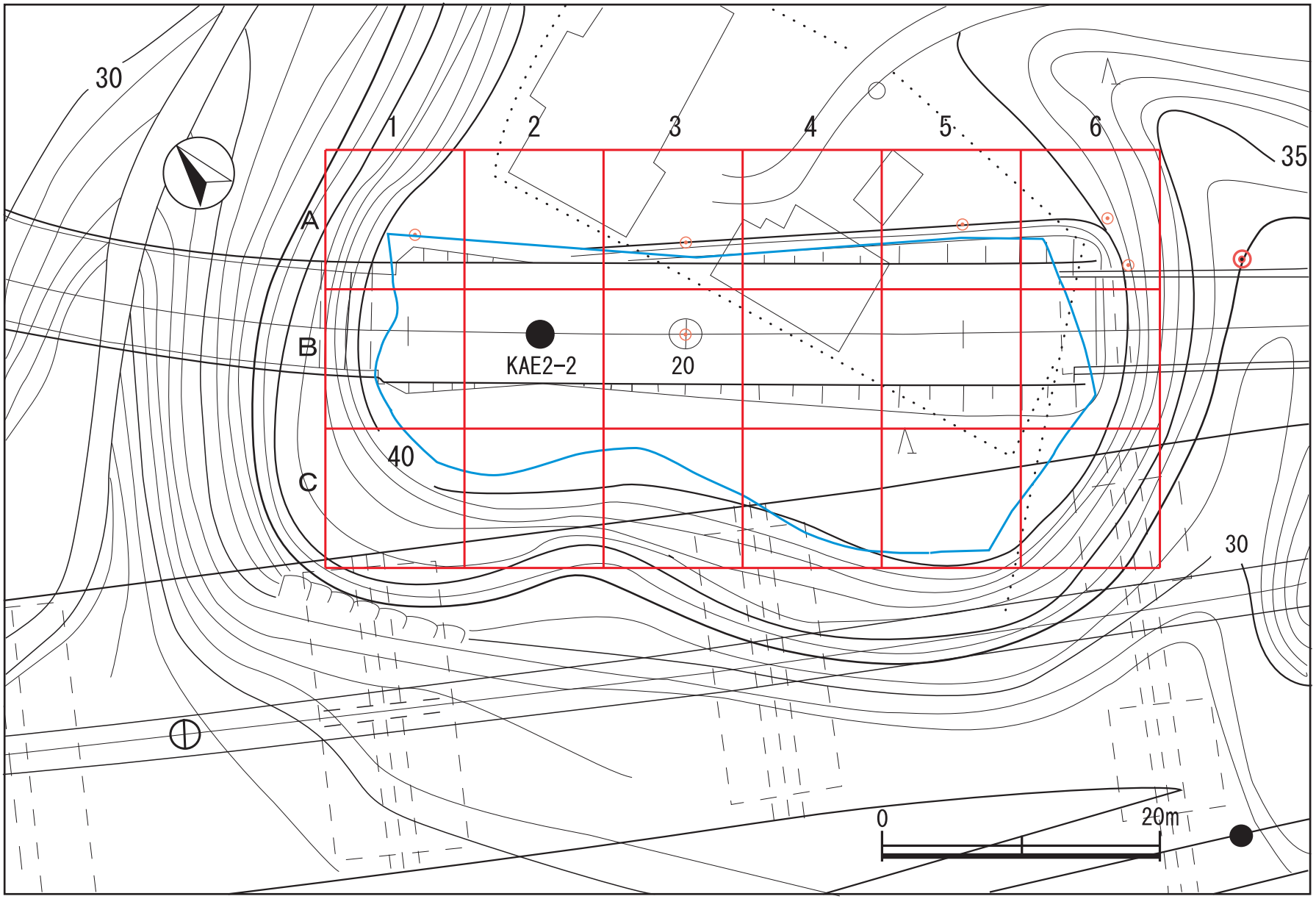
第１節　発掘調査の方法

平成８年度の確認調査の結果を受けて，平成９年度に1,000㎡を対象に本調査を実施した。調査は，道路の幅杭を基準に調査区中央付近に任意の基準杭を設定し，調査区内に北東から南西方向にＡ～Ｄ，北西から南東方向に１～６とする10m間隔の調査用グリッドを設定して実施した。また，測量基準としてレベル原点は日置市東市来町湯田堀内に所在する基準点の補点№17（Ｈ＝43.503m）を利用した。

調査の方法としては，伐採などの環境整備を実施した後，人力や重機による表土除去，排土搬出を行い，人力による掘り下げを実施した。その後，Ⅲ層上面からⅥ層上面まで，各層で遺構検出作業を実施し，検出した遺構については，図面作成作業や記録写真撮影等を実施した。また，４か所の先行トレンチを設定して，下層確認を人力で掘り下げていった。



第１図　周辺地形図



第２図　グリッド配置図

第３図　調査用グリッド・確認調査トレン配置図

第２節　遺跡の層位

市ノ原遺跡第２地点は，薩摩半島北西部の日置市東市来町湯田に所在する。地理的には薩摩半島の東シナ海に面した海岸から直線距離で約1.5kmほど内陸に位置する遠見番山180.4mを中心とする小起伏山地にあり，西麓に海岸段丘状の台地が西に向かって緩やかに傾斜する標高40～50mの台地西側に立地する。第２地点は，その台地上でも第４地点，第３地点から西側の小さな谷を隔てた舌状の台地にある。本遺跡の基本的な層序は，以下のとおりである。

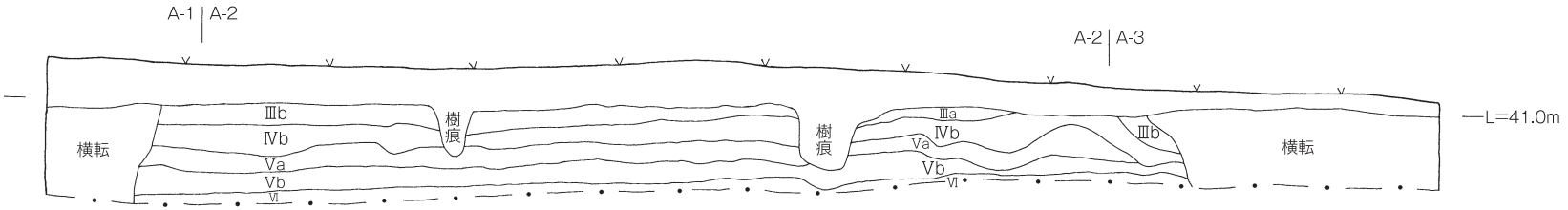
Ⅰ　層	Ⅰ　層　表土・耕作土・客土	
Ⅱ　層	Ⅱ　層　黒色腐植土	
Ⅲａ層	Ⅲａ層　暗黄褐色土	アカホヤ火山灰腐植土
Ⅲｂ層	Ⅲｂ層　黄褐色土	アカホヤ火山灰
Ⅲｃ層	Ⅲｃ層　黄橙色軽石	
Ⅳ　層	Ⅳ　層　茶褐色土	
Ｖａ層	Ｖａ層　黒褐色粘質土	縄文時代早期の包含層
Ｖｂ層	Ｖｂ層　黒褐色土	
Ｖｃ層	Ｖｃ層　黒色粘質土	
Ⅵ　層	Ⅵ　層　暗褐色パミス混じり粘質土	桜島薩摩火山灰 旧石器時代の包含層
Ⅶａ層	Ⅶａ層　暗褐色粘質土	
Ⅶｂ層	Ⅶｂ層　明褐色粘質土	
Ⅶｃ層	Ⅶｃ層　暗褐色土（部分的に残存する）	
Ⅷａ層	Ⅷａ層　明黄色土	
Ⅷｂ層	Ⅷｂ層　暗黄色土	
Ⅸ　層	Ⅸ　層　黄白色土	シラス

第４図　遺跡基本土層図

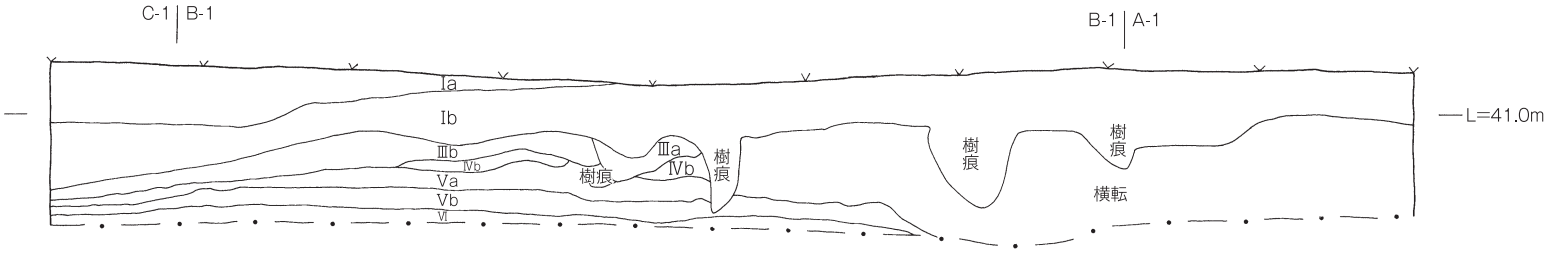
第３節　発掘調査成果の概要

遺構は，Ⅵ層上面で近世以降のものと思われる円形の大型土坑を１基検出した。遺物は，Ⅵ層からナイフ形石器２点（接合）・石核１点・剥片（はくへん）10点・砕片（さいへん）11点・輝石安山岩の礫（れき）３点の計27点が出土した。Ⅴ層からは石核５点，剥片16点，砕片21点・打製石鏃未製品１点の計42点が出土した。このほか，表土や旧表土から苦浜式土器・打製石鏃・黒曜石剥片・砕片・土師器・須恵器・染付・陶器・土製人形・古銭等が出土した。

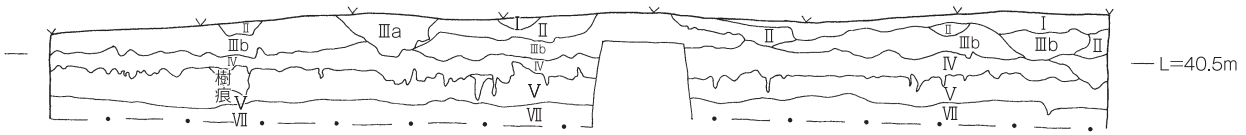
① A-1～3区　北東土層断面



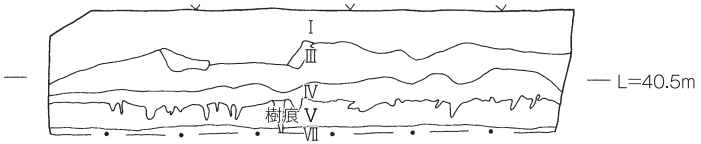
② A～C-1区　南西～北東土層断面

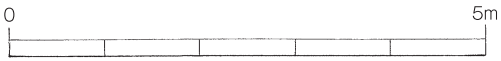


③ 下層確認　東西トレンチ北東土層断面



④ 下層確認　南北トレンチ1北西土層断面





第５図　土層断面図

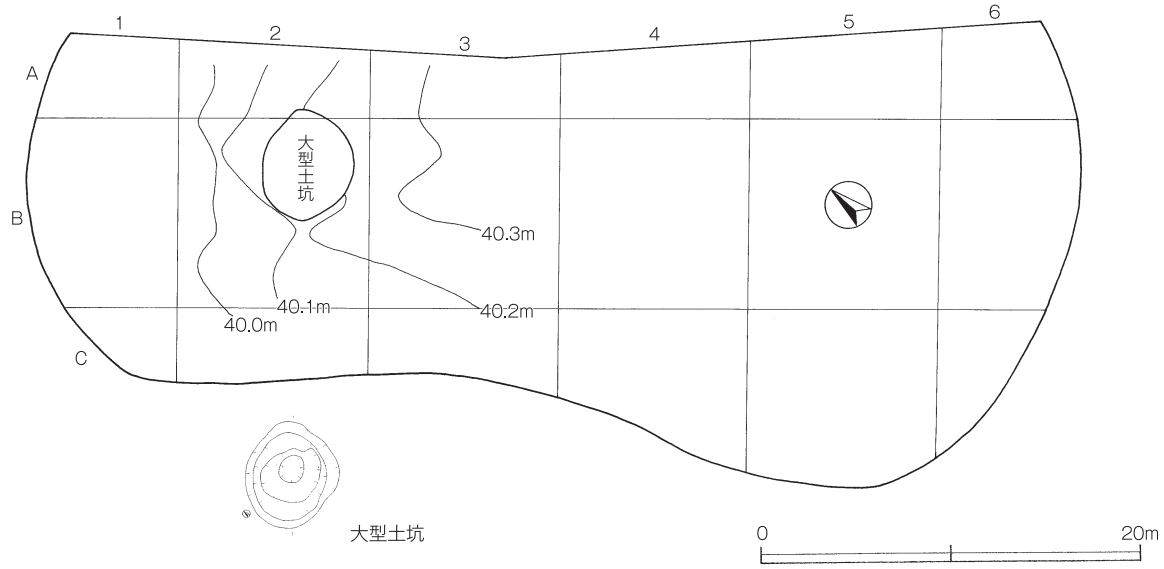
第Ⅲ章　発掘調査の成果

第１節　Ⅵ層の調査

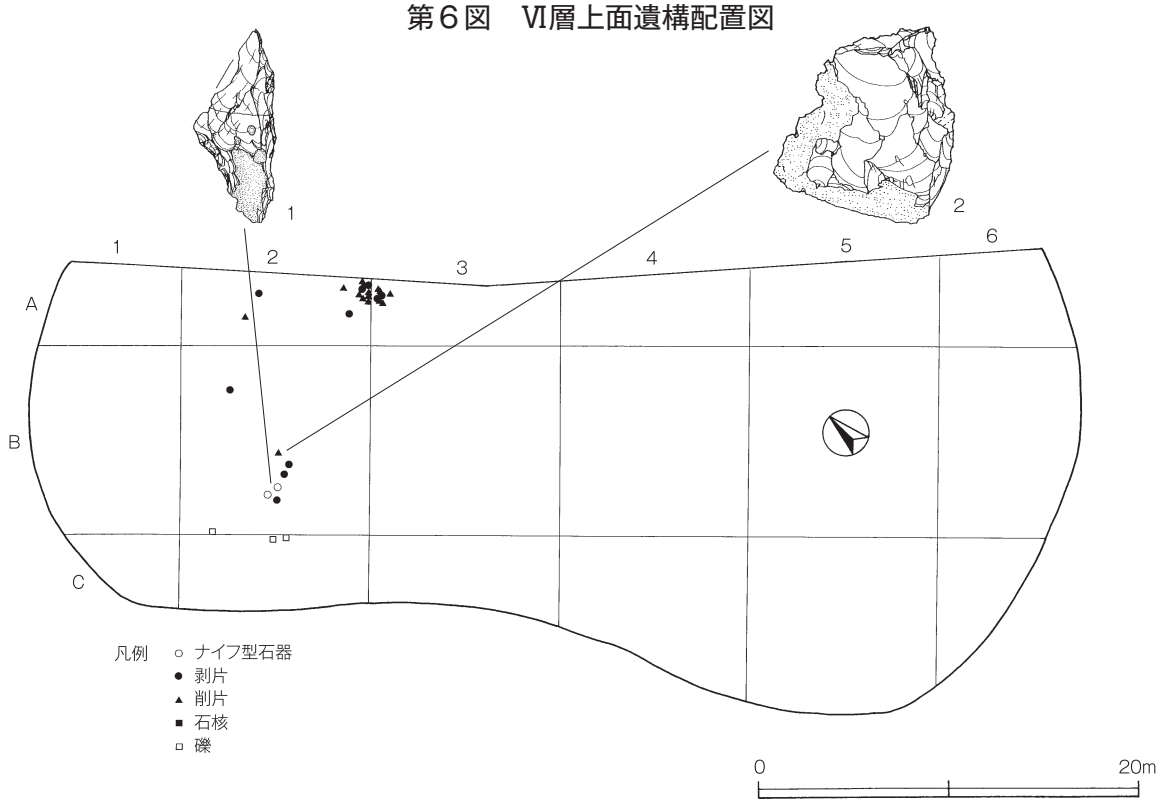
旧石器時代の包含層であるⅥ層の調査では，一つのグリッド内を25に分割して人力で丁寧に掘り下げを行った。

１　遺　構

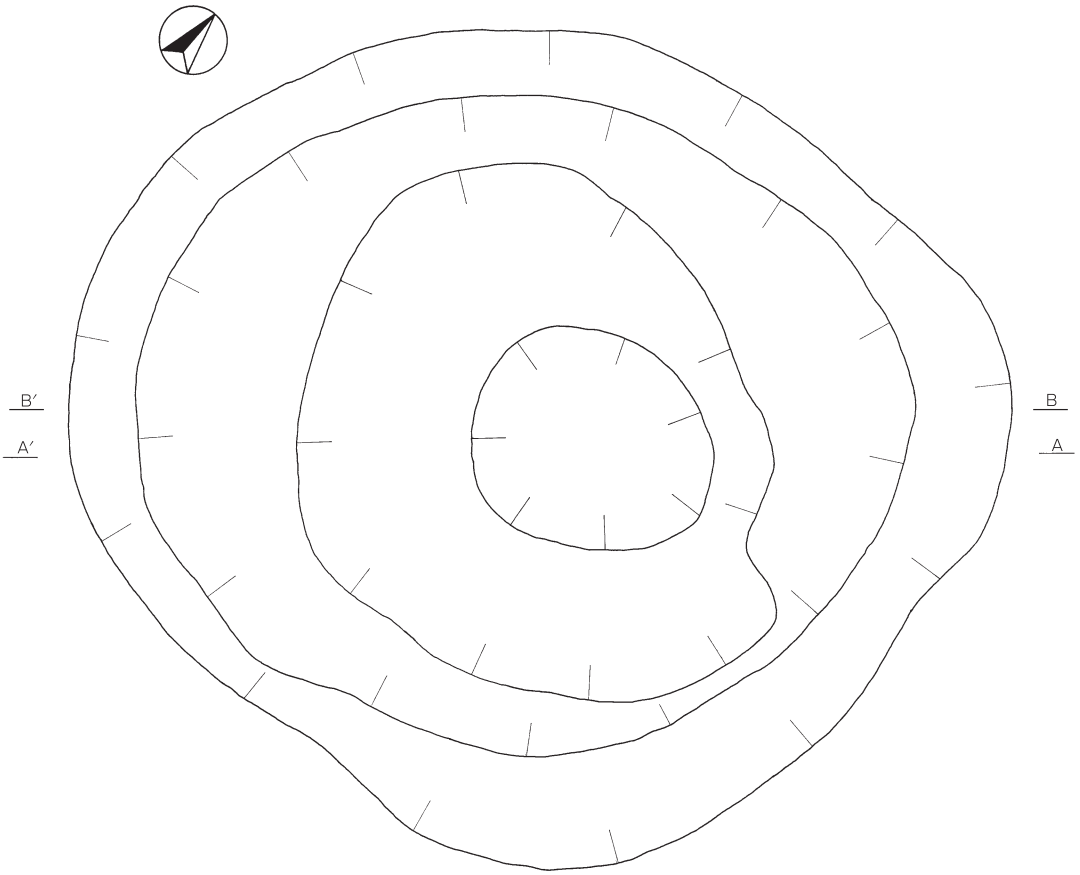
Ⅵ層上面で礫群が検出され，遺物の取上げを行っていたが，Ｂ－２区に13.7m×12.2mの略円形

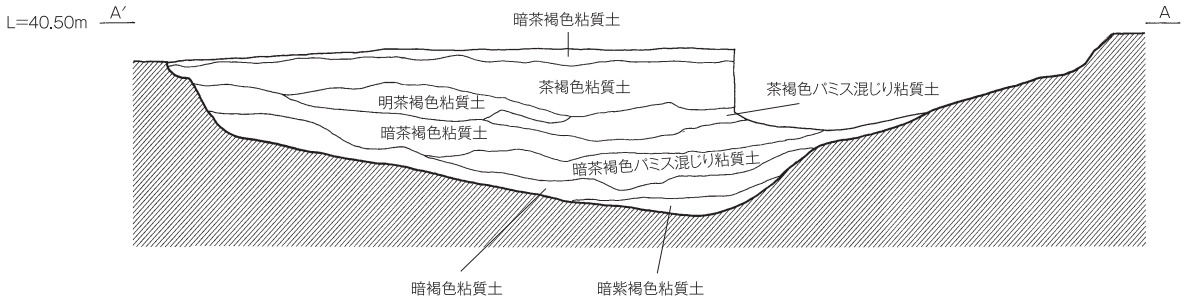


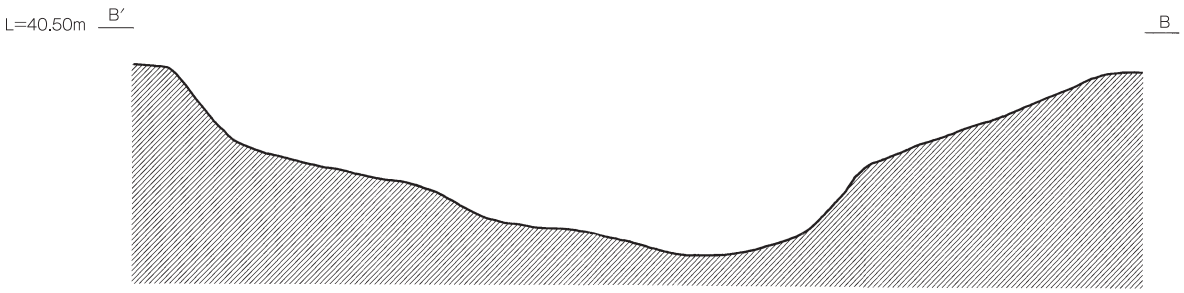
第６図　Ⅵ層上面遺構配置図

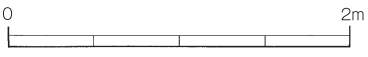


第７図　Ⅵ層遺物出土状況図


B′
A′
B
A


L=40.50m
A′
A
暗茶褐色粘質土
茶褐色粘質土
茶褐色パミス混じり粘質土
明茶褐色粘質土
暗茶褐色粘質土
暗茶褐色パミス混じり粘質土
暗褐色粘質土
暗紫褐色粘質土


L=40.50m
B′
B


0
2m

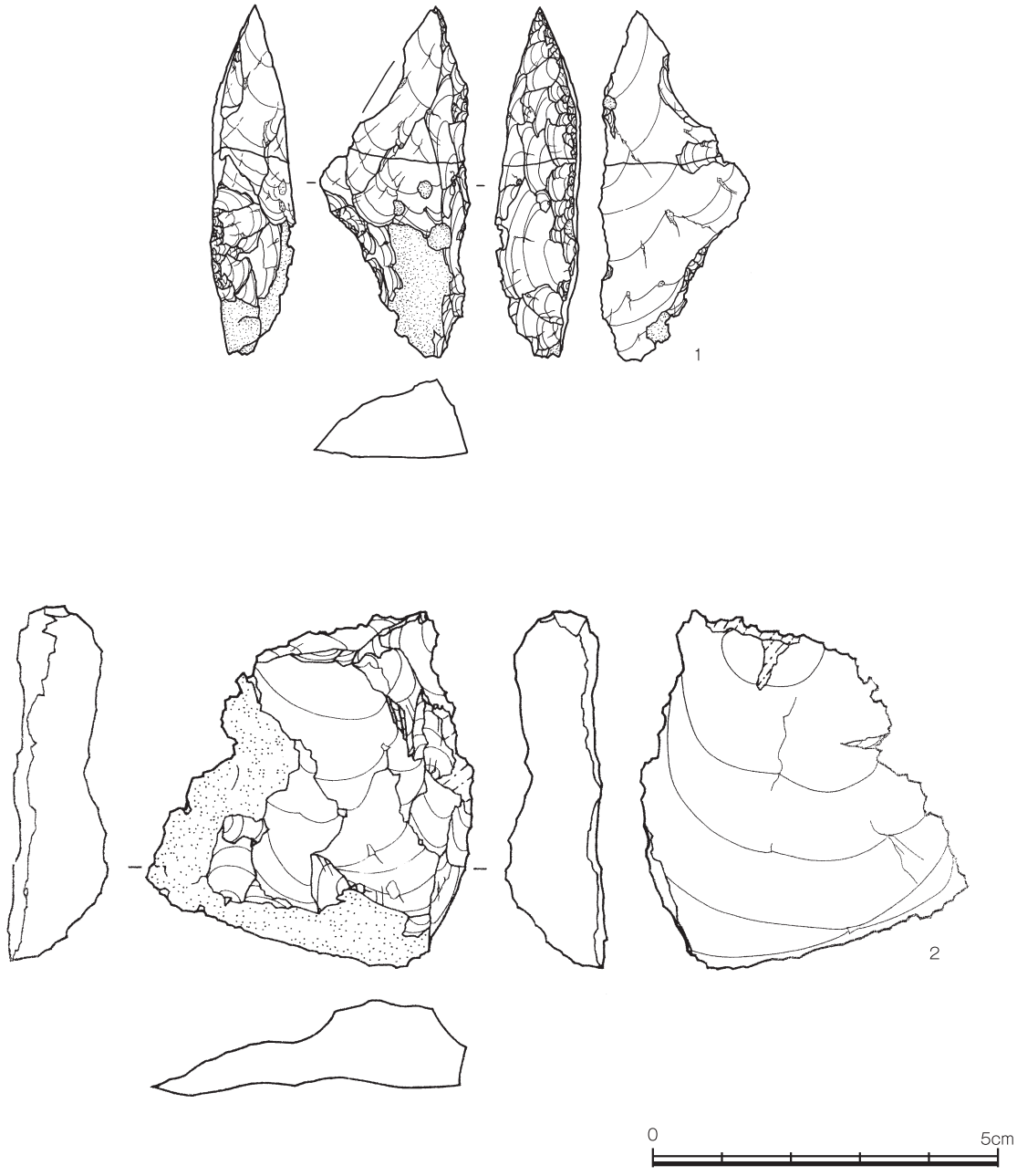
第8図　土坑図

をした大型土坑が発見された。そこで，遺構の中央に係るメッシュ（グリッドを25に分割した２ｍのメッシュ）に沿って掘り下げていくと，土坑の底面付近に沿って一面の礫が検出された。

遺構の掘り下げを行ったところ，礫の検出面に沿って鉄滓１点が出土したが，深さは約2.2mで，すり鉢状の断面をし，埋土は８層ほどに分かれている。この遺構は中から時代を特定できる土器などが出土していないため，時期不明の大型土坑である。ただ，検出面はⅥ層上面であるが，中から鉄滓（てっさい）が出土していることから，時期の新しい中世以降の土坑と思われる。用途についてもはっきりしない。

２　遺　物

ナイフ形石器１点（接合），石核１点・剥片10点・砕片11点・輝石安山岩の礫３点の計27点が出土



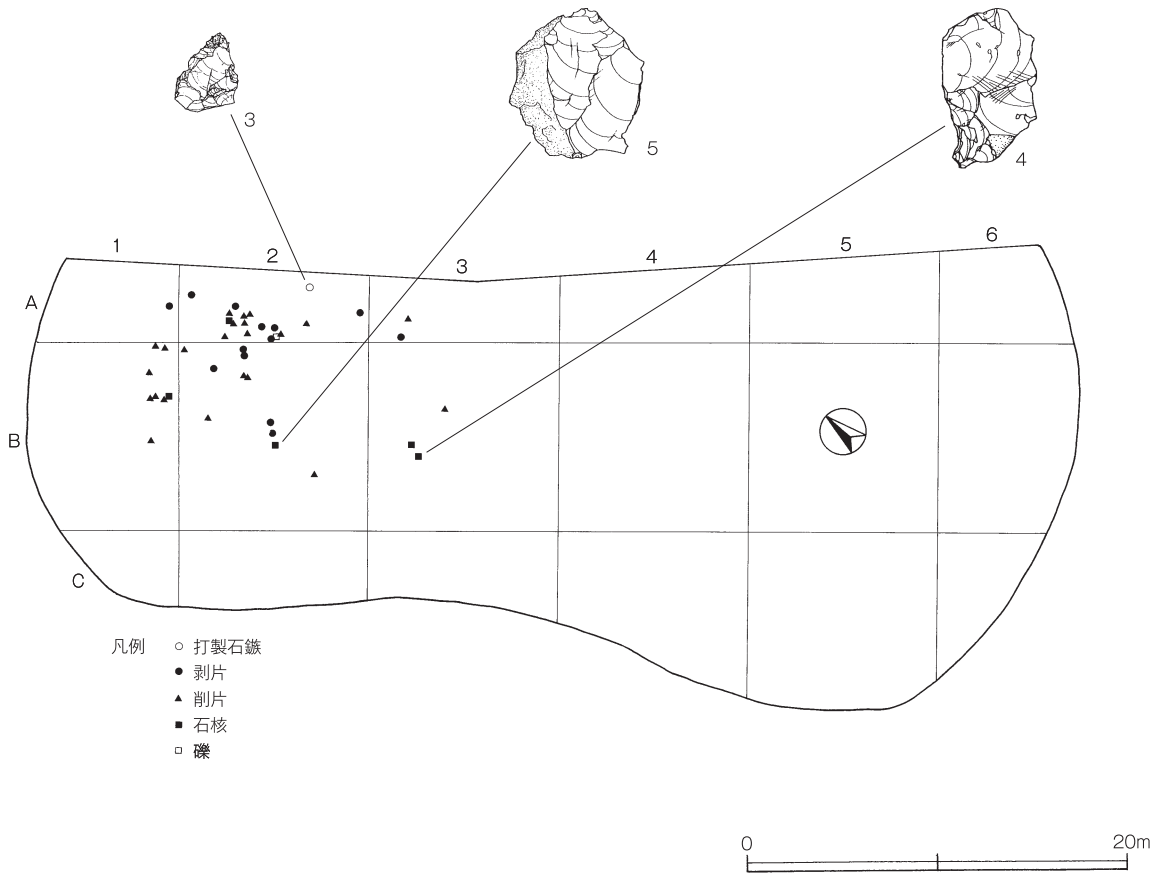
第９図　出土石器１

し，２点を図化した。遺物はＡ－２・３区を中心に分布している。

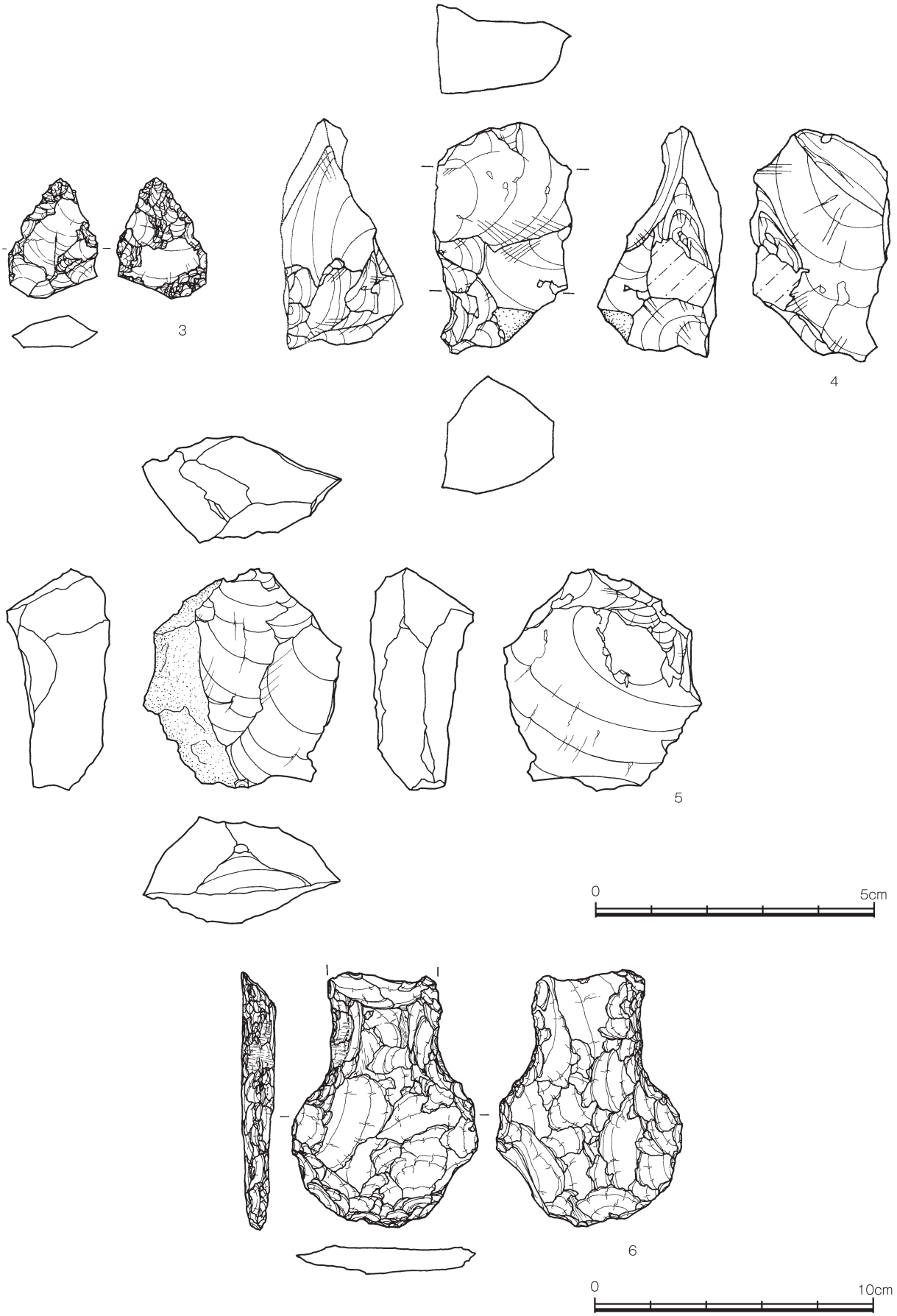
１はナイフ形石器である。Ｂ－２区の確認調査30トレンチの下層確認の結果，Ⅵ層から出土したもので，２点が接合した。上牛鼻産黒曜石製で，最大長5.05cm，最大幅2.2cm，最大厚1.2cm，重量は9.55gである。素材剥片の鋭利な一片を刃部に設定し，刃部は斜刃状を呈する。二側縁とも腹面からブランティングが施される。基部には礫面が残存する。２は上牛鼻産黒曜石に類似する剥片である。風化面の状況から既述のナイフ形石器と同時期のものと考えられる。

第２節　Ⅴ層の調査

縄文時代早期の包含層であるⅤb層（黒褐色土）からは石核５点，剥片12点，砕片11点の計28点，Ⅴa層から剥片４点，砕片５点の計９点，Ⅴ層から打製石鏃未製品１点，砕片５点の計６点の石器が出土し，そのうち４点を図化した。３は打製石鏃の未製品と思われる。Ａ－２区のⅤ層から出土したもので，基部を欠損する。正三角形に近い形をし，基部は抉りがない平基式である。表裏ともに大きな剥離面を残し，周辺の一部を細かく加工して形を整えている。腰岳産黒曜石に類似する。４はⅤb層から出土した黒曜石の石核である。上牛鼻産黒曜石の礫をそのまま打面にして，打点転移



第10図　Ⅴ層遺物出土状況図



第11図　出土石器２

を行いながら剥離をしている。５はⅤb層から出土した石核である。上牛鼻産黒曜石に類似する。

第３節　その他の調査

表土で採取したものや樹木等の横転から出土遺物で，46点を図化した。

１　縄文時代の出土遺物

６はラケット形を呈する頁岩製の打製石斧である。基部を欠損する。刃部は丸く，相当小型化している。繰り返しの使用により再加工され，最終形態の可能性がある

７は早期前葉の前平式土器口縁部である。口唇部を丸く整形し，その外側端部に貝殻の肋（ろく）を用いて縦位に刺突施文を施している。外面は斜方向の二枚貝条痕，内面はナデの調整である。８～11は早期後葉の苦浜式土器である。８は外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部である。口唇部を平坦に成形し，口縁外面上端に縦位の貝殻刺突文，貝殻の肋を６～８条用いて横位に幾何学文を施している。その下には短く途切れる横方向の貝殻条痕がみられる。９～11は胴部である。９は球状にふくらんで，頸部付近で屈曲して口縁部に向かって外反し，縦位のこぶ状の突起を持つ。瘤状突起頂部に貝殻施文具で刻みを施す。頸部の屈曲部に二枚貝の貝殻腹縁部で縦の押圧文を施し，二枚貝の肋７～８条を用いて，屈曲部から上は幾何学状の施文を施し，下部は横位の施文を施している。内面は横方向ヘラナデである。10は９の上半部と同じような文様である。11は底部付近の胴部の破片である。貝殻施文具で横位に施文している。内面は縦方向のナデ仕上げである。

２　古代の出土遺物

須恵器の壺と甕がある。16は外面が長格子タタキ，内面が横方向ナデの大型壺である。赤っぽい茶褐色を呈している。17は外面が条痕タタキ，内面当て具も条痕だが，外面がこまかいのに対し，内面は幅広である。灰色を呈している。

３　中世の出土遺物

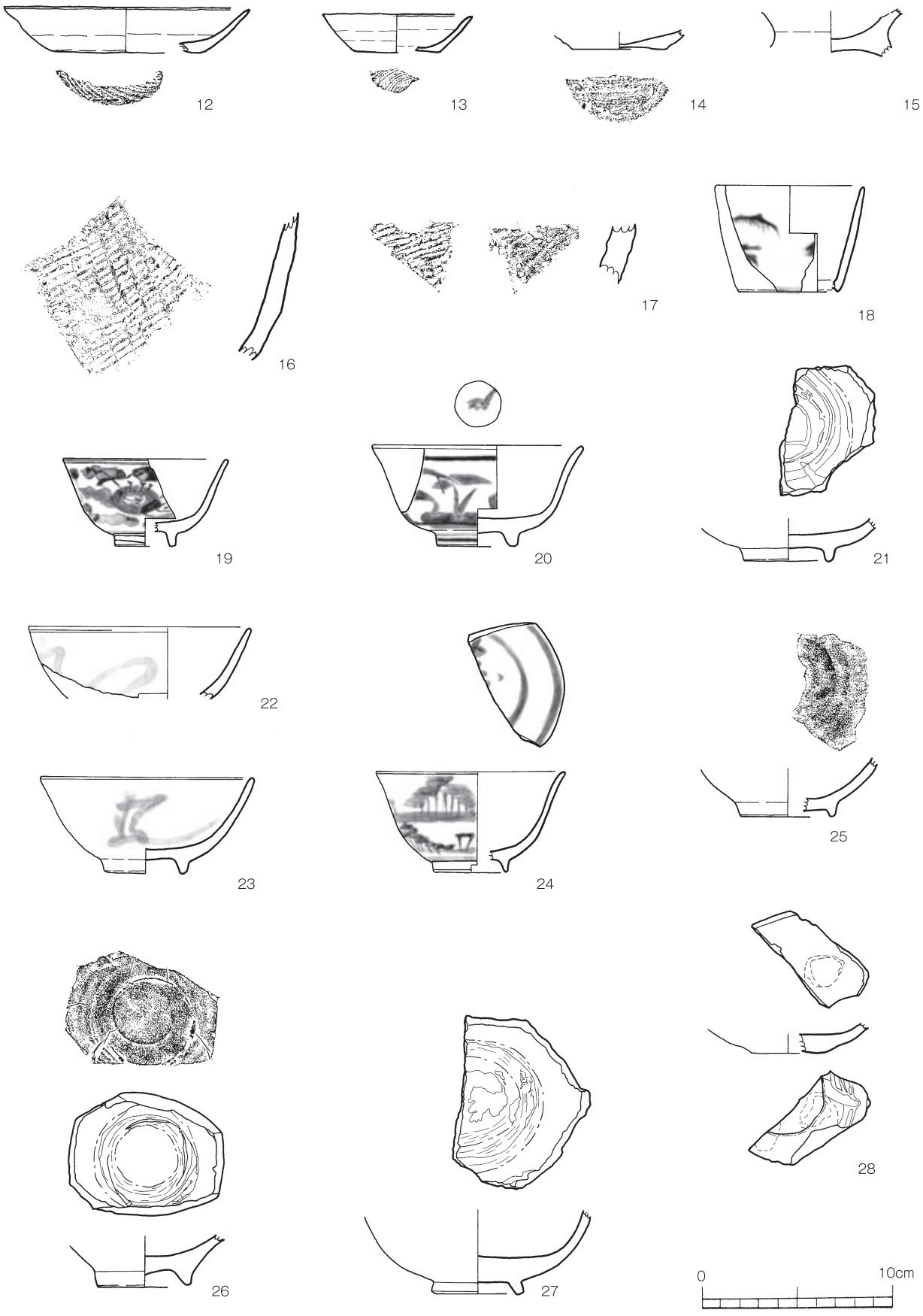
土師器が出土している。12～14は糸切り底の土師器坏で，口縁直径が13cmほどの浅い中型坏と，口縁直径が８cm程の小型坏とがある。12は高さ2.5cm，底径８cm，13は高さ２cm，底径2.5cmである。14は底径５cmの底のみである。これは時期が下る可能性がある。15は高台付埦の破片で，埦部，高台とも欠けている。

４　近世の出土遺物

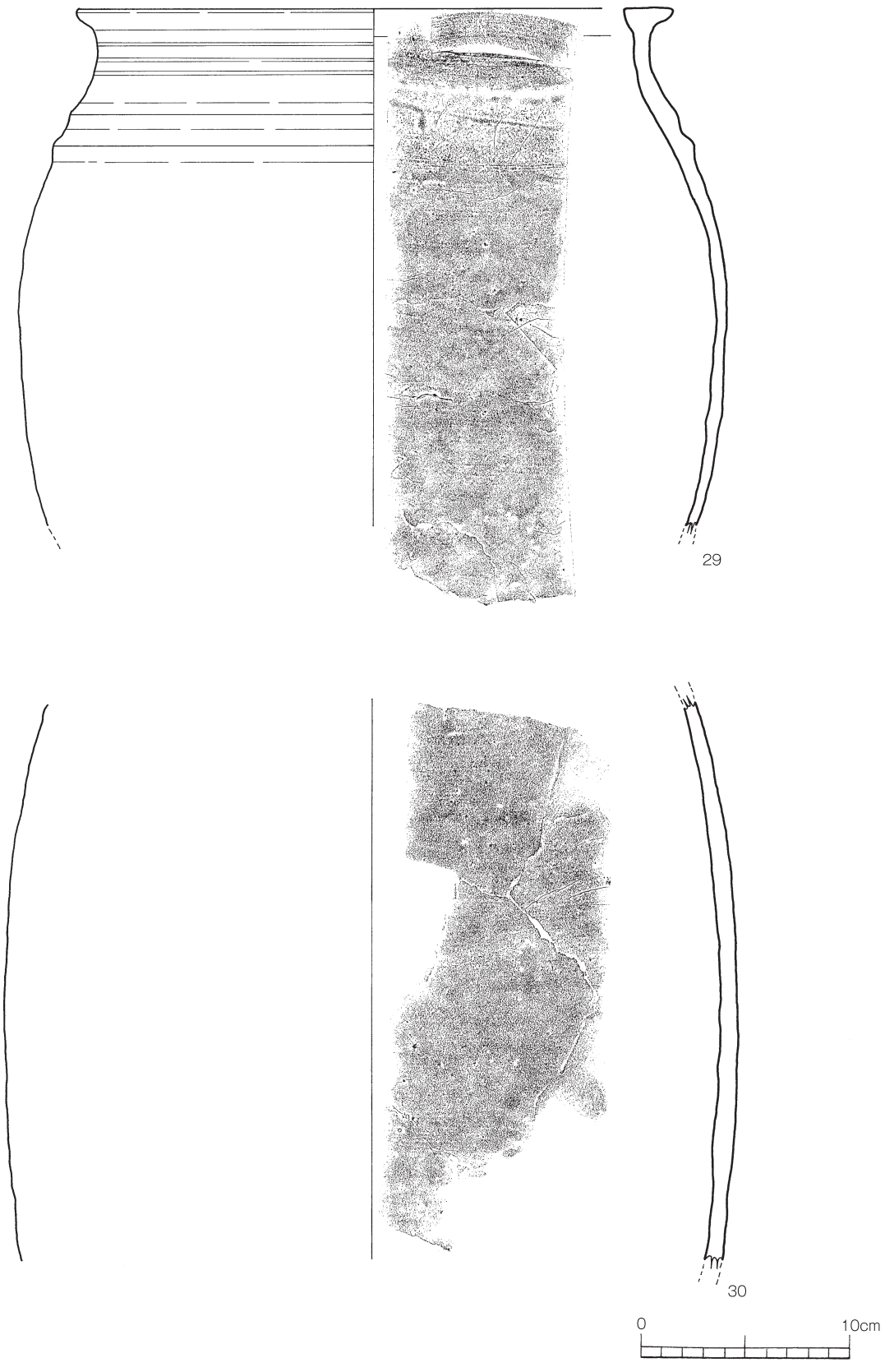
磁器・陶器・土錘・土師質土器・銭貨などがある。18～20・22～24は磁器の碗である。直口する平底のもの（18），やや外反する高台付のもの（19・20・24），内弯するもの（22・23）がある。山水画，牡丹などの花文，草花文，「寿」字，圏線などが外面や内底部に見られる。高台は矩形のもの，尖り気味のものなどがあり，直交するものと外へ踏ん張るものとがある。

21・25～28は陶器で，椀（25～27）と皿（28）がある。高台は矩形である。25は畳付き部分のみが露胎である。26は黒みがかった光沢のある緑色を呈し，重ね焼きのため畳付き部と内底部

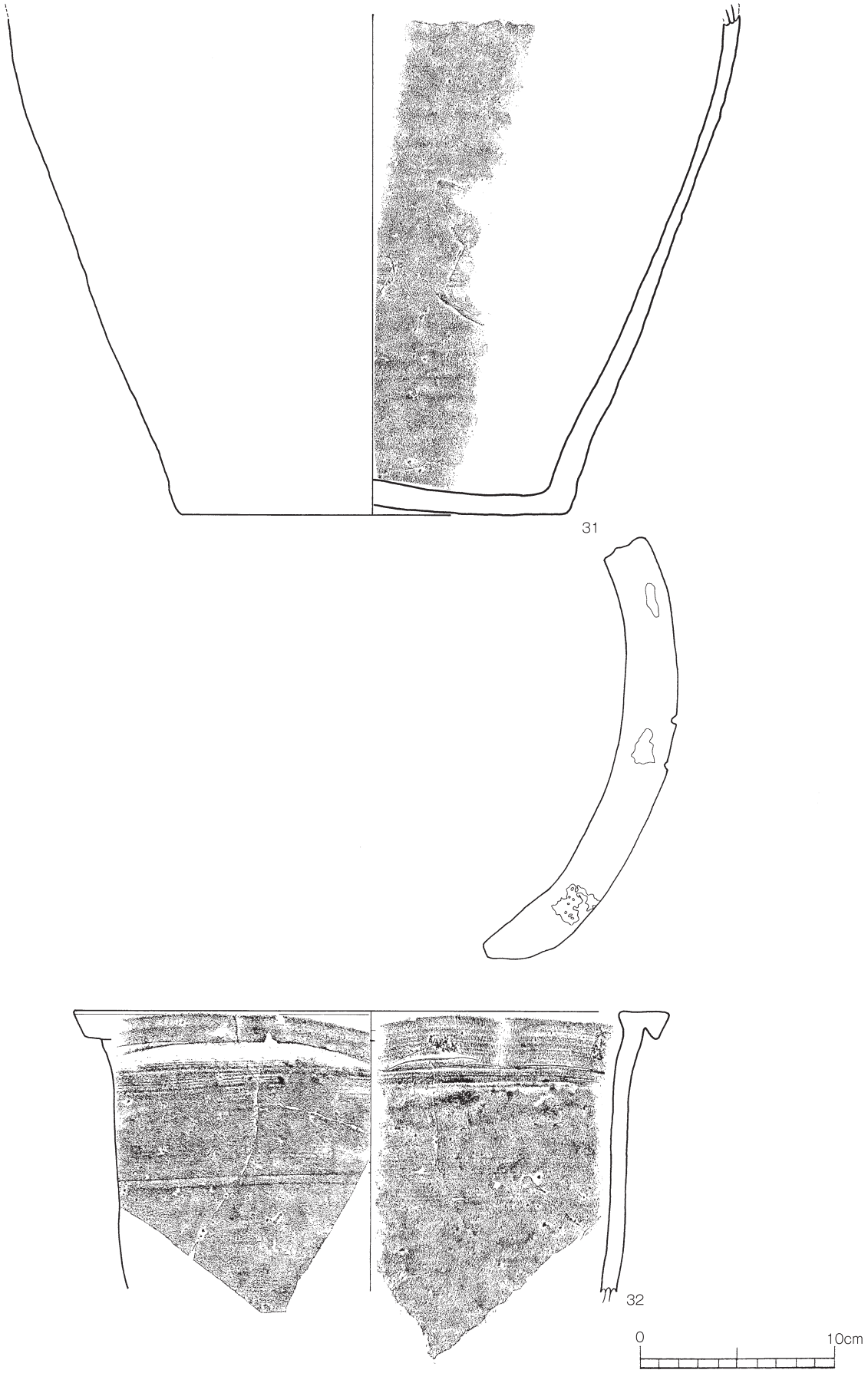
第12図　縄文土器



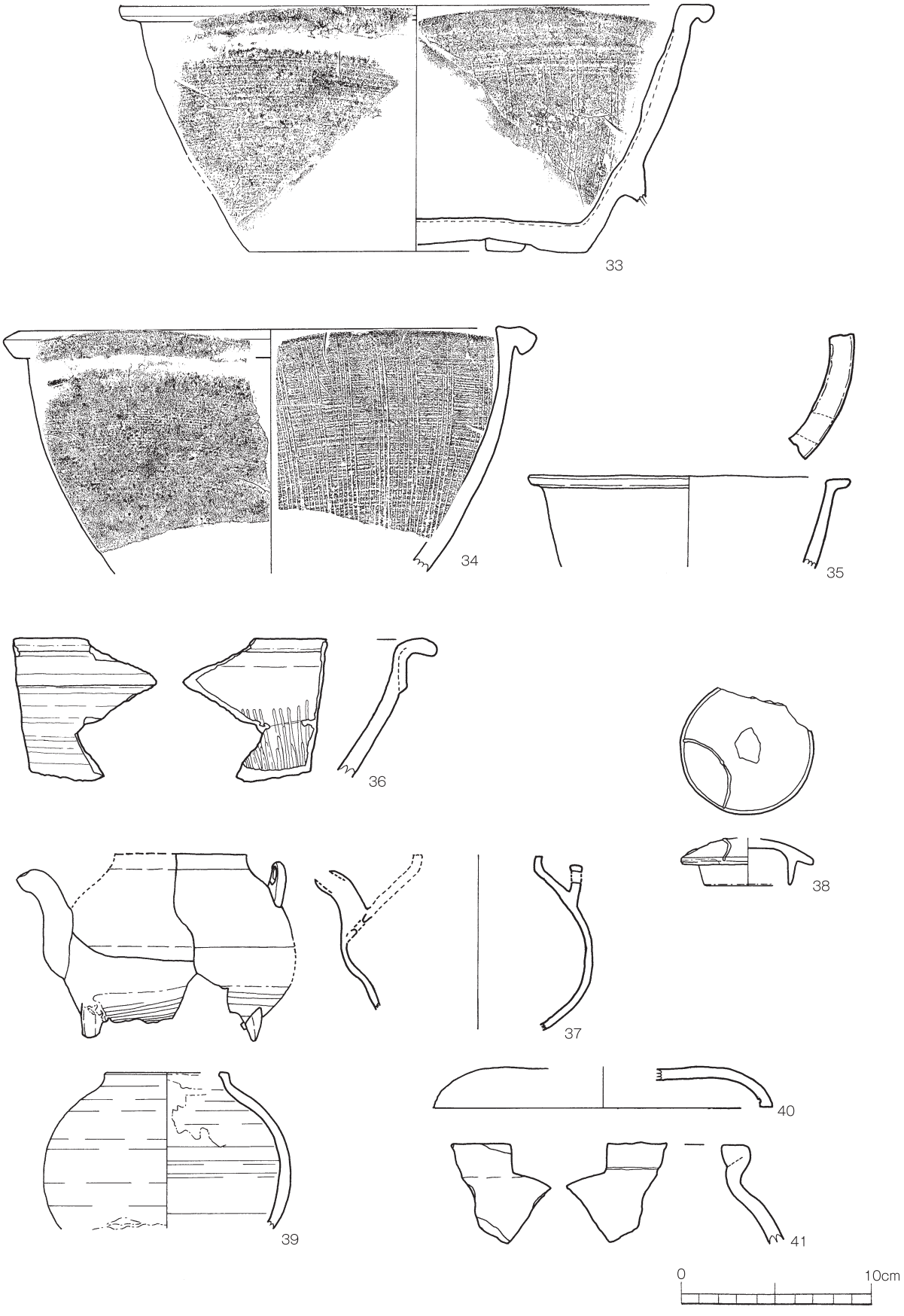
第13図　古代～中世の遺物，近世の遺物１



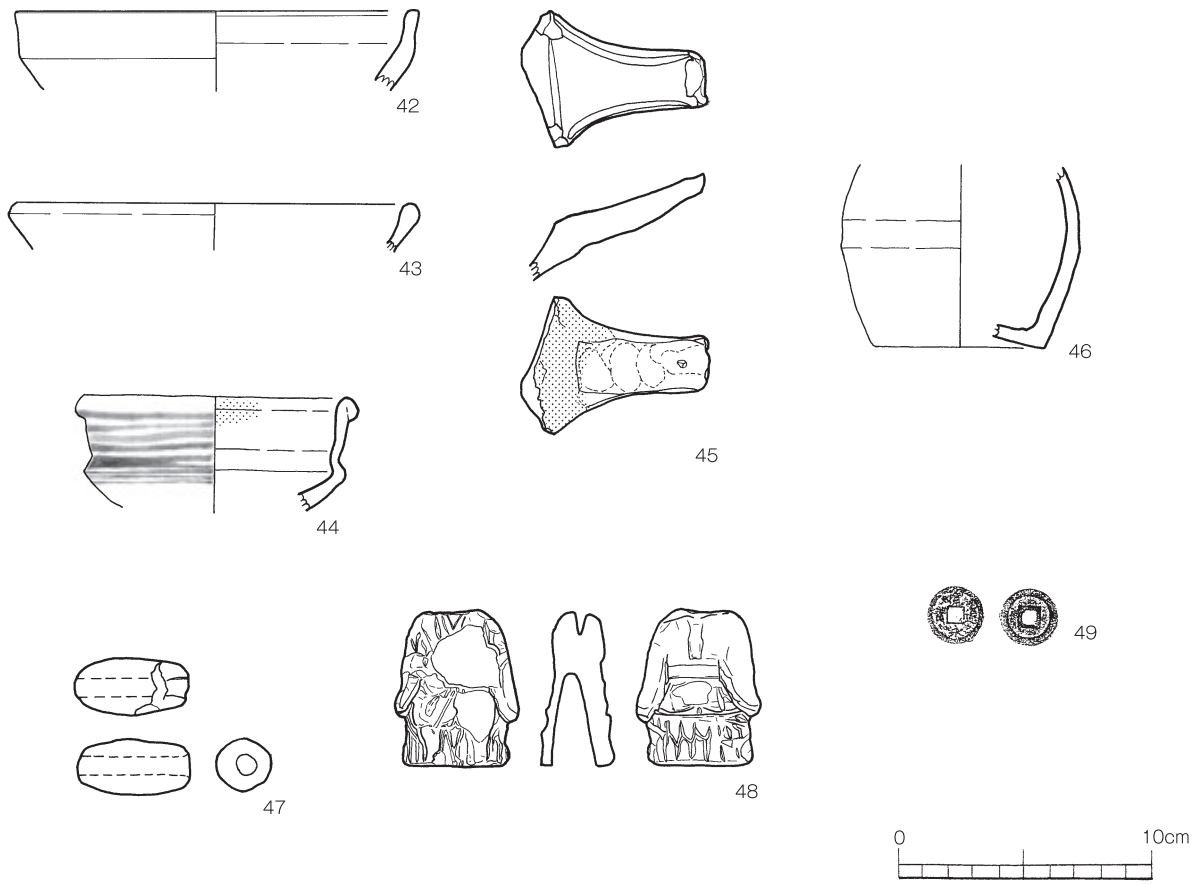
第14図　近世の遺物２



第15図　近世の遺物３



第16図　近世の遺物４



第17図　近世の遺物５

第１表　出土遺物観察表（石器）

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器　種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	注記番号	備　考
第9図	1	B－2	Ⅵ	ナイフ形石器	Ob2	5.05	2.2	1.2	9.55	29＋30	接合
	2	A－2	Ⅵ	剥片	Ob2	5.1	4.7	1.4	26.04	31	
第11図	3	A－2	Ⅴ	石鏃未製品	Ob1	2.2	1.6	0.5	1.42	18	未製品
	4	B－2	Ⅴ	石核	Ob2	4.00	3.5	1.9	22.34	65	
	5	B－3	Ⅴ	石核	Ob2	4.1	2.5	2.1	19.77	72	
	6	—	—	打製石斧	An	9.2	6.6	0.7	87.30	2表	

第２表　出土遺物観察表（土器ほか）①

挿図番号	遺物番号	注記番号	出土区	層位	種類	形式	部位	調整		色調		胎土・焼成							備考
								外面	内面	外面	内面	石英	角閃石	長石	輝石	雲母	火山ガラス	焼成	
第12図	7	—	—	横転	深鉢	前平	口縁	貝殻条痕・刺突・ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	○		○			○	良	片岩・茶粒
	8	—	—	表	深鉢	苦浜	口縁	貝殻条痕・刺突・ナデ	ヘラナデ	黄橙	黄橙	○	○	○			○	良	片岩
	9	—	—	横転	深鉢	苦浜	胴	貝殻条痕・刺突・ナデ	ヘラナデ	黄橙	にぶい黄	○	○	○			○	良	片岩
	10	—	—	表	深鉢	苦浜	胴	貝殻条痕・ナデ	ヘラナデ	橙	灰黄	○	○	○			○	良	片岩
	11	—	—	横転	深鉢	苦浜	胴	貝殻条痕	ヘラナデ	黄橙	灰黄	○		○			○	良	片岩

第２表　出土遺物観察表（土器ほか）②

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土区	層	種類	器種	部位	調整		色調		焼成	備考
								外面	内面	外面	内面		
第13図	12	14	—	表	土師器	坏	口～底	横ナデ	横ナデ	浅黄	浅黄	良	
	13	12	—	—	土師器	坏	口～底	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	14	15	—	表	土師器	坏	底	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	不良	
	15	11	—	—	土師器	埦	胴～底	横ナデ	横ナデ	黄橙	黄橙	良	
	16	8	—	表	須恵器	壷	胴部	タタキ（格子）	ナデ	にぶい赤褐	橙	不良	
	17	9	—	表	須恵器	甕	胴部	タタキ（平行）	タタキ（平行）	灰黄	灰	不良	
	18	21	—	表	染付	蕎麦猪口	口～底			明緑灰	灰白	良	
	19	16	—	表	染付	湯のみ	口～底			灰白	灰白	良	端反
	20	18	—	表	染付	中碗	口～底		蛇目釉はぎ	灰白	緑灰	良	
	21	6	—	—	陶器	碗	底部		蛇目釉はぎ	灰	灰	良	高台内施釉，畳付露胎
	22	20	—	表	染付	中碗	口～胴			緑灰	緑灰	良	
	23	19	—	表	染付	中碗	口～底		蛇目釉はぎ	灰白	灰白	良	
	24	17	—	表	染付	中碗	口～底			灰白	灰白	良	端反
	25	5	—	—	陶器	埦	底部	横ナデ	横ナデ	暗灰黄	暗灰黄	良	
	26	7	—	—	陶器	埦	底部	横ナデ	蛇目釉はぎ	暗オリーブ	暗オリーブ	良	
	27	4	—	—	陶器	埦	底部	横ナデ	蛇目釉はぎ	灰	灰	良	高台内施釉
	28	22	—	表	陶器	皿	底部		目跡有り	にぶい黄橙	オリーブ	良	
第14図	29	2	—	表	陶器	甕	口～胴			暗緑	暗緑	良	
	30	9	—	表	陶器	甕	胴			暗緑	暗緑	良	
第15図	31	8	—	表	陶器	甕	胴～底			暗緑	暗緑	良	
	32	11	—	表	陶器	甕	口～胴	横ナデ	横ナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	良	
第16図	33	1	—	—	陶器	擂鉢	口縁					良	コマ目
	34	3	—	表	陶器	擂鉢	口縁		縦横条線	オリーブ黒	暗赤褐	良	
	35	23	—	表	陶器	捏鉢	口縁	横ナデ		オリーブ黒	オリーブ黒	良	
	36	24	—	表	陶器	擂鉢	口～胴			オリーブ黒	暗灰黄	良	
	37	10	—	表	陶器	茶花	口～胴			黒褐・赤褐	黒褐	良	
	38	28	—	表	陶器	土瓶	蓋	釉	露胎	暗褐	灰褐	良	
	39	29	—	表	陶器	茶花	口～胴	鉄釉	露胎	極暗赤褐	暗赤褐	良	胎土：橙
	40	30	—	表	陶器	蓋	蓋			オリーブ黒	灰褐	良	
	41	25	—	表	不明	不明	口～胴			黒褐・赤褐	暗オリーブ灰	良	
第17図	42	13	—	表	土師器	鉢	口縁部	横ナデ	横ナデ	黄橙	黄橙	良	
	43	10	—	表	土師器	鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	良	スス付着
	44	26	—	表	不明	小型鉢	口～胴			明赤褐	明赤褐	良	スス付着
	45	31	—	表	土師質	焙烙	把手	ヘラ削り後ナデ	ヘラ削り後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	指頭圧痕，スス付着
	46	27	—	—	陶器	壷	胴～底	横ナデ	横ナデ	オリーブ灰	灰	良	
	47	32	—	表	土製品	土錘		ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	良	
	48	33	—	表	土製品	人形	頭欠損			にぶい橙	にぶい橙	良	
	49	なし	—	—	古銭	—	—	—	—	—	—	—	寛永通宝

に露胎がみられる。21･27は灰白色をした唐津焼風の埦で，重ね焼きであるが，内底は薄く釉がかかり薄い部分が器面にみられる。28の外面は露胎で，内面に砂目痕がみられる。

29～32は，陶器甕である。口縁部は，内外へ張り出すもので，上面は平坦となるが，Ｔ字状のもの（29）と，Ｔ字状で外が下へ張り出すもの（32）とがある。32の上面には，重ねの砂痕が見られる。胴部は膨らむものと，筒状になるものとがある。口縁直径は29～31cm，ややあげ底ぎみとなる平底の底部直径は20cmである。33～36は陶器鉢で，口縁部は外へ張り出しているが，逆Ｌ字形のものと，外へ反るものとがある。33は口縁直径が31cm，高さ13cm，底部直径が18cmで，底には団子状の重ねが残っている。かき目は幅が広い。34は口縁直径が26.6cmで，やや丸みをもって深いものである。35は口縁直径が17cmあり，口縁上面には重ね痕が残っている。36はかき目幅が広い擂鉢である。37・39は茶花で，注ぎ口は如意状を呈している。38は天井部につまみがあり，受け部が直に立ち上がる蓋で，受け部直径が44cmである。40は端部が矩形となり，天井部が下へ下がる蓋である。47は長さ4.5cm，直径2.5cm，孔径0.8cmの紡錘状土錘である。48は首が欠けた僧侶形の土人形で型作りのものである。49は直径2.1cmの寛永通宝である。裏は無字である。42・43は土師質の小型鉢で，42・43とも口縁直径16.2cmである。43は玉縁状の口縁である。45は，土師質の焙烙の握手である。46は底部直径が７cmとなる安定した底の陶器の壺である。44は直径10.5cmの陶器の小型鉢である。玉縁状の口縁となる。

第Ⅳ章　発掘調査のまとめ

後世の耕作等でⅡ層以上の包含層の残存がほとんどなく，Ⅲ層（アカホヤ火山灰層）の残存も少なかったため，包含層からの出土遺物はなかったが，旧石器時代や縄文時代早期の遺物の発見が見られ，工事区域以外にも遺跡の広がりを確認することができた。

遺構では，旧石器時代のブロックや近世遺構のもと思われる鉄滓を含む大型の土坑などがあった。大型土坑は，鉄滓の量から鍛冶や製鉄関連の遺構と考えにくく，自然の流れ込みと現場で判断した。一面に敷き詰められたような礫との関連も不明であり，今後の類例の発見を期待したい。

遺物では，縄文時代早期の苦浜式土器は，その特徴である胴部の膨らみから屈曲し外反する器形を残しており，苦浜式土器研究の良好な資料となった。

引用・参考文献

①　鹿児島県企画部開発課　1974『鹿児島地域開発地域　土地分類基本調査　伊集院』

②　町田洋・新井房夫　2003『新編　火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』東京大学出版会

写　真　図　版

市ノ原遺跡周辺空撮（国土交通省画像）

「国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省」より編集加工　鹿児島県立埋蔵文化財センター

遠見番山遠景

図版 2

C-10・11 区
下層確認トレンチ断面

C・D-11・12 区
下層確認トレンチ断面

D-21 区
下層確認トレンチ断面

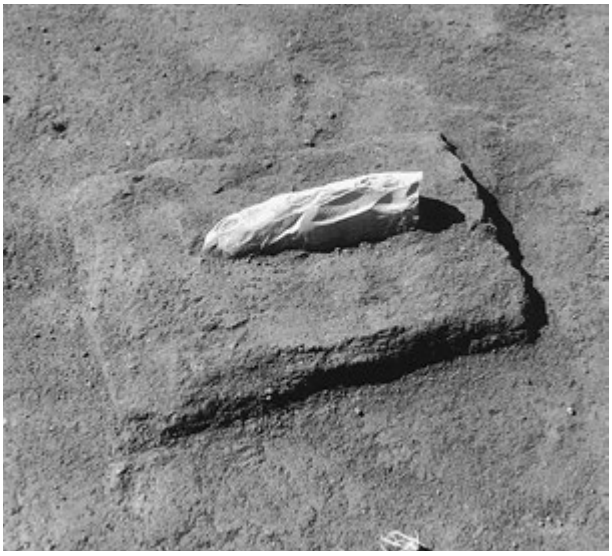
集石２検出状況

縄文土器（XV類）出土状況

弥生時代竪穴住居内遺物出土状況

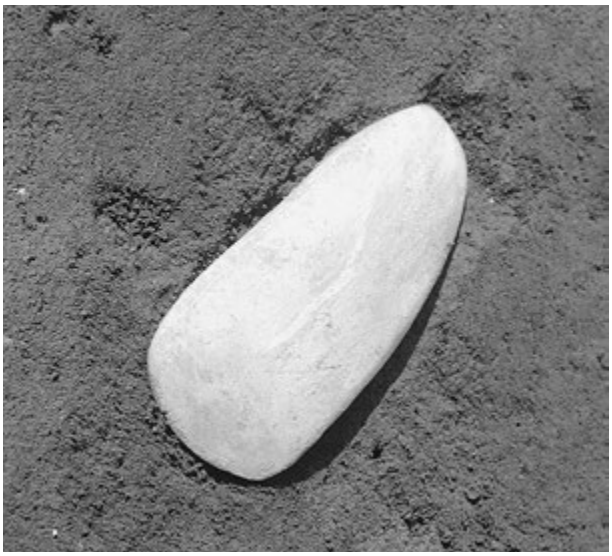
弥生時代竪穴住居完掘状況

三角壕形石製品出土状況



打製石斧出土状況

磨石出土状況



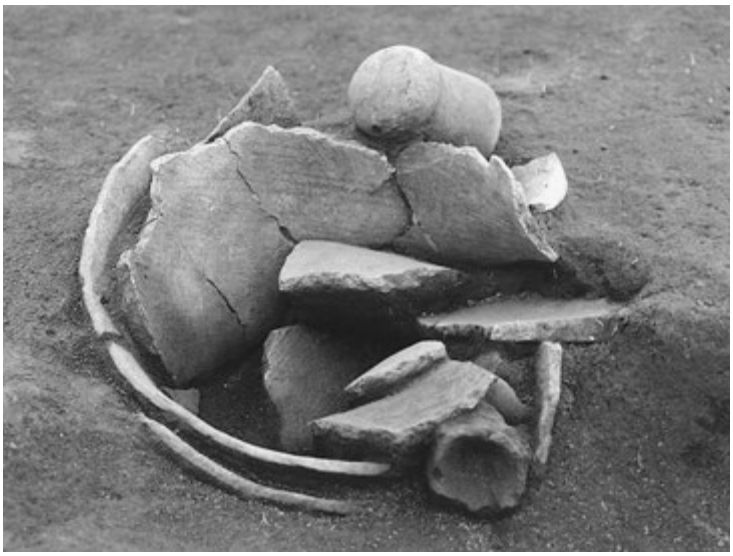
石皿出土状況

磨製石斧出土状況

図版6

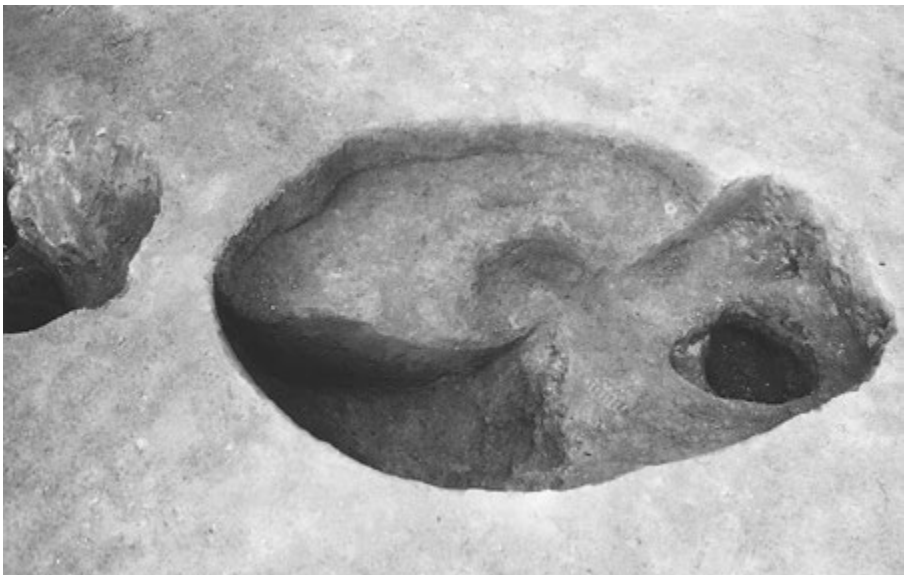
古墳時代　焼土遺構断面

成川式土器出土状況１

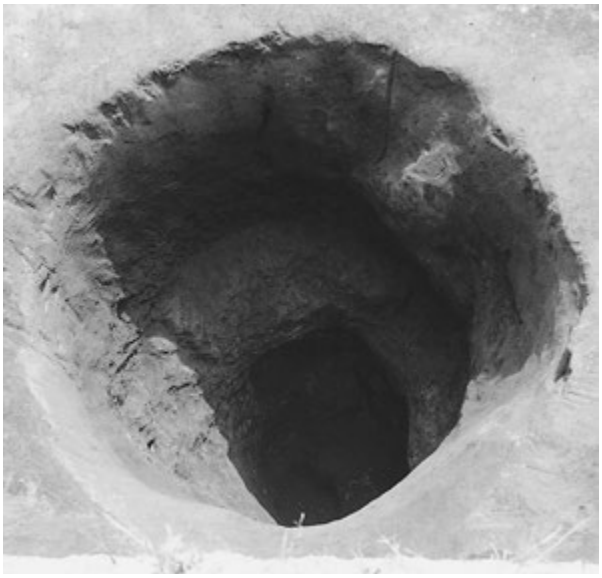


成川式土器出土状況２

Ⅴ類土坑



Ⅰ類土坑



時期不明土坑

時期不明土坑断面

掘立柱建物跡１

掘立柱建物跡２

中世道路状遺構検出状況

中世道路状遺構断面

近世道路遺構（出水筋跡）①

近世道路遺構（出水筋跡）②

近世道路遺構（出水筋跡）③

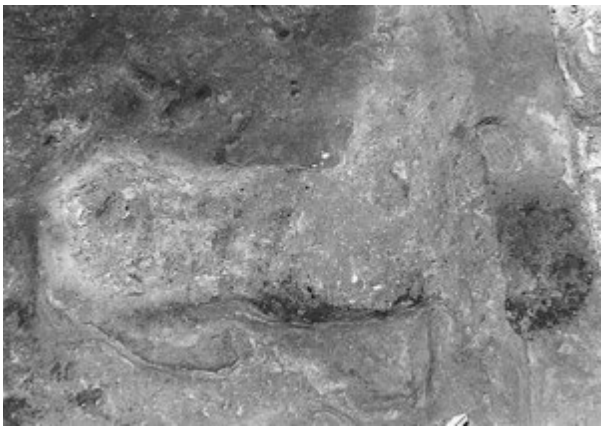
近世道路遺構（出水筋跡）断面　④

近世道跡
溝状遺構検出状況

近世溝状遺構検出状況

近世陶器溜まり遺構検出状況

図版12



鍛冶炉跡検出状況

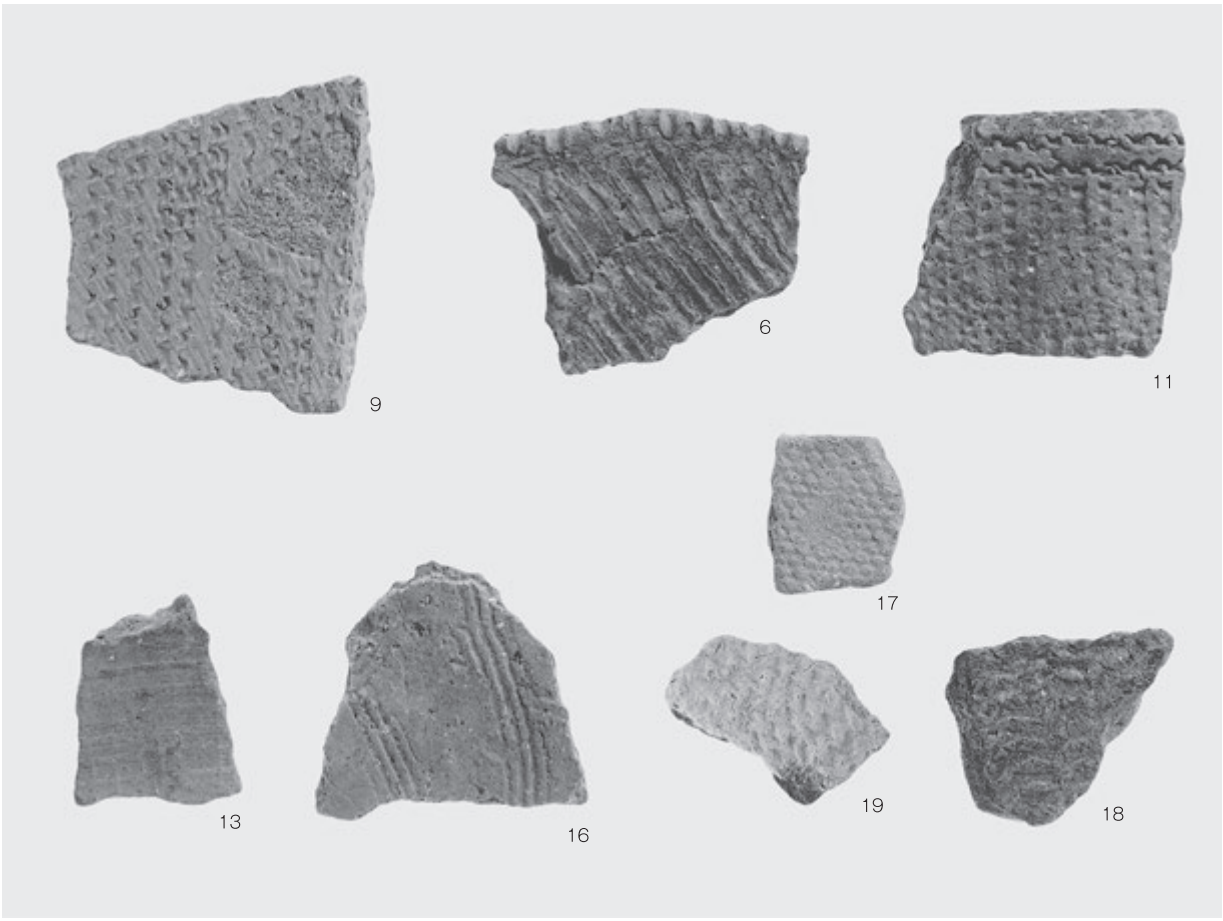
鍛冶炉跡半截

竈跡・石溜まり遺構検出状況

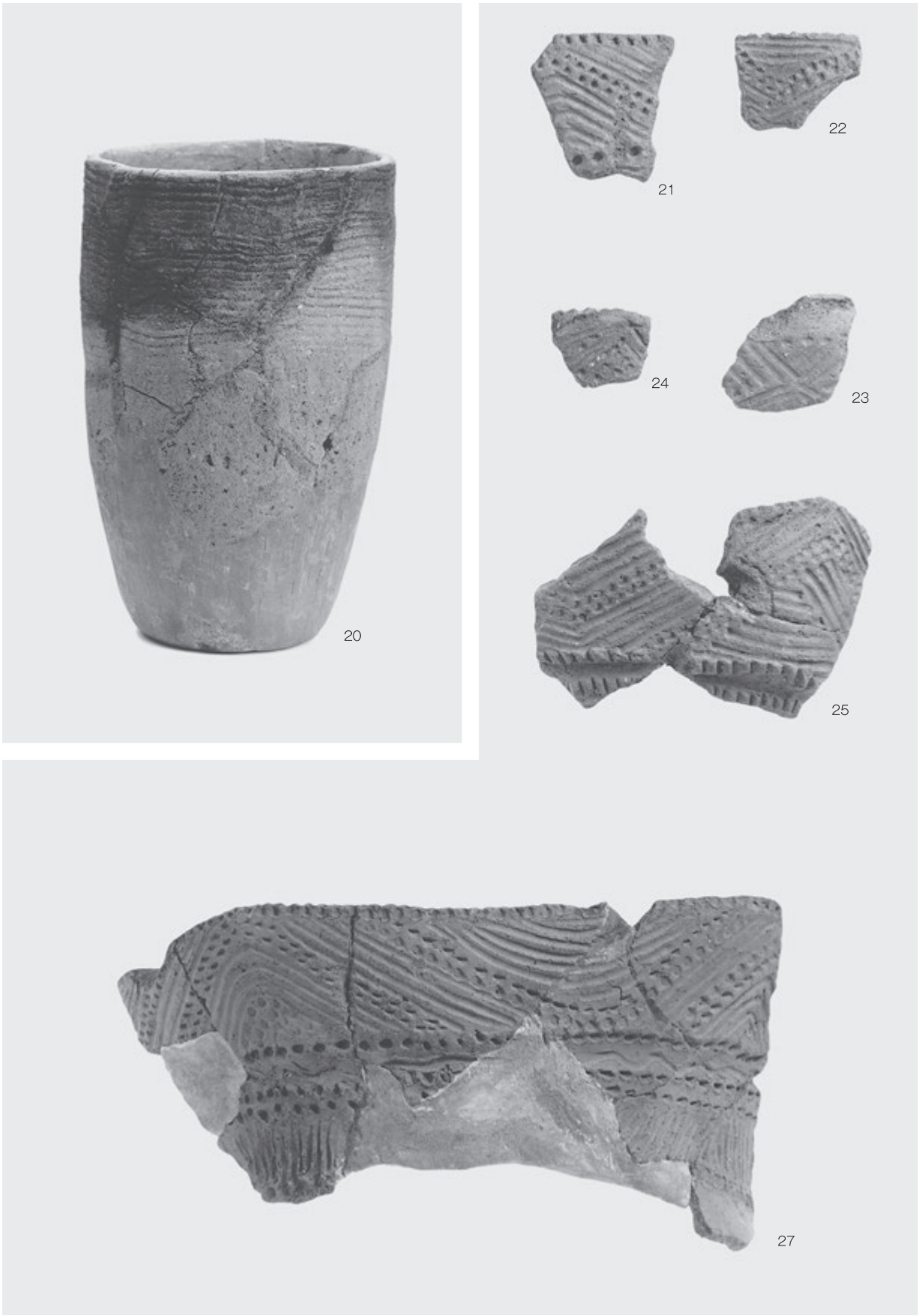
竈跡

竈跡調査風景

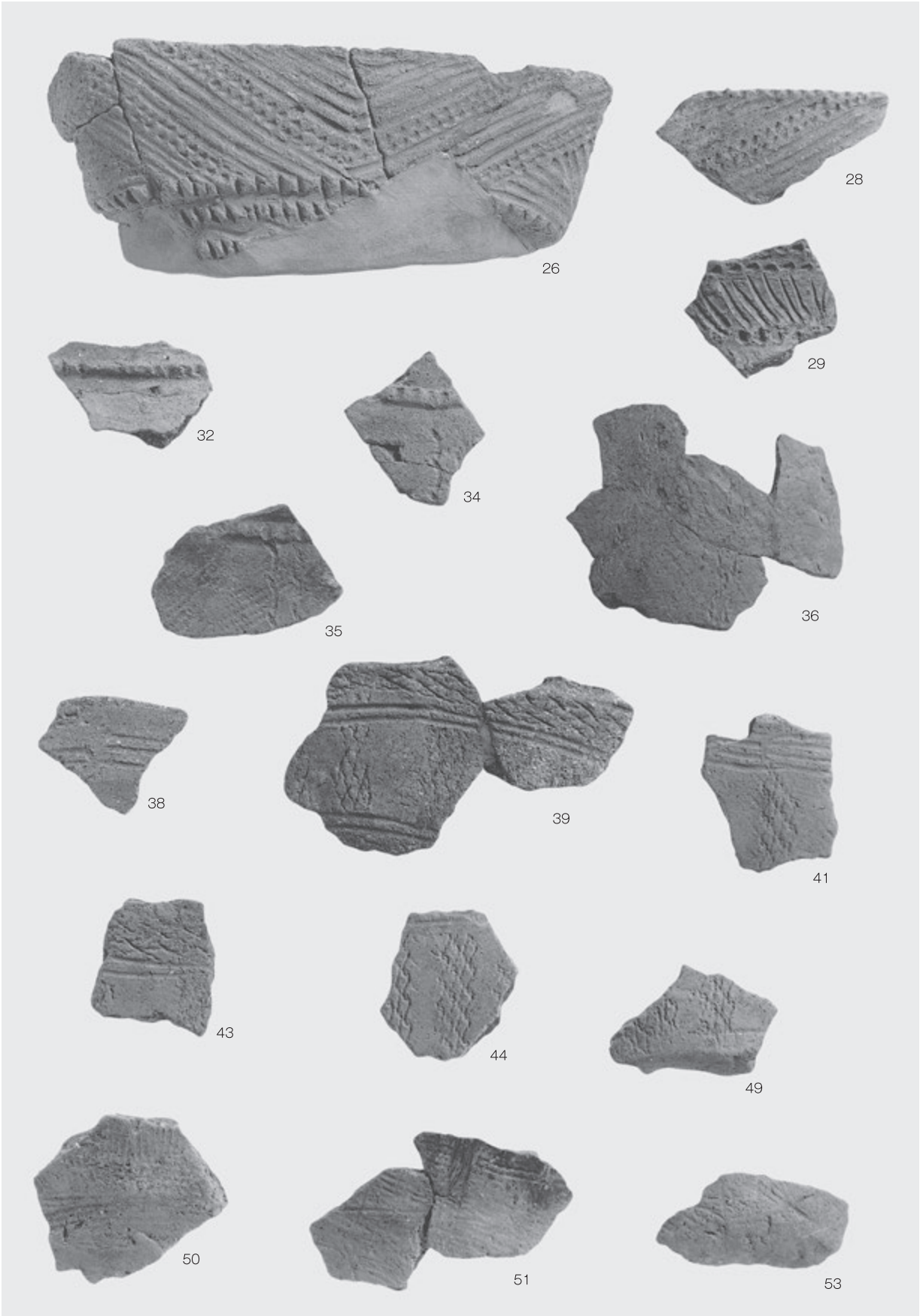
竈跡完掘状況



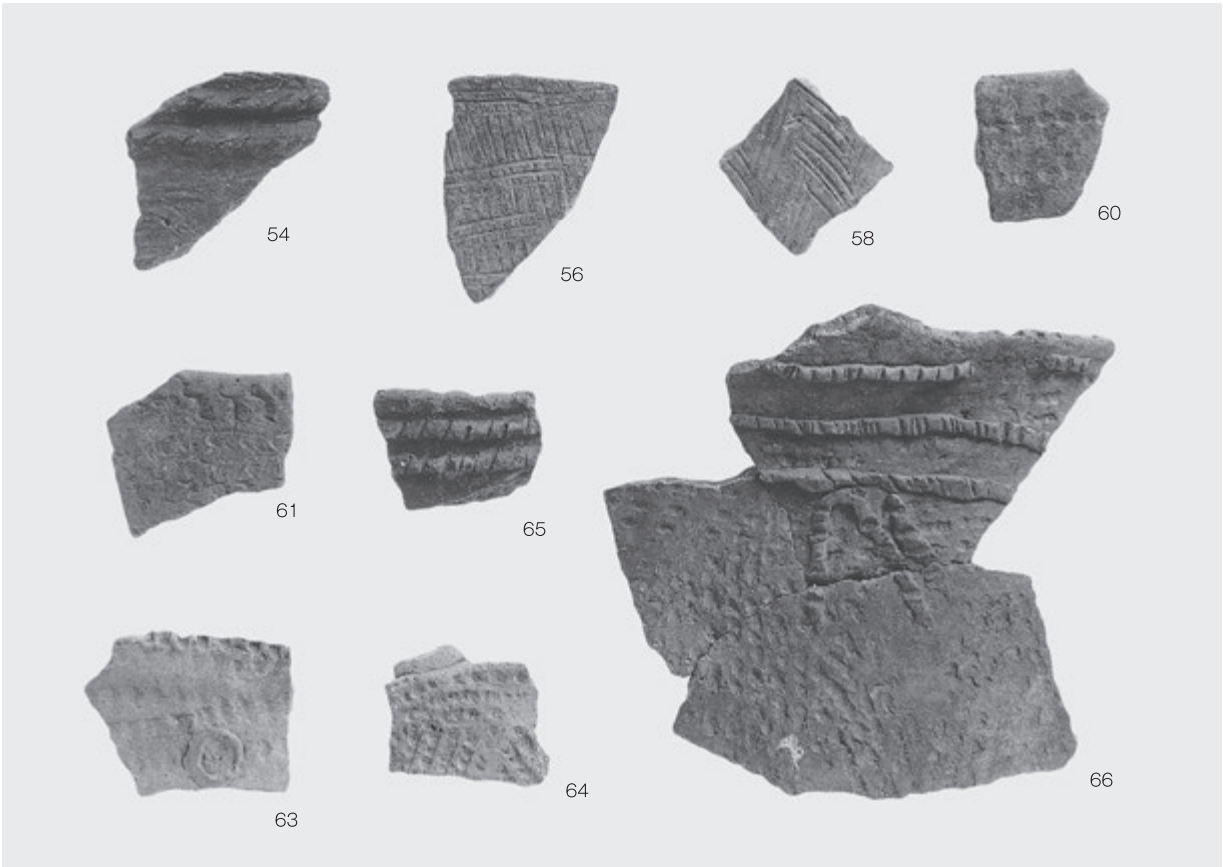
縄文土器１（Ⅰ～Ⅵ類）



縄文土器２（Ⅶ・Ⅷ類）

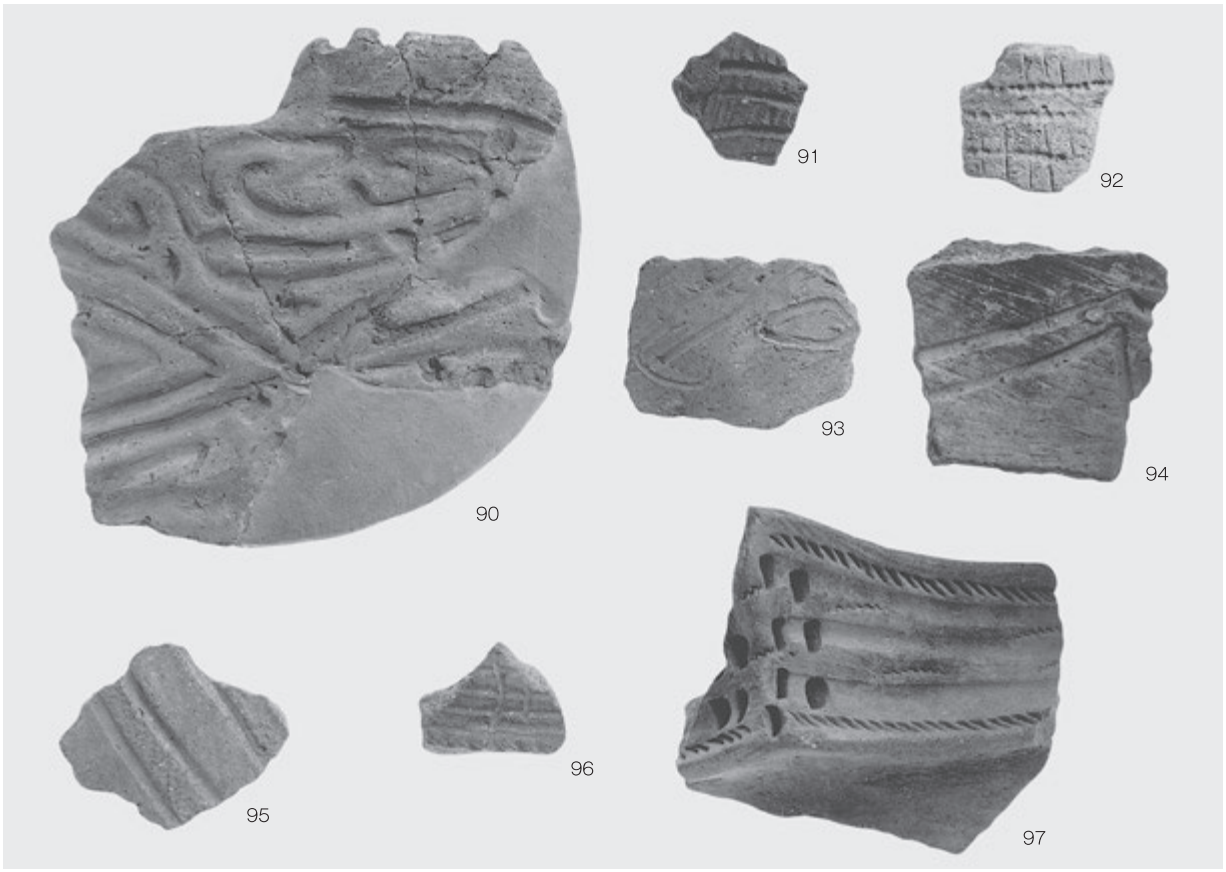


縄文土器３（Ⅷ・Ⅸ類）

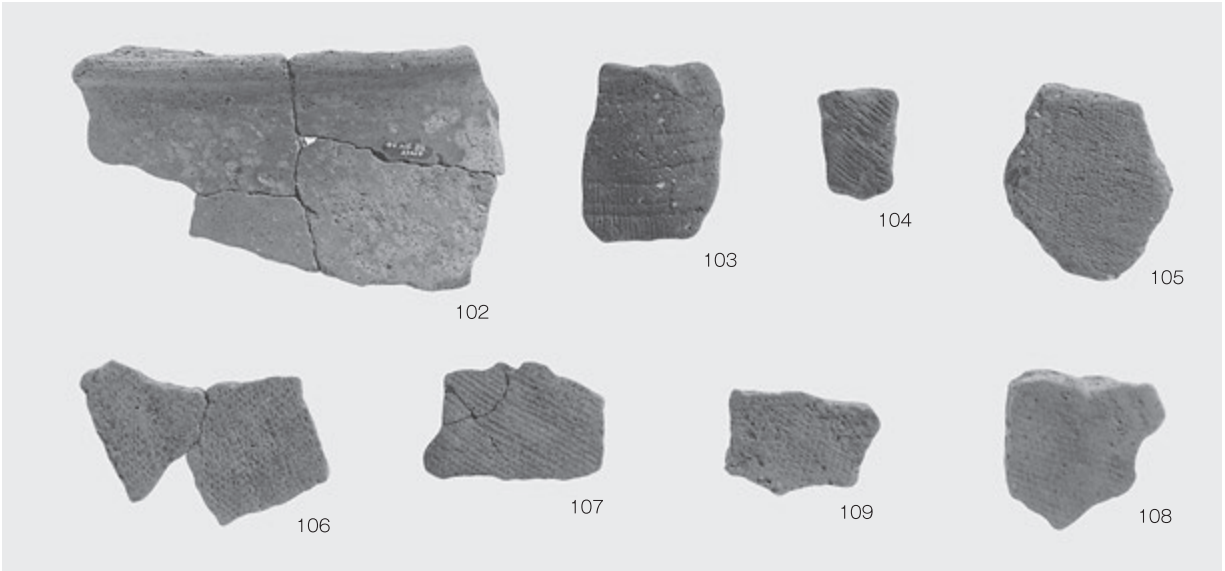


縄文土器４（Ｘ～ⅩⅡ類）

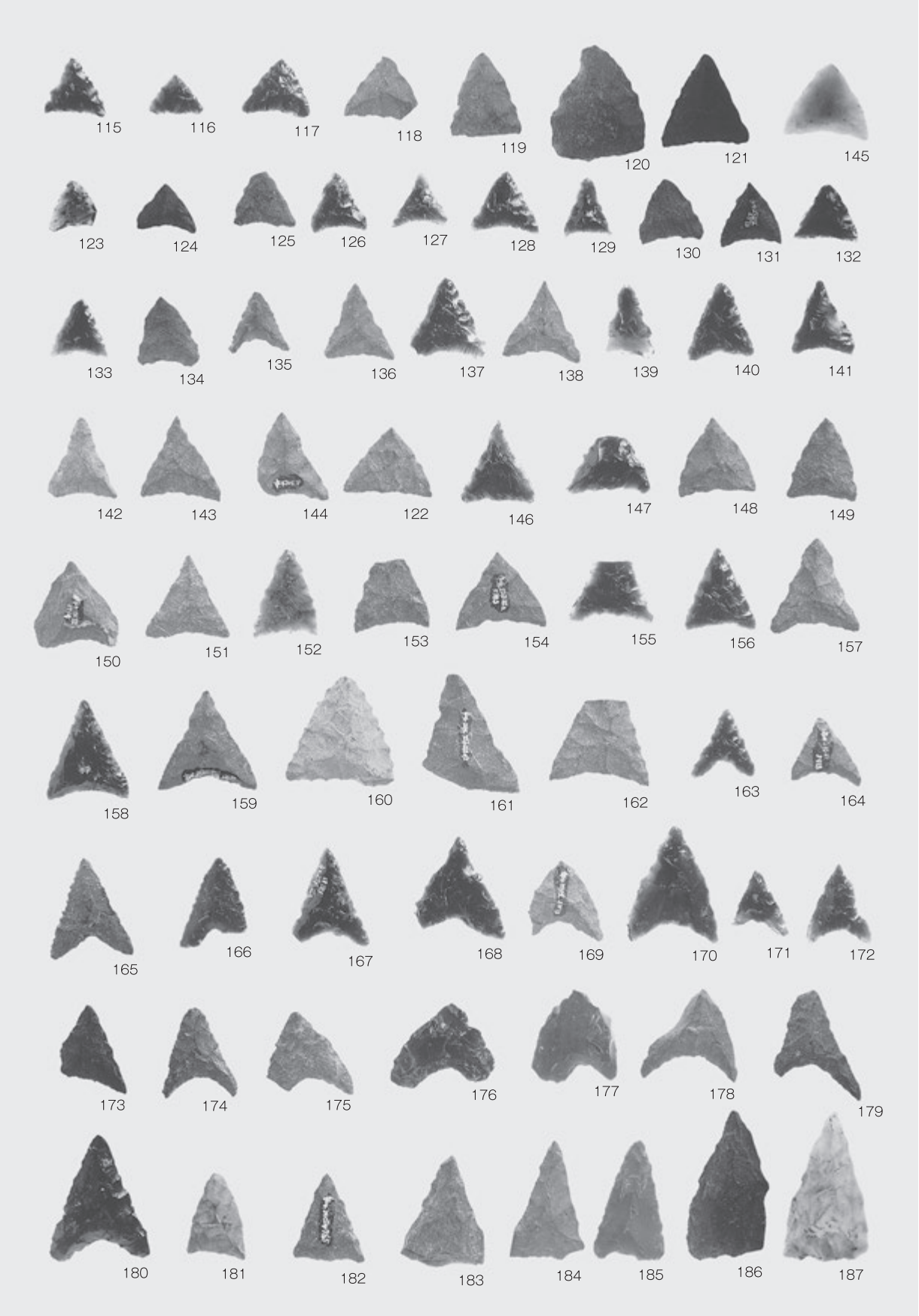
縄文土器５（Ⅻ～ⅩⅣ類）



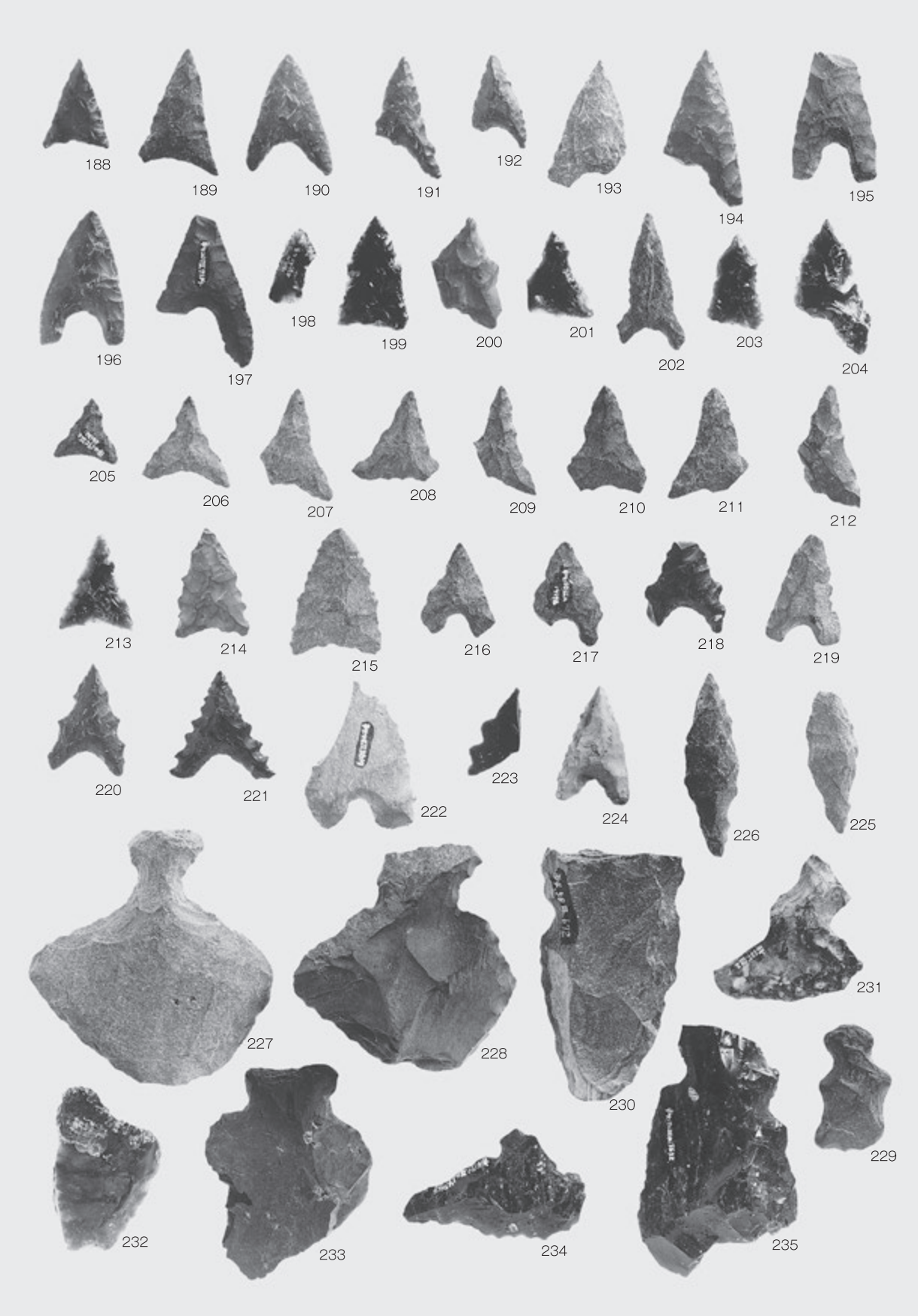
縄文土器６（XV～XIX類）



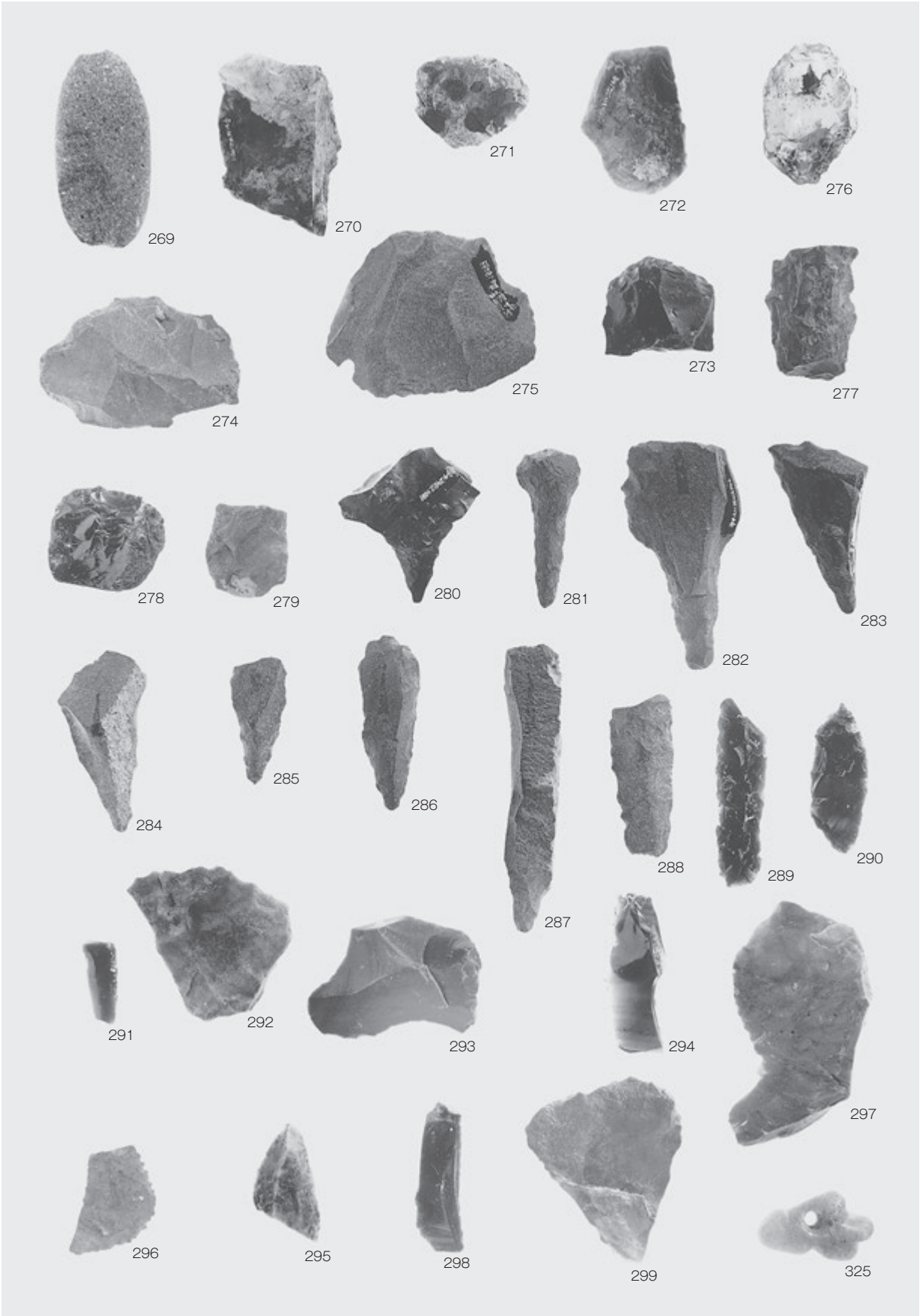
縄文土器７（XX～XXⅢ類）


115
116
117
118
119
120
121
145
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
122
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187

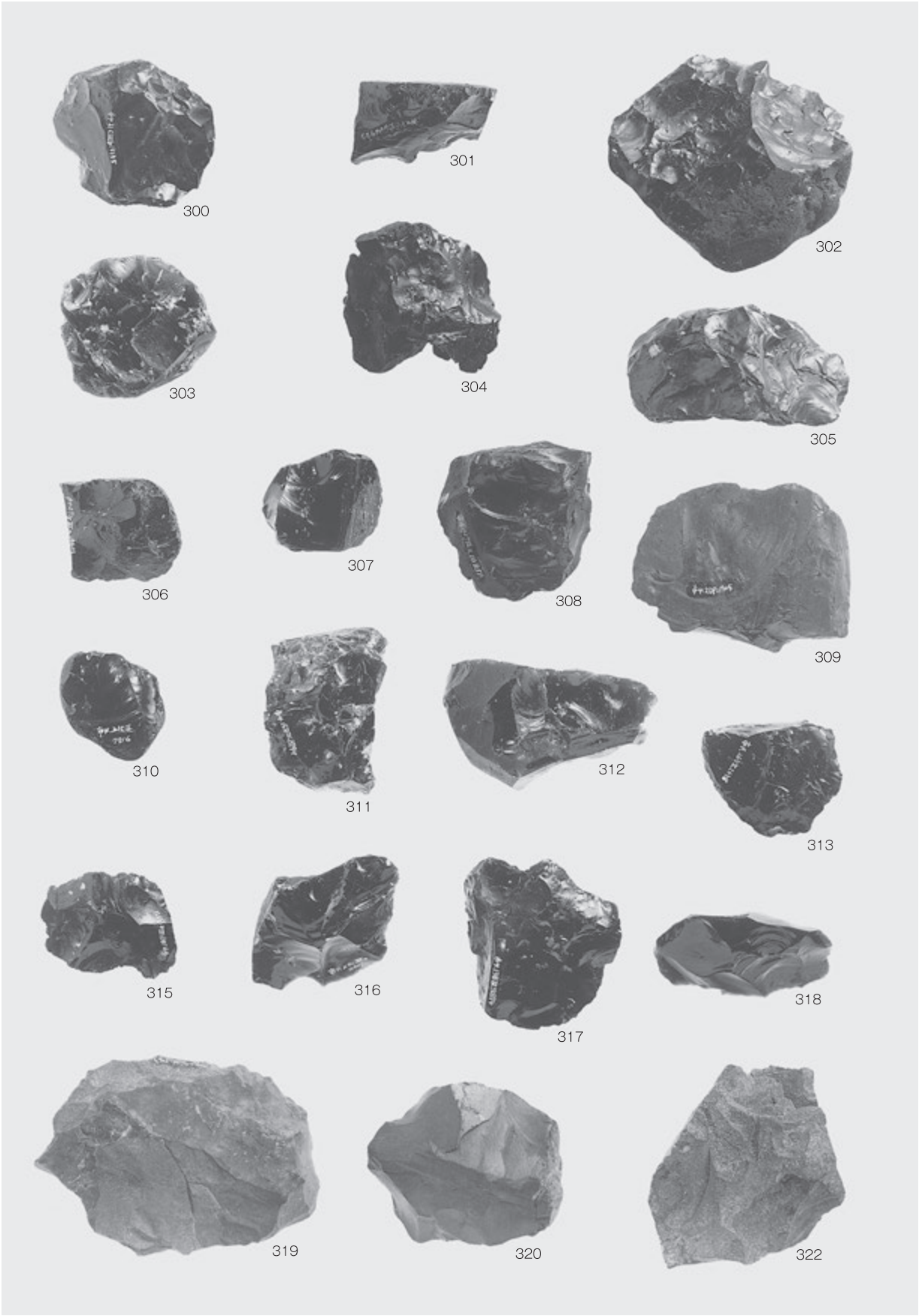
縄文時代の石器 1


188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
226
225
227
228
230
231
232
233
234
235
229

縄文時代の石器２


269
270
271
272
276
273
274
275
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
297
296
295
298
299
325

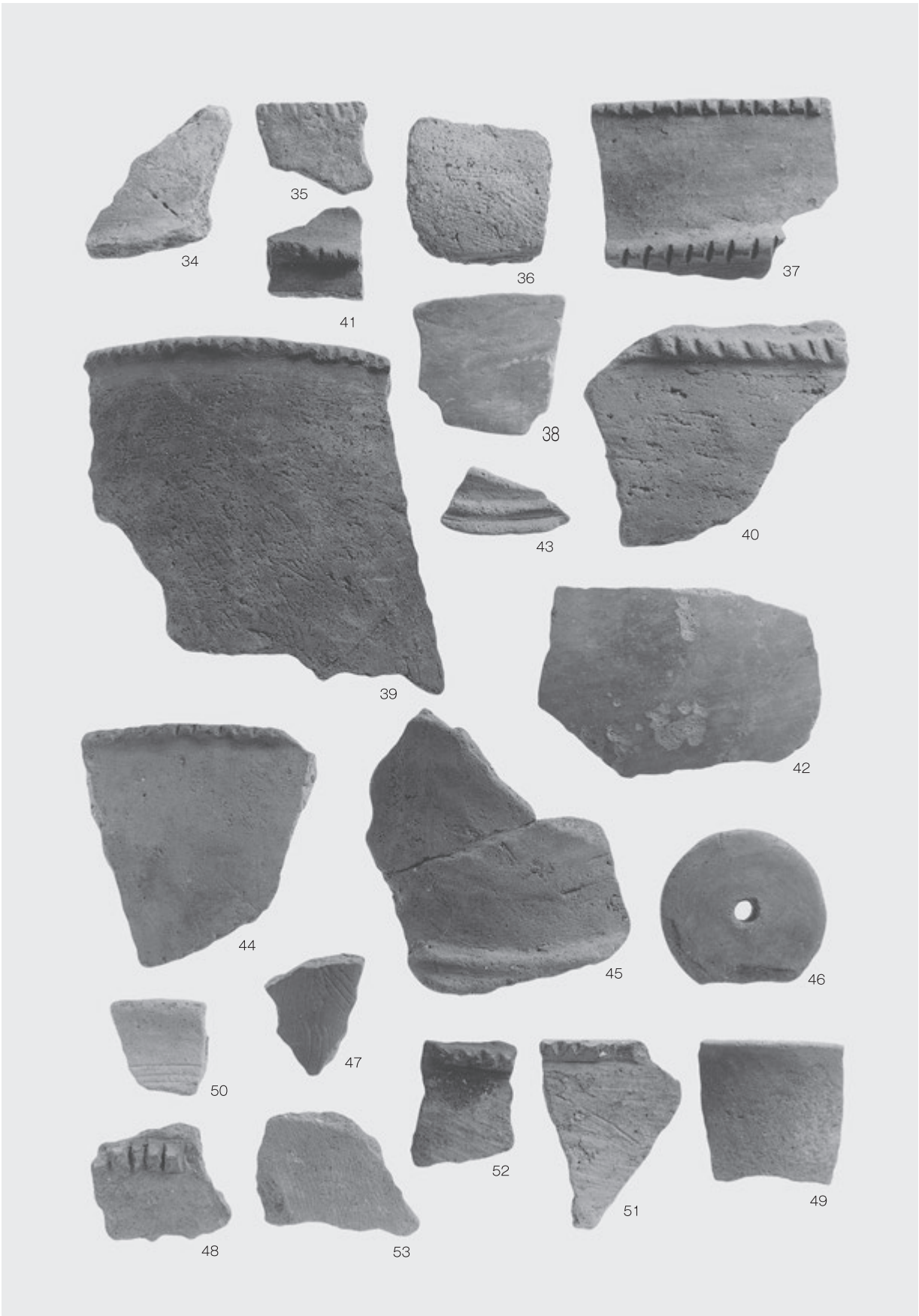
縄文時代の石器３


300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
315
316
317
318
319
320
322

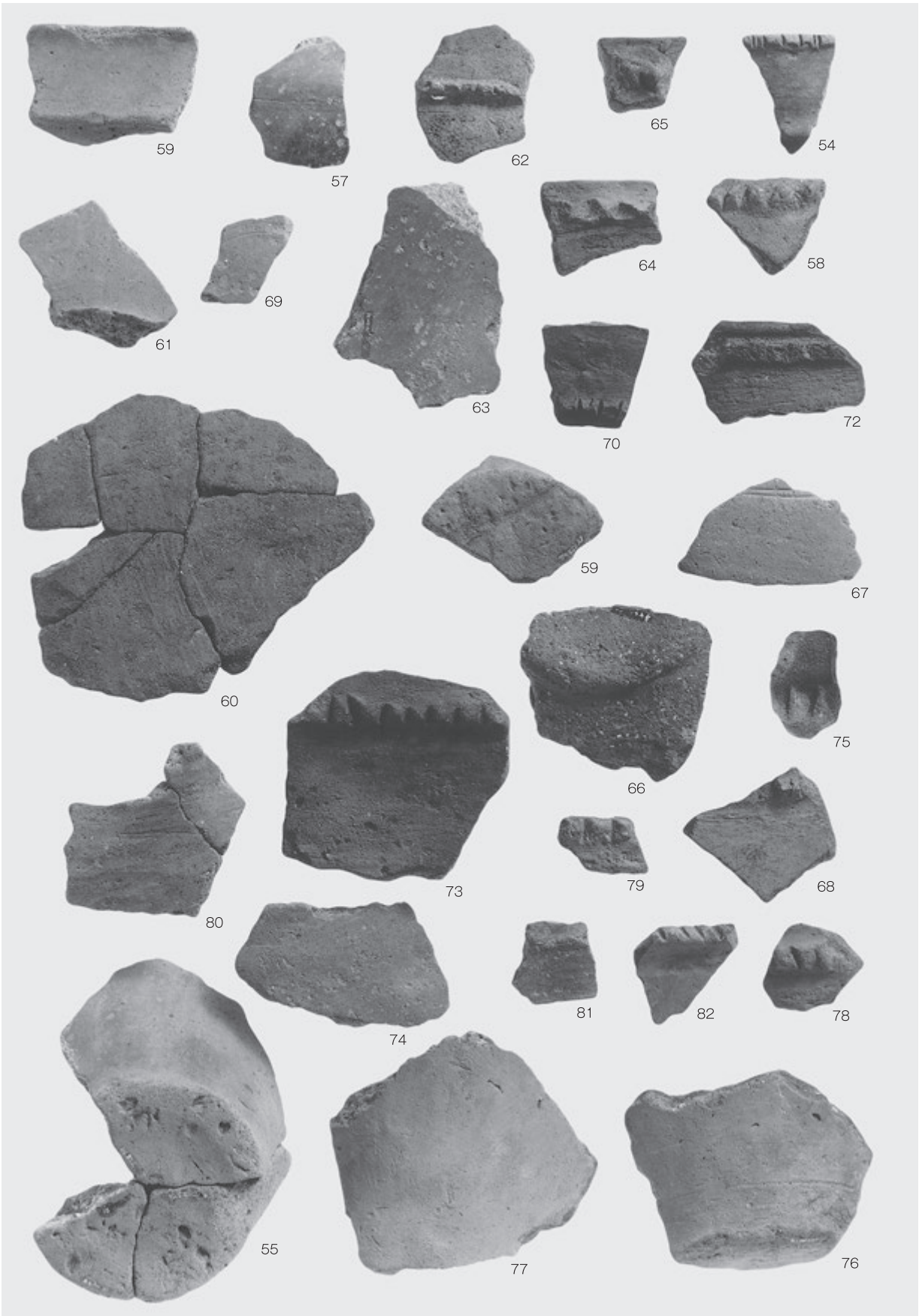
縄文時代の石器４

弥生時代の竪穴住居内出土遺物

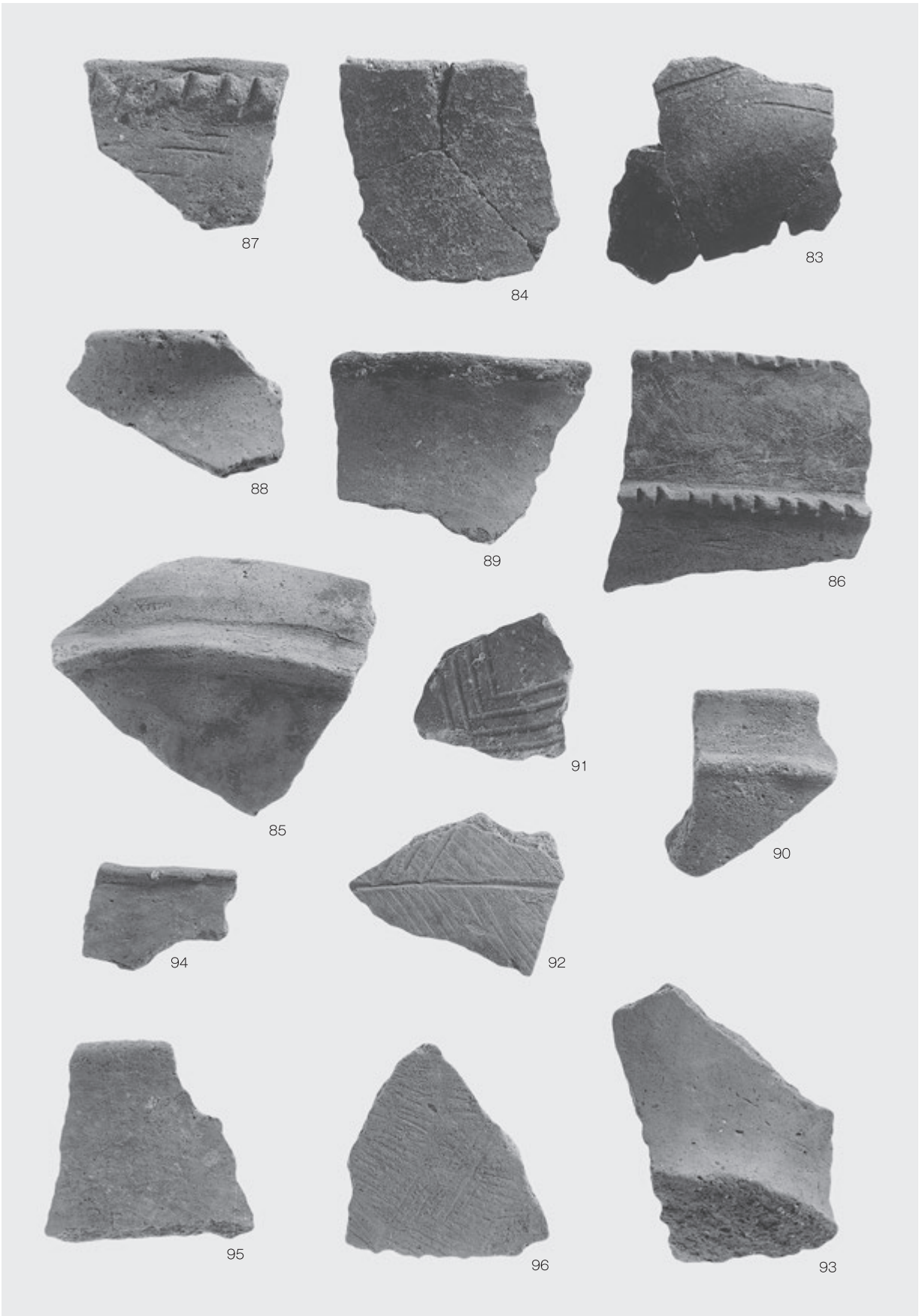
弥生時代の竪穴状遺構内出土遺物



弥生時代の土坑出土遺物 1

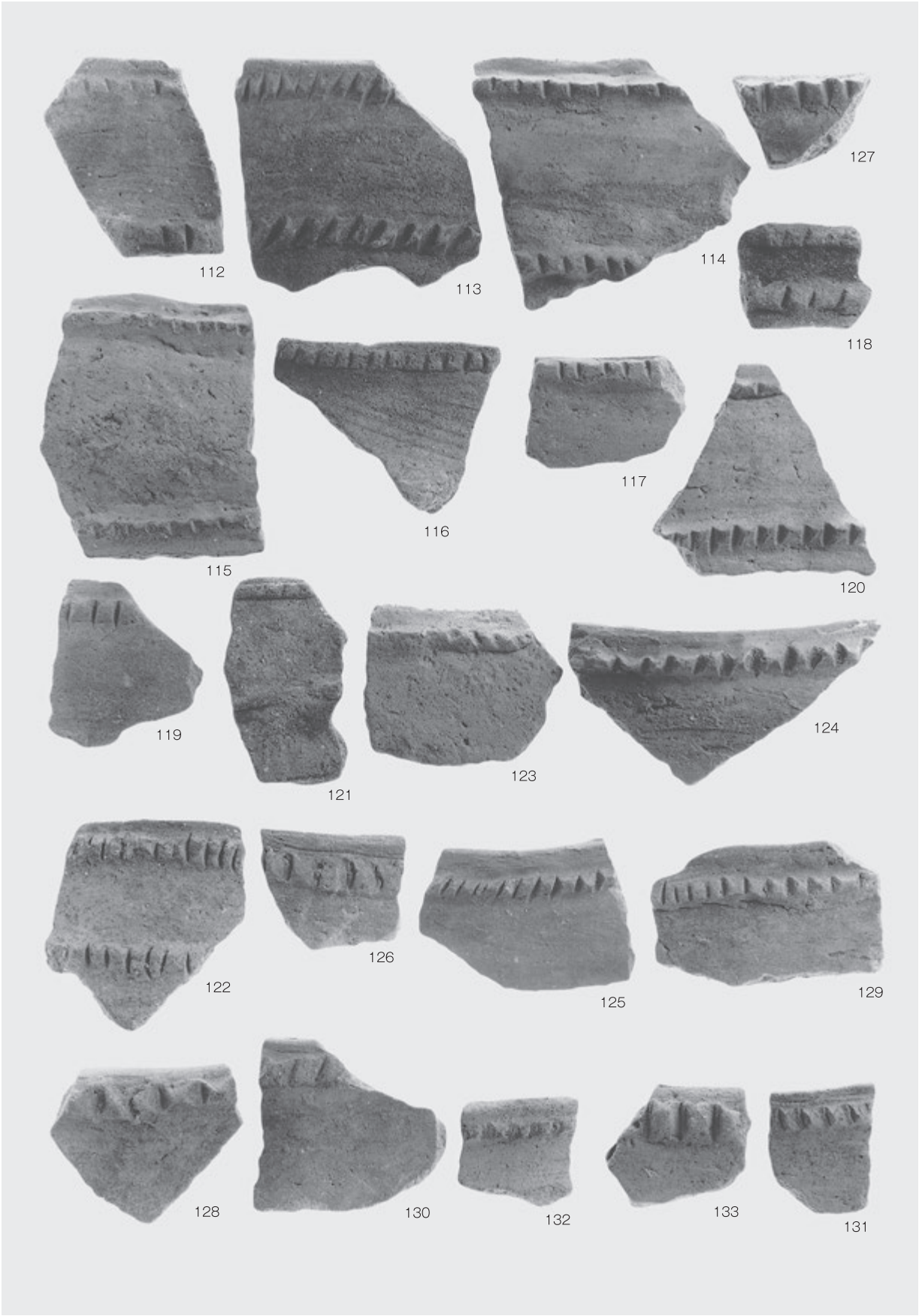


弥生時代の土坑出土遺物２・３

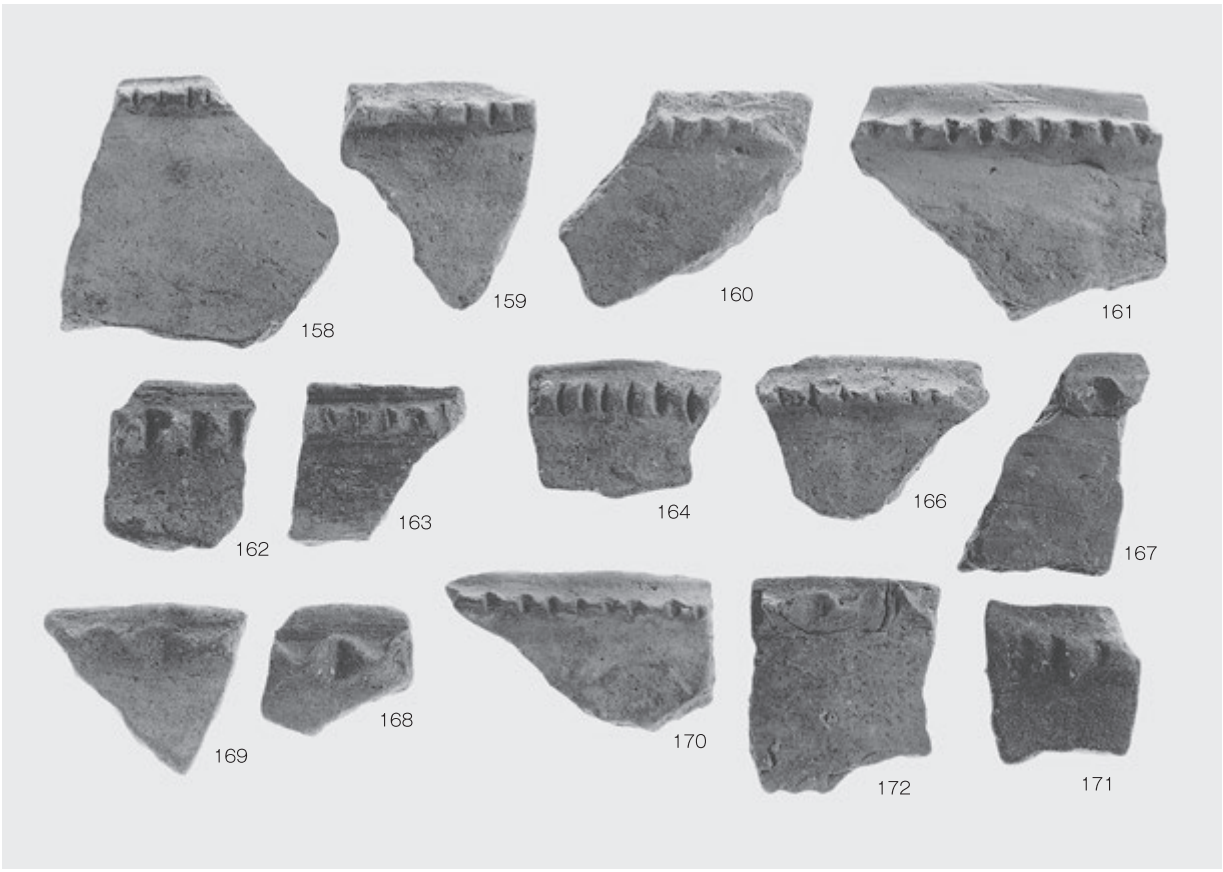


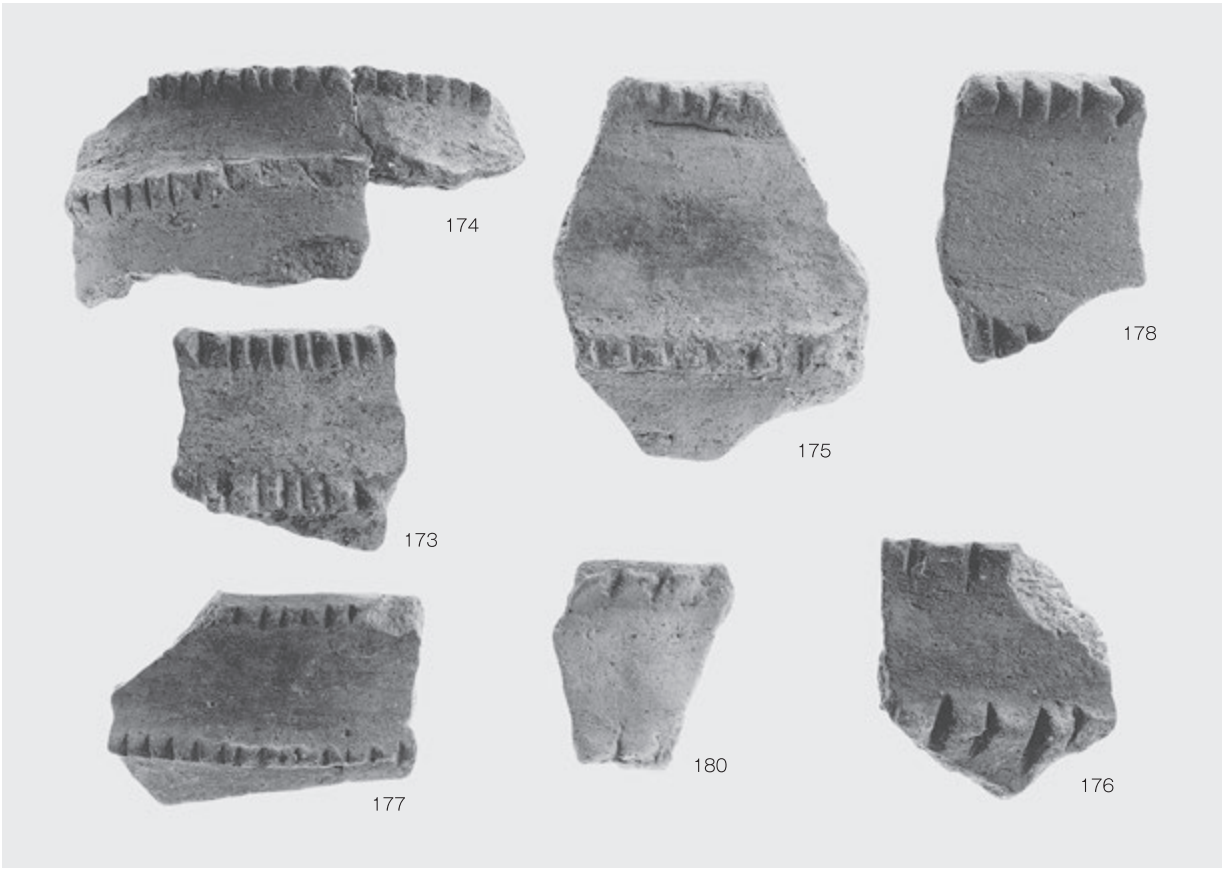
弥生時代のピット出土遺物

弥生時代の甕形土器 1

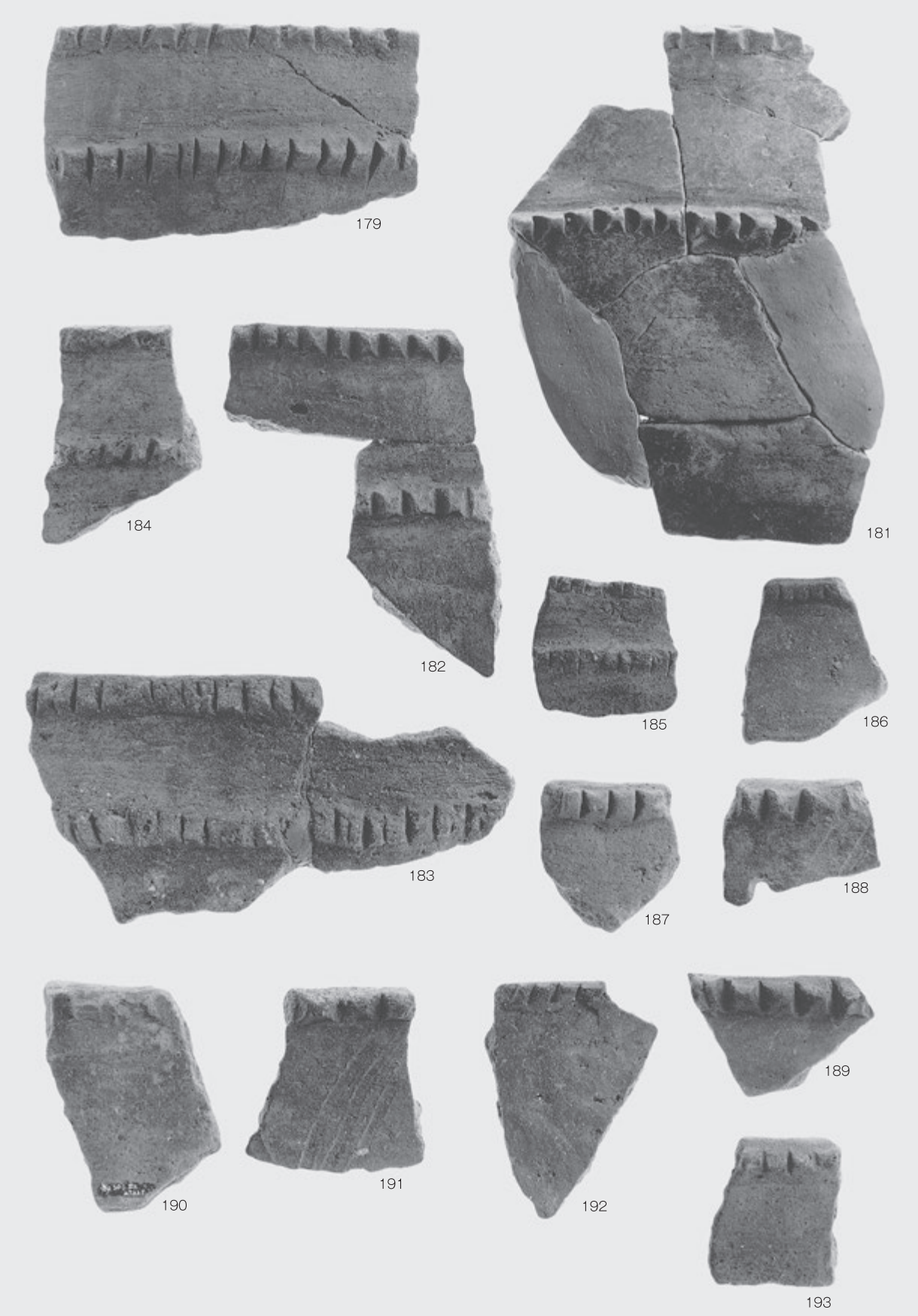

112
113
114
127
118
115
116
117
120
119
121
123
124
122
126
125
129
128
130
132
133
131

弥生時代の甕形土器２

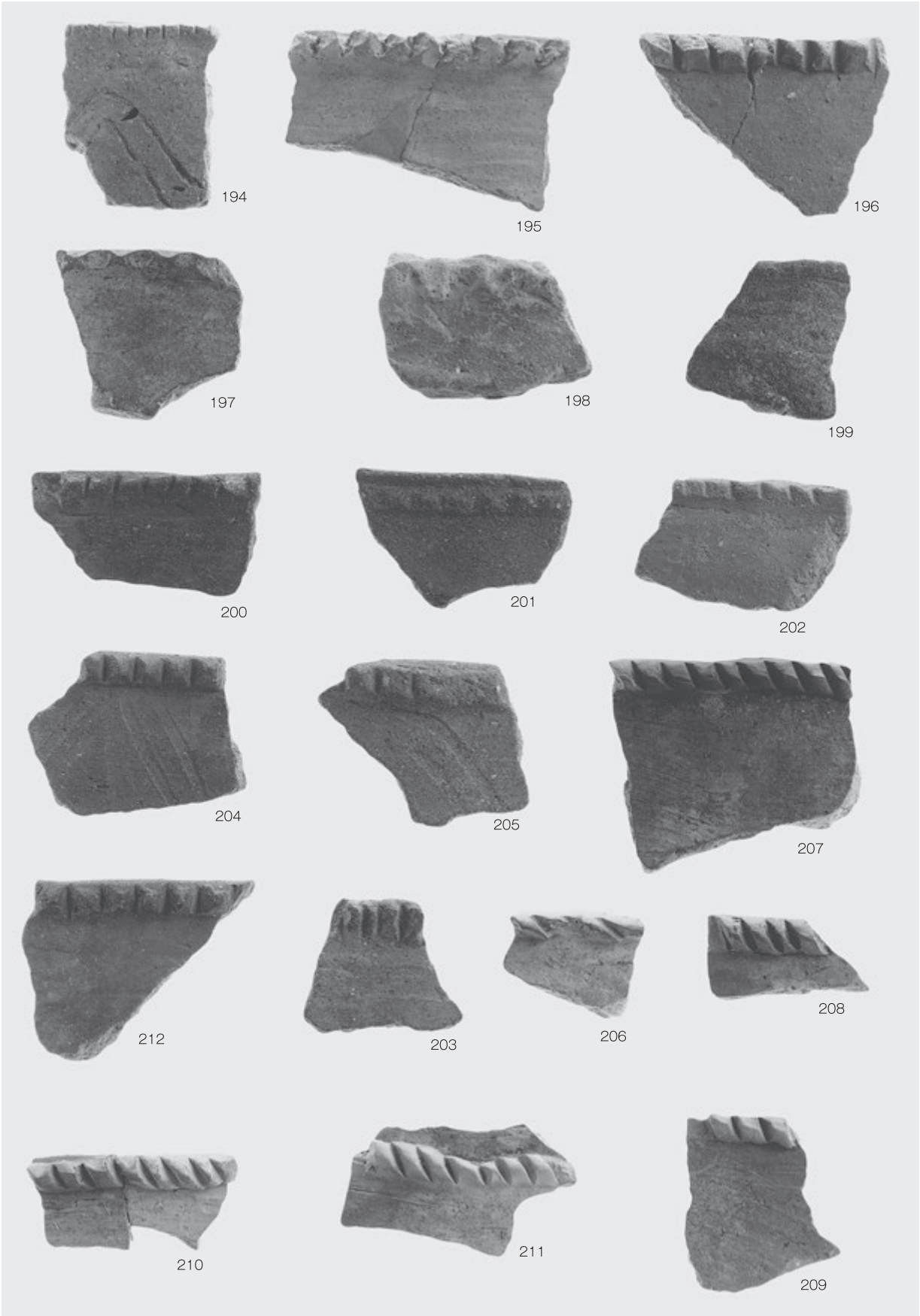

158
159
160
161
162
163
164
166
167
168
169
170
171
172


173
174
175
176
177
178
180

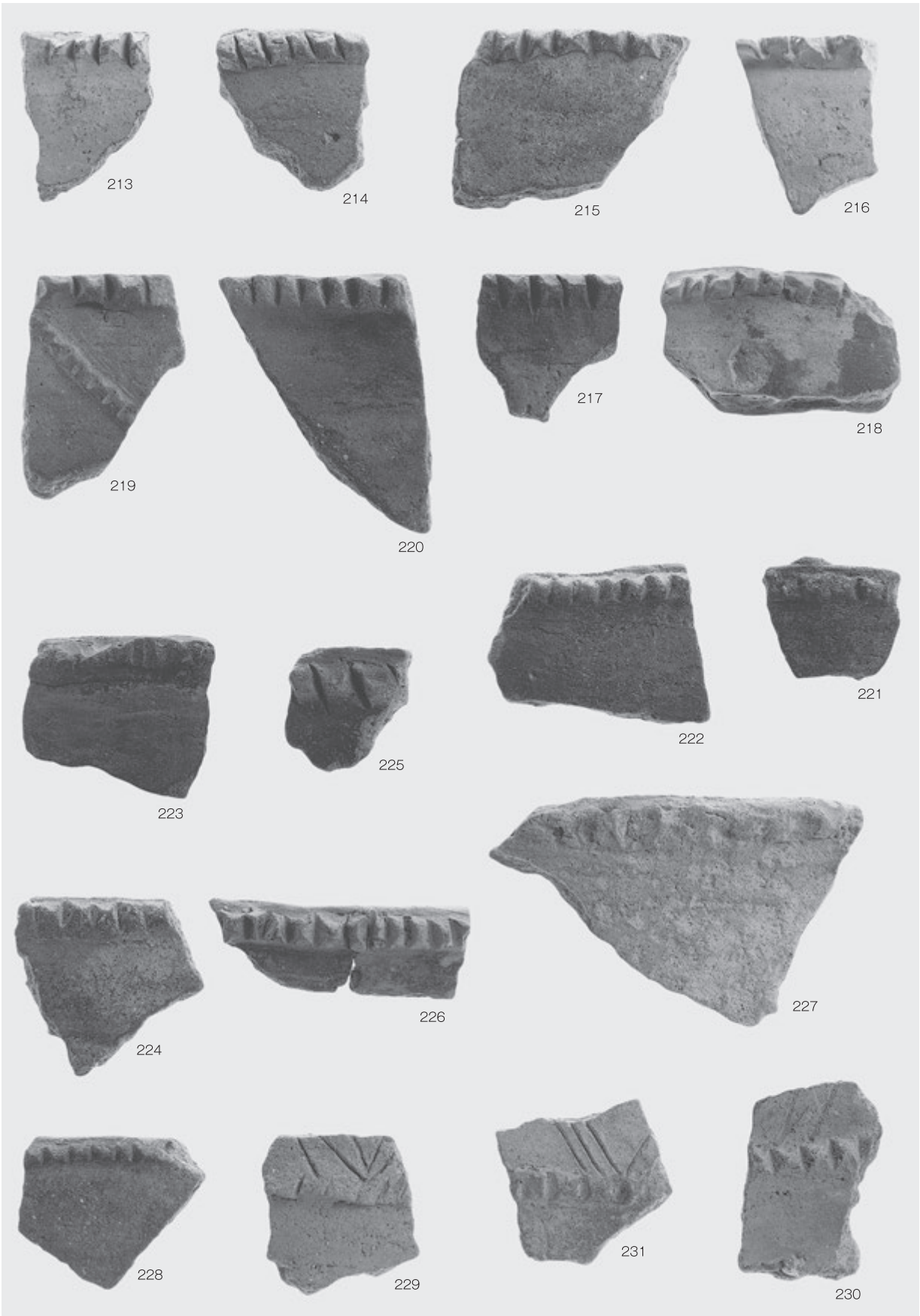
弥生時代の甕形土器３



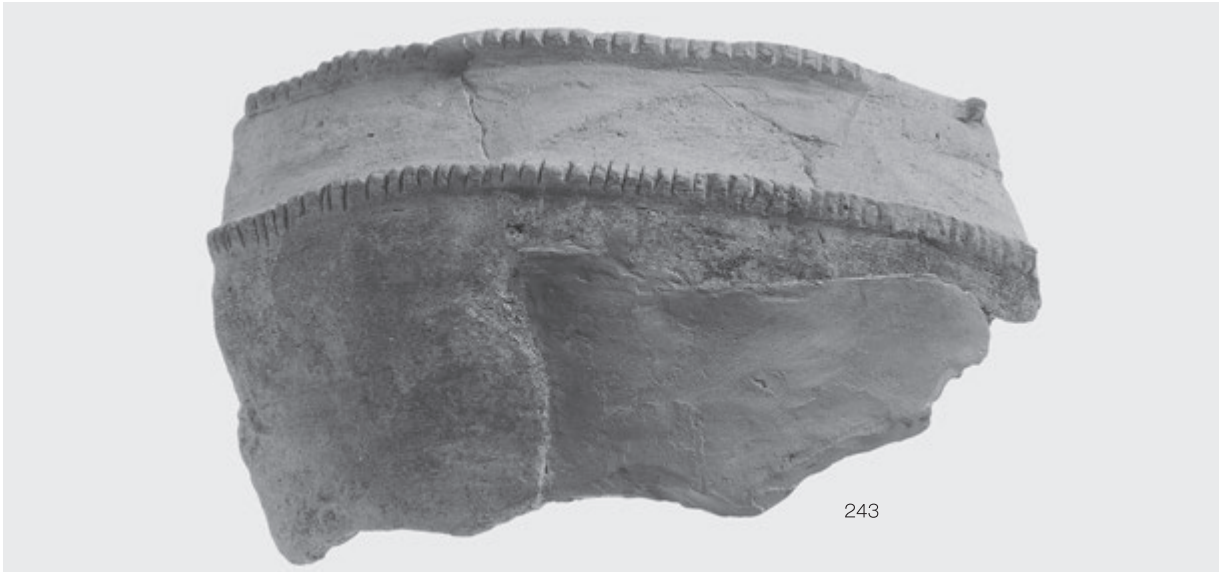
弥生時代の甕形土器４


194
195
196
197
198
199
200
201
202
204
205
207
212
203
206
208
210
211
209

弥生時代の甕形土器５

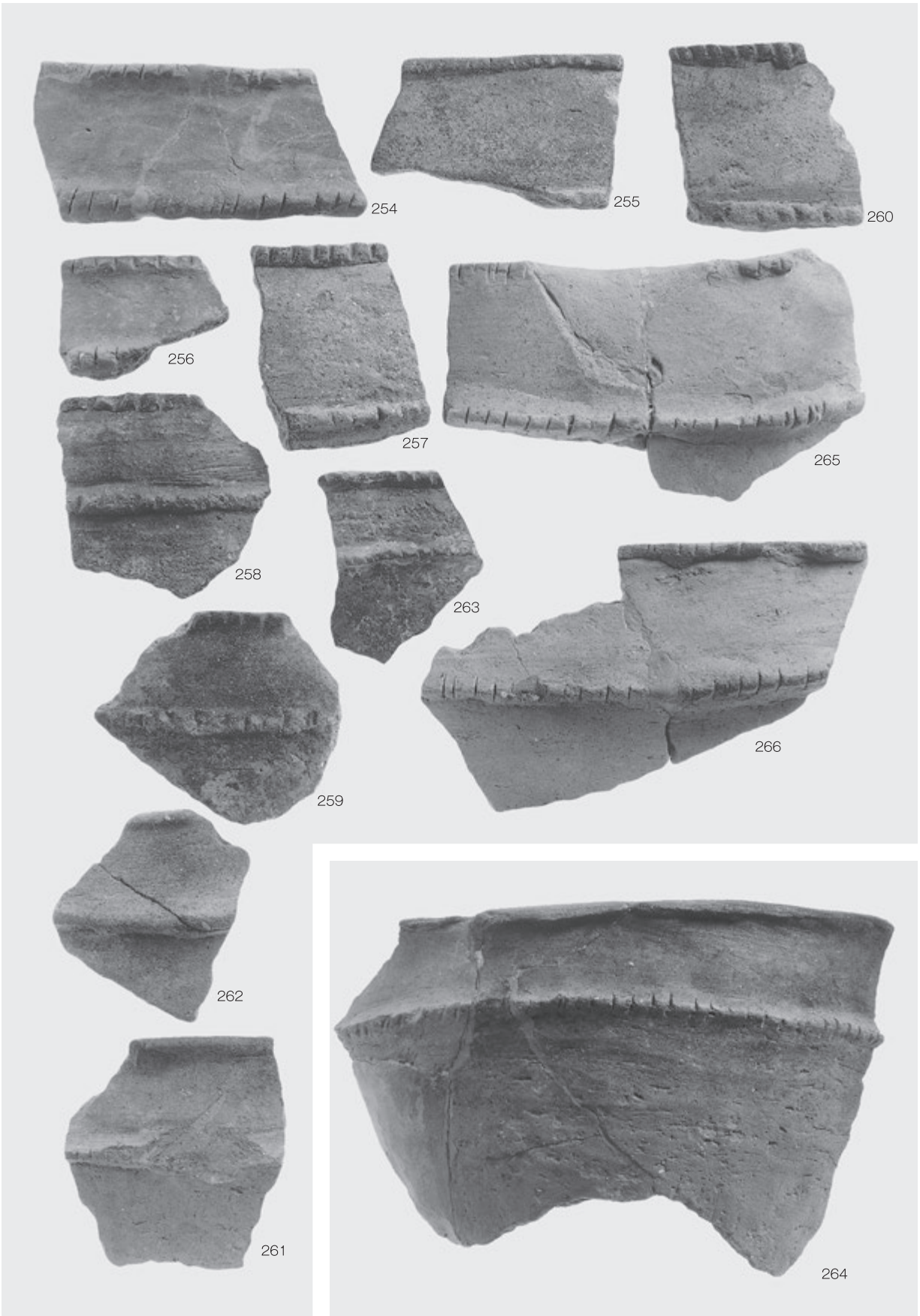

213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
225
224
226
227
228
229
231
230

弥生時代の甕形土器６

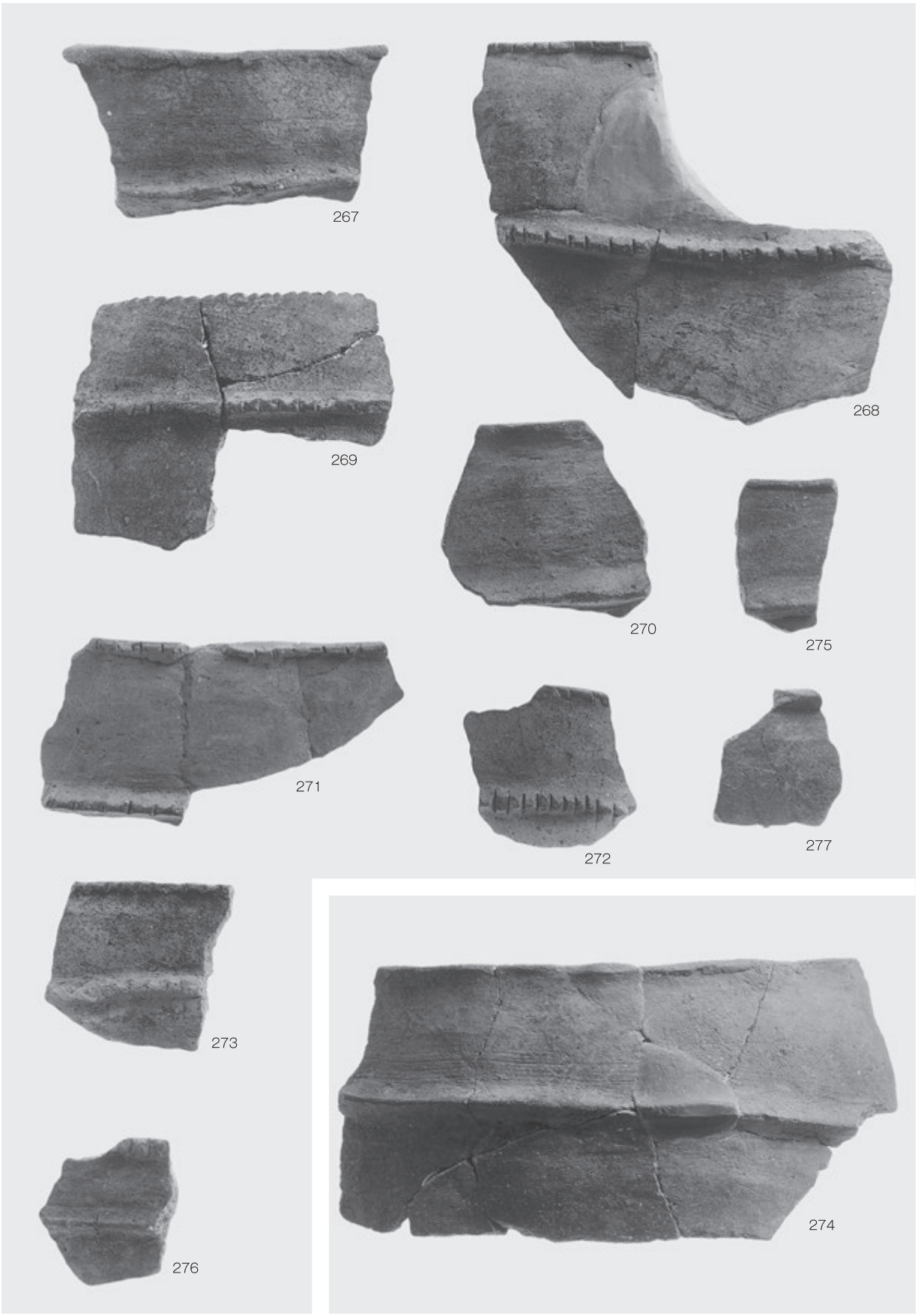


弥生時代の甕形土器７

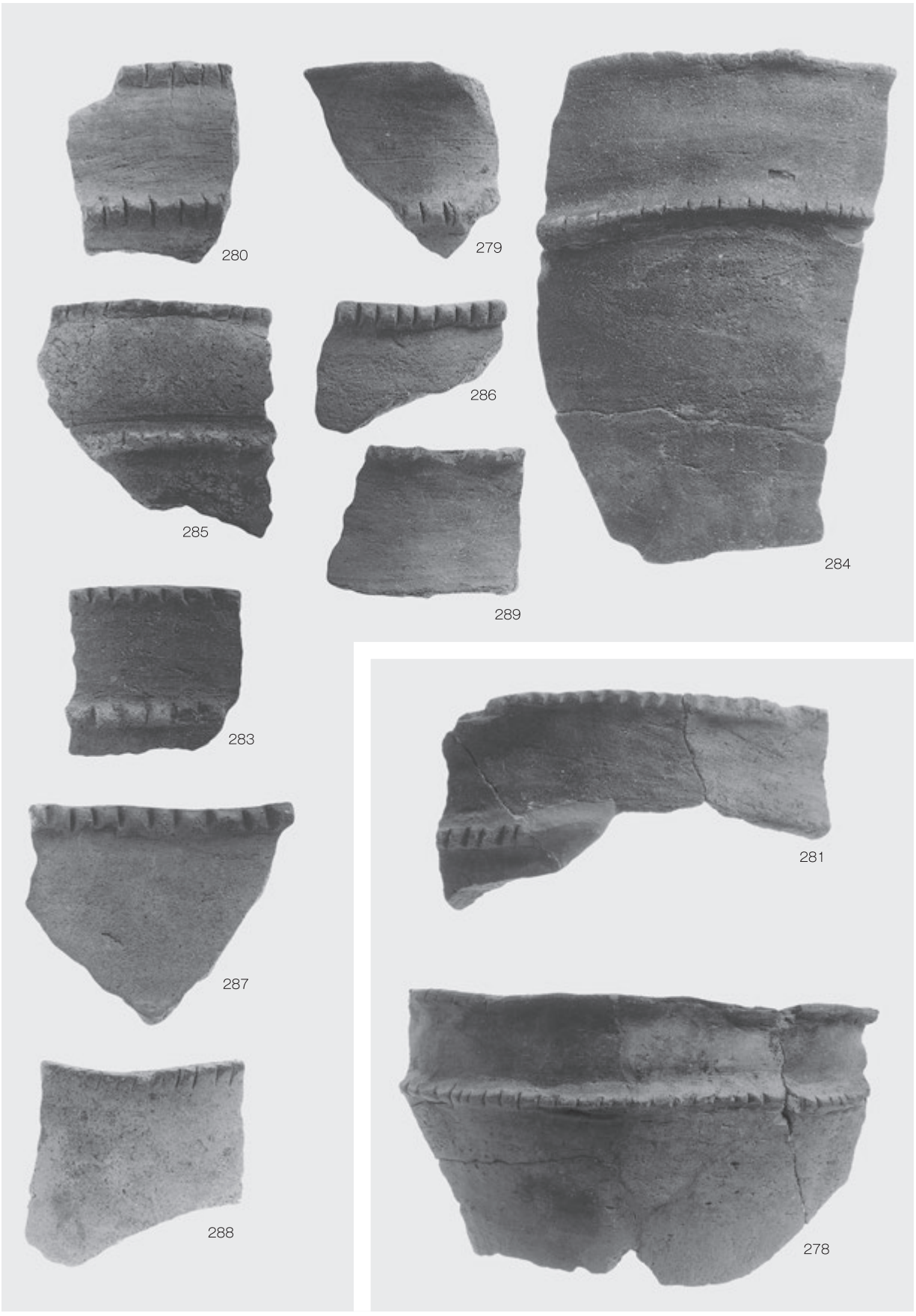
弥生時代の甕形土器８



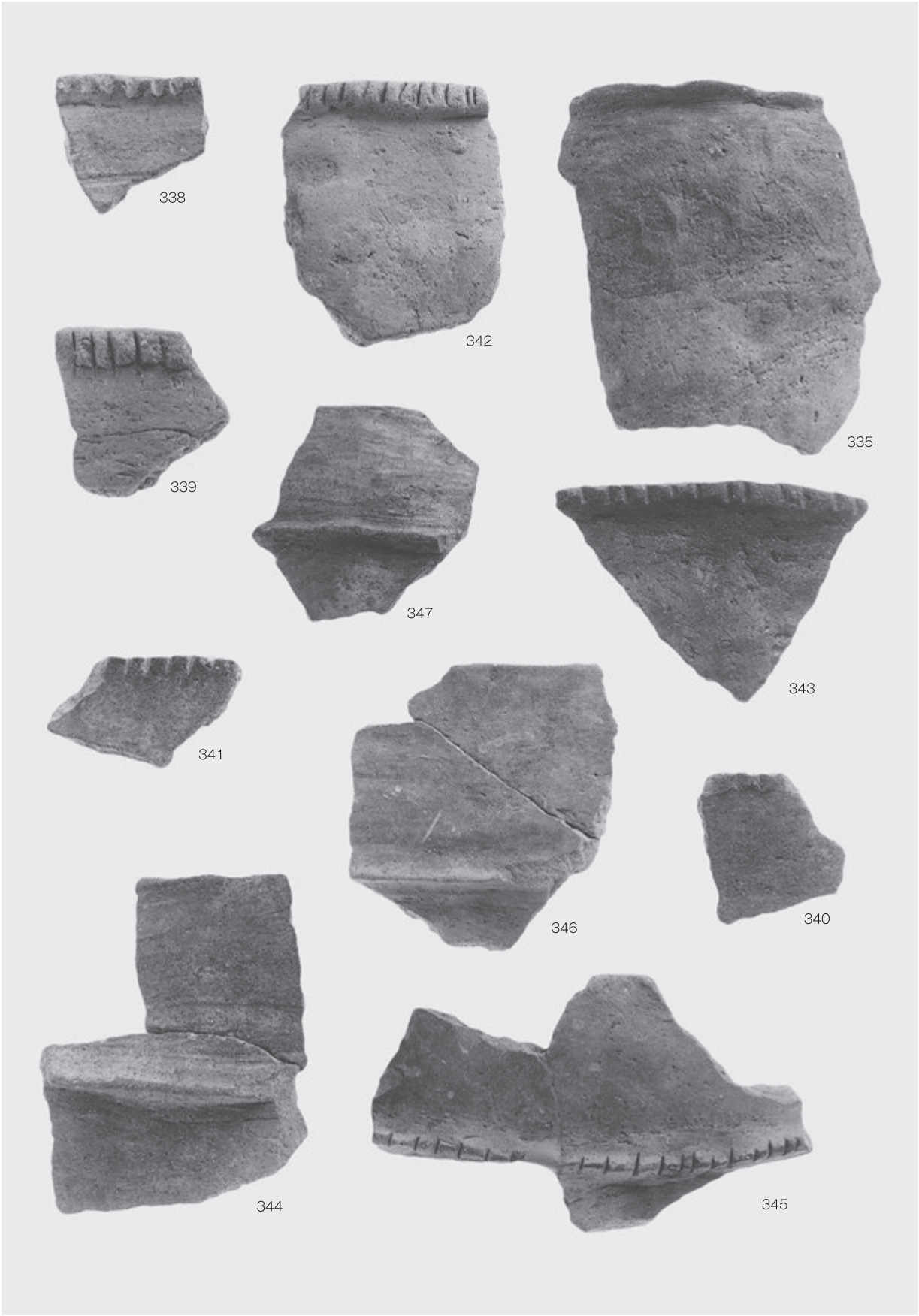
弥生時代の甕形土器９



弥生時代の甕形土器 10

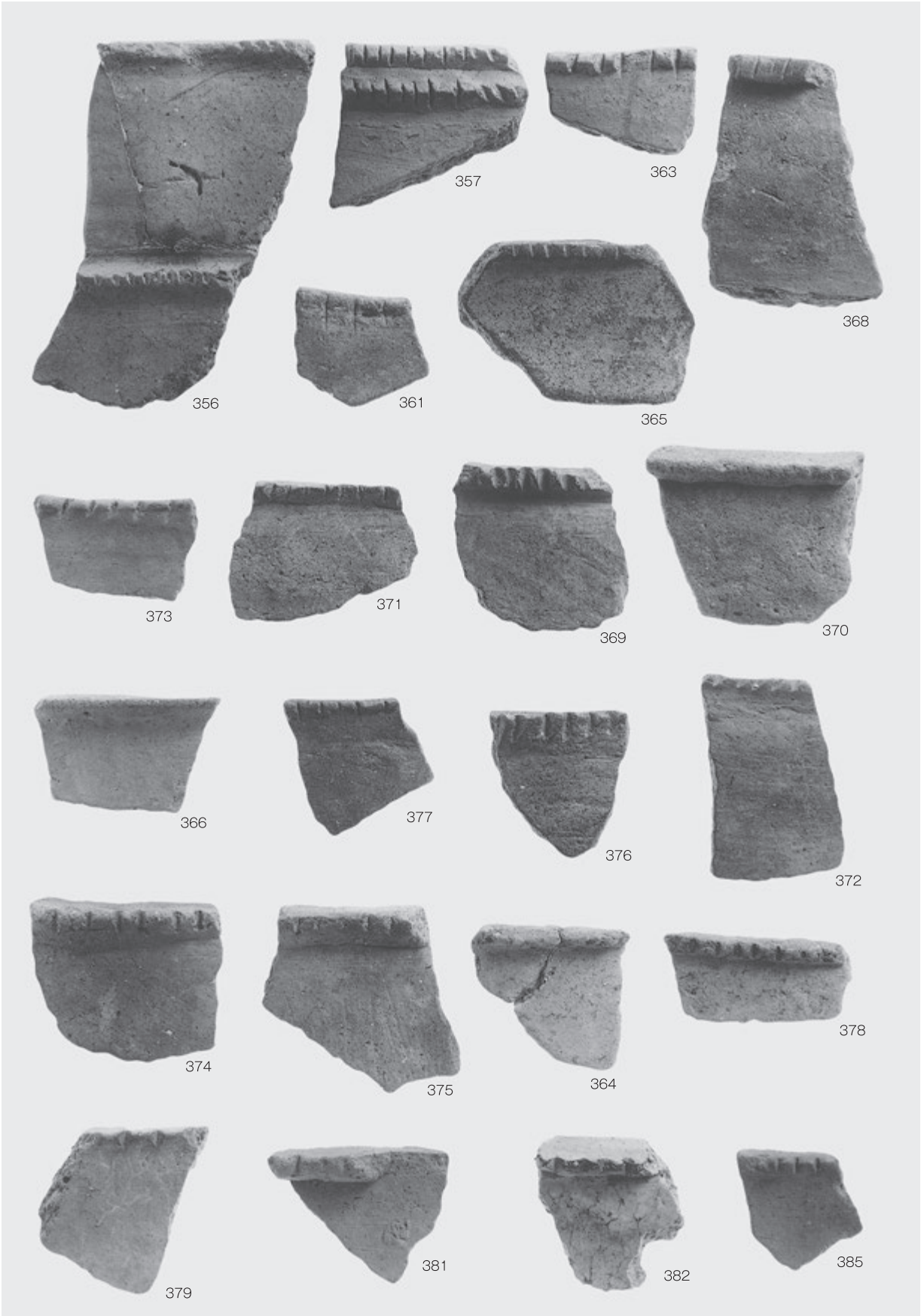


弥生時代の甕形土器 11



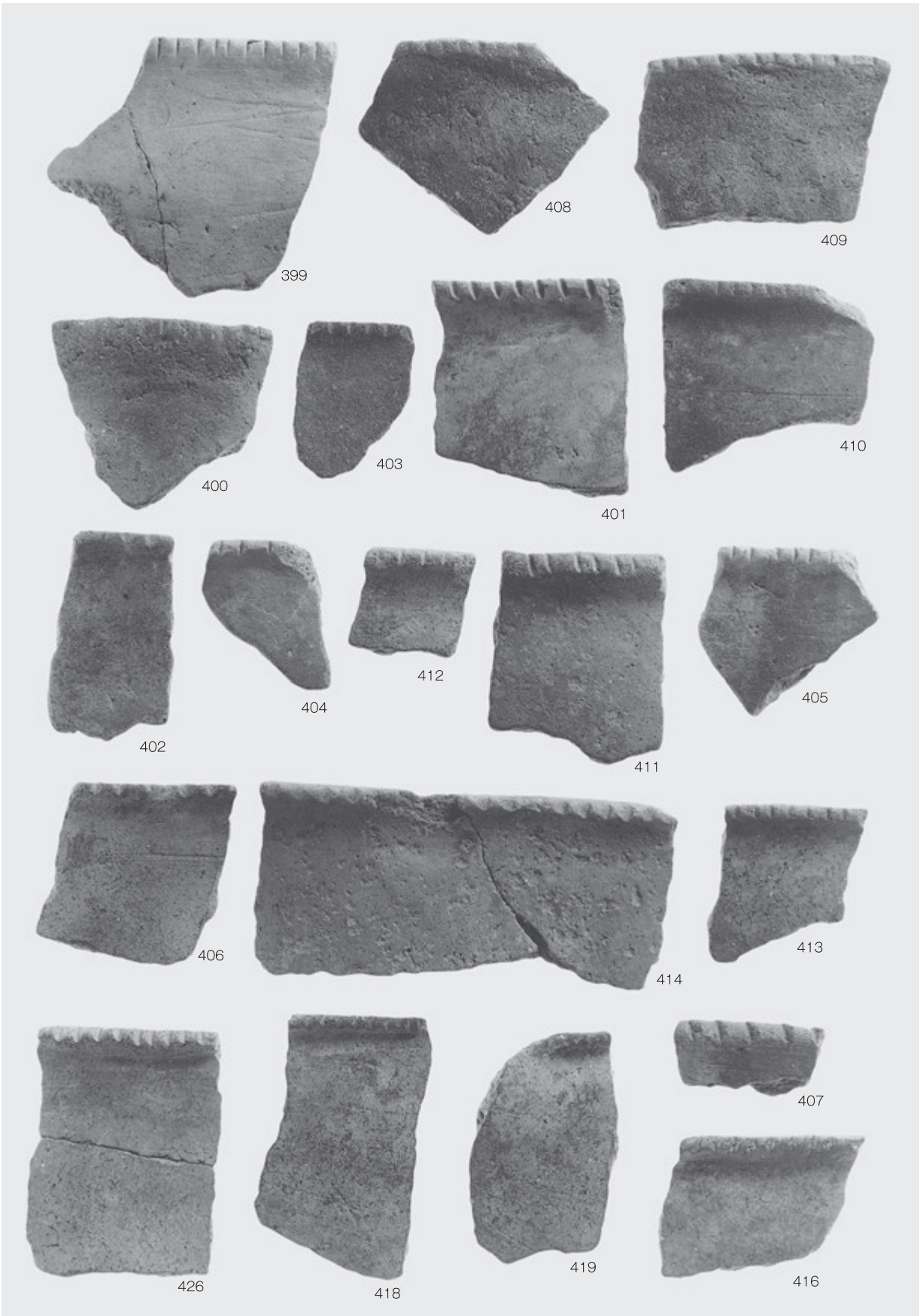
弥生時代の甕形土器 12

弥生時代の甕形土器 13

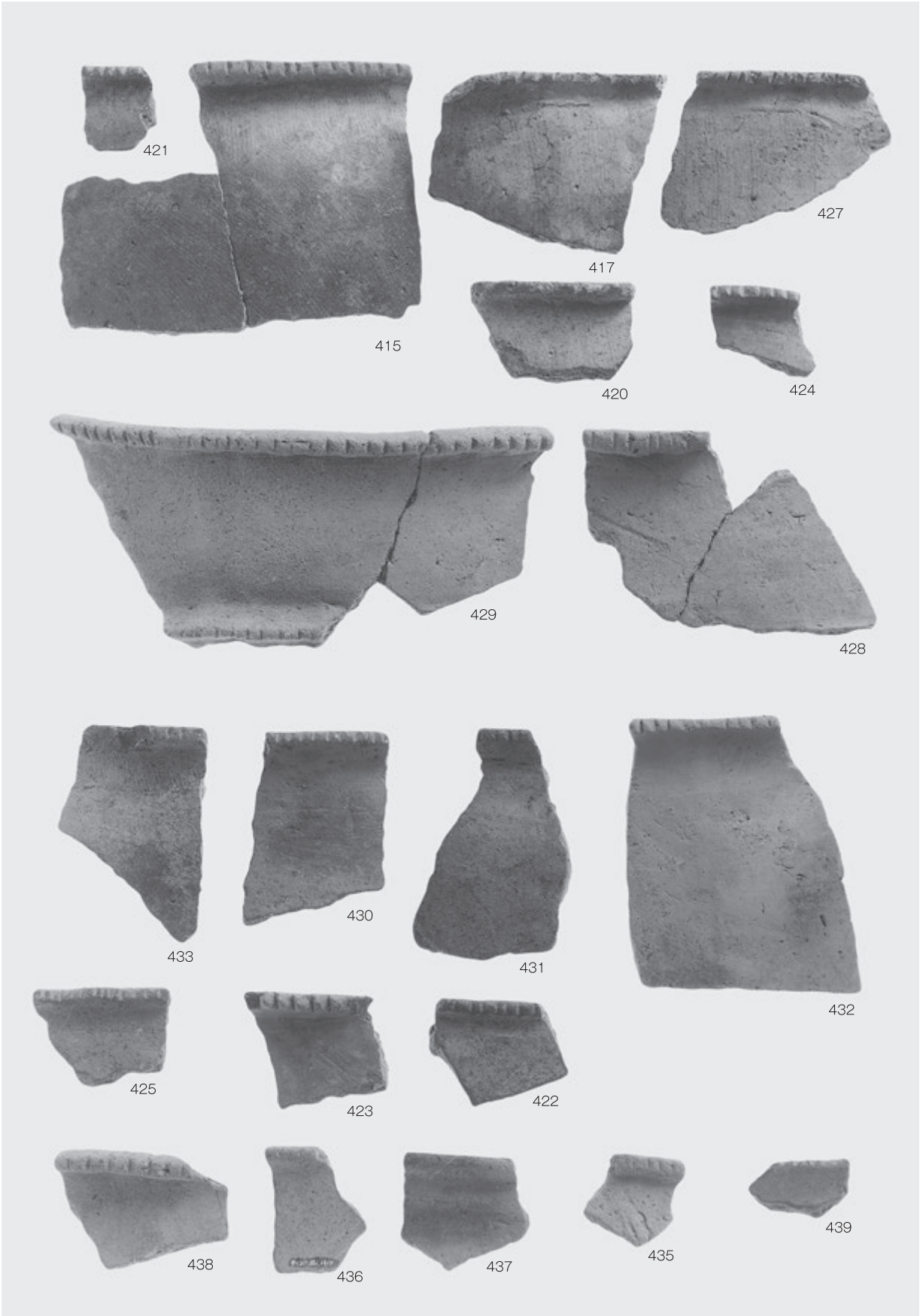


弥生時代の甕形土器 14

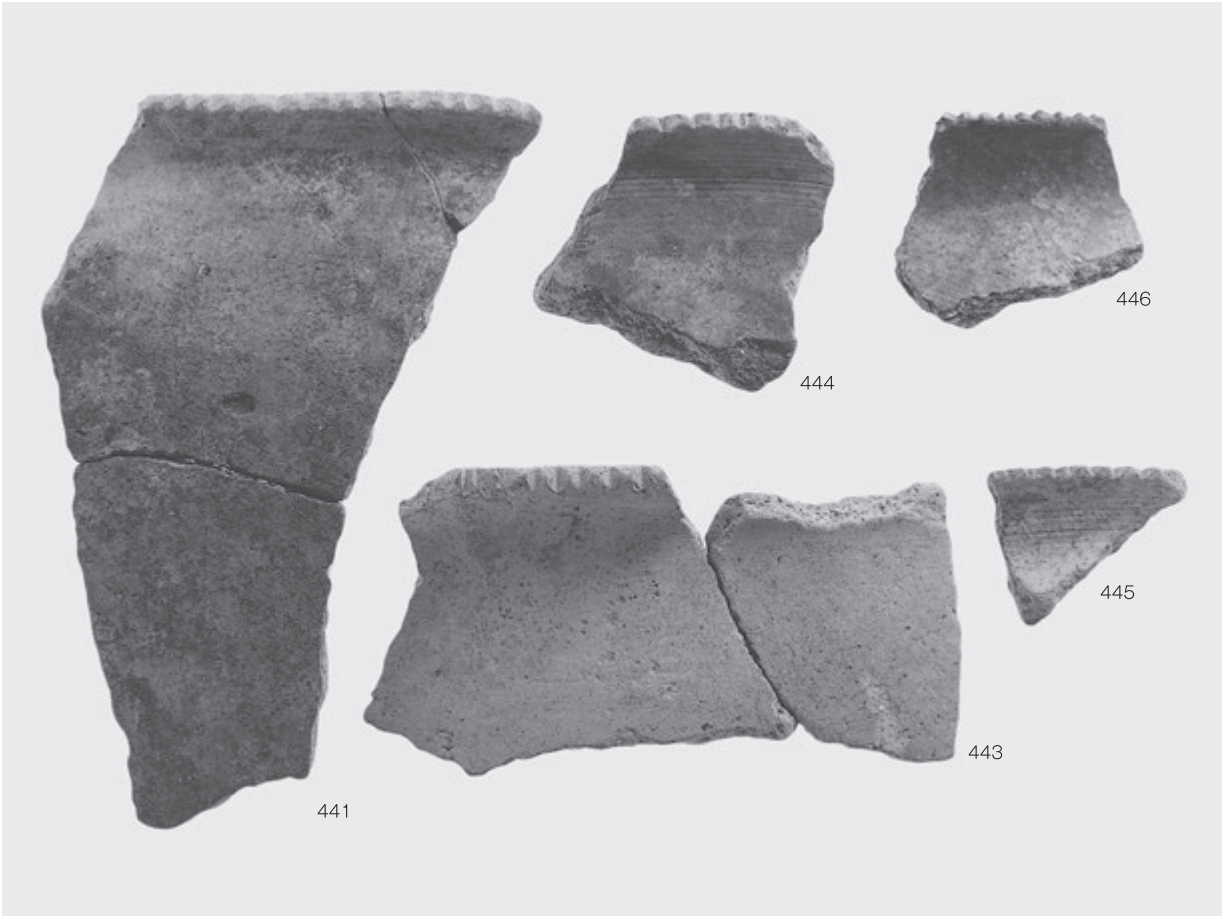
弥生時代の甕形土器 15



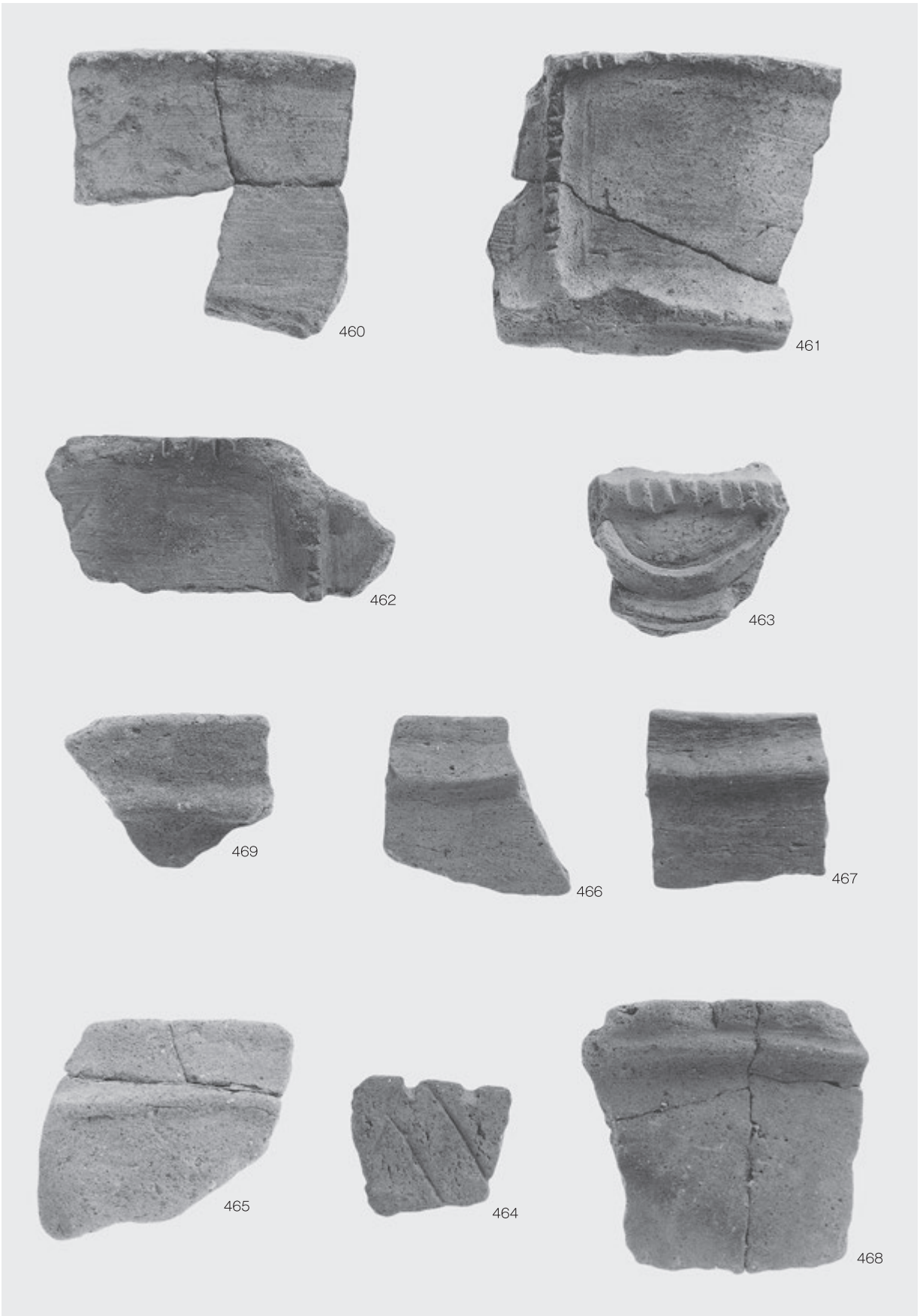
弥生時代の甕形土器 16



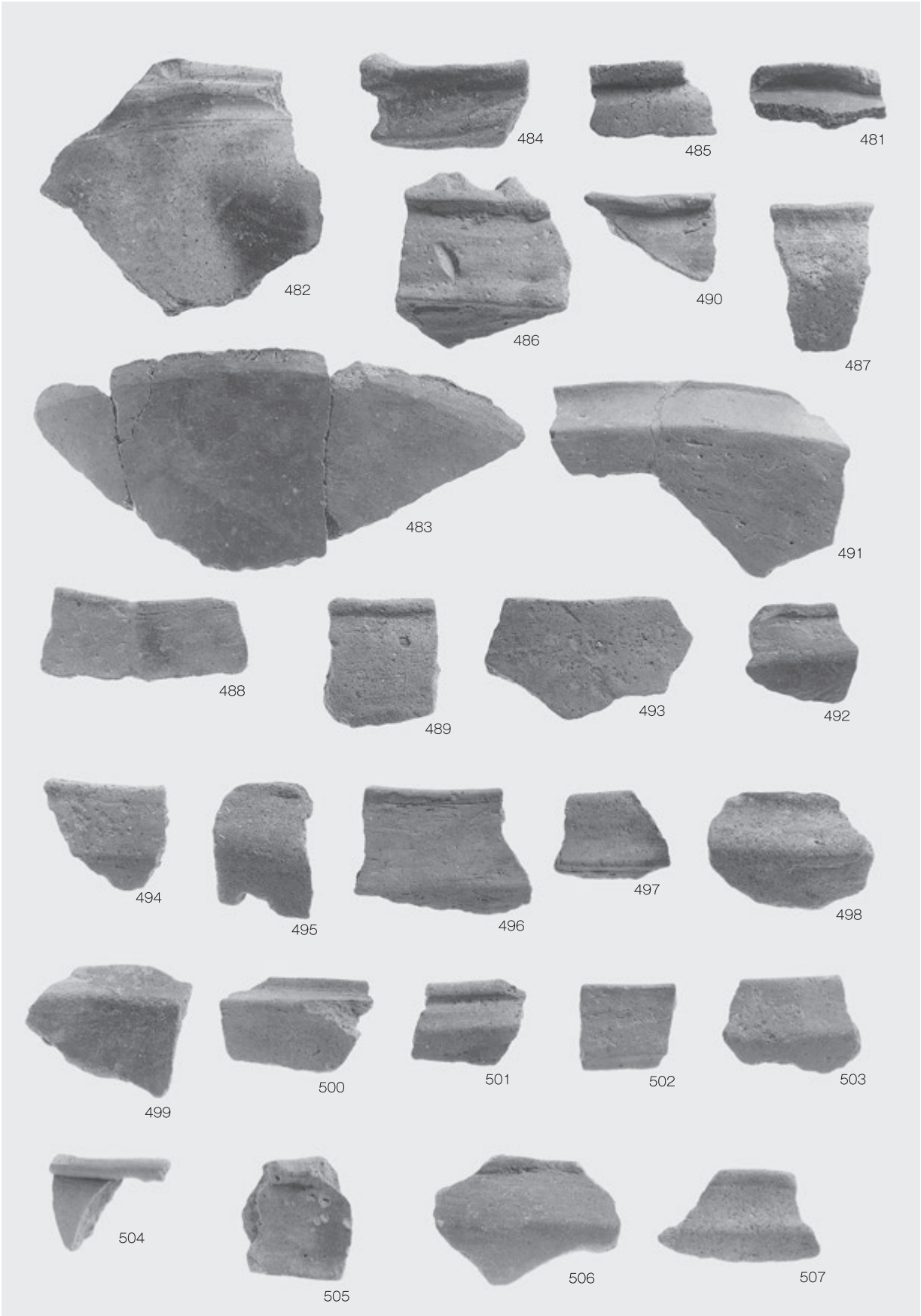
弥生時代の甕形土器 17



弥生時代の甕形土器 18



弥生時代の甕形土器 19


484
485
481
482
486
490
487
483
491
488
489
493
492
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507

弥生時代の鉢形土器 1

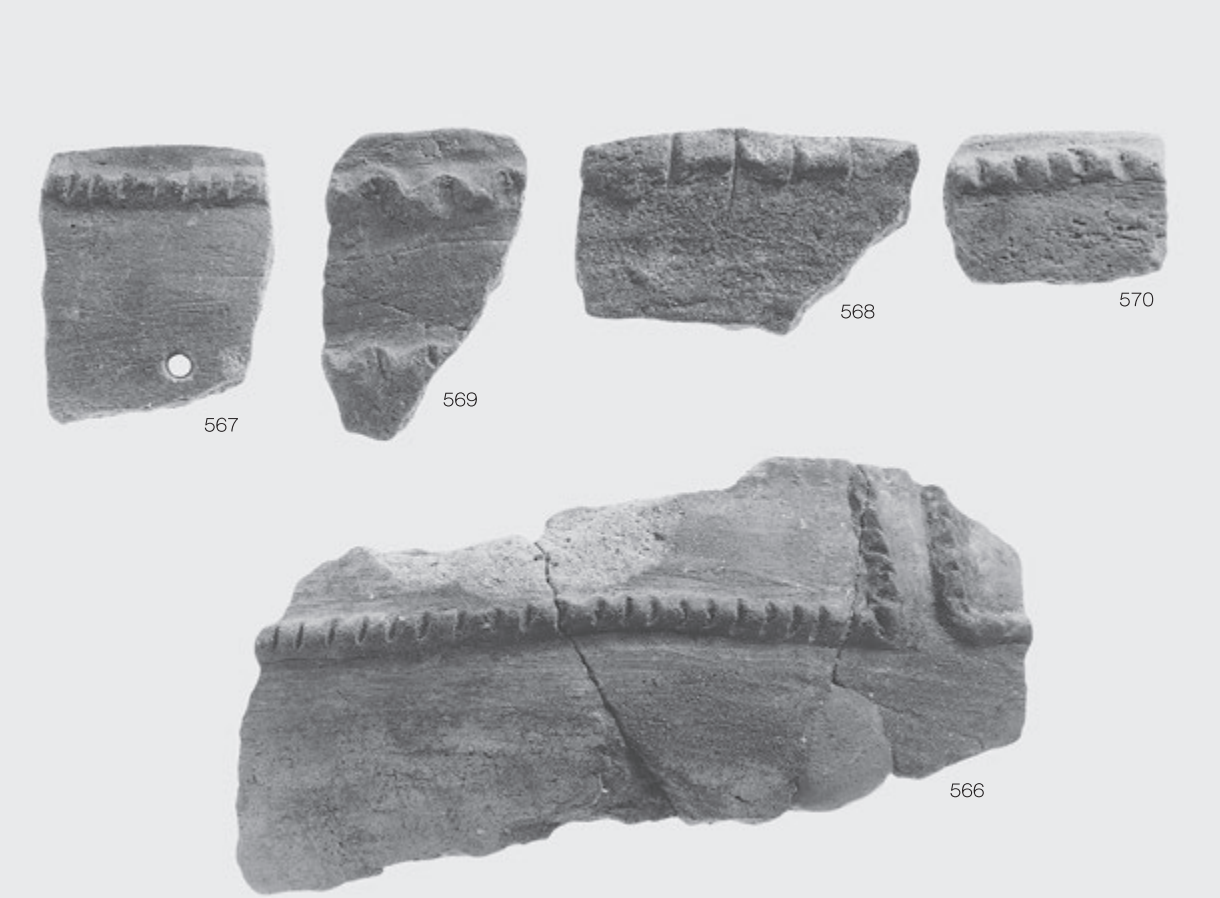
509
510
515
508
511
512
513
521
514
517
520
516
519
523
524
522
525
528
518
530
527
526
529

弥生時代の鉢形土器２

弥生時代の鉢形土器３

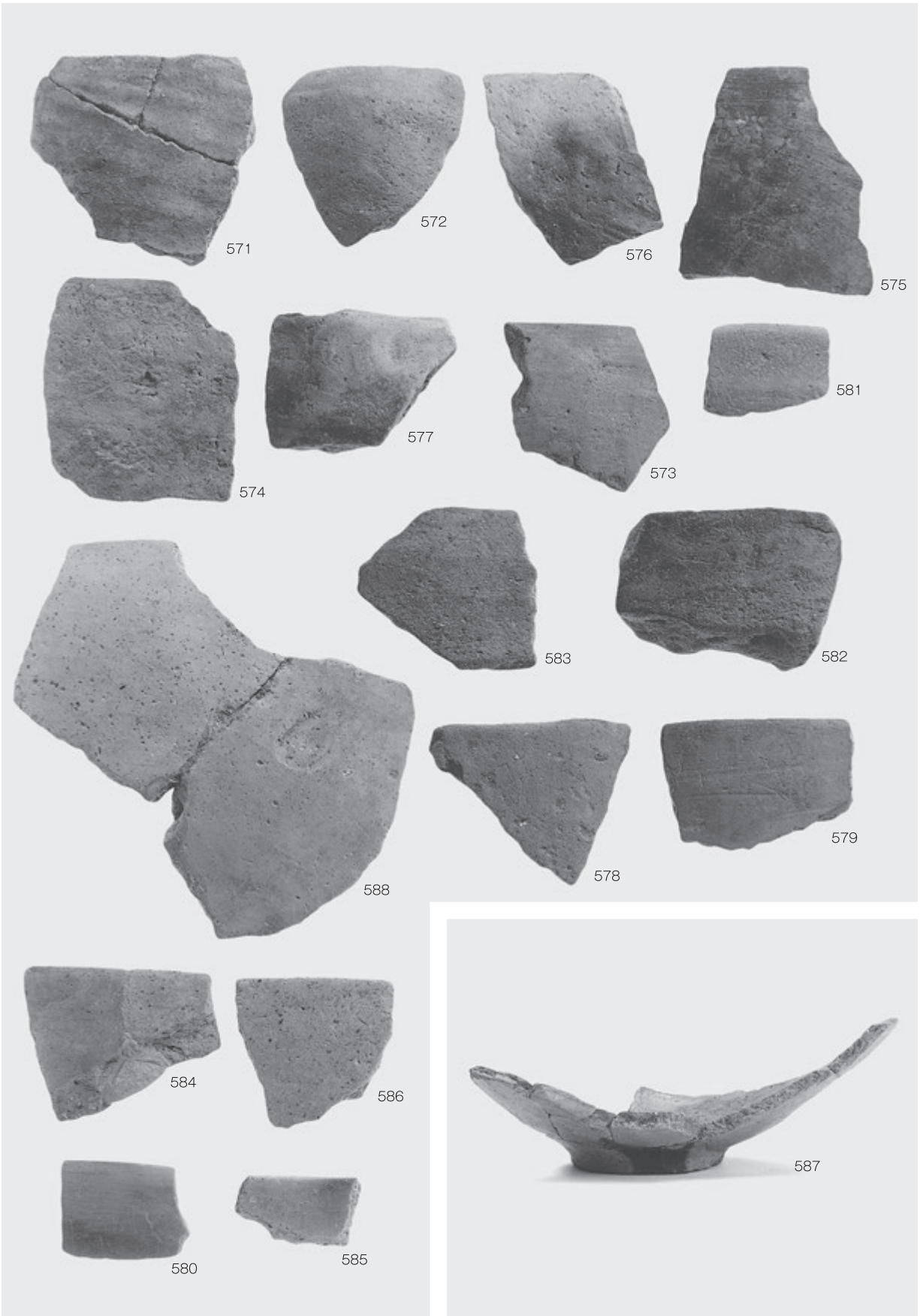
弥生時代の鉢形土器４

弥生時代の鉢形土器５



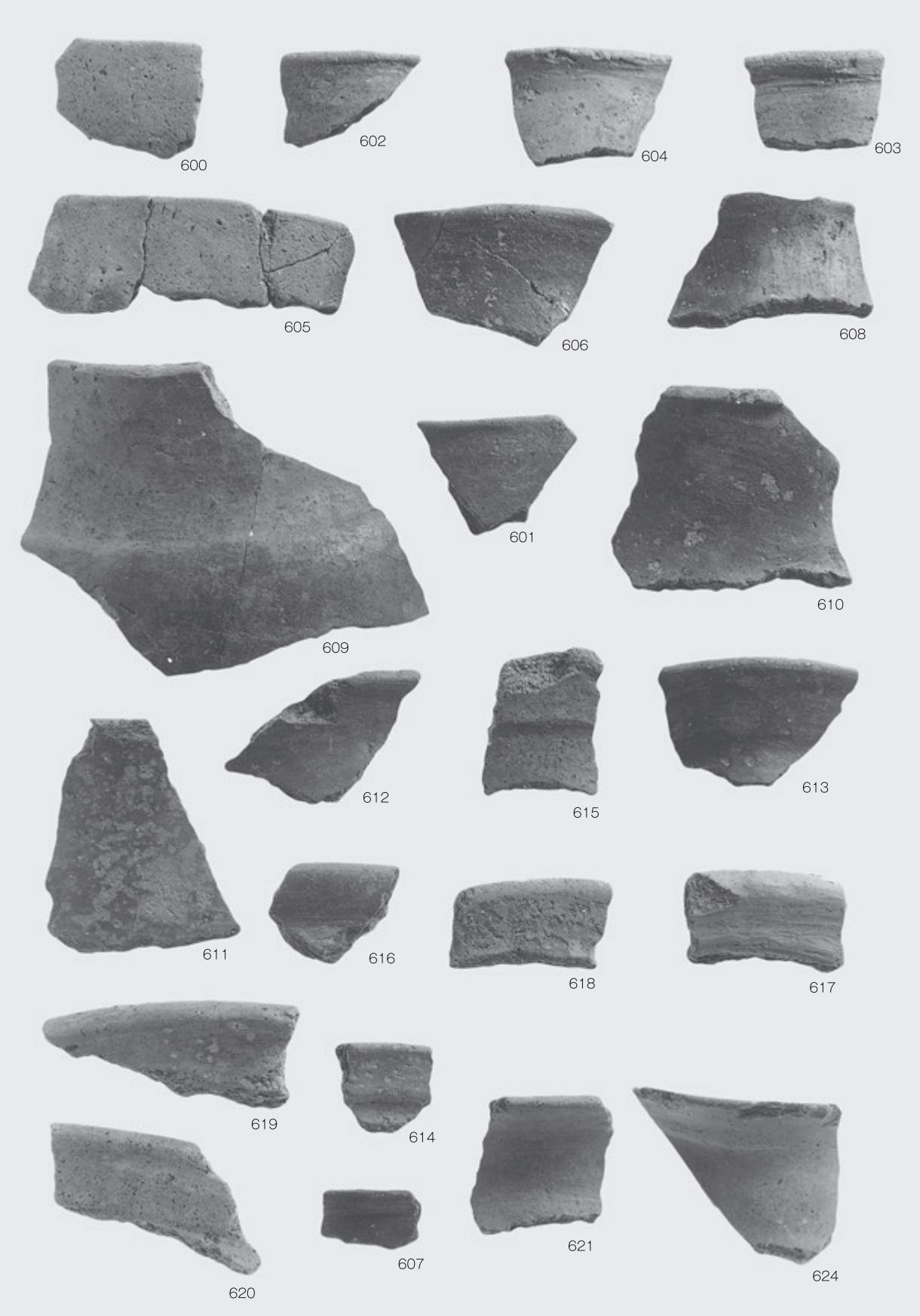
弥生時代の鉢形土器６

図版54



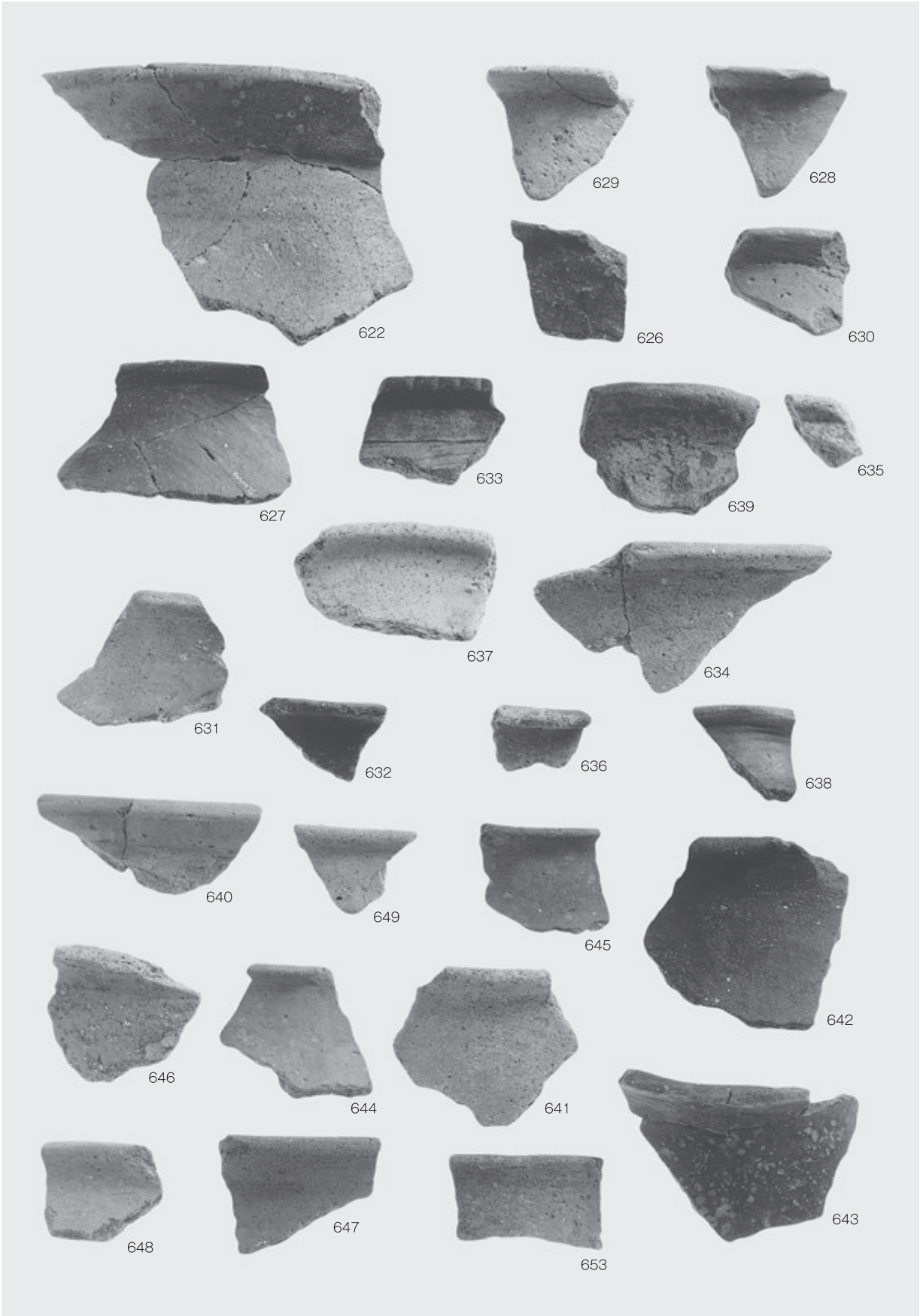
弥生時代の鉢形土器７

弥生時代の鉢形土器８


600
602
604
603
605
606
608
609
601
610
612
615
613
611
616
618
617
619
614
620
607
621
624

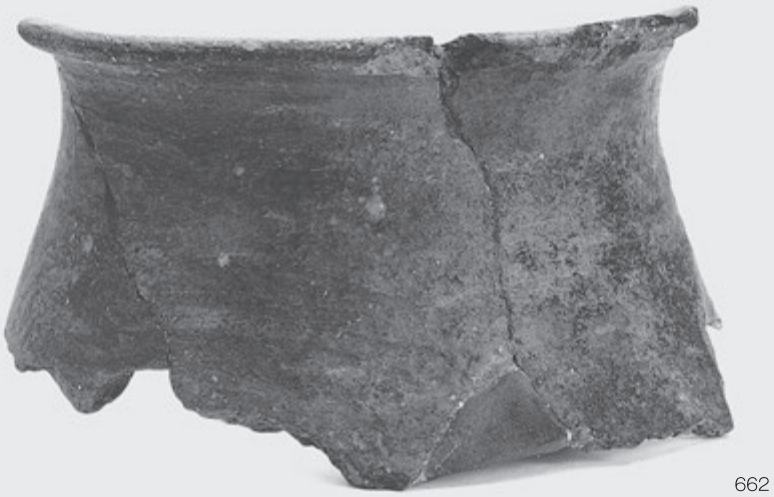
弥生時代の壺形土器 1

弥生時代の壺形土器２


622
629
628
626
630
627
633
639
635
637
634
631
632
636
638
640
649
645
642
646
644
641
643
648
647
653

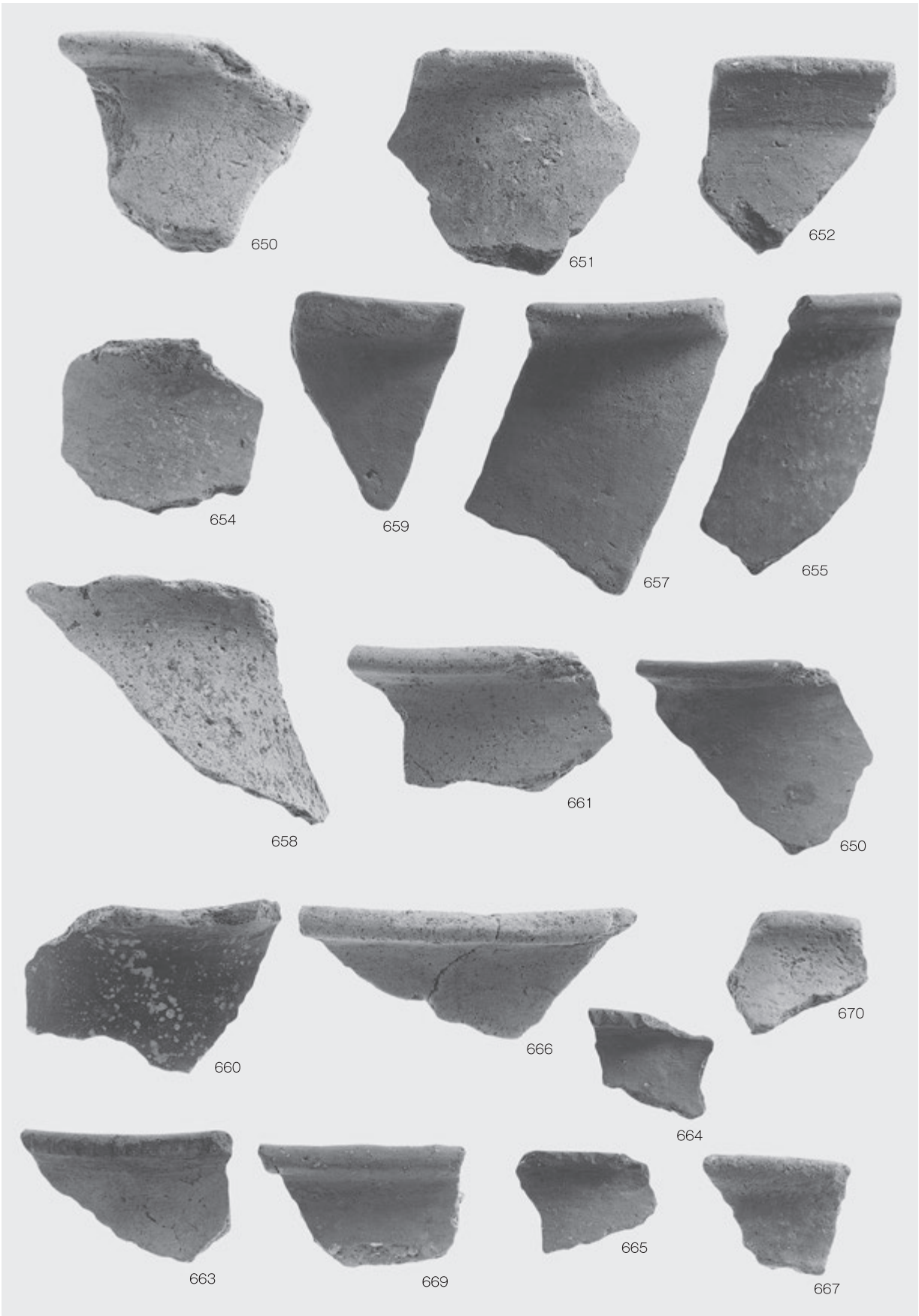
弥生時代の壺形土器３

656



662

弥生時代の壺形土器４

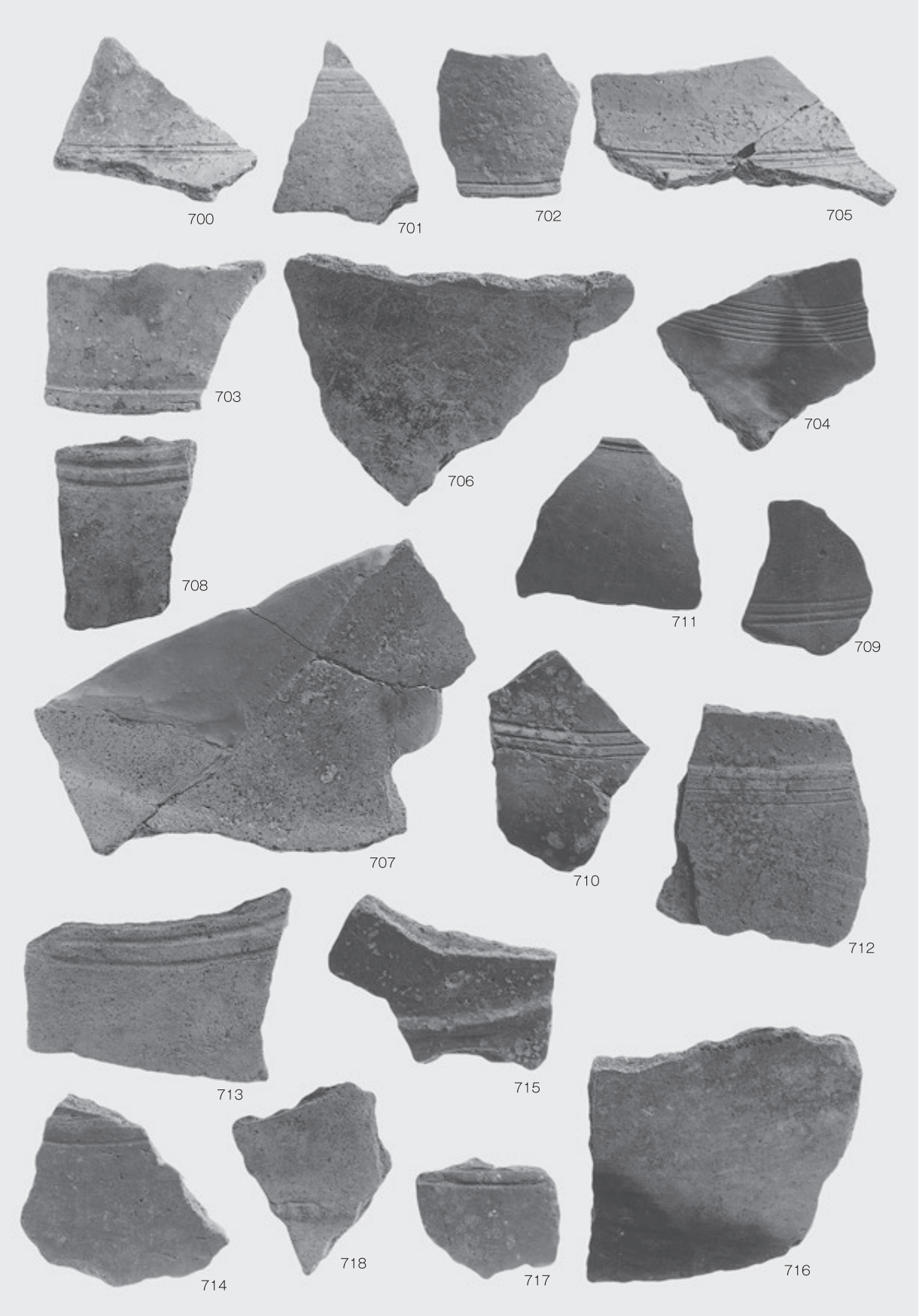

650
651
652
654
659
657
655
658
661
650
660
666
670
664
663
669
665
667

弥生時代の壺形土器５

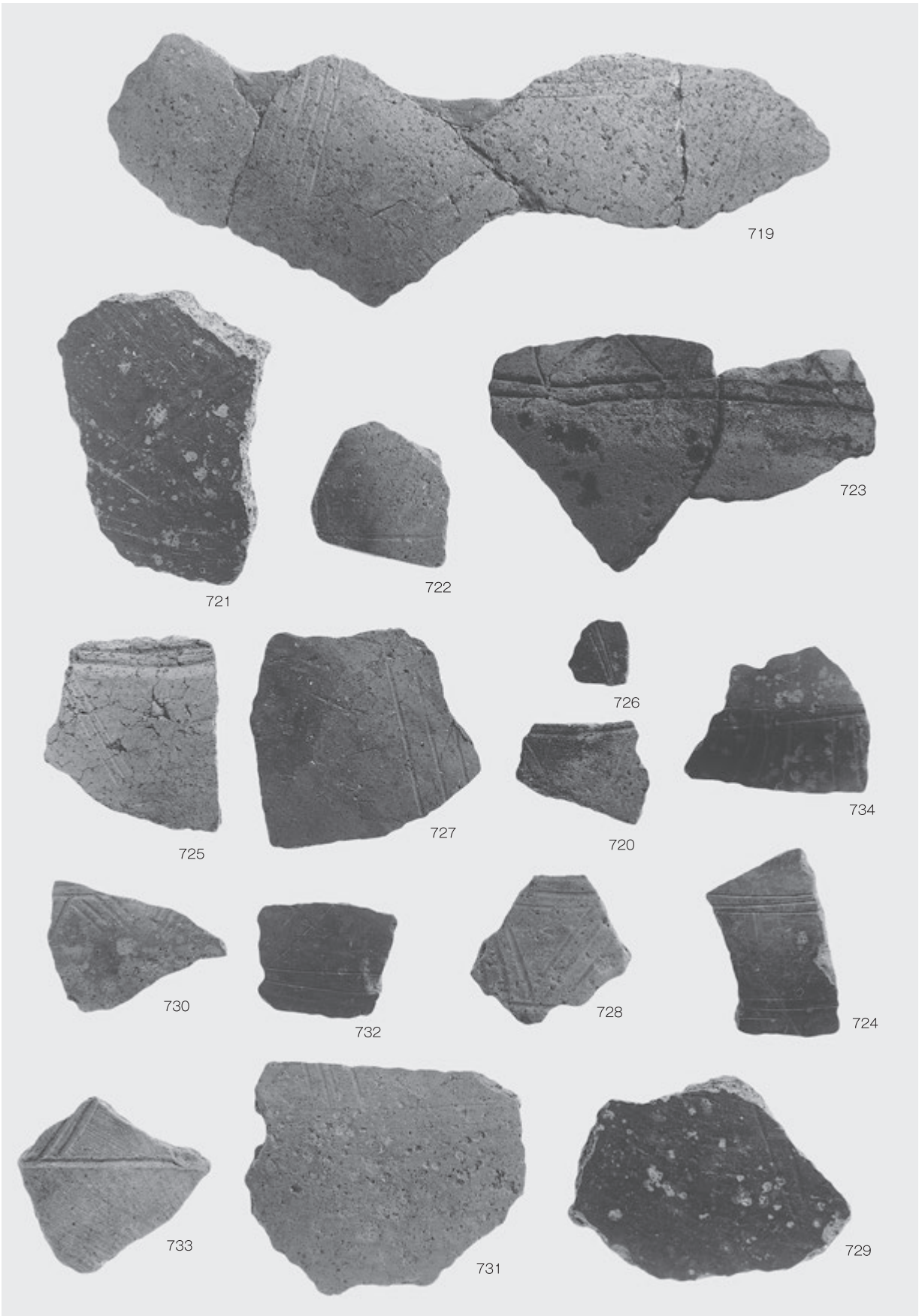
671
672
678
675
673
674
677
676
679
681
680
682
684
687
683
685
689
686
688

弥生時代の壺形土器６

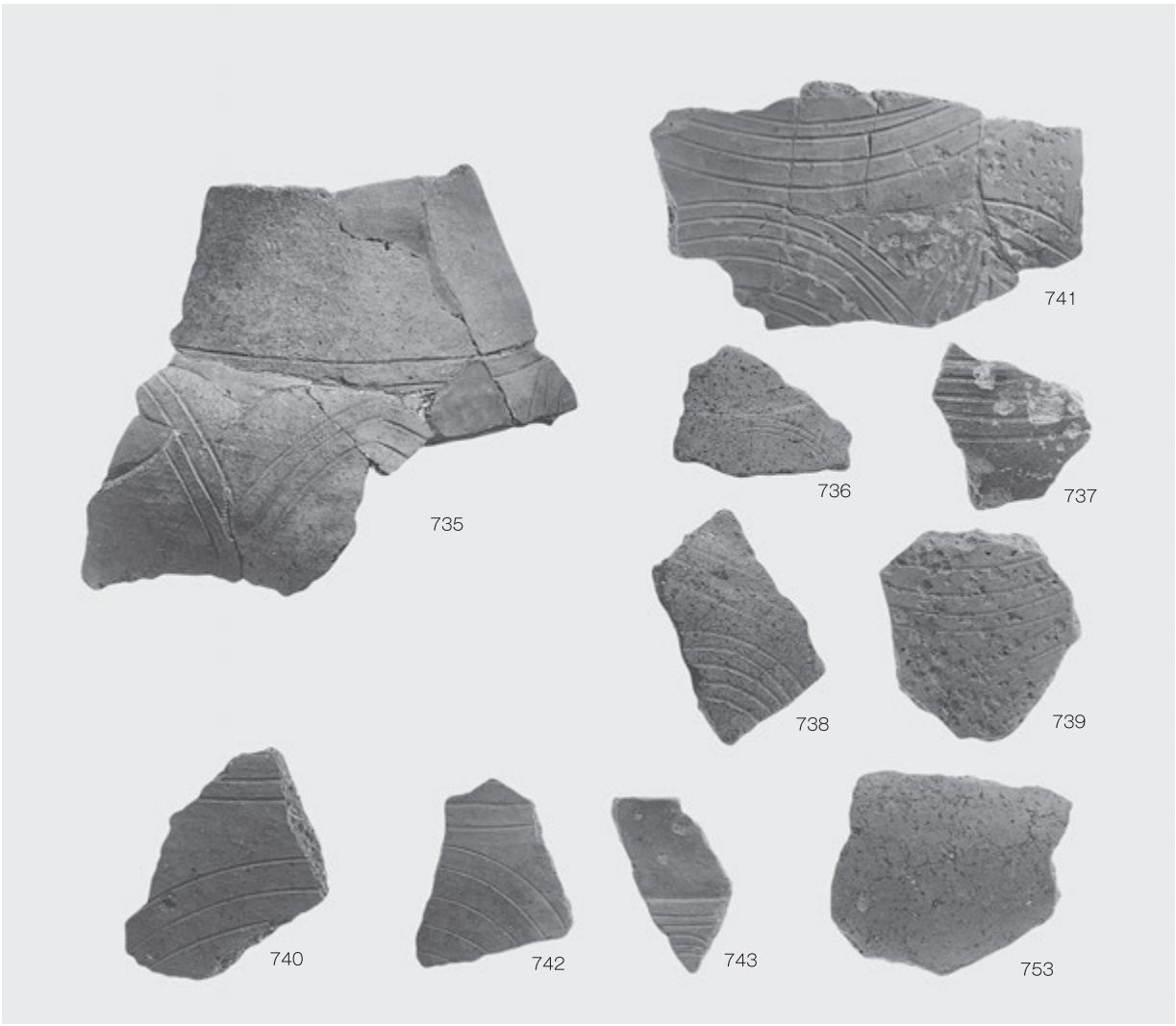
弥生時代の壺形土器７

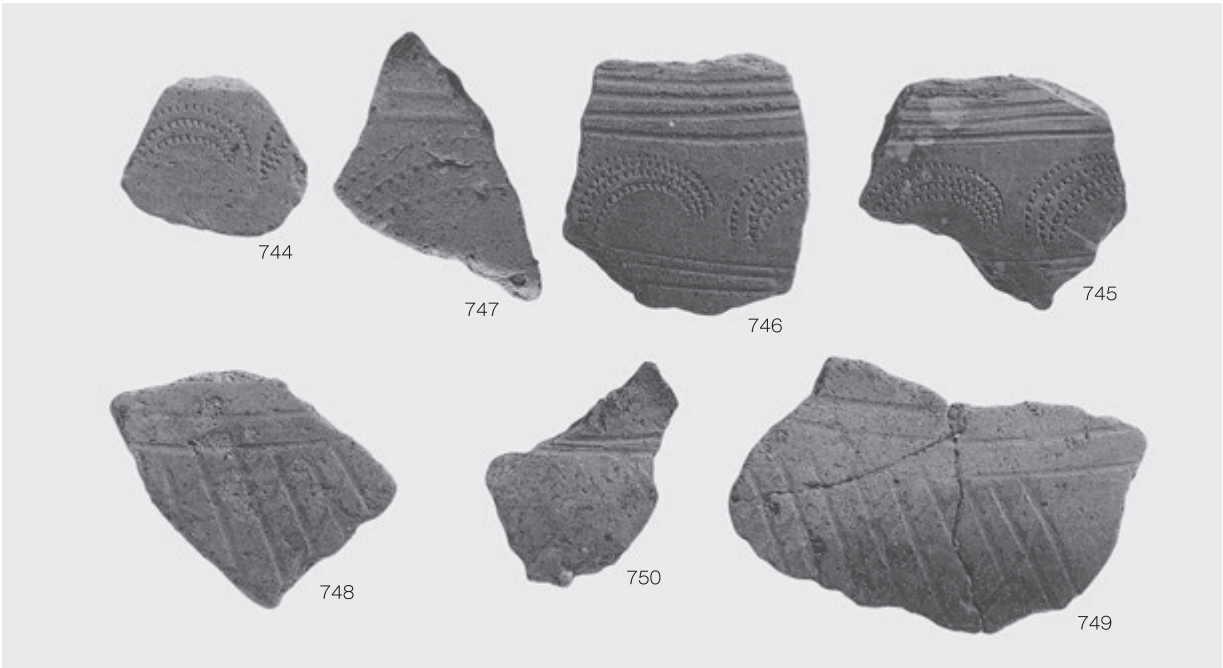

700
701
702
705
703
706
704
708
711
709
707
710
712
713
715
714
718
717
716

弥生時代の壺形土器８

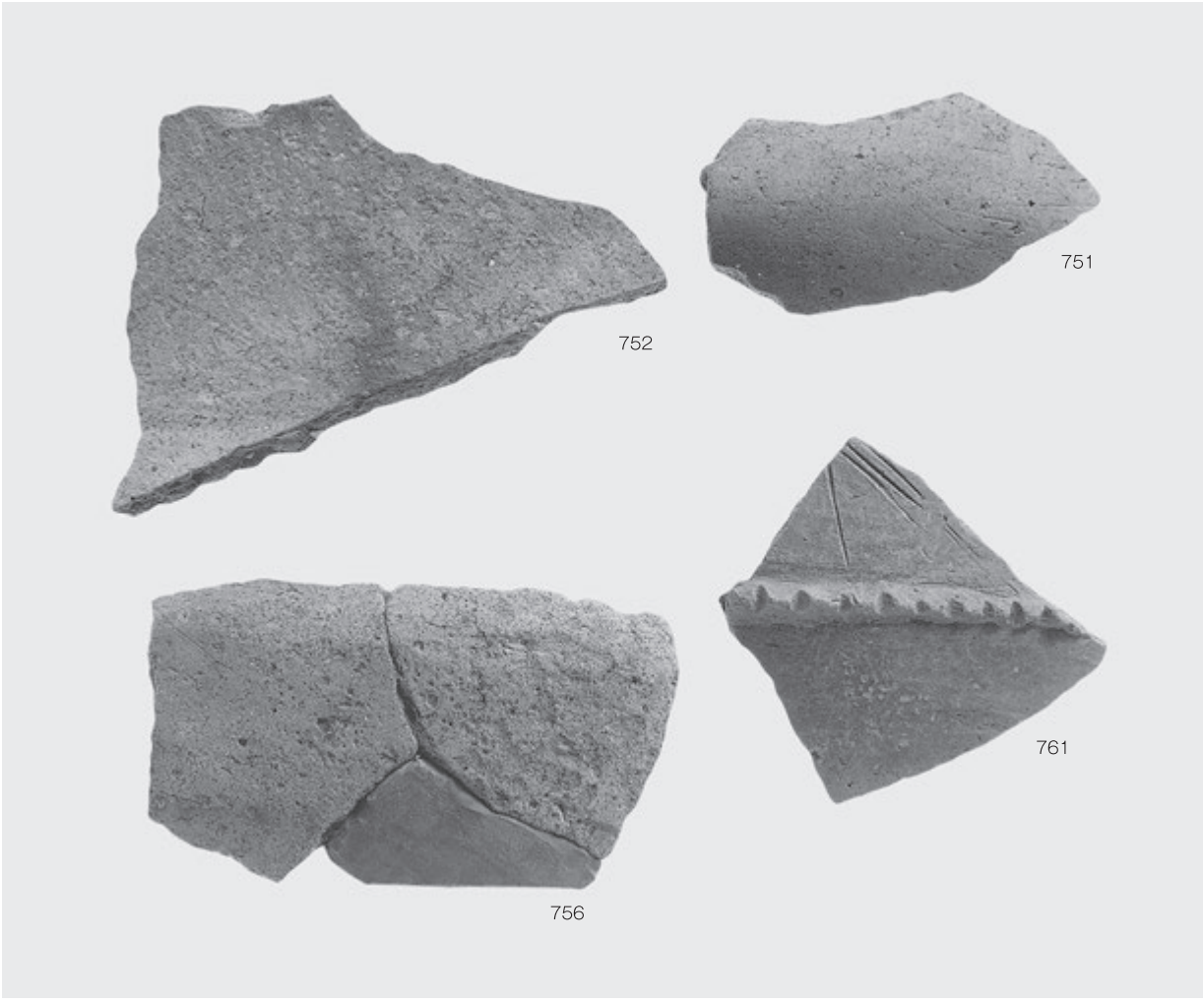


弥生時代の壺形土器９

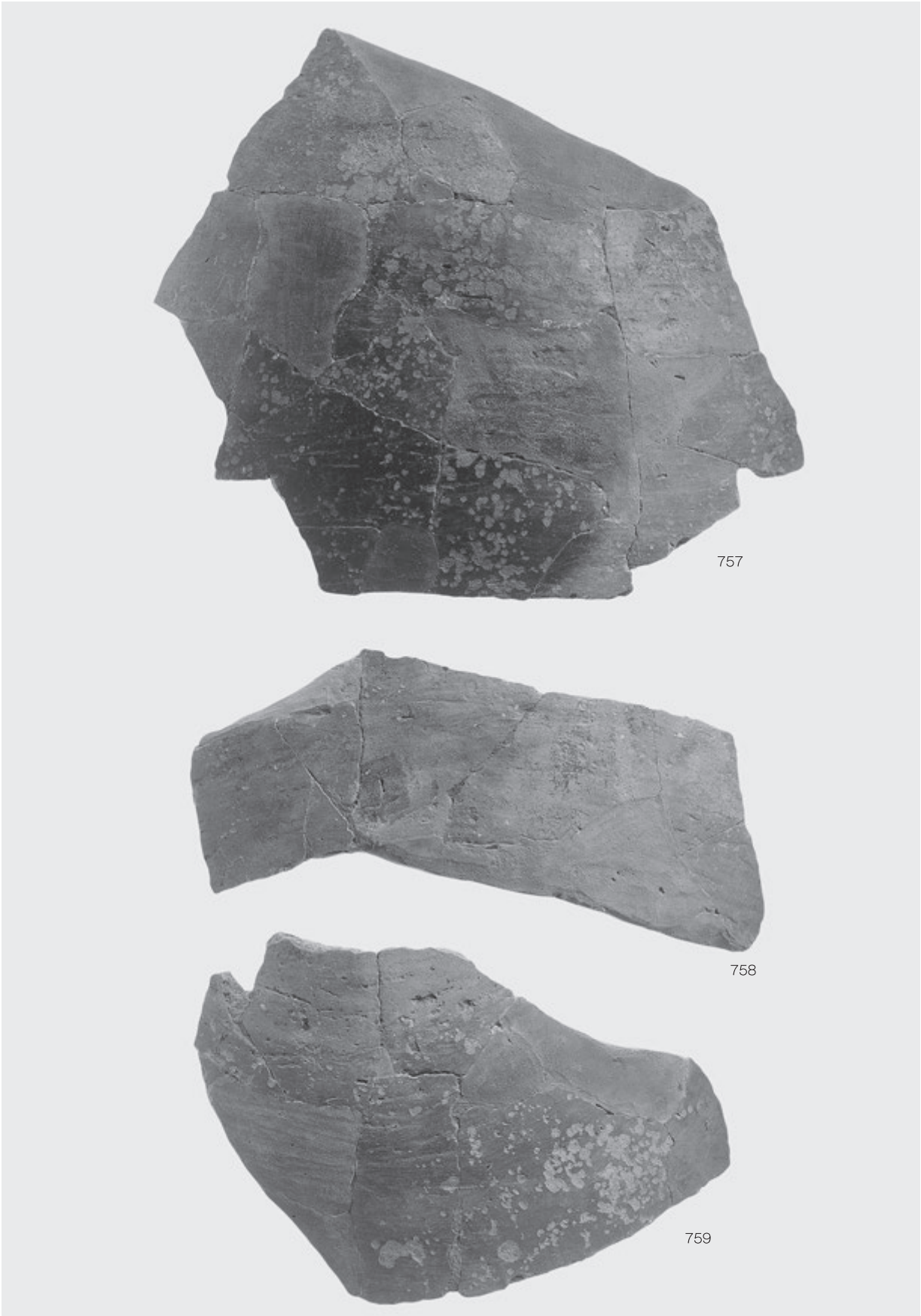




弥生時代の壺形土器 10

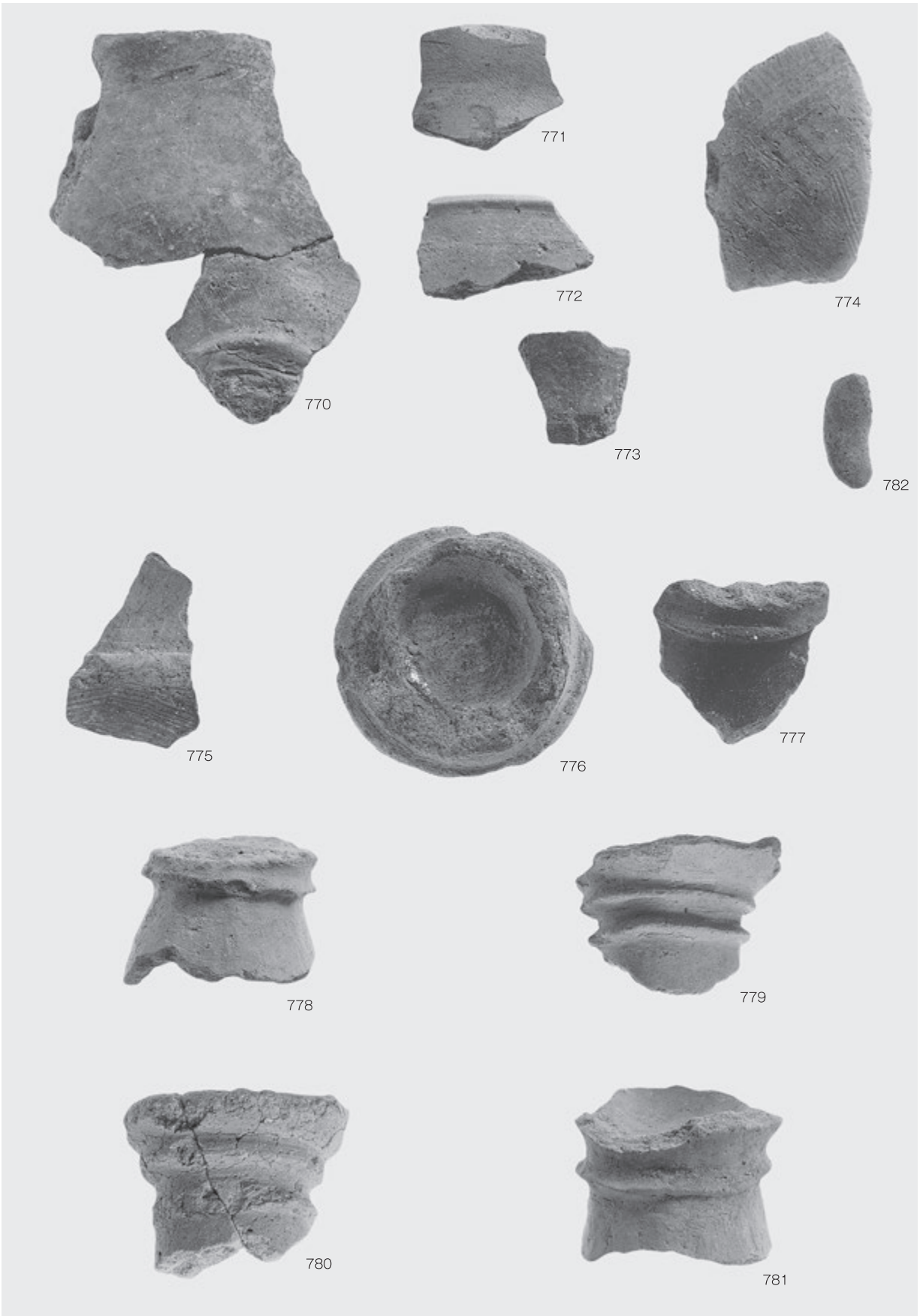


弥生時代の壺形土器 11



弥生時代の壺形土器 12

弥生時代の壺形土器 13

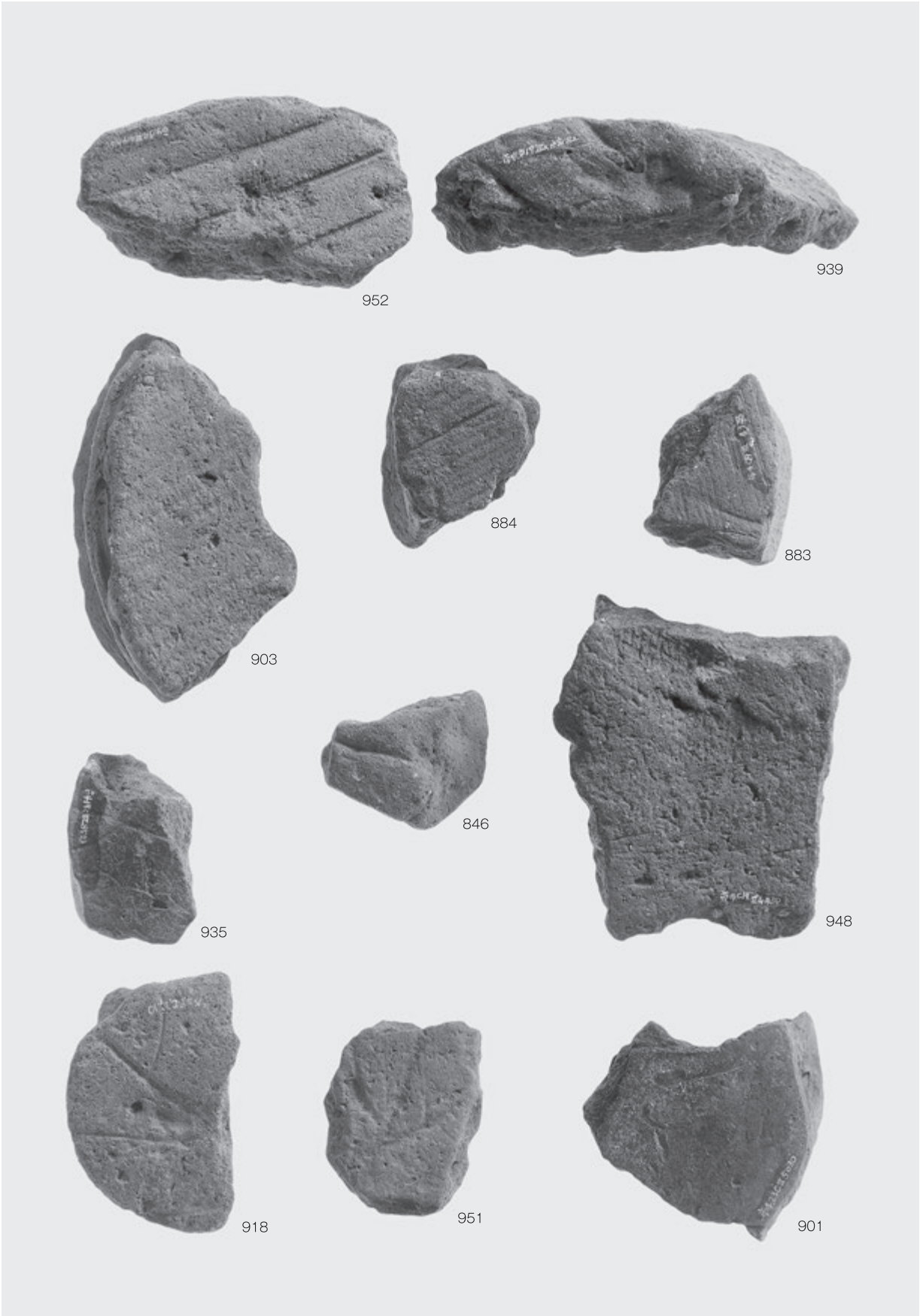


弥生時代の高坏形土器・土製勾玉

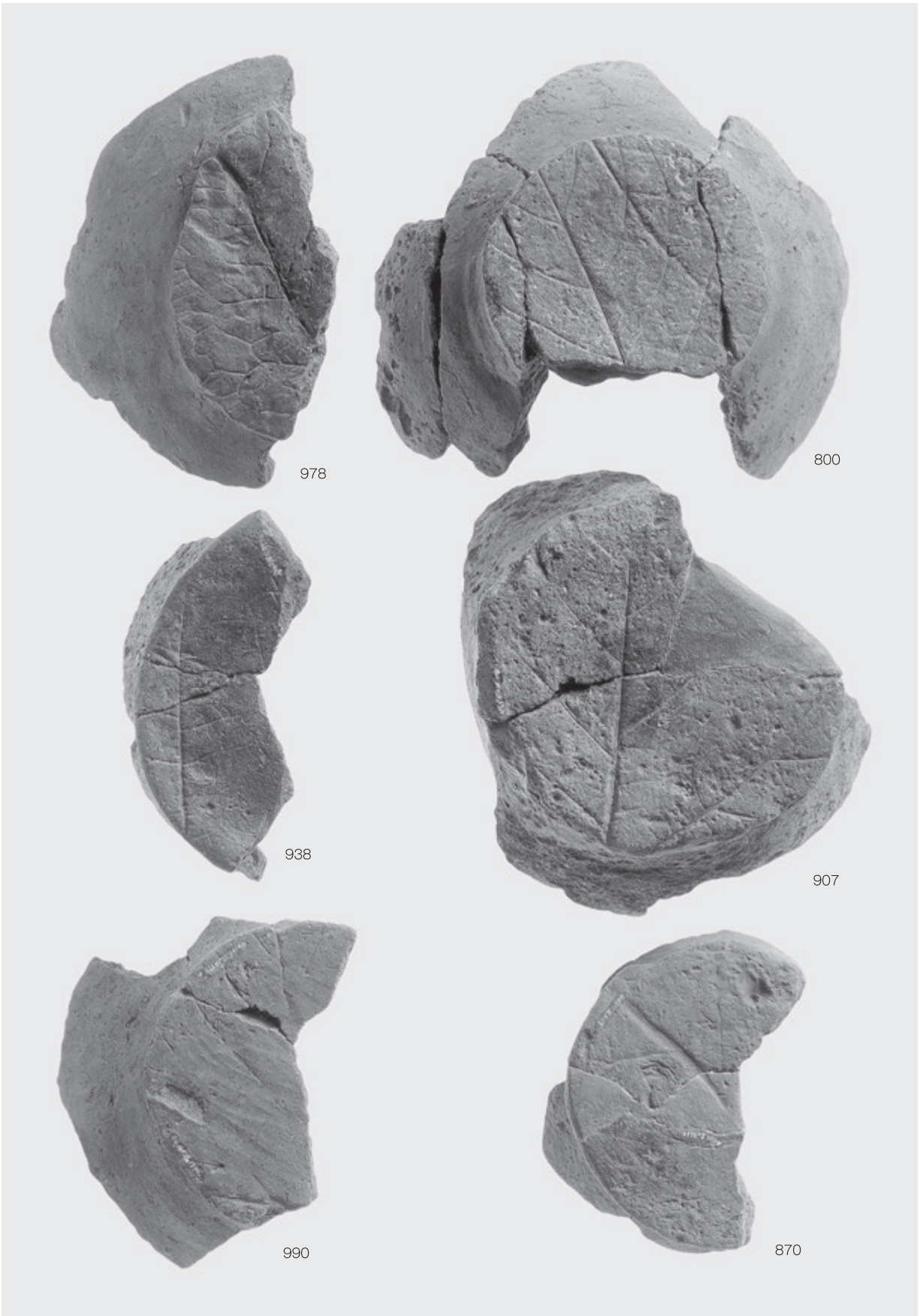
949
989
905
911
934
928
863
840
864
862
924
891
937
912
947
909
887
861
785

弥生時代の土器底部 1

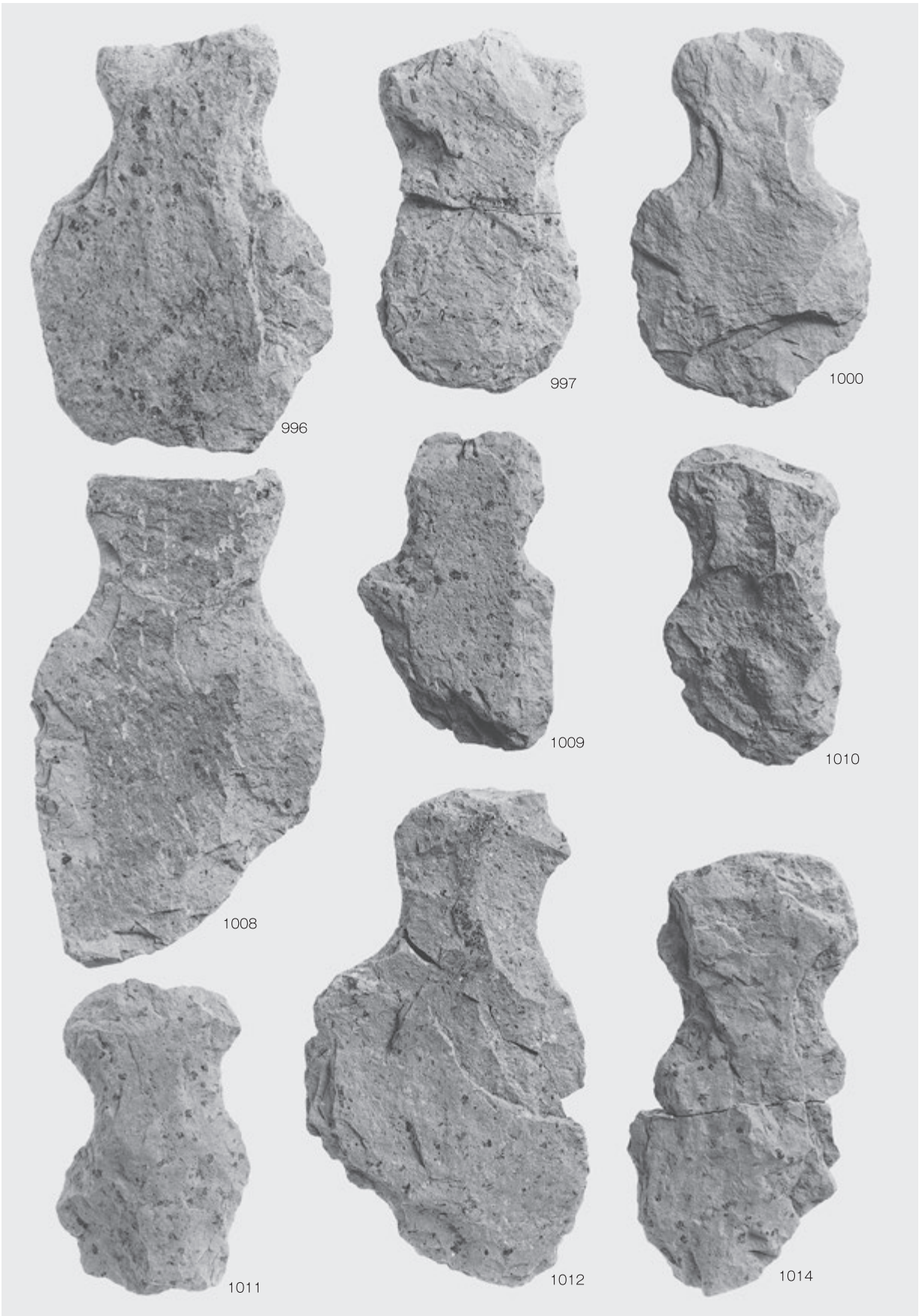
弥生時代の土器底部２



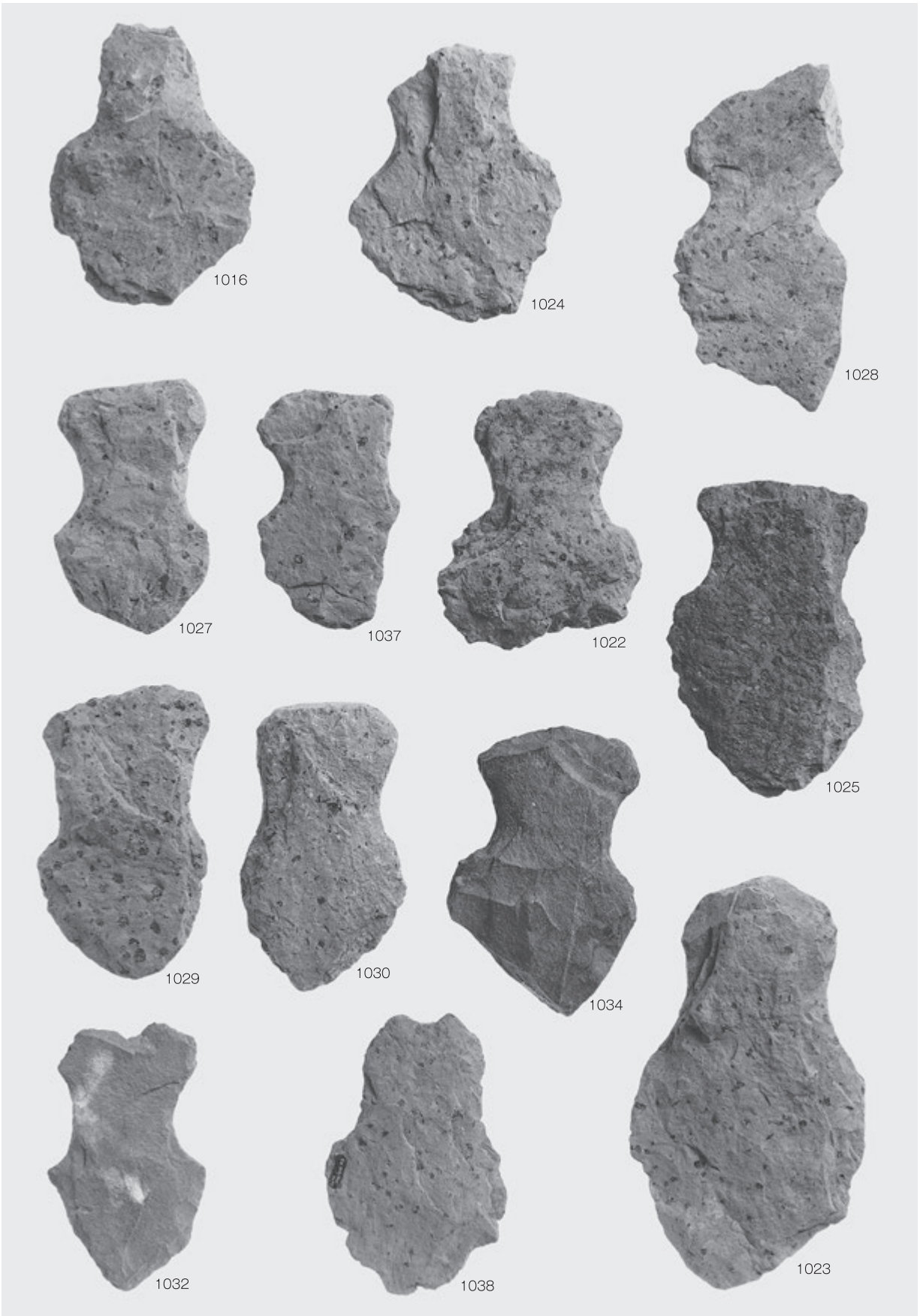
弥生時代の土器底部３



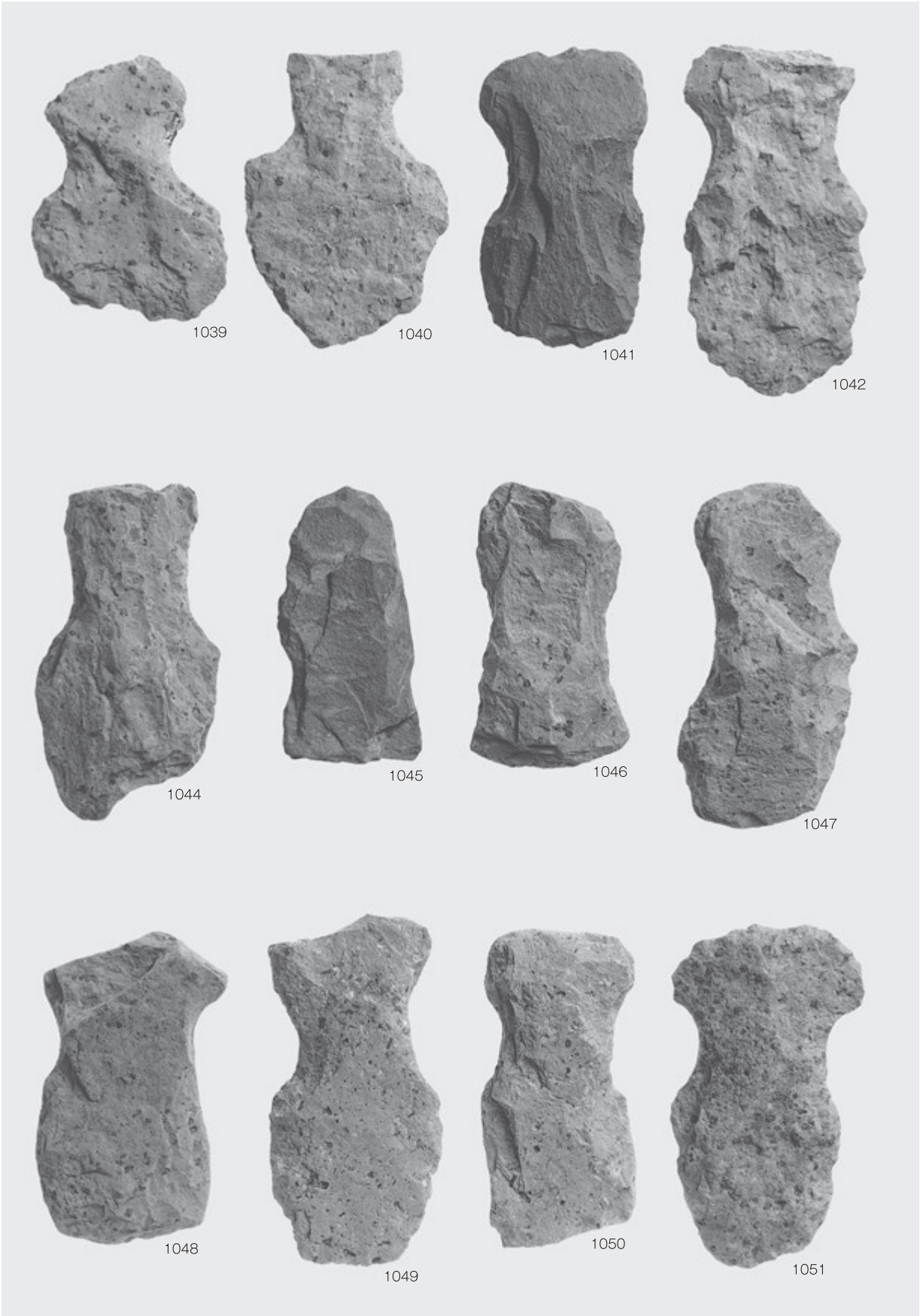
弥生時代の土器底部４



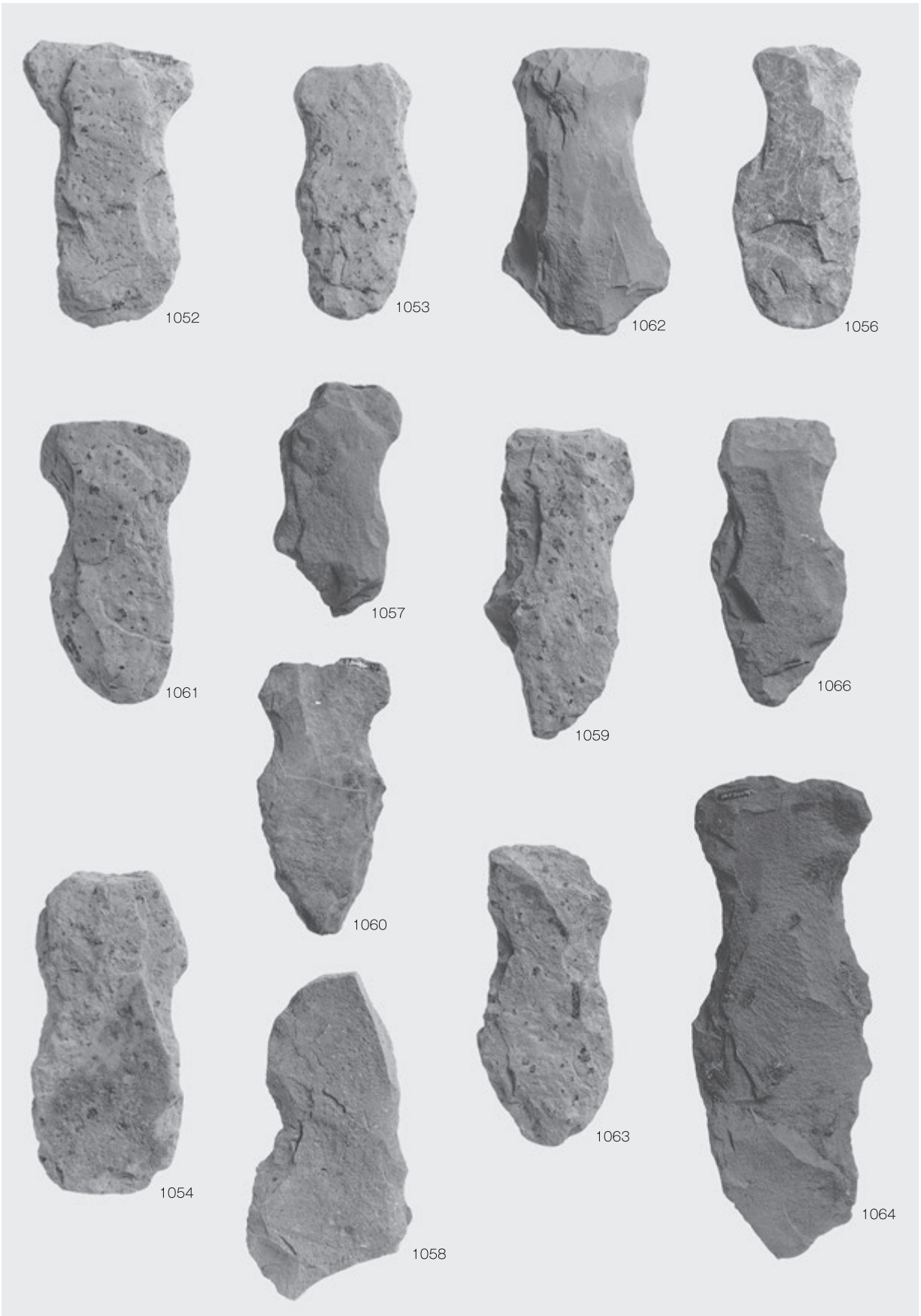
弥生時代の石器 1


1016
1024
1028
1027
1037
1022
1025
1029
1030
1034
1032
1038
1023

弥生時代の石器２

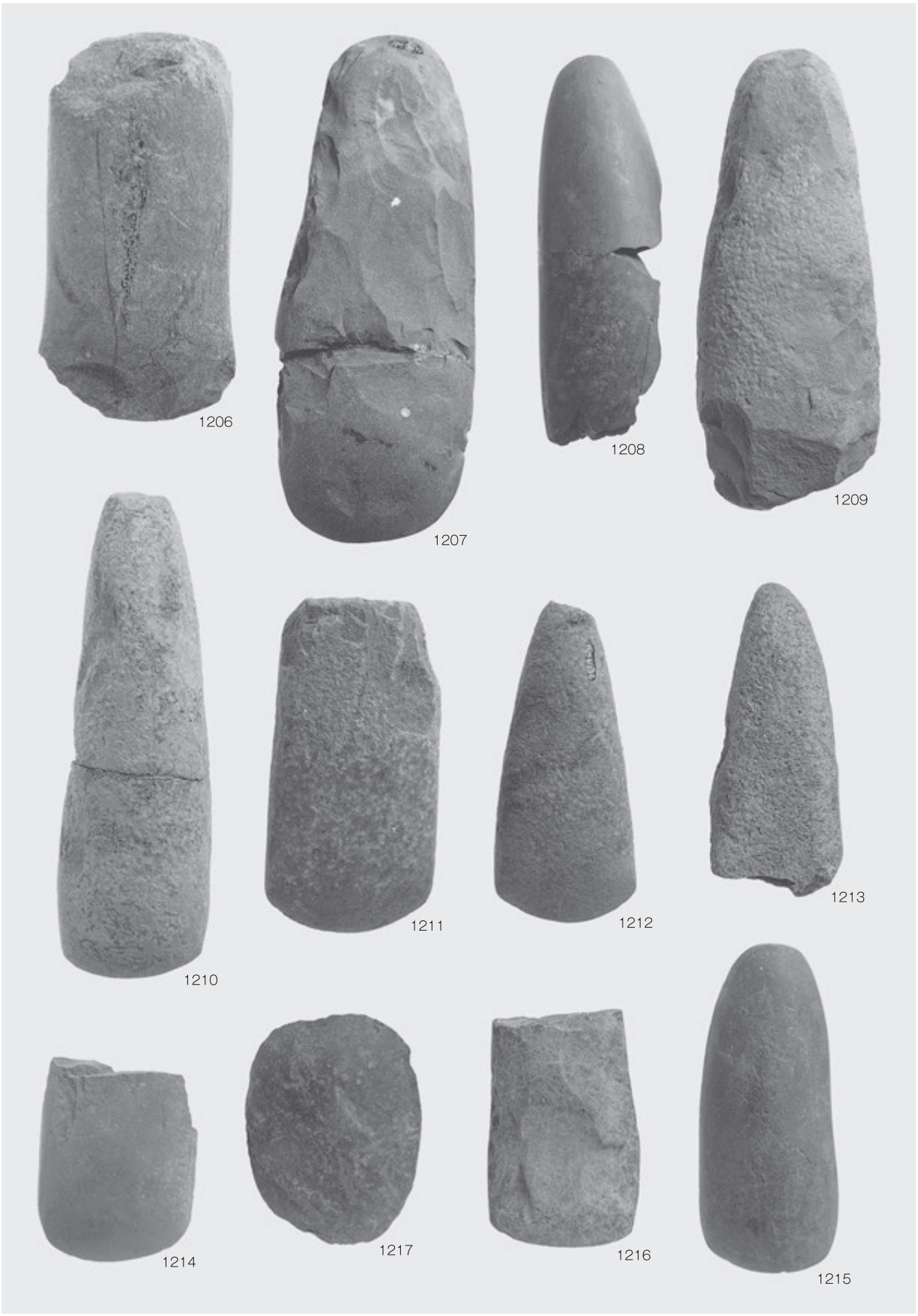


弥生時代の石器３


1052
1053
1062
1056
1061
1057
1059
1066
1060
1054
1063
1064
1058

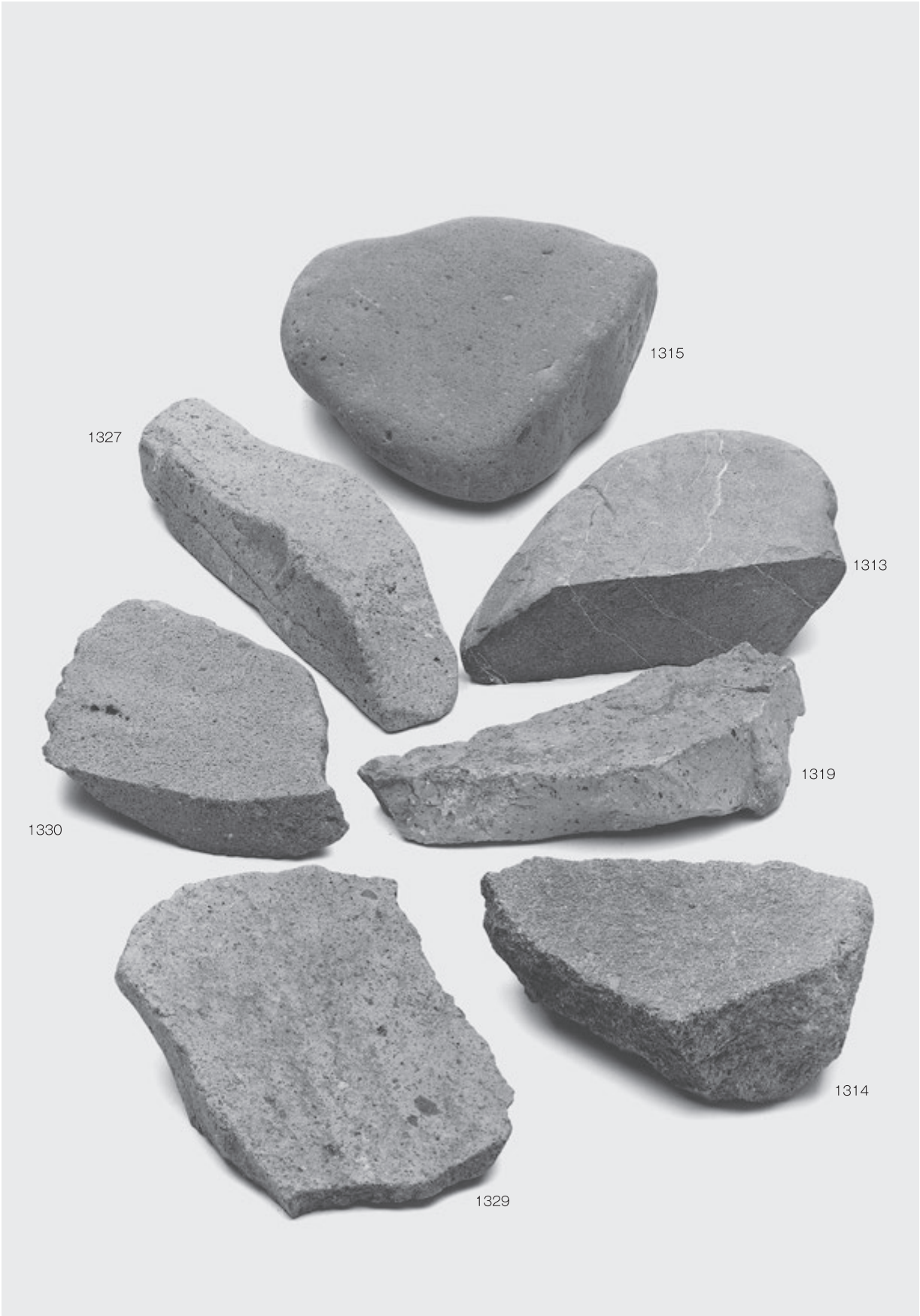
弥生時代の石器４

弥生時代の石器５

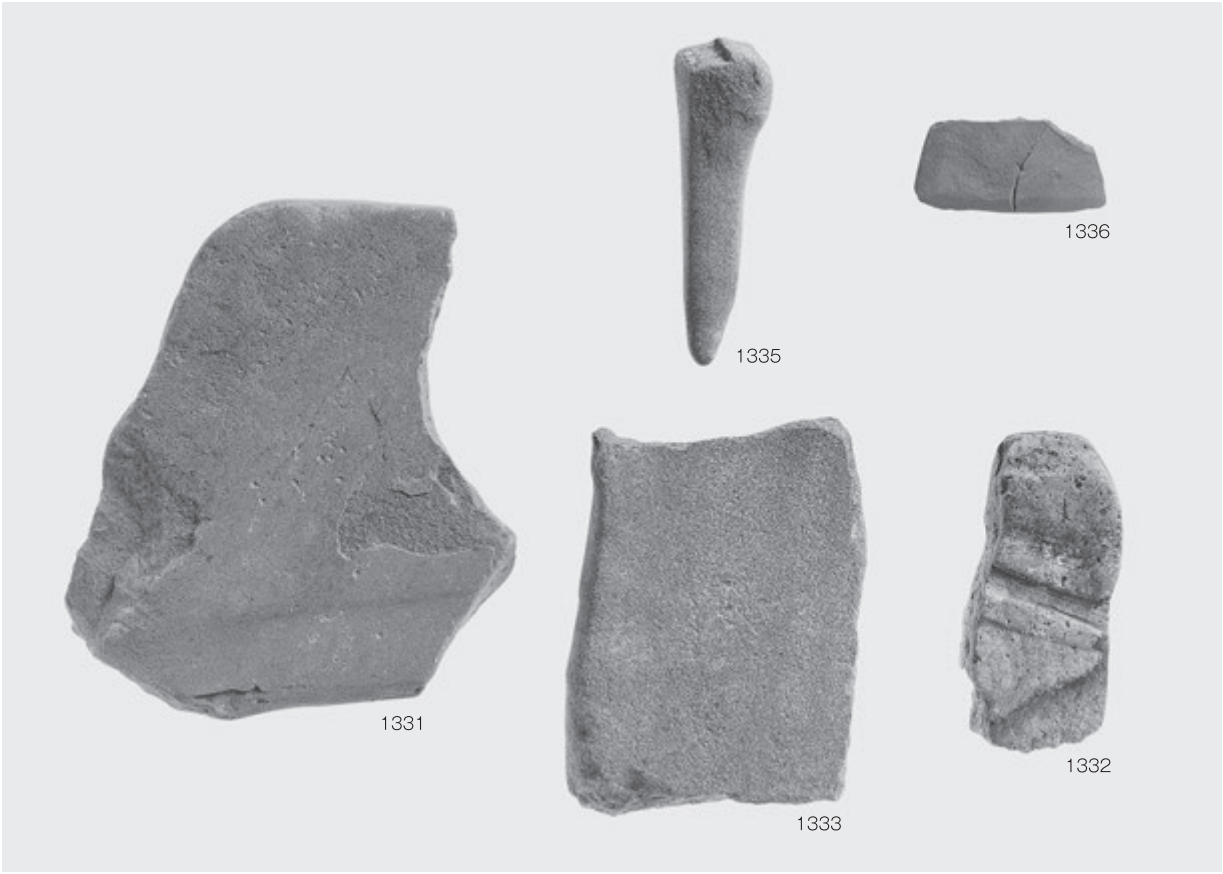


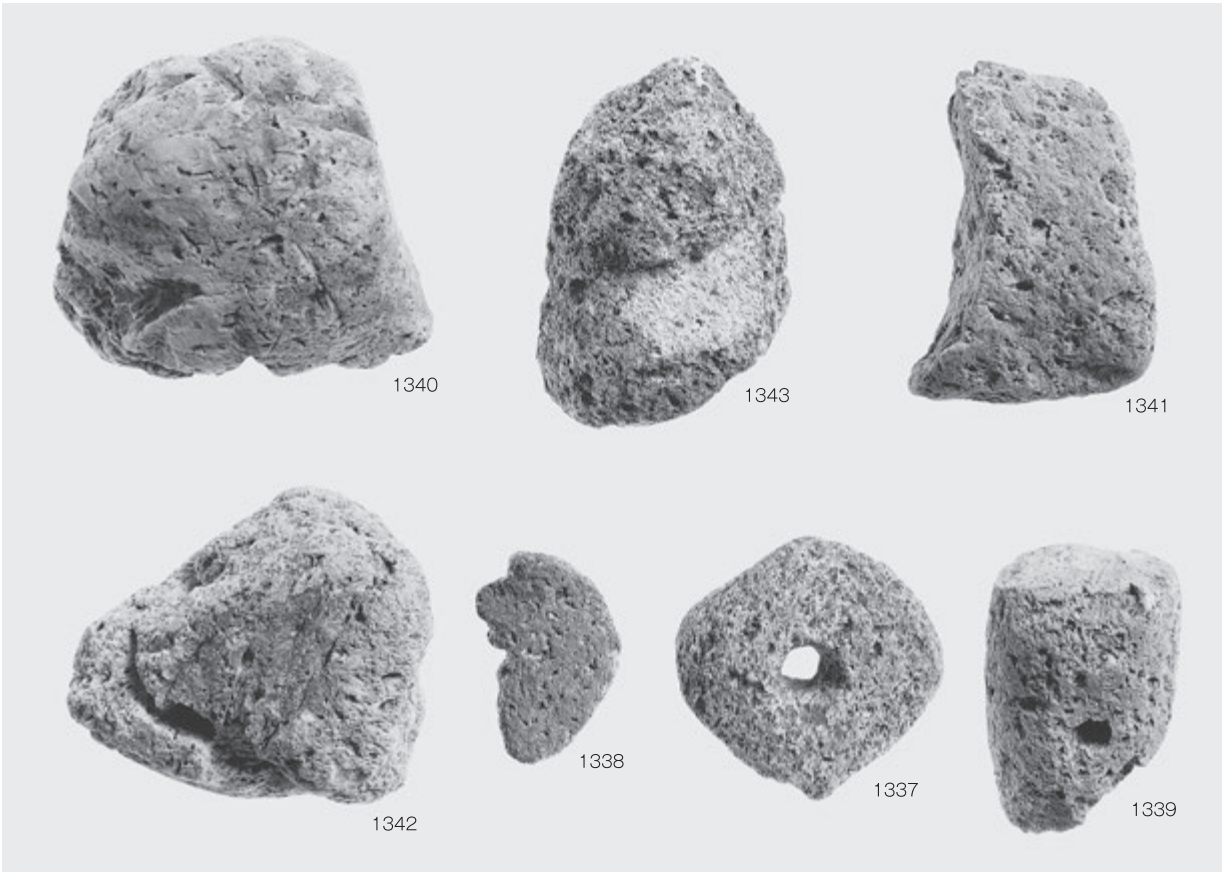
弥生時代の石器６

弥生時代の石器７

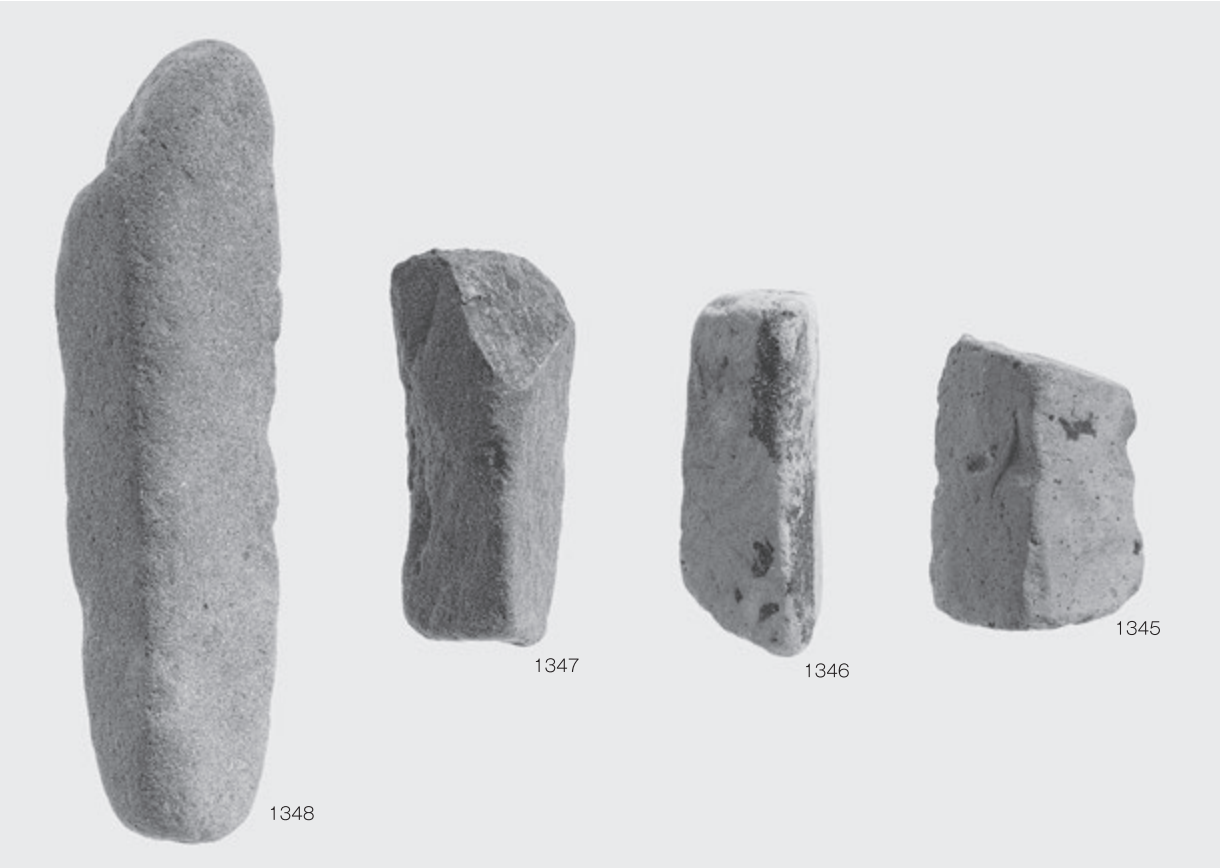


弥生時代の石器８





弥生時代の石器９



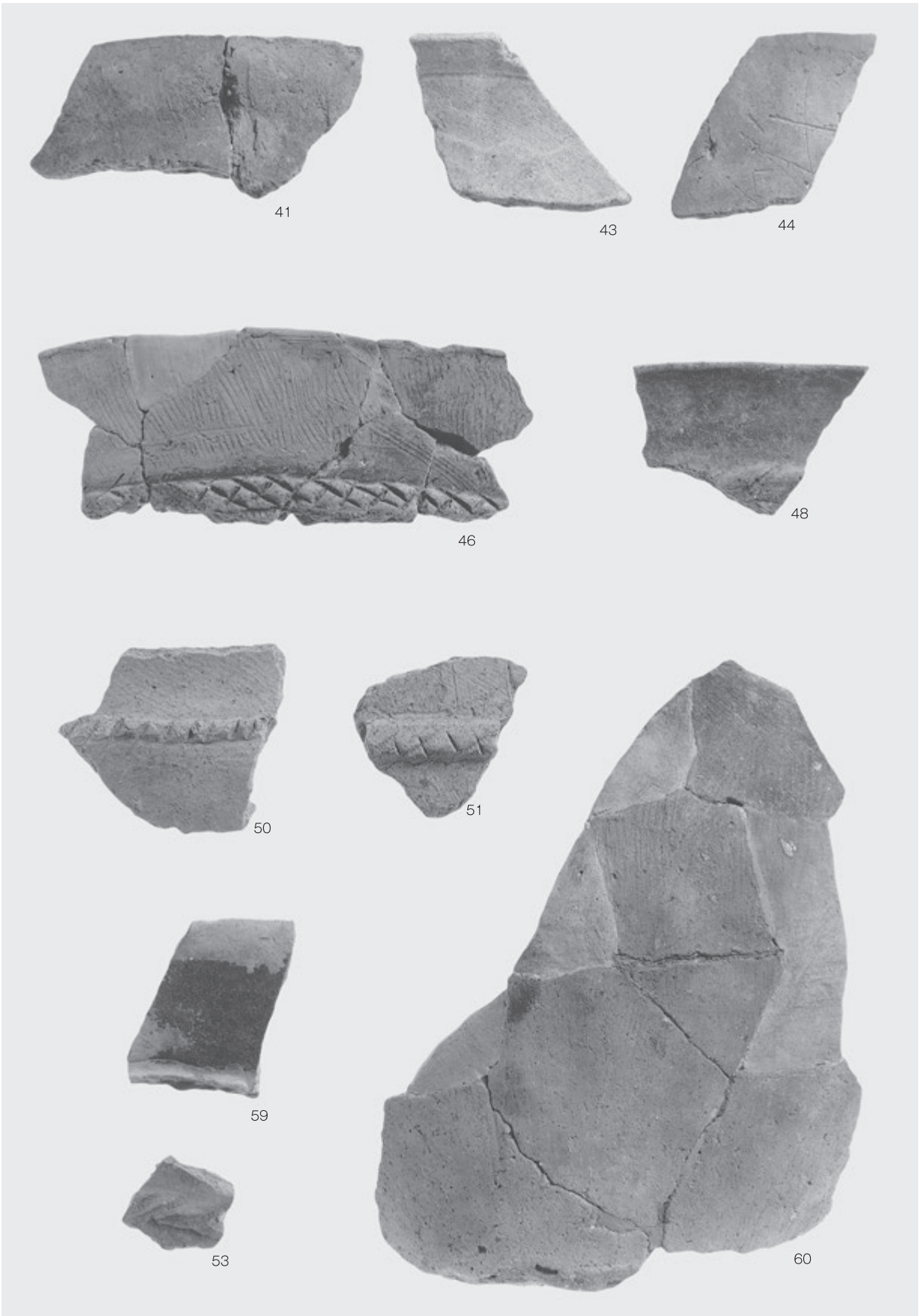
弥生時代の石器 10

古墳時代の土器 1

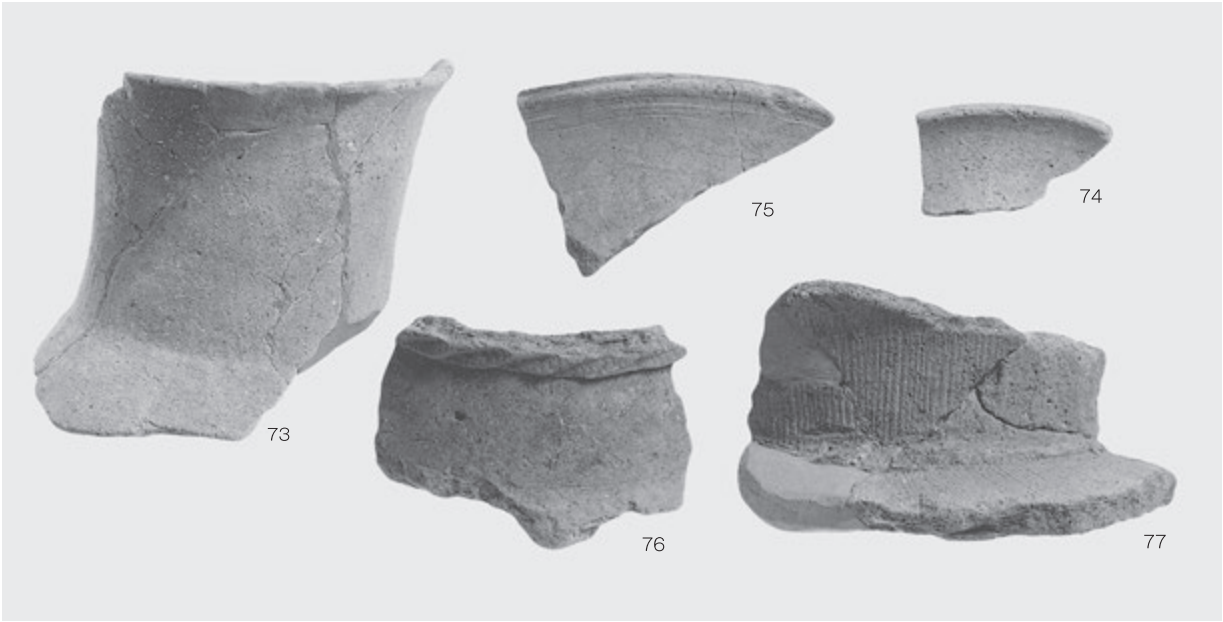
古墳時代の土器２

古墳時代の土器３

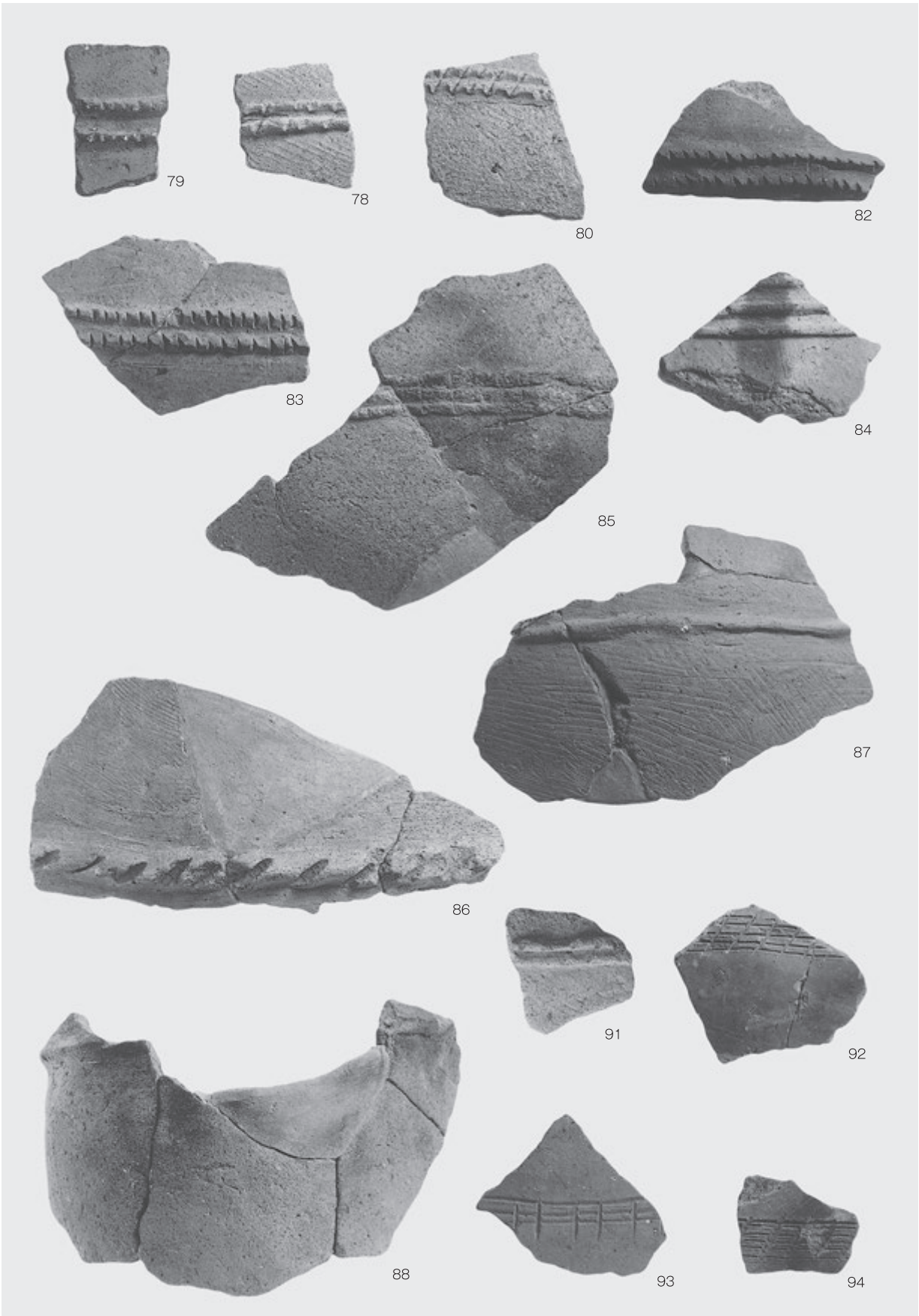
古墳時代の土器４



古墳時代の土器５

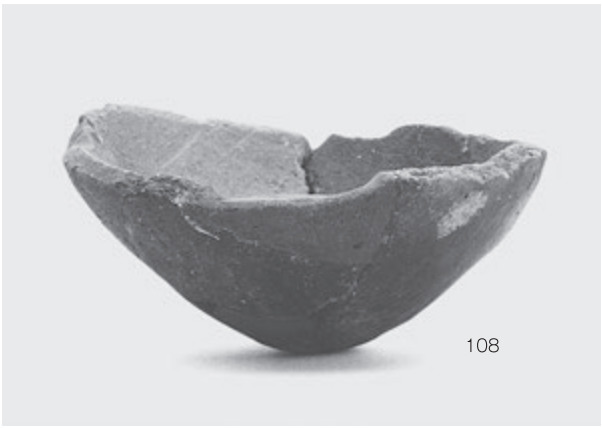


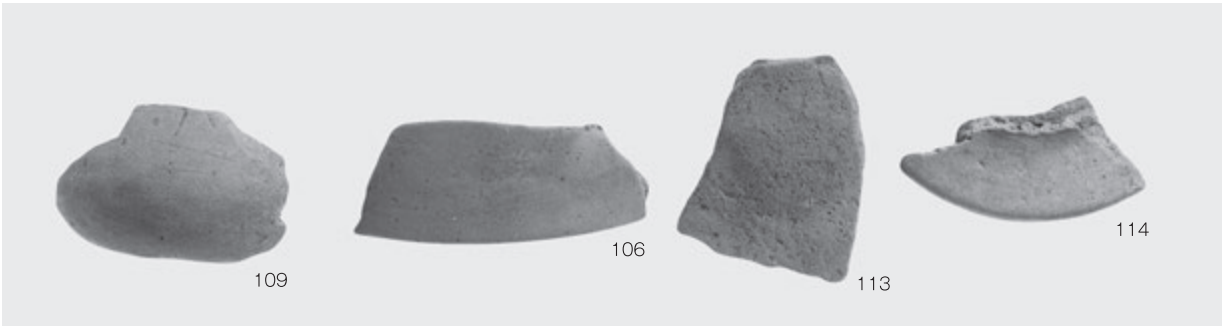
古墳時代の土器６



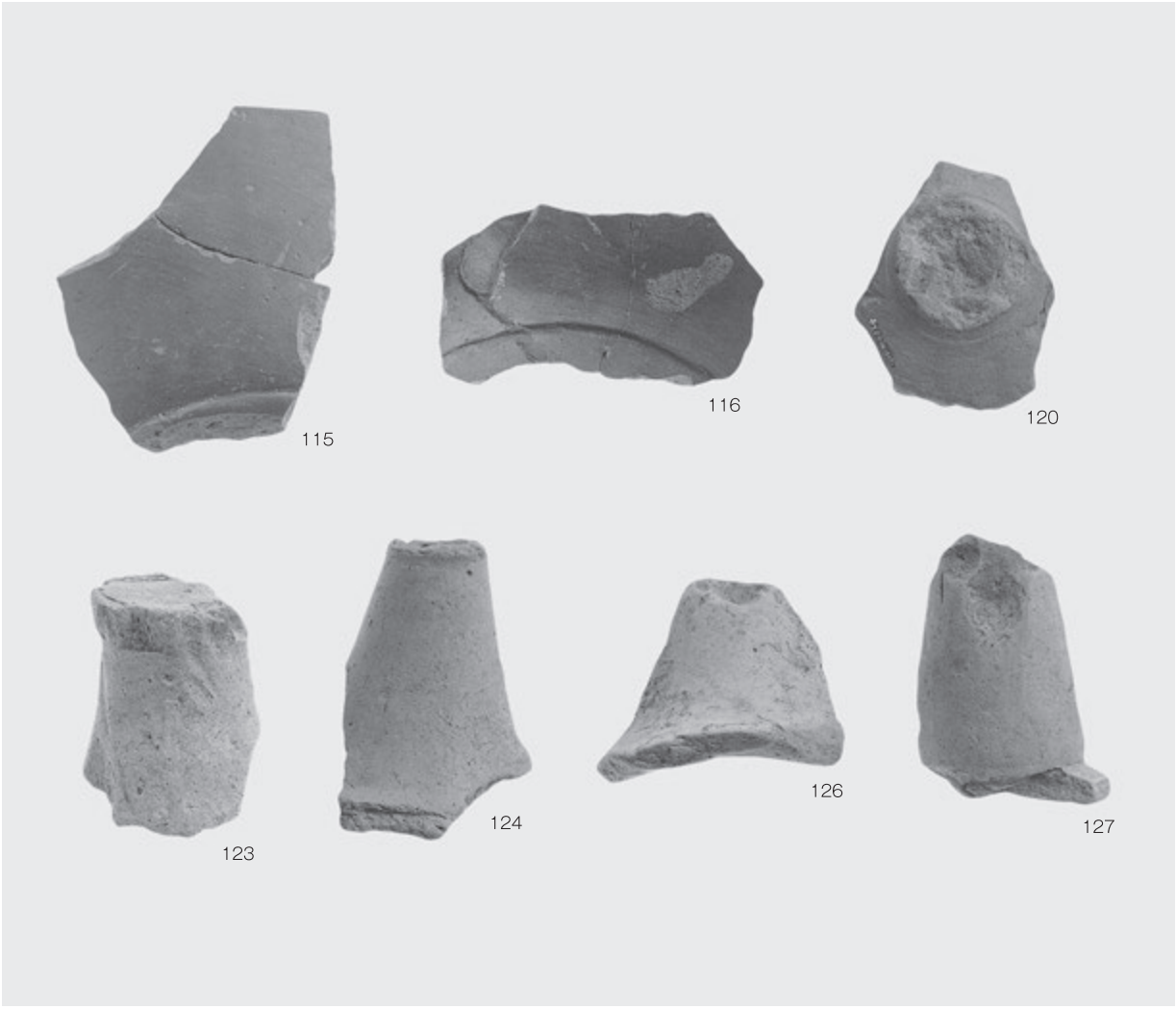
古墳時代の土器７

古墳時代の土器８

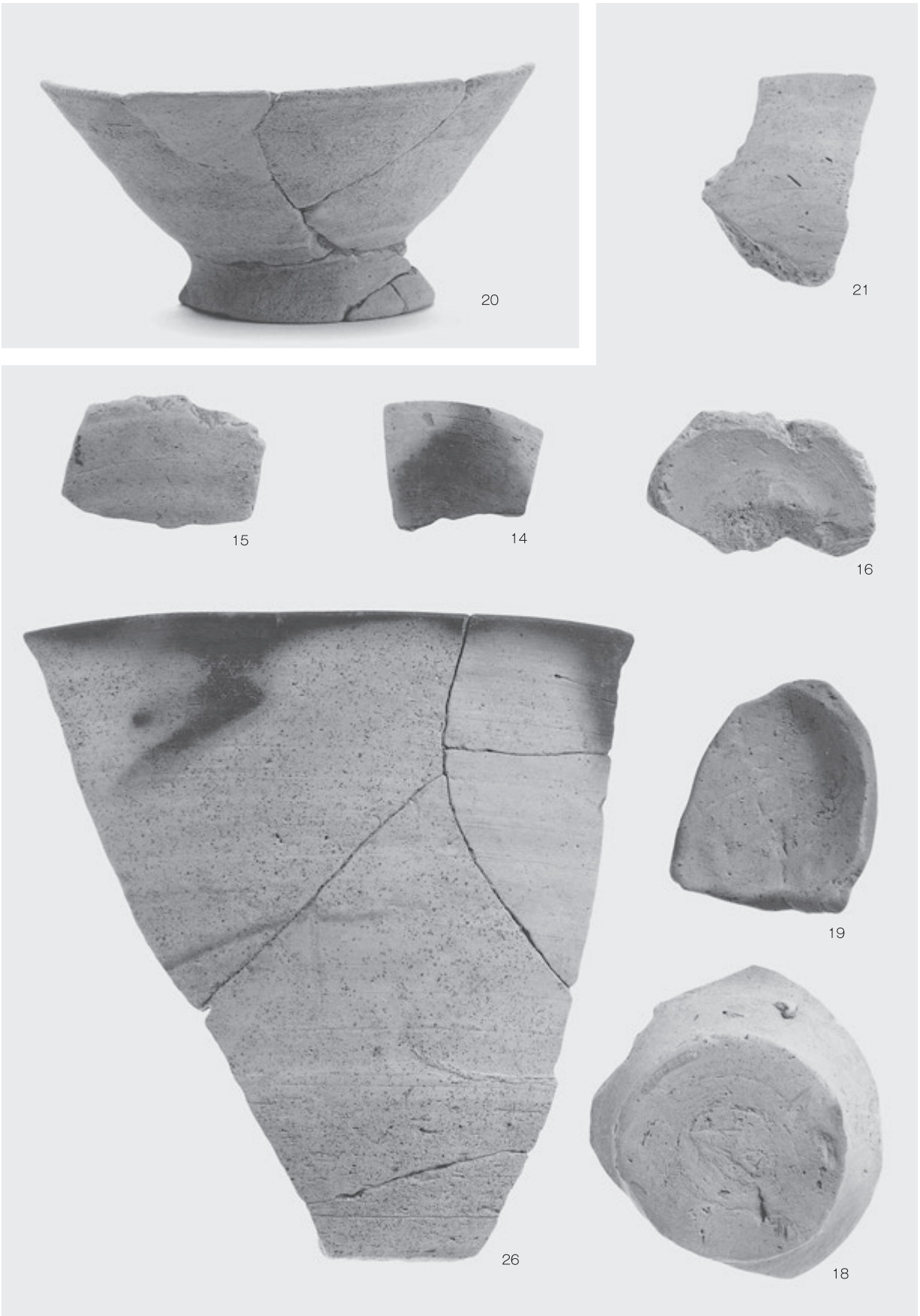




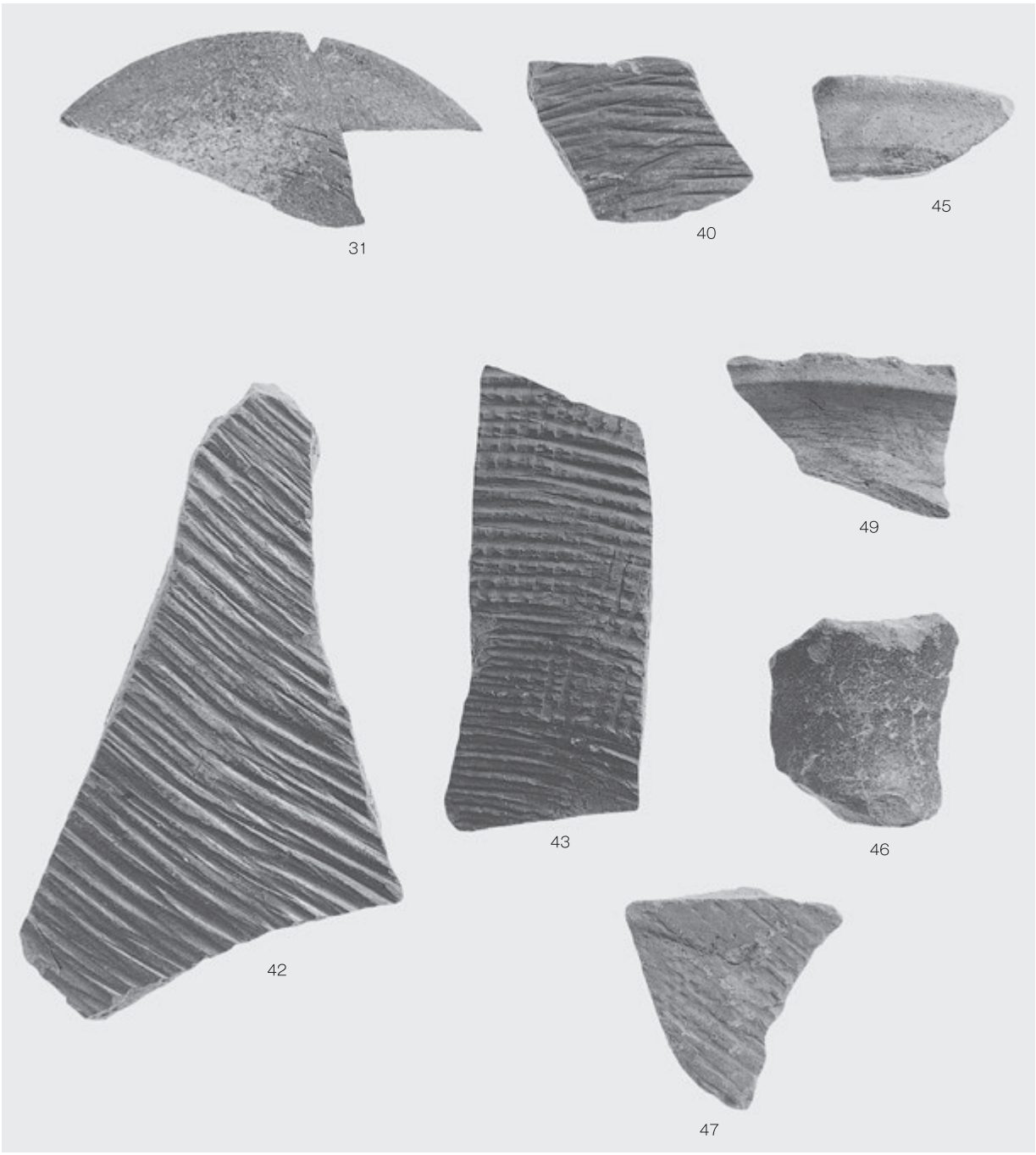
古墳時代の土器９



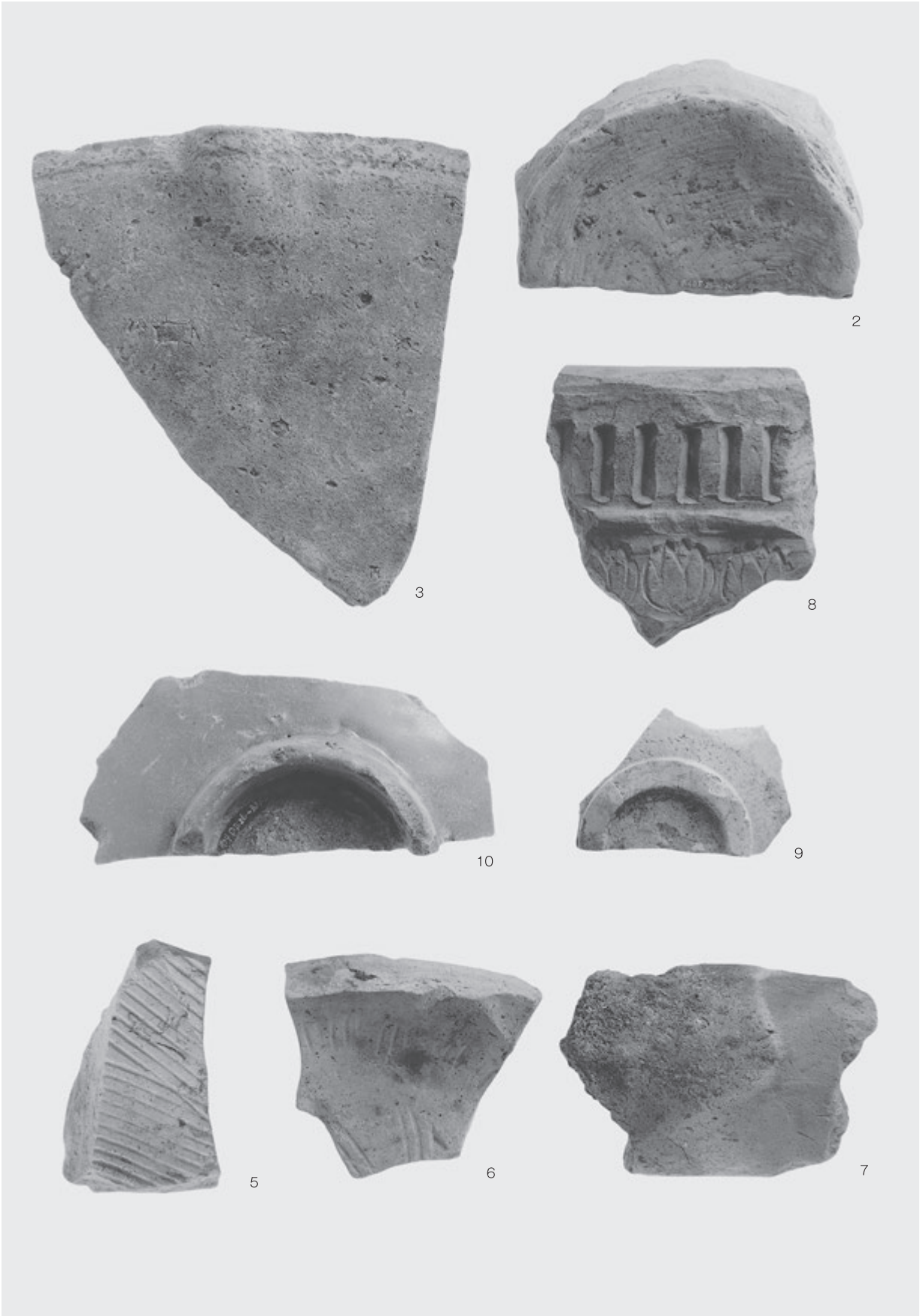
古墳時代の土器 10



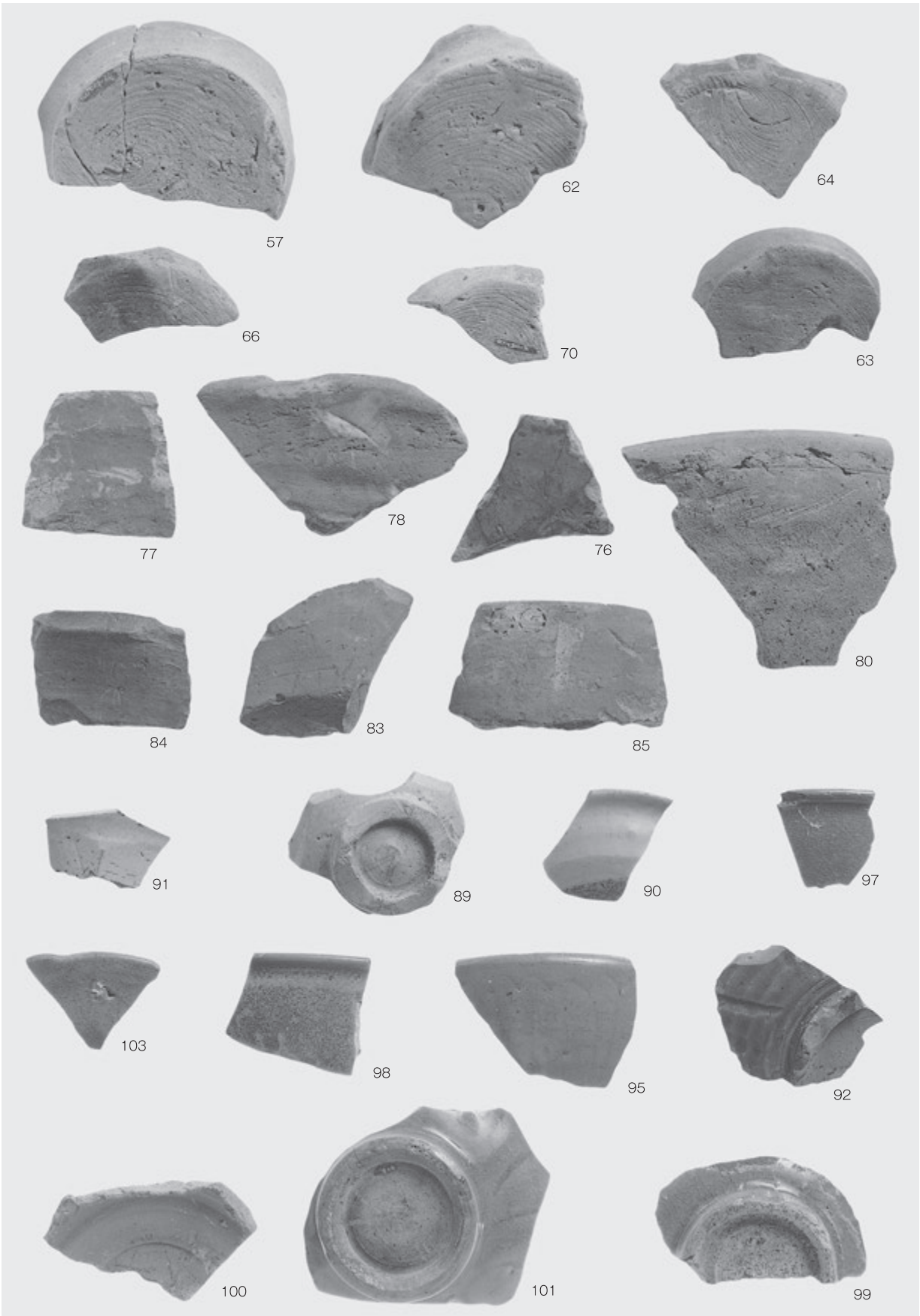
古代の遺物 1



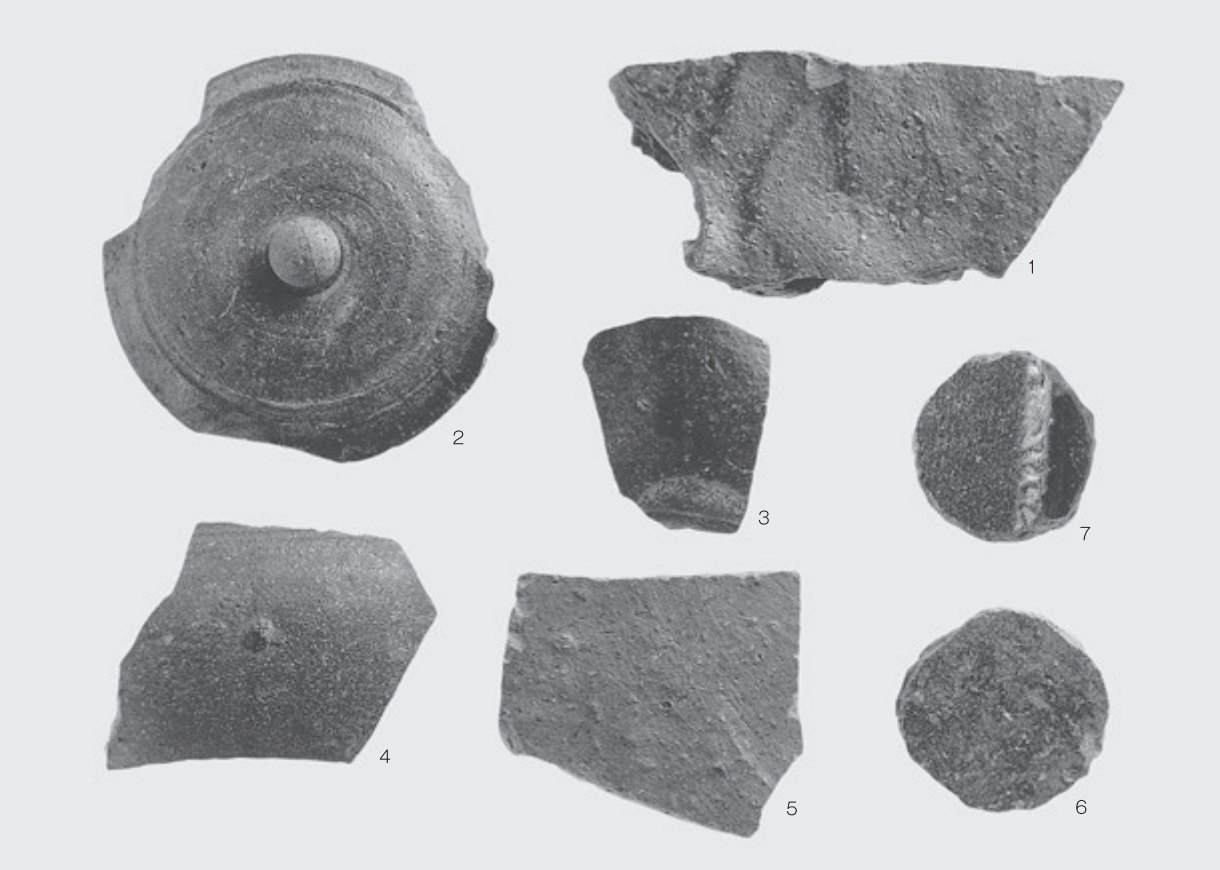
古代の遺物２



中世道路状遺構内出土遺物



中世の遺物（土師器・須恵器・青磁・白磁）



近世道路遺構（出水筋跡）出土遺物

近世の土坑・ピット出土遺物

近世の遺物１（薩摩焼）

近世の遺物２（薩摩焼）

近世の遺物３（陶磁器・焙烙・古銭等）

図版

102

下層確認トレンチ断面①

下層確認トレンチ断面②

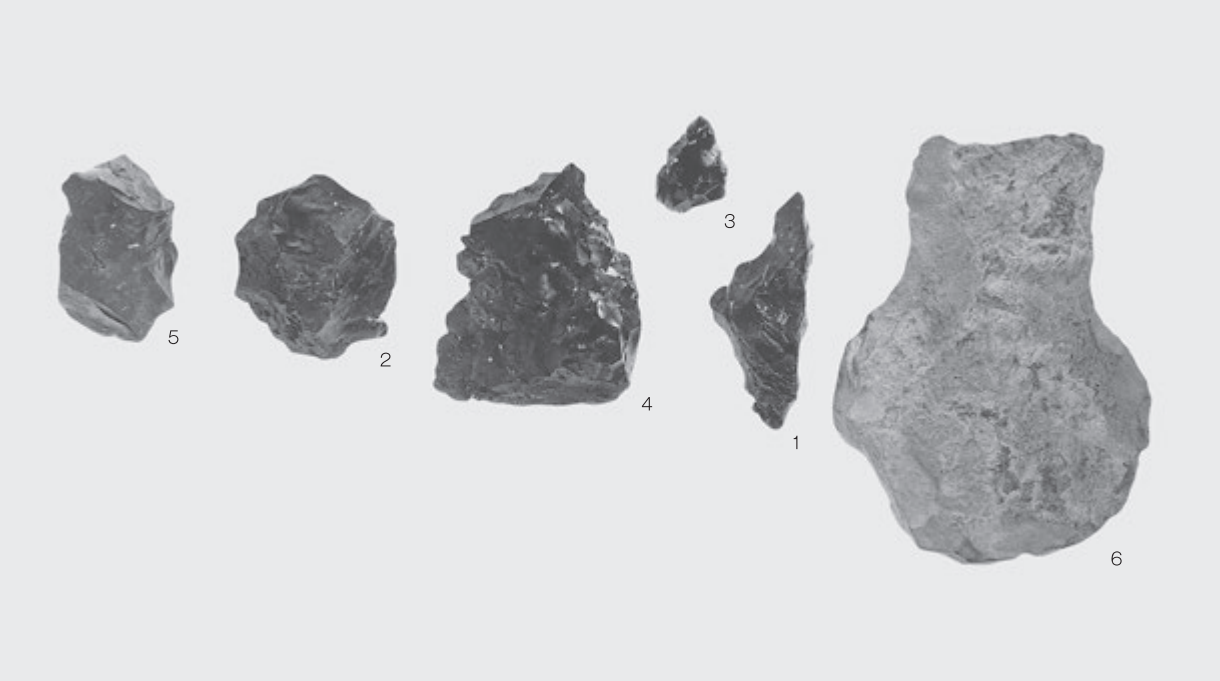
下層確認トレンチ断面③

VI 層礫群検出状況

大型土坑検出状況 1

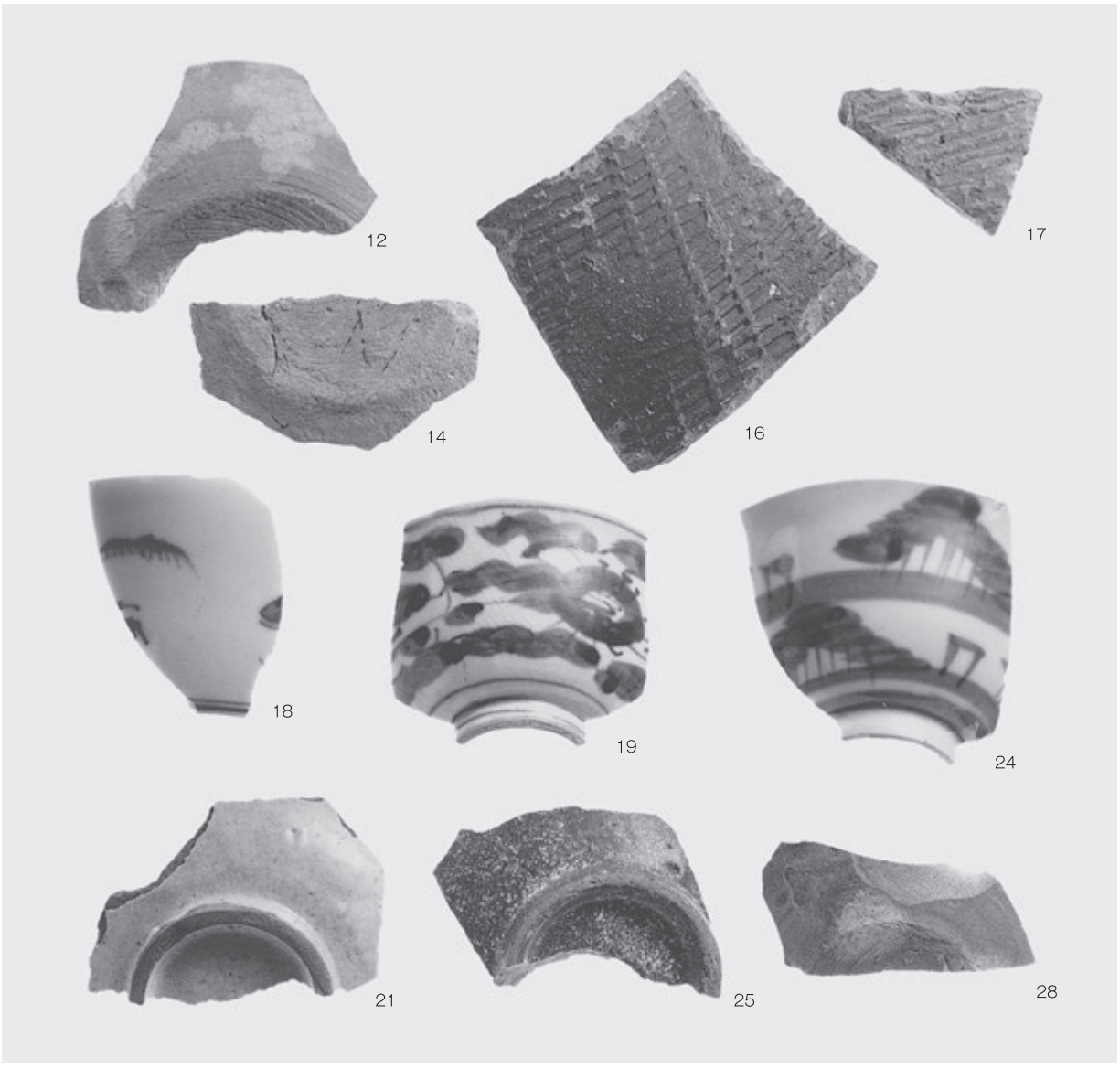
大型土坑検出状況２

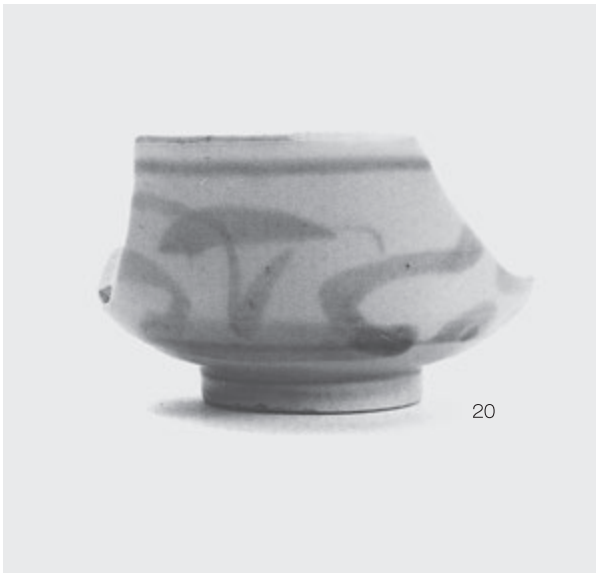
大型土坑内鉄滓出土状況



縄文時代の石器

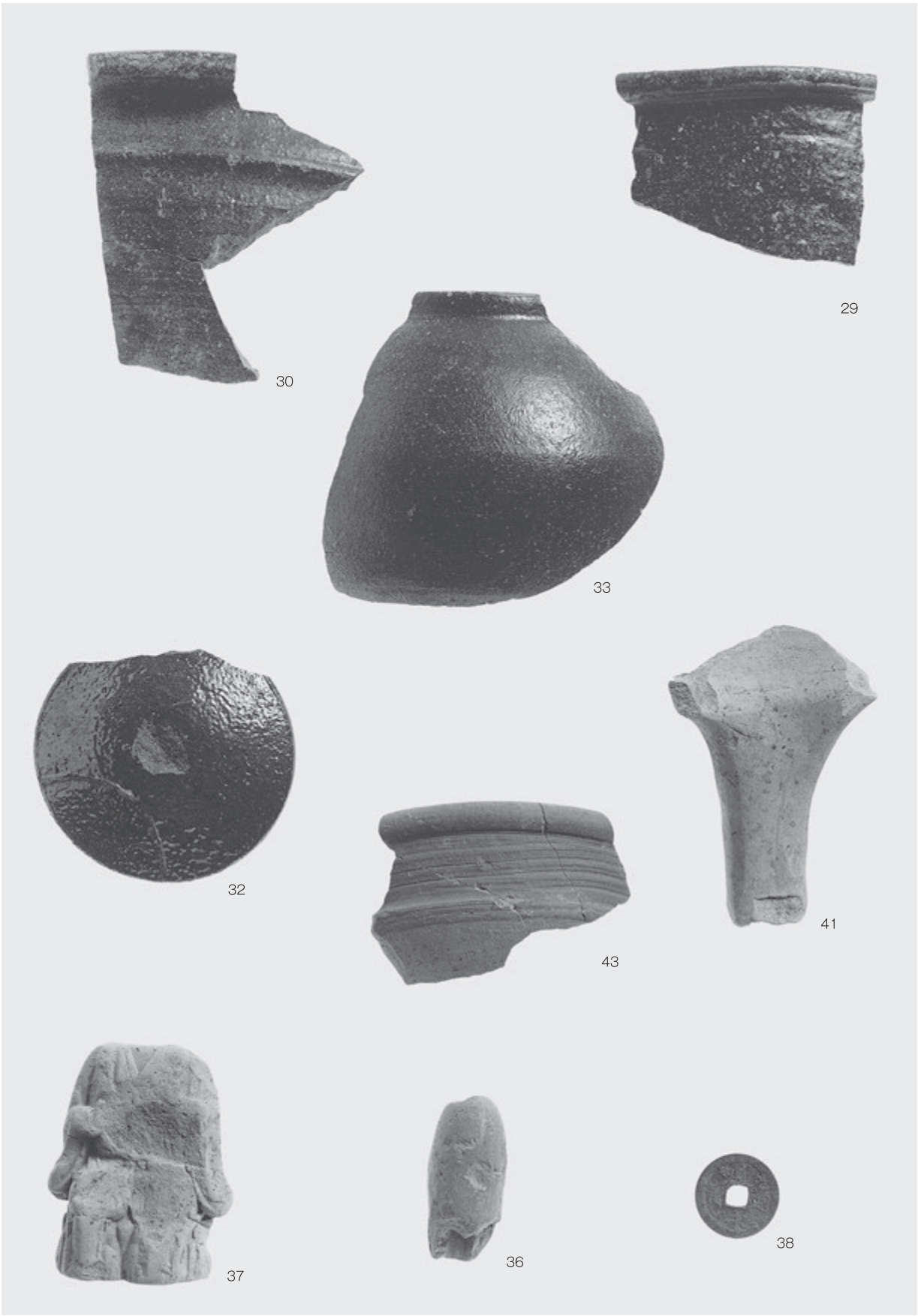
縄文土器





古代～中世の遺物，近世の遺物１

近世の遺物２



近世の遺物３

あ と が き

本年度に発掘調査から十年を経過して，報告書を刊行することができました。その間に西回り自動車道も整備され，遺跡の面影は，当時生活していた人々が仰ぎ見ていたであろう遠見番山にのみ見いだすことができます。消滅してしまった遺跡を，可能な限り忠実に保存することに努めましたが，担当者の力量不足で十分になしえなかったかもしれません。しかし，本報告書が地域の方々の誇るべき埋蔵文化財として，語り継がれ活用されることを願ってやみません。

寒暖の激しい中，発掘調査に従事された地域の方々や，多くの遺物と格闘しながら整理作業にあたった方々に，刊行できましたことを感謝し，お礼申し上げます。

最後に，整理作業半ばにして亡くなられた川口敏子さんに感謝と哀悼の意を表します。

鹿児島県立埋蔵文化財センター(130)
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXVII

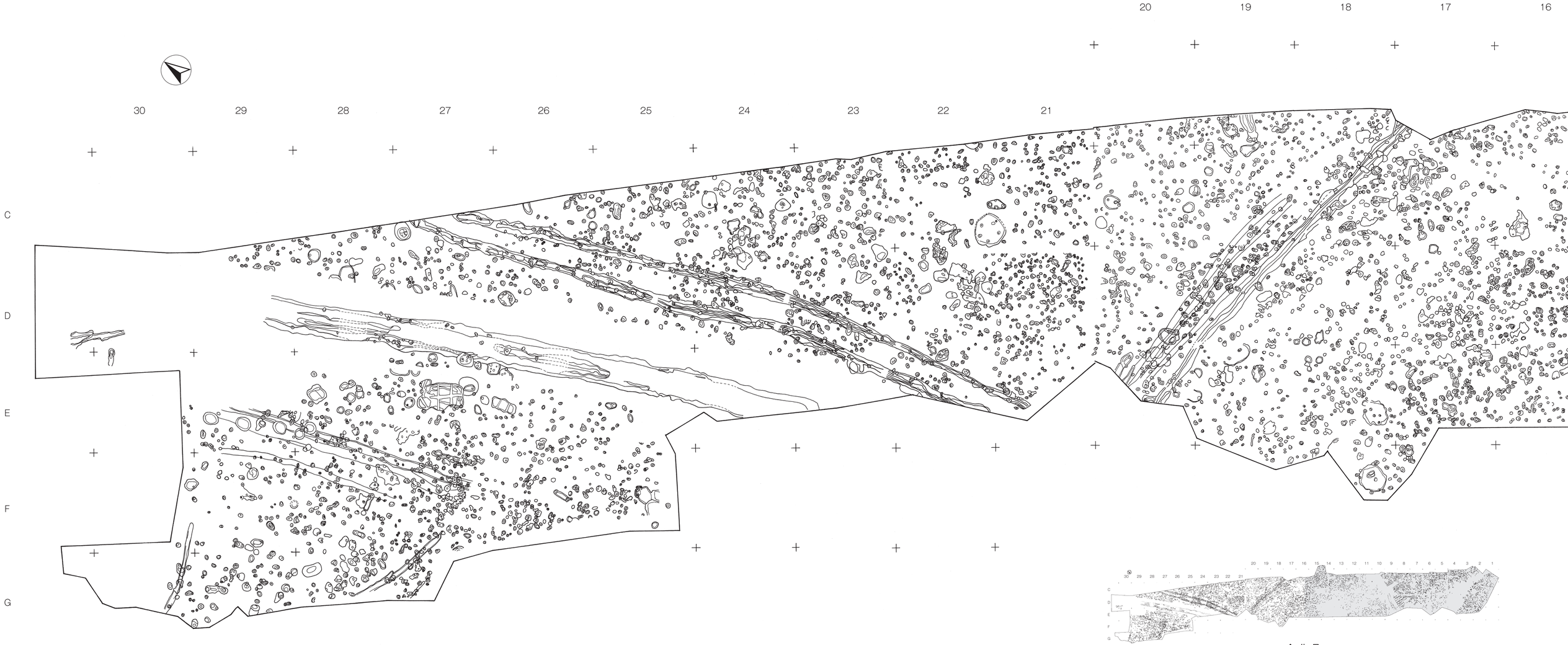
市ノ原遺跡
（第４地点・第２地点）

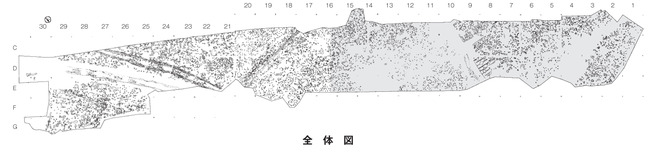
発行日　2008年3月25日

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811

印刷所　凸版印刷株式会社
〒892-0844　鹿児島県鹿児島市山之口町1-10
TEL 099-226-9141

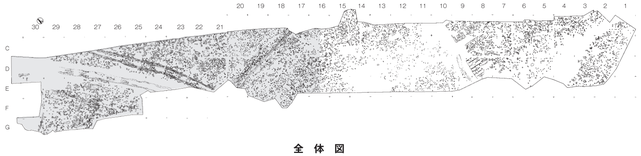
市ノ原遺跡　第4地点　遺構位置図2





全体図

市ノ原遺跡　第4地点　遺構位置図1



全 体 図